伊藤英明／吉沢悠／ハーレイ・ジョエル・オスメント／ペネロペ・クルス／
ロバート・デュヴァル／ジェイク・ギレンホール／ロバート・ベントン／追悼・三橋達也

キネマ旬報

85th ANNIVERSARY KINEMA JUNPO 1919-2004

7月上旬号
2004 NO.1408

巻頭特集

「スチームボーイ」

大友克洋
鈴木杏
小西真奈美

特別企画

「ハリー・ポッター」と夏休み映画64本

特集

「白いカラス」
「ウォルター少年と、夏の休日」
「ワイルド・レンジ　最後の銃撃」
「午後の五時」「ハナのアフガンノート」
「スパン」「花咲ける騎士道」

がDVD−BOXで再び妖艶に舞う

初回特典：オリジナル・アートカード（7枚組）封入！

リタ・ヘイワースの代表作『カバーガール』が 遂にDVD-BOXで登場！

ファン待望！ コロンビアスタジオ屈指のミュージカル全7作品

本邦初登場2作品を含む、全作品初DVD化

■カバーガール
Cover Girl

●1944年作品
●愛を失った途端、夢は色褪せる—
「雨に唄えば」のジーン・ケリーと
共演したリタ・ヘイワースの代表作。
●特典映像：関連作品予告編集

■カラー/約107分/画面：スタンダード/音声：モノラル（英語）
字幕：①日本語②英語③その他/ディスク：片面1層

■地上に降りた女神
Down To Earth

●1947年作品
●美しき女神、地上で人に恋をする。
ラリー・パークスと共演、
ギリシャ神話の世界を描くファンタジー。
●特典映像：関連作品予告編集

■カラー/約101分/画面：スタンダード/音声：モノラル（英語）
字幕：①日本語②英語/ディスク：片面1層

■今宵よ永遠に
Tonight and Every Night

●1945年作品
●結ばれぬ恋ほど、美しいものはない—
戦渦のロンドンを舞台にリー・ボウマン共演で贈る
ラブ・ロマンス。
●特典映像：予告編集

■カラー/約92分/画面：スタンダード/音声：モノラル（英語）
字幕：①英語②日本語③フランス語/ディスク：片面1層

■ミュージック・イン・マイ・ハート
Music In My Heart

●1939年作品
●思わぬ事件こそ、運命の出会い。
若きリタ・ヘイワースの瑞々しさに
息を呑む、さわやかな名作。
●特典映像：予告編集

■B&W/約70分/画面：スタンダード/音声：モノラル（英語）
字幕：①日本語②英語/ディスク：片面1層

■雨に濡れた欲情
Miss Sadie Thompson

●1953年作品
●美しさは、時に人を、惑わせる—
名立たる俳優たちとの共演が光る、
サマセット・モームの小説「雨」の映画化。
●特典映像：関連作品予告編集

■カラー/約90分/画面：スタンダード/音声：モノラル（英語）
字幕：①日本語②英語/ディスク：片面1層

■踊る結婚式
You'll Never Get Rich

●1941年作品
●些細な嘘から始まる騒動—
フレッド・アステアとリタ・ヘイワースが魅せる
ダンス・ミュージカルの傑作。
●特典映像：オリジナル劇場予告編集

■B&W/約88分/画面：スタンダード/音声：モノラル（英語）
字幕：①日本語②英語③その他/ディスク：片面1層

■晴れて今宵は
You Were Never Lovelier

●1942年作品
●異国の街に待っていたのは運命の出逢い—
ミュージカル映画史上最高のダンサー、
フレッド・アステアと再びコンビを
組んだ本格的ダンス・ミュージカル
●特典映像：関連作品予告編集
■B&W/約97分/画面：スタンダード/音声：モノラル（英語）
字幕：①日本語②英語/ディスク：片面1層

※発売日、特典、仕様、ジャケット及びBOXのデザインは都合により変更になる場合がございます。

2004.6.23 RELEASE

DVD VIDEO

魅惑の大女優"リタ・ヘイワース"

FILM COLLECTION with RITA HAYWORTH

リタ・ヘイワース フィルム・コレクション

晴れて今宵は YOU WERE NEVER LOVELIER
踊る結婚式 YOU'LL NEVER GET RICH
ミュージック・イン・マイ・ハート MUSIC IN MY HEART
雨に濡れた欲情 MISS SADIE THOMPSON
地上に降りた女神 DOWN TO EARTH
今宵よ永遠に TONIGHT AND EVERY NIGHT
カバーガール COVER GIRL

RITA HAYWORTH

BP-178

7タイトル収録BOX

2005年7月末までの限定生産商品 ※尚、本BOX収録タイトルの単品発売は当面ございません。

¥16,800／¥17,640（税込）

ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント http://www.sonypictures.jp/

マルクス兄弟にはなんか感じるんだよ。今の若い人には受けるかどうかわからないけど、
「マルクスだけは感じてくれよ」って言いたいね。――立川談志(落語家)

チャップリン、キートンと並ぶ古典喜劇スター、
マルクス兄弟の6作品が超豪華コレクターズ・ボックスで初DVD化！

DVD VIDEO

MARX BROTHERS COLLECTOR'S BOX

マルクス・ブラザーズ コレクターズ・ボックス

CHICO (THE LEER)
GROUCHO (THE LOOK)

これが伝説の「船室スシ詰め」シーンだ！

笑いの神話！映画通なら知らぬとは言わせない！

あのセレブも、やっぱりマルクス兄弟が大好き！

グラウチョって"だます"って意味なんでしょ。
こいつら悪者だから好きなんだよ ――立川談志(落語家)

死ぬんじゃないかと思うくらいに笑いころげた
――安西水丸(イラストレーター)

ロイドもキートンもチャップリンも、
好きだけれども、いま一番、ピッタリきて
嬉しいのは、マルクス・ブラザーズである
――南 伸坊(イラストレーター)

【1985年MGM5作品リバイバル公開時パンフレットより】

何度となくリバイバル公開された人気抜群の作品群！
MGM時代の後期円熟期6作品を収録！

初回限定生産

DISC1 映像特典◆約70分
『オペラは踊る特別版』
古典的なギャグと音楽が満載のMGM第1作！
その後の喜劇界に大きな影響を与えた
"船室スシ詰めシーン"は、この作品に！

DISC2 映像特典◆約61分
『マルクス一番乗り特別版』
MGM第2作目にしてマルクス映画のなかで
最もヒットした傑作！黒人たちの陽気な大合唱など、
音楽的な見せ場も盛りだくさん！

DISC3 映像特典◆約20分
『マルクス兄弟珍サーカス特別版』
サーカス独特の小道具や動物を使った
ナンセンスギャグは爆笑間違いなし！ついに
ハーポが喋る!? 最初から最後まで目が離せない！

DISC4
A 映像特典◆約26分
『マルクスの二挺拳銃特別版』
マルクス三兄弟による抱腹絶倒ウエスタン喜劇！
様々な映画の名場面を思わせる
パロディ・シーンは映画ファン必見！

B 映像特典◆約19分
『マルクス兄弟のデパート騒動特別版』
鏡に映った3人のハーポが奏でるハープ三重奏！
チコ&ハーポが映画初のピアノ・デュエット！
見所満載の傑作ミュージカル喜劇！

DISC5 映像特典◆約19分
『マルクス捕物帖特別版』
名作映画「カサブランカ」のパロディ!?
ハーポが寄りかかっていた建物から手を離すと
巨大なビルが一気に瓦解するギャグは、もはや伝説！

HARPO (THE OGLE)

◎6作品全て特別版！
合計約215分の超豪華映像特典収録！
◎5DISC(6作品)スペシャルBOX仕様！

GROUCHO CHICO・HARPO MARX BROTHERS Collection

7.9 ON DVD

ハリウッドクラシックス®

希望小売価格 ¥9,500(税抜)/¥9,975(税込)

※掲載のジャケット、及びスペックは変更になる場合があります。

ワーナー エンターテイメント ジャパン株式会社
ワーナー・ホーム・ビデオ

お買い求めは、CDショップ、有名電器店、大型ビデオショップなどDVDソフト取扱店にて。
DVD&ビデオ最新情報は➡http://www.whv.jp/ http://www.whv.jp/i/

DVD VIDEO

ウエスタン＆ジョン・フォード監督作品

西部の砂漠やアフリカのジャングルを舞台に、熱い男たちが繰り広げる物語！
初DVD化4作品一挙リリース！

7.9 ON DVD

希望小売価格 各¥2,980(税抜)/¥3,129(税込)

ワイアット・アープ スペシャル・エディション(2枚組) 初DVD化

『ボディガード』のゴールデン・コンビが再び手を組んだ。ケビン・コスナー主演&ローレンス・カスダン監督作！

開拓史時代の英雄、その栄光の裏に隠された人間としての真実の姿を描く傑作西部劇！

約56分にも及ぶ超豪華映像特典満載の2枚組で登場！

1：ドキュメンタリー集 It happened that way(約14分)
2：1994年テレビ特集 ワイアット・アープ：伝説と共に(約23分)
3：削除されたシーン集(約19分)

STAFF
監督：ローレンス・カスダン
製作：ケビン・コスナー／ジム・ウィルソン／ローレンス・カスダン
脚本：ローレンス・カスダン／ダン・ゴードン

CAST
ケビン・コスナー／デニス・クエイド／ジーン・ハックマン

※掲載のジャケット、及びスペックは変更になる場合があります。

『マルタの鷹』『チャイナタウン』の巨匠ジョン・ヒューストン監督&ポール・ニューマン主演作！

ロイ・ビーン 初DVD化

実在の判事、ロイ・ビーンの生き様を描く魅惑のウエスタン！

STAFF
監督：ジョン・ヒューストン
製作：ジョン・フォアマン
脚本：ジョン・ミリアス

CAST
ポール・ニューマン／エバ・ガードナー／ジャクリーン・ビセット

巨匠ジョン・フォード&クラーク・ゲーブル主演作！

モガンボ 初DVD化

壮大なスケールで描く愛と冒険の物語！

グレース・ケリーが本作でゴールデン・グローブ賞助演女優賞を受賞！

STAFF
監督：ジョン・フォード
製作：サム・ジンバリスト
脚本：ジョン・リーメイヒン
原作：ウィルソン・コリソン

CAST
クラーク・ゲーブル／エバ・ガードナー／グレース・ケリー

巨匠ジョン・フォード&ジョン・ウェイン主演作！

三人の名付親 初DVD化

砂漠に生きる男たちをヒューマンタッチで描く異色ウエスタン！

STAFF
監督：ジョン・フォード
製作：ジョン・フォード／メリアン・C・クーパー
脚本：ローレンス・スターリングス／フランク・S・ニュージェント
原作：ピーター・B・カイン／

CAST
ジョン・ウェイン／ペドロ・アルメンダリス／ハリー・ケリー・Jr.

※掲載のジャケット、及びスペックは変更になる場合があります。

ワーナー エンターテイメント ジャパン株式会社 ワーナー・ホーム・ビデオ

お買い求めは、CDショップ、有名電器店、大型ビデオショップなどDVDソフト取扱店でどうぞ。
DVD&ビデオ最新情報は➡http://www.whv.jp/ http://www.whv.jp/i/

もしあなたが孤独を感じているなら、すでに、しあわせを知っているはず

全力で誰かを愛したことがある人に届けたい、
愛について誰も教えてくれなかったこと。

涙に濡れた頬の冷たさに目覚めた朝。
誰かに抱きしめられないと、バラバラになりそうな夜。
たった一つの石に一瞬で砕かれた人生のかけら—
拾い集めれば、こんなにも切ないラブストーリー
それでもこれは
愛についての大いなる希望の物語。

OPEN HEARTS

しあわせな孤独

【Staff】 監督・原案：スザンネ・ビエール／脚本：アナス・トーマス・イェンセン
プロデュース：ヴェベケ・ウィンデロフ「ダンサー・イン・ザ・ダーク」
撮影：モーテン・サーボリー／音楽：イェスパー・ヴィンゲ・レイスネール

【Cast】 セシリ：ソニア・リクター／ニルス：マッツ・ミケルセン／ヨアヒム：ニコライ・リー・カース
マリー：パプリカ・スティーン／スティーネ：スティーネ・ビェルレガード

7.2 DVD ON SALE

全国劇場公開作品　原題：OPEN HEARTS　ドグマ#28

2002年／デンマーク／本編108分＋特典映像約18分／スタンダード／カラー／¥3,990（本体¥3,800＋税5％）ZMBY-1759［レンタル同時発売］

MEDIA FACTORY

　発売・販売：メディアファクトリー

あなたに"しあわせ"を運ぶ
プレゼントキャンペーン実施！

DVD商品に封入されているハガキにて
ご応募いただくと、
抽選で右記のプレゼントが当たります。
［応募締切：平成16年9月2日当日消印有効］

セシリ賞 1名様
※写真とは異なる場合があります。
ボーコンセプト「シェリーチェア」
2つの貝殻が重なり合うような
構造で快適な座り心地
張り地はなんと全50種類！
提供：ボーコンセプト
www.boconcept.co.jp

ヨアヒム賞 5名様
「ドリーミング プリンセス
EDP SP 45ml」
時間の経過によって
いろいろな香りが楽しめる！
提供：マーキュリーパルファム
TEL 093-592-5311

ニルス賞 10名様
「ラブクロスペンダント」
宝石の中に十字の輝きを実現！
Crossfor 提供：株式会社クロスフォー
www.crossfor-diamond.co.jp

マリー賞 3名様
「マイクロ フォト イオン」
ビタミンC&Eチャージで1年中
うる・スベ・つや肌！
ヤーマンのフォト＆イオン導入美顔器
ヤーマン株式会社 提供：ヤーマン株式会社

DIG THE NIPPON

ガッパ再び上陸か!?

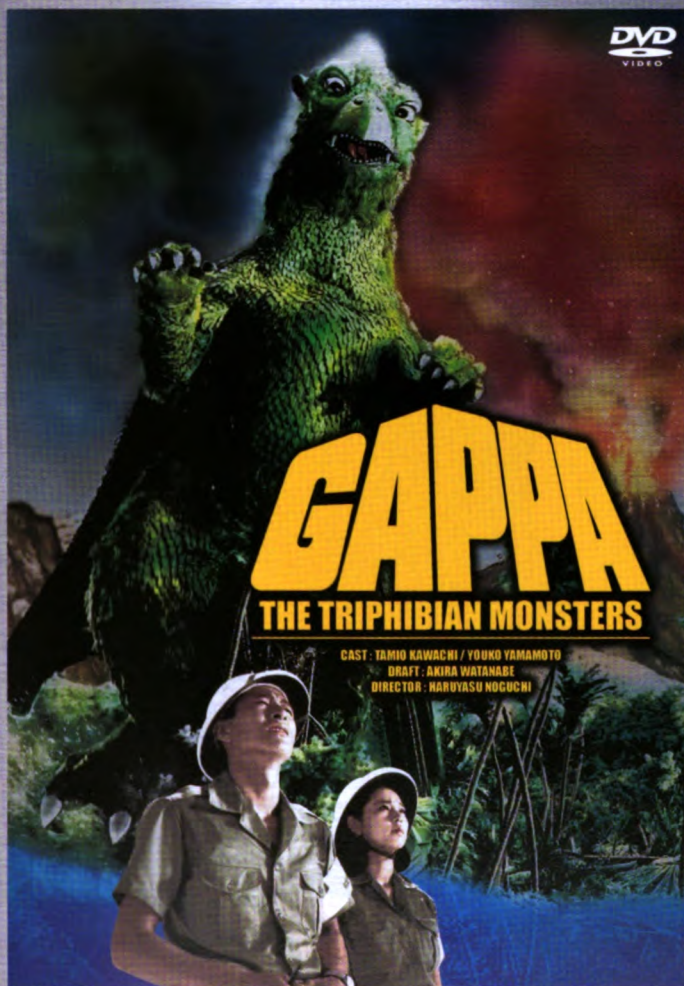
DVD VIDEO

GAPPA THE TRIPHIBIAN MONSTERS 大巨獣ガッパ

STORY 南太平洋の孤島・オベリスク島に彼らはいた！ 彼ら―ガッパは、有史以前より島に棲息する伝説の巨大怪鳥。日本の調査団がその幼態＝仔ガッパの捕獲に成功。日本へ連れて帰った。だが、怒り狂った仔ガッパの両親が我が仔を探して日本へ飛来したのだ！！自衛隊のあらゆる近代兵器もものともせず、口から4000度の熱線を吹いて暴れる2頭のガッパ！日本中が恐怖のどん底へと叩きこまれた…！

DVD VIDEO

GAPPA THE TRIPHIBIAN MONSTERS

CAST : TAMIO KAWACHI / YOUKO YAMAMOTO
DRAFT : AKIRA WATANABE
DIRECTOR : HARUYASU NOGUCHI

秘境に轟く謎の雄叫び！

怒りに燃えた2頭の親ガッパが、富士五湖、熱海の街を所狭しと暴れまくる！！想像を絶する能力を有するガッパは、4000度の高熱線で市街地を焼き尽くし、人々を恐怖のどん底へと突き落とす！"人類滅亡か？""助かる策はあるのか？"日本の怪獣映画を語る上では決して避けては通れない超大作！

1967年に巨額の資金をつぎ込んだ超大作！

1967年一日本を空前の"怪獣ブーム"が席巻していた。その火付け役となったのがその前年にオンエアがスタートしたSF-TVドラマ「ウルトラQ」である。映画界においても各社こぞって新キャラを出すなか、ついに日活も満を持して『大巨獣ガッパ』を世に送り出すことに！製作費はなんと当時破格の1億6千万！最高のスタッフとキャストで作り上げた大スペクタクル怪獣映画である。

一流のスタッフによる特撮映画の最高峰！

『ゴジラ』シリーズの特撮美術を手掛けた名匠、渡辺明が原案及び特撮を担当。またキャストには川地民夫、山本陽子、和田浩治、そして藤竜也など当時の日活青春スターが勢揃い！

映像特典

- メイキングスチール&スタッフインタビュー
- ポスターギャラリー
- 国内版・海外版予告篇
- 当時のニュース映像
- ガッパデータ集

STAFF 原案:渡辺 明　監督:野口晴康　脚本:山崎 巌／中西隆三　**特撮STAFF** 監督:渡辺 明　撮影:柿田 勇／金田啓治／中村義幸　美術:山本陽一
CAST 川地民夫／山本陽子／和田浩治／小高雄二／藤 竜也　1967年／日本／84分／ドルビーデジタル・モノラル／シネマスコープ・サイズ　DVN－16／全国劇場公開作品

7.9 ON SALE ¥4,935 (tax incl.)

※この商品は2000年2月に発売致しました「大巨獣ガッパ DVDコレクターズBOX」(DVN-1000)に収録されているDVD映像と同一のものです。

第4回 日本映画エンジェル大賞

<日本映画エンジェル大賞>は、次代の映画界を担うプロデューサーの発掘・育成を目的に、「角川出版事業振興基金信託」によって創設されました。"作品の質"と"市場性"を両立させる映画の企画を広く募集しています。

プロデューサー志望のクリエーター
応募する

マーケティング・センスを持つビジネスマン
応募する

世界を視野に入れたプロデューサー
応募する

成功報酬を狙うプロデューサー
応募する

映像ビジネスに進出したい企
応募する

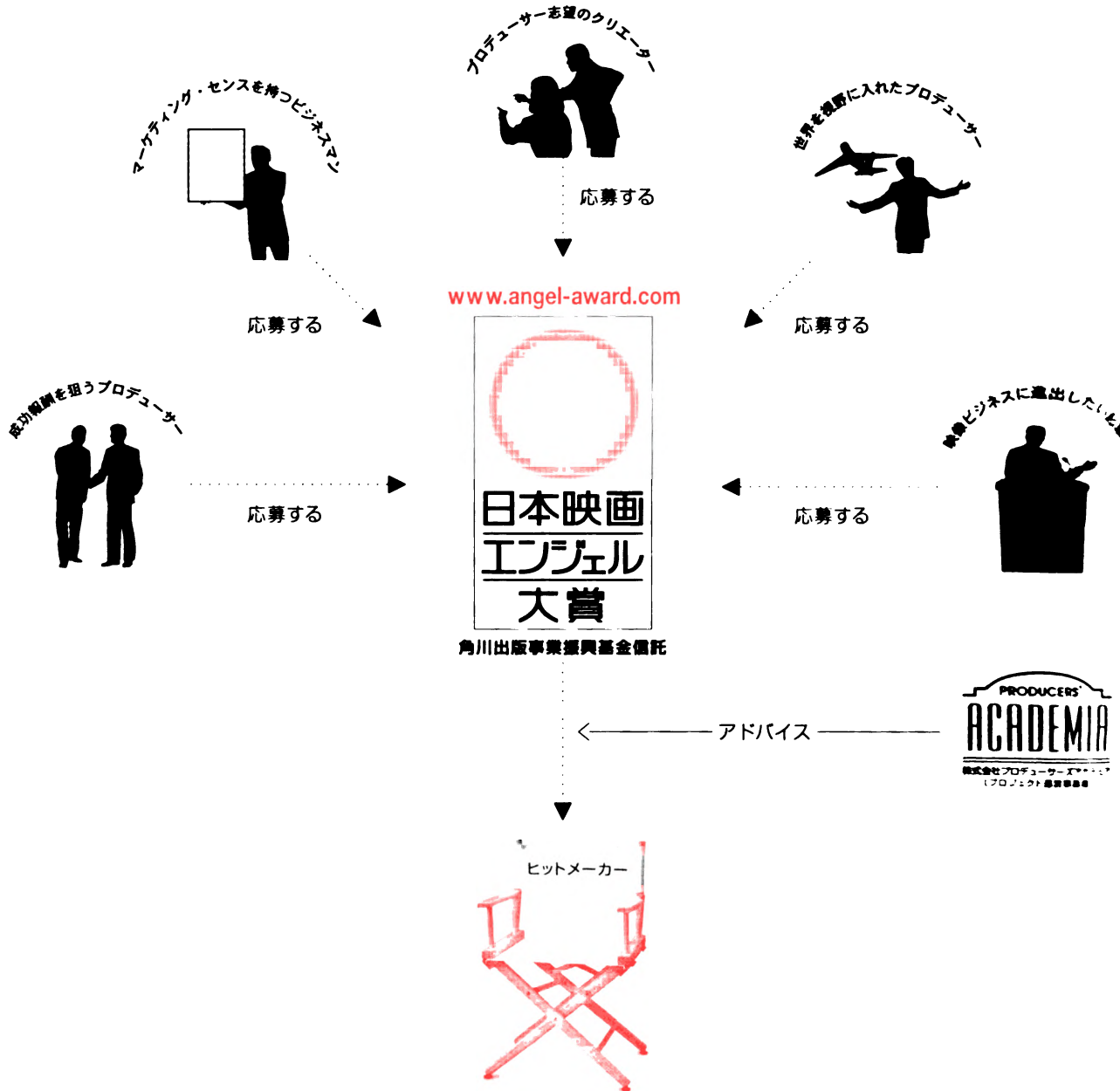
www.angel-award.com

日本映画エンジェル大賞

角川出版事業振興基金信託

アドバイス

PRODUCERS' ACADEMIA

ヒットメーカー

ヒットの陰に、プロデューサーがいる。

■募集内容
実写またはアニメーション映画の企画書。
（著作権者の許諾を前提に、原作のある企画も可）

■応募資格
「起業家」的プロデューサーを志す者。旧来の手法に捉われることなく、新たな挑戦を志向する者、または自ら映像作品（映画、TVドラマ、ビデオ等）をプロデュースした経験のある者。

■大賞受賞者への賞金と映像化支援
・賞金100万円が贈呈されます。
・500万円までのビジネスプラン開発資金が提供されます。
・ビジネスプランが審査を通過すると、最大3億円の製作資金の出資を受けることが可能です
・利益が出た場合には、成功報酬が認められます
・5年後には、募金の利益がプロデューサーに帰属します。

■応募受付期間
2004年7月1日（木）～7月30日（金）
※7月30日到着分まで有効。

■審査と発表
企画書審査を通過した作品応募者に対する面接審査等の上、大賞（4作品程度）を決定。
結果は2004年10月下旬に発表を予定しています。

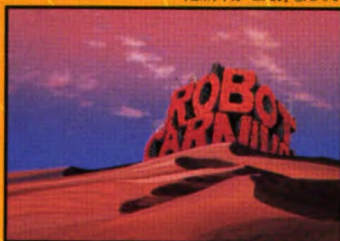
<日本映画エンジェル大賞>の趣旨や応募要項の詳細、応募に必要な書類、Q&Aなどについては、ホームページに掲載しています。
応募をお考えの方は、必ずご覧ください。

日本映画エンジェル大賞 事務局 株式会社プロデューサーズ

アキバ ORIENTAL COMIC THEATER

アニメ専門ロードショー館

秋葉原オリエンタルコミックシアター

「ロボットカーニバル」©A.P.P.P.

アニメ100日マラソン ～オープン記念企画～

6月20日(日)～26日(土)「BURN-UP」スペシャル
「BURN-UP EXCESS」「BURN-UP SCRAMBLE」

6月27日(日)～7月4日(日) ガイナックス20周年記念
「この醜くも美しい世界」「忘却の旋律」(各1～6話)

7月10日(土)～16日(金)
「ロボットカーニバル」「MEMORIES」

7月17日(土)～8月14日(土) ガンダム25周年記念
「機動戦士ガンダムⅠ」「機動戦士ガンダムⅡ 哀・戦士編」
「機動戦士ガンダムⅢ めぐりあい宇宙編」
「機動戦士ガンダム逆襲のシャア」「機動戦士ガンダムF91」

8月1日(日)～8月14日(土) イデオン特集
「伝説巨神イデオン 接触篇」「伝説巨神イデオン 発動篇」

8月15日(日)～21日(土) サクラ大戦特集
「サクラ大戦 活動写真」ほか(予定)

「サクラ大戦 活動写真」
©2001 SEGA・RED/「サクラ大戦 活動写真」製作委員会

「機動戦士ガンダムⅠ」
©創通エージェンシー・サンライズ

秋葉原 オリエンタル コミックシアター
銀座線 末広町 4番出口
至上野
蔵前橋通り
中央通り
電気街口
JR秋葉原
至御茶ノ水

東京都千代田区外神田6－14－2サカイ末広ビル地下1階
東京メトロ銀座線末広町駅4番出口徒歩0分
JR秋葉原駅電気街口徒歩8分

☎03-3833-7700／info_aoct@foom.co.jp
http://orient-com.jp

全席指定席、各回入替制(105席)

SERVICE サービス

会員組織

年会費630円で、映画鑑賞の会員特別割引や優先予約、各種イベントへのご招待および特別割引、さらにフリードリンクが100円(200円のところ)など、特典満載。

ロビー

■入場無料&アニメの情報満載！
■原画や台本、コスチュームも展示！
■DVD、フィギュア、コミック…ショッピングもOK!

フィギュアセール
100日マラソンを記念して
全品30～50%オフでお届け!
(1000円以上・7/4まで)

その他

■200円でフリードリンク！
■ぴあシネマリザーブシート導入!!
■毎週水曜日は女性限定シートが登場!!
■映画館初！ HOTSPOT(無線LANサービス)導入!!

とぎ話の常識をくつがえす、史上最強のファンタジー！

シュレック

2

FACE 04

伊藤英明

焼きつけたリアルな演技

取材・構成／石村加奈　撮影／安藤信之(eyes*)
スタイリスト／西ゆり子　ヘアメイク／稲葉功次郎(KiKi inc.)

撮影中から「現場が楽しくて仕方ない」と話していた伊藤英明待望の主演映画「海猿 ウミザル」が公開中だ。人命救助のエキスパート〝潜水士〟を目指し、50日間におよぶ猛訓練に挑む主人公・仙崎大輔と13人の仲間たち。若き海上保安官たちの、過酷な訓練を通して次第に培われてゆく男の友情を描いた作品である。

「広島県の呉市でロケをしたので、キャストやスタッフとずっと一緒だったんです。撮影中は酸素ボンベとか自分たちの使った道具も、当然のように自分自身で管理して。そうやって普段から台本にない前後の部分もやっていたから、特に役作りをしたという感覚はなかったですね。自然と仙崎大輔のままでいられたというか。ドキュメンタリーじゃないけど、役のままでいるみんなの自然な姿を、隅々フィルムに焼きつけていったような」

共演者が「ハード」と口を揃える水中での訓練シーンも、ダイブマスターの資格を持つ彼は楽しかったのだとか。本作について「俳優としてひとつの作品を撮り終えたというより、人間としていい経験をさせてもらった」と話す。

「仕事とはいえ、自分がやりたいと望んだ役で話をもらって、タイミングも合って、いい監督、脚本、スタッフ、キャストに恵まれたことは、それだけで幸せでした。そして今回は、本当にいろんなヤツから刺激を受けましたね。僕のバディだった工藤役のあっくん（伊藤淳史）は最初カナヅチだったけど、泣き言ひとつ言わずに、みんなに必死についていこうという気持ちがすごく感じられて。実際、全く泳げなかった彼が、最後はみんなと変わりないくらいうまくなって。ずっとその成長を見ていた分、やっぱり感動も大きいし。映画の中で工藤の難関をクリアしていくシーンが、僕はいちばん好きなんです」

もともと原作のファンだったという彼。己の弱さを克服し、確かに成長してゆく主人公の魅力についてはこう語る。

「原作より少し男っぽいですよね。男っぽいし弱いし、強いし、みたいな（笑）。でも人間って弱いからね。だからこそ強くなれるというか。大輔はまさにそういう男ですよね。弱いから、その弱さをさらけ出して、向き合って強くなろうとする。弱くて何が悪い！ って言えるのがカッコいいというのかな。でも彼はみんながいたからこそ成長できた。あのメンバーの誰が欠けてもダメなんです。その辺も、今回はとても自然に変化できました」

自然な成長と言えば、このところの伊藤にも、新しい役に貪欲に挑戦し、俳優の道をズンズン開拓している印象を受ける。7月には初舞台も控え、彼のフィールドは広がる一方だ。

「長く仕事を続けていくにあたって、もうちょっといろんなことをやりたいと思っているんです。それで舞台も経験してみたいなって。舞台については、好きか嫌いか、まずはそこからなんで（笑）。そこで自分がどう変化できるかということに、今、すごく興味があるんです。前も楽しかったんですけど、今は前にも増して、俳優の仕事が楽しいですね。（俳優としての自分を）『増量中！』みたいな（笑）。いろんな役をやるようになったことで、周りに素直に尊敬できる、カッコいい人がいることに改めて気づいちゃったんです。その中にいれば、自然と刺激ももらえるし。2年くらい前にある俳優さんと出会ってから〝俳優の仕事って、こんなもんじゃねぇな〟って思ったんですよ。その人、普段は思いっきり三枚目なのに、芝居は本当に色っぽくて。技術ではなく、魂でやっているんだなと思った。セリフじゃない部分で気持ちが伝わってくる俳優さんって、なかなかいないじゃないですか。本当にすごいと思った。その方と出会ってから、ますます仕事が楽しいと思うようになりましたね」

いろんな出会いを通して、俳優・伊藤英明がこれから目指すところはどこなのか？

「5年先、10年先、どういう俳優にというよりは、こういう人間になっていたいという気持ちの方が大きいかも知れませんね。人としていろんなことを経験していれば、懐もデカくなるし、いろんな人を演じられることにもつながるんじゃないのかなぁって。懐がデカくてちゃんと筋が通った人って、男らしくていいなぁって思いますね」

「海猿」のシリーズ化を真剣に望んでいるという伊藤。人としての成長を志し、確実に存在感をつけている彼ならば、今後の仙崎大輔の成長も、より軽妙に、より重厚に、たるみのないリアルな人物として見せてくれるに違いない。

『海猿 ウミザル』●監督／羽住英一郎 共演／加藤あい、海東健、藤竜也、香里奈、伊藤淳史 ●日劇2ほか全国東宝邦画系にて上映中

FACE.

伊藤英明

1975年岐阜県出身。97年ドラマデビュー。主演作「ブリスター！」(00)「LOVE SONG」(01)のほか、「陰陽師」シリーズ、「修羅雪姫」(01)などの出演作がある。「白い巨塔」などドラマでも活躍

ブレスレット　価格未定(CHEVRON ROYAL)
お問合せROYAL ORDER渋谷本店　03-5784-5587

2004 No.1408 7月上旬号 目次

表紙 ●鈴木杏 撮影

連載

フロント
インタビュー66

松竹株式会社
代表取締役社長

迫本淳一

薫風を受けて、新たなるスタート

5月27日（木）、定時株主総会とその後の取締役会での承認を受け、迫本淳一氏の松竹株式会社代表取締役社長就任が決まった。51歳の若き社長の登場である。この6年、企業再建の努力を重ねてきた松竹は、基盤作りを終え、薫風を受け、新たなる船出の時を迎えた。そんな印象を受けた。

取材・文＝関口裕子

ハードより まず人材

ここ数年、顕著な変化を重ねる映画界。まずハリウッド・メジャー日本支社や、東宝、東映など映画会社のトップが変った。また買収、出資による出版、音楽、広告代理店、ハードメーカーなど異業界からの参入も続く。そして松竹。

「こういう変化は、世界的に見て珍しいことではありませんし、日本映画界も金融業界同様、基盤を再構築する時期に差し掛かっているのだと思います。これまで、映画界は恵まれていたと思います。無論、頑張ってきたからではありますが、ある時期の猛烈な売上を遺留することで継続できてしまった感もある。いかに儲かっていたかということですね」

当期純利益マイナス97億円、有利子負債717億円を計上した98年に入社。04年、当期純利益11億をあげ、見事に再生をとげた。まず最初に手をつけられたことは。

「本当は、一年間じっくり会社内外の状況を見て勉強しよう。状況を見極め、それから判断しようと思っていました。でも入ってみたら、そんなことをしている余裕は全然なかった(笑)。今となっては懐かしい気もしますが、当時は週末返上で毎週、役員の人たちとコンビニの弁当を食べながら会議をしていました。

改革という意味では、まず不良資産の処理、有利子負債の削減という財務基盤の強化、それから収益力の強化という3つを急ぎました。まず出血を止めないといけない。そのためにひと月2億円の赤字を出していた鎌倉シネマワールドを閉鎖。その後、大船撮影所を売却したわけですが、それができたのは先輩方が資産を築いてくれたからこそ。それを売らなければならないのは非常に辛いことでしたが、これなくして再生のきっか

「天国の本屋～恋火」丸の内プラゼールほか全国松竹系にて公開中
©2004「天国の本屋～恋火」フィルムパートナーズ

けを作るのは難しかった」
みんなが望む形を選択できれば理想的。だが基盤が弱いところに、理想は重ねられない。
「新木場に撮影所を作ることなど、再び撮影所を持つ話は継続しております。でも、まずは人。人をどう育てられるかだと思うんです。人材育成ができて初めて、ハードをどうしようかということになってくる。施設を作ればよい映画ができるわけではありません。松竹が廃止したブロック・ブッキングだって、ブッキング先があるからよい映画ができるのではなく、よい映画ができたから多くの劇場を必要とするわけですよね」
このところの松竹配給の日本映画には、非常にチャレンジングな姿勢を感じる。製作本数を絞り、しかもさまざまなジャンルに果敢に挑み、しかもヒットも出している。
「そう言っていただけると嬉しいですね。本業をきちっとやることで、収益をあげていくことが理想ですから。僕が言うのもなんですが、そこは携わっている社員を褒めたいとずっと思っていました。『この世の外で　クラブ進駐軍』みたいな反戦的な作品もやるし、ファミリーで観られる『クイール』みたいなもの、『CASSHERN』みたいなアクションもある。山田洋次監督作品(『隠し剣　鬼の爪』)あり、『釣りバカ』(『釣りバカ日誌15』)シリーズあり、『ホテルビーナス』みたいなコマーシャルなものある。枠組やジャンルにとらわれず冒険し、収益的にはトータルで貢献してくれればいいと思っています。ただパートナー企業さんには一緒にやってよかったと思ってもらいたい。ビジネス・パートナーにも、お客さんにも喜んでいただける形を作りたいと思っています」

さこもと・じゅんいち　1953年生まれ。1976年慶應義塾大学経済学部卒業。78年同法学部法律学科卒業。97年UCLAロースクール法学修士。78年松竹映画劇場株式会社入社。91年に退社し、最高裁判所司法研修所入所。93年に弁護士登録をし、三井安田法律事務所に入所。97年からはハーバード大学ロースクール客員研究員も兼任。98年それらを退き、4月松竹株式会社顧問に就任。同5月代表取締役副社長に就任。04年5月同社代表取締役社長に就任。元松竹社長で名プロデューサーとして知られる城戸四郎は祖父にあたる。

祖父と大いに議論したかった

名プロデューサーで松竹社長であった故城戸四郎氏は迫本氏のおじいさまにあたる。肉親ゆえの忌憚のない意見交換で、映画製作、会社運営、そして映画の内容について、どんな話が交わされたのか。

「祖父について話すのは気恥ずかしいですね。祖父とは高校生から大学生までの間の6～7年間一緒に住み、もちろんいろいろ話もしました。映画業界には他業種より親近感を感じていましたが、僕は映画をやるつもりがありませんでしたので、他人事みたいな感じで聞いていた。こんなことならもっと突っ込んで聞いておけばよかったと思います(笑)」

まず、不動産会社である松竹映画劇場に入社。後に退社し、弁護士として企業法務やファイナンスを手がけながら、UCLAのロースクールに留学。同時にハーバードのロースクールで客員研究員として働く。当時の迫本さんの目は海外ビジネスに向いていた。

「考えてみれば映画だってインターナショナル・ビジネスなんですが、当時、そんな匂いは全くしませんでしたから。

祖父からは、いつも熱っぽく映画製作に関する話を聞かされていました。祖父は、経営者というより、製作者でしたね。映画作りは、哲学から入らなくてはならないというのが持論で、プロデューサーたちに『これを読め』と、『社会思想史十講』を配っては困らせていました(笑)。まず絶望し、そこからスタートするんだ。デスペレートな状態の人間を前向きな気持ちにさせる映画を作ってこそ意義があると」

松竹が作ってきた映画と符合する。

「そうですね。ただ僕は、それだけが松竹映画ではないと思う。そこは祖父が生きていたら大いに議論したいところです。松竹の主流ではありますが、それ以外もあっていいのではないかと。

祖父は江戸っ子で、洒落のきかないものが嫌いでした。問題を起こした経営者が、テレビで申し訳ないと形ばかりの涙なんか流していると、『何だあいつは』みたいなことを言ってね。そんな人でしたから、どんな偉い人から誉められるよりも、ラーメン屋のおじちゃんに『寅さん、良かったよ』と言われるほうを喜んだ。ただ、自分の思いを強烈に持っていたので、近くにいた方は大変だったと思います。プロデュースに関しては、もっと深く関われば祖父に負けないものを作る自信もあります。ですが、ここはクリエイティブの人たちがガンガン働けるよう、マネージメントに徹しようと思っています」

飽和状態となりつつある国内マーケット。これからはアジアのコラボレーションなど海外も視野にいれると語る。

「『血と骨』『亡国のイージス』『甲賀忍法帖(仮題)』『阿修羅城の瞳』『HAKKENDEN』とインターナショナルに勝負できそうなラインナップを揃えることができました。あとはその企画をどこまで活かせるかということですね」

二つお願いをした。まず、会社を経営されるなかで、会社を熟知している人、映画的知識に自信がある人も大切にして欲しいと。

「重要なことだと思います。会社を改革するには、新規に採用した優秀な人材も大事なのですが、中にいる者が核にならないと意味がない。改革は交換とは違います。人材は、どこの部署でも使える組織型も重要ですが、専門性が高く、知識が要求される映画の場合はプロフェッショナル型も大切。両輪でやっていくつもりです。もうひとつのお願いとは？」

健康に十分留意されること。

「(笑)。俺ね、減量する。見てて、痩せるから。今年の年頭の目標は、痩せて存在感のない男になることですから」

キネ旬フロント

チョンジュ（全州）フィルム・コミッションの現在と未来 その1

ＦＣ成功の秘訣　チャン・ドンチャン事務局長に訊く

文・佐藤結

前号にレポートが掲載されたチョンジュ（全州）国際映画祭の開催地であるチョンジュ市は、今も残る歴史的な町並みと、全州ビビンパプなど〝韓国一おいしい〟食べ物で知られている。行政的には全羅北道の道庁（道は日本の県にあたる）所在地だが、人口は約62万人と、1000万人都市ソウルや400万人近いプサンに比べ、かなりこぢんまりした印象だ。そんなチョンジュ市で、昨年、韓国映画の全製作数の約43パーセントにあたる26本もの映画が撮影されたという話を耳にした。その秘密をうかがうため、チョンジュ・フィルム・コミッション（ＪＪＦＣ）のチャン・ドンチャン事務局長を訪ねた。

「ＪＪＦＣは2001年4月28日、プサンに次ぐ韓国で二番目のＦＣとして設立されました。私はもともと、チョンジュとは縁もゆかりもない映画プロデューサーでしたが、撮影で訪れたことがきっかけとなり、昨年7月に事務局長に就任しました。ＪＪＦＣの年間予算はチョンジュ市からの2億ウォン（約2000万円）と、今年の下半期からは全羅北道からの1億ウォンも加わり、合計3億ウォンになります。スタッフは私と広報スタッフ、ロケーションマネージャー3人の合計5人で、皆、映画製作の経験のある人たちです。全羅北道で唯一のＦＣですので、市内だけでなく、道全域での撮影に対応しています」

日本各地のＦＣと比べると、予算、スタッフ共に恵まれていることがわかるが、作品誘致成功の理由はそれだけではない。

「他のＦＣと同じように撮影を積極的に支援していることに加えて、市と道、市民の協力によって、市庁前の道路を封鎖しての銃撃戦や爆破シーンといった、他の街では撮影困難なシーンの撮影が可能なことも大きな要因です。また、他の地域に比べて多少発展が遅れているので、70～80年代の風景が残り、建物も30年代くらいのものからあります。車で少し走れば山、川、海、島もあり、自然の中で撮影を行うこともできます。ソウルに比べて物価も1割ほど安く食事もおいしいので（笑）、たくさんの撮影チームが来てくれているのでしょう。昨年は地域全体で映画製作のために53億ウォンほどが使われたと見ています。間接的な効果まで含めれば130億ウォン程度になると予想されますので、経済的にも影響は大きいですね」

と、ここまででも、活発に活動中のＦＣだということは十分わかるのだが、チャン事務局長はさらに発展的なビジョンを持っている。

次号ではＪＪＦＣの未来についてのお話をお届けしたい。

©Evan Agostini／Getty Images／AFLO FOTO AGENCY

海岸にトンガリ帽子の白テントのパヴィリオンが並ぶインターナショナル・ヴィレッジ

キネ旬フロント

もうひとつのカンヌ・レポート

文・河原畑寧

カンヌ国際映画祭の開催期間は、一九九〇年以来ずっと十二日間だった。ところが、今年は最終日の五月二十三日はリピート上映にあて、授賞発表はその前日の二十二日に行うということになった。ということは、実質的に一日短縮である。一九四六年の第一回が十六日間、以後一九七七年までは、十八日間という長期開催が二回、十四日間という短期開催が三回あったほかは、十五日から十七日間が通例だった。それが一九七八年からは、七九年と八一年が十五日間、八〇年が十四日、あと八九年までは十二日か十三日間。つまり、ダウンサイジングしながらビジネス・イヴェントとしては世界最大の国際映画祭へと巨大化してきたわけである。それを、さらに能率化、合理化しようというのであるか。

コンペティション参加作も、発表時点で十八本、それにプレス試写直前になってジョナサン・ロシター監督のワイン業界の内幕を描いたドキュメンタリー「モンドヴィーノ」が加わったが、十九本というのは、おそらく史上最少数であろう。代わりに、というわけでもあるまいが、アウト・オブ・コンペティションに「トロイ」「ドーン・オブ・ザ・デッド」、クロージング上映用の作曲家コール・ポーター（ケヴィン・クラインが扮する）の伝記ミュージカル「ド・ラヴリー」と、封切り直前のアメリカ映画が並んで、ここらはカンヌならではの華やかなラインナップ。

そりゃあ、二千四百席のグラン・オーディトリウム・ド・リュミエールの巨大スクリーンと最高の音

響再生装置での「トロイ」なんて、帰れば日本で上映していると分かっていても、やはりここで行かねばという気になりますヨ。「ドーン・オブ・ザ・デッド」の深夜零時からの上映もあって、さすがにこれは日本で見ていたので遠慮したけれども、すごい盛り上がりだったと聞いた。

今年から設けられた〈カンヌ・クラシック〉は、補修復元された名作映画の紹介、映画についての新作ドキュメンタリー、巨匠名匠へのオマージュなど、映画史的視点から編成された新部門である。

ミケランジェロ・アントニオーニへのオマージュでは、監督自らが案内人となってルネッサンスの巨人ミケランジェロの彫刻を細部にわたって観客に見せて行く十五分のドキュメンタリー「ミケランジェロを見る」が紹介された。介護役に助けられながら歩いて予定より三十分近く遅れて上映会場に現われた九十一歳の監督に、会場のサル・ブニュエルを埋めた観客全員がスタンディング・オヴェイションで迎えた。

昨年のチャプリンに続いて復元新版が上映されたのは一九二六年製作のサイレント映画「キートンの将軍」。千百席のサル・ドビュッシーで、久石譲さんが書き下ろしたスコアが、久石さん自身が指揮する大編成のオーケストラで演奏され、細部まで鮮明に復元された機関車大追跡の手に汗握るアクションを最高に盛り上げ、上映後は熱狂的な拍手がしばらく鳴りやまなかった。キートン映画の品格の高さを、あらためて認識させる美しく見事な音楽だった。

オマージュでは、このほかブラジル〈シネマ・ヌオーヴォ〉のグラウベル・ローシャ監督（一九三八－八一）にスポットを当て、伝記ドキュメンタリー「グラウベル・ザ・フィルム／ブラジルの迷宮」などが上映された。草月シネマテークで見て凄いショックを受けた「白い悪魔と黒い神」（一九六七年）を再見、これまでにないグレイ・ゾーンが綺麗に出たプリントに感動を新にした。

映画を主題にした映画の一本として、やはり〈カンヌ・クラシック〉の枠内で上映されたのが、ジャック・リシャール監督「ル・ファントム・ド・アンリ・ラングロワ」という三時間三十二分の長編ドキュメンタリー。シネマテーク・フランセーズの創始者アンリ・ラングロワとその時代を回顧する内容だが、ラングロワが情熱を傾けて創設したミュゼ・デュ・シネマが火災にあって閉館したままの現状が紹介され、過ぎ行く時の残酷さを思い知らされて、ちょっと落ち込んだり。しかし、ああいうスーパー・シネフィルの怪人を、世界の映画人が懸命に支えた〝古き良き時代〟が、無性に懐かしく感じられた。

今年は、マルシェの方では文化庁、経済産業省、ジェトロ、日本映画海外普及協会（ユニジャパン）でジャパン・パヴィリオンを出した。とんがり帽子の大型テント三つを連ね海の見えるテラスのあるスペースで、夕方には日本酒をサーヴィスするハッピー・アワーで人集めしたり、取材や記者会見、打ち合わせなどに、けっこう重宝に使われていたようだ。まあ、無線LANが誰でも無料で使え、広々としたビーチを持つアメリカン・パヴィリオンを見てくると、インターナショナル・ヴィレッジの長屋の一軒という印象であるが、まずは大切な第一歩を踏み出したことは評価したい。

パレ・デ・フェスティヴァルのマルシェ用アネックス〈リヴィエラ〉にジェトロが設けたジャパン・ブース。国別、会社別に大小のブースがひしめき合って並んでいた

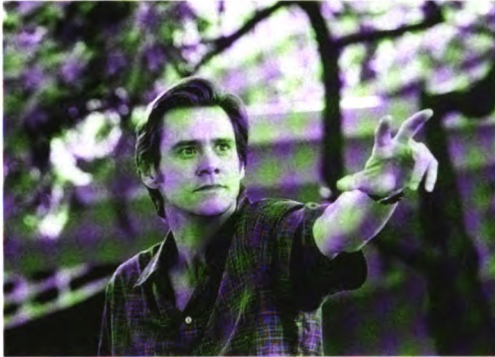
HOLLYWOOD

| ワールド・ニュース | ハリウッド | 井口健二 | Kenji Iguchi |

© Scott Gries／Getty Images／AFLO FOTO AGENCY

© Peter Kramer／Getty Images／AFLO FOTO AGENCY

「ブルース・オールマイティ」

ブレンダン・フレイザー　　McG（マックジー）

「ブルース・オールマイティ」の続編
残る難問はジム・キャリーの続投

昨年全米で第5位の興行成績を記録したジム・キャリー主演の神様コメディ「ブルース・オールマイティ」の続編が計画されている。前作で神の休暇中の代役で振り回された主人公は、今度は神の啓示によって第2のノアの箱船を作らされることになるようで、脚本の題名は"The Passion of the Ark"。実はこの脚本、元は前作とは無関係に発表されたものだったが、前作を監督したトム・シャドヤックが続編として使えることを思いついたのだそうだ。ところが4月に行われたオークションで、前作を製作したユニヴァーサル／スパイグラスは権利の獲得に失敗。権利はソニーに行ってしまった。そこでシャドヤックは自らソニーに赴き共同製作を申し入れたということで、続編は3社の共同製作で実現されることになっている。また前作にも参加した脚本家のスティーヴ・オーデカークが、続編にマッチするように脚本をリライトすることも決まっているようだ。ただしキャリーは、中々続編には出たがらない性分だそうで、今回は「エース・ベンチュラ」の続編も実現した盟友シャドヤック監督作品ということでどうなることか。なおリライトは、主演の変更も考慮した2面作戦で進められるようだ。

「スーパーマン」製作者側はすんなり決定
肝心の主演選びが難航中？

すでに撮影が開始されている「バットマン」に続いて、待望の21世紀版「スーパーマン」の製作が本格化してきた。そこで新たに公表された情報では、ＶＦＸを「マトリックス」を手掛けたＥＳＣが担当。またアニマトロニックとスペシャルメイクのベテラン、スタン・ウィンストンの参加も発表されている。さらに製作総指揮には、「スタースキー＆ハッチ」などのギルバート・アドラーの起用が報告されているが、実は3者は、先にキアヌ・リーヴス主演のDCコミックスの映画化"Constantine"でも一緒に仕事をしたところで、その流れで新作への参加もスムースに決まったようだ。そしてＪ．Ｊ．アダムスの脚本、ＭｃＧの監督で、ワーナーは年内にも撮影を開始したいようなのだが、肝心の主演者がまだ決まっていない。一時はブレンダン・フレイザーがかなり有力だったようだが、彼自身本作への出演は希望しているものの、それは主人公ではないとのことだ。なお本作は、「バットマン」と同じく物語の起源に戻ることが予定されているが、そこで登場する父親ジョー・エル役を、当初は敵役のレックス・ルーサーをオファーされていたジョニー・デップが希望しているという情報もあるようだ。

WORLD NEWS

「アルタード・ステーツ　未知への挑戦」

©Vince Bucci/Getty Images/AFLO FOTO AGENCY

ハリソン・フォード

©Evan Agostini/Getty Images/AFLO FOTO AGENCY

ジャック・ブラック

ケン・ラッセルのカルト作「アルタード・ステーツ」をリメイク

ケン・ラッセル監督が、80年にウィリアム・ハート主演で発表したＳＦ作品「アルタード・ステーツ　未知への挑戦」のリメイクが計画されている。オリジナルは、「ネットワーク」でオスカー受賞の脚本家パディ・チェイエフスキーの原作小説を映画化したものだが、実は原作者自らの脚色と監督のヴィジョンが対立し、最終的にチェイエフスキーが脚本のクレジットを下ろしたという曰く付きのものだ。しかし映画は公開後にカルト的な評価を得て、特にテーマとなった瞑想タンクを描いた作品では最高傑作とも言われている。ただしその後はテレビなどへの登場も少なく幻の作品になっているようだ。今回は原作に則した映画化を行うということで、脚色には「ターン」のリメイクも手掛けるファーンリー・フィリップスの起用が発表されている。監督は未定。

J・キャメロン製作のＳＦ作品出演も発表されたハリソン・フォード

前回に続いてハリソン・フォードの情報で、ジェームズ・キャメロン製作によるＳＦ作品への出演が発表されている。作品は、「the EYE［アイ］」のハリウッドリメイクなども担当しているライン・ダグラス・ピアソンのオリジナル脚本によるもので、題名は“Godspeed”。国際宇宙ステーションを舞台に、居住者全員の生命が脅かされる様な状況を描いたアクション作品のようだ。そしてこの作品では、キャメロンが「タイタニックの秘密」の撮影のために開発した３Ｄカメラが全面的に採用され、全編3Dによる長編映画化が予定されている。製作は今秋に開始され、フォードの出演シーンの撮影は来年早々の予定。ただし、フォードは“Indy 4”が開始されたときにはただちにそれに参加することを約束しているということで、その状況がどうなるかは不明だそうだ。

ミシェル・ゴンドリー監督ジャック・ブラック主演のＳＦスリラー企画

「ヒューマンネイチュア」などのミシェル・ゴンドリー監督で、“Master of Space and Time”というＳＦスリラーの計画が進められている。この作品は、ＳＦ作家のルディー・ラッカーが84年に発表した原作の映画化で、内容は、２人の科学者が思念を実体化する装置を発明したことから始まる騒動を描いたもの。そしてこの主演に、「スクール・オブ・ロック」のジャック・ブラックを起用する計画も発表されている。ただしこの計画、現在は、原作の映画化権をフランスのプロダクションが所有しており、ここから参加を要請されたゴンドリーがそれをドリームワークスに持ち込み、同社がフランス側と交渉中とのことで、その交渉がまとまれば実現するということ。ブラックには“King Kong”などの予定も詰まっており、実現は少し先になりそうだ。

http://www.enpitu.ne.jp/usr4/47635/も見てください。

「17歳的天空」(2点とも)

台湾映画復活の希望を運ぶ「17歳的天空」

本誌2月下旬の決算号でも書いたように、昨年の台湾映画シーンは何一つヒット作の出ない壊滅的状況にあった。それは今春まで含めても同じ。しかしこの4月に封切られ超ロングランの続く「17歳的天空」が、映画界に久々の活況と希望をもたらしている。

同作は、新人監督と新人プロデューサー、加えて何の映画製作実績もないプロダクションの製作による超低予算(約400万元、日本円で1400万円ほど)作品。公開も台北で4館のみという小規模スタートとなったが、映画は見るみるうちに若者たちの心を掴み、「グリーン・デスティニー」「聖石伝説」「ダブル・ビジョン」等過去数年の大規模製作台湾映画に次ぐレベルの異例の大ヒットを記録した。

成功の一因は、現在活況を呈している台湾テレビドラマで活躍する楊祐寧ら、新世代の人気赤丸急上昇中スターの出演によるように見えるが、実質的には、本作のプロデューサーたちの戦略勝ちと見るべき部分が大なように思う。

本作をプロデュースしたのは、李耀華(アイリーン・リー)、葉育萍(ミシェール・イエ)の二人。台湾映画というと作家主義、監督主導型の製作スタイルで知られるが、彼女たちは当初からプロデューサー主導型で企画を始動、開発。監督も、この企画に相応しい人を後から両プロデューサーが“発掘”する、という経緯で起用された。その幸運な監督は、陳映蓉(D.J.チェン)。商業映画監督経験ゼロの彼女は、その自主製作短編「Sorry Spy」(02年金馬獎デジタル短編部門入選作品)等が両プロデューサーの目に留まり、自らの企画・脚本によるものではないとは言え今回の幸運なデビューを果たした。

主要製作陣(幕後)は女性ばかりで占められた本作だが(あるいは、それゆえに、と言うべきか)、スクリーン(幕前)の方は、タイトルにもあるように、役柄上ハイティーンの男の子たちばかりで占められている。語られるのはゲイの男の子たちの一夏の恋物語だ。

「17歳的天空」は、その製作システムから、題材、監督、製作スタッフ、そして出演者に至るまで、凡そあらゆる領域で既成の台湾映画の“色”に染まっていない。それが、地元映画を巡って国民的危機感に苛まれる台湾での、本作の異例の成功を導き出した。いまや政府の製作補助金なしでは成り立たないとされる台湾映画だが、この映画は製作補助金も得ることなく作られている。

WORLD NEWS

「飛躍、海へ」

蔡明亮

混迷する台湾映画界が生んだ もう一人の"奇跡"

「17歳的天空」の成功とは別の意味でだが、死滅寸前の台湾映画界でもう一人、人々から"奇跡"のように見られている監督がいる。彼女の名は王毓雅（アリス・ワン）。多くの有能監督が長年にわたる沈黙を強いられている台湾で、彼女のみは毎年のように、それも時に年１本以上のペースで新作を作り続けているからだ。米国と日本で映画を学んだ彼女は、01年「蛋」で長編デビュー。同作を含めその後の作品も殆どまともに公開、評価されてきたとは言えないが、林依晨（アリエル・リン）らテレビの人気俳優を起用して、何とか製作活動を継続。昨年の金馬奬では、蔡明亮組の新作以外収穫はないと言われるなか、ついに林依晨を主演女優賞候補に送り込んでしまった。

そのノミネート作品「飛躍、海へ」（原題「飛躍情海」）が、７月２日から開催の福岡アジア映画祭で上映される。本作は二人の女主人公を中心に据えた作品だが、林依晨以外のもう一人はクランク・イン直前まで見つからず、万策尽きて監督自ら主演することになったという曰くつきの作品。今の台湾映画人が置かれた苦境とそれに対する痛々しい格闘ぶりが伝わってくる一本だ。

「天橋不見了」の後日談となる 蔡明亮の新作がクランク・イン

一方、混迷を深める台湾映画界でただ一人、典型的な作家主義型監督にも関わらず気を吐きつづける蔡明亮は、「さらば、龍門客桟」に続く新作に早くもクランク・インした。この新作は、歌手・白光が50年代に歌った曲名から取られた「天邊一朵雲」。既に昨年度の政府製作補助金を獲得し完成が待たれていたもので、当初は「さらば、龍門客桟」より早く撮られる予定だった。が、「さらば、〜」の舞台となる映画館が取り壊されることになったため、急遽同作を先に撮りあげていた。

蔡明亮は「さらば、〜」の直前に短編「天橋不見了」を監督し、それが短編にも関わらず商業公開されたことは以前紹介したが、「天邊一朵雲」は、多分にこの短編の延長上に構想されている（因みに「天橋不見了」自体は、「ふたつの時、ふたりの時間」の延長上に、その後日談的な話を語ったものだった）。今回も主人公は李康生。「天橋不見了」の後半で、歩道橋（天橋）での時計売りを辞めた彼はＡＶ男優になる面接を受けるが、「天邊一朵雲」ではＡＶ男優となった彼が主人公として登場、陳湘琪らいつものメンバーと絡む。またタイトルが暗示する如く、ミュージカル場面も見せ場となる予定だ。

カンヌのレッドカーペットに登場した「オールドボーイ」チーム

「下流人生」

ユ・ジテ

パク・チャヌク監督の復讐三部作の完結篇とは？

「JSA」のパク・チャヌク監督が手がけた「オールドボーイ」がカンヌ国際映画祭でグランプリ（審査員特別大賞）を受賞した。韓国映画のカンヌでの受賞は02年にイム・グォンテク監督が「酔画仙」で監督賞を受けたのに続いて２度目。韓国では昨年11月21日に封切られ320万人の観客を動員し、既にビデオ化もされている作品だが、受賞を受けて６月１日から全国56スクリーンで再度封切られることになった。また、次回作「親切なクムジャ氏」(仮題）に「ＪＳＡ」にも出演したイ・ヨンエが出演することも発表された。“復讐三部作”の最後を飾るこの作品は、犯罪を共謀した男の裏切りで罪を被った女の復讐劇となるとのことで、久々のスクリーン復帰となるイ・ヨンエがどんな姿を見せてくれるのか楽しみだ。秋、クランク・イン予定。

イム・グォンテク監督最新作ヴェネチアのコンペに参加

大ベテラン、イム・グォンテク監督の第99作にあたる「下流人生」が、ヴェネチア国際映画祭コンペティション部門である〈ヴェネチア61〉に出品されることになった。これにより韓国映画は99年の「LIES／嘘」(チャン・ソヌ監督)以降、６年連続で同映画祭のコンペに出品されることになる。イム・グォンテク監督自身は、87年にカン・スヨンが主演女優賞を受賞した「シバジ」に続いて２度目のヴェネチア。韓国では５月21日から公開されている「下流人生」は、激動の50〜70年代を生き抜いた男の物語で、「ラブストーリー」のチョ・スンウが主演している。ベルリンでの監督賞(キム・ギドク監督「サマリア」)、カンヌでのグランプリ(「オールドボーイ」)に続く受賞をと、国内では期待の声が高まっている。

一般参加も可能なイベント【一つの都市の物語9404】開催

「スキャンダル」のイ・ジェヨン監督らが企画する【一つの都市の物語9404】が６月９日に開かれる。この催しは参加者がムービー、スチールなどのデジタル機器でソウルの１日を記録するというもので、５分程度の作品であれば形式は自由とのこと。「ソウルはあまりにも早く変わってしまうので、少なくとも記録に残しておかなければ」と考えるイ・ジェヨン監督は94年の６月９日にも同じようなイベントを企画したことがあり、この時は720人余りの芸術家、学生らが35ミリ、16ミリなどでソウルの１日を切り取った。今回も映画監督や、ユ・ジテ、イ・ジョンジェといった俳優たちが参加を決めているが、申し込みさえすれば、一般の人も参加できる。できあがった作品はインターネットを通じて公開されるとのこと。

ソウル週末興行成績 5.15 5.16

順位	作品	観客数
❶	「僕のガールフレンドを紹介します」(6月4日、韓国)	16万3000人
❷	「デイ・アフター・トゥモロー」(6月4日)	14万7220人
❸	「トロイ」(５月21日)	9万2520人
❹	「マッハ！」(５月26日)	1万7966人
❺	「レディ・キラーズ」(６月４日)	1万492人
❻	「阿羅漢　掌風大作戦」(4月30日、韓国)	8733人
❼	「孝子洞の理髪師」(５月５日、韓国)	2974人

EUROPE WORLD NEWS

｜ワールド・ニュース｜ヨーロッパ｜吉武美知子｜Michiko Yoshitake｜

"NOTRE MUSIQUE"

"10e CHAMBRE-INSTANTS D'AUDIENCES"

ドキュメンタリーの概念を逸脱した"ドキュメンタリー"作品たち

カンヌを挟んでこの1カ月に観た映画の中で印象に残るものといえば"ドキュメンタリー"が圧倒的に多い。括弧付きなのは従来のドキュメンタリー映画という概念を逸脱したものが多いからだ。予め書かれた脚本を俳優が演じたわけではない、映像に記録された実態を作家(監督)の主観で編集＝再構築し、新たなエモーションを与える。カンヌで上映された2本、アメリカのジョナサン・カウェット作 **"TARNATION"** は、母と自分の関係や家族の秘密を、8歳の時から撮っていたという映像（自身が仮装して演じるフィクションあり、周囲へのインタヴューあり）を万華鏡のようにちりばめ加工し、詩的に昇華させた自分史。一方、イタリアのイェルヴァン・ジャニキアン＆アンジェラ・リッチ＝ルッキ（ストローブ＝ユイレ夫妻を彷彿とさせる）コンビ監督の **"OH, UOMO／あー、人間"** は、第一次世界大戦を題材にした三部作の最終編。アーカイヴ所蔵の資料映像(1919〜21年)の中から、負傷した肉体や飢えに苦しむ肉体を凝視した悲惨な映像を繋ぎ音楽を被せ、より強烈なインパクトを与える。今日も同じ事を繰り返している人類に対する痛切なメッセージ。偉大なるジャン＝リュック・ゴダールの **"NOTRE MUSIQUE／我等の音楽"** の導入部となる〈王国1：地獄〉も、まさにこの手法なのであるが、JLGの場合は、記録映像も劇映画（黒澤「乱」等）も、時代もカテゴリーも超え、およそ全ての戦争を扱った映像を彼の感性でチョイスし繋ぎ合わせ、観る者を圧倒！　レイモン・ドゥパルドンの **"10e CHAMBRE-INSTANTS D'AUDIENCES／第10簡易裁判所"** は、面白い！の一言に尽きる正統派。同監督は94年にも検事の部屋にカメラを据えた「軽犯罪」という快作を撮っているが、今回は簡易裁判所で裁かれる12件に関わる、裁かれる者、裁く者、告訴する人、弁護する人、をじ〜っと撮る。コメントも音楽も無い。作り手の主観を可能な限り排除して見せる。社会世相も浮かび上がるが、何より人間が面白い！のである。さて、アッバス・キアロスタミの「10話」はお得意のカメラ・ポジション(車の助手席)にDVカメラを固定し、運転しながら映画について1時間以上語りつづける自分を撮っている。1イントロ、2カメラ、3テーマ、4脚本、5ロケ、6音楽、7俳優、8小道具、9監督、10ラストレッスン。彼の映画論なら文章で読んでもよいようなものだが、運転する彼の肩越しに風景が流れ、最後にカメラを降ろした後の俳句オチまで、やはり映像作品なのだ。

「風音」

「風音」モントリオール映画祭出品

東陽一監督がメガホンを執った「風音（ふうおん）」（東京・渋谷ユーロスペースほかで夏公開）が第28回モントリオール世界映画祭（8月26日開幕）ワールドコンペティションに出品されることが決まった。アジアフォーカス・福岡映画祭2004（9月10日開幕）にも出品される。同映画は芥川賞を受賞した作家・目取真（めどるま）俊さんの原作・脚本。沖縄を舞台に、海風が吹くと、物悲しい音が鳴る特攻隊員の頭蓋骨をめぐる物語。つみきみほ、加藤治子、ほか沖縄の市民が出演。東監督は「北米大陸最大の映画祭モントリオールと作品選定に定評のあるアジアフォーカスに招待され、とてもうれしい。特に、沖縄を舞台にした映画が、広く世界の人々に見られるチャンスが与えられたということに、深い感慨がある」とコメント。那覇市では6月12日から先行公開中。

第23回藤本賞授賞式より

織田裕二が俳優で史上2人目の藤本賞

故藤本真澄プロデューサーの功績を称えて設けられた「第23回藤本賞」の授賞式が6月3日、都内で行われ、俳優の織田裕二が受賞した。同賞は映画製作者に贈られるもので、俳優の受賞は主演作「ホタル」で第21回特別賞の高倉健について2人目。昨年7月公開の「踊る大捜査線 THE MOVIE 2」の製作に貢献し、ヒットに導いたとの理由で、フジテレビ映画事業局長の亀山千広氏、永田芳男氏との連名だった。織田は和久刑事を演じた故いかりや長介さんについて聞かれると「どう思っているのか、声が聞けるなら聞きたい」。特別賞は「ジョゼと虎と魚たち」の製作・久保田修氏、小川真司氏、「ヴァイブレータ」の製作・森重晃氏、奨励賞は「東京ゴッドファーザーズ」の丸山正雄氏、「美しい夏キリシマ」の仙頭武則氏、新人賞は「油断大敵」の監督・成島出氏。

清水美砂

清水美砂がカナダ映画のヒロインに決定

清水美砂がカナダ映画に主演することが決まった。題名は「ペーパー・ムーン・アフェア」（監督デイヴィッド・タマギ）で、夫を持つ日本人女性が青年と中年の白人男性と出会い、その愛に揺れるという物語。夫役は「ラストエンペラー」のジョン・ローン。清水は1998年11月に米男性と結婚し、現在、米東部メリーランド州在住。二人の子供を出産、子育てしながらも、日米を行き来し女優活動を続けており、昨年10月のオーディションで役を射止めた。製作サイドは当初、中国人を考えていたが、カンヌ国際映画祭パルム・ドールを受賞した「うなぎ」や「赤い橋の下のぬるい水」でヒロインを演じた清水を気に入り、設定を日本人に変えたという。5月31日からヴァンクーヴァーで約2か月の撮影に臨む。製作サイドでは日本公開にも意欲的、来年のカンヌ映画祭出品を狙っている。

WORLD NEWS

「コンクリート」

上映中止の「コンクリート」が7月公開

銀座シネパトスで5月29日からの上映が中止になった映画「コンクリート」（中村拓監督）が7月3日から9日まで、渋谷のアップリンク・ファクトリーで上映される。同映画は1989年に東京・足立区で起きた「女子高生コンクリート詰め殺人事件」を基にしたフィクション。作品情報が新聞で発表された直後から、銀座シネパトスに抗議や意見が多数寄せられたため、中止になった。製作サイドはホームページでこれまでの経緯などを説明し、「いろいろな意見があると思います。ご覧になりたくない方がいれば、もちろん観る必要はありません。ただ、不快だからという理由で、それを抹殺する権利は誰も持たないのではないでしょうか」などとコメント。アップリンク側も「抗議や脅かしがあっても上映中止という“自主規制”をするつもりはありません」との声明を出した。

映画「世界の中心で、愛をさけぶ」

「世界の中心で、愛をさけぶ」が今度は連ドラに

行定勲監督がメガホンを取った映画が大ヒットしている「世界の中心で、愛をさけぶ」（原作・片山恭一氏）が今度はTBS系連続ドラマになる。放送枠は金曜午後10時、7月2日スタート。ストーリーは映画よりも原作に忠実で、高校時代の話が中心。山田孝之が主人公サクを、綾瀬はるかが初恋の相手・亜紀を演じる。映画発のドラマでは矢口史靖監督の「ウォーターボーイズ」（01年）が記憶に新しい。昨年7月期、フジテレビ系で放送されたドラマ版でも、山田が主演している。「ウォーター～」には映画版「世界～」で高校時代のサクを演じた森山未來も出演していた。映画版と同じキャストはいないが、映画で成人したサクの婚約者を演じた柴咲コウが主題歌のバラードを担当。最終興収60～70億円見込みという映画同様、支持を得られるかどうか、注目が集まる。

「誰も知らない」

「誰も知らない」世界30か国で上映決定

第57回カンヌ国際映画祭の史上最年少男優賞に輝いた俳優の柳楽（やぎら）優弥（14）が主演する「誰も知らない」（是枝裕和監督、7月下旬公開）が世界30か国で公開される見込みだ。配給元シネカノンによると英、仏、アイルランド、ロシア、韓国など19か国で契約が成立。米、イタリア、ドイツ、タイなど5か国が交渉の最終段階を迎えており、最終的には30か国に達するという。同映画は4人の子供が母親に捨てられ、自分たちで生き抜く姿を描くもの。海外ではフランソワ・トリュフォー監督の「大人は判ってくれない」の日本版、などと高く評価された。都内で行われた授与式で、是枝監督からトロフィーを手渡された柳楽は「持って帰っていいんですか？」と喜んでいた。現在、出演中のテレビ朝日系ドラマ『電池が切れるまで』（木曜・午後10時）は今後、出番が増えるという。

日本映画製作情報

World News Japan

森田芳光監督最新作「海猫」始動！

森田芳光監督が第10回島清恋愛文学賞を受賞した谷村志穂の同名小説を映画化する東映製作・配給「海猫」の撮影が、6月15日から本格的にスタートした。

作品は、北海道・函館の漁村を舞台に漁師に嫁いだヒロイン・野田薫とその夫、義弟との三角関係を軸に愛の純粋さや美しさを描く。

脚本は、森田監督と「それから」「失楽園」「阿修羅のごとく」などコンビが多い筒井ともみが担当。

森田監督は今回の映画化について「僕は高倉健さんの映画、日本の風土とドラマが見事にマッチしている映画が好きなんですが、そういう作品が高倉健さんのもの以外に今の日本映画にはない。それが映画ファンとして悔しいと思っていたところ、谷村さんの小説に出会い、絶対映画にしたいという強い衝動にかられました。難しいテーマですが、やりがいのある仕事です。極上の日本映画を目指します」と抱負を語っている。

森田作品には「模倣犯」に続いて2作目、映画初主演となる伊東美咲は「私の役は、ひと目をさけて生きているロシア人の父を持つハーフの女性。繊細に大胆に演じたい」と意欲を語り、相手役となる夫を演じる佐藤浩市は「20数年前、『魚影の群れ』（相米慎二監督）で漁師を演じたが、その作品で得たいろいろなイマジネーションを膨らませてこの役をやりたい」、義弟役の仲村トオルは「森田作品（『悲しい色やねん』）は16年ぶり。前作は興行的に芳しくなかったので、その悔しさを胸にいだきつつ、森田監督のイメージを忠実にスクリーンに再現したい」とそれぞれ話している。

他の出演者は、薫の母親に三田佳子、薫の娘にミムラ、小島聖、白石加代子、深水元基、角田ともみ、蒼井優、鳥羽潤、佐藤恒治。

9月下旬に完成し、11月中旬から全国東映系公開。

（製作会見／前列左より）ミムラ、三田佳子、伊東美咲、谷村志穂
（後列左より）森田芳光監督、佐藤浩市、仲村トオル

「レディ・ジョーカー」のキャスティング

高村薫が〈グリコ森永事件〉に想を得て執筆した社会派長編小説「レディ・ジョーカー」を平山秀幸監督のメガホンにより現在、映画化中なのは既報どおり。

企業誘拐を題材に骨太な人間ドラマを描いたこの原作は、97年に刊行されて以来64万部を記録するベストセラーとなっている。それだけに、かねてから映画化が待望されており、実現した今は配役が気になるところ。ここでは、先日行われた製作会見で発表となった配役一覧を紹介する。

［競馬仲間］物井清三＝渡哲也／半田修平＝吉川晃司／布川淳一＝大杉漣／高克己＝吹越満／松戸陽吉＝加藤晴彦 ［警察］合田雄一郎＝徳重聡／平瀬＝國村隼／神崎＝矢島健一／土肥＝外波山文明 ［ビール会社］城山恭介＝長塚京三／白井＝岸部一徳／倉田＝清水紘治／城山武郎（原作では杉原）＝辰巳琢郎 ［その他］城山佳子（原作では杉原）＝菅野美穂 レディ＝斎藤千晃 物井清二（原作では岡村）＝谷津勲／秦野浩之＝綾田俊樹／岡田経友会・西村＝松重豊

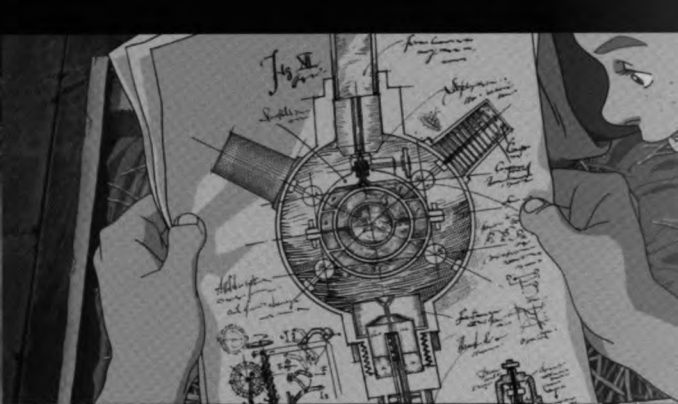
会見の席上で高村薫は、「この原作は映画化不可能だと思っていたが、映画人の方たち、特に企画の近藤晋さんの、この作品に懸ける熱い想いには頭が下がる思いでした」と語っている。

撮影は今年1月にアップ、現在ポストプロダクション中。公開は東映の配給により12月、全国東映系にて。

巻頭特集

スチームボーイ
STEAMBOY

超高圧蒸気を高密度に圧縮し、空前絶後のパワーを生み出す画期的発明品スチームボール。発明一家スチム家のレイ少年は、祖父ロイドと父エディの開発したこのスチームボールの争奪戦に巻き込まれる……。激戦区の夏興行に真っ向勝負を挑む19世紀の英国を舞台にした冒険活劇「スチームボーイ」。今後のアニメ界の命運を握るかもしれないこの大友克洋監督によるアニメーション大作の魅力を探るべく、スタッフの証言などから徹底特集。

大人も子供もワクワクできる映画って凄いと思う

鈴木杏 Interview

主人公 ジェームズ・レイ・スチム［声］

取材・文＝永野寿彦　撮影＝前田昭二
スタイリスト＝阿井真理子　ヘアメイク＝晋一朗（ZACC）

衣裳協力＝ Santa monica 遊歩道店（TEL 03-3402-6501）

大人も子供もワクワクできる映画って凄いと思う

鈴木杏 INTERVIEW

「スチームボーイ」でタイトルロールでもある主人公の少年レイを演じたのは、ハリウッド映画「ヒマラヤ杉に降る雪」(98)からSFアクション「リターナー」(02)、岩井俊二監督作「花とアリス」(04)まで、幅広く活躍している若手実力派女優・鈴木杏ちゃん。

少年の声を女性が演るというのは日本のアニメでは珍しくないことだが、「劇場版ポケットモンスター／セレビィ　時を超えた遭遇」(01)で声優体験済みとはいえ、男の子の声を全編に渡って表現するのはかなり難しかったはず。

「私なんかがやって大丈夫なのかなって正直思いました。こんな大役ですからね。初心者なのに(笑)。セリフとかは結構難しかったです。言ってることもなんか専門的というか、漢字やカタカナがいっぱい出てきたりもしたし。〝自走蒸気機関〟とか〝バルブ〟とか。私は何回やっても〝バルブ〟を〝バブル〟って言っちゃって(笑)。〝バルブ〟だよっていつも突っ込まれてました。あと口の動きが細かったので合わせるのも苦労しました。その上、男の子ですからね(笑)。声質はちょっと低くしているかな。ただ14歳の男の子なんで、そこまで低くなくてもいいんじゃないかなと思って、ビックリするくらい低くはしなかった。一番難しかったのは、大きな声で叫ぶ時にはどうしても声が高くなっちゃうんですよ。それはちょっと大変でした。でも男の子を演じる機会なんてなかなかないですから。〝考えろ考えるんだ〟ってセリフがあるんですけど、それは男の子にしか言えないセリフだし、レイじゃなきゃ言えないセリフだから、結構好きでしたね。カッコイイなぁって思いました」

世界中で人気のクリエイター、大友克洋監督の9年ぶりの新作ということでのプレッシャーはどうだったのだろうか。

「世界中が待っている方ですからね。プレッシャーはありますよ(笑)。すごい数の人が待ちに待っているかと思うと、ちょっと怖かったですね」

そんな大友監督に演出された感想は？と訊くと、ほとんど指示されることはなかったとのこと。現場での作業は音響監督である百瀬慶一さんが進めていったのだという。

「百瀬さんと2人でスタジオに入って黙々と録音作業していました。百瀬さんの指示に従って、全体像の印象がまだ掴めないまま演じていました。演じ手としては百瀬さんが監督で、大友さんは総監督って感じでした。大友さんの口から聞いたのは、〝あ、いいんじゃないんですかね〟って言葉。それは何回も聞きましたよ。百瀬さんが録っては〝大友さんどうですか〟って確認するというスタンスで作業していたんですけど、毎回〝あ、いいんじゃないですかね〟。百瀬さんがどんなに迷って聞いても〝あ、いいんじゃないですかね〟って(笑)。〝あ〟が必ず入るんですよ。だからやっぱり総監督って感じ」

大友監督の印象はと訊くと、意外にも「普通に優しい人だよって答えてます」と杏ちゃん。

「大友さんは凄い人だと思います。

でもそこを見せないんですよ。普通の人って言うと変ですけど、そういうオーラをわざと発していない感じです。私も実像はつかめていないかもしれませんが、何を考えているのか分からない人だなって思いました。寡黙だし、かと思ったら冗談も言うし。その冗談もいつもの大友さんのトーンだからよーく聞いてないと聞き逃して、えっ!? ってなっちゃうような感じで。でも言ってることは笑える。まだそんな仲良くなっていない頃に、お仕事で北海道に行っておみやげを買ってきたんですよ。そしたら大友さんは〝なんでカニじゃないの?〟って。仲良い人だったら分かりますけど、〝よろしくお願いします〟〝お疲れさまでした〟ぐらいしか声を交わさないぐらいの時に、〝なんでカニじゃないの?〟って言われるなんて思いませんでしたね。不思議な人だなぁって(笑)」

実際に完成した作品を観た杏ちゃんは、自分が演じていることすらも忘れて、一観客としてこの「スチームボーイ」を心から楽しんだという。

「すっごく面白かったです。最初の方は自分の声は大丈夫なのかって気にしていたんですけど、でもそんなことを気にさせないぐらい面白かった。久しぶりに映画を見てワクワクしました。『スチームボーイ』は凄く広いなと思ったんですよ、対象が。私はワクワク観れたし、大人の人たちもワクワク観ていた。小さい子供たちも絶対ワクワクするはずですし。それは凄いことだなって思ったんですよ。そういう映画はなかなかないんじゃないかな。録音の時は1人だったので完成しているものを見て初めて会話していると思いましたよ。小西(真奈美)さんとしゃべってるって。共演者の方々の演技には、果たして私は大丈夫なのかってちょっと焦ったりもしたりして(笑)。内容的にも奥深い映画ですけれど、人それぞれ考えること、感じることは違いますから。まず美しい映像を堪能してもらいたいですね。そこから入って、映画館を出る時には色んなものを持って帰ってほしいなって願っています」

すずき・あん/1987年生まれ。東京都出身。96年にテレビドラマ「金田一少年の事件簿」で女優デビュー。主な出演作に、映画「ジュブナイル」(01)「青の炎」「MOONCHILD」「ナイン・ソウルズ」(03)、テレビドラマ「青い鳥」(97)「六番目の小夜子」(00)「Stand Up!!」(03)、舞台「奇跡の人」「ハムレット」(03)など。豊田利晃監督作「空中庭園」が公開待機中のほか、人気漫画を映画化するアンドリュー・ラウ&アラン・マク監督作「頭文字D」、10月公演の舞台「髑髏城の七人」にも出演。
http://www.web-foster.com/

スチームボーイ
STEAMBOY

＊P76～P77に、スカーレット役の小西真奈美さんのインタビューを掲載

撮影=前田昭二

スチームボーイ
STEAMBOY

大友克洋監督発言から読み解く「スチームボーイ」誕生秘話

文＝氷川竜介

ついに「スチームボーイ」が完成、大友克洋監督による期待の映像が結晶化した。その完成像は意外にも「AKIRA」のようなサイバー的で極彩色の先端映像とは正反対の、『漫画映画』の王道を行くような、古めかしくてかつ新しい冒険活劇であった。

コンピュータ、デジタルという21世紀の絵筆を使いつつ、大友監督はなぜ19世紀産業革命時代の蒸気機関を使ってこの冒険世界を描こうとしたのか。そこにこめられた想いを、大友監督の公式発言から探ってみたい。

出発点は『大砲の街』

まず、最初に作品づくりの原点となった動機とは何だったのだろうか。

「出発点は、映画『MEMORIES』(95)で自分が監督した『大砲の街』です。これは、"蒸気"の漂う"第一次大戦"っぽいヨーロッパの感じの世界観でしたが、それを長編のドラマにするためには、もっと以前の蒸気機関を使って万国博覧会を舞台にして、きちんとした"少年もの"をやった方が良いと思いました。それで手塚治虫さんの『アストロボーイ（鉄腕アトム）』に対抗して、原子の力じゃなくて"蒸気の力"にしようということで、題名も『スチームボーイ』にしたのです」

もうひとつ、この作品の成立において重要な目標としては、コンピュータによるアニメーション制作というものがあった。それと企画の立ち上げについては、どのような関連があったのだろうか。

「『大砲の街』は全編ひとつにつながったワンカット処理をして延々とカメラワークが続く作品でしたが、当時はアニメーションの撮影台の限界で不可能だと言われることが多かったのです。ちょうどそのころ、ディズニーがコンピュータを導入して『ライオン・キング』(94)で画期的な映像をつくっていましたし、スタジオにも安藤（裕章／CGI監督）くんが入ってきて、僕たちもコンピュータを使い始めたので、"もう、次はこれしかないだろう"という話になっていったのです」

最先端の映像技術で19世紀を描く

しかし、コンピュータによる最

先端の映像技術と、産業革命の出発点であり今は失われた石炭による蒸気機関、そして少年の冒険活劇という要素はストレートにはリンクしない。それを結びつけた大友監督の発想とは？

「冒険活劇にしたのは、1本の作品をコンピュータで実現するのが予算的にも技術的にもいかに大変なことか、当時の僕たちがいかによくわかっていたかという証拠です。回収するためには、〝ウケる映画〟をつくらなければならないということです。

　その当時、出資者が僕に期待していたのは、『AKIRA』(88)のような〝超能力と近未来〟のイメージだったと思います。確かに未来という世界観はCGで作るのには向いてはいますが、絵を描く人間たちにとってはツルツルしたものは面白くないし、そもそも世界観が作れません。むしろざらついた錆びた鉄の感じや油のギトギトしている感じ、つまり肌ざわりのあるものをやりたいと思ったのです。そういう〝テクスチャー〟が欲しくて、ある程度資料も集めていた19世紀の世界を選びました」

　その手触り感を具体的に体現するもの――それは映画の中では精緻に描き込まれた美術が中心となっている。その油まみれの重厚な

1978—じゆうを我等に
（実写映画・自主製作／製作・脚本・編集・監督）

1983—幻魔大戦
（アニメーション映画／アニメキャラクターデザイン）

1987—ロボットカーニバル
（OVA／オムニバス／オープニング＆エンディング　脚本・監督）

—迷宮物語
（アニメーション映画／オムニバス／「工事中止命令」脚本・キャラクターデザイン・監督）

1988—AKIRA（アニメーション映画／原作・脚本・監督）

1991—ワールド・アパートメント・ホラー
（実写映画／脚本・監督）

—老人Z（アニメーション映画／原作・脚本）

1995—MEMORIES
（アニメーション映画／オムニバス／原作・製作総指揮・総監督／Episode 3「大砲の街」原作・脚本・キャラクター原案・美術・監督）

1998—パーフェクトブルー（アニメーション映画／企画協力）

—スプリガン（アニメーション映画／総監修・構成）

—GUNDAM Mission to The Rise
（イベント映像／CG短編／デザイン・絵コンテ・監督）

2001—メトロポリス（アニメーション映画／脚本）

大友克洋が参加した主な映像作品

「幻魔大戦」©1983角川映画

「ロボットカーニバル」（オープニング）©A.P.P.P

「迷宮物語」（「工事中止命令」）©1987角川映画

「AKIRA」©1988マッシュルーム／アキラ製作委員会

【DVD】
「AKIRA ＜DTS sound edition＞」
◎PIBA-1268
◎発売元／ジェネオン エンタテインメント
◎定価3990円（税込）

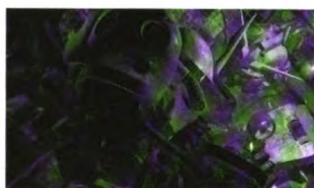
「ワールド・アパートメント・ホラー」
©1991 Aniplex Inc., Quarter Flash Inc.

「老人Z」
©1991 TOKYO THEATERS CO., INC / KADOKAWA SHOTEN PUBLISHING CO., LTD / MOVIC CO.,LTD / TV Asahi/Aniplex Inc.

「MEMORIES」（「Episode3 大砲の街」）
©1995マッシュルーム／メモリーズ製作委員会

【DVD】
「MEMORIES」
◎BCBA-1763
◎販売元／バンダイビジュアル
◎定価3990円（税込）

「スプリガン」
©1998たかしげ宙・皆川亮二／小学館・バンダイビジュアル・TBS・東宝

【DVD】
「スプリガン」
◎BCBA-0134
◎販売元／バンダイビジュアル
◎定価8190円（税込）

「GUNDAM Mission to The Rise」
©創通エージェンシー・サンライズ

【ローソン限定DVD】
「Road to STEAMBOY」に特別収録
◎DVD付大人チケット
定価2900円（税込）
◎DVD付子供チケット
定価2400円（税込）

「メトロポリス」©手塚プロダクション／METROPORIS製作委員会

【DVD】
「メトロポリス」
◎BCBA-1034
◎販売元／バンダイビジュアル
◎定価3990円（税込）

おおとも・かつひろ／1954年生まれ。宮城県出身。73年に短編「銃声」で漫画家デビュー。「ハイウェイスター」「さよならにっぽん」「気分はもう戦争」などで注目され、83年に「童夢」で第4回日本SF大賞受賞。82年から連載した「AKIRA」が爆発的なヒットとなり、84年には第8回講談社漫画賞受賞。独自の漫画表現で業界内外に多大な影響を与え、日本を代表する漫画家としての地位を築く。83年にはりんたろう監督による映画「幻魔大戦」のキャラクターデザインを務め、これを契機に以後アニメ制作に関わり始める。近年は、アニメ制作が中心となっているが、絵本「ヒピラくん」（木村真二・画）や漫画「沙流羅」（ながやす巧・作画）などの原作のほか、イラストやエッセイなどでもその才能を発揮している。また、原作提供した実写映画化作品には、石井聰亙監督の短編「シャッフル」（81）山川直人監督「SO WHAT」（83）などがある。

質感は背景にとどまらず、続々と登場するスチームメカひとつひとつの表面にも実現されて、この映画の大きな魅力となっている。

「僕にしてみれば、描き割りみたいな美術がセコい映画は観ていられません。やはり、美術が世界観そのものなのです。トータルな世界を作るためにも、きちんとした世界観をもった美術が欲しくて木村（真二／美術監督）さんにお願いしました。良い仕事を要求しましたし、実によく応えてもらいました。

一番最初に思っていたことは、美術で作りあげた木村さんの世界をいかにコンピュータ上に具現化するかということでした。ですから、"テクスチャー"をCGで作るのではなく、逆に美術を3DCGの全部に貼り込んでいくということを目ざしました。パーツ、パーツで描くので全体が見えなかったり、コンポジット（合成）した後に再調整せざるを得ないなど、難しい局面も多々ありましたが、挑戦して良かったと思います」

メカデザインと音の狙い

こうしたさまざまな試みを含みつつ産まれた濃密な19世紀の世界観の中で、縦横無尽に動きまくるスチームメカ——それはまさに「発明の時代」を象徴する機械群だ。そのデザインには、大友監督はどのような意図を持っていたのだろうか。

「難しかったのは、リアリティを持続することです。単に架空の蒸気機関というだけなら簡単に作れますが、一番最後にものすごいものがでてくるので、それまでは物語に即してなるべく抑え気味にして、現実からあまりかけ離れないようなデザインにしたいと思いました。いわゆる"SFメカ"にしてはいけなくて、素材はあくまで木と鉄、動力として必ずボイラーが積んであるという、そんな実感を守ることです。途中で蒸気兵が登場して、もっと大きな飛行兵が出現してという具合に、最後の方に向けていろんなものがでてきますが、いかにそれまでを地道にやるか苦心しました。デザイナーはそれぞれ自分の実力を発揮したい気持ちがありますから、どうしても現実離れしたデザインをしがちでした。実際に格好良すぎて使えないものもあったりで、それには困りました」

さて、本作品の大きな話題のひとつには、百瀬慶一音響監督の指揮のもと、日本スタッフと米国ハリウッドの一流スタッフが共同で音楽と音響の作業を行ったことがある。それに対する大友監督の狙いとは、どの辺にあったのだろうか。

「今は劇場の音響の質が違ってきて、5・1chで迫力の低音も出るようになっています。まず、そういう環境に対応できるものにしたいと思いました。特にアメリカ映画は全般に音圧が強く、『ドン！』と身体に来ると感じています。その音圧が生み出すようなダイナミズムや高揚感が欲しいと思いました。音楽についても、映像が完成した上でマッピングに近い感じで合わせていくハリウッド的な劇中音楽を、スケールの大きな形でやりたかったこともあって、結局はアメリカで作業するのが良いと思うようになりました。

今回、百瀬音響監督には『音楽』と『効果音』と『セリフ』をトータルで見るようお願いしました。誰か一人に預けることで、音響をシンプルな形として、強くしたかったからです。実際、完成作品ではは音はトータルにひとつのものとして聞こえますから、それぞれぶつかったりしないよう、何を作っ

ているかを知っている人間が一人、真ん中に立って作業を指揮することが必要だと考えています」
　こうして得られたハンス・ジマーのプロダクションに所属する若手スティーヴ・ジャブロンスキーの音楽と音響の仕上がりは、記者会見によれば大友監督も満足のいく結果だったようだ。

今作にこめたテーマと願い

　最後に、大友監督がこの作品にこめたテーマの核とは、いったい何だったのだろうか。どういう観客にどのように受け止められたいという願いがこもっているのか。ここに締めくくりとして、まとめてみたい。
「僕の中での『スチームボーイ』の目標とは、コンピュータとアニメーションの一番良いスタイルを作ることでした。コンピュータにも特化せず、アニメーションにも特化しない、両方をベストな形で組み合わせた“もう一つ別な映像”を作るということです。
　そのためには、自分が面白いと思う素材でないといけないわけですから、あのようなゴチャゴチャしたものがガチャガチャ動くという映像になりました。結局、僕はああいうものが好きで、そういう意味では、これは男の子にとってのプラモデル系の映画です。作品としてはずっとそのコンセプトは変わっていませんし、コンピュータになったからといって、つくる人間までが変わるわけではありません。ある種の冒険もの、エンターテインメントは不変だと思っています。
　この映画は、小学3～5年生ぐらいの男の子に観て欲しいです。スチーム城の中央動力室がでてきたとき、『うわ～!』と思ってくれれば成功です。映画というものは、もちろんテーマもありますが、もともとオモチャ箱的なところを持っていると思います。次から次へと目の前に見たこともない世界がでてきて、そこで自分たちと同じ子どもが活躍する……空を飛ぶし水にも潜るという、そういう単純な活躍を観ていただければ、楽しんでもらえるのではないかと、僕は思っています。小さな子どもが驚いてくれて、その子たちをどこまで知らない世界へ、どこまで遠くに連れていって喜ばせてあげられるか、それが大事なことではないでしょうか」
　監督の視線は回顧ではなく、あくまでも開かれた子どもの未来に向かっている。それは映画の中で描かれている通りであり、それがこの作品の持つ力強さの源泉なのだ。大友克洋監督の、『永遠の童心』を乗せた「スチームボーイ」――世界へと飛翔するのは、もう間もなくだ。

「スチームボーイ」の公開を記念し、CS『スカイパーフェクTV！』の各局では、
大友克洋の映像作品を放映（ケーブルTVやスカパー！110°などでも視聴可能）

■日本映画専門チャンネル（スカパー！707ch）
アニメ初参加の「幻魔大戦」、監督作「AKIRA」などの代表作から、「シャッフル」「SO　WHAT」などの原作提供実写作品、さらには「AKIRA」のメイキングまで全9作品を放映。

○2004年7月2日（金）から、5週連続毎週金曜深夜放映
「AKIRA（日本語版）」「AKIRA（日本語字幕付き英語版）」「AKIRAメイキング　プロダクション・リポート」
「ロボットカーニバル」「幻魔大戦」「迷宮物語」「シャッフル」「SO WHAT」「ワールド・アパートメント・ホラー」

■アニマックス（スカパー！724ch）
○7月4日（日）21：00ほか「老人Z」
○7月11日（日）21：00ほか「AKIRA　サウンドリニューアル版」

■ キッズステーション（スカパー！276ch）
○7月3日（土）22：00ほか　「MEMORIES」

PRESENT
7月17日からの「スチームボーイ」の公開を記念して、非売品のTシャツとトートバッグをプレゼント。P204のプレゼントと同じく、巻末の閉じこみハガキを使ってご応募ください。締め切りは、7月5日です。

■Tシャツ（フリーサイズ）　3名様
■トートバッグ　2名様

「スチームボーイ」を描いた男たち

取材・構成＝山下慧

メインスタッフの証言で綴る完成までの道程と最新技術を駆使した2Dアニメ表現の頂点

製作期間9年、構想からは10年の歳月を経ていま「スチームボーイ」が我々の前に届けられる。この長き苦闘の足取りを振り返る意味も込めて、「スチームボーイ」製作に参加したメインスタッフの発言を紹介していこう。

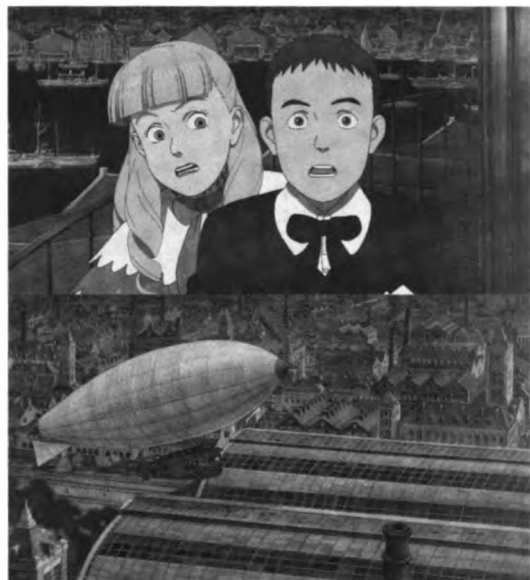
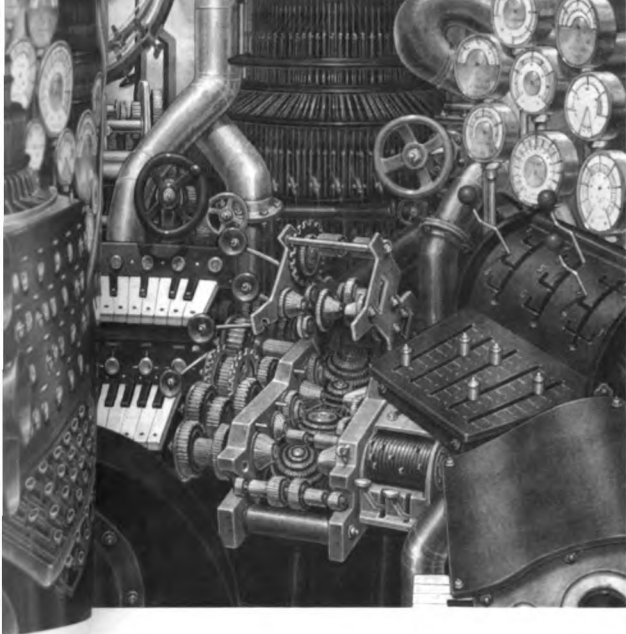
写真右から
安藤裕章［CGI監督］
木村真二［美術監督］
高木真司［演出］
外丸達也［総作画監督］
橋本敬史［エフェクト作画監督］

スチームボーイ
STEAMBOY

企画スタート パイロット版制作

「スチームボーイ」の企画書完成は94年6月。オムニバス・アニメ「MEMORIES」（95）の中で、歯車と蒸気機関からなる西欧的架空世界を舞台とした「大砲の街」を監督した大友は、19世紀西欧のスチーム・パンク世界をデジタルワークで描く構想を持っていた。デジタル環境が整う以前の、「MEMORIES」や「GHOST IN THE SHELL／攻殻機動隊」（95）でCGIやデジタル処理が導入され始めた時期だ。アニメーション制作は「MEMORIES」と同じスタジオ4℃が担当。そこで起用されたのが、以下のメインスタッフである。

総作画監督の外丸達也は、フリーの立場で4℃作品に携わっていた69年生まれのアニメーターだ。

「この作品の前は「MEMORIES」で、森本晃司さん監督の『彼女の想いで』の原画を担

当してました。そこで４℃から、次の大友さんの企画のパイロット版を作るので作画監督で入らないかと誘いを受けて、ちょっと荷が重いとは思ったんですけど、勉強がてらやることにしたんです」

　エフェクト作画監督の橋本敬史は65年生まれ。外丸と同じくフリーの立場で４℃作品に参加し、「ＭＥＭＯＲＩＥＳ」から続いての登板となる。

「『彼女の想いで』の原画やエフェクト、『最臭兵器』の原画もやりました。中学生の頃から大友さんのファンで、『ＡＫＩＲＡ』の時はすでに原画マンだったけど、参加できなくて残念な思いをしてたんです。だから今回は是非にと。作画監督としては、外丸君が基本的にキャラクター方面を手掛け、キャラ以外は自分という完全分業のかたちです」

　ＣＧＩ監督の安藤裕章は66年生まれ。ＣＧＩ担当として４℃に参入し、同スタジオの他作品も並行して手掛けつつ「スチームボーイ」のＣＧＩを製作した。

「『彼女の想いで』や『大砲の街』では、実験的にＣＧを使っていました。その終わり頃、こんなのどうだろうという感じで『スチームボーイ』の話が出て、そのまま自然な流れでパイロット版に参加したかたちですね」

　62年生まれの美術監督・木村真二は、大友と直接組むのは今回が初めてとなる。

「その少し前に『ＡＫＩＲＡ』の作画監督だったなかむらたかしさんの『とつぜん！ネコの国バニパルウィット』（98）が終わったばかりでした。大友さんがこれを見てくれたようで、４℃からお話をいただいたんです。２本続けて映画はキツイということもあったんですが、パイロット版の頃は軽いものを作ろうと言って、それほど気負いもなく参加したので、こんなになるとは思ってませんでした」

制作体制の変化 中断と再開

　構想段階での「スチームボーイ」はビデオ作品であり、若手アニメーターとのコラボレーション的な意味合いを持たされていた。パイロット版の完成後、企画は映画作品に発展し、イギリス・ロケハンを経て96年６月から作画作業に入る。その後、出資会社がバンダイビジュアルに移って97年10月に製作発表。予算は11億円（最終的な製作費は24億円）、99年の公開予定だった。だが体制の乱れから99年に作業中断、さらに制作スタジオが４℃からサンライズへ移管といった紆余曲折を経て、本格的に製作再開の体制が整うのは２０００年７月のことであった。

　制作体制が混迷を続ける間、スタッフは放置されていたわけではない。

「途中で抜けるという気持ちはありませんでした。現場の製作はずっと続いていて、上の方でゴタゴタと揉めているなぁという感じで。大友さんは、絶対作る、とずっと言っていたので、それほど気にせずに」（作画・外丸）

【ＣＧＩ監督】安藤裕章（あんどう・ひろあき）／1966年生まれ。愛知県出身。93年より大友克洋監督「MEMORIES」（95）のＣＧＩスタッフとしてスタジオ４℃に加わり、アニメ業界へ入る。現在、アニメ＆ＣＧプロダクションのビーンジャムで代表取締役を務めている。主な参加作品に、映画「メトロポリス」（01／ＣＧスタッフ）、短編アニメ「音響生命体ノイズマン」（97／ＣＧスタッフ）「チキン保険に加入ください」（00／監督）、ミュージッククリップ「ケン・イシイ／EXTRA」（95／ＣＧディレクション）「GLAY／サバイバル2.7-D ANIMATION VERSION」（99／ＣＧスタッフ）など。

「作業が滞った時期も大友さんとダイレクトに打ち合わせしてもらって、レイアウトを自分の方で描いて作業していましたね。大友さんの絵コンテが緻密に描かれていたから可能だったことです」（美術・木村）

CGI・安藤も制作が4℃から離れた時点でフリーとなる。旧スタッフがほぼそのままサンライズへ移動したかたちだ。この時期の00年10月、東映アニメーションはTV用アニメの作画工程すべてをデジタル化すると発表。また11月には、フルデジタル制作の「BLOOD THE LAST VAMPIRE」（00）が公開されるなど、業界ではデジタル制作の環境が整いつつあった。ここで人材補強的な意味で参加したのが、61年生まれの演出・高木真司だ。

「大友さんとはTBSのスポット映像（98）を一緒に作っています。私はプロダクションI.Gから出向するかたちでこちらに来てるんですが、ある日いきなり、サンライズの富岡秀行プロデューサーと知己だったI.Gの石川光久社長に呼ばれて、次は『スチームボーイ』へ行けと（笑）」

高木はI.Gのデジタル部門責任者であり、「BLOOD」の演出を担当した人物だ。「モチベーションを維持し続けるのは、結局大友さんが一番大変なんです。制作が中断してるなかでも大友さんは絵コンテでこつこつと作品世界を構築してきた。その絵コンテを読ませていただいて、これが世の中に出ないのはもったいない、自分の力が実現に結び付くのならばぜひ、と参加しました」と高木は当時を振り返る。

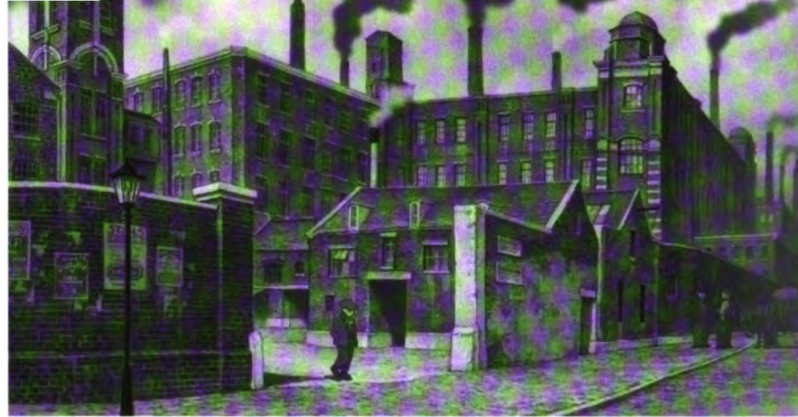
本格始動 スタッフたちの挑戦

こうしてようやく本格始動に至った「スチームボーイ」ではあるが、作画工程もまた尋常ではなかった。総カット数は約1850、動画枚数は18万枚を超え、すべてのカットは大友作品特有の緻密な絵で描かれる。当初からデジタル製作を謳っていたものの、それは彩色・撮影以降と一部の作業をデジタルで行なうのであって、作画自体は従来通り一枚一枚紙の上に描くのだ。

「エフェクトにしても手で描くのが前提でした。パイロット版に蒸気を3Dでやった場面があるんですが、何だこりゃって思った。作画でばばって描いた部分は力技でカッコよくて、この時、大友さんも作画の方がいいと確信したみたいです」（エフェクト・橋本）

それはCGI部門も合意のことであり、安藤はこう語る。

【美術監督】木村真二（きむら・しんじ）／1962年生まれ。埼玉県出身。小林プロダクションを経てフリーに。大友克洋とは絵本「ヒピラくん」（02／おはなし・大友克洋、え・木村真二／主婦と生活社刊）でも組んでいる。主な参加作品に、映画「うる星やつら2 ビューティフル・ドリーマー」（83／背景）「プロジェクトA子」（86／美術監督）「ルパン三世 風魔一族の陰謀」（87／背景）「となりのトトロ」（88／背景）「ヴイナス戦記」（89／背景）「賢治のトランク 双子の星」（96／美術）「とつぜん！ネコの国バニパルウィット」（98／美術）、OVA「天使のたまご」（85／背景）「県立地球防衛軍」（86／美術監督）など。

背景動画はデジタルで処理された

マンチェスターの工場

ロンドン市街

「自分がやりたかったことは、2Dアニメにおけるデジタルの有効利用。作りたいのはスタイルとしてのセルアニメなんですね。省力化とかではなく、まっとうにメリットを活かすかたちで、セルアニメへ全編にコンピュータを利用したらどのように出来るか、それを正面から試みてます」

美術の場合、CGとして取り込まれた絵がモニター上とフィルム上で正確に再現されることを必須条件とすれば、背景画を描くことに大きな変化はない。

「マンチェスターとロンドンの違いというか、そのへんの質感を描くのが大変になるだろうとは思ってました。やってる間はずっと疑心暗鬼なんですよ。たとえばイギリスの人が見ても納得するかどうか。ただ日本人が平安京の映画を観て違和感があるかどうかというのも、簡単に推し量れないことですからね」（美術・木村）

大友の、すべてを美術的なルックで動かしてみたいという想いは、背景動画をデジタルで処理するというかたちでも実現した。移動や回り込みなど、カメラの動きに合わせて背景が構図を変化させていく〝背景動画〟の部分に、CGを用いるのだ。従来の背景動画はすべて作画が手で描いていた。今回の場合は、元の原図を作画で描き、それに沿ってCG部門が美術からの素材を組み込んで背景動画を作っていく。

「全体の風景の他に、樹木や家やそういう素材を一つ一つ手で描いて、それをテクスチャーとして貼ってもらうわけです。それは実写のCG背景でも同じ方法論を取っているはず。美術はそのぶん枚数的に作業が多くなりましたが」（美術・木村）

この方法ではイメージボードの段階で背景動画をシミュレートでき、作画の作業量は軽減されると同時に、背景動画の質感が美術画のままになるわけだ。演出の高木にとって、こうしたデジタル制作の作業量を増やすことが個人的なテーマとなった。

「前作の『BLOOD』は中編でしたが、機材のスペックや技術の面でこれ以上は長く出来ないという制約があったんです。だから『スチームボーイ』では量的に多く、なおかつ質をきっちり維持して、そのバランスを取るということが自分なりのテーマでした」

作画スタッフにとっては、大友作品独特の動きや、構図の取り方が課題だ。

「オーソドックスなかたちがいいなと思ってたんです。今の流行りの動きとか絵柄とかをなるべく取り入れない方向にしたい。実写をトレースしたリアルさも求めないし、アニメーション

【演出】高木真司（たかぎ・しんじ）／1961年生まれ。東京大学工学部卒。テレビアニメ『らんま1/2』（89）などで絵コンテや演出を務めつつ、デジタル化を見越してコンピュータ知識を習得。ソニー・コンピュータエンタテインメントでのアニメーションアドバイザーを経て、プロダクションI.Gに入社。制作現場のデジタル化に取り組む。I.Gのデジタル部門の責任者兼演出を担当後、スチームボーイスタジオに出向。主な参加作品に、映画「BLOOD THE LAST VAMPIRE」(00／演出、システム設計)、テレビアニメ「魔法騎士レイアース」(94〜95／絵コンテ、演出)、ＯＶＡ『パンツァードラグーン』(96／監督)『フリクリ』(00〜01／スーパーバイザー)、ゲーム『モーター トゥーン・グランプリ』(94／モーション演出)『サクラ大戦2〜君、死にたもうことなかれ〜』(98／アニメーション監督）など。

スチームボーイ
STEAMBOY

の中でしかないような動きや、記号化された動きもなるべく排除する。そのせいで若干地味な印象にはなったかなと思うんですけど」（作画・外丸）

「大友さんの作品って〝リアル〟よりは〝リアルっぽく見える漫画〟で、はっちゃけた方が面白いなっていうのが外丸君と私の意見なんです。エフェクトも、リアルっぽく見えるけど実はリアルじゃない動きをさせたりとか。世界観はリアルに作って、画面はリアルっぽく見えればいいかなぐらいの感じでやってましたね」（エフェクト・橋本）

構図に関しては、大友は望遠レンズや俯瞰の画面が好みなのだという。広角レンズを使うとそこに意味が出る、余計な意味が出ないように望遠を使う、ということだ。

「アニメーションってはったりでごまかすというか、勢いで見せる場合がけっこう多いんです。カットを割って、ぱぱっと切り返して、勢いでイメージを伝える。そうじゃないと作画がものすごい労力を必要とするんです。それを大友さんは、さらっと俯瞰の1カットで、大変な状況を絵として見せよと指定する。でも実際にそのまま絵にすると、見てて何もない絵になりかねないんです。そこで何か要素を足すなり、カメラワークをいじったりするんですが、やりすぎても不自然になっちゃうし、いろいろなところで匙加減が大変でした。広角レンズのカットってほとんどない。たまにあると、何か普通のアニメっぽい構図だなと、逆に違和感になっちゃうんですよね」（演出・高木）

「大友さんのイメージに発想力があって、欲しいと思った絵が逃げの絵ではない。枚数を使うから、動きが難しいからと普通は構図的に逃げる部分で、逃げない構図がまず思い浮かべて描けちゃう人なんです。CGのところだと、真正直な透視図法でなく、いかに大友さんの〝絵〟のパースにするかと気を使いました」（CGI・安藤）

　細部で特筆すべきは本作の肝でもある蒸気描写だろう。通常の蒸気は、輪郭を持ち光と影の部分を塗り分けて表現されてきた。ここでは〝粒子の密度により描き分けた〟表現が試まれている。蒸気の一つ一つは、すべて独自の手法による手描きの煙だ。

「『大砲の街』がエアブラシでかなりリアルにやっていたので、あれを超えよう、と。カット毎にキャラクター性のある生きた蒸気を描きたかったので、ひとつの蒸気を他に流用するパンクはあまり使ってません。エアブラシを使う方がベストなのかもしれないけど、一枚絵ならと

【総作画監督】外丸達也（とまる・たつや）／1969年生まれ。神奈川県出身。87年にみゆきプロダクション入社。テレビアニメ「ハイスクール！奇面組」（85～87）で動画デビュー。90年に退社してフリーとなり、91年には有志でフリー集団〈画房 雅〉を結成。主な参加作品に、映画「MEMORIES」（彼女の想いで／95／原画）、テレビアニメ「バトルファイターズ 餓狼伝説」（92／作画監督）「NINKUー忍空ー」（95～96／原画）「るろうに剣心ー明治剣客浪漫譚ー」（96～98／原画）、OVA「孔雀王3 櫻花豊穣」（91／原画）「THE 八犬伝［新章］」（93～95／2話・原画／5話・作画監督）「アミテージ・ザ・サード」（95／原画）など。

もかく、自在に動かすとなるとなかなか難しい」(エフェクト・橋本)

「『大砲の街』は短編だから出来ることなんです。長編に対応するためにどうするかで苦労して、時間がかかりました」(作画・外丸)

――完成
作品へこめた思い

こうした、スタッフの長きに渡る手作業によって「スチームボーイ」は完成した。出発時点では、20代の若手スタッフで大友作品を制作すると標榜したものが、今やメインスタッフの全員が30代半ば以上。はたして彼らの感慨はいかなるものか。

「結局アニメーター人生の半分を費やしてしまったので、大きな経験だったと思います。けっこう実験ができる場でもあったし、いろいろ上手い原画の人、それもトップクラスの人たちと知り合えて、かなり勉強になったんですよね。これからそれを活かせるかどうかが問題です」(作画・外丸)

「名前も知らない人を制作さんが連れてきて、こんな上手い人がこんなところに埋もれてたんだって発見できたのは、自分としても嬉しかった。『スチームボーイ』はいい意味で大友さんらしくない素直な作品です。変に考えないで見られるというか。どんな作品でも必ず流して作っちゃう部分があるけど、それが1カットもない。ある意味、2Dアニメの頂点にあるのかなと思いますけど」(エフェクト・橋本)

「スタッフはみんな、日本や海外の区別なく、ただ絵を作ることにおいて参考にしたりライバル意識を持ったりして作ってるものです。『スチームボーイ』は2Dアニメとしてすごくまっとうで丁寧な作り方をしたんですけど、国籍に関係なくアニメという枠でそのまま世界に送り出したいですね」(CGI・安藤)

「各パートの人の関わったところが、ちゃんとその人の映像になってますね。自分のキャリアの中ではすごく大きなものになるし、関わってきた人たちがある程度幸せに自分たちの作品ですと言えるようなものになったことが、最も嬉しい」(演出・高木)

「製作期間の話になると、もし悪い方向に答が出たら本当に次がない、その意味での功罪はあります。ただ、大友作品のうるさいぐらいのくどさというのは、10年に一度のスタンスで皆が見たいくどさだと思うんですよ。紆余曲折がなくても5～6年はかかったと計算してますが、それでこれが出来るなら、手描きアニメから撤退した海外の資本も入ってくる可能性があるかもしれない。予算も時間もかかるアニメーション映画は日本国内だけでペイするのはなかなか難しいので、『スチームボーイ』は世界に通用するようになってほしいと思ってます」(美術・木村)

たしかに後年になって振り返れば、「スチームボーイ」はアニメーション大作におけるさまざまな功罪を示すことになるだろう。だが今は、彼らをはじめとする製作スタッフすべてのセンスと技術を受け止めつつ、この健康的な空想科学冒険活劇をたっぷりと堪能しようではないか。

【エフェクト作画監督】橋本敬史(はしもと・たかし)/1965年生まれ。群馬県出身。84年にスタジオじゃんぐるじむ入社。テレビアニメ『燃える!お兄さん』(88)などで原画を務め、88年よりフリー。91年には有志でフリー集団〈画房 雅〉を結成。93年に退団後、スタジオ4℃などを経てスチームボーイスタジオへ。主な参加作品に(桐生雅則クレジット作品を含む)、映画「サイレントメビウス2」(92/メカ作画監督)「GHOST IN THE SHELL/攻殻機動隊」(95/原画)「MEMORIES」(彼女の想いで/最臭兵器/95/原画)、テレビアニメ『破邪巨星Gダンガイオー』(01/メカ総作画監督)、OVA『YAMATO 2520』(95~96/メカデザイン、2~3話・総作画監督)『聖少女艦隊バージンフリート』(98/視覚効果デザイン)、短編『SUPERFLAT MONOGRAM』(ルイ・ヴィトン広報映像/03/原画)など。

音響監督

百瀬慶一 INTERVIEW

ありそうでない音をデザインする

取材・文＝編集部

ももせ・けいいち／1965年生まれ。兵庫県出身。広告代理店を経て、ソニー・ミュージックで音楽プロデューサーを務める。96年に映像演出と音楽を学ぶためLA留学。帰国後、映画「催眠」「GTO」（99）などの音響効果を担当し、「BLOOD THE LAST VAMPIRE」（00）で音響監督デビュー。現在はエムエス インターナショナルで取締役副社長を務め、サウンドデザイナー、音響監督、音楽プロデューサーとして、実写・アニメ両分野で活躍中。主な参加作品に、映画「ジュブナイル」（00／ポストプロダクションスーパーバイザー）「サトラレ」（01／サウンドデザイナー）「リターナー」（02／サウンドデザイン）、テレビアニメ「SDガンダムフォース」（04／音響監督）、アトラクション映像「富士急ハイランド／GUNDAM THE RIDE」（00/音響監督）、音楽「恋しさとせつなさと心強さと」（94／音楽プロデューサー）など。

最初にお話を伺ったのは02年の6月位。当時の僕は実写映画中心でしたが、「BLOOD THE LAST VAMPIRE」に参加したことがきっかけで、音楽プロデュース・効果音・アフレコ演出など、音響関係をトータルにみられる人にお願いしたいと、相談を受けました。あくまでも音響監督の選考段階でしたが、その時に観た未完成の映像だけでも、日本映画には少ない、スケール感のあるエンターテインメントな音の演出ができる作品という点に興味をひかれました。

参加が決定してから、大友監督に音に関する大枠のイメージは伺いましたが、細かい指示はなく、基本的には僕がシナリオや絵コンテから感じ取ったものを自由にやらせてもらい、違うものについてだけ大友監督から指示があるという感じで進みました。

音楽家選択のコンセプト

音楽家については、大友監督にコンセプトの了解をいただき、それに合った方を海外で探しました。そのコンセプトとは、ハリウッド大作のようなアクションも人間の感情も書け、なおかつオーケストラの曲が書けること。子供も観る作品なので、生の楽器を使いたかったし、人間の心情を描いたり、スケール感を出すためには、オーケストラが最適だと考えました。大友監督からはクラシックという案もあったのですが、19世紀という舞台設定にはまりすぎてしまうので、シンセサイザーやサンプリングなども混ぜて、オーガニックとメカニックの融合という、無国籍で時代性がわからないけれども新しい音楽にしたいと思いました。

また、ハーモニーをきちんと書けることも重要でした。大きな感情の変化はメロディだけでも表現できますが、白黒区別のつかない複雑な人物が多い今回のような作品は、細かな感情表現が必要で、それはハーモニーでしか表現しきれないからです。

さらに、日本映画の音楽製作費の予算内に収まる方でありながら、著名な作曲家たちにも匹敵する力と才能があるといった厳しい条件を満たしたのが、ハンス・ジマーのチームの、若手のホープであるスティーヴ・ジャブロンスキーでした。その成果は予想以上で、非常にラッキーだったと思います。

声優のキャスティング

今回のキャストは、結果的に著名な俳優の方々がメインを占めることになりましたが、演技ができ、役にあい、セリフのリズム感がよく、こちらの予測を超えて役を膨らませてくれる方、ということを重視して選びました。声優としての技術は二の次でしたので、俳優・声優問わず、様々なバリエーションのキャスティングを検討しました。

声のバランスなどを考えて、レイとスカーレット、ロイドとエディなどは対で考えました。レイ役は、子役の少年という案もありましたが、声変わりする危険性もあるので、少年の声を出せる女性を検討し、当初から考えていた鈴木杏ちゃんを推しました。「ジュブナイル」「リターナー」のアフレコの際、彼女は役を掴むのが早く、リズム感もあって、声の出し方が気持ちよかった。それで、大友監督に「リターナー」を観てもらって快諾をいただきました。

スカーレット役には、大友監督による甲高い声のイメージと、彼女が嫌われないように演じられる人を重視しました。スカーレットはその育ち故に高飛車な態度もとるけれど、ピュアで何もわからずにふるまっているだけだから、絶対に悪役にみえないようにするといったコンセプトを固めていく内、外見は綺麗で近寄りがたそうだけど、内面からの優しさが感じられる人でないと演じられないなと考え、小西さんが適役だということに落ち着きました。他の役も、ス

も、本当に19世紀にしてしまってはいけない。また、上映時間の半分はアクション場面なので、存在感がありながらも耳につきすぎないことに注意しました。

スチームの音については、大友監督もこだわったところでしたが、最初からあまり迷わなかったので、特に大変だったわけではありません。スチーム自体の音は録れないし、録った音を加工してスチームらしくするのは面白みもないので、そのままでスチームらしき音を録るための実験はいろいろやりました。素材もとにかくたくさん録りましたね。すべての場面のスチーム場所についてます。気にせずに観て欲しいのですが、二度三度と観る方は、何の音かを考えながら観るのも面白いと思います。きっと想像もつかないようなモノで音を創り出していますからね。

効果音のスタッフたちは、ありそうでないものを作りだすために全力を注いでくれました。目立たないことが重要なので気付かれにくいのですが、彼らは陰の功労者だと思います。

海外での音響作業

海外で音響作業をやった理由は、クオリティの違いもありますが、参加してくれたスタッフたちは、ハリウッドの一流のエンジニアたちばかりでした。彼らは、〝映画はこうすべき〟という固定概念に縛られず、個々の作品にあったことを考え、いろいろとやってみせてくれるし、人間の感じる気持ちのいい音に敏感で、効果音の心地よさなどを重視していることがよくわかりました。また、この作品自体が低くみられてしまわないように、日本から持ち込む音の素材のクオリティには気をつけましたが、現地スタッフには高い評価を受けることができましたし、ハリウッドでも音に関してここまで関われ

LAのFOXスタジオで行われた、オーケストラの録音風景。右写真の手前が百瀬氏で、中央が大友監督［撮影■氷川竜介］

る面白い作品はなかなかないと、今回の仕事に満足を得てくれたようでした。

作品への思い

全体を通して最も苦労した点は、音の面をトータルでみたことではなく、チームワークを作り出す作業でした。トータルでみているだけに、僕がスタッフやキャストに嫌われたり認められないと、すべてのバランスが崩れてしまう。今回の音の成功は、とにかくいいスタッフが集まったこと。そのスタッフが、世界的な注目を浴びる大友監督作品に参加しているという高い意識をもち、チームとして一丸となれたことで満足のいくものができた。

日本映画の大作として、音の面に使った予算は標準的なものですが、やり方次第でここまでのことができるということは、示すことができたと思っています。

映画は画と音があってこそのものですから、この作品を観て、あらためて音の魅力を感じていただけると嬉しいですね。

＊P158～P159に、音楽のスティーヴ・ジャブロンスキーのインタビューを掲載

エグゼクティブ・プロデューサー

渡辺繁

INTERVIEW

世代も国境も時空も突破できる冒険活劇の誕生

取材・構成＝氷川竜介

わたなべ・しげる／1957年生まれ。福島県出身。バンダイビジュアル専務取締役。81年にバンダイ入社。グループ会社ポピーでの玩具開発を経て、83年にフロンティア事業部（バンダイビジュアルの前身）でビデオ新レーベル「EMOTION」を設立し、日本初のオリジナル・ビデオ・アニメ「ダロス」に参加。以降、プロデューサーとして「王立宇宙軍 オネアミスの翼」(87)「GHOST IN THE SHELL/攻殻機動隊」「MEMORIES」(95)「タオの月」(97)「人狼 JIN-ROH」(00)「WXⅢ 機動警察パトレイバー」(02) など世界的な評価を受けるアニメ大作や特撮作品を多数手掛けている。

アニメの到達点をみせる

すでにご覧になった方々からは異口同音に、「大友さんがまさかこういう直球勝負の作品をつくるとは思わなかった」と言われまして、同時に「デジタルを使った大作でも『イノセンス』とは作品の方向性が両極端だね」ということもよく耳にしました。ですから、まずいろんなことは忘れて、純粋な気持ちで楽しんでいただけたらと思います。

確かに大友さんが堂々たる空想科学冒険活劇をつくるということについては、僕自身もスタート当初は半信半疑でしたね。でも始めてすぐに、これは今までの大友さんのノリとは全然違う、大丈夫だという確信に変わりまして、そのおかげで長い時間を耐えてこられたと思います。何より嬉しいのは、大友さん自身が一番最初に「デジタルを駆使して凄いものを見せてやるぞ」という意気込みで考えられた通りに作品が仕上がっていることだと思います。大友さんも途中は不安でいっぱいだったでしょうが、最後までブレなかったのは凄いことだと思っています。

「たそがれ清兵衛」などの時代劇を観に行くようなお年を召した世代にもお孫さんと一緒に、ともかく劇場に来ていただきたいですね。つまり、「なんだマンガか」というような世代にこそ「アニメもここまで来ているのか」と感じていただきたいんです。石炭が産業の中心からどんどんはずれていったことを知っているその世代にこそ、深く納得していただけるんじゃないかと。そういう点では、小学生ぐらいのお子さんにも非常に評判が良いと思いますし、その上に大人の方も楽しめる、本当のエンターテインメントになったと自負していますので、親子2世代、3世代でぜひご覧になってください。

国内の7月公開に向けて着々と宣伝を進めていきますが、海外向

けの展開としては、ソニー・ピクチャーズさんと組んで英語版と仏語版をつくり、欧米に出して行きます。秋には欧州で公開しますし、アメリカも年末から来年早々の上映になると思います。先方も完成試写を観られて気合いが入ったようで、ファミリーマーケットへ出そうということになり、全米公開は数百館規模での公開になる予定です。

　ロサンジェルスの20世紀フォックスのスタジオで音楽を録音しているとき、現地の子どもさんたちが社会見学で来られたことがありまして、中では当然静かにしていたのですが、外に出たとたんに「イッツ　クール！」と喜んで大騒ぎしていたんです。単純明快で絵に力があるから非常に分かりやすいですし、のべつまくなしアクションでつながっていくし、それでいて残酷ではありませんので、非常に良いんじゃないかなという手ごたえを、そのとき感じました。ですから海外の方が、さらに良い評価がいただけるという可能性も充分にあります。

　日本だと「大友さんが作る冒険活劇」というのは、もしかしたら〝北野武の「座頭市」〟みたいに思われているんじゃないですか（笑）。非常に近い位置づけにあるのかもしれませんね。そういう意味でも、まずは実物を確かめに来ていただけたらと思います。

永く広く世界中の人に

　フィルムが完成して、今はようやくスタートラインに立ったというのが感慨です。あとはどれだけ永く、どれだけ広く世界中の人に観ていただけるかというのが、これからの課題です。それも永いサイクルで、どれだけ何回も観ていただけるかということが、本当の勝負だと思っています。良い作品は国境も突破しますし、時空を超えていきます。この作品はそういうジャンルの名作だと思いますから、価値を損ねないようにやっていこうと身を引き締めているところです。

　それにはまず、執念深く売り続けることです。僕は「王立宇宙軍オネアミスの翼」（87）を日本で16バージョンのビデオグラムにして発売した男ですから（笑）。それは種類を増やすことに意味があったわけではなく、お見せするチャンスを手を替え品を替え狙ってきたということなんです。メーカーが自信を持って商品を出し続けることによって、作品の良さが継続的に伝播していくものと思っているからです。ですから、作り手がまず作品の良さを忘れてはいけないと思っていますね。同時に「スチームボーイ」のスピンオフという計画もあります。今回の映画だけでは描ききれなかった世界を、映画から離れたかたちでぜひ作って拡げていきたいと思っていますので、この後も期待してください。

　公開が延期になったことについて関係者にいろいろご迷惑をおかけしましたが、結果的に画も音も質を向上させられたことを、非常に感謝しています。そういう意味でも恵まれていると思います。ここまで粘ってくれたスタッフの方々の努力や、スポンサーのご理解など、いろんな方たちが好意的に支えてくれたおかげです。初号試写を観ていたら、走馬燈のようにいろんなことを思い出しましたが、お客さんに必ず喜んでいただける作品ができたと確信しています。

「スチームボーイ」
●2004年・カラー・ビスタサイズ・ドルビー・デジタル・DTS・126分
●原案・脚本・監督／大友克洋　エグゼクティブ・プロデューサー／渡辺繁　プロデューサー／小森伸二、富岡秀行　脚本／村井さだゆき　総作画監督／外丸達也　エフェクト作画監督／橋本敬史　美術監督／木村真二　CGI監督／安藤裕章　演出／高木真司　テクニカルディレクター／松見真一　デジタルコンポジット／佐藤光洋　編集／瀬山武司　音楽／スティーヴ・ジャブロンスキー　音響監督／百瀬慶一　制作／サンライズ　製作／STEAMBOY製作委員会（バンダイビジュアル、ソニー・ピクチャーズエンタテインメント、バンダイ、電通、TBS、サンライズ、東宝、IMAGICA、カルチュア・パブリッシャーズ）
●声の出演／鈴木 杏、小西真奈美、中村嘉葎雄、津嘉山正種、児玉 清、沢村一樹、斉藤 暁、寺島 進、稲田 徹、相沢恵子、小林沙苗、日比愛子
● 配給／東宝
● 7月17日より日比谷映画ほか全国東宝洋画系にて

「スチームボーイ」と2004年アニメ・イヤーの実態

分岐点となるアニメと実写のねじれの結節点

文＝藤津亮太

「スチームボーイ」の立つ位置

デジタル技術を手に入れたアニメは、情報量やカメラワークの限界が取り払われ、一般観客がしばしば「実写と見まごうばかり」と形容するような映像を構築することが可能となった。一方で実写映画は、デジタル技術を手に入れたことで、急激にアニメへと接近した。04年はまずこの奇妙なねじれの結節点として記憶されるべきだろう。

　ここでは「スチームボーイ」を〈基準点〉とすることで、各作品の立ち位置を確認しつつ、04年の状況を俯瞰してみたいと思う。

「スチームボーイ」は、手描きによる2Dのアニメーションがまず基本的な技法としてある。そこにデジタル技術の成果として加えられているのが、カメラマップと3DCGだ。カメラマップは、従来ならば背景動画（動きのある背景を、背景画ではなく動画として処理すること）にしなくてはならなかった場面などに活用され、背景画の質感を保ったまま動く背景などに使われている。これにより従来のアニメには足りなかった空間感が大幅に補強されている。また3DCGはメカの描写に使われた。手描きでは困難な複雑な形状のメカを正確に描き、かつ表面に質感のあるテクスチャを貼ることで、セルアニメ的な平板な印象を避けることができるメリットがある。

　この「スチームボーイ」を基準点とすると、先だって公開された「イノセンス」（押井守監督）は、はるかにデジタル方向に傾いており、逆に「ハウルの動く城」（宮崎駿監督）は、従来のセルアニメの技法に近い。

「イノセンス」は、背景を3DCGでセットのように組んだ場面があるほか、さらにはキャラクターの一部も3DCGで表現している。また各場面の〝照明〟についてもやはりデジタル技術でコントロールし、押井監督の望むルックを作り出している。

　一方「ハウルの動く城」は、特報を見る限りずっとアナログで従来の宮崎アニメの印象をキープしている。タイトル・ロールの「城」も、デジタル技術を使ってはいるが、むしろ「風の谷のナウシカ」で王蟲の動きを作り出すために作られたゴムマルチという技法を彷彿とさせる。

　このようにどれも世界的に知名度のある巨匠が10億円を超える予算で作った大作だが、デジタル技術の取り入れ方はかなり対照的だ。だがその一方で、共通点もある。それはアニメーターによる「手描きのキャラクターの表現」のアドバンテージを信用している点だ。

　たとえば「スチームボーイ」では、最もポイントとなる蒸気の描写は手描きで表現されている。ま

スチームボーイ STEAMBOY

た、アニメーターのラフな原画にしたがって3DCGの動きが付けられることもあったという。

また「イノセンス」では、犬や人形の持つ官能性を表現する点について、アニメーターの技術にすべてを委ねているし、従来のセルアニメをそのまま受け継ぐ「ハウルの動く城」は言うまでもない。

アニメは脱アニメへ 実写はアニメへの転倒

だが04年には、このアニメの大作3作品とは、真逆の立ち位置の作品が登場した。それが「APPLESEED」（荒牧伸志監督）だ。3Dライブアニメと称されたこの作品は、アニメキャラ風の顔立ちをした3DCGキャラクターをトゥーンシェーダーによりセル画タッチに仕上げるという手法で作られている。キャラクターの表情やアクションは、実際の俳優の動きをモーションキャプチャーで拾う仕組みだ。

この作品の特徴は、伝統的なアニメとは違った手法でアニメ・ライクな映像を得ようとしている点である。そしてこの手法は、アニメ制作における人件費の高さや作業時間の長さといったデメリットと無縁という点も重要なポイントだ。

完成した作品そのものは、3Dライブアニメという表現にふさわしいキャラクターデザインや、そうしたキャラクターの欠点をカバーする演出術などが未開発の印象があったが、この技術が今後どう化けるか、要注目であることには変わりはないと思う。

こうしたアニメ的表現に急激に接近しているのが、実写（特撮）映画だ。04年は、アニメ・コミックを原作とする実写映画が多数ラインナップされているのも、一つの特徴である。こちらはこれまでに「CASSHERN」（紀里谷和明監督）と「キューティーハニー」（庵野秀明監督）が公開され、今後「NIN×NIN 忍者ハットリくん THE MOVIE」（鈴木雅之監督）、「デビルマン」（那須博之監督）、「鉄人28号」（富樫真監督）が控えている。

ここで重要なのは、それらが単にアニメやコミックを題にとっただけでは済まない、という点だ。たとえば「スチームボーイ」を「CASSHERN」や「キューティーハニー」と比べたとき、「CASSHERN」や「キューティーハニー」の表現のほうがはるかにアニメ的なのだ。もともとがアニメの演出家である庵野監督による「キューティーハニー」だけならまだしも、「CASSHERN」までもがアニメ的であるというのは、つまり、アニメで育った世代の映像感覚が極当たり前に実写を浸食しているということでもある。

そうした感性の変化を背景にしつつ、デジタル技術によってアニメは「脱アニメ」のベクトルを強め、実写は「アニメ」になっていく――というこの転倒こそが、04年の大きなトピックなのだ。

「スチームボーイ」にかかる期待

そこで問題になるのが興行成績だ。大作アニメはもちろん、アニメ・コミックの実写化は、真っ当に制作しようとしたら、日本映画としては破格の予算が必要となる。それを確保するにはヒット作が生まれることが必須条件だ。

今年は「アニメの巨匠の3作品が勢揃い」であるとか「アニメ・コミックの実写化ブーム」といった報道がそこここで見受けられる。ここで注目を浴びているのは各作品ではなく「現象」だ。「現象」で語られる、ということは、興行面でシナジー効果が働く可能性も十分あるが、同時にマイナス面も予想される。

「現象」をひとつのきっかけとして劇場へ足を運んだ一般客は、その作品は「現象」を象徴し、そのジャンルを代表する作品と考えがちだ。そのためその観客にとって

「イノセンス」©2004 志郎正宗／講談社・IG, ITNDDTD

「APPLESEED」©2004 志郎正宗／青心社・アップルシードフィルムパートナーズ

は、一作品の評価がジャンルの評価となり、もし「つまらない」と考えれば、その作品だけでなく、ジャンル自体に負のフィードバックがかかることになる。そしてこれは、そのまま映画の出資者の企画を見る目に影響してくる。

一言で言うなら04年は可能性の年だ。ここで試されているのは、大きくいうと「アニメ的な感性に支えられた娯楽映画はありうるか」ということであり、それはさらに二つの要素に分けられる。一つが「スタジオジブリ以外の大作アニメーションは、日本で成立しうるかどうか」、もう一つが「アニメ・コミックの実写化に新しい1ページは開けるかどうか」ということだ。ここでヒットが出れば、大きく流れが変わることになる。

まず「スタジオジブリ以外の大作アニメーションは、日本で成立しうるかどうか」についてだが、第一バッターである「イノセンス」は、スタジオジブリがバックアップしたにもかかわらず、興行収入は10億円程度にとどまってしまった。邦画としてはヒットの部類に入る数字ではあるが、製作費の13億円にも届くことができず、期待されたほどの成績を収めることができなかった。

そのためその可能性は偏に「スチームボーイ」にかかっているといってよい。幸い、作家性が前面に出た「イノセンス」と違い、「スチームボーイ」は、間口の広い作品となっている。本来の大友作品の持ち味といえる、ある種の皮肉っぽさや先鋭さがマイルドになり、オーソドックスな少年の物語を展開している。この作品の成否は、1作品だけに留まるものではないのだ。

一方で注目したいのは「CASSHERN」の興行収入16億円（見込み）という予想外のヒットだ。「APPLESEED」が地方興行で苦戦しそれほどの数字（キネ旬調べで興行収入約4億円見込み）にならなかったことを考えると、少なくともアニメ・コミック実写映画の第一バッターとして「CASSHERN」は十分といえるほどの成績を残したといえるだろう。この後に続く作品が、このヒットを受け継ぎ、一つのムーブメントにまで盛り上げていけるかどうかがポイントだ。

アニメ業界に目を向けると、ほどほどの規模の劇場作品は聞こえてくるものの、大作が進行中という話は聞かない。近年の大作は制作に2～3年かかることも珍しくないので、単純に考えても次の大作が登場するのは、06年から07年以降のことになる。

ではその時が訪れたとして、劇場にはどのような映画が流れているだろうか。やはりジブリ作品しか存在しえないのか、あるいはアニメ的感性にみちた実写作品なのか、それとも独自に発達した日本流3DCGアニメなのか……。

04年のねじれとは、そういう可能性を孕んだ、大きな一つの分岐点なのだ。

特集

白いカラス

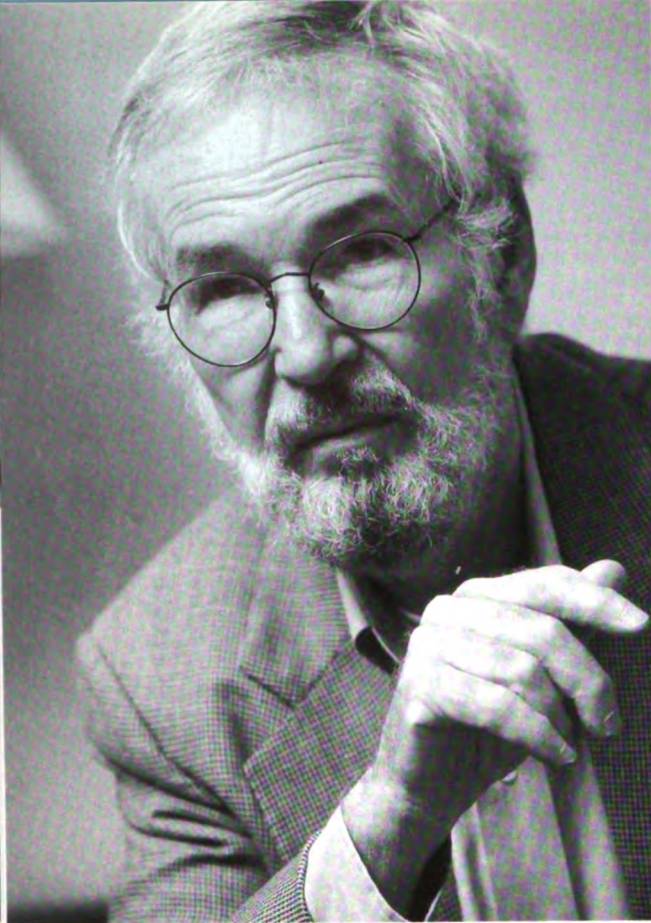
THE HUMAN STAIN

●2003年・アメリカ・カラー・シネマスコープ・ドルビーデジタル・1時間48分

●監督／ロバート・ベントン　製作／トム・ローゼンバーグ、ゲイリー・ルチェッシ、スコット・シュタインドルフ　製作総指揮／ロン・ボズマン、アンドレ・ラマル　脚本／ニコラス・メイヤー　原作／フィリップ・ロス　撮影／ジャン＝イヴ・エスコフィエ　音楽／レイチェル・ポートマン　美術／デイヴィッド・グロップマン　衣裳／リタ・ライアック

●出演／ニコール・キッドマン、アンソニー・ホプキンス、エド・ハリス、ゲイリー・シニーズ、ウェントワース・ミラー、ジャシンダ・バレット、アンナ・ディーヴァー・スミス

● 配給／ギャガ・ヒューマックス

● 日比谷みゆき座ほか全国東宝洋画系にて公開中

ロバート・ベントン監督インタビュー
俳優もカメラマンも作品を一緒に作る協力者なんです

取材・文＝渡辺祥子

撮影＝谷岡康則

幼少時代は読み書きができなかった

一九六〇年代終りのアメリカ映画に新しい時代を開き、アメリカン・ニューシネマと呼ばれた新たな流れを呼び起こすきっかけになったのが「俺たちに明日はない」(67年)だった。その脚本を友人のデイヴィッド・ニューマンとともに書いたロバート・ベントンは、五年後の一九七二年に「夕陽の群盗」で監督デビューを飾った。以来、三十年以上にわたる映画生活で十作品を監督。寡作だが、七九年の「クレイマー、クレイマー」のアカデミー作品・監督賞の受賞をはじめとして、質の高い作品を生んできた優れた映画作家であることは誰もが認めるところだろう。

そんなロバート・ベントンの日本未公開作「トワイライト」(98年)以来、五年ぶりの新作が「白いカラス」。一九五〇年代、黒人の血を隠し、黒人とはまた違った形の差別の対象だったユダヤ人と偽って生きる道を選んだ人物、コールマン・シルクの人生を描いたこの映画は、一九三二年生まれのベントンより一年あとに生まれたユダヤ人作家フィリップ・ロスの小説が原作だ。

「ロスとは一歳違いだから世代的には一緒で、共通するところも多い。二人とも第二次大戦前の生まれで、いまは、生まれ育った時代と劇的に違ってしまった時代を生きている。でも、同じところはそれだけ。私たちはものの見方が全然違っている。彼はかなり辛口で、私はセンチメンタル。ただ、彼とは仲がよく、映画のおかげで友情が生まれました」

もの静かだが思いのほか饒舌で気さく。インタビューを始める前に言っていた「日本を楽しんでいる」という言葉に社交辞令はなさそうだ。「白いカラス」の映画化を決意した理由の一つは、主人公コールマン・シルクが地方の小さな町の

「白いカラス」

ユダヤ人として初めて古典教授となったコールマン・シルク（アンソニー・ホプキンス）は、講義中に発言した言葉を取り上げられ人種差別と非難され、辞職に追い込まれる。その心労で妻を亡くしたシルクは隠遁生活を送るようになるが、やがて、フォーニア・ファーリー（ニコール・キッドマン）と知り合い恋に落ちる。彼女には悲惨な過去があり、自らが幸福になることを拒む女性だった。友人になった作家のネイサン・ザッカーマン（ゲイリー・シニーズ）は、二人があまりにも違いすぎることを心配するのだが、シルクにも長年隠し続けてきた心の傷があった。

アンソニー・ホプキンスとロバート・ベントン監督

出身で、幸せな家庭がありながらそこから出なければならなかった、というところ。そこが自分に共通していたから、と言う彼は過去を振り返った。

「私はテキサスの小さな田舎町の育ちです。幼少時代は読み書きが出来ないという障害を負っていて、それを乗り越えることが出来たのは、アーティストになりたい、という欲求があったのと、映画好きのおかげでした。私には障害を越えて新しい自分を創造するために家を出る必要があった。そういう意味ではコールマン・シルクが抱えていた問題も同じだと思う。彼は自由になるために生まれ育った土地と家族から離れなければならなかった。けれど彼のしたことは家族を裏切る行為であり、自分が犯した罪の結果に悩まされ、そして破壊されてしまう」

コールマン・シルクは、家族を捨てたことで、黒人であることに精一杯誇りを持とうとしている家族の気持を踏みにじる。同じように家を出た、といってもベントンにシルクの抱える苦悩はない。

黒人蔑視とされる言葉を黒人学生に浴びせて名門大学初のユダヤ人古典教授の職を追われるという皮肉な運命を受け入れたシルクは、失意のうちに妻を亡くし、その半年後に掃除婦のフォーニア・ファーリーに恋をした。

うまくて聡明な俳優は私を助けてくれる

偽りの人生を生きることで心に深い傷を負う人物コールマン・シルクを演じるのがアンソニー・ホプキンス。そして彼が愛した掃除婦フォーニア・ファーリーは、彼には想像外の苦しみを抱えている。ニコール・キッドマン演じるこの女性は、義父から性的虐待を受け、ヴェトナム帰りの夫からは暴力を振るわれていた。幼い息子二人は焼死、という過去を背負って自虐の日々を生きていた。

そんな男女を演じるアンソニー・ホプキンスとニコール・キッドマンの味わい深い演技に目を見張るが、うまい役者を使うのは、「クレイマー、クレイマー」「プレイス・イン・ザ・ハート」(84年)の頃から一貫して変わらないベントン作品らしさの一つだ(註①)。

「うまい俳優を探すのは昔からつねに心がけていること。うまいだけでなく、聡明であることも重要です。聡明な俳優を使えば彼らの演技や解釈によって私自身が助けてもらえる。たとえばメリル・ストリープですが、『クレイマー、クレイマー』の撮影の際、裁判のシーンでは彼女にお願いして書いてもらった台詞を使っています。あそこにある母の気持は私がどんなにがんばっても書けなかった。『白いカラス』では、ニコールにも手伝ってもらいました。シルクに子供の遺骨の入った箱を見せるシーンの見せ方です。彼女の役の掴み方の確かさに驚かされました」

俳優は使うのではなく、一緒に作品を作る協力者、と言いきるベントン監督が語ったリハーサル中のもう一つのエピソード。若い日のコールマン・シルクと恋人のベッド・シーン。映画の中ではセックスが終ったあと女性のほうがシルクの上に横たわっているが、あれは演じるジャシンダ・バレットが自分で出したアイデアだった。

「ぼくは他人のアイデアを使うのがうまい(笑)。俳優たちに自信を持って演じる場を与える。何をやっても私がちゃんと守ってあげる、ということを知らせるのです」

その一つの例、というより、撮影中の俳優をめぐるおかしなエピソード。映画の中にはシルクが近所に住む作家ネイサン・ザッカーマン(ゲイリー・シニーズ)を訪

ニコール・キッドマンを演出するロバート・ベントン監督

ね、『チーク・トゥ・チーク』の曲に乗って楽しげに踊るシーンがある。「映画化を決意するポイントになったシーンの一つ」と言うベントン監督のお気に入りのシーン。はじめはシルクがひとりで踊り、やがて強引にザッカーマンを誘ってまるで恋人同士のように踊る。

「『チーク・トゥ・チーク』は、アステア&ロジャースのファンの私が大好きな曲です。撮影中は、ロケ地まで毎朝三十分かけて通ったのですが、その車の中でどの曲を使おうかと考えていて思いつきました。あれはアンソニー・ホプキンスが、撮影中、唯一演じることにナーバスになったシーンです。ダンスはいやだ、って。そこで撮影のときは必要最小限のスタッフで撮ることになりました。普通、こういうことをするのは裸のシーンとかベッド・シーンに限られるのですが、アンソニーがどうしても、というのでそうしたのです。

振付師が踊り方を教え、セットから必要なスタッフ以外は追い払った。ところがテストのあと、アンソニーはすっかりダンスが気に入って、『さあ、みんなを呼んでくれ』の一言には大笑い。撮影が終ってもゲイリーと一緒に朝まで踊っていましたよ」

二人の名カメラマンを失った悲しみ

このシーンを隣の家から覗き見しているように意識して撮った、と言うベントンは、カメラにこだわる監督でもある。

「映画とはカメラによって描かれるもの。才能豊かで私と同じ考えを持ってくれる撮影監督を見つける必要があります。五作品で一緒に仕事をしたネストール・アルメンドロス（註②）は亡くなり、彼と通じるものがあった今回のジャン＝イヴ・エスコフィエ（註③）も亡くなった。大切な二人を失った私は、このあと、誰と組めばいいのか……。撮影監督を決めたら週に二、三回は会って食事をしたり、打ち合わせをしたりしますが、撮影が始まったらすべて任せます。万が一失敗しても口は出さない。任せたのは私だから。そういう場を与えることで彼らも自分の限界を超えて新しいことを生みだします。私はアルメンドロスとエスコフィエから監督業について学びました」

二人の名カメラマンを失ったことの悲しみを滲ませながら撮影監督との関わりを語るベントンは、

「プレイス・イン・ザ・ハート」の撮影スナップ
名コンビ、ネストール・アルメンドロス（左）とベントン監督

さらにカメラマンの話を続けた。

「話をちょっと変えていいですか？「ノーバディーズ・フール」（94年）を撮ったときのことです。いろいろなことがあって最初のカメラマンにやめてもらうことになり、仕事は一緒にしたことがないが古い友人のジョン・ベイリーに撮ってもらうことにしました。そのとき彼に相談したんです、ポール・ニューマンの演技は良いのだが、どうしても地味な性格俳優にしか見えない。ぼくは彼に「ハッド」のときのようなスターらしい輝きのある演技をして欲しいんだ、って。すると彼は、「大丈夫、任せてくれ」と言いました。そしてジョン・ベイリーが撮影に入った初日、そこには私が望んだ通りのポールがいました。驚いてジョンに「何をしたんだ？」と聞くと、「俳優というのは普通のライトを当てると性格俳優的演技を始め、スターのライトを当てるとスターの演技を始める」と言いました。照明の力を借りるのです。俳優は誰よりも自分に当たっているライトに敏感です」

雑誌のデザイナーから脚本家へ

さて、ロバート・ベントンといえば、まず「俺たちに明日はない」の脚本であり、アメリカン・ニューシネマだ、ということは最初に書いたが、この映画の誕生のエピソードを本人の口から直接聞けるのは嬉しい。

「字が読めないのをかろうじて克服、大学で画家になる勉強をして修士課程に進もうとしたところで学資が続かなくなってしまった。そこでコマーシャル・アートのアルバイトをするうちに「エスクワイア」誌のアートディレクターのアシスタントに採用されてアートデザインを担当することになりました。この仕事が大好きで一生やっていても良い、と思ったのですがほどなくしてクビ。仕事をするうちに私の好みが変わってきたのを会社は見ぬいたんでしょうね。私が三十歳のときです。そんなとき友人の一人がドリス・デイの映画の脚本になる前の段階の〝トリートメント〟を書き、五年間暮らしていけるギャラをもらったことを知りました。それで、脚本家は悪くない、と思ったのです。

ところが問題が一つ。私は文字が正確に綴れない。そのとき考えたのが、「エスクワイア」の編集者デイヴィッド・ニューマン（註④）と一緒にやるということでした。彼も映画が好きで一緒によく見にいっていた仲です。当時たまたま二人でジョン・デリンジャーに関する本を読んでいて、そこにボニーとクライドのことが出ていました。犯罪物に興味があったのは、うちの父親の兄二人がどちらも殺されたということと関係があるのかもしれません。父は正直者でしたが、犯罪者には興味があってボニーとクライドの葬式に参列したそうです」

トリュフォー、ゴダール、ベイティ「俺たちに明日はない」誕生秘話

「当時の私たちはフランス映画に魅せられていて、トリュフォーやゴダールに夢中でした。そこでボニーとクライドの脚本をトリュフォーに撮ってもらいたくて彼に捧げたのです。書けたときトリュフォーがアメリカまで来てくれて、そのとき私たちは彼から脚本の書き方というものを教えられました。でも、彼は「華氏451」の撮影に入ることが決まり、代りにジャン＝リュック・ゴダールを紹介してくれたのです。ゴダールはアメリカへ「アルファヴィル」の撮影に来ていたのですが、気が乗らな

白いカラス
The Human Stain

ロバート・ベントン
ROBERT BENTON／1932年9月29日、アメリカ、テキサス州生まれ。「エスクワイア」のデザイナーとして活躍し、そのころ知り合ったデイヴィッド・ニューマンと共同で「俺たちに明日はない」の脚本を執筆。紆余曲折を経て映画化され、アメリカン・ニューシネマのムーヴを起こす作品となり、一躍注目される。72年には「夕陽の群盗」で監督に進出、79年の「クレイマー、クレイマー」でアカデミー賞作品賞、監督賞、脚本賞など5部門を受賞。さらに84年の「プレイス・イン・ザ・ハート」で同脚本賞に輝く。寡作ではあるが、じっくりと人間をみつめるドラマ作りを続け、その演出・脚本には定評がある。次回作はトム・ハンクス主演の“The Ladie's Man”の予定。

〈フィルモグラフィ〉

1967	俺たちに明日はない（脚本）
1970	大脱獄（脚本）
1972	おかしなおかしな大追跡（脚本）
	夕陽の群盗（監督、脚本）
1977	レイト・ショー※（監督、脚本）
1978	スーパーマン（脚本）
1979	クレイマー、クレイマー（監督、脚本）
1983	殺意の香り（監督、原案、脚本）
1984	プレイス・イン・ザ・ハート（監督、脚本）
1987	消えたセクシー・ショット（監督、脚本）
1988	事件を追え＊（製作総指揮）
1992	ビリー・バスゲイト（監督）
1994	ノーバディーズ・フール（監督、脚本）
1998	トワイライト＊（監督、脚本）
2003	白いカラス（監督）

※＝日本劇場未公開、テレビ放送のみ
＊＝日本劇場未公開、ビデオのみ

くて、こちらの話に興味を示してくれました。そこでいよいよこのプロジェクトが動き出したのだけど、若いプロデューサーの二人組が問題でした。才能はあっても経験がない。撮影は十二月開始と決まった十月のことです。彼らは自分たちに製作資金がないことを言い出せなかった。で、『この映画は夏のシーンから始まるのだから』と言い出し、時間稼ぎをしようとしたのです。するとゴダールはすっくと立ちあがり、『ぼくは映画の話をしているのに、君たちは気象の話をしている』と言って出ていってしまいました。

それから四年間、脚本は色々な人たちの手に渡り、話はまとまりませんでした。

そんなときフランソワ・トリュフォーと一緒に仕事がしたくてウォーレン・ベイティが彼を訪ねてきました。でもトリュフォーは乗り気でなく、彼を追い払うつもりで『ボニーとクライド』の脚本を彼に見せたのです。

その頃、私はほんの少しだけウォーレン・ベイティを知っていました。私が結婚三カ月の頃のことです。ある土曜日の朝、ウォーレンから『ボニーとクライド』の脚本のことで話があると電話があり、私は妻には言わずに彼を待っていました。彼女はジーンズ姿にノー・メイク、頭にはカーラーを巻いていました。それから十分ほどしてチャイムが鳴り、妻がドアを開けるとハリウッドきってのハンサム・ガイ、ウォーレン・ベイティが立っていた（笑）。私たちは今年で結婚生活四十年になりますが、妻はいまでも私を許してくれません。そのあと正式にウォーレン・ベイティの主演、アーサー・ペン監督による『俺たちに明日はない』が誕生しました。

映画の完成後、妻に言いました『どうせ二、三週間の上映で終るだろうがやっと映画の世界に足がかりができたんだ』。実際の話、最初にでた批評は最悪、二、三週間ももてば上等という印象でした。これが『俺たちに明日はない』が世に出るまでの話です」

アメリカ映画に新しい夜明けをもたらした一九六七年の「俺たちに明日はない」は、それを遡ること十年前、フランスで一九五七年に誕生した「死刑台のエレベーター」に始まるヌーヴェルヴァーグの旗手たちの助けを得て誕生した。映画とは世界共通の言語、と確信できる幸福なエピソードだ。

現在、ベントンが脚本を書いたスリラー・コメディー“The Ice Harvest”がハロルド・ライミス監督、ビリー・ボブ・ソーントン主演で撮影中。彼の新たな監督作はトム・ハンクス製作・主演“The Ladie's Man”の予定。

註①「白いカラス」以前のベントン作品に出演した俳優は、ジェフ・ブリッジス、アート・カーニー、ダスティン・ホフマン、メリル・ストリープ、サリー・フィールド、ダニー・グローヴァー、ジョン・マルコヴィッチ、エド・ハリス、キム・ベイシンガー、ニコール・キッドマン、ブルース・ウィリス、ポール・ニューマン、メラニー・グリフィス、ジェシカ・タンディ、ジーン・ハックマン、スーザン・サランドン……。錚々たる顔ぶれ！

註②ネストール・アルメンドロス
1930年、スペインのバルセロナ生まれ。フランスでスチール写真を学び、やがて撮影監督として活躍。「野性の少年」「恋のエチュード」「アデルの恋の物語」「終電車」「日曜日が待ち遠しい！」などフランソワ・トリュフォーの作品を多く手掛けた。「天国の日々」ではアカデミー賞を受賞。ロバート・ベントンと組んだ5作品とは「クレイマー、クレイマー」「殺意の香り」「プレイス・イン・ザ・ハート」「消えたセクシー・ショット」「ビリー・バスゲイト」。1992年死去。

註③ジャン＝イヴ・エスコフィエ
1950年、フランスのリヨン生まれ。レオス・カラックスの「ボーイ・ミーツ・ガール」「汚れた血」「ポンヌフの恋人」で世界的に注目されアメリカ映画にも進出。他に「グッド・ウィル・ハンティング」「クレイドル・ウィル・ロック」「ベティ・サイズモア」「抱擁」などがある。2003年4月1日に死去。

註④デイヴィッド・ニューマン
1937年、ニューヨーク生まれ。「エスクワイア」誌のライター＆編集者からベントンと知り合い脚本家となる。「俺たちに明日はない」で映画界入りし、ベントンと組んで「大脱獄」「おかしなおかしな大追跡」「夕陽の群盗」「スーパーマン」「殺意の香り」などを執筆。ベントンとの共作以外では「スーパーマンⅡ」「スーパーマンⅢ」「サンタクロース」などを手掛けている。2003年に死去。

ロバート・ベントン監督作品をふりかえる

文=鬼塚大輔

ビリー・バスゲイト

Billy Bathgate　92年　脚本／トム・ストッパード　撮影／ネストール・アルメンドロス　出演／ダスティン・ホフマン、ニコール・キッドマン、ローレン・ディーン、ブルース・ウィリス

■前作の不評に懲りたのか初めて脚本を自分では執筆せず、E.L.ドクトロウ原作、トム・ストッパード脚色と最強の布陣で臨んだ作品。大恐慌時代、大物ギャング、ダッチ・シュルツ（ダスティン・ホフマン）の側近となるビリー・バスゲイト（ローレン・ディーン）だったが……。時間の解体が面白い脚本だが、ベントン流ストーリー・テリングとは上手く合っていなかった。ホフマンもミスキャスト。ニコール・キッドマンが美しい。

殺意の香り

Still of the Night　83年　原案／デイヴィッド・ニューマン　撮影／ネストール・アルメンドロス　出演／ロイ・シャイダー、メリル・ストリープ、ジェシカ・タンディ

■西部劇、フィルム・ノワールときたら、やっぱりヒッチコックにもオマージュを捧げときましょうという作品。精神分析医ロイ・シャイダーが美しき患者メリル・ストリープと関わったことから殺人事件に巻き込まれていく。犯人はストリープなのか？ヒッチコック命のブライアン・デ・パルマには「ジョーズを殺した男が殺人鬼に怯えるのはアホらしい」と言われてしまったが、しっとりとしたムードがあってそれほど悪い出来ではなかった。

夕陽の群盗

Bad Company　72年　共同脚本／デイヴィッド・ニューマン　撮影／ゴードン・ウィリス　出演／ジェフ・ブリッジス、バリー・ブラウン

■記念すべき監督デビュー作。脚本もデイヴィッド・ニューマンと共同で担当。南北戦争末期、北軍の徴兵から逃れた良家の子弟バリー・ブラウンが、乱暴な無法者ジェフ・ブリッジスと知り合ったことから、無法者へと落ちていく様を綴る。主人公二人の友情が瑞々しいタッチで描かれ、西部劇神話を破壊しようとするニュー・シネマ的なリアリズムと好対照をなしている。登場人物の善悪を安易に判断しないベントンの流儀がすでに始まっている。

ノーバディーズ・フール

Nobody's Fool　94年　撮影／ジョン・ベイリー　出演／ポール・ニューマン、メラニー・グリフィス、ブルース・ウィリス、ジェシカ・タンディ

■これは文句なく素晴らしいベントン監督／脚色（原作はリチャード・ルッソ）作。頑固で子供っぽい性格のために人生の道を踏み外した初老の男ポール・ニューマンが、自らの雇い主の妻メラニー・グリフィスや久々に再会した息子や孫とのふれ合いの中で、静かに成熟を迎えていく。ニューマンの魅力を100％生かし切ったベントン演出の冴え。「ビリー・バスゲイト」同様、脇に回ったブルース・ウィリスが絶品の出来である。

プレイス・イン・ザ・ハート

Places in the Heart　84年　撮影／ネストール・アルメンドロス　出演／サリー・フィールド、ダニー・グローヴァー、ジョン・マルコヴィッチ、エド・ハリス、エイミー・マディガン

■大恐慌時代のアメリカ南部を舞台に、未亡人サリー・フィールドが貧困の中で家族と綿花農園を守るため奮闘する姿を描いた感動作。アカデミー賞主演女優賞、脚本賞受賞。かたくなに心を閉ざす盲人を演じたジョン・マルコヴィッチはこれが映画デビュー。エド・ハリスとエイミー・マディガンは、この作品での共演が縁で結婚した。善悪と生死の彼岸を越えて、登場人物たちが一堂に会するラストが素晴らしい。

レイト・ショー

The Late Show　77年　撮影／チャールズ・ロッシャー・ジュニア　出演／アート・カーニー、リリー・トムリン

■昔気質の私立探偵アート・カーニーが、ニュー・エイジ女性リリー・トムリンから行方不明の飼い猫の探索を依頼される。最初はこの依頼を断るカーニーだが、この“事件”が彼の親友の死と関係していると知って……。西部劇に続いて50年代のフィルム・ノワールにオマージュを捧げた作品。日本では劇場未公開、WOWOWで放送されただけだが、アカデミー賞脚本賞ノミネート（ベントン）他、数々の受賞もある隠れた佳作。

トワイライト

Twilight　98年　共同脚本／リチャード・ルッソ　撮影／ピョートル・サボチンスキー　出演／ポール・ニューマン、スーザン・サランドン、ジーン・ハックマン、ジェームズ・ガーナー

■原点回帰。「レイト・ショー」同様、老探偵の意地を描くハードボイルド。主人公の探偵ポール・ニューマン（ルー・ハーパー!?）が俳優夫妻ジーン・ハックマン、スーザン・サランドンの頼みを聞いたことから、殺人事件と関わることに。やっぱりベントンはハードボイルド好き。探偵仲間がジェームズ・ガーナー（ロックフォード?!マーロウ?!）。主人公とストッカード・チャニング演じる女刑事とのやりとりが楽しい。日本では劇場未公開。

消えたセクシー・ショット

Nadine　87年　撮影／ネストール・アルメンドロス　出演／キム・ベイシンガー、ジェフ・ブリッジス

■大絶賛された「プレイス・イン・ザ・ハート」の次にこんな作品をひょっこり作ってしまうあたりもベントンらしい。50年代のテキサスを舞台に、自分のヌード写真を取り返そうとしたことから殺人事件の目撃者となってしまうキム・ベイシンガーと、彼女が別れようとしている腐れ縁の夫ジェフ・ブリッジスの二人が、犯罪者と警察から逃げ回るというスクリューボール犯罪コメディ。のんびり見物していれば腹も立ちません。

クレイマー、クレイマー

Kramer vs. Kramer　79年　撮影／ネストール・アルメンドロス　出演／ダスティン・ホフマン、メリル・ストリープ、ジャスティン・ヘンリー

■アメリカで大きな社会現象となっていた女性の自立とそれに伴う家庭の崩壊を描き大ヒット。日本でも“クレイマー現象”なる流行語を生んだ。作品賞をはじめアカデミー賞5部門受賞。突然妻であるメリル・ストリープに去られたダスティン・ホフマンが幼い一人息子を抱えながら奮闘する様が時にはユーモアも交えて描かれるが、後半は親権を巡る裁判劇に。エレベーターの扉を効果的に使ったラストが心に残り、爽やかな後味を残す。

消そうとしても消せない人間のしみ

「白いカラス」作品評＝新藤純子

「白いカラス」とは、実にうまい邦題だと思った。日本の社会は周囲とちがう人間を排除しようとする傾向が強い。外見がちがう人間はもちろん、趣味や思考がちがう人間を好まない。似た者同士でかたまって派閥を作る。周囲とちがう人間は、そのちがいを隠すことで、周囲に溶け込んで生きる。つまり、白いカラスになるのだ。

主人公の大学教授コールマン・シルクは、アフリカ系でありながら白い肌をもって生まれたため、黒人社会にも白人社会にも溶け込めない。そこで、彼はユダヤ人だと偽って白人社会に入り込み、古典文学の教授として成功する。

ユダヤ人がヨーロッパ古典文学の教授になるということ自体が、とてもむずかしいことなのである。ユダヤ人はユダヤ文化を担い、黒人は黒人文化を担う――それが当然だと思われている。シルクは白人の文化を研究したかった。そのために、白いカラスになるしかなかったのだ。

人間は人種や性別を選んで生まれてくることはできない。だからこそ、人種や性別などに関係なく、個人を認めてほしいと思うのだが、アメリカのような個人主義の国でさえも、こうした現実がある。ましてや、異質な人間を排除する傾向の強い日本では、白いカラスとして生きている人は多いだろう。本当の自分を隠し、周囲に合わせて生きている人々。周囲に望まれる人間を演じている人々。「白いカラス」という邦題は、そうした日本人の心情に訴えかける。

しかし、この映画の（そして、原作小説の）原題は「ヒューマン・ステイン」（人間のしみ）である。「白いカラス」という日本的な邦題とちがい、この原題はきわめて欧米的な匂いがする。「ヒューマン・ステイン」とは、ギリシャ悲劇の主人公たちが負わされた宿命のようなものではないだろうか。

白い肌の黒人として生まれたシルクは、黒人を差別する言葉を、そうとは知らず使ってしまい、謝罪を拒否して大学を追われる。シルクは本当の自分を隠しながらも、ささやかな抵抗をしてきた人物だ。ユダヤ人として古典文学の教授になり、黒人を大学に採用した。差別語に対する謝罪の拒否も、そうした抵抗の一環なのだろう。白い肌をもつ黒人としての宿命は、消そうとしても消えないヒューマン・ステインなのだ。

宿命としてのヒューマン・ステインを背負った人物はシルクだけではない。シルクと恋に落ちるフォーニアは、幼い頃に義父から性的虐待を受け、母親からは疎まれ、ヴェトナム帰還兵の夫の暴力を受け、子供を火事で失うという悲劇に見舞われている。人種や性別だけでなく、どういう家庭に生まれるかも、人間は選べない。フォーニアもまた、背負わされた宿命から逃れられないでいる。そして、彼女の夫レスターも、戦争による心の傷から逃れられず、別れたあとも、彼女を恨んでつきまとう。

どうして忘れられないの、と言うのはたやすい。忘れられれば、それに越したことはない。だが、宿命や過去の傷はそう簡単には消えない。ギリシャ悲劇の宿命のように、どこまでも人間につきまとう。ロバート・ベントン監督はギリシャ悲劇を意識したそうだが、アンソニー・ホプキンス、ニコール・キッドマン、エド・ハリスの演技には悲劇の風格が感じられた。そして、傍観者役のゲイリー・シニーズが、アメリカ文学者らしいまなざしで彼らを見つめている。

Secondhand Lions
●2003年・アメリカ・カラー・ビスタサイズ・ドルビーSRD、SDDS・1時間50分
●監督・脚本／ティム・マッキャンリーズ　プロデューサー／デイヴィッド・カーシュナー、スコット・ロス、コーリー・シエナガ　製作総指揮／トビー・エメリッヒ、マーク・カウフマン、ジャニス・ロズバード・チャスキン、カレン・ループ、ケヴィン・クーパー　共同プロデューサー／エイミー・セイレス　撮影監督／ジャック・グリーン　美術／デイヴィッド・J・ボンバ　編集／デイヴィッド・モーリッツ　衣裳デザイン／ゲイリー・ジョーンズ　音楽／パトリック・ドイル　キャスティング／エド・ジョンストン、エミリー・シュウェバー
●出演／マイケル・ケイン、ロバート・デュヴァル、ハーレイ・ジョエル・オスメント、キーラ・セジウィック、エマニュエル・ヴォージュア、ニッキー・カット、ジョシュ・ルーカス、ケヴィン・ハバラー、クリスチャン・ケイン
●配給／日本ヘラルド映画
●7月10日より丸の内ピカデリー2ほか全国松竹・東急系にて

ウォルター少年と、夏の休日

SECONDHAND LIONS

ROBERT DUVALL／1931年米・カリフォルニア州生まれ。62年「アラバマ物語」で映画デビュー。「ゴッドファーザー」(72)「地獄の黙示録」(79)など、計6度のアカデミー賞ノミネートを受け、「テンダー・マーシー」(82)で主演男優賞を受賞。近作は「60セカンズ」(00)「ジョンQ－最後の決断」(02)「ワイルド・レンジ　最後の銃撃」(03・公開中)。

ロバート・デュヴァル

マイケル・ケインとの芝居は実にしっくりいったよ

取材・文＝細谷佳史

ロバート・デュヴァルの出演作を見直すと、改めて役者としてのデュヴァルの凄さに驚かされる。「ゴッドファーザー」(72)や「地獄の黙示録」(79)といったアメリカ映画史に残る傑作に出演しているだけでなく、これまで6度もアカデミー賞にノミネートされており、82年、アル中の元カントリー歌手を演じた「テンダー・マーシー」では主演男優賞を受賞している。デュバルが62年の映画デビュー以来40年以上も第一線で活躍を続けている理由には、卓越した演技力の持ち主であることはもちろんだが、ジーン・ハックマン同様、主役から脇役まで実に幅広い役をこなせることがある。

最新作「ウォルター少年と、夏の休日」で共演したイギリスの名優マイケル・ケインは、「演技のうまい俳優と仕事をすると自然と自分の芝居もよくなるから好きなんだ」とデュヴァルとの仕事を楽しんだと言う。では、デュヴァルにとってはケインとの仕事はどうだったのだろう?

「とてもよかったよ。マイケルとは友情や信頼を感じながらやれたからね。なにも特別なことをしなくても、マイケルとの芝居はなぜか自然とやれてしまうんだ。役者同士の相性は人それぞれだけど、彼とは実にしっくりいくんだ」

大ベテランのデュヴァルにとって、今回のハブ役を演じる上でなにかチャレンジのようなものはあったのだろうか?

「僕が唯一心配していたのは、この作品があまりキュート過ぎなければいいということなんだ。センチメンタル過ぎるのもよくないしね。だから演じる上でもまず出来るだけしっかりとリアリティを感じさせた上にユーモアを加えたりしていくんだ」

現場でよく癇癪を起こすことで有名なデュヴァルにはタフなキャラクターがよく似合う。本作でも、70歳を超えたデュヴァルが若いチンピラたちを次々と蹴散らすシーンが痛快だ。しかし素顔の彼は意

ハーレイ・ジョエル・オスメント

脚本を読んで すぐにやりたいと思った

取材・文＝細谷佳史

天才子役として知られてきたハーレイ・ジョエル・オスメント。5歳からプロの子役として活躍し、「シックス・センス」(99)でアカデミー賞やゴールデン・グローブ賞にノミネートされたのはわずか11歳の時。その後も、スティーヴン・スピルバーグ監督の「A.I.」(01)や、ケヴィン・スペイシー、ヘレン・ハントと共演した「ペイ・フォワード／可能の王国」(00)といった話題作に出演し、常に大人顔負けの演技力で観客を魅了してきた。

そんな彼も今年で16歳。新作「ウォルター少年と、夏の休日」では、すっかり声変わりし随分と大人っぽくなったオスメントに、まず驚かされる。しかし演技の巧さは相変わらずで、今回もマイケル・ケイン、ロバート・デュヴァルといった名優相手に一歩も引かない演技を見せてくれる。

役者の父親の影響で演技を始めたというオスメント。送られてきた脚本は先ずマネージャーでもある父親が読んで、それから彼自身が読むという。

「この脚本も他の作品をやっていた時に二人で読んで直ぐに二人ともやりたいと思ったんだ。それはこの映画が撮影される二年前だったんだけどね。もしもあと一年この映画の撮影開始が延びていたら、僕がこの役を演じるのは正直難しかったかもしれないね。この映画を撮影した時の僕の年齢はウォルターを演じるのにぴったりだったから。逆に二年早かったら僕自身

外と物静かな印象を受ける。

「僕自身はそんなにタフガイじゃないよ。時々声を張り上げることはあるけど、ファイターでもないしね。全ては演技だよ。それに優しい役もやってるんだ。リチャード・ハリスと共演した『潮風とベーコンサンドとヘミングウェイ』(93)でキューバ人の内気な床屋役をやったけど、あれはよかったよ。自分でもいろんな役を演じながら、正直、自分の中にあるいろんな面に気付いたりするんだよ」

今まで実に多くの作品に出演してきたデュヴァルが最も気に入っている役は、意外にも、「ゴッドファーザー」のトム・ヘイゲン役でも「地獄の黙示録」のキルゴア役でもなく、テレビのミニシリーズ『Lonesome Dove』で演じたテキサス・レンジャー役だという。

「『ゴッドファーザー』に参加した時はこの作品がきっと大変な作品になるだろうという実感はあったよ。作品の出来としても『ゴッドファーザー』の方が上だけど、役としてはやっぱり『Lonesome Dove』の方が上だよ。でも初めて『Lonesome Dove』を見た時は驚いたんだ。エディターが凄く大事なシーンをカットしていたんだ。それは僕にとって特別なシーンだったんで、怒ってプロデューサーにそのシーンを戻すように言ったんだ」。いかにも頑固で職人気質のデュヴァルらしいエピソードだ。

現在、ウィル・ファレルと共演するコメディ「Kicking & Screaming」を撮影中のデュヴァルは、その後、アンディ・ガルシアの初監督作でダスティン・ホフマンらと共演する「The Lost City」、お爺さんと孫が一緒にメキシコを旅する「A Night In Old Mexico」への出演が決まっている。「The Apostle」(97)で監督としても高い評価を得たデュヴァル、新しい監督作も期待したいものだ。

ウォルター少年と、夏の休日

HALEY JOEL OSMENT／1988年米・ロサンジェルス生まれ。94年「フォレスト・ガンプ／一期一会」でデビュー。大ヒット作「シックス・センス」(99)の演技で、わずか11歳にしてアカデミー賞助演男優賞にノミネートされた。他の出演作は、「ペイ・フォワード／可能の王国」(00)「A.I.」(01)「ぼくの神さま」(01)など。

この役にあまり感情移入出来なかったただろうしね」

大ベテランの名優二人との仕事に、オスメントも随分興奮したそうだ。

「二人の作品の大ファンだったし、役者としても何かを学べるいいチャンスだと感じたからね。演技について言葉で説明するのは難しいんだ。多くはフィーリングだからね。でも彼らが現場でどうやってリアリティのある演技を作り出すかを見られたのはとても興味深かったよ」

また本物のライオンとの共演も、オスメントにとっては思い出に残る体験だったようだ。

「僕がライオンとじゃれ合うシーンでは、みんなが神経質になっていたよ。僕自身はやる準備は出来ていたんだけど、やっぱり100%安全を保証出来ないと言われてやめることにしたんだ。たとえ子供のライオンでもね。でもライオンがあんな近くにいたことはそれまでなかったから楽しかった。凄い経験だったよ」

役を選ぶ上で一番重要なのはあくまでも脚本だという。しかし、大人になるにつれ役選びが難しくなってきているようだ。

「今僕にあった作品を見つけるのは難しいよ。年とともに外見が大きく変化していく時期だから、役の年齢と僕自身が噛み合うかどうかを判断するのは結構大変なんだ。これから僕が大人になる途中でどんな役があるかによるけど、今ちゃんとした役をやることは、僕の将来にとってとても大事なことだと感じている。大人になって役者を続けていく上でそれが大きく影響していくことになるだろうからね」

子役としてこれ以上ないほどの名声を手に入れたオスメントだが、今後大人の役者になっていく上での不安はないという。

「たとえ脚本が送られてこなくなったとしても、今の僕には学校とかいろいろとやることがあるから別に気にはしていないよ。演技だけでなく、監督や脚本にもとても興味があるんだ。だから今後、演技だけにこだわるつもりはないんだ」

あと二年したら大学生になるオスメント。大学では本格的に演出や脚本について学ぶつもりだという。ハリウッドには子役出身の監督が何人かいるが、もしかしたらオスメントは第二のロン・ハワードやジョディ・フォスターになるかもしれない。

ふたりの名優がみせるたくましさと、優しさ

作品評＝瀬戸川宗太

"中古のライオン"ぶりに注目

どことなく、なつかしい香りのする映画である。主人公のウォルター少年（ハーレイ・ジョエル・オスメント）が、夏休みにテキサスに住む二人のおじいさんに頂けられるのだが、約束の期日が過ぎても、迎えに来るはずになっていた母親（キーラ・セジウィック）は、いっこうに姿を現わさない。少年は、どうやら置き去りにされてしまったようである。そんなウォルター君をなぐさめ、生活を共にするうちに、おじいさんたちは、少しずつ心を開き、若き日のスピリットをとりもどしていく。

邦題から判断すると、少年の成長だけがテーマのように思えるが、原題の「セカンドハンド・ライオンズ」が象徴するように、中古のライオンたち、つまり、二人のおじいさんが一人の少年を一人前の男に育てあげる物語といった方がより正確といえるだろう。それだけに、老人たちを演じるマイケル・ケインとロバート・デュヴァルの中古のライオンぶりが実にいい。十分に円熟し、大人の男のもつたくましさと、優しさを合わせもつ二人の役は、この名優たちをおいて他にはいないのではないかと思わせるほど、ピッタリと合っている。

少年が様々な体験を経ながら、一人前の大人に育っていくお話は、古今東西、山ほどあるが、最近はどうも少女の成長物語がめだつような気がする。が、今、求められているのは、本作のような男の子のドラマの方ではないだろうか。おじいさんたちの語る夢のような冒険譚に魅せられていくウォルター君を観ながら、同じように心おどらせる男性観客も多いと思う。

時代背景が六〇年代初頭となっているのは、当時、まだそんな武勇伝をもつ大人たちが、現実に生きていたからなのか、定かではないけれど、「男らしさ」がからかいの対象になり始めるのが、六〇年代後半ということを考えると、やはり時代設定にはそれなりの意味があるに違いない。

舞台がテキサスというのも、西部劇のイメージが重なり、ロバート・デュヴァルが地元のチンピラ集団を相手に、腕っぷしの強さを見せるあたりは、まるっきりジョン・フォード西部劇に出てくる酒場での殴りあいのように見える。男が男らしくあった時代をほうふ

つとさせる。

いつの時代にも通用する冒険物語

こんなことを書くと、保守化しつつあるアメリカの動きと符合する作品といった声がどこからか聞こえてきそうだが、そんなことはない。「ウォルター少年と、夏の休日」は、少年たちがベッドでくつろぎながら読む、マーク・トウェインの冒険小説と同じである。いつの時代にも通用する普遍的価値をもつエンターテインメントといえるだろう。

そのため、原作の小説があるように思えるが、実は「MOVIE LINE」誌で「スクリーンで観たい良質な脚本ナンバーワン」に選ばれた作品をベースに製作されたものである。脚本を書いたのは、古典的なアニメーションの技法を使い、高く評価された「アイアン・ジャイアント」の脚本家ティム・マッキャンリーズ。そういえば、「アイアン・ジャイアント」も、一九五〇年代末を舞台とした、少年が主人公の冒険映画で、よく出来たファンタジーだった。

今回も、そんな脚本の妙味が、巧みに生かされている。冒頭シーンから複葉機に乗り、無謀きわまりない操縦をくり返すデュヴァルとケインの暴走ぶりに、観客はあっけにとられるだろう。ラストになって、現在の二人が既に九〇歳を過ぎたおじいさんたちであることがわかり、再びあっけにとられるという結末もうまい。

また、本物の年をとったライオンが登場するが、おじいさんたちを含め、中古のライオンが三匹いるわけだから、タイトルはライオンズとなる。というように、いくつもの伏線がちりばめられ、ドラマの構成がしっかりしているため、この種の子供向け作品に、しばしば見られる説教臭さがまったく感じられない。映画はエンターテインメントでなければいけないという哲学が作品の芯を貫いているうえに、ラストには、感動を与えてくれる。ちょっと欲張りな作品だ。

私は、この映画を特に日本の大人や少年たちに観てもらいたいと思っている。我が国で父性の欠如が問題とされてから久しい。マイケル・ケインやロバート・デュヴァルの演じるおじいさんたちのような男性が大勢いれば、現在、世間を騒がせている残虐な幼児殺害事件や家庭内での陰惨な事件など起こらなかったであろう。少年たちは、ウォルター君のように、たくましい大人に成長していたはずである。

いや、かつての日本には、二人のような男らしい大人たちがいくらでもいたように思う。本作がなにかなつかしさを感じさせるのは、古いアメリカ映画や外国の古典小説だけでなく、我が国にも同じような冒険物語がいくつもあったからではないか。

若き姉妹がつむいだ ふたつのアフガン物語

――「午後の五時」と「ハナのアフガンノート」をめぐる対談

取材・構成＝佐藤忠男

「午後の五時」はイランのサミラ・マフマルバフ監督がタリバン政権壊滅後のアフガニスタンに行って、現地の素人たちを俳優として起用して作った劇映画である。彼女自身まだ二十四歳の若い女性であるサミラは隣国アフガニスタンの復興再建の希望はこの国の自分と同じような若い女性たちの自覚にあるべきだと見定めて、将来は大統領になりたいと述べる若い女性を見出して、これを中心にしてドラマを作りあげた。

素人俳優の起用というのは今日では珍しいことでもなんでもないが、アフガニスタンの場合はまた別である。この国では女が他人に顔をさらすなどもっての外、という考え方がまだ生きているからである。だから交渉はトラブルつづきだった。サミラの妹で当時まだ十四歳だったハナ・マフマルバフがこの映画のメーキングをビデオで撮っていたが、その過程を撮っているうちに興に乗って、そうしたアフガニスタン社会のさまざまな側面も撮った。なかでも若い女性たちの討論の場面などは圧巻で、この国の再建は若い女性たちの自覚から、という姉のテーマ設定が必ずしも思い込みや気負いだけからくるものではなく、現実的な基盤を持つものかもしれないと思わせる。その意味で「午後の五時」は妹ハナの「ハナのアフガンノート」とセットで見るほうがいい。一本ずつでは荒削りの緊急発言のように見えるが、二本あわせるとグッとこの国の現実と理想が立体的に見えてくるのである。

じつは私はサミラとハナのマフマルバフ姉妹とは、姉が高校生で、妹がまだ小学生の頃に、テヘランで父のモフセン・マフマルバフの家によばれて会っている。ちょうどそのとき、サミラが学校をやめると言うから家で映画学校をはじめてそこでみんなで映画を勉強することにしようと計画している、と彼から言われた。それはたいへんだ、どうなることかと友人として心配していたのだが、見事にこういうことになった。だから東京でサミラとハナの姉妹にインタヴューできたことはとても嬉しいことだった。以下その内容である。

サミラ・マフマルバフ
古い伝統を重んじる人々を敬う心は美徳だと再確認した

SAMIRA MAKHMALBAF／1980年イラン、テヘラン生まれ。14歳で映画監督を志し、マフマルバフ・フィルム・スクールで4年間映画を学ぶ。98年初監督作「りんご」がカンヌ国際映画祭ある視点部門に正式出品。2作目「ブラックボード～背負う人～」(00)もカンヌ国際映画祭に出品、審査員賞を受賞した。

「午後の五時」
タリバン政権崩壊後のアフガン。ノクレは家族に内緒で学校に通う。ミナやパキスタンから帰還した青年に出会う一方で、過酷な運命を生きる。●監督・脚本／サミラ・マフマルバフ　脚本／モフセン・マフマルバフ　出演／アゲレ・レザイ　●7月3日より銀座テアトルシネマにて

「午後の五時」

佐藤　アフガニスタンについての映画というのは、ニュースも含めていろいろあるのですが、これは非常に新鮮な印象を受けました。どうしても、外からアフガニスタンを観察せざるを得ないわけだけれども、できるだけ内側から見たいという気持ちがよくわかりました。ストーリーを持っていらっしゃったんでしょうが、事前にどういうふうに調べることができたか。行ってみて、ストーリーはこれでいいと思われたか。そういったことを聞きたいですね。

サミラ　全然ストーリーはなかったんです。ただ、アフガニスタンについての疑問はたくさんありましたし、隣の国で責任感を感じていたところもあって、行ったんです。言葉は同じで、文化もそんなに違わないので、だから彼らの痛みをわかるのではないかなと思いました。20年以上、アフガニスタン難民がたくさんイランに移り住んでいて、そばで見たりはしているのですけれども、一番最初にアフガン人と話したのはちょっと出演もした父の「サイクリスト」の現場でなんです。さらに父が「カンダハール」を撮った時は、じゃあ私は写真を撮りますって、父の現場にずっといたんですね。そこで、アフガンの女性と子供の写真を撮ったりして、今度はもっと深く彼らを知ることができた。まだ9月11日の事件は起きていなかったんですが、すでにその時、父は人々にアフガンの現状を話していたんですけど、その現状を映した映像はどこにもないんです。9・11の事件の後ようやく、たくさんの映像がテレビで報道されたんですけれども、その映像を見ると、本当の映像じゃないものばかり。本当のアフガン人の声は聞こえないと思いました。彼らには自分たちの声を世界に訴えてくれる映画人もいないんです。だったら私に何ができるかというと、自分の映画をアフガニスタンで作っていくことかなと思ったんです。そこにいたら、アフガン人のようになっていたでしょうから。それで絶対にアフガニスタンに行って映画を作ると決心をしました。でもノーアイディアでした。

佐藤　イランで知っていたアフガニスタン人と、行ってみて接したアフガニスタン人とは、何か違いはありましたか。

サミラ　イランに住んでいるアフガン難民の人たちというのは、タリバン政権の時にアフガンに住んでいないので、タリバンのプレッシャーを感じていないんです。もちろん難民としての苦しみはたくさんあると思いますけど。ただアフガンで実際暮らしている人たちの痛みを、そこまで深く感じていなか

ったと思います。ブルカもそうなんです。イランにいる女性はブルカを被っていないから、その苦しみを分かっているわけではないんです。

佐藤　今私はあなたと握手したけれども、イランでは人前で女の人の手を握るなんて大変失礼なことだとされている。アフガニスタンにもあなたの顔を見て、顔を背ける男がいるでしょう。どう思われますか。

サミラ　実際に自分でアフガンに行った最初の日に、ホテルから出ようとしたら、そういうおじいさんに会ったんですよ。おじいさんは私の顔を見てすぐに壁に向いてしまって。それはすごく衝撃的だったんですよね。その時思ったのは、タリバン政権の下でブルカを被らされる女性はたくさんいたけれども、その考えは昔からあった。今のそういうおじいさんたちはタリバン政権下であってもなくても同じことを信じてるんです。イランでもやはり政治の上では、女性は例えば握手をしてはいけないとか、あまり自分をアピールしてはいけないというのはあるけれど、私たちの意識の中ではそういった観念はないんですね。今の若い人たちはそれも守っていないし、もう政府が変わるしかないかなと思いますけれど。

佐藤　難しい問題だと思います。そういう状態のアフガニスタンに行ってみて、それを遅れていると見たら助けてやらなきゃいけないと思うのは当然だけど、彼らは彼らなりに誇りを持って古い習慣を守っている。それを軽蔑してはいけない。あなたは遅れていると思うと同時に、相手が持っている誇りというものもよく分かって、その辺が微妙に表現されていますね。私はそれが一番感心しました。

サミラ　まだ24歳なので、分からないことはたくさんありますよ。そういう伝統的な古い考えを持っているおじいさんたちは私よりたくさん経験してきているわけですから、そういった人々を尊敬しないといけないとはずっと思っていました。その一方で、たくさんの若い女性たちと話していたんですけれども、将来何になりたい？　と質問をすると、意見をはっきり言える。すごく驚きました。彼女らは5年間も学校に行けなかったのに、何でこんなに強くなったのかと。

佐藤　本当に今まで持っていた先入観を打ち破られました。

サミラ　アフガニスタンに行ってすごく感じたことというのは、アフガニスタンには大きな宝があるということ。それは若い女性たちです。一番苦しんできた、一番黙らなければならなかった人たちなんですけれども、喋り出すと、ものすごく面白い意見を言えるんですね。ですから彼女たちを見たとき、この女性たちはまさに私のストーリーになるべきだと思ったんです。中には、大統領になりたいなんていう女性もいました。

佐藤　これはハナさんの作品にだけ入っているのかな。女性が大統領になれば平和になるとあなたが言ったら、パキスタンのブット首相は女性じゃないか、女性の政治家だから平和主義とは限らないというように異論が出た。あれはどうなりました？

サミラ　全然結果は出なかったんです。でもなんで彼女がこんなによく他の国のことを知っているのか、喋れるのかとすごく驚きました。

佐藤　8年くらい前かな、お宅におよばれした時に、お父さまが、娘は学校を辞めて映画をやるんだと言っている、だから映画学校をやることにしたっていうようなことを言って、楽しそうに笑っていました。日本でも、高校を辞めたいっていう若い人がいっぱいいるんですよ。だけど、家でそんな話をしたら、親は心配して心配して大変なことになるんです。お父さんもやっぱりあなたのことを心配していたのではないかな。これは憶測だけれども、相当犠牲を払ったのでしょうか？　それとも、何でもないことだったのでしょうか？　その辺は当事者としてどう思いますか？　もし失礼な質問だったら答えなくて良いですけれど。

サミラ　一つは、私は成績がすごく良かったんです。いつも１００点満点で、お父さんは安心していました。学ぶからには、ギリギリまで精一杯勉強したんです。やるだけやってからお父さんに、私はこの学校ではもう学ぶことがないから辞めますと言ったわけです。父にとってはもちろん、とても難しい判断だったと思います。けれども、私が怠け者だからではなく、もっと学びたいからこう言っているとすごく理解してくれたんです。父も学校を卒業していないですし、学校以外のところでたくさん学んで体験してきたから、私の意見もきちんと聞き入れてもらえたのでしょう。じゃあ学ぶのならと、この道を教えてくれたんです。大学出の若者たちが大学を卒業した後、ここまで勉強してきたのに、一体何をしたらよいのか分からなくなってしまうことがよくあると聞きます。その状態が、私には5年前に起こったんです。このまま行けば、映画大学を出て父のもとに弟子入りするのかもしれない。そう考えたら、それなら大学に行かなくとももっと早い時期から映画をやるべきだと、ある時に決心したんです。それから私は、映画を撮るようになったんです。

「ハナのアフガンノート」

HANA　MAKHMALBAF／1988年イラン、テヘラン生まれ。7歳で父モフセンの映画「パンと植木鉢」に出演。8歳よりマフマルバフ・フィルム・スクールで学び、9歳にして初の短編「おばさんが病気になった日」でロカルノ映画祭に参加。初の長編となる本作は2003年ヴェネチア国際映画祭に正式出品、同年の東京フィルメックスで審査員特別賞を受賞。

「ハナのアフガンノート」
2002年9月。アフガニスタンの首都カブールに着いたサミラ・マフマルバフは、“アフガン女性の痛み”をテーマにした映画を撮るため、出演者を探し始め……。●監督・撮影／ハナ・マフマルバフ
●6月19日より銀座テアトルシネマにてモーニング。

ハナ・マフマルバフ
アフガンに入り込んでの撮影は心を開いた彼らのままを捉えた

佐藤　何年前でしょう、お父さまによばれてお宅で夕飯をご馳走になったことがありました。そのときあなたの絵を見せてもらった。お父さまは、この子は絵の才能があるんだっていうことを、しきりとおっしゃっていましたよ。

ハナ　そうですね。そういう父親を持ったことは、私にとってはとても幸せなことですし、誇りにも思っています。父は私にいろんなものを教えてくれたのですが、自分に自信を持つことをまず教えてくれました。佐藤さんもいらして、家の壁に飾ってある絵の数々をご覧になったと思うのですが、その当時、私は絵を描くのが本当に好きで。描くたびに父がそれを額に入れて飾ったりしていつも褒めてくれたので、私には才能があるのだ、いつか有名な画家になれるんだというふうにずっと思っていたんですよ。父もお客さまが来るたびに、すごいでしょ、ピカソよりうまいでしょって言っていて(笑)。少し大人になってから昔の自分の絵を改めて見てみると、恥ずかしくて。この絵のどこが素晴らしいのか、と。

佐藤　今度の映画はとても面白かったです。10代の若者でなければ撮れないような撮り方をしているなあと。これまで見たこともないアフガニスタンだと感心しました。サミラが赤ん坊を抱いて大人と話し合っている最中に、下にこぼした粉ミルクを父親がしゃがんで子供に舐めさせる場面がありますね。それをサミラさんが一生懸命止める。あれはしゃがんで撮っている感じでしたね。つまり、アフガニスタンの人たちを外から見て撮っているというよりは、群集の中に入り込んで撮っている。これがあなたの作品の一番際立った特色で、アフガニスタンの人たちは地面を這うような生活を強いられているわけだけれども、本当に地面を這うような感じを、撮る方もそれに即して、それに寄り添って撮っているというところが面白かったんですね。

ハナ　多分私も小さかったし、背が低かったというのもありますが、同じ立場で撮ることによって、その人の真実の姿をみなさんに見せられるのではないかと思いまして、そういう撮り方をしました。

佐藤　非常に手軽なカメラで撮っているから、そういう撮り方ができるようになったのかなとも思います。

ハナ　そうですね。小さいカメラでしたので、やはり軽かったですね。動かしやすかったこともあって、そういう

映像が撮れたのではないかと思います。

佐藤　今デジタルカメラは普及しているのだけれども、あんなふうに、人々の中に潜り込むような撮り方をしている人はまだあまりいません。

ハナ　ありがとうございます。

佐藤　ああいうところこそ撮るべきだと、現場にいて思ったのかしら？　それとも、とにかく何でもかんでも撮っていたのかしら？

ハナ　確か、他にいろんな場面を撮っていたのですけれど、編集しているうちに、この人のキャラクター、ここのシーンが一番良いかなと思ったんです。なぜなら、その人がちょっと知能的に障害のある男性で、貧乏でお金もなかったし、どちらかというと姿も汚かったのですけれど、それでもやはり子供のことだけは考えていたんですよね、自分なりに。彼にしてみれば、こぼれた粉ミルクを集めて子供に飲ませることによって、その子供を死なせずにすむっていう、子供に対する愛情を表していた。それをみなさんに見て欲しかったんです。

佐藤　学校で、サミラとアフガニスタンの女性たちとが議論する場面があるでしょう。あのアフガニスタンの女性は強烈ですね。あそこは非常に感心しました。これまでアフガニスタンの女性というと、ただおとなしくて、閉じ込められているのだとばかり思っていたら、猛烈に、ちゃんと議論するんですね。人間性までが閉じ込められているわけではない。言いたいことをちゃんとしゃべれる。私は、アフガニスタンの女性に対する先入観を改めさせられました。

ハナ　私も最初は佐藤さんと同じ考えで、アフガン女性はおとなしくて物静かで、自分の意見とか考え方を表に出さないと思っていたのですが、実際に彼女たちと接していると、そうでもなかったんですよね。いろいろと言いたいことがあったのではないかと思います。だから、あれだけ必死に、強烈に話をしたり、ケンカをしたのではないかと思います。私が接した9歳の女の子なんて、いろんなことを経験しているんですよね。まるで40歳の大人の方と同じぐらいの経験をしたり、痛みももちろん持っているということに、私は非常に驚きました。確かに、アフガン女性はブルカを被っていて、イラン女性は頭にスカーフを被っているのですが、それが別に自分の意見を出してはいけないということではないんですね。今まで言えなかった分、そういうふうに自由になってしまうと、言いたいことが山ほどあって、だから止まらないのではないかと思います。アフガン女性が経験している悲しみは、本当に想像を絶するものなんです。

佐藤　外国人のカメラマンがあそこにいっぱい入っているんだけれども、男が女性に頼るというわけにはいかないのではないかなことに気がつきました。やはり、あなただから撮れたのではないかなと思いましたね、アフガニスタンの女性たちをね。

ハナ　そうですね。彼女たちから見ると私も外国人なんですが、でもあまり私を警戒しなかった理由としては、3点ぐらい挙げられると思います。まず、イランとアフガニスタンは似ている部分があって、言葉も非常に似ていて、文化も非常に共通しているところが多いこと。アフガンからは20年にわたってずっとイランに難民が行っていたというのもあります。そして、多分私が小さかったから。オモチャで遊んでいるというふうにみなさんが思っていた。だから逆に警戒されなかったし、わりと心を開いてくれたというのはあったと思います。

佐藤　お父さまが、学校を作って、そこで学んだそうですが、どういうことをされたのですか？

ハナ　父親の学校に入って単なる映画を勉強したのではなくて、その前に、どういうふうにしたらより良い暮らしができるか、生活ができるかというのを、まず最初に学んだんですね。例えば料理の仕方とか、お裁縫とか、映画とは全然関係はないのですが、そういうものを勉強しました。あとは運転の仕方、スポーツとか、水泳とか。その次に教えてくれたのが、どうしたらより良い人間になれるのか。哲学とか心理学、社会学を学んで、人間はこういうふうにすればより良い人間になる、考え方が変わる、人と接することができるということを学びました。そして最後に、映画の編集から監督の仕事、脚本の書き方なんかを教わりました。

佐藤　それは全部お父さまから？

ハナ　ほとんど父親が教えてくれたのですけれど、料理に関しては、父親はお茶もいれられないので、それは母に教わりました。英語も、父とか母ではなくて、他の先生に教わりました。

佐藤　お父さまは大変だったのではないのかな。

ハナ　そうですね。でも、9・11事件の前に「カンダハール」を作るためにアフガニスタンに行って帰ってきて、ちょっと性格が変わったところもあるんですよね。彼らに接してきて、どうしたら彼らの力になれるのかとか、彼らを救うことができるかというのを、ずっと考えていたり、食事がノドを通らなかったりとか。

佐藤　本当に立派な方ですね。今日はどうもありがとうございました。

キネ旬チョイス
Kinejun's Choice

ワイルド・レンジ／最後の銃撃

作品評

ケヴィン・コスナーが愛情を注いだ本格的西部劇

文＝鬼塚大輔

OPEN RANGE
●2003年・アメリカ・カラー・スコープサイズ・ドルビーSRD、SDDS・2時間20分
●監督・製作・出演／ケヴィン・コスナー　製作／デイヴィッド・ヴァルデス、ジェイク・エバーツ　脚本・製作総指揮／クレイグ・ストーパー　製作総指揮／アーミアン・バーンスタイン　撮影／ジェームズ・ミューロー　美術／ガエ・バックリー　編集／マイケル・J・ダシー、ミクロス・ライト　衣裳／ジョン・ブルームフィールド　音楽／マイケル・ケイメン　キャスティング／ミンディー・マリン
●出演／ロバート・デュヴァル、アネット・ベニング、マイケル・ガンボン、マイケル・ジェッター、ディエゴ・ルナ、ジェームズ・ルッソ、アブラハム・ベンルビ、ディーン・マクダーモット、キム・コーツ、ハーブ・コーラー、ピーター・マクニール
●配給／日本ヘラルド
●7月3日よりK's cinema、銀座シネパトスにて

牛を放牧しながら旅を続けるフリー・グレイザー

本格西部劇の香り

クエンティン・タランティーノやロバート・ロドリゲス、ジョン・ウーといった"レオーネ・チルドレン"が、スパゲッティ・ウエスタンを自分たちのビジョンで再生しているのは、とても面白い状況だと思う。だが、正真正銘のハリウッド製ウエスタンがぱったりとスクリーンに登場しなくなったのは寂しい限り。「アメリカン・アウトロー」や「テキサス・レンジャーズ」といった史実を題材とした近作もあり、特に前者はなかなか楽しませてくれたが、速いテンポのジェットコースター・アクションに慣れた観客に半端に迎合しようとしているため、本格西部劇の香りには欠けていた。

そして満を持して登場したのがケヴィン・コスナー監督&主演の「ワイルド・レンジ／最後の銃撃」。主演とは言っても実際にビリングがトップなのは、ベテランの牛追いを演じるロバート・デュヴァル。デュヴァルはTV西部劇『ロンサム・ダブ』(89)での名演を彷彿とさせる人物を悠々と演じ、この作品を盛り上げている。現在、もっとも西部劇の香りを残している俳優である。そしてコスナーの方も、今までの「俺が、俺が」的なナルシシズムを抑制気味にし（無くなったわけではない）、デュヴァルを前に立てることで逆に点数を稼いでいる。コスナーと心を通わせるようになる女医にアネット・ベニング。実年齢とケンカをしない控えめな演技で、おとなの女性の魅力と色香を醸し出している。町を支配するガンボン一派に反旗を翻し、コスナーとデュヴァルに味方する厩の主人がマイケル・ジェッター。市井の人間の持つ凛とした強さを感じさせる演技だ。最近では「ウェルカム　トゥ　コリンウッド」などでも達者なところを見せていたが、HIV感染症のため世を去った。もう一人、映画ファンに（そしてロック・ファンにも）なじみ深い名前であるマイケル・ケイメンも、「ワイルド・レンジ」ともう一本だけ作品を遺して逝ってしまった。コスナーの西部劇への愛情を、音楽の面から支える職人芸を存分に味わいたい。

原作となっているのは古い西部小説で物語の内容も、「フリー・グレイザー（放牧の牛追いたち）」のデュヴァル、コスナーと富と権

力で法までも味方に付けた牧場主マイケル・ガンボン一派の対立という古典的なものだ。1時間半で終わりそうなこの物語を、コスナーはしかし2時間半近くかけてゆったりと綴っていく。端折ろうと思えば端折ることができる、むしろ最近では端折ることが普通になっているような何気ないエピソードもコスナーはじっくりと撮っている。だが、このゆったりとしたペースは意外なほど心地よい。

ロバート・デュヴァルとケヴィン・コスナーが息の合った演技に注目

神話とリアリズムの融合

「ダンス・ウィズ・ウルブズ」（コスナー監督作）、「ワイアット・アープ」の二本の修正主義的西部劇を作ったコスナーだが、「ウォーターワールド」、「ポストマン」（コスナー監督作）の二作は、実は完全に西部劇の構造を持つSFアクションだった。「ダンス・ウィズ・ウルブズ」と「ワイアット・アープ」では、皮肉なことに西部劇というジャンルへのコスナーの愛情が、むしろ西部劇神話の破壊の方向へと向かい、「ウォーターワールド」と「ポストマン」のようなSFのほうに、昔ながらの西部劇の神話的構造がそのままの形で生かされていたのである。「ワイルド・レンジ」は（妙な言い方だが）古典的な西部劇の構造を持った西部劇である。コスナーが〝脱神話〟西部劇において試みたリアリズムと、SF映画の中でオマージュを捧げていた〝神話化〟とが絶妙のバランスで混合している。

　クライマックスの決闘場面は、特に人の死を美化することもなくリアルなものだ。それでいてダイナミズムも十分に持ち合わせた見事なものに仕上がっている。せっかくがっちりとした撮り方をしているのだから、もう少しだけ観客を信頼して、クライマックスでのスローモーションの使用を控えれば、傑作と呼べる作品になっていたかもしれない。

　不満が全くないでもないが、やはり西部劇の良さを久々に満喫させてくれる「ワイルド・レンジ」は歓迎すべき作品である。

　「ダンス・ウィズ・ウルブズ」のような成功作でも、「ポストマン」のような失敗作でも、自然の美をスクリーンに刻みつけるコスナーの美的感覚と、優れた構図の感覚は共通していた。この「ワイルド・レンジ」でも、それは十分に生かされている。

　オープニングの場面は、平原を行く牛の群れとそれを追う二人のカウボーイ。まず馬上のデュヴァルの姿をゆっくりと移動するカメラが後ろから捉え、カメラがさらに移動してデュヴァルを前面から映すと、その後ろからやはり馬上のコスナーが近づいてきて二人が並ぶ。こんな何気ないショットに、コスナーのセンスの良さと西部劇への愛情がにじみ出ていて、何とも嬉しい気分になる。スクリーンで対面できる久々の、そしてすこぶる良質の西部劇、それが「ワイルド・レンジ／最後の銃撃」なのだ。見逃すわけにはいくまい。

インタビュー

ケヴィン・コスナー監督 僕が西部劇にこだわる理由

取材・文 猿渡由紀

演出中のケヴィン・コスナー監督

「ダンス・ウィズ・ウルブズ」がアカデミー賞を取ったのは、今から13年も前のことだが、その瞬間をケヴィン・コスナーは、はっきりと覚えているに違いない。西部劇というジャンル、そして2時間を超える上映時間などの理由から公開前、業界人の多くが失敗を予測していたこの映画で、コスナーは最高の栄誉を得たのである。

「ダンス～」ほど派手ではないものの、「ワイルド・レンジ／最後の銃撃」で、彼はひさびさに同じ種類の喜びを味わった。やはり西部劇という今日のハリウッドでは流行らないジャンル、そして若手スターが誰も出ていないという悪条件を背負ったこの映画は、思いのほかに好調な興行成績を収めたのだ。

「『たぶん自分はこの映画は嫌いだろうな』と思いながら見た人が、『意外にも、とてもおもしろかった』と言ってくれる。それが楽しいんだ。いい意味で観客を驚かせることこそ、映画作りの醍醐味だからね」

日中の気温が40度近くにも達する5月初めの真夏日、ハリウッドの牧場で、コスナーはそう満足気に語る。でも結果こそ良かったものの、「ワイルド・レンジ」の製作を実現するのは、決して簡単ではなかった。

「どうして、苦労するとわかっている作品を手がけるのかって？ 説明できないな(笑)。僕自身、時には（スタジオを）説得することに疲れて、まいってしまうこともある。こんな性格じゃなかったら、人生、楽だろうな」

大変なのはそこでは終わらない。監督業に進出した多くのスターは「監督もしながら出演するのは多大なるエネルギーを必要とした」と振り返ってみせるが、コスナーは今回も、製作、監督、主演を兼任している。

「自分が出演もしながら監督もするとなれば、たしかにやることが山ほどある。でも、僕は今回、どうしても自分で全部やりたかったんだ。そうでないと、たとえば若者志向のテイストにされてしまう危険性がこの映画にはあったから。物語に忠実な映画にすることが、僕としてはとても大切だったんだ。あえて彼らが好むような作り方にしなくても、そうすればきっと、若い観客だって良さをわかってくれるはずだと思っていたよ」

責任の高い仕事を複数兼任する上で、重要なことは「十分な準備をもって望むこと」だとコスナーは考える。

「監督、俳優、どちらの立場でも、僕は事前にしっかりと準備をした上で現場に足を運ぶ。だから、撮影当日、突然に新しいアイデアが浮かんだりしても、迷わず試してみることができるんだ。準備しないでのぞんでいたら、誰かがおもしろい案を持ち出してきても『そんなことやってる余裕はないよ！』としりぞけてしまうだろう。監督の経験がある僕は、ほかの監督と仕事をする時、他の奴らよりも働きやすい役者かどうかと聞かれると、イエスともノーとも言えるね。監督がどれほど大変かを知っているから、彼らに共感はするけれど、一方で準備不足な監督にはがまんがならない」

「西部劇ならなんでも好きなわけではない」と言うコスナーが挙げるお気に入りの作品は「シェーン」「西部開拓史」「赤い河」だ。

「これらの作品は、真実に忠実で、同時に詩的な美しさがある。だから娯楽性も高い。ほかの西部劇にはウソっぽいものも多いんだ。僕がこのジャンルに引かれる理由はいくつかあるけれど、そのひとつは、あの時代、西部に生きた人々は、非常に賢くアグレッシブでいなければならなかったことかな。生と死の境目で決断を下さなければいけないことが、彼らにはたびたびあった。そんな時代に生まれていたかったとは思わないけれど、彼らの生き方には興味をそそられるんだ」

だからまた、西部劇を作りたいとケヴィンは思っている。

「すでに脚本も完成しているんだ。とてもすばらしいストーリーさ。実際に撮影に入る日が、今から待ちきれないよ」

KEVIN COSTNER／1955年、米カリフォルニア州リンウッド生まれ。「シルバラード」(85)に出演後、「ファンダンゴ」(85)で主演に抜擢され注目を集める。90年の「ダンス・ウィズ・ウルブズ」では監督も務め、アカデミー賞を受賞する。主な出演作は「アンタッチャブル」(87)、「フィールド・オブ・ドリームス」(89)、「JFK」(91)、「ボディガード」(92)や監督も兼任した「ポストマン」(97)など。

キネ旬チョイス
Kinejun's Choice

スパン

作品評

実に正しく、グランジのリアリティにあふれる作品

文＝森直人

Spun
●2002年・アメリカ＝スウェーデン・カラー・ビスタサイズ・SRD・1時間42分
●監督／ジョナス・アカーランド　脚本／ウィル・デ・ロス・サントス、クレイトン・ヴェロ　撮影監督／エリック・ブロムス　音楽／ビリー・コーガン　美術／リシャール・ラサル　プロデューサー／クリス・ハンレイ
●出演／ジェイソン・シュワルツマン、ジョン・レグイザモ、ミッキー・ローク、ブリタニー・マーフィ、ミーナ・スヴァーリ、パトリック・フュジット、デボラ・ハリー、エリック・ロバーツ、ピーター・ストーメア、アレクシス・アークエット
●配給／東芝エンタテインメント
●シブヤ・シネマ・ソサエティにて公開中

郊外のすさんだ青春模様を描いた

僕にとって、この映画を観たい！　というフックになったのは、ビリー・コーガンである。90年代初めから半ばにかけて世界的に盛り上がったアメリカのオルタナティヴ・ロック・シーン、ニルヴァーナやパール・ジャムを輩出した〝グランジ〟と呼ばれるムーヴメントの中でも、ドリーミーなテイストを大きく含む最もユニークな音楽性を持っていたバンド、スマッシング・パンプキンズ（スマパン）のフロントマン＆コンポーザーだった彼。残念ながら2000年に解散してしまったが、彼らのマスターピースである2枚のアルバム（後者は2枚組なので実質3枚だが）、93年の「サイアミーズ・ドリーム」と95年の「メロンコリーそして終りのない悲しみ」は、我が青春期の決定的な名盤であり、いまでも本当によく聴いているのだ。そのビリーが、ソロで音楽を担当している映画なら、絶対にチェックせぬわけにはいきますまい！

かくして臨んだこの「スパン」は、まさにグランジという言葉がぴったりの映画だった。グランジは、シアトルのインディーズ・レーベル、サブ・ポップからデビューしたバンドが中心になってメジャー化を果たした現象だが、その精神的背景となっていたのは、都会ではなく郊外のすさんだ青春模様である。ビリーの地元はシカゴだが、ニルヴァーナの故カート・コバーンなどはシアトル郊外の小さな町アバディーンの出身であり、ローカルな場所で育まれた退屈や虚無を、荒々しいギター・サウンドに乗せてがなり立てるスタイルの音楽を確立。ちょうど、ダグラス・クープランドが91年に発表したデビュー小説から広まり定着した用語、ジェネレーションXとカブっている世代である。それは、ブレット・イーストン・エリスが描いた80年代のエリートの次に来た、無気力＆非生産な若者たちの肖像であり、同時代的な共振として、日本のなんにもない田舎町で生まれ育った僕にも、やたらシンクロするものがあったわけだ。こう書いているだけで、なんだかとても懐かしい気持ちになってくる。

出演者はみな汚くて、素晴らしい

とはいえ「スパン」は、別に当時を振り返ったドラマではない。いまの時代を描いたものなんだけど、あらゆる要素から立ちのぼるのは、やはり〝あの頃〟の感覚なのだ。舞台はロサンゼルスの郊外。無駄に舗装だけはされた道路がだだっ広く続く中、娯楽施設はレンタルビデオ店とコンビニくらいしかなく、暮らしているだけで身体も脳も腐りそうなユルユルの地方都市である。そこに住む大学中退のプー青年、主人公のロス（ジェイソン・シュワルツマン）が、麻薬を求めて濃すぎるお兄さんたちのもとを奔走するダメダメ全開のストーリーが展開する。基本的に、脚本を書いたコンビの片割れであるウィル・デ・ロス・サントスが、ポートランドでメタフェタミン製造者の運転手というヤバすぎる職

業に従事していた頃に体験した実話をベースにしているらしいが、そんな彼氏、65年生まれだから、まさしくグランジ世代(の上の方)。
ビリー・コーガンの音楽は、スマパンや、そのあとに結成してすぐ解散したズワンとはまた違い、弾き語り系のアコースティックな美しいナンバーが中心だったが、重要なのはそれに加え、オジー・オズボーンやモトリー・クルーなどのヘヴィメタの既製曲を普通に流していることだ。周りはバカなマッチョだらけで、その中に勉学や恋愛に挫折してヤク中になっている屁タレがいるという構図が、実に正しくグランジ的なのである。グランジ全盛当時に商業的なフォーマットで作られた「シングルス」(92)や「リアリティ・バイツ」(94)は、80年代のプレッピーなノリを引きずったものでグランジ・ファンを満足させなかっただけに、いまになってここまでグランジのリアリティにあふれる映画が登場したのは皮肉である。環境のメインはあくまでヤンキー。特に筋肉鍛えすぎのミッキー・ロークと、「8 Mile」(02)に続き片田舎の不良娘がハマリすぎなブリタニー・マーフィの、キャラ立ちぶりは半端ではない！ 便器にまたがるミーナ・スヴァーリも、豪快なレズおばさんのデボラ・ハリーも、吹き出物まみれのパトリック・フュジットも(彼は屁タレ側)、みんな汚くて素晴らしい！

監督のジョナス・アカーランドは、スマパンの〝トライ・トライ・トライ〟も撮っているミュージック・ビデオの名匠だが、マドンナの〝ミュージック〟でも使用したアニメーションを、ドラッグのトリップ描写として多用し、また刑事が乗り込むシーンではTVの刑事ドラマのオープニングロールを挿入したりして(これはスパイク・ジョーンズ／ビースティ・ボーイズの〝サボタージュ〟を意識したか？)、自由奔放な映像プレイを披露する。粗い映像でジャンク・カルチャーへの偏愛を示しつつ、ちゃんと表現としての洗練も感じさせるのが、さすがだ。そしてビリー・コーガン先生だけど、キンタマを診察する金髪のヅラ＆黒ぶちメガネ姿の医者役で、一瞬だけ登場する（次頁写真）のでお見逃しなく！

ブリタニー・マーフィには、片田舎の"蓮っ葉"な女がよく似合う!?

"マッチョ"になって復活のミッキー・ロークの姿もファンには嬉しい

コラム

閉塞感と孤独感を際立たせるビリー・コーガンの音楽

文＝山口哲一

カーディガンズやロクセットといった同郷のポップバンド、プロディジー、モビーなどラディカルなクラブ系、マドンナ、U2、レニー・クラヴィッツ他のビッグ・ネーム。ミュージッククリップの世界で名をあげた北欧スウェーデン出身のジョナス・アカーランドの初監督作品「スパン」は、LA郊外の町で暮らす若者たちがドラッグに溺れ、ただただノンベンダラリンと過ごす日常を描いた映画だ。地元一のプッシャー（売人）をいきがったスパイダー、市販の薬品から白い結晶の精製を生業とする中年カウボーイのコック、そしてコックの便利な使いッパとして小銭を稼ぐ主人公ロス。オトコ共のセックス相手のハニーたち、ろくでなしの警官、ゲーム狂、レズばばあ……。プロレス、ポルノたれ流しのTVのあるすみかを拠点にレンタルビデオ屋、コンビニ、ガススタンド、トレーラーハウス、ストリップ小屋を物語はグルグルと巡る。

「トレインスポッティング」「KIDS」「レクイエム・フォー・ドリーム」「ルールズ・オブ・アトラクション」……、過去を遡るまでもなくドラッグにハマる若者の日常を描く作品をあげれば、数も方向性も、社会派、文学派、アート派まできりがない。

その中で「スパン」が特異なのは、社会通念上は仮にもサイアクのジャンキー世界を、ラヴリーでキュート、ポップでキッチュなバブルガムテイストに包み、それでいながらどこかアーシー、なぜかスペイシーな印象を残す作品に仕立て上げてしまったことだ。

日本でも流行ったブレぼけ写真、あるいは手作り感覚のオシャレなカフェをも思い出させるカラフルな色彩、アニメやグラフィック・デザインを差し込みながら5345カットに及ぶパーツをレゴのように積み上げていく演出・編集手法は、決まりごとを無視するかのような楽しさに満ちている。

この奇妙にかわいい世界観をさらに一歩先の境地に押し進めるのが、ビリー・コーガンの音楽だ。コーガンは、90年代アメリカのグランジ～オルタナティヴ・ロック・ブームの中から登場し、結果的には同時期に登場したアーティストの中でもアジアからヨーロッパまで、長くワールドワイドに受け入れられることとなった〝スマッシング・パンプキンズ〃のソングライター兼ギタリスト・ボーカリスト（略称〝スマパン〃は2000年解散。映画関連としては過去に「バットマン&ロビン」主題歌、最近では元メンバーのジェームズ・イハが日本人女性Vo.を起用した「テッセラクト」の主題歌などがある）。過去に数曲のPVをアカーランドが担当した縁で、ソロ活動として、映画音楽への初の参戦となった。

映画オリジナルとして録音されたのは、UFO、スコーピオンズ、アイアン・メイデンなどのハードロックをアコースティック・ギターでカヴァーしたヴォーカル&インストゥルメンタル・ナンバー。コーガンのグラマラスで金属的な声質と演奏のタッチは、激しさと内省が同居する魅力とともに、聴く者の感情を遥か彼方の異世界へと誘うような不可思議な遠心力がある。このコーガンの音楽性が、生まれ育った土地や関係の中をグルグルと回るだけで外界に出られない主人公ロスの閉塞した状況を浮き上がらせ、おいてきぼりの孤独感を際立たせる。また、映像的にもドラッグによる酩酊状態のめまぐるしさから断絶させる扱いがなされ、抜群の効果をあげている。〈宇宙にひとりぼっちの心象風景〉あるいは〈世界から取り残された惑星感〉。形成されるイメージは、90年代にあらゆる表現で目立ったサバービアという概念の先にある〈気分〉ともとることができる。物語の語り部が簡単に口にし、その実、映像化することは困難な〈どこにでもあるどこか〉がそこにはある。

つまるところ「スパン」は、アメリカ的なるものを描きながら、まぎれもなく他所者であるアカーランドの視点、アメリカで生まれアメリカ的な曲を書いてもどうしようもなく非アメリカ的なコーガンの資質そのものと言えるのかもしれない。だからこそ、バカなアメリカ若者の乱痴気騒ぎは表層のギミックを超越し、これまでの同テーマの映画とは趣を異にする親しみやすさと新しさを獲得し得た。どうでもいいような物語に愛を感じてしまう所以。それは存外、理にかなったものだ。

BILLY CORGAN(左)／米・シカゴ生まれ。ロック・バンド"スマッシング・パンプキンズ"を結成、90年「ギッシュ」でデビューする。このアルバムは全世界で100万枚を超えるヒットとなり、その後もヒット作を連発する。2000年に解散を発表、その後新しいバンド"Zwan"を組むも解散。現在はソロ活動に向けて準備中。

キネ旬チョイス
Kinejun's Choice

花咲ける騎士道

作品評

フランス娯楽映画の原点の再発見

文＝大森さわこ

FANFAN LA TULIPE
●2003年・フランス・カラー・スコープサイズ・ドルビーデジタル・1時間39分
●監督／ジェラール・クラヴジック　脚本／ジャン・コスモス、リュック・ベッソン　原脚本／アンリ・ジャンソン、ルネ・ウィーラー、ルネ・ファレ、クリスチャン＝ジャック　音楽／アレクサンドル・アザリア　撮影／ジェラール・シモン　録音／ロラン・ゼリグ、ジャン＝バティスト・フォル　美術／ジャック・ビュフノワール　衣裳／オリヴィエ・ベリオ　スタント＆剣術指導／ミシェル・カルリエーズ
●出演／ヴァンサン・ペレーズ、ペネロペ・クルス、エレーヌ・ド・フジュロル、ディディエ・ブルドン、ミシェル・ミュレール、フィリップ・ドルモワ、ジャック・フランツ
●配給／アスミック・エース
●6月26日より日比谷スカラ座2ほか全国にて
●関連イベント／豪華なルイ王朝の衣裳やデザイン画を、東京・プランタン銀座に展示。6月21日～6月28日まで

アドリーヌ役のペネロペ・クルス

新トレンドとしてのコスチューム活劇

1952年にジェラール・フィリップ主演、クリスチャン・ジャック監督で作られた「花咲ける騎士道」を、ヴァンサン・ペレーズ主演で現代に蘇らせたリュック・ベッソン。今回は製作と脚色を担当。夢とロマンと冒険がたっぷりで、最後はハッピーなハッピーな幕切れ。18世紀のフランスを舞台に、自由を求めて生きるプレイボーイ騎士のヒーローぶりを、頭をからっぽにして楽しめる〝大〟娯楽映画だった。最近のハリウッドでは「トロイ」や公開待機中の「アレクサンダー」のような史劇ものが、〝ロマンへの回帰映画〟として、ひとつの新しいトレンドになりつつあるが、フランスの場合、「花咲ける騎士道」のようなコスチュームの活劇映画が、逆に新鮮に思えるのかもしれない。

考えてみると、「最後の戦い」(83)や「サブウェイ」(87)でリュック・ベッソンが80年代のフランス映画界に登場した頃から、彼は〝フランスのスピルバーグ〟と呼ばれ、より大衆的なエンタテインメント作りを目指してきた。そして、99年の「ジャンヌ・ダルク」を例外とすると、監督作品であっても、製作作品であっても、主に現代や近未来を舞台設定に好んできた。しかし、この「花咲ける騎士道」は、華やかなコスチューム劇で、彼にはちょっと珍しい挑戦ともいえる。

今回の作品を見ていて、思い出したのはフランスの国民的な作家アレクサンドル・デュマの映画化作品群だ。特に90年代以降、ハリウッドでも、ヨーロッパでも、デュマ作品の映画化が目立っているからだ。

ハリウッドではマーティン・シーン、キーファー・サザーランド主演の〝剣劇〟「三銃士」(94)やレオナルド・ディカプリオ主演の「仮面の男」(97)が作られ、特に後者では年老いた三銃士の復活が話題を呼んだ。

また、デュマのもう一本の代表作で、男の執念を描いた『モンテ・クリスト伯』は、2002年にハリウッドではジム・カヴィーゼル主演で映画化。フランスでは98年にジェラール・ドパルデュー主演のテレビ・ドラマ化もされ、国内では視聴率52%を誇ったという(日本ではNHK衛星でも放映さ

れたが、確かにおもしろかった）。
また、ちょっと退廃的なドラマではイザベル・アジャーニ主演、パトリス・シェロー監督の「王妃マルゴ」(94）があった。考えてみると、この作品でアジャーニの相手役をつとめていたのが、ヴァンサン・ペレーズだ。このデュマ作品の映画化で自由な愛に生きる男を演じたヴァンサンを主役のファンファンにして、デュマ的な要素を持つ「花咲ける騎士道」の映画化を果たしてみせたのが、今回のベッソンなのだ。

ヨーロッパ出身俳優の粋な遊び心を解放

「花咲ける騎士道」のオリジナル版が公開された時、フランスでは「ジェラール・フィリップはたったひとりで三銃士にとって代わった」という批評も出たのだという。
また、このオリジナル版の監督クリスチャン・ジャックはデュマ原作の「黒いチューリップ」を63年にアラン・ドロン主演で撮っているので、新版の「花咲ける騎士道」にもデュマ的なところが残っているのは、当然の結果かもしれない。
「花咲ける騎士道」は、もちろん、デュマが原作ではないので、彼の他の映画化作品にあるような復讐、執念といったドラマティックで暗い感情は描かれていないが、野心的な男が愛と自由を求め、活劇の世界に身を投じる姿が、とにかく、愉快で、観客としては昔の〝活動写真〟的な世界を主人公と共有することができる。
さらにハリウッド映画の活劇にはない軽妙な明るさも魅力的に思えた。フェロモン系の男優として知られてきたヴァンサン・ペレーズの演技も、いつになく軽やかで、特に剣で闘う場面は、さすがにフェンシングの国ならではの迫力。ハリウッドものだと、城が爆発したり、馬が暴走するような場面を増やすことで、スペクタクルな見せ場にするが、そういう仰々しい小細工はなしで、あくまでも剣劇シーンに重きを置いて、シンプルな娯楽作として構成されているところが潔い。
今では国際的な活躍を見せるスペインの人気女優ペネロペ・クルスがヴァンサンと渡り合う男勝りなヒロインに扮しているが、「バニラ・スカイ」のようなアメリカの現代劇では良さが発揮されない彼女も、今回は妙に生き生きとチャーミングに見えるし、数々のレトロな衣裳も目に麗しい。
娯楽映画の王道を目指すベッソンが、ヨーロッパ出身の俳優たちの粋な遊び心を解放し、フランス娯楽映画のひとつの原点として再発見したのが、「花咲ける騎士道」のフェンシング・アクション（?）の世界なのだろう。

ジェラール・フィリップのファンファンに匹敵ヴァンサン・ペレーズ

フェンシングの国ならではのアクション・シーン

2つの「花咲ける騎士道」 いつだって映画は、作られる時代が反映される

文＝小藤田千栄子

ジェラール・フィリップ

ほぼ50年ぶりのリメイクと聞いて、ジェラール・フィリップ版を見直してみた。すぐにビデオで見られるこの便利さ。この50年間の映画の違いは、まずこれだ(!)と思った。見たい。すぐ見られる。なんという素晴らしさ。

ジェラール・フィリップの「花咲ける騎士道」(52)って、黒白映画だったのですね。ジェラール・フィリップの映画は黒白の陰影という感じを持っていたのに、何故か「花咲ける騎士道」はカラーのような気がしていて、それは多分「花咲ける」というタイトルの華やかさからくる錯覚であったことが分かる。それにしてもステキな邦題だ。

で、こんどヴァンサン・ペレーズの新作「花咲ける騎士道」を見て、映画の50年って、同じ素材でも、こんなふうに変わるのだということが、いちばん面白かった。物語の前半は、ほぼ同じである。ルイ15世の時代に、もののはずみで軍隊に入ってしまった青年が、占いで語られた王女さまとの結婚を目標に、大活躍するという話である。話の展開は同じでも、その描き方は、かなり異なる。

ジェラール・フィリップ版は、アクションといっても、いま見るとかなり優雅でさえある。剣を構えても、正しいフェンシングを習いましたという感じ。この青年＝ファンファンが、どこで剣の修業をしたのかなどは、全く語られないのだが、それでも正しい剣使いのように見える。これは多分、昔の映画のお約束なのであろう。

それにひきかえヴァンサン・ペレーズのほうは、もうワンパクという感じ。「ワンパクでもいい。逞しく育ってほしい」でしたか、そんなCMを思い出してしまったほど。運動能力に秀でているのは分かるが、いまの映画は、これくらいは動き回ってくれないと困るという感じが、ありありである。

もちろんこれには、監督の資質が大いに関係する。クリスチャン＝ジャック監督は、特にアクションを得意にしていた監督ではなく、いや、あの時代のフランス映画には、アクションが得意な監督なんていなかったし、私たちもフランス映画に、そんな味わいを求めたりはしなかった。クリスチャン＝ジャックだって、これ以前の作品では、まずは「パルムの僧院」(47)である。だが「花咲ける騎士道」の成功で、かなりアクション派になったのは確かだ。

一方のジェラール・クラヴジックは、いまのところ、根っからのアクション派である。「Taxi」を2本も撮っているのだもの。この監督さんなら、こういう撮り方と、きわめて分かりやすいのが特徴だが、これは同時に、いまの映画の作り方であることが分かる。

味わいが異なるのは後半である。ジェラール・フィリップ版では、ルイ15世に助けを求めに行ったヒロインが、その美しさで、王様のお目にとまってしまうという展開である。昔ふうに言うと〈特別の思し召し〉といった感じ。だがポンパドゥール夫人に助けられ、修道院に隠れるのだが、このとき助けに行くジェラール・フィリップが、まさに昔のヒーローそのものである。なんと白馬に乗って駆けつけるのだ。

これはもう「鞍馬天狗」の世界である。「杉作少年、危うし」というとき、颯爽、馬で駆けつける鞍馬天狗。満員の映画館は、もう拍手喝采である。50年前の「花咲ける騎士道」には、こんな時代活劇の味わいがあった。

だがいまはもう単に色好みの王様では、お話にならない。なんと敵軍に通じているスパイを登場させるのだ。しかもルイ15世の側近。この男は、かなり早い段階から登場はしているのだが、ラストで一気に悪者ぶりを見せる。

このような物語に、女性は、どう登場するのか。これこそがリメイクいちばんの見どころである。

かつてのヒロイン＝ジーナ・ロロブリジダは、この映画で華やかな存在となった人で、当時としては思いきりセクシーな作りである。胸を強調した衣裳に、ドキッとした男の人もいたはず。でも感心するのは、この時代のヒロインにしては、弱者ではなく、強くあろうとするところで、この点が小気味よくもある。色好みの王様に拿捕されても、果敢に逃走を試みるところがよい。

リメイク版のペネロペ・クルスとなると、当然のこととして、もっと強い。もちろん時代が時代なので、胸を強調した衣裳なのだが、それでも総体にマニッシュな味わいで、男たちの群れに入っても、違和感がないところが、まさに現代の女優である。そしてグラマーなのかも知れないが、特にそれを強調しないのがいい。

映画の50年って、こんなふうに変わってきたのだということが、よく分かる映画であり、いつだって映画は、作られる時代が反映されるのだということが、確認できた映画でもあった。

FROM United Kingdom

㊷シンデレラの姉の毒は下妻で下毒(げどく)

中野香織

「シンデレラの姉Aが、ラッキーをつかんだシンデレラの姉Bをやっかむ」の法則、なかなかシブい発見でございますぜ、敦子師匠。言われてみれば、イラク人質事件被害者や拉致被害者家族会への理不尽なバッシングにも、この〈シンデレラの姉の論理〉が見え隠れしますね。「たまたま悲劇の主人公として脚光を浴びたからっていい気になるんじゃないよ」っていう。

とげとげしい時代です。カンヌの審査委員たちも世を覆うそんなムードを見抜き、〈姉〉のやっかみの対象になりようのないマイケル・ムーアのドキュメンタリーや14歳の柳楽優弥クンに大きな賞をあげることにしたんでは……と勘ぐりたくなります(なんて勘ぐりじたい、〈姉〉ですが)。

が、そんな空気をすかっと追い払ってくれるような映画に遭遇。敦子さんご推薦の「下妻物語」です。はじめに嶽本野ばらの原作を読んだらこれがもう痛快で、即、翌日映画館へ。ロリータファッションの観客は割引になるとかで会場はフリフリ娘ばっかり、場違いな思いをしましたが、いやあ、上映が始まると冒頭のロココ時代の解説から笑いすぎて涙、こんなにアナーキーで面白さ炸裂の映画は久しぶりで、帰ってもう一度原作を読み返してまた次の日映画館へ!

ヒロイン二人の装いを制服やモードなブランドものじゃなくて、異端で反時代的なロリータとヤンキーにしたっていうのも、そもそもポイント高いですね。異形のものに対しては観客の内なる〈シンデレラの姉〉は機能停止。無茶苦茶なロココ解釈にツッコミを入れるのもばからしく、手放しで拍手するしかないってもんです。

それでカンヌのレッドカーペットに話、飛ぶんですけど(すいません)、赤いドレスでキメた藤原紀香、どうして日本のメディアでもカンヌでもあまり評判にならなかったんでしょう? ビーズ刺繍アーティストの田川啓二の手になる梅柄ドレスを着こなした藤原紀香はもっと讃えられるべきと思いましたが、なんでもカンヌでは紀香の写真より、勘違いドレスをまとって女優の卵かと揶揄されたいつぞやの中村江里子の写真のほうが(いまだに)売れてるんですってね。ひょっとしてここにも、〈シンデレラの姉〉の論理が働いていない? 異形のドレスで現れた元アナウンサーは場違いすぎて笑えるから許すけど、たかが声の出演なのに優等生的ドレスで国際派女優気取るんじゃないよっていうやっかみ。紀香姐さんにはいつの日か「ワレら、イチビっとったらイテまうぞコラ」と下妻の桃子ばりにシンデレラの姉を蹴散らしてほしいものでございます。

ドーバー越えて

往復連載

齋藤敦子 中野香織

「下妻物語」
シャンテ・シネ、シネクイント
ほかにて上映中

服飾史家である中野香織さんと、映画評論家で字幕翻訳家の齋藤敦子さんの往復書簡的コラム。ファッション誌の映画コラムニストとフランス映画社宣伝部員として出会った中野さんと齋藤さんは、以来十数年、友情を育む。この連載では、イギリス文化とフランス映画という専門分野をベースに映画談義が交わされる。

オブジェ制作=井上陽子

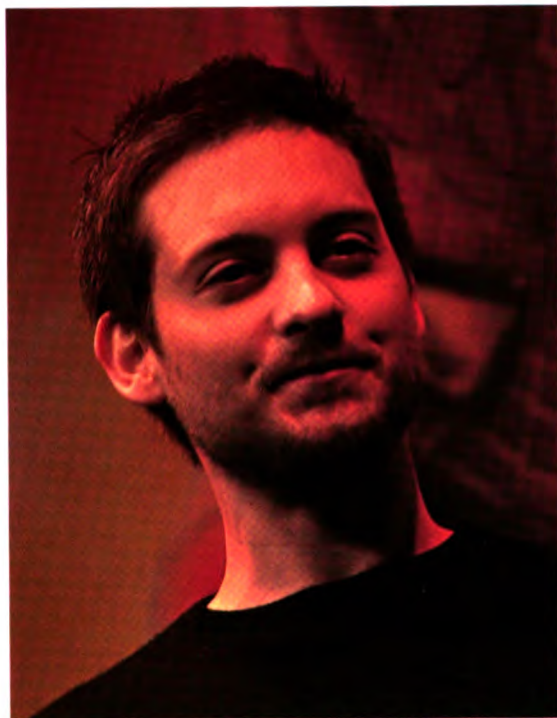
HOT SHOTS

来日会見

取材・文＝永野寿彦　撮影＝前田昭二（トビー）、吉岡誠（キルスティン）

トビー・マグワイア&キルスティン・ダンスト

「スパイダーマン2」ではふたりの恋のゆくえに新展開が！

KIRSTEN DUNST／1982年、米ニュージャージー州生まれ。「ニューヨーク・ストーリー」(89)で映画デビューを果たす。主な出演作は「インタビュー・ウィズ・ヴァンパイア」(94)、「ジュマンジ」(95)、「ヴァージン・スーサイズ」(99)、「チアーズ！」(00)など。

TOBEY MAGUIRE／1975年、米カリフォルニア州サンタモニカ生まれ。93年の「ボーイズ・ライフ」で注目を集め、以後「アイス・ストーム」(97)、「サイダーハウス・ルール」(99)、「ワンダー・ボーイズ」(00)、「シービスケット」(03)などの話題作に出演する。

「スパイダーマン2」
●監督／サム・ライミ　共演／アルフレッド・モリーナ、ジェームズ・フランコ、ローズマリー・ハリス
●7月10日より日劇1ほか全国東宝洋画系にて

映像が少しずつ公開される度に期待感が高まり、夏映画の話題を独り占めしそうな予感の「スパイダーマン2」。その主演俳優たちがまたまた新たなレアな映像を引っ提げて連続で日本上陸。5月18日にヒーロー、ピーター役のトビー・マグワイアと、前作に引き続き親友ハリーを演じるジェームズ・フランコが、6月1日にはヒロイン、MJ役のキルスティン・ダンストが来日、記者会見が行われた。

初来日だったジェームズが体調不良のために会見を欠席するというアクシデントもあったが、取材陣に初公開された映像はそれを補って余りある素晴らしい出来。サム・ライミ監督らしい演出テクニックが駆使された手術室での悪役ドックオクの大暴れシーン、そしてまたまた銀行強盗シーンから摩天楼での高所バトルへと移行していくドラマチックなアクションと、前作以上の見せ場の連続に場内からも拍手が起こった。トビーも「最初から最後まですべてが見どころ」と自信満々。

「基本的な設定は前作で作られているので、今回は関係性を分かった上で、ストーリーや方向性に合わせた演技をするのがやりがいがありました」とトビー。ピーターとの報われない恋に悩むMJを演じるキルスティンもキャラクターの成長がポイントだと語る。「ピーターのことを待つのは苦しい。だから今回、彼女は自分から決断するんです」

どんな決断を下すのかは、観てのお楽しみ。前作以上にロマンチックなキス・シーンもあるそうだ。

取材・文＝竹之内円　撮影＝安井敏雄

こにし・まなみ／1978年生まれ。鹿児島県出身。98年につかこうへいの舞台『寝盗られ宗介』で女優デビュー。「阿弥陀堂だより」「うつつ」「クロエ」などの02年出演映画により、キネマ旬報ベスト・テン新人女優賞など多数の賞を獲得。主な出演作に、映画「blue」「踊る大捜査線THE MOVIE 2」(03)、テレビドラマ『ちゅらさん』(01)『天体観測』(02)『僕だけのマドンナ』(03)『オレンジ・デイズ』(04)、舞台『蒲田行進曲』(99)『透明人間の蒸気』(02) など。(公式ＨＰ)http://www.konishimanami.net/

小西真奈美

声優初挑戦「スチームボーイ」で魅せる新たな魅力

「ＡＫＩＲＡ」の大友克洋監督9年ぶりの作品として話題の「スチームボーイ」。多くの有名俳優が声優として参加しているが、そのなかで声優初挑戦ながら絶賛されているのが小西真奈美だ。

「お話をいただいたのは『阿弥陀堂だより』(02)が公開された頃なので約2年前になります。声優はやったことがなく、やる機会もないと思っていたので最初は驚いたんですけど、自分にとって新しいことだからやってみたいと思ったんです」

小西真奈美が演じたのはヒロインで財閥のわがままお嬢さまスカーレット、14歳。音響監督の百瀬慶一氏によると、実はスカーレットの声によって、ほかのキャラクターの声質が決まるというほど重要なキャスティングだったという。重要な役だけに不安も多かったとか。

「これはまずいと思って、アニメや吹替えの洋画を見まくりましたし(笑)、下手でもやれるだけのことはやっておこうと録音の2カ月前から自宅で毎日練習したんですよ。監督は自由にやらせてくださったんですが、不安だったのはやはり14歳ということですね(笑)。子供だけど大人びた生意気なところもあるし、どうしようと思ったんです。そこで年齢は考えずに画から受けた印象で、どんな声で話したら面白くみえるのかを考えて、体当たりで演じてみたんです」

「スチームボーイ」のアフレコは通常のアニメとは違い、ひとりずつ個別に録音されている。

「映画やドラマと違って相手もセットもないブースで録ったんですが、声優は初めてだったので〝そういうものなんだ〟って疑問を持たずにやれました(笑)。ただ相手がいないので、ちゃんとセリフが伝わっているのか不安はありました。それに、セリフは動ける範囲内で動いたりして、自分ではいつもより大げさに演じたつもりなのに〝もっと大きくやってください〟と言われて。それも不安だったんですが、完成した映画を観ると、ぴったりなので驚きましたね」

小西真奈美というとつかこうへい劇団でデビューし、映画やドラマではナチュラルな演技が印象的な実力派の女優だ。だが最近はTVバラエティでコントも演じて新境地を見せており、今回の声優としての演技にも役立ったという。

「やはり経験してきたことは活かされていると思います。演技に迷ったときもいろいろやってみて、選んでもらったりしました。スカーレットは後半になると〝きゃあ〟というセリフが多いんですね。でもただの〝きゃあ〟では間が抜けているので、いろいろ変えてやってみたんですが、そのうちバリエーションがなくなってしまって(笑)、穴に落ちるときの叫び声は横に離れたり、自分で小さくなりながら後ろに下がってみたりもしました(笑)」

試行錯誤と努力で演じたスカーレット役だが、見事なアニメ声で役に完全にハマっている。まもなく公開される主演作「恋愛小説」でも、これまでにない奔放な女性を演じていて、この2作で新境地を開いた小西真奈美。才能ある女優に、また魅力が増えた。

「まったく初めてのことだったので、新しい自分の声や表現方法、新しい世界を毎回見せられているようでした。難しくて大変でしたけれど、この経験も蓄積されていくんだなと思います」H

「スチームボーイ」
●原案・脚本・監督／大友克洋　声の出演／鈴木杏、小西真奈美、中村嘉葎雄、津嘉山正種　●7月17日より日比谷映画ほか全国東宝洋画系にて

「[illegible]」
●監督／森淳一　原作／金城一紀　出演／玉木宏、小西真奈美、池内博之、平山あや　●渋谷シネ・ラ・セットにて公開中

取材・文＝浦川とめ　撮影＝吉岡誠

ジャッキー・チェン

生誕50年、日本公開50作目のメモリアル「メダリオン」

「メダリオン」
●監督／ゴードン・チャン　共演／クレア・フォラーニ、リー・エヴァンス、ジョン・リス＝デイヴィス、ジュリアン・サンズ
●ニュー東宝シネマほか全国東宝洋画系にて上映中

「アラウンド・ザ・ワールド・イン・80デイズ」
●監督／フランク・コラチ　共演／スティーブ・クーガン、セシル・ド・フランス、ジム・ブロードベント
●11月6日より渋谷東急ほか全国松竹・東急系にて

成龍(ジャッキー・チェン)が「メダリオン」の宣伝のため公式来日した。この映画、従来一貫して不死身のヒーローを演じてきたジャッキーが劇中で早々と死んでしまう点がまず新しい。

「今までは会社が僕を映画で死なせなかった。今回、どんな反応が出るか見てみたいんだ。常に変化していきたい、その思いで長年ここまで映画に携わってきた」

クレア・フォラーニとのキスシーンも、香港映画のジャッキーではあまり見ることのなかった熱熱ムード。「緊張して、撮影前は一生懸命に歯を磨いた(笑)。クレアはリハーサルからして僕を引き寄せて思いきりキス！　彼女は全然平気なんだけど、僕は慣れてなくて。結局NGを6回出した(笑)」

世界のトップスターとして大きな影響力を持つジャッキーにとって、映画と並んで重要なライフワークが慈善活動だ。

「もし『メダリオン』の主人公のようにスーパーパワーが僕にあったら、まずカンボジアの地雷を全部撤去し、世界のあちこちへ飛んで戦争をなくしたり、水のない所に水を運んだりしたい。本当にスーパーマンになりたい心境なんだ。今、地雷撲滅をテーマとする映画を企画している。実現できれば来年撮影すると思う」

満50歳。「早く定年退職したい」と冗談をとばしたりもするが、新作が続々と待機中だ。7月にはアドヴェンチャー大作「アラウンド・ザ・ワールド・イン・80デイズ」が日本公開。息子の房祖名(ジェイシー・チャン)が俳優デビューを飾り、ジャッキーもゲスト出演する「千機変2」は今夏に香港公開予定。「新警察故事」はすでに撮り終え、会見の翌日には香港で「伝説」(仮題)の撮影に入った。文字どおり世界を駆け巡り活躍するジャッキーに、休むという言葉はきっと今後も無縁であるにちがいない。KJ

JACKIE CHAN／1954年、香港生まれ。「ドランク・モンキー酔拳」(79)で日本に初御目見えして以来、本作「メダリオン」で公開作品が50作を数える。主な出演作は「プロジェクトA」(84)、「ポリス・ストーリー　香港国際警察」(85)、「ラッシュアワー」(99)、「シャンハイ・ヌーン」(00)など。

取材・文＝佐藤友紀　撮影＝若山和子

ペネロペ・クルス

私を励ましてくれるサプリメント！「花咲ける騎士道」でお転婆なアドリーヌを演じて

パリ郊外のスタジオで、「花咲ける騎士道」を撮影中のペネロペ・クルスを取材した時のこと。自分のトレーラーに招き入れるも「ちょっと臭いわよ(笑)」。一歩踏み入れた途端、本当に猫ションの匂い。「ファンファンとチューリップという名前なの」という2匹の仔猫と戯れるペネロペのあどけない姿には、こりゃあ男性にモテるの当然だな、と大納得させられた。

「あら、でも私、ヨーロッパに戻った時は特に、男の理想像というより、自分自身が友人になりたいような女性を選んで出演しているつもりよ。『花咲ける騎士道』のアドリーヌだって、別にファンファンに守ってもらわなくともサヴァイヴァルしていけそうだし(笑)。もうひとつの新作“Don't Move”(04)のヒロインなんて悲惨な人生をおくっているのに、心の中の気高い部分を失なっていない。どちらも、演じている私の方が、彼女たちに励まされてるのよ。もっともヴァンサン（・ペレーズ）がほとんど自分でアクションをこなすのを見ているうちに、私ももっと暴れたくなってしまった(笑)。衣裳にも、せっかくパンツ・ルックがあるんだし、私もかなりやれるんじゃないかしら、と何だか自信を持ってしまっているのよ。それもあって、今度、親友のサルマ・ハエックと2人で、西部劇を作るの。製作はリュック（・ベッソン）が手がけてくれるから、『花咲ける騎士道』で一応彼に恩を売っておいた甲斐はあったかも(笑)。そうじゃなくともこうした明るさ一辺倒の作品も、女優を続けていく上では大いなるリフレッシュになるもの。そう、サプリメントよ(笑)」

「花咲ける騎士道」
監督／ジェラール・クラヴジック　出演／ヴァンサン・ペレーズ、ペネロペ・クルス、ディディエ・ブルドン、エレーヌ・ド・フジュロル　浮気な騎士ファンファンに恋のお告げ。胸ときめかせる運命の恋のお相手とは!?　ジェラール・フィリップ主演の同名映画をリュック・ベッソンがリメイク。

PENÉLOPE CRUZ ／ 1974年スペイン生まれ。「ベルエポック」(92) でスペインの若手女優トップに。主な作品は「オール・アバウト・マイ・マザー」(99)「バニラ・スカイ」(01) など。

取材・文＝内山磨魅　撮影＝吉岡誠

吉沢悠

「Believer　ビリーバー」で詐欺師役に挑戦

「Believer　ビリーバー」

●監督／多胡由章　共演／伊藤歩、瑛太、相沢紗世
●渋谷シネ・ラ・セットにて公開中

「今まで僕を好きでいてくれた人は離れていっちゃうかもしれないけど、これも僕の一面だと思って観てくれたら嬉しい」

これまで映画「星に願いを。」やドラマ『エースをねらえ！』などでさわやかな好青年を演じてきた吉沢悠が、新作「Believer ビリーバー」で詐欺師を演じ初の悪役に挑戦した。

「英治はスプーン曲げの超能力少年としてもてはやされ、たった一度の失敗でインチキ呼ばわりされた心に傷を持つ男。僕も女の人に騙された経験があるから感情移入しやすかった(笑)。詐欺やアクションのシーンでは『パイレーツ・オブ・カリビアン』のジャックをイメージしてちょっとハジケた芝居をしました。監督も若いからノリがよくって、当日台本を付け足したり、ドラマ的なアプローチをしたり、撮影もフレキシブル。衣裳や小物には僕の私物も使っています。ロケで渋谷ロフトを普通に歩いたのは気持ちよかった！　女子高生が気付いて『アレ？』って……」

監督は『木更津キャッツアイ』などのメイキング映像やTVドラマ『東京ぬけ道ガール』を手掛けた多胡由章。ゲリラ的な撮影で渋谷の現在を切り取った。そして物語は不思議な少女カオル（伊藤歩）の登場により、思いもよらぬ結末を迎える。

「英治はアレでよかったんだと思います。カオルと出会ったことでダサイ自分に気付いて、スプーンを曲げていた頃の自分に戻れたから。実はキスシーンが3つあったのに1つカットされちゃったんです。理由は僕がエロい顔してたから(笑)」

そう冗談を言う素顔は17歳からやっているという趣味のサーフィンで日焼けし、かなりやんちゃで男っぽい。

「今後は『トロイ』や『海猿』みたいな“男くさい”役をやりたい。いろんな面を出していけたらと思っています」

よしざわ・ゆう／1978年生まれ。TV、映画、舞台で活躍中。映画は2003年の「星に願いを。」でデビュー、本作が2作目となる。TVドラマは「エースをねらえ！」「動物のお医者さん」(主演)など。オフィシャル・ファンクラブ“Smile” TEL：03-5363-7577　http://www.smile-smile.jp

取材協力：アマポーラ恵比寿店

Interview

取材・文＝はせがわいずみ

ミーナ・スヴァーリ

「スパン」の汚れ役で演技派開眼

麻薬中毒者＝ジャンキーのイメージは、顔色がまだらで目の周りが赤く、感情の波が激しいうえに、言動が変で目が行っちゃってる人。「スパン」のミーナ・スヴァーリは、上述したジャンキーのイメージをソックリそのままリアルに体現した。しかも、コメディアンとしても有名な共演のジョン・レグイザモに引けを取らない迫力と笑いのセンスで場面をさらっている。

「ジョンからものすごく影響を受けたわ。彼が相手だからこそ口論のシーンもあんなにテンションが高くなった。それに、どうやって笑いのタイミングを取るかもとても勉強になったわ」とミーナはジョンについて語る。そして監督へは尊敬の眼差しでこうコメントした。

「出演することにしたのは、自分にチャレンジできる役というのもあったけど、ジョナス・アカーランドと仕事をしてみたかったのが大きな理由なの。彼のこれまでの作品に感銘を受けてたんだけど、今回、一緒に仕事をして本当にスゴイ監督！と思ったの。ものすごく準備をして、いろんな情報を提供するんだけど、撮影では俳優に自由を与えてくれるの。だから、今までで一番楽しい仕事になった。セットに行くのが毎日とても待ち遠しかったわ」

女優になってすぐは、「脚本を読んで理解するのが精一杯だった」と言うミーナ。すぐに俳優の仕事に魅了されたそうだ。

「最初は何をやっているのかよく分からなかった。でもすぐに、ものすごく楽しいと同時にやりがいのある仕事だと思ったの。そして、同じような役ばかりを演じるのは嫌だと思った。いろんなことに挑戦したいの」

挑戦好きと聞いて彼女の近作に納得した。売春婦を演じた「ソニー」。そして、ジャンキー役の本作「スパン」。この後には、心理サスペンスの"Trauma"そしてコメディの"Beauty Shop"が控えている。

「俳優の仕事はアートだから、アートを作っていると感じるインディペンデント系の作品の方が私は好き」と言う彼女は、今回の汚れ役を選んだことで、「美人」女優ではなく「演技派」女優として歩む覚悟が十分だと分かった。

「スパン」
●監督／ジョナス・アカーランド　共演／ジェイソン・シュワルツマン、ミッキー・ローク、ブリタニー・マーフィ、ジョン・レグイザモ
●シブヤ・シネマ・ソサエティにて公開中

MINA SUVARI／1979年、米・ロードアイランド州生まれ。1997年「ノーウェア」で映画デビュー。「アメリカン・ビューティ」(99)で一躍注目を集めるようになる。主な出演作は、「アメリカン・パイ」(99)「恋は負けない」(00)「アメリカン・サマー・ストーリー」(01)「ソニー」(02)。

取材・文＝竹之内円　撮影＝吉岡誠

ソフィア・マイルズ

「サンダーバード」でレディ・ペネロープを演じる

「サンダーバード」

●監督／ジョナサン・フレイクス　共演／ビル・パクストン、ベン・キングズレー、ブラディ・コルベット
●8月7日より日劇3ほか全国東宝洋画系にて

SOPHIA MYLES／1980年、英ロンドン生まれ。主な出演作は「フロム・ヘル」(01)、「アンダーワールド」(03)など。

●数千万円かけて空輸されたペネロープ号。実際に撮影で使用されたもので実動も可能。なお、実写化された本作ではロールス・ロイスからフォード社製に替わっている。

65年の初放送以来、未だに高い人気を誇る『サンダーバード』が新解釈で21世紀に甦った。黒柳徹子の吹き替えでお馴染みのレディ・ペネロープも若く魅力的になって登場する。演じるのは「アンダーワールド」で女ヴァンパイアに扮した23歳のソフィア・マイルズ。

「オリジナルの『サンダーバード』は普遍的な作品ね。SFでアクションでコメディでもあるし、とてもジャンル分けできないほど多彩な作品だと思うわ。誰でも楽しめるファミリー・アドヴェンチャーね。今回の『サンダーバード』はオリジナルを尊重しながら、21世紀風の味付けをしたの。私が着る衣裳は60年代のタッチを残しているし、身のこなしも貴族らしいエレガントさを意識したわ」

21世紀のサンダーバードはメカもリニューアルされたが、ロールス・ロイスからフォードに替わったペネロープ号＝FAB1は空まで飛んでしまう。それればかりかペネロープはキック・ボクシングで戦ってしまうのだ！

「ペネロープは戦うときもエレガントなの。どんなに暴れても髪ひとつ乱れないし、汗もかかない完璧な女性なの(笑)。そのために2週間トレーニングしたけれど、実はスタントがふたりいて、ひとりはキック・ボクサーでもうひとりは体操の選手。だからカッコいいアクションをしてるシーンは実は私ではないの(笑)。もっとジムに通っておけばよかったわ」

本作で確実にブレイクするであろうソフィア。次に出会うときはどんなソフィアになっているだろう。

「ペネロープを演じていたら、もっとコメディをやってみたいと思ったの。ロマンチック・コメディに出てみたいわ。それから今度こそアクションもやってみたいわ(笑)」

HOT SHOTS Interview

取材・文＝竹之内円　撮影＝吉岡誠

ジェイク・ギレンホール&エミー・ロッサム

「デイ・アフター・トゥモロー」で大自然の猛威と闘う

「監督が決してスターではない僕をキャスティングしてくれたのは、この映画では演技力が必要だったからだと思うよ。でもいつもの変な役と違って普通の少年を演じるのは難しかったな(笑)」

これまでインディペンデント映画で印象的な演技を披露してきたジェイク・ギレンホールは、初めての超大作「デイ・アフター・トゥモロー」に出演したことについてそう語った。しかし映画に対するスタンスはいつもと変わらない。

「キャラクターを演じる上で、自分の言葉ではないセリフは変えてもらったんだ。やはり仕事をすることは、ある種の戦いだと思っているからね」

ジェイクは何よりこの映画の持つ〝地球環境問題〟というテーマに惹かれたと語る。

「バカな役者としてはこの映画で地球環境についていろいろ学んだよ(笑)。実は〝フューチャーフォレスト〟という自分の吐き出した二酸化炭素を酸素に変えてくれる木を育てるという運動に参加しているんだ。身近なところでは無駄な電気は使わないとか、気をつけるようになったよ」

ジェイクの恋人を演じたエミー・ロッサムもやはりこの映画がきっかけで地球環境について考えるようになったという。

「学校でももちろん習ったけれど、真剣に受け止めていませんでした。この映画に参加したことで環境について考えるようになり、リサイクルしたり自動車に乗らずに歩くようになりました。この映画の素晴らしいところは娯楽映画でありながら、地球環境について話し合いたくなることだと思います」

劇中でジェイクたちは、図書館に逃げ込み、蔵書を燃やして暖を取り生き延びるが、エミーは実際にそうなったとき、真っ先に燃やしたい本があるとか!?

「それは歴史の教科書よ!」 KJ

JAKE GYLLENHAAL／1980年、米ロサンゼルス生まれ。主な出演作は「シティ・スリッカーズ」(91)、「遠い空の向こうに」(99)、「ドニー・ダーコ」(01)、「ムーンライト・マイル」「グッド・ガール」(02) など。

EMMY ROSSUM／1986年、米ニューヨーク生まれ。「SONG CATCHER」(00) で映画デビューを果たす。また「ミスティック・リバー」(03) では惨殺されるショーン・ペンの娘を演じて好評を博す。次回作は「オペラ座の怪人」

「デイ・アフター・トゥモロー」
●監督／ローランド・エメリッヒ
共演／デニス・クエイド、イアン・ホルム、セラ・ウォード
●日劇1ほか全国東宝洋画系にて上映中
※6月下旬号にて作品特集あり

©Carlo Allegri　Getty Images／AFLO FOTO AGENCY

んで……
ッド！

●荻原順子

©Carlo Allegri／Getty Images／AFLO FOTO AGENCY

ふくふくジーナ　産んだあと戻ったのかと心配。ヘレン・ハントはなんかかっこいい妊婦さん。グウィネスはベビーカーを押してなお薄幸そう　女の一生いろいろ

©Giulio Marcocchi／Getty Images／AFLO FOTO AGENCY
©Getty Images／AFLO FOTO AGENCY

祝御誕生　in Hollywood

風薫る５月は良い季節だからというわけでもないのだろうが、ハリウッドの女優３人にめでたくベビーが誕生した。まず、2002年４月に46歳で第１子、アリゼーちゃんを出産したジーナ・デイヴィスが、５月６日、ロサンゼルスで双子の男の子、キアン君とカイス君を無事、出産した。48歳にて双子を出産するなんて元気としか言いようがないが、夫君で神経外科医のレザ・ジャラヒー氏は15歳年下なので、デイヴィスは気持ち的にも肉体的にもまだ30代なのかも……？　ヘレン・ハントも、41歳直前に、５月13日、ロサンゼルスで、長女マケーナレイちゃんを出産。予定日より３週間早かったので、体重は2,725ｇと小柄だが、元気で健康な女の子だそうだ。父親は、2001年から交際してきた脚本家でプロデューサーのマシュー・カーナハン。ハントと１日違いの５月14日、やはり女の子を出産したのは、去年の12月に、イギリス人ミュージシャン、クリス・マーティンとできちゃった結婚をしたグウィネス・パルトロウ。イギリスで出産したマドンナに“イギリスの病院は止めた方が良い”とアドバイスされたパルトロウだったが、結局、５月14日、ロンドンの病院で、アップルちゃん（本名です）を出産した。三人三様のハリウッド・ママたちだが、まずはおめでとうございます。

映画史上最高の死のシーンは……？

たしかにこの写真を見るだけで、あのなが～い悲鳴が思いだされます。

イギリスの映画雑誌トータル・フィルムが、映画史上最高の死のシーンへの投票を募った結果、1960年製作の「サイコ」が第1位に選ばれた。同誌のエディターは、〝モンタージュと観客の操作では最上級の作品。あの血がチョコレート・シロップで、刺す効果音はメロンをメッタ刺しにすることによって作り出されたという事実を知っていても、あのシーンの恐怖のインパクトは損なわれない〟とコメントしているが、実際、「サイコ」は白黒作品であるにもかかわらず、観客の多くが、渦巻きながら排水口に流れていく赤い血を憶えていると断言するそうだ。また、このシーンを7日間かけて撮影した〝犠牲者役〟のジャネット・リーですら、完成作を観た後はシャワーを浴びる気にはなれなかったと回想しており、このシーンの持つ影響力の大きさがうかがえる。ちなみに、映画史上最高の死のシーン、ベスト5の2位以下は、次の通り――「博士の異常な愛情」のキング・コング少佐ことスリム・ピケンズの原爆にまたがったカミカゼ的死にざま、1933年版「キング・コング」の主役キング・コングの死、「ダイ・ハード」でのアラン・リックマン演ずるテロリストの首領、ハンス・グルーバーの墜落死、そして、「俺たちに明日はない」のボニーとクライドの銃撃死、という結果になっている。

HOT SHOTS

食べて飲んで産んで死
活気いっぱいハリウッ

©Giulio Marcocchi／Getty Images／AFLO FOTO AGENCY

やったるでぇ！　どてらいスタローン

〝ランボー・ブランド〟サプリ新発売

シルヴェスター・スタローンが、アメリカの大手健康食品メーカーGNCと組んで、〝エネルギーとフィットネスのレベルを上げる〟新しい栄養サプリメント、インストーン・シリーズの開発・販売に乗り出した。スタローンが、サプリの開発を思い立ったのは、「コップランド」出演のため増やした体重がなかなか元に戻らずに苦労していた際、栄養サプリが効果的だということに気づいたからだとか。自分の30年以上にわたる身体作りの経験を活かしていきたいと語るスタローンは、ニューヨークのプラネット・ハリウッドで行なわれた発売記念パーティで、インストーン・サプリ・ラインの1つ、インテイク・ゴー・プディングを食べながら、〝若返った気分〟などとスピーチして、宣伝に努めたそうだ。

シュレック・フレーバーはいかが？

「シュレック」が2001年に全米公開された際、ドリームワークスとタイアップして、登場人物たちをテーマにしたフレーバーのアイスクリームを売り出したバスキンーロビンス(日本ではサーティワンとしておなじみ)が、「シュレック2」の公開にちなんで、またまた“シュレック・フレーバー”のアイスクリームを販売している。登場人物たちの名前がそれぞれ付けられているフレーバーを御紹介すると、主役のシュレックは、グレープ／アップル味のシャーベットと、“シュレックのホット・スラッジ(泥)”と名づけられたホット・ファッジ・サンデー（温めたチョコレートがかけられたサンデー）と2つのフレーバーがある。“フィオナのおとぎ話”と名づけられたフレーバーは綿あめフレーバーのピンク＆紫のアイスクリーム、ドンキー・ゴーン・バナナ(大騒ぎドンキーの意)・サンデーはプラリネ・トッピングとホイップ・クリームが載ってチョコレートがまぶしてあるバナナ・サンデー、そして新しく仲間入りした、アントニオ・バンデラス吹き替えの長靴をはいた猫は、ホワイト・チョコレート・ムース、ミルク・チョコレート、チョコレート・チップ、チョコレート味のプレッツェルが入っている、これでもかというぐらいのチョコレート風味のアイスクリーム。“シュレック・フレーバー”のアイスクリームたち、日本でも発売されたら、是非、お試しください。

New Cinema Rush

ニュー・シネマ・ラッシュ
新作紹介
6・7月

ワイルド・レンジ／最後の銃撃
OPEN RANGE

ケヴィン・コスナーが製作・監督・主演を兼ねて贈る入魂の西部劇大作。リアルな銃撃戦が絶賛され、全米では興収60億円を超えるヒットを記録した。牛を放牧して旅を続けるカウボーイたちの前に悪徳牧場主が立ちふさがる。仲間を殺された彼らは、正義と名誉を取り戻すべく挑戦状を叩き付けるのだった。

DATA ●監督・出演／ケヴィン・コスナー 出演／ロバート・デュヴァル、アネット・ベニング、マイケル・ガンボン、マイケル・ジェッター 配給／日本ヘラルド ●7月3日よりK's cinema、銀座シネパトスにて（2003年・米・140分）
http://www.herald.co.jp/official/wild_range/index.shtml

セイブ・ザ・ワールド
THE IN-LAWS

79年の「あきれたあきれた大作戦」をモチーフにマイケル・ダグラスとアルバート・ブルックスのベテラン・コンビがタッグを組んだ、抱腹絶倒アクション・コメディ。ＣＩＡ捜査官スティーヴは息子の結婚式を控えていたが、国際的な武器密輸組織の潜入捜査中に嫁の父ジェリーを巻き込んでしまう。

DATA ●監督／アンドリュー・フレミング 出演／マイケル・ダグラス、アルバート・ブルックス、ロビン・タニー 配給／ギャガ＝ヒューマックス ●6月26日より有楽町スバル座にて（2003年・米・95分）
http://www.savetheworld-movie.com/

イザベル・アジャーニの惑い
ADOLPHE DE BENJAMIN CONSTANT

永遠の美人女優イザベル・アジャーニが、19世紀の文豪コンスタンの小説「アドルフ」のヒロインを熱演。名匠ブノワ・ジャコの繊細な演出も見応えあり。22歳の青年アドルフは10歳年上の婦人エレノールを誘惑する。しかし全てを投げうち恋に走った彼女の激情は、やがて彼の心に愛よりも哀れみを芽生えさせる。

DATA ●監督／ブノワ・ジャコ 出演／イザベル・アジャーニ、スタニスラス・メラール、ジャン・ヤンヌ、ロマン・デュリス 配給／ザナドゥー、エレファント・ピクチャー ●7月3日よりシネスイッチ銀座にて（2002年・仏・102分）
http://www.elephant-picture.jp/madoi/

花咲ける騎士道
FANFAN LA TULIPE

かつてジェラール・フィリップが主演した名作を、完全リメイク。ペネロペ・クルスとヴァンサン・ペレーズを主演に、華麗なラヴ・アドヴェンチャーが展開する。18世紀、プレイボーイ、ファンファンは、募兵官の娘アドリーヌの差し金で入隊するハメに。そこでは思わぬ恋の始まりが彼を待っていた。

DATA ●監督／ジェラール・クラヴジック　出演／ヴァンサン・ペレーズ、ペネロペ・クルス、エレーヌ・ド・フジュロル、ディディエ・ブルドン　配給／アスミック・エース　●6月26日よりスカラ座2にて（2003年・仏・99分）
http://hanasake.com/

いつか、きっと
LA VIE PROMISE

演技派女優イザベル・ユペールがトラウマを乗り越えていく女性をリアルに演じる。監督は「クリムゾン・リバー2　黙示録の天使たち」のオリヴィエ・ダアン。娼婦シルヴィアは14歳の娘が誤って男を刺したことから、2人で逃避行に出る。やがて謎の中年男ジョシュアが加わり奇妙な三角関係が生まれる。

DATA ●監督／オリヴィエ・ダアン　出演／イザベル・ユペール、パスカル・グレゴリー、モード・フォルジェ、アンドレ・マルコン　配給／ギャガ、アニープラネット　●7月3日より新宿武蔵野館にて（2002年・仏・93分）
http://www.gaga.ne.jp/ituka/

新・O嬢の物語
STORY OF O：UNTOLD PLEASURES

フランス文芸エロスのヒロイン“O嬢”が、21世紀のロサンゼルスに蘇る。モデル出身のダニエル・シアーディが大人の色気でヒロインを熱演。下積み中の女性カメラマン“O”は、スティーヴン卿の援助を受ける代わりに彼の愛玩具となる。そんな折、純粋なナタリーに出会い衝撃を受けるのだった。

DATA ●監督／フィル・レイルネス　出演／ダニエル・シアーディ、ニール・ディクソン、マックス・パリッシュ、ミッシェル・ルーベン　配給／マクザム　●6月26日より銀座シネパトスにて（2003年・米・102分）
http://www.maxam.jp/news/9/ozyou.html

LIVE FOREVER
LIVE FOREVER

社会全体がセンセーショナルな変化を迎えようとしていた1990年代、イギリス。そんな中、ブリティッシュ・カルチャーを牽引してきたブリットポップの知られざる裏側に鋭く迫ったドキュメンタリー。オアシス、ブラー、パルプ、マッシヴ・アタックなど人気バンドの貴重なインタヴューも満載だ。

DATA ●監督／ジョン・ダウアー　出演／ノエル・ギャラガー、リアム・ギャラガー、デーモン・アルバーン、ジャーヴィス・コッカー　配給／ワイズポリシー　●7月3日よりシネマライズにてレイト（2002年・英・82分）

ブラザーフッド

태극기 휘날리며　**TAEGUKGI**

500万人の命が失われた朝鮮戦争。この真っただ中に立たされた一組の兄弟に焦点を当てた究極のヒューマンドラマ。「シュリ」の名匠カン・ジェギュが、韓国の若手スターを主演にスペクタクルに描く。訓練を受ける余裕すらなく実戦に投入された若き兄弟は、戦渦で思わぬ運命に巻き込まれていく。

DATA　●監督／カン・ジェギュ　出演／チャン・ドンゴン、ウォンビン、イ・ウンジュ、コン・ヒョンジン、チェ・ミンシク　配給／UIP　●6月26日より日比谷スカラ座1ほか全国東宝洋画系にて（2004年・韓・148分）
http://www.brotherhood-movie.jp/

子猫をお願い

고양이를 부탁해　**TAKE CARE OF MY CAT**

韓国の新進女性監督チョン・ジェウンが、若い女性たちの恋と友情をみずみずしく描いた群像劇。「ほえる犬は噛まない」の人気女優ペ・トゥナの素朴な愛らしさが映える。女子商業高校を卒業して1年。5人の娘たちはおのおのの生活を送り、最近ちょっと疎遠。そんな彼女たちの不器用な青春が綴られる。

DATA　●監督／チョン・ジェウン　出演／ペ・ドゥナ、イ・ヨウォン、オク・ジヨン、イ・ウンシル、イ・ウンジュ　配給／ポニーキャニオン、オフィス・エイト　●6月26日よりユーロスペースにて（2001年・韓・112分）
http://www.koneko-onegai.jp/

友引忌／ともびき

가위　**NIGHTMARE**

「ボイス」の監督アン・ビョンギと主演女優ハ・ジウォンが、それに先立ちコンビを組み一躍注目を集めた衝撃ホラー。大学時代の仲間ソネがヘジンの元に2年ぶりに訪れる。顔面蒼白の彼女はかつて自殺をした友人に付きまとわれていると告白。やがて、かつての仲間たちが次々と変死していく。

DATA　●監督／アン・ビョンギ　出演／ハ・ジウォン、ユ・ジテ、キム・ギュリ、チェ・ジョンユン、ユ・ジュンサン、チョン・ジュン　配給／松竹　●7月3日よりシネマミラノにて（2000年・韓・97分）
http://www.tomobiki.jp/

午後の五時

AT FIVE IN THE AFTERNOON

イランの尖鋭サミラ・マフマルバフが、アフガニスタン女性との出会いを機に生み出した女性映画の秀作。広くアジアの女性が共感しうるメッセージを詩的な映像を通して投げかける。タリバン政権崩壊後のアフガニスタン。大統領になりたいと願う女性ノクレは、詩人の青年の励まして意思を固める。

DATA　●監督／サミラ・マフマルバフ　出演／アゲレ・レザイ、アブドルガニ・ヨセフラジー、マルズィエ・アミリ、ラジ・モヘビ　配給／東京テアトル　●7月3日より銀座テアトルシネマにて（2003年・イラン＝仏・105分）

恋愛小説

「GO」で直木賞を受賞した金城一紀の原作を、玉木宏、小西真奈美ほか、人気若手スターたちを配して映画化。監督は「Laundry ランドリー」の森淳一。法学部に通う大学4年生の宏行は、友人の聡史から遺言書作りを依頼される。そして、彼は過去のかけがえのない恋愛の記憶を語るのだった。

DATA ●監督／森淳一 原作／金城一紀 脚本／坂東賢治 撮影／小宮山充 出演／玉木宏、小西真奈美、池内博之、平山あや 配給／WOWOW ●渋谷シネ・ラ・セットにて上映中（2004年・日・105分）
http://www.wowow.co.jp/ren-ai/

夢幻彷徨 MUGEN-SASURAI

日本映画美術界の巨匠、木村威夫が85歳にして初めて監督に挑んだ中編。台詞を一切廃し、映像と音楽・音響だけで構成する前衛スタイルを追求。空襲の最中に出会った若い男と女。戦後、男は自由を求めてさすらい、女は体を売って生計を立てていた。やがて2人は再会し、永遠の道行きへと向かう。

DATA ●監督・原案・美術思考／木村威夫 脚本／山田勇男 撮影／白尾一博 出演／銀座吟八、藤野羽衣子、秋桜子、飯島大介 配給／ワイズ出版 ●7月3日よりポレポレ東中野にて（2004年・日・35分）

愛なくして

自主映画と商業映画を行き来しつつ、京都を舞台に暗闇の情念を見つめ続けた映画作家・高林陽一が、16年ぶりにメガホンを取った最新作。既成の映画俳優、撮影システムを使わず制作。孤独な老人の死にまつわる多彩なエピソードの中から、人間の生命の尊厳や生と死の問題を炙りだしていく。

DATA ●監督・脚本／高林陽一 撮影／としおかたかお 出演／藤沢薫、木元としひろ、栗塚旭、浜崎慶吉、遠藤久仁子、竹橋団、遠藤博圭 配給／シネマトリックス、シネ・ヌーヴォ ●ポレポレ東中野にて上映中（2003年・日・82分）
http://www.cinematrix.jp/

難波金融伝 ミナミの帝王 スペシャルVer.50 金貸しの掟

借金を踏み倒そうとする者を地獄の果てまで追いかける高利貸し、萬田銀次郎。竹内力の当たり役"ミナミの帝王"の活躍を描くシリーズ50作目がついに登場。大阪ミナミ。返済に滞るホステスのマユミの情夫が属する杉浦会に借金の肩代わりを要求する銀次郎は、予想外のトラブルに巻き込まれる。

DATA ●監督／萩庭貞明 原作／天王寺大 脚本／友松直之 撮影／三好和宏 出演／竹内力、川島なお美、桐谷健太、天田益男 配給／ケイエスエス ●6月26日よりテアトル池袋にてレイト（2004年・日・110分）
http://www.kss-movie.com/minami50/index.html

舌～デッドリー・サイレンス

「マレヒト」「L'Ilya～イリヤ～」など、独自の世界設定の中にユニークな物語を紡ぎ出す監督・佐藤智也が、ゾンビを素材にある夫婦の道行きを追ったダーク・ファンタジー。画家の夫と出版社に勤める編集者の妻。お互いを必要とし、お互いを気遣い、支え合った夫婦の日常が壊れていく。

DATA ●監督・脚本／佐藤智也　撮影／野崎明広　出演／あしかがあや、まんたのりお、満田幸一郎、なにわ天閣、遊上良子　配給／マレヒト・プロ　●7月3日よりシネマアートン下北沢にてレイト（2004年・日・38分）
http://www.jaraku.com/shita/

炎のジプシーブラス～地図にない村から～

BRASS ON FIRE

「アンダーグラウンド」や「黒猫・白猫」などで世界を驚かせたジプシーブラスのルーツに迫る音楽ドキュメンタリー。ドイツ出身の監督ラルフ・マルシャレックは、5年の歳月をかけてジプシー文化への思いを綴り上げた。日常をほのぼのと映し出すスケッチや熱狂のライブシーンが巧みに交錯する。

DATA ●監督・脚本／ラルフ・マルシャレック　出演・音楽／ファンファーレ・チォカリーア　配給／プランクトン　●7月3日より吉祥寺バウスシアターにて（2002年・独・98分）
http://www.plankton.co.jp/brassonfire/

すくらんぶる・ハーツ～恋のソナタ～

「美少女探偵団～飛鳥からの風～」の監督・亀井弘明が、テレビドラマで人気の矢沢心を主演に描くスリリングなラヴ・ストーリー。新進気鋭のデザイナー曜子の恋人・一也の元に届いた脅迫めいたチェーン・メール。やがてそれは受信者の恋人、妻、愛人、友人たちの運命までをも変えていく。

DATA ●監督／亀井弘明　脚本／岡田浩祥　撮影／安田享　出演／矢沢心、弓削智久、美森あいか、タイソン大屋、大蔵淳子、こずえ鈴、隆大介　配給／ミライ　●テアトル池袋にてレイト上映中（2004年・日・85分）

マチコのかたち

3時間28分の大長編群像劇「眠る右手を」が注目された異色監督・白川幸司が、歌姫エミ・エレオノーラを迎えて極彩色の短編ミュージカルを放つ。レストランで不倫相手を待ち続けるマチコ。自分と同じドレスを着たマダム白金と不思議な信頼関係を築くうち、ある魔法を勧められ奇妙な運命を辿る。

DATA ●監督／白川幸司　出演／鈴木薫、エミ・エレオノーラ　配給／HUE　●シネマアートン下北沢にてレイト上映中（2004年・日・30分）
http://film.m78.com/machiko/

劇場公開 映画批評

このページの批評は作品の結末にふれているものもあります。ご了承の上、お読み下さい。

トロイ

TROY
ワーナー・ブラザース映画配給
5月22日公開

秋本鉄次

　本作と同じく、やはりリメーク作品であるヴァンサン・カッセル、ペネロペ・クルス主演の「花咲ける騎士道」で〝戦争とは権力者たちが思いつく団体競技〟というくだりがあるが、このリメーク史劇を見ると、言い得て妙、〝団体競技だなあ〟と感じてしまう。

　ましてや、このトロイ戦争の名目が〝相手の王子と駆け落ちした美人妻を取り返すため〟なのだから、アホみたいな理由だ。ねえちゃん一人のために、何千何万という屈強のアスリートたちが斃れゆく光景は圧巻といえば圧巻だが、空しいといえばこれほど空しいものもあるまい。劇中のセリフのように『若者は死に行き、老人はそれを語るのみ』なのである。

　さて、ヒロイン、ダイアン・クルーガー嬢（正月映画「ミシェル・ヴァイヨン」ではディアーヌ・クルージェって表記だった。覚えにくいなあ）は、そんな〝傾城の美女〟ヘレンたり得るか。たしかにパッキン美人ではあるが、いかにもファッションモデル然としていて、この手の史劇には今一つ。僕だっていつもパッキンを褒めるわけじゃない、ときっぱり！　むしろ戦士アキレスの心を変えるブリセウスを演じるローズ・バーン嬢のほうが生身の女性っぽい。個人的には往年の「ヘレン・オブ・トロイ」のロッサナ・ポデスタのセクシーな肉感ぶりこそ〝傾城〟に値する。ついでに言えば、前出の「花咲ける騎士道」もペネロペちゃんも悪くはないが、オリジナルのジーナ・ロロブリジダの妖艶濃厚エロスにトドメを刺す、と確信するが、いかがか。

　例によってヒロインを優先させたが、主役はギリシャ軍の勇猛戦士アキレスを演じるブラッド・ピットである。マッチョな肉体改造を行い、戦闘マシーンのような男を熱演する。特に、トロイの英雄ヘクトルとの一騎打ちは西洋チャンバラの魅力十分である。「U・ボート」「パーフェクトストーム」など、死地に赴き、戦いに身を賭す男たちの悲壮を描くことに長けたウォルフガング・ペーターゼン監督の真骨頂と言える。

　ところで、〝映画は役者で見る〟ボクとして、本作は、映画は俳優の肉体でナンボ、ということを再確認させてくれた。水平線の彼方までの大船団も、浜辺を埋め尽くす人海戦術も、最近はどうせCGだろ、との先入観のせいか、面白くも何ともない。ピーター・オトゥールの枯淡の演技のほうがよっぽど感動的だった。

　有名な〝トロイの木馬〟の新解釈など、歴史講談と思えば大いにツブシはきくが、どうも腑に落ちないのは、この戦争の発端となった駆け落ち男女が隣国へと逃げおおせてしまうラストだ。普通、生き残しちゃいかんだろ、人道上（？）。テメエらの自己チューな恋路のために、見てみろ、死屍累々じゃねえか、と、その〝自己責任〟を問おう！

　たかが指輪を捨てるのに9時間以上もかけるなよ、のファンタジー長大作に比べれば、なかなか楽しめた2時間43分だったが、今ひとつ気分が晴れないのは、きっとそのためである。

クリムゾン・リバー2
黙示録の天使たち

LES RIVIÈRES POURPRES2
LES ANGES DE L'APOCALYPSE
アスミック・エース、ギャガ＝ヒューマックス配給
5月29日公開

田中英司

面白いのか面白くないのか、正直いってよくわからない映画だった。映像のかっこよさでおおっと身をのりだすところもあるし、ジャン・レノのスタイルのよさが画面をひきしめるあたりは、日本映画では絶対に見られない感じだなあ、とやや嫉妬もする。ブノワ・マジメルという若手俳優も、どこか「タクシー・ドライバー」の頃のデ・ニーロの面影があって、なんとなく懐かしくていい感じだ。

でもやはり、これを「絶対に見に行ったほうがいいよ！」と人にすすめる何かが欠けているのだ。

フランスがハリウッドに負けまいとして、必死になってヨーロッパのサスペンスを作ろうとしている努力は賞賛するが、映画が緊張感に満ち、テンポがスピードアップして、あたたまってくると、やっぱりハリウッド映画の模倣をしているような雰囲気にからめとられてしまっている。例えば映画の中盤あたりの、病院から廃屋へ流れてゆく追跡シーンなど、「セブン」と「フレンチ・コネクション」と「マトリックス」あたりをうまくマニュアルとして使用している感がある。さらに、良くも悪くもフランス映画的な、つじつまよりも盛り上がり優先という態度が作用して、逃げる悪玉の運動量と、追いかける善玉の運動量が比例していない。逃げる方は飛んだり跳ねたり大変なのに、追うのは意外と淡白だ。つまり、追跡劇のリアリティが、迫力を求めるあまりにないがしろにされているのである。

この風潮は「クリムゾン・リバー2」の全体にわたって漂っていることで、見せ場をたっぷり用意しているにもかかわらず、その前後のつながりがあまりうまくない。ひとつひとつのアイディアはいいのに、その発想の余韻をコントロールすることを軽く見ているフシがある。デジタルな造りのサスペンス、とでもいえばいいのだろうか。

見終わったあとのさっぱり感は見事なもので、惨殺死体を沢山見たのに不快感はあまりないから、デートのお食事なんかに悪影響は及ぼさない。と、同時に「映画を見たなあ」という満腹感もあまりない。

ドーン・オブ・ザ・デッド

DAWN OF THE DEAD
東宝東和配給
5月15日公開

鬼塚大輔

ジョージ・A・ロメロ監督／脚本による傑作のリメイク。ゾンビ化を逃れた人々がショッピング・モールに立て籠もるという基本的なコンセプトはオリジナルと共通だが、登場人物の設定やストーリーの展開はロメロ版とはかなり違ったものになっている（脚本はジェイムズ・ガン）。

ロメロ版では（オリジナルの三部作第一作である「ナイト・オブ・ザ・リビング・デッド」を受けてか、あるいは低予算のためか、あるいはその両方のためか）物語が幕を開けた時点で至るところをゾンビたちが跳梁跋扈しているが、今回の新版では日常が一夜にして地獄に変わっていく様子がテンポよく語られている。ゾンビと化した近所の子供や夫から命からがら逃げ出したヒロイン（サラ・ポーリー）が外に出てみると、世の中の様子が一変していることを遠景で見せるショットは、定石とはいえやはり衝撃的である。R指定を避けるために暴力描写を和らげるように会社に言われて「S.W.A.T.」を監督するチャンスを断ったというザック・スナイダーは、この作品ではやりたいようにやっていて、一つ一つの描写はこってりしているし、物語の展開にもスピード感

があって悪くはない。登場人物たちの描き分け方も、最初は悪玉だった警備員（マイケル・ケリー）が最後には自己犠牲の精神を発揮したりするなど、これまた定石ではあるがやるべきことはやっている。だが、案外いい加減なところもある脚本で、生き残りの人たちを無視して行ってしまうヘリコプターを長々と映しているので、何かの伏線なのだろうと思っているとそれっきりだったりする。

さらに困るのは、登場人物たちが揃いも揃って迂闊で粗忽なことで、まあ、ホラー映画の登場人物というのはある程度は迂闊で粗忽でなくては困るのだが、それにしてもこの作品に出てくる人々は度を超している。明らかにゾンビがいそうな部屋にのこのこ入っていったり、犬を助けるために仲間の命を危険にさらしたり、「大丈夫だから」という夫の言葉を真に受けて、ゾンビに噛まれた妊婦を長い間ほったらかしにして、ゾンビ・ベイビーの誕生を許したりと、あまりにも隙がありすぎるので、時々ばかばかしくなってしまい物語に没入できない。

コメディだと思ってみれば、なかなかユーモラスな場面もあって、一行がモールにたどり着いてみると「ドント・ウォリー・ビー・ハッピー」などという、この上もなく状況に似つかわしくない歌が流れているあたりは笑わせてもらった。

オリジナル版と比べれば、たっぷりと金がかかっているのは明瞭だが、そのために生々しい恐怖や、社会批判が薄れてしまったのは皮肉である。

逆にロメロ版の出来の良さ、低予算映画ゆえの力強さを改めて認識し、もう一度観たくなった。新版も大作ホラーとしてはアベレージの出来で悪くはないのだが、偉大な作品をリメイクする際の宿命を逃れ得てはいないのだ。

グッド・ガール

THE GOOD GIRL
UIP配給
4月17日公開

中西愛子

マイク・ホワイト。ハリウッドは今、この若い脚本家に熱い視線を注いでいるに違いない。主演も兼ねたエキセントリックなバディ・ムーヴィー「チャック＆バック」(00)、日本ではヴィデオ・スルーだったが、トム・ハンクスの息子コリン・ハンクス主演の異色学園映画「オレンジカウンティ」(02)と、スモール・タウンを舞台にした怪作を執筆。そして、友人ジャック・ブラックと組んだ「スクール・オブ・ロック」(03)が全米で大ヒットし、メジャーもイケることを証明した。「マイクはクールじゃない。でも、ハリウッド一素晴らしい脚本家だ」とは、ブラックの弁。俳優として映画に登場するホワイトはいつも冴えないけれど（いや、冴えない男の役なのだ）、この男のシニカルなまなざしの強さと自信は相当年季の入ったもので、今後も侮れない。

「グッド・ガール」は「オレンジカウンティ」と同年に作られた作品で、「チャック＆バック」の監督ミゲール・アテタと再びコンビを組み、やはりスモール・タウンに繰り広げられる奇妙な人間模様を描いている。刺激のない町、愚鈍な夫、ドラッグストアでの惰性な仕事。日常にうんざりしている主婦が、サリンジャーを愛読する青年と恋に落ちる。彼女の好奇心と退屈しのぎで始まった不倫の関係は、やがて彼女に思わぬしっぺ返しを喰らわすが、女はそんな数々の危機を悪知恵を働かせポーカーフェイスでクリアしていく。

なかなかしたたかな悪い女である。この主婦を演じているのは、ジェニファー・アニストン。一見、意外なキャスティングだが、これが実に効いている。彼女の普通っぽさ、いや、天性の陽の存在感は、何とも意地悪なホワイト＆アテタ・コンビの毒の中で絶妙な味に料理される。「グッド・ガール」という皮肉なタイトルの面白さも、アニストンあってこそ響いてくる。彼女はスター女優ではないけれど、映画の中でとてもおいしい素材になりうる。ホワイトの秘める善良さが、彼女のおかげでユーモラスに滲み出たのも、本作の奥行きを深める結果になった。

トスカーナの休日

UNDER THE TUSCAN SUN
ブエナ ビスタ配給
6月12日公開

©TOUCHSTONE PICTURES

新藤純子

アメリカ人やイギリス人にとって、イタリアは心を解放してくれる場所らしい。「旅情」では、ヴェネチアを訪れたアメリカのハイミスが魅力的な中年男性とひとときの恋を楽しむ。「眺めのいい部屋」では、おかたい良家の令嬢がフィレンツェで身分のちがうイギリス青年と恋に落ちる。どちらもまじめ一辺倒の人生を送ってきた女性が、イタリアの独特の雰囲気の中で自分を解放し、恋にめざめるという内容だ。

「トスカーナの休日」もこれらの映画と同じコンセプトで作られている。「旅情」や「眺めのいい部屋」とちがい、ヒロインは離婚したばかりの作家だが、彼女もまじめ一辺倒に生きてきた女性に見える。夫に裏切られた上、財産分与で家まで取られた彼女は、友人がプレゼントしてくれたイタリア旅行でトスカーナ地方に出かけ、そこで古い家を衝動買いしてしまう。家を買った以上は、住まなくてはならない。だから修理をする。ということで、家の仲介をしてくれた不動産業者やポーランド人の修理業者、近所の家族などとのつきあいが始まる。

「旅情」や「眺めのいい部屋」ではヒロインは観光客だから、いずれは国に帰る。ヒロインの目に映るイタリアはあくまで観光客の見たイタリアで、生活臭は薄いし、人物もどことなく夢のようである。観客はヒロインと一緒にいっとき旅に出て楽しむ。そしてヒロインとともに心を解放されて現実の世界に戻る。これが観光映画の最も魅力的なところだ。

「トスカーナの休日」ではヒロインは家を買い、そこに住むけれど、本質的にはこれも観光客の立場で作られている。その証拠に、ヒロインを取り巻く人々にはポーランド人の修理業者やアメリカから来たレズビアンの友人など、よそ者が多い。よそ者と地元の人々の出会いと交流がメインなのだが、中心はあくまでよそ者の方である。逆に言うと、よそ者としてのスタンスをきちんと守っているから、魅力的な観光映画になっているのだ。しばし、時を忘れて〃トスカーナの休日〃を楽しもう。

ジャンプ

シネカノン配給
5月8日公開

持永昌也

小説における文体の味わいを、映画に置き換えるとカメラワークに相当するのではないだろうか。きわめて原作に忠実なこの映画版「ジャンプ」を見て、その感がことさら深くなった。

佐藤正午の作品に一貫して流れる理知的なユーモアと温もりのあるほろ苦さは、一人称で展開する語り口の巧みさによるところが大きい。主人公はおおむね作者の分身を思わせる男性であり、日常にまつわる迷いやためらいが精緻に描かれる。そして、いつしか人生の分岐点を迎えていた彼は、おずおずとそれを越えるのだ。

フリーの助監督として20年ものキャリアを重ねてきた竹下昌男にとって、宿願だったという佐藤正午の映画化は、近年の代表作「ジャンプ」で結実した。長年にわたって愛読してきたと語るだけに、佐藤正午の小説が持っている語り口の魅力は、見事に消化されて映像へと移植されている。それが、丸池納による秀逸なカメラワークだ。手持ちカメラが多用されたドキュメンタリー・タッチの映像は、「いちばん好きな人のことが、いちばんわからない」という宣伝コピーが指すような人と人とのメンタルな距離感を絶妙に捉えて、映画全体のトーンを整えてい

る。そこには、洗練された低温のエロティシズムがある。佐藤正午の文章にも通じる味だ。

その一方、二人が再会を遂げるクライマックスは、映画ならではの名場面となりえていた。ひと言も告げぬまま相手の前から失踪した女とされた男が、5年ぶりに顔を合わせる。かつて恋人同士だった二人がそこで見つめるのは、過ぎ去ったお互いの時間と現在の自分自身である。姿を消すことで逆に存在感を主張する役柄に挑んだ笛木優子と、彼女の足取りを懸命に追いかける不器用な男を抑えた演技で見せてくれる原田泰造の好演ぶりも印象に残る。

日常生活の中に埋もれた感情をすくいあげる佐藤正午の小説は、どちらかといえば映画にはなりにくい題材だろうが、「永遠の1／2」「リボルバー」に続く佳作が生まれた。佐藤正午ファンにとって、幸福な映画化作品となったと思う。

スキャンダル

스캔들 조선남녀상열지사
シネカノン、松竹配給
5月29日公開

黒田邦雄

一七六九年、スペイン系貴族出の青年士官だったラクロは、大尉としてグルノーブルに赴任した。その六年間、ラクロは社交界でモテモテだったらしく、この時の経験をもとにして書かれた小説が『危険な関係』である。ロジェ・ヴァディム監督は初映画化にあたって、舞台を現代のグルノーブルに設定した。これはうまいアイデアで、二十世紀グルノーブルの中に、ラクロのすごした十八世紀グルノーブルのムードを押し込めたのである。同原作の映画化であるスティーヴン・フリアーズ監督の「危険な関係」や、ミロス・フォマン監督の「恋の掟」には、そういった脚色のスリルがなかった。それぞれ、クリストファー・ハンプトン、ジャン＝クロード・カリエールといった名手が脚色に当たっており、ハンプトンはアカデミー賞脚色賞を獲得したのだが、ヴァディム版を超えるアイデアは見られなかった。

アジア初の映画化である「スキャンダル」は、何より十八世紀末の李朝という舞台設定が効いている。ラクロが「危険な関係」を書いた頃、朝鮮は李朝末期だったのだ。貴族社会から庶民社会へ、時代が大きく変わり始めた中で、破滅的な恋愛ゲームに興じる貴族階級の男と女。ここに原作の主人公であるメルトゥイユ公爵夫人とヴァルモン子爵をはめこんで、滅びゆく社会と人間を描くというアイデアは素晴らしい。

この脚色で映画の成功は半ば約束されたようなものだが、イ・ジェヨン監督は滅びるものの美しさを徹底して描きながら、それをルキノ・ヴィスコンティ監督作品のような大仰な悲劇で終わらせなかったことに注目。ここがイ・ジェヨンの若さだろうが、彼は、滅びたもののあとに現れるものに、大いなる希望を託しているのだ。当然、原作とは異なる結末を迎えるのだが、それを甘いと感じさせなかったのはお手柄。韓国人らしい儒教へのたしなみゆえかもしれないが、実にロマンチックである。ヴァディム版の恐ろしいエンディングとは大違いだが、こんな「危険な関係」があってもいいなと思わせた。

最大の見ものは、『冬のソナタ』でブレイクしたペ・ヨンジュンが、韓国版ヴァルモン子爵であるチョン・ウォンを演じていること。これまでこの役を演じたジェラール・フィリップやジョン・マルコヴィッチらとは全く違う、いかにも東洋的なしょうゆ顔のペ・ヨンジュンは、すでに悲劇を待ち受けているような、諦観にみちた静けさでこの役を演じている。地位を捨て風流と色遊びにかまけるチョン・ウォンは、ドン・ファンである華やかさより、滅びを待ち受ける静けさこそ演技の勝負なのだ。そこにペ・ヨンジュンがぴったりはまり、絵もたしなむ貴族のナイーブさが、遺憾なく表現されている。屋敷を捉える俯瞰カメラが『源氏物語絵巻』を思わせることもあって、光源氏を彷彿とさせたりするのだ。日本映画がまだ光源氏を描ききれないことを思うと、この韓国映画から学ぶべきことは多い。

深呼吸の必要

日本ヘラルド映画、松竹配給
5月29日公開

服部香穂里

　編集によって時間をやたらと交錯させたり、これ見よがしに複数のエピソードを同時進行させたりする作品は、観る者に、頭を使ってパズルを正確に組み立てるよう要求する。こちらの思惑はとりあえず抜きにして、作り手が意図的にシャッフルしたショットに目を凝らしていった先に、これまでに体験したことのない世界が広がっている場合もあるが、映像の端々に散りばめられたヒントを必死に読み取り、その手順通りにパズルを一片一片はめ込んでいったにも関わらず、最後のピースを入れると案外ありきたりで薄っぺらな完成図だった、なんてことも少なくない。こんな時、作り手が仕掛けたハッタリだらけのタネ明かしに付き合った甲斐もなく、すべては徒労に終わってしまう。

　本作で特徴的なのは、回想シーンが一切登場せず、時間軸に忠実に話が展開していくことである。沖縄の、人手不足な農家の収穫を手伝う〝きび刈り隊〟に志願し、平良家に迎えられたひなみ(香里奈)、池永(谷原章介)、西村(成宮寛貴)、悦子(金子さやか)、加奈子(長澤まさみ)の五人、さらに、先輩格の田所(大森南朋)、急遽参加することとなった美鈴(久遠さやか)を加えた計七人は、年齢も見た目もバラバラ、それぞれにワケありな雰囲気だが、「言いたくないことは言わなくてもいい」という平良家のルールのもと、自分の過去や現状について多くを語ろうとはしない。篠原哲雄監督は、時にゆったりと、時にスピーディーに時間を進め、「時間は前にしか進まない」と、宙ぶらりんなきび刈り隊の背中を優しく押し続ける。

　冒頭に映し出される水泳大会真っ只中のプールで、スタートの直前、唐突に深呼吸を始める少女。結局ビリでゴールするが、どこか楽しげな表情が妙に印象に残る。場面は飛び、目的地に向かう船の上、青空の下で気持ちよさそうに深呼吸をするひなみの姿が捉えられる。ああ、あの水泳少女か、と合点はいくものの、象徴的なトップシーンの位置づけは明らかにされぬまま、映画は三十五日をタイムリミットにした収穫の日々へと突入する。

　やがて、ひなみが水泳大会で深呼吸をした思い出を池永に語る場面に到り、ようやくあの冒頭が意味をもつ。本来であれば、ここに回想シーンとして挿入されるのが道理であるが、敢えて頭に置いたことで、時の流れに逆行せずに済むだけでなく、ひなみと同じ目線で過去に思いを馳せるという、ユニークな感覚を味わうことができる。

　さとうきびを刈るだけの話なので、派手なドラマには欠けるが、根底をなす時間経過そのものが、非常にドラマティックだ。期限が近づくにつれ、仕事にも慣れ、ますます無口に作業をこなす面々のショットの反復は、単調なようでいて、実際に現場で同様の経験を積んだであろう俳優陣の真摯な姿勢ともダブり、一向に観飽きることはない。森のごとくそびえていた畑に道ができ、それがやがてグラウンドとなる。「『フィールド・オブ・ドリームス』!」とキャッチボールをするシーンには、とうもろこし畑を潰した球場に後ろめたさが潜んでいた本家とは違い、収穫後の達成感が漂う。怒涛のラストスパートから一転、最後のさとうきびが七人それぞれに手渡される厳粛な儀式へと減速していくゴールも、勝負に執着しない本作らしい。

　記念写真に、田所の初日の声が重なるラストシーンが、既に懐かしく映るのは、深呼吸少女のはにかんだような笑顔で始まった映画が、成長した彼女が何とか任務を全うするまでの一連の時間をスクリーンにしっかりと刻みつけた上で、さらにほんの少し先へと前進しているからだ。時間いじりにばかり精を出す作品が後を絶たない中、弛みなく流れるありのままの時間に身を委ねていくうちに、胸がすーっと軽くなった気分になる、正に深呼吸のような作品であった。

ピンク映画時評

切通理作

女優からスタートし監督としてもヘテロものとホモものを両方手がけてきた吉行由実が、最新作「せつないかもしれない」(製作吉行プロ、提供オーピー映画)が春の薔薇族映画常設館でのロードショーを終え、7月17日に東京国際レズビアン&ゲイ映画祭でも上映される(17時より青山スパイラルホール)。

実はホモである新入社員(千葉尚之)が頼りがいのある先輩社員(岡田智宏)に恋をし、その行方がリリカルに描かれる。

普通ピンク映画で「会社員」といってもそれは設定だけであくまで背景的に出てくることが多いが、サラリーマン経験の長い本田唯一が脚本に参画した(吉行と共同)こともあり、本作は広告代理店に就職した千葉尚之演じる主人公の社会人としての成長物語となっており、それが先輩との関係を通して捉えられている。その上で「仕事だけですか」という後輩の先輩へのまさに「せつない」問いかけと想いが描かれ、童顔の千葉がまるでアイドル映画の主演のようにすがすがしく頑張っているのを、吉行演出は生き生きと描いている。「仕事を通した恋愛」「恋愛を通した仕事」の微妙な振幅はゲイやヘテロといった違いを超えて広く訴えかけるだけの可能性を持っている。「同性愛には興味がない」と言う読者諸氏にもぜひ見て欲しい作品だ。

先輩役の岡田智宏も、若いながらもやり手の貫禄で芸達者なところを見せる。岡田の恋人である同じ会社のOL役である林由美香のちょっと軽めのお姉さん的役柄も作品を弾ませているし、口うるさい上司役のなかみつせいじもタイプキャストとしてハマっている。

先輩のミスを後輩が一日奔走して穴埋めするくだりもリアルだし、千葉が同性愛者であることを会社の同僚とのパーティの席上でついノリで「カミングアウト」してしまうくだりなどは、そういうこともあるかと思わせてしまう日常の中での飛躍が楽しい。またそのことによって、会社の中で千葉のことを噂する同僚たちを岡田がたしなめるくだりなども生きている。

ホモとノンケの恋愛がどう成立するかという飛び道具としてノンケである先輩が過去に男の先輩から「強姦」されたトラウマをカウンセラーに相談しているという設定を持ち込んでいるが、こちらの方は本筋が崩れないように最小限になっている。千葉尚之の方が、それまでのセックスフレンドと簡単に関係を結ぶ日常にやや倦んでいるというのも当たり前のように納得させられるし、その辺のバランス感覚も見事である。

これまでの吉行作品の中ではアップリンクから発売されているDVDシリーズ「NIPPON EROTICS」で、97年に作られた「姉妹どんぶり　抜かずに中で」が「イノセント・キス」と題されて、奇しくも「せつないかもしれない」ロードショー時期の4月末より発売中だ。監督二作目であるこの作品は「明日世界が終わるとしたら、あなたは誰と一緒にいたいですか?」という問いかけを〝フレンチ・クルーラー〟〝手話〟〝エリック・ロメール〟などのキーワードを使ってヴィヴィッドに描いたラブストーリーの傑作で、吉行監督の評価を決定的なものにした。最近ではその演出もやや手馴れてきた感があったが、「せつないかもしれない」は監督二作目の時のみずみずしさが復活しており、吉行監督がこれからも映画の世界に新しい息吹を見せてくれることが期待される。

さて先月の本欄でピンク大賞の得点形式について、総合得点形式であり平均点でもあるといった不分明な記述になってしまい読者から指摘を頂いたことをここに記すとともにお詫びしたい。正確には投票者がその年に観たピンク映画すべてに1~10点をつけ、その集計を投票者数で割って平均点を出す形式である。筆者の意見はその一回の集計で結果を出すだけでなく、上位作には投票者の合意の高さを測る決選投票を行ってはどうかというものだった。だから執筆主旨そのものに変化はないことをお断りしておく。

文化映画紹介

渡部実

「不思議の星　地球」
イメージサイエンス作品

［スタッフ］プロデューサー／小山欣紹　制作／渡邊昇　演出・企画・脚本／碓井隆志　撮影／片岡高志　VE／長岡茂樹　照明／下田栄二　CG／佐藤修　音楽／吉田昭彦　編集／和田理　MAV／木田宏信　スタイリスト／華江遊子　出演／佐田明、松岡大介、中田博之　ナレーター／玉川紗己子　監修／日置幸介　企画／文部科学省国立天文台　協力／日本気象協会、NASDA　完成／03年　ビデオ作品・27分

［内容］陽春の4月23日、東京・北青山にあるTEPIA(テピア)プラザにおいて、第14回TEPIAハイテク・ビデオ・コンクールの表彰式が行われた。TEPIA（主催＝㈶機械産業記念事業財団）については以前本欄でも紹介しているが、機械産業や情報産業の技術的成果を広く一般の人々に知らしめ、また、科学技術を扱ったビデオ作品、DVD作品などの視聴、さらには各家庭へのストリーミング配信などによって、これら産業の社会と調和した発展に寄与することを目的として設立された財団である。

TEPIAプラザはハイテクノロジーをはじめとする情報発信の場所として、毎年数々の催しものを行っているが、年に一度、最近の収集作品の中からハイテクノロジー分野を扱った優れた映像作品を奨励するコンクールを開催している。長い歴史を持つ科学技術映像祭と共に、日本の科学技術の同時代の記録として、その存在は年々ますます重要になりつつある。

近年、子供の理科離れが進んでいると言われる一方、現実にはハイテクノロジーが多くの分野で想像もつかない速さで日々発展している。現代の10代の若者たちに、このような最先端の科学の世界に親しんでもらうことが大事である。科学映像作品の鑑賞は、その良い契機になるだろう。映像の影響力は大きいのだ。いつの時代にも科学映像プロダクションは、若い世代に対して科学に興味を喚起させる魅力的な作品を作るという責務を担っているといっても過言ではないだろう。

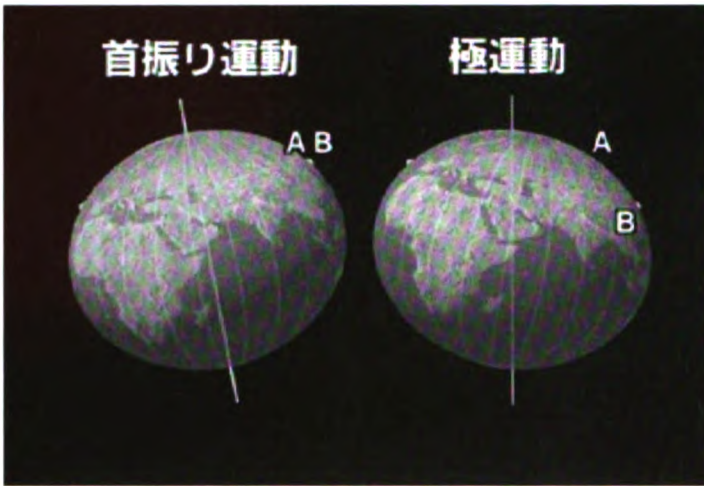
面白い地球の自転運動

今回はこの第14回TEPIAハイテク・ビデオ・コンクールで最優秀作品賞（日本経済団体連合会会長賞）を受賞した「不思議の星　地球」を紹介したい。

本作は、私たちが住む地球の自転について説明をした作品である。そこに朝、昼、晩といった時間の変化が訪れるわけであるが、科学には素人の私から見ても、地球が一日でまるまる一回転をしてしまうというのは、これは大変な速度と思われる。映画の舞台となるのは岩手県水沢市の国立天文台水沢観測センター。今、こ

こには最新鋭の観測機器が設置され、観測が続けられている。自転を続ける地球の特徴が、巨大な望遠鏡が設置されている観測センターで働く人たちの興味深い言葉によって言及される。すなわち「円い地球が自転しているのは周知の事実である。けれどもよく見ると地球はフラフラと回っている」あるいは「地球は全体として柔らかい」などと、意外な見方が出来るというのである。もっと具体的に言えば、宇宙空間に浮かぶ地球の回転には3種類の変動があるとされている。

首振り運動

極運動

この地球の回転変動の運動については、昔から日本の科学者たちが地道ながら国際的な業績を積み上げてきた。その事実は意外と知られていない。

そこで映画は当時、臨時緯度観測所と言われたこの水沢の観測センターを舞台として、20世紀初頭の科学者、木村栄のもとにドイツの観測所から知らせが来ることからドラマは始まる。その知らせには、日本の水沢における観測は不十分であるという批判が書かれていた。これを読んだ木村は発奮し、やがて日本人が観測した研究を世界に認めさせるまでになる。地球は楕円体である。なぜなら回転する遠心力で地球は伸び縮みするからである。ちょうどそれは公園の回転遊具に乗っていると遠心力で外に飛ばされる感じを受けるのと似ていよう。

ここで映画は地球の自転をコマの回転に譬える。よく作られたコマの回転はまとまった回り方をするが、心棒のズレたコマの回転はフラフラとしている。ここに円い地球の回転との共通性が見出される。ここで重要なのは、軸のズレたコマのようにもしかしたら地球の回転軸もズレているのではないかという問題が生まれたことである。科学者たちはそれを観測してきた。心棒がズレたコマを回したらどうなるのか。すなわち回転の軸に対して、コマ全体がブレて回ることになる。その小さなコマの運動を地球の回転運動に当てはめてみる。真上の夜空を見上げて東から西に動く星の高さを精密に観測する。そして星の位置が南北に変化をしているか調べる。同じ緯度線上にある観測点から星を見ると、本来なら同じ場所に見えるはずである。だが地球の回転軸がズレると、どちらかの観測点は空に対して位置が変わるので、星も南か北にズレて見えることになる。そして観測の結果、実際にそのズレが見つかったのである。これは大きな発見であり、さらにズレている地球の回転軸が北極点の周りをゆっくりと動いて勝手に場所を変えていることも分かった。

映画は、地球が回転軸のズレたコマのようにフラフラと回っている事実に対して、日本をはじめとする科学者たちが世界的なプロジェクトをもってどのように観測を行っていったかを、再現ドラマ、インタビューを交えて描き出す。描かれるのは現在まで引き継がれてきた研究の歩み。それに現在進行中の月惑星研究も紹介される。その月面観測によって明らかになる地球の意外な姿をも描き出している。27分の短編ながら、地球の回転変動に関する情報は山盛りである。地球の自転に着目し、科学への興味を喚起させる力作と言えるだろう。(問合せ先=イメージサイエンス　TEL03−3404−7807)

読者の映画評

●第一次審査通過（応募総数179通）
大田一（「クレヨンしんちゃん　嵐を呼ぶ！夕陽のカスカベボーイズ」）、河内和弘（「グッバイ、レーニン！」）、酒井美帆（「恋愛適齢期」）

●応募要項
住所、氏名（ペンネーム使用の方は本名を忘れずに）、年齢、職業、電話番号を明記の上、800字～800字で、縦書き。原稿用紙、またはワープロ打ちされたものでご応募ください。レポート用紙不可。字数厳守のこと。

●宛先
〒106-0045　東京都港区麻布十番1－2－3
プラスアストル　キネマ旬報編集部
「読者の映画評」係まで

皆様のご応募お待ちしております

クレヨンしんちゃん　嵐を呼ぶ！夕陽のカスカベボーイズ

丸山哲也
埼玉県所沢市
自衛官・39歳

しんちゃんの友人、ボーちゃんが、しんちゃんを評してこう言う。
「しんちゃんの性格、おねいさん好き（女子高生以上）。」
確かに今まではそうだった。過去のしんちゃんシリーズに登場したヒロインは皆、女子高生以上。ただ、彼女達は（一部の例外を除き）しんちゃんを庇護する存在であり、彼にとってもまともな恋の対象ではなかった。
だいたい、しんちゃんはおねいさん達にやたらと声をかけたりはするけれど、それは『浮浪雲』の「おねえちゃん、あちきと遊ばない？」みたいなものでしかない。マジな恋に身を焦がしたことはなかったのではないか。
ところが本作では、未完成の西部劇映画の世界に迷い込んだしんちゃんが、つばきちゃんという女の子に、本気で惚れてしまうのだ。
ジャスティスという名の悪徳知事に奴隷のようにこき使われているつばきちゃんを、しんちゃんは何とかして助けようとする。何しろ今までこのシリーズには一度として登場したことのない、弱々しいが健気で芯の強い女の子だ。男が惚れぬ道理はない。
恋する男は強い。怖いモノなしだ。ただ一つだけ恐れるものがあるなら、それは大切な「彼女」を失うこと。だから、恋人を守るための戦いはとてつもなくアツくなる。
今まで「アクション仮面をお助けするため」や、「自分達家族の未来を守るため」に戦ってきたしんちゃんだが、今回は違う。元の世界に戻るためという大前提はあるが、それ以上に、彼は「つばきちゃんを守るため」にこそ、超人的な力を発揮するのだ。あの「～カリオストロの城」で、ルパンがクラリスを救うために命がけで戦ったように。
残念ながらこの恋はホロ苦い結末を迎えることになるが、我々観客の胸の中には何とも知れない幸福感が残される。誰かを本気で好きになると、人間はとことん真っ直ぐになれるんだ、ということを思い出させてもらえたから。
ラスト・クレジットでの、しんちゃんとつばきちゃんの可愛らしいダンスに、不覚にも泣けてしまった。

クレヨンしんちゃん　嵐を呼ぶ！夕陽のカスカベボーイズ

小島弘之
愛知県刈谷市
高校教師・43歳

館内が明るくなった時、いつもと異なる感覚にとらわれる仕上がりである。

荒唐無稽なまでのパワーに、笑いを通り越して圧倒されるのはいつもの通り。しかし哀しみと同時に、背筋がぞくっとするホラー映画の味わいが画面全体に漂うのだ。

冒頭、しんちゃんと仲間たちの鬼ごっこが、追う者と追われる者の緩急の呼吸も見事な疾走で、まず笑わせる。しかし、忘れられた「カスカベ座」が、不気味な冷たい雰囲気を吹き込む。そして、迷い込んだ西部劇の世界では、記憶を失う恐怖が強調され、元の世界に帰れない、という再三繰り返される台詞が、恐怖感をより煽りたてるのだ。その抑えられたエネルギーが爆発する終盤の機関車爆撃場面は、圧巻の一言である。とりわけ、しんちゃんたちが彼らの合言葉を思い出す場面は、画面全体が踊っているかのようだ。

ところで、この「映画」を背後で動かしているのは、カスカベ座の無人の映写室で静かに回転する映写機である。けれど、誰が映写機のスイッチを入れたのか、そもそも誰がフィルムを装填したのか。この謎は、ラストでも答えが示されないままだ。

そのラスト。戻ってきた人々は、我先に扉の外に飛び出して行くこともなく、座席でぼーっとしている人までいて、三々五々ゆったりと去って行く。それは、我々観客の普段の行動でもある。ここは誰の視線で描かれているか。スクリーンの視線である。

そう、忘れられた「映画」を哀しみ、その完成を促すために人々を「映画」の中に送りこんでいたのは、実はカスカベ座自身なのだ。映写機とスクリーンが協力して「映画」を完成させ、明るくなった後でも観客に余韻に浸らせる雰囲気を取り戻したいのだ。ホラー映画のようでもあり、哀しみに満ちた雰囲気はここから生まれているように思える。

哀しみ、と言えば、今回のしんちゃんの恋の相手をめぐるオチも心に染みる。人々を引き込む「映画」の荒野の場面で一人歩み去っていく男がいたが、しんちゃんたちを引き込むための彼女の仮の姿だったのかもしれないし、更に言えば、映画館の意思の投影なのかも、と強引に繋げてみたくなった。

グッバイ、レーニン!

鈴木功一
東京都足立区
税理士・45歳

時の流れの速さに人はただ取り残される。1989年のベルリンの壁崩壊から、既に、15年の歳月が流れた。この映画を観て、この間の世界をみれば、我々は、正に、歴史の真中にいることに思いがいく。この映画のなかの早まわしの場面が、特に印象に残るのは単に、時の流れの速さを示すだけでなく、取り残される人の哀しみを表しているからだ。特に、津波のような大きな時代の変化のうねりは、人々の思いを飲み込んで行く。この映画を観る人は、自分の信じていたものが一瞬にして崩壊していく様に驚かされる。大きな期待と不安。夢と現実。その人々の揺れ動く心の様は、悩み多き青春期なら、尚更だ。

この映画の主人公アレックスは正に青春期。国家に対する反対は、保守的で厳しい母親への反発でもある。リンゴを食べながらのデモへの参加で象徴的に描かれているように、そこには甘えがある。確固たる国家や、しっかりした母親はそう簡単に倒れるはずがない。だからこそ、安心して反抗できるのだ。しかし、両者とも、実は、思ったよりも強くない。倒れられて初めてそれに気づく。最初のうちは自由を謳歌しているが、果してそれで良いのか。失ってしまったものへの愛惜が湧く。彼の母親への無償の献身は、そのまま母の信じていた国家体制への見直しへと通じていく。母への思い。人が人として成長するには、この人への思いやりこそが要なのだろう。彼の思いは、そのまま、彼の人間としての成長を支える。ララ(チュルパン・ハマートラがすごく可愛い)への恋愛感情も、父への人間としての理解も、その中から発現していく。

この映画が、コメディを乗り越えて、感動的なのは、この人としての成長をしっかりと描いているからだ。過度の競争社会を嘲りながら、社会主義と映画へのオマージュに満ちた見事な121分。各回とも満席で、観るのに4時間待たされたが、その甲斐は十分にあった。

デイ・アフター・トゥモロー

監督／ローランド・エメリッヒ 出演／デニス・クエイド、ジェイク・ギレンホール、エミー・ロッサム（20世紀フォックス配給）●日劇1ほか全国東宝洋画系にて公開中

©2004 TWENTIETH CENTURY FOX

地球温暖化による異常気象の後、氷河期が訪れた世界で懸命に生き抜こうとする人々の姿を描いたスペクタクル巨編。古代気候学者ジャックが大規模な気候変動を予測。4カ月後、世界中を異常気象が襲い……。

ザ・ボディガード

監督／マーティン・バーク 出演／シルヴェスター・スタローン、マデリーン・ストウ、アンソニー・クイン（アートポート配給）●シネマミラノ、シネマサンシャインほかにて公開中

名優A・クインの遺作ともなった、S・スタローン主演のサスペンス・アクション。警護しきれず、敬愛するマフィアのボスを失ったボディガードのフランキーは、ボスの遺志に従い、彼の娘の護衛を誓う。

西脇英夫

デイ・アフター・トゥモロー

壮大な映像ショーとしては十分見応えがあるものの、それにしてもドラマの部分が弱い。地球半分が滅亡しかねないというときに、父と息子の情愛をしんねりむっつり描いてみても、感動には繋がらない。それでも、せめて氷河縦走の苦難の旅をもっとダイナミックに、冒険活劇風に、或いは超リアリズムで表現していたら、もう少しなんとかなったかも。つまりこの後半が面白くないのだ。とは言うものの、SFXで見せる自然の驚異の映像は素晴らしく、特撮好きにはたまらない。

★★★

ザ・ボディガード

タイトルからコテコテのミステリー・アクションかと思いきや、まるで中途半端なラブ・コメとは、すっかり肩透かしをくってしまった。それにしてもラブもコメも、スタローンの似合わないこと。我がままお嬢のマデリーンに、手を焼く姿のぎこちないこと。歳をとったアクションスターのその後の処し方は、いずれも難しいところがあるが、過去の名声が高かっただけに、一番ヤバイのがスタローンだろう。そういうことでいろいろ試みているのだろうが、どうもうまくいってないようだ。

★

北川れい子

デイ・アフター・トゥモロー

冷凍食材を溶解すると、中身がぐーんと小さくなっていることがよくある。水分は凍結すると膨張する原理。この映画も包装のデカさはたいしたものだが、中身自体はかなりスカスカの冷凍食品。しかも実に消化が良く、何だか観終ったとたんにすぐお腹が空いちゃって。とはいえ、VFXによる大寒波映像はさすが観応えがある。技術の進歩が新たなるストーリーを可能にするってこと。けれどもただ逃げるだけってのも能がない。地球温暖化対策に非協力的なアメリカの反省ぶりが甘いよ。

★★

ザ・ボディガード

そうか、スタローンは、生涯〝アマチュア〟の人なんだな。5本作られた「ロッキー」にしても、3本の「ランボー」にしても、それ以外の作品でも、彼の演じるキャラは、何だか常に迷い、悩み、戸惑っていて、なかなか、その道のプロ、いや、人間としてのプロは演じられていない。近年、B級ふうなアクションやサスペンスが続くのもその辺の腰の引けがあるからかも。本作のキャラも然りで、ラブ・コメディの主人公としても、ボディガードとしてもアマチュアっぽい。何だかなァ。

★

田中千世子

デイ・アフター・トゥモロー

面白い。〈気象変動スペクタクル〉というジャンルを開いた映画だ。今までも地球規模の災害映画はよく作られ、人間ドラマと政治とパニックが入り乱れているうちに終わるというのが大半だったが、これは違う。エメリッヒが前に作った「インデペンデンス・デイ」よりずっと素晴らしい。大統領たちがよい人というオマケがなければもっといいが、人間関係もすっきりしているし、我先にと逃げ出す人々や互いに争うパニック描写がないのもいい。特に前半のスピーディな大災害シーンが大迫力。

★★★★

ザ・ボディガード

余裕のロマンティック・コメディ。映画とテレビの製作・脚本からマフィアの実態や戦場のドキュメンタリーなど数多く手がけたマーティン・バーク監督は、奇をてらったり無理に新しがったりすることなく「娯楽映画はこうやってつくりゃあいいんだ」風の安定感がある。監督のこの落ち着きがスタローンにいい味を出させることになったと思う。別にスマート・ガイになったわけではないが、暗黒街のあしながおじさんとして、お嬢様を守り抜くヒーローぶりがさわやかである。

★★★

轟夕起夫

デイ・アフター・トゥモロー

京都議定書を無視したアメリカに一泡ふかせるディザスター映画。寒気を視覚化する趣向はバカバカしくて面白いし、竜巻、洪水、津波、氷河とVFXも大活躍なのだが、エメリッヒ監督の辞書には「人間が一番怖い」という項目がない。雷の次に怖いのは親父のはずなのに、描かれるのは無茶な父子愛……ある意味怖いか。個人的にはハズレ作のなかったJ・ギレンホールに、P・ニューマンが「世界崩壊の序曲」(79) に出たときのような衝撃を！ ま、いつもと変わらぬ陰鬱な演技でしたが。

★★

ザ・ボディガード

その身につけたオーデコロン〝プリュット〟の匂いについて、劇中たびたび言及されるスタローン。しかしそれとは別に彼が醸し出している、尋常ではない〝加齢臭〟はなんだろう。黄昏感が増し、しがないボディガード役にはうってつけではあるが、これはもう個人的な好みの領域で、M・ストウの華のなさ、ユルいコメディ演出と共に作品に〝渋味〟を与えすぎている（A・クインの遺作でもあり苦味走ってる！）。全編を覆うB・コンティの音楽は70年代イタリア映画のサントラのようでグッド。

★★

★★★★…必見！　★★★…一見の価値あり　★★…悪くはないけど　★…私は薦めない

セイブ・ザ・ワールド

監督／アンドリュー・フレミング　出演／マイケル・ダグラス、アルバート・ブルックス（ギャガ＝ヒューマックス配給）●6月26日より有楽町スバル座ほか全国にて

ある極秘任務に就くＣＩＡの秘密潜入捜査官が、世界の平和と息子の結婚を控えた家庭の平和を守るために奮闘する姿を描いた、「あきれたあきれた大作戦」(79) のリメイクとなるアクション・コメディ。

アクション・コメディと銘うっても、アクションもコメディも未消化で面白味に欠ける。マイケルがいくら名優でも、アルバートとの地味なジジイ・コンビでは、いかんせん鮮度不足。おまけに動きにキレがないから、全体にモタモタした感じ。せめてもう一人、シャキッとした若手でも加わっていれば、好対照の面白さが出せたかもしれないのだが、二人だけでいけると踏んだのは少々強引。次々と懐かしいヒットメロディを流すのもやや唐突で、おかげで古めかしさがよけい強調された。★

このレトロな感じワルくない。近年はＶＦＸばかりに力を入れ、その映像の中を人間がウロウロする映画がやたらに多いが、この作品はキャラクターが先行、そのキャラクターが次々とトラブルとアクシデントを生み出していくのだ。ちょっと〝００７〟の初期作品の雰囲気もする。しかも全編、アソビ心というか、余裕と茶目っ気があり、それが程よく野暮ったい。まあね、今どきＣＩＡを主人公にすること自体、アナクロもいいところだが、俄か相棒とのドタバタも愉快で、寛大な気分で楽しめる。★★★

オリジナル版のピーター・フォークたちより天国のジャック・レモンとウォルター・マッソーが自分たちの後継者ができたわいと祝杯をあげている、きっと。ぼけのブルックスが愉快だが、ダグラスがとことんダグラスしているのが、かえってさわやか。フレミング監督の演出がいいのだ、きっと。レストランのトイレで殺し屋と戦っている最中のダグラスをブルックスが目撃するあたりのスラプスティックな笑いがたまらない。二度見たが、やはり笑えた。芸で見せる笑いなのだ、きっと。★★★

Ｐ・フォーク＆Ａ・アーキンのオリジナル版には及ばないけれど、Ｍ・ダグラス＆Ａ・ブルックスの凸凹コンビぶりは悪くない。選曲はベタといえばベタだが、何とＰ・マッカートニーが3曲提供、ゴージャスな画作りでムードを作り、それを破壊する〝無駄の美学〟が垣間見られる。フレミング監督は「キルスティン・ダンストの大統領に気をつけろ！」(99／未) でウォーターゲート事件を艶笑モノにしたセンスの持ち主。本作も脇の脇まで日本語吹替えが聞こえてきそうなアホらしさが愛おしい。★★★

メダリオン

監督／ゴードン・チャン　出演／ジャッキー・チェン、クレア・フォラーニ、リー・エヴァンス、ジュリアン・サンズ（ヘラルド配給）●ニュー東宝シネマほか全国東宝洋画系にて公開中

Ｊ・チェンの生誕50周年＆日本公開50作品を記念した主演最新作。死者を甦らせる聖なるメダルをめぐり、所有者の少年、彼を狙う犯罪組織、組織を追う刑事らによって展開するファンタジー・アクション。

どっかで似たような話が？　確かエディ・マーフィの「ゴールデン・チャイルド」だったか。ジャッキー映画もそろそろネタ不足なのか、このところかなり苦慮しているようだ。こちらはとくに変化を求めているわけでもないが、よわい50を数え、年齢とともにアクションにキレがなくなった分、一層のエンターテイメントを考えたのだろう。そんな無理しないでも、彼のキャラクターなら定番の刑事コメディで十分楽しめるのだが、今さら「ポリス・ストーリー」というわけにもいかないか。★★

伝説の聖典とか、古代のメダルとか、選ばれた少年とか、話の風呂敷の広げすぎというか、まったく実感がわかないのがツライ。話が絵空ごとだと、ジャッキーの本気アクションまで空回りしてしまう。ロケ地は香港だけでいいから、もっとリアリティのあるストーリーで、ジャッキーらしいメモリアル映画にしてほしかった。でも顔は年相応にやつれても、ジャッキーが自分のルーツ、本分を決して忘れないのには頭が下がる。過去どれほど彼のアクションにワクワクしたか。星一つおまけしよ。★★★

胸のすく決闘シーンと50歳のお祝いで星4個。聖なるメダルと、聖なる少年の組み合わせでジャッキーが不死身になる仕組みがよくわからないが、少年はお釈迦様と三蔵法師の中間のパワーを持っているのだろう。ライバルのワトソン刑事は、探偵ホームズに対するあのワトソンというより銭形平次のライバルの万七親分のよう。そう、どこか懐かしい捕物帖気分が漂って、人を幸せにする映画だ。生き返って不死身になるにせよ、ジャッキー死す——のシーンにはじんとくる。★★★★

五十にして天命を知るジャッキー、その体技とＣＧ、ＶＦＸ技術との和合に拍車がかかるのは仕方ない。そこで改めて重要になってくるのが彼のキャラ設定だが、なぜに「タキシード」に続いて〝超人ネタ〟になるのか（たとえ笑いのためとはいえど）。また今回はコメディ・リリーフ、Ｌ・エヴァンスのドタバタ演技がイタすぎて、映画の流れを寸断することこの上ない。非アクション的な仇役Ｊ・サンズ共々、すべてが裏目に出ている。恒例のＮＧ集さえもがウソ臭く感じられ、曲がり角かも。★

キャンプ

監督／トッド・グラフ 出演／ダニエル・リタール、ジョアナ・チルコート（アスミック・エース配給）●ヴァージンシネマズ六本木ヒルズにて上映中

サンダンス・フィルム・フェスティヴァルで評価された青春映画。友達のいないゲイ、過食気味な女の子などはみ出しもののティーンエイジャーたちがサマーキャンプに参加し、ミュージカルの上演に打ち込む姿を描く。

河原晶子

〝キャンプ〟には夏の海山合宿の他にもうひとつ、かつてスーザン・ソンタグが定義したあの独特の感覚の意味あいが隠し込まれている。ソンタグが例にあげたビアズリーや白鳥の湖のように、ここに登場するソンダイムやバカラックのミュージカルが〝キャンプ〟の象徴だ。フォッシーもM・ベネットも死んでしまった、タイムズ・スクエアはテーマ・パークと化しているというアル中作曲家の台詞に現在のブロードウェイ・ミュージカルに対する作者の嘆きが感じとれる。性の混沌に悩む若者像も愛らしい。

★★★

稲垣都々世

こんなサマーキャンプがあるとはさすがにアメリカ。集まったアーティスト指向のティーンエイジャーは学校からはみ出した変人という設定だが、こういう世界にしてはかなりマトモ。屈折した少女の〝復讐〟は少々アブナいが、基本的にはいい子ばかりで、もしかするとその健全さが映画のインパクトを弱めているのかも。青春ものとしては常套だが、嫌味はないし、作り手の姿勢はマジメだし、何より彼らの本物のパフォーマンスがこの映画に力を与えている。性格のいい映画だ。

★★

大場正明

実際にステージドア・マナースに参加した経験を持つグラフ監督の狙いは、その実態をありのままに描くことだったというが、それにしては人物もドラマも作り物めいていて、深みに欠ける。プロムにドラッグ・クイーンで登場して袋叩きにされたゲイのマイケルやまったくもてないエレン、過食防止のワイヤーをつけたジェンナなど、キャンプに集まるのは悩みを抱えた落ちこぼればかりだが、そうした抑圧が表面的であるために、ミュージカルに解放の場を見出す喜びも平凡なものになってしまう。

★★

金原由佳

性差別、容姿のコンプレックス、生まれ持った障害、家族の不関心など、各キャラクターの抱える悩みがかなりデフォルメされ、わかりやすい図式で紹介される。それが、ミュージカルという過剰な表現と相まると、彼らの歪さがそれぞれの魅力となり、前向きなパワーに満ち溢れる。キャンプでの発表会が、ミュージカル史の駆け足の紹介にもなっているが、割愛された感は楽曲の権利上、致し方ない？　当然、子供の歌は巧みだが、まだ磨かれていない素材の方がやっぱりずっと面白い。

★★

dot the i／ドット・ジ・アイ

監督／マシュー・パークヒル 出演／ガエル・ガルシア・ベルナル（エスピーオー配給）●7月下旬よりシネセゾン渋谷にて

「天国の口、終りの楽園。」のガエル・ガルシア・ベルナルがミステリアスな男を演じたラブサスペンス。結婚の決まった女性が、独身最後の夜のパーティで出会った男性に激しく心を揺さぶられる。そして……。

河原晶子

映画作りについての映画という、映画青年たちが魅了されてきた主題が、ここでも繰り返される。映画という玩具で遊ぶ若い監督たちの頭でっかちの野心が陥る出口なしの無力感。同じ主題でもマイケル・パウエルの「血を吸うカメラ」は独創的で前衛的だったと思う。ロンドン郊外の邸宅にひとり住む優雅な青年の二重性は、まるで「サイコ」のA・パーキンスのよう。どこかイギリス風エレガンスを漂わせるジェームズ・ダーシーは魅力的だけど……。観客を欺くラストに後味の悪さが残る。

★

稲垣都々世

ゲームのキスで始まった運命的な愛の三角関係をそれなりに楽しんだ。頻繁に挿入されるビデオカメラの映像が不穏な気配を募らせ、隠されている真相を推測して緊張が走った。ところが、事実が見えてくると不快な澱がたまる。真実と虚像の曖昧な境界線。カメラを通して現実を見る現代社会のメタファーとしてはともかく、〝究極の即興〟と言いつつ、覗き、やらせ、騙しの手法に走る映画作家の存在が、どうにも気分を重くする。その作家の魂胆に通ずる監督自身の性格の悪さがほの見える。

★★

大場正明

よくある三角関係のドラマに見えながら、頻繁に挿入される粒子の粗い映像が不穏な空気を醸しだし、その先にどんでん返しが待ち受ける。しかし、それがどんな世界であれ、運命のキスはあくまで運命のキスであり、現実と虚構はすでに絡み合っている。主人公たちは、それを解きほぐすのではなく、今度は逆に自分を巧妙に演じることで現実と虚構を操作し、さらには虚構の世界を生きる切符を手にする。この恋愛映画は、虚構や監視が日常化する時代を風刺しつつ、軽やかに突き抜けていく。

★★★

金原由佳

「メメント」「バニラ・スカイ」のP・ワックスバーガーが製作総指揮だけに、本作も、現実世界と脳で構築する世界との境界が曖昧な人物が登場。この青年の抱える問題が境界例の症状と様々な点で合致するところが興味深い。医学的にどこまで検証しているのかは不明だが、他人と自分の人格を別個のものと捉えることができず、他人の生活に著しく侵食していく様はある種の現代人の抱える病を言い表していると思う。それを盗撮と絡める発想は面白いけど、ラストのオチはかなり甘いなあ。

★★★

浮気な家族

監督／イム・サンス　出演／ムン・ソリ、ファン・ジョンミン、ユン・ヨジョン（ギャガ配給）●シアターイメージフォーラムにて上映中

「ディナーの後に」のイム・サンス監督が、「オアシス」で注目されたムン・ソリを主演に描くブラックコメディー。浮気している夫、幼い養子、わがままな姑、病気の義父を抱えた人妻がとった行動とは……。

人間考察に悪意が込められた映画である。でもこれは批判ではない。これほど冷酷に醜く人間の本質を描くことが、はたして日本映画にできるだろうか？韓国映画は成熟している、と思う。不倫をする夫。隣家の高校生を誘惑する妻。老いらくの恋（？）で家を出てゆく夫妻の母。そしてラストの鍵を握る郵便配達夫。崩壊してゆくこの弁護士一家は、あの「アメリカン・ビューティ」を連想させる。若き日の李麗仙を想わせるムン・ソリのあくの強い、粋でみだらな性的魅力に圧倒された。

★★

不倫する夫も、隣家の高校生との情事に溺れる妻も、夫が死んだおかげで始まった新たな性愛生活を喜ぶ姑も、イヤ〜な雰囲気の現実感がある。このテーマにしてこの表現方法を選んだ監督の気持ちもわかるが、やはりメンタリティの違いを痛感する。〝赤裸々〟にも色々な方法があるし、曝け出すばかりが能ではない。エロスというより、生々しくリアルな肉体性。生理に直結する慎みのない表現。この映画に限らず、最近の韓国の意欲的な作品のセックス描写には、正直言って疲れる。

★

朝鮮戦争の戦没者の遺骨を発掘する作業に立ち会った弁護士ヨンジャクが、穴に転がり落ちる冒頭の場面は、彼の状況を暗示している。遺骨の発掘と余命いくばくもない彼の父親の存在は、歴史を象徴している。母親や息子夫婦は、病院では結束して父親を支える家族に見えるが、実はそれぞれに浮気している。豊かな生活を送る彼らには、歴史はもはや重荷でしかない。このドラマは、歴史やイデオロギーと自己の欲望に忠実に生きようとする孤独な肉体の相克を鮮やかに浮き彫りにしている。

★★★★

夫に期待せず、義母の嫌味を受け流し、義父の最期も淡々とこなす。ムン・ソリ演じる妻の家族というものへの期待を捨てた、諦念ぶりに感動すら覚える。セックスの後、夫を尻目に、満たされぬ欲求を自分でさっさと処理する即物的な場面は露骨だが、家族の中で自己完結している現代妻たちの姿を完璧に象徴している。むしろ、養子の少年が息子の役割を必死に模索し、夫婦の仲介役を演じている光景に泣けた。社会的な仮面を脱いだときの夫の未熟さを日本映画ももっと、鋭く描くべきだ。

★★★

夢幻彷徨　MUGEN-SASURAI

監督／木村威夫　出演／銀野吟八、藤野羽衣子、秋桜子、飯島大介、石川真希、佐野史郎（ワイズ出版配給）●7月3日よりポレポレ東中野にて

日本映画美術界の重鎮・木村威夫が85歳にして初めて監督に挑んだ中篇。自身が手がけた名作のセットを再現しながら、戦火の中で出会った男女の宿命的な恋の行く末が、前衛的なイメージの中で描かれていく。

恩地日出夫、黒木和雄、そして木村威夫。かつて日本映画の黄金期を作った映画人たちにとって、第二次大戦の悪夢は生涯を貫く重いテーマなのだろうか。空襲のさなかに出逢った男と女の放浪がジャポニズム表現主義のデカダンスを通して描かれる。日の丸。防空頭巾。ヒロシマ。哀切の歌謡曲。ノスタルジーの断片のコラージュ。星条旗を裸身にまとい、日本刀を持って踊る女は、かつてみた前衛舞踏劇のように観念的だ。日本映画美術の巨匠である氏の85才の処女作に敬意をもって星を加えたけれど……。

★★

映画というより、動くアートとでもいえばいいのだろうか。一応、男女関係の設定と流れはあるようだが、想念というようなものではない。監督の戦争に対する思いの中で断片的なイメージが浮遊し、装置や美術、オブジェのような人の映像となって結実する。ただ、美しく。そこから伝わってくるのは、監督のイメージに対する執着である。そういう意味では、監督の素直で正直な気持ちが表れた作品だと思う。むしろ〝脚本〟など無視してイメージを並べれば、もっとさすらえたろう。

★★

戦争と戦後という時空を彷徨う男女の運命を、台詞を使わず、映像と音楽だけで描いた極私的かつ極詩的な作品。日の丸と星条旗のコントラスト、体を売って暮らす女の境遇、バックに流れる『星の流れに』などは「肉体の門」を想起させる。様式美に貫かれたセットや微妙な光によって深みをおびる色彩、多様なイメージとデジタル処理が生みだす異空間。緻密に作り込まれた映像は、完璧なアートになっている。但し、そんな映像世界にストーリーをはめ込むのは、少し無理があるように思う。

★★★

石井輝男、鈴木清順、林海象etc.etc.と、様々な映画監督の作品の場面が去来するのは、それだけ彼らの作品が木村威夫の美術に強く支えられていた証でもあるのだ。初の映画監督作だけれど、戦争の悲惨さ、原爆のオゾましささえ、様式美にしてしまう美術監督の性や執念を感じた。運命に翻弄される男女の悲哀、切なさが昇華される分、おどろおどろしい人間の生々しさ、リアルな痛さは排除されている。それがいいか、悪いか、ではなく、ただ見るか、見ないかの問題だ。

★★

★★★★…必見！　★★★…一見の価値あり　★★…悪くはないけど　★…私は薦めない

音楽があってよかった。そんな3本。「スウィングガールズ」は女子高校生たちが弁当一個のためにビッグバンドジャズをやるという話。矢口史靖監督らしく、相変わらずバカバカしく、くだらない展開だけれど、あきれて観ているうちに、いつしか画面から清々しい風が吹いてきて気持ちよくなり、終には好きになってしまう。その不思議な魅力に、今回は彼女たちの懸命にジャズを演奏する姿がプラスされて、実に楽しい。

試写よりの使者

The envoy from previews.

宮崎祐治 ㊿66

ジャニス・ジョプリンとジョン・レノンに今も狂っている従弟を騙して金を取ろうとする、保険会社の男の作戦を描く「歌え!ジャニス・ジョプリンのように」。LSDをやり過ぎた従弟役クリストフ・ランベールがとぼけていて、結構笑える。

「炎のジプシー・ブラス〜地図にない村」はルーマニアのバンド「ファンファーレ・チョカリーア」に迫ったドキュメンタリー。ドラマ仕立ての「つくり」の演出が見え隠れするが、村から生まれた音楽が圧倒的に存在していて全てを被いつくす。

ひとり男子、平岡祐太は矢口監督そっくり。

「スウィングガールズ」は上野樹里ら全員が山形弁をどんどん話してまるでリズムのように聞こえる。楽器を手に入れるのに、バイトから始めるのも高校生らしく時間がたくさんある感じた。

「才能ないから、あきらめろ!」とお互い怒鳴り合うシーンが出色。

ジャニスに扮する妻マリー・トランティニャンの遺作となった「歌え!ジャニス・ジョプリンのように」。暗かった彼女は歌うことで開放されていく。その隣りで混乱する夫セルジ・ロペスの行動を省略してみせる演出がうまい。この新人監督はなかなか。

「炎のジプシー・ブラス〜地図にない村から」。村人が線路の上をよく歩いているのは道がぬかっているからだった。ツアーでやって来た渋谷の街が映されて「まぶしいな、進んだ国は」と言っていたが、村よりずいぶん安っぽく見えた。

立川志らくのシネマ徒然草

⑱⑤チャールトン・ヘストンに謝りなさい

今年のカンヌはマイケル・ムーア監督の「華氏911」がパルム・ドールを受賞した。観ていないからなんとも言えないが、私はこの監督をあまり好かない。「ボウリング・フォー・コロンバイン」を観てそう思った。とっても面白いドキュメンタリーであったが、やりすぎなんですよね。チャールトン・ヘストンの家に行った際、話を聞いてくれないヘストンに怒り、玄関に銃で殺された六歳の少女の写真をおいて帰った。どうしてそんな嫌味なことをするの？ 少しでも銃問題について考えてもらいたいという気持ちであろうが、気持ちの悪いやり方だ。ヘストンの家だけだからその気持ち悪さが目立たないが、ライフル協会のメンバー全員の家に写真を置いたとしたら？ だいたい名優チャールトン・ヘストンに対して失礼だ。映画界の人間ならばもっと敬意を示すべきだ。確かに銃問題に関してはイライラするほどヘストンは分からず屋だ。だけど彼は銃に対して信念を持ってやっているわけで、例えば自民党の議員のところに共産党の議員が出かけていって、政治理念の間違いを説いたところで、なんになる、ってはなしだ。マイケル・ムーアの何がずるいかって、ヘストンとアポを取る時に、自分は映画監督でライフル協会員であるといって約束を取った事だ。ヘストンは仲間が会いに来てくれたと思った。それなのに……。ヘストンは過去、散々、猿にいじめられたり、ローマ帝国で奴隷として働かされたり、大変だったんだぞ！ いじめちゃ駄目。どんなに愚かな思想を持っていようが、相手はチャールトン・ヘストン。間抜けに描くなんて映画人のやることではない。マイケル・ムーアは作品の中で、「銃事件があった翌日、その街で銃の大会を開いた事に対し、市民に謝るべきでは」とヘストンを責めていたが、私は言いたい。チャールトン・ヘストンをただの馬鹿に描いた事を映画ファンに謝罪しなさいと。

　でも「ボウリング・フォー・コロンバイン」はよく出来ている。カナダの人は家に鍵をかけないというのは驚きだった。市民の七割が銃を所持しているにもかかわらずだ。アメリカばかりがどうしてそんなに銃の事件が多いのか。単純に皆が銃を持っているからだと誰もが思っていた。そうじゃなかったんですね。国と大手の企業が消費の名の下に国民を不安にさせているから。テロ対策の為にガスマスクを買いましょう、自分を守る為には銃が必要、ダイエット食品はこれがいい、口臭薬、水虫の薬、最新ファッションはこれ、等々、どんどん人々を不安にさせていく。この社会の構図が悲劇を招いたのだ。考えてみると日本もアメリカに近い。だけど銃事件は少ない。それは銃が日本にたくさんないから。その代り、年々、事件の異常さが増してきた。日本で銃の所持が認められるようになったら、アメリカと同じぐらい犯罪が増えるだろう。

「ボウリング・フォー・コロンバイン」

　パルム・ドールの「華氏911」はどんな映画だろうか？ どうも私はここのところカンヌと気があわないからな。「エレファント」「ダンサー・イン・ザ・ダーク」「戦場のピアニスト」……。昔は「スケアクロウ」「タクシー・ドライバー」といった文句無しの秀作が選ばれたんだけどね。もっと古くは「恐怖の報酬」「第三の男」といった名作が選ばれている。いつからひねくれてしまったんでしょうか？ 観てなくてこんな言い方は失礼だが、マイケル・ムーアのドキュメンタリーが選ばれるなんて、その昔の日活ダイヤモンドラインに素人が入っちゃったみたいな違和感を覚えるんですけど。

　それにしても是枝監督、おめでとうございます。最新作「誰も知らない」の子役が男優賞受賞。監督が代理で賞をいただいておりましたね。是枝監督はテレビで私のドキュメンタリーを撮ってくれた人。そのお礼というわけではないが、数年前、インディーズ映画祭で監督の「ワンダフルライフ」に立川志らく賞をさしあげたのだが、今ではカンヌ。どんどん偉くなっていきますね。一度、監督協会の句会においでください。宗匠は志らくです。お待ちしております。お元気で……って最後は手紙になってしまった。

映画を見ればわかること

川本三郎

65「バーバー吉野」のこと、「荒野の決闘」のことなど

町歩きをしたり、旅に出たりした折りに、よくその町の床屋に入る。髪を切ってもらいながら町の話を聞く。いい居酒屋を紹介してもらうこともある。

ご存知のようにいま日本の田舎町は急速に過疎化している。若い人が次々に都会に出て行ってしまう。そんな寂しい町でも最後まで残る店は、なぜか、酒屋と美容院、そして床屋である。町の社交場になっているためだろうか。

荻上直子脚本・監督の快作「バーバー吉野」は小さな町の床屋の話。伊豆の下田あたりでロケされているようだが、いまどきよくこんな床屋が残っていると驚くような古ぼけた店。メガネをかけたおばさん（もたいまさこ）が一人で切り盛りしている。

町では男の子たちが、みんなこの店で髪を切ってもらうので、同じ髪型をしているのが面白い。おかっぱ。女性作家、吉屋信子がこんな髪型をしていたっけ。

昔から髪型はこれと決まっていて、それが吉野刈りと「伝統」になっている。そこに東京からしゃれた髪型の男の子が転校してきて、てんやわんやの大騒ぎになる。

床屋のおばさんは、子供たちに無理矢理、同じ髪型を押しつけるヘンな人だが、だからといって別段、独裁者などではない。彼女なりに店を守ろうと必死である。

店は先代の頃から、ほとんど変っていないのではないか。設備も古い。小津安二郎監督の「浮草」(59年）に登場した三重県の田舎町（大王町）の床屋（高橋とよ子と野添ひとみの親子がやっている）のほうがまだきれいだった。竹中直人監督の「東京日和」(97年）に登場した北原白秋の故郷、柳川の床屋（主人は名傍役、村上冬樹）には古いながらも風格があった。

ところがおばさんのバーバー吉野はただ古ぼけているだけ。いまや死語と化している「散髪」という言葉が平気で使われている。東京からの転校生がこんな、時代から取残されてしまったような店では髪を切りたくないのはよくわかる。

小学生の男の子でも美容院に行く時代、店はかなり苦戦を強いられているのではあるまいか。料金を通常より安くしているのはそのためだろう。

町じゅうの男の子が全員ここで「散髪」するのなら（料金は七百円）もっと金持であってもいい筈だが、少子化のためか、あまり潤っているようには見えない。げんにおじさん（浅野和之）はどこかの会社に勤めている（リストラになる）。

そんなわけで、おばさんが独裁者などにはとても見えず、むしろ小さな町でなんとか床屋を続けようと奮闘している個人商店主に思えて、声援したくなった。

もしかしたら妙な天狗の話などで同じ髪型の伝説を作り上げたのは、おばさんの懸命な生き残り策だったのかもしれない。

小さな町の床屋の苦戦を知っているのは実は、ヘンテコな吉野刈りに反抗した子供たちだろう。最後、子供たちがまたいつものようにおばさんの店に遊びに来るところは、ほっとした。

イラストレーション　ムカサリツコ

「バーバー吉野」

床屋といえば、二十年ほど前、愛知県の富山村という、人口二百十三人（当時。現在は二百二十四人）の日本本土でいちばん小さな村を旅したことがある。

床屋があったので髪を切ってもらおうとしたら、ちょうどその日で閉店。店をやっていた女性が結婚して浜松に行ってしまい店は終り。無医村ならぬ無床屋村になったと村の人が困っていた。そんなことを思い出すと、バーバー吉野の健闘を祈らずにはいられない（富山村ではその後また床屋が再開したという）。

6月上旬号の本誌を開いたらまっさきにジョン・フォード監督「荒野の決闘」（46年）のDVDの広告が目に入った。待望していた。発売日に銀座の山野楽器店に飛んで行き、無事、手に入れた。

飛んで行ったのには理由がある。二月にコロムビアの西部劇のDVD・BOXが発売された。そのなかに西部劇ファン垂涎の「決断の3時10分」（57年）が入っている。エルモア・レナード原作、デルマー・デイヴィス監督、グレン・フォード、ヴァン・ヘフリン主演。これまでビデオテープにはなっていない。

発売日に山野楽器店に行った。夕方だった。もう売り切れていた。注文して手に入ったが、熱心な西部劇ファンがいると、恐れ入った。それで今回は早目に出かけた。

DVDには特典が付いていて、スコット・エイマンという伝記作家が「荒野の決闘」の細部にわたって分析している。

「アクションは長く、セリフは短く。それで映画が良くなる。それには西部劇がいちばんいいとジョン・フォードは考えた」

「フォードはロケを好んだ。ロケ地には、口うるさい映画会社のお偉方がやってこないからだ」

牛を運んでいるアープ兄弟が、一夜、トゥームストーンの町に出かける。留守役の末弟ジェームズ（ドン・ガーナー）がクラントン（ウォルター・ブレナン）の一家に殺される。町からキャンプに戻ってきたアープ（ヘンリイ・フォンダ）たちは、弟の死体を発見して愕然とする。

解説によると、弟の死体をよく見ると片足が馬のあぶみに引っかかっている。おそらく彼は馬で逃げようとしたところを撃たれ、馬から落ちたのだろう。死体にも動きがある。こういう細部にこそフォードの真骨頂があるとエイマンはいう。

これまで何度も「荒野の決闘」を見てきたが、これには気が付かなかった。

またエイマンによれば、「荒野の決闘」には先行する作品がある。一九三九年に作られたアラン・ドワン監督の“Frontier Marshall”。日本未公開。ワイアット・アープはランドルフ・スコット、ドク・ホリデイはシーザー・ロメロ。「荒野の決闘」はこの作品を受継いでいるという。

このことは、西部劇好きの作家、逢坂剛さんが、『毎日新聞』に連載していた〝西部劇小説〟『墓石の伝説』で指摘していた。ぜひ見てみたい作品だ。

そういえば「荒野の決闘」にも「バーバー吉野」と同じように床屋が出てきた。トゥームストーンの保安官になったヘンリイ・フォンダのアープが町の床屋に入り、主人（ベン・ホール）に髪を切ってもらい、ハニーサックルローズの香水をつけてもらう。ガンファイトだけではなくこういう開拓時代の日常生活を描くところがこの映画の良さだろう。

連載

日本魅録（にほんみろく）㉟

香川照之

篠原哲雄、ふたたび

何かの質問で「それでは、今年あなたの記憶に残った撮影を三つ挙げて下さい」と言われたら、きっと一つはこの変てこりんな現場のことを思い出すのだろう。

長期に及んだキツい映画撮影だった訳ではない。さりとて過密で苛酷なテレビドラマの撮影だったのでもない。しかし、「映画監督・篠原哲雄が贈るグラフィック・ムービー」と名付けられ、先日、初夏の八ヶ岳で数日間写真を撮りまくっただけの広告用スチールの撮影は、予想外の展開と劇的なラストが周到に用意された実に不思議な現場だったのである。

それはホンダの「エリシオン」という新車の、車雑誌とかに差し込まれるコマーシャル冊子の写真を撮る企画で、夫婦と子供二人の家族四人がワゴン車を買ってカーナビで山奥に行く過程を写真で追っていくという何の変哲もないものだった。監督は「月とキャベツ」「深呼吸の必要」のその篠原哲雄。撮影が「ハッシュ！」の上野彰吾。照明は「独立少年合唱団」の赤津淳一。美術は「失楽園」の小澤秀高。特に上野と小澤は、篠原監督の新作「天国の本屋～恋火」でも私と顔を合わせたばかりだ。

だが、この、ただスチール写真を収めるために集められたスタッフが、なぜか全員普段映画畑でバリバリ働くムービーの専門家だったことが、現場を「変てこりん」に変えていく。初日、写真を撮るのにこれだけ映画組のスタッフを揃えるメリットがどこに――と首を傾げながらロケ現場に足を踏み入れた瞬間、そこがコマーシャルのスチール撮影とは似ても似つかない旧式の「コテコテの映画スタイル」で埋め尽くされている様を見て、私は早くも嫌な予感が的中したことを知るのだった。

だいたい、わずか十ページほどの冊子に配置される二十数枚のカットを押さえるのに、どういう訳だか来る日も来る日も朝五時半に集って、現場では映画並みにライティングの待ち時間を耐えるその間も、助手を三人抱える照明班はもう馬鹿みたいに丁寧なセッティングを繰り返し、助監督が二人いそいそと動き回って「じゃあそろそろ回していきますか」と監督に聞くと、監督は「じゃあ回していこう、ヨーイ、スタートッ」と掛け声をかける視線の先には、見事に組み立てられた六尺イントレの上に鎮座した三脚、そしてその三脚の最上部にチンと据えられた葉書大のキャメラ――大がかりな機材に囲まれた、不自然に小ぶりな一眼レフだかのデジカメが、撮影

監督・上野彰吾の手によって「カシャ、カシャ」と厳かな音を立てている様子は、実に奇妙な光景なのであった。

第一、何を「回していく」というのだ。現場に「回る」ものなど何もないのだ。また何かを回す必要だって全然ない。ただシャッターを押せばいいのだ。ところが監督は「じゃあ回そう」とこれでもかと言い続け、助監督は「ではトラック1」と呟きながらデジカメのレンズ前にカチンコを出し、それをファインダーから覗くキャメラマンが「はいボード入った」と返事をしながらパシャッと一枚写している。――やれやれ。写真を撮れば終わりなのだから当然録音部はいないのに「トラック」という言葉をわざわざ使い、それに「トラック1、はい、本番!」と答える意味の無さ。で、なぜか日々二十三時あたりまで延々終わらない撮影――我々が早朝からやっている作業は、本編の撮影ともう何ら変わらないのだった。

右より撮影・上野彰吾、篠原監督、照明・赤津淳一

「今回のやり方って、映画の時とどう変えてるんですか?」

私はついに満を持して監督にこの質問をぶつけてみる。

「いや、同じです。っていうか、このやり方しか出来ないから」

写真という二次元の産物を生み出すのにも、頑なに映画的な三次元の手法を貫いたのは、実は職人ゆえの選択肢の狭さから来るものだったという訳である。

そんなこんなでこの現場では、従来のスチール撮影の時のようにキャメラ手持ちで自由に被写体を写すことはほとんどなく、三脚にキャメラを据えての定点観測が主となった。その前で我々俳優陣は、さも映画の三十五ミリキャメラが回っている時のように撮影台本に則した演技をセリフ込みで演じていく。映画なら、これが言わばマスターショットとしての引きの画となり、俳優たちの寄りの表情はキャメラを据え直してカット・インとして追加された。ちなみにこれは、「天国の本屋〜恋火」で篠原が採用した撮り方そのままであったことは言うまでもない。

車内のカットでは、監督以下のスタッフが大挙して車に乗り込み、大がかりな牽引で何度も何度もお台場のトンネルの中を行ったり来たりした。最後には、「よーい、ハイッ!」という監督の掛け声の元ではむしろキャメラが回っていないことが不思議に思える程にさえ感じられた。何よりも、「天国の本屋〜恋火」で竹内結子とのシーンを全段ほぼワンカットで乗り切った篠原監督と上野キャメラマンが、ロケセットの部屋の奥でじっとこちらを睨んでいると、あの時北海道で自然と湧き出た満タンの感情が思い出され、知らぬ間に映画ならではの濃密で崇高な空間が現出していくような気がした。神秘的なデジャビュだった。

それにしても時代は進化したものだ。今や、車のボンネットに吸盤で吸い付けられた精密そうな台座の上にリモコンで制御されたデジカメを設置したり、ロケセットでは三十型のハイビジョン・テレビにデジカメを接続してクリアな静止画がモニタリングできるのだ。こんな技術革新を目の当たりにしていると、銀幕に像を映写する映画の撮影は何やら遥か遠い過去の遺物のように感じられる。

けれども――雨が降り続いた撮影最終日――本当にもう最後という日没前の十分間だけ黒い雲が俄にかき割れて荘厳に夕焼けが現れ、八ヶ岳の立体的な山間が一瞬水墨画のように輝いた時だけは、長年映画を創り続けてきたスタッフたちが現場にいたからこそ起こった神がかりの奇跡だったと確信するのである。それは、いかにデジタル化が進んでも、映画の神様が微笑んで起こる奇跡は自然界に永遠に存在し、この奇跡は日進月歩するデジタル性を常に凌駕することを暗示しているのではあるまいか。

さて――現場で携帯電話を流れるように扱っていた、私の娘と息子を演じた二人の小学生の俳優たちの眼には、この聖なる奇跡はどのように映ったろうか?

リレー・エッセイ
映画と私 207

藤子不二雄Ⓐ
漫画家

映画は子供の頃から観ていた。

ぼくの生家は富山県氷見の曹洞宗のお寺だったが、よく小僧さん（といっても二十歳頃だが）に連れられて映画館へ行った。当時は時代劇映画の全盛で、大河内伝次郎、阪東妻三郎、嵐寛寿郎、片岡千恵蔵……といった時代劇スタアが大活躍だった。その中でもぼくは特に嵐寛寿郎の「鞍馬天狗」シリーズが大好きだった。

国民学校五年生の時、父が亡くなり、お寺を出て高岡へ引越しをした。当然、学校も転校したが、ここで生涯の相棒となった藤本弘君（藤子・F・不二雄）と出会った。

藤本君も大の映画好きで、よく一緒に映画を観に行った。その頃、大映映画にディズニーの短編アニメを併映していて、それを観たさに大映の映画館へ行った。ニュース映画のあとにディズニーの「シリー・シンフォニー」シリーズの短編をやる。そのあと二本立て。ぼくたちはもう一回アニメを観たいために、我慢して二本

映画と漫画は深い相関関係にある

「少年時代」

立て（母ものやアチャラカ時代劇etc.）を観るのだ。しかし、我慢して観る価値はあった。その頃上映した「シリー・シンフォニー」シリーズは「子供の夢」や「三匹の仔豚」「丘の風車」etc.珠玉のような傑作揃いだった。

たまたま、ぼくの居た家の隣が映画館だった。明日がテストで机の前に坐っていると、ジリジリジリ〜と映画館のベルが鳴る。〈えーい、勉強はあとだ！〉とノートを投げ捨てて映画館へ走る。そんな事がしょっちゅうだった。おかげでテストは散々の始末。

それにしてもあの頃は映画の全盛時代だった。戦争が終わり、世界中から映画が日本へやって来た。アメリカ映画は勿論、フランス映画、イギリス映画、ソ連映画も続々と封切られた。その中でも最高傑作はやはりキャロル・リード監督の「第三の男」(49)だろう。藤本君と映画館を出たあと、ぼくの家で興奮して話し合ったのを憶えている。ぼくらの初めての連載漫画『四万年漂流』のオープニングは、ほとんど「第三の男」のオーソン・ウェルズの地下道での迷走シーンからのイタダキだった。

アメリカ映画はジョン・ヒューストン監督のクライム映画がたまらなかった。「アスファルト・ジャングル」(50)などは今でもワンシーン、ワンシーン思い出すとゾクゾクッとしてくる。影響を受け易いぼくは『コンクリート・ジャングル』というギャグ漫画（!?）を描いたほどだ。

日本映画も負けてはいなかった。松竹は小津安二郎、木下恵介、大映は溝口健二、吉村公三郎、東宝は黒澤明etc.と名監督の絶頂期だった。ぼくは当時、漫画家を夢見ていたが、気持ちのどこかで〈映画監督になりたいなぁ〉とも思っていた。

高校を出て富山新聞社へ入った。学芸部に所属してラジオ欄や少年少女欄を担当していたが、先輩の退社で映画欄を担当する事になった。当時、富山市内に七館の映画館があり、そこで上映している映画を夕刊に紹介するのだ。毎日映画を観て、その紹介記事を次の日の夕刊に出す。こんなオイシイ仕事はない。ぼくは有頂天になった。

そんな時、ジョン・ヒューストン監督の新作「赤い風車」(52)が封切られた。ホセ・ファーラーがロートレックになって、あのムーラン・ルージュの日々を描く。期待して観たがいまいちのれなかった。それでチョッピリ辛口の批評を書いた。次の日、夕刊を開いて驚いた。ナント!? 見出しにゴシックで

ヒューストン監督にしては駄作！

と出ているではないか。しかも、その真下に映画館の「赤い風車」の広告が！ 広告部長が飛んで来て、ぼくは学芸部長と二人の前に呼びつけられた。広告部長がどなる。「とんでもないことを書いてくれたな。映画館から厳重な抗議が来とるぞ。もう、おたくの新聞には広告は出さんと言ってるんだ。どうしてくれる！」学芸部長のとりなしでなんとか堪忍してもらったが、それからはヘンな批評家意識は捨てて、作品のいい所だけを褒めまくるようにした。

漫画家を目指して昭和二十九年に藤本君と二人で上京した。東京へ来て一番嬉しかったのは、いろんな映画を観放題できる事だった。東京新聞の映画欄を探って、富山で観られなかった映画を毎日のように観まくった。一日に七本観た事もあった。

映画はぼくの描く漫画に大きく深く影響を与えている。はっきり意識はしていないが、ぼくは映画を作るつもりで漫画を描いているようだ。ぼくの気持ちの中で映画と漫画が強い繋がりを持って絡み合っている。平成二年、ぼくは映画「少年時代」を作った。柏原兵三「長い道」を原作に、脚本・山田太一、監督・篠田正浩という最高のコンビで。主題歌は井上陽水。初めての映画プロデューサーの体験は、ぼくに新しい世界の扉を開けてくれた。映画の製作に関わった事で、逆に漫画の持つパワーを新発見した。映画と漫画は深い相関関係にある事もわかった。ものを創る意欲の対象として、映画も漫画も変わりはない。

実はもう一本だけ製作したい映画の企画がある。できたら近い内にそれをまず漫画化し、それから映画化したい（!?）と思っている。

ふじこ・ふじお・えー／（本名：安孫子素雄）1934年富山県生まれ。主な作品は「忍者ハットリくん」「怪物くん」「プロゴルファー猿」「まんが道」「少年時代」「笑ゥせぇるすまん」「愛…しりそめし頃に…」など多数。氏の映画好きは有名で、映画に関するエッセイ集「パーマンのわくわく指定席」や黒澤明監督の「用心棒」を漫画化したものもある。90年に自作「少年時代」を篠田正浩監督、山田太一脚本、自らのプロデュースで映画化、日本アカデミー賞をはじめ数々の映画賞を受賞した。今年、「忍者ハットリくん」が香取慎吾主演で映画化され、8月28日から公開となる。

●●連載最終回

降る影 待つ光

照明技師 熊谷秀夫

長谷川隆

１９２８(昭和三)年11月1日、京都生まれ。京都市立第一工業学校卒業後、48年二月、大映京都撮影所に照明係として入所。「雨月物語」「山椒大夫」「近松物語」等の溝口健二作品や、大映のカラー第一作「地獄門」などに照明助手としてつく。56年に上京、日活東京撮影所に入社。58年、「赤いランプの終列車」で照明技師として一本立ち。「非行少女」「けんかえれじい」「東京流れ者」「紅の流れ星」「無頼より 大幹部」等を担当する。日活の路線変更以降も、ロマンポルノ第一作「団地妻 昼下がりの情事」を皮切りに、「㊙女郎責め地獄」「天使のはらわた 赤い教室」等の傑作を手がけ、その一方で「潮騒」「絶唱」等の山口百恵主演映画にも携わる。日活在籍中に担当した作品は百本を超える。81年に日活を退社した後は、長谷川和彦、藤田敏八、寺山修司、和田誠、平山秀幸といった多様な作家たちの作品に参加する。中でも「セーラー服と機関銃」から始まった相米慎二監督とのコンビは長く続いた。75年「東京エマニエル夫人 個人教授」で日本映画照明技師協会奨励賞。93年「おろしや国酔夢譚」で日本アカデミー賞・最優秀照明賞。96年「天守物語」で日本映画テレビ技術者協会賞。97年「学校Ⅱ」で日本映画協会最優秀照明賞。現在、日本映画照明協会会長。

(前回からの続き)

照明部があるのは中国、韓国、そして日本

◆—僕は照明のことはまったく分からないので、目に付く照明、面白い画面について話さざるを得なかったわけです。つまり、これまで熊谷さんとしてきた話は、照明に関する一般論ではいささかもないし、オーソドックスな照明については聞きようがなかったというのが正直なところです。しかし例えば、「夢の女」の次の、「学校」(1)などは、照明が前へ出てくるということがほとんどない、そういう意味でオーソドックスな画面の映画だと思うんですが、こうした映画の場合、腕のふるいどころがなくてつまらないとか、そういうことはないんですか。

熊谷 たしかに「学校」は、特別なことはやってないですね。しかし、つまらないということでもないんですよ。オーソドックスというのは、きめ細かくやらなくちゃいけないんです。作りものなら嘘でもいいということで、最初からそっちの方に持っていけるけど、オーソドックスだとそうはいかない。嘘はつけないですから、かえって

いかに見せるか

気を遣いますね。逆に、技師の力量がはっきり出てしまうということもあるかも知れない。オーソドックスにやる場合は、こういうライトの強さ、角度ということが、おおよそ決まってるわけです。それが出来てないとなると、何だ、ということになっちゃいますね。本質的には丁寧にやらないと駄目です。御都合主義でひとカットかふたカットは撮れても、だんだんアラが出てくる。それは照明する人間の精神の問題でもありますね。感じない人もいると思うんです。その場しのぎで、ハイこっち、ハイこっちというやり方ですね。だけど、それだと画がバラバラになっちゃう。オーソドックスにやる場合は、ライトを置きやすいところへ持っていきがちなんですよ。それがいけないんです。苦しいところにライトを持っていくことだって必要なんです。どんなに条件が苦しくても、そこを逃げちゃ駄目なんです。逃げてやるから、最後はバラバラになっちゃう。

◆—苦しさというのは、キャメラの動きや俳優の動きが、照明を制限してくるということですね。考えてみると、現場では照明がいつでも一番最後です。各パートから出てきた条件の、いわばツケが回って来るという感じですよね。

熊谷 うん、そうかも分からない。キャメラが据わって、芝居の動きが決まってから、照明が始まるわけですからね。キャメラがちょっと上向いたらやり直し、ちょっと右向いたらそこはライト置けない、ということになる。だから助手さんで、キャメラに、ちょっと右向いて、なんて言う奴もいるんですよ。そういうときは叱りますね。たしかに、ちょっとこっち向いて欲しいなって、心の中で思うこと

はありますけどね、それは絶対に言わないです。

◆―海外は、照明部のない国がほとんどですね。

熊谷 中国と韓国にはあるんです。韓国も最近は撮影監督システムが入ってきてるらしいんですが、照明部はあります。日本で照明部というパートが独立した理由の一つには、戦後のライトマンたちが、それまでとはまったく違うライティングの方法を確立したということがあると思うんです。岡本健一さんなんか、昔のライティングにはない、独自のやり方を見つけてきたわけですね。藤林甲さんもそうだろうし、東宝と東映で仕事をした西川鶴三(2)さんなんかもそうだと思います。そういう力のある照明技師が、キャメラマンに対抗するような形が出てきたんじゃないかと思うんです。

◆―照明部と撮影部の間にある葛藤を、ある意味で合理的に解決してしまうのが、撮影監督システムです。キャメラマンが照明プランを立てるという形ですね。日本にも撮影監督システムで仕事をしているキャメラマンは多くいますが、実際には照明に無頓着な〈撮影監督〉も多いと聞きます。

熊谷 日本で撮影監督システムということが言われ始めたことには、松竹大船撮影所の伝統が影響してるんじゃないかと思うんです。大船では、雨降らしや移動を撮影部がやってたんですね。照明の主導権も撮影部が握ってたんです。それが戦前から戦後にかけての話で、高村(倉太郎)さんは松竹出身だから、「昔は撮影部がレフ持ってたんだ」なんて話をよくしてましたよ。そういう伝統でやってきた高村さんが撮影監督協会の会長なわけですからね、それが今の撮影監督システムにつながってきてるように思うんです。キャメラマンと照明技師の力関係というものはつねにあるんです。こっちはわざと暗くしてるのに、キャメラの方はもっと当てろと言う、そこで喧嘩になるという(笑)。でも、「羅生門」(3)なんかでも、手柄はぜんぶ宮川一夫さんに行きましたよね。あのミラーを使った照明(4)なんかも、岡本さんの功績にはならないんですよ。

◆―そもそも批評家が目を向けないでしょう。まず監督を褒めて、次が脚本か俳優か撮影で、あとはせいぜい音楽か美術。

熊谷 照明なんかいつまでたっても出て来ないよな(笑)。

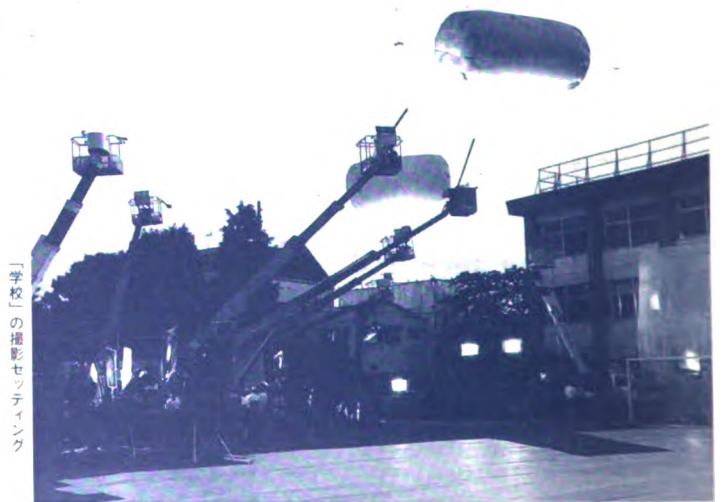
我々は現場上がりなんですよ

◆―誰がどれだけ貢献したかということは、映画は共同作業なんだからどうでもいい。しかし画面のことで撮影だけを褒めるというのは違うと思います。

熊谷 どちらも同じように画を作ってるわけだから、意地やプライドも当然あるんです。ただ、我々は現場上がりなんですよ。技師に怒られて怒られて、それでライトの角度から何から覚えていった。しかしキャメラマンが、ライトを扱うということ、ライティングということをどれだけ勉強してるのか、それは思うわけですね。まあこっちもつまんない意地を張ったりもするんだけど、どうなんでしょうねえ。一人でやった方がいいのか、共同でやった方がいいのか。

◆―イギリスの場合、監督とオペレーターが相談してアングルを決めて、撮影監督は本当に光を作るだけらしいんです。日本の照明部、少なくとも熊谷さんは、そういう

「学校」の撮影セッティング

(1)1993年・松竹。監督・山田洋次、撮影・高羽哲夫、長沼六男。出演・西田敏行、竹下景子、萩原聖人、中江有里、神戸浩、裕木奈江、渥美清、大江千里、田中邦衛。
(2)担当作品に、「燃ゆる大空」(阿部豊)、「加藤隼戦闘隊」(山本嘉次郎)、「こころ月の如く」(稲垣浩)、「武蔵野夫人」(溝口健二)、「めし」(成瀬巳喜男)、「次郎長三国志」シリーズ(マキノ雅弘)、「独立愚連隊」「日本のいちばん長い日」(岡本喜八)ほか。
(3)1950年・大映京都。監督・黒澤明、撮影・宮川一夫、照明・岡本健一。
(4)主な舞台の一つである森の中の撮影で、太陽光を再現するため、鏡による反射を用いた。

「学校」カメラ右隣に熊谷秀夫さん

意味では撮影監督と同じなんじゃないかと思います。

熊谷 まあ名前はどうでもいいんじゃないですか。木村大作(5)さんは「赤い月」(6)で、クレジットが〈撮影者〉なんですよ。「映画には監督がいるんだから、監督二人は要らない。俺はキャメラを回した人間だから〈撮影者〉なんだ」と。撮影監督にこだわってないんです。

なるほどと思いましたよ。

◆―〈照明者〉である熊谷さんの新作、「透光の樹」(7)の公開がまもなくです。

熊谷 今でも現役でいられるということは恵まれてると思います。それは、ずっといい土壌で来たからだと思うんです。大映で基礎を覚えて、日活で(鈴木)清順さんとかマッさん(舛田利雄)とか、いろんな監督に育てられてね。ロマン・ポルノをやったのも、結果的には良かったわけですよね。いろんな技術を試せて、そこでゴジ(長谷川和彦)や相米(慎二)さんと出会って、それがフリーになってからの仕事に繋がっていったわけですからね。そういう巡り合わせが、何より幸運だったと思います。

◆―今の日本映画界を見て思うことはありますか。

熊谷 単館封切りとかで、映画の本数は増えてますよね。ただ、作ればいいというものではないと僕は思うんですよ。作りたくてうずうずしてる人はたくさんいるでしょうけど、作るからには責任を持たなくちゃいけない。我々はプロですからね。映画はお客さんが入ってナンボというものでしょう。観てもらわないと意味がない。結論はそこですよ。まずお客さんを満足させるということですよね。俳優さんを綺麗に見せるということも、そこに結びつくわけですよ。作ればいいという形は、お客さんに対して無責任だと思うんです。そこを徹底してるのはアメリカ映画ですよね。いかに見せるかということで徹底してるでしょう。最近はちょっとCGが多すぎるような気はするんだけど。

◆―日本映画でもCGの役割はどんどん大きくなってますよね。影が一つしか出てないのは照明が丁寧だからだ、というような話が成り立たなくなるような気もします。余分な影はCGで消せばいいじゃないか、とかね(笑)。

熊谷 ロケーションで雪が降ったらどうするんだ、なんて相談してると、そんなのCGで消せばいいよって話になりますからね。明かりだって好きなように出来るようになるかも知れない。照明の役割が変化していくなら、それには付いていかなきゃいけないと思います。しかし、それでは驚きがなくなっていくんですよ。どうせCGだろう、と思っちゃうと、映画を観ても凄いなと思わないんでしょう。木村大作さんの〈撮影者〉というのも意地を感じるよね。CGじゃなくて、わざわざ中国まで行って〈撮った〉んだぞという。

◆―CGではない〈当てた〉んだぞという熊谷さんの仕事に、これからも期待しています。長い間、ありがとうございました。

これまで読んで下さった皆さんもありがとうございました。とりあえずの〈最終回〉です。連載に協力・助力をいただいた方々にこの場を借りてお礼申し上げます。それから――インタビュー時の様子を撮影したビデオが、「照明熊谷学校」のタイトルでドキュメンタリーとしてまとめられ、公開予定です。熊谷さんの照明を、文字ではなく実際の映像で、熊谷さんの語りとともに確認できるチャンスに、乞うご期待。

(5)担当作品に、「八甲田山」(森谷司郎)、「復活の日」「火宅の人」(深作欣二)、「駅 STATION」「あ・うん」「鉄道員〈ぽっぽや〉」(降旗康男)、「花園の迷宮」(伊藤俊也)、「天国の大罪」(舛田利雄)、「時雨の記」(澤井信一郎)、「誘拐」(大河原孝夫)、「陽はまた昇る」(佐々部清) ほか。

(6)2004年・東宝＝日本テレビ＝電通＝読売テレビ＝読売新聞社＝日本出版販売＝S・D・P。監督・降旗康男、撮影・木村大作、照明・渡辺三雄。

(7)2004年。監督・根岸吉太郎、撮影・川上皓市。出演・秋吉久美子、永島敏行、吉行和子、うじきつよし、村上淳、戸田恵子、寺田農。

前作「魂遊び　ほうこう」から
実に17年――名匠・高林陽一監督が
待望の新作「愛なくして」を発表した。
その公開にあわせ、
初期の短・中編や、
「すばらしい蒸気機関車」の
ニュープリント版、ATG作品など、
全13プログラムの上映が東京で
開催されている(大阪では昨秋開催)。
京都から上京された
高林監督にお時間を頂き、
このたびの復帰のいきさつや
作品に込められたメッセージなど、
興味深いお話を伺った。

スペシャルインタビュー

高林陽一

高林陽一監督の「遺書」としての「愛なくして」

取材・文＝植草信和

京都で活動する知られざる役者たちを起用

高林さんの「8ミリ映画」の時代からの盟友である大林宣彦監督は26年前の1978年に出版された『あの遠い日の映画への旅』という本の「まえがき」で、高林さんの人と作風についてこんなふうに書いている。

「高林さんにとって、此の世は闇であるとしても、高林さんにとっての冥府には、何時でも明るい日射しが充満している様である。其の至福の世界に向って旅立ちたいと願う心が、憧れが、高林さんの映画に不思議に明るい叙情を、何時も余韻しているのである。暗い様で、陰湿な様で、どろどろしている様で、ぼくが高林さんの映画から感じるものは、何故か静謐で明晰な、空一杯に溢れる日射しの様に、優しく、温いのである」

前作「魂遊び　ほうこう」の公開から17年目の03年に完成した高林監督の新作「愛なくして」は、大林監督がいう「何時でも明るい日射しが充満している至福の世界」である冥府に向って「旅立ちたいと願う心」そのものを描いた映画だ。

高林監督の72歳の人生観が凝縮されていると思わせる新作「愛なくして」は、主治医に安楽死を頼みこむ老人、村を失った長老、夫を喪った妻、不治の病を宣告された青年、記憶を失った中年男性、倦怠期の夫婦……生きる拠り所を持たない登場人物たちだけで構成されている。

映画を撮らなかった空白の16年という歳月が長いか短いかはともかく、55歳で引退を決意した映画監督が72歳で新作を発表したといえば、ファンならずともその時間の経緯には興味を抱くはずだ。

「早すぎる引退」について、「魂遊び　ほうこう」を撮り終えたあと高林監督はこう述べている。

「こうして振り返ってみると、いろいろな映画を撮ってきた。私にとって次の映画とは、一体なんだろう、いや、この次の映画というものがあるのだろうか?　このあたりで、私の映画人生にピリオドを打つのがいいのではないか。私は、心から、そう思った。人生、引き際が大切である。(中略)　1986年秋、『魂遊び　ほうこう』を撮って、私は自分の映画人生にピリオ

ドを打った。私は１９３１年（昭和６年）の生まれである。ちょうど五十五年の歳月が流れていた。以前なら定年の年である。もう、さほど撮りたい映画もない。これだけはどうしても撮っておきたいと思うものが出てくれば別であるが、今、それほどさし迫った映画もない。少し映画を離れてみるのも人生また変わっていいだろう。映画を志して８ミリ映画に始まった私の映画は、私に多くのものをもたらした。もう、それで十分であると思った」（『魂のシネアスト　高林陽一の宇宙』より）

人生80年といわれる現在、また新藤兼人、市川崑といった高齢者が活躍している映画界にあって55歳の「引退」は異常にもとれるが、それが高林陽一という映画監督の特異性といえば言えるのだろう。

では、「もう、さほど撮りたい映画もない。これだけはどうしても撮っておきたいと思うものが出てくれば別であるが」と語った16年後に、高林陽一に何が起こったのか。

「２０００年８月、新劇女優で、『二人だけの劇場セザンヌ』を主宰している遠藤久仁子さんが、どうしても映画を作って欲しいと言ってきたんです。どんな映画ですかと聞いたところ、『京都には苦労しながら地道に頑張っている役者さんがたくさんいます。その人たちの姿を映像にまとめておきたいのです』。私も京都に生まれ、京都でたくさんの映画を撮ってきましたから、何か熱いものが、胸にこみあげてくるものを感じましてね。遠藤さんのなかにある熱いものが伝わってきたんです。だから可能性だけは探ってみましょうということで、カメラマンのとしおかたかお君に頼んで、予算、スタッフ、製作体制のことなどを詰めてもらったら、何とか一千万円くらいあれば作れるだろうということが分かった。

ただひとつ困ったのは、遠藤さんの希望は私に監督してほしいということだったんです」

その時点では体力的にも自信がもてないので、ご自身は応援するだけで若い人に監督を任せるという考えのようだった。

「そうです。『魂遊び』を作って自分の映画人生にピリオドを打ってそれから14年、もう70歳だし体力も衰えていましたからね。しかし私も新劇の小劇団の貧しさ、辛さをよく知っていてそんななかで一生懸命お金を集めて映画を作ろうとしている遠藤さんの一途さに何とか応えたいという気持が強くなってきたんですね」

映画は私に深い喜びを与えてくれました

こうして、劇団京芸、二人だけの劇場セザンヌ、劇団感劇荘といった小劇団の俳優たちのキャメラ・テストが始まった。

「ひとりずつ黒バックの前に立って２、３分のフリー・トークをしてもらい、そのビデオ・テープを

「愛なくして」（03）
企画・製作／二人だけの劇場セザンヌ
製作協力／たかばやしよういちプロ、
ムービーワークショップ、ビジュアルアーツ専門学校
製作／遠藤久仁子　監督・脚本／高林陽一
撮影／としおかたかお
出演／藤沢薫、木元としひろ、栗塚旭、浜崎磨吉、遠藤久仁子、竹橋団、遠藤博圭、稗田邦隆、塩見順一、椋木春奈、坂元剛、大平由佳、中武顕、村田稔、米沢梢、吉井多美子

たかばやし・よういち／1931年京都市生まれ。大学時代に8ミリで映画作りを始める。監督第1作は「南無」（59）。「石ッころ」（60）がモンテカティーニ映画祭で金賞を受賞、16ミリ第1作「砂」（63）がベルギー実験映画祭で特別賞を受賞するなど、日本の実験映画・個人映画の草分け的存在となる。66年ごろより消えゆく蒸気機関車をフィルムにおさめ、70年の「すばらしい蒸気機関車」はヒットを記録した。75年にATGと提携し「本陣殺人事件」（75）「金閣寺」（76）を監督、また独特の官能世界を描いた「蔵の中」（81）「雪華葬刺し」（82）を発表した。86年の「魂遊び　ほうこう」を最後に沈黙していたが、このたび新作「愛なくして」（03）で17年ぶりに監督復帰を果たした。

何度も何度も見て、イメージを掴みシナリオを作るという方法をとりました。この映画の場合、通常のようなシナリオがあってキャスティングするのではなく、先に出演者が決まっていてその一人ひとりのキャラクターに合わせた役柄を作っていかなければならないという変則的なケースですからそうするしかなかったんですね。大げさではなく、テープが擦り切れるほどテスト・テープを見ました」

そこからどんなストーリー、テーマをもつシナリオが生まれたのだろうか。

「『死』です。70数年の人生のなかで見てきたたくさんの『死』。二本の映画を共に作った山田順彦プロデューサー、シナリオ・ライターのいど・あきおさん、私の次回のシナリオを楽しみにしていた『雪華葬刺し』の若山富三郎さん、さらに映画作りの最大のパートナーだった妻・博子……こうして思い出すだけでも本当にたくさんの人の死を見てきました。そして私自身も平均寿命まであと数年ですから、『死』というのは最大のテーマなんですね」

冒頭に引用させていただいた大林監督の文章にもあるように、高林さんの映画は「死」に対する憧憬、畏怖に貫かれているといっていいだろう。その代表作「往生安楽国」(76)は「死」、あるいは「滅び」の形をフィルムに納めた映画だった。

「私がもうひとつ心を動かされたのは熊井青蔭氏の『無題』という詩でした。『やがて我等又死に行くものか』に始まる詩は、私の72歳の心情にぴったりで、自分でも納得できる『死のイリュージョン』が完成したんです」

撮影は福井県小浜の国宝・明通寺、琵琶湖東岸で行なわれ、アフレコ、ダビングが終わったとき、遠藤久仁子さんから最初の相談を受けてから3年半の歳月が流れていた。

「ダビングの終わりでラスト・ロールのスーパー・タイトルを見ている遠藤さんの目が涙で光っていましたね。それを見たとき痛む足を引きずって頑張った甲斐があった、本当に『愛なくして』を監督してよかったと思いました。映画は私に深い喜びを教えてくれました。今度こそ、もう本当に映画を撮ることはないでしょう」

「愛なくして」が高林監督のラスト・ムービーになるのかどうか、それは誰にもわからない。

特集上映　魂のシネアスト　高林陽一の宇宙

初期Aプロ　短・中編作品（8ミリ）
「南無」(59)
「石ッころ」(60)
「京都」(61)
「石が呼ぶ」(61)

初期Bプロ　短・中編作品（16ミリ、36ミリ）
「砂」(63)
「ひなのかげ」(65)
「むさしのいのち」(65)
「べんがら格子」(71)

「すばらしい蒸気機関車」(70)
音楽／大林宣彦
出演／谷口法子

「餓鬼草紙」(75)
出演／伴勇太郎、新田章、松田幸江、小林加奈枝

「本陣殺人事件」(75)
出演／中尾彬、田村高廣、新田章、高沢順子

「金閣寺」(76)
出演／篠田三郎、柴俊夫、横光勝彦、島村佳江

「往生安楽国」(76)
出演／高沢順子、服部妙子、星美智子、原泉

「西陣心中」(77)
出演／島村佳江、光田昌弘、土屋嘉男、楠郁子

「蔵の中」(81)
出演／山中康仁、松原留美子、亜湖、小林加奈枝

「雪華葬刺し」(82)
出演／若山富三郎、宇都宮雅代、京本政樹、滝田裕介

「雪華葬刺し」

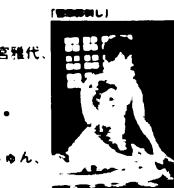
「赤いスキャンダル・情事」(82)
出演／水原ゆう紀、泉じゅん、戸川昌子、水木薫

「魂遊び　ほうこう」(86)
出演／奥山恵介、山田悟志、加藤直美、佐野恵美子

「愛なくして」(03)

「愛なくして」

上映スケジュール

	12:40	14:20	16:35	18:40	20:15
6/19土	舞台挨拶＋愛なくして	舞台挨拶＋初期Aプロ	餓鬼草紙	蒸気機関車	金閣寺
6/20日	愛なくして	初期Bプロ	本陣殺人事件	蒸気機関車	西陣心中
6/21月	愛なくして	雪華葬刺し	蔵の中	蒸気機関車	魂遊び　ほうこう
6/22火	愛なくして	往生安楽国	西陣心中	蒸気機関車	赤いスキャンダル
6/23水	愛なくして	金閣寺	雪華葬刺し	蒸気機関車	本陣殺人事件
6/24木	愛なくして	本陣殺人事件	金閣寺	蒸気機関車	初期Aプロ
6/25金	愛なくして	餓鬼草紙	赤いスキャンダル	蒸気機関車	初期Bプロ
6/26土	蒸気機関車	魂遊び　ほうこう	初期Bプロ＋トーク(※)	愛なくして	蒸気機関車
6/27日	蒸気機関車	本陣殺人事件	初期Aプロ	愛なくして	蒸気機関車
6/28月	蒸気機関車	西陣心中	金閣寺	愛なくして	雪華葬刺し
6/29火	蒸気機関車	餓鬼草紙	蔵の中	愛なくして	往生安楽国
6/30水	蒸気機関車	赤いスキャンダル	本陣殺人事件	愛なくして	魂遊び　ほうこう
7/01木	蒸気機関車	蔵の中	雪華葬刺し	愛なくして	初期Bプロ
7/02金	蒸気機関車	雪華葬刺し	往生安楽国	愛なくして	初期Aプロ

※松本俊夫（映画監督）と高林陽一監督のトークショー

7月2日まで
ポレポレ東中野にて上映中
TEL.03-3371-0088

成田陽子の
忘れられないスター
第15回

ミッキー・ルーニー
MICKEY ROONEY

芸人の中の芸人がさけぶ ハリウッドへの怒りと嘆き

1920年9月23日、アメリカ・ニューヨーク市ブルックリン生まれ。ヴォードヴィル芸人の両親を持ち、幼少から舞台に立つ。26年短編映画シリーズのオーディションで合格して映画デビュー。ハーディ家を舞台にしたシリーズの主人公を演じる傍ら、大作に出演。38年の「少年の町」ではアカデミー賞特別賞を受賞、39年からは3年連続でマネーメーキングスターのトップに位置するほどの人気を得る。映画出演に加えて、ブロードウェイ、テレビでも活躍。83年にはアカデミー賞名誉賞を受賞。エヴァ・ガードナーをはじめ8人の女優や歌手との結婚歴がある。

今日のハリウッドはあまりにもひどい！

「若く美しかった昔の恋人が今、醜く、みすぼらしく、威厳を全く失ってしまった安娼婦になってしまったような、たまらない寂しさと怒りを感じてしまうのだ。僕がドル箱スターだった頃のハリウッドは世界中の憧れのドリームタウンにふさわしい、美しい、ロマンチックな町だったというのに、今日のぶざまなありさまはあまりにひどくて、これがハリウッドです、なんて恥ずかしくて見せられたものではない！ ロイ・ロジャースの牧場が国立記念公園に指定されるのなら、ハリウッドのアメリカの記念都市の資格は充分すぎるほどあるはず。うす汚れた通りに立ち並ぶポルノ・ショップに下品な下着の店、我々が誇るスターたちの星形の敷石は吐き捨てられたガムやタンにまみ

「少年の町」

「経育・ハリウッド」

れ、道を歩くとベタベタと足をとられるという醜悪な光景を見せびらかしているハリウッド大通りの現状を考えただけで僕は吐き気さえ感じてしまうのだよ」

　今から15年前、89年に当時69歳だったミッキー・ルーニーは、ありとあらゆる現象に怒っていた。映画の中心、ハリウッドのうす汚れた状態に、スタジオがビジネスマンにコントロールされていること、俳優組合が無職の俳優たちを無視していること、アメリカの病院施設から内容のないアクション映画の氾濫に、カンカンに怒っていて、5フィート3インチ（という公称の身長だが、5フィート4インチ＝162センチの私メよりアタマ2個分は背が低い）の小柄な体から湯気をたぎらせるのである。ほとんど毛髪のない頭にまん丸な赤ら顔で唇を突き出す姿はタコ坊主のようで、深刻な内容の批判もコミカルな味つけが加えられ、こちらはうなずきながらも、つい、ニタニタとしてしまう。

　結婚8回目(!)の妻、ジャン・チェンバーン（78年結婚、歌手とのこと）がかたわらで、軽い反撃をしてきてはルーニーが、うれしそうに彼女をやり込める、という上方漫才のようなインタビューは彼のTV映画『ビル・オン・ヒズ・オウン』とまもなく出版するという自伝のプロモーションのためだったが、そこは17ヵ月の赤ん坊時代からヴォードヴィルの舞台でつちかわれ、笑わせる行為がもう血液の中に流れているようなルーニーゆえ、猛スピードで怒り、笑い、泣いてしゃべり続け、まさに爆弾ジイさんなのである。

「若い頃は波のように毛がうねっていたが、今は浜辺だけ。それと言うのも僕はテニスが大好きで毎日のようにプレーし、その度に強い石けんでゴシゴシ髪を洗っているうちに毛がどんどん抜けてしまってね。その昔はプロのチャンピオン、ビル・ティルデンをストレートの5セットで負かしたほどなのだ」

「背が低い、低いと言われるが『シェーン』のアラン・ラッドと僕は身長に限っては大差ないのだよ。二枚目の顔を持っていたなら僕だってミカン箱の上で二挺拳銃をぶっ放し、美人女優とアツアツのラヴシーンをしていたはずだ」

「結婚を8回したのは、一種のリハーサルなのだ。回数がショッキングだと言われるが僕は常に予行演習を積まないと進歩しなくてね」

　ツバキを飛び散らして、オハコの自虐的ジョークを続けるルーニーが、エヴァ・ガードナーと42年に結婚したという歴史上の事実は何とも信じがたい。もちろん当時のルーニーはジュディ・ガーランドとコンビを組んだMGMの青春映画が大人気で、39年から41年までアメリカのNo.1ドル箱スターだったのだが、あの完璧な美貌と妖艶さのガードナーは、ミカン箱の上にルーニーを乗っけてキッスをしたのだろうか、想像もしたくない図ではある。5番目のワイフとは58年に結婚し、66年、嫉妬に狂った情夫に彼女が殺されるというセンセーショナルな痴情殺人事件まで起こすなど、ルーニーの周囲は常に騒がしかったようだ。

どうしてスタジオと劇場が同じ会社ではダメなのか

冒頭の〝怒れるルーニー〟のコメントを紹介しよう。

ハリウッドについて。

「ハリウッドはもう存在していない。一応、そういう名の町があり、丘に大きな看板が出ているが現在のハリウッドはロサンゼルスの中でも最も醜悪な町だ。第二次大戦後にハリウッドを特別の町にする計画が持ち上がり、青写真まで出来上がったのを僕は知っている。しかし、ルイス・B・メイヤーが

亡くなり、ワーナー兄弟が亡くなり、この計画を後押しするスタジオのオーナーたちが次々と消え、いつの間にかハリウッドのタウン企画は流れてしまったのだ。僕はサワー・グレープ（酸っぱいぶどう）と言われようが、生きている限り、美化運動に参加し、荒れ果てた町を建て直していく」

現在のスタジオ経営について。

「MGMが映画を製作し、その映画をMGM直営の劇場で上映するのは法律に違反するとバカなロビイストがワシントンで叫んだために映画産業は殺されてしまった。ワーナーの映画をワーナーの劇場で見せてはならぬ、それはアンチトラスト（独占禁止）だと言う。良いかい？　フォードやキャデラックがそれぞれのディーラーで自動車を販売するのは構わない。フローシャイム靴が自社の靴を製造し、自分の店のチェーンで売るのはOK、シーズ菓子がシーズ・ストアでチョコレートを売るのも合法。しかし映画会社と劇場は同会社ではダメと言うのは、かなりイヤなものが匂うだろう。そのために大手スタジオは次々とパワーを失ってしまったのだから。そして今は、映画など理解しようともしない弁護士や会計士が得々として社長の席におさまっている。口惜しくて、悲しくて僕は歯をキリキリとさせている状態なのだよ」

スターシステムの長所について。

「未経験の若い人たちを集めて、演技指導から歌、ダンスをコーチし、さらにインタビューされる際のコツ、ブロマイドの撮られ方、礼儀作法から服の着こなし、メイクまで、ありとあらゆる点を教えてくれるスタジオのスター生産システムはとても良かったと僕は信じている。同時にプロデューサー、監督、脚本家から技術者と全ての映画チームを教育し、お互いに競争させて才能を磨いていく。現状を見給え。ロバート・レッドフォードやメリル・ストリープの名が挙がれば映画の企画はスタートするだろうが、あとのほとんどのプロジェクトは気が狂いそうな程の長い期間と次から次へと変わっていくプロデューサーを経て、オリジナルとは全く変わった映画になっていく。ビジネス面だけで進行して行く企画は、まずスターに何百万ドル、プロデューサーに数百万ドル、誰それに5百万、と予算ばかりが先行し、かんじんの質の向上には注意を払わず、下の方で雇われるキャストは、ツナ・サンドウィッチで我慢というひどいプロセスだ。おまけに今では誰も電話に出ない。大ぜいの秘書やアシスタントが直接に電話に出させないようにして値を吊り上げるんだ。それに『ハイ、ミッキー・ルーニーです』などとすぐに電話を取るタイプは〝過去の人〟〝アウト　オブ　ファッションの人〟として遠ざけられてしまう。悲劇的な状況だ。人間の心が全くなく、映画の質は落ちていくばかりなのだから」

「殺し屋ネルソン」（上）「少年の黒い馬」（下）

ミッキー・ルーニーと筆者

多くの俳優は無念の境地で世を去っていく

――俳優組合について。

「俳優組合のメンバーは絶対にストライキをしない。脚本家やカメラマンたちはストライキをするが、俳優たちを保証してくれる組織は存在していないんだ。1960年以前の映画が何回テレビに出ても俳優たちは全くロイアルティーをもらえない。ロサンゼルスには無職の俳優があふれ返り、昔は高名なスターだった知り合いの男は、家から家に物品を売りに行く仕事をしてい

成田陽子の

始末。95パーセントが失業中という状態がコンスタントに続く組合がどこにあると言うのか。ひと握りの老俳優は俳優老人ホームで何とか生きているが、多くの俳優は無念の境地で世を去って行く。俳優組合はそういうケースを全く助けず、若い人気スターは巨万の富を稼ぎまくっても組合は放っておくだけだ。僕は生きているうちに俳優組合を滅ぼし、ASPAC（アメリカン・ソサエティー・フォア・プロテクション・オブ・アクターズ・アンド・クリエーターズ）という組織を創り、持てる者から取り、持てない者に分け与える、強い者は弱い者を支え、若きは老いを助ける、というシステムを実行する。ASCAPという名に、笑ってはいけない（ケツの穴のフタ、と言う意味にも取れる）。プロゴルフにはシニア・ツアーという老人を助ける制度があるではないか。俳優たちも野たれ死になどせず、お互いに助け合い、誇りを持って生きていくべき」

この辺でルーニーの弁護士が登場。

「おやおや。僕が訴えられたりしないようにと法律上のヘルパーまで現れてしまって。スタジオ・システムがあったら、僕らの危険なコメントやバカな行動の尻ぬぐいをしてくれたのだが、今では個人的に自分をプロテクトせねばならないという弁護士のみが盛えるイヤな御時世になったものだ」

へらず口を叩いては、目を白黒させ、天を仰ぐと言う典型的ゼスチュアをし、こちとらはその余りの古っぽさに白けたり、お世辞笑いをしたりと、ちと不遜な反応をしてしまう。

結婚について。

「ケーリー・グラントが5回結婚しても誰も気にしない。エリザベス・テイラーが7回したのは批判されたが、それは彼女が女性だったから。そうそう、彼女のために断っておくが、〝リズ〟と呼ばれるのが大きらいなのだよ。必ず〝エリザベス〟と呼んでくれ給え。人々は僕に高校時代の恋人と結婚し、時おりホコリを払い、夕陽に向かって静かに消えて行く、という生き方を望んでいるようだが、こん畜生、現実はそれ程、ノーブルに生きられるものではないのだ。僕はマッカーサーに習って、アイ・シャル・リターンを繰り返していくつもりさ。そして僕の墓には〝アイ・トライド（私は試みた）〟と刻んでもらう。たった二コの言葉で私の人生をよく表現していると思わないか」

――生後17ヵ月で舞台に出たことについて。

「僕の父はスコットランドのグラスゴーに生まれてね、ヴォードヴィリアンとしてアメリカに行き、ある日、舞台に出ている時、17ヵ月の赤ん坊だった僕がハイハイして現れ、ホコリを吸って大きなクシャミをし、それが受けて次から父は三音のハーモニカを僕の首にかけて出し、僕がそれを勝手に吹く、というスタンツが始まったのだよ」

以後、舞台の折や小説を出版した際に会うチャンスを持ったが、常に〝引退はしない、発奮あるのみ〟を繰り返す芸の極道みたいなルーニーなのである。

Mickey Rooney Filmography

1932 街の野獣
　インチキ競馬
　護国の騎士
1933 猛獣士クライド
　男の一頁
　紐育・ハリウッド
　豚児売り出す
　世界は還る
　米国のメロディ
　君と唱へば
1934 男の世界
　愛の隠れ家
　私のダイナ
　死の本塁打
1935 真夏の夜の夢
　暁初恋
　港に異常なし
1936 小公子
　腕白時代
1937 我は海の子
　奴隷船
1938 海国魂
　初恋合戦
　少年の町
1939 宿なしハックの冒険
　青春一座
1940 若い科学者
　ストライク・アップ・ザ・バンド（V）
1941 感激の町
　二人の青春
　ブロードウェイ
1943 ガール・クレイジー（T）
　町の人気者
1944 青春学園
1945 緑園の天使
1948 サマー・ホリデイ
　ワーズ＆ミュージック（T）
1949 大車輪（ビッグ・ホイール）
1953 腰抜けMP
1954 トコリの橋
1956 密林の豹人（製作のみ）
　戦慄
1957 殺し屋ネルソン
1959 第三独房・地獄の待合室
　私刑（リンチ）街
1961 でっかい札束
　ティファニーで朝食を
1963 おかしな、おかしな、おかしな世界
1964 侵略戦線
1965 ビキニガール・ハント（V）
1966 復讐戦線
1969 80歩大行進
1971 真夜中の喝采（V）
1972 悪の紳士録（T）
1974 ザッツ・エンタテインメント
1975 クレージーボーイ／香港より愛をこめて
　ボロ・コップ（V）
1976 ドミノ・ターゲット
1978 ピートとドラゴン（V、声の出演）
　ラッシー
1979 ワイルド・ブラック／少年の黒い馬
1981 きつねと猟犬（声の出演）
1986 白馬物語／勝利のゴール（V）
1988 エリック・ザ・バイキング／バルハラへの航海
1991 キラー・ホビー／オモチャが殺しにやって来る（V）
1992 レディ・スコルピオン（V）
　マックス・フォース（V）
1994 ザッツ・エンタテイメントPART 3
1998 ベイブ　都会へ行く

※日本公開作品（劇場、ビデオ、テレビ）のみ対象
※テレビ作品は除く

連載4

あの娘ぼくがこんなシネマ撮ったらどんな顔するだろう

河原雅彦

イラスト&題字 中村まこと

この物語は、明日の映画界の発展のため空前の話題作を生み出そうと七転八倒する、とある映画製作会社を舞台とした『机上の空論キャスティング小説』である。

シネマ1

嵐のクランクイン「実写版Dr.スランプ」

後編〈完結編〉

「紅だあああああああ！！！」

アラレちゃんを演じるYOSHIKIが、こめかみに嘘みたいな太っとい青筋を立ててスタジオ内を駆け巡る駆け巡る。おかっぱ頭を振り乱して一心不乱に風になるカリスマロッカーの姿に、人々の視線はマッハで釘付けである。

……が、日頃の不摂生がたたったのか、ものの二十メートル走っただけで早くも青色吐息のYOSHIKIであった。

「ハア、ハア、ハア……あ、あ、あ、あずさ君だっけ？」

軽くチアノーゼ入ったYOSHIKIが青紫の唇をぷるぷる震わせ、純情新入社員を振り返る。

「どっ、どお？」

「いや、どおって……」

……確かに。

確かに飛行機の羽の如く両手をピンと広げて走っては、いる。

けど、アラレちゃん的にはやはりこの場合「キ～ン」が妥当であって、いくら「テンションがバリ上がる」とはいえ、こんなパンクなアドリブが認められるわけもなく、あずさはほとほと困り果てるしかなかった。

「けぷっ！」

かくいうYOSHIKIはとうとう小ゲロまで吐く始末……。元・X JAPANのくせになんだか聖飢魔IIな展開である。

と、次の瞬間。

「いんでねぇ、いんでねぇ。ものごっつ、いんでねぇ」

めちゃめちゃ聞き覚えのあるインチキ東北弁がスタジオ内にこだまする。

言わずもがな、お茶汲みアルバイト・ミミの声だ。

「なあに、鳥山明にはアチキからガツンと言っとくでよお」

「ええええっ！？？ な、なんでミミさんがここに？」

「現場見学ずら」

あずさは「……まずい」と心の中で呟いた。
「ほほお～そうきましたかあ」
七色の声を操る満田がいつもの調子で全く推敲もせずミミの意見に乗っかりだした。柿色だった。
「アラレちゃんの部屋にはドラムセットがあって、走って帰ってくるたびに狂ったようにバスドラを連打するっていうのはどうでしょう！」
旗畑もハイテンションでゴミのようなアイディアを排出。これにて『アトミック・シモンズ（株）滅びの方程式』の完成である。
「ちょ、ちょっと待って下さい！　そんな脚色ありえな……」と、あずさの背後から魂の咆哮！
「ウメボシ食べて松健サンバッ！！」
「松平さんは楽屋待機でお願いします！」
スケボーの上にいそいそと腹這いになってスッパマン役の松平健が去って行く。
「……太秦とは勝手が違うのだな」そんなことを一人寂しく呟きながら……。
「え～っと……」
すると続いて蚊の鳴くような細き声が……。
他でもない監督の杵柄である。
杵柄はその才能は誰もが認める新進気鋭の監督であったが、いかんせん気が小さく周囲の意見に流されやすい。が、その一方で、仰天アイディアを強気で採用してしまう大胆な一面も持ち合わせていた。ちなみに、あずさも感銘を受けたアトミック・シモンズ社唯一のヒット作「鉄道員VSメカゴジラ」は杵柄の出世作でもあった。
「しょうがないよね。しょうがないよね……」

しょんぼり左右の人さし指をつんつん合わせながら杵柄がそう呟いた。
「か、監督!?」
「早く始めた方がいいんでねぇ？」
「そうだよね……。仕方ないので前向きにいきま～す！」
あずさは心の中で考える。
「……ぜってえ、前、向けねぇよ」
さて。とにもかくにも撮影は開始された。
結局旗畑のプランは採用となり、YOSHIKIの更なる希望もあって、アラレちゃんの部屋には要塞のようなドラムセットとグランドピアノが急遽スタンバイされた。これには則巻千兵衛役の西田敏行も昔の血が騒いだのか、YOSHIKIの伴奏に合わせて『もしもピアノが弾けたなら』を大熱唱。以降、Dr.マシリト役の葉加瀬太郎の奏でるヴァイオリンの調べも加わって、壮大な一大セッションに発展する。途中、演奏中のYOSHIKIが必死で笑いを堪えながら、「ねえねえ、『もしも小室が安室なら』ってどお？」と何度も何度もあずさに尋ねてきたが、あずさはこれにどう答えていいのかマジで分からず、その都度愛想笑いを振りまくだけであった。一方、すでに何の危機感もない満田と旗畑は控え室で平成版人生ゲームに興じている。
こうしてファーストシーンの撮影は一向に始まる気配も無く、監督杵柄は早々に撮りこぼしを宣言。次のシーンの準備に取りかかっていると、再び事件は起きた。
「こんなふざけた台詞言ってらんねえ！」

どうやら楽屋でそう言ってきかない俳優がいるらしい。
あずさが大慌てで真相の確認に向かうと、そこには山吹みどり役の米倉涼子を膝に乗せ険しい顔で胸をもみしだく市川海老蔵の姿があった。
「……ちびったわ」
これには皿田キノコ役の寺島しのぶも三輪車から転げ落ちてすかさずお漏らし。さすがにド忙だ。
海老蔵は「朝だぞーい」とペンギン村に昇る元気印の太陽役だからして、これに代わる台詞はないのだが、その点に関しては出演交渉の際に了承済みである。にもかかわらずここにきての造反…。現場サイドのYOSHIKIへの高待遇に海老蔵がヘソを曲げたのは言うまでもなかった。
「襲名早々、問題起こしやがって……」
そう言ってやりたい気持をあずさがグッと押さえていると、ここで信じられない一石が鬼のように投じられた。
「『お～い、お茶』でいいんでねぇ？」
ミミである。
「ええええええっ!?」
「……じゃあ、『お～い、お茶』で」
「か、監督！！！？？？」
「仕方ないので前向きにいきま～す！」
あずさはまだ衝撃の事実を知らない……。
要するにこういうことだ。
ミミは杵柄のラマンでもあった。
……その後、ホントどうでもいいシーンでYOSHIKIがXジャンプ（アドリブ）をしたところ敢えなくろっ骨を疲労骨折。無念の降板を余儀なくされる。かくして「実写版Dr.スランプ」は幻の作品に終わったのだった。トホホ……。

アトミック・シモンズ（株）の人々

あずさ
映画を愛する入社三カ月の熱血純情青年。制作として初の映画撮影現場に参加するが……。

満田
企画開発チームのリーダーながら世情に疎いプロデューサー。野性の勘だけで生きている。

旗畑
毒にも薬にもならない発言ばかりの宣伝チームのリーダー。若手に暴言をはく悪癖あり。

ミミ
無能なお茶汲みバイトで東北訛りの家出少女。満田の愛人でその意見がやたら重宝される。

安西水丸の
4コマ映画館

㊱NYで見た「眞実一路」

「眞実一路」川島雄三監督

イーストリバーの対岸にペプシコーラのネオンの見えるニューヨークの友人宅で、おもいがけず川島雄三監督の「眞実一路」を見た。

この映画を見たのは中学一年生のときで、確か月島の西仲通りを少しはずれたところにあった「月島松竹」だったと記憶している。

連れてってくれたのはぼくの家に出入りしていた大工さんの奥さんだった。ぼくは「月島のおばさん」と呼んでいたのだが、この「月島のおばさん」は今年の一月に他界した。ぼくにとって、思い出のいっぱい詰っている女性だった。

「眞実一路」は言うまでもなく、文豪、山本有三原作なのだが、この映画のできた昭和二十九年というのは、日本映画の黄金時代とでもいうのか、木下恵介が「女の園」と「二十四の瞳」を、黒澤明が「七人の侍」を、成瀬巳喜男が「晩菊」を、本多猪四郎が「ゴジラ」を、溝口健二が「近松物語」を撮っている。この年の前後も、日本映画のラインナップは傑作ぞろいといっていい。

それで「眞実一路」だが、重苦しい白黒の画面が、妙に雰囲気をかもし出していて、和服姿の淡島千景と桂木洋子が何とも美しい。外国で見ているといった気分の違いもあっただろうが、彼女たちの表情、言葉づかいが、一つ一つ突きささってきた。

桂木洋子の弟に扮した水村国臣は小学校五年生という設定だったが、映画の撮られた昭和二十九年、ぼくは小学校六年生だったので、当時の時代風景が懐しく思い出されてたまらなかった。特に彼と同じ金ボタンのコートを着ていたので、そのことも懐しかった。冬の寒い日、金ボタンのコートを着て、郵便局へ集めた子供貯金のお金を届けに行った時のことなどを思い出した。

映画の舞台は東京郊外らしく、寒々とした畑の風景が広がっていた。

母性愛と、愛人との情愛の間で葛藤するむつ子の淡島千景と、その弟に扮した多々良純が印象的だった。

それにしても、桂木洋子のような日本女性はすっかりいなくなった。

特別企画

ドドーンと観せます

ハリー・ポッター & サマームービー 64本

HARRY POTTER

SUMMER MOVIE

今年も暑い、熱い季節がやって参りました。2004年のサマームービーも昨年同様、大作・話題作が目白押し。何を観たらいいのか、迷っているあなたにお贈りする夏休み映画ガイドの決定版！

6.26 公開

ハリー・ポッターとアズカバンの囚人

驚異的なメガヒットシリーズの第3弾がついに登場！「天国の口、終りの楽園。」のメキシコ出身監督アルフォンソ・キュアロンが新たにメガホンを取り、前2作とは全く異なるファンタジー世界を創造する。ハリー役のダニエル・ラドクリフをはじめ、成長したお馴染みの子供たちが活躍。超豪華な英国俳優たちが顔を並べるのも大きな見どころだ。

配給◎ワーナー・ブラザース

スパイダーマン2

史上最高の製作費220億円を投じ、前作を遥かに超えるスケールで人気アメコミ・ヒーローの活躍が描かれる。今やスターの貫禄を滲ませるトビー・マグワイアと、名匠サム・ライミ監督が新たな伝説を生む。大学生活を送る一方、スパイダーマンとしての任務も果たすピーター。愛するMJ、親友ハリーとの複雑な愛憎劇が展開していく。

配給◎ソニー・ピクチャーズ

7.10 公開

サンダーバード

1960年代に登場して以来、海外テレビ史上最も多くのファンを生み出してきた英国の名作ＳＦが、実写版となって甦る。レトロ・フューチャーなデザインや世界観に彩られてドラマが展開。ビル・パクストン、ベン・キングズレーらベテラン勢に加え、“トレーシー・ボーイズ(トレーシー５人兄弟)”にはオーディションで選ばれた次世代のスターたちが揃う。

配給◎UIP

8.7 公開

キング・アーサー

メガヒットを次々と放つジェリー・ブラッカイマー製作によるスペクタクル歴史大作。西洋史上最大の英雄にして、英国の伝説的人物、アーサー王の肖像が、圧巻の戦闘シーンと共に描き出される。英国の実力派俳優クライヴ・オーウェンがアーサー王を熱演。監督は「トレーニング デイ」で注目されたアントワン・フークア。

配給◎ブエナ ビスタ

7.24 公開

シュレック2

アカデミー賞長編アニメーション部門作品賞を獲得した最強ファンタジーが、再び世界を唸らせる。ドリームワークスの精鋭スタッフが結集し、３年以上かけて緑の怪人シュレックの物語を新たに綴る。声の出演には、マイク・マイヤーズ、キャメロン・ディアス他、新キャラクター“長ぐつをはいたネコ”役でアントニオ・バンデラスも参加。

配給◎UIP

7.24 公開

ウォルター少年と、夏の休日

ハーレイ・ジョエル・オスメント主演の感動ドラマ。マイケル・ケイン、ロバート・デュヴァルの2大名優が脇を固める。古き良き時代の片田舎で、母に見捨てられた少年と2人のおじさんとのひと夏が綴られる。

配給◎日本ヘラルド

7.10 公開

デイ・アフター・トゥモロー

「インデペンデンス・デイ」のローランド・エメリッヒ監督が放つ、最新ディザスター巨編。異常寒波という未曾有の天変地異が人類をパニックに陥らせる。デニス・クエイドとジェイク・ギレンホールが父子役で共演。

配給◎20世紀フォックス

公開中

モナリザ・スマイル

ジュリア・ロバーツと、次世代の女優たちが織りなす学園群像劇。1950年代、ニューイングランドの名門女子大学を舞台に、女性の様々な生き方が見つめられていく。監督は「ハリー・ポッター」の続編に抜擢されたマイク・ニューエル。

配給◎UIP

8.7 公開

リディック

「ピッチブラック」からスピンオフされた、ヴィン・ディーゼル演じる"リディック"が活躍するSFスリラー。遥かな未来を舞台に、5つの惑星から指名手配されたお尋ね者リディックが救世主として未知なる恐怖と戦う。3部作の第1弾にあたる。

配給◎東芝エンタテインメント、松竹

8.7 公開

テイキング ライブス

特別捜査官に扮するアンジェリーナ・ジョリーが、不可解な事件に巻き込まれる衝撃サスペンス。イーサン・ホーク、キーファー・サザーランド、ジーナ・ローランズなど、個性派スターたちとの絡みも見もの。

配給◎ワーナー・ブラザース

夏 公開

マッハ！

CG、ワイヤ・ワーク一切なし。今、世界で話題沸騰中のタイのムエタイ・アクション超大作がついに日本上陸。10歳から古式ムエタイの他、テコンドーや剣術などを学ぶトニー・ジャーが、神業的な技でヒーローを熱演。

配給◎クロックワークス、ギャガ=ヒューマックス

7.24 公開

69 sixty nine

村上龍のベストセラー同名小説を、妻夫木聡と安藤政信共演、宮藤官九郎が脚色、新鋭・李相日がメガホンを取り映画化。1969年、長崎の佐世保に暮らす高校生たちの青春を描く。 配給◎東映

7.10 公開

バレエ・カンパニー

名匠ロバート・アルトマン監督が名門バレエ団の人間模様を描く青春ドラマ。かつてバレリーナを目指していたネーヴ・キャンベルが、見事な踊りを披露している。 配給◎エスピーオー

7月下旬 公開

CODE46

英国の俊英マイケル・ウィンターボトムが贈る近未来SFラヴ・ストーリー。サマンサ・モートンとティム・ロビンスが、禁じられた愛の行方を濃密に演じる。 配給◎ギャガ

8月下旬 公開

Mの物語

「美しき諍い女」のジャック・リヴェット監督が、エマニュエル・ベアールと再び組んで挑んだ愛の衝撃作。謎の女マリーの正体をミステリー仕立てで綴る。 配給◎ファインフィルムズ

8月上旬 公開

丹下左膳　百万両の壺

日本映画最高のヒーロー、丹下左膳。天才監督・山中貞雄の名作を、絢爛豪華な映像の中に完全リメイク。豊川悦司がコミカルな演技で粋な左膳を体現。 配給◎エデン

7.17 公開

ドリーマーズ

イタリアの巨匠ベルナルド・ベルトルッチが、1968年、5月革命前夜のパリを舞台に描く3人の男女の青春ドラマ。米国人俳優マイケル・ピットが好演。 配給◎日本ヘラルド

7月下旬 公開

父と暮せば

黒木和雄監督が描く戦争レクイエム三部作の完結編。原爆投下から3年後の広島が舞台となる井上ひさしの戯曲を、宮沢りえ、原田芳雄で映画化。 配給◎パル企画

7.31 公開

誰も知らない　Nobody Knows

本作で、カンヌ国際映画祭史上最年少の主演男優賞を獲得した柳楽優弥。そのナチュラルな演技を引き出した、是枝裕和監督の手腕も光る現代日本の家族劇。 配給◎シネカノン

7月下旬 公開

ハリー・ポッターとアズカバンの囚人

ダニエル・ラドクリフは語る

取材・文＝佐藤友紀

DANIEL RADCLIFFE／ハリー・ポッター役。1989年、英ロンドン生まれ。01年に「テイラー・オブ・パナマ」で映画デビューを果たす。シリーズ第4作「ハリーポッターと炎のゴブレット」にも出演が決まっている。

大人の関係者たちと同じ記者会見の壇上に並んでも、既に堂々とした風格を感じさせ始めたラドクリフ。やはりこのまま続投？

「今回は前2作と違って、監督がアルフォンソ(・キュアロン)に代わったわけだけど、クリス(・コロンバス)から長い間かけて学んだことを、アルフォンソとの関係に持ち込むのは、それ自体難しかったとも言える。だってまた一からいろんなことに慣れていかなきゃいけなかったわけだし。ただ、それが僕らの成長の糧になったとも思うんだ。僕は『ハリー・ポッター』シリーズがもたらす、こういう大がかりなイベントやプレミアも面白いけど、一番好きなのはやっぱり映画そのものを撮っている時でね。みんなはそれを〝仕事〟だと言うけれど、僕はそういうふうには感じていない。もちろん、いろいろ大変だけどとても楽しいよ。ただ、僕は演技にはとても興味があるけれど、他にも山ほどやりたいことがあるんだ。例えばミュージカルとかも。『ハリー』シリーズに関しては、僕、何だかみんな死んじゃいそうな予感がするよ(笑)。ハリーと宿敵ヴォルデモート卿は根っこの部分は似通っていてさ。4作目では2人のそういうつながりが見られるし。ま、僕の勘違いかも、だけどね」

ハリー・ポッター成長記

「ハリー・ポッターと賢者の石」

構成＝山下慧

ハリー・ポッター成長記の1年目。成長記はホグワーツ魔法魔術学校での寮生活を1年単位で描き、学校で起きた事件の謎解きを通じてハリーの出自が少しずつ明かにされていく。その初年度、孤児のハリーは自身の生い立ちを初めて知る。11歳の誕生日にホグワーツの入学許可証が届いたのだ。彼の両親は、悪の魔法使いヴォルデモートと闘って命を落とした伝説的魔法使いだった。ハリー自身も魔の手から生き延びた唯一の存在として注目される中、魔法修業の素晴らしき学園生活が始まる。1年目の事件は、地下室に隠された賢者の石の探究だ。トロル騒動を発端に、ハリー、ロン、ハーマイオニーの3人組が石の存在を察知。石は不老不死の水を生み、復活を企むヴォルデモートがこの石を狙っているらしい。スネイプ先生が悪の手先かと思われたが、クィレル先生こそヴォルデモートの宿主だった。ヴォルデモートはハリーに退けられるものの、未だ復活の機会を狙っている。

エマ・ワトソンは語る

取材・文＝佐藤友紀

EMMA WATSON／ハーマイオニー・グレンジャー役。1990年、英オックスフォード生まれ。「ハリー・ポッターと賢者の石」で映画デビューを果たす。

「今回、ホグワーツの制服よりも私服姿が多かったのはとてもらくちんだったわ。私たちの年頃の子供ってみんなそうだと思うけど、カジュアルな服を着ることで、よりパーソナルな気分になれるし。一般的に"女の子の方が男の子より優秀"ってのはもちろん当っていると思う(笑)。かつハーマイオニーってとてもカリスマ性のある役でしょ。しかも今までは悪口を言われても聞き流すような感じだったけど、今回はいじめっ子のマルフォイのことを殴り倒したり、先生に反抗したり。すごくパワフルにはじけていて、もう私のお気に入り！　演じるのが本当に楽しかった(笑)。ただ、私、歌もダンスも大好きだから、演じることも含め、これらのうちのどれかを続けたいわ」

ルパート・グリントは語る

取材・文＝佐藤友紀

RUPERT GRINT／ロン・ウィーズリー役。1988年、英ハートフォードシャー生まれ。本シリーズのほかに「サンダーパンツ！」(02)にも出演する。

「このまま映画の仕事を続けられたら本当に最高だと思うけど、もっと小さい頃はアイスクリーム屋になりたくって、今でもそれが理想の職業だったりもするし……。最終的にはロンが悪役になったりしたら、物凄くカッコいいと思うよ(笑)。自分が映画の世界で仕事をしてるってことに関しては、時々変な気もするけど、あとは全く普通だな。失ったものとしては、学校に通えなかったことかな？　だけど、これ、かえって得したって気もするけれども(笑)。それと映画の撮影中、ネズミにおしっこをかけられたことはイヤだったな。エマの手を握るシーン？　あそこはぎこちなくなっちゃったね。でも、それでも確かに映画の方が現実よりも簡単だと思うよ」

ゲイリー・オールドマンは語る

取材・文＝佐藤友紀

GARY OLDMAN／シリウス・ブラック役。1958年、英ロンドン生まれ。86年に「シド・アンド・ナンシー」で映画デビューを飾る。主な出演作は「レオン」(94)、「ハンニバル」(01)など。

「この映画への出演が決まった時には、僕は息子の学校で一夜にしてスーパースターになってしまったんだ(笑)。自分の子供たちを見ていて驚くのは、彼らは学校に行くのが好きなんだよ。僕なんて、学生時代に影響を受けた教師など一人も思いつかないぐらい、毎日拘束されて、それこそ囚人のような思いを持ってたけど、子供たちは学校が楽しいという。ただ自分が幸運だったのは、やりたいことがわかっていた点、演技を通じて自分が何かを返せるというのはいいことだよね。今回、ダニエルたちと一緒に演技をしてみて、彼らが子役などではなく、一人前の役者なんだということを実感させられた。物語がファンタジーであるからこそ、"演技はリアルに"の鉄則を自然に身に付けているのが凄いね」

ハリー・ポッター成長記

「ハリー・ポッターと秘密の部屋」

構成＝山下慧

夏休みは人間界で過ごすハリーに警告が届く――ホグワーツへ戻るのは危険だと。12歳、ホグワーツ2年生の事件はここから始まった。新年度の学校では生徒が石化する事件が相次ぎ、学校閉鎖の危機にまで発展する。謎の核は、学校のどこかに隠された秘密の部屋。ある力の継承者だけがその部屋の封印を解くという。50年前のトム・リドルの日記を手掛かりに謎を追ったハリーは、探り当てた秘密の部屋でリドルの幻像と対面。リドルは若き日のヴォルデモートであり、かの力の継承者でもあった。敵は50年の時を経て部屋の封印を解こうとしたのだ。1年生時に続きヴォルデモートと対峙したハリーは、自分に敵と同じ力が潜むことを知る。ここでは学校創立の挿話やヴォルデモートの出自、森の番人ハグリッドの過去、スリザリン寮のマルフォイとの確執までが事件の謎解きに折り込まれた。前年度同様、"闇の魔術に対する防衛術"の先生が事件に関わるのもパターンに。

マイケル・ガンボンは語る

取材・文＝佐藤友紀

「ダンブルドア校長を演じるに当たり、前任のリチャード(・ハリス)は、すごく重い衣裳を着ていたんだけど、僕のはもっと軽くしてもらったんだ。シルクを2枚だけ。すると途端に動きは身軽になり、スリッパを履いて踊ってたから、ちょっとヒッピーみたいだったかもしれないな(笑)。あと、僕の英語は故郷のアイルランド訛りがあるんだけど、監督のアルフォンソはそんな英語があるなんて知らなかったみたいで、逆に面白がってくれたよ。リチャードの死去を受け、途中参加ということで、最初の1週間ぐらいは柄にもなく緊張していたけど、それからは自分のペースを取り戻せた。でも去年だけで私は6本の映画に出演したので、気持ちはすぐ切り替えられたよ(笑)」

MICHAEL GAMBON／アルバス・ダンブルドア役。1940年、アイルランド・ダブリン生まれ。主な出演作は「ゴスフォード・パーク」(01)「ワイルド・レンジ／最後の銃撃」(03)など。

クリス・コロンバス(製作)は語る

取材・文＝佐藤友紀

「子供の俳優たちの成長ぶりを見た時は、正直言って、本作も自分で監督したい！と思ったよ。もし6作目か7作目でまた僕がメガホンを取ることになるとしたら、それは1作目からずっと成長してきた彼らと、また仕事をしたいという理由からだ。1作目の時なんて、例えばロン役のルパートは一つの台詞を言うのも難しいことがあった。しょっ中、笑っちゃってね(笑)。でも、今やみんな俳優として自分に自信がついた感じがする。実は『ハリー・ポッター』を撮ってもらいたい監督のリストがあってね。スコセッシとかコッポラとか。彼らの『ハリー・ポッター』も見てみたくないかい？
オリヴァー・ストーンはちょっとこの世界には合いそうにないけどね(笑)」

CHRIS COLUMBUS／1958年、米ペンシルヴェニア州生まれ。87年に「ベビーシッター・アドベンチャー」で監督デビューをする。主な監督作は「ホーム・アローン」(90)、「ミセス・ダウト」(93)、「9か月」(95)など。

アルフォンソ・キュアロン(監督)は語る

取材・文＝佐藤友紀

「本作が〝暗い〟とよく言われるのは、僕の資質というよりも原作から来ていると思う。もちろん僕は最初から原作に忠実にやりたいと考えていたんだけどね。今回ハリーは前2作と異なり、世の中対して暗いイメージを抱き始めた。彼の中で世界というものが変貌を遂げつつあるんだよ。つまり、怪物は外からではなく、内からやって来るのだと。もし暗い側面が印象的だとしたら、そのハリーの思いから発している。ただ僕としては逆にそれ以外とのバランスを取ろうとしたつもりさ。原作の素晴らしさは、まさにその恐怖とユーモアの均衡にあると思うし。何より撮影のマイケル(・セレシン)と美術のスチュアート(・クレイグ)との共同作業がうまくいったのがうれしいね」

ALFONSO CUARON／1961年、メキシコ生まれ。95年に「リトル・プリンセス」で監督デビューを果たし、以後「大いなる遺産」(98)、「天国の口、終りの楽園。」(01)を監督する。

ハリー・ポッター成長記

「ハリー・ポッターとアズカバンの囚人」

構成＝山下慧

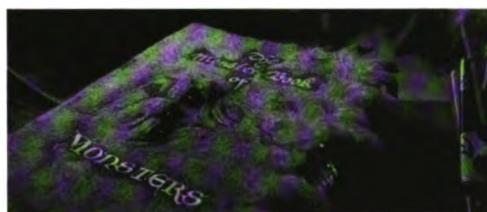
思春期の13歳、暗雲漂うホグワーツで3年生の暮らしが始まる。学校には脱獄囚シリウス・ブラックを捕らえようと吸魂鬼の一団が監視についていた。このブラックが今年の事件の主だ。彼はハリーの両親を裏切り、ヴォルデモートに引き合わせ死に追いやった男だという。新任のルーピン先生に防衛術を教わりつつ、復讐心を抱くハリー。そのブラックはルーピンと通じ合って学校内に潜んでいた。濡れ衣を着せられ囚人となったブラックは、ロンの近くに潜む本当の裏切り者を追ってきたのだ。吸魂鬼に襲われたブラックは何者かに命を救われるが、冤罪は晴らせず処刑を免れそうもない。ハリーたちは逆転時計を使ってこの危機を回避しようとする。大枠・細部ともに過去2年の生活を踏襲しながら、成長した少年少女の新たな横顔を捉える3年目。それは空の描写でも表現される。恒例のロール・プレイング・ゲーム風な謎解きにSF的要素が加わって、成長記の幅広さをも示すこととなった。

作品評

一年半ぶりの再会「ハリー・ポッターとアズカバンの囚人」

文・おかだえみこ

そうですか。"アズカバンの囚人"は彼でしたか。ゲイリー・オールドマンでしたか。

継続か、中断か、愛読者の子どもたちがヤキモキした一年半の間だったろう。おとなの読者としても、一年後の話が半年間延びればこの年齢の少年少女の顔や体型の変わりようは予想がつく。やっぱり、みんなぐっと成長していた。子どもからミドルティーンになっていた。男の子は声変わりして、すっかりおとなびていた。それでも話が動き出せば瞬間感じた戸惑いはすぐ消えて、おなじみの魔法学校の生徒たちとして眺めていたが。

それにしても、監督が変わるとこれほどテイストが変わるものなんですね。ノンストップ・ムービーのあわただしさが控えられ、登場人物たちがあたたかい。リチャード・ハリスからリレーしたマイケル・ガンボンの校長先生、デイヴィッド・シューリスの闇の魔術防衛術の先生、つまりハリーを見守り、導き、ピンチにさりげなく手を差し伸べてくれるよき大人たちの存在が観客をホッとさせる。ファンは当然みんなハリーの味方だが、画面の中にも頼れる人がいてほしい、という観客心理をちゃんとキュアロン監督は心得ている。そして読者が毎度抱く「またあのイヤな家に帰らなくちゃいけないの？　あの

「ハリー・ポッターとアズカバンの囚人」

原作の世界、映像の世界

文・横森文

「ハリー・ポッターとアズカバンの囚人」は、製作陣が観客は必ず原作を読んでいる……と踏んで作ったとしか思えない。なぜなら原作で描かれていたハリーの父親ジェームズ・ポッターと友人との学生時代のエピソードがまるまるカットされたからだ。さらにアニメーガス(動物もどき)の説明も端折られた。

アニメーガス。第1作でマクゴナガル先生が猫に変身していたことを覚えている人は多いだろう。彼女のように動物に自在に変身できる魔法使いが、アニメーガスと呼ばれているが、この高度な魔法ができる者は、必ず魔法省に申請しなければならない。原作では20世紀にアニメーガスと登録されたのはわずか7名しかいないことも言及されており、いかにアニメーガスが特殊な魔法使いであるかが描き込まれていた。ところがジェームズとその友人たちは、友人の1人が狼人間になったがために、それに合わせて訓練を積み未登録(=違法)のアニメーガスとなったのだ。狼人間は人間しか襲わないので、動物に変身したジェームズたちは問題なく狼人間の友人に近づくことができたというわけ。この過去の話がないせいで、後半が今ひとつ分かり

バカモンどもの言いなりにならなくちゃいけないの?」という不満を、のっけに、しかも比較的あっさりと解消してくれたのは嬉しかった。

　読んでもいま一つイメージが浮かばなかった吸魂鬼ディメンターはなかなか怖い。出現時のすさまじい寒気も怖い。手なづけるのが一仕事の怪物教科書もかなり怖い。期待していたナイトバスはもちろん、半鳥半馬ヒッポグリフはいいなあ、やってくれましたねっ、の出来ばえ。狼男はちょっと違和感。前回の〝物語る日記帳〟に続いて楽しみだった〝忍びの地図〟はスタッフも満足の仕上がりと見えて、ラストのクレジットにも応用、たっぷり見せてくれる。たいへん結構です。

　いささか物足りない点をあげれば、アズカバン監獄がどのような所か想像できず、したがってそこを脱獄した男の凄さがよくわからないこと。マギー・スミスの副校長先生の出番が少ないのもちょっと残念。さらに、これは仕方がないことだが、原作の愛読者は先が読めているので〝アズカバンの囚人〟にあまり恐怖を感じないのがちょっと困るんですねぇ。

　愛機〝ニンバス2000〟が折れてしまう豪雨のクィディッチ試合、暴れ柳の動き、防衛術の授業、ディメンターの大群との戦い、ちょっぴり時間をいじってのヒッポグリフ救出、これという見せ場はきっちり、期待を裏切らない。そこでラストにハリーのところへ最新仕様の〝ファイヤボルト〟が送られてくると同時に、保護者の許可が必要な魔法村ホグズミードへハリーが天下晴れて行けるようになる次第はやはり見せてほしかった。

　さあ次回はどうなるのだろう。〝名前を言ってはいけないあの人〟は、現れるのだろうか? キャストは〈あの彼〉なのだろうか? さて……。

PS2版「ハリーポッターとアズカバンの囚人」の
ゲームソフトを3名様にプレゼント

PlayStation 2

●映画と同じスリリングなストーリーをゲームで追体験ができる! 御希望の方は巻末の綴込みハガキにて。締切は7月5日消印有効。
◎提供:エレクトロニック・アーツ㈱

★7140円(税込)

にくい。例えば暴れ柳と初登場のホグズミードにある叫びの屋敷の関連性。実は狼人間となっている間はこの屋敷で過ごしており、それを隠すために屋敷への抜け道には暴れ柳が置かれたのだ。またハリーが危ない時に守護霊を呼んだ呪文で、白く輝く鹿が登場したのも映画版では意味不明。実はジェームズがアニメーガスとして変身していたのは牡鹿。そう、つまりジェームズが守護霊としてハリーを守ったことを、実はキチッと示唆していたのだ。

　逆に丁寧に描写されたのは半鳥半馬のヒッポグリフや吸魂鬼ディメンターの様子。確かにヒッポグリフの美しさやディメンターの恐怖(特にホグワーツを取り囲む画は抜群)は、映像で具現化されたことでハッキリと伝わってきた。原作でも楽しかった過去へのタイムスリップも、映画らしい魅力にあふれたシーンに。つまり今回は映像にして楽しいことに時間が費やされ、原作でも充分楽しめる物語としての仕掛けは重要視されていない。だがもともと原作のすべてを入れ込むのは不可能。そこまで割り切ったのは英断と言える。

　となると上下巻に分かれた次作『炎のゴブレット』も、かなり割り切って進むのかもしれない。クリス・コロンバスが抜けた新生ハリ・ポタがどう展開するか、楽しみだ。

赤線

7.10公開

「日本の裸族」など異色作を手掛けてきた鬼才・奥秀太郎が、中村獅童主演で描く昭和SFラヴストーリー。終戦直後の日本。赤線に集う男女の恋が綴られる。

配給◎NEGA DESIGN WORKS

茶の味

7.17公開

カンヌ国際映画祭の監督週間オープニング作品としても話題を呼んだ、尖鋭・石井克人監督最新作。日本の田園風景にCGやアニメが絡み合うユニークな家族ドラマ。

配給◎クロックワークス、レントラックジャパン

機関車先生

7月下旬公開

人気俳優・坂口憲二が映画初主演。伊集院静の同名小説を「ヴァイブレータ」の廣木隆一が映画化。口のきけない先生と7人の生徒が勇気と成長の物語を繰り広げる。

配給◎日本ヘラルド

MASK DE 41 [マスク・ド・フォーワン]

8月下旬公開

ある日突然リストラを宣告された41歳のサラリーマン・忠男は、長年の夢だったプロレス団体を興すことを決意。監督はCM界出身の新鋭・村本天志。

配給◎ファントム・フィルム

ミラーを拭く男

8.21公開

定年間近で思わぬ交通事故を起こしてしまった中年サラリーマンと、その家族の物語。サンダンス・NHK国際映像作家賞を受賞した梶田征則が監督に挑む。

配給◎バル企画

劇場版ポケットモンスター　アドバンスジェネレーション　裂空の訪問者　デオキシス

7.17公開

人気シリーズ、「ポケモン」の最新作。ハイテクシティを舞台に、サトシと不思議な少年トオイの熱い友情が描かれる。お馴染みのポケモンたちも大活躍。

配給◎東宝

劇場版金色のガッシュベル!! 101番目の魔物

8.7公開

TVやカードゲームで人気炸裂アニメがついに映画化。やさしい魔界の王になるため戦うガッシュたちの前に、最強の魔物が出現。大ピンチが彼らを襲う。

配給◎東映

それいけ！アンパンマン　夢猫の国のニャニイ　同時上映：つきことしらたま～ときめきダンシング～

7.17公開

アンパンマン・シリーズ16作目。不思議な夢猫の国からやって来た子猫ニャニイとメロンパンナの友情を中心に、アンパンマンと仲間たちの冒険が展開。

配給◎東京テアトル、メディアボックス

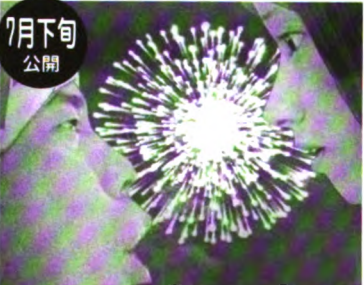
スチームボーイ

7.17公開

「AKIRA」から16年。アニメ界の巨匠・大友克洋の最新作。19世紀のイギリス。発明一家に生まれた少年レイは、謎の金属ボールを巡り陰謀に巻き込まれる。

配給◎東宝

マインド・ゲーム

7月下旬公開

「アニマトリックス」などにも参加した映像精鋭集団STUDIO 4℃と湯浅政明監督が実写、2D、3Dを融合させ、路地裏から宇宙までを超絶技巧によって描くハイブリッドムービー。

配給◎アスミック・エース

いかレスラー

7.17 公開

ナンセンスとシュールで過激なギャグと本格格闘技アクション満載で描く、スポ根・海産モンスター・ヒーロー巨編。原作・監督はカルト的人気の河崎実。

配給◎ファントム・フィルム

天国の青い蝶

8月 公開

「翼をください」で注目されたカナダの女性監督レア・プールが描く感動のトゥルー・ファンタジー。大病を患う少年が幻の蝶を求めてジャングルに旅立つ。

配給◎東芝エンタテインメント

地球で最後のふたり

7月下旬 公開

浅野忠信がヴェネチア国際映画祭コントロコレンテ部門で主演男優賞を受賞した話題作。クリストファー・ドイルのカメラがタイで過ごす恋人たちの風景を映し出す。

配給◎クロックワークス

好きと言えるまでの恋愛猶予

7月下旬 公開

60年代パリに生きる若者たちの恋愛模様を、当時のポップ・ミュージックにのせてキュートに描く。主演のマチュー・シモネは、ジャック・ペランの息子。

配給◎アートポート

セックス調査団

8.21 公開

「モダーンズ」のアラン・ルドルフ監督が性の衝動、性の神秘を調査する人間たちの姿を描く。原作は、超現実主義者アンドレ・ブルトンが残した実在のセックス調書。

配給◎アルバトロス・フィルム

堕天使のパスポート

夏 公開

英国の鬼才スティーヴン・フリアーズが、ロンドンの片隅で生きる移民たちの日常を描いた人間ドラマ。オドレイ・トトゥがトルコ人の移民娘役で好演。

配給◎東芝エンタテインメント

プリンス&プリンセス

8.7 公開

フランス・アニメの巨匠「キリクと魔女」のミッシェル・オスロが手掛けた幻の劇場用アニメ初監督作品。美しい影絵で綴る6編の珠玉のファンタジー。

配給◎ワイズポリシー、ツイン

らくだの涙

8月上旬 公開

子供に愛情を持てない母親らくだの奇跡的な音楽療法の行方をとらえたドキュメンタリー。ドイツ、ミュンヘン映像大学に通う2人の新鋭の卒業制作。

配給◎クロックワークス

ぼくセザール 10歳半 1m39cm

7月下旬 公開

フランスの名優リシャール・ベリが監督したキッズ・ムービー。少年セザールと仲間たちの冒険がエキサイティングに展開。家族ドラマとしても楽しい。

配給◎アスミック・エース

16歳の合衆国

7月下旬 公開

16歳の少年の心の闇を28歳の新鋭マシュー・ライアン・ホーグがあぶり出す。製作・出演に名を連ねるケヴィン・スペイシー他、豪華キャストも嬉しい。

配給◎アスミック・エース

ステップ・イントゥ・リキッド

8月 公開

サーフィンに魅了された人々の姿を映し出したドキュメンタリー。「エンドレス・サマー」の監督を父に持つ、デイナ・ブラウンがメガホンを取る。

配給◎グラッシィ

家族のかたち

7.10 公開

ロバート・カーライルとリス・エヴァンスが共演するほのぼの英国映画。1人の女性を巡って2人のダメ男が争う。監督は注目の俊英シェーン・メドウス。

配給◎クレストインターナショナル

青の塔

7.24 公開

「カタルシス」の注目監督・坂口香津美が、それより以前に手掛けた長編初監督作。母と暮らすひきこもりの少年が、傷ついた少女と出会い惹かれ合う。

配給◎アルゴ・ピクチャーズ

ディープ・ブルー

7.17 公開

海で生きる動物から海底5000メートルの未知の域まで、海の知られざる世界を最新の映像技術でとらえた驚異のドキュメンタリー。ロケ地は200ヶ所以上にも及ぶ。

配給◎東北新社

カーサ・エスペランサ～赤ちゃんたちの家～

7月中旬 公開

名匠ジョン・セイルズが新旧のオスカー女優、個性派女優たちを配してリアルに描く人間ドラマ。南米のとある国で、養子を求め女性たちが奮闘する。

配給◎ギャガ

箪笥（たんす）

7.24 公開

「クワイエット・ファミリー」の俊英キム・ジウンが放つ話題のコリアン・ホラー。ソウルの一軒家に住み始めた美しい姉妹が、恐怖体験に戦慄する。

配給◎コムストック

アマンドラ！希望の歌

7月下旬 公開

南アフリカのアパルトヘイトに対し、歌を最大の武器として立ち向かった人々のドキュメンタリー。美しい闘いの記録が、観客の心に大きな感動を残す。

配給◎クロックワークス

永遠の片想い

7.17 公開

「猟奇的な彼女」でブレイクした韓国人男優チャ・テヒョン主演のラヴストーリー。ジファンは２人の女の子に出会うが、やがて切ない三角関係が始まる。

配給◎タキコーポレーション、リベロ

dot the i／ドット・ジ・アイ

7月下旬 公開

新進俳優ガエル・ガルシア・ベルナルが、ロンドンで三角関係のトラブルに巻き込まれていく異色の恋愛ドラマ。二転三転するクライマックスにも注目。

配給◎エスピーオー

THE BLUES Movie Project

8月下旬 公開

マーティン・スコセッシ、ヴィム・ヴェンダース、マイク・フィギスら７人の音楽を愛する監督たちが、ブルースへの想いや情熱をそれぞれに描き出す。

配給◎日活

白くまになりたかった子ども

7.10 公開

デンマーク・アニメの巨匠ヤニック・ハストラップが、イヌイットに伝わる神話を基に描いたおとぎ話。音楽は「WATARI DORI」などのブリュノー・クレ。

配給◎ミラクルヴォイス、ビターズ・エンド

マーダー・ライド・ショー

8月 公開

ヘヴィ・ロック界の大物ロブ・ゾンビが、独自の映像センスで長編映画監督に挑戦。ハロウィン前夜。４人の若者が殺人一家の元に連れられ惨劇を見る。

配給◎アートポート

霧の中のハリネズミ

7.18 公開

ロシア・アニメの巨匠ユーリー・ノルシュテインの代表作「霧の中のハリネズミ」始め、「キツネとウサギ」「話の話」などを一挙上映。

配給◎ふゅーじょんぷろだくと、ラピュタ阿佐ヶ谷

アメリカン・スプレンダー

7.10 公開

友人ロバート・クラムに作画を担当してもらい創刊した人気コミックの原作者ハービー・ピーカーの人生をドラマ化。ピーカー本人も随所に出演する。

配給◎東芝エンタテインメント

華氏911

8月 公開

カンヌ国際映画祭でパルムドールを見事獲得した、異才マイケル・ムーア監督の話題騒然ドキュメンタリー。痛烈なブッシュ批判がユニークな手法で展開される。

配給◎ギャガ、日本ヘラルド

歌え！ジャニス・ジョプリンのように

7月下旬 公開

昨年、悲劇の死を遂げたマリー・トランティニャンの遺作。彼女の元夫が監督したヒューマン・コメディ。歌姫ジャニスに憧れた平凡な女性が輝いていく。

配給◎ギャガ、東京テアトル

狐怪談

8.7 公開

3人の韓国若手女優を主演に、新人女性監督ユン・ジェヨンが描く女高怪談。女子高付近にある願いの叶う28階段が、やがて血みどろの恐怖を引き起こす。

配給◎スローラーナー

エルヴィス・オン・ステージ

7.31 公開

2004年はエルヴィス・デビュー50周年。アーティストとして絶好調を迎えた1970年ラスヴェガスでのステージが、ドルビー・デジタル版でスクリーンに甦る。

配給◎シナジー、コダック

IZOU

8月中旬 公開

鬼才・三池崇史が本格無頼俳優・中山一也他、豪華キャストを配して贈るアクション超娯楽大作。幕末の人斬り以蔵の怨霊が時空を超えて飛びかかる。

配給◎チームオクヤマ

ゲート・トゥ・ヘヴン

7月中旬 公開

「ツバル」から4年。ドイツの尖鋭ファルト・ヘルマーが、様々な国の俳優たちを集め、国籍の壁を越えたラヴストーリーをハートウォーミングに映し出す。

配給◎アルシネテラン

デビルズ・バックボーン

8月下旬 公開

「ミミック」などハリウッドでも活躍中のメキシコの鬼才ギレルモ・デル・トロが、エドゥアルド・ノリエガ主演で描くヨーロッパ最恐の怨霊ホラー。

配給◎ザナドゥー

風音

7.31 公開

芥川賞作家・目取真俊が書き下ろした脚本を、名匠・東陽一が映画化。夏の沖縄。強い海風が吹くと聞こえる不思議な“風音”の謎が明かされていく。

配給◎シグロ

トッポ・ジージョのボタン戦争

8月下旬 公開

イタリア生まれのネズミの男の子トッポ・ジージョ。この不朽のキャラクターを主人公に、巨匠・市川崑が1967年に作り上げた日＝伊合作のパペット映画。

配給◎ケイブルホーグ

LOVERS

8.28 公開

「HERO」でアクション映画にも進出した中国の巨匠チャン・イーモウが、金城武、チャン・ツーイー、アンディ・ラウを主演に描く大型ラヴストーリー。

配給◎ワーナー・ブラザース

ムーンライト・ジェリーフィッシュ

8.7 公開

藤原竜也、岡村綾、木村了ら注目若手俳優たちがアンサンブルを奏でる、ホロ苦い恋のメルヘン。太陽の下で生きられない青年の姿が幻想的に描かれる。

配給◎PONY CANYON

WALKABOUT 美しき冒険旅行

7月下旬 公開

1972年に公開されて以来、ニコラス・ローグの最高傑作と語り継がれてきた幻のデビュー作。アボリジニの少年と白人少女の淡いロマンスが浮き上がる。

配給◎ケイブルホーグ、日本スカイウェイn.s.w.

読んでから観るか、観てから読むか

恒例・夏休み映画座談会

塩田時敏×金子裕子×中西愛子×竹之内円（司会・構成）

●もうすぐ夏休みシーズン。
数多くの大作、話題作の公開を間近に控え、
映画ファンならずとも心が弾む季節が今年もやってきました。
そこで塩田時敏、金子裕子、中西愛子、竹之内円の
いつものメンバーによる
恒例の夏休み映画座談会を今回も開催。
完成が間に合わなく観ることが
出来ない映画も数あれど、
独自の視点で話題作を一刀両断。
何を観ようか迷っているあなた、
是非参考にしてみてください。

竹之内　今年も大作が観られないうえでの座談会ですが、まずは6月26日公開の**「ハリー・ポッターとアズカバンの囚人」**。原作を読んでいないファンにはこれまででいちばんおもしろいと評判ですが。

金子　原作を読んだ派として原作の省略のしかたが荒いと思う。事象を追うだけになっちゃっている。でも映像的には建物の外のシーンが多くなって、そこが新しくていいかな。

中西　前2作と別物というくらい変わっていて、お子様映画から大人っぽくなったかな。私はそこが好きなんですけど、あそこまで変わると、戸惑う人もいるかもしれませんね。

金子　あの子たちも物語同様、成長してるから。

塩田　興味を持てない僕としては変わってない気がしたけどな(笑)。監督が代わって期待したんだけど、監督の色が出る映画じゃないし、ハリ・ポタの世界が強固で誰が撮っても一緒。でもゲイリー・オールドマンやアラン・リックマンにデイヴィッド・シューリスとかイギリス人の底意地の悪さが顔に貼りついた俳優を揃えたんだから(笑)、彼らの話をもう少し描いてもおもしろくなっただろうに。

竹之内　その3人が揃うのがほんの数秒なのはもったいないですね。次作の「炎のゴブレット」もすでにマイク・ニューウェル監督で撮影が始まってますが。

金子　ニューウェルはシリーズ初となるイギリス人監督だけどどうなるのかな。クリス・コロンバスも監督に復帰したがってるみたい。でもスピルバーグがやりたがってるんだから撮らせればいいのよ(笑)。

中西　ニューウェルは**「モナリザ・スマイル」**を観ると、相当スピーディに展開させちゃうかも。

金子　「モナリザ・スマイル」は今頃なぜこういうテーマの映画作ったのかわからない。ニューウェルは職人なんだけど古くさいのよね。

中西　でもこれからスターになりそうな今の若い女優たちが、女性が生き方を選択できる時代の原点を素敵に演じているのは感慨深いです。今、受けるかどうかわかりませんけど。

塩田　つまり「ハリ・ポタ4」も期待できないってことだ(笑)。

竹之内　それではもうひとりの人気子役ハーレイ・ジョエル・オス

メントが出演している**「ウォルター少年と、夏の休日」**は？

金子　いい映画で名優ふたりの演技もほのぼのとして好きなんですけど、ハーレイ君のおっさんぶりには驚いた（笑）。

中西　演技が鼻に付くんですよ。自然でいいのに、演技してますって感じで。

「スパイダーマン２」

「ハリー・ポッターとアズカバンの囚人」

竹之内　ロバート・デュヴァルとマイケル・ケインに対抗しなきゃいけないのはわかるんですけど、子供の素直さが出てませんからね。

塩田　日本だとハーレイで売らなきゃいけないんだろうけど、この邦題じゃ良さが伝わらない。

金子　**「マッハ！」**もおもしろいのにタイトルがよくない。なんだかわからないし。

竹之内　サブタイトルに「ムエタイ野郎」を付けましょうか（笑）。

塩田　男優の技はすごいんだけどね。女優が今ひとつ。〝マッパ〟もいいが少しは〝マッハ〟にしてくれないと（笑）。

中西　コメディかと思ったらけっこうシリアスで驚きました。仏教国のお国柄が出てるのはおもしろいですね。最後はちょっと感動。

金子　ジャッキー・チェンみたいなすごい人が、また出てきたと思った。

塩田　リュック・ベッソンあたりがツバつけそうだよね（笑）。ツマんないドラマくっつけてさ。

竹之内　人間の迫力の次はCGの迫力ということで、公開中の**「デイ・アフター・トゥモロー」**は？

塩田　上等な映画じゃないけど飽きなくておもしろかった。いろんなパニック・ディザスタームービーがあったけど竜巻も洪水も全部襲ってくる集大成映画で下手な人間ドラマがないだけに「インデペンデンス・デイ」よりずっと楽しめたな。京都議定書にサインしろよってメッセージも入ってるし、メキシコには不法侵入するし、エメリッヒ監督がついにアメリカにケツまくってやるじゃないかって（笑）。

竹之内　集大成のせいか、どこかで見たシーンも多いです（笑）。宇宙人やゴジラなら戦い方もわかるけど、天変地異相手にどう戦うのかと思ったら、〝じっと我慢する〟だったのには笑いました。

――次は**「シュレック２」**ですが、いろんな映画のパロディやギャグがけっこう笑えたんですが。

金子　そうなんだけど、やっぱり主役は美しくなきゃ（笑）。あと人間の登場人物が多いからCGだとヌメっとして気持ち悪いのよ。

中西　私もあれがすごく嫌なんです。無理に人間の表情やろうとしていて。バンデラスの猫はかわいいですけど。

竹之内　同じアニメの**「スチームボーイ」**もありますが、こちらは今号の巻頭特集を参考にしていただけばと思います。次は**「テイキング　ライブス」**ですが。

塩田　オチがおもしろい。タイトルの通り他人の人生を乗っ取るんだけど、もうひとつのヨミがあって、アンジェリーナ・ジョリーが精気、命を乗っ取り（笑）、妊娠して犯人をおびき出すんだよ。

中西　「ボーン・コレクター」みたいな役はうまいですからね。

日本で当たる？ ヒーロー映画

竹之内　ここからはまだ観ることが出来ない映画を。まずは**「スパイダーマン２」**。

金子　トビー・マグワイアみたいにシリアスをやれる子がヒーローをやるのはいいわね。

塩田　「スパイダーマン」は１作目でやりつくした気はするけどね。

竹之内　今回はコスチュームを捨てるシーンがあったり、マスクなしで地下鉄を止めたりともっと人間臭い話になるのではと思ってるんですが。

金子　日本じゃアメコミってそんなに認知されていない。「スパイダーマン」が当たったのも作品の

出来だからね。それでいくとアメコミじゃないけど**「サンダーバード」**はどうなんでしょう?

竹之内　当時の子供たちが親になって、子供と観に行くのでファンは広いと思うんです。ただ10分間の映像を見た限りでは「スパイキッズ」みたいだし、メカのデザインも丸くなってカッコ悪いし、ファンとしてはちょっと心配ですね。

中西　ノン・スターなので日本では難しいんじゃないかと思うんですが。

金子　ペネロープがムエタイで戦っちゃうんでしょ。

竹之内　それにサンダーバードの誕生前夜みたいな話なのにいきなり基地が乗っ取られるのはどうかと思うのですが。

「サンダーバード」

――それでは次に**「リディック」**です。製作費170億円のSFアクションですが。

中西　ヴィン・ディーゼルの日本での人気が今ひとつなのが気になります。

金子　「トリプルX」は体張ってがんばってると思ったんだけど、そんなに人気が出なかったね。

竹之内　バディ・ムービーの相棒でいい味出しそうな役者ですね。

塩田　予告見る限りじゃ「マトリックス」から「トロイ」まで何でもありの映画に見えるけど。

竹之内　この作品は「ピッチブラック」からスピンオフされた映画。SFがよくわかってる監督なので個人的には期待してます。

――次は**「キング・アーサー」**ですが、剣と魔法の物語というよりは史劇の作りになっているようです。

金子　製作はジェリー・ブラッカイマーだからね。でも期待はしているんだ。クライヴ・オーウェンもいいし、キーラ・ナイトレイは久々に育ってほしいと思った女優だから。

中西　意外と硬派のようなので、笑いの要素がないとブラッカイマーでも「パイレーツ・オブ・カリビアン」みたいにはいかないかも。でもオーウェンと監督に期待。とても楽しみな映画ですね。

金子　監督はいいんだから、ブラッカイマーらしさがいい意味で出ればいいんだけどね。

塩田　いい意味って、この映画にそんな要素あるの? アーサー王でドッカンドッカンやられても(笑)。

竹之内　大丈夫です。あの時代に飛び道具はないですから(笑)。

金子　これでジョニー・デップかブラッド・ピットが出てりゃ大ヒットなのにね。

塩田　でもお正月映画の座談会の時のように「ラスト サムライ」に誰も期待しなかったのがよかったりするからね(笑)。

金子　**「LOVERS」**もちょっと観た人が「HERO」よりいいって言っていて、すごく期待してます。チャン・ツーイーは脱いでないけど金城武は脱いでるらしいし(笑)。

竹之内　カンヌで話題の**「華氏911」**も急遽8月の公開予定になりました。

金子　ドキュメンタリーだけは観ないとさすがにわからないわね。

塩田　アラン・ルドルフ監督の**「セックス調査団」**もひょっとしたら大傑作かもしれないよ。

竹之内　次は巨匠監督の新作を取り上げたいと思います。

中西　アルトマンの**「バレエ・カンパニー」**はバレエ団の群像劇なんですけど、バレエ・シーンをちゃんと撮っていて楽しめます。ネーヴ・キャンベルは製作も兼ね、素晴らしい踊りも見せてくれますよ。難を言えば最後の踊りが……。

金子　タイトルがドキュメンタリーっぽいのが残念ね。

塩田　ベルトルッチの**「ドリーマーズ」**は僕の今年のベスト・ワン候補ですね。これはね68年が舞台だけど映画ファンに「お前ら映画ばっかり観てないで、火炎ビンのひとつも投げろ」って映画でね(笑)、それでいてヌーヴェルヴァーグ等にどっぷりで、性と政治と映画のバランスのよさが心地いいんだな。主演の3人もいいし。

中西　映画の引用はベタでこっ恥ずかしいですけど(笑)。若い子を描いてますがエロ爺さんの視線がベッタリ。ま、そこも興味深く(笑)。

塩田　**「69 sixty nine」**も「ドリーマーズ」と同じ時代を描いてるんだけど、比べると子供の映画だな。笑えるしおもしろい映画なんだけど。

「誰も知らない　Nobody Knows」

「ドリーマーズ」

「リディック」

中西　69年の空気が出ていないような気がするんですけど。原作では斜に構えてイキがってる少年がお調子者の現代っ子になってる。

塩田　69年にこだわらないのならシックスナインにこだわって(笑)、妻夫木にもっとガンガン青(性)春してくれと。

金子　**「丹下左膳　百万両の壺」**はユルユルだけど、不思議と最後まで見られちゃった。

塩田　時代劇というよりはホームドラマ。なにしろ山中貞雄のオリジナルが、やりつくされた丹下左膳を開き直って人情話にして傑作になったというやつだから。これはコメディをやりたかったんだよ。そう思えば面白い。時代劇だと思って観に行ったら怒るかな(笑)。

竹之内　邦画では話題の**「誰も知らない　Nobody Knows」**がありますが。

中西　これは傑作だと思いますよ。カンヌでは柳良君が賞を取ったけど、監督の力あってこそだし、ほかの子供たちもＹＯＵもすごくい い。10年前の事件がモデルなんですが、今観てもタイムリーな内容。ここ最近の邦画では断トツによかったですね。悲惨な話なのに結構笑える部分もあるし、是枝裕和監督の最高傑作だと思いますよ。

最近の映画は子役が決め手

竹之内　皆さんのお勧めの注目作を挙げていただければと思います。

塩田　**「茶の味」**はベスト・テンに入れるべきおもしろい映画ですよ。石井克人監督の優しさが出てるんだな。

金子　**「堕天使のパスポート」**は「アメリ」のつもりで行かないように(笑)。悪い映画じゃないんだけど暗いのよ、これ。

中西　意外に社会派なんですよね。

塩田　オドレイ・トトゥって本当は主演じゃないしね。そのつもりで観ると違うから。

中西　**「ぼくセザール10歳半　1m39cm」**はかわいい映画で、よく出来た子供コメディで楽しかった。

金子　ヨーロッパの子役って本当にいいのね。ついやられちゃうの。

中西　変な癖がなくて子供らしいんですよね。

竹之内　**「天国の青い蝶」**も子役がよかったですよ。ただ病気が治ったら美しい蝶ならＣＧじゃなくて本物で見せてほしかったというのがありますね。映画はとてもいいんです。

塩田　ちなみに「茶の味」のガキもすごくいい(笑)。タイ映画では**「地球で最後のふたり」**も浅野忠信の脱力演技とクリストファー・ドイルの酔ったカメラでタイのダラダラした空気の泣ける愛の映画ですよ。三池崇史のヤクザがすごい(笑)。

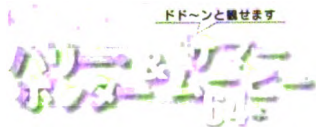
金子　**「dot the i／ドット・ジ・アイ」**がよかった。主演のガエル・ガルシア・ベルナル君とジェームズ・ダーシーもいいし、ラストのどんでん返しのトリックもおもしろかった。

竹之内　**「好きと言えるまでの恋愛猶予」**も60年代の雰囲気がよく出てるかわいい映画でしたね。

金子　観ていていじらしいし、子供時代がかわいかったね。

中西　影絵のアニメなんですけど**「プリンス&プリンセス」**もよかった。過去や未来の６つのお話があって、日本の江戸時代の話があったりシャレてるんですよ。

塩田　**「いかレスラー」**がちょっとおもしろかったかな。いかより意外にレスリングに愛情を持って描いてるんだよ。あとレスリングな

ドドーンと観せます

「華氏911」

「キング・アーサー」

まだまだあります！ 夏休み映画ー追加情報ー

「ハーケンクロイツの翼」
「ロボコン」の小栗旬最新主演作。やる気のない男。やる気しかない男。相手を不幸にする女。暴走しまくりの青春ムービー！
配給◎SUPLEX INC.

「D.P」
『仮面ライダー555』で一躍ブレイクした半田健人主演による新感覚バイオレンス&サスペンス。監督は「巌流島―GANRYUJIMA―」の千葉誠治。
配給◎ケイエスエス

ら田口トモロヲが「反則王」みたいなサラリーマン・レスラーになる「**MASK DE 41 マスク・ド・フォーワン**」もおもしろい。

竹之内　殺人鬼ホラーのオマージュとパロディなんですが、「**マーダー・ライド・ショー**」はパワフルでおもしろかったですね。誰も助からないというのがすごい。

塩田　久しぶりに見たけど「**WALKABOUT 美しき冒険旅行**」は傑作ですよ。英国版のジェニー・アガターがエロい(笑)。

金子　「**アメリカン・スプレンダー**」もすごくおもしろかった。時代の文化や気分がよく出てた。「**カーサ・エスペランサ～赤ちゃんたちの家～**」はジョン・セイルズだから優しいし多面的ですごくいい映画なんだけど、そこまでして子供が欲しいのかって思っちゃう。誰にも感情移入できない。

中西　アメリカの女性がそうなのかもしれません。私もあの感覚はわからないですね。えげつなさを感じてしまう。いろいろ考えさせられますが。

塩田　「**IZOU**」はついに三池映画が実験映画の領域に入ったという映画で、しかもそれを突き抜けてウルトラ・エンタテインメントになってしまった(笑)。以蔵の怨念が立ちふさがる者をすべて殺していくという、時代劇でも現代劇でもない、ただのアクションでもない、ただの実験映画としか呼べない映画ですね。これはいいぞう(笑)。

夏休みはコレを観ろ！

竹之内　どうやらこの夏は60～70年代テイストの映画と子供の時代という感じになりましたね。

金子　みんな、ハーレイ君みたいにおっさんにならないでね(笑)。

竹之内　それではこの夏のベスト5と期待値高いの映画を挙げていただいてお開きにしたいと思います。

塩田　「ドリーマーズ」、「茶の味」、「地球で最後のふたり」、「IZOU」。新作なら「69」で、リヴァイヴァルなら「WALKABOUT」。あえて期待するなら「スパイダーマン2」と「華氏911」、「セックス調査団」かな。

金子　「ハリー・ポッター」、「ドット・ジ・アイ」、「ぼくセザール」、「マッハ!」、「ドリーマーズ」。期待は「LOVERS」と「キング・アーサー」、あと話題性で「華氏911」だね。

竹之内　「ハリー・ポッター」、「シュレック2」、「スチームボーイ」、「天国の青い蝶」、「マーダー・ライド・ショー」で期待作が「サンダーバード」と「華氏911」ですね。

中西　「ハリー・ポッター」、「誰も知らない」、「プリンス&プリンセス」、「ドリーマーズ」、「モナリザ・スマイル」。期待は「LOVERS」と「華氏911」、「キング・アーサー」です。

追悼 三橋達也

三橋達也（みはし・たつや）
1932年東京・銀座生まれ。44年劇団「たんぽぽ」に入団するが、軍隊に召集され、その後シベリア抑留生活を体験する。47年に復員。48年太泉撮影所に入社、51年「あゝ青春」で本格的映画デビューを飾る。以後、松竹、日活、東京映画、東宝などに所属し、都会的で洗練された二枚目として、ロマンス、アクション、文芸もの、社会派ドラマ、ミステリーとさまざまなジャンルで活躍。出演作品は140本。代表作は、川島雄三監督の「愛のお荷物」（54）「あした来る人」（55）「洲崎パラダイス　赤信号」（56）、市川崑監督の「青春怪談」（55）「こころ」（55）、黒澤明監督「悪い奴ほどよく眠る」（60）「天国と地獄」（63）、成瀬巳喜男監督「女の中にいる他人」（66／毎日映画コンクール男優助演賞受賞）、アクション映画「暗黒街の牙」（62）「国際秘密警察」シリーズ（63～66）、海外作品「勇者のみ」（65）「トラ・トラ・トラ！」（70）など多数。70年代以降は映画出演が減るが、01年に主演した「忘れられぬ人々」で、青木富夫、大木実と共にナント三大陸映画祭主演男優賞を、単独で毎日映画コンクール男優主演を受賞。その後、「Dolls（ドールズ）」（02）、「CASSHERN」（04）と続いた。04年5月15日、急性心筋梗塞のため、死去。享年80。

映画俳優としか言いようのない存在

文＝篠崎誠

この一年足らずで映画「忘れられぬ人々」でご一緒させていただいた方々が立て続けに亡くなられました。佐伯秀男さん、青木富夫さん、うしおそうじ（鷺巣富雄）さん、そして三橋さん。悲しいとか淋しいとか、そんな言葉で言い表せないまま、今も呆然としています。父が死んだ時、いや、ひょっとするとそれ以上の無念さで、考えれば考えるほど胸が張り裂けそうです……。

三橋さんと初めてお会いしたのは1999年の春でした。「あんたみたいな若い監督がなんで戦争をくぐり抜けてきた大正生まれの人たちの映画を作ろうと思ったのか知りたくてね」。開口一番、三橋さんはそうおっしゃり、ご自身のシベリアでの抑留体験をお話してくださいました。

「強制労働の帰りに動けなくなった男がいてね、石田って農家の出身でね。『班長（三橋さんのこと）、日本へ帰ったら、おらの家に遊びにきてください。うちには二升いっぺんにつける臼があるで、班長にはえれぇ世話になったもんで、餅ついて腹いっぺえ喰ってもらうんだ。あんころ餅だの、からみ餅だの……』『そいつは豪勢だなあ、是非ご馳走になるよ』。で、ふと黙ったなと思ったら、もう死んでいてね。車には予備タンクってのがあって、ガソリンが切れても少しは動くもんだけど、それもなくなると全く動かなくなる。人間も一緒でね。可哀想に最後の力も使い果したんだろうね」。

その後、三橋さんのいきつけの中華料理店でご馳走になりながら、いろいろなお話を伺いました。酔いつぶれた川島雄三監督を何度かおぶって家まで送り届けたこと。黒澤明監督の「用心棒」で仲代達矢さんが演じられた敵役

「青春怪談」(55)

「東京マダムと大阪夫人」(53)

「洲崎パラダイス　赤信号」(56)

「あした来る人」(55)

「悪い奴ほどよく眠る」(60)

は最初三橋さんにオファーがきたこと(『タッちゃんにピッタリの役だ。君に合わせてピストルをもたせることにしたよ』。で、僕も『首にマフラーを巻くのはどうですか』なんて、アイデアだしたら、黒澤さん、喜んでくれてね。でも自分が世話になったプロデューサーの作品とどうしても重なって、断腸の思いで直接断りにいったら、怒って口もきいてくれなくてね」)。フランク・シナトラが監督・主演をつとめた「勇者のみ」で渡米した際のエピソード(「最初の監督はラウォール・ウォルシュが監督するはずで、僕も挨拶したんだ。こんな眼帯しててね、貫禄あったな」「レコーディング・スタジオに招待してくれたり、サヨナラ・パーティまでしてくれるのはいいんだけど、シナトラがあやうく溺れそうになって、スケジュールが押したあげくにまだ4分の1くらい撮影が残ってるのに当のシナトラが帰っちゃってね」)。堀池清監督の「青空の仲間」で初めて新珠三千代さんと共演した話(『伊藤雄之助にそそのかされてさ、「タッちゃん、あの子、なんかツンツンしてるからさ。打ち解けさせるためにスチール撮りの時、二人で胸でもさわってやろうよ」。で、イチ、ニのサン！　で、俺だけやって、アイツ爆笑してるんだよ。新珠君、『どうしたの?』って全然気がついてなくってさ、よせばいいのに、『タッちゃんがさ』って。それで怒って口聞いてくれなくなって。次の『洲崎パラダイス』の時もまだ警戒されてて往生したよ』)などなど。今考えれば夢のように贅沢な時間でした。

しかし、わずか数カ月後、資金繰りの失敗で映画が中止。私は新しいプロデューサーと組み、三橋さんも信じて待っていてくださいました。再開の目処がつき、お会いした時の三橋さんの言葉が忘れられません。「ひとつだけ聞きたいんだけど、これ、ビデオで撮るんじゃないよね」「ええ、絶対にフィルムで撮ります」「どうもビデオってヤツは調子がでなくってね。自分はやっぱり映画で育ったから」。

撮影が近づいたある日、「何か記念になるものをプレゼントをしたいんだけど。監督は帽子とか被らないかね?　それともディレクターズ・チェアはどうかな」と三橋さん。「でも僕、落ち着きがなくってじっとしてられないタチなもんで。お気持ちだけで充分です」。そしていよいよ迎えたクランク・インの当日、長男が生まれた。まもなく立派なベビー・カーが送られてきた。三橋さんからだった。翌日、現場でお礼を申し上げると「うちの孫と同じ物あげたかったんだけど品切れでね、でも同じメーカーの物で使い勝手がいいっていうから……。子供って可愛いもんでしょ」と目を細めていらした三橋さん。

映画のアイデアもいただいた。「忘れられぬ人々」の終盤、死を覚悟した三橋さんがいつも遊びに来る子供に戦友の形見のハーモニカを託す場面がある。脚本では縁側に手紙を置き、ハーモニカをおもし代わりにしていたが、完成した映画ではハーモニカは軒下にテルテル坊主のようにぶら下げられ、それを三橋さんが微笑みながらチョコンと指で弾く。あれは三橋さんのアイデアだ。いつか川島雄三監督の「洲崎パラダイス　赤信号」の一場面のことをお聞きしたことがあった。三橋さん扮する主人公が腐れ縁の女と別れて真面目に働き出し、失踪していた飲み屋の亭主と肩を並べて歩く場面。「俺が言えた義理じゃないが、やっぱり堅気な暮らしが一番だよ」という亭主の言葉に、三橋さんは咥えかけた煙草を自分の耳に挟む。しかし、次の場面で蕎麦屋に戻ると入れ違いで、たった今まで女が自分を待っていたと知り、耳に挟んだ煙草に無意識に手を伸ばし、火をつけてしまう。虚空を見つめて煙を吐き出すその姿に、ああ、この人はやはりあの女のことが忘れられないのだなという予感が見るものを締め付ける。煙草という小道具の見事な使い方。「あれは川島さんじゃなくて、僕が考えたと思う。しかし、よく細かいところ覚えてるね」。そう言って三橋さんは嬉しそうに微笑まれた。言葉で説明するのではなく、こんな風にちょっとした仕草や細部のアイデアの積み重ねが映画をより豊かなものにすることを三橋さんは体でわかっていらっしゃったのだ。

「監督、この『人んちあがろうって人間なら最初に自分の身分をちゃんと明かすのがスジってもんだろ』って台詞なんだけどね、この〝最初に〟ってところと、〝ちゃんと明かす〟ってところね、別の言い回しもあるんだけどどうかね。『人んちあがろうって人間なら〝真っ先に〟自分の身分を〝ハッキリさせる〟のがスジってもんだろ』。こんな感じなんだけど」。思わず頬が緩む。「いいですね。そちらの方でお願いします」。

三橋さんの脚本を覗きこむと、台詞のフレーズごとに色とりどりのペンで線引きされていて、いろいろと書き込みがある。恐らく台詞の抑揚やリズム、どの部分を強調すべきかなど、事前にキチンと考え抜いた上でご自分にわかるように脚本に書き込まれているのだろう。「僕はこう見えてもガキの頃に新劇で育ったもんだからね、いろいろ考えないとかないと現場で不安になるんだよ」。私の視線に気づいた三橋さんが「監督のも今度覗いてやろうかな」と照れくさそうに笑われた。しかも、そうやってとことん役を突き詰めた上で、三橋さんはそれに固執するのではなく、相手の俳優の出方や私の狙いに応じて、柔軟に対応してくださった。これまでの長いキャリアの中で優柔不断な優男から気のいい二枚目、無骨な男まで、様々なキャラクターを計算に裏打ちされた繊細な演技で演じわけながら、それがいわゆる芝居臭さに止まることがなかった三橋さんの、まさに「映画俳優」としか言いようのない佇まいに何度も感動した。演技のうまさをこえて、ただそこにいるだけで、映画を輝かせてしまう存在そのものの魅力。カメラの脇の特等席からそんな三橋さんを見ているだけで、幸せな気持ちになりました。

映画が出来てからも、毎年川島雄三さんの命日に川島組ゆかりの人々が集

追悼 三橋達也

「忘れられぬ人々」キャンペーンにて
篠崎誠監督、三橋達也氏、青木富夫氏

「トラ・トラ・トラ！」(70)

「女の中にいる他人」(66)

「Dolls（ドールズ）」(02)

「忘れられぬ人々」(01)

「忘れられぬ人々」(01)

まる「川島忌」に呼んでいただくなどの、お心遣いが身に沁みました。またナント三大陸映画祭で大木実さん、青木富夫さんと3人揃って主演男優賞を受賞された時には、奥様の安西郷子さんとも合流して、新橋でご馳走になりました。その席上「女の中にいる他人」で毎日映画コンクールの男優助演賞を受賞された時、監督の成瀬さんに「三橋君、僕はね、助演じゃなくて、君も主演のつもりであの映画を撮ったんだ」と言われて、嬉しかったとおっしゃっていましたね。それから今度は本当に同じ毎日映画コンクールの男優主演賞を受賞されました。再び奥様やキャメラマンの岡崎宏三さんらと食事に誘っていただきました。後に雑誌の取材で「『忘れられぬ人々』で毎日映画コンクールの男優主演賞をとれたことが、晩年の女房に対するせめてもの孝行になった」と答えられているのを読んだ時には正直胸がつまりました……。

　最後にお会いしたのは、昨年10月でした。三橋さんが主演し、保坂延彦さんが監督する脚本の改稿を手伝ってほしいと頼まれました。「やっぱり映画をやりたいんだ。ことによっちゃ僕自身がプロデュースしてもいいって考えてるんだ」。久しぶりにお会いする三橋さんはとてもお元気そうでした。力不足でこの件ではお役にたてなかったのですが、その頃、僕自身、実は三橋さんを念頭において、若い脚本家と脚本を書き進めていました。役柄は映画の要となる老ハンターの役でした。以来数カ月にわたって改稿を重ね、これでようやく形になったと思えたのが、忘れもしません、今年の5月14日です。「この役はやっぱり三橋さんにお願いしたい。企画にゴー・サインが出次第、僕の方から頼むよ」。そう言って脚本家と祝杯をあげたわずか数時間後に三橋さんがお亡くなりになってしまわれるとは……。

　たった5年間のお付き合いでしたが、まだまだ書ききれない思い出がたくさんあります。今三橋さんのことを思い出すと、真っ先に浮かんでくるのが、いたずらを見つかった子供みたいな、あのはにかんだような笑顔です。三橋さんのあの笑顔がもう二度と見られないことが、なんともやりきれません。棺の中の安らかなお顔を拝見した今もまだ信じられない気持ちです。正直まだ泣くこともできないまま、途方に暮れております。

　三橋さん、ご一緒するはずだった数々の企画のうち、ただの一つも実現出来なかった私の非力を許してください。短いお付き合いでしたが、本当にいろいろとありがとうございました。この感謝の気持ちに偽りはありません。どうか安らかにお休みください。合掌。

五月二十五日、「ゴジラ」最終作の製作報告記者会見に出席したときのこと。ヒロイン役に決まった菊川怜が、臨席の宝田明について、こう発言した。「ゴジラ」1作目に出演したときの宝田と「(今の宝田は顔が)全然変わっちゃいましたね」と。宝田は、苦笑気味に菊川のほうを振り返ったのだが、内心はかなり動揺しているように見えた。

宝田明は、現役の日本映画界の重鎮男優である。その宝田が、「ゴジラ」最終作に出演するというのは、それだけで感動的な出来事だとふつうは思う。それを件のタレントは、そうした感慨など何もなく、あっさりと当人にとっての〝本音〟を言ってしまったのだ。会見場がシラっとしたのは、言うまでもない。

これが、外国映画の会見だったら、どうだろうか。経験の少ない俳優は、大ベテランがその場にいれば、当然その人の業績を踏まえ、尊敬の態度を見せて言葉に表すだろう。同じ土俵でこれから勝負するのだから、大先輩に対して一目も二目もおいた発言をするに違いあるまい。

そうした当たり前のことが全くできず、ただ場あたり的に月並みな感想を述べてしまうタレントを見て、日本映画界も随分と舐められたものだと呆れ返った。これは最近の若い人は礼儀を知らなくて、といった次元の問題ではない。はっきり言って、俳優としてのプロ根性が稀薄になったのである。

鈴木杏

大高宏雄のファイトシネクラブ

Hiroo Otaka Fight CineClub

Round 104 現代日本映画俳優考Vol.1

六月三日、「スチームボーイ」の試写会に赴いたときのこと。監督のほか声優が舞台挨拶を行ったのだが、主役のレイ役の声優をつとめた鈴木杏が、こう発言した。

「映画を観て、本当に凄い人は、普段それを表さない人だと思いました」と。監督のことを言ったのだが、内容もさることながら、私はこの人の歯切れのいい言い回しに感心してしまった。

一つ一つの言葉のアクセントが非常に明快で、それが知的な要素をかもし出すと言ったらいいか。「リターナー」や「花とアリス」などで、実力のある若手女優であるのは知っていたが、舞台上の彼女には、理解可能な〝少女像〟を覆す面白い資質があるように見えた。監督たちは、まだ彼女の資質を生かしてないな。そんな思いを、壇上の鈴木から抱いた。

六月四日、「キューティーハニー」を銀座の映画館に観に行ったときのこと。初見参の佐藤江梨子の、まさにキュートなアクションに気分を良くした。気に入ったのは、監督が彼女の肉体を顔の表情含め、〝運動する女優体〟として把握していたことだ。下着姿の屈伸姿勢から、泣き笑いや意味不明な顔の崩れた表情まで、〝運動する〟佐藤の肉体は、魅力にあふれていた。

とくに感動的だったのは、佐藤の顔が工藤夕貴と似てしまうことであった。おそらく、監督の頭にあったのは、工藤のデビュー二作目である「台風クラブ」を頂点とする相米慎二の演出手法だったのではないか。かつてのプログラム・ピクチュアの添えもの的骨格をもたざるをえないこの作品を前に、監督は勝負どころは佐藤の〝資質〟に賭けたのである。

俳優は、虚実入り乱れたなかで日々、見＝観られている。その、ときどきの〝貌〟を切開してみよう。とりあえずは、日本映画に限る形で。

第26回ぴあフィルムフェスティバル

□7月3日(土)～7月9日(金)　□会場：日比谷・シャンテ シネ

〈巨匠たちのファーストステップ特別版〉よりテオ・アンゲロプロス監督「再現」

ぴあフィルムフェスティバル
ディレクター
荒木啓子さん

http://www.pia.co.jp/pff/

明日の日本映画界を背負う才能が集うぴあフィルムフェスティバルの季節がやってきた。今年はどんな映画祭になるのか、ディレクターの荒木啓子さんに、メインとなるアワード部門を中心にお話をうかがった。

25回目という節目の年で、期間も長くプログラムも盛りだくさんだった昨年に比べ、今年のプログラムはぐっとシンプルになった印象だ。もちろん、コンペティション部門である「PFFアワード2004」が中心となることに変わりはない。

「665本の応募作品の中から、審査員が必死に観て、熱くシビアに語り合って選んだ15作品を上映します。どの作品も相当パワフルで、おもしろいですよ。このおもしろさをどうやって伝えたらいいのか、毎年悩むんです。わずか15作品ですから、だまされたと思って一回観て！　としかいいようがないんですけど（笑）」

全体の傾向として、エンターテイメント性を重視する作品が増えたという。

「PFFアワードというのは、あくまでも『最初の一歩』を応援する部門なんですけれども、入賞者の中から選ばれた監督を援助するスカラシップが大きな注目を集めるようになったので、それを目標に応募してくる人が多くなりました。その影響でエンターテイメント志向が強くなっているんだろうと思います」

映像や映画のあり方も変わってきたようだ。

「映像を一人で作って形にすることが誰にでもできるような時代になったと思います。だから、最初の一歩を勇気を持って踏み出しやすくなった。後はいかに継続していくか、いかに勉強していくかですね。映画をはじめて止まらなくなるような人が一人でも二人でも増えればいいなと思っています」

アワード以外の部門でも、若い作家たちの映画作りに刺激を与えることを最も大切にしている。

「今、世界的に見ても、映画に向かう切実さというものがどんどん希薄になっていると思います。映画で何ができるのかというイマジネーションが弱っている。『すごい！』といえる作品を見ている量が圧倒的に少ないんですよ。（映画を作ろうとするのなら）映画というものを真剣に考え抜いてきた人たちの作品を見ないとまずい。だから今回はアンゲロプロスです」［文＝佐藤結］

PFFアワード2004

森田芳光、黒沢清、塚本晋也といった日本を代表する監督から、矢口史靖、古厩智之、李相日といった中堅、若手監督まで、多くの監督たちの登竜門となったコンペティション部門。今年も665本の応募作から選ばれた15本の作品が上映され、映画祭最終日にはグランプリ、準グランプリ、審査員特別賞他の各賞が発表される。入賞者には「PFFスカラシップ」獲得を目指して企画を提出するチャンスが与えられる。

荒木さんが「どれもおもしろい」と太鼓判を押す15作品の中に、今年は女性監督の手によるものが5本あることが注目される。中でも「青春プレイヤー／平凡プラネット」は女性4人が共同で監督した作品だ。また、演劇活動を続けてきた友人同士の作品が共に選ばれたのが「ある朝スウプは」と「さようなら」。新興宗教と自殺マニアという重目のテーマを見応えのある作品に仕上げている。また、監督が応募当時高校生だった「修学旅行班別自由行動」は、クラスのはみ出しもの3人が、バラバラな気持ちを抱えながらも共に時間を過ごし、自分の殻を破るきっかけをつかむ様子を描いた作品。身近なテーマを奇をてらうことなく、まとめた映像がすがすがしい。「アワード作品を観たことがない」という人にも、ぜひ、直接観ていただきたい作品ばかりだ。

■東京会場タイムテーブル

7月	11：00	13：45	16：30	19：15
3（土）	PFFアワード2004〔Aプロ1〕 「マンモ」 「修学旅行班別自由行動」	PFFアワード2004〔Bプロ1〕 「つぶろの殻」 「新ここからの景」	PFFアワード2004〔Cプロ1〕 「文句ある？」 「五月ノ庭」	オープニング上映 〈最新日本映画プレミア上映〉 市川準監督作「トニー滝谷」
4（日）	PFFアワード2004〔Dプロ1〕 「ある朝スウプは」 「飴工場」	PFFアワード2004〔Eプロ1〕 「かりんとうブルース」 「新しい予感」	PFFアワード2004〔Fプロ1〕 「さよなら　さようなら」 「青春プレイヤー／ 平凡プラネット」	PFFアワード2004〔Gプロ1〕 「くみかえの日」 「カストリ大行進」 「３８２」
5（月）	巨匠たちのファースト ステップ特別版 テオ・アンゲロプロス監督 「再現」	巨匠たちのファースト ステップ特別版 テオ・アンゲロプロス監督 「1936年の日々」	8ミリ映画アーカイブ スタート記念企画 〈原点を探れ —矢口史靖スペシャル—〉	〈最新日本映画プレミア上映〉 村松正浩監督 「『トニー滝谷』メイキング 『晴れた家』」
6（火）	PFFアワード2004〔Bプロ2〕 「つぶろの殻」 「新ここからの景」	PFFアワード2004〔Gプロ2〕 「くみかえの日」 「カストリ大行進」 「３８２」	国境を越えた日本映画 —映画監督・清水崇、 ハリウッドへ—	国境を越えた日本映画 —映画監督・清水崇、 ハリウッドへ—
7（水）	PFFアワード2004〔Cプロ2〕 「文句ある？」 「五月ノ庭」	PFFアワード2004〔Fプロ2〕 「さよなら　さようなら」 「青春プレイヤー／ 平凡プラネット」	8ミリ映画アーカイブ スタート記念企画 〈原点を探れ —風間志織スペシャル—〉	〈最新日本映画プレミア上映〉 風間志織監督 「せかいのおわり」
8（木）	PFFアワード2004〔Eプロ2〕 「かりんとうブルース」 「新しい予感」	PFFアワード2004〔Aプロ2〕 「マンモ」 「修学旅行班別自由行動」	PFFアワード2004〔Dプロ2〕 「ある朝スウプは」 「飴工場」	クロージング上映 〈第14回PFFスカラシップ作品〉 内田けんじ監督作 「運命じゃない人」
9（金）			17：00〜 表彰式＋グランプリ作品上映	

◆見どころ

スカラシップ作品＆最新日本映画

PFFで初上映されるスカラシップ作品は「WEEKEND BLUES」が第24回の「PFFアワード2002」で企画賞とブリリアント賞を受賞した内田けんじ監督の「運命じゃない人」。金曜の夕方から土曜の朝までの出来事を5人の登場人物、それぞれの視点から描く作品となる。

「運命じゃない人」

最新日本映画プレミア上映には、市川準監督が村上春樹の短編小説を映画化した「トニー滝谷」が登場。ほとんどのシーンを空き地に組んだステージの上で撮影したという実験的な作品がオープニングナイトを飾る。さらに、PFFアワード出身の村松正浩監督が手がけたこの作品のメイキング「晴れた家」も上映される。また、同じくアワード出身の風間志織監督の、「火星のカノン」に続く最新作「せかいのおわり」も楽しみだ。

テオ・アンゲロプロス未公開作

世界の監督たちの初期作品を紹介してきた「巨匠たちのファーストステップ」プログラムでは、アテネオリンピックの開催と全集DVD-BOX発売を記念してギリシャのテオ・アンゲロプロスの長編デビュー作「再現」と第2作「1936年の日々」を上映。どちらも劇場未公開作品で、比較的短いので、アンゲロプロス・ファンはもちろん、未見の観客の「はじめの一歩」にもうってつけだろう。また、映画祭終了後の7月10日から16日にかけてPFF SPECIAL「テオ・アンゲロプロス映画祭」も開かれ、こちらでは全長編12作を見ることができる。

国境を越えた日本映画＆原点を探れ

「呪怨」ハリウッド版を自らの手で完成しつつある清水崇監督。「国境を越えた日本映画〜映画監督・清水崇、ハリウッドへ〜」では、自らの信じるものを作り続けながらハリウッドに行き着いた清水監督のたどった軌跡を、PFFならではの切り口で再構成する。

一方、多くの映画作家の出発点である8ミリフィルムに注目するのは「原点を探れ　矢口史靖スペシャル／風間志織スペシャル」。保存が非常に難しいこの8ミリをDVD化し、保存するアーカイブを設立する日立マクセルの特別協賛を得て、PFFアワード出身の矢口史靖監督と風間志織監督の８ミリ作品が上映される。8ミリを使ったことのない世代に向けてのトークショーも合わせて行われる予定。

全国映画興行収入ランキングTOP10

日刊興行通信社調べ

今週	先週	タイトル	配給会社	公開日	公開週	上映館
5月4週目（22日・23日）						
1	―	トロイ	ワーナー	5・22	1	丸の内ルーブル
2	1	世界の中心で、愛をさけぶ	東宝	5・8	3	日劇2
2	2	ホーンテッドマンション	ブエナ　ビスタ	4・24	5	日劇1
4	4	ビッグ・フィッシュ	ソニー	5・15	2	日比谷スカラ座1
5	3	ドーン・オブ・ザ・デッド	東宝東和	5・15	2	日比谷映画
6	―	レディ・キラーズ	ブエナ　ビスタ	5・22	1	丸の内ピカデリー1
7	5	名探偵コナン　銀翼の奇術師	東宝	4・17	6	ニュー東宝シネマ
6	―	スキャンダル	シネカノン＝松竹	5・22	1	シネカノン有楽町
5	6	パッション	ヘラルド	5・1	4	テアトルタイムズスクエア
10	7	CASSHERN	松竹	4・24	5	丸の内ピカデリー2
5月5週目（29日・30日）						
1	2	世界の中心で、愛をさけぶ	東宝	5・8	4	日劇2
2	1	トロイ	ワーナー	5・22	2	丸の内ルーブル
3	―	クリムゾン・リバー2　黙示録の天使たち	アスミック・エース＝G/H	5・29	1	日劇3
4	―	下妻物語	東宝	5・29	1	シャンテ・シネ
5	3	ホーンテッドマンション	ブエナ　ビスタ	4・24	6	日劇1
6	4	ビッグ・フィッシュ	ソニー	5・15	3	日比谷スカラ座1
7	―	キューティーハニー	ワーナー	5・29	1	シャンゼリゼ
6	6	スキャンダル	シネカノン＝松竹	5・22	2	シネカノン有楽町
5	5	ドーン・オブ・ザ・デッド	東宝東和	5・15	3	日比谷映画
10	6	レディ・キラーズ	ブエナ　ビスタ	5・22	2	丸の内ピカデリー1

「クリムゾン・リバー２」は、前作（01年／15億円）が予想を超える健闘した分、２作目はその落差が目立つスタートとなった。つまり１作目が良すぎたため、前作対比が通常以上に悪いということである。４～５億円に届くかというところだろう。

「下妻物語」は全国156スクリーンで公開され、初日・２日間の動員、５万5958人、興収7800万円をあげた。ロリータ・ファッションとヤンキー・スタイルの下妻ワールドに熱心なファンが集まり、大健闘の出だしとなった。観客が見たい映画を作り手が送るという企画の勝利であろう。前記の「スキャンダル」は腰の強い興行を期待できるが、この「下妻～」は勢いが強い分失速の心配もあるのではないか。それでも８～９億円から大台も期待できる。シャンテ・シネを中心に全国156スクリーンも広がるのはシネコン時代ならではだ。

「深呼吸の必要」は、知らない同士の男女７人が、アルバイトとして沖縄でサトウキビを刈る姿を描いた群像劇。これは「下妻～」とは反対に作り手が多くの観客に見て欲しいと送り出した作品だ。しかし、快調とはいえないスタートとなった。東劇をメインとした都内数館という興行形態がこの作品の質と合わなかったようにも思える。６月６日朝日新聞が社会面で取りあげているように、この作品の関心は高い。盛り返しを期待したい。

「キューティーハニー」はサトエリこと佐藤江梨子のコスプレがどこまで広がるかが勝負だったが、結果は熱心なファンの域を越えるに至らなかった。作品的には賛否両論あるが、ここまで徹底した世界が作られれば、監督として本望であろうし、ある種のカルト映画となってＤＶＤの売り上げも見込めるのではないか。

しかし、これらの作品群が新しく登場しても、びくともしない「世界の中心で、愛をさけぶ」(東宝）の強さはすごいの一言だ。60億円は見えているという。

６月に入ると、「シルミド」「ブラザーフッド」の注目の韓国映画２本が公開される。前者と「デイ・アフター・トモロー」、後者と「ハリー・ポッターとアズカバンの囚人」の初日がぶつかるが、どんな戦いをするか、韓国映画ファンとしては気になるところだ。（掛尾良夫）

2004年6月6日はノルマンディー上陸作戦（Dデー）から60年ということで、記念式典でのブッシュ大統領のスピーチがニュースで紹介された。スピーチの内容はDデーとイラク戦争を絡めたものだった。新聞の記事には、この戦いを描いた映画「史上最大の作戦」(62) を引用したものもあったが、当時は正義VS悪の戦争の構造は映画化しやすいものだった。その後、ヴェトナム戦争を題材にした映画は「地獄の黙示録」(79)、「プラトーン」(86)など傑作、秀作が多く作られたが、この戦争の構造は曖昧で、どれも暗い作品ばかりだ。映画に英雄は登場せず、主人公は苦悩し狂気に追い込まれる。それでは、今のイラク戦争から、今後どんな映画が作られるのだろうか。戦闘は退廃し、映画化するには気が滅入る話ばかりが伝えられているが……。

さて、夏興行の大作を来月に控えたこの時期は、興行の谷間といった感じで、中規模な作品が並んだ。5月22日には「トロイ」(ワーナー／丸の内ルーブル系、他)、「レディ・キラーズ」(ブエナ ビスタ／丸の内ピカデリー1系)、「スキャンダル」(シネカノン＝松竹／シネカノン有楽町他)、29日には「クリムゾン・リバー2　黙示録の天使たち」(アスミック・エース、ギャガ＝ヒューマックス／日劇3系)、「下妻物語」(東宝／シャンテ・シネ他)、「深呼吸の必要」(ヘラルド＝松竹／東劇他)、「キューティーハニー」(ワーナー／渋谷東急系)などが出ている。

この中で目立ったのがハリウッド大作の「トロイ」だ。全国587スクリーンで公開され、初日・2日間で動員48万5419人、興収6億6000万円弱という上々のスタートを切った。題名どおりこの作品はトロイ戦争を扱ったものだが、日本では史劇はあまり芳しい成績は残していない。しかし、ワーナーは主演のブラッド・ピットを招聘し、歌舞伎町の新宿ミラノ座前に映画で使用した実物大の巨大木馬を飾るなどして、大きな宣伝費を投じた。このスタートの勢いから、興収50億円が視野に入った。メジャーの力業としか言いようがない展開だが、この作品をここまで押し上げたことは評価されるのではないか。

「レディ・キラーズ」はトム・ハンクス主演、コーエン兄弟監督・脚本という、芸達者、巧みな製作チームによる期待作だったが、厳しいスタートとなった。今回は弟のイーサンが初めて監督したためか、いつもの冴えもなかった。前評判が今ひとつだったことと、「ディボース・ショウ」(日劇1系）もそうだったが、全国拡大公開の場合、このような小さなドラマは埋もれてしまう。コーエン兄弟のような作品は、恵比寿ガーデンシネマ、シネスイッチ銀座、新宿武蔵野館でチェーンを組んだ「ロイヤル・テネンバウム」のような公開規模が相応しいのではないか。

「スキャンダル」は言わずと知れた韓国テレビドラマ『冬のソナタ』のペ・ヨンジュン主演の話題作である。しかし、『冬ソナ』のイメージとはかけ離れた時代物のコスチュームに女たらしの役は、不快感を表す女性の声もあった。しかし、"ヨン様"パワーはそんな不安を吹き飛ばす。全国115スクリーンで公開され、初日・2日で動員4万6958人、興収6700万円をあげた。この作品の強みは平日の動員が落ちないことだ。通常、平日は土・日の50%以下の動員になるのだが、主婦層を集客して平日も70%以上の動員を維持している。この勢いで8～9億円は期待でき、10億超えの可能性もある。もしそれが達成できれば韓国映画としては「シュリ」(18億5000万円)、「JSA」(12億円)に続く3本目の作品となる。

全米新作興行成績ランキング　5月7日～5月13日

■封切り日は全て5月7日
興収の( )内は5月7日～5月9日の週末3日分

順位	タイトル	配給会社	興収 万ドル
[illegible]	ヴァン・ヘルシング（スティーヴン・ソマーズ）	ユニヴァーサル	6436.8（5174.8）
[illegible]	ニューヨーク　ミニット（デニー・ゴードン）	ワーナー	696.9（596.2）
[illegible]	Super Size Me（モーガン・スパーロック）	IDP	76.6（51.7）
[illegible]	Still, We Believe:The Boston Red Sox Movie（ポール・ドイル・ジュニア）	シンクフィルム	11.2（9.1）
[illegible]	ゴジラ（本多猪四郎）	リアルト	6.3（3.8）
[illegible]	Seeing Other People（ウォレス・ウォロダースキー）	ランタン・レーン・エンタテインメント	4.9（3.8）
[illegible]	Valentin（アレハンドロ・アグレスティ）	ミラマックス	2.1（1.4）
[illegible]	A Foreign Affair（ヘルムート・シュレッピ）	IFG	1.8（1.3）
[illegible]	The Mudge Boy（マイケル・バーク）	ストランド	1.7（1.1）
[illegible]	Off the Lip（ロバート・ミケルソン）	ハノーヴァー・ハウス	1.4（1.1）
[illegible]	オアシス（イ・チャンドン）	ライフサイズ	1.0（0.6）
[illegible]	Reeseville（クリスチャン・オッツェン）	IFG	1.0（0.8）
[illegible]	Wasabi Tuna（リー・フリードランダー）	カフェ・エンタテインメント・スタジオ	不詳（0.8）

全米新作興行成績ランキング　5月14日～5月20日

■封切り日は「シュレック2」「S21」は5月19日、他は全て5月14日
興収の( )内は5月14日～5月16日の週末3日分

順位	タイトル	配給会社	興収 万ドル
[illegible]	トロイ（ウォルフガング・ペーターゼン）	ワーナー	6203.5（4686.5）
[illegible]	シュレック2（アンドリュー・アダムソン、ケリー・アズベリー、コンラッド・ヴァーノン）	ドリームワークス	2094.5（──）
[illegible]	Breakin' All The Rules（ダニエル・タプリッツ）	ソニー	620.8（508.9）
[illegible]	A Day without A Mexican（セルジオ・アラウ）	テレヴィスタ・シネ	84.6（62.0）
[illegible]	Coffee and Cigarettes（ジム・ジャームッシュ）	MGM／UA	16.3（9.9）
[illegible]	かげろう（アンドレ・テシネ）	ウェルスプリング	3.0（2.0）
[illegible]	Carandiru（ヘクター・バベンコ）	ソニー・クラシックス	2.9（1.8）
[illegible]	After Freedom（ヴェヘ・バビアン）	ヴァイタグラフ	1.7（1.1）
[illegible]	A Slipping-Down Life（トニ・ケイレム）	ライオンズ・ゲイト	1.4（0.9）
[illegible]	春の惑い（ティエン・チュアンチュアン）	パーム・ピクチャーズ	1.3（0.8）
[illegible]	With All Deliberate Speed（ピーター・ギルバート）	カメラプラネット／ディスカヴァリー	0.8（0.5）
[illegible]	The 24th Day（トニー・ピッチリーヨ）	スクリーン・メディア・フィルムズ	0.3（0.2）
[illegible]	S 21:The Khmer Rouge Killing Machine（リシィ・パン）	ファースト・ラン	0.2（──）
[illegible]	The Last Place on Earth（ジェームズ・スローカム）	パノラマ・エンタテインメント	0.2（0.1）
[illegible]	American Reunion（マーク・ポッギ、リーフ・ティルドン）	フィルムメイツ	不詳（不詳）

Source：Nielsen EDI and Variety

週末は1億1201万ドル余、7日間では1億8071万ドル弱であった。

要するに、「マトリックス」第2弾の猛烈なダッシュの分、今週も昨年同時期比ではダウンといった具合である。さらに言えば、この2週間で前年の夏の実績からのマイナス額は約6570万ドル、春のシーズンを終えての累計興収のプラスが1億2400万ドルだったため、言わば貯金の半分以上を吐き出してしまったようなものである。しかし、詳しいデータは次号回しにさせていただくものの、新たにアントニオ・バンデラスにジュリー・アンドリュースがヴォイス・キャストとして加わった「シュレック2」は、「マトリックス　リローデッド」を凌ぐ数字を週末以降に残しており、決してアメリカの市場が夏なのに冷え込むといった事態に陥ることはない模様。

実際に「シュレック2」は、最初のときほどの新鮮さは感じられないとの留保がなくはないものの、大多数の批評家からは好評を集めており、観客の反応も上々とのこと。早くも、もう2本の続編の製作が決定したほどである。

さて後回しのようになってしまった「トロイ」だが、同種の作品と言える「グラディエーター」よりも、滑り出しの数字は順調である。具体的には、2000年の5月第1週にスタートのラッセル・クロウ主演作は、4902万ドル弱(3482万ドル弱)だったのだから、まさしく一目瞭然であろう。気懸かりなのは、批評家からの評価が「グラディエーター」ほどではないことである。

［5月7日～5月13日］

アメリカの映画興行の区分の中で最も長く、かつ重要なかき入れ時となるはずのサマー・シーズンの始まりである。その開幕を飾る作品として、昨年は「X-MEN 2」、一昨年は「スパイダーマン」とマーヴル・コミックスからの映画化作品が公開されたが、今年は、それら以上に映画の歴史と縁のあるキャラクターたちが一堂に会する作品「ヴァン・ヘルシング」が用意された。その監督スティーヴン・ソマーズと言えば、2本の「ハムナプトラ」で、いわゆるミイラを現代に復活させたわけだが、この「ヴァン・ヘルシング」では、豪華にも(!?)ドラキュラとフランケンシュタインの怪物に狼男を、まとめて登場させたという次第。以上のモンスターたちに立ち向かうのが、もちろんタイトル・ロールのヘルシングで、演じるはヒュー・ジャックマン。彼に関して言えば、2年続けての夏のトップ・バッターになるわけである。

さて、今年の夏のオープナーへの反応だが、批評家からは特撮だけの映画と、決して芳しい評判ではない。一方の興行の出足は別表の通りで、かなりの数字に見えるだろうが、5月の封切り作品としては、歴代のトップ・テンにも入れないような程度となってしまった。例えば、去年の「X-MEN 2」は、1億0764万ドル余(8556万ドル弱)だったのだから、見劣りするという印象を持たれるのも無理はないところだろう。

"Super Size Me"

また昨年の場合は、「X-MEN 2」に続いて"The Lizzie McGuire Movie"が、1932万ドル弱(1734万ドル弱)の興収を上げていたものだが、それと同様の期待をかけられていた本年の「ニューヨーク　ミニット」は御覧の通りである。これだけ新作の成果に差が出たのであるから、市場全体の売り上げが、2003年の夏の第1週の実績1億9222万ドル弱(1億5359万ドル余)を大きく下回る1億4238万ドル余(1億1152万ドル余)となったのも、当然と言えば当然である。

なお興行の成果という観点から離れると、今週は興味深い作品が限定的規模ながら、いくつか登場している。50年前のシリーズ第1作の「ゴジラ」は、アメリカでは初のオリジナルでの公開になるし、一種の人体実験を描いた"Super Size Me"は、かなりの話題を呼んでいる。これは、1カ月にわたって、あるファスト・フード店のメニューだけを食べて過ごしたら、どのような影響が体に出るかを試した作品で、まさに監督が体を張った映画と言えよう。

［5月14日～5月20日］

今週もバラエティに富んだ数多くの作品が登場しているが、興行的に注目を集めていたのは、何と言っても金曜スタートの「トロイ」と水曜デビューの「シュレック2」の数字であった。その結果は別表の通りだが、市場全体とすれば、週末3日間が1億1203万ドル弱、1週間では1億6486万ドル弱となっている。

一方、昨年の夏の第2週は、金曜に「チャーリーと14人のキッズ」(順に3218万ドル弱、2762万ドル余)、水曜の夜から「マトリックス　リローデッド」(4251万ドル弱)が登場といった陣容で、

BOOK THEATER
本の映画館

映画行脚

池波正太郎　淀川長治　著

河出書房新社　1680円（税込）

review

純粋に映画を語り合える友のいる喜び

植草信和

　1974年から1984年までの10年間にわたって間歇的におこなわれた10本の対談（うち2本が鼎談）をまとめた、愉悦に充ちた映画対談集だ。この顔合わせならば当然だが、何よりもいいのは、「映画が好きで好きでたまらない、映画について語らずにはいられない」という思いが行間から溢れ出ていることだ。

　多分このお二人が誌上で初めて顔を合わせたのが、この本の最初に納められている「フェリーニのアマルコルド」って僕らの映画ですよ」（キネマ旬報1974年11月上旬号）で、私事だが、これをコーディネートし司会した当時の編集長・白井佳夫に命じられ、僕は駆け出しの編集者として同席、数日後に上がってきた二百数十枚の速記原稿を泣く泣く切りながら構成したのを覚えている。

　この対談集は大きく分けて、ふたつの要素で構成されている。ひとつはいうまでもなく映画そのもので、「アマルコルド」や「キッド」についての語らいからは純粋に映画を語り合える友を得た喜びが伝わってきて読む者を幸福にしてくれる。そしてもうひとつは、『小説新潮』『小説現代』といった一般誌で行われた「情緒の無いのはこわいですネ」などで、映画をベースに料理、芝居、ファッション、人生などについて語られていて、「人生を全うした人」の対話が味わい深い。

　例えばジェームズ・キャグニーについてのこんな会話。

〈池波　「ラグタイム」のキャグニーいいね。あれにはまいったねえ。
淀川　あ、僕は、言おうと思ってた。いいねえ。キャグニーいいねえ。
池波　つまり江戸でいえばね、南町奉行のお奉行さまですよ。
（中略）もう酸いも甘いもかみわけてね。しかも腹の中は三枚底もあるようなね。そういう腹の二重底、三重底のあるお奉行さまですね。〉

　もう、映画についてこんな楽しいやり取りができる評論家は双葉十三郎氏くらいしか残されていないのだが、このお二人も黒澤明の「乱」をめぐって意見が対立、1985年以降、語り合うことはなかった。僕は淀川さんの連載「自伝」と池波さんの「シネマ通信」を担当したので、その決別の経緯をよく知っているが、お二人は映画を愛するがゆえに、自説を貫き通したのだ。

　そんな立場の人間にとってはありがたい対談集ではあるが、この本には索引も注も解説もない。つまり若い人たちが手にしやすくなる工夫が何一つほどこされていない本で、「映画の伝道師」淀川さんが手にしたら怒るに違いない。

九十三齢春秋

北林谷栄 著
岩波書店　1680円（税込）

review

若々しい精神 明晰な頭脳に 魅了された！

森直人

「嘘お好きですか？（笑）。まぁ私も嘘はあんまり好きじゃない。それが嘘の始まりです（笑）」。こういうクールな視点を軽やかなユーモアと共に差し出せる九十三歳が存在する！　という事実が、本当に素敵だし、元気をもらえる。「阿弥陀堂だより」での日本アカデミー賞最優秀助演女優賞受賞も記憶に新しい、今も第一線の現役である北林谷栄さんの、語りやエッセイを集めた一冊。自伝的な要素も強く、共に劇団民藝を創立することになる宇野重吉氏との長年の友愛なども感動的に読めるが、それ以上に、二十歳代から〝おばあちゃん役者〟を始めた北林さんが、本物のおばあちゃんになった時、逆に若々しい精神と明晰な頭脳を誰よりもキープしていることに、僕は魅了された！

　演劇が好きなのは人間を見つめる仕事だから、と答えている北林さんは、過剰な自我を押し出す女優とは全く違ったタイプだ。傑出点は、人間観察と批評の能力。「ふだんから、老人はこうであってはいけないと、他人の演じるものを見ていた」との冷静な目を持って、役のリアリティを追求していく。その真摯さは、関東大震災の際に非情な差別の実態を見た記憶が、在日朝鮮人を演じることへのこだわりへとつながっていく展開にも表れている。

　同時に、美しい時代の銀座に生まれたお嬢様であるエレガンスも、北林さんの大きな魅力だろう。女学生時代の写真は必見ですよ！

LOVE GUN

（宮崎あおい著／黒瀬康之・撮影／リトルモア刊／税込2100円）
こちらを見つめていても、遠くを眺めていても、その視線が凛と強いものであることがわかる。宮崎あおい「ラブドガン」オフィシャルフォトブック。自らポラロイドカメラを持って撮った写真も紹介。写真に寄せられたエッセイによると「じっくり撮るタイプ」らしい。

ディズニーとライバルたち アメリカのカートゥン・メディア史

（有馬哲夫著／フィルムアート社刊/税込3360円）
一匹のねずみ、ミッキーマウスから始まったといわれるディズニーの世界と、それに対抗する形で生まれたライバル、「ポパイ」のフライシャー兄弟や「トムとジェリー」のハンナ＝バーバラたち。米アニメーション業界の興亡が詳細に綴られた一冊。

闇からの光芒 マフマルバフ、半生を語る

（ハミッド・ダバシ著／市山尚三訳／作品社刊／税込1890円）
「サイクリスト」「カンダハール」でイラン映画の名を世界に轟かせた監督・マフマルバフは政治的に、宗教的に、そして幼い頃は複雑な家庭環境に、抑圧され続けてきた。閉ざされた世界で、その才能が研ぎ澄まされてきた経過が語られている。

現代・アメリカ・映画

（田中英司著／河出書房新社刊／税込1575円）
クリント・イーストウッドの映画を見るとなぜ心配になってしまうのか、キャメロンが描き続けているのは「別れ」である、「アザーズ」のアメナーバル監督は「死を甘美なものとして描ける」点でヒッチコックとは異なるなどなど。アメリカ映画の構造と魅力が理解・納得できる好著。必読です！

サントラ・ハウス
sound track house

賀来 タクト

スティーヴ・ジャブロンスキー インタビュー

4月21日水曜日、午後4時15分。指揮者のブレイク・ニーリーからバトンが振り下ろされると、弦の弾むような響きに温もり豊かなホルンが伴われ、やがてクラリネットが主旋律を麗しく奏でていく。伝統ある20世紀フォックスのニューマン・スコアリングを舞台に、大友克洋監督作品「スチームボーイ」の音楽録音はこうして幕を開けた。映画の冒頭、タイトル直後のマンチェスターの街並みを彩るその楽曲は、最初の一音からこれを創作した作曲家の明るい将来を謳歌してやまない。ハンス・ジマーが主宰する音楽家集団メディア・ヴェンチャーズから生み出された最も新しい才人スティーヴ・ジャブロンスキーこそ、日本を代表するアニメーション作家の冒険大作に選ばれた男だった。

「音楽担当に選ばれたときは本当にビックリしたよ」

口ひげをチャーミングに蓄えた今年34歳のジャブロンスキーは、その瞬間を静かに振り返ってくれた。

「もう2年も前のことになるかな。最初はアラン（・メイヤーソン／録音技師）が、友人のケイ（百瀬慶一／音響監督）が日本のアニメーション映画に取り組んでると話してくれてね。ついてはデモを渡してみたらどうかって、誘われたんだ。で、それから何カ月も経ったある日、アランが『君のCDが採用されたみたいだ』って教えてくれたんだ。思わずワオッって叫んだよ。その頃にはそれがどんなに大作か、そして僕の大好きな『AKIRA』の大友さんの映画だってことが分かっていたからね。信じられなかったよ」

決定後、大友と最初に会ったのは03年3月のこと。まずは簡単なスケッチと絵コンテを見ながら作曲を始めたという。本格的な作曲については、その後手に入れた台詞入りのビデオをもとに、およそ2カ月で90分に及ぶ楽曲を書き上げた。中でも、劇中の随所に流れる主人公レイのための主題曲は旋律の線の美しさにおいて出色の出来だ。

「レイの主題曲は僕が最初に書いた曲で、みんなにもすごく気に入ってもらえたんだ。僕自身、この曲にはすごく誇りを持ってる。その後、この作品には大編成の音楽が必要だということも分かってね。レイの曲を書いた後に、個々の登場人物のための音楽も書いていったよ。スカーレットにレイの父親、お爺ちゃん……とね。もちろん、全員に曲を設けるわけにはいかない。主要人物だけだね」

冒頭に言及したクラリネットに限らず、木管楽器が実に効果的に巡らされている点にも耳が行くだろう。

「木管を書くのは大好きさ。クラリネットにしても、幼い頃に習っていたからね。それに今回はアニメーションだろう？ アニメーションには木管が必要だと思うんだ。きっと大友さんやケイも気に入ってくれると思ったし。だから、できるだけ木管を入れたんだ」

総じて、柔らかで温もり豊かな感触が行き渡っている音楽の肝を思うに、やはり旋律を大事に扱おうとする作曲者の姿勢が強く反映しているといえないか。

「どういう状況であろうと、できれば美しい旋律を盛り込んでいきたいと思ってる。『スチームボーイ』の前に担当した『テキサス・チェーンソー』では二つのメロディーを書いたけれど、かろうじて1曲使われただけでね。でも、ほとんどの場合、特にこの作品のように情感に満ちた作品の場合は旋律を盛り込むことが大切だ。観客が映画で感じたことを思い出してもらえるよ

うにね。うん、メロディーは最も重要だ。僕はエンニオ・モリコーネが大好きだけど、彼の音楽もすごく旋律が魅力的だろう?」

ジャブロンスキーが単独で音楽を担った最初の作品は確かに「テキサス・チェーンソー」だが、公開時期の変更がなければ、「スチームボーイ」こそがデビュー作になるはずだった。

「本当に『テキサス・チェーンソー』の後に、この作品に参加することができてよかった。もしホラー映画を続けてやっていたら、同じような依頼ばかりもらっていただろうからね。それに『スチームボーイ』はたくさんの旋律が必要なんだ。これこそ僕のやりたかったことだよ。できれば、僕はカー・チェイスや銃撃戦がないようなドラマをやってみたいと常々思っていたんだ。その意味では『スチームボーイ』は絶好の機会さ。ここにはたくさんのドラマがある。僕はこれまでレイやスカーレットのテーマのような曲を書いたことがなかったからね。最高だよ」

録音現場の風景に戻るなら、程よい緊張感と和やかな雰囲気の中で初日は進行していった。ブース内では大友が楽曲の調子に合わせ相槌を重ね、音楽への好感を表し、エンジニアのメイヤーソンも「今日はマジカルな日だよ。殆どが最初のテイクでOKになってる」と笑顔を絶やさない。翌22、23日と3日間続く録音では編成を厚くし、最大時で85人の演奏者による山場の音楽が録音された。

「今回の最大のチャレンジは、ラストの9分に及ぶアクション音楽だよ。今回の映画にはたくさんのアクションが詰まっているからね。これを観客に退屈させずにどうやってこなしていくかが書いていて難しかった。今日の録音はエキサイティングだったよ。神経質にもなったけれど、うまくいったんじゃないかな。最高の演奏者に参加してもらえてとてもうれしく思ってる」

日米問わず、あらゆる作曲家を視野に入れて行われた「スチームボーイ」の音楽担当選びは、本格的な単独デビューをしていない新人の発掘という冒険に発展していったわけだが、最良の結果となって報われた。彼の才能を抜擢した百瀬慶一以下、スタッフの慧眼は称賛に値する。個人的には、ジャブロンスキーの音楽的才能のみならず、控え目で誠実な性格にも打たれたことを記しておきたい。

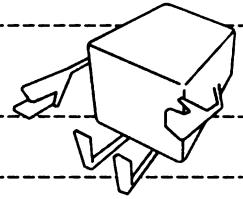
「映画音楽は楽しいよ。もちろん、書くのはいつも本当に難しい。自分のしていることが正しいのかどうか確信が持てないんだから。でも、書き終えたあと、監督やプロデューサーにその曲を『いいね』と言ってもらえたときはいつもハッピーになる。今日の録音でも大友さんが微笑んで僕に頷いてくれていたからね。とてもハッピーな気分だよ」

「スチームボーイ」

セッション風景

Steve Jablonsky／1970年10月9日、カリフォルニア州パサデナ生まれ。日系四世のアメリカ人。10歳（もしくは12歳）のときに誕生日プレゼントとして祖父にクラリネットを買ってもらい、中学、高校と演奏を重ねる。大学では当初コンピュータを学んでいたが、程なく音楽専攻に変更。卒業後、メディア・ヴェンチャーズの門を叩き、ハリー・グレッグソン・ウィリアムズやハンス・ジマーの助手として腕を磨く。その才能が存分に発揮された「スチームボーイ」のサントラ盤は7月14日、ビクターエンタテインメントより発売。

tele-jun

時評　石飛徳樹

「離婚弁護士」(フジテレビ系にて6月24日22:00より最終11話放送)

『離婚弁護士』は新たなフジブランドの系譜に属する

弱小法律事務所を舞台にした連続ドラマ『離婚弁護士』が面白い。一話完結型で、事務所に持ち込まれる決して派手でない家庭問題を、癖のある弁護士たちが決して派手ではない方法で解決していく。

ヒロインの弁護士を演じる天海祐希がズバリはまっている。34歳独身。恋人なし。今流行の「負け犬」である。仕事面では、企業法務で成績を上げて意気揚々と独立するはずが、上司の妨害に遭って大企業のクライアントに逃げられる。

公私とも散々な役柄を、天海は体を張って演じている。津川雅彦や佐々木蔵之介、ミムラ、玉山鉄二ら事務所の面々も、控えめながらユニークな個性を与えられている。こういう一話完結型の連ドラでは、脇を固めるレギュラー陣がいかに魅力的かで成否が決まる。

そして、何より林宏司らの脚本が練り上げられている。ヒロインのモテなさ加減をはじめ、レギュラー陣の個性を生かしつつ、依頼人のドラマをきっかりと見せる。この2つの要素を分離させることなく上手に絡ませるには、相当な熟練を要するはずである。

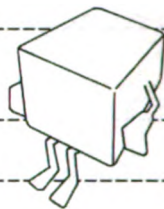
特に、吉田日出子と藤村俊二を迎えた第7話は、一話完結もののお手本のような出来だった。吉田が内縁の夫の藤村を相手取り、入籍を求める訴訟を起こす。冒頭の天海の見合い写真撮影シーンから、吉田がなぜ入籍を強く求めたかが明らかになるクライマックスまで、伏線とどんでん返しが物語に馴染む形で見事に和えてある。

この作品のコンセプトは法律をモチーフにした一話完結型で、笑わせておいてぐっと泣かせるウェルメイドな人情ドラマ、ということになる。これは、「HERO」「ビギナー」などフジテレビが築き上げてきた路線の延長上にある。さらに遡るなら、「きらきらひかる」「カバチタレ!」の系譜でもある。フジブランド・ドラマに、トレンディーに続く新たな看板が生まれたと言ってもよいのではないだろうか。

ただし、この作品には一つ、似つかわしくないものがある。過剰に装飾的な映像処理である。激しく細切れにされたカット、コマ落としやCGを使った遊びなどが、このウェルメイドなドラマにどうして必要なのか。視聴者は映像の突出に目を奪われ、素材の味を楽しめなくなるだけである。

この映像を見ていると、「ふぞろいの林檎たち」パートIIIを思い出す。なぜだかディレクターが遊びすぎて、パートIIまでのテイストが損なわれていた。いま「オレンジデイズ」を撮影中の生野慈朗ディレクターがHP上で言っている。「カメラがお芝居しないこと」「演出家が主張しないこと」。この作品に関して言えば全く同感だ。

tele-jun

シネマタイム　豊﨑岳彦

「さらば冬のかもめ」（The Last Detail／1973／アメリカ／103分）ＮＨＫ－ＢＳ２にて７月６日放映予定
原作＝ダリル・ポニクサン　監督＝ハル・アシュビー　脚本＝ロバート・タウン
出演＝ジャック・ニコルソン、オーティス・ヤング、ランディ・クエイド、キャロル・ケイン、ナンシー・アレン

いつかもう一度とべ！　かもめのように　自由なこころで……

フィルム編集者から監督に転身し、雇われ企画も厭わず秀作を連打した、俊才の初期作。ある寒い冬、遠い海軍刑務所に若い元水兵を護送する命令を受けた、ふたりの下士官。彼らが酒を飲んだり女を買ったりする野放図な旅を共にしつつ奇妙な友情で結ばれる……という、苦いドラマだ。

14年の海軍生活を酒でなんとかやり過ごしてきた反骨漢バダスキー（J・ニコルソン)と、女房役の黒人将校マルホール(O・ヤング)。そして、小児麻痺のための募金箱からはした金をくすねかけて、除籍&8年の刑を食らった木偶の坊メドウズ(若きR・クエイド)という三すくみの妙が泣かせる。ニコルソンは当て書きだけに、当時ぎりぎりの卑猥語を連発。これでも製作会社は何度も改稿を命じ、撮入まで2年も棚上げされていたという(だから公開時、本国での宣伝惹句は敢えて伏せ字だらけだ)。全編に漂う、いかにも「チャイナタウン」の脚本家らしい憤懣やるかたなさと、ペーソスのさじ加減はまさに独擅場ですな。

演出は一見素っ気ないが、忘れ難い場面がいっぱいあるのが特徴。開巻いきなり、バダスキーを探して前のめりで横切る水兵の歩き方からして、なんとなく「怒りの葡萄」の冒頭のヘンリー・フォンダを想起させる。監督の固有のリズムが、俳優にも脈動しているといおうか。荒廃した実家の空舞台の絶妙な尺とか、駅の売店でなにげなく万引きする呼吸とか、薄幸なメドウズの育ちを背景だけで納得させるのも、編集者出身監督の紛れもない刻印だろう。

蛇足。クライマックスを踏まえた詩的な邦題だが、実はあの場面には一羽の鴎も映っていない。背後の鳴き声は本当に鴎なのかなあ。単に水兵＝鴎という発想なら敬服しますよ。原題は「最後の任務」、超訳なら「任務はつらいよ」ですか。

必見！ レア作品

怪談昇り竜
(1970・日活)

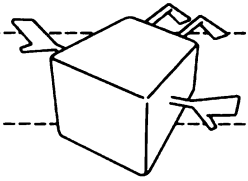
ＣＳ放送のチャンネルＮＥＣＯ(日活系)と東映チャンネルが共同で、６月下旬にクールビューティ、梶芽衣子特集を放映する。代表作の「女囚さそり」シリーズはもちろん、実質デビュー作たるマキノ雅弘監督「日本残侠伝」(69）や、「銀蝶渡り鳥」「銀蝶流れ者　牝猫賭博」(共に72）など未ビデオ化作も出るので見逃せないところ。

もう一つ。ネットで放映希望作のリクエストを募る『たのみ.com ＴＶ』という画期的な企画がスタート。記念すべき７月３日の第１弾は、一部で高値取引きされている広川太一郎＆ビートたけし吹替版「Mr.Boo!」(76／香港)を放映しちゃったりなんかしたりする。思わず110°CSを導入し、ep055chにチャンネルを合せる人急増の予感。

チャンネルNECOにて6月26、29日放映

※６月25日は東映チャンネルで、６月26日にはチャンネルＮＥＣＯで梶芽衣子作品を一挙放映

tele-jun

テレビ・トラベラー　樋口尚文

「キューティーハニー」（渋谷東急ほか全国松竹・東急系にて公開中）

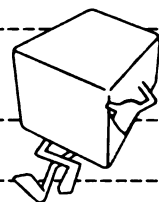
⑮70年代ブームと作り手たちの病い（後）

庵野秀明、紀里谷和明というアニメ界、PV界の鬼才が、70年代の伝説的アニメ「キューティーハニー」と「新造人間キャシャーン」の実写リメイク版を演出し、ともに堂々洋画系のロードショーに出たというのは、企画と製作の両面で、70年代の若い観客が作り手に回った「現在」を象徴する出来事であった。ところが、である。

まず「キューティーハニー」について言えば、格別な大傑作でなくても、「流星課長」で見せてくれたような実写のアニメ的演出が快調に展開する、むしろ積極的に軽くて薄い愉快な作品だといいなあと思っていた。そして実際、出だしの15分くらいはそういう意図がはっきり見えて愉しくもあったのだが、随所の画づくりに凝りすぎたのか、全体の語りは正直言ってブレスレス状態なのである。ごたいそうな映画でなくても、実写をアニメにしてしまうような荒唐無稽な語りのフォルムさえあれば、本作はじゅうぶんだと予め思っていたのだが。

しかしこれは序の口で、庵野への共感を表明している、やや後続の紀里谷和明が撮った「CASSHERN」に至っては、とにかく問答無用にまずいことになっている。「キューティーハニー」と違って、深刻な反戦と愛をめぐるテーゼがもっともらしく語られていたりするので余計に際立つのだが、ここにはおよそ文化が無い。紀里谷は持てる意匠のテクニックを思いのたけ動員して、凝りに凝った画で全篇を埋め尽くしたが、そこには映画の文体、語りへの意識というものがまるで欠落しきっている。その技巧のための技巧と、むき出しのアジビラのようなテーゼとが遊離したまま投げ出されているさまは、あたかも文化の廃墟のようで、騒々しい紀里谷の画づくりの語彙は（悲壮に反戦を説きながら）映画を成立させている文化的な約束事を完膚なきまでに空爆しまくっている雰囲気で、私は反発を覚えるより先に眩暈を覚えるばかりであった。

というか、私は同世代の庵野のやりたいことも、その方向で暴走した紀里谷のやりたいことも理解できるだけに、怒るというよりも傷ましさが先立つのであった。われわれは、かつて伝説的なソフトの数々との一期一会に誰よりときめいた幸福な観客であった。その体験を通して、われわれはカタログ的に多彩な表現の記憶のコレクターとなった。しかし、受け手ではない純粋な表現者となるためには、われわれはコレクターであることを潔癖に止めなくてはならない。庵野の旋回と紀里谷の頽廃は、永遠に「あの画この画」の蒐集家であることから逃れられない、世代的な病い（を超えた呪い）をこれでもかと感じさせるのであった。

海外ドラマ・ウォッチ　池田敏

「フェリシティの青春」
©Touchstone Picturesand Television

ファンは“お遊び”のエピソードがたまらない！

長期間続く米国のTVドラマの中には、時々だが一話丸々〝お遊び〟を思わせるエピソードがある。

筆者が最初に見つけたケースは『超人ハルク』(78－82)。主人公は怒ると怪物に変身してしまうデイヴィッド（ビル・ビクスビー）だが、「記者魂」(「マクギーの記者魂」だったかも）という回は、デイヴィッドを追う新聞記者マクギー（ジャック・コルヴィン）のほうが主人公。まだ子供だった筆者はデイヴィッドの登場が一瞬で、台詞もゼロ(!)というのにモヤモヤしたもの。しかし本来憎まれ役だったマクギーの人間性を魅力的に掘り下げたこの回によって、この番組をますます好きになった。

最近のメジャー感がある人気作では、意外にも『ER』が多い。レギュラーがグリーン（アンソニー・エドワーズ）とロス（ジョージ・クルーニー）しか出てこない第4シーズン「父と息子」とか、ベントン（エリック・ラ・サル）の単独主演作ともいうべき第5シーズン「地の果てにて」他を憶えている人は多いはず。

また、いつもは陽気なBGMと共に幕を閉じるドラマが、あるシリアスな回に限ってBGM無しで重厚に終わることも多い（パッと思いついたところでは『白バイ野郎ジョン&パンチ』や『フレンズ』にそんな回があった)。これも広義の〝お遊び〟と言えるだろう。

これらは、受け手が期待するものをはぐらかしてまでも送り手（作り手）の思いが暴走した、まるでやんちゃな悪ガキだ。しかし、物語に別の角度からも光を当てられる送り手ならではの特権を行使した、TVドラマの究極の楽しみ方でもある（それを受け手が共有出来るならなおよし)。番組を見続けた人だけのご褒美、といっては幼稚なのか。

ロン・ハワードらの製作総指揮でNYの大学生の群像を描く『フェリシティの青春』(写真　スーパーチャンネル／7月7日より第2シーズン開始／毎週水曜夜10時00分～11時00分)。その第2シーズン「恋わずらい」は、究極の〝お遊び〟かも。いつもはカラーなのにこの回だけは全編モノクロで、画面がぐにゃぐにゃとなるオープニングからして異様だが……。実はこの回は丸々、名作SFドラマ『ミステリー・ゾーン』のパロディだ。監督も『ミステリー・ゾーン』に参加していたラモント・ジョンソンという凝りよう。ヒロインのフェリシティ（ケリー・ラッセル）と仲間たちは、自分たちが閉じ込められた異空間から脱出しようと挑むが……。『ミステリー・ゾーン』さながらの大オチをこの世で最も楽しめるのが、この番組を普段から楽しんでいる送り手と受け手というのが最高の〝お遊び〟である。これは〝ドラマ愛〟と言い換えてもよい。

女人哀愁

【放送日】7月3日あさ10：00～
(37) 脚本／成瀬巳喜男、田中千禾夫　出演／入江たか子、佐伯秀男、大川平八郎、堤眞佐子

夜の流れ

【放送日】7月17日あさ10：00～
(60) 監督／成瀬巳喜男、川島雄三　脚本／井手俊郎、松山善三　出演／司葉子、山田五十鈴、三橋達也、宝田明

▶「杏っ子」の再放送もあり

「女人哀愁」©東宝

「夜の流れ」©東宝

成瀬巳喜男劇場
THE THEATER OF M.NARUSE
毎週土曜あさ10時から（再放送あり）
スカイパーフェクTV!日本映画専門チャンネル

文＝田中眞澄

映画を発明したリュミエール兄弟は、映画は所詮は見世物、一時的な流行にすぎないと考えていたという。映画が発明当時の動く映像記録、視覚的刺戟の段階にとどまっていたら、あるいはやがて人々から飽きられてしまったかもしれなかった。映画が当の発明者の予想を裏切って、二十世紀最大の大衆文化となったのは、物語の発見にあったというのが、映画の内側で充足したあらゆる映画史の常識を克服するための、外側からの視点で考察した、文化史の中での超映画史の仮説である。映画を、一スジ、二ヌケ、三ドウサと喝破した牧野省三は、確かにその辺の機微を心得ていたと思われる。

　今回の二本の成瀬映画は、どちらもオリジナル・シナリオによる。一九三七年の「女人哀愁」は成瀬と劇作家田中千禾夫(田中澄江の夫)、一九六〇年の「夜の流れ」は井手俊郎と松山善三の共作である。二本ともストーリィを持っている。もちろん、それぞれ全く別の話である。だが、二本ともそれぞれのストーリィを持つことでは変わりはない。そこに、極く一部の例外を除けば、映画、特に大衆に受容される映画に於けるシナリオの必要、シナリオライターの必要が認められる。〝シナリオ文学論〟は、物語文化としての映画を考える時、一つの暗示であるだろう。「女人哀愁」がイプセンの『人形の家』を物語発想の核としているのは、誰の目にも明らかである。おそらくこの類型は世界的規模で模倣されたと想像できる。その上にケース・バイ・ケースの変異が生ずるであろう。この映画では、その時代の日本近代の流動する価値観、モラルを特徴的に反映して、封建的家族制度の圧迫感が意識されている。ヒロインが脱出できたのは、一九三七年という時点で、都市のモダンでリベラルな気分が、辛うじて息づいていたことを示すのではないか。その後の戦時体制の進行の中では、映画の企画として可能だったろうか。

　六〇年安保の年の「夜の流れ」は、五年前の「くちづけ」以来の藤本真澄との共同プロデュース。日程に余裕がなく、川島雄三に共同監督を依頼した。花柳界を舞台に新旧の世代を描く風俗映画だが、物語に出来事を盛り込みすぎた観があり、成瀬映画シナリオ陣のポスト水木洋子・田中澄江時代は、安定感を回復していない。両監督の撮影分担は、成瀬が古い世代と料亭等七一シーン、川島が若い世代と芸者屋等六五シーンと伝わる。

「青春の殺人者」©東宝

「祭りの準備」©東宝

青春の殺人者 【放送日】7月1日ほか

(76) ●監督／長谷川和彦　出演／水谷豊、原田美枝子、内田良平

祭りの準備 【放送日】7月15日ほか

(75) ●監督／黒木和雄　出演／江藤潤、竹下景子、原田芳雄

ATG アーカイヴ

スカイパーフェクTV!日本映画専門チャンネル

文＝森直人

最近、パンク・バンドのガガガSPが同タイトルのシングルを発表してオマージュを捧げたように、黒木和雄監督の75年作「祭りの準備」は、青春映画のスタンダードとして定着している名作だ。舞台は昭和30年代初め、高知県の中村という漁港の小さな町。主人公の沖楯男（これが映画デビューだった江藤潤）は、シナリオ作家を目指しながら郵便局に勤めている青年。破綻した家族に加え、ほとんど片思いのような恋人の涼子（竹下景子）、隣人の荒くれ男（原田芳雄）らに囲まれ、鬱屈した日々を過ごしている。やがて夢をかなえようと、閉鎖的な故郷からの脱出を決意した楯男は、上京するための列車にひとり乗り込む……。

この物語は、本誌1404号でご紹介した「郷愁」(88)と同じく、脚本家・中島丈博の自伝的内容。劇中の青年が、ついには『真珠夫人』『牡丹と薔薇』の脚本まで手掛けることになるのだと考えると非常に感慨深い。ラストシーンは、地方出身の上京経験者なら号泣必至！（ちなみに同じ中島脚本作「突然、嵐のように」のラストと似ている）。

四半世紀の沈黙をもってしてもなお、最も新作が期待される監督、長谷川和彦。彼が76年に発表したデビュー作「青春の殺人者」も、いまだ現在形の衝撃力を備えた青春映画の名作だ。音楽はゴダイゴ。

原作は中上健次の小説『蛇淫』だが、実際に起きた少年の両親殺人事件を基にしている。主人公は、成田空港が近い千葉郊外で父親のスナックを任されている斎木順（TVドラマ『傷だらけの天使』で大ブレイクしたばかりの水谷豊）。住み込みウエイトレスのケイ子（この年は他にも「大地の子守歌」など大活躍した原田美枝子）と恋仲になった彼だが、その関係に口を出した父親を殺害。さらには成りゆきで母親をも刺し殺し……。些細なことから一気に破滅へと突っ走っていく若者の焦燥と哀切をパワフルに描き、ひたすら圧巻！ 新人監督としては初のキネマ旬報ベスト・テン第1位に輝いた。

「清作の妻」©角川映画

「兵隊やくざ」©角川映画

兵隊やくざ

【放送日】7月8日よる11：00～
(65) 原作／有馬頼義　出演／勝新太郎、田村高廣、淡路恵子、成田三樹夫

清作の妻

【放送日】7月22日よる11：00～
(65) 原作／吉田絃二郎　出演／若尾文子、田村高廣、成田三樹夫、千葉信男

▶「『女の小箱』より　夫が見た」「黒の超特急」の再放送もあり

増村保造 レトロスペクティブ

隔週木曜よる11時30分から（再放送あり）

スカイパーフェクTV!日本映画専門チャンネル

文＝轟夕起夫

二人でいる。二人だけでいる。ひとりっきりではなく。

増村保造の映画には、全世界を敵に回そうとも〝二人でいること〟を選ぶ〟人物たちがしばしば登場する。

いや、選ぶというよりも、片方は、ハンパではない相手の熱情に巻き込まれ、好むと好まざるとにかかわらず常識的世界から踏み外してゆく。その結果、どちらかが死んでしまう場合もあるし、双方が生き延びても、それはここではないどこか、彼岸への旅立ちのように見える。

日露戦争真っ只中の明治時代、愛する清作（田村高廣）を二度と出征させまいと、〝自分だけのもの〟にしてしまおうと、ヒロインのお兼（若尾文子）がその目を五寸釘で潰す「清作の妻」。これは同じ若尾主演の「『女の小箱』より　夫が見た」(64)で描かれたエゴイスティックな超越者を、いっそう過激にしたキャラクターである。

言うなれば、さながらそこには「コールドマウンテン」(03)のニコール・キッドマンと、「ジャンヌ・ダルク裁判」(62)のフロランス・カレス（ドゥレ）、「女囚701号・さそり」(72)の梶芽衣子を掛け合わせた苛烈な〝猛獣〟がいる！

もともと村八分の境遇にあったお兼と、反対に村のヒーローで模範兵だった清作。両目を潰され、人生をメチャクチャにされたはずだが、彼は出所したお兼を迎えたとき、憎しみで首に手をかけつつも、こう激白する。「ひとりになって初めて、目が見えなくなって初めて、ひとりぼっちの寂しさがわかった、お前の気持ちがわかった……」。

どう考えても間尺に合わぬ、御都合主義極まったこんな展開を、増村の手腕は力ずくで納得させる。観る者は自分の中に潜む「ひとりぼっちの寂しさ」をふと噛みしめることになる。

ラスト、この世にいながら、ここではないどこかへと旅立つ二人は、もしかしたら「共同謀議」（小川徹『映画評論』一九六五年九月号）をなしえたのかもしれない。そうして「ひとりぼっちの寂しさ」を永遠に共有しあう関係になるのだ。

この「清作の妻」の1本前に田村高廣は、「兵隊やくざ」で増村映画に迎えられた。それが「清作の妻」のステップボードになったのは確かだ。インテリだが軍隊では無用の存在、しかし〝猛獣〟大宮貴三郎（勝新太郎）と組んで「共同謀議」しながら極限状況を生き抜いてゆく有田上等兵役。二人でいる。たとえ全世界を敵に回そうとも。そう考えると劇中、丸メガネをかけた〝猛獣使い〟田村高廣の姿は、何だか増村保造その人に見えてくるのである。

グループの指導ー話し合い劇を通してー

【放送日】7月4日深夜12：00～
(56) 監督／羽仁進

グーッド　グーッド　ヤッピとワイズとゾーラの物語

【放送日】7月11日よる11時30分～
(87) 監督／浜口勝美　ナレーション／倍賞千恵子

夜明けの国

【放送日】7月18日深夜12時30分～
(67) 監督／時枝俊江

日独裁判官物語

【放送日】7月25日よる11：00～
(99) 監督／片桐直樹

▶「につつまれて」「妻はフィリピーナ」「曖昧な未来、黒沢清」の再放送もあり

右上「グループの指導ー話し合い劇を通してー」左上から「グーッド　グーッド　ヤッピとワイズとゾーラの物語」「夜明けの国」「日独裁判官物語」

ドキュメンタリー傑作選

日曜よる（再放送あり）

スカイパーフェクTV!日本映画専門チャンネル

文＝藤原敏史

ドキュメンタリーは主題に対してどのような作り手としての距離を持ち得るのか？

土本典昭や小川紳介、黒木和雄といった監督、撮影の大津幸四郎や鈴木達夫らを輩出した岩波映画は、大企業や官庁からのPR映画の受注で支えられていた。「岩波のプリンス」と呼ばれた羽仁進監督は「教室の子供たち」や放映の「グループの指導」、当時の文部省の教育方針を啓蒙する映画で評価を確立した。映画は小学校教育の現場に持ち込まれた理想主義的な教育の方法論を紹介するが、それ以上に、岩波で羽仁が初めて使ったという一眼レフ式キャメラ（ファインダーで覗いた構図がそのままフィルムに定着される）が、子供たちの表情の輝きを見せる。この理想的な教育方針が今ではしばしば批判される「ゆとり教育」につながったことは否定できないが、しかしこの映画が映し出す顔には、今でも新鮮な子供であることの普遍性がある。

岩波の撮影隊が文革の最中の中国で撮った「夜明けの国」を今見ると、我々は複雑な思いに捕らわれる。時枝俊江監督が捉える工場労働者たちの顔や、農村で働く紅衛兵たちの作業の手には、貧困と階級格差のない新しい時代への希望が刻印されている。だが我々は文革の中国が政治暴力と混乱と理不尽な弾圧、貧困と飢餓に全土を覆われていたことも知っている。作り手たちがその理想に共鳴していたとしても、なぜもっと深く現実の矛盾を見る作家的視点を持ち得なかったのか？　彼らの能力云々を言うのなら、ドキュメンタリー映画の父ヨリス・イヴェンスもまた、文革期に「禺公山を動かす」を作り、その後遺作「風の物語」でこの国の政治権力への複雑な思いを吐露するまで、十数年の作家的沈黙を強いられたことは忘れられない。

「日独裁判官物語」では、冒頭から撮影隊が裁判所へのキャメラの持ち込みを拒絶される。現役の裁判官たちは言いたいことがあっても、インタビューに答えることができない。比較対象のドイツの裁判官たちは、実はどこで言っても問題にされない公式見解的なことを語っているに過ぎないし、ドイツの裁判制度に問題はあるだろうに、比較の問題でドイツがいかに理想的であるかという印象しか受けようがない。

ドキュメンタリーは物理的にキャメラの前にあるものからしか本当に伝えることを構成できない。好意的とは言わずとも最低限公正な描写を期待するのなら、撮らなくてはなにも始まらない。

DVD&VIDEO RELEASE

DVD&ビデオリリース

丸山尚輝&やまもとかほ

先取り情報

●アイ・ヴィー・シー
7／25「鏡　デジタル完全復元盤」「ロマノフ王朝の最期　デジタル完全復元盤」「戦争は終った」「恋愛手帖」「恋の情報網」
●松竹
7／24「還美清DVD-BOX」（「拝啓天皇陛下様」「続拝啓天皇陛下様」「白昼堂々」「でっかいでっかい野郎」）「娘の結婚」
●エスピーオー
7／23「キングダム　コンプリートＢＯＸ」「超能力学園Ｚ」８／６「悪い男」
●アスミック
８／６「ジョゼと虎と魚たち」
●キングレコード
８／４「特撮秘宝コレクションDVD-BOX　怪獣篇」（「原始怪獣ドラゴドン」「魔法の剣」）「特撮秘宝コレクションDVD-BOX　異星人篇」（「巨大アメーバの惑星」「恐怖の火星探検」
●アーティストフィルム
7／23「奇跡の海　プレミアム・エディション」「ドッグヴィルコンプリートＢＯＸ」「ドッグヴィル　プレミアム・エディション」
●ジェネオン　エンタテインメント
7／23「ミトン」「赤い殺意」「「エロ事師たち」より人類学入門」「神々の深き欲望」「にっぽん昆虫記」「ニューオーリンズ・トライアル／陪審評決　プレミアム・エディション」
●ユニバーサル・ピクチャーズ・ジャパン
7／23「マスター・アンド・コマンダー」
●日活
８／６「コンフィデンス」「勝利なき戦い」「戦場」「大侵略」「要塞」「レッド・バロン」「帰らざる日々」「八月の濡れた砂」
●バンド
８／６「ぼくは怖くない」
●ブロードウェイ
８／６『裸足の青春①～④』
●ワーナー・ホーム・ビデオ
８／６「ハッピーエンド　特別版」「ＭＵＳＡ－武士－特別版」「帰ってきたドラキュラ」「ガス燈　コレクターズ・エディション」「グランド・ホテル　特別版」「ドラキュラ　血の味」「フランケンシュタイン　恐怖の生体実験」

TOPICS

「ラスト　サムライ」130万枚！洋画としては初の歌舞伎座上映

★「ラスト　サムライ」のＤＶＤ発売記念の上映会が去る５月28日、東京・東銀座の歌舞伎座で行われた。ＤＶＤは５月12日の発売から12日間で130万枚の売り上げを記録（これはワーナー・ホーム・ビデオタイトルでの100万枚実売達成記録としては「ハリー・ポッター」シリーズに次いで歴代３位）。歌舞伎座での映画上映は1994年の「忠臣蔵外伝　四谷怪談」以来10年ぶり２度目、洋画では初の試みで、劇場正面には「ラスト　サムライ」の懸垂幕がかけられた。舞台挨拶には出演者の原田眞人監督が、上映後は映画初出演した歌舞伎俳優・中村七之助が登場し会場を大いに沸かせた。
★ソニー・ピクチャーズ　エンタテインメントが、６月から２つの新廉価キャンペーンをスタート。ひとつはＦＯＸなどが先行して行っている、１枚購入したらその場でもう１枚貰える「２枚目タダ男」(第１弾期間８／４～９／30）。もうひとつは２枚、３枚と買うごとに価格が半額になっていく「半額半蔵」(第１弾６／23～８／31）。特に後者は１枚目2500円、２枚目1250円、３枚目625円（４枚目以降は2500円…）という業界初のキャンペーンだけに是非とも注目して欲しい。
★今まで作家性の強い作品をリリースしてきた紀伊國屋書店が、娯楽性の高い作品をメインにした新レーベルを始動。第１弾作品として、スティーヴ・マックィーン主演のＳＦモンスター・パニック「マックィーンの絶対の危機（ピンチ）　人喰いアメーバの恐怖」を７／24に発売。
★「スケバン刑事　コンピレーション版」（東映ビデオ）のＤＶＤ発売を記念して、浅香唯、大西結花、中村由真が、渋谷のタワーレコードでトークイベントを開催、撮影当時の思い出話を披露した。
★2004年３月度ＪＶＡ（日本映像ソフト協会）出荷統計にて、レンタル用ＤＶＤとＶＨＳの出荷金額が51対49と、ＤＶＤがＶＨＳを初めて上回り、ＤＶＤレンタルがいよいよ本格化している象徴的な数字となった。

おすすめ新作 DVD

丸山尚輝

DVD

ワーナー・ホーム・ビデオ
32年〜・米・527分
監督／W・S・ヴァン・ダイク、リチャード・ソープ、セドリック・ギボンズほか
出演／ジョニー・ワイズミュラー、モーリン・オサリヴァン
★5985円

7.9S

ジョニー・ワイズミュラー　ターザン・フィルムズ　コレクターズ・ボックス
JOHNNY WEISSMULLER TARZAN FILMS COLLECTOR'S BOX

ジョニー・ワイズミュラー生誕100周年を記念したDVD－BOXが限定発売！

●水泳の選手として、２度の五輪で合計５個の金メダルを獲得。その後、鍛え上げられた肉体を武器に映画俳優に転身し、歴代ターザン俳優の中でも最も人気を博したジョニー・ワイズミュラーの、生誕100周年を記念した2000セット限定の企画ボックス。収録されるのは、ワイズミュラーのデビュー作「類猿人ターザン」＋「ターザンの逆襲」、「ターザンの復讐」＋「ターザンの猛襲」、「ターザンの黄金」＋「ターザン紐育へ行く」の計６タイトル３ディスクと、127分にも及ぶ特典映像を収めたボーナスディスク（①ドキュメンタリー「銀幕の王ターザン」②Schnarzan The Conqueror!!　③ドキュメンタリー「ジョニー・ワイズミュラー」④Rodeo　Dough）。ちなみに、"アーアアー！"と言う有名な雄叫びは、「類猿人ターザン」で初めて使用されたのはご存じでしたでしょうか？　尚、関連作として「グレイストーク　類人猿の王者　ターザンの伝説」と「類猿人ターザン」（ボー・デレク主演）も同時発売。

写真は「ターザンの逆襲」

DVD

JAZZ SEEN　カメラが聴いたジャズ
JAZZ SEEN : THE LIFE AND TIMES OF WILLIAM CLAXTON

VIDEO同時レンタル
レントラックジャパン＝BIG TIME ENTERTAINMENT
2001年・独・80分
監督／ジュリアン・ベネディクト
★4935円
●"パシフィック・ジャズ"のアルバム・ジャケットを手がけた名カメラマン、ウィリアム・クラクストンの半生に迫るドキュメンタリー。

6.25S＆R

DVD

エア・ストライク
AIR STRIKE

VIDEO同時発売
アートポート
2002年・米・未公開・95分　監督／デイヴィッド・ワース　出演／ロバート・ラスター　★3990円
●テロ集団の犠牲となった弟の復讐を果たすべく、退役していた伝説のパイロットが立ち上がった！　ロバート・ラスター主演の軍事アクション。予告編付き。

6.25S＆R

DVD

阿修羅のごとく

VIDEO6.11レンタル
博報堂DYメディアパートナーズ
2003年・日・135分
監督／森田芳光　脚本／筒井ともみ　出演／大竹しのぶ、黒木瞳　★6300円
●向田邦子原作、５大女優共演の傑作人情喜劇。特番「女は阿修羅である」、監督が語る裏阿修羅的エピソード、特製ブックレットの特典付き。

6.25S/6.11R

DVD

東京オリンピック

東宝
65年・日・143分
監督／市川崑
★6300円
●東京オリンピック開催40周年を記念した豪華企画。オリジナル版とディレクターズカット版との２枚組。勿論、音響も5.1chにリミックス。豪華デジパック仕様、ブックケース付き、プレスシート縮刷復刻版を封入する。

6.25S

DVD

神風
KAMIKAZE

パラマウント　ホーム　エンタテインメント
86年・仏・89分　監督／ディディエ・グルッセ　出演／ミシェル・ガラブリュ、リシャール・ボーランジェ　★3980円
●テレビ内の人間をモニター越しに殺害するメカを開発したマッド・サイエンティストの暴走を描くSFサスペンス。仏版予告編付き。

6.25S

DVD

泉麻人の昭和ニュース劇場①

ジェネオン　エンタテインメント
2004年・日・OV・81分　構成・出演／泉麻人　出演／実相寺昭雄　★4935円
●文化人・泉麻人が昭和30〜34年の風俗を、数々の貴重なニュース映像と共に紹介するバラエティの第１弾。35〜39年の第２弾も同時発売。実相寺昭雄監督との解説副音声付き。

6.25S

★価格はすべて税込。ただし、レンタルのみの場合は無表記。Sはセル、Rはレンタル、TFはテレビフィーチャー、OVはオリジナルビデオ。

DVD
トレジャーアイランド
LOST TREASURE

VIDEO同時レンタル
ハンド
2003年・米・未公開・97分　監督／ジェイ・アンドリュース　出演／スティーヴン・ボールドウィン　★5040円
●コロンブスが隠したとされる伝説の秘宝を巡るトレジャーハンターと悪の傭兵部隊との戦い！　スティーヴ・ボールドウィン主演の冒険活劇。

7.2S & R

DVD
シェイド
SHADE

VIDEO7.2レンタル
エスピーオー
2003年・米・101分　監督／ダミアン・ニーマン　出演／シルヴェスター・スタローン　★4179円
●スタローン、スチュアート・タウンゼント、ガブリエル・バーンといった豪華キャスト共演によるサスペンス。インタビュー集、メイキングなどの映像特典付き。

7.2S & R

DVD
ブラザー・サン　シスター・ムーン
BROTHER SUN, SISTER MOON

パラマウント　ホーム　エンタテインメント
72年・伊＝英・121分　監督／フランコ・ゼフィレッリ　出演／グラハム・フォークナー、アレック・ギネス　★4179円
●12世紀のイタリアの町を舞台に、宗教に目覚めた青年・フランチェスコが聖人と呼ばれるようになるまでを描いた青春ミュージカル。

6.25S

DVD
ローマン・エンパイア
AUGUSTUS : THE FIRST EMPEROR

VIDEO同時レンタル
ハンド
2003年・伊・未公開・117分　監督／ロジャー・ヤング　出演／ピーター・オトゥール　★5040円
●ピーター・オトゥールとシャーロット・ランプリング主演で贈る歴史大作。ローマ帝国初代皇帝・オクタヴィアヌスの血塗られた生涯を描く。予告編付き。

7.2S & R

DVD
地獄のモーテル
MOTEL HELL

エスピーオー
80年・米・101分　監督／ケヴィン・コナー　出演／ロリー・カルホーン　★4179円
●カルト的人気を誇る食人ホラー。今回、同時発売される他の6タイトルと共に、先着2000枚限定、有名ホラー漫画家による特製アウターBOXのおまけ付き（対象ショップのみ）。

7.2S

DVD
イン・アメリカ　三つの小さな願いごと
IN AMERICA

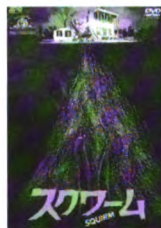
VIDEO同時レンタル
フォックス　ホーム　エンターテイメント
2003年・米・106分　監督／ジム・シェリダン　出演／サマンサ・モートン、パディ・コンシダイン　★4179円
●ジム・シェリダン監督が実体験を基に描出する奇跡の物語。10種の未公開シーン、メイキングなどの映像特典付き。

7.2S & R

DVD
ロストイノセンス　赤の果実　【ヘア無修正版】
DOUBLE VIE & LE DORLIS

VIDEO同時レンタル
ハンド
2003年・仏・未公開・93分　監督／フランク・P・ブパール　出演／エステル・デサンジュ　★5040円
●南国の島・マルティニックを舞台に、目覚めゆく少女たちの愛と性を描いた、「ダブル・ライフ」と「ドルリス」の2話構成のトロピカル官能編。予告編付き。

7.2S & R

DVD
スクワーム
SQUIRM

エスピーオー
76年・米・93分　監督／ジェフ・リーバーマン　出演／ドン・スカーディノ　★4179円
●ゴカイ類の大群が人間を襲うパニック・ホラー。ちなみに、特製アウターBOX参加漫画家は、日野日出志、水木しげる、犬木加奈子、伊藤潤二、御茶漬海苔、高橋葉介の6名。

7.2S

DVD
イン・ジャングル　地獄からの脱出
100 DAYS IN THE JUNGLE

VIDEO6.4発売
インターフィルム
2002年・米・未公開・92分　監督／ストゥーラ・ガンナーソン　出演／マイケル・リレー　★3990円
●南米のジャングルの奥地、コロンビア・ゲリラ部隊の人質になってしまった男たちの決死の脱出を描いたサヴァイヴァル・アクション。予告編付き。

7.2S／6.4R

DVD
私にも妻がいたらいいのに
I WISH I HAD A WIFE

VIDEO同時レンタル
カルチュア・パブリッシャーズ
2001年・韓・未公開・106分　監督／パク・フンシク　出演／ソル・ギョング　★3990円
●「シルミド／SILMIDO」のソル・ギョングとチョン・ドヨン共演による、本国では数々の賞に輝いたロマンチック・ラヴストーリー。

7.2S & R

DVD
デス・サイト
IL CARTAIO

VIDEO同時発売
タキコーポレーション
2003年・伊・未公開・99分　監督／ダリオ・アルジェント　出演／ステファニカ・ロッカ　★4935円
●ホラー映画の巨匠、ダリオ・アルジェント監督によるサイコ・ホラー。ポーカーのサイトに映し出された猟奇殺人を女性警官が追う。

7.2S & R

DVD
サル

VIDEO6.4発売
インターフィルム
2004年・日・107分　監督・脚本／葉山陽一郎　出演／水橋研二、大森南朋、鳥羽潤　★3990円
●新薬人体投与実験の現場で起こる恐ろしい出来事を、リアル感たっぷりに描出するサスペンス・ホラー。スチール写真集、予告編の映像特典付き。

7.2S／6.4R

おすすめ未公開作品 これだけは見逃すな！

丸山尚輝

DVD

VIDEO6.4レンタル
ファインフィルムズ
2001年・米・未公開・98分
監督／マーク・マーロン
出演／キーファー・サザーランド、アンソニー・ラパグリア、ラダ・ミッチェル、デニス・アーント
★3990円

6.25S／6.4R

ワイルド・スタリオン
DEAD HEAT

『24』のキーファー・サザーランド主演、ノンストップ・アクション

●話題沸騰のテレビ・シリーズ『24』でも、その存在感を十二分に発揮したキーファー・サザーランド主演のサスペンス。一頭の名馬に人生の再起を懸けたどうしようもない男たちと極悪マフィアとの攻防戦が、アクションや笑いを織り交ぜてスリリングに描かれる佳作だ。監督は「サインズ・オブ・ライフ」のマーク・マーロン。共演に「ギター弾きの恋」のアンソニー・ラパグリア、「ピッチブラッグ」のラダ・ミッチェルら。オリジナル予告編付き。

離婚問題や心臓の病気を抱え、警官の職を辞したパリーは、犯罪に手を染める弟・レイの誘いで一頭の年老いた競走馬を購入するが、意外にもそれが隠れた名馬だったことから、ふたりはその馬に人生の再起を懸ける決心をする。ところが、騎手として雇ったトニーの借金の肩にマフィアに馬を差し押さえられてしまった。果たして、諦めきれない3人は、無謀とも思える馬奪還作戦に出るのだが……。

DVD

泳ぐひと
THE SWIMMER

ソニー・ピクチャーズエンタテインメント
68年・米・95分　監督／フランク・ペリー、シドニー・ポラック　出演／バート・ランカスター、ジャニス・ルール
★3990円
●クレジットはないもののシドニー・ポラックも監督を担当した、アメリカン・ニューシネマの異色作。予告編付き。

6.23S

DVD

グローイング・アップ
LEMON POPSICLE

キングレコード
78年・イスラエル＝米・95分　監督／ボアズ・デイヴィッドソン　出演／イフタク・カツール
★4179円
●80年代前半、日本でも人気を博し大ヒットしたイスラエル産青春映画の初DVD化。監督の最新インタビューなどの映像特典のほか、ブックレットを封入。

7.7S

DVD

ワニ&ジュナ～揺れる想い～
WANEE & JUNAH

VIDEO同時レンタル
カルチュア・パブリッシャーズ
2001年・韓・未公開・114分　監督／キム・ヨンギュン　出演／キム・ヒソン、チュ・ジンモ、チョ・スンウ　★3990円
●韓国の人気上昇中、若手実力派俳優共演の切ない切ないラヴ・ストーリー。未使用シーンの映像特典付き。

7.2S&R

DVD

去年の夏　突然に
SUDDENLY LAST SUMMER

ソニー・ピクチャーズエンタテインメント
59年・米・114分
監督／ジョセフ・L・マンキウィッツ　出演／キャサリン・ヘップバーン
★3990円
●テネシー・ウィリアムスの戯曲を、名匠マンキウィッツ監督がキャサリン・ヘップバーンとエリザベス・テイラーを迎えて映画化した名編。

6.23S

DVD

天使の肌
PEAU D'ANGE

VIDEO同時レンタル
アスミック
2002年・仏・85分
監督／ヴァンサン・ペレーズ　出演／モルガン・モレ
★4935円
●俳優、ヴァンサン・ペレーズが監督デビューを飾ったラヴ・ロマンス。メイキング、未公開シーン、ミュージック・クリップ、予告編の映像特典付き。

7.9S&R

DVD

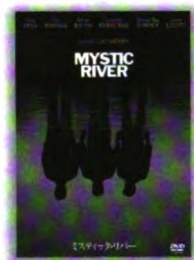
キラー・エリート
THE KILLER ELITE

キングレコード
75年・米・122分
監督／サム・ペキンパー　出演／ジェームズ・カーン、ロバート・デュヴァル
★4179円
●ヴァイオレンス映画を得意とするペキンパー監督の娯楽アクション。オリジナル劇場予告編、アートワークギャラリーの映像特典のほか、解説書を封入する。

7.7S

★価格はすべて税抜き。ただし、レンタルのみの場合は無表記。Sはセル、Rはレンタル、TFはテレビフィーチャー、OVはオリジナルビデオ。

No. 131 キネ旬DVDコレクション

ミスティック・リバー 特別版

ミスティック・リバー 特別版

◎2004年・アメリカ・カラー・16：9LB スコープサイズ（スクイーズ）・5.1chドルビーサラウンド・2時間18分
◎監督／クリント・イーストウッド 出演／ショーン・ペン、ティム・ロビンス、ケヴィン・ベーコン、ローレンス・フィッシュバーン、マーシャ・ゲイ・ハーデン、ローラ・リニー
◎特典：ミスティック・リバーの裏側／小説から映画／インタビュー（クリント・イーストウッド、ティム・ロビンス、ケヴィン・ベーコン）／オリジナル劇場予告編／特報
◎7月9日発売／3129円（税込）
◎発売・販売元／ワーナー・ホーム・ビデオ

イーストウッド・ブランドの一級品

文・細越麟太郎

トライアングルな友情関係の宿命

もし「ロード・オブ・ザ・リング」三部作の完結編が昨年公開されなかったら、確実にアカデミー賞作品賞を獲得していたであろう、人間ドラマの秀作だ。

新作『シャッター・アイランド』も好評のデニス・ルヘインの原作は、三人の少年が辿った人生の皮肉な宿命の顛末を描いてベストセラーになったが、少年虐待問題が、彼らの青春や人生そのものを台無しにして、しかも複雑な殺人事件まで誘発するテーマの重さと深刻さに、その映画化に対しては原作者は頑なに強い拒絶反応を示していたと語っている。よくスティーヴン・キング原作の「スタンド・バイ・ミー」のトライアングル・ノスタルジーが比較されているが、事件の傷跡の深さと重さはより鮮烈で、ひとつ視点を低くすると稚拙な犯罪ミステリーに成り果てる。作者デニス・ルヘインの危惧は当然のことである。

しかし、クリント・イーストウッドのプロジェクトからオファーがきた時、その態度は一変してしまった。というのも、ベテラン作家、マイケル・コナリーのミステリー小説「ブラッド・ワーク」を撮ったばかりのイーストウッドは、ドン・シーゲル監督直伝のハードなミステリー感覚を得意とし、敬愛したジョン・ヒューストンの骨太な人間直視の作風を信条として、いまやハリウッド最高の映画製作プロジェクトとして評価され、その偉名は誰もが認めているからに他ならない。

つまり今、どんな作家でも、もしクリントから電話

が入ったら、映画化交渉を断れないだろう。ショーン・ペンが特典映像で語っていたように「クリントは今やアメリカン・アイコン(聖像)なのだ」という言葉の強さは真実なのだ。

あくまでCG処理や突飛な映像表現を避けて、人間のハートの真実を見つめようとするクリントの映画哲学は、古典的だと仮に言われても、軽く一蹴するほどの伝統的風格をいつも備えている。もはや彼の堅実な作風は、硬質で孤高な一種のブランドであり、稀に見る個性なのである。

見応えのある特典と名優たちの意外な発言

ショーン・ペンが主演男優賞。これは文句のつけようがない。とかくオーバー気味な演技が臭いと批判されてきたショーンは、この作品で自己主張よりも、相手の言葉をよく聞き、その内容で微妙なリアクションの変化を見せている。

事件で娘を失った悲しみは当然だが、とくに友人だったティム・ロビンスや、妻のローラ・リニーの話を聞いているシーンの表情の歪みは繊細だ。

ティム・ロビンスの助演男優賞。これには多少異論があった。あの渡辺謙の存在感が圧倒的だったせいだ。しかしこうして冷静にDVDで再見するティムの、実に計算された異常な巧さにはオスカーも認めざるを得ない気迫がある。

とくに「俺はもう、一度死んだ人間だ。あのとき洞窟から脱出したのは俺じゃない。吸血鬼なんだよ」とテレビのヴァンパイアを見ているティムの表情は、たしかにキレていた。暗闇からはい出した彼の背中には過去が張りついたままなのだ。

本編よりも長い特典映像の、とくに貴重なシーンは、ニューヨークのテレビ・インタヴュー番組が収録したクリント・イーストウッド、ティム・ロビンス、ケヴィン・ベーコンたちの発言である。ユーモア巧みに対話を仕掛ける司会のチャーリー・ローズの話術も凄いが、終始笑みを浮かべたクリントの対応も絶妙。

「ドン・シーゲルは演技の勢いが広がるのを見つめる。わたしは役者の直感を優先するから演技に注文はつけない。ただ現場にいるだけさ」と謙遜する。

「ワン・テイクで済むのは、クリントが名監督としての自信があるからさ」と自分でも演出経験のあるティム・ロビンスは監督を絶賛する。

「ラスト・シーンの行方は、見た人の解釈に任せるよ」とクリントは笑う。犯罪として裁くか。友情を守り、思い出として葬るか。事件の真実よりも人生の些細な選択として心に秘めるのか。

さあ、あなたはどう見ますか?

No.
132
キネ旬DVDコレクション

しあわせな孤独

しあわせな孤独

◎2002年・デンマーク・カラー・スタンダードサイズ・ドルビーデジタル（モノラル）・1時間48分
◎監督／スザンネ・ビエール　出演／ソニア・リクター、マッツ・ミケルセン、ニコライ・リー・カース、パプリカ・スティーン、スティーネ・ビェルレガード
◎特典：監督インタビュー／日本版劇場予告編
◎7月2日発売／3990円（税込）
◎発売・販売元／メディアファクトリー

映画／〈ドグマ95〉、切り撮られた人生の断片たち

文・杉原賢彦

どこにでもあるお話

——〈ドグマ95〉の手法で撮影してよかったことは？

「一番よかったことは、リアルな映像が撮れたこと。作品に現実感が出せたこと」

〈ドグマ95〉に則り撮られた、スザンネ・ビエール監督の「しあわせな孤独」がDVDになる。本編とともに、日本版の特典として監督インタビュー（先の引用もDVD中の特典映像からのものだ）と予告編を本編とともに収めて、〈ドグマ95〉の新たな頁が読まれるのを待っている。

すでに知られている通り、〈ドグマ95〉は、つくり手に対して多くの足枷を課す。いわく、セットを使わずロケーション撮影のみとする。人工の照明を使ってはいけない。音楽は画面内から聞こえるもののみに限定する。キャメラは手持ち撮影のみ。表面的なアクションを入れてはいけないetc.10箇条におよぶ誓いは、映画を始源へと返すことに努められてきた。そして「しあわせな孤独」もまた、その10箇条の誓いを遵守しながら撮られてゆく。

生起する物語は、2組のカップルのもとに起こる。プロポーズ後、結婚を目前にひかえた婚約中の男女と、病院に勤める医師の夫とその妻。だが、ある日、医師の妻が婚約中の男を轢いて

しまったとき、物語は転がり始める。医師であるため、また自分の妻が加害者であるため、婚約中の女への同情を禁じ得ない医師の男。一方で、婚約中だった男は、全身不随となり、自分の殻に閉じこもる。すれ違い、ぶつかり合い、そしてそれぞれが奇妙な孤独のなかに閉じ込められてゆく……。

スザンネ・ビエールは、彼らをただ、手持ちキャメラによって追ってゆく。クロース・アップにより、人物の表情を中心にとらえてゆく。婚約中の女セシリ(新人のソニア・リクターの自然な美しさ、かわいらしさ!)とそのフィアンセで地質学者のヨアヒムの、人生最大の行事を目前にひかえて見せる他愛のない歓びの表情。そして事故によって全身不随となったヨアヒムを愛しながらも、医師のニルス(マッツ・ミケルセン)へと心を移しかけるセシリ、医師としての同情心に揺らぎをおぼえ恋心へと変わり始めるニルス自身の表情。刹那的に切り取られてゆく映像は、心理描写を排して物理学の即物性をもって提示されてゆく。

どこにでも転がっていそうな物語が、まさにキャメラが見つめる現前で生起し、ぼくたちはそのただなかへと投げ込まれては、狂おしいまでの感情の身動きのとれないもどかしさのなかでやがてそれぞれが抱える葛藤と心の闇を共有するようになる……。

まるで不意打ちのように

監督のスザンネ・ビエールは、〈ドグマ95〉からの影響について、「ストーリーの核心を表現するという点で可能性が広がった。〈ドグマ95〉の考え方からとても影響をうけた」と語っているが(引用は同じく特典映像中の監督インタビューより)、「しあわせな孤独」にあるのは、まさにストーリーの核心だけだといえるだろう。不慮の事故による運命の歯車の狂いから生じたふとした不倫劇。その小さな事件の当事者だけを追いかけ、ありのままの光のなかに収めた映画は、まるで不意打ちのように、偽りのない人間の表情を掬い撮ってゆく。たとえばジョン・カサヴェテスがジーナ・ローランズに向けたキャメラのように(医師の妻マリー役のパプリカ・スティーンに向き合うキャメラの凄み!)。

「しあわせな孤独」にあるのは、人間の生のなまなましい手触りだ。もろくて壊れやすい、ざらざらとしていやらしい、それでいて慈しまずにはいられない、愛おしさではちきれそうになるほどの、生きてゆくという痛みだ。

〈ドグマ95〉が目指したもののひとつが、映画の不純物を取り除くことであったなら、「しあわせな孤独」はその狙いを昇華し得ているだろう。しかも35ミリによる映像にスーパー8の荒れたざらついた映像を挿入することによって、ぼくたちが手触りとして感じられるようにしてみせた。

〈ドグマ95〉にとっては掟破りの、ルール壊しの映像と音楽が、だがしかし、「しあわせの孤独」をいっそう身近なものにし得たのだ。映画のリアリティとは、作為のうえにしか構築され得ないといういまさらながらの事実を、ひそかに語ってもいる。もはや〈ドグマ95〉を卒業してもいい頃ではないのか。「しあわせな孤独」は、映画の歴史を、新たな歴史の頁を開き歩いてゆきつつある——。

No. 133

キネ旬DVDコレクション

モロ・ノ・ブラジル

モロ・ノ・ブラジル

◎2002年・独＝フィンランド＝ブラジル・カラー・ビスタサイズ・5.1chドルビーデジタル・1時間45分
◎監督／ミカ・カウリスマキ　出演／セウ・ジョルジ、マルガレッチ・メネーゼス、イヴォ・メイレリス＆ファンキン・ラタ
◎特典：解説リーフレット
◎発売中／5040円（税込）
◎発売・販売元／紀伊國屋書店

ブラジルに魅了されたミカ・カウリスマキ

文・森直人

これぞオール・アバウト・ブラジリアン・ミュージックと呼びたくなる、珠玉の音楽ドキュメンタリー！　フィンランドを代表する映画兄弟の、冴えない兄の方、と紹介されがちだったミカ・カウリスマキが、愛してやまないブラジル音楽のルーツを自らの足を使って探索し、弟のアキとはまったく異なったタイプの傑作を、ついに生み出した。「モロ・ノ・ブラジル」とは"私はブラジルに住んでいる"との意味だが、日本語の駄洒落で"モロのブラジル"なんて記すと、実はしっくりくる。入門編というには、かなりコアな世界なのだ。ヴィム・ヴェンダースがグラミー賞受賞のキューバ・ミュージシャンたちに迫った「ブエナ・ビスタ・ソシアル・クラブ」（99）みたいな、パッケージングの巧みなものとは大きく違い、土地の人々の日常生活に溶け込み、直結して立ち上がる音楽の素晴らしさを、文化人類学的なアプローチともいえるリアルさで、そして音楽ファンとしてのピュアネスで、映像に収めている。DVD発売はまさに朗報！　本当に何度でも観たい一本だからだ。

ブラジル音楽を探す旅から見えてくる国の歴史

映画はフィンランドのヘルシンキから始まる。「30年前、ブラジル音楽のレコードを手に入れた。ロックと交換したのだ」とのたまうミカ監督は、夢の国であるブラジルへと旅立つ（ちなみにロックのレコードとは、ディープ・パープルだったらしい）。彼がまず出会うのは、インディオのフルニーオ族だ。先住民族の村で奏でられるのは、都会のカフ

エやクラブで流れるおしゃれなブラジル音楽とは遠くかけ離れた、完全なる土俗音楽！　最初は少しとまどうものの、"生"そのものから自然に湧き出てくるプリミティヴなリズムの鼓動に、だんだん体が馴染んでくる。そして、ブラジル音楽の最初のルーツはインディオであり、それが黒人文化と融合してサンバが誕生したこと。またブラジルは人種のるつぼであり、様々な民族が持ち寄った音楽がミックスされる。特にアフリカやポルトガルの影響が強い。などなど、現地の声を通して、いろんな角度からブラジル音楽を学習することができる。ミカ監督のナビゲーションも、簡潔で好感度大。映画の中の彼はガイド役でありつつ、我々と共に現在進行形で学んでいるのだ。フォホー（アコーディオンをよく使用するランバダのルーツの一つ）、マラカトゥ（アフリカ起源の舞踏音楽）、コーコ（パンデイロなどの打楽器や手拍子を使うリズムと歌の音楽）、エンボラーダ（映画の中では「究極のラップだよ」と解説される）といった、たくさんのジャンルの名称が紹介されていくうち、徐々に見えてくるのは、ブラジルという国の複雑な歴史である。さらにその中でも、伝統にこだわる人とそうではない人など、地域や世代での意識差もうかがえる。やがてミカ監督はバイーアに足を進めるが、ここのミュージシャンは、新しい音楽を常に取り入れる姿勢を持っているようだ。デイヴィッド・バーンのツアーに参加したこともある女性シンガー、マルガレッチ・メネーゼスの、ロック・スピリットあふれるパワフルなライヴ・パフォーマンスはかっこよかった！

ミカの情熱は止まらない
リオにクラブをオープン！

　そして旅の最終地はリオ・デ・ジャネイロ。音楽産業も盛んなこの都市では、田舎とは違ったブラジル音楽の顔を見せる。地方ではプロやアマチュアの区別などほとんどなく、音楽の演奏は生活と一体化したものなのだが、リオではCDをリリースして成功することが、スラムから抜け出すための手段という考え方が出てくる。しかも貧困層に定着しているのは、サンバよりもファンクだというのだ。イヴォ・メイレリス&ファンキン・ラタは、ジェームズ・ブラウンの「セックス・マシーン」を引用して、最高のサウンドを聴かせる。また、ホームレスから成り上がった歌手として登場するセウ・ジョルジは、「シティ・オブ・ゴッド」(02)でマネを演じた役者！　あの映画と彼自身を重ね合わせると、よりいっそうブラジルの現実が生々しく浮かんでくるだろう。

　かくして、4000キロにも及んだミカ監督の旅は終わる……と思ったら、なんと勢いあまった彼、リオにクラブをオープンしてしまったらしい！　そのノメり込みぶりには畏れ入るが、確かにこの「モロ・ノ・ブラジル」が素敵なのは、彼の音楽への純粋な好奇心と愛情がシンプルに映画へと結実しているからだ。ミカ監督の情熱と共に、ブラジル音楽の喜びを繰り返し堪能したい。

No.134 キネ旬DVDコレクション

大巨獣 ガッパ

大巨獣　ガッパ

◎1967年・日本・カラー・16：9 LBスコープサイズ・ドルビーデジタル（モノラル）・1時間24分
◎監督／野口晴康　出演／川地民夫、山本陽子、和田浩治、小高雄二、藤竜也
◎特典：メイキングスチール／スタッフインタビュー／ポスターギャラリー／国内版・海外版予告編／ニュース映像／ガッパデータ集
◎7月9日発売／4935円（税込）
◎発売・販売元／日活

日活唯一の怪獣映画「大巨獣 ガッパ」

文・磯田勉

「昭和のジュラ紀」に登場した異色怪獣映画

「ゴジラ FAINAL WARS」の完成が待ち遠しいが、シリーズ最終作と銘打たれたことに、一抹の寂しさを覚える。ついにこの日が来たか。年に一度の楽しみだった怪獣映画という名のお祭りが、いま終わろうとしている。怪獣映画は既にファミリーピクチュアとしての役割を終え、アニメにその座を譲ったのだろうか。

しかし、記憶を思い返せば、かつて怪獣天国というべき時代があった。テレビのチャンネルを文字どおり回せば、彼らがブラウン管狭しと暴れ回り、春・夏・冬の休みには映画館でスクリーンから飛び出さんばかりのその迫力に、固唾を呑んで見守った。この「昭和のジュラ紀」は1966年（昭和41年）、円谷プロのテレビ番組『ウルトラQ』に始まった。それまで銀幕でしかお目にかかれなかった怪獣が毎週登場する画期的な番組は当時の子供たちを熱狂させ、玩具や出版などのマーチャンダイジングを含めた一大ブームへと発展。現在の皇太子が大伴昌司編集の怪獣図鑑を手にとる場面がニュース映像に紹介されて話題になったのもこの頃だ。男の子はみんな怪獣が好きなのね、である。

ブームは邦画各社に広がった。この67年、老舗の東宝は春に「怪獣島の決戦 ゴジラの息子」、夏に「キングコングの逆襲」とテレビ再編集版「長編怪獣映画 ウルトラマン」の2本立て。対抗馬の大映は「大怪獣空中戦 ガメラ対ギャオス」。これに松竹の「宇宙大怪獣ギララ」、そして日活の「大巨獣 ガッパ」と、それまで怪獣映画と無縁だった会社も参入。東映も得意の時代劇に怪獣を絡ませた「怪竜大決戦」を前年に公開している。まさしく、日本列

島は怪獣たちによって蹂躙されていた。

当時、「ゴジラ」をはじめとする日本製怪獣映画はその卓抜した特撮技術で海外でも人気が高かった。だが、とかく特撮映画は製作費がかかる。ノウハウのないところでは尚更である。そこで政府の肝いりで発足した機関、社団法人映画輸出振興協会が救いの手を差し伸べた。輸出して外貨を稼ぐ日本映画のために製作費を融資しようという制度である。日本映画がぎりぎり「産業」として成立していた往時を偲ばせるエピソードである。外貨獲得のため、というのが泣かせる！　まさしく怪獣映画は高度経済成長の申し子というべき時代の子であった。かくして日活の「ギララ」とともにこの制度を受けることに成功。日活は当時としては破格の1億6千万円の融資を受けて、「ガッパ」の製作に着手した。

怪獣映画の王道を往く ミニチュアワークの冴え

南海の孤島から持ち帰った怪獣ガッパの子供を取り返しに、二匹の親怪獣が日本を破壊するというプロットは、イギリス映画「怪獣ゴルゴ」(60)の換骨奪胎というか翻案というか、そのまんまである。さすがは日活アクションで鍛えられたお家芸というべきか。怪獣映画といえばモデルアニメーションが主流の欧米にあって珍しく、「怪獣ゴルゴ」は精密なミニチュアワークを駆使した円谷流特撮の影響を受けた作品だが、「ガッパ」の原案・特撮監督としてクレジットされる渡辺明こそ円谷英二の下で長年、特撮美術監督を務め、東宝特撮映画絶頂期を支えた人材だった。「ゴジラ」→「ゴルゴ」→「ガッパ」という影響関係を考えると楽しくなってくる。

実際の現場では金田啓治ら日活の技術陣が中心になって手がけたというが、熱海の温泉街、京浜工業地帯、羽田空港など、東宝にも負けない大スケールのミニチュアセットを使ったスペクタクル場面は特筆もの。巨大なガッパの足が天井をぶち抜いて現れるシーンなど本編との繋がりも緊密で、怪獣映画の醍醐味を味わわせる。河口湖の津波や日光のガッパの仰角など、丁寧な合成ショットも光る。ラストの親子再会の場は巨大な羽田空港のセットも見事な、実に泣かせる愁嘆場となった。

監督は鈴木清順が師事した野口晴康（博志）。「拳銃無頼帖」や「銀座旋風児」シリーズなどを手がけた日活プログラムピクチュアの職人で、本作が事実上の遺作。企画の児井英生は古くは溝口健二の「西鶴一代女」(50)で知られ、生涯125本もの映画を手がけた大プロデューサー。キャストは川地民夫、藤竜也、和田浩治、そして山本陽子ら当時の日活アクションや青春スターの面々。美樹克彦の『大巨獣　ガッパ』やダニー飯田とパラダイス・キングの『がんばれ仔ガッパ』と主題歌や挿入歌が印象的な「歌う映画」になっているところも含めて、日活映画らしい陽性の楽しさである。

No.
135
キネ旬DVDコレクション

この世の外へ クラブ進駐軍

この世の外へ　クラブ進駐軍

◎2004年・日本・カラー・16:9LBビスタサイズ・4.0chドルビーデジタル・2時間3分
◎監督／阪本順治　出演／萩原聖人、オダギリジョー、MITCH、松岡俊介、村上淳
◎特典：予告編／キャスト＆スタッフプロフィール／インタビュー／メイキング
◎6月25日発売／4935円（税込）
◎発売・販売元／松竹ホームビデオ

全編を流れるジャズの数々

文・滝矢直

拳でもう一度栄光をつかもうとするボクサー（「どついたるねん」）。妹を殺し逃亡の中で新たな人生を見つける女性（「顔」）。過去や力関係を暴力で変えようとするヤクザ（「新・仁義なき戦い。」）。阪本順治監督の作品には何かをきっかけに自分のいる"この世の外へ"抜け出そうとする人間が描かれ続けてきた。「この世の外へ　クラブ進駐軍」は、アメリカ兵相手にジャズを演奏する5人の若者（萩原聖人、オダギリジョー、松岡俊介、村上淳、MITCH）を中心に、彼らを取り巻く人々が戦争の傷跡から立ち上がる人間模様を描いている。「映画は時代とともにある」という監督がこの作品を作るきっかけとなったのは、前作「KT」撮影時に起きたアメリカ同時多発テロと、その後のイラク戦争。「なぜ自分はのんきに映画を撮っているんだろう」というほどの衝撃に、戦争の映画を作ろうと思い、今の若者にも通じるテーマとして選んだのが進駐軍クラブに出入りしていたジャズメンの話だった。

当時の若者と「ラッキーストライク」

監督は製作に先立ち、時代背景をリサーチするために当時の進駐軍クラブで演奏していたジャズメンの同窓会的なイベント「クラブ進駐軍」を取材。そこで、すでに70才を過ぎたかつての若者たちが今でもジャズを満喫し、コークやポップコーンを味わうカッコいい姿に大いにインスパイアされたという。映画でも全編をジャズが彩るのはもちろん、進駐軍がもたらしたアメリカ文化がいくつも登場する。例えばアメリカ製煙草「ラッキーストライク」。主人公のジャズメンたちはアメリカ軍用品でもあったこの煙草を愛煙し、バンドにも「ラッキーストライカーズ」と命名している。俗語で"大当たり"を意味する「ラッキーストライク」は、パッケージの赤い丸のデザインが日の丸を思わせることから、実は戦争にまつわる逸話が多く残っている。真偽のほどは定かでは

ないが、例えばアメリカ兵が日本軍機についた日の丸（ちょうど燃料タンクの場所）を狙って叫んだフレーズが「ラッキーストライク！」だったとか、「自分が弾に大当たりされては困る」とアメリカ兵はこの煙草を持ちたがらなかった……等々。劇中では、戦争で片足を失った男がパッケージを指して「真ん中の赤いのが日本、外側の円がアメリカ。日本はアメリカに囲まれてるんだ」と説明する。バンドマンから差し出されたこの煙草を彼が口にしないところには、アメリカに対するそれぞれの感情の違いもみえてくる。

戦争の時代が向かう "この世の外"とは

　一方で、日本人が嫉妬と羨望の目で見ていた進駐軍兵士たちも、戦争によってさまざまな苦悩を抱いていることが次第に浮かび上がる。弟を殺した日本人を憎む兵士（アメリカ人俳優シエー・ウィガムが好演）が抱く心の傷。そして終盤では、クラブに集まる兵士たちに朝鮮戦争への派遣命令が下される。「なぜ人間は戦争をくり返すのか？」という疑問が、映画のきっかけであったテロやイラク戦争へとつながっていく。撮影の時期はアメリカがちょうどイラクに侵攻していた時で、作品の持つメッセージに共感した本物のアメリカ兵たちもエキストラとして参加。乱闘シーンで「ケンカなんか止めろ！　俺たちはこれから戦争に行くんだぞ！」と仲裁する黒人兵は実際にイラクに行く直前で、セリフはアドリブで思わず出てしまったものだという。脚本を読んで出演を即決したというイギリスの名優ピーター・ミュランも、作品のメッセージに共感した一人で、製作発表（DVD特典映像に収録）で「この映画は国際的にも意義があり、全世界のいろいろな人に観てほしい」とコメントしている。撮影に参加した実際の兵士たちは、今どこでどんな思いを抱いているのだろうか？　劇中ではジャズが兵士たちの心を癒し、慰めるものの、いまだにどこかで争いが続く世界が向かう"この世の外"がどこなのか、見つけるのはとても難しい。

　映画のエンディングには、ジョージ川口氏、ペギー葉山氏といった往年のジャズメンが出演して昨年9月11日に行われた「クラブ進駐軍」のもようが流れる。毎年恒例となっていたこのイベントも残念ながら5回目の昨年で最後となった。また映画の時代考証に関わったジャズ歌手、笈田敏夫氏が直前の9月2日に、イベントに出演されていた川口氏が11月1日に逝去。今年に入ってからも、ピアニストの世良譲氏が2月17日に亡くなられた。戦争だけはいつまでも繰りかえすのに、戦後のジャズが築いたひとつの時代は、すでに遠いものとなりつつある。

日本映画紹介

データ表記■製作会社／配給会社／封切日／C＝カラー、BW＝モノクロ、PC＝パートカラー（使用フィルム：F＝フジ、EK＝コダック、A＝アグファ）／BU＝ブローアップ／FR＝フィルムレコーディング、LC＝レーザーシネマ／S＝スタンダード、V＝ヴィスタ、EV＝ヨーロピアンヴィスタ、CS＝シネマスコープ／D＝ドルビー、DSR＝ドルビーSR、S＝ステレオ、M＝モノラル／上映時間／映倫指定／封切代表館／M＝モーニングショー、E＝イヴニングショー、L＝レイトショー

死に花

「死に花」製作委員会（東映＝アミューズ＝テレビ朝日＝東映ビデオ＝IMJエンタテインメント＝毎日新聞社）作品（製作協力＊TIMES IN＝東映東京撮影所）／東映配給／04・5・8／C（F）・V・DD／120分／丸の内東映

スタッフ■監督＝犬童一心　製作＝横溝重雄／大里洋吉／宮下昌幸／木村純一　企画＝遠藤茂行／宮河洋　プロデュース＝伊藤満　プロデューサー＝木村立哉／橋田寿宏／福吉健／松田康史　アソシエイトプロデューサー＝久保田修／西口なおみ　アシスタントプロデューサー＝小笠原宏之　制作担当＝武石宏登　原作＝太田蘭三　脚色＝小林弘利／犬童一心　撮影＝栢野直樹　照明＝磯野雅宏　編集＝阿部亙英　録音＝浦田和治　美術＝磯田典宏　装飾＝田畑照政　衣裳コーディネート＝宮本まさ江　衣裳＝波多野芳一　音楽＝周防義和　音楽プロデューサー＝北神行雄／安東義史　スクリプター＝中田秀子　スチール＝西村彩子　ビジュアルエフェクト＝浅野秀二　CGI＝横石淳　音響効果＝岡瀬晶彦　効果応援＝北田雅也／伊藤瑞樹　特殊造形＝宗理起也　助監督＝谷口正行　主題歌＝元ちとせ『精霊～nomad version～』

キャスト■菊島真…山崎努　伊能幸太郎…宇津井健　穴池好男…青島幸男　庄司勝平…谷啓　先山六兵衛…長門勇　源田金蔵…藤岡琢也　明日香鈴子…松原智恵子　井上和子…星野真里　遠山貞子…加藤治子　青木六三郎…森繁久彌　赤星周次郎…小林亜星　赤星静江…吉村実子　鴨下光代…白川和子　阿保親雄…岩松了　梅岡千香子…土屋久美子　黒井順一…ミッキー　カーチス　鴨下太一…高橋昌也　月村俊介…鳥羽潤　図書館の美女…戸田菜穂　北村英治　江草啓介　稲葉岡光　近藤和紀　ワイドショウ出演者…大和田獏／依田司／大石美佳／大下容子　中森祥文　中村靖日　サクランボ銀行ガードマン…佐藤佐吉　枝光利雄　小川俊彦　山田良隆　長沢一樹　大沢ちさと　吉田能里子　ポール　カミンスキ　野口武郎　足立信彦　猪岐英人　鈴木亮平　佐藤愛子　高橋のぞみ　小花幸彦　幸将司　折原凛　高橋香おり　赤山健太　近江テツヒロ　菅原実里　小笠原美博　川村謙介　水谷浩久　山藤実花　藤本恭子　村山昌子　昼間忠久　近藤久美子　佐野福美　加納恵美子　窪田節子　貫田明子　窪田かね子　澤登ひほり　梅岡南斗　中谷諭紀　近藤淳子

解説■金庫破りに情熱を燃やす老人たちの姿を描いた喜劇。監督は「伝説のワニ　ジェイク」の犬童一心。太田蘭三の同名小説を基に、「Jam Films 2／CLEAN ROOM」の小林弘利と犬童監督が共同で脚色。撮影を「黄龍　イエロードラゴン」の栢野直樹が担当している。出演は、「13階段」の山崎努、「シベリア超特急3」の宇津井健、「明日があるさ　THE MOVIE」の青島幸男、「星砂の島、私の島～ISLAND DREAMIN'～」の谷啓、「かっ鳶五郎」の長門勇、「サラリーマン専科　単身赴任」の藤岡琢也、「おにぎり」の松原智恵子、「伝説のワニ　ジェイク」の星野真里ら。

略筋■東京郊外にある老人ホーム〝らくらく長寿園〟に暮らす元映画プロデューサーの菊島は、同じホームの入居者・源田の遺品の中に、銀行の地下に穴を掘り、金を強奪すると言う奇想天外な計画を記した〝死に花〟と題されたノートを発見。ホームの仲間である女好きの穴池、ほら吹きの庄司、銀行の支店長だった伊能、そして恋人の鈴子と共にその計画を実行に移すことにした。狙うは、伊能のかつての勤め先である〝サクランボ銀行〟。期間は、ターゲットの支店が閉鎖されるまでの一ヶ月間。穴掘りの拠点となる隅田川沿いに住むホームレスの先山やホームの新人職員・和子をも仲間に引き入れ、着々と穴を掘り進めて行く菊島たち。途中、防空壕の跡から白骨化した母子の遺体が見つかったりしたが、予定通り金庫の真下まで掘り進めることが出来た。ところが、明日はいよいよ金庫を破ると言う日、台風に見舞われせっかく掘った穴が水没してしまう。万事休す――しかし、なんと浸水によって地盤が緩みビルが傾き始めたのである！　そこで、勿怪の幸いとばかり、菊島たちは傾いたビルの下に穴を掘ると、まんまと17億3千万円のゲットに成功したのであった。だが後日、防空壕から発見された遺体がホームの青木老人の妻子のものだったことが判明。今回の計画が

源田による青木老人の為のものだったと気づかされた彼らは、しかしもう一花咲かせるべく、奪った金を元手に武田信玄の埋蔵金探しを計画するのだが、その時、菊島にボケの症状が顕れていた……。

17才

17才製作委員会作品（製作協力＊三輪ミュージックオフィス■ニュー・メディア・ジェネレーション■CORNFLAKES）／スローラーナー配給／03・6・21／C（DV・DLP）・S／70分／テアトル新宿／L

スタッフ■監督■木下ほうか　企画■猪俣ユキ／三輪明日美　プロデューサー■狩野善則／堀江慶　制作担当■堀江慶　脚本■猪俣ユキ　撮影■大道省一　照明■小川幹　編集■松田和茂　録音■浅田将助　スタイリスト■相馬佳子　音楽■浅井勇弥　スクリプター■金丸律子　スチール■渡辺慎一／涼　Bカメ■中島崇　撮影応援■斎藤徳暁　助監督■宮川宏司　主題歌■七尾旅人「ウィッグ・ビーチ」

キャスト■アコ…三輪明日美　リョウ…猪俣ユキ　ヒトミ…菊地百合子　オヤジ1…木下ほうか　本を持った少年…松田龍平　店チョー…徳井優　屋台のSWINGMAN…田口浩正　オヤジ2…田中要次　レコード少年…BIKKE　セヴァスチャン…永島克　オカマの生徒…山崎裕太　セクシー看護婦…久我未来　理屈ボイ客…新田亮　客…本田博人／塚本高史　自転車美少年…高岡蒼佑　痴漢…村上淳　ケンヂ…水橋研二　本を持った少年の女…松丘小椰　知的な警官…津田寛治　馬鹿な警官…岡村洋一　襲われる美女…三輪ひとみ　可憐な女教師…奥貫薫　順子先生…浅野順子　性格の悪い生徒…小谷美裕／馬場喬子／鈴木真利／佐藤真輝子　他校の男子…古谷将之／藤平涼／伊達建士／鈴木祥二郎／久保田武蔵／ラージキル／こやまじん　みゆう　豊岡明子　伊相紘明　宮内こずえ　宇宙☆海月　篠原里枝子　山口和之　宮川宏司　こおじ　猪俣メーテル　玉山鉄二　合谷杏里

解説■漠然と毎日を過ごす女子高生が、様々な事件を通して成長していく姿を描いた青春ドラマ。監督は、本作が初監督作となる俳優の木下ほうか。脚本は女優の猪俣ユキ。撮影を「異形ノ恋」の大道省一が担当している。主演は、「ロックンロールミシン」の三輪明日美と「死びとの恋わずらい」の猪俣ユキ。

略筋■4月、キャバクラでバイトをしている17才の女子高生・アコのクラスに、留年したリョウが編入されて来た。DJを目指す彼氏とイギリスに渡るのが夢だと語るリョウに憧れを抱くと同時に、自分には彼女のような夢や居場所がないことに不安を感じるようになっていくアコ。やがて、彼女は失恋や親友・ヒトミの自殺未遂事件、リョウの死などを乗り越えて、未来へ前向きに生きていこうと決意するのであった。

〈なんくるムービー〉あじまぁのウタ 上原知子 天上の歌声

レントラックジャパン■アジマァ■ランプルフィッシュ作品／レントラックジャパン■パンドラ配給／03・7・12／C（HD24p・LC・EK）・V・DTS／88分／新宿テアトルタイムズスクエア／L

スタッフ■監督■青山真治　プロデューサー■仙頭武則　協力プロデューサー■長澤一史／中西義明　アシスタントプロデューサー■福山研輔　プロダクションスーパーバイザー■三宅川敬輔　撮影■たむらまさき／猪本雅三　編集■大重裕二　レコーディングミキサー／ミキシングエンジニア■大川正義　サウンドエディター■小川高松／照田明弘　音楽■照屋林賢　スチール■島袋浩　ビデオエンジニア■小野寛明　（カラハーイ・ライブ）マルチレコーディングエンジニア■上畠基生　サウンドエディター■照田明弘

キャスト■上原知子　照屋林賢　桑江良美　稲福克典　大城隼　上原顕　新崎成人　山川清仁　interviewer…仙頭武則

解説■沖縄ポップスを代表する〝りんけんバンド〟のヴォーカリスト・上原知子をフィーチャーし、ライヴやインタビューなどで構成した長篇音楽ドキュメンタリー。監督は「刑事まつり／Noと言える刑事」の青山真治。撮影を「TAMPEN／空華　koo-ghe」のたむらまさきと「TAMPEN／shortfilm」の猪本雅三が担当している。

内容■2002年6月29日、沖縄のライヴハウス〝カラハーイ〟で行われた〝りんけんバンド〟のヴォーカリスト・上原知子の〝バースデーライブ〟の模様と、録音スタジオでのレコーディング風景、84年ソロデビューのことや沖縄民謡の難しさ、音楽に対する想いなどを語ったインタビューを収める。収録曲は、「浦風」「石川 金武 辺野古」「ふなやれ」「小夏」「里や糸の上」「織りなす日々」「仲島節～かいされー」「いちゃいぶさ」「乾杯さびら」「ありがとう」「嘉手久」「唐船どーい」「肝にかかてぃ」「黄金三星」の全14曲。

地獄甲子園
BATTLEFIELD STADIUM

メディア・スーツ■クロックワークス作品（制作＊スープレックス／制作協力＊ナバームフィルムズ）／クロックワークス■メディア・スーツ配給／03・7・19／C（F）・V・DTS／87分／渋谷シネクイント／L

スタッフ■監督■山口雄大　製作■千葉善紀／藤本款　企画プロデュース■佐谷秀美　プロデューサー■北村龍平　アソシエートプロデューサー■鳥澤晋　ラインプロデューサー■志村知子　テクニカルプロデューサー■篠田学　制作担当■咲山翔　原作■漫☆画太郎　脚色■桐山勲／山口雄大　脚本協力■漫☆画太郎／石井輝男／北村龍平／高津隆一　撮影監督■古谷巧　編集■掛須秀一　録音■長嶋慎介　整音■林毅史　美術■小林正巳　衣裳■会田晶子　音楽■矢野大介　スクリプター■桐山勲　CGI■瀧澤栄／田中宣彦／吉野和則　音響効果■NTT MEDIALAB　特殊メイク■仲谷進　アクション監督■下村勇二　武術指導■岩本淳也　ギャグ監修■増本庄一郎　助監督■遠藤健一　主題歌■小宮山雄飛【KICK IT】

キャスト■野球十兵衛…坂口拓　メガネ…伊藤淳史　外道監督…谷門進士　ほういち…榊英雄　朝倉南太郎…永田耕一　教頭／メカ教頭…飯塚俊太郎　番長1…小西博之　番長2…西尾秀隆　松井ゴリラ／メカゴリラ…土平ドンペイ　番長3…生田目研人　ババア…三城晃子　若い頃のババア…魚谷佳苗　十兵衛の親父…蛭子能収　生徒会長…大場一史　吉田依利　中村泰造…勝俣喜章　主審…増本庄一郎　片山武宏　金澤大朗　鈴木暁　ハカケ…松本実　石橋美佳　歌原仁美　東きよ美　福嶌徹　堀内俊成　吉田浩之　田中誠之　川村悟史　松浦大志　中村太紀　増本輝　大石寛大　山本美由紀　相原美穂　石井壮太郎　渡辺望　石谷裕江　稲富早映　関本由香　神代應　後藤克秀　末広哲　村上征寛　楠本卓司　パンチ…ひめ　見目竜一　梅津直人　ナレーション（パンチ）…下條アトム

解説■甲子園を目指す高校球児たちの死闘を描いたコメディ。監督は「最も危険な刑事まつり／続・名探偵刑事」の山口雄大。漫☆画太郎の同名コミックを基に、「ALIVE」の桐山勲と山口監督自身が共同で脚色。撮影監督に「ALIVE」の古谷巧があたっている。主演は「ALIVE」の坂口拓。尚、本作は「地獄甲子園外伝　ラーメンバカ一代」と同時公開された。第14回ゆうばり国際ファンタスティック映画祭2003ヤング・ファンタスティック・グランプリ部門グランプリ受賞作品。

略筋■甲子園を目指す星道高校野球部。その予選第一回戦の相手に決まったのは、勝つ為なら殺人までも犯す悪名高き外道高校だった。その報せを聞いた監督を兼任する星道高校校長は、一度は予選出場辞退を考えるも、転校生・野球十兵衛の喧嘩野球に惚れ込み出場を決定する。だが当日、十兵衛が刑務所に入れられている間に、星道ナインは惨殺され、遅れて到着した十兵衛もまた彼らの罠に堕ち爆死してしまうのだった。しかし、あの世から生き返った十兵衛は外道高校にリベンジすべく、最新医学で蘇った仲間たちを引き連れ外道高校に殴り込みをかけると、死闘の末に外道監督を改心させることに成功し、見事、勝利を収めるのであった。

地獄甲子園外伝
ラーメンバカ一代

メディア・スーツ■クロックワークス作品（制作＊スープレックス）／クロックワークス■メディア・スーツ配給／03・7・19／C（VTR・）・V・M／8分／渋谷シネクイント／L

スタッフ■監督／編集■山口雄大　製作■千葉善紀／藤本款　プロデューサー■佐谷秀美　ラインプロデューサー■鳥澤晋　テクニカルプロデューサー■篠田学　制作協力■陶久英治　制作担当■山本興　原作■漫☆画太郎　脚色■山口雄大／桐山勲／増本庄一郎　撮影■古谷巧　照明■野村泰寛　録音■久保田敏之／佐藤昌幸　整音■林毅史　美術■生田しねまん／安原伸　スタイリスト■岸真理子　音楽■矢野大介　ビジュアルエフェクト■進威志　音響効果■NTT メディアラボ　特殊メイク■仲谷進　ミニチュア制作■上田かをる　ラーメン■酒徳ごうわく

キャスト■めん太郎…生田目研人　店主…菅田俊　大人めん太郎…佐藤佐吉　ババー…勝俣喜章　ナーレーション…木村匡也

解説■病床の祖母の為、ラーメン修業に出た男の姿を描いたコメディ。監督は「地獄甲子園」の山口雄大。漫☆画太郎の原作コミックを基に、山口監督と「地獄甲子園」の桐山勲、増本庄一郎が共同で脚色。撮影を「地獄甲子園」の古谷巧が担当している。主演は、「地獄甲子園」の生田目研人と「ALIVE」の菅田俊。尚、本作は「地獄甲子園」と同時公開された。

略筋■名も無い無人島にババーとふたりで暮らすめん太郎

は、死ぬ前にラーメンが喰いたいと言うババーの願いを叶える為、新宿のラーメン屋で厳しい修業を積む。月日は流れ、遂にめん太郎のラーメン第1号が完成した。しかし、その頃既にババーはミイラになっていた。

白百合クラブ　東京へ行く

白百合プロジェクト作品／パナリ本舗＝オフィス・シロウズ配給／03・7・19／C（VTR・DLP）・V・S／90分／渋谷シネ・ラ・セット

スタッフ■監督＝中江裕司　製作＝新井真理子／中江裕司／具志堅剛／宮島竜治／真喜屋力／中村美美子／佐藤剛　プロデューサー＝新井真理子／中村美美子　撮影＝具志堅剛　撮影応援＝高間賢治／新家子美穂／恩田浩　編集＝宮島竜治　編集応援＝菊井貴繁　技術＝真喜屋力　（東京公演スタッフ）プロデューサー＝佐藤剛　制作＝金井治樹／川崎由美子　録音＝藤井暁

キャスト■白百合クラブ（西玉得浩／多宇郊／宮良祐吉／平地展裕／天久朝敏／田盛正貴／松本義子／金嶺節／榎本貞子／豊里ヤス／屋良ムラ／玉城正雄／平良真三郎／川平長正／石垣用行／大島彦光／島仲秀子／与那覇幸子／内原みね／多宇ヨネ／島仲しげ子／前盛文子／城間千代／久高一雄／奥間恵子／大島修／内原勇／米盛英松／新良幸永／東川平真永／新本全穂／川平美代子／野底ヒデ／東平地けい子／宮良敏／入松田秀／仲宗根文吉／宮良雪子／東崎原初枝／崎田サエ／天久美智／堀切トキ／前盛よし子／仲島正／川平勉／内原栄健／東川平真吉／多宇三守／内原敏夫／多宇史子／新本ヤス子／沖山常／嘉弥真政／新里きよ／島仲文／東川平成功／大島勇／豊里友徳／米盛ミチ子／仲宗根久美子）　THE BOOM（宮沢和史／小林孝至／山川浩正／栃木孝夫）　今福健司　平安隆　星野悠子　大竹研　中江裕司

解説■終戦直後に結成され、今なお活動を続けている石垣島のバンド"白百合クラブ"の東京公演の模様を中心に、彼らの活動を収めた長篇ドキュメンタリー。監督は「ホテル・ハイビスカス」の中江裕司。撮影を具志堅剛が担当している。

内容■昭和21年の結成以来、同じ唄、同じ踊り、同じメンバーで56年間活動を続けてきた石垣島出身の日本最高齢楽団"白百合クラブ"の念願の東京公演が決定した。ステージに備え練習を重ねるメンバー。だが、共演する"THE BOOM"のヒット・ナンバー「島唄」をマスターするのに四苦八苦する者も……。そして、公演当日。白百合クラブは、「満州娘」や「ロンドンの街角で」「さよなら港」「桑港のチャイナタウン」「港横浜花売娘」「ラバウル小唄」などのナンバーを披露。会場である鴬谷"東京キネマ倶楽部"に集まった満員の客をわかせ、ステージは大成功のうちに幕を閉じた。その後、石垣島に帰ったメンバーは、9年前に他界したクラブの中心人物・多宇郊さんの墓に東京公演の報告を済ますと、多宇さんの家で一晩中、唄遊びで盛り上がるのだった。

CHAIN

アートポート＝エニライツ作品／アートポート配給／03・7・19／C（DV・VP）・V・S／78分／シネマ下北沢／L

スタッフ■監督＝清水厚　製作＝松下順一　企画＝加藤東司　プロデューサー＝米山紳／太田裕輝　アソシエイトプロデューサー＝福島重幸　製作担当＝仲野俊隆　脚本＝大久保智巳　撮影＝下元哲　録音＝岩丸恒　美術＝佐々木敬　スタイリスト＝小野今朝義　選曲／効果＝木村俊之　スチール＝田部井満　CG＝小久保裕司　助監督＝中久保修

キャスト■恩田由里…小向美奈子　神田昌平…大浦龍宇一　恩田亮…海鋒拓也　湯島隆…曽根英樹　野田玲子…伊藤かな　葉山操…高井菜緒　吉岡秀幸…宮崎将　芝広太郎…鈴木拓也　女…椿朝美／中元恵美子　結城悟…川上洋一郎　鬼沢卓二…星野隆広　北村ゆみか…宮崎恵美　小宮隆児　小林裕子　和田聡　奥田順一　湯浅奈央　池田美香　林下友昭　緒方琢也　鈴木勝比古　斎藤慎太　大須賀早苗　青木仁美　村山麻美　田中麻衣子　岩倉宗一郎　柿田寛

解説■携帯電話を通して若者たちに広がる呪いの恐怖を描いたホラー。監督は「武勇伝 BUYUDEN」の清水厚。脚本は大久保智巳。撮影を「人妻 渇いた舌先」の下元哲が担当している。主演は、小向美奈子と「水の女」の大浦龍宇一。

略筋■かつてホテルだった廃屋に忍び込んだ少年たちが変死を遂げた。以来、伝染病のように蔓延、頻発する若者たちの突然死。事件に注目したスランプ中のミステリー作家の神田は、独自の調査を開始する。そして、その聞き込みを受けた高校生・由里の周りでは、100％当たると言う占いメールが流行していた。実は、それこそが変死事件の原因だったのだ。携帯電話から携帯電話へメールに載って転送され増殖する、廃屋の闇に潜む邪悪な呪い。変死を遂げた若

者たちは、みんなそのメールを受け取っていた。ある日、由里の小学生の弟・亮の携帯に占いメールが転送されて来た。興味本位に開いてしまった弟の命を守る為、携帯を取り上げる由里。果たして、彼女もまた変死する。

踊る大捜査線 THE MOVIE 2
BAYSIDE SHAKEDOWN 2

フジテレビジョン■アイ・エヌ・ビー作品（制作プロダクション＊ROBOT）／東宝配給／03・12・20／C（HD24p・FR・F）・CS・DDSRD―EX・DTS―ES・SDDS／119分／日比谷みゆき座

スタッフ■（インターナショナル版）Sound Designer■TOM MYERS Re-recording Mixers■TOM MYERS／TONY SERENO Sound Effects Editor■J.R. GRUBBS（以下、2003年11月下旬号（№1393）に同じ。但し、表記の異なるスタッフのみ掲載した）Executive Producer■KOICHI MURAKAMI Co Executive Producers■MASAKI MIYAUCHI／YOSHIO NAGATA Producers■CHIHIRO KAMEYAMA／HIROTSUGU USUI／TAKASHI ISHIHARA／ICHIRO TAKAI Co Producers■TORU HORIBE／CHIKAHIRO ANDO First Assistant Director■KUNIHIRO NAGASE

キャスト■Shunsaku Aoshima…YUJI ODA Sumire Onda…ERI FUKATSU Shinji Muroi…TOSHIRO YANAGIBA Heihachiro Waku…CHOSUKE IKARIYA Yuriko Kashiwagi…MIKI MIZUNO Masayoshi Mashita…YUSUKE SANTAMARIA Hitomi Okita…MIKI MAYA Shigeru Koike…KOHTAROH KOIZUMI Ritsuko Edo…MANAMI KONISHI Kiichi Masuda…TAKASHI OKAMURA Kanda…SOICHIRO KITAMURA Kengo Hakamada…TAKEHIKO ONO Akiyama…SATORU SAITOH Toshiaki Yoshida…SHIGERU KOYAMA Kentaro Shinjo…TOSHIO KAKEI Masakazu Ichikura…SHIGEMITSU OGI Kusakabe…KOH TAKASUGI Jiro Uozumi…KENTA SATOI Osamu Nakanishi…SUSUMU KOBAYASHI Kaoru Ogata…MASASHI KOHMOTO Koji Morishita…TOSHIYA TOHYAMA Keiko Yamashita…YUKA HOSHINO Yoko Watanabe…NAGINE HOSHIKAWA Taeko Yoshikawa…TAEKO KODAMA Arumi…SHINYA OWADA Sushi Chef…NAOMASA MUSAKA Snatcher…MASAOMI HIRAGA Rikako's Boss…CHISAKO TAKASHIMA Noboru Kunimi…MAGY Kenzo Takahashi…MASATO IRIE Tatsuya Mishima…YOSHIYUKI MORISHITA Yoshio Segawa…HIROKI MIYAKE Takashi Nakajima…YASUSHI KIMURA Sakakibara…TAKEO NAKAHARA Sakamura…TAKESHI MASU Director of Training…KENJI KASAI Senba…MINORU MAEHARA Kawamura…KOHEI MASHIBA Akabane…MASAYUKI SATO Kuroda…TOSHIO YAMAGUCHI Midorikawa…KOICHI AKAIKE Female Police Officer…YOKO KIMURA／SOU HIROSAWA／WAKANA SENZAKI／RIN TACHIBANA／MAKO TSUNOMURA／KAYOKO SHIBATA／NOZOMI KAWATA MPD Official…SHIRO NAMIKI Deputy Director of Training…YUKIKAZU KANOU Super Intendant General…TATSUYOSHI EHARA Inspector…HIROSHI OKOUCHI M.C.…ISAO NONAKA MPD Detective…TORU NAKANE／RYU TANAKA／YASUTO KOSUDA／KURANOSUKE SASAKI／KOJI ITO／HIROSHI ATSUMI／HIDEKAZU MASHIMA／TAMAMI MATSUMOTO Uniformed Police Officer…TARO OHMIYA／KAZUYOSHI HAYASHI Old Detective…IKKOU SUZUKI Kishimoto…AKIKO HATAKEYAMA Pickpocket Family:Father…SHUICHI HARADA Pickpocket Family:Mother…HIROKO YAMASHITA Pickpocket Family:Son…RYUNOSUKE KAMIKI Pickpocket Family:Rikako…MION MUKAICHI MLIT Official…NARUSHI IKEDA Victim…ICHIRO MIKAMI Cameraman…YUICHI YASODA SAT…TAKASHI SHIRAKI BPH Official…KAZUKI IWATA Criminal…TADAHIRO AOKI Body…OSAMU SUKA High School Girl…AYAKA KOMATSU／AYAKO SAWAMATSU／SHIORI KANZAKI Voice for "Wangan Taro"…CHIKA SAKAMOTO Narration…BANJO GINGA

解説■興行収入170億円、観客動員1245万人を越え（2003年11月25日現在）、数々の記録を塗り替えた「踊る大捜査線 THE MOVIE 2

レインボーブリッジを封鎖せよ！」の海外配給用インターナショナル版。未公開シーン及び別アングル・カット、別ヴァージョンを追加、再編集しオリジナル版より約19分短縮、更にアメリカの〝ルーカス・デジタル社スカイウォーカー・サウンド〟によるサウンド・リミックスが施されている。フジテレビ開局45周年記念作品。
略筋■2003年11月下旬号（№1393）を参照。

最後の恋、初めての恋
最初的愛　最后的愛

「最後の恋、初めての恋」Film Partners（松竹＝オフィス・トゥー・ワン＝テレビ東京＝電通＝衛星劇場＝ムービーアイ・エンタテインメント＝上海电影集団公司＝上海上影数碼傳播股份有限公司）作品（企画＊ムービーアイ・エンタテインメント／プロデュース＊ムービーアイ・エンタテインメント／共同制作＊上海电影集団公司＝上海上影数碼傳播股份有限公司／制作プロダクション＊WILCO／制作協力＊オフィスまとば）／松竹配給／03・12・20／C（HDカム・HDキネコ・EK）・V・DTS／108分／シネスイッチ銀座

スタッフ■監督＝当摩寿史　製作総指揮＝迫本淳一／海老名俊則／木綿克己／遠谷信幸／石川富康／高木良直／朱永徳　監制＝卓伍／楊誠　「最後の恋、初めての恋」パートナーズ＝野村芳樹／豊田俊穂／松迫由香子／柳原雅美／福山亮一／内藤和也／秋元一孝／濱口靖／榎糀恵介　プロデューサー＝牛山拓二　協力プロデューサー＝的場朱美　ラインプロデューサー＝石田基紀　制片人＝仲崢　アシスタントプロデューサー＝林仰謙／平耕一　制作担当＝安田邦弘　脚本＝当摩寿史／長津晴子／山村裕二　撮影＝清水尚　照明＝中村裕樹　編集＝録音＝山方浩　美術＝吉田悦子　美術指導＝胡宗　装飾＝龍田哲児　衣裳＝蒋夏香　スタイリスト＝平尾俊　音楽＝栗尾直樹／稲葉政裕　音楽プロデューサー＝木下智明　選曲＝元倉宏　スクリプター＝廣瀬なおこ　スチール＝津野貴生　ビデオエンジニア＝さとうまなぶ　撮影Bキャメラ＝三栗屋博　音響効果＝渡部健一　助監督＝猪腰弘之／湯奔晨　主題歌＝小田和正「僕ら」

キャスト■早瀬高志…渡部篤郎　ファン・ミン…徐静蕾　ファン・リン…董潔　恩田聡…石橋凌　トート…陳柏霖　ファン・シャンフー…牛犇　李社長…呉汝俊　澤井和彦…筧利夫　森口直之…津田寛治　滝本司…松岡俊介　理恵…目黒真希　西野修…清水邦彦　陳…楊世奇

解説■上海を舞台に、日本人青年と中国人姉妹の切ない愛の行方を描いたラヴ・ストーリー。監督は「うつつ UTUTU」の当摩寿史。脚本は、当摩監督と「オールナイトロング　イニシャル0」の長津晴子、山村裕二の共同。撮影を清水尚が担当している。主演は、「大河の一滴」の渡部篤郎と「スパイシー・ラブスープ」の徐静蕾、「至福のとき」の董潔。第16回東京国際映画祭特別招待部門上映作品。

略筋■恋人と親友に裏切られたショックから立ち直れぬまま、〝イムラ自動車〟上海支社に転勤して来た早瀬高志は、そこでミンとリンと言う中国人姉妹と知り合う。高志に好意を寄せる、明るく積極的な大学生・リン。一方、高志は物静かで聡明な姉・ミンに心惹かれるようになっていた。しかし、ミンにはリンにも知らせていないある秘密があった。実は、彼女は不治の病に冒され、もうずっと恋することを諦めていたのだ。高志に想いを寄せながらも、病気と妹への遠慮からそれを断ち切ろうとするミン。だが、彼女は彼女の病気のことを唯一知る父親に後押しされ、高志とのデートに出かける。ところが、あろうことかその現場をリンに見られてしまったのだ。ふたりの関係を目の当たりにし心を痛めたリンは、しかし姉の為に身を引くことを決意する。その後、高志とミンは結婚した。ふたりの生活は短いものだったが、ミンを亡くしても高志は以前のように人生に後ろ向きではなくなっていた。

外国映画紹介

データ表記■製作国＊製作会社／配給会社／製作年／封切日／C＝カラー、BW＝モノクロ、PC＝パートカラー／上映時間／S＝スタンダード、V＝ヴィスタ、CS＝シネマスコープ／D＝ドルビー・ステレオ、U＝ウルトラ・ステレオ、DSD＝ドルビー・ステレオ・ディジタル、DTS＝デジタル・シアター・システム、SDDS＝ソニー・ダイナミック・デジタル・サウンド、SR＝スペクトラル・レコーディング／EP＝エグゼクティヴ・プロデューサー

ロスト・イン・トランスレーション

Lost in Translation（翻訳されて失われるもの）

米＊アメリカン・ゾエトロープ＝エレメンタル・フィルムズ作品（フォーカス・フィーチャーズ提供）／東北新社配給（東北新社＝アーティストフィルム＝フジテレビジョン提供）／03＝04・4・17／C・V・SRD／102分 字幕＝松浦美奈

スタッフ■監督＝ソフィア・コッポラ 製作＝ロス・カッツ／ソフィア・コッポラ EP＝フランシス・フォード・コッポラ／フレッド・ルース 脚本＝ソフィア・コッポラ 撮影＝ランス・アコード 音楽監修＝ブライアン・レイツェル 美術＝アン・ロス／K・K・バーレット 編集＝サラ・フラック 衣裳＝ナンシー・スタイナー

キャスト■ボブ・ハリス…ビル・マーレイ／シャーロット…スカーレット・ジョハンソン／ジョン…ジョヴァンニ・リビシ／ケリー…アンナ・ファリス

解説■東京で出会ったハリウッド俳優の中年男と若いアメリカ人女性の淡い愛の交流を描いたドラマ。監督・製作・脚本は「ヴァージン・スーサイズ」のソフィア・コッポラ。製作総指揮はソフィアの父であるフランシス・フォード・コッポラほか。撮影は「アダプテーション」のランス・アコード。音楽監修は「ヴァージン・スーサイズ」「CQ」のブライアン・レイツェル。美術は「ナインスゲート」のアン・ロス、「アダプテーション」のK・K・バーレット。編集は「フル・フロンタル」のサラ・フラック。衣裳は「ヴァージン・スーサイズ」「ヒューマンネイチュア」のナンシー・スタイナー。出演は「ザ・ロイヤル・テネンバウムズ」のビル・マーレイ、「真珠の耳飾りの少女」のスカーレット・ジョハンソン、「閉ざされた森」のジョヴァンニ・リビシ、「最'新'絶叫計画」のアンナ・ファリスほか。林文浩、藤井隆、ダイアモンド・ユカイほか日本人も多数出演。2004年アカデミー賞オリジナル脚本賞、同年ゴールデン・グローブ賞脚本賞、作品賞（ミュージカル／コメディ部門）、主演男優賞（ミュージカル／コメディ部門）、2003年ヴェネチア国際映画祭コントロコレンテ部門主演女優賞、リナ・マンジャカプレ賞ほか多数受賞。

略筋■ハリウッド俳優のボブ・ハリス（ビル・マーレイ）は、ウィスキーのCM撮影のために来日する。慣れない国での不安感を感じるボブは、東京のホテルに到着した翌朝、エレベーターで若いアメリカ人女性、シャーロット（スカーレット・ジョハンソン）と乗り合わせた。彼女はフォトグラファーの夫ジョン（ジョヴァンニ・リビシ）の仕事に同行してきた若妻で、やはり孤独と不安に苛まれていた。やがて2人は、ホテルのバー・ラウンジで初めて言葉を交わし、親しくなる。シャーロットの友人のパーティーに誘われ、夜の街へと出掛けたボブは、カタコトの英語を話す若者たちとの会話を楽しみ、カラオケでマイクを握るシャーロットに魅入る。2人は東京に来て初めて開放的な気分を感じた。ボブはCM撮影が終了したが、急遽舞い込んだテレビ出演の話を承諾し、滞在を延ばすことになった。その間、シャーロットとランチを共にし、ホテルの部屋で古い映画を観て時を過ごし、絆を深めていった。だがボブの帰国の時が訪れる。その日の朝、2人は渋谷の街中で初めてキスを交わし、そのまま別れるのだった。

ソニー

Sonny（ソニー（主人公の名））

米＊サターン・フィルムズ作品（ゴールド・サークル・フィルムズ＝サミュエル・ゴールドウィン・フィルムズ提供）／ギャガ・コミュニケーションズ配給／02＝04・4・17／C・V・ドルビーSR／ドルビーデジタル／110分 字幕＝太田直子

スタッフ■監督＝ニコラス・ケイジ 製作＝ニコラス・ケイジ／ノーム・ゴライトリー 脚本＝ジョン・カーレン 撮影＝バリー・マーコウィッツ 音楽＝クリント・マンセル

キャスト■ソニー・フィリップス…ジェームズ・フランコ／キャロル…ミーナ・スヴァーリ／ジュエル・フィリップス…ブレンダ・ブレッシン／ヘンリー・ウェイド…ハリー・ディーン・スタントン／アルバート…シーモア・カッセル／アシッド・イエロー…ニコラス・ケイジ

解説■男娼として育った青年

の苦悩と葛藤を描く青春映画。監督・製作は「アダプテーション」などの俳優として知られ、これが監督デビュー作となるニコラス・ケイジ（脇役で出演も）。撮影は「すべての美しい馬」のバリー・マーコウィッツ。音楽は「ノックアラウンド・ガイズ」のクリント・マンセル。出演は「スパイダーマン」のジェームズ・フランコ、「ヤング・ブラッド」のミーナ・スヴァーリ、「リトル・ヴォイス」のブレンダ・ブレッシン、「ブレッジ」のハリー・ディーン・スタントン、「ザ・ロイヤル・テネンバウムズ」のシーモア・カッセルほか。

略筋■1981年。ニューオリンズの歓楽街に、軍を除隊したソニー（ジェームズ・フランコ）が帰ってきた。娼館を営む母親ジュエル（ブレンダ・ブレッシン）のもと、少年時代から男娼として完璧な教育を受けてきたソニーは、その類い稀な容貌と才能で街の伝説になっていた。以前の生活を望んでいたジュエルは早速彼に仕事復帰を促すが、ソニーはこの世界から足を洗い、普通の人生を手に入れようと決意していた。新しい生活をスタートさせるため、軍隊の友人を頼って家を出るソニー。しかしそこで堅気の人間たちの乱れた生活を目にした彼は幻滅し、また元の生活へと舞い戻ってしまう。そんな中でソニーは、ジュエルのもとで働く新入り娼婦キャロル（ミーナ・スヴァーリ）と心を通わせる。だが、現状に甘んじているソニーに対し、キャロルは荒んだ境遇からの脱出を願う気持ちが強くなる。キャロルは一緒に旅立とうと誘い掛けるが、ソニーがどうしても踏み切れないため、プロポーズされた冴えない中年の客との結婚を選択する。孤独に打ち拉がれるソニーに追い打ちをかけるように、年上の友人ヘンリー（ハリー・ディーン・スタントン）が事故死。しかもジュエルから、彼がソニーの父親であるという驚愕の事実を知らされた。そして、いよいよキャロルが街を出ていく時が来る。ソニーは彼女が乗った車を追い掛けようかどうか葛藤したまま、家のドアの前から動けないのだった。

キル・ビル Vol.2

Kill Bill Vol.2（ビルを殺せ　第2章）

米＊バンド・アパート作品（ミラマックス・フィルムズ提供）／ギャガ＝ヒューマックス配給（ギャガ・コミュニケーションズ＝ユニヴァーサル・ピクチャーズ・ジャパン提供）／04＝04・4・24／C（一部BW）・CS・SRD／SDDS／136分　字幕＝石田泰子

スタッフ■監督＝クエンティン・タランティーノ　製作＝ローレンス・ベンダー　EP＝ボブ・ワインスタイン／ハーヴェイ・ワインスタイン／エリカ・スタインバーグ／E・ベネット・ウォルシュ　脚本＝クエンティン・タランティーノ　撮影＝ロバート・リチャードソン　音楽＝The RZA／ロバート・ロドリゲス　美術＝デイヴィッド・ワスコ／ツァオ・ジュウピン　編集＝サリー・メンケ　衣裳＝小川久美子／キャサリン・マリー・トーマス　武術指導＝ユエン・ウーピン

キャスト■ザ・ブライド（ブラック・マンバ）…ユマ・サーマン／ビル…デイヴィッド・キャラダイン／バド（サイドワインダー）…マイケル・マドセン／エル・ドライヴァー（カリフォルニア・マウンテン・スネーク）…ダリル・ハンナ／パイ・メイ…ゴードン・リュー／エステバン…マイケル・パークス／オルガン奏者…サミュエル・L・ジャクソン

解説■復讐に燃える女性殺し屋の旅を描いたドラマの第2部（完結編）。スタッフとキャストは、基本的に第1部を受け継いでいる。監督・脚本は「ジャッキー・ブラウン」のクエンティン・タランティーノ。撮影は「サハラに舞う羽根」のロバート・リチャードソン。音楽は「ゴースト・ドッグ」のThe RZAと、「レジェンド・オブ・メキシコ／デスペラード」などの監督として知られるロバート・ロドリゲス。美術は「ザ・ロイヤル・テネンバウムズ」のデイヴィッド・ワスコと、「至福のとき」のツァオ・ジュウピン。編集は「すべての美しい馬」のサリー・メンケ。衣裳は「コンセント」の小川久美子ほか。武術指導は「マトリックス」シリーズのユエン・ウーピン。出演は「ペイチェック／消された記憶」のユマ・サーマン、「バード・オン・ワイヤー」のデイヴィッド・キャラダイン、「ウォーク・トゥ・リメンバー」のダリル・ハンナ、「007／ダイ・アナザー・デイ」のマイケル・マドセン、「フル・ブラッド」のゴードン・リュー、「フロム・ダスク・ティル・ドーン」のマイケル・パークス、「S.W.A.T.」のサミュエル・L・ジャクソンほか。

略筋■かつて闇のエージェント〝毒ヘビ暗殺団〟で最強と言われた殺し屋ザ・ブライド（ユマ・サーマン）は、結婚式の最中に、花嫁姿のまま瀕死の重傷を負わされ、身篭もっていた娘をも殺された。彼女は、自分を襲った組織のボスであるビル（デイヴィッド・キャラダイン）とその部下た

ちへの復讐の旅に出ていた。残る標的は3人。ビルの弟バド（マイケル・マドセン）はストリップ・クラブの用心棒をしながら、薄汚れたトレーラーで酒浸りの日々を送っている。片目にアイ・パッチをした女、エル・ドライバー（ダリル・ハンナ）は、ザ・ブライドの代わりにビルの愛人の座に納まっていた。ザ・ブライドはテキサスの荒野へと降り立ち、まずはバドを殺しにいく。だが逆に倒されてしまい、彼女は土の中に埋められる。しかし中国の僧侶パイ・メイ（ゴードン・リュー）のもとでの武術の修行の日々を思い出したザ・ブライドは、拳で棺桶の蓋を突き破り、地上に出ることに成功。一方バドは、エル・ドライバーの裏切りにより毒ヘビに噛まれて死亡。そこにザ・ブライドが現われ、エル・ドライバーの残っている片目をえぐり取る。そしてビルとの対決。ザ・ブライドとビルの間に産まれた娘は生きていた。ビルの愛を知ったザ・ブライドだが、それでもビルを殺害する彼女。翌日から、娘と共に新しい生活を始めるのだった。

スクール・オブ・ロック

The School of Rock（ロック学校）

米＊スコット・ルーディン・プロダクション作品（パラマウント映画提供）／UIP配給／03■04・4・29／C・V・DTS／SRD／SR／110分　字幕■太田直子

スタッフ■監督■リチャード・リンクレイター　製作■スコット・ルーディン　EP■スティーヴ・ニコライデス／スコット・アヴァーサノ　脚本■マイク・ホワイト　撮影■ロジェ・ストファーズ　音楽■クレイグ・ウェドレン　音楽監修■ランドール・ポスター　美術■ジェレミー・コンウェイ　編集■サンドラ・エイデアー　衣裳■カレン・パッチ

キャスト■デューイ・フィン…ジャック・ブラック／マリンズ…ジョーン・キューザック／ネッド…マイク・ホワイト／パティ…サラ・シルヴァーマン／ザック…ジョーイ・ゲイドス・ジュニア／サマー…ミランダ・コスグローヴ／フレディ…ケヴィン・クラーク／ケイティ…レベッカ・ブラウン／ローレンス…ロバート・ツァイ／トミカ…マリヤム・ハッサン

解説■売れないロッカーが代用教員になりすまし、小学生にバンドを組ませてしまう学園コメディ。監督は「テープ」のリチャード・リンクレイター。脚本・出演は「グッド・ガール」のマイク・ホワイト。撮影は「イナフ」のロジェ・ストファーズ。音楽は「しあわせの法則」のクレイグ・ウエドレン。音楽監修はランドール・ポスターに加え、音楽コンサルタントを人気ミュージシャンのジム・オルークが担当している。衣裳は「10日間で男を上手にフル方法」のカレン・パッチ。出演は「ハイ・フィデリティ」のジャック・ブラック、「あなたのために」のジョーン・キューザック、「エボリューション」のサラ・シルヴァーマンほか。

略筋■デューイ（ジャック・ブラック）は、ロック・バンドのメンバーとしてワイルドに生きている男。だが、代用教員の親友ネッド（マイク・ホワイト）のアパートに居候している彼は、多額の家賃滞納によりネッドの恋人パティ（サラ・シルヴァーマン）を激怒させ、アパートから追い出すと宣告される。バンド・バトルで優勝すれば賞金で家賃を払えると考えるが、破天荒な態度が問題となりバンドをクビになってしまった。途方に暮れた彼は、名門小学校からネッドにかかってきた仕事の依頼の電話を受け取る。デューイはネッドになりすまして、この学校の代用教員になることにする。まんまと厳しい女校長のマリンズ（ジョーン・キューザック）を騙し、小学校5年生の担任に。そして音楽室から流れてくる生徒たちのクラシック演奏を聴き、生徒たちにロックをやらせて一緒にバンド・バトルへ出場するという計画を思いつく。リード・ギターに内気な少年ザック（ジョーイ・ゲイドス・ジュニア）、ドラムスにフレディ（ケヴィン・クラーク）、キーボードに寡黙なローレンス（ロバート・ツァイ）、ベースにケイティ（レベッカ・ブラウン）、コーラスにソウルフルな歌声を持つトミカ（マリアム・ハッサン）を抜擢し、クラスの仕切り屋の女子生徒サマー（ミランダ・コスグローヴ）をマネージャーにするなど、生徒全員に役割を与えた。生徒たちはロックの世界を通じて自由と個性を知っていく。そしてマリンズ校長をバーに誘ったデューイは、彼女がスティーヴィー・ニックスのファンであることを利用して、生徒たちの校外引率の許可をもらった。いよいよ大会が近づいてきたが、そんな時、パティの通報によってデューイは学校を追放に。だが生徒たちはデューイを迎えに行き、バンド・バトルへ出場。優勝は逃したものの、その素晴らしい演奏に観衆は魅了され、デューイたちはアンコールの演奏をするのだった。

訃報

―映画・TV界―

尾上九朗衛門氏（おのえ・くろうえもん／本名＝寺島清晃／歌舞伎俳優）3月28日、肺炎のため死去。82歳。名優・尾上菊五郎を父にもつ。25年に初舞台を踏み、40年に九朗衛門を襲名。尾上菊五郎劇団などで歌舞伎俳優として活動するかたわら、「群盗南蛮船」50、「かくて自由の鐘は鳴る」「宮本武蔵」54などに出演。64年に脳溢血で倒れたが再起し、71年に米国に移り、ワシントン、ハーヴァード、コロンビア大学などで日本演劇を教え、歌舞伎の紹介や国際交流に尽力した。

うしおそうじ氏（本名＝鷺巣富雄／漫画家、アニメ・特撮プロデューサー）3月28日、急性心筋梗塞のため死去。82歳。戦前から円谷英二とアニメに携わり、戦後はTVドラマ「マグマ大使」などの特撮を手掛ける。「スペクトルマン」は「宇宙猿人ゴリ対スペクトルマン」71、「スペクトルマン 大激戦！七大怪獣」72として映画化された。長男は作曲家の鷺巣詩郎氏。

シルヴィア・フルースさん（米／女優）3月28日に死去。89歳。20年代から30年代にかけて、「歓呼の嵐」34などに出演していた。

中谷一郎氏（なかたに・いちろう／本名＝中村将昭／俳優）4月1日、咽頭がんのため死去。73歳。早大中退後の55年、俳優座座員となる。同期に仲代達也、佐藤慶、佐藤允ら。同年、「浮草日記」で映画デビューも果たす。59年岡本喜八監督の「独立愚連隊」で人情味溢れる軍曹役を好演し注目を集め、その後も「戦国野郎」63、「ああ爆弾」64、「日本のいちばん長い日」67、「ダイナマイトどんどん」78、「大誘拐」91など岡本作品のほとんどに出演。TVでは、初代黄門役の劇団の先輩・東野英治郎氏の誘いを受け、「水戸黄門」の風車の弥七役を69年の放映開始時から00年まで務めた。その他の作品に「用心棒」61、「切腹」62、「いのちぼうにふろう」71、「金環蝕」75、「次郎物語」87など。

キャリー・スノッドグレスさん（米／女優）4月1日に死去。57歳。69年の「イージー・ライダー」でデビュー。翌70年の「わが愛は消え去りて」でゴールデン・グローブ賞主演女優賞（コメディー・ミュージカル部門）と新人女優賞を同時に獲得したほか、オスカーにもノミネートされる。その後は女優業を一時休止し、ロックミュージシャンのニール・ヤングとの間に生まれた脳性麻痺の息子の介護を続けていたが、78年の「フューリー」でカムバックし、「ペイルライダー」85、「ブルースカイ」94、「ワイルドシングス」98、「ヴァンパイア・ハンター」01などに出演した。

難波敏氏（なんば・さとし／元日本ヘラルド映画副社長）4月5日、腹膜炎のため死去。77歳。

芦屋雁之助氏（あしや・がんのすけ／本名＝西部清／俳優）4月7日、うっ血性心不全のため死去。72歳。10年以上前から糖尿病を患い、入退院を繰り返していた。芸事好きの父とともに、幼少時から芝居で各地を巡業。18歳で上方漫才師の芦の屋雁玉・林田十郎に入門し、弟の芦屋小雁とコンビを組むも、突如コメディアンに転身。59年、花登筐が舞台で登場させた番頭と丁稚をTVに移した公開番組「番頭はんと丁稚どん」での憎まれ役の番頭役で人気を博す。同年「森の石松幽霊道中」で映画初出演。以後、「てなもんや三度笠」63、「悪名市場」63、「悪名一番」63、「悪名太鼓」64、「泥の河」81、「男はつらいよ 浪花の恋の寅次郎」81、「野獣刑事」82、「流転の海」90、「男はつらいよ 寅次郎紅の花」95などに出演。また、80年から放送されたTVドラマ「裸の大将」シリーズで演じた放浪の天才画家・山下清役が当たり役となり、81年は劇場版も公開された。舞台では「おもろい女」で共演の森光子とともに芸術祭大賞受賞。84年には歌手デビュー曲「娘よ」が大ヒット、日本レコード大賞特別賞などを受賞した。昨年4月の舞台を緊急入院で降板してから療養中だった。

イベント

第26回ぴあフィルムフェスティバル

黒沢清、矢口史靖、李相日、風間志織ほか多くの才能を輩出してきたぴあフィルムフェスティバル。今年もPFFアワード入選作品ほか、第14回スカラシップ作品の「運命じゃない人」、市川準監督最新作「トニー滝谷」ギリシャの巨匠アンゲロプロスの未公開作品など魅力的な作品構成で映画祭を開催する。

▼上映スケジュールは151頁参照

料金＝1400円（前）1200円）フリーパス（前）5500円

会場＝日比谷・シャンテ　シネ

問＝03・3265・1425

http://www.pia.co.jp/pff/

「カストリ大行進」「かりんとうブルース」「文句ある？」「マンモ」

「くみかえの日」「新しい予感」「五月ノ庭」「修学旅行班別自由行動」

「382（サンパツ）」「さよなら さようなら」「ある朝スウプは」「つぶろの殻」

PFFアワード2004入選作品

「青春プレイヤー／平凡プラネット」「飴工場」「新ここからの景」

第18回福岡アジア映画祭

福岡でしか見られない、福岡だから見られる世界各国の最新映画を一挙上映。「氷雨」「愛しのサガジ」など今人気の韓国映画や、山形ドキュメンタリー映画祭グランプリ作品の「鉄西区」、日本映画は山田孝之主演「ジェニファ／涙石の恋」ほか、イラク、アフガニスタン、台湾などから集まった多彩なラインアップ。

上映スケジュール＝7月2日（金）11時「S21　クメール・ルージュの虐殺者たち」13時「マーシー／ルクナムの命」〈短編〉「ラム酒瓶の冒険」「魔王」「イズミール即興詩」14時15分「ジェニファ／涙石の恋」16時「もうひとつのアフガニスタン」「在りし日のカーブル博物館」17時45分「笑うイラク魂／民の声を聞け」19時「戦場の夏休み／小学2年生の見たイラク魂」

7月3日（土）10時30分「鉄西区　第1部・工場」15時30分「鉄西区　第2部・街」19時「鉄西区　第3部・鉄路」

7月4日（日）10時30分「もうひとつのアフガニスタン」「在りし日のカーブル博物館」12時「S21　クメール・ルージュの虐殺者たち」14時「笑うイラク魂」15時15分「戦場の夏休み」16時45分「ジェニファ／涙石の恋」18時30分「マーシー／ルクナムの命」〈短編〉「ラム酒瓶の冒険」「魔王」「イズミール即興詩」19時40分「ボリウッド・リミックス」

会場＝大名・九州日仏学館5Fホール

上映スケジュール＝7月9日（金）14時30分「愛しのサガジ」16時30分「旅人とマジシャン」19時「氷雨」※ティーチ・イン

7月10日（土）10時30分「日系人野球、独立の日」「ビザと美徳」11時45分「旅人とマジシャン」14時「氷雨」16時30分「飛躍、海へ」※ティーチ・イン　19時「愛しのサガジ」※ティーチ・イン

7月11日（日）10時30分「日系人野球、独立の日」「ビザと美徳」11時45分「愛しのサガジ」※ティーチ・イン　14時「飛躍、海へ」※ティーチ・イン　16時30分「氷雨」※ティーチ・イン　19時〈グランプリ発表〉「アラブ・ナン・ラヒ／戦場の友へ」

会場＝天神岩田屋本店7F・NTT夢天神ホール

料金＝1800円（前）1400円／大学1500円／中・高・シニア1000円／（前）5作品券6000円／（前）10作品券1万円

問＝092・733・0949

http://www2.gol.com/users/faff/faff.html

日本映画の巨匠と女優たち

スクリーンで観る機会の少ない日本映画の名作を日本人だけでなく、日本在住の外国の方にも見る機会を。日本文化の紹介活動に力をいれる国際交流基金が黒澤明、溝口健二、清水宏、五所平之助、市川崑5人の巨匠による6作品を英語字幕付きで上映する。黒澤作品「白痴」と「醜聞」はニュープリント。

上映スケジュール＝6月25日（金）19時「醜聞」（黒澤明）

6月26日（土）13時「浪華悲歌」（溝口健二）14時30分〈ドナルド・リチー氏の講演（日本語通訳付き英語による講演）〉

16時「白痴」(黒澤明)
6月27日(日)13時「按摩と女」(清水宏)14時30分「黄色いからす」(五所平之助)16時40分「こころ」(市川崑)
料金＝600円（講演は入場無料）各回入替制
会場＝赤坂・国際交流基金フォーラム
問＝03・5562・3535

テオ・アンゲロプロス映画祭

アテネ・オリンピックを前にギリシアの巨匠、テオ・アンゲロプロスの長編作品全11本を一挙に上映。アンゲロプロス作品の日本語字幕を手がける作家の池澤夏樹が監督にインタビューを行うドキュメンタリー「THEO ON THEO」のワールドプレミア上映も。
上映スケジュール＝7月10日(土)12時「再現」14時30分「1936年の日々」17時「永遠と一日」20時「THEO ON THEO」
7月11日(日)11時「旅芸人の記録」16時30分「霧の中の風景」十トーク
7月12日(月)11時「ユリシーズの瞳」15時30分「蜂の旅人」19時「こうのとり、たちずさんで」
7月13日(火)11時「狩人」14時30分「シテール島への船出」18時「アレクサンダー大王」
7月14日(水)11時「こうのとり、たちずさんで」14時「永遠と一日」17時「旅芸人の記録」
7月15日(木)11時「アレクサンダー大王」15時「狩人」19時「シテール島への船出」
7月16日(金)11時「THEO ON THEO」13時「霧の中の風景」15時30分「蜂の旅人」18時「ユリシーズの瞳」
料金＝1400円（(前)1200円）／フリーパス1万円※各回入替制。初回上映30分前より当日分の整理券を配布
会場＝東京国際フォーラムD1ホール
問＝03・3265・1425

ユナイテッド・シネマとしまえん　オープン

7月9日(金)、遊園地「としまえん」に隣接して、ユニバーサル・スタジオとパラマウント・ピクチャーズによるシネマ・コンプレックス「ユナイテッド・シネマとしまえん」が開館。最新鋭の音響映写システムを設置した9スクリーン、上映前や後にゆっくりお茶が飲めるオープン・カフェなどリラックスして映画を楽しめる空間が用意されている。
http://www.uci-j.co.jp

募集

函館港イルミナシオン映画祭第8回シナリオ大賞作品募集

函館山山頂にて開催される函館イルミナシオン映画祭がシナリオを募集。今年は開催地の函館市から函館市長賞として賞金300万円が授与される。11月に東京都内で結果発表、12月の映画祭にて授賞式が行われる。審査員は荒俣宏氏、飯田譲治氏、河井信哉氏、川本三郎氏。
募集内容＝A部門　長編映画用シナリオ（200字詰め原稿用紙換算120～200枚まで）B部門　短編映画用シナリオ（200字詰め原稿用紙換算40枚まで）
応募方法＝応募原稿、応募原稿のコピー1部、400字程度のあらすじと人物評、応募用紙（全国のシナリオ関連教育機関、一部映画館、東京事務局からファクスで入手可能）を送ること。原稿は右肩をクリップ留めして通し番号をふること。
応募規定＝プロ、アマ問わず。オリジナルで未発表のもの。原作の脚本化、他コンクールへ応募した作品は不可。A、B部門それぞれ1作品まで応募可能。
応募締切＝7月30日(金)※当日消印有効
応募先＝〒162-0805　東京都新宿区矢来町111　日本出版社ビル5階　函館港イルミナシオン映画祭　東京事務局(オムロ内)「2004函館港イルミナシオン映画祭シナリオ大賞」係
問＝03・5206・6371

長岡インディーズムービーコンペティション作品募集

この秋開催予定の第9回長岡アジア映画祭がインディーズムービーコンペティションに参加する作品を募集。審査委員会が作品を選定し、グランプリ・入賞作品を映画祭で上映する。
応募規定＝平成15年以降に制作された40分以内の映像作品。形式はフィルムかビデオに限り、審査はビデオで行うためフィルム作品はビデオに変換して応募すること。他者の著作物を使用する場合は許可を得たうえで応募すること。審査用ビデオは返却不可。
応募方法＝応募用紙に必要事項を記入して作品とともに提出。
応募締切＝7月16日(金)当日消印有効
応募先＝〒940-0065　新潟県長岡市坂之上2-1-1　長岡商工会議所　第9回長岡アジア映画祭
問＝0258・33・1231
0258・32・4500
http://www.mynet.ne.jp/~asia

東京芸術大学映像・舞台芸術実験授業受講生募集

東京芸術大学が、映像・舞台芸術に関する実験授業として①日本の古典映画②映画の、現在③現代テレビ論④歌舞伎⑤西洋

「古典」演劇研究⑥映画・創造とビジネスを10月より開講。受講生を募集する。
応募資格＝①大学院、大学、短期大学、高等専門学校、専修学校専門課程のいずれかを卒業または修了した者。または、大学3年次以上か大学院在学中の者。もしくは映像・舞台芸術関係の職務についている者。②昭和39年4月2日以降、昭和59年4月1日までに生まれた者（日本の古典映画はそれ以前の生まれでも可）。③1年間毎回受講できる者
応募手続き＝①簡易書留で郵送〈6月23日（水）～7月5日(月)〉②持参〈6月23日(水)～7月5日(月) 10時～12時、13時～17時〉
提出書類＝①願書②最終学歴を証明する修了証明書③在学中の者は在学証明書④映像・舞台芸術の職務についている者は在職証明書⑤80円切手を添付し住所氏名を記入した定型返信用封筒1通
選考方法＝書類選考と面接
応募先＝〒110-8714
東京都台東区上野公園12-8
東京芸術大学事務局総務課（映像・舞台芸術教育室）※事務局棟3階
問＝03・5685・7537
http://www.geidai.ac.jp

東京都

■韓国映画鑑賞会
「愛する人よ」
6月24日(木)18時30分
料金＝入場無料（先着150名）
会場＝韓国文化院大ホール（韓国中央会館8F）
問＝03・5476・4971
http://www.koreanculture.jp

■日比谷図書館映画会
6月23日(水)14時「イーハトーブの赤い屋根」
6月30日(水)14時「蟹工船」
会場＝日比谷図書館地下講堂
問＝03・3502・0101

■無声映画上映会
6月24日(木)18時30分「伊豆の踊子」「不如帰」
出演弁士／澤登翠、佐々木亜希子、片岡一郎
料金＝1800円（前1500円）／学生1600円／会員1000円
会場＝門仲天井ホール
問＝03・3605・9981

■池内淳子スペシャル
連日朝10時30分から上映
6月20日(日)～26日(土)「夢で逢いましょ」
6月27日(日)～7月3日(土)「喜劇 駅前飯店」
7月4日(日)～10日(土)「秘剣」
料金＝1200円／シニア・学生1000円／会員800円／水曜1000円均一
会場＝ラピュタ阿佐ヶ谷
問＝03・3336・5440
http://www.laputa-jp.com/

■TheaterKINOkuniya 第18回DVD上映会
「みすゞ」
7月6日(火)19時
料金＝1000円（前900円）
会場＝紀伊國屋サザンシアター
問＝03・5361・3321

奈良県

■奈良シネマクラブ第85回例会
「アイデン&ティティ」
6月26日(土)18時30分
6月27日(日)9時30分
月会費＝1000円（入会費1000円）
会場＝奈良市立ならまちセンター
問＝0745・78・5799

京都府

■「新選組」関連映画上映
6月24日(木)13時30分、17時「鞍馬天狗・龍攘虎搏の巻」
6月25日(金)13時30分、17時「幕末残酷物語」
6月26日(土)13時30分、17時「鞍馬天狗・龍攘虎搏の巻」
6月27日(日)13時30分、17時「幕末残酷物語」
7月1日(木)13時30分、17時「その前夜」
7月2日(金)13時30分、17時「蛍火」
7月3日(土)13時30分、17時「その前夜」
7月4日(日)13時30分、17時「蛍火」
料金＝常設チケットで鑑賞可（500円／大学生400円／中小生300円）
会場＝京都文化博物館映像ホール
問＝075・222・0888
http://web.kyoto-inet.or.jp/org/bunpaku

大阪府

■「白い巨塔」山崎豊子の世界
6月19日(土)〈Bプロ〉「横堀川」10時、14時10分、18時15分「花のれん」11時50分、16時、20時
6月20日(日)〈Cプロ〉「華麗なる一族」10時、14時、18時
6月21日(月)〈Dプロ〉「大悪党」10時、14時45分、19時30分「不毛地帯」11時40分、16時25分、21時10分
6月22日(火)〈Cプロ〉
6月23日(水)〈Dプロ〉
6月24日(木)〈Eプロ〉「女の勲章」10時、14時5分、18時5分「女系家族」12時、16時5分、20時
6月25日(金)〈Bプロ〉
6月26日(土)〈Eプロ〉
6月27日(日)〈Dプロ〉
6月28日(月)〈Cプロ〉
6月29日(火)〈Bプロ〉
6月30日(水)〈Eプロ〉
7月1日(木)〈Cプロ〉
7月2日(金)〈Eプロ〉
料金＝1800円（前1300円）／大高1500円／中学生以下・シニア1000円／前3プロ券3600円／最終回1本のみ1000円
会場＝高槻松竹セントラル
問＝072・673・1709
http://www.cinema-r170.com

兵庫県

■KOBE 居留地シネマ
「逢いたくてヴェニス」
7月1日(木)・2日(金)10時30分、13時、15時

料金＝1300円（前1000円）／シニア・障害者・大学生1000円／小・中・高校生700円／会員1000円
会場＝神戸市立博物館
問＝078・332・7050
http://www5e.biglobe.ne.jp/~kff100/

■黒澤明大特集
6月19日(土)10時「一番美しく」11時40分「用心棒」13時50分〈トーク〉「椿三十郎」16時20分「隠し砦の三悪人」19時「影武者」
6月20日(日)10時「悪い奴ほどよく眠る」12時45分「七人の侍」16時30分「隠し砦の三悪人」19時5分「生きものの記録」21時「一番美しく」
6月21日(月)10時「七人の侍」13時45分「用心棒」15時50分「椿三十郎」17時40分「悪い奴ほどよく眠る」20時30分「生きものの記録」
6月22日(火)10時「影武者」13時20分「隠し砦の三悪人」16時「七人の侍」19時50分「悪い奴ほどよく眠る」
6月23日(水)10時「生きものの記録」12時「悪い奴ほどよく眠る」14時45分「天国と地獄」17時25分「椿三十郎」19時20分「七人の侍」
6月24日(木)10時「一番美しく」11時45分「影武者」15時5分「隠し砦の三悪人」17時45分「用心棒」20時「生きる」
6月25日(金)10時「用心棒」12時5分「椿三十郎」14時「生きる」16時40分「天国と地獄」19時20分「七人の侍」
料金＝1300円（前1100円）／学生1100円／会員1000円／高中小・シニア1000円／3回券3300円（前3000円）
会場＝シネ・ピピア2
問＝0797・87・3565
http://terra.zone.ne.jp/cinepipia

広島県

■名作映画鑑賞会
6月20日(日)10時30分、14時「ここに泉あり」
6月25日(金)10時30分、14時、18時「山びこ学校」
6月26日(土)10時30分、14時、18時「にっぽん泥棒物語」
6月27日(日)10時30分、14時「太平洋ひとりぼっち」
7月2日(金)10時30分、14時「西鶴一代女」
7月3日(土)10時30分、14時、18時「息子の青春」
7月4日(日)10時30分、14時「日本の悲劇」
料金＝大人440円／こども220円（「にっぽん泥棒物語」「山びこ学校」は大人330円／こども160円）
会場＝広島市映像文化ライブラリー
問＝082・223・3525

山口県

■「アイ・ラブ・ピース」特別上映会
6月20日(日)10時30分、13時30分／周南市市民館小ホール
6月25日(金)14時、16時30分、19時／下関市民会館中ホール
6月26日(土)10時30分、13時30分／小野田市民館
6月27日(日)10時30分、13時30分／宇部市文化会館
6月27日(日)14時／美祢市民館
7月3日(土)14時、16時30分、19時／シンフォニア岩国
7月3日(土)14時、16時30分、19時／山口県教育館
7月4日(日)10時30分、13時30分／光市民ホール小ホール
料金＝1500円（前1200円）／高校生以下1000円（前800円）
問＝0834・22・5079

キネ旬ロビイ kinejun lobby

読者の声

●瀬戸内海の美しい風景を

香川県内で撮影された「世界の中心で、愛をさけぶ」のロケ地捜しに関心が高まっているなか、「機関車先生」が5月29日に地元先行ロードショーとして公開されます(全国公開は夏)。全国の映画ファンの皆様に瀬戸内海の美しい風景をぜひご覧いただきたいと思います。(山地正得・香川県仲多度郡・地方公務員・57歳)

●愛らしく、足も長い!

長澤まさみさんは「ロボコン」の愛らしさで注目していたが、「世界の中心で、愛をさけぶ」での可愛らしさには本当に参った。彼女の存在だけで、この映画を観る価値がある。それにしても足が長い!(吉川雅博・広島県大竹市・会社員・48歳)

●心配してたのですが

ついにHOT SHOTSで登場! 香里奈ちゃん。私は彼女がコカ・コーラのCMやTVドラマ「カバチタレ!」に出ている頃から注目してました。最近ちょっとTVで見ないので心配してたんですが、映画に3本も出てたんですね。全部見に行きますよ。もっとガンガン映画出て下さ〜い!!(田中守・京都府京都市・自営業・45歳)

●声を押さえて号泣

あっという間に終わってしまった「ミッシング」は素晴らしい作品でした!! 必死に声を押さえて号泣してしまいました。ケイト・ブランシェットとトミー・リー・ジョーンズの演技が最高でした!!(溝口奈々子・東京都西東京市・自営業・28歳)

●まるでアリゾナ

「下妻物語」、傑作だと思います。途中でこれは日本版「テルマ&ルイーズ」かもと思ったくらい。げんに中島哲也監督も「アリゾナの風景を意識した」と云うように、そのドライな雰囲気は日本映画には珍しい。舞台は「下妻」だけど……。(小川和彦・千葉県浦安市・会社員・32歳)

●斬新な映像とおもしろさ

2年ほど前だろうか、TV「世にも奇妙な物語」の1話「ママ新発売!」を観て、その斬新な映像とおもしろさに心底驚いた。その中島哲也監督の新作「下妻物語」はやはり傑作だった。岩井俊二監督の「ifもしも…打ち上げ花火、下から見るか? 横から見るか?」をTVで観た後、「Love Letter」を映画で観ることができた時の幸福感を思い出した。(岡本武志・熊本県熊本市・42歳)

●ドキュメンタリーの週

水曜日は基本的にノー残業なので17時15分の勤務時間終了後、すぐに電車に乗って仕事帰りに初の映画鑑賞をしました。ポレポレ東中野のドキュメンタリー「HARUKO」を見ました。今週はシネマ・アートン下北沢で「TAIZO」も見たのでドキュメンタリーWEEKでした。職場が西武新宿線の郊外なので制約がありますが、今後も仕事帰りに映画をがんばってみます。(村松聡・東京都文京区・公務員・24歳)

●妻が「冬のソナタ」に

ドアを開けると非日常的な日本語が、TV画面をのぞくと生活臭のうすいヨン様が。それを喰い入る様に見つめる我が妻。これが最近の我が家の近況。そうです、妻が「冬のソナタ」にハマってしまいました。そして気付きました、我が妻もオバさんだと!!(瀧本和文・兵庫県加古川市・会社員・54歳)

●これ以上はゼイタク?

イアン・マッケラン様主演の「リチャード三世」のDVD発売を切に願っています。「ゴッド・アンド・モンスター」は何度観ても飽きないし、先日NHK・BSで再放送された「アクターズ・スタジオ・インタビュー」も（気持ちだけは）斎戒沐浴して視聴。他の出演作品のビデオも観られる限り。俳優として偉大なのは勿論、俳優とか男とかいうのを越えて、人間存在として美しい人だと思います。「ロード・オブ・ザ・リング」がなければ英国民や演劇ファン、俳優仲間に深く尊敬されていても、私のような極東の好みの偏った一主婦には発見できなかった。目のくらむような幸運。これ以上望むのはゼイタク……でも「リチャード三世」のDVDが欲しい！（伊藤馨・大阪府藤井寺市・主婦・46歳）

●望みはかないますか？

私はレスリー・チャンのファンです。新作は望めませんが、まだ日本で放映されていない映画があると思います。1本でも見たいと思っています。私の望みはかないますか？（島佳子・東京都世田谷区・専業主婦・46歳）

●アジア映画の勢い

重苦しい気持ちを引きずったまま迎えた翌朝未明、朗報が飛び込んで来た。カンヌ映画祭で柳楽優弥君の男優賞受賞のニュース。ちょうど6月下旬号にて「日本映画の曲がり角」と「telejun」の是枝監督の記事を読んだところだったので、とても嬉しく、関係者の皆様に心よりお慶びを申し上げます。柳楽優弥君はインタビューで監督に言われるままに演技しただけと言っていましたが、彼の視線の演技、とても楽しみで、公開が待ち遠しいです。また今年のカンヌはアジア映画の勢いが感じられた年でもありました。今後もこの勢いが続くことを願っております。本当におめでとうございました。（岩瀬美智子・愛知県西尾市・会社員・46歳）

●自由なシネマの世界

カンヌ映画祭で「誰も知らない」の柳楽優弥が14歳という最年少受賞したり、ブッシュ政権を痛烈に批判した「華氏911」が受賞したニュースを聞き、久しぶりに気持ちが晴れました。世の中の暗いニュースの中、映画人が良識をアピールしたといっても大げさでないと思います。これぞ自由なシネマの世界です。（東京都板橋区・石川まゆみ・会社員・50歳）

●カンヌの英断

マイケル・ムーアの「華氏911」がカンヌでグランプリをとった事に拍手を贈りたい。内容はもちろんまだ観る事ができないので解りようもないが、日々悪化していく今のイラクの混迷した状況を思うと、現アメリカ政権への批判をまっ向から訴えているM・ムーアと彼の作品をグランプリとした今年のカンヌの決断に頭が下がる思いだ。（井上繁・東京都品川区・会社員・56歳）

●重厚な存在感を発揮

5月15日、俳優の三橋達也氏が急性心筋梗塞のためお亡くなりになりました。つい最近見た「CASSHERN」に出演されており、まだまだ元気でおられるなあと思ったばかりだったので、この訃報には大変驚きました。近年の「忘れられぬ人々」や「Dolls」等で重厚な存在感を発揮しており、これからの活躍が期待されただけに残念です。ご冥福をお祈り申し上げます。（入江弘幸・岩手県紫波郡・会社員・39歳）

lobby 伝言板

▼昨年度の大河ドラマ「武蔵」の第1話・第2話を録画された方、どうか御一報下さい。（〒185-0032 国分寺市日吉町3-12-8-204 堀勝幸）

▼映画雑誌「ロードショー」1972年の8・10月、1973年の1・3・6月、1974年の3月、1975年の8〜12月、1976年の2〜6と8〜12月、1977年の1・2月、「スクリーン」1972年の8月、1973年の4月、差し上げます。送料は着払い。ハガキにて連絡下さい。（〒940-0203 新潟県栃尾市楡原1344-19 宮嶋厳）

スクリーンの魔術師

第19回 内田吐夢

絵と文 すぎやまチヒロ

内田吐夢

1898年〜1970年

岡山市に生まれる。中学卒業後横浜のピアノ製作所で働く。栗原トーマス、谷崎潤一郎らが加わった大正活映に出入りする。大正活映解散後は旅役者の一座に加わったり、浅草でルンペン生活をしたりして放浪生活を送る。その後、日活に入り、1927年監督になる。「生ける人形」（29年）「仇討選手」（31年）「人生劇場」（36年）「土」（39年）と、社会性の強い重厚な作品を発表。戦時中、満州に渡り、満鉄に属した。終戦後9年間も中国にとどまったのはなぜか今でも謎である——。

戦前のことはこの程度で割愛させていただいて、戦後の活躍を紹介させていただきます

「活動写真」という名称が「映画」と呼ばれ出した頃私はこの道に飛びこんだ。

登山帽

造作がすべて大きい。

風貌から「トム」

身長は180センチ

アメリカ進駐軍払い下げの上着

木綿のズボン

下駄ばき

最初は俳優だったが、後に監督に転向したんだよ

「飢餓海峡」のころ。

戦前の名作

37年「限りなき前進」

小津安二郎原作

真面目なサラリーマンが停年をむかえて発狂する。

39年「土」

一人の小作農の半生をとおして農村と農民を描いた。

でか！

演出はセットのど真ん中にどっかり腰をすえて

ブツブツ

自分でもセリフを口ずさむ。

帰還第一回作品として発表されたのがこの

55年「血槍富士」東映

「たそがれ酒場」新東宝

「自分の穴の中で」日活

石川達三原作の「自分の穴の中で」を古巣の日活で撮る。

机竜之助

音無しの構え

「ここつんでは父のため ここつんでは母のため〜」

チーン チーン

市川右太衛門

映画「血槍富士」だった。

さまざまな人間がそれぞれの人生を背負って街道を行く—。

56年東映専属監督になる。

「黒田騒動」

「逆襲獄門砦」

千恵蔵とのコンビ確立

57年「暴れん坊街道」

「大菩薩峠 第一部」

「どたんば」

58年「千両獅子」

「大菩薩峠 第2部」

「森と湖のまつり」

旅人宿たまたま出会った庶民のあたたかな交流にふれる—。

時代劇とか現代劇とか区分する意識はないんだよ。つねに人間像を考えてるからね

「黒田騒動」は会社企画だったけどどう表現しようか楽しんで作ったよ

「千両獅子」

が、クライマックスが突然おとずれる。

下郎と酒をのむとは何ごと

「逆襲獄門砦」は迷いが出てしまって失敗作だったな

トムの酒は尋常な強さでない。豪快に飲みます。

若かりしころの「森と湖のまつり」の高倉健

「どたんば」と「森と湖のまつり」の共通点は在日朝鮮人とアイヌという民族問題である

「暴れん坊街道」がヒットしたのはお涙ちょうだいの母ものが受けたんだよ

高倉健に対しては「あれは将来大物になる」と直感した。

駆けつける槍もち

7分間にわたる大立ち廻りはノーカットで撮るという中の撮影だった—。

ものすごくシリアスなシーンです。念のため

くちグセは

芝居は理屈じゃない！感じ合うことだあ

「真剣勝負」撮影中に倒れて入院。

病院を抜け出して撮影を再開するも、編集は機材を持ち込んで病院のベッドの上で行った。

【②】荒れた画面のほうが臨場感がますと考え、16ミリで撮影して、35ミリに拡大して劇場公開した。

65年、妻子と別れて、小田原城の見える4畳半一間のアパートで暮らす。(駅弁を買って昼食をすませる毎日)

カランコロン

手拭をぶら下げてバスに乗って、箱根宮の下の共同浴場に通う。

【飢餓海峡こぼれ話①】水上勉氏の原作では、殺された女の唯一の物的証拠になったのは旅館の安全カミソリだったが、大きな男の足のツメに変更した(トム氏自身の大きな足のツメがヒントになって)。

トム氏の足

飢餓海峡 それはニッポンのどこにでもみられる海峡である。我々はその底流に貧しい善意に満ちた人間の愛と執念をみることができる―。

【③】伴淳三郎を発奮させるために

オレとお前は一緒に活動に入ったのにオレは監督、お前はへなちょこ役者のままじゃないか―

クレーンの上から叫ぶ

なにィ~

伴淳の弓坂刑事← よかったなあ…

命一コマ 吐夢

映画公開前に息を引きとる。

杉並の和田廟の墓碑

知りませんなー

弓坂……

64年「宮本武蔵 一乗寺の決斗」

「飢餓海峡」代表作との評判を得る。

65年「宮本武蔵 巌流島の決斗」映画界斜陽のため大幅に予算を削られたが完成させる。

68年「人生劇場 飛車角と吉良常」撮影中は大泉撮影所の粗末な大部屋で寝泊りした。

70年「真剣勝負」東宝 8月7日永眠。映画公開は翌年の2月20日だった。

真剣 勝負

「ずーっとめーになるがのう…かれこれ10年もめーになるがのう…やっぱり警察の人が人を探しに来おったことがあってのう…」

10年前!

弓坂って刑事が…

寝言の名人

バカヤロー

タクン!

(聞かせるつもりで言っていたのか?)

宮本武蔵をやるなら…

錦之助はいい役者だ…… いまの彼なら武蔵ができるかもしれないなぁ…。

不老気 オンモリ

待ち 酒盛りをする

映画という近代産業は古い農耕時代の生産様式から解放されることはないんだよ。ヒック

浪花の恋の物語か…あったなあ

一年一作、5年間かけて五部作。

そこまで会社が腰をすえてかかるつもりならやりましょう

ムーン

結局会社首脳は受諾する。

海音寺潮五郎原作「酒と女と槍」大友柳太朗

59年「大菩薩峠完結篇」「浪花の恋の物語」

「花の吉原百人斬り」「恋や恋なすな恋」とあわせて"古典芸能三部作"となる

映画界が好景気だったので予算は充分にあり、千年杉をコンクリートで作ったり、一寺建てたりできた。

高所恐怖症の錦ちゃん

60年「酒と女と槍」「妖刀物語 花の吉原百人斬り」

歌舞伎「籠釣瓶」より

心の中まで疱があるわけでもないでしょう

葛屋武蔵

これぞ二刀流で

61年「宮本武蔵」会社との約束どおり1年1作、5年間で5部作を完成させることになった。

62年「恋や恋なすな恋」「宮本武蔵 般若坂の決斗」

63年「宮本武蔵 二刀流開眼」

吉原遊女に惚れた顔に疱のある男。クライマックスの大殺傷はまさに"花の吉原百人斬り"

京都には通算10年以上住んだことになるなあ…

起きぬけに一杯の白湯を楽しむ その後で玉露をいれ、次に中国のお茶(茉莉花茶)を楽しむ。

白湯が好き

机の上には石が置いてある。

琵琶湖の石には「宮本武蔵」、南部恐山の石には「飢餓海峡」とそれぞれ仕事の名が書かれてある。

コニャックも大好き

次回はルネ・クレマン監督です

今号の筆者紹介

(　)内の数字は掲載ページ

石村加奈　ライター。交渉開始から8万値切ってエアコン購入。奮闘を讃え店員さんから高級扇風機も贈呈された！(3)

佐藤結　ライター。待望の和製ガールズ・ムービー「下妻物語」に感激。次は安野モヨコ作品の映画化が見たいなあ。(11)

河原畑寧　文筆業　異境でフライング・ソーサーが命中、休養一日。友だちの有り難さを改めて噛みしめました。(12)

井口健二　SF映画評論家。いよいよ映画も夏本番。今年も大作目白押しだが、やはり満を持した続編が強いのか？(14)

嘩峨創三　評論家。東京国際映画祭ホームページで連載コラム開始、したものの早々に原稿落としまくり……(冷汗)。(16)

永野寿彦　シネマ・イラストライター。「マイン・ドゲーム」の天才・湯浅政明監督の映像構築力にただただ圧倒！(26)

氷川竜介　アニメ特撮文筆業。「スチームボーイ」ではハリウッドの音響作業が見られて至上の幸せでした。作品の迫力倍増！(29)

山下慧　映画系文筆業。DVD同梱のエイリアン・ヘッドが届く。これもいいが、グリコの鉄人28号もすごくいい。(35)

藤津亮太　アニメ評論家。『三鷹の森ジブリ美術館ガイドブック』を現在編集中。企画展示のピクサー展はかなりの見応え。(43)

渡辺祥子　「妻に内緒」とダイエット・コークを飲んでいたベントンさん。結婚以来、髪はずーっと奥さまが刈っているそう。(47)

鬼塚大輔　静岡英和学院大学教授。「SCARY MOVIE 3」には大笑いしたが、そのままの形で日本公開されるのか？(52)

新藤純子　「誰も知らない」、「なぜ彼女は愛しすぎたのか」の少年俳優に驚愕。「珈琲時光」の東京は奇妙になつかしい。(53)

細谷佳史　映画監督。最近見た中では「シュレック2」のおもしろさが断トツ。猫好きにはたまりませんでした(55)

瀬戸川宗太　映画評論家。最近、DVDで古い西部劇を観ています。映像が鮮明なので感激してます。(58)

猿渡由紀　永住権の更新期限だということを南豪旅行に出かける1週間前に思い出した。危うく帰ってこれなくなるとこでした！(67)

森直人　横浜開港祭に出向き、クレイジーケンバンドのライブを鑑賞。旅費千円未満で軽く旅行気分に。(68)

山口哲一　映画・音楽評論。ミッキー・ロークの猫パンチは会場で生で体験。拳闘好きですから。最近両国に引越し。(70)

大森さわこ　映画評論家。「家族のかたち」で久しぶりにロバート・カーライルの好演を見て、取材時の彼の笑顔を思い出す。(71)

小藤田千栄子　映画評論家。野村萬斎・麻実れいについで、平幹二朗・鳳蘭の「オイディプス王」が上演される。こちらも期待作。(73)

中野香織　共訳者の死も乗り越え、7年越しで完成した『イングランド社会史』翻訳が筑摩書房より刊行されます。(74)

竹之内円　映画ライター。待ちに待ったモリコーネのコンサート。マカロニ・メドレーに涙が止まりませんでした……。(76)

瀬川とめ　ライター　よく道を聞かれる。香港とか海外ですらよく聞かれる。そういう相なのか単にヒマ人ぽいのか？(78)

佐藤友紀　「本当に来てくれたの!?」は「偽りの侍女」に出演中のシャーロット・ランプリング。一人で帰る姿がカッコいい。(79)

内山慶魅　ライター・翻訳家。吉沢悠くんと同じポイントにサーフィンに行っていることが判明。今度探しちゃお～っと！(80)

はせがわいずみ　10年ぶりにジャッキー・チェンに会った。英語が上達していてビックリ。でも老けたなぁ……。(81)

荻原順子　最近、全米各地で利用できる個人売買サイトCraigslistで中古家具の掘り出し物を探すのにハマっています。(84)

秋本鉄次　映画評論家。ご贔屓シャーリズ・セロンの「モンスター」に驚愕。やりすぎの声もあるが、僕はセロンの味方。(91)

田中英司　先日、長野県・菅平高原の温泉に行ってきました。牧場でポニーに雑草を食べさせました。(92)

中西愛子　フリー。成田陽子さま。前号ピーター・オトゥールの記事、感動です。ありがとうございました。(93)

持永昌也　ライターなど。元パルコ安田裕子さんの『映画の畑で四つ葉のクローバーを探して』が好著でした。(94)

黒田邦雄　雨の日曜日、森美術館の「MOMA展」ですごす。ベルメール、ベイコンも何気なく展示。(95)

服部香穂里　「夏の香り」もいよいよ佳境に。「冬のソナタ」よりも「秋の童話」寄りのドロドロさは、暑い夏にぴったり？(96)

切通理作　文化批評。寅さん全部見た。震災後に長田区のマダンが寅さんを迎えるラストには感動。(97)

渡部実　映画評論家。TVで映画版「白い巨塔」(山本薩夫監督)を再見。滝沢修の演技を改めて堪能。(98)

西脇英夫　映画評論家。神山征二郎監督の「草の乱」の、いまどき貴重な真面目さが好きです。(102)

北川れい子　映画評論家。わが家の双子の子猫に〝ヨン様A〟〝ヨン様B〟と命名。でもどっちがどっちか判別不可。(102)

田中千世子　映画評論家。月2回発行の「大阪映画サークル」は1本の作品を4千字で書ける。非営利の活動に公の支援を！(102)

轟夕起夫　文筆稼業。最近、面白かったもの。湯浅政明監督の「マインド・ゲーム」。清順監督の新作の現場取材。(102)

河原晶子　「THE BLUES・Movie Project」の試写開始。M・フィッギス篇、60年代ブリティッシュ・ロックへの嬉しい想い！(104)

稲垣都々世　睡蓮鉢で水を飲み、色づいたグミを食べ、種を植えたプランターで砂浴びし、何かを吐いていく鳥よ……。(104)

大場正明　評論家。あれよあれよという間に忙しくなり、ずっと原稿を書きつづけておりました。(104)

金原由佳　映画ライター。下妻の手前の水海道にての、塩田組「カナリア」の現場に日帰りで参加。やはり豚が……。(104)

宮崎祐治　理由あって、古い日本映画のビデオをずっと観ている。後ろから妻が「凄いね、昔の日本映画は」と言う。(106)

立川志らく　落語家。7月15日19時築地ブジストホールにて私の監督主演「不幸の伊三郎」の上映会があります。(107)

川本三郎　評論家。「誰も知らない」に感動。柳楽優弥もいいし、長女役の北浦愛が二木てるみを思い出させる。(108)

香川照之　黒木和雄監督の愛弟子、日向寺太郎監督のデビュー作「ニケの風」で浅野忠信クンと初共演。ワクワク。(110)

長谷川隆　脚本家。連載でいちばんシンドかったのはこのページでした。本業がそろそろ再開します。リハビリしなきゃ。(114)

植草信和　フリー編集者。FCで斎藤寅次郎の才気横溢の戦前作を鑑賞。しかし映画はやはり「時代の産物」だ。(117)

成田陽子　LAライター。ハリポタのロンドン・プレミアで魔女の占いを受け、健康もお金も混乱状態と言われ、しょんぼり。(120)

河原雅彦　俳優・舞台演出・脚本。7月末からの舞台「鈍獣」稽古開始を前に、何もしていない日々を過ごし中です(124)

中村まこと　俳優。メジャーリーガーに近づこうと思って口ヒゲを生やしました。とたんに打てなくなったので剃ります。(124)

安西水丸　今年は海外出張が多く、六月の終りにはゴーギャンの足跡を訪ねてタヒチへ行く。タヒチへの旅は初めてだ。(126)

おかだえみこ　アニメ研究家。「荒野の決闘」DVDの特典映像、フォード研究家の高橋千尋さんに見せたかった。(134)

横森文　「あずみ2」の現場に来訪。超元気な石垣佑磨くんのパワーにあてられ、こっちも元気になりました。(135)

塩田時敏　映画評論家。パリよりギャスパー・ノエがロケハンに来日。ハンティングと飲みに付き合う。年内撮入!?(140)

金子裕子　映画ライター。夏休みの大作が、ほとんど見られないままに原稿執筆。年々恒例化するこの状況、困ってます!(140)

大高宏雄　映画記者。木曜夜の楽しみは、MXTVの「ヒッチコック劇場」。レッドフォードやローランズが出演していて凄い。(149)

濱口幸一　授業の一環としてアニメーションのキャラクター認識度を調査。最も知られてたのは、ポパイだった。(154)

賀来タクト　文筆家。取材後、「スチームボーイ」のデモCDをくれたS・ジャブロンスキー。とってもいい奴です。(158)

石飛徳樹　朝日新聞記者。魂のシネアスト高林陽一監督を取材。「時をかける少女」の時計屋さんの話で盛り上がる。(160)

豊崎岳彦　虚業。実家で母親が腰骨を折る騒ぎ。もろもろの締切りなんかも重なって、ご迷惑をおかけしました。多謝。(161)

樋口尚文　映画批評家。秋吉久美子DVDボックスに、夢にまで見たサントラCDが！　70年代サウンドを堪能。(162)

池田敏　アメリカTVライター。NHK衛星第2「海外ドラマ夜話」、年に一度位でもいいのでまたやってほしい。(163)

田中眞澄　松阪行き。小津安二郎青春館発掘資料は『諸君』に紹介。帰りの名古屋古本屋歩きは「みすず」へ。(164)

藤原敏史　ドキュメンタリー作家/映画批評。「ゆきゆきて、ゆきゆきて…原一男」がやっと完成し、放心状態です。(167)

丸山尚輝　ライター。知人岡輝男脚本作「飼育のレズ部屋〜熟れすぎた恭子〜」(新田栄/Xces)が7/2より公開。(168)

やまもとかほ　「ヴァン・ヘルシング」「ヘルボーイ」「エイリアンVSプレデター」が早く見たい！(168)

細越麟太郎　K・コスナーは「ワイアット・アープ」で不満を残したガンファイトを「ワイルド・レンジ」でリベンジを試みた。(172)

杉原賢彦　映画批評/慶應大学教養センター所員。ラージ・カプールに再びかっ飛ぶ。ついでに西尾維新にも。(174)

磯田勉　ポレポレ東中野の高林陽一に木村威夫、新文芸坐の中島貞夫と、出版記念の特集上映で必見の企画が続く。(178)

滝矢直　ライター。キネ旬初登場です。「69 sixty nine」を観て、久々に映画で笑い転げました！(180)

すぎやまチヒロ　私の友人に一滴も飲めないのに毎日晩酌する奴がいた。女房が大酒呑みで。今日も漫画をかく。(184)

募集！『私とキネマ旬報』

今年、「キネマ旬報」は85周年を迎えます。1919年7月に創刊以来、戦争などによる休刊はあったものの、85年もの長きにわたり発刊し続けられたのは、ひとえに読者のみなさまのおかげと感謝しております。

そこで、きたる8月上旬号（7月20日発売）、8月下旬号（8月5日発売）にて、この85周年をみなさまと祝うべく、記念特集を考えております。

つきましては読者のみなさまから「私とキネマ旬報」のタイトルで、ご自身とキネマ旬報の関わりについてのエッセイを募集します。

文字数は800字以内。締切は6月25日までに、郵便またはEメールにて、キネマ旬報編集部宛にお寄せください。

採用された方には、85周年記念の品をお送りさせていただきます。

お待ちしております！

【郵便】〒106-0045　東京都港区麻布十番1－2－3プラスアストル3F
（株）キネマ旬報社　編集部「私とキネ旬」係

【Eメール】kinejun@kinejun.com

85th

キネマ旬報社

劇場招待プレゼント&上映スケジュール

●ご招待券（7月中有効）ご希望の方は本誌挟み込みのプレゼントハガキに希望劇場名を書いてお申し込みください。7月5日消印有効。
●劇場の都合により番組が変更になる場合がありますので、ご確認の上お出かけください。＊印は次回上映作品

上映期間：6/19（土）〜7/10（土）

地区	劇場名	TEL	招待組数	上映スケジュール（6/19土〜7/10土）
銀座	有楽町スバル座	03(3212)2826	2	世界の中心で、愛をさけぶ → セイブ・ザ・ワールド
新宿	テアトル新宿	03(3352)1846	2	ラブドガン
渋谷	渋谷東映	03(5467)5773	5	シルミド SILMIDO → 69 sixty nine
渋谷	渋谷シネパレス1 渋谷シネパレス2	03(3461)3534	10	21グラム 天国の本屋〜恋火 → ハリー・ポッターとアズカバンの囚人
渋谷	シネ・アミューズ イースト／ウエスト	03(3496)2888	2	〈イオセリアーニに乾杯！〉 スキャンダル
渋谷	シブヤ・シネマ・ソサエティ	03(3496)3203	2	スパン
池袋	シネマサンシャイン	03(3982)6101	5	クリムゾン・リバー2 → ※要問合せ → スパイダーマン2 デイ・アフター・トゥモロー カレンダー・ガールズ → ハリー・ポッターとアズカバンの囚人〈字幕版〉 キューティーハニー → ハリー・ポッターとアズカバンの囚人〈吹替版〉 パッション → ハリー・ポッターとアズカバンの囚人〈字幕版〉 シルミド SILMIDO → 69 sixty nine
池袋	シネマ・ロサ	03(3986)3713	10	天国の本屋〜恋火 → ハリー・ポッターとアズカバンの囚人〈字幕版〉 21グラム
池袋	シネ・リーブル池袋	03(3590)2126	5	スキャンダル 深呼吸の必要 → 友引忌
池袋	テアトル池袋	03(0000)0000	2	HERO？ 天使に逢えば… → 危情少女 嵐嵐
浅草	浅草中映劇場	03(3841)2400	5	ハリウッド的殺人事件／ウインドトーカーズ → ギャザリング／ミスティック・リバー → ブロウ／さすらいのカウボーイ → マスター・アンド・コマンダー
浅草	浅草名画座	03(3841)3028	5	花と蛇／極道の妻たち 赤い殺意／続・渡世人 → 宮本武蔵 般若坂の決斗／北海の暴れ竜 釣りバカ日誌12 史上最大の有給休暇 → 続・男はつらいよ／ゼブラーマン／緋牡丹博徒 花札勝負 → 徳川一族の崩壊 昭和残侠伝 唐獅子牡丹／塀の中の懲りない面々
東京	早稲田松竹	03(3200)8968	3	コール／ミニミニ大作戦 → ショーシャンクの空に／未来は今 → ザ・エージェント／シカゴ
東京	三軒茶屋シネマ	03(3421)3322	10	スパニッシュ・アパートメント／イン・ザ・カット → ホテル ビーナス／ジョゼと虎と魚たち
東京	下高井戸シネマ	03(3328)1008	10	恋愛適齢期 → シービスケット → 殺人の追憶 → みなさん、さようなら。
東京	シネマアートン下北沢	03(5452)1400	5	〈監督 川島雄三〉 → 〈オキナワ映画クロニクル〉
東京	バウスシアター	0422(22)3555	2	トロイ → ハリー・ポッターとアズカバンの囚人 真珠の耳飾りの少女 → 炎のジプシーブラス〜地図にない村から〜 キューティーハニー → トロイ

※劇場によっては、土・日・祝日は招待券を使用できませんので、ご了承ください

	劇　場　名	TEL	招待組数	6/19土 ⑳日 21月 22火 23水 24木 25金	26土 ㉗日 28月 29火 30水 7/1木 2金	3土 ④日 5月 6火 7水 8木 9金	10土
横浜	横浜日劇	045(251)1815	2	レジェンド・オブ・メキシコ デスペラード／ヘブン・アンド・アース 天地英雄	キル・ビル／キル・ビル2／イン・ザ・カット		
	シネマ・ジャック	0120(198)009		〈犯罪劇場、四十九日。〉			
	シネマ・ベティ	0120(198)009		ザ・ボディガード		純愛中毒／気まぐれな唇	ハッピーエンド／悪い男
	関内MGA	045(261)8913	2	スイミング・プール　＊イザベル・アジャーニの惑い			
新潟	新潟シネ・ウインド	025(243)5530		夕映えの道／carmen.カルメン／アンテナ	わらびのこう 蕨野行／オアシス／アンテナ		
松本	松本エンギザ	0263(32)0396	5	海猿			
岐阜	シアターペルル	058(262)0871	5	しあわせな孤独／ぼくは怖くない		幸せになるためのイタリア語講座	
愛知	名古屋シネマスコーレ	052(452)6036	10	赤目四十八瀧心中未遂	ロスト・メモリーズ／4人の食卓		[illegible]
	名古屋ゴールド劇場	052(451)0815	10	ロスト・イン・トランスレーション　＊トスカーナの休日			
	名古屋シルバー劇場	052(451)0815		ドラムライン		パピヨンの贈り物	デイ・アフター・トゥモロー
	名古屋シネマテーク	052(733)3959	5	リアリズムの宿	リアリズムの宿／秋聲旅日記	バーバー吉野	犬と歩けば チロリとタムラ
	今池国際シネマ	052(732)1880	5	下妻物語			キッチン・ストーリー
	今池国際劇場	052(732)1880	5	海猿			
大阪	テアトル梅田	06(6359)1080	10	リアリズムの宿		ラブドガン	
				パピヨンの贈り物	キャンプ	テッセラクト	
	シネ・リーブル梅田	06(6440)5930	5	ロスト・イン・トランスレーション			
				深呼吸の必要 ロスト・イン・トランスレーション	ロスト・イン・トランスレーション	友引忌／ロスト・イン・トランスレーション	
	シネ・ヌーヴォ	06(6582)1416	5	〈中国映画の全貌2004〉			
京都	祇園会館	075(561)0160	5	嗤う伊右衛門／座頭市		リーグ オブ レジェンド 時空を超えた戦い／ファインディング・ニモ(吹替版)	
神戸	シネ・リーブル神戸	078(334)2126	5	パッション／カレンダー・ガールズ		列車に乗った男	
				下妻物語	スイミング・プール		
				ロスト・イン・トランスレーション			
	シネ・ピピア	0797(87)3565	5	世界の中心で、愛をさけぶ			
				〈黒澤明大特集〉	恋愛適齢期	クイール	[illegible]
広島	広島サロンシネマ1	082(241)1781	10	ロスト・イン・トランスレーション			友引忌
	広島サロンシネマ2	082(241)1781		エレファント	純愛中毒／悪い男		[illegible]
	広島シネツイン	082(241)7711		チルソクの夏		カレンダー・ガールズ	
	シネマモード	0849(23)3788	5	ロスト・イン・トランスレーション			69 sixty nine
九州	シネテリエ天神	092(781)5508	10	ぼくは怖くない		幸せの法則／列車に乗った男	
	KBCシネマ1	092(751)4268	10	ソニー	ションヤンの酒家		
	KBCシネマ2	092(751)4268		上海家族	あなたにも書ける恋愛小説		ヴェロニカ・ゲリン
	シネサロン・パヴェリア	092(852)5650	5	わが故郷の歌	ふくろう		ジャンプ
	シネ・リーブル博多駅	092(434)3691	10	スキャンダル	スイミング・プール		
				純愛中毒／深呼吸の必要	パピヨンの贈り物		
	シネパラダイス	096(211)3360	5	キューティーハニー	ブラザーフッド		

◆次の各劇場へ今号の本誌挟み込み〈試写会ハガキ〉を持参されると、各劇場規定料金にて割引ご招待いたします。
【高知】●高知東映●ピカデリー1・2・3●あたご劇場（高知キネ旬友の会協力）　【高松】●高松東宝1・2・3（高松キネ旬友の会協力）
【松山】シネ・リエンテ●シネマサンシャイン　【福岡】●福岡中洲大洋●福岡東映劇場●駅前ロマン●福岡オークラ劇場（福岡キネ旬友の会協力）

Presents

プレゼントの応募は本誌とじ込みハガキでどうぞ。7月5日必着です。

試写会 **バレエ・カンパニー** ■九段会館ホール（九段下） ■7月12日（月） ■18：00開場／18：30開映 ロバート・アルトマン監督が、名門バレエ・カンパニーの協力を得て撮った新作。夏休みシャンテ・シネ、Bunkamuraル・シネマにて公開〈提供：エスピーオー〉 **10組20名**	試写会 **歌え！ ジャニス★ジョプリンのように** ■ヤマハホール（銀座） ■7月22日（木） ■18：30開場／19：00開映 平凡な主婦が、ジャニス・ジョプリンの歌と出会って大変身！ ロック黄金期のヒット曲にも注目。夏シャンテ・シネほかにて〈提供：ギャガ、東京テアトル〉 **20組40名**	「溝の中の月」 「太陽は夜も輝く」 「時の翼にのって」 DVD **「溝の中の月」「太陽は夜も輝く」「時の翼にのって ファラウェイ・ソー・クロース!」** DVD上記3作品 前号に引き続き第2弾は、ナスターシャ・キンスキーの気品に満ちた大人の魅力たっぷりの3作品（税込各5040円）。DVD－BOXも好評発売中（税込15120円）〈提供：エスピーオー〉 **各1名**
Goods **アンドロメダSEASON2 DVD The Complete Box I** オリジナルピクチャーレーベルCD－R 「スタートレック」シリーズの創作者、ジーン・ロッデンベリー原作による壮大なSFアドベンチャー・シリーズ第2弾がDVD－BOXとなって登場、好評発売中（税込13440円）〈提供：カプコン・セルピュータレーベル、ハピネット〉 **10名**	DVD **好きと言えるまでの恋愛猶予** デザートブーツ型キーホルダー パリに実在した伝説のクラブ“ドラッグストア”を舞台に、60年代のヒットナンバーに乗せて贈る甘く切ない恋愛模様。出演するフランスの若手スターにも注目を。7月下旬シブヤ・シネマ・ソサエティにて〈提供：アートポート〉 **3名**	Book **「THE ELVIS」（5月・6月号）** 今夏公開の「エルヴィス・オン・ステージ」を特集したエルヴィス・ファン雑誌（奇数月25日刊／税込1200円／☎03-3541-6503）が全国のタワーレコードや山野楽器等で好評発売中〈提供：エルヴィス・プレスリー・ソサエティ・ジャパン〉 **10名**

Kinejun Information

営業部だより

■【お詫びと訂正】6月下旬号の173頁「クリエイターズ・アイ」に掲載の「ほたるの星」の公開日に誤りがございました。正しい新宿武蔵野館の公開日は6月5日です。菅原浩志監督をはじめ関係者の方々および読者の皆様に深くお詫び申し上げます。なお、「ほたるの星」は、ワーナー・マイカル・シネマズ板橋（東京）、OS劇場C.A.P（大阪）などでも絶賛公開中です。

出版部だより

■大槻ケンヂさんのエッセイをまとめた「オーケンの、私は変な映画を観た!!」が6月26日にいよいよ発売されます。また29日には「男優倶楽部VOL.16」が発売。表紙・巻頭には「69 sixty nine」の安藤政信が登場、また特別企画は“昼ドラ”男優特集です。ご期待ください。

営業部だより

■「アクターズファイル①浅野忠信」「脚本通りにはいかない!」「フェイス トニー・レオン」を重版いたします。ご希望の方はお近くの書店、または弊社営業部までお問合せください。

営業部だより

■巻末広告にもありますように、来る8月21日に、恒例の「映画製作セミナー」を開催します。講師に、人気監督×プロデューサー×俳優をお迎えして、劇場公開作品を作るための方法論をじっくりと語っていただきます。本気で映画作りを志す人必聴のプログラムです。

キネマ旬報

2004年
7月上旬号
No.1408

●発行人
小林　光

●編集長
関口裕子

●副編集長
前野裕一

●編集スタッフ
山田正人
天本伸一郎
滝澤麻衣
神保憲史
川井英司

●広告スタッフ
島崎智明
上田真美

●表紙デザイン・レイアウト
島岡　進

●レイアウト
梅津由子

●発行
株式会社キネマ旬報社
〒106-0045
東京都港区麻布十番
1-2-3　プラスアストル
振替00100-0-182624
TEL 03-3589-8300(代表)
03-3589-8327(編集部)
03-3589-8325(営業部)
03-3589-8329(広告部)
FAX 03-3589-8302
http://www.kinejun.com/

●印刷・製本
三晃印刷株式会社

ISSN 1342-5412

編集後記

■「フォッグ・オブ・ウォー　マクナマラ元米国防長官の告白」は、タイトル通り米国の元国防長官ロバート・マクナマラのドュメンタリーで、大雑把に言うと、彼が軍人として、あるいは国防長官として関係した戦争を回顧し、11の教訓を語ったものである。教訓といっても、「いかにして戦争に勝つか」といった軍人のための戦術ではなく、「人類は殺戮や戦争についてもっと真剣に考えなければならない。同じことを繰り返したいのか?」という発言から始まるように、21世紀を生きる我々に向けられている。マクナマラは問う。「一晩で10万人の市民を殺しても罪に問われない。それは米国が戦争に勝ったからだが、それで許されるのか」。これは太平洋戦争における日本全土の爆撃について語った言葉だが、見る者は当然イラク戦争と重ねることになる。マクナマラから何を学ぶのか。映画は我々に、静かに、そして力強く迫ってくる。　**前野**

コレすごく面白かった！
「フォッグ・オブ・ウォー」
9月11日よりヴァージンシネマズにて

■「ウォルター少年と、夏の休日」予告編でまたまた「ドラゴン　ブルース・リー物語」のテーマが。この曲、「フォレスト・ガンプ」の曲と思っている人、結構いるんじゃないかな。**川井**

■パスポートに韓国の出入国印ばかり押されているせいか、最近は成田の税関で、やたら質問され荷物をチェックされるようになりました。運び屋だと思われているのでしょうか。**神保**

■何かを背負ってるという責任感のあるサミラと、あどけなさの中に鋭い観察力をたたえるハナ姉妹。マフマルバフ家の会話とは一体どんなものなのか?一度、聞いてみたいところ。**滝澤**

■今号表紙は、写真で「スチームボーイ」のイメージの再現を試みてみました。杏ちゃん、スタイリスト阿井さん、ヘアメイク晋一朗さん、カメラ前田さんを始め皆様のご協力に感謝。**天本**

■今年も「夏休み映画特集」を担当し、公開作品が多いことを実感。選択肢が多いことを喜ぶべきか。今年の夏も映画に振りまわされる生活!? 嬉しくもあり悲しくもあり。**山田**

■「スミス都へ行く」の政治家、「大統領の陰謀」のジャーナリスト、「金環蝕」「悪い奴ほどよく眠る」を描く映画作家、これらのスピリットを持つ人たちの大活躍を今こそ期待したい。**前野**

■ひょんなことで墓を買う。家もないくせに、永眠する所はできた。キャンバスを買ったような、宝の地図を手に入れたような、妙な気分だ。たどり着く所は決まった。あとはそこに至る人生を思う通りに描けということか?／総合学習の時間で小社に訪れた小学生女子に映画雑誌を作る意義を問われた。業務の説明に加え、己以外の人の人生を示唆することと答える。**関口**

次号予告

7月下旬号[No.1409]◎7月5日発売◎定価820円(税込)

巻頭特集
「69 sixty nine」
妻夫木聡、安藤政信、李相日監督インタビュー、メイキング・オブ・「69」

作品特集：◎「スパイダーマン2」◎「ドリーマーズ」◎「アメリカン・スプレンダー」◎「丹下左膳　百万両の壺」◎「カーサ・エスペランサ」◎「機関車先生」
特別鼎談：「茶の味」石井克人×我修院達也×浅野忠信

表紙・FACE●トビー・マグワイア　Hot Shots●手塚理美、和久井映見

キネマ旬報バックナンバー在庫一覧

☆＝定価（税込）　送料は各120円（2／下・臨時増刊は160円）

2003

●1386・8月上旬特別号　☆860円
「踊る大捜査線　THE　MOVIE 2」／「マイ・ビッグ・ファット・ウェディング」「沙羅双樹」追悼：グレゴリー・ペック

●1387・8月下旬号　☆820円
「パイレーツ・オブ・カリビアン／呪われた海賊たち」／「コンフェッション」「フリーダ」／「ゲロッパ！」／追悼：キャサリン・ヘップバーン

●1388・9月上旬特別号　☆860円
「HERO」「ドラゴンヘッド」／「ファム・ファタール」／特別企画：韓国テレビドラマ／「木更津キャッツアイ」ルポ①

●1389・9月下旬号　☆820円
「恋は邪魔者」「座頭市」／「フォーン・ブース」／「ロボコン」どう観た「踊る大捜査線 THE　MOVIE 2」／「木更津キャッツアイ」ルポ②

●1390・10月上旬号　☆820円
「陰陽師 II」／「トゥームレイダー2」「サハラに舞う羽根」／リスペクト－中平康／映画本座談会2003年上半期版／「木更津キャッツアイ」ルポ③

●1391・10月下旬号　☆820円
「インファナル・アフェア」／「リーグ・オブ・レジェンド」／「マグダレンの祈り」／「木更津キャッツアイ」ルポ④／「阿修羅のごとく」ルポ前篇

●1392・11月上旬号　☆820円
「キル・ビル」／「ティアーズ・オブ・ザ・サン」／「スカイハイ［劇場版］」／「木更津キャッツアイ」ルポ⑤／「阿修羅のごとく」ルポ後篇

●1393・11月下旬号　☆820円
「阿修羅のごとく」「マトリックス　レボリューションズ」「g@me.」／「昭和歌謡大全集」／「木更津キャッツアイ」ルポ⑥／双葉十三郎が選ぶ日本映画男優100人

●1394・12月上旬特別号　☆860円
「木更津キャッツアイ　日本シリーズ」／「バッドボーイズ2バッド」／「ブラウン・バニー」／「幸福の鐘」／「ヴァイブレータ」

●1395・12月下旬号　☆820円
「ラスト　サムライ」／「ファインディング・ニモ」／「美しい夏キリシマ」／「MUSA」／どう見た「キル・ビル」／特別企画：小津安二郎生誕百年

2004

●1396・1月上旬号　☆820円
「2046」「最後の恋，初めての恋」「ミシェル・ヴァイヨン」／「ジョゼと虎と魚たち」／「10ミニッツ・オールダー」／「アイデン&ティティ」／「すべては愛のために」

●1397・1月下旬新春特別号　☆860円
KOREAN　MOVIE&STAR2004／「ミスティック・リバー」／「着信アリ」「半落ち」／「25時」新春インタビュー：新藤兼人・鈴木敏夫・三谷幸喜・大林宣彦

●1398・2月上旬号　☆820円
「ドラッグストア・ガール」／「シービスケット」「赤い月」／「ニューオーリンズ・トライアル」／「オアシス」／特別企画：祝・主演100本　哀川翔

●1399・2月下旬決算特別号　☆1600円
2003年度ベスト・テン／公開作品リスト／「嗤う伊右衛門」／「この世の外へ　クラブ進駐軍」

●1400・3月上旬号　☆820円
「ロード・オブ・ザ・リング　王の帰還」／「ヘブン・アンド・アース」「東京原発」「グッバイ・レーニン！」「マスター・アンド・コマンダー」

●1401・3月下旬号　☆820円
「ホテル　ビーナス」／「ペイチェック　消された記憶」／「イノセンス」／「花とアリス」／「ピカ☆☆ンチ　LIFE　IS　HARDだからHAPPY」スクリーンで甦る「大脱走」

●1402・4月上旬号　☆820円
「クイール」／「イン・ザ・カット」「殺人の追憶」／「N．Y．式ハッピー・セラピー」／「卒業の朝」／第76回アカデミー賞のすべて

●1403・4月下旬号　☆820円
「恋人はスナイパー《劇場版》」／「ディボース・ショウ」／「ピーター・パン」「バーバー吉野」／映画本座談会2003年下半期／クリント・イーストウッド論

●1404・5月上旬特別号　☆860円
「コールドマウンテン」／「CASSHERN」「キル・ビル Vol. 2」／「ロスト・イン・トランスレーション」　山中貞雄監督入門／特集　イ・ビョンホン

●1405・5月下旬号　☆820円
「世界の中心で、愛をさけぶ」「ビッグ・フィッシュ」「パッション」／対談：犬童一心×山崎努・青島幸男×谷啓

●1406・6月上旬号　☆820円
「トロイ」／「21グラム」／「深呼吸の必要」／「クリムゾン・リバー2　黙示録の天使たち」／日本映画の曲り角

●1407・6月下旬特別号　☆860円
「ブラザーフッド」と夏の韓国映画／「デイ・アフター・トゥモロー」／「天国の本屋～恋火」／「海猿」／スペシャルインタビュー：寺島進

近刊バックナンバー

'04・6月下旬特別号「ブラザーフッド」と夏の韓国映画
☆860円◇送料120円

'04・6月上旬号「トロイ」特集
☆820円◇送料120円

'04・5月下旬号「世界の中心で、愛をさけぶ」特集
☆820円◇送料120円

'04・5月上旬特別号「コールド・マウンテン」特集
☆860円◇送料120円

'04・4月下旬号「恋人はスナイパー」特集
☆820円◇送料120円

'04・4月上旬号「クイール」特集
☆820円◇送料120円

■本欄掲載以外の号の一覧もございますのでご希望の方はハガキ等でお申し込み下さい。

■バックナンバーのお申し込みは、最寄の書店に御注文いただくか、小社宛、現金書留または郵便振替用紙にて、定価に送料をあわせて御入金下さい。また、下記の書店にてバックナンバーを扱っておりますので、御利用下さい。

北上市　ブックスサンワ
仙台市　丸善アエル店
川口市　書泉ブックドーム
千葉県　芳林堂書店津田沼店・多田屋中央店
東京都　八重洲ＢＣ本店・三省堂書店本店・書泉グランデ・書泉ブックマート・書泉ブックタワー・大盛堂書店・リブロ渋谷店・リブロ池袋店・旭屋書店銀座店・教文館・紀伊國屋書店本店・紀伊國屋書店新宿南店・ブックファースト渋谷店・ジュンク堂書店池袋店・ジュンク堂書店プレスセンター店
横浜市　有隣堂横浜東口ルミネ店・有隣堂イセザキ本店
静岡市　戸田書店静岡本店
名古屋　ちくさ正文館本店・リブロ名古屋店・ヴィレッジヴァンガード生活創庫店・ヴィレッジヴァンガードベイシティ
京都市　ブックファースト京都店
大阪市　旭屋書店本店・シネ・ヌーヴォ・ジュンク堂書店大阪本店・紀伊國屋書店梅田本店シネマシネマ
神戸市　ジュンク堂書店三宮駅前店
倉敷市　喜久屋書店倉敷店
広島市　リブロ広島店
福岡市　リブロ福岡店・ジュンク堂書店福岡店
長崎市　メトロ書店アミュプラザ店

キネマ旬報社の新刊

6/26発売

■A5判・並製・約200ページ
■予価:1,575円(税込)

オーケンの、私は変な映画を観た!!

「キネマ旬報」に連載された、大槻ケンヂの
"ヘンムービーのススメ"ともいうべきコラムが
ついに単行本化！
こんな映画の観方があったのか!?
各評論家も目からウロコ、あるいは笑いの渦、
あるいは絶賛の嵐！
映画のツボがひと目でわかる
三留まゆみのイラストもドーンと掲載。

© Mayumi Mitom

ご予約は書店にて キネマ旬報社 http://www.kinejun.com TEL 03-3589-8325(営業部)

★★『オーケンの、私は変な映画を観た!!』刊行記念オールナイト★★

大槻ケンヂのなんじゃこりゃ映画祭

狂気だよ全員集合！ Vol.1

6/26(土)夜22:30スタート

大槻ケンヂがセレクトした
名作、怪作を一挙上映！
トーク&ミニミニライブもあるよ!!

空想科学任侠伝 極道忍者 ドス竜…… 22:40～
(1990・東北新社/ビデオ上映) 監督・原作:永井豪 脚本:芹沢大助
出演:大槻ケンヂ、松井哲也、キューティー鈴木、新小田悦子
幻の大槻ケンヂ初主演作。で、懲りて役者廃業したわけだが。胸に"忍者"と刺繍を入れたドス竜の活躍……それ忍んでねーじゃん!!

江戸川乱歩全集 恐怖奇形人間……… 24:00～
(1969・東映) 監督・脚本:石井輝男 原作:江戸川乱歩 脚本:掛札昌裕
出演:吉田輝雄、由美てる子、土方巽、小池朝雄、大木実
江戸川乱歩の世界を独自すぎる発想で映画化。カルト中のカルト。リピーターもビギナーもさあ一緒に叫べ。「おか～さ～ん!!」

祈りの踊り…………………………………… 2:15～
(1998/16ミリ) 〈ドキュメンタリー〉 監督・脚本・編集・出演:ギリヤーク尼ヶ崎 撮影:櫻田純弘
未だ知られざる怪作！大道芸人ギリヤーク尼ヶ崎の旅を追ったアングラ&ほのぼのロードムービー。まず彼を観てからものを言え。

ねらわれた学園 ……………… 3:35～5:05(終映予定)
(1981・角川) 監督:大林宣彦 原作:眉村卓 脚本:葉村彰子
出演:薬師丸ひろ子、高柳良一、三浦浩一、峰岸徹、手塚真
意味不明のギャグに彩られた不可思議なSF学園サスペンス。なんだかよくわからないが、薬師丸ひろ子は可愛く、峰岸徹は金星人だった80's！

感動はスクリーンから
新文芸坐 池袋東口 歩3分 TEL:03-3971-9422
http://www.shin-bungeiza.com

一般 2,[illegible]00円、情報誌割引 2,400円 新文芸坐友の会・前売券 2,100円
[illegible]当館窓口と[illegible]販売中。※18歳未満の方はご入場できません。

劇場公開作品を作るには どうすればよいか？

キネマ旬報社主催

映画製作セミナー

日時：2004年8月21日（土）11：00〜17：00
会場：恵比寿・SPAZIO2（TEL03-5725-4240）
料金：8400円（税込）

『企画をどのようにして立案し、完成させ、見せるか？』

“作りたい映画の企画がある”“映画をプロデュースしたい”“劇場公開作品を作るにはどうすればよいか？”“映画に出演したい”と考えている人々に向けて、第一線で活躍中の映画監督＆プロデューサー＆俳優が語る、五者五様の映画製作論。具体的な作品の成り立ちに沿って「企画の生み出し方」「シナリオのディベロップ」「資金調達」「撮影現場での役割」「演出／演技について」、また「今求められる企画」など多岐に渡るテーマで講義を行います。奮ってご参加ください。

Lesson1■ 「ジョゼと虎と魚たち」はいかにして作られたのか？〜監督の視点・プロデューサーの視点1〜

講師：犬童一心（いぬどういっしん）氏（映画監督）×久保田修（くぼたおさむ）氏（プロデューサー／ＩＭＪエンタテイメント）

代表作：
「金髪の草原」
「ジョゼと虎と魚たち」
「死に花」

代表作：
「とらばいゆ」
「黄泉がえり」
「ジョゼと虎と魚たち」

Lesson2■ 新作「スウィングガールズ」はいかにして作られたのか？〜監督の視点・プロデューサーの視点2〜

講師：矢口史靖（やぐちしのぶ）氏（映画監督）×桝井省志（ますいしょうじ）氏（プロデューサー／アルタミラピクチャーズ）

代表作：
「アドレナリンドライブ」
「ウォーターボーイズ」
「パルコフィクション」

代表作：
「Shall We ダンス？」
「ウォーターボーイズ」
「タカダワタル的」

Lesson3■ 俳優・監督それぞれの役割

講師：榊英雄（さかきひでお）氏（俳優）

代表作：
「VERSUS―ヴァーサス―」
「あずみ」
「監督感染『終着駅の次の駅』（監督作品）」

※講師・演題はやむなき事情により変更の場合がございます。

申込方法：キネマ旬報社ＨＰの申込ページ（http://www.kinejun.com/events/index.html）よりお申込ください。パソコン環境の無い方は、氏名（ふりがな）・年齢・職業・住所・電話番号・申込人数をご記入の上、下記宛に郵送かFAXにてお申込ください。折り返し、ご入金手続きをご案内いたします。

主催・問合せ：株式会社キネマ旬報社　事業部（月〜金10:00〜18:00）
〒106-0045　東京都港区麻布十番1丁目2-3プラスアストル4F
TEL／03-3589-8326　FAX／03-3589-8301　http://www.kinejun.com　seminor@kinejun.com

全米ロングラン大ヒット！

（5週連続トップ10入り）

"西部劇史上もっともリアルなガンファイト"を目撃せよ！

逃げる場所もない。隠れる理由もない。

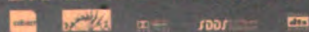
ロバート
デュバル

ケビン
コスナー

アネット
ベニング

ワイルド・レンジ
最後の銃撃

アカデミー賞監督ケビン・コスナー作品

コバルト・メディア・グループ 提供 タッチストーン・ピクチャーズ ティッグ・プロダクション 共同制作 ケビン・コスナー 作品 ロバート・デュバル ケビン・コスナー アネット・ベニング "OPEN RANGE" マイケル・ガンボン マイケル・ジェッター キャスティング ミンディー・マリン C.S.A. 音楽 マイケル・ケイメン 衣装 ジョン・ブルームフィールド 編集 マイケル・J・ダシー ミクロス・ライト 美術 カエ・バックリー 撮影 ジェームス・ミューロー 製作総指揮 クレイグ・ストーパー アーミアン・バーンスタイン 製作 デイヴィッド・ヴァルデス ケビン・コスナー ジェイク・エバーツ 脚本 クレイグ・ストーパー 監督 ケビン・コスナー

提供:MGM 配給:日本ヘラルド映画 www.herald.co.jp

7/3（土）ロードショー

東京 新宿K'sCinema 銀座シネパトス 大阪 ホクテンザ2
名古屋 中川コロナ 福岡 AMCキャナルシティ13 札幌 ユナイテッドシネマ札幌 他、全国ロードショー

価820円 本体781円 雑誌 20721-7/1
4910207210743
00781

トビー・マグワイア／東陽一／アントニオ・バンデラス／手塚理美／和久井映見
坂口憲二 in「機関車先生」／「釣りバカ日誌15」撮影現場ルポ／DVD情報も満載！

キネマ旬報

85th ANNIVERSARY KINEMA JUNPO 1919-2004

7月下旬号
2004 NO.1409

巻頭特集
「69 sixty nine」
妻夫木聡
安藤政信
李相日監督

企画特集
韓国映画の女性たち

スペシャル鼎談「茶の味」
石井克人×我修院達也×浅野忠信

スペシャルインタビュー
木村威夫、木村大作

特集
「スパイダーマン2」「ドリーマーズ」
「アメリカン・スプレンダー」「丹下左膳　百万両の壺」
「カーサ・エスペランサ～赤ちゃんたちの家～」
「機関車先生」

上最大の王》、誕生!!

ブラッカイマー最新作

不滅の伝説から生まれた、世紀の映像プロジェクト!

世界中に《海賊ブーム》を巻き起こした昨年夏の「パイレーツ・オブ・カリビアン」に引き続き、ハリウッドのトップ・プロデューサー、ジェリー・ブラッカイマーがまたしてもスゴイ映画を作ってしまった!「ロード・オブ・ザ・リング」や「ハリー・ポッター」をはじめとするファンタジーの原点となった【西洋史上最大の伝説】——あの《アーサー王伝説》に斬新かつ大胆なアプローチで斬り込み、途方もなく魅力的なヒーローとヒロインが繰り広げる、愛と感動のスペクタクル・ロマンを誕生させたのである。

暗黒の時代——真実の愛が《救世主》を目覚めさせる…。

イギリスがブリテンと呼ばれ、ローマ帝国の支配下にあった時代——ローマ軍の司令官のアーサーは、無敵を誇る《円卓の騎士》を率いて戦っていた。ある日、アーサーは無実の罪で囚われていたグウィネヴィアというブリテン人の女性を救出。彼女の高貴な美しさと強い信念に、アーサーは心惹かれていく。その頃、ブリテンは残虐な侵略者によって滅亡の危機に瀕しており、グウィネヴィアは愛する祖国のために共に戦うことをアーサーに懇願する。その願いは、アーサーの中に眠っていた《王となる宿命》を目覚めさせていく…。

ハリウッド最高のスタッフ&キャストが結集!

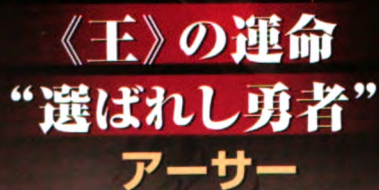
アーサー役には「すべては愛のために」「ゴスフォード・パーク」のクライヴ・オーウェン。彼と恋に落ちるグウィネヴィア役に「パイレーツ・オブ・カリビアン」のキーラ・ナイトレイ。また、「トレーニング・デイ」「ティアーズ・オブ・ザ・サン」のアントワン・フークワ監督をはじめ、脚本に「グラディエーター」でアカデミー賞受賞のデイヴィッド・フランゾーニなど、超一流のフィルムメイカーが結集した。

その少年は伝説の剣を抜き、
救世主の宿命を背負った。
彼の名はアーサー。
史上最強・最大の王——。

7.24(土)
全国松竹・東急系超拡大ロードショー
7.17(土)・18(日) 2DAYS
《特別先行上映》決定!!

2004年・夏——《史

「パイレーツ・オブ・カリビアン」製作ジェリー

《王》の運命
“選ばれし勇者”
アーサー

《王》誕生の鍵
“宿命の王妃”
グウィネヴィア

《王》を守り抜く
“最強の騎士”
ランスロット

キング・アーサー

FACE 04

TOBEY MAGUIRE

トビー・マグワイア

更にパワーアップしたトビーが帰ってきた

取材・構成／横森文　撮影／前田昭二

映画が完成する前は、いろんな噂が流れた「スパイダーマン2」。例えばそのひとつがトビー・マグワイアとキルスティン・ダンストの不仲説や、トビーとジェームズ・フランコとの不仲説。だがそれはどうやらかなりのデマのようで、実際は「1作目よりも和気あいあいとした現場だったよ」とトビーはあっけらかんと言う。

「それに僕はサム・ライミ監督と気が合うしね。今回は本当にスタッフ&キャストのみんながサムのヴィジョンを具体化しようと、一丸となっていた。いわば「スパイダーマン2」という船をまさにサムが船長として仕切っている感じで、非常に気持ちの良い撮影現場だったんだ。ジェームズだっていい奴さ。情熱的で、アーティスティックな役者だ。〝ロサンゼルスで舞台に出演するから観に来いよ〟と言われて行ってみたら、なんと25〜30席くらいしかないすごい小さな劇場でね、自作の芝居をやっていたんだ。「スパイダーマン」のような大作に出るヤツなのに。芝居自体はとてもいい芝居だったし、彼はとても生き生きと演じていて、良かったよ」

腰痛が悪化して、一時期「スパイダーマン2」を降板するとの噂が流れたのも「あれもただの噂に過ぎなかったんだ」という。

「僕の腰痛は何も今に始まったことじゃないんだよ。ずっと前から患っているんだ。ただパート2をやるってことになった時、脚本を読んだら前作よりもスタントがハードだって気がしてね。それで本当に自分でできるのかどうか、スタジオ側に試してみたいとお願いしたんだよ。それが腰痛で降板という噂になったんだ。もちろんスタジオ側は快く承諾してくれたよ。ところが実際にスタントチームとテストしてみたら、前作からハーネス(胴輪・胴体ベルト)は改善されているし、ワイヤの張り方も研究されて替わっていた。つまり1作目よりも全然楽なスタントになっていたんだ。だから何の問題もなくパート2の撮影ができたんだよ」

もちろんクランク・イン前には、前作同様に筋肉をつける必要があった。「シービスケット」では競馬の騎手を演じるために激ヤセした彼だが、今度は筋力アップ。一体、本人にとって痩せるのと筋力アップとどちらがシンドいことなのだろう?

「苦労は同じだね。ワークアウトする時間そのものは一緒だから。ただ行う運動が違うんだ。1日に3〜4時間、週に6日間やるんだけれど、「シービスケット」の時のように痩せる時は心臓に負担を重くかける運動をするんだ。心臓への負担を大きくして心拍数が140なのを170くらいにあげることによって、脂肪も筋肉も燃やしていく。反対に筋肉をつける時は脂肪だけを燃焼させる運動をする。ウエイト中心のものでテンポはゆっくりで、心臓に負担がかからないようにしていく。そういう特別な運動をするんだ。ただ痩せる時の食事は普段の半分くらいしか食べないからね。その点、空腹だから辛いというのはあるかも。だから体重減少のワークアウト中は、一日の終わりになるとヨロヨロしている時があるんだ」

もうひとつ役作りとして「シービスケット」の時もやったというある事を行った。

「確かに今回は続編モノだからね。役作りのために特に新しいリサーチをする必要などはなかったんだ。背景や基本的な性格は前作でもう十分にわかっているし。ただ僕が演じるピーター・パーカーの行動パターンや心理の動きを紙に書いてボードに貼っていく作業はしたよ。それをすると鮮明に理解できて、自分としてもやりやすくなるんだ。あと今回はサムが最初からメロドラマにしようという意向をみせていたからね、役者としてはとてもやり甲斐があるひねりのきいた物語になっていると思う」

確かに作品を見てもらえばわかるが、今回はドラマ重視の内容。アクションよりも比重は完璧に登場人物のドラマによっている。噂では出演シーンがあると言われたリザードンも登場しない。敵はドック・オクのみだ。実はこのドック・オクもパート1に出演を検討されていたキャラだった。

「脚本の段階では出演していたんだよ。とにかく触手がついてヴィジュアルも面白いし、いいキャラクターだからね。前回のグリーン・ゴブリンも悪役として良くできていたけど、仮面をつけて顔が見えなかった分、観客には伝わりづらい悪役だった。でも今回の新たなる敵のドック・オクは顔も見えているしね。とにかく登場人物たちが織りなすドラマが素晴らしいから期待してよ」

「スパイダーマン2」●7月10日より日劇1ほか全国東宝洋画系にて公開 ※42頁より作品特集あり

FACE.

トビー・マグワイア

●1975年、米カリフォルニア州サンタモニカ生まれ。93年に「ボーイズ・ライフ」で映画デビューを果たし、「アイス・ストーム」(97)、「サイダーハウス・ルール」(99)、「ワンダー・ボーイズ」(00) などで演技力を発揮する。またアカデミー賞にノミネートされた「シービスケット」(03) では出演のほかに製作総指揮も務めている。

2004 No.1409 7月下旬号 目次

表紙●トビー・マグワイア 撮影 ●妻夫木聡

フロントインタビュー67
映画監督

東陽一

沖縄の人は50年前の記憶を〝過去〟にはしない

沖縄の風土の中を、魂の存在を告げるような〝風音〟がゆったりと流れていく。ここでは沖縄的な音色は一切登場せず、映像に寄り添うのは血を沸騰させるようなルーマニアのジプシーバンドの音楽と、その熱を静かに鎮めるバッハの〈ゴールドベルク変奏曲〉。
東陽一監督の新作「風音」は、69年に記録映画「沖縄列島」で長編デビューした東監督が、21世紀的世界観で沖縄を描いた心がざわめく作品である。沖縄での先行上映を2日後に控えた監督にお話を伺う。

取材・文＝北川れい子
撮影＝稲垣純也

原作者の手による美しいシナリオ

「沖縄で映画を撮りたい気持ちはずっとあったんですよ。でもなかなか撮りたいと思うものが見つからなかった。沖縄のようなところだと自分でオリジナルな脚本は書けない。この企画はまずプロデューサーの山上(徹二郎)さんが目取真(俊)さんの原作に惚れ込んじゃったんですよ。ぼくも面白いと思ってね。それで原作者に脚本を書いてもらうという話になったんですが、原作者である小説家に脚本を書かせるなんて発想は、ぼくは単独で考えられなかった。危いもの(笑)。原作に惚れたプロデューサーの冒険ですよ」

沖縄の芥川賞作家、目取真俊。その短編「風音」と「内海」を自らアレンジした脚本を読んだ時、原作のふくらませ方に感動すると同時に、やっぱりこう書いてきたか、小説家のシナリオだな、とニヤリとする感じもあったという。

「しかしシナリオの書き方に決まった法則があるわけではない。ぼくはむしろ、少し壊れたシナリオの方が好きなんですよ。むかし、「サード」(78年)を寺山修司の脚本でやった時なんか、ある意味、脚本がどこかで壊れちゃっている。その方が監督としてはやり易いところもある。自分で新たに組み合わせができますから。今回の目取真さんの脚本は、秀れた小説を書く人だけに、とても美しいシナリオなんです。ことばが美しい。ですから脚本を読むと、それぞれ頭の中で映画がすでに出来上ってしまうんですよ。そういう脚本というのはいくら脚本通りに撮っても、ことばの表現よりも映像が下回るように見えてしまうこともある。これ

「風音」
●原作・脚本／目取真俊
●出演／上間宗男、加藤治子、つみきみほ、光石研
●7月31日よりユーロスペース、テアトル新宿（レイトショー）にて
桜坂シネコン琉映(沖縄)にて公開中

はエライことになった、って（笑）」
映画は、それぞれの記憶に生きている世代の異なる人々が、全てを自然のなりゆきとして受け入れる沖縄の日常の中で、その記憶と同化する様子が描かれる。

沖縄戦で死んだ初恋の人の遺骨を探し続ける本土の老婦人（加藤治子）。夫の家庭内暴力に耐えかねて実家に逃れてきた若い母親（つみきみほ）と少年。この2組に、沖縄戦を体験した漁師（上間宗男）や、少年の祖母（吉田妙子）、地元の少年たちが絡んで進行する。自然の美しさは言うまでもない。

そしてこの映画の影の主人公である、海際の洞窟に置かれたひとつの頭蓋骨。銃弾痕の残る頭蓋骨は、風が通過する時、不思議な音を響かせ、地元の人たちはこの音を〝風音〟と呼んで親しみ、頭蓋骨には「泣き御頭（うんかみ）」と名付けて畏れ敬っていた。

ひがし・よういち／1934年和歌山県生まれ。岩波映画製作所に入り、69年「沖縄列島」で長編監督デビューする。78年の「サード」ではキネマ旬報ベスト・テン監督賞をはじめ多くの映画賞に輝いた。その他の監督作は、「化身」（86）「橋のない川」（92）「絵の中のぼくの村」（96・ベルリン映画祭銀熊賞）「わたしのグランパ」（03）など。

〝沖縄映画〟に特化したくはなかった

東監督は、初の長編劇映画「やさしいにっぽん人」（71年）でも、主人公の青年を沖縄・集団自決の生き残りに設定し（脚本は東監督と前田勝弘と共同）、記憶といま生きている現在との距離を描いていたが、沖縄の小さな村を舞台にした「風音」では、記憶にほとんど時間的距離はない。

「それは沖縄の人たちが実際にそうなんです。おじいたちもふだんは過去のことなど語らないけれども、何かで50年前のことを話しだしたりすると昨日のできごとのように鮮明なんです。それは記憶を過去のものにしていないからなんですね。それと今回、ぼくは、沖縄を〝特化〟したくなかった。これは沖縄の映画ですよ、というものにする気はなかった。どこの人にでも通用する世界性を持ってい

ないと、いかに深刻な問題を扱おうが、いかに文化的に深く描こうが、参考文献程度の映画にしかならない。音楽にしても、ぼくは沖縄映画に三線（サンシン）や沖縄民謡というのがダメなんです。これはぼくがよく持ち出す例なんだけれども、イタリアのパゾリーニ監督は、ギリシャ悲劇（「アポロンの地獄」67年）を撮っているのに日本の尺八を使っている。ある意味で音楽は映像と〝衝突〟した方がいいんです。今回のジプシーバンド〈タラフ・ドゥ・ハイドゥークス〉は、山上プロデューサーがいくつかCDを持ってきた中の曲で、これならいけると。あの血を沸き立たせてくれるような音楽が、画面ではハッキリと語っていない内側の部分を語ってくれるかもしれない、と。でもそれだけではダメだという直感があったので、バッハの〈ゴールドベルク変奏曲〉を入れたのです。ま、必ずしもお客さんの好みに合うとは限りませんが、音楽の選び方に対しては一貫してぼくのポリシーはあるんです」

　不思議なのは、人物たちそれぞれの記憶は苦くて切ないものばかりで、描き方次第では暗く重いものになりかねないのに、どの人物も、そのたたずまいや描かれ方がさりげないこと。殺人事件も起こるが、何だかこれも自然の事故と思えてしまう。全てが日常の流れの中で描かれているのである。

「いや、それは原作者もそういうところがあるし、ぼく自身の体質というか、考え方がそうですから。人間世界で起こるいろんな事件や悩みというのは、TVドラマみたいに、そこだけが突出して音楽まで鳴り出すような、そんな世界じゃないわけですから」

　今回、編集も担当、撮り上がった映像を前にした時は、いかにシナリオを忘れるかが大切だという。ここに並んだ映像の素材を使って、自分はどういう映画を作りたいのか。その答えを見つけるためにも、編集にはたっぷり時間をかけたい。

「ええ、子供たちのロング映像のラストのカット。評判いいですね。あれ、ロケの初日に撮ったんですよ。ラストシーンで使うと決まっていたわけではなく、シナリオのラストも違うシーンだったんですが、目取真さんも、あのラストは正解だと」

　ところで東監督は昨年「わたしのグランパ」で新人・石原さとみに幸運なスタートを切らせたばかりだが、今回もとびきり初々しい少女に女優への道を拓いている。加藤治子の少女時代を演じている加藤未央。セーラー服にもんぺ姿の彼女が、出陣の挨拶に来た特攻隊員（細山田隆人）を、凛々しい言葉で見送るシーンの美しさ。少女の純粋な魂がキリリと胸に突き刺さる。

「彼女、いいでしょう。うまく育てば石原さとみ以上になります。いや、でもね、最近、子供や少女ばかりで、濃厚なベッドシーンのあるような映画はやらせてくれない（笑）。やりたいですよ。男と女の切ない恋物語。『冬のソナタ』を超えるような作品（笑）」

「シルミド」のクライマックスもチョンジュで撮影された

上2つともキム・ギドク監督「コースト・ガード」の撮影風景。

チョンジュ・フィルム・コミッションの現在と未来

その2 チャン・ドンチャン事務局長インタビュー

文・佐藤結

前号では、チョンジュ・フィルム・コミッション(JJFC)が地域の特性を生かして多くの映画撮影の誘致に成功していることを紹介した。引き続き今回は、地元に映画産業を根付かせようとするJJFCの計画についてうかがった。

「現在、韓国には7つのFCがあり、それぞれに特色が出てきています。例えばソウルの場合は、ロケハンや撮影に同行することよりも行政的な手続きが主な仕事になります。また、プサンは国際的プロダクションに焦点をあてていますし、クァンジュ(光州)は映画だけでなく、アニメーションやその周辺の映像文化にまで関心をもっています。その中でJJFCは、映画の撮影を誘致するだけでなく、地域にある映像関連の学校の卒業生たちが地元で就職できるような映像産業を作っていこうとしています。手始めとしてCG、編集、サウンド作業などができるポスト・プロダクション・モールを建設し、8月にオープンを予定しています。この施設はレンタルするだけでなく、一定の審査をパスした作品には無料で使ってもらい、映画の興行成績によって歩合をもらうというような現物投資のシステムも考えています」

その他、映画プロデューサーとしての経験を生かしたユニークな人材育成プログラムも計画中だ。

「シナリオ公募を行い、優秀作に選ばれた5人程度の人たちと10ヶ月間契約します。その人たちとプロデューサー・スクール(秋開校予定)の修了生が一緒に創作集団を作り、実際に興行的に成功するようなプロジェクトを製作会社と一緒に進めてもらう。その中で成功したチームは独立して会社を作る。こうして創作集団がアメーバのように分裂していくシステムを作り、この地域の映画産業の基盤にしていきたいと思っています」

さらに、2006年の完成をめざして国内最大規模の総合映画撮影所の建設も始まるほか、地元で撮影した作品の試写会や、夏の夜に行われる市民対象の野外無料上映会など、JJFCの活動は多岐にわたる。

「FCは地域経済を活発化させ、観光産業にまで影響を与える非常に経済的な組織だといえます。少ないお金で大きな効果を得ることができるので、地方自治体が真っ先に取り組むべき事業ではないでしょうか。

チョンジュは日本より物価も安いですし、看板を架け替えれば、60年代の日本の街も作ることができますので、少し昔を舞台にした映画や韓国の風景が必要な時は、いつでも撮影に来てください」

オーバーハウゼン国際短編映画祭で金井勝氏が受賞

文・那田尚史

日本がゴールデンウィークで賑わっていたさなか、4月29日から5月4日にかけてドイツで「オーバーハウゼン国際短編映画祭」が開催された。

　このフェスティバルは基本的に撮影から編集まで一人で行う個人映像の世界では老舗として知られ、今回は50周年に当たるために、オープニング・パーティにはシュレイダー首相がスピーチするという力の入れようだった。

　この一事を見ても、いかにドイツが文化大国であるかが分かる。例えば、山形国際ドキュメンタリー映画祭に、小泉首相が挨拶に現れる姿が想像できるだろうか。芸術補助金制度に対する取り組みにしても日本は先進国の中では最下位に位置しており、相変わらず文化三流国である。まったく嘆かわしいことだ。

　それはともかく、このフェスティバルでは山田勇男作品が特別上映されただけでなく、5000本を超えるコンペティション部門応募作品の中から、金井勝（かないかつ）氏の「スーパードキュメンタリー　前衛仙術」（2003年製作）が国際批評家連盟賞を獲得した。日本人としてこの快挙をともに喜びたい。

　受賞作品について少々解説しよう。

　この作品は60歳を過ぎた主人公（金井勝氏本人が演じる）に若いお嫁さんができ、庭に花々が咲き乱れ、ぶどうが実り、アケビが実をつけ、キジバトが庭に営巣し、家の北側にマンションが出来て北風を防ぐ、といった日常の中で起こった実際の幸運を、金井氏が「仙術」で獲得した奇跡である、という発想に基づいて作られた作品である。

「スーパードキュメンタリー　前衛仙術」

　小説の世界には「心境小説」というジャンルがあるが、この作品も老境を迎えた金井氏がその澄み切った心境から日常を眺め、「日々是好日」の思いを込めて作ったものだろう。言い換えれば、日常のふとした出来事が、実は奇跡なのである、という宗教的発見に基づいた作品で、普通なら抹香臭くなるのだが、それをユーモアに溢れた仙人の術であるとしたところに、金井勝の真骨頂がある。

　金井勝は60年代末から70年代前半にかけて、「無人列島」（リヨン国際ドキュメンタリー映画祭グランプリ）「GOOD−BYE」「王国」などの傑作を世に放ち、そのシュルレアリスティックなイメージの挑発性において寺山修司としばしば比較されるカルト監督だったが、十数年の沈黙の後、「夢走る」（メルボルン映画祭最優秀短編映画賞）でカムバックし、日本の個人映像、実験映像のトップランナーとして活躍し続けている息の長い映像作家である。

　ところで、この際に一つ抗議し

表彰式の様子

ておきたいことがある。それは新聞を代表するマスメディアがこの快挙を一切とりあげようとしない事実である。

私は購読している東京新聞の本社編集部と朝日新聞の支局に電話をかけて金井氏の受賞を知らせ、ぜひ記事にするように要請した。電話での感触は非常に良かったので期待して待っていたが、一向にその記事が出ない。東京新聞には再度電話をかけて、必ず返事をよこすことを約束したのだが、待てど暮らせど返事がなかった。

おそらく新聞記者から見れば、「オーバーハウゼン国際短編映画祭？　なにそれ？」といったところなのだろう。

改めて言いたい。新聞の美術批評は現代アートばかりとりあげるのに、なぜ「現代アートとしての映像」については無関心なのだろう。映像を商業主義の鎖から解放し、絵画や文学のような純粋な個人表現の対象にしようとする努力は1910年代からすでに始まっており、現在日本中の大学のほとんどの映像学科では個人映像作家が教鞭を執っている。実際、金井勝氏も大学講師である。カンヌ国際映画祭やアカデミー賞などに集まる劇映画、言い換えれば「芸能人によるお芝居映画」に関してマスメディアは必要以上の情報を与えるが、企業の作るお芝居映画は映像芸術の可能性のごく一部分に過ぎないのだ。新聞に限らず映像専門のジャーナリズムすら、このことに対する認識が欠如しているのではないだろうか。

結局、人間というものは市井に隠れた芸術家に目を注ぐことよりも、有名人・芸能人の動向に関心があるのだろう。スターや芸能界に対する大衆の憧れは「偶像崇拝」という人間の原始心性に奥深く根ざしている。しかし、メディアに関わる者はそういう大衆性から脱し、純粋な作品主義の立場から市井に埋もれた芸術家を探し出し評価するだけの見識と審美眼を持たねばならない。

カンヌやアカデミー賞その他の企業映画の動向はテレビの芸能番組にでも任せておいて、新聞はもっと高みに立った視点から硬派な情報を提供して欲しいものだ。

金井氏の快挙を祝うとともに、マスメディアの姿勢に苦言を呈して筆をおく。

HOLLYWOOD

|ワールド・ニュース|ハリウッド|井口健二| Kenji Iguchi |

©Vince Bucci/Getty Images/AFLO FOTO AGENCY ©Sean Gallup/Getty Images/AFLO FOTO AGENCY ©Michel Porro/Getty Images/AFLO FOTO AGENCY ©Carlo Allegri/Getty Images/AFLO FOTO AGENCY

シャーリーズ・セロン　フランシス・マクドーマンド　マット・デイモン　ジョージ・クルーニー

シャーリーズ・セロン主演アクション映画に オスカー女優F・マクドーマンドが共演

4月下旬号でも紹介した本年度アカデミー主演女優賞シャーリーズ・セロンの新作"Aeon Flux"に、96年度の同賞受賞者フランシス・マクドーマンドの共演が発表された。この作品は、前回も紹介したようにMTVで放送されているアニメーションシリーズを実写映画化するものだが、この製作を担当しているのが「ターミネーター」などのゲイル・アン・ハード、そして監督が「ガールファイト」のカリン・クサマということで、まさに女だらけのアクション映画になりそうだ。お話は、数100年後の未来が舞台。疫病により人類が死滅しかけている時代の未来都市を背景に、時の政府に反抗するアクロバティックなヒロインが活躍する物語で、このヒロインをセロンが演じ、マクドーマンドはヒロインが参加する反抗組織のリーダー役。ただし、ヒロインは自分の行動に疑問を持っているということだ。撮影は8月にベルリンで開始の予定。オスカー女優2人の共演も楽しみだが、アニメーションの原作からは「マトリックス」以上のVFXアクションが期待できそうで、これを新人監督がどう捌くかも注目される。ここにハードの後ろ楯は大いに頼りになりそうだ。アメリカ公開は05年に予定されている。

マット・デイモンとジョージ・クルーニー "Ocean's 12"に続く共演作

「オーシャンズ11」で共演し、さらに続編の"Ocean's 12"でも共演しているマット・デイモンとジョージ・クルーニーの共演作が、もう1本発表されている。作品の題名は"Syriana"。中東を舞台に、石油の利権を巡って国際的な陰謀が繰り広げられる「トラフィック」のような物語ということで、CIAによる外国政府への介入の実体が描かれる。元CIAエージェントのロバート・ベアが著した"See No Evil : The True Story of a Foot Soldier in the CIA's War on Terrorism"からインスパイアされた脚本ということだ。そしてデイモンは、この作品の中で、アメリカ系石油資本の担当役員を演じ、クルーニーは原作者でもあるベアを演じることになっている。脚本監督は、「トラフィック」の脚本でオスカーを受賞したスティーヴン・ゲイガン。彼は昨年公開された「ケイティ」の監督も務めている。なお、本作はクルーニーらが主宰するセクション8で製作、ワーナーが配給する計画だが、ワーナーではこの他にも、中東石油とテロを背景にした作品が、ブラッド・ピット主宰のプランBの製作と、デイヴ・カラハン脚本でも計画されているということで、時ならぬ社内競作になりそうだ。

WORLD NEWS

TVアニメ「Samurai Jack」

「The Rule of Four」原作本

「ファイナル・デスティネーション」

暗礁に乗り上げていた『鉄腕アトム』の映画化ようやく再始動？

計画が発表されてから久しい『鉄腕アトム』"Astroboy"のハリウッド版に動きが出た。この計画は97年に発表され、当時はトッド・オルコットによる脚本も用意され、一旦はゴーサインも出たが、その直後に「A.I.」の計画が発表されて頓挫していた。その計画の再始動は脚本からで、これをザ・ロック主演の映画化も予定されている『Samurai Jack』や、劇場版が製作された『パワーパフ・ガールズ』などのTVアニメーションを手掛けるジェンディ・ターテイコフスキーが担当することが発表されている。なお映画化は、一時はオールCGIによる計画も報告されたが、現在はアニメーションと、アニマトロニクスと実写の混合による撮影が検討されているということだ。また製作には、マペッツの創始者のジム・ヘンスン ピクチャーズの参加も発表されている。

ベストセラー小説『ダ・ヴィンチ・コード』の映画化計画に動きあり？

大ベストセラーの兆しも見せてきた『ダ・ヴィンチ・コード』のコロムビアでの映画化計画については、昨年8月下旬号で報告しているが、それと同様の中世の作品に隠された謎を巡って、現代に起きる事件を扱ったスリラー作品の計画がワーナーから発表された。この作品は"The Rule of Four"という題名で、イアン・コールドウェル、ダスティン・トマスンの共著による小説の映画化権が契約されている。内容は、15世紀に書かれたHypnerotomachia Poliphiliという文書の解読を進める4人の研究者が、そこに秘められたローマ帝国の財宝の情報を見つけ出し、それに絡む殺人事件に巻き込まれるというもの。脚本家も未定だが、他にも似た内容で"Daughter of God"という作品の計画も発表されており、競作ともなれば計画が早まることもありそうだ。

「ファイナル・デスティネーション」シリーズ第3弾でモーガン＝ウォンが復活

00年に公開され、全世界で9000万ドル以上を稼ぎ出したと言われる「ファイナル・デスティネーション」の第3作が計画されている。このシリーズでは、第1作はグレン・モーガン脚本、ジェームズ・ウォン監督で作られたが、第2作の「デッド・コースター」に彼らはタッチせず、この作品も全世界では7000万ドル以上を稼いだとは言うものの、ファンの目にはテーマが消化不良で、ちょっと物足りない作品だった。そこで発表された第3作にはモーガン＝ウォンのコンビが復活するもので、彼らの基本コンセプトを活かした作品を期待したい。因みに彼らは、第2作の製作時にはジェット・リー主演の「ザ・ワン」を手掛けていた。なおこの第3作は、3Dで作られるという情報もあるようだが、いろいろなものが飛び散るこのシリーズでは、かなり強烈になりそうだ。

http://www.enpitu.ne.jp/usr4/47635/も見てください。

「僕の彼女を紹介します」

チョン・ジヒョン

大ヒットコンビが放つ「僕の彼女を紹介します」

「シルミド」「ブラザーフッド」以降の韓国映画で最も期待が高かった新作といえば、「僕の彼女を紹介します」をおいて他にないだろう。「猟奇的な彼女」のクァク・ジェヨン監督とチョン・ジヒョンが再びコンビを組んだこと、プロデューサーが香港をベースに「HERO」など中華圏を股にかけた製作活動を成功させてきたビル・コンであること、そして韓国映画としては未曾有な、韓国、香港、中国などアジア各地での一斉公開を実現したことなど、なるほど事前の話題性には事欠かなかった。

しかし6月初頭の公開を目前に、計らずももう一つの"話題性"がそこに付け加わった。事前の試写での反響が押し並べて悪かったからだ。そのあまりの酷評に慌てた韓国の配給会社は、封切り間際になって急遽15分ものカットを施した〈劇場公開版〉を作成したほど。それでも「僕の彼女〜」は、公開1週目の週末こそ同時公開の「デイ・アフター・トゥモロー」をも上回る観客動員第1位に踊り出たものの、2週目の週末には早くも約40%もの動員低下に見舞われている。

その〈劇場公開版〉でさえ、どこか「男たちの挽歌」時代のツィ・ハークの束縛から逃れ、確立した名声を基により自由な立場を確保した直後のジョン・ウー映画のような"締まりの無さ"が支配している。雨の場面や泣く女主人公への恥知らずな偏愛、「猟奇〜」へのオタク的目配せ、ヒロインを囲んでグルグル移動するカメラ（さらに今回はヘリ撮影を多用できる環境まで手中にし、撮影の締まりの無さは極限的に増大した)、加えて脚本の練りの浅さも相俟って、全体に"節度を欠いた「猟奇的な彼女・前伝」"とでもいった印象が拭いきれない。

けれど不思議なことだが、それでも「僕の彼女〜」を再度見たいと誰もが思うだろう。理由はただ一つ、チョン・ジヒョンの稀有な魅力ゆえ。その魅力をフィルムに定着する点に於いて、クァク・ジェヨンが韓国で突出した能力に恵まれていることは否定できない。「猟奇〜」でも断片的には示されていたことだが、「僕の彼女を〜」で彼は、イケテなさこそチョン・ジヒョンの魅力であることを悟り、そのイケテない瞬間をカメラに収めることに賭けた。さらに宣伝用ビジュアルでも、美しい彼女ではなくイケテない彼女を押し出すことに徹底。そのイケテなさを1時間以上にわたって眺められるだけで、「僕の彼女〜」の欠点の全ては許してもいい気にさせられてしまうのだ。

WORLD NEWS

「犬と歩けば」

「スキャンダル」

上海国際映画祭各賞をアジア映画が席巻

東京国際映画祭と共にアジアの〈A級国際映画祭〉にカテゴライズされている映画祭である第7回上海国際映画祭が、6月13日に閉幕した。コンペ部門でグランプリに輝いたのはイラン映画「TRADITION OF LOVER KILLING」。審査員特別賞は中国の名カメラマン侯咏の監督作で章子怡主演の「茉莉花開」、最優秀監督賞は「スキャンダル」のイ・ジェヨンが受賞した。今年から上海国際映画祭はアジア圏映画界へ貢献・寄与する姿勢をより強くアピールし始めていたが、今回の主要3賞のアジア映画による独占という結果も、その方向性に沿ったものとなった。なお「スキャンダル」は、最優秀音楽賞、最優秀音響効果賞も受賞。

またアジア指向の目玉として導入されたアジア新人賞は、最優秀監督賞に、香港国際映画祭でもグランプリ他を受賞した「雲的南方」の朱文と、「マイ・ガール」(日本公開仮題は「ぼくの恋人」)でデビューしたタイの新人監督6人(コングリット・スリーウィモル、ソンギョス・スグマカナン、ニティワット・タラトーン、ヴィジャー・コジュウ、ヴィタヤ・トングユーヨン、アディソール)の両者を選出。最優秀作品賞は篠崎誠の「犬と歩けば」が受賞した。

コンペ部門では日本から黒木和雄監督、またアジア新人賞には佐藤忠男氏が審査員として参加。またアジア新人賞の方には『小津安二郎映画の詩学』『Planet Hong Kong』等の著者デイヴィッド・ボードウェルも3人の審査員の一人に名を連ねた。

上海国際映画祭は、これまでそのAカテゴリーという位置付けに相応しい評価は得られておらず、どちらかというと問題山積みの映画祭として知られてきた。今回もプログラムの弱さ(中途半端に古い作品が多い)やコンペのいちばんの注目作「茉莉花開」上映の急遽キャンセル(とその後の告知不足の環境下での臨時上映)など問題は散見されたが、一方で重要な変化の徴も匂わせた。特に変化を物語るのは、アジア新人賞受賞の朱文はじめ、王小帥、賈樟柯など、かつてこの映画祭には無縁だったはずの"地下監督"たちがオフィシャルなゲストとして顔を揃えたこと。依然として無認可中国映画が上映されないことには変わりないが、彼らのような新世代の有力作家たちをもこの映画祭に取りこんでいければ、将来は中国映画の最新状況を一目瞭然に把握できる貴重な場として成長していくことができるだろう。

キム・ギドク

「密愛」

「スリー　モンスター」

韓・日・仏の合作となるキム・ギドク監督最新作

先頃閉幕したカンヌでは、コンペだけでなくマーケットでも韓国映画が注目を集めた。日本でも作品が続けて公開される予定のキム・ギドク監督は、次回作「3番アイアン」の製作費の大半を日本とフランスから調達することに成功。空き家を移動しながら生きていた男が、暴行で記憶を失った女性と恋に落ちるというこの作品は、脚本さえ完成していない状態だったというが、シノプシスだけで製作資金が集まったため、早速、撮影に入るという。また、「友へ／チング」のクァク・ギョンテク監督が再びチャン・ドンゴンと組む「台風」、「ブラザーフッド」のウォンビンが主演する「うちの兄貴」も日本での配給が決定。いずれも未完成の作品ながら、日本のバイヤー間の競争でかなりの高額で配給権が売却された模様。

国際派女優キム・ユンジン米国テレビドラマに進出

「密愛」以来、目立った活動をしていなかった女優キム・ユンジンが、アメリカのテレビドラマに出演することが明らかになった。昨年12月にＡＢＣと専属契約を結び、今年３月にはパイロット版の撮影を終えていた彼女だが、今回、連続ドラマに出演することが正式に決まったとのこと。これから本格的な撮影が始まるドラマ『ロスト』は無人島に飛行機が不時着した後、生き残った13人が脱出のために奮闘する姿を描く作品。キム・ユンジンは英語のできないふりをする韓国人役ということだが、実は彼女は10歳の時アメリカに移民し、ボストン大学の演劇学科やオックスフォード大学付属研究所で演技を学び、ブロードウェイでも活躍した経験を持つので、当然、英語も堪能。「ロスト」はアメリカで９月から放送予定。

昨年に引き続き今夏もホラー映画がまっさかり

「箪笥」「狐怪談」がヒットした昨年に続いて、この夏もホラーが続々公開される。今年は特に新人監督の作品が多く、死体の顔を修復する“復顔”をテーマにした「フェイス」（６月11日公開）、「リメンバー・ミー」のキム・ハヌルががらりと印象を変えて登場する「霊」（６月18日公開）、実在の人間をモデルに人形を作る主人公が登場する「人形師」（７月末公開）、ベトナムの戦場を舞台にした「アール・ポイント」（８月公開）と４本を数えている。その他、「ボイス」「友引忌」でホラーの第一人者となったアン・ビョンギ監督の新作「焚身娑婆」（７月16日公開）、パク・チャヌク監督、三池崇史監督、フルーツ・チャン監督の作品が並ぶオムニバス「スリー　モンスター」（８月公開）も公開を控えている。

ソウル週末興行成績 6.19 6.20

順位	作品	動員
❶	「シュレック２」（６月18日）	24万人
❷	「デイ・アフター・トゥモロー」（６月４日）	8万3400人
❸	「霊」（６月18日、韓国）	６万4500人
❹	「トロイ」（５月21日）	４万3186人
❺	「僕の彼女を紹介します」（６月４日、韓国）	３万8524人
❻	「フェイス」（６月11日、韓国）	２万3500人
❼	「The Prince & Me」（６月18日）	１万1235人
❽	「モンスター」（６月18日）	8000人
❾	「デッドコースター」（６月11日）	3900人
❿	「マッハ！」（５月26日）	187人

EUROPE WORLD NEWS

| ワールド・ニュース | ヨーロッパ | きむらひろみ | Hiromi Kimura |

"Ma mṁme"

母と息子の切ない関係を南の島を舞台に描いたクリストフ・オノレ監督作

クリストフ・オノレの新作"Ma mṁme"は、今年のカンヌのオフィシャル・セレクションから洩れたことに対し監督ら製作陣が映画祭開催局に異議を申し立てる運動をしている。確かに見た後にずっしりとした重みがあり、フランス代表として出品されたとしても少しもおかしくない。ジョルジュ・バタイユの「わが母」を出発点に、自らも作家でありこれが監督長編2作目のオノレが紡ぐ母と息子の妖しく切なく美しい物語。イザベル・ユペールとルイ・ガレル（ベルトルッチの「ドリーマーズ」で注目を浴びた、仏人監督フィリップ・ガレルの息子）のコンビは、"退廃的""不健康"などという言葉を越え、血と肉で強く結ばれる母子を見事に演じる。意図的に使われた粗い画質、南の島という状況設定が、時と空間の中に私たちを迷わせ、現実と非現実の狭間に誘い込む。

"Poids léger"

俳優として成長したデュヴォシェル主演"Poids léger"

今年カンヌの〈ある視点〉部門に出品されたジャン＝ピエール・アメリスの"Poids léger"では、プロボクサーを目指す青年を演じるニコラ・デュヴォシェルの活躍が目覚しく、99年にエリック・ゾンカ監督（「天使が見た夢」）作品「さよならS」で注目を浴びた彼の役者としての成長がうかがえる。主人公は、両親を亡くし、その破壊的な性格が災いして、実の妹（昨年ジル・マルシャン監督の「誰がバンビを殺したの？」で注目を浴びたソフィー・キントン）にも恋人にも見放され、兄のように頼っていたコーチまで遠く離れる、という孤立無援の状況に陥る。その後の物語展開に疑問が残るのは、アメリスの脚本の甘さにある。ただ射るような目つきをして街を徘徊するデュヴォシェルは、迫力ある演技で私たちを圧倒する。

"Rosenstrasse"

ベルリンの収容所で起きた解放運動にスポットをあてた史実に基づく物語

マルガレーテ・フォン・トロッタの"Rosenstrasse"は、ヒットラー政権下のベルリンで、ユダヤ教という異教徒と結婚した妻たちが、ゲシュタポに捕らわれた夫たちの釈放のために運動を起こす、という史実に基づき、貴族出身でユダヤ人バイオリン奏者と結婚した女性（カーチャ・リーマン）を主人公に仕立てた。物語は現代のニューヨークで始まる。当時主人公に助けられたユダヤ人少女の娘が、「母親の過去を知りたい」という好奇心から、ベルリンの母親の恩人を捜し当てる。その老女の回想から、ベルリンの中心街にあったローゼンストラスという収容所と、夫の救出に全力を尽くした妻たちの存在を知らされる。史実の紹介に忙しくて、演出の存在感が希薄なのが気になったが、それでも主演のリーマンは昨年のヴェネチアで女優賞を獲得している。

「犬と歩けば　チロリとタムラ」

「犬と歩けば」が上海映画祭で受賞

コリコの田中直樹が主演する映画「犬と歩けば　チロリとタムラ」(篠崎誠監督) が、第7回上海映画祭（6月5日〜13日）でアジア新人映画部門の最優秀作品賞に選ばれた。同映画祭は世界11大映画祭のひとつで、アジアでは東京と2つしかないAクラスにランクされている。同部門にノミネートされた10本の中から、田中の演技が高く評価された、という。篠崎監督は「田中さんが評価されたことが何よりうれしかった」と喜んでいる。計17本が出品されたコンペ部門には、竹内結子が主演した「天国の本屋〜恋火」(篠原哲雄監督)、歌舞伎俳優の中村福助が出演する「娘道成寺」(高山由紀子監督)が参加したが、無冠に終わった。同映画祭では、第4回で山田洋次監督が「学校Ⅲ」で最優秀監督賞を、第6回では「リリイ・シュシュのすべて」(岩井俊二監督) が審査員特別賞を獲得している。

「下妻物語」

「下妻物語」が世界7カ国で公開決定

深田恭子が主演する映画「下妻物語」(中島哲也監督) が世界7カ国で公開されることが確実となった。同映画は18世紀、ロココ時代のフランスに生まれたかったと夢想するロリータ少女が、田園が広がる茨城・下妻を舞台に、趣味も生き方も違うヤンキー娘（土屋アンナ）と友情を育む青春ストーリー。5月、カンヌ国際映画祭のフィルムマーケットで「カミカゼ・ガール」とのタイトルで上映され、各国から配給オファーが寄せられた。米国、イタリア、スペイン、オランダ、中国、韓国、タイでの上映が確定的で、さらに増える可能性もあるという。また、チェコのカルロヴィヴァリ、独ハンブルク、伊トリノ、ベルギーのフランダース、ブリュッセル、米ハワイ国際映画祭でも上映される。国内では全国156館で公開され、興行は好調。東宝では興収10億円を目標にしている。

「バトル・ロワイアルⅡ【鎮魂歌】」

「BRⅡ　特別編」のDVD発売が無期延期

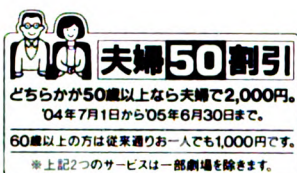
東映ビデオは、6月1日に長崎県佐世保市で起こった小6の同級生による女児殺害事件を受け、9月に予定していた「バトル・ロワイアルⅡ　特別編 REVENGE」(深作健太監督) のDVDとビデオの発売を無期延期することを決めた。レンタル、セル用合わせて3万〜5万本を出荷予定だった。この事件では、加害女児が深作欣二監督による前作ビデオに影響を受け、ホームページに中学生同士が殺し合うという内容の自作小説を掲載していたことなどが報じられていた。同社では「諸般の事情により」としているが、世論動向をみながら議論した模様。今年3月には同映画に刺激を受けた中3生10人が、東京・大田区の区立中学の放送室を占拠し、威力業務妨害容疑などで逮捕される事件も起きている。同DVDは昨年7月に公開されたシリーズ2作目の映画に未公開映像約20分を加えたもの。

WORLD NEWS

「チルソクの夏」

「チルソクの夏」上映館ぞくぞくと

昨年5月、ロケ地の山口県下関市で大ヒットを記録した「チルソクの夏」(佐々部清監督)が、今年4月の東京をはじめとした関東地区でも2万人を記録して興行を終えたが、大好評の声を受けて、七夕を目前に再び日本全国で公開される。映画は、70年代中頃の下関市、日韓合同大会で知り合った陸上選手の女子高校生と韓国の男子高校生との淡い恋を3人の仲間の友情を交えて描く青春映画。チルソクとは韓国語で「七夕」のこと。佐々部監督は本作で日本映画監督協会新人賞を受賞している。以下、上映スケジュール：青森・シネマディクト～7月9日／東京・渋谷シネパレス7月10日～(モーニング)／山梨・甲宝シネマ7月10日～23日／大阪・パラダイススクエア7月10日～／大阪・OS劇場C.A.P.7月10日～(モーニング)／ほか多数。詳しくはhttp://www.chirusoku.jp/にて。

夫婦50割引
どちらかが50歳以上なら夫婦で2,000円。
'04年7月1日から'05年6月30日まで。
60歳以上の方は従来通りお一人でも1,000円です。
※上記2つのサービスは一部劇場を除きます。

「映画館に行こう！」ロゴ

「映画館に行こう！」キャンペーン

日本映画製作者連盟(映連)など関連4団体が、7月1日から夫婦のどちらかが50歳以上なら2人で入場料金を2000円にする「夫婦50割引」を始めると発表した。映画館で映画を観てもらうための「映画館に行こう！」キャンペーンの第1弾で、期間は来年6月30日までの1年間。通常、当日券は2人で3600円のため、1600円が値引きとなる。一部を除く全国の映画館で行う。同キャンペーン実行委員会によると、50代の男性は一人で行くケースが多く、女性も10代の6割が年に1度は映画館に足を運ぶのに対して、60代は1割5分で、中高年層の動員を増やすために考え出した。現在、年間の映画人口は1億6000万人だが、本年度はさまざまなキャンペーンを展開し、2億人まで増やしたい考え。イラストレーターで映画監督の和田誠さんがポスターやロゴのデザインを担当した。

「ホテル ビーナス」

「ホテル ビーナス」モスクワ映画祭出品

SMAPの草彅剛が主演する「ホテル ビーナス」(タカハラ秀太監督)が第26回モスクワ国際映画祭(6月18～27日)の「パースペクティブ部門」に出品された。同部門は新人・若手監督の作品を集めたコンペ。同映画祭は世界11大映画祭のひとつで、01年には香港の「華の愛 遊園驚夢」(ヨン・ファン監督)の宮沢りえが、02年には「blue」(安藤尋監督)の市川実日子、03年には「ふくろう」(新藤兼人監督)の大竹しのぶが3年連続で主演女優賞を受賞している。同映画は最北の地にあるホテルを舞台に、心に傷を負った住人たちの群像劇で、草彅、中谷美紀、香川照之らが全編韓国語セリフに挑戦した。SMAPでは木村拓哉がウォン・カーウァイ監督の「2046」でカンヌ国際映画祭に参加したばかり。草彅は「本当に光栄。ぜひモスクワに行きたい」と喜んだ。

日本映画製作情報

World News Japan

日中合作で描く3つのラブストーリー

日本と中国が合作で製作する「アバウト・ラブ／関於愛」が8月の完成に向けて製作中だ。

作品は、東京、台北、上海の3つの都市を舞台にした3つのラブストーリー。留学生と地元出身の人間が出会い、言葉や育ってきた文化背景の違いを超えた3つの恋を、知り合うための努力、すれ違う思い、気がつかない想いといった共通のテーマで描く。3本のオムニバスではあるが、それぞれが部分的に重なっており、1本の映画として成立するユニークな構成になっている。製作はムービーアイ エンタテインメント、東宝、中国天津映画撮影所の3社。製作サイドは「アジアにおける映画人の、新しい試みへのきっかけにしたい。映画という共通言語を話す、アジアの人々への友情をこめた企画」と話している。

出演は、東京編が伊東美咲とチェン・ボーリン、市川由衣、台北編が加瀬亮とメイビス・ファン、上海編が塚本高史とリー・シャオルーで、監督は、下山天（東京編）、イー・ツーイエン（台北編）、チャン・イーバイ（上海編）が務める。

撮影は3月から5月にかけて行われており、8月完成予定。ムービーアイの配給により中国と同時に2005年陽春全国公開の予定。

「アバウト・ラブ／関於愛」東京編　撮影／三浦憲治

滝田洋二郎監督の新作時代劇

「陰陽師」「壬生義士伝」の滝田洋二郎監督が映画化に取り組む松竹配給「阿修羅城の瞳」が5月29日にクランク・インし、松竹京都映画（撮影所）を中心に撮影が進められている。

作品は、劇団☆新感線が新橋演舞場と大阪松竹座で行った同名ヒット舞台（原作：中島かずき）を映画化するアクションラブストーリー。時は伝説の鬼・阿修羅王が復活するという噂が駆け巡っている江戸。幕府が鬼退治のために設立した特務機関で"鬼殺し"と異名をとった病葉出門と盗賊団の美しい女首領・つばきとの愛を軸に、人と鬼の生き残りを賭けた戦いを最新のCG・デジタル技術を駆使して描く。脚本は戸田山雅司と川口晴が担当。

出演は、主人公の出門役に市川染五郎が舞台に続いて出演し、映画初主演。ヒロインのつばき役には宮沢りえが扮し、樋口可南子、小日向文世、内藤剛志、渡部篤郎らが共演する。

スタッフは、撮影・柳島克己、照明・長田達也、美術・林田裕至、録音・小野寺修、視覚効果・松本肇、特殊造型・原口智生ら。作品は夏にアップし、CGなどポストプロ作業を経て12月に完成する。公開は2005年4月の予定。

第3回エンジェル大賞受賞者、決定

次代の映画界を担うプロデューサーの発掘・育成を目的に、角川出版事業振興基金信託によって設立された日本映画エンジェル大賞。第3回の受賞者は次のとおりに決定した。

■大賞：森岡利行（企画名「路地裏の優しい猫」）、榎本憲男（「愛と笑いの夜（仮）」）

■佳作：亀田裕子（「BLINDED BY THE LIGHT」ブラインデッドバイザライト～まぶしくて見えない）、望月徹（「アカペラ」）

同賞は現在第4回を募集中。しめきりは7月30日。詳細はhttp://www.angel-award.comまで。

尚、第2回の受賞作、「カナリア」（松田広子）は塩田明彦監督で夏完成予定。「カーテンコール」（臼井正明）は佐々部清監督で7月中旬から撮影に入る。

妻夫木聡
安藤政信

原作 村上龍
脚本 宮藤官九郎
監督 李相日 リ・サンイル

巻頭特集

69 sixty nine シクスティナイン

人生は
メジャーコードたい!!

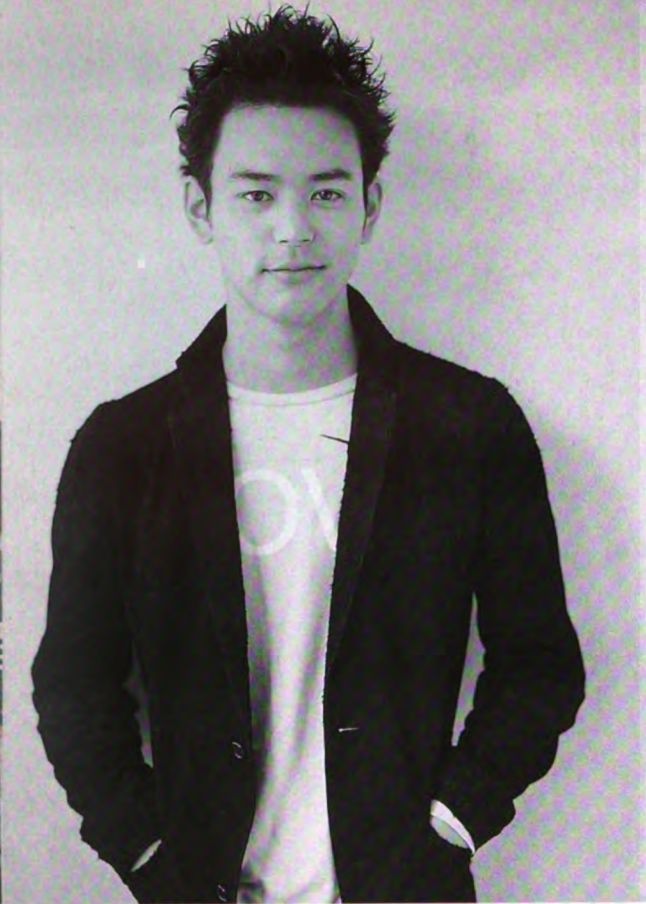
妻夫木聡

矢崎剣介―ケン

撮影＝安藤信之（eyes*）　ヘアメイク＝晋一朗（ZACC）

安藤政信

山田正一アダマ

撮影＝宮坂浩見（cuva inc.）　スタイリスト＝宮島尊弘（D-CORD）　赤の長袖シャツ￥19,950　Attachment（アタッチメント）03・3770・5090　ピンクリブタンクトップ￥2,940　TOLL FREE 03・3715・9278

妻夫木聡

インタビュー

取材・文＝浅見祥子

ドラマに映画に快進撃を続ける妻夫木聡の最新作は「69 sixty nine」。村上龍の自伝的小説を、宮藤官九郎が脚色した暴走系青春映画だ。妻夫木が演じる高校3年生のケンは、日々に溢れる過剰エネルギーを発散するため、映画ありライブありのフェスティバル開催をもくろむ。

「事前に特別な準備はしませんでした。台本とは違うと思ったから、原作もあえて読まなかった。当時のビデオも見たけど今回はそれがテーマじゃないし。時代にとらわれず若いヤツの気持ちが前に出るのがいちばんだと思った。自分が今ここにいることを示すため、何かやってやろうぜ！ って気持ちは昔も今も変わらないですよね」

ロケ地は物語の舞台である佐世保。だから佐世保に行けば映画の世界に入れる、そう思い込むことが役への第一歩だった。そうして彼は1カ月半の撮影期間を、文字通りに〝駆け抜けた〟のだ。

「リアルな芝居か、はっちゃけても大胆な芝居か。監督にどっちですか？ と聞くと、その中間だと。高校生って何も考えてないじゃないですか。それって、勢いで演じたほうが若さからくるパワーとして説得力をもつと思ったし」

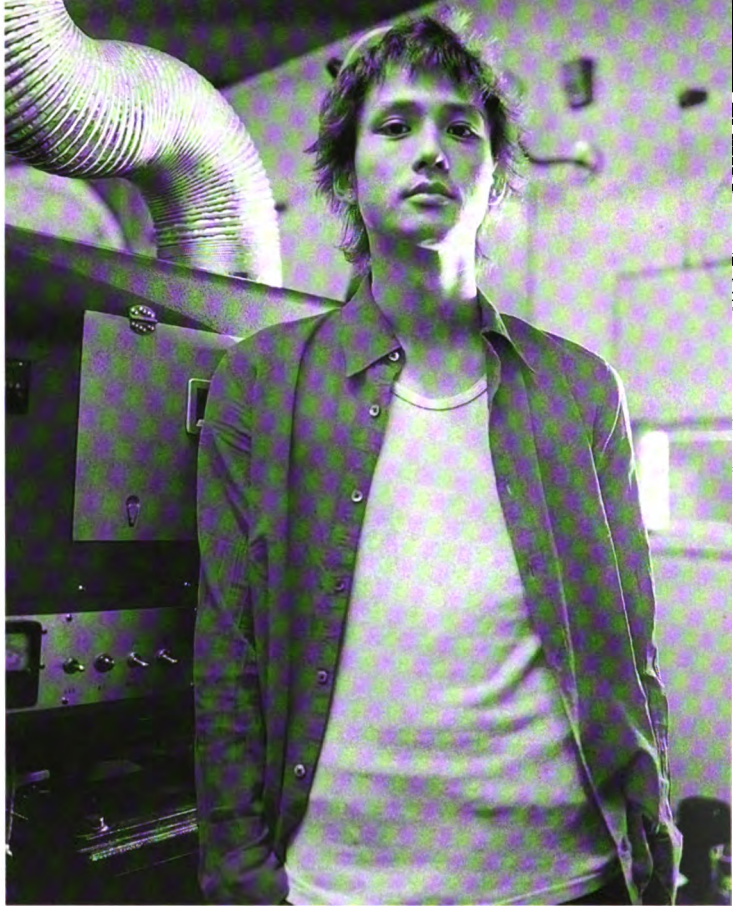
楽しまなきゃ いいものなんて生まれない

妻夫木が発したその〝勢い〟は、周囲のそれを巻き込んで速度を増す。撮影時20代だった監督もまた、もう一つの〝台風の目〟だ。

「年齢が近いせいもあると思うけど、李さんは監督と役者という境界線を引かない。ご飯を食べに行ったり、部屋で一緒に飲んだり。同じ人間としていい作品をつくろうぜ、という兄貴的存在だった。そのせいでもないけど、自分から提案することもありました。納得できないと、納得してない表情になるから。自分だけが正しいわけじゃないけど、思ったことは監督に伝えたい。話し合ってより良い方を取りたい。芝居に〝正しい〟なんてないじゃないですか」

そうして妻夫木は映画の中で、ケンとして熱い夏を生きた。やんちゃ盛りの高校生、ケンのハチャメチャな夏。誰もが身に覚えのある、青春とかいう日々のお話だ。

「この映画をやって、やりたいことをやりゃあいいんだなと思った。無理して大人にならず、ゆっくりやっていけばいいんだって。僕らの年齢って子どもと大人の境目。大人ってなんだろう？ どこまでいったら大人になれるの？ みたいな思いがすごくある。でも、そんなに冷静にならなくていいんじゃないのかなって。セリフにもあるけど〝楽しんだ者勝ち〟。まさにその通り。楽しまなきゃ、いいものなんて生まれないですよね」

つまぶき・さとし／1980年生まれ、福岡県出身。1998年テレビドラマでデビュー。映画主演作に「ウォーターボーイズ」(01)「さよなら、クロ」「ドラゴンヘッド」「ジョゼと虎と魚たち」(03)「きょうのできごと a day on the planet」(04) がある。「約三十の嘘」「ローレライ」が公開予定。

安藤政信

インタビュー
取材・文＝横森文

安藤政信は決して小手先の演技をしない。「バトル・ロワイアル」では役柄に没入するあまりに不眠症にかかったし、つい最近、手塚眞監督作「シンクロニシティ」でも一つ間違うとキレてしまう精神的にギリギリ状態にいるカメラマンという役に入り込みすぎて、実家でとんでもないことをやらかした。

「母親にいろいろと言われていた時にカッとなって、思わず飲んでいたビールを引っ掛けてしまって……。母親にビールをかけるなんてもちろん生まれて初めて。なんでいつもこうなってしまうのかと思う」

普段の関係性が演技を超える部分を作りあげる

「69 sixty nine」では高校生のアダマこと山田正に扮した彼。当然のことながら気持ちはかなり中学生や高校生の頃にフィードバック。クランク・アップの日以外は、どこか女性を寄せつけない内気さを発揮していた。

「撮影中は女の人の体ってどんな感じなんだろうと想像ばかりしていた、本当に悶々とした童貞だった頃の感覚に戻っていた。だからじゃないかな。寄せつけないみたいな雰囲気が出ていたのは。役柄的にもアダマはケンこと矢崎剣介とずっと一緒にいるって設定だったから、ケン役の妻夫木聡とずっと一緒。それ以外はたいてい一人でボヤッとしていた」

確かに妻夫木聡とは、まさに〃つるんでいる〃状態。撮影の間も二人で校庭の芝生に寝転がりながら女性についてアレコレとしゃべったり、校庭の隅に落ちていたボロボロのテニスボールを見つけて突然サッカーを始めたり。男子高校生そのものになっていた。

「撮影前に仲が悪くて、〃用意スタート！〃って言われて急に仲良くするのなんてできないよ。もちろんそれが演技なんだろうけど、やっぱり普段の関係性をキチンとすることが、演技を超える部分を作りあげることになると思っているからさ。それに本当の自分はアダマよりはケンに似ていると思う。ケンほど出たがりではないけどね」

そんな風に役作りをするから、演技をし続けると彼は精神的にマイることが多かった。

「でも亡くなった深作（欣二）さんに〃今年はやります〃って誓ったし、攻撃的にドンドンやっていくつもり。『69』の後『シンクロニシティ』『孤独への口づけ』とたて続けに作品に出たけれど、まだまだ疲れていないし、いい作品があればどんどん出演したい。本当は夏休みに（今、撮りためている）花火の映像を撮り歩きたいけど、作品がくればそっちを優先するつもりだよ」

あんどう・まさのぶ／1975年生まれ、神奈川県出身。1996年に「キッズ・リターン」でデビュー。「アドレナリンドライブ」(99)「バトル・ロワイアル」(00)「サトラレ」(01)「昭和歌謡大全集」(03) など映画を中心に活躍している。公開予定作に「シンクロニシティ」「孤独への口づけ」がある。

李相日監督

ダイナミックに勢いで走っていく作品

インタビュー
取材・文＝金澤誠

※このインタビューでは物語の結末にふれております。

69 sixty nine

リ・サンイル／1974年生まれ、新潟県出身。大学卒業後に日本映画学校に入学。卒業制作「青 chong」がＰＦＦアワードでグランプリを受賞。ロッテルダム国際映画祭ほか多くの映画祭に招待された。ＰＦＦスカラシップで製作された２作目「BORDER LINE」(03) も高く評価されている。

69という時代を背景に普遍的な“今”を描く

映画「69 sixty nine」は、稀に見る痛快な青春映画である。何よりも作品の魅力は69年という時代を背景にしながら、ノスタルジーではなく『今』のパワーを感じさせる映画になっていることだ。果たして52年生まれの作家・村上龍が自分の高校時代をモデルにした小説に、74年生まれの李相日監督はどのように挑んでいったのだろうか？

「プロデューサーの伊地智啓さんからお話をいただいて、まず原作を読んだんです。時代的には自分が生まれていない頃の話ですけれども、登場人物たちが抱えている感情、権力に反抗する思いなどは、誰もが中学・高校の時に通過するものだと思ったんです。僕も高校時代はそうだったので、その思いは共有できたんです。ただ僕の場合は思っていただけでしたけれど、この主人公のケンは実際に行動に出ていく。しかも彼を動かしている一番の動機が、単純に好きな子にモテたいからというのはすごく納得できました。伊地智さんにも、僕が感じた時代性と切り離したそういう普遍的な思いでしか勝負できないと言ったんですが、それで了承をいただいたんです」

その監督の思いにある方向性を与えてくれたのは、すでに第1稿ができていた宮藤官九郎の脚本だったという。

「原作のいいところを上手くすく

※バリケード封鎖。学校の出入口などを机や椅子などのバリケードで封鎖すること。1960〜70年代の大学紛争時に反体制、学生運動の象徴として行われた。

い取った脚本で、面白かったですね。僕が『こういう方向性なら、腹を括れる』と思ったのは、宮藤さんの本が69年のリアルな思想などを盛り込んだものではなくて、それは背景としてあるけれども描きたいことは別にあったから。喩えるなら69年という砂場を借りて、自分が遊ぶ感覚。時代はあくまで背景で、今を生きるということでいいんだなと。気分のベースとして、そのことが凄く共感できたんです」

ただ第1稿は原作のエッセンスを上手く抽出しているが、李監督はもう少し独自の流れを作品に持たせたかった。

「原作は面白いエピソードの連続でしたが、映画には登場人物間の感情のうねりやダイナミックな動きをもっと足したいと思った。それを宮藤さんが理解してくれて、徐々に変えてもらったんです。ダイナミックな動きというのを分かりやすく言えば、映画ではケンとアダマはバリ封(※)事件を経てから意識や感情がちょっとズレていく展開にしたんです。原作では二人の関係性が最後まで変わらないんですけれども」

名コンビのケンとアダマにズレが生じることを表現する上で、大事にしたのはバリ封事件の後にケンが刑事の取調べを受けるシーン。ケンの妄想が延々と続くこの長回しのシーンは、撮影でも特に力を入れたらしい。

「あそこは原作を読んだ時から『肝』にしようと思っていました。勢いだけでバリ封をやったケンが、刑事に尋問されて自白する。ベトナムでは戦争をしていて、東京では全共闘の紛争がある。そんな時に自分はこの片田舎で『何をやっているんだろう』と、彼は葛藤の渦に巻き込まれるんです。このシーンを中心に映画は前後に分かれるんです。原作のように文字だとケンの感情はよく分るんですが、それを映像でどう見せようかと悩みました。この場面をケン自身がどう受け取るかによって作品の見え方が変わってくると思いますから」

ここがあることによって、ケンは女の子にモテたいだけの単純でパワフルな青年とは、少し違ったキャラクターになっている。

「明日に向って撃て!」がケンとアダマのイメージ

「ケンはジコチューでハッタリばかりで、一歩間違えば嫌なヤツですよ。それをいかに共感が得られるキャラクターに持っていくかと考えた時に、ケンを演じられるのは妻夫木君しかいないと思いました。彼はヘタレな良さを出す役を沢山やってきましたけれど、ケンのようにアグレッシブに攻める。そういう良さも彼には絶対にあると思ったんです。アダマに安藤君を選んだのは、ケンとアダマのイメージは僕の中で『明日に向って撃て!』のポール・ニューマンとロバート・レッドフォードだったんです。安藤君と会ってみて妻夫木君との2ショットが、そのイメージにピタリとはまったんですよ。二人には『明日に向って撃て!』のDVDも見せました」

ラストは登場人物たちの後日談を語る、いわゆる「アメリカン・グラフィティ」オチを、さらにひ

撮影現場の李監督(左)と安藤政信

●2004年・ビスタサイズ・ドルビーデジタル・1時間53分
●監督/李相日　脚本/宮藤官九郎　原作/村上龍　製作/横濱重雄、黒澤満、早河洋、伊達寛　企画/遠藤茂行、木村純一　プロデューサー/伊地智啓、近藤正岳、齋藤勇司　共同プロデューサー/古川一博　撮影/柴崎幸三　照明/上田なりゆき　美術/種田陽平　録音/柿澤潔　編集/今井剛　音楽スーパーバイザー/立川直樹、佐久間雅一　音楽プロデューサー/津島玄一　音楽/中シゲヲ、The Surf Coasters、藤原いくろう、鎌田ジョージ　主題歌/CHEMISTRY
●出演/妻夫木聡、安藤政信、金井勇太、水川あさみ、太田莉菜、三津谷葉子、新井浩文、井川遥、村上淳、星野源、加瀬亮、与座嘉秋、三浦哲郁、柄本佑、瀬山俊行、桐谷健太、澤田俊輔、宮内陽輔、嶋田久作、峯村リエ、豊原功補、森下能幸、小日向文世、原日出子、岸部一徳、國村隼、柴田恭兵
●配給/東映
●7月10日より全国東映系ロードショー

っくり返した感じで終わる。「決定稿ではケンたちがフェスティバルの余韻に浸っている感じで終わるんですが、どうもしっくり来なかった。勢いで走っていく作品ですから、最後に失速するのも嫌だったし。ラストは編集段階で僕が、ああいう形にしたんです。最終的には『後日談』を逆手にとって、『というのは嘘で』という原作に良く出てくるフレーズを入れました。いくら背伸びをしても、この時代を知らない僕らが作った映画であると宣言したかった。『というのは嘘で』という言葉が作品全体のテイストとして通っていて欲しい。そういう思いが、このラストにはこもっているんです」

sixtynine 69

クランク・インまでの攻防

伊地智啓プロデューサーにきく

取材・文＝轟夕起夫

いじち・けい／1936年兵庫県生まれ。日活撮影所助監督を経てプロデューサーに転向。日活退社後も「セーラー服と機関銃」(81)「あぶない刑事」(87)「居酒屋ゆうれい」(94) ほか多数の作品をプロデュースする。

笑いを撮れる資質

「宮藤(官九郎)くんに脚本を依頼したとき、時代考証をしろとも言わなかった。世保をシナハンしろとも佐とにかく原作の面白いところを全部書いてくれと。結果は期待以上の出来でしたよ。ゲラゲラ腹抱えて笑った。ただしそのタッチから、当初想定していた監督ではなく、〝69年〟に対し何の意識も持たない者に任せよう、と考えが変わってしまった」

2003年――。伊地智啓プロデューサーにとって長年の企画だった「69 sixty nine」の映画化は、そうやって第一歩を踏みだした。

「原作者・村上龍の分身であるこの主人公は、いつか映画に活かせるなとずっと念頭にありました。〝69年〟を知らない若者に観せたい、けれど団塊の世代も含め、その時代を経験した人たちを裏切ることは出来ないので〝匂い〟だけ

は欲しい。それは美術や音楽で出来るだろう。宮藤くんは大人計画の芝居でその才能を熟知していましたが、映画の世界では未知数で、でも「GO」(01)の脚本を読んだらめちゃくちゃ面白くてね。それからこの企画に引き込むまで約1年。今回は彼の脚本を生かすために何をすればいいかを考えた。普通は監督ありきなんだが、こんな映画作りは異例で、僕にとって初めてのことでしたよ」

以後、若手監督の作品に無数に当たっていくが、しかし候補は決まらず。そんなとき、李相日の存在を知らされた。「BORDER LINE」(03)の公開前にビデオを取り寄せ、「笑いたいんだけど笑わない、我慢しているようなユーモア感覚」に興味を持ち、さらにPFFアワードグランプリ作「青 chong」(00)も追いかけて観た。

「すごく良かったんだ！ 宮藤とは違うセンスだが、間違いなく笑いを撮れる資質があった。で、すぐに会うことにしたら目の前に茫洋とした青っちょろい男が現れて、大丈夫かなって一瞬思った(笑)。もしかしたら彼はオリジナルしか撮らないタイプかもと心配したんだけど、送った脚本を読んで、その気があるからやって来たはず。やるかって訊いたら、〝成算はありませんが、やりたい〟って。よし、成算なんか誰もないんだぞと、会って2、3分で決まりました」

ここで1978年の逸話を——。

伊地智氏は、縁あって村上龍の初監督作「限りなく透明に近いブルー」をプロデュースした。

「当時、長谷川和彦の作品を村上龍の脚本でやろうとしていたんです。プロットは次々と出て来るんだが、長谷川には納得できるものがない。で、彼は後回しになって、突然、村上龍監督が誕生した。「太陽を盗んだ男」はその一年後に登場するんです。書かれたプロットの中には、脚本にしたものもあって、うち一本がのちの「コインロッカー・ベイビーズ」の原形だったんだが、いつのまにか上下2巻の小説になっていた。あれには驚いたね」

1987年——。「69」は単行本化され、ベストセラーになった。

「当時、「69」という小説にいちばん魅かれたのは、時代を直視してはいるんだが、表現の仕方にどこかハズした軽妙さがあったところ。〝バリ封〟ってもっとシリアスな事件だったでしょ。東大安田講堂の攻防が極点にあったわけだけど、それを悪ふざけのようにいとも簡単に、村上龍は裏っ返してしまった。そこが映画的にも面白いと感じたんだな。同じ頃、「平凡パンチ」だったか、60年安保闘争時の全学連委員長・唐牛健太郎(37~84)への取材テープが発掘されて誌面に再録されたんですよ。彼にとって60年安保はゼロに等しかったが、同志たちに申し訳ないし樺美智子さんという犠牲者も出て、決して〝虚しかったとは言えない〟と述懐していた。これなんだよね。真正面に連合赤軍や浅間山荘事件をやったって出てこない、こういう捉え方こそ或る時代の若者が浮かびあがってくるんじゃないか、って「69」同様に思った」

遊び感覚が持つエネルギー

今回の映画化は、その〝どこかハズした軽妙さ〟を突き進めている。妻夫木聡と安藤政信の二人の〝軽さ〟がさらにそうしているのだ。1960年に日活に入社、石原裕次郎を筆頭に綺羅星のごときスター、数々の名監督と同じ空間にいた大プロデューサーは語る。

「妻夫木や安藤は、自然体なところがいいんだと思う。日本映画に日常性を持ち込んだのは石原裕次郎だが、たとえばドラムセットの前に座ると、どこかポーズを作ってしまっていた。ところが妻夫木はポーズを作らなくてもサマになっていた。これは感動的というか、教えてできるもんじゃないよね。彼は高校時代にバンドやってんだけどキャメラの前で本当に無防備なんだ。李監督もね、今日も徹夜かと思って〝深夜0時までに終わったら焼き肉食いに行くぞ〟なんて言ったら、0時15分前に終えた。俺はねえ、夜中に焼き肉なんか食いたくないのに(笑)。そういう芸当もやってみせるわけ。これは今のコたちが持ってる遊び感覚ね。そこに底知れぬエネルギーを感じた。僕たちは助監督をやりながら勉強した。苦節10年と言いながら。彼らは関係ないからね。日頃、何を掴んだかで即勝負してる。69年には影も形も無かった李監督が、村上龍の小説を使って堂々と映画で遊んでみせたことを、今の若い人たちがどう受け止めるのか、大いに楽しみにしたいね」

2004年——。つまり「69」は現在を描いた映画ですか？ と最後に質問すると、伊地智プロデューサーはこう答えた。

「そう。今そのもの。当初やろうとしたことではなかったけれど、でも映画って、そういうものでなきゃいけない気がするんだよね」

69 sixty nine 撮影現場ルポ

暑さと睡眠不足を克服せよ

取材・文＝横森文

2003年9月12日 台風14号と汗地獄

長崎県・佐世保で行われているという「69 sixty nine」の撮影現場へ向かった。ロケ現場に到着したのは12時半くらいだったろうか。この日はパブ〝BLACK ROSE〟に関わるシーンが撮られるという。もともと倉庫で、最近ではアマチュア・バンドの練習用として使われていた場所を映画用に改造したそうで、外観も中もかなりいい感じにクラシカル。しかも69年っぽい長ラン、リーゼント系のヤンキーがズラリ（不良役のエキストラは地元で募集）と店を取り囲んだ様は、かなりタイムスリップした感じだ。

ところが午後1時頃からすごい強風が吹き始めた。実はこの日、台風14号が接近。直撃は免れるとの話だったが、次第に空は真っ黒い雲に覆われ始め、やがて大粒の雨が！　やむなく外観シーンの撮影は中止。全員が〝BLACK ROSE〟内に入って撮影を再開する。ただでさえ暑いのだが、室内は冷房装置なし。しかもスモークをたいているため窓も開けられない（最も外は大嵐なのでどっちみち開けられない）状況。そのせいで大袈裟ではなく汗が滝のように流れ始めた。まさに地獄。

「でも今日の暑さはまだいいほう。女性更衣室での撮影時なんてもっと暑かったから」とはアダマ役の安藤政信の弁。

「暑さはね、最初は勘弁してって感じでしたけど、だいぶ慣れてきて、汗が出ても平気になってきましたよ」とは妻夫木聡。とは言いつつ体力温存のためか、この日は皆がなるべく喋らないようにしていた。そりゃそうだ。台風で荒れ狂う外のほうが遥かに涼しいし過ごしやすいと思えるほど、脳味噌の芯がボーッとしちゃうような暑さなのだから。そんな中でまだ夕方ぐらいなのにプロデューサーが「深夜1時までに終わったらいいね」と恐ろしいことを言う。だがそれも現場を見れば納得。脚本の分量が多い上に、李相日監督の演出は実に丁寧なのだ。本当に1カットずつ時間をかけて撮っていく。本番1回でOKなんてことはまずない。最低でも3カットは撮っている感じだ。

「本当に現場は過酷。もう24時間撮影ってのが2回ありましたから。やっていることが楽しいからがんばれるけれど。このまま続けていくと厳しいとかじゃなくて、撮りきれなくなっちゃう可能性があるかも（笑）」（妻夫木）

ちなみに深夜はケンがドラムを

叩いているバンド〝シーラカンス〟の演奏風景を撮る。もともと高校時代にバンドでベースとボーカルをしていたという妻夫木だが、ドラムは初体験。撮影前から時間を見つけては練習をして臨んだのだそうだが、なかなかいい感じだ。

9月13日 全共闘アジトで佐世保弁

結局、前日は朝の6時半まで撮影（筆者は体力なく最後までつきあえず）。だがこの日、午後の1時にはもう全員が集合。スタッフは目の下のクマがかなり目立っている。その生活がたたったか、珍しく安藤の顔にニキビが。

「そう、できちゃったんだよ。なにしろ今までで一番体力的にハードな現場だからさ」と困り顔。思わず納得してしまう。

さてこの日は北高全共闘のアジトシーンの撮影だった。ロケ地はかつて佐世保旅客船協会があった古い建物。1階は事務所として機能中だが、2階は現在空き室だらけ。そんな場所を借りての撮影だ。きしむ床やたくさんヒビが入ってすすけた壁などが、なんともアジト臭くてリアル。しかもここでは壁に自由に落書きをして良いと持ち主に言われたそうで、「思想を、言葉を、自己を行為に翻訳せよ！人間としての〝生〟の為に」だの「時は革命なり、一刻一刻革命の時を刻む」「我々は死んで生きるより、生きて死にたい」といかにも全共闘っぽい言葉が壁を埋めつくしている。さらに本番ギリギリまでこの落書きは書き足された。さらに「お〜、モーレッ」の文字が踊る丸善ガソリン100ダッシュのポスターや、69年の東映のカレンダー、69年の少年マガジンなどが部屋の中にズラリ。この手のものを集めるのはまだ楽だったそうだが、ちゃんとブラウン管が生きている60年代のテレビや使える冷蔵庫や車など、そういった品々を見つけるのは相当苦労したらしい。

初めてケンたちが北高全共闘の面々と顔を合わせるシーンからまずスタートしたのだが、あまりにも妻夫木&安藤がスラスラと佐世保弁を口にするのでビックリ。聞けば方言指導の方が常に現場についているとか。だからアドリブなどをきかせたい時は、その場で習って台詞を言っているそう。安藤などは、劇中では字幕が出るほどの佐世保弁がさらに訛った言葉をペラペラと目の前で言ってみせてくれたりも。しかもだいぶ、佐世保弁を聞き取って理解できるようにもなったとか。そんな風にどんどん役柄に入り込んでいるからだろう。すでに思春期の男子特有の話しかけづらい不思議なオーラを放っていた。

ちなみにこのシーンではイワセが『時には母のない子のように』をギターを鳴らしつつ歌う予定だったが、カットになってしまう。

「歌った後にも長い台詞があるんです。ケンさんもアダマも卒業したら大学に行くとやろう？ というイワセのダルい台詞（笑）。でもその台詞を歌った後に言うのはテンポが悪いってことでカットになったんです。実はめっちゃ練習していたんですけどね（笑）。でもそ

こでテンポが悪くなるよりは良かったんじゃないかな」（イワセ役・金井勇太）

9月30日〜10月2日 静岡の廃校ロケで大爆笑

静岡の廃校、元東海大一高校でのロケ。久しぶりに会ったスタッフは以前よりも真っ黒に日焼けしていて、かなりお疲れの様子。だがもう夏の日差しは通りすぎ、静岡ではすでに肌寒くなっていた。そのせいかとにかく皆がよく遊ぶ。校庭に落ちていたテニスボールを拾って妻夫木&安藤筆頭にサッカーに没頭したり、台車に人を乗せて爆走したり。かと思えば芝生に寝転がって妻夫木&安藤が女性談義に花を咲かせたり。まさに男子高校生そのものに全員がなりきっている。特に妻夫木と安藤の仲の良さはこの頃はもうハンパじゃなかった。さすが撮影の後もほとんど一緒にいるというだけあって、完全につるんでいる。しかも安藤は妻夫木と話す以外は誰とも話そうとせず、孤独なアダマそのものになっているではないか。しかもなりきっているのは生徒だけじゃない。体育教師・相原役の嶋田久作はシャツをビッチリ半パンツの中に入れたあまりにもダサい格好で登場。英語教師・吉岡役の小日向文世がその格好を見て大爆笑している。そこで嶋田がやってくれた。それはマドンナ松井がいる英語劇部にケンがやってきたシーンの撮影でのこと。相原が「ヤ〜ザ〜キ〜！」（ケンの名字）と叫びつつ駆け込んでケンに殴りかかるのをスローモーションで撮影するのだが、なんと嶋田はリハーサルで自分で動きをスローにして走ってきたのだ。これには出演者&スタッフ一同大爆笑。

「あの〜、スローモーションにするのはこちらの作業なんで（笑）。嶋田さんは普通に走ってきてケンに殴りかかってもらえば（笑）」と李相日監督も大笑い。ちょっとバツの悪そうな嶋田の姿がさらなる笑いを呼んでいた。

こんな風に過酷ではあるが、実に楽しい現場であったことは言うまでもない。決して投げ出さずにネバって撮る李監督のこだわりと暑さにヘロヘロにはなったが、その熱き思いが全員に伝わったからこそ、傑作と呼ぶにふさわしい青春映画に仕上がったと言っても過言ではないだろう。

音楽で69の世界へ

音楽スーパーバイザー 佐久間雅一にきく

取材・文＝竹之内円

昔から〝歌は世につれ、世は歌につれ〟というが、音楽は一瞬でその時代に見る者を連れていく力を持っている。映画「69 sixty nine」の時代を表現する上で、音楽はもうひとりの主役と言ってもいい。そこで「69」には音楽スーパーバイザーという、邦画ではあまり馴染みのないスタッフが参加している。音楽スーパーバイザー佐久間雅一は、元々は加山雄三や舘ひろしなどの音楽プロデューサーで、「あぶない刑事」のサントラにも携わっている。

「僕は俳優の担当が多かったことから映画にも関わるようになったのですが、おもに主題歌程度でした。今回、プロデューサーから洋楽をたくさん使う映画をやるので、権利のクリアランス関係をやってくれないかという話がありまして、それが『69』だったんです。音楽スーパーバイザーとは権利関係や音楽に関する的確なアドバイスをする仕事なんですが、日本ではまだまだ認識されていないジャンルですね」

これまで何本もの映画に参加してきた佐久間雅一だが、この「69」ほど大変でかつ楽しかった仕事はないという。

「最初に原作に出てくる曲の一覧をいただいたのですが、有名曲ばかりで。これは大変だと思って、私の師匠でもあり音楽スーパーバイザーの先駆けである立川直樹さんにご協力いただいて、なんとかやることができました。李（相日）監督は若い方なので、69年の原体験はありませんが、僕らはあるので、そういう曲のリストを作って選んでもらったんです。それでも監督の希望する曲の権利がどうしても取れないということはありました。でもオープニングに流れるクリームの『White Room』は権利が取れて本当にラッキーでした。この一曲で69年の世界に飛びますから。実は海外の曲は交渉が大変なんですよ、使用料も高いですし。劇中で同じクリームの『Sunshine Of Your Love』を妻夫木君たちが演奏するんですが、音源ではなく楽曲使用だけなのに、返事が来るまでに2週間かかってますから（笑）」

それだけこだわっただけにスコア曲も邦画では珍しいほど手間をかけて作られている。

「通常は場面に合わせて録音された曲を編集して使うんですが、今回は場面に合わせて何度も録音し直しているんです。そうして音を入れたものを監督に聴いてもらって進めました。昔ながらの方法なんですが、普通の日本映画の手間のかけ方ではなかったということは言えますね（笑）。おかげで当時の匂いを出せたと思うのですが」

実は佐久間雅一の仕事は日本だけではない。韓国映画の音楽スーパーバイズも手がけており、「MUSA－武士－」（音楽：鷺巣詩郎）や「殺人の追憶」（音楽：岩代太郎）に参加している。

「韓国の知人から日本の作曲家を使いたいということで相談を受けたのが最初ですね。それで参加したんですが韓国映画は今、本当に力がありますね。実は次の仕事も韓国映画なんです。音楽スーパーバイザーはハリウッドでは作曲家と並ぶ重要なポストなので、これからは日本でも認識していただければと思っています」

「69 sixty nine」オリジナル・サウンドトラック
6月23日発売／定価2415円
ソニー・ミュージック・ダイレクト
MHCL382

さくま・まさかず／1957年生まれ。東京都出身。レコード会社勤務を経て1999年に音楽製作会社ファイブナイン・ファクトリーを設立。ミュージシャンのアルバムや映画音楽など、多彩な分野で音楽プロデューサーとして活躍している。http://www.fivenine.biz

若さとは、平気でバカができる至福の季節

作品評＝野村正昭

69 sixty nine

小説『69 sixty nine』と『ハイスクール1968』

　今春刊行された四方田犬彦『ハイスクール1968』(新潮社刊)を読みながら、そういえば同時代を舞台にした村上龍『69 sixty nine』は、どんな風に映画化されるのかなあと、思いを巡らせていた。どちらも時代の持つ空気が大きな特色になっていたからだ。52年生まれの村上龍が87年に刊行した小説『69 sixty nine』(集英社刊)は「69年に、高校生だったわたしのまわりで起こったことの一部を書いたもの」(原著あとがき)であり、53年生まれの四方田犬彦が04年に刊行した『ハイスクール1968』は、本の帯に「ビートルズも、三島由紀夫も、毛沢東も、まだ生きていた。1968年、15歳の少年は、ジャズと漫画と詩を求めて新宿へ向かった。反体制運動と若者文化は彼にどんな洗礼を浴びせたか? 話題沸騰の批評的自伝!」とある。54年生まれの筆者は『69 sixty nine』の中に登場する「クリーム」や「サイモンとガーファンクル」「バリケード封鎖」「ATG系」「11PM」というキーワード(小説の中で、これらの固有名詞は、ひときわ大きく活字化され強調されている)や、『ハイスクール1968』の中に登場する「ガロ」や「COM」「イージー・ライダー」「平凡パンチ」というキーワードだけで、身体の中の記憶の壺を押さえられ、平静ではいられなくなっている。

　ほぼ同時代に同じような環境の中で過ごした身にしてみれば、まったく他人事ではなく、その一挙手一投足が、鏡を見ているかのように、ある恥ずかしさを伴って迫ってくる。それでも『69 sixty nine』は、作者自身が「これは楽しい小説である。こんなに楽しい小説を書くことはこの先もうないだろうと思いながら書いた」と記すだけあって、どこかあっけらかんとした爽やかな読後感を残し、片や『ハイスクール1968』は、著者の抱えこんだ「陶酔と屈辱に

満ち満ちた歳月」への決着であり、「60年代には孤立した前衛であり えた芸術は、来たるべき70年代には、大衆消費社会のなかで、ほどよい面白さとほどよいスリルを備えた暇潰しに成り下がろうとしており、そこで基準とされるのは、何よりもその場かぎりでのパッケージ化された驚きであり、面白さでしかなかった。芸術が完全に消費財と化してしまう状況が、もうそこまで来ていたのである」と終章に書かれているように、ひとつの秀れた「歴史のドキュメント」であり検証でもある。あの時代を語るには欠かせないキーワードや空気を、70年生まれの宮藤官九郎や、74年生まれの李相日は、どう映画化するのか。しかも、それを特定少数ではなく、全国東映系劇場に集まる不特定多数の観客に向けて、どう発信するのか。筆者の興味は、ひとえにそこにあった。

野放図な元気の良さが時代を超えた共感を呼ぶ

『ハイスクール1968』を読了した直後に、「69 sixty nine」を見ることができた。この映画の作者たちは、まったく怯むことなく、舞台となった時代のリアリティを損ねることもなく、さらに下の世代の出演者たち（80年生まれの妻夫木聡、75年生まれの安藤政信、88年生まれの太田莉菜ら）と共闘し、堂々と原作と対峙して、世代を超えた普遍性を獲得することに成功している。おそらく宮藤官九郎にとっても、李相日にとっても、自分たちが生まれる前の、あるいは生まれていても物心がつかないはずの時間である『69 sixty nine』映画化は、時代劇を描くに等しい行為であり、しかも近未来ならぬ近過去であるだけに、当時を知るうるさ型がウジャウジャ存在するにもかかわらず、効果的にキーワードをちりばめつつ、青春映画の佳品たりえたのは、原作の核を見事に抽出したからだろう。それは、おそらく若さとは大人から見ればバカなことを平気でやることのできる特権を手にした者の至福の季節であり、バリ封の最中に校長室の机の上にウンコをしようが、憧れのマドンナとイチャイチャしたいがために自主映画を撮ろうが、放送室に立てこもって校内中に『オー・チンチン』の歌を大音響で流そうが、その野放図な元気の良さこそが、時代を超えた共感を呼ぶ、という視点をしっかり掴んでいたからだと思う。筆者の69年も、今から思えば、いたたまれないほどの恥ずかしさの連続であり、そうした点を差し引いても、本作は自由で柔らかい空気と甘酸っぱい感傷と、もう絶対に戻らない69年という時代への距離のとり方が見事に両立していて、これは手練れの仕事になっていると感心させられた。

ここまで書いてきて、52年生まれの篠田昇カメラマンの訃報に接し、実は呆然としているところ。篠田さんのデビュー作「ラブホテル」（85年）の撮影現場に密着取材して以来、80年代から90年代にかけて多くの撮影現場で世話になった彼の不在に、改めて歴史は人の死によって閉じていく無常さを感じ、「69 sixty nine」にも触発されて、わが69年を問い直さざるをえない事態に至るのか。

69 sixty nine

「69」を知らない監督たちの映像世界

文＝大場正明

見知らぬ過去を現代に消化する咀嚼力

一九六九年の物語である「69 sixty nine」には、時代を象徴する様々な音楽、映画、キーワード、アイテムなどが散りばめられている。しかし、七四年生まれの李相日監督がこだわるのは、彼が体験していない六九年という時代そのものではない。村上龍の原作には、こんな記述がある。「九州西端のいなか町では、全共闘もバリ封も、ゴダールやレッド・ツェッペリンと同じで、遠いあこがれでしかなかったのだ」。世の中が激動している時代に、そういう田舎で高校生をやってなければならないというのは、あまり面白いことではないだろう。しかし、主人公ケンは、女にモテたいがために、この遠い憧れを利用し、ハッタリをかまし、バリ封やフェスティバルによって、田舎に強烈な磁場を生みだす。そんな状況と物語は、冷戦が終わり、グローバル化が進み、外部や地域性が希薄になっていく時代だからこそ、より新鮮に感じられるのだ。

また、この「69」は、同じ七四年生まれの熊切和嘉監督が、連合赤軍リンチ事件をモチーフにして作った「鬼畜大宴会」と比較してみると、同時代的な接点が見えてくる。この映画には、七〇年代ならではといえる暗く陰湿な空気があるが、熊切監督がこだわっているのも、やはり時代そのものではなく、集団が置かれた状況だろう。だから、政治的なイデオロギーといった要素はあっさりと除外され、激しい欲望と破壊的な衝動が延々と描きだされるのだ。集団が生みだすパワーが向かう先は「69」とはまったく対照的だが、状況に対する関心やアプローチはかなり近いところにあるといえる。

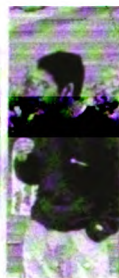
そして、ふたりの監督の現代に対するアプローチにも共通点がある。李監督の「BORDER LINE」は、二〇〇〇年に岡山県で高三の少年が母親を殺害し、自転車で逃亡した事件がモチーフになっている。映画では、父親を殺して逃亡する少年を含めた五人の人物の物語が並行して描かれていく。彼らはそれぞれに孤立し、殺人をめぐって境界線に立っている。少年をはねたアル中のタクシー運転手は、ひとつ間違えば彼の命を奪っていたかもしれない。中年のヤクザは、裏切った弟分の落し前をつけると同時に死を覚悟した賭けに出る。憧れのマイホームを失いかけている主婦は、息子をいじめる子供に殺意を抱く。援助交際で退学になった中学生は、頭のなかで父親を殺している。ひとりで身動きがとれなくなっていた彼らは、お互いに接点を持つことで、他者を通して境界線や家族を見つめなおし、孤立した状況から抜け出していく。

「鬼畜大宴会」

「BORDER LINE」

熊切監督の「**空の穴**」や「**アンテナ**」の登場人物たちも、同じように孤立し、身動きがとれなくなっている。「空の穴」は北海道を舞台にしたドラマで、ドライブインを営む市夫と東京からやって来た妙子の関係から見えてくるのは、自分が過去に囚われ、穴のなかで生き、彼女をそこに引き込もうとしていることにも気づかない男の姿である。彼は、その関係が破綻することで自分の発見に至る。「アンテナ」では、肉親の失踪という過去に囚われ、ばらばらになった家族から、ふたつの異なる妄想が生まれ、激しくせめぎあう。そして、現実との繋がりを断ち切ろうとする出口のない妄想に、自分の痛みの源を見極め、乗り越えようとするSMの妄想が打ち勝つとき、家族は失われた絆を取り戻していくのだ。

一方、七六年生まれの山下敦弘監督が現代を描くスタイルは、ジム・ジャームッシュの初期の作品を想起させる。たとえば、「ストレンジャー・ザン・パラダイス」で、ブダペストからアメリカにやって来た娘が、憧れの〝新世界〟で発見するのはTVディナーであり、主人公たちがエリー湖の見物に出かけると降りしきる雪で何も見えず、今度はフロリダを目指すが、そこは期待した常夏の楽園からは程遠い。山下監督の作品でもそんな肩透かしのユーモアが繰り返されるが、そこから見えてくるものには微妙な違いがある。

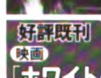
ビートに多大な影響を受けているジャームッシュのユーモアは、アメリカの表層的なイメージ、時代や場所を特定する情報や記号を拭い去り、登場人物はそれだけ解放されていく。山下監督の世界にもそういう要素がないわけではないが、彼の場合は、自分が見えてない情けない人物を好んで主人公にし、解放よりも人物の繋がりを独特のタッチで描きだす。「**どんてん生活**」のコンビは、目標もなく、自分たちが置かれた状況にも無頓着で甘い夢ばかり見ている。「**ばかのハコ船**」のカップルは、東京で健康飲料の事業に失敗し、故郷に帰って親類縁者や同級生の力を借りようとするが、誰にも相手にされない。「**リアリズムの宿**」のコンビは、共通の友人が約束を破ったため、ぎくしゃくした雰囲気を漂わせながら旅を始める。こうした登場人物たちは、滑稽な脱線を繰り返し、曖昧な距離を保ちつつも、腐れ縁のような関係を築いているのだ。

都会から離れて人物の繋がりを描く監督たち

ここまで取り上げてきた映画を振り返ると、「69」を筆頭に地方が鍵を握る作品が目立つことに気づくが、その地方への眼差しで異彩を放っているのが、六九年生まれの河瀬直美だろう。彼女は、故郷の奈良を舞台に映画を撮りつづけているが、そのなかでもここで特に注目したいが、「**沙羅双樹**」が形になるまでの経緯である。公式ホームページにあるインタビューによれば、二〇〇〇年当時、十七歳の少年犯罪が大きな注目を浴び、彼女は当初、そんな少年の内面を描く映画を作ろうとしていたという。さらに、その舞台についてもこのように語っている。「当初は、撮影場所も商店街のない新興住宅地を想定していて、新しい町で子どもたちが行き場を失って生きている、という感じを考えていましたが、それもまたしんどくなってたんですよね。何か実感の持てない世界で」。

「沙羅双樹」は、そんな模索を経て、奈良の旧市街地を舞台にする映画になった。その冒頭では、新興住宅地にはあり得ない路地を駆ける双子の兄弟が映しだされ、兄

「アンテナ」

「どんてん生活」

「リアリズムの宿」

が神隠しにあったように姿を消してしまう。そして終盤では、十七歳になった弟と彼の幼馴染の娘が、禊の儀式を行うように再び路地を駆ける。またこの映画には、伝統に加えて、バサラ祭りという新たな鼓動も描きだされている。

これに対して、七六年生まれの渡辺一志監督の「19」や七四年生まれの西川美和監督の「蛇イチゴ」は、伝統も求心力もない現代の日常の脆さを巧みに描きだしている。

「沙羅双樹」

「19」

「蛇イチゴ」

「19」では、平凡な大学生が三人組の男たちに拉致され、あちこち連れまわされる。この映画で興味深いのは、この大学生と次に拉致される男との姿勢の違いだ。恋人がいる男は、どんなに暴力を振るわれても逃げようとするのに対して、大学生は次第に三人組に奇妙な絆を感じるようになる。しかしそれは、彼らと運命をともにするような絆ではない。だから大学生の旅はあっけなく終わる。そんなドラマは、日常における彼の帰属感の希薄さを浮き彫りにしているのだ。一方、「蛇イチゴ」に登場する一家には、常に正論を掲げる妹と嘘で塗り固めたいいかげんな人生を送る兄という対極の価値観があり、妹と両親は結束してささやかな幸福を分かち合ってきたはずだった。ところがその両親は、無理して体面を保ちながら、陰では嘘を積み重ねている。そして、彼らの嘘が露見し、その基盤が揺らぐとき、家族の価値観はあっけないほど簡単に妹から兄へとシフトしてしまうのである。

SPIDER-MAN 2

特集
スパイダーマン2

SPIDER-MAN 2
●2004年・アメリカ・カラー・スコープサイズ・ドルビーデジタル、SDDS・2時間7分
●監督／サム・ライミ　脚本／アルヴィン・サージェント　ストーリー／アルフレッド・ゴー、マイルズ・ミラー、マイケル・シェイボン　製作／ローラ・ジスキン、アヴィ・アラド　製作総指揮／スタン・リー、ジョセフ・M・カラッシオロ、ケヴィン・フェイグ　共同制作／グラント・カーティス　撮影／ビル・ポープ　美術／ニール・スピサック　編集／ボブ・ムラウスキー　視覚効果／ジョン・ダイクストラ　衣裳／ジェームズ・アシェソン　作曲／ダニー・エルフマン
●出演／トビー・マグワイア、キルスティン・ダンスト、アルフレッド・モリーナ、ジェームズ・フランコ、ローズマリー・ハリス、ドナ・マーフィー、J・K・シモンズ、ダニエル・ギリース
●配給／ソニー・ピクチャーズ
●7月10日より日劇1ほか全国東宝洋画系にて公開

※今号3頁『FACE』にてトビー・マグワイアのインタビュー記事あり

INTERVIEW

キルスティン・ダンスト

メリー・ジェーン・ワトソン 役

女性の微妙な心情を体現

取材・文＝永野寿彦

「MJは前作からかなり成長しているの」と語るのは、前作に続きヒロイン、MJことメリー・ジェーンに扮するキルスティン・ダンスト。前作ではまだ女優志望のウェイトレスにすぎなかったMJだったが、本作では女優という夢を実現させ、成功を収めている。キルスティンによれば、自分と重なる部分もあるという。

「私の方が彼女よりもデビューしたのは早いけど、1人で新しいキャリアにチャレンジし、苦労しながら一生懸命に頑張っている姿には共感できる。私も子役からスタートし、オーディションとかも大変だったから。私自身もこの2年間で成長しているので、MJの役作りの中にはそんな自分の成長も反映されていると思うわ」

　MJの、女性としての成長はドラマ面にも大きく反映されている。

「前作のラストではピーターから〝君と一緒にいられない〟と告げられる。MJとしてはもちろんピーターと一緒にいたいのだけど、ピーターのことを待つということはとても辛くて苦しい。だからこの映画で彼女は、ピーターに〝一緒にいることができないから、私は違う道をいくわ〟と主張するの」

　それは、新しい恋人である宇宙飛行士のジョンとの結婚。本当に好きな人がいながら他の男性を選ぶ、そんなMJの微妙な心情を描いたドラマが用意されているのだ。

「ピーターのことが好きなんだけれど、ハリーと付きあってみたり、ジョンという新しい相手を選んだりする。これは彼女の生い立ちに原因がある。アル中の父親と一緒に暮らしてきた彼女は、〝こういう人が好き〟というちゃんとした理想像を持っていないんだと思うの。そんな彼女が普通のカップルのような反応が返ってこないピーターを待てずに、経済力を持った男性や二枚目な男性に心魅かれるのは、精神的にはごく自然な選択だと思う。それにジョンはとても好い人ですから。同じ女性としてはなんとなく分かります」

「とにかく『スパイダーマン2』はドラマが素晴らしい」というキルスティン。

「ただのアクション映画ではなくて、素晴らしいキャラクターと配役、心温まるストーリーが描かれ、そしてそこには愛がある。スパイダーマンが持っている能力さえもが左右されてしまうくらいに、愛の力の大切さが描かれているんです。キス・シーンも前作のハードなものとは違った、もう少し深い意味を持ったものになっているわ。楽しみにしてね」

撮影＝吉岡誠

KIRSTEN DUNST　1982年、米ニュージャージー州生まれ。89年に「ニューヨーク・ストーリー」（当時7歳）で映画デビュー。「インタビュー・ウィズ・ヴァンパイア」（94）でその才能を示す。「若草物語」（94）、「ジュマンジ」（95）、「ヴァージン・スーサイズ」（99）、「チアーズ！」（00）と様々なジャンルの映画に出演する。

INTERVIEW

ジェームズ・フランコ

ハリー・オズボーン 役

2代目グリーン・ゴブリンになる男

取材・文＝横森文

ジェームズ・フランコは学生時代、とてもシャイな男のコだった。昔から演じることに興味があったのに、内気な性格が災いして演劇に進むことができなかったという。そんな内気な性格を意識してか、最初彼はピーター役で「スパイダーマン」のオーディションを受けたのだという。

「でも客観的に見て、やはりピーターはトビー(・マグワイア)が当たり役だと思うんだ。だからこれで良かったんだよ。オーディション中にサム・ライミ監督と親しくなって、ハリー役を直接オファーされたんだけど、ハリーは内面深くに本当にいろいろなことを抱えている役だし、やり甲斐のあるいい役だよ」

そんなハリー役を演じるにあたり、彼はどんな役作りをしていたのか?

「前作の時に、100冊以上の原作コミックを読んで、それから上流階級の子供たちが通う寄宿学校はどんなものか、実際に体験した。後はサムやトビー、ハリーの父親を演じたウィレム・デフォーとキャラクター像の相互理解を深めるために、いろいろディスカッションをしたんだ。特にその話し合いで得たハリーと父親、ハリーとピーターとの関係性は今回の映画のバックボーンになるからね。ずいぶん参考になったよ。なにしろ前作で、葛藤がいろいろあった父親が死んで、ハリーはそれをスパイダーマンのせいだと考えて、スパイダーマンと仲が良いらしいピーターにまで怒りの矛先を向けるからね。でもピーターには友情も感じている。だから撮影現場でトビーと口を聞かないとかいう役作りをしたことはなかったよ」

原作ではハリーは2代目のグリーン・ゴブリンになるのだが、映画版ではどうなのか!?

「確かに原作に忠実だから、僕がグリーン・ゴブリンになるのは当然さ。でもそれではストレートすぎる。だからちょっとしたヒネリが効かせてあるよ。楽しみにしていてほしい」

個人的には監督業にも進出中で「THE APE」という作品を撮りあげた。

「主人公は小説家。だが妻と子供が創作活動の邪魔をするから、彼はアパートを借りるんだ。そこで書こうと思うんだけど、そのアパートにはなぜかゴリラがいて(笑)、そのせいでまた執筆に時間がかかるという物語。実は約1週間後に次の作品『フールズ・ゴールド』ってコメディを撮る予定なんだ」

とても内気だったとは思えないほど今や活動的な彼に、今後も目が離せない。

JAMES FRANCO　1978年、米カリフォルニア州生まれ。主な出演作に「容疑者」「ソニー」(02) などがあり、近日公開作品として「バレエ・カンパニー」(03) がある。

SAM RAIMI／1959年、米ミシガン州生まれ。8歳の時から8mmカメラで映画を撮り始める。20歳の時に製作した短編映画「森の中」を「死霊のはらわた」(83) として再映画化し、大好評を得る。以降「XYZマーダーズ」(85)、「ダークマン」(90)、「シンプル・プラン」(98) 等を手掛ける。

INTERVIEW

サム・ライミ監督

早くもパート3の監督にも内定

取材・文＝朝熊五郎

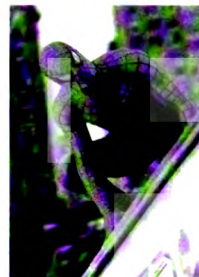
スパイダーマン2

「最初の『スパイダーマン』の後、観客が次に観たいのは一体なんなのか？　それをスタッフと話し合った。何故1作目があそこまで支持を受けたのかを自分なりに分析してみた。その答えは登場人物、つまりピーター・パーカーやメアリー・ジェーンの人間関係に尽きると言う事だ。この2人の関係に観客がシンパシーを感じたんだな。CGやアクションだけじゃない。CGを中心にストーリーを考える監督がいるけど、僕はそういう風に考えられない。続編ではこの2人と伯母やジェームズ・フランコのキャラクターにも焦点を当てるように脚本家に指示を出した。他のアメコミの実写化作品が失敗している理由は、製作側が勝手な解釈をしてしまい、コアな観客を裏切ってしまうから。私の場合、よくはわからないが、原作者の意向を重要視したからに過ぎない。僕自身アメコミを子供の頃読んでいたからね。脚本家もそれに関しては協力的だった。

前回の大ヒットのお陰でスタジオもいろいろ言ってこなくなった。つまり裁量権を与えられたわけだね。昔の仲間もたくさん出てる。子供の頃の8㎜映画を作ってた時代の仲間がね。昔からの僕のファンが『2』を観ると、こういうとこは結構楽しんでくれると思うよ。

今回の悪役はアルフレッド・モリーナ。彼をキャスティングした理由は僕の妻ジリアンが『フリーダ』のアルフレッドを観て、『彼をキャスティングするべきだ！』と。で、映画を観たら素晴らしい。他の出演作も観た。でも彼はカメレオン俳優なんで、どこに出てるのかよく分からない。スペイン語訛があると思ったんだけど、実際の彼はイギリス人。彼が出演してくれる事で、映画に厚みが出たと思う。

本編に挿入出来なかったショットやシーンは前回同様そんなに多くはない。ほとんど計画通りに終わった。ペースを維持する為に仕方なく切ったシーンはいくつかあるけど、それもこの年末に発売されるDVDに特典映像として収録するつもりだ。『3』の公開前にDVDで『2・5』を発売する話が出ている。これも期待して欲しい。

正直、この業界に入って25年。多くの事が変わった。当時、僕はビジュアル的な事ばかりで、どの作品もストーリーが弱かった。でも僕は今、妻も子供もいる。そういう事からかどうかはわからないけど、画的なモノよりストーリーに眼が行くようになった。これは25年前の自分では考えられなかった。早くもありがたい事に、私の次回作を気にかけてくれる人たちがいる。今ネット上で噂になっている『3』『4』だけど、これは本当だ。『3』は恐らく僕が監督する事になると思う。公開は2007年夏。『2』以上の作品を作らなきゃいけない。頭が痛いよ（笑）」

スーパーヒーロー映画とVFX技術

文＝大口孝之

VFX（*1）技術の進歩には、スーパーヒーロー映画の貢献度が大変大きい。その傾向は、フラッシュ・ゴードンの「超人対火星人」（36）や、バック・ロジャースの「原子未来戦」（39）といった時代から続くものであり、ミニチュア、ワイヤ・ワーク、スクリーンプロセスといった手法が駆使されてきた。やがてスーパーヒーローたちの活躍の場は、テレビへと移って行き、しばらくは劇場から遠ざかる。

スーパーヒーローをスクリーンに復活させた「スーパーマン」（78）では、上下左右の平面的な動きしか出来なかったスクリーンプロセスに、前後方向の表現を可能にさせたゾプティックという手法が導入された。これは、フロントプロジェクターとカメラに、それぞれ連動するズームレンズを与えたものだ。このゾプティックでも不可能な動きに関しては、俳優や人形のブルーバック合成で対応される。しかし、これでもまだアクションの制限は大きかった。

95年には、画期的な作品が二本登場した。その一つが「ジャッジ・ドレッド」（95）である。この作品は、興行的失敗から映画史的には忘れられているが、ありとあらゆるVFXの新技術（*2）が詰め込まれた革命的な映画だった。その新技術の中に、空中バイクに乗ったドレッド（シルヴェスター・スタローン）のデジタルダブル（CGによる代役）があった。スタローンの3Dレーザースキャニングと、磁気式モーションキャプチャーによって作られたデジタルダブルは、アクションの制限を一切無くしてしまった。この技術の開発に当たったのが、ダグラス・トランブル門下のマス・イリュージョン社と、クライザー・ウォーザック・コンストラクション・カンパニーである。

マス・イリュージョンは、社名をマニックス・ビジュアル・エフェクツと変え、「マトリックス」（99）を作り上げる。そしてそこから独立したメンバーは、Escエンターテインメント社を設立して、「マトリックス　リローデッド」（03）と、「マトリックス　レボリューションズ」（03）を手がけ、現在はアメコミの『ヘルブレイザー』を実写映画化する「コンスタンティン（原題）」（04）や、ハリー・ベリー主演の「キャットウーマン」（04）などを手がけている。

またクライザー・ウォーザック社は、「X-メン」（00）、「X-MEN2」（03）のミスティーク（レベッカ・ローミン＝ステイモス）や、「ザ・ワン」（01）のジェット・リー、「The Son of Mask（『マスク』の続編）」（04）等のデジタルダブルを作り上げた。こういった技術の下地は、「ジャッジ・ドレッド」の時に出来上がっていたのである。

「スーパーマン」

95年のもう一つの画期的な作品は、「バットマン・フォーエヴァー」(95)である。こちらにも、ビルから飛び下りるバットマンを表現したデジタルダブルが登場するが、地味に忘れられた「ジャッジ・ドレッド」と違い、伝説的作品となった。つまり、俳優のユニオンからクレームがついて、デジタルダブルのフッテージを切らざるを得なかったという伝説だ。米国でもたまに耳にするし、日本ではNHKスペシャルの『新・電子立国』で紹介されたこともあって、CG俳優の脅威を語る時に必ず引き合いに出されるエピソードとなった。だが筆者は95年に、同作品のモーションキャプチャーを担当したアクレイム・エンターテインメント社を訪れた時、こんな話はまったく聞かされなかったし、他にも矛盾点が多い。不思議に思って、この場面のVFXスーパーバイザーを担当したアンドリュー・アダムソン(「シュレック」01、「シュレック2」04の監督)に直接聞いてみた所、まったくのデマであることが判明した。

そしてこの「バットマン・フォーエヴァー」と、次の「バットマン&ロビン/Mr.フリーズの逆襲!!」(97)で、アダムソンと共にVFXスーパーバイザーを担当したのが、巨匠ジョン・ダイクストラである。彼が「スター・ウォーズ」(77)のために初代(現在は二代目)のILMを設立し、モーションコントロールカメラのダイクストラフレックスを開発したことは、あまりにも有名だ。

ダイクストラは、その後ソニー・ピクチャーズ・イメージワークス(SPI)に参加して、「スパイダーマン」(02)のVFXデザイナー(VFXスーパーバイザーは、スコット・ストクダイク)を担当する。ダイクストラとストクダイクは、スパイダーマンとグリーン・ゴブリンのアクション表現の大部分に、デジタルダブルを採用した。これに関しても、誤情報が流れているが、この表現にモーションキャプチャーは一切使用されていない(遠景の群集には使われている)。

ダイクストラらは、「スパイダーマン2」(04)でも同様の手法を用いた。ただし今回は、素顔で登場するドック・オク(アルフレッド・モリーナ)や、マスクを外したピーター・パーカー(トビー・マグワイア)が必要になる。そこで、表情描写のみにフェイシャルキャプチャーが行われた。また、南カリフォルニア大学ICT[*3]のポール・デベヴェックが開発した、ライトステージという装置を用い、俳優の頭部の光学的計測が行われた。これは、360度全ての方向から、皮膚の脂分、表皮の色彩、皮下の散乱成分などの反射率や透過率のデータを記録するものだ。同時に、魚眼レンズやミラーボールなどを使って、デジタルダブルが合成されるロケ場所の周辺環境も、広いダイナミックレンジで360度全て記録される。この二つのデータを組み合わせて、微妙な光の影響をもCGに反映させるイメージベースド・ライティングが施され、極めてリアルな肌のレンダリングが可能になった。

このように、スーパーヒーローの表現には、日々進化する映像技術が敏感に反映されているのだ。

「ジャッジ・ドレッド」

「バットマン・フォーエヴァー」

*1 ビジュアル・エフェクトは、かつてスペシャル・フォトグラフィック・エフェクトとも呼ばれた。

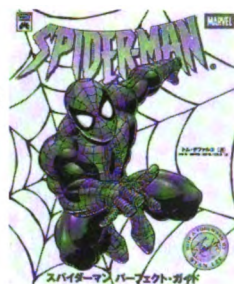
*2 他にもプリビジュアライゼーションの導入、レーザー計測を用いた実写とミニチュアのマッチムーブ、フォトグラメトリー、レーザーカッターを用いたミニチュア制作のCAD/CAM化、ガントリークレーン式モーションコントロールカメラなどがある。

*3 Institute for Creative Technologies

原作の世界、映像の世界

文＝永野寿彦

『スパイダーマン
パーフェクト・ガイド』
（小学館プロダクション刊）

原作の詳細な解説とビジュアルは他に類をみない、研究書の決定版！（限定数完売のため販売終了）

強敵ドック・オクとのバトルに苦戦するスパイダーマン。そんな中、彼の最大の武器である糸が出なくなってしまった……ビックリである。我らがピーター・パーカーがスパイダーマンとして生きていくことに疑問を感じ、自分の人生を取り戻そうと考え始めたためにナント、ピーターはヒーローとしての力を失いかけてしまうのだ。原作にあるウェブシューターというクモ糸発射装置を使わずに、肉体そのものが変化して糸を発射するというジェームズ・キャメロンのアイデアを取り入れた映画版ならではのドラマチックな展開。それだけじゃない。映画はもはや原作との比較なんて無意味じゃないかと思えるくらいに新たなストーリーを語り始めている。もう少し正確に言うなら、63年にスタートしたオリジナル・コミックス『アメージング・スパイダーマン』が作り出したドラマ要素を再構築し、新たなスパイダーマン物語を生み出していく新シリーズと考えた方がいいだろう。

実際、今回の「スパイダーマン2」は原作ファンにとってみれば三日三晩煮込んだ豚骨スープのようにこってりとした内容になっている。なにしろ、原作では長いシリーズを通して描いてきたドラマを2時間強の上映時間内に収めてしまったのだから、濃いのも当然。スパイダーマンを引退して普通の男として生きたいと願うピーターの苦悩を描いていくのはもちろん、ピーターがスパイダーマンであることを薄々感じながらもピーターの煮え切らない態度に新たな恋を選択するMJの揺れる想い、父を殺したスパイダーマンに復讐を誓うハリー・オズボーンの憎しみ……と、通常ならそれぞれに違うチャプターで描かれるような内容がまるで幕の内弁当のように詰まっている。ピーターがスパイダーマンのスーツを捨ててしまう話なんて、本当なら街を牛耳るキングピン（「デアデビル」にも登場した悪役。原作ではマーヴルの世界が繋がっている）と闘う話なのに、そんなことは関係なしにピーターの

ドラマを構築するための要素としてかき集められているのだ（といいつつもご丁寧にもゴミ箱に捨てられたスーツとピーターの後ろ姿のカットは原作のコマと同じだったりするところに原作愛も感じる）。早い話が原作が持っているドラマの美味しいとこ取り状態。だからこそ、原作を知らない人でも楽しめるエンタテインメントとして完成されているのだ。

シリーズ物としての次回への布石も忘れていない。メインの敵役として登場するのはドック・オクこと8本手足のドクター・オクタヴィウスだが、ほんのチョイ役で有名悪役キャラクターが顔を出していたりする。ピーターが通う大学の先生コナーズは実はトカゲの怪人リザードへと変貌する人物だし（原作と同じく片腕がない）、MJが結婚相手として選ぶ宇宙飛行士ジョン・ジェームソン（スパイダーマンを悪役と呼ぶジェームソン編集長の息子）も月の石の呪いによって狼男マン・ウルフと化す人物なのだ（しかも、原作で彼の呪いを解くのは、スパイダーマンとコナーズ先生だったりする）。原作を知らない人にとってみればなんでもないキャラクターたちだが、原作ファンにしてみれば今後さらに人間関係が複雑に絡み合い、より深いドラマが展開されることは明らか。しかも今回はピーターの親友ハリーの苦悩もタップリと描かれ、次回作では原作通りに彼が2代目グリーン・ゴブリンとなって父親の敵討ちのためにスパイダーマンに挑むであろうことが暗示されていたりする。ドラマ的にも今回のエンディングのMJの微妙な表情を見ても分かる通り、さらなる試練が待っていることは確実だし、原作のドラマチック要素としてはピーターとMJの結婚やメイ伯母さんの死なんていうのもありうるし、ドック・オクだって執念深くスパイダーマンに襲いかかる（原作ではメイ伯母さんとの結婚まで企む！）キャラクターとして人気なんだからまた出てこないとも限らんし……。「スパイダーマン3」は一体どうなることやら。

スパイダーマン【解説】

62年に登場し、今日まで高い人気を誇るヒーロー・コミックを初めて実写映画化。基本設定や物語展開は初期原作を強く意識したものとなった。冴えない高校３年生のピーター・パーカーが、遺伝子操作を施したスーパースパイダーに手を刺され、超常能力を得る。彼は慢心から強盗を見逃し、その強盗が養父である伯父ベンを殺害。後悔に苛まれるピーターは、スパイダーマンの姿で力を正義のために使おうと決意した。一方、親友ハリー・オズボーンの父ノーマンは、身体能力増強薬の人体実験によって二重人格化し、怪人グリーン・ゴブリンの人格を持つ。私怨の無差別報復をスパイダーマンに邪魔されたゴブリンは、その正体を見抜き、ピーターの伯母メイやＧＦのメリー・ジェーン（ＭＪ）を襲撃。この対決の結果、スパイダーマンはハリーから父殺しの仇と見做されてしまう。マーヴル・コミックス作品の特徴である“悩める等身大ヒーロー”の誕生譚を十全に映像化。

●2002年「キネマ旬報5月下旬特別号」（№1356）
「スパイダーマン」特集：出演者インタビュー、アヴィ・アラド×サム・ライミ対談ほか。特別定価860円（税込）、在庫あり。

スパイダーマン２【解説】

前作の世界観を完全に継承した続編では、主人公の苦悩がよりクローズアップされる。スパイダーマンとして活動するピーターだったが、日常生活に支障を来し始めた。学業も収入もままならず、ＭＪは別の男と婚約、ハリーとの友情も壊れ、新聞はスパイダーマンを悪人と書き立てる。心労から超常能力を失ったピーターは、普通の青年の暮らしに戻った。その頃、ピーターが尊敬する科学者オクタヴィウスが実験の失敗で怪物化、人工知能アームに操られたドック・オクとして暴走し始める。あらためて正義とヒーローの意味を問い直したピーターはスパイダーマンに復帰。だがハリーと手を組んだドック・オクがＭＪや彼を襲った。ハリーにもＭＪにも正体を知られたスパイダーマンは、それでも、大いなる力には大いなる責任が伴うことを自覚しつつ闘い続ける。旧弊なコミック・ヒーロー物語のパターンをことごとく打ち破った、現代的アメコミ・ヒーロー活劇スタイルの完成型。

「スパイダーマン」(1977年製作)
監督／E・W・スワックヘイマー　出演／ニコラス・ハモンド、デイヴィッド・ホワイト

「スパイダーマン」(1994年製作・全52話)
スタン・リーの原作に最も忠実に描かれた作品。
◎CS放送「カートゥーンネットワーク」にて放映中

スパイダーマン映像小史

文＝山下慧

78年「スーパーマン」、89年「バットマン」といったアメコミ映画の成功は、もう一人のヒーロー、スパイダーマンの映画化を予想させたものの、それが実現するのは02年に至ってからであった。実際、企画自体は約20年前に立っている。だが85年に映画化権を獲得した製作会社キャノン・グループは、その後権利を他社に譲り渡して消滅、さらに権利の分散や譲渡先の破産といった問題が重なって遅れに遅れたのだ。実写映画化はかように困難な道を歩んだが、一方でスパイダーマンは62年の誕生以来、各年代毎にさまざまに映像化され続けている。この諸作が各時代でファンの期待と記憶を活かし続け、映画第一作「スパイダーマン」が幅広く支持される理由の一端となったことも否めないだろう。

スパイダーマンの最初の映像化は、67年、ABC放映のTVアニメシリーズだ。日本でも放映されたラルフ・バクシ製作のこのTV版は、基本設定や悪役の多くが原作に忠実であり、これは以後のアニメ版の総合的な特徴となる。映画第一作のエンディングや第二作の劇中に使われたテーマ曲も本作のもので、視聴者からよく愛されたと窺われよう。

70年代に入ると、74年に子供向けショー番組『ザ・エレクトリック・カンパニー』で出演コーナーを持ったのち、77年にはCBSがニコラス・ハモンド主演でTVムービー化している。この第一弾「スパイダーマン」は日本等の諸外国では劇場公開され、米国では翌78年からTVシリーズ化、日本では長尺版の『プルトニウムを追え』『ドラゴンの挑戦』がビデオ公開された。ただ、これらの悪役には人気キャラが採用されず、アクションの不燃焼感も否めない。同時期の78年、東映も実写版TVシリーズを作っているが、これはキャラクターを借りただけで、スパイダー星人から能力を授かり悪の秘密組織・鉄十字団と戦うという東映ヒーローもののフォーマットで作られたものだった。コスチュームとアクションは原作者からも評価を得たものの、実質的にアメコミの映像化とは言い難い。

80年代では、再びアニメ化が行なわれる。NBC用のシリーズ(日本では一部をビデオ公開)と地方局用のシリーズが共に81年からスタートし、共に80年代後半までTV放映され続けた。アニメ化に関しては問題も少なかったようで、94年にはFOX-TVが新シリーズ

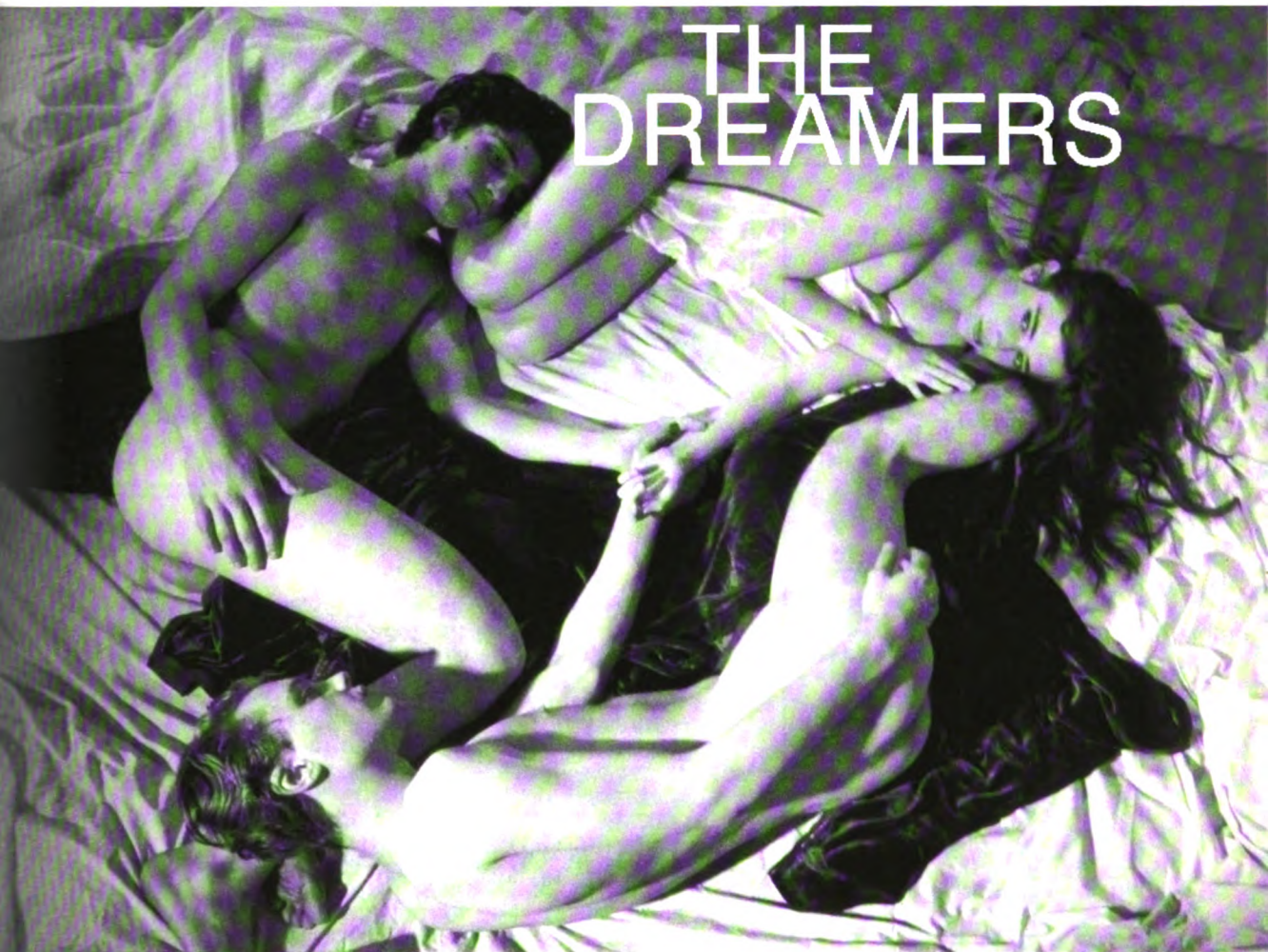
『アメージング・アドベンチャー・オブ・スパイダーマン™・ザ・ライド』
最先端の3-D映像をはじめ、「ライブ」感あふれる演出、特殊効果、最新技術によるシミュレーション体験が融合した、他に類のない画期的なアトラクション。（ユニバーサル・スタジオ・ジャパン™）

『スパイダーマン』
（2003年製作・全13話）
全く新しいスタイルのCGアニメーションとしてテレビシリーズに登場！
◎CS放送「アニマックス」にて放映中

を放映。日本のCS局で本年7月から放映開始したのはこの作品であり、『MARVEL HEROES』のシリーズ名で悪役別の選り抜き選集もDVD発売されたところだ。作画等のアニメーション制作は日本のテレコム社が担当し、これまでのカートゥーン版よりはモダンなアクション描写を持ったのが特徴。また99年にはFOX-KIDSで反宇宙を舞台にしたオリジナルの子供向け作品『SPIDERMAN UNLIMITED』も登場している。

　これらTVアニメにおいては、ほとんどが原作を忠実に映像化した幸福なる動画版であったが、実写映像化に関しては02年でようやく、といった感が強い。デジタルを駆使したスイング・アクションは、ユニバーサル・スタジオのバーチャルライド・アトラクション（99年オープン。ユニバーサル・スタジオ・ジャパンでは04年より）の影響もうかがえ、まさに映画第一作はスパイダーマン映像の集大成とも言えよう。デジタル技術の発達やコミックテイストの浸透など、遅れてしまったゆえのメリットも多い。03年には、映画2作品をブリッジする内容のTVアニメシリーズも作られ、重厚な物語は映画で、多彩な敵役の登場はTVアニメで味わえるかたちとなっていた。デジタル制作によるTV版は映画同然のアクションを見せ、その気分を継続させるだけに、映画第三作製作を待つ今、シリーズ続行が望まれるところだ。

特集 ドリーマーズ

THE DREAMERS

The Dreamers
●2003年／イギリス＝フランス＝イタリア／カラー／ビスタ／ドルビーＳＲＤ／1時間57分
●監督／ベルナルド・ベルトルッチ　製作／ジェレミー・トーマス
脚本／ギルバート・アデア　美術／ジャン・ラバス
撮影監督／ファビオ・チャンチェッティ　編集／ジャコポ・クァドリ
キャスティング／ジュリエット・メナジェ、ハワード・フューアー、ルーシー・ボールティング
衣装／ルイーズ・スチャンスワード　サウンド／スチュアート・ウィルソン
●出演／マイケル・ピット、エヴァ・グリーン、ルイ・ガレル、ロバン・レヌーチ、
アンナ・チャンセラー、ジャン＝ピエール・レオー
● 配給／日本ヘラルド映画
●７月31日より、シネスイッチ銀座、新宿武蔵野館、シネ・リーブル池袋、関内ＭＧＡほか、全国にて

BERNARDO BERTOLUCCI／1941年生まれ。イタリアのパルマ出身。詩人で批評家でもあった大学教授の父の影響を受けて早くから詩人としての才能を発揮するが、大学を中退し、「アッカトーネ」（61）撮影時のパゾリーニの助監督として映画界入り。62年に脚本も手掛けた「殺し」で監督デビュー。「ラストエンペラー」（87）で、監督賞、作品賞をはじめ、9部門のオスカーを獲得。主な監督作に、「革命前夜」（64）「暗殺のオペラ」（69）「暗殺の森」（70）「ラストタンゴ・イン・パリ」（72）「1900年」（76）「ルナ」（79）「シェルタリング・スカイ」（90）「リトルブッダ」（93）「魅せられて」（96）「シャンドライの恋」（98）「10ミニッツ・オールダー　イデアの森」（02）など。

［監督］ベルナルド・ベルトルッチ インタビュー

ある時代の遺産について、一つのことをちゃんと語っておきたかった

取材・文＝佐藤友紀

果してこの映画は"軽い"のだろうか?

軽さ――「ドリーマーズ」が初上映された昨年のベネチア映画祭の記者会見で、ベルトルッチ監督は、かつての自分の作品と比較して、本作には「軽さ」があることを自ら認めた。

「うん。特に同じパリを舞台にした『ラストタンゴ・イン・パリ』の重さと比べてだったね。でも、この映画には、全く違ったある種の重さがある。そしてそれは、必要不可欠なことだったんだ。今回は、マーロン（・ブランド）のように、象徴的な意味での死にかけた像が存在していたわけじゃなかったからね。『ラストタンゴ～』の最初のシーンで、彼は有罪を言い渡される。あれは最初のクローズアップ・ショットだった。で、地下鉄の高架の下から空を見上げて『神とは笑わせる。俺が罪深いことは先刻承知だろう?』とつぶやく。でも、昨夜の上映で『ドリーマーズ』を改めて観て、ふと思ったよ。『確かにこの映画は軽いが、果たして本当に"軽い"のだろうか?』ってね」

ベルトルッチを囲んでの、このミニ記者会見のために集まったジャーナリストたちは、リアルタイムでは「68年」を体験していない者も多い。それを見て取ってだろうか、彼の話しぶりはいつも以上に丁寧だ。

「今回のプロジェクトを進める決意をした理由の一つに、今の時代に対して、ある時代の遺産について一つのことをちゃんと語っておきたいと思ったというのが挙げられる。それはもちろん68年のことだよ。今も覚えているけれども、あの頃は、夜眠る時に思ったものさ。今度目が覚めた時には、"明日"ではなくて"未来"になっているんだ！ と。毎晩僕らは、すぐにでも世界が違ったものになることを願った。でも、と同時に僕らには不思議と、その変化は遠いものであることもわかっていたんだ。この感覚は、現代の若者にはないものだと思うよ。きっと僕らは大きな窓が未来に向かって開いていると考えていたんだろうね。今のイタリアの子供は、『将来、どんなところで働きたい?』と聞かれたら、『スカイTVだよ』と

答えるだろう（笑）。それも悪くはないけど、あまりエキサイティングな希望とは言えないよね。そんな若者がこの映画を観て、夢見る才能に溢れた人物たちに感化されて欲しいと思ってるよ」

3人の主人公は、自身と共通するものがある

イタリアとアメリカの違いこそあれ、故国を離れてパリに長期滞在し、シネマテークに通いつめていた、という共通点などから、マイケル・ピット扮する主人公をベルトルッチ監督自身の分身と受け取る人も多い。つまり、「ドリーマーズ」は監督の自伝だと。

「もちろん自叙伝的な面も多くある。3人の登場人物の振舞いにはたいしてそういうところはないけれども、でも彼らの"夢"や"エネルギー"には共通するものがあるね。そうだな、僕個人ではなくて、僕が育った時代の思いかな。僕は、今日の若者から奪われてしまったものは、"共通した記憶"だと思う。歴史に関する記憶。それはある種の記憶喪失のようなもので……。でもキャスティングの時に若者たちに質問してみたら、あの時代の知識を両親から受け継いでいたものが結構いたんでびっくりしたよ。特に、ルイ・ガレルは68年の出来事をよく知っていた。父親のフィリップ・ガレルから聞いていたんだろうね。フィリップは僕より若くして監督デビューしたから、68年には既に映画界で活躍していたし。おかしなことに、今の若者の多くは、68年は"楽しい時代"だったと思っているんだ。確かに、映画という大きな器の中で、政治、セックス、音楽などが一体になって揺れていた時代というのはとてもユニークなものだった。あの時代の感情のうねりはマジカルなものだったしね。だけど、それを"楽しさ"とだけとらえるのはやはり表層的でしかないよ」

この映画の中には、映画ファンなら思わずニヤリとしてしまうやりとりも多く登場する。例えば「バスター・キートンとチャーリー・チャップリンでは、どちらが素晴らしいか?」。そう言えば、この類の比較、日本でも一時期、大流行だったことを思い出す。

「それって、結局は人生のどの時期にあたるかという問題だと思うよ（笑）。例えば、60年代の僕は、紛れもなくキートンに傾いていた。彼のスタイルはいつもはっきりしているし、そのスタイルこそが映画の一部になってるだろう。逆に、チャップリンの場合、特に後記の作品は、あまりに高く飛びすぎて、我々の目には見えなくなってしまったものがある。アンドリュー・サリスがアメリカ映画を語った中で、『人間は天使であり、機械である』と。つまり、チャップリンが天使としての人間で、キートンが機械としての人間ということだよ。映像作家、映画監督というものは、根幹の部分こそずっと変わらないが、キャリアを積んでいく中で、余分なものをおろしたり、軌道修正したり、または新たな発見、出会いによって全く新しい世界観を自分の創造に反映させていく。送り手側ですら、刻々と変化というか、新しい要素を入れ込むわけだから、映画を観る側も人生経験や思考に応じて変わっていって当然だと思う。でなかったら、つまらないからね」

心配された幾つかの該当場面、残念ながらアメリカでも日本でもカットされての上映となってしまった。中でもマイケル・ピットのエレクトした性器にエヴァ・グリーンの写真が貼り付いたシークエンスは、ベルトルッチ監督の瑞々しさが滲み出た何とも美しいシーンである。いつの日にか復活しての上映を希望してやまない。

インタビュー

マイケル・ピット

取材・文＝佐藤友紀

MICHAEL PITT／1981年生まれ。アメリカのニュージャージー出身。99年にオフ・ブロードウェイの舞台で俳優デビュー。主な出演映画に、「小説家を見つけたら」（00）「ヘドウィグ・アンド・アングリーインチ」「BULLY ブリー」（01）「完全犯罪クラブ」（02）など。次回作は、今秋日本公開のM・ナイト・シャマラン監督「ヴィレッジ」など。

マイケルは、19歳のアメリカ人留学生マシューを演じている。

「撮影に入る前にベルナルドに頼んだんだ。僕の役が見ているはずの映画は、全部教えて欲しいって。もちろんにわか勉強なのはわかってるよ（笑）。でもあれは物凄く勉強になった。それまで自分が観る機会のなかった映画ばかりだからね。ベルナルドには、その意味でも感謝している。『フリークス』（32）『勝手にしやがれ』（60）『はなればなれに』（64）……。あの、3人でルーヴル美術館を通り抜けるシーン。ハル・ハートリーも真似してるけど、ゴダール作品をあんなに正確に模倣できるなんて思わなかった（笑）。撮影中は、僕らのカメラのフレームの脇に、ゴダールの映画を映すモニターがあって、それを完璧にダブらせるようにベルナルドは計算していたんだよ。ちなみにあの通り抜けが、僕の初めてのルーヴル体験さ（笑）」

体を張ってトライしたシーンの数々には、やはり格別の思い入れがあるらしく、一番好きなのは「エヴァとの初めてのセックス・シーン」と言うマイケル。

「該当シーンをカットされるぐらいなら、NC—17レーティングの方がいいよ。僕だって14歳の時にNC—17の映画を観に行っていたし。でも、こういうアメリカの未成熟さは本当に恥ずかしく思う。それでも、68年という年にはヨーロッパのみならず、世界中で変革が起こっていたことを改めて知ると、やっぱり感動するんだけどね」

エヴァ・グリーン

EVA GREEN／1980年生まれ。フランスのパリ出身。舞台出演を経て、本作で映画デビュー。母親は女優のマルレーヌ・ジョベール。また、今回の役と同様、自身にも双子の妹がいる。公開待機作に、ジャン＝ポール・サロメ監督"Arsene Lupin"、リドリー・スコット監督、オーランド・ブルーム共演"Kingdom of Heaven"など。

エヴァは双子の姉イザベルを演じている。

「マイケル（・ピット）のことはよく知らなかったの。『完全犯罪クラブ』も観てないし。マイケル本人いわく、"どれもこれもワルで、イヤな奴だよ" だって（笑）。でも、今回の役は、まるで無垢な天使のようでしょ。ギャップがありすぎるわよね。そのくせフランス語を覚える時は悪い言葉ばかり知りたがるの（笑）。とっても才能のある人だというのはすぐにわかったけど」

エヴァも、最も印象的なシーンとして、「マイケルとのキッチンでのセックス・シーン」を挙げる。「床の上でやられちゃうの、何だかすごく滑稽だったわ（笑）」

「『ドリーマーズ』というタイトルには、強い絆で結ばれた人間関係の意味が含まれていると思う。映画の夢の世界が、象牙の塔みたいになっていく感じかしら。誰にも邪魔されたくない姉妹2人の、それこそ夢！ 象徴的ね」

ルイ・ガレル

LOUIS GARREL／1983年生まれ。映画監督フィリップ・ガレルを父に持ち、母や祖父も映画界に所属する映画一家で育つ。主な出演映画に、ヨランド・ゾーベルマン監督"La Guerre a Paris"（00／未）、ロドルフ・マルコーニ監督"Ceci Est Mon Corps"（00／未）など。公開待機作に、クリストフ・オノレ監督"Ma Mere"など。

ルイは、双子の弟テオを演じている。

「シネマテークは映画好きの人間にとっては確かに嬉しい場所なんだけど、僕はパレ・ドゥ・シャイヨとグラン・ブルバールの2カ所あるうち、後者が好きなんだ。シャイヨの方は周辺の雰囲気が大嫌いでさ（笑）。まるでミュージアムじゃないか、と思っていたら、本当に今では"シネマ博物館"と呼ばれてる。あそこに行っても、若い子たちには出会えないんだよ（笑）。ベルナルドの古い映画を追いかけられるのは助かるけどさ」

父の影響もあって、「人生のあらゆることが映画とつながっている」という言うルイ。

「映画のラストに流れるエディット・ピアフの『水に流して』。"自分は後悔しない"という歌だけど、僕の場合、これにすぐ当てはまるのは"映画には常に新鮮な気持ちで臨む"ってこと。これに尽きるよ！」

[作品評]

革命と官能——ベルトルッチの原点回帰

文＝黒田邦雄

五月革命へのノスタルジー

ベルナルド・ベルトルッチ監督の最新作「ドリーマーズ」は、あきらかに一九六八年に起こった五月革命へのノスタルジーがベースになっている。学生運動が全国的なゼネストに発展し、当時の大統領ド・ゴールを政権から引き摺り下ろした五月革命は、映画人にも大きな影響を与えた。ヌーヴェル・ヴァーグの若手監督たちは第21回カンヌ国際映画祭の会場に乱入し、フランソワ・トリュフォー監督は〝パリに革命の血流るる時、カンヌくんだりで映画祭などに浮かれるとは何事か！〟と声を張り上げて（山田宏一著『友よ映画よ、わがヌーヴェル・ヴァーグ誌』より引用）、映画祭を中止に追い込んだ。

一九四一年生まれのベルトルッチは当時27歳。すでに「殺し」（62）「革命前夜」（64）を発表し、イタリア映画の新しい才能として注目されていた。しかし、ベルトルッチはパリで観たジャン＝リュック・ゴダール監督の「勝手にしやがれ」に衝撃を受け、イタリア映画にはついていけなくなっていた。彼の視線はパリに向かい、パリのアパルトマンを舞台にした「ラストタンゴ・イン・パリ」（72）で世界的な人気監督の座を得ることになる。

この間に五月革命が巻き起こったわけだが、「ドリーマーズ」の冒頭で、シネマテーク・フランセーズの事務局長アンリ・ラングロア解任に反対する映画ファンのデモが映し出される。この解任事件がカンヌ国際映画祭を中止に追い込むきっかけになったことはよく知られているが、このシネマテークにせっせと通ったのが若きベルトルッチだった。〝私は、映画製作について学んだことはない。たったひとつの学校は映画館だった。映画学校へ行って、理論を学ぶことなど時間のムダだ。しかし、世界で最もすぐれている映画学校と言えば、パリのシネマテークであり、最もすぐれた教授は、アンリ・ラングロワだ〟とコメントしているのだが、「ドリーマーズ」の若き主人公たちもこのシネマテークに通う熱烈な映画ファンである。

ヌーヴェル・ヴァーグへの思い入れ

19歳のアメリカ人留学生マシュー（マイケル・ピット）は、このシネマテークでパリに住む二卵性双生児の若き姉弟と知り合う。美しい姉イザベル（マルレーヌ・ジョベールの娘、エヴァ・グリーン）、感受性の強そうな弟テオ（フィリップ・ガレルの息子、ルイ・ガレル）。たまたま彼らの両親が一箇月の旅行に出ることになったため、マシューは姉弟のアパルトマンに入り浸りになる。三人は五月革命の喧騒も忘れ、密室の中で自由とセックスと映画をむさぼる。それはだんだんとエスカレートしていき、お互いを傷つけあうまでになってしまう。パリのアメリカ人という設定において「ラストタンゴ・イン・パリ」を思わせもするが、この物語が何より想起させるのはジャン・コクトーの小説『恐るべき子供たち』だ。双子姉弟の秘密の関係とそこ

に加わってくるヨソ者、密室でのアンモラルな儀式、実によく似ている（映画の原作・脚色はギルバート・アデア）。

しかし、ベルトルッチにとって重要なのは、コクトーの小説にこだわることではなく、コクトーへの目配せであったはずだ。つまり、コクトーこそは、ヌーヴェル・ヴァーグの精神のカナメ的存在だったからである。トリュフォーは〝私は『恐るべき子供たち』を指標として映画作りを進めてきた〟と告白しているのだが、コクトーが遺作となった「オルフェの遺言」の製作費に困っていた時、彼はこんな申し出をした。〝『大人は判ってくれない』が好評な滑り出しなので、その興行収入をあなたの映画に充ててください〟。コクトーは喜んで申し出を受け、映画は完成した。当然、ヌーヴェル・ヴァーグはこの映画を熱烈支持、難解という世評を吹き飛ばしたのである。ヌーヴェル・ヴァーグの中心的監督だったジャック・リヴェットの最新作「Mの物語」が「ドリーマーズ」と同じ時期に日本公開されるが、この作品も「恐るべき子供たち」の重要なカギが映画のタネあかしに使われている。〝コクトーの『美女と野獣』日記」を読んだことが映画監督になるきっかけとなった〟と言う、リヴェットらしい作品だ。

そういうわけで、「ドリーマーズ」は何よりヌーヴェル・ヴァーグへの思い入れをたっぷり感じさせるのだが、ベルトルッチは〝この映画を撮ることで、一九六八年の学生革命を起こした若いスピリットと、ハリウッドの黄金時代、ヌーヴェル・ヴァーグの巨匠たちへ、心からのオマージュを捧げたい〟とコメントしている。しかし、そんな簡単な映画でないことが、ラストシーンを観ればわかるのだ。自分たちだけの世界だった密室の窓を開けた三人の目に飛び込んでくる、五月革命のデモ。三人の子供の時間の終わりを暗示するシーンだが、ここにベルトルッチの思いが凝縮されているように思う。革命と官能というベルトルッチの基本テーマが、実にナイーブなかたちで表出しているのである。

このテーマが時代に合わなくなった頃から、ベルトルッチの巨匠としてのイメージが揺らぎ始めた気がするが、「ドリーマーズ」はそんな彼が時代に臆することなく、原点に回帰しようとした傑作である。そこに、映画の現況に対するベルトルッチの絶望が塗り込められていることは、言わずもがなだろう。

特集

アメリカン・スプレンダー

American Splendor
●2003年・アメリカ・カラー・ビスタサイズ・ＳＲＤ・１時間41分
●監督・脚本／シャリ・スプリンガー・バーマン、ロバート・プルチーニ　プロデューサー／テッド・ホープ　アソシエイト・プロデューサー／ジュリア・キング
撮影／テリー・ステイシー　美術／テレーズ・デプレズ　編集／ロバート・プルチーニ　衣裳／マイケル・ウィルキンソン　音楽／マーク・スオッゾ
ミュージック・スーパーヴァイザー／リンダ・コーエン　ライン・プロデューサー／クリスティーヌ・クネワウォーカー　キャスティング／アン・グールダー
●出演／ポール・ジアマッティ、ホープ・デイヴィス、ハービー・ピーカー、ジョイス・ブラナー、ジェームズ・アーバニアク、シャリ・スプリンガー・バーマン、
ジュダ・フリードランダー、トビー・ラドロフ、ロバート・プルチーニ
●配給／東芝エンタテインメント
●７月10日よりヴァージンシネマズ六本木ヒルズにて

シャリ・スプリンガー・バーマン監督 &ロバート・プルチーニ監督 インタビュー

ポール・ジアマッティは完璧（パーフェクト）なキャスティング

取材・文＝舩橋淳

©野沢文子

SHARI SPRINGER BERMAN(右)
／1964年、米・ニューヨーク生まれ。
ROBERT PULCINI(左)
／1964年、米・ニューヨーク生まれ。
2人はコロンビア大学大学院フィルムスクール在籍中にコンビを組み始める。97年にドキュメンタリー"Off The Menu : The Last Days Of Chasen's"を発表、初の劇映画となる本作は、アカデミー賞脚色賞にノミネートされるという快挙を成し遂げた。

**シャリ・スプリンガー・バーマン＆ロバート・プルチーニは、
ニューヨークを拠点とする映画監督夫婦。
10年間ドキュメンタリーを作ってきた2人が共同監督した
初めてのフィクションが「アメリカン・スプレンダー」だ。
70年代以降アメリカン・コミック界でカルト的人気を集めた
作家ハービー・ピーカーの人生を、
フィクションとドキュメンタリーという2つの撮影手法を
ミックスさせる斬新なアプローチで描いたこの作品は、
サンダンス映画祭グランプリを受賞、
2003年度アカデミー賞脚色賞にもノミネート。
ニューヨークのＨＢＯ本社で、監督2人にインタビューを行った。**

——"Ordinary People's Ordinary Life（フツーの人間のフツーの生活）"という台詞にもあるように、この作品はハービー・ピーカーという「フツーの人間」の物語です。アメリカ映画史にはこのような「フツーの人間」の映画というものが多く存在しますが、自分たちがその系統に属する映画を作るにあたって、過去のハリウッド作品を意識したり、それと差異化をはかるようなことは考えられましたか？

ロバート・プルチーニ（以下P）：「撮影前に参考にした『フツーの人間』の物語の一つは『マーティ』（1955年、デルバート・マン監督）です。ごくフツーの男がごくフツーの女性に恋をするという、ごくフツーのお話ですね。また、同じく『フツーの人間』の物語である『ロッキー』(76)はごく『フツーの人間』がのし上がって、ボクシングで世界制覇するという話です。つまり特別な存在になりあがる。しかし、この作品ではそんな特別なことは起きません。物事は日常生活の繰り返し。映画の中のハービーは自分にしかできないアートをクリエイトしようと七転八倒しますが、言ってみればそれが一番フツーでないことです。他の作品を参考にするというよりも、この作品のインスピレーションは、ハービーのオリジナルコミックからだと言った方がいいでしょう。彼は、それまでスーパーヒーローものだけだったアメリカン・コミックで、ごく『フツーの人間』に焦点を当てました。我々自身も彼と同じような視点で映画を作ろうと思ったのです」

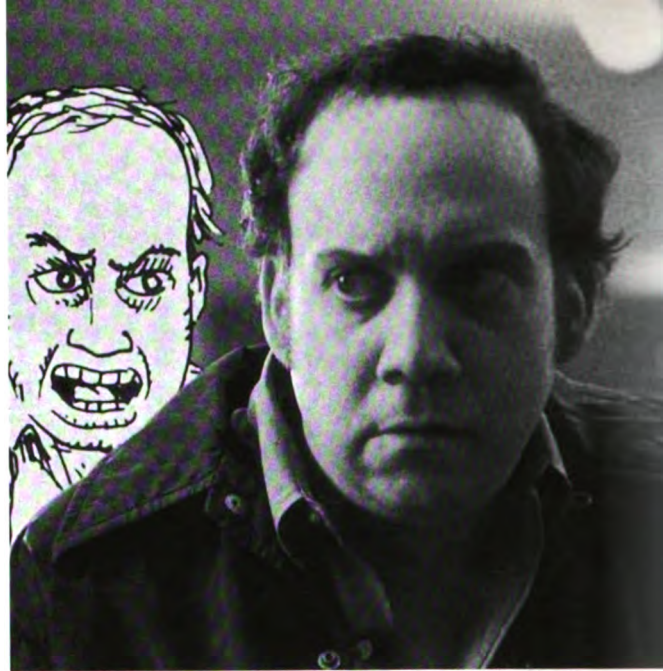
シャリ・スプリンガー・バーマン（以下B）：「私たちはもともとドキュメンタリー畑でやってきたんです。セレブやお金持ちの話ではなく、ごく『フツーの人々』の人生にフォーカスを当てた映画を作ってきました。この作品でもドキュメンタリー的な人物描写を考えたのです」

——ごく「フツーの人間」を題材にコミックを書いたハービー、そのごく「フツーの人間」であるハービーの人生を描いた映画作家としてのあなた方お二人。この「フツーの人間」を主題とした二重構造はとても面白いですね。フィクションにドキュメンタリーをミックスしてゆくスタイルをどうやっ

て考えだしたのですか。
B：「以前からハービーのことは知っていたけど、コミックのことはあまり詳しくなかったの。で、作品の準備をしてゆくうちにハービーは何人ものアーティストとコラボレートしてコミックを作ってきたことを知りました。コラボレートする相手がかわるごとに、彼のコミックも変化していった。その何度も『人格』が変わっていったコミック作家ハービーを映画にするためには、ドキュメンタリー的手法を組み込んでゆくしかないんじゃないかと思ったの。劇中のハービーと本物のハービーを有機的に交差させてゆけばいいんじゃないかって。それにハービーって人自体がとても面白いじゃない？　彼の魅力を映画の中にとり入れない手はないわ。フィクションとドキュメンタリー、彼の書いたコミック、そしてテレビのトークショーといろんなレベルのハービー、マルティプル・ハービーを映画に詰め込んだのよ」
P：「ハービーはいろんな人生を観察し続けてきた、いわばドキュメンタリー作家のような人です。そのドキュメントしようという衝動、アーティスティックな欲望に我々は共感を覚えました。コミック作家としての彼の人生とこの作品をシンクロさせようと思ったんです。出資元であり、製作会社であるHBOもこのコンセプトを気に入ってくれました。できるだけ実験的に、過激にやってくれと。その意味でクリエイティブな、素晴らしく自由な製作環境だったと思います」
――ハービー本人のインタビューはとても自然でしたね。
B：「もちろん。やらせはなしよ。質問は用意したけど、ハービーがどんな答えを言ってくるか、私たちは全く予期できなかったわ。今でもできないし(笑)。『ハービー、脚本は読んだの？』って台詞も私が本当に尋ねたことよ（シャリはインタビュアーとして登場している)。ナレーションは私たちが書いて、彼に朗読してもらったんだけど、明らかにはじめて原稿を読むみたいな感じなのよ。撮影の何週間も前に原稿は渡しておいたのに！　自分の人生についての映画なんだから、ちょっとは興味を持って脚本を読んできてくれるだろうと思った私たちが甘かったわ(笑)。奥さんのジョイスはしっかりと目を通して来てくれて、コメントをくれたりしたの。ハービーは、全くおかまいなし。現場の食事が一番の楽しみだったみたい(笑)」
――また、劇中のハービーを演じたポール・ジアマッティが見事です。フィクションのキャラクターである彼を、どうやってハービーという実在の人物と「一体化」させたのでしょうか？
B：「ポールはハービーと外見こそそんなに似ていませんが、ハービーという存在そのものを掴んだと思います。彼の人格を理解し、自分のものとして表現する、素晴らしい演技でした。ハービーのような面白い個性と、ポールのような深みのある俳優がいれば、我々がやるべき仕事はこの二人をスムーズに融合させてあげることでした。ポールには撮影前にハービーのビデオを渡しました。ハービーとポールは二人で何度か会ったようです。我々はハービーとは何度も会って、映画から哲学、文学の話をしました。しかし、リハーサルはそんなにやりませんでしたよ。肝心だったのは、最初のキャスティングです。映画の中で実在の人物と横並べにするわけですから。ポールはただの『真似』では決してなく、ハービーの魂を写し取ったんです！　パーフェクトなキャスティングをした時にだけ起こる奇跡だと思います」
P：「ハービーとポールは似てないけど、似てるんです。人生において同じようなものに興味を持っているような……、二人ともフィクションが好きで、人間愛があり、読書家で、ジャズ好き、気難しそうで、ムスッとしてるけど、周りの人間は皆彼らが好きだ。直感ですね、二人ならいけると思える何かがありました」

ポール・ジアマッティ インタビュー

批評家たちの好反応には信じられない気持ちだよ

取材・文=**はせがわいずみ**

PAUL GIAMATTI／1967年、米・ニューヨーク生まれ。97年に「プライベート・パーツ」で注目を集め、「トゥルーマン・ショー」(98)「マン・オン・ザ・ムーン」(99)「クレイドル・ウィル・ロック」(99)「PLANET OF THE APES 猿の惑星」(01)などで性格俳優ぶりを発揮している。近作は「コンフィデンス」(03)「ペイチェック」(04)など。本作でシアトル批評家協会賞をはじめ、多くの男優賞に輝いた。

「アメリカン・スプレンダー」で実在の人物ハービー・ピーカーに扮したポール・ジアマッティ。実在の人物を演じるに当たって、どんな役作りをしたのだろうか。

「ぼくが演じたのはハービーの若いころがメインだった。あのころの彼は、今とは体型も性格も少し違っていた。だから、今のハービーの外見をコピーする必要はなかったんだ。彼と一緒に時間を過ごし、ハービー・ピーカーという人物を理解するようにした。そもそも、ハービーと一緒にいるのは楽しかったけどね。そして、ハービーを演じるのはある意味、とても楽だったんだ。以前、別の作品で実在の人物を演じたことがあったけど、あの時は大変だった。〝実在の人物〟が、常にぼくに注文をつけてきたんだ。『オレはそんな風にはしない』ってね。ぼくはなるべく彼を忠実に表現しようと思って演じたんだけど、彼にとっては自分を美化したキャラを演じて欲しかったみたいだね。ものすごく苦労したよ。その点、ハービーは、ぼくがどんな風に彼を演じようと気にしてなかったみたいだよ。ハービーは、『自分は自分』という考えが強い人だから、ハービー像というのは自分とは別のものっていう考えができる人なんだ。それに、以前、役者がハービーを演じているところを見たことがあったから、免疫があったみたいだしね」

5月に来日したハービー・ピーカー(本人)

本作は、サンダンス映画祭でグランプリを、また、カンヌ映画祭では〝ある視点〟部門で国際映画批評家連盟賞を受賞したほか、各賞に輝き、アカデミー賞やゴールデン・グローブ賞の候補に挙がった。しかし、主演のポールは、受賞はおろか、映画祭出品さえも驚きだったようだ。

「だって、この映画は本当に小さな作品で、劇場用映画の小品よりも小さく、テレビ映画の中でさえ小品中の小品という規模の作品だった。だから、映画祭に出品するって聞いて驚いたよ。映画祭前にホープ(・デイヴィス)と一緒に試写に呼ばれたんだけど、完成されたものを見て驚いたよ。ものすごくいい出来だったからね。でも、良品は良品だけど、一体誰がこんな地味な映画に興味を抱くのだろうって思ったのも正直な気持ちだった。だから、映画祭や批評家の好反応を見て、信じられなかった。今でも信じられないんだ。本当に変な感じなんだよ」

作品評

“普通人”ハービー・ピーカーの輝ける人生

文＝宇田川清一

さまざまなハービーがひとつの人物像を形成する

　映画「アメリカン・スプレンダー」は、ハービー・ピーカーという実在の男を多面的に描き、あたかもドキュメンタリーのような味わいでその人生を浮き彫りにする。ハロウィンの日に仮装する仲間たちを冷めた目で見下す少年時代から、「タクシードライバー」のトラヴィスの如く両手をポケットに突っ込み猫背で歩く中年の禿げ男へと画面が転換するオープニングからして味わい深い。幼い頃からひねたガキで、そのまま大人に成長したことが一瞬にして表現されているのだ。現実への不平不満を腹にため、常に苦虫を噛み潰した表情をしているハービー。トラヴィスのようにバイオレンスで憂さを晴らすことなどできるはずもなく、スーパーのレジで手こずるババァに散々待たされても文句を言うこともできない。「私には大衆好みのライフスタイルは合わないの」と生意気な口を聞かされ、家を出て行こうとする2番目の妻に「行かないでくれ、君がいないとダメだ」と懇願する情けなさ。だが、描写に誇張はなく、現実の人生をリアルに描いたら、案外こんなものかなと素直に思わせる演出の底力がある。

　日常の出来事を描いたコミック「アメリカン・スプレンダー」の原作者として人生の転機を迎えたハービー・ピーカーにとって、その原作を生み出すという作業は名声を勝ち得ることより、鬱憤の捌け口を見出すという意味において大きな価値を持つ。行き詰まった人生に焦りを感じていた強迫神経症の症状は、夜中に突然目を覚ますほどの「(原作を)書かなくちゃ」という焦燥感に転換していく。

　ポール・ジアマッティが眉間に皺を寄せ、いつにもまして神経質そうな表情でハービーを演じている。だが、ジアマッティの実力か、はたまた巧みな演出のせいか演技臭さを微塵も感じさせないのが奇跡的だ。ハービーのどん詰まりの日常を冷静に解説するのはハービー・ピーカー御本人。ナレーションだけでなく、映画の舞台裏からひょっこりと顔も出している。さらにはアニメ絵のハービーも突然出没する仕掛け。こうしてドラマは劇映画と現実とアニメーションの世界を行ったり来たりするのだが、そのすべてのハービー・ピーカーに違和感がない。ハービーの原作が異なる作画家によって描かれ、時にマーロン・ブランドに似たり、時に毛むくじゃらのサルにされたりするように、さまざまな顔をしたハービー・ピーカーがひとつの人物像を作り上げているのである。本人さえもが彼のイメージの一部でしかないように思えてくるから不思議だ。ポール・ジアマッティ扮するハービーがテレビ局の楽屋から出ると、かつて『レターマン・ショー』に出演した際の本物のテレビ映像に切り替わるのさえ自然な流れである。

愛の力で成長を遂げたハービー

「この映画から夢や現実逃避を求めることはできない」とハービーは映画の冒頭で断言する。だが、

人生を嘆きながらも「幸せになりたい」と思い続けてきたからこそ、輝きを得ることのできたハービーの半生は羨ましくもある。ハービーのコミックの熱心なファンである13歳年下のジョイスとの出会いが、ハービーの孤独を癒し始めるあたりから、じわじわと愛のドラマが浮かび上がっていく。燃え上がるような情熱もなしにズルズルと結婚生活に突入してしまうのもこの2人にとっては当然の成り行き。だが、次第にハービーのストレスはジョイスへと向けられていく。しかし、ジョイスが海外へ取材旅行に出かけた途端にハービーは不安に苛まれ、「レターマン・ショー」で大暴走してしまう。帰国したジョイスだけがハービーを優しく包む。そして、ガンに冒された彼は、妻と共に闘病コミックを描くことにより、辛い化学療法の日々を乗り切るのである。どこか愛に冷めた2人だからこそ、互いの存在を認め合い、求め合う姿に共感を覚えるのだ。ドン臭い青年がスーパーヒーローに変身するアクション映画もいいが、依怙地で冴えないオヤジがささやかな幸福に包まれる物語のほうが身につまされてしまう。誰だって嫌な現実を抱えているんだ、頑張れ!ってな応援歌にも思えてくる。

ハービーは2001年に書類係として35年間勤めていた病院を退職。さらに旺盛な執筆活動を続けている。「精神的な成長は信じない。若い経験が人を成長させるなんてでたらめだ」と格言を残したハービー・ピーカーも愛の力で大きな成長を遂げたようである。映画「アメリカン・スプレンダー」完成後は家族を引き連れ、宣伝ツアーで世界を回っている。この5月には日本にも訪れた。人を苛立たせる性格と言われたハービーも今ではすっかり朗らかな好々爺という印象。それでもオフタイムにむっとしている時があると、「この人はかまってほしいから、こんな顔をしているのよ」と妻のジョイスがアシストしていたという。「映画の中の私ってまるで〝アラレちゃん〟みたいでしょ」というジョイスのコメントも可愛らしい。養女のダニエルは日本の前に立ち寄ったハワイのゲーセンで出会った青年に恋をして苦い別れをしてきたのだとか。ハービー・ピーカーと家族の輝ける日々は、まだ始まったばかりなのである。

特集

丹下左膳 百万両の壺

2004年・カラー・ビスタサイズ・ドルビーSR・1時間59分
●監督・撮影・編集／津田豊滋　プロデューサー／江戸木純、川崎のり子
原作／林不忘　脚本／江戸木純　オリジナル版脚本／三村伸太郎　照明／川井稔
美術／松宮敏之　録音／小池利幸　音楽／大谷幸
●出演／豊川悦司、和久井映見、野村宏伸、麻生久美子、武井証、金田明夫、
坂本長利、かつみ♡さゆり、中山一朗、柏原収史、山下徹大、田中千絵、
坂本三佳、由樹、渡辺裕之、渡辺篤史、堀内正美、荒木しげる、豊原功補
●製作／日活、博報堂DYメディアパートナーズ、プレシディオ、
カルチュア・パブリッシャーズ、エデン
●製作プロ・配給／エデン（制作協力／東映京都撮影所）
●7月17日より恵比寿ガーデンシネマにて公開

山中貞雄作品がもっている人間の愛情を大切に

津田豊滋監督インタビュー

取材・文■金澤誠

つだ・とよし／1956年京都府出身。26歳でカメラマンデビュー、100本以上の映画、ドラマの撮影を手掛けて活躍する。近作に「冷静と情熱のあいだ」(01)「王様の漢方」(02)などがある。OV「平成維新伝・群狼がゆく」で監督を務め、今回が初の劇場用映画監督作となる。

アクションはあっても血は見せない

「丹下左膳　百万両の壺」で、劇場映画監督デビューを果たした津田豊滋。彼に今回の企画を持ち込んだのは20年以上にわたる友人であり、この作品のプロデューサーと脚本を務めた江戸木純だった。

「江戸木とは、20数年前にクランク・イン寸前まで行った映画の企画があったんです。その後にも、もう1回彼が書いた脚本を一緒に映画化しようとしたが、これも実現しなかった。今回は、やっと実現した三度目の正直。でも、まさか時代劇の企画を持ってくるとは思わなかったですけれど(笑)」

津田監督は京都の出身。京都の映画会社で撮影助手としてキャリアをスタートさせた。時代劇に馴染んだ土壌で育ったようだが？

「京都時代、当時は若すぎて本当の意味での時代劇のよさというものをわかっていなかったんだと思います。本来僕は「ニュー・シネマ・パラダイス」みたいな映画が大好きで、東京に出てそういう作品を撮りたかった。しかし、今、年齢も落ち着き、あらためて日本の持つ文化や伝統をすばらしいと思えるようになった。そういうタイミングにこの企画が来ました。江戸木も素晴しい脚本を書いてくれましたし」

この映画は、山中貞雄監督の名作「丹下左膳餘話　百萬兩の壺」(35)のリメイク。それだけにプレッシャーは大きかったという。

「山中さんのイメージは崩さないように。それは心がけました。時代劇としてのリアルさよりも、山中さんの作品が持つ人間の愛情、人情にクローズアップしたかった。そして、子供からおじいちゃん、おばあちゃんまで幅広い年代の方々に楽しんでいただけるようわかりやすく作りました」

完成した作品を観ると山中版の人情コメディ的なテイストの内、今回の映画は人情劇の部分がより強められている印象を受ける。

「題材が丹下左膳ですから要素としてはアクションもあるんですが、今回は人情を全体の基点にしようと思いました。オープニングの左膳誕生を描くプロローグだけは、昭和30年代の時代劇のような雰囲気でアクションを演出しています。でもその後のクレジットが出てからは、イメージを変えて人情を前面に出しました。アクションは幾

つかありますけれど、血糊を出したり人を刺す描写は一切作らなかった。それはアクションを際立たせると人情が飛んでしまうと思ったからです」

人情という点では、夫婦の在り方がひとつのベースになっている。

「ここには同棲している左膳とお藤、柳生源三郎夫婦、回収屋の夫婦と3組の夫婦が出てきます。全部キャラクターは違いますけれど、どれも幸せで下品さのない夫婦に仕上げて、そこに人情の優しさを盛り込みたかったんです。例えば刀を持ったら強い左膳が、女のお藤には手を上げない。言い合いをすれば彼が負けるんですよ。僕は左膳にポンポン文句を言うお藤は、キャラクター的に大阪のオバチャンにしたかった。図々しさを入れ込みたかったんです。ただそれを上品でシックな和久井映見さんに出来るかなと思って、打ち合わせの時に聞いたんです。そうしたら、和久井さんは『女は皆、お藤なんですよ(笑)』とおっしゃって。それを聞いて大丈夫だなって(笑)」

左膳を演じたのは豊川悦司。これまで時代劇のイメージがさほどない彼を、なぜキャスティングしたのだろう?

「左膳にはスラッとしたイメージがある。それで背の高い人にしたかった。そのほうが立ち回りをしても豪快じゃないですか。豊川さんは演じている内に、どんどん山中版に主演した大河内傳次郎さんに似て来ました。クライマックスの蔵の中での立ち回りの時には、顔が大河内さんに見えましたよ。片腕は使えないし、目は糊で閉じられてさらに頭はかつらの圧迫感。本当に大変だったと思うんですが、見事にやってくれました」

岡本太郎の色彩を美術に取り込む

本業がカメラマンだけに、津田監督は映像の構図と色彩には人一倍気を使ったそうだ。

「僕は色彩と構図から作品に入っていくんです。この映画を撮る前は、川崎市にある岡本太郎美術館に通ってアイデアを考えました。岡本さんの色彩が僕は大好きなんですよ。岡本太郎は作品に絶対黄色やオレンジを使う。それを観て着物を黄色にしようとか、壁をグリーンにしようと決めた。だから色遣いに関しては、現場でまったく迷いがありませんでした」

撮影現場では監督に加えて、撮影監督も兼業した。両方をこなすのは大変だったらしい。

「監督の時には芝居の演出に集中する。それがカメラマンとしてファインダーを覗くと、今度は構図に集中してしまうんです。ですから本番ではカメラマンの心境になっていて、カットになると助監督に『あの芝居、大丈夫だった?』と聞いていました。でも構図に関して迷いはありませんから、無駄カットを撮らない自信がありますね。次は『山の郵便配達』のような、優しい映画を江戸木と一緒にやりたい。そしていつか『ニュー・シネマ・パラダイス』みたいな、夢のあるファンタジー映画に挑戦したいです」

〝豊悦左膳〟の若々しい魅力

文・渡辺武信

チャンバラ時代劇映画が数少なくなってから既に四十年以上が経過している。もちろん散発的な佳作はあり、昨年は北野武の「座頭市」や滝田洋二郎の「壬生義士伝」、一昨年は山田洋次の「たそがれ清兵衛」、岡本喜八の「助太刀屋助六」などの話題作があったが、この四作は有名監督による大作であり、単純なエンタテインメントとして作られたものではない。終戦直後には占領軍の政策により、武士社会の封建的道徳や、忠義、仇討ちなどを描く映画の企画が禁じられていたために、しばらくの空白があったが、それらの禁忌が解けた一九五〇〜六〇年代は、二本立てブロックブッキングの時代ともなり、年間六社が四百本以上の劇映画を製作し続けた。その体制の中でつくられるいわゆる〝プロラムピクチャー〟は、具体的に数は調べていないが、半分以上がチャンバラ時代劇であったと思われる。中でも〝任侠映画〟路線以前の東映は、片岡千恵蔵、市川右太衛門という重役スターを抱え、中村錦之助、東千代介、大川橋蔵などの新進も加えて時代劇スター層の厚みを誇り、会社自身のキャッチ・コピーも〝時代劇の東映〟だった。一時は第二東映という別の製作所を設けて封切りが七系統になったことさえある。（ちなみに日本映画の製作本数は第二東映が存続した一九六〇年に年間五百四十七本でピークを迎えている）。

こうした時代劇の全盛時代にはチャンバラ映画のヒーローが数多く生まれた。戦後に誕生したヒーローとしては旗本退屈男、座頭市、眠狂四郎、拝一刀などがいるが、戦前から生き延びたヒーロー、鞍馬天狗、清水の次郎長、大岡越前、荒木又右衛門、宮本武蔵、銭形平次、赤穂浪士らも活躍を続けた。戦前から戦後を貫くヒーローの一人に隻眼隻手の剣豪、丹下左膳がいる。

丹下左膳映画の歴史を調べると一九二八年に始まり前記一九六六年までに実に三十四作もある。中でも山中貞雄監督の「丹下左膳餘話　百萬兩の壺」（一九三五）は名作として評価が高く、フィルムセンターで見たことがある。この作を含めて左膳役をもっとも多く演じたのは大河内傳次郎で、半数近い十六作で演じているから、代表的な左膳役者と言っていいだろう。左膳の決まり台詞が大河内の場合「姓はタンゲ、名はシャゼン」と聞こえるので、時代劇全盛時には長谷川一夫が大石内蔵助役で、少し鼻にかかった声で言う「よいか、おのおのがた……」と、市川右太衛門が旗本退屈男役で語尾が「ンパッ」という感じで発する「直参旗本、早乙女主水之介、人呼んで旗本退屈男、この額の傷が目に入らぬか」の三つが、物まね（声帯模写）芸人が必ずやる持ちネタでもあった。

しかし、私が封切り当時に現在進行形で接したのは、ちょうど自分の大学生時代の一九五八年〜六二年に連続的に製作された大友柳太朗主演作六本だった（監督は五本が松田定次、最後の「乾雲坤竜の巻」だけが加藤泰）。大友柳太朗という役者は、当時の東映で前記の重役スターと新進スターの間に挟まれて、必ずしも役に恵まれていなかったが、この左膳シリーズは彼の持ち味が発揮された代表作と言っても良かろう。彼も口跡（今は活舌というらしいが、要するに発声）に癖があり、早口になると、若いときの現・団十郎にも

大河内傳次郎と喜代三（「丹下左膳餘話　百萬兩の壺」）

大友柳太朗（「丹下左膳　怒濤篇」）

豊川悦司と和久井映見（「丹下左膳　百万両の壺」）

似た呂律のまわりにくい難があったが、面長の容貌が整い、剣戟も巧く、身体障害者である丹下左膳というヒーローを、名優・大河内傳次郎が発散していた陰を敢えて感じさせない、陽性の人間として演じた点が特徴的である。

　このたび豊川悦司が丹下左膳を演じると聞いて、これは斬新な企画だと思った。この左膳は一九六六年の中村錦之助主演、五社英雄監督作品「丹下左膳　飛燕居合い斬り」以来、実に三十八年ぶりの登場であり、豊川悦司という今や旬の俳優がこれまで時代劇に無縁だっただけに新鮮味もある。本作は冒頭に記した有名監督による意図的な大作ではなく、監督は劇場用映画デビューする津田豊滋である。過去の左膳ものは一貫してお馴染みのヒーローがお馴染みの活躍をする大衆娯楽映画として作られており、津田の演出にも作家的主張より、豊悦という役者の魅力を前面に押し出してエンタテインメントに徹する意図が見える。座頭市が勝新太郎という俳優と切り離せない、肖像権が役者に属するヒーローであり、北野武は敢えてそのイメージを毀して金髪の市を演じた（それゆえに私の〝北野座頭市〟に対しては批判的な見解を公表している）のに対し、左膳は前述のようにいろいろな役者がかわるがわる演じてきた（阪東妻三郎も演じている）から、豊川悦司が新しいイメージを作り出しても問題はない。

　今回の〝豊悦左膳〟は前記の山中貞雄の「百萬兩の壺」のリメイクであるが、津田豊滋の演出は、左膳が片目片足を失うタイトル前の剣戟シーンから縦に深い構図を採用するなど、カメラマン出身らしいセンスの良さを示し、後半の竹林の斜面における殺陣にも迫力がある。和久井映見も相手役のお藤を和服姿で自らの三味線と小唄を聴かせるなど新しい役柄に挑んで好演しているし、〝豊悦左膳〟も、本作の源となった戦前作はともかく、晩年にあたる一九五〇年代の〝傳次郎左膳〟より若々しいニヒリズムを発散している。左膳特有の剣さばき（片腕がないため鞘ごと掴んだ剣を口でくわえて抜き、鞘を投げ捨て、戦いが終わると剣先で鞘をすくい上げて鮮やかに納める）も流麗に決まっているし、白地に墨で経文や梵字が書かれた衣装から真っ赤な襦袢がこぼれ出る姿もカッコよく、久しぶりの〝ヒーロー・チャンバラ映画〟と呼ぶにふさわしいと思う。

「丹下左膳」映画化＆テレビ化リスト

年	作品名	会社	監督	丹下左膳
1928	新版大岡政談　鈴川源十郎の巻	東亜	広瀬五郎	団徳麿
	新版大岡政談　中編	東亜	広瀬五郎	団徳麿
	新版大岡政談　後編	東亜	広瀬五郎	団徳麿
	新版大岡政談　前編	マキノ	二川文太郎	嵐長三郎
	新版大岡政談　中編	マキノ	二川文太郎	嵐長三郎
	新版大岡政談　第一篇	日活	伊藤大輔	大河内傳次郎
	新版大岡政談　第二篇	日活	伊藤大輔	大河内傳次郎
	新版大岡政談　第三篇	日活	伊藤大輔	大河内傳次郎
1933	丹下左膳　第一篇	日活	伊藤大輔	大河内傳次郎
1934	丹下左膳　剣戟の巻	日活	伊藤大輔	大河内傳次郎
1935	丹下左膳餘話　百萬兩の壺	日活	山中貞雄	大河内傳次郎
1936	丹下左膳　乾雲必殺の巻	マキノ	マキノ正博	月形龍之介
	丹下左膳　坤竜呪縛の巻	マキノ	マキノ正博	月形龍之介
	丹下左膳　日光の巻	日活	渡辺邦男	大河内傳次郎
1937	丹下左膳　愛憎魔剣篇	日活	渡辺邦男	大河内傳次郎
	丹下左膳　完結咆吼篇	日活	渡辺邦男	大河内傳次郎
1938	新篇　丹下左膳　妖刀篇	東宝	渡辺邦男	大河内傳次郎
1939	新篇　丹下左膳　隻手篇	東宝	山本薩夫	大河内傳次郎
	新篇　丹下左膳　隻眼の巻	東宝	中川信夫	大河内傳次郎
1940	新篇　丹下左膳　恋車の巻	東宝	萩原遼	大河内傳次郎
1952	丹下左膳	松竹	松田定次	阪東妻三郎
1953	丹下左膳	大映	マキノ雅弘	大河内傳次郎
	続丹下左膳	大映	マキノ雅弘	大河内傳次郎
1954	丹下左膳　こけ猿の壺	大映	三隅研次	大河内傳次郎
1956	丹下左膳　乾雲の巻	日活	マキノ雅弘	水島道太郎
	丹下左膳　坤龍の巻	日活	マキノ雅弘	水島道太郎
	丹下左膳　昇竜の巻	日活	マキノ雅弘	水島道太郎
1958	丹下左膳	東映	松田定次	大友柳太朗
1959	丹下左膳　怒濤篇	東映	松田定次	大友柳太朗
1960	丹下左膳　妖刀濡れ燕	東映	松田定次	大友柳太朗
1961	丹下左膳　濡れ燕一刀流	東映	松田定次	大友柳太朗
1962	丹下左膳　乾雲坤龍の巻	東映	加藤泰	大友柳太朗
1963	丹下左膳	松竹	内川清一郎	丹波哲郎
1966	丹下左膳　飛燕居合斬り	東映	五社英雄	中村錦之助
2004	丹下左膳　百万両の壺	エデン	津田豊滋	豊川悦司

●テレビ

年	作品名	会社	監督	丹下左膳
58～59	丹下左膳	ＮＴＶ	安藤勇二	丹波哲郎
60	丹下左膳	フジ		辰巳柳太郎
60～66	丹下左膳	ＴＢＳ	船床定男	中村竹弥
63	丹下左膳	ＭＢＳ		大村崑
67～68	丹下左膳	ＴＢＳ		松山英太郎
70	丹下左膳	ＡＮＢ	佐伯清	緒形拳
71	丹下左膳と櫛巻きお藤	フジ		若山富三郎
74～75	丹下左膳	ＮＴＶ	市川崑	高橋幸治
82	丹下左膳　剣風！百万両の壺	フジ	五社英雄	仲代達矢
90	丹下左膳１～４	ＡＮＢ	吉川一義	藤田まこと
04	丹下左膳	ＮＴＶ	本木克英	中村獅童

※84ページからの和久井映見さんのインタビューもあわせてお読み下さい。

カーサ・エスペランサ～赤ちゃんたちの家～

Casa de los Babys
●2003年・アメリカ・カラー・ビスタサイズ・SRデジタル・1時間35分
●監督・脚本・編集／ジョン・セイルズ　製作／レモア・シヴァン、アレハンドロ・スプリンゲル　撮影監督／マウリチオ・ルビンシュタイン　衣裳／マヤ・C・ルベオ　プロダクション・デザイン／フェリペ・フェルナンデス・デル・パソ　音楽／メイソン・ダーリング
●出演／マギー・ギレンホール、ダリル・ハンナ、マーシャ・ゲイ・ハーデン、スーザン・リンチ、メアリー・スティーンバーゲン、リリ・テイラー、リタ・モレノ、ヴァネッサ・マルティネス
●配給／ギャガ・コミュニケーションズ
●7月31日よりテアトル・タイムズスクエアにて

インタビュー　ジョン・セイルズ監督　費用が少なくても、撮影期間が短くても作れるものなんです

取材・文＝金子裕子

JOHN SAYLES／1950年、米・ニューヨーク生まれ。80年に「セコーカス・セブン」で監督デビュー。この作品がロサンゼルス映画批評家賞最優秀脚本賞を獲得、「希望の街」(91) は東京国際映画祭グランプリを受賞するなど、高いクオリティの作品を作り続ける。「パッション・フィッシュ」(92)「真実の囁き」(96)ではアカデミー賞オリジナル脚本賞にノミネートされている。その他の作品は「メイトワン1920」(87)「エイトメン・アウト」(88)「フィオナの海」(94) など。

まずは、愛くるしい赤ちゃんたちのお昼寝シーンが映しだされ、うっとりと幸せ気分。しかし、監督は社会派としても知られるジョン・セイルズ。となれば、一筋縄ではいかない内容と、覚悟が必要だ。そう、「カーサ・エスペランサ～赤ちゃんたちの家～」は、天使のように無垢な赤ちゃんたちが居るのは、南米の某国にある聖マルタ園という孤児院。彼らは生まれてこのかた一度も親に抱かれたことがない。次に映しだされるのは、海辺でくつろぐ6人のアメリカ人女性。彼女たちはそれぞれの事情から子供を欲しがり、ここで養子縁組みの許可が下りるのをひたすら待ち続けているのだ。

「まず、単純な養子縁組みの物語であっても、そこには複雑に入り交じった感情があり、とてもドラマチックなんです。たとえば、自分に子供ができないというのがわかった時、多くの女性は罪悪感を感じる。さらに、アメリカ国内では養子縁組みが可能な子供の数が限られてるから、どうしても欲しい場合は他の文化圏から子供をもらおうとする。となれば、異文化との接触と理解も求められるわけです。ほとんどの場合、養子縁組みによって親のいない子供たちが家族が持てるのはいいことです。でも、私の映画では、養子縁組みにはギャンブル的な要素があることも克明に描いてもいるんです」

カナダのトロントで会見したジョン・セイルズ監督は、物静かな口調で語りだす。顔は優しく微笑んでいるのだが、その視線はジッと相手を見据え、時に鋭い光も。まさに、どんな時でも人間観察はおこたらない、といった風情といったら、うがちすぎかしらん？

「ハハハッ、そんなことはないけど。でも、僕は、人間が大好きです。それも、完成されていない、完ぺきでないもの。そして、そういう人々が、敗北感を感じたりしつつも、問題を克服するという強さに対しての希望を描くことが、好きなんです」

映画は、養子縁組みを通して、6人の女性のそれぞれの人生を浮き彫りにするばかりか、逆にせっかく産んだ子供を養子に出さざるをえない母親や、それを認めざるをえないお国事情なども描かれ、深みを増している。

「私が心がけているのは、ひとつのテーマに留まらないこと。いつも考えるのは〝この物語を語るための、すべての方法を考えてみよう〟です。『羅生門』のようなものですね。あれは3つの異なった視点がありましたね。『カーサ・エスパランサ～』には、まず6人のアメリカ人女性それぞれの視点、そして、この養子ビジネスによって稼ぎを得ている人々の視点。それに、若い二人の女性も登場します。ひとりはかつて我が子を養

子に出した女性と、いままさに養子に出そうとしている妊娠中の女性。私は可能なかぎり、多彩な視点を映画に与えようとしました。そうすることで、より真実を語れるとも思うんです」

〝多彩な視点を意識する〞ようになったのは、自分の俳優経験に由来するという監督。じつは、もうひとつその経験によって実行していることがある。

「ほとんどの場合、セリフの多い少ないに関係なく、俳優さんには演じるキャラクターのバイオグラフィーを書いて事前に渡します。俳優は、どんな役でも自分が演じる役の〝視点〟をつかみたいと思うものです。ですから、その指針となるものを、渡すのです。たとえば、リリ・テイラーが演じた未婚のニューヨーカーの場合なら、彼女がどんな男たちとどのような関係をもっていて、いかにして子供が欲しい、これ以上は待てないと決心したのか。それも、出来事だけではなく、もっと精神的な構造に関して説明します」

失礼ながら、製作費はたったの100万ドルだというのに、キャストは豪華。たとえば、前出のリリはメジャーからインディペンデントまで幅広い活躍をする個性派だし、母親に虐待されて育ったナンシー役のマーシャ・ゲイ・ハーデンは、「ポロック　2人だけのアトリエ」でアカデミー賞助演女優賞を受賞したオスカー女優。また、流産経験者のスキッパーをダリル・ハンナが演じれば、「ウエスト・サイド物語」でアカデミー賞助演女優賞を獲得した懐かしのスター、リタ・モレノもホテルの経営者として出演しているのだ。

「商業的に成功するのには、シンプルでわかりやすいことが求められます。善玉と悪玉がはっきりした勧善懲悪。だから、最近はコミックを原作にした映画が増えてる。『スパイダーマン』などが好例ですね。だから、私のような監督の映画作りは困難です。100万ドル集めるのもやっと(笑)。でも、たとえ製作費が少なくても、撮影期間が4週間しかなくても、作らなければならない。作れるもんなんです。そう、すばらしい女優たちが集まってくれたのも、彼女たちが、エンターテイメント重視の作品では演じられない新しい役柄に魅力を感じてくれたからです。女優に限らず、演技を志す人なら誰だって、演じたことのない役柄を求めているものです。また、それによって、新たな側面をハリウッドにアピールできる、認めさせるチャンスでもあるわけですからね」

現在、進行中の企画には歴史劇があって、珍しく大作指向だが、「現在、製作資金を調達中だけど、四苦八苦(笑)」とのこと。一刻も早く、実現することを願うばかりだ。

「セクレタリー」「モナリザ・スマイル」と出演作の公開が続くマギー・ギレンホール

監督自身による脚本は、6人の女性それぞれの境遇を描き出す

作品評　養子を持つ女性たちの生き方と不安

文＝おかむら良

演出中のジョン・セイルズ監督

わたしはジョン・セイルズ作品というと「ブラザー・フロム・アナザー・プラネット」(84)と「エイトメン・アウト」(88)を思い出す。前者はユニークな宇宙人キャラが好きで、後者は野球映画の秀作だと思っているからだ。どちらも男性主人公だが、セイルズは女性を非常にリベラルに描く監督のひとりでもある。「リアンナ」(83)はレズビアン女性の話で、メアリー・マクドネルがアカデミー賞主演女優賞候補になった「パッション・フィッシュ」(92)は女性の友情をテーマにし、「フィオナの海」(94)では少女の目を通して家族の絆や自然を描いていた。

セイルズ脚本・監督・編集の最新作「カーサ・エスペランサ〜赤ちゃんたちの家〜」も女性の物語で、女優たちの顔ぶれが魅力的だ。「ブレードランナー」のダリル・ハンナ、「ミラーズ・クロッシング」のマーシャ・ゲイ・ハーデン、「メルビンとハワード」のメアリー・スティーンバーゲン、「ウエスト・サイド物語」のリタ・モレノ。映画ファンにとって忘れられない作品に出ていた女優たちが、大集合しましたという感じのキャスティングになっている。

舞台は南アメリカの国というだけで国名は特定されていない。だがガイドをする地元の男性は「赤ちゃんはこの国の最大の輸出品だからね」と自嘲気味に笑う。合法的な養子縁組は悪いことは思わないが、〈輸出品〉というビジネスライクな表現には、正直なところギョッとした。

言葉が通じないこの国で、6人のアメリカ女性が養子として赤ちゃんを抱く日を待っている。彼女たちが養子をとる理由は、子供が出産後すぐに死んだから、男性に興味はないが子供がほしい、夫との関係が揺れている…とさまざま。みんな不幸というほどではないが幸福という実感を持てずにいて、赤ちゃんが新しい希望になるはずと考えていることで共通する。

この背景にはアメリカ人のファミリー至上主義があると思う。家族は裏切らない、家庭こそ安息の場、家族は何ものにもかえがたいという当たり前のことが、競争やストレスが多い国だからこそ、一種の信仰のように高められているのだろう。映画作家であると同時に作家でもあるセイルズは、なに気ないおしゃべりや行動から、女性たちが置かれている情況や心の不安を少しづつ浮かび上がらせていく。

アメリカ女性が赤ちゃんをもらう側なら、赤ちゃんを生むのは地元の女性たちだ。ヴァネッサ・マルティネスが好演するメイドのアスンシオンは、子供を北米に養子に出したことを泣きながら語る。彼女は今も子供の誕生日を切ない気持ちで迎え、少女が遊ぶ姿をなみだをためて見つめる。いっぽう町では妊娠を恋人に言えない若い女性が、そう遠くない将来、子供を里子に出そうとしている。

それでももらわれていく赤ちゃんが幸福になるのなら救いがあるけれど、単純にそうとも言い切れないのが哀しい。厳格な母親に体罰をうけて育ち、盗癖のあるナンシーを見ているとよけい心配になる。だが道路で眠り、もらった本さえ売ろうとするストリート・チルドレンをにとっては、養子縁組が人生の選択肢をひろげるのも確かなことに違いないのだ。

養子をもらう側、養子にだす側、赤ちゃんの将来の姿かもしれないストリート・チルドレン。この三者をからみ合わせて描くことで、セイルズは合法的な養子縁組の意味や問題を提議する。さらにちょっと見方を変えると、この作品の別の面が見えてくる。あり余る時間の中で自分と向かい合う女性たちの物語とも考えられるし、南北アメリカの経済格差をいやおうなく実感させられるし、リタ・モレノ演じるホテル経営者の「子供は悩みのタネね」という言葉に象徴されるように、子育ての難しさを描いてもいる。しかしセイルズはどの問題にも明解な答えを導きだそうとはせず、観客が考えることを求めているような気がする。

バンジャマン・コンスタンの『アドルフ』を「イザベル・アジャーニの惑い」として映画化

監督 ブノワ・ジャコ

イザベルが第六感で私を選んだ……

インタビュアー＝河原晶子

撮影／イエハラトキオ

Benoit Jacquot／1947年パリ生まれ。75年、A・カリーナ“L'ASSASSIN MUSICIEN”で監督デビュー。D・サンダ「肉体と財産」(89)、J・ゴードレーシュ「デザンシャンテ」(90)、V・ルドワイヤン「シングル・ガール」(95)など女優の演出に定評あり。近作は「発禁本ーSADE」「トスカ」(00)。最新作はイジルド・ル・ベスコ「いつか会える」。

スタンダールの『赤と黒』やラクロの『危険な関係』と並ぶ近代フランス恋愛心理小説の代表作であるコンスタンの『アドルフ』の映画化ときいて、あわてて本棚の奥を探したら、あの古本特有のカビの匂いのする岩波文庫の一冊が古い思い出とともに出現した。コンスタンの自伝的小説といわれる、彼のほとんど唯一のこの特異な古典は、はたしてフランス人にとってよく知られた小説なのだろうか？

「古典として記念碑的な作品だが、フランスでもあまり読まれていない。20～30年前はフランス文学としての存在価値はあったが、今ではもう誰も読まない遺跡のようなものだ（笑）。でもこの映画がパリで公開されて、小説は復活した。カヴァーにイザベル・アジャーニの写真入りで、一週間で売り切れてしまった」とブノワ・ジャコ。

彼ブノワ・ジャコにとっては、15才の時の青春の書だという。それから何度も読む機会はあったが、映画化など思いもしなかった。それがイザベル・アジャニ自身の企画によって、彼に監督依頼の話がきたのだという。「イザベルは16才の時に読んで、いつかは演じてみたいと思っていたようだ。スタンダール、ラクロ、コンスタンは、いつも並べて語られる。18世紀末から19世紀の始まりにかけての大きな文学的潮流とか、感情の描写とかにおいて、ね。コンスタンはラクロを尊敬していたし、スタンダールはコンスタンを読んでいた」。

前途ある美しい青年アドルフ（スタニスラス・メラール）と16才年上の憂愁の伯爵夫人エレノール（イザベル・アジャニ）との、絶ちがたい恋の官能と残酷。

原作も映画も、アドルフの独白で物語は進行する。「アドルフは冷酷で繊細、自己中心的。若い男の象徴だ。彼はエレノールに対しても自分に対しても冷酷だ。エレノールの死は彼の冷酷さのせいだが、彼自身だって生きながら死んでいるんだ。アドルフは男性すべてに共通点をもつ。男は女を理解できず、女を苦しめる。でも、恋は逃れられないもの。映画もシャンソンもそのことを語り続けている」。アドルフを演じるスタニスラス・メラールはアジャニ自身からの要望だった。「スタニスラスは実生活においてもアドルフそのものなのです」とアジャニは言う。

男性たちがアドルフに自身を発見したのに対して、女性たちはエレノールにどう反応したのだろう？「女性観客はイザベルに深く感情移入してしまう、ときいた。イザベルとエレノールを混同してしまうんだ。数多いフランス女優の中で、イザベルは唯一すべて演じる役が彼女自身と重なってしまう女優だ。ユペールもドヌーヴもビノシュも、演じる役は彼女たち自身と混同されない。イザベルは違

う。実生活も映画そのままじゃないか、と思わせてしまうんだ」。そうアデル・Hもエミリー・ブロンテも、そしてカミーユ・クローデルも、彼女が演じてきた激しくも純粋なヒロインたちは、まさしくアジャニそのもののようだ。

　それにしてもイザベル・アジャニはなぜいつまでも少女のように美しくはかなく一途なのだろう？「彼女は人一倍老いを恐れ、若くあることへの努力を惜しまない。実際に彼女は20才の頃からあまり変っていない。老いを感じたら、彼女はスクリーンから去るだろう」。ジャンヌ・モローとは対照的？「ジャンヌは20才の時から成熟した女だった。イザベルは16才の少女として有名になった。ソフィ・マルソーもそうだ。ドヌーヴも『シェルブールの雨傘』のイメージが強かったが、彼女は上手に年を重ねた。いちばん頭のいい女優だ」。こうしてしばらくブノワ・ジャコならではの女優論が展開した。ドミニク・サンダからジュディット・ゴドレーシュ、ヴィルジニー・ルドワイヤン、そして今注目のイジルド・ル・ベスコと注目の女優たちを育ててきた女性専科(?)の彼の面目躍如である。

　それではアドルフ＝スタニスラス・メラールについては？「イザベル自身が彼を希望していたから……。アンヌ・フォンテーヌとは知り合いだし、『ドライ・クリーニング』は観ていた。私は俳優の気持を尊敬する。私の演出はあまり具体的なものではない。ちょっとした指摘をするだけで導いてゆく。俳優たちには動物的な勘があって、それを感じてくれるんだ。どんな俳優の中にもなにか一匹の動物がいる。それを引き出して魅力的なものにみせるのが私の仕事だ。イザベルが私に監督を依頼してきたのも、俳優の鋭い第六感が私を選んだのだろう」。

　このインタビューは昨年6月のフランス映画祭で行われたものだが、その時、「来年、又来るよ」と約束した通り、今年のフランス映画祭にも「いつか会える」をもって来日した。この新作は彼が「発禁本—SADE」で大抜擢した注目の女優イジルド・ル・ベスコを主演に、アラブ系のミステリアスな美青年（じつは犯罪者）を愛し、彼とともにフランスからスペインへ、モロッコからギリシャへと放浪する19才の女を描いた映画である。憑かれたように恋の情念を追うこのヒロインは、まるでフランソワ・トリュフォーが創造したあのアデル・Hのようだった。

「イザベル・アジャーニの惑い」

多くの女性を魅了し続けるバンジャマン・コンスタン著の近代フランス恋愛心理小説「アドルフ」を、アジャーニ自ら企画・主演した話題作。16歳年下の青年との恋に生きた女性エレノールの一生を描く。
●2002年・フランス・ヨーロッパビスタ・1時間48分
●監督／ブノワ・ジャコ　原作／バンジャマン・コンスタン　脚本／ブノワ・ジャコ、ファブリス・ロジェ＝ラカン
●出演／イザベル・アジャーニ、スタニスラス・メラール、ジャン・ヤンヌ、ロマン・デュリス
●配給／ザナドゥー、エレファント・ピクチャー
●シネスイッチ銀座、関内ＭＧＡにて上映中

FROM France

齋藤敦子

㊸熱血教師の伝統

「下妻物語」、気に入っていただけてよかった。実は私も稲垣トトヨ女史の推薦で見に行ったんです。でなければ、うっかり見逃してたところ。気に入っていただいたついでに、もう1本お薦めを。「69 sixty nine」という村上龍原作の1969年の佐世保の高校生を主人公にした学園物です。主演は妻夫木聡と安藤政信で、29才の安藤政信が詰襟で高校3年生を演じているのを見て、思わず近藤正臣を連想してしまいました(古いね)。岸部一徳演じる担任教師が、中学のときの美術の先生に(病弱なところも)そっくりなのも、しみじみしたし。

その後、「モナリザ・スマイル」の決して美人とはいえないジュリア・スタイルズの顔を見ていて、安藤→近藤式連想が再びむくむくと頭をもたげてきました。思いついたのはコンスタンス・ベネット。ジョージ・キューカーの「栄光のハリウッド」で元祖〝ノーマン・メイン夫人〟を演じた人です。ほんと、そっくり。それで、ハリウッドには昔から彼女たちのような狆クシャ顔を好む土壌があったんだなと納得。

「モナリザ・スマイル」は50年代の名門女子大学に進歩的な美術教授(ジュリア・ロバーツ)が赴任してきて、伝統と因習の壁にぶちあたるという〝挫折する教師〟物。監督のマイク・ニューウェルはそれをハリウッド風の感動学園物にしようとして苦労している。同じ〝挫折する教師〟なら、ケヴィン・クライン主演の「卒業の朝」の方が、苦労してない分すっきりして面白かったけど、〝挫折〟する学園物は当たらないからね。しかし、50年代のアメリカの女子大生って、こんなに甘かったのかなあ。シドニー・ルメットの「グループ」は30年代の女子大生の話だけど、もっとずっとシビアだった気がする。これって英国人ニューウェルの思い込みじゃないの? もっとも「グループ」はメアリー・マッカーシー原作だから、甘くなりようがないんだけど。

学園物といえば、英国には「チップス先生、さようなら」を始めとする伝統があるでしょ? でもフランスにはないんです。学校が出てくる思春期物はあるけど、学園物にはならない。英国のパブリック・スクールに相当するのは、フランスでは修道院付属の寄宿学校になると思うけど、これがまた昔からろくなところじゃなくて、おかげで感動学園物というジャンルが存在しえないんです。とはいえ、チップス先生もミス・ブロディも決して熱血とはいえないから、もしかしたらフラナガン神父ばりの熱血教師は、ハリウッド(と日本のテレビ)の専売特許かもしれません。

ドーバー越えて

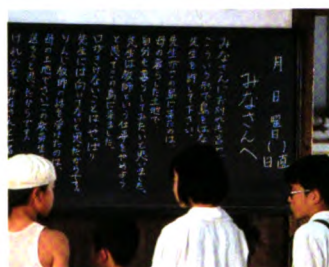
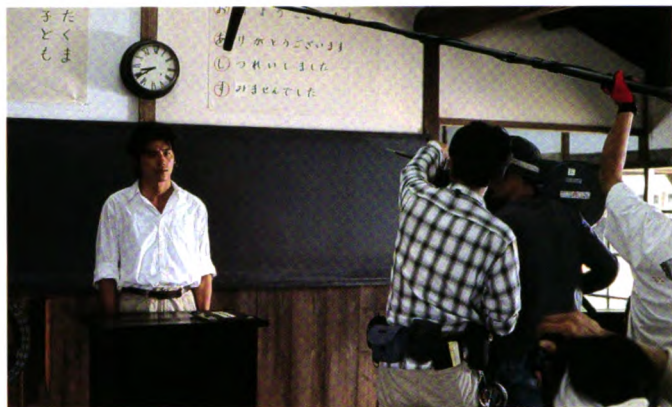
往復連載

齋藤敦子
中野香織

「モナリザ・スマイル」8月7日より
みゆき座にて

服飾史家である中野香織さんと、映画評論家で字幕翻訳家の齋藤敦子さんの往復書簡的コラム。ファッション誌の映画コラムニストとフランス映画社宣伝部員として出会った中野さんと齋藤さんは、以来十数年、友情を育む。この連載では、イギリス文化とフランス映画という専門分野をベースに映画談義が交わされる。

オブジェ制作＝井上陽子

special report
メイキング・オブ・機関車先生

香川県の本島にあった臨海学校に使用されていた建物に手を入れ、昭和30年代当初の小学校を再現。美術監督・重田重盛のこまやかな仕事ぶりが、時代の雰囲気を見事に作り出している。現場を訪れた脚本の加藤正人も「重田さんの美術に助けられてますね」とひと言。ちなみに黒板の文字は坂口本人の字。

03年、「ヴァイブレータ」でその巧みな演出術をみせた廣木隆一監督。主演の寺島しのぶがキネマ旬報賞をはじめ、数々の映画賞に輝いたことは記憶に新しい。その廣木が次に取り組んだ作品が、この7月に公開される伊集院静原作の「機関車先生」だ。

舞台は瀬戸内海にうかぶ架空の小さな島、葉名島。この島にやってきた、口のきけない代用教員〝機関車先生〟こと吉岡誠吾が、生徒たちをはじめ島の人々と心を通わせてゆくハートウォーミングな物語である。吉岡に扮する主演の坂口憲二をはじめ、堺正章、倍賞美津子、大塚寧々、そして生徒役の子供たちが、昨年春、1カ月以上にわたる全編オールロケ撮影に臨んだ。

地元ネットワークとの貴重なつながり

この作品において重要な位置を占めるロケーションには製作側がかなりこだわり、廣木監督自らも台本を起こすにあたりロケハンを重ねていたという。そんな製作側の動きの一方で、香川フィルムコミッションと地元の映画誘致の民間支援団体「映画・えいがの会」による誘致活動もかなり熱心だった。「島の感じが香川県がいちばんいいんじゃないかと思って。昭和30年代の校舎に見立てて撮影するのに、ちょうどいい木造の建物が島にあったことも大きかった」と監督が香川でのロケを決断するまでには、監督のロケハンにも足しげく同行するなど誘致側スタッフの地道な努力もあった。撮影がはじまってからも彼らはサポートの手を惜しまず、ボランティアの方が昼食の炊き出しに出たり（取材時はその場で釜揚げした讃岐うどんに焼き魚と本格的！）、急きょ入用になった小道具を調達してきたりと、現場での大きな支えとなっていた。

どうフレームを切り取るかを綿密に打ち合わせる廣木監督と撮影監督の鈴木一博(写真左下)。このシーンではクレーンを使っての大掛かりな撮影。島に残る美しい自然と計算された美術により、引き画面も説得力のある画に仕上がっている。

坂口の静かなる存在感

取材をした5月3・4日は快晴で、春先とはいえ照りつける太陽がかなり強烈。そんな中、3日は吉岡が島を離れる決意をし、生徒たちとの思い出の詰まった教室に別れを惜しんで学校を訪れるシーン。翌日の4日は吉岡が生徒たちに本当の強さとは何かを示すべく、封印していた剣道に向き合うシーンと、両日とも話の核となる大事な場面の撮影だ。全体的にスケジュールは押していたが、廣木は妥協しない。テストを重ね、セリフのニュアンスがぴったりリアルに響かないとひとつひとつきっちり指摘してゆく。

坂口にとって、映画初主演の大役を担いつつ、口のきけない難役に挑むのはかなりのプレッシャーでは？

「最初は表情も大げさでしたし、子供が元気でワーッとやってくるので、僕もつられてワーッといっちゃうこともあって。廣木さんからはもっと抑えて抑えてって言われてました。とはいえ、しゃべれないことが誠吾にとってのハンディに見えないよう、今にもポロッとしゃべってしまいそうな雰囲気で演じてます」

誠吾が教壇から教室を見渡す演技などを見ていると、すっかり坂口は〝機関車先生〟の佇まいだったが。

「見透かされているというか。気持ちがちゃんと入っていないとOKを出してくれない監督なんですよ。逆に100%気持ちが入っていれば、たとえその表情が求められていたものでなくても、廣木さんはOKしてくれるかなとも思いました」との言葉に、彼の誠吾役を演じることへの確かな自信と、廣木監督への信頼感を感じた。実際、テレビの仕事が多い坂口は自分の演技をモニターでチェックする習慣があるが、「廣木さんが僕のモニターになってくれていると思う」と、今回の現場ではまったくノーチェックだった。

special report
メイキング・オブ・

機関車先生

撮影現場にてオフショット、廣木監督は子役たちとも笑顔で会話を交わしつつ、その会話の中で、子供たちに役を演じるにあたってのヒントを出してゆく（写真上）。5月4日、主演の坂口を支えてきた水見色小学校校長の佐古周一郎役の堺正章がクランク・アップ。坂口と堺が笑顔で「お疲れさま」と握手（写真左下）。

ジャンルは違えど、映画は映画

坂口に絶大の信頼を寄せられた廣木監督だが、今回のような作品にたずさわるのは珍しいのではとも思うのだが。

「別にものすごく新しいものをやっているという感じはしないんですよ。たくさんの子供たちとの仕事は初めてなので、初めての経験はいっぱいありますが」

初めてとはいえ、子供たちへの演出風景を見ていても、子供たちひとりひとりと話をして、発声のおかしいところをチェックしたりと、多少かみ含んで指示を出してはいるものの、基本的には大人への演出とさして変わりなかったような……。

その一方で、廣木の坂口に対する要求は「本当に、立っていてほしい（笑）」。小手先の芝居で感情を表現しようとすれば、おのずと動作が大きくなり、逆に感情が見えなくなる。「180センチもあって、本当に大きいじゃないですか。すごい存在感だし、子供たちのヒーロー像としてぴったり」と評する立ち姿だけで、すでにリアリティは生まれている。その辺りの演出を坂口がしっかり受け止めて演じていたのだ。

新潟でロケ撮影した前作「ヴァイブレータ」に続いての地方ロケとなった「機関車先生」。「東京の風景にないところに違うものが見えるかもしれないから」と語った監督が香川の小島でスクリーンに切り取ったもの。それをぜひスクリーンで確かめてほしい。

「機関車先生」
監督／廣木隆一　原作／伊集院静　製作総指揮／長谷川安弘　出演／坂口憲二、倍賞美津子、大塚寧々、伊武雅刀、堺正章、佐藤匡美、徳井優、笑福亭松之助、千原靖史、森田直幸、吉谷彩子　配給／日本ヘラルド映画
●7月31日よりテアトル新宿ほか全国順次夏休みロードショー

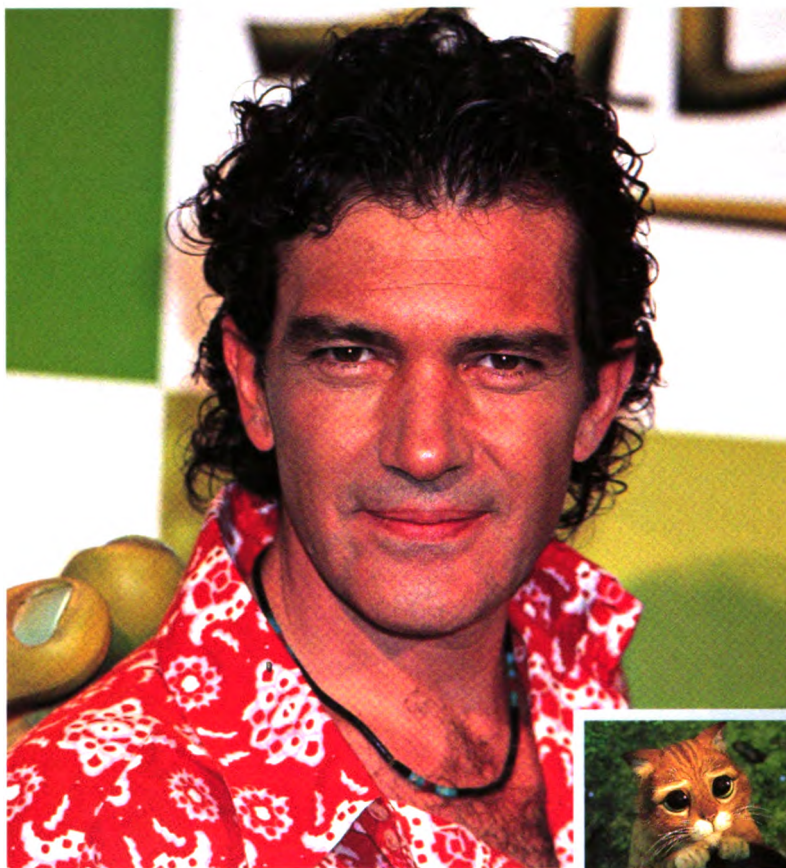
取材・文＝**編集部**
撮影＝**吉岡誠**

HOT SHOTS

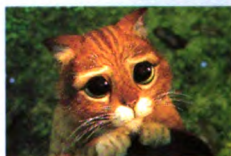
interview

取材・文＝横森文　撮影＝吉田誠

アントニオ・バンデラス

「シュレック2」で刺客？“長ぐつをはいたネコ”の声優に挑戦！

ANTONIO　BANDERAS／1960年、スペイン生まれ。主な出演作は「マンボ・キングス／わが心のマリア」(92)、「デスペラード」(95)、「エビータ」(96)、「マスク・オブ・ゾロ」(98)、「レジェンド・オブ・メキシコ／デスペラード」(03) など

「シュレック2」

●監督／アンドリュー・アダムソン、ケリー・アズベリー、コンラッド・バーノン　声の共演／マイク・マイヤーズ、キャメロン・ディアス、エディ・マーフィ
●7月24日よりスカラ座1ほか全国東宝洋画系にて公開

●「怪傑ゾロ」のようないでたちでシュレックの命を狙う「長ぐつをはいたネコ」!? 必殺技の愛くるしい、ウルウルさせた目で相手を油断させる

全米で「ファインディング・ニモ」の記録を抜くのは確実！　と言われる「シュレック2」。そんな映画のおいしいところをかっさらっていくのが、新キャラ〝長ぐつをはいたネコ〟。セクシーで可愛くて、強くて面白い……まさに最高のキャラクター。しかも声を演じているのはミスター・セクシー、アントニオ・バンデラスだ。

「前作が大好きだったから、依頼が来た時は即答で〝イエス〟と言ったよ。何の役でもいいから出たかったんだ。しかも今回は演じる時にとても自由にやらせてもらえたんだよ。製作陣が俳優のアイデアに対してオープンで、声のトーンやどのような役作りをするのか、リクエストを押しつけるようなことは全然なかったんだ。とりあえずどんどん声をつけていったわけだけど、そのうちにスタッフの笑い声が聞こえてきてね。それで自分の仕事ぶりはそれほど悪くないんだなと思えたんだよ。しかも後で出演場面を増やしてくれたんだ」

結局、声の録音に費やした時間は7日間。しかもずっと最後まで彼は1人だった。

「ラストのドンキーと猫とのデュエットの時も録音はバラバラ。でも僕はドンキーを演じるエディ・マーフィの性格を知っていたから、歌の途中でオペラのように歌ったりした。絶対にエディは〝何やっているんだ〟って突っ込むと思ってね。あとスペイン語で〝スペイン語話せよ、アホ・ドンキー〟っていれたけど、それにも応えてくれていた。そんな風にして録音に1カ月のタイム・ラグがあるとは思えないくらいに、いい感じに仕上がったんだ。リーサル・ウェポンのウルウル目も最高だし(笑)、本当にセクシーで楽しいキャラだよ。猫のキャラクター商品は人気だろうな。皆、僕と寝ることになるんだぜ(笑)」

文＝高橋千秋　撮影＝前田昭二

てづか・さとみ／1961年生まれ。「ハイカラさん」から『ふぞろいの林檎たち』シリーズ、「男女７人秋物語」「ふたりっ子」など、様々な役柄を自然体で演じ幅広い層のファンを持つ女優。主な映画出演作品に「正午なり」(78)、「ア・ホーマンス」(86)、「ISOLA　多重人格少女」(00) ほか

ヘアメイク：松田美穂(ロンド)　衣裳協力：ワンピース¥40,950（テ・ボワン・イグレク広尾本店　TEL：03-3444-7435）[illegible] (ALEX MONROE [illegible] H.P.FRANCE　TEL：03-5778-2022)）

HOT SHOTS interview

手塚理美

4年ぶりの映画「茶の味」でアニメーターのお母さんを演じた

「そんなに長くお休みしてた気はしないんですけどね。時間ってすぐたっちゃって」

ボブヘアに花模様のワンピースを来た姿は少女みたいにかれんな印象。映画は2000年の「ISOLA 多重人格少女」以来。久々の映画が石井克人作品というのはちょっと意外な感じだ。

「『PARTY7』、好きなんですよ。何より台本がすごくおもしろかったから。役どころが『子育てが一段落して仕事に復帰する女性』ということで自分と重なる部分もあったし」

「茶の味」は、山あいの町に住む春野家の物語。平和に見える家族それぞれに小さな悩みや葛藤がある。中学生の長男は恋に胸を痛め、小学生の妹は巨大な分身の出現(CG映像が楽しい)に悩み、催眠療法士の夫(三浦友和)は妻・美子が仕事に復帰するのを応援する反面、さびしさも感じている。美子の仕事はアニメーター。その動きもいろいろ研究した。

「『もののけ姫』のメイキングを見て、宮崎駿さんの動きを盗んだりしちゃいました。美子さんは主婦をやりつつ仕事もして、でも髪ふり乱して両立！ っていうんじゃない。演じていて幸せな気分になるような役でしたね」

実生活でもノホホンとしたおかあさん？

「ぜんっぜん違います(笑)。いつも怒鳴りまくってますね。朝起きないんだから……もう」

我修院達也、浅野忠信といった俳優陣との共演も、新鮮で楽しい体験だった。

「個性的な方ばかり。轟木一騎さんなんて見ているだけで得した気持ちになっちゃいました」

映画の中で印象的なのは、美しすぎて哀しいくらいの夕陽を、家族が別の場所でそれぞれが見上げる場面。

「うちでも夕焼けがきれいな日、月がきれいな日には子供が呼びにきます。『おかあさん、月がすごくおっきいよ』って」

今後も、当分はマイペース。

「こんな世の中ですし、せめて子供が小学校を卒業するまではなるべく一緒にいたいな、って」

できるなら、「エレファント」のような社会性のあるドキュメンタリー仕立ての作品をやってみたい、という。ファンとしては『ふぞろいの林檎たち』パート5も望みたいところだが。

「そうですね。若い頃一緒にしごかれた仲間だから、会うと自然に『ふぞろい～』の空気に戻っちゃう。あの頃、スタジオからいつもみんなで帰って、途中のファミリーレストランで『あの場面、どうしたらいいかなあ？』なんて延々話し合ってた。なつかしいです」

みずみずしさを残し、力は抜けた感じ。その笑顔に、同行の編集者二名＋カメラマン(ぜんぶ♂)ともども、ふんわりほっこりした。

「茶の味」
●監督／石井克人 共演／坂野真弥、佐藤貴広、浅野忠信、我修院達也、三浦友和
●7月17日よりシネマライズにて公開

取材・文＝信夫梨花

「トレイシー・ボーイズ」見参！

「サンダーバード」にイケメンがずらりと揃う

フィリップ・ウィンチェスター(スコット・トレイシー)／次男、1号機を操縦。

ドミニク・コレンソ(ヴァージル・トレイシー)／三男、2号機を操縦。

ベン・トージャーセン(ゴードン・トレイシー)／四男、3号機を操縦。

ブラディ・コルベット(アラン・トレイシー)／五男、4号機を操縦。

レックス・シャープネル(ジョン・トレイシー)／長男、5号機を操縦。

クライブデン・ハウス(左)と国際救助隊秘密基地(下)

「サンダーバード」
●監督／ジョナサン・フレイクス　共演／ビル・パクストン、ベン・キングズレー、ソフィア・マイルズ
●8月7日より日劇3ほか全国東宝洋画系にて公開

約40年間全世界の人々から愛され続けた「サンダーバード」。その実写版で国際救助隊員のトレイシー兄弟を演じる俳優たちがクライブデン・ハウスに集結した。ロンドンから西へクルマで1時間。映画のなかでレディ・ペネロープの屋敷として登場するこの館は、17世紀、王室の狩猟の家として建てられた荘厳な歴史的建造物だ。

サンダーバード1号担当の次男スコット（フィリップ・ウィンチェスター）は別の任務のため欠席したが、5号を操る長男ジョン（レックス・シャープネル）、2号に乗る三男ヴァージル（ドミニク・コレンソ）、父ジェフとともに3号を操縦する四男ゴードン（ベン・トージャーセン）、五男アラン（ブラディ・コルベット）が勢ぞろいした。

主役のブラディは米国生まれの15歳。7歳の時からCMに出演、「サーティーン」（近日公開）で映画デビュー。撮影時より長くなった前髪で顔の輪郭を隠した彼は、ちょっと不良っぽい雰囲気。映画では父から相手にされない末っ子の役だが、会見では貫禄を感じさせた。淡々とこともなげに「こんな大きな映画に出るなんて思ってもみなかった」と言う。

レックス・シャープネルは英国出身。父は名優ジョン・シャープネル。「K-19」に父子揃って出演した。弟たちの堅さを解くような、気さくな態度とコメントが印象的だった。

ドミニクとベンのふたりはともに映画初出演。前者は81年英国生まれ。ロンドンのドラマセンターで学び、テレビや舞台に出演。「アクション・シーン撮影の時は、本当にヒーローになったような気がした」。今年、高校を卒業した米国出身のベンは「スーパーマンみたいな衣裳を着られて光栄」と話す。

本当の家族のように、楽しそうに和気藹々と話す彼らに、明日のスターの片鱗を見た。KJ

HOT SHOTS report

撮影／川崎浩護

会場の世宗文化会館に詰め掛けたファンは1000人以上

第41回大鐘賞授賞式

歴史ある、韓国映画界のビッグ・イベント

さる6月4日、韓国映画人協会およびSBS（ソウル放送）共同主催による第41回大鐘賞授賞式が開催された。1962年から始まった当映画祭は、かつては韓国の政治状況に翻弄、また賞選出の公平性を巡って批判を受けてはきたが、"韓国のアカデミー賞"と呼ばれる歴史ある韓国映画界最大のイベント。今年は、カンヌでのグランプリ獲得の勢いそのままに主要な賞は「オールド・ボーイ」一色になるかと思いきや、最優秀作品賞が「春夏秋冬そして春」に決まるなど、優れた人材ひしめく韓国映画界の現在を如実に示す結果となった（右表を参照）。

第41回大鐘賞主要部門　受賞結果一覧

部門	受賞
最優秀作品賞	「春夏秋冬そして春」
監督賞	パク・チャヌク（「オールド・ボーイ」）
主演男優賞	チェ・ミンシク（「オールド・ボーイ」）
主演女優賞	ムン・ソリ（「浮気な家族」）
助演男優賞	ホ・ジュノ（「シルミド／SILMIDO」）
助演女優賞	キム・ガヨン（「どこかで誰かに何かがあれば、必ず現れるホン班長」）
新人男優賞	キム・レウォン（「幼い新婦」）
新人女優賞	ムン・グニョン（「幼い新婦」）

パク・チャヌク監督は「私と私の妻子に、ご飯を食べさせ服を与えてくださった韓国の観客の皆さん、ありがとうございました」と会場を沸かせた

「今日はここに来られただけでも、とてもうれしくて幸せなことなのにこんなに素晴らしい賞までいただいて」と感激のキム・カヨン

何故か受賞の壇上には登らなかったキム・ギドク監督

「箪笥」がまもなく日本で公開されるムン・クニョン

「春夏秋冬そして春」
●監督・出演／キム・ギドク　出演／オ・ヨンス、キム・ジョンホ●秋、Bunkamuraル・シネマにて公開

「オールド・ボーイ」
●監督／パク・チャヌク　出演／チェ・ミンシク、ユ・ジテ●秋、シネマスクエアとうきゅうほか全国公開

文＝おかむら良　撮影＝前田昭二

わくい・えみ／1970年生まれ。89年「べっぴんの町」で映画デビュー。91年「息子」でキネマ旬報助演女優賞はじめ映画賞を多数受賞、93年「虹の橋」で日本アカデミー賞最優秀主演女優賞を受賞し、若手演技派として活躍する。映画作品に「就職戦線異状なし」「復活の朝」「エンジェル　僕の歌は君の歌」「バースデイプレゼント」、テレビ作品に「夏子の酒」「妹よ」「ヒュア　動物のお医者さん」「恋文」などがある。9年ぶりの映画出演となった「丹下左膳　百万両の壺」と、ナレーションと出演を務めた「茶の味」が同日に公開となる。「スクールウォーズ　HERO」「MAKOTO」などが公開待機中。

HOT SHOTS **interview**

和久井映見

「丹下左膳　百万両の壺」で新しいヒロインに挑戦

映画ファンのひとりとしては「おかえりなさい」と言いたくなる。95年の「バースデイプレゼント」以来スクリーンから離れていた和久井映見が、津田豊滋監督・撮影・編集の「丹下左膳　百万両の壺」で帰ってきたのだ。

「若い時は無我夢中で撮影を終えることもありましたが、今は難しさとか演じる怖さもなんとなくわかるようになって、前にもまして毎日が緊張の連続です。作品を作り上げることが〈はい、できました〉というのではなく、もっと重いものだということに気づきました」

彼女が演じるのは、丹下左膳のパートナーのお藤。出演依頼を受けた時「これって間違ってないんだろうか。わたしですけど……という気持ちでしたね」と振り返る。

お藤は矢場の女主人で、客のケンカにも一歩もひかず、気は強いけれどどこか可愛く、口からはポンポンと威勢のいい言葉が飛び出す。

「京都の撮影所で着物をきてカツラをつけて矢場のセットに入った瞬間、お藤さんはこの矢場を切り盛りしてきたんだと、彼女の人生が急にリアルな形で現れてきました」

和久井といえば清楚で芯の強い女性というイメージで、お藤のように鉄火なキャラクターはこれまで演じたことがないし、対極にあると言ってもいい。「役柄と自分の共通項はあまり考えない」という役作りは。

「演じていると何かの瞬間〈あっ、これが今回の役なのかな〉と感じることがあって、そういう感覚を軸にして役を考えていきます。お藤さんの場合は、所作や立ち振る舞いにがんじがらめになった部分があって、最初は悩みました。撮影中、滞在したホテルでテレビをつけていたら、小津安二郎監督の作品を放送していて、毎日、見ていたんです。いろいろな女優さんが出てらして、立ち振る舞いや仕草にとらわれることなく、役の人物として存在してらっしゃる。それを見た時に〈あっ、こういうことかな〉と感じて。それでわたしはこういう方向に進んでいけばいいのかな、というのがなんとなくできました」

和久井にとって映画での時代劇は、日本アカデミー賞最優秀主演女優賞を受賞した93年の「虹の橋」以来になる。今、改めて、時代劇をどう考えているだろう。

「時代劇はあまり見ていなかったのですが、想像とは違う素敵な世界でした。撮影を終えてからもテレビで時代劇をちょこちょこ見ています。池内淳子さんが出ていらっしゃる『沓掛時次郎・遊侠一匹』を偶然拝見して、当時の池内さんがお幾つかわからないのですがすごく大人で、人間の持っている強さというか、役以前に演じる方のすごさみたいなものが見えて、〈カッコいい〉とショックを受けました」

今の彼女は「丹下左膳」で「時代劇という扉を開けてもらった」と感じているが、石井克人監督の「茶の味」ではナレーションにも挑戦。なにかほのぼのとした気分になるナレーションで、短いが出演もしている。

「この『丹下左膳』にしても『茶の味』にしても、今までしたことのないものをどなたかが求めて下されば、飛び込んでみたいな、と思う自分でありたいと思っています」

和久井映見の〈映見〉という名前は、以前から映画女優にふさわしいと思っていた。だが今回、聞いてみると〈カンよく、賢く、誰からも愛されるように〉という意味で付けられた芸名だという。静かにていねいに話す彼女を見ていると、ふさわしい名前だと思えてきた。

「丹下左膳　百万両の壺」

©Evan Agostini/Getty Images/AFLO FOTO AGENCY

GOES ON

とっとくもの？
るの？

●荻原順子

証拠になったシットコム

たまたま犯行現場に居合わせた観光客の撮っていたビデオが犯人の姿をとらえていた……あるいは、防犯カメラが容疑者のアリバイを証明した……そんな都合良い展開は刑事ものの映画やテレビドラマの中だけのことのように思いがちだが、まさにそのような状況の事件が、ロサンゼルスで起きた。去年の５月、16歳の少女が自宅前で射殺されたが、彼女は、或る刑事事件の証人として容疑者に不利な証言をしていたため、その報復として殺されたとして、容疑者の弟、フアン・カタランが殺人容疑で逮捕された。カタランは、一貫して容疑を否定。犯行時刻には、犯行現場から何マイルも離れたドジャーズ・スタジアムで、６歳の娘と友人たち数人と野球の試合を観ていたと主張した。カタランが持っていた試合の入場券だけでは証拠不十分だと思った彼の弁護士、トッド・メルニックは、試合のテレビ中継映像の中からカタランの姿を探し出そうとしたが、あいにく、テレビ・カメラは彼の姿を映していなかった。しかし、『ザ・ソプラノズ』や『SEX AND THE CITY』で有名な有料ケーブル局ＨＢＯ製作のシットコム『カーブ・ユア・エンシュージアズム』が、ちょうどその時、ドジャーズ・スタジアムで撮影を行なっていたということを聞いたメルニック、ＨＢＯに頼んで未編集の群衆ショットを見せてもらったところ、幸運にも携帯電話をかけているカタランの姿が映っていた。メルニックは携帯電話の記録と併せて、“証拠物件”の映像を裁判所に提出。カタランは、無実が証明されて釈放された。『エンシュージアズム』のクリエイター兼主演のラリー・デイヴィッドは、“自分の番組が無実の人を救うのに役立って嬉しい。今度の事件を元にしたエピソードを書くのもいいかも”とコメントしている。

©Vince Bucci/Getty Images/AFLO FOTO AGENCY

『カーブ・ユア・エンシュージアズム』はテレビの賞も受けた名物番組。まんなかがクリエイターで主演のラリー・デイヴィッド。

「女性No.１」のキャサリン・ヘプバーン。時間は人を思い出収集家にするのでしょうか。

収集魔だった(？)キャサリン・ヘプバーン

去年の６月に亡くなったキャサリン・ヘプバーンの遺品が、サザビー社によってオークションにかけられた。今回、出品された691点の中には、舞台版『フィラデルフィア物語』で共演したジョセフ・コットン、ヴァン・ヘフリンらのキャストから贈られた銀製の煙草入れや、有名な写真家、セシル・ビートン撮影によるポートレイト、風刺画家アル・ハーシュフェルドの作品、“ミス・ヘプバーン”の名入りのディレクターズ・チェア等、往年のハリウッド・スターらしいアイテムもあったが、フィラデルフィアの名士の息子、ラドロウ・オグデン・スミスと挙げた、生涯唯一の結婚式で着たウェディング・ドレスや、大学時代の歌集、失敗作と言われている1937年の舞台版『ジェーン・エア』のプログラムから、ＲＫＯスタジオの通行証までと、センチメンタルな価値しかないようなアイテムも多かったそうだ。伝説的な名女優だったヘプバーンが、古き良き昔を懐かしく思い出せるものなら何でもとっておく癖のある、どこにでも居そうな老婦人みたいな面も持っていたことがうかがえて、なんだか微笑ましい。

「過去」。それは捨てるもの? あるいはわが身を助けるも

©Paul Hawttome／Getty Images／AFLO FOTO AGENCY

ジェニファー・ロペス、結婚！

去年、全米のマスコミの関心を惹きつけながら、ベン・アフレックとの結婚をドタキャンしたジェニファー・ロペスが、6月5日、歌手のマーク・アンソニーと結婚した。挙式予定地だと目されたサンタバーバラにマスコミの大群が押し寄せたアフレックとの結婚未遂騒動とは対照的に、アンソニーとの結婚式は、ロサンゼルスのロペスの自邸にて、数十人の親族と友人たちのみを招待した、ごく小ぢんまりとしたものだったそうである。ロペスとアンソニーは、イベントに一緒に出席したり、仲睦まじそうにしているところが目撃されたりしたうえ、最近になって、ロペスが婚約指輪のような大粒のダイヤモンドの指輪を身につけ始めたため、“結婚も近いか？”と噂されていたのだが、2人のパブリシストたちは、それぞれ、“彼らはただの友達”と否定していた。結婚式を挙げた後で、トークショーに出演したアンソニーも、好奇心いっぱいで結婚のことを聞いてくる司会者に、“私生活のことは話さない主義なので”とアッサリ質問をかわしており、マスコミの取材攻勢が破局の遠因を作ったと言われているロペスとアフレックの結婚未遂事件に懲りてか、新婚の2人は、極力、プライバシーを守る姿勢を崩していない。ロペスの1度目の結婚は1年、2度目の結婚は10ヶ月しか続かなかったことや、アンソニーと前妻との離婚が正式に受理されてからわずか5日後の、いわゆる電撃結婚だったこともあって、この結婚の“持続性”について疑問視する声が目立つのがちょっと気になるが……。

©Paul Hawtorne／Getty Images／AFLO FOTO AGENCY

©Frederick Brown／Getty Images／AFLO FOTO AGENCY

一度や二度の失恋や行き違いくらいでションボリしてる若者よ、みならおう！　上のヤサ男がマーク、左下はろう人形の花嫁ジェニファー。つるつるしてラブリー。ものめずらしそうに見つめられて幸せ……。

New Cinema Rush

ニュー・シネマ・ラッシュ
新作紹介

7月

スパイダーマン 2
SPIDER-MAN 2

トビー・マグワイア主演、メガヒット・アメコミ映画の続編がついに登場！ 製作費220億円をかけて前作を遥かに上回る興奮とスケールが放たれる。グリーン・ゴブリンとの死闘から2年。大学生になったピーターは、苦悩の末、スパイダーマンであることを辞めようとするが、彼の前に新たな敵が出現する。

DATA ●監督／サム・ライミ 出演／トビー・マグワイア、キルスティン・ダンスト、アルフレッド・モリーナ、ジェームズ・フランコ 配給／ソニー・ピクチャーズ ●7月10日より日劇1ほか全国東宝洋画系にて（2004年・米・127分）
http://www.sonypictures.jp/movies/spiderman2/

ウォルター少年と、夏の休日
SECONDHAND LIONS

ハーレイ・ジョエル・オスメントが親の愛に恵まれない少年を健気に演じるハートウォーミング・ストーリー。2人の名優マイケル・ケイン、ロバート・デュヴァルが渋い演技で彼を支える。ある夏、ウォルター少年は2人の頑固じいさんの家で過ごすことになり、じいさんたちの謎めいた過去を知る。

DATA ●監督／ティム・マッキャンリーズ 出演／マイケル・ケイン、ロバート・デュヴァル、ハーレイ・ジョエル・オスメント 配給／日本ヘラルド ●7月10日より丸の内ピカデリー2ほか全国松竹・東急系にて（2003年・米・110分）
http://www.herald.co.jp/official/s_hand_lions/index.shtml

スチームボーイ

「AKIRA」から16年。鬼才・大友克洋が、製作期間9年、総製作費24億円をかけて待望の最新作を放つ。19世紀のイギリスを舞台に繰り広げられる大空想冒険活劇。発明一家に生まれた少年レイ。祖父から謎の金属ボール＝スチームボールを渡されたことから、とてつもない陰謀と冒険に巻き込まれていく。

DATA ●監督・脚本／大友克洋 脚本／村井さだゆき 総作画監督／外丸達也 声の出演／鈴木杏、小西真奈美、中村嘉葎雄、津嘉山正種、児玉清 配給／東宝 ●7月17日より日比谷映画ほか全国東宝洋画系にて（2004年・日・126分）
http://www.steamboy.net/

劇場版ポケットモンスターアドバンスジェネレーション 裂空の訪問者 デオキシス

大人気シリーズ“ポケモン映画”がパワーアップして登場。ハイテク都市を舞台に、サトシと不思議な少年トオイの熱い友情が展開する感動アドヴェンチャー。ポケモン・バトルに挑戦しようとしていたサトシとピカチュウたちは、心を閉ざした少年トオイや、幻のポケモン、デオキシスに遭遇する。

DATA ●監督／湯山邦彦 原案／田尻智 脚本／園田英樹 声の出演／松本梨香、大谷育江、上田祐司、KAORI、山田ふしぎ、林原めぐみ 配給／東宝 ●7月17日より日劇2ほか全国東宝系にて（2004年・日・100分予定）
http://www.pokemon2004.jp/

それいけ! アンパンマン 夢猫の国のニャニイ
同時上映：つきことしらたま～ときめきダンシング～

愛と勇気の大人気ヒーロー、アンパンマンの劇場版シリーズ第16作。不思議な夢猫の国からやって来た子猫のニャニイとメロンパンナの友情を中心に、アンパンマンと仲間たちのハラハラドキドキの冒険が描かれる。同時上映に「つきことしらたま～ときめきダンシング～」。

DATA ●監督／矢野博之 製作／加藤俊三 原作／やなせたかし 脚本／金春智子 声の出演／戸田恵子、中尾隆聖、西村知美 配給／東京テアトル、メディアボックス ●7月17日より銀座テアトルシネマにて（2004年・日・70分予定）
http://www.ntv.co.jp/anpanman/movie2004/index.html

白くまになりたかった子ども
L'ENFANT QUI VOULAIT ETRE UN OURS

デンマーク・アニメの巨匠ヤニック・ハストラップが描く、イヌイットに伝わる神話を基にしたおとぎ話。2003年ベルリン国際映画祭キンダーフィルム準グランプリを受賞。クマのお母さんとお父さんに育てられた人間の赤ちゃん。やがて人間社会に戻るが適応できず、クマになりたいと願うようになる。

DATA ●監督／ヤニック・ハストラップ 声の出演／ケヴィン・ソミエ、グウェナエル・ソミエ、パオロ・ドミンゴ 配給／ミラクルヴォイス ●7月10日より恵比寿ガーデンシネマにて（2002年・仏＝デンマーク・78分）

69 sixty nine

村上龍のベストセラー青春小説を、宮藤官九郎の脚本で完全映画化。妻夫木聡、安藤政信らトップ若手俳優たちが、生き生きとラウ＆ピース世代の高校生を演じる。1969年、九州に暮らす高校生ケンは、憧れの女子高生レディ・ジェーンの気を引くため、仲間たちと共に学校のバリケード封鎖を敢行する。

DATA ●監督／李相日　原作／村上龍　脚本／宮藤官九郎　撮影／柴崎幸三　出演／妻夫木聡、安藤政信、柴田恭兵、金井勇太、水川あさみ、太田莉菜　配給／東映　●7月10日より丸の内東映ほか全国東映系にて（2004年・日・113分）
http://www.69movie.jp/

茶の味

「鮫肌男と桃尻女」「PARTY 7」の俊英・石井克人が、美しい田園風景にＣＧ＆アニメを融合させて描いた異色の家族ドラマ。カンヌ国際映画祭監督週間オープニング作品としても注目された。山間の町に住む春野家。父、母、祖父、内気な長男、物思いにふける妹。一家のちょっと変わった日常が綴られていく

DATA ●監督・脚本／石井克人　撮影／松島孝助　出演／坂野真弥、佐藤貴広、浅野忠信、手塚理美、我修院達也、土屋アンナ　配給／クロックワークス、レントラックジャパン　●7月17日よりシネマライズにて（2004年・日・143分）
http://www.grasshoppa.jp/tea/

穴

“穴”をテーマに4人の注目監督が、それぞれの視点で独自の世界を築いていくオムニバス・ムーヴィー。俳優、女優、ミュージシャン、お笑い芸人というジャンルを超えた主演を迎えてストーリーが展開。「発狂する唇」の佐々木浩久監督による「胸に開いた底なしの穴」他、個性派作品が並ぶ。

DATA ●監督／麻生学、佐々木浩久、本田隆一、山口雄大　製作／仁平幸男　企画・プロデュース／片山武志、八木欣也　配給／ケイエスエス　●7月10日よりユーロスペースにてレイト（2003年・日・94分）

写真は「夢穴」（麻生学監督）

危情少女　嵐嵐（ランラン）

「ふたりの人魚」が話題を呼んだ中国映画第6世代のロウ・イエが、それより以前に挑んだ中国映画史上初の本格恐怖ホラー。悪夢にうなされる毎日の嵐嵐。悪夢の原因をつきとめようと、夢に現れるアパートを探しあてるがますます混乱するばかり。やがて彼女の周囲に起こった恐ろしい過去が明らかになる。

DATA ●監督／ロウ・イエ　出演／チー・イン、ヨウ・ヨン　配給／パル企画　●テアトル池袋にて上映中（1995年・中・100分）
http://www.pal-ep.com/kijyou-syoujo/htm/kijyou-syoujo.htm

丹下左膳　百万両の壺

巨匠・山中貞雄が生んだ日本映画の屈指の名作を、ベテラン撮影監督・津田豊滋か映像美の中に完全リメイク。豊川悦司が大物スターたちが演してきた伝説のヒーローを熱演する。片目、片腕を失い侍を捨てた男・丹下左膳は、矢場を営むお藤と生活。ある時、5歳の少年を預かったことで珍事に巻き込まれる。

DATA　●監督・撮影／津田豊滋　原作／林不忘　脚本／江戸木純　出演／豊川悦司、和久井映見、野村宏伸、麻生久美子、武井証、金田明夫　配給／エデン　●7月17日より恵比寿ガーデンシネマにて（2004年・日・119分）
http://www.sazen2004.com/

プッシーキャット大作戦
同時上映：すべ公同級生

「東京ハレンチ天国・さよならのブルース」で、2001年ゆうばり国際ファンタスティック映画祭オフシアター部門グランプリを受賞した気鋭・本田隆一の劇場公開最新作。3人のゴーゴーガールが、東北の片田舎で壮絶強欲珍道中を繰り広げる。60年代スタイルが盛りだくさんの「すべ公同級生」も同時上映。

DATA　●監督・脚本／本田隆一　脚本／永森裕二、吉津屋こまめ　出演／水谷ケイ、江口ナオ、布川ゆかり、村石千春、高山謙二、山本浩司　配給／バイオタイド　●テアトル新宿にてレイト上映中（2004年・日・43分／「すべ公同級生」(18分)）

いかレスラー

イギリス映画「えびボクサー」から1年。さらに巨大で強力なスーパー・モンスター・ファイターが活躍する。世界初の愛と感動のスポ根・海産モンスター巨編。数年前に不治の病を患い、パキスタンで修行を積んで病を克服した人気レスラーが、いかレスラーとなって再びリングで血潮を燃やす。

DATA　●監督・原作・脚本／河崎実　企画／叶井俊太郎　脚本／右田昌万　撮影／長野泰隆　出演／西村修、AKIRA、石田香奈、ルー大柴　配給／ファントム・フィルム　●7月17日よりシネセゾン渋谷にてレイト（2004年・日・92分）
http://www.ika-movie.com/

集団殺人クラブ GROWING ／集団殺人クラブ 最後の殺戮(主演：吉野紗香／7月10日～)

女子高生たちを主人公にしたホラー・ムーヴィー。今どきの女子高生ミキ、アミ、ナナ。トイレに産み落とされたばかりのナナの胎児を隠すため、3人はミキの別荘へ。しかし、そこには殺戮モンスターが住みついていた。7月10日より、同シリーズ「集団殺人クラブ　最後の殺戮」が引き続き上映。

DATA　●監督／谷洋平　製作／仁平静夫　脚本／龍一朗　出演／小向美奈子、柳沢なな、石川佳奈、松田悟志、遠藤憲一　配給／ケイエスエス　●池袋シネマ・ロサにてレイト上映中（2004年・日・各74分）
http://www.kss-movie.com/shu-dan/forever/

写真は「集団殺人クラブ GROWING」

家族のかたち
ONCE UPON A TIME IN THE MIDLANDS

「トゥエンティフォー・セブン」で注目されたイギリスの俊英シェーン・メドウスが、故郷ミッドランドを舞台に描く家族ドラマ。カーライル＆エヴァンスの競演も見どころ。バツイチのシャーリーは、娘と共にシャイなディックと暮らしている。だが、ある日、元夫が現れて平穏な日々は打ち破られる。

DATA ●監督／シェーン・メドウス　出演／ロバート・カーライル、リス・エヴァンス、シャーリー・ヘンダーソン、フィン・アトキンス　配給／クレスト、エレファント・ピクチャー ●7月10日よりシャンテ・シネにて（2002年・英・104分）
http://www.crest-inter.co.jp/kazoku/

永遠の片想い
연애소설／**恋愛小説**

「猟奇的な彼女」で大ブレイクした韓国の人気男優チャ・テヒョンが主演する感動のラヴストーリー。男1人女2人の美しい友情が、やがて切ない涙を誘う。青年ジファンは、スインとその親友ギョンヒと共に友情を育んできた。しかし、ジファンの心の変化が3人の関係を微妙に揺るがし始める。

DATA ●監督・脚本／イ・ハン　出演／チャ・テヒョン、ソン・イェジン、イ・ウンジュ、ムン・グニョン、パク・ヨンウ　配給／タキコーポレーション、リベロ ●7月17日よりシネ・リーブル池袋にて（2003年・韓・105分）
http://www.eien-kataomoi.com

ゲート・トゥ・ヘヴン
TOR ZUM HIMMEL

「ツバル」の鬼才ファイト・ヘルマーが4年ぶりに贈る、ハートウォーミング・ストーリー。10カ国にも及ぶさまざまな国籍の俳優たちを集め、国籍の壁を超えた作品に仕上げた。スチュワーデスになりたいインド人の女の子ニーシャと、パイロットを夢見るロシア人青年アレクセイは出会い、恋に落ちる。

DATA ●監督／ファイト・ヘルマー　出演／ヴァレラ・ニコラエフ、マースミー・マーヒジャー、ミキ・マノイロヴィッチ　配給／アルシネテラン ●7月17日よりシアター・イメージフォーラムにて（2003年・独・90分）
http://www.alcine-terran.com/main/gate.htm

ディープ・ブルー
DEEP BLUE

海の知られざる世界を最新カメラでとらえた驚異のドキュメンタリー。200カ所以上のロケ地を4年半を費やして撮影。海の底知れぬ力や、生き物たちの姿をリアルに映し出す。イルカ、シャチ、コメツキガニ、ペンギン、ホッキョクグマ……。さらに水深5000メートルに広がる深海の生物も登場し、圧巻だ。

DATA ●監督・脚本／アラステア・フォザーギル、アンディ・バイヤット　撮影／ダグ・アラン、ピーター・スクーンズ、リック・ローゼンタール　配給／東北新社 ●7月17日よりヴァージンシネマズ六本木ヒルズにて（2003年・英＝独・91分）
http://www.deep-blue.jp/

アメリカン・スプレンダー
AMERICAN SPLENDOR

人気アメコミ「アメリカン・スプレンダー」、その原作者ハーヒー・ピーカーと妻の風変わりな日常を映画化した話題作。70年代、クリーブランド。ピーカーは友人である人気漫画家ロバート・クラムの協力を得て、自分の日常を漫画化してもらう。たちまち漫画は人気を博し、彼の人生は一転するのだった。

DATA ●監督／シャリ・スプリンガー・バーマン、ロバート・プルチーニ　出演／ポール・ジアマッティ、ホープ・デイヴィス　配給／東芝エンタテインメント　●7月10日よりヴァージンシネマズ六本木ヒルズにて（2003年・米・101分）
http://www.amesp.jp/

赤線　AKA-SEN

「壊音」「日雇い刑事」「日本の裸族」など異色作を手掛けてきた奥秀太郎が、歌舞伎界のニューヒーロー・中村獅童を主演に、赤線に浮かぶ人間模様を描く。強姦の罪で投獄されていたイソウは脱獄し夜の街へ。やがて赤線の娼館キムラヤの看板娼婦シズモに出会い、心惹かれていくのだった。

DATA ●監督／奥秀太郎　脚本／小柳奈穂子　出演／中村獅童、つぐみ、小松和重、片山佳、荒川良々、今奈良孝行、山田広野、野田秀樹　配給／NEGA DESIGN WORKS ●7月10日よりライズXにて（2004年・日・90分）
http://www.nega.co.jp/aka_sen/

Bridge　～この橋の向こうに～

期待の若手監督・加納周典が、日常の出来事を通して新しい自分を発見していく人々の姿を描いた青春ストーリー。主演は「ウルトラマンコスモス」で注目の市瀬秀和。ある朝、同棲中の恋人・薫の姿がなく、動揺する満作。彼女を捜すべく探索の旅を始めた彼は、その道程でさまざまな発見をする。

DATA ●監督／加納周典　脚本・出演／川端麻祐子　出演／市瀬秀和、藤真美穂、高槻純、吉岡毅志、太田千晶、中村優子　配給／ケイエスエス　●7月10日より渋谷シネ・ラ・セットにてレイト（2004年・日・93分）
http://www.kss-movie.com/bridge/

コンクリート

15年前の女子高生コンクリート詰め殺人事件を映画化した衝撃作。5月公開予定だった本作は、上映抗議が多く寄せられたため中止になったが、劇場を移し上映がついに実現。高校を中退し、少年たちを集め龍神会を結成した辰夫。やがて、彼らは帰宅途中の女子高生を監禁し残酷な行為に走る。

DATA ●監督／中村拓　脚本／菅乃廣　撮影／倉本和比人　出演／高岡蒼佑、小森未来、三船美佳、小林且弥、中谷彰宏、永澤俊矢　配給／ベンテンエンタテインメント　●アップリンク・ファクトリーにて上映中（2004年・日・90分）
http://www.benten org/concrete/

お友達になりたい

ピンク映画の鬼才・荒木太郎による初の一般映画。「トーキョー×エロティカ」の佐々木麻由子を主演に、セックスを巡る人間模様を描く桜色ムーヴィー。未亡人・佳恵のもとに、かつて夫の愛人だった若い女・容子が現れる。“お友達になりたい”という容子の言葉は2人の女の関係にある変化をもたらす。

DATA ●監督／荒木太郎 原作／神山由美子 脚本・出演／藤川美和 撮影／小山田勝治 出演／佐々木麻由子、大野金繫 配給／アトリエ・キャット ●7月17日よりシネマアートン下北沢にてレイト（2004年・日・88分）
http://www.bbfilms.com/fr_film/friend.html

映像詩人ユーリー・ノルシュテインとロシアアニメーションの世界

ロシア・アニメの巨匠ユーリー・ボリソヴィチ・ノルシュテインの代表的作品「霧の中のハリネズミ」を始め、名作群が一挙に上映される。ラインナップは、親子向きのAプロに「霧の中のハリネズミ」「キツネとウサギ」他、大人向きのBプロに「話の話」「アオサギとツル」他が並ぶ。

DATA ●監督／ユーリー・ノルシュテイン他 脚本／セルゲイ・コーズロフ他 声の出演／A・バターロフ、M・ビノグラードワ 配給／ふゅーじょんぷろだくと、ラピュタ阿佐ヶ谷 ●7月18日よりラピュタ阿佐ヶ谷にて（1975年・ソ連）
http://www.comicbox.co.jp/norshtein/

ワー！マイキー　リターンズ！

ビデオアートの鬼才・石橋義正が生んだ、アメリカ人マネキン家族が繰り広げる異色ドラマ「オー！　マイキー!」。今や海外からも熱い注目を浴びているこの人気ブラック・コメディ・シリーズの全編オール新作の映画版特別編の上映、マネキンキャストが勢揃いする展示会など、ハッピーな夏イヴェントが開催！

DATA ●監督／石橋義正 配給／エス・エス・エム ●7月17日より東京都写真美術館ホールにて（2004年・日・60分予定）
http://www.vpn-tv.net/index.html

シュヴァンクマイエル映画祭2004

チェコ生まれのアート・アニメの巨匠ヤン・シュヴァンクマイエルの全貌が楽しめる映画祭を開催。全8プログラム32作品が一挙上映される。近作の長編「オテサーネク」「悦楽共犯者」「ファウスト」「アリス」から、60年代に作られた短編アニメまで見逃せない作品が揃っている

DATA ●監督・脚本／ヤン・シュヴァンクマイエル 提供／レンコーポレーション、ユーロスペース、チェスキー・ケー、ザジフィルムズ ●7月18日よりシアター・イメージフォーラムにて（1964～2000年・チェコ）
http://www.imageforum.co.jp/svank

写真は「オテサーネク」

劇場公開映画批評

このページの批評は作品の結末にふれているものもあります。ご了承の上、お読み下さい。

デイ・アフター・トゥモロー

THE DAY AFTER TOMORROW
20世紀フォックス映画配給
6月5日公開

鬼塚大輔

C.G.I.技術の発達により、気がついてみたら復活していたジャンル、〝ディザスター・ムービー〟の最新作はローランド・エメリッヒ製作／監督／原案（脚本はジェフリー・ナクマノフと共同）だけあって、まずは楽しめる作品に仕上がっている。

地球温暖化の影響により世界中で異常気象が続発し、クロサワ映画に出てくる闇市みたいな現代の千代田区にも大きな雹が降ってくる。主人公の気象学者はデニス・クエイドだが、この手の作品に登場して災害の襲来を警告する科学者のパターン通り、権力者にはまともに取り合ってもらえず、もちろん災害を食い止めることもできない。

そうこうするうちに、L.A.を襲う大竜巻群、N.Y.を襲う巨大津波という二つの大きな見せ場がやってくる。正直、C.G.I.で作ったスペクタクルには幾分飽き飽きしており、氷原を延々と映していく（ように見せている）冒頭の場面にはうんざりしたのだが、この竜巻と洪水の迫力は堪能した。犠牲となる人々のリアクションを丁寧に拾うと共に、街の全景を捉える大俯瞰ショットを適切にインサートしてあるので災害のスケールと破壊力がビビッドに伝わってくるのである。この二つの場面に関して言えば、幾多のディザスター・ムービーの中でも最高のものに仕上がっていると言ってよかろう。

スペクタクル場面の間に挿入されるドラマ部分でも、例えば飛行機内のワゴンの使い方など細かいところでサスペンスを醸し出しダレ場を無くすようにしている。

二つの大きな見せ場が終わってしまうと、後は息子を救うためにN.Y.へと向かうクエイドの冒険行と、息子ジェイク・ギレンホール一行のサバイバルが物語の中心となり、さすがにテンポが悪くなる。とはいえ、どこぞで核兵器を爆発させて一気に片を付けようなどという、ありがちでアホらしい手を使って盛り上げるよりはるかにマシであることは確かだ。

エメリッヒはどの作品でも、人間ドラマを過不足なく描いてはいるのだが、情感でスクリーンを満たすのは苦手なようで、英国の気象学者イアン・ホルムの場面など、もう少ししっとりとしたものになればC.G.I.による大災害場面がさらに生きたはずである。

出演者たちは可もなく不可もない出来、あくまでも災害を引き立てる脇役なので仕方ないのだが。そんな中で合衆国大統領役で七〇年代に活躍していたペリー・キングが出演しているのが懐かしかった。

エライことになってしまったわりには、妙に楽観的な雰囲気の漂うラストだが、後味が悪くならないのはけっこうである。米国では「華氏911」と共に、この作品のメッセージがブッシュの再選を妨げる可能性があるのではと話題になっているようだが、このラストであるので、メッセージ色がだいぶ弱まるので、あまり関係ないだろう。

観ている間は面白く考えさせる作品。明後日には忘れているかもしれないが。

シルミド／SILMIDO

실미도
東映配給
6月5日公開

野村正昭

「韓流」かあ。年末までに30本近い作品が劇場公開されると聞くと、ほんの数年前、閑散とした客席の三百人劇場に通いつめて「韓国映画の全貌」を見ていたのが随分昔のように思えてくる。そして「シルミド／SILMIDO」を見た。冷戦下で、金日成暗殺を目的に、死刑囚や無期懲役囚ら31人の男たちが、無人島に集められ、3年に及ぶ苛酷な訓練を受けるが、外交政策の転換により存在を否定され抹殺されるという物語が強い説得力を持つのは、これが実話に基づいているからだろう。

2時間15分もの比較的長尺であるにも拘らず、最後まで飽きさせないのは、訓練兵たちを束ねる空軍准尉チェ・ジェヒョン（アン・ソンギ）や、チェの片腕的存在であるチョ（ホ・ジュノ）、それにソル・ギョングや、チョン・ジェヨン、イム・ウォンヒら訓練兵たちのキャラクターが、しっかりと描かれているからに他ならない。「二重スパイ」（03年）に続いて、東映系の劇場で拡大公開されたが、最近の東映系劇場で上映された、どの邦画よりも、かつての東映調を彷彿とさせるのは皮肉な巡り合わせと言うべきで、本作も「実録・暴動特殊部隊」と勝手に邦題をつけたいほどだ。

激しい銃撃戦の末に訓練兵たちは島を脱出し、ソウルの中心地に向かう途中で包囲され、バスの中に血文字で自らの名前を記す。現実の矛盾が秀でた作品を生む原動力となり、一級のエンタテイメントとしても昇華させる逞しさには敬意を表するが「シュリ」（99年）や「ＪＳＡ」（00年）では、その割り切りの良さが筆者には微かな違和感として残った。だが本作では、捨て身で個人の尊厳を取り戻そうとする男たちの熱い血が、かつての東映映画に通底する、ぎりぎり崖っぷちの侠気を想起させ、思わず貰い泣きさせられてしまう。

ただ手数のかかる邦画を上映するよりは買い値が高くても（ソフト化を含めて、リスクも分散できるし）、話題の韓流を上映する方が埋め草としても効果があると、配給会社が考えているとしたら、これは日本映画にとっても韓国映画にとっても由由しき問題なのだが。

21グラム

21GRAMS
ギャガ＝ヒューマックス配給
6月5日公開

渡辺祥子

麻薬中毒から立ち直り、やさしい夫と娘二人の幸せな家庭を築いていたクリスティーナ（ナオミ・ワッツ）は、夫と娘たちを轢き逃げ事故で奪われた。

余命わずか、心臓移植手術以外に生き延びる道はない、と宣言された大学教師ポール（ショーン・ペン）は妻とうまくいっていない。

運良く手に入れたと思っていたトラックで誤って人を轢き殺し、罪の意識に苦しんで信仰にすがるヒスパニック系の貧しいジャック（ベニシオ・デル・トロ）。

この三人の、普通なら決して出会うはずのない人生が一つの心臓を軸にして交錯する。ジャックのトラックがナタリーの夫の命を奪い、夫の心臓はポールに移植された。ポールはドナーの家族に会いたくてナタリーを探し出す。

これは「アモーレス・ペロス」のメキシコ人監督アレハンドロ・ゴンサレス・イニャリトゥ監督とギジェルモ・アリアガ脚本による長編二作目にして英語映画デビュー作。ここでは三人それぞれのドラマを一度解体して、ジグソーパズルの大きめのピースのようにした断片を、何のルールもなしに並べたような、手の込んだ作り方がされている。

時間の流れを気にせず、

気まぐれに並べられたように見えるその断片は、やがて次に起きることの予告のように思えてくる。観ているうちに、いま彼らに起きていることはすでに予告されたこと、宿命なのだと思わせられる作り方だ。

三人の運命は神のさだめたもののように見える。日々の生活に当然のこととして神の存在が忍び込んでいるのがスペインやメキシコなど、カトリック信仰の国における映画作家の作品の特質の一つだが、ここにもその色は濃く、宗教的な匂いがたちこめる。

その匂いを一層強力なものにするのが「ミスティック・リバー」のショーン・ペン、「トラフィック」のベニシオ・デル・トロ、「ザ・リング」のナオミ・ワッツという演技派トリオの熱く真摯な演技だ。彼らのそれぞれが放つ存在感が画面に緊張を生んでいる。

ショーン・ペンが表現するうしろめたさ。ナオミ・ワッツの悲嘆と憎悪。全身が罪の意識で固まったベニシオ・デル・トロ。彼らの熱演を手持ちカメラを多用して切り取るロドリゴ・プリエトの映像は粗く暗い。

誰もがすがりつくように安らぎを求めるが、神は応えてくれない。それどころか、三人にはやるせない結末に向かって歩かざるをえないという試練が待つ。

「命が消えるとき人は21グラム軽くなるのだという」と、冒頭に流れるボールの声。その根拠はどこに？　と思わなくもないがそういう考え方もあるだろう。21グラムは何？

生きる力かもしれないし、命そのもの、あるいはもっと別の何か？　人にはそれぞれの21グラムがある。それが何かを探しながら、観客は、亡き人の残した命の輝きはきっと誰かに引き継がれる、という思いを抱くようになり、そこにかすかに差し込む希望の光に少しほっとする。

海猿　ウミザル

東宝配給
6月12日公開

斉藤博昭

必要以上に物語を複雑にせず、テーマに誠実に向き合おうとする作り手の志が伝わる一作である。主人公・仙崎を中心に、潜水士を目指す14名の海上保安官。映画の冒頭から前半にかけて、彼らはプールでの訓練に挑むのだが、ここでは人物の感情の変化ができる限り抑制されることで、観客も一緒に訓練の過酷さを体感させることに成功している。俳優の肉体にも嘘っぽさがなく、プールの底から重りを持ち上げる場面など、演技では不可能と思われる手足の動きを見せる。青いプール。太陽と海底を思わせるオレンジと黒のウェットスーツ。その3色が放つ鮮やかなコントラストにも、観客を集中させるマジックがあるようだ。

一度、物語に引き込まれれば、多少のあざといシーンも見過ごしてしまう。たとえば中盤、ある重要な登場人物が不幸な事件に見舞われるが、その場面だけ切り取れば、主演・伊藤英明の演技はやや過剰でクサ過ぎると言ってもいいほど。また、仙崎をライバル視する三島の台詞など〝いかにも〟なわざとらしさだが、導入部で物語に引き込まれた観客は、瞬間的な違和感を味わうまでには至らない。

映画全体を貫くテーマも、芯の部分がしっかりしている。保安官たちは、肉体の鍛錬や技術の向上よりも、「水中でのバディ（潜水パートナー）との関係」という人間同士の絆を、しつこいほど叩きこまれる。その絆の重要性は、仙崎が経験する恋にも通じている。確かに恋の物語は、時として彼の潜水士としての物語を停滞させるが、この手の映画が陥りがちな〝とってつけたロマンス〟の感覚は希薄。14名の保安官に余分なエピソードを与え過ぎなかったのも正解で、物語がすっきりと研ぎ澄まされ、ピュアなきらめきを放つ。

エンドクレジット後の確信犯的な映像で、続編の製作も決定したが、教官役の藤竜也が語るように、実際の海難救助の現場は華々しさとは縁遠いだろう。映画のために、スケールアップされた事件が題材になるのは必至で、当然、1作目のピュアなきらめきは失われる。期待しつつ不安でもある。

カレンダー・ガールズ

CALENDAR GIRLS
ブエナ　ビスタ配給
5月29日公開

中西愛子

映画業界の底辺で物書きに精を出し、地道に生活している女映画ライター。ここで一発ヌードになって大胆なセルフ・アピールでもすれば、一躍時の人になるのかしらん？　などと意地悪く思いつつ、それにしても〝女が脱ぐ〟ということは、どんな場所でも時代でも欲望のドラマを引き起こしてしまうものなのだなと、「カレンダー・ガールズ」を観ながら改めて考えさせられた。イギリスの田舎町で実際に起こった、ある〝事件〟を描いた物語。素朴な婦人会の熟女たちが、自分たちのヌード・カレンダーを作り、その収益で病院への寄付金を集めようと思いつく。メンバー集めや制作許可をめぐる一悶着の末、カレンダーを発行。すると大評判の売れ行きで、しかも彼女たちはマスコミの話題の的になる。

ヘレン・ミレンをリーダーにしたこれら逞しい女たちのサクセス・ストーリーとして痛快だが、本作の興味深いところは、むしろその成功の後にやって来る展開だ。脱いだ女たちにマスコミが押し寄せる。ついにはハリウッドにも招かれ、テレビ番組にまで出演する。突然世間から脚光を浴びてしまった田舎の主婦たちは、まるで夢のようなトントン拍子の成り行きに浮かれる一方、その代償も受けることになる。普通の主婦に潜んでいた女としてのエゴ。事情はともあれヌードになって〝見せる側〟と、それを面白がって興味本意で〝見る側〟。人間の欲望の力学がドラマを揺さぶり始めるのだ。じわじわと暴かれていく女たちのエゴの在り方は、「シカゴ」のようにファンタジーチックに謳歌されるわけでもなく、こっぴどく裁かれるわけでもなく、ただ静かに、リアルな問いかけとして観客に提示される。

ヌードになったことで光と影を見たカレンダー・ガールズ一行。実際の彼女たちは、日本の映画公開時にキャンペーンで来日して元気な姿を見せていたようである。さすが、さっぱり脱げる女たちの根性は座っている。彼女たちを演じるベテラン英国人女優たちのユーモラスな演技も、本作の見どころだろう。

浮気な家族

A GOOD LAWYER'S WIFE
ギャガ配給
6月12日公開

田中千世子

すぐれて技巧的でありながら、みずみずしいパワーの感じられる傑作である。日活ロマンポルノも超えられたかもしれない。と、少し淋しい。言いわけめくが、ロマンポルノは女優たちがあまりうまくないのが味わいだったし、体が筋肉質でないところに淫靡な魅力があり、映画全体に日陰もの風のところがあるのがよかった。ロマンポルノは70年代、イム・サンス監督の映画は21世紀。較べたりせずにそれぞれ別のものとしてみればよい。とも思う反面、ロマンポルノはしかし素晴らしかった。それを越える監督たちが韓国や台湾に現れたことを喜び、いろいろ比較研究するのがいいとも思う。ロマンポルノにもいろいろな監督がいた。神代辰巳とツァイ・ミンリャンは私にはほぼ同じ大きさの相似形に見える。「悪い男」のキム・ギドクなら池田敏春や田中登と比較してみたい。この「浮気な家族」はというと、路線としてはちょっと上の中流家庭の人妻を主人公にした風祭ゆき主演の「妻たちの性体験　夫の眼の前で、今…」（80年、小沼勝監督）だろうか。そして登場人物たちの心理や皮肉な関係がよく描かれた点では根岸吉太郎や中原俊の映画とも比較してみたく

なる。「浮気な家族」の主人公はホジョン（ムン・ソリ）である。彼女の夫ヨンジャクはハンサムな弁護士だ。二人は養子のスインと三人で暮らしている。三人が並んで歯磨きするシーン。森田芳光の「家族ゲーム」の食卓風景（家族がこちらを向いて並ぶ）がよみがえったかのよう。夫のヨンジャクには愛人がいる。そのため帰宅が遅く、夫婦仲はしっくりいかない。たまにセックスしても物足りないホジョンは夫のそばでオナニーを始める。すこぶる皮肉である。夫はやめてくれと不快を示すが、ホジョンはフンといった顔をする。ヒステリーを起こすでもなし、夫の浮気を問い詰めるでもなしの妻は、ちょっとニヒルでカッコイイ。ホジヨンはダンス教室を手伝ってはいるが、特に仕事に生きるという風でもないから一層ニヒルが輝く。養子のスインの存在もまた面白い。彼は両親に可愛がられ、気持よさそうに育っているが、学校でクラスメートに養子のことでからかわれ、祖母は自分が養子だということをどう思っているか、気にしたりしている。そのことをスインがホジョンに話すと、まあしょうがないといった感じでホジョンはきいてやっている。この関係がなかなかいい。二人が逆立ちしたり風呂でアイスクリームをなめるシーンもいい。スインは一番無垢な存在だ。そのスインがヨンジャクの浮気旅行とそれに続く事故が原因で郵便配達夫の恨みの吐け口になり、死んでしまう。男に抱えられて建設途中の建物の中をのぼっていく時「おじさん、僕を放り投げたりしないでね」と、スインが言ったすぐあとで彼は放られる。ロベルト・ロッセリーニの「ドイツ零年」でエドムンドが廃墟から飛び降りて死ぬ場面のように鮮烈だ。女優ムン・ソリの化けっぷりが本当に見事だ。音楽もよかった。

バーバー吉野

ユーロスペース配給
4月10日公開

佐藤忠男

なにか桃源郷のような、のんびりとした山間の田舎町の物語である。そこにはバーバー吉野という床屋さんが一軒しかなくて、男の子たちはみんな、そこのおばちゃんの強制による一定の形式の前髪のオカッパ頭にさせられている。そこに東京から転校生がきて、ふつうのカッコイイ髪型を変えないとがんばるところから、じつは自分もこの髪型は嫌なんだという同志がふえていって、ちょっとした反乱が起るという、かわいい小品である。

いくら山の中の田舎だからといってもテレビはあるわけだから、転校生が来てはじめて自分たちの髪型の特殊さに気づいたみたいな話のすすめかたには少々無理があるように思う。ただ、そういう浮世ばなれのした別世界の好ましさはこの作品の良さで、古くさい田舎かと思うと少年合唱隊がハレルヤを歌うという西洋ふうの習俗があったり、それといかにも本物の伝統習俗ふうな行事も共存していたりで、脚本監督の新人荻上直子は、この愛すべき架空の町をメルヘンの舞台のように作りあげることに映像作家としての確かな能力を示していると思う。景色はいいし、気風はおだやかだし。子どもたちがちょっと家出して気勢をあげるのに恰好ないい自然がすぐ近くにいくらでもある。

この子どもたちを圧迫する大人というのは、以前ならば教師とか町の有力者というのが定形化された設定だったものであるのだが、この作品では、じつは憎めない、根は人の好さそうな床屋のおばちゃんであるというところが、ちょっと独特のところである。いかにも権威者らしい権威者ではないのになぜかいばっていて、町の淳風美俗の維持はこの髪型を断固保守できるか否かにかかっていると信じている。その自信が学校まで支配している。これは一見ナンセンスな笑い話にすぎないような描かれ方であるが、もたいまさこの好演で人間像がきわだって、日本の社会における権威の構造の一面を鮮やかにえぐっているようにも思える。そこにもうひとつ鋭いものがほしかった。

日本映画時評 189

実写・アニメ・マンガ

山根貞男

中島哲也の『下妻物語』を日比谷の映画館へ見に行って、二つのことで驚いた。一つは中高年の観客が意外なくらい多いことで、わたしもその一人にちがいないが、仕事という名目があるので自分のことは棚に上げ、ウイークデイの真昼間、若い女の子の映画を見にくるなんて、どういう人たちだろうと思った。もう一点は、予想外に映画が面白かったことである。この連載を休んだほど西本正インタビュー本の原稿づくりに追われるなか、何本も試写を飛ばし、そこに『下妻物語』も入っていて、まあ、パスするか、と思っていたのだが、うまいぐあいに時間が合ったので映画館に飛び込み、あふれかえる面白さに目を瞠った。

若いヒロイン二人が素晴らしい。全身フランス人形の桃子(深田恭子)がフリルの日傘を傾けて「できれば私はロココ時代のおフランスに生まれたかった」と呟き、刺繍文字入りの紫の特攻服を着て桃色のバイクにまたがったイチゴ(土屋アンナ)がツバを吐きゾク言葉を喚く。それが、大都会ならまだしも、見渡すかぎり田圃の真只中の畦道だから、おかしい。優雅と荒くれ、軟弱と硬派、ロリータとヤンキー、まるで対照的な二人がそれぞれの生き方をまっすぐに貫徹することで、交わらないはずの二直線が交錯し重なって、けたたましくもファッショナブルな騒ぎを巻き起こす。

フランス人形もどきのファッションと田園の風景との組み合わせに象徴されるように、この映画の世界は基本的に馬鹿馬鹿しいミスマッチから成っているが、それでいながら、どこかリアルな感じをもたらす。明らかに表現の徹底度によるにちがいない。現実の田圃のド真ん中に、嘘みたいに派手な衣装の深田恭子と土屋アンナを立たせ、おすましとツッパリの演技を誇張した形で演じさせ、必要ならCG処理も加え、さらにはアニメまで導入し、凄まじい勢いの画面展開のもと、これでもかこれでもかといわんばかりに虚構性を貫徹する。その徹しぶりが、いつのまにか馬鹿馬鹿しいミスマッチの世界をリアルさへ反転させてしまうのである。

映画全体のそうしたありようが、ヒロイン二人がミスマッチの関係にあること、自分を貫くなかで友愛を深めていくこと、その過程がなまなましく面白いことと、ぴったり重なることはいうまでもない。深田恭子はみごとにハマリ役で、新星土屋アンナのモーレツ活劇ヒロインぶりも特筆に値する。

いうなれば桃子は自分なりのロリータ物語を必死に生き、イチゴは彼女なりのヤンキー物語を大真面目に生き、そんなヒロイン二人を、深田恭子と土屋アンナは女優として演じている。そこに二重の虚構性が見られるが、ドラマの進展とともに、別のフィクションが加わる。伝説の刺繍屋「閻魔」やら、女暴走族の「妃魅姑伝説」やら、実体の定かならぬ話が重要な部分として登場し、後者のほうはアニメで挿入されるので、コテコテの虚構性が強調され、そのあげく、クライマックスに至るや、桃子がでまかせに「妃魅姑伝説」に参入し、フランス人形から一転、ゾク言葉を喚くのである。

『下妻物語』とは、このダイナミックに何重にも深まっていく虚構性の総体にほかならない。近ごろ、これほど見て元気になる映画も珍しいが、その力がどんどん虚構性の深まっていく勢いから発することはだれの目にも明らかであろう。となれば、年齢など関係ないわけで、白昼、日比谷の映画館から出ていく観客たちの表情はじつに晴れやかであった。

庵野秀明の『キューティーハニー』でも元気な女の子が大活躍をくりひろげる。変身ものマンガの実写版ゆえ、荒唐無稽な世界がどうリアルな描写として現前化するか、大いに期待したが、どうも乗れない。雑な出来というか、さまざまな部分がバラバラの印象を与え、マンガの面白味が弾けないのである。

勤め先の商事会社ではダメ印を捺されている若いOLが、いざとなるや、あっというまに勇壮な戦士に変身し、縦横無尽に飛んだり跳ねたりして、謎の秘密結社の四天王を相手に闘う。この基本設定のうち、変身後の戦士の活躍はそれなりに描かれるが、OL部分の描写が貧弱という以外なく、いくら間抜けた言動を誇張したところで、単に魅力のない鈍な女の子がいるというだけに終って、ギャグにもならない。両方の部分が対等に面白くなくては、文字どおり別次元に属する平凡なOLと勇壮な女戦士との差異のエネルギーが生まれず、変身もの

の醍醐味というべき荒唐無稽さが空転してしまうのは、当然のなりゆきであろう。

ヒロイン役の佐藤江梨子は、女戦士のコスチュームで暴れまくるぶんには躍動感を放つが、同じ衣装をまとっていても、芝居のシーンになると、パワーが落ちる。だから、OLの部分がもたない。肉体的魅力はあっても、演技力がないとしたら、出来栄えは監督の責任に属する。及川光博が四天王の一人に扮して溌剌たる悪役ぶりを見せ、闘うヒロインを食ってしまうが、いくら面白くても、そんな主客逆転を喜ぶわけにはいかない。勝手な想像でいえば、この監督は演技の演出に力を入れていないのではないか。ヒロインの演技的みすぼらしさに加え、刑事役の市川実日子がキャラクターとして不発なことも、ヒロインと女刑事につきまとう謎の男役の村上淳が面白くもおかしくもないことも、ちらりと出てくる松田龍平や吉田日出子の存在が無意味に終ることも、そう思わせる。おそらく及川光博は放っておいても乗って輝くタイプにちがいない。

結果、安っぽい映画ができあがる。もともと荒唐無稽な世界だから、当然にも安っぽいというのではない。飛んだり跳ねたりのバトル・シーンを見ればよくわかるが、CG処理がなされていても、これなら、昔の縫いぐるみ特撮のチープさのほうが、まだなんぼかいいではないかと思わせるような、そんな安っぽさなのである。

チープさの魅力ということは確実に存在する。少し前では、三池崇史の『ゼブラーマン』が、話はくだらないものの、哀川翔の力演ならざる力演のもと、小学校教師が夜な夜な憧れた果てに変身ヒーローになってしまうさまを、まさに安っぽさの活気で見せた。石井輝男の『盲獣VS一寸法師』については前回に触れた。安っぽさ自体が問題なのではなく、重要なのはそれが映画的エネルギーに転化されているかどうかであることは、はっきりしている。

紀里谷和明の『CASSHERN』はかつてのテレビ・アニメの実写化で、安っぽいどころか、めまぐるしいまでに絢爛豪華な映像と音響にあふれ、未来社会の闘いを描く。「新造人間」と呼ばれるアンドロイドないしロボットが人間に反逆する話は、少しも目新しくない。それでもなにやら迫力たっぷりなのは、CG技術をふんだんに駆使した映像のシャワーのごとき奔流が凄まじく、その勢いを浴びるかのように、死闘をくりひろげる者たちの叫びが響きわたるからであろう。ことに反逆者のリーダー役の唐沢寿明のモーレツ怪演ぶりは唖然とするほどで、全篇、劇画タッチで吼えまくり、それに負けじと、ヒーロー役の伊勢谷友介が人間なのに新造人間となって闘う者の苦悩を力演する。

だが、画面は凝りに凝っているのに、いや、むしろ、だからこそというべきか、作品全体としては散漫の印象が強い。そもそも二時間二十一分は長すぎる。明らかにそれは、いろいろ因縁関係にある人物がわんさと登場して角逐をくりひろげるから、必要とされた長さなのであろうが、多様な人物のドラマをちりばめたぶんだけ、散漫になったことは否めない。画面を凝れば凝るほど、諸人物のエピソードを取り入れれば入れるほど、それを統合してモザイク状に提示するにはたいへんな力技を要する。まことに失礼ながら、そんな力がこの新人監督にあるとは思えない。

写真はともに『下妻物語』

結果、主人公たちの叫びは形骸化している。香港とロシアを折衷した感じの大都会が出てくるあたりは、押井守の『イノセンス』に通じるが、細密かつ強烈なイメージが結局、単なる絵模様としての面白さでしかない点でもそっくりで、まさにそんなふうに叫びが空転するのである。その意味では『キューティーハニー』の安っぽさと『CASSHERN』の形骸性は、どちらのドラマも永遠の命への欲望から起こる闘いを描くように、裏表の関係にあるといえる。

『下妻物語』がくりひろげるのも安っぽい世界だが、それが表現の武器になっている。馬鹿馬鹿しさの連続のなか、女の子の心情がなまなましく浮かび上がることが、その証明にほかならない。映像を凝りに凝り、猛スピードで展開する点では『CASSHERN』に通じるが、若いヒロインたちの叫びが形骸化せず、描写の細部が積み重なっていくことにおいて、まるで違う。

単純化していえば、『CASSHERN』はアニメと実写を足して二で割ったような作品であり、『キューティーハニー』はしょせんマンガの実写にすぎない。それらに対し『下妻物語』はむろんまず実写であり、そこに、人物も話も描写もマンガ的な形で取り込み、さらにアニメまで導入することで、実写とマンガとアニメをみごとに掛け合わせ、映画という生命体を生み出しているのである。そこから、単に若い女の子の元気などではなくて、純粋に表現としての元気が放たれてくる。

おそらく三作品は映画の現在をひりひりと体現しているにちがいない。これらの対極に普通の実写があるわけで、今回、そこへ目を移すつもりでいたが、紙数が尽きた。

レイアウト　鈴木一誌

文化映画紹介

渡部実

第16回すかがわ国際短編映画祭レポート

16th INTERNATIONAL SHORT FILM FESTIVAL IN SUKAGAWA JAPAN

　陽春の5月14、15、16日の3日間、福島県須賀川市において第16回すかがわ国際短編映画祭（主催＝同映画祭実行委員会／須賀川市／須賀川市教育委員会）が開催された。この映画祭は例年であれば開催期間は2日間なのだが、今年は例外的に3日間となった。それは1本のアニメーション映画に起因している。本誌でも取り上げた「連句アニメーション　冬の日」（03年／川本喜八郎監督・総合監修）である。

　そもそも須賀川市は、松尾芭蕉の「奥の細道」の舞台の一つとなった土地であり、同市には芭蕉記念館もある。したがって芭蕉の俳句に因んだ本編「冬の日」、メイキング映像「冬の日の詩人たち」の上映と、総合監修をされた川本喜八郎監督を招いて監督作品の上映、川本監督と地元の文化人・森川光郎氏との俳句や映画にまつわる貴重な対談などに映画祭の一日である14日をさいたのである。

　今回はとてもユニークな作品「頭山」（02年／山村浩二監督）も上映され、話題を呼んだ。一人の男がたまたまサクランボの種を食べたために頭に桜の木が生えてきてしまい、男の頭上の桜の木で人々が勝手なことをやらかすというナンセンスな物語。特異な発想は落語から着想されたものだというが、シュールリアリスティックな画像表現には圧倒的なものがある。米国アカデミー賞短編アニメーション部門ノミネートをはじめ、世界各地の映画祭で受賞し、話題をさらっている。噂に高い作品をこの映画祭で「冬の日」と同じく鑑賞できたことは嬉しかった。川本喜八郎監督、山村浩二監督が今回のメインゲストであった。

　ゲストといえばもう一人、この映画祭で馴染みの深いイスラエル映画の提供を毎年行ってくれる駐日イスラエル大使館の存在も大きい。今回はその前任者の文化担当官を引き継ぐ形で、新たに今年4月に赴任された政治・文化担当のシュムリック・バース氏（Counselor Mr. Shmulik A. Bass）が須賀川市まで来られ、会場でイスラエルの映画について巧みな日本語でスピーチをされ、観客に感動を与えた。

　イスラエル映画の上映は今年で10回目を迎える。今回の作品「アンダードッグ」Under Dog（02年／エラン・メラヴ監督）は、全寮制の学校に学ぶティーンエイジャーの男の子が直面するイジメの問題を取り上げており、このような問題は世界でも共通のものだと思わせられた。また、「クリスマスにお茶碗を」（02年／米／マイケル・フィモナグリ監督）のマイケル・フィモナグリ監督も数名のスタッフ、キャストと一緒に映画祭に来られ、会場は華やいだ雰囲気となった。

　さて、アニメーションに

「冬の日」©IMAGICAエンタテインメント・電通テック

「アンダードッグ」

戻ると、昨年公開されたばかりの新作「茄子 アンダルシアの夏」(03年/高坂希太郎監督)も、南スペインを舞台に世界3大自転車レースの一つ、ブエルタ・ア・エスパーニャに集う人たちの人間模様を精緻な画像と大人の感覚で描いた異色作であった。また、カナダからの作品「オペレーション・クックー」(02年/ピエール・M・トゥルディーヴ監督)も、鳩時計たちの世界を愛すべき表現で描いている。この作品は「頭山」とは異なりCG映像によるもので、今日のアニメーションの幅の広さを感じさせる。今回の映画祭は「冬の日」「頭山」をはじめ、アニメーションの存在が大きい意味を持ったものになった。

学生映画上映発表の場としての期待

毎年開催の映画祭も16回を数えるほどになると、それぞれの分野の映画を紹介するコーディネーターの人たちの実力が鮮明に見えてくる。その意味でこの映画祭は、北欧各国の優れた児童映画が見られることで定評がある。今回、特に感心したのは、「リトルマン」(02年/デンマーク/カトリーネ・ウィンフェルト監督)と「DISA MOVES TO JAPAN」(03年/ノルウェー/ベネディクテ・オルヴィング監督)の2本である。前者は一人の少年の日常を凝視しながら、少年が友達を発見する様子が描かれる。ナレーションはなく、映像とリアルな音のみによって、17分の作品ながら子供、特に男の子の世界を見事な感性で描ききっている。

一方「DISA MOVES TO JAPAN」は異色の内容だ。4歳のディサは好奇心旺盛で元気な女の子である。そのディサが母国のノルウェーから遠い日本にやって来て、そこで暮らすことになる。26分の上映時間で幼女の視点から見られた、また感じられた、東洋の日本という国が新鮮な感性の映像でリアルに捉えられている。

同じく北欧といえば、「彼らはフェリーに間に合った」(48年/デンマーク/カール・ドライヤー監督)という、オートバイを疾走させるカップルの運命を描いた伝説的な作品が、35ミリのプリントで上映されたことも喜ばしいことだった。

ところで今回は、学生映画の登場が目をひいた。毎年上映されているイスラエル映画も、多くはサム・スピーゲル映画・テレビ学校などの学生の作品である。今回は他にも、アメリカの女子高生が日本に興味を抱き、日本にホームステイする中で自分のアイデンティティに目覚めていく「クリスマスにお茶碗を」が、アメリカUCLAの学生映画であった。また、水泳に勤しむ青年が、水と戯れる中に人と人との別れの刻(とき)を情感豊かに描いた「クロール」(03年/平田陽亮監督)も、日本大学芸術学部映画学科卒業制作作品であった。

国内、国外問わず、若い世代の学生映画製作は盛んである。それにも関わらず発表上映の場はきわめて少ない。そこで提案であるが、すかがわ国際短編映画祭はすでに短編映画祭では定評がある。小規模でもよいから、短編映画(映像)の分野で国内の学生映画の発表の場を作り、さらに映画(映像)コンクールなどを開始してはいかがであろうか。今回の入場者数は3日間ということもあり、過去最高の2816人であった。次回の映画祭にも期待したい。

読者の映画評

殺人の追憶

田中美紗子
神奈川県伊勢原市
18歳・学生

　悪という主題は昔から作家たちの創作意欲を刺激し続けている。悪は暴力的でありどんな人も絶望させ得るが、同時にそれゆえの魅力、残酷な美を持ちあわせているからである。「殺人の追憶」はそんな悪をスクリーンに巧みにあぶりだしてみせた。

　物語には様々な伏線が張り巡らされている。刑事たちは事件解決のために奔走するが、犯人逮捕どころか自らが傷ついていく。それは犯人の仕業ではない。犯人が蒔いた悪意の種が小さな農村で増殖し、災いが連鎖的に起きていくのだ。村中の人の負の感情が鎖になって村を苦しめる。ソン・ガンホ演じる地元の刑事は、自分の人を見る目を頼めるような主観的な捜査をする男だが、最初に村の異変に気づき、冷静になっていく。逆にキム・サンギョンの都会から派遣された刑事は、データや書類に基づいた客観的な捜査で事件に挑むが、自分が関わった少女が犠牲になることで豹変する。二人の刑事の変化の対比が鮮烈に描かれている。有力容疑者の男が逃げて行くトンネル描写が見事だ。深い闇に、この事件が決して解決しないという予感と、心身ともに傷ついた刑事たちの絶望が映し出されるからだ。

　物語は黄金色の稲穂が垂れた田園地帯、物語が始まった場所と同じ場所で終わる。また田んぼで遊ぶ少年の顔で始まったことに呼応して、ガンホの顔で終わる。私たちが最後に彼の顔を見るとき、何を思うであろう。観客は捜査する彼と一緒に様々な人々の顔を見た。しかし犯人は見つからなかった。彼も私たちも犯人の顔を知らない。だが語り手は最後に、いわば一緒に犯人を追っていたガンホの顔と私たちの顔とを向き合わせるのだ。この瞬間、衝撃が走った。犯人は必ずいる。しかし誰もが悪意を生み出し得る、そしてこの犯罪を生み出した世界のひずみを作り得るのだと思い知らされるのだ。確かに物語は同じ場所で始まり終わる。だが最後の田園は昔のままだからこそ、悲しく恐ろしい。観客の心にも傷を残す鋭い切れ味のある物語を、確固とした骨組みで演出した傑作である。

エレファント

小笹裕司
大阪府茨木市
42歳・塾講師

　今時珍しいスタンダード

●第一次審査通過（応募総数190通）
東野真美（「エレファント」）、後藤南、鈴木月子（「きょうのできごと」）

●応募要項
住所、氏名（ペンネーム使用の方は本名を忘れずに）、年齢、職業、電話番号を明記の上、800字～800字で、縦書き。原稿用紙、またはワープロ打ちされたものでご応募ください。レポート用紙不可。字数厳守のこと。

●宛先
〒106-0045　東京都港区麻布十番1－2－3
プラスアストル　キネマ旬報編集部
「読者の映画評」係まで

皆様のご応募お待ちしております

サイズのスクリーン、わずか1時間21分の映画だが、圧倒的な力を持っている。「霊媒」にしてしまうのだ、客を。

アメリカの高校生たちが、平凡な一日を過ごしている。カメラが、彼らを背後からつけ回す。横から回りこみ、無防備な表情をアップで眺める。その作業に飽きたように、カメラは止まり、学生を見送る。画面外から、現実音がひっきりなしに聞こえてくる。突然、黒地白抜きの文字で彼らのファーストネイムが紹介され、次の場面では、時間が後戻りし、(あるいは先へ進み)別の学生をおなじようにつけまわす。カメラは学生たちには一切無視され、ステディ・カムによるなめらかな動きにより「浮遊している」。だれにも見えず浮遊する眼が、時間も空間も自在に移動している。まさしく「霊魂」。高校生たちは、別になにをするでもない。アル中の父親を心配したり、いちゃいちゃしたり、サラダを食って、すぐに吐き出したり、写真を現像したりしているだけである。しかし、異常なカメラ・ワークのせいで、「禁断の映像」のように見えてくる。

映画の半ばで、この平凡な一日に「悲劇」が起こることがわかる。わかっていながら、どうすることもできない。「早まるな」「そんなことはするな」「早く逃げろ」「そっちへ行ってはダメだ」、と高校生たちに声をかけて、迫る悲劇を回避させたいのにできない。「浮遊霊」の眼を借りて、ある日のある高校を幻視しているにすぎないから。視覚と聴覚のみが生かされていて、その世界に関与することはできない。そのもどかしさ、怖さ。起こることがわかっているのに、だれも助けることができない恐怖。スタティックな悪夢。

カメラは3度、空を見上げる。無力な「霊」がため息をついて仰ぐ空なのである。起きてしまったことへの無力感、因果関係だけを類推してあれこれ意見を言うむなしさを強烈に感じさせる。ラストに流れる「エリーゼのために」は、「ジョンのために」であり、「アレックスのために」であり、「イーライのために」である。鎮魂歌だ。

見終わって、雑踏に出ても、ふと振り返り、だれかが自分を観ているのではないかと確認したくなる、そんな強い呪縛力を持った映画だ。

きょうのできごと a day on the planet

鈴木功一
東京都足立区
45歳・税理士

「いつか、絶対に傑作を撮る。でも、今はまだ、その時じゃない。」中沢が呟く。この映画が懐かしいのは、過去の自分に出会えるからだ。実際、京都の街を池袋に変えれば、彼らのきょうのできごとは、そのまま、僕等のかつてのできごとだ。多くのキネ旬読者と同じように、僕も8ミリフィルムを回していた。蓮實教授の授業を受け黒沢清先輩を遠くでみつめながら、PFFでの入賞を夢見ていた頃を思い出す。

大人になるということは、自分の中の無限の可能性が、結局は、不可能だったことを知る過程でもある。当時、文芸坐地下で、まさに京都の学生の自主映画を観た。「暗くなるまで待てない!」監督大森一樹。この作品をみながら、すごい共感を覚えるとともに、僕には彼のような才能がないことを知った。才能や容姿はどうにもならない。この映画の西山がヤケになる複雑にからみあった根本的問題。その後、8ミリを回すことを止め、映画館からもだんだんと足が遠のいていった。自分の映画への情熱を封印して、社会での居場所を確保するのに懸命になった。

この映画に登場する学生たちをヤマアラシジレンマと批判するのはたやすい。伝えたいことを伝えられないままに虚しさを募らせるだけではある。しかし、自分の思いを直にぶつけたら、それが砕けてしまうことを、彼らは予期している。好きな人の心には実は自分以外の人への思いが隠されているかも知れない。本当に映画を撮ってしまえば自分の才能のなさが露呈してしまうかもしれない。もちろん、行動によってのみ一歩を踏み出せるのだが、けれども、その一歩を踏み出す前のこの時をせめてもう少しだけ過ごしていたい。きょうが永遠に続くように。あすとの境が永遠にこなければ……。その気持ちは切ない。「暗くなるまで待てない!」と同じ匂いの映画を数年ぶりに観た。この雰囲気は青春期に普通なものなのだろう。自分の映画への情熱が蘇ってくるのを感じた。

ハリー・ポッターとアズカバンの囚人

監督／アルフォンソ・キュアロン 出演／ダニエル・ラドクリフ、ルパート・グリント（ワーナー配給）●丸の内ピカデリー1&2ほか全国松竹・東急系にて公開中

英国作家J・K・ローリングによる世界中で人気のファンタジー小説が原作の映画版第3弾。魔法魔術学校の新学期、3年生を迎えたハリーに、両親の死と関係のある危険な脱獄囚ブラックの影が忍び寄る。

花咲ける騎士道

監督／ジェラール・クラヴジック 出演／ヴァンサン・ペレーズ、ペネロペ・クルス（アスミック・エース配給）●日比谷スカラ座2ほか全国東宝洋画系にて公開中

52年のJ・フィリップ主演作をL・ベッソンの製作・脚本でリメイク。18世紀仏を舞台に、恋に生きるファンファンが、嘘の占いに導かれて運命的な出会いを果たすロマンティック・アドベンチャー。

西脇英夫

花咲ける騎士道

リュックにはこのあたりの軽い作品がピッタリなのかもしれない。オリジナル版の粋なこしらえを軽快なアクションに変えて、きわめて爽やかな作品に仕上げている。ただし、若いだけに主演のヴァンサンに、ジェラール・フィリップほどの色気とカリスマ性がないのが惜しまれる（少々使い古しではあるが、ディカプリオかジョニー・デップあたりがやったら、と想像するのも面白い）。それにしても、コメディタッチのヨーロッパの中世騎士道物が当世の観客にどれだけアピールできるか疑問。★★★

ハリー・ポッターとアズカバンの囚人

3作目ともなると、観ているこちらもさすがに魔法疲れか、前2作ほどの驚きや喜びを感じなくなるのは困ったものだ（観る側としての反省）。一番気になったのは、極悪人と見えたのが善い人だったというドンデン返し。ここでガクッと腰が砕け、ラストをどう処理するのかと思っていたら、やはり曖昧のままで終わってしまった。それでも映画全体としては見せ場も多く、時間を戻すアイデアにひねりが効いていて十分楽しめた。それにしても余計なお世話だが、第4作が難しいだろうな。★★★

北川れい子

花咲ける騎士道

近年、見てくれだけのガサツな映画が目立つベッソン印ではあるけれども、リメイク版までイケイケ、ドンドンとは。そもそも「TAXi」シリーズの監督を起用すること自体、ガサツもいいところ。そしてV・ペレーズの“ファンファン”ぶり。元祖G・フィリップのファンファンも屈託がなく御調子者ふうではあったが、どこかキュートで善良で、ピカピカしていた。が今回は超自己チューのガキ。子供騙しにもならない悪役キャラもバカバカしい。P・クルスのヒロインぶりも薄っぺら。★

ハリー・ポッターとアズカバンの囚人

成長期の主役3人が、映画内の時間よりずっと早く成長することはハナから計算ずみだったと思うが、今回はどうも物語とのバランスが悪い。思春期に入りかかったハリーたちが体験するのは、夜の騎士バスや奇妙な魔界の生きものたちで、何やらお化け屋敷映画のよう。しかもハリーはすっかりキレやすくなっていて、冒頭、自分にいじわるをするオバさんを風船化して宙に飛ばしてしまうエピソードなど、以前より短気になっている。キュアロン監督は魔法など信じてないのでは。★★

田中千世子

花咲ける騎士道

去年のカンヌのオープニングがこれ。いかにも祝祭気分。万歳！ フランス映画。というはしゃぎぶり。製作と脚本のリュック・ベッソンがハリウッドに対抗してフランス映画を盛り返そうとしている。しかし、ヴァンサン・ペレーズではジェラール・フィリップどころかアラン・ドロンにも及ばない。可愛いタイプの美男だけれど、フランスくささが過ぎて、国内向けという感じ。ペネロペ・クルスはよかった。テンポを早くしてアクションシーンを工夫しているのはベッソンの常套手段。★★

ハリー・ポッターとアズカバンの囚人

このシリーズ、だんだん私から遠くなる。いや、私がシリーズから、いやいや互いに遠くなる。一作目の観客に同じ状態でとどまりつつ物語のさらなる展開を楽しんでもらおうというつくり方なのだろう。ただ、本筋に関係ないサービスが過ぎる。そのためお子様向きの度合いが強くなってくる。そこをうまくのりきれば、主人公の父と母のことがだんだんわかってきてミステリアスなファンタジーもふくらんで興味も持てるのかもしれないのだが——。退屈の海を漂ってしまった。★★

轟夕起夫

花咲ける騎士道

J・フィリップ版と比べる気はない。サッカーでたとえるなら、ジダンのいないフランス代表みたいなものか。気品の薄い主役のペレーズのせい（だけ）ではない。映画の司令塔である監督クラヴジックの編集過多なタッチは、映画を落ちつかせず、クラシックな味わいを減じている（それが今風を狙った製作ベッソンの目論見だとしても）。せめて剣戟シーンはしっかり見せてくれなくては。ヒロイン役のペネロペも悪くはないが、本家G・ロロブリジーダの色香の前では……結局比べてしまった！★★

ハリー・ポッターとアズカバンの囚人

演ずるラドクリフ君ともども成長したポッター。そうなると、そろそろ“お約束”めいたシーン（特にライバル、ドラコとの仲違い等々）が子供じみてツラくなってきた。キュアロン監督はシーン、ひとつひとつの作りはダークなトーンでまとめて巧いが、全体の構成度は案外ユルい（終盤のタイムパラドックスのためもあるが）。今回G・オールドマンは顔見せで、ルーピン先生ことD・シューリスの渋味に軍配。“忍びの地図”を使ったエンド・クレジットを締め括るポッターの一声にはニンマリ。★★★

ブラザーフッド

監督／カン・ジェギュ　出演／チャン・ドンゴン、ウォンビン、イ・ウンジュ、コン・ヒョンジン、チェ・ミンシク（UIP配給）
●日比谷スカラ座1ほか全国東宝洋画系にて公開中

©KangJeGyu Films 2004

「シュリ」の監督が一組の兄弟を通して朝鮮戦争の悲劇を描く戦争ドラマ。50年に朝鮮戦争が勃発。徴兵された兄ジンテは、弟の除隊の許可を得るため危険な任務に挑むが、兄弟の思いはすれ違ってしまう。

韓国映画の実力がここまできたかと、今さらながら驚嘆させられた。戦争場面はまさに「プライベート・ライアン」か「ブラックホーク・ダウン」を彷彿とさせる出来。その上で、物語はいかにも韓国テイストの兄弟愛情講談で、観ているこっちまで肩にグッと力が入ってくる正統重厚感涙巨編。しかも、脚本は最後の最後までよく練られていて、これぞ〝恨〟の伝統の勝利と言うべき。演出、撮影の立派さは言わずもがなだが、俳優陣の見事さに圧倒される。朝鮮戦争はまだまだ映画になる。

★★★★

力作「シルミド」に続いて、〝恨（ハン）〟という韓国特有の情念を連想した。トレンド化した昨今の韓国映画からすっかり忘れ去られたような、理屈など通らない土着的な執念。弟を家族の元に帰すためなら、自分のいのちはもとより、国を裏切り仲間を捨てることも厭わない兄。「プライベート・ライアン」を彷彿とさせる戦闘シーンも、この恨的兄弟愛を更に際立たせるための〝トリックスター〟だったのだ。しかもクドすぎるほどの描写の連続。観るのに体力を要するのが難かもね。

★★★

「弟よ、弟よ」。母の愛にもまさる兄の愛。母性につけこむ自己犠牲の肉親愛は、日本の映画や歌舞伎にもあるが、この映画の兄が抱く「弟こそわが命」という愛（多分、家とか子孫繁栄にどこかでつながっているのだろうが）は、強烈だ。それは朝鮮戦争で引き裂かれた同胞同士の比喩でありつつ、深いところでエロスなんだと思う。だからこそ弟は美少年で、兄は美青年だ。プラトンが言う古代ギリシアの理想の軍隊のよう。時代の激動を正面から描く物語には男たちのエロスが似合う。

★★★★

朝鮮戦争を〝大河〟なドラマに仕立てあげた韓国の国民的映画だが、筆者にはなんと兄弟役のJ・ドンゴンとウォンビンが、若き日の岡崎二朗（＋津川雅彦）と浜田光夫に見え（えっー!?）、あるいは裕次郎主演、舛田利雄監督「昭和のいのち」(68)あたりの〝疾風怒濤感〟を思い出し、ジェギュ演出の(日活的)職人技をたんと味わった。つまり苛酷な運命に翻弄されるスター二人に感情移入させ、次々と打ち寄せる大波小波の展開に身を委ねさせる王道の手法……多少それがベタで奇矯ではあっても。

★★★

ワイルド・レンジ／最後の銃撃

監督・出演／ケヴィン・コスナー　出演／ロバート・デュヴァル、アネット・ベニング、マイケル・ガンボン（日本ヘラルド配給）
●K'sCinema、銀座シネパトスほか全国にて公開中

K・コスナー監督・主演で、遊牧生活を送るカウボーイたちの正義と誇りをかけた闘いを描く西部劇大作。開拓時代末期の1882年のアメリカ西部。移動しながら牛を育てるフリーグレイザーたちがいた……。

シンプル・イズ・ベストを絵に描いたような作品だ。ありていに言えば、ヒネリもなければケレン味もない、直球勝負の地味作り。しかし、それが観終わったときに不思議な感動としてジワーッと伝わってくる。思えばこういう西部劇は50、60年代にはよく作られていた。大スターを使わず、低予算のB級ながら、マニアにはその渋さがたまらないといったような。そういう意味でこのキャスティングは絶妙で、それぞれの抑えた演技がラストで一挙に開花する作りが重厚さを漂わせている。

★★★★

教科書的西部劇。さすがK・コスナーである。西部劇の全データをコンピュータに入れて、その平均的要素を製作費とバランスをとりながらセレクトしたとでもいうか。とはいえR・デュヴァルに味と風格があり、退屈はしないが、コスナーのキャラなど、南北戦争で散々人を殺したというカウボーイで、これって「ラスト サムライ」の二番煎じ。いや、西部劇には多いキャラ。誰もヒーロー化していないのは現代的だが、映像がいまいちスケール不足。A・ベニングの女医もTVドラマ並。

★★

ロバート・デュヴァルがいい。「ウォルター少年と、夏の休日」の時と同じほどいい。70歳を越えたタフガイ男たちのよさとは違う、彼独特の魅力。「地獄の黙示録」のあの狂気の軍人イメージをもとにそれを限りなく清浄に昇華させていった果ての不思議な静かさだ。どんなにおだやかに見えてももとの狂気が生きている。それも戦（いくさ）をする男の狂気が。そのためケヴィン・コスナーが気の毒なほどふやけて見える。銃撃シーンもみごとだが、雄大な曇り空や大雨やどろんこが素晴らしい。

★★★

製作、監督、主演K・コスナーの〝ウエスタン愛〟が心に響く佳編。「シルバラード」のときも彼は帽子を落とし、素顔で銃を握っていたと思うが、今回もそれを踏襲。飄々と、男の心意気を見せるR・デュヴァルの素晴らしさ。『セサミストリート』の〝ミスターヌードル〟ことM・ジェッター（これが遺作）がことづてを読みあげるシーン。スリリングな銃撃戦（銃声がいい）。ヒロインのA・ベニングの〝顔なめ〟で背後から告白するコスナー……観賞後も無数の場面を反芻させてくれて嬉しい。

★★★

★★★★…必見！　★★★…一見の価値あり　★★…悪くはないけど　★…私は薦めない

イザベル・アジャーニの惑い

監督／ブノワ・ジャコ 出演／イザベル・アジャーニ（ザナドゥー、エレファント・ピクチャー配給）●シネマスイッチ銀座にて上映中

フランスの近代文学「アドルフ」をアジャーニが自ら企画し映画化した意欲作。伯爵夫人エレノールは美しい青年アドルフの激しい求愛を受け入れるが、その先には大きな苦しみが待ち受けていた……。

河原晶子

〝肉体〟としての人間よりも抽象的な恋愛心理が主人公である近代フランス文学のある種のストイシズムを繊細に映画化した、フランス映画の王道を往く作品である。冷酷な自己主義者の美青年アドルフの内的告白でつづられるこの作品の主人公は自身を青年に結晶させた作者コンスタンその人だが、映画ではアジャーニ扮する伯爵夫人に主眼が移っている。アジャーニのアデル・Hを想わせる純なる狂気。そしてスタニスラスの世紀末的デカダンスのはかない美しさ。全篇に甘美なヨーロッパ没落のムードが立ち込める。★★★

稲垣都々世

久しぶりのアジャーニは、皮膚がこわばったように、いつも虚ろな表情をしていた。彼女自身が企画し自らアドルフに選んだメラールも、無表情に画面を通り過ぎていった。手に入れた途端、女に興味を失ってしまう男の心理は、文学的なナレーションと手紙の文面によって手にとるように理解できる。男が言葉によって愛を表現する原作の趣をそのまま映画の味にしたかったのだろう。だが、本来男が語るべき心情に女＝アジャーニの心が入り込んで、〝惑い〟の映画になってしまった。★★

大場正明

原作では、主人公アドルフの内面が一人称でどこまでも掘り下げられていく。彼の性格には、同じように内気な父親の存在が大きな影響を及ぼしている。父親との微妙な関係によって、彼は内にこもり、他者を拒絶する人間になったのだ。この映画の冒頭には、鏡の向こうからエレノールがアドルフに語りかける場面がある。彼女は、他者や世界を受け入れることができないアドルフにとって、鏡のような存在でもある。彼女には彼のすべてが映しだされる。これも確かにひとつの愛のかたちなのだ。★★★

金原由佳

伯爵の愛人、エレノールは、幼い子供たちに「青髭」を読み聞かせる。富と権力の館に押し込まれた哀れなヒロインに自分の姿を重ねるのか、そこを突っ込めば、ペローの童話のような女性の心理の魑魅魍魎の様が浮き立っただろうに。むしろ興味深いのは映画より、原作にこだわり、初対面のS・メラールを主役に誘い、公私共のパートナーに育てたアジャーニの強い信念の過程だったりする。相手不在の恋愛模様は彼女の得意とする領域だが、その館から彼女は逃げたくないのだろうか？★

家族のかたち

監督／シェーン・メドウス 出演／ロバート・カーライル、リス・エヴァンス（クレスト配給）●7月10日よりシャンテ・シネにて

夫に去られた女性シャーリーは、愛娘と、平凡だが誠実な恋人と三人で平和に暮らしていた。そこへとつぜん風来坊の夫が舞い戻り……。微妙な人間模様を描くイギリス発の家族の物語。

河原晶子

イギリスの性格俳優、ロバート・カーライルとリス・エヴァンスが放浪者と家庭を守る男を演じ分ける。もし配役を逆にしても、味わいの違うコメディになっただろう。60年代のイギリスが生み出した「夜空に星のあるように」などのみずみずしい市井の人々の生活を描いた作品群に連なるホーム・ドラマだ。あるいは楽天的なケン・ローチ？　マイク・リー？　原題はセルジオ・レオーネのマカロニ・ウエスタンのパロディだが、この放浪者カーライルは流れ者というよりロック・ミュージシャンの雰囲気だ。★★

稲垣都々世

宣伝資料に〝普通の人々のデイリーライフ〟と謳っているが、普通を描くのは難しい。普通を普通に描いたら退屈なだけだ。リス・エヴァンス、ロバート・カーライルらいい役者たちを揃えながら、予定調和の古風で笑えない物語が続くと寂しさが募る。ウドの大木のように情けない恋人と、暴力的で魅力のない元夫の間で〝揺れ動く〟女も哀れだ。男がいなければ生きられない？　二人とも捨てて自立したら？　と言いたくなる。こんな〝普通の生活〟は、現実だとしても興味がわかぬ。★

大場正明

メドウズの「トゥエンティフォー・セブン」は、彼が作りたいものを作った純粋な映画だった。ユーモアのなかにも社会に対する厳しい眼差しがあり、人々は確かにその世界を生きていた。それに比べると、この映画は妥協が目立つ。メドウズの持ち味は、ミッドランドに暮らす人々の日常を、ステレオタイプに陥ることなく生き生きと描きだすところにあるが、この映画の日常はステレオタイプでしかない。ウエスタンを意識した物語も予定調和的で、せっかくのキャストが生かされていない。★★

金原由佳

S・レオーネの「ウエスタン」（「Once Upon a Time in the West」）を模した原題だけあって、冒頭でカーライルは強盗を敢行、彼の義兄はカントリーの歌手役、と西部劇のテイストが全編に漂う。けれど、ヒロインはカルディナーレのような美人じゃない。彼女といるカーライルもセクシーで憎めないけど身勝手で、エヴァンスは真面目な点が少し滑稽で窮屈。この二人のリアルなダメさ加減で粗のある脚本を補って余りある。ただラスト、ヒロインは誰のために決着したのか、曖昧で残念。★★

午後の五時

監督／サミラ・マフマルバフ　出演／アゲレ・レザイ、アブドルガニ・ヨセフラジー（東京テアトル配給）●銀座テアトルシネマにて上映中

ロルカの詩からタイトルをとった、サミラ・マフマルバフの新作。タリバン政権崩壊後、女性たちにも学校が開放された。大統領になりたいと夢を語る、新時代のアフガニスタンの女性たちの姿が描かれる。

アフガニスタンの大統領になりたい女性たち。フェミニズム的発想を超えた、大胆で壮快な夢である。この映画でそのことについて語る女性たちの瞳に偽りはない。まさしく22才の才気溢れる女性監督のメッセージ映画である。ヒロインを演じる(?)女性の東洋的面影にも親近感をもつ。でも「ハナのアフガンノート」で映画作りの現場をのぞいてしまったことで、妙な雑念が入り込んでしまう。マフマルバフ映画一家の熱意と情熱の中に潜むある種の傲慢さがずっと気になっている。　★★

これまでは「パパに手伝ってもらったくせに生意気な…」と陰口たたいて見ていたが、今回初めてサミラ本人の心を感じた。22歳になってますます意気軒昂なサミラは、大統領になりたい女性を主人公にすることで女の地位について考え、彼女が履き替えるハイヒールによって女心を吐露する。象徴的な設定の中に語られる淡い恋物語は、しかし終盤になってロルカの詩に導かれるように死のイメージと観念に染まっていく。"類が友を呼んだ"ような主人公の意志の強い相貌が悲しい。　★★★

「りんご」は、サミラがテレビのニュースで見たひとつの事件が発端になり、「ブラックボード」は、イラン・イラク戦争に翻弄されるクルド人や密輸で生活する少年たちの現実が起点になっていた。この映画も、「ハナのアフガンノート」に描かれているように、出発点にあるのはタリバン以後のアフガニスタンだが、現実に対するアプローチに違いを感じる。まず現実を受け入れ、独自の感性でそれを映画に変えていくのではなく、彼女のなかの観念やイメージが先に立っている印象を受けるのだ。　★★

父親の見ぬ場所で履くノクレの白いハイヒール。それは女性であることの自己肯定の証のようで劇中、何度も脱いだり、履いたりのカットが挿入される。誰もいない宮殿跡でフラメンコを彷彿させるリズムを刻むその靴を、その直後、足で蹴り捨てる場面が痛い。束の間の自由を得て、大統領を夢見る彼女の姿を、サミラは靴や風でたなびくブルカなど、身に着ける物で端的に描く。単なる夢物語やアジテーション映画に留まらないのは、女性の心理を瞬時に映像化するサミラの眼力にある。　★★★

子猫をお願い

監督／チョン・ジェウン　出演／ペ・ドゥナ、イ・ヨウォン（ポニーキャニオン、オフィス・エイト配給）●ユーロスペースにて上映中

1969年生まれの女性監督チョン・ジェウンが、高校を卒業したばかりの女の子たちの姿を描く青春群像劇。それぞれが夢を追い、家族に反発し、違う道を模索して悩む姿をいきいきと浮かび上がらせてゆく。

高校を卒業した仲良し5人組の少女たちの、青春のつづれ織り。日本映画でも出逢ったような、どこか懐しく甘くほろ苦い味がある。5人のキャラクターの書き分けも、等身大でいとおしく新鮮だ。少女たちの日常がまるでドキュメンタリー映画のように自然で勢いのある生命力のリズムを生み出している。5人のひとりにでも恋のエピソードを作らなかったのは、あえて？　韓国の女性監督たちは元気だ。みずみずしいチョン・ジェウンに対して、「4人の食卓」のような濃密な迷宮を作り出す女性もいる。　★★

猫好きの気を引く題名に油断して見たら、侮りがたい作家の映画だった。瑞々しいけれど、つかみどころもなくスケッチ風につづられる女の子たちの孤独と疎外感、厭世感にはそう簡単に共感できぬ。カメラは仲良しグループの世界に入り込んで女の子たちと一緒に疾走するが、このグループ感を知らない者にとっては、皮膚感覚で映像に焼き付けられた気分を理解するのが難しく、画面のこちら側に傍観者として取り残されてしまった。理解するのでなく、感じる映画なのだろう。　★★

ジヨンは、食事時に訪ねてきた知人と、包丁を手にしたまま立ち話をする。仲間とソウルで過ごしたテヒは、思いついたようにナイフを購入する。ヘジュは、レーザーメスによる視力復手術を受ける。ある共通するイメージが盛り込まれたこうしたエピソードは、やがて彼女たちの人生の選択を際立たせることになる。学歴で自分を見限っているヘジュは、どこまでも自分を取り繕おうとする。これに対してジヨンとテヒは、それぞれに悩みながら過去を断ち切り、未来へと踏みだしていくのだ。　★★★★

日本の「負け犬」論争に通じ女の子の競争心の構図が実に瑞々しく、胸がズンズンと疼いた。なんといっても勝ち組街道を爆走する新米OLヘジュの描写が秀逸。男性社員に笑顔を振りまきながら、密かに事務から総合職への転換を狙い、ここぞと職場で実力をアピール。肥大する向上心の前では、故郷に留まる元同級生は止まっているようにしか見えない。監督はヘジュと居残り組の状況を丁寧に対比し、競争社会＝男社会に飲み込まれまいとする5人の少女のそれぞれの意地をキラキラと描く。　★★★★

★★★★…必見！　★★★…一見の価値あり　★★…悪くはないけど　★…私は薦めない

3本とも今秋公開。ちょっと早すぎるのだけれど、とても面白い映画なので、勢い紹介しちゃいます。どれも人の秘密をめぐる物語。

ロシア映画「父、帰る」は12年振りに家に戻って来た父の、厳しく頭ごなしの口調と不思議な行動に反感を持つ兄弟。「本当の父親なのか。なぜ今頃帰ってきたのか」その謎がサスペンスになって、3人の小旅行はどこにたどり着くのかわからない。

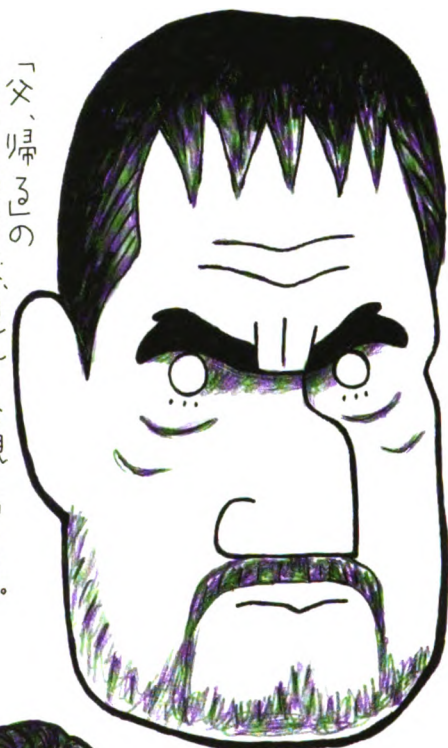
教師なのに「面白すぎる」父親のピエロになった秘密が明らかにされる

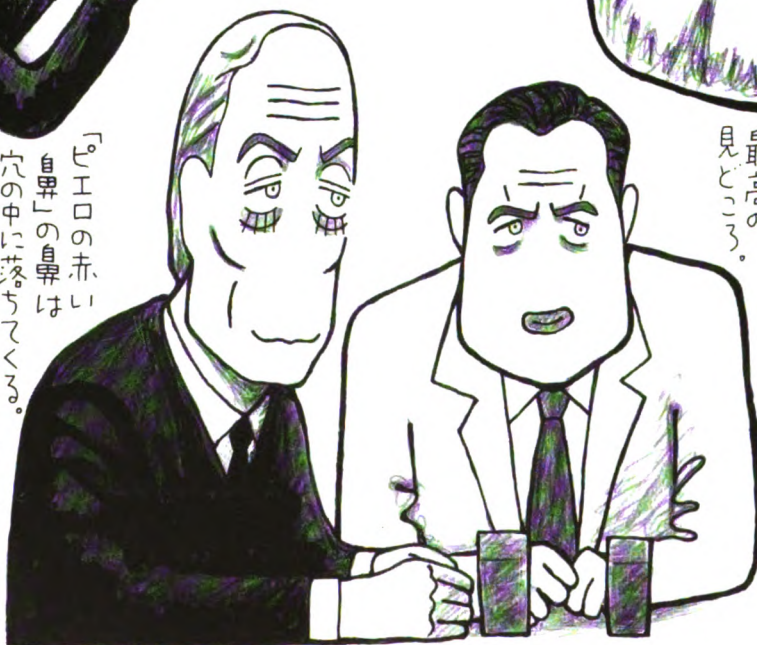
試写よりの使者

The envoy from previews.

宮崎祐治 ㊿

「ピエロの赤い鼻」。ドイツ占領時代、レジスタンス活動に参加した親友コンビが、逮捕されて大穴の中で殺されそうになるが……。戦争中なのにみんないい人で、フランス映画らしい洒落たユーモアと涙が心地よい。

グレアム・グリーン原作の『おとなしいアメリカ人』がなぜか「愛の落日」という邦題。ベトナム戦争直前の混乱時、殺された男の謎を解いていく。アメリカの参入などをうまく取り込んだサスペンス。エキゾチックな空気感が効果を上げている。

「父、帰る」の兄弟の前に突然現れる父親という男。兄は父に従うが弟はずっと反抗し続けて殴られたりする。ロシア映画の伝統か水の表現がものすごく際立っている。ヴェネチア金獅子賞作。

ベトナムの女を真ん中に三角関係になるふたり「愛の落日」。ブレンダン・フレイザーの若さやアメリカの威力に対抗しようとするマイケル・ケインの目の演技が「この映画」の最高の見どころ。

「ピエロの赤い鼻」の鼻は穴の中に落ちてくる。ジャック・ヴィユレとアンドレ・デュソリエが若い頃を演じるのも哀しみになっているのか。少々古臭いけれど、田舎の人の気持ちの優しさが伝わってくる佳作。

立川志らくのシネマ徒然草

186 大林宣彦監督へ感謝の気持ちを込めて

大林宣彦監督の新作「理由」は殺人事件が題材でありながら品のある穏やかな作品である。近頃は殺人事件というと妙に殺しの場面をリアルにしたり、とにかく残酷な内容にする傾向が強い。ヒッチコックの映画はそうではなかった。殺人事件を扱っていても楽しかったじゃないですか。映画の魅力は殺人だろうがなんだろうが「楽しい」だと私は思う。そして「理由」はドキュメンタリー形式の内容だが、役者がしっかり芝居しているのもいい。

　大林監督は現在最も信頼のおける監督ですね。その監督にこの間、私の落語会をプロデュースしてもらっちゃったのだ。で、大林監督の「あした」を「駅馬車」と混ぜて落語にすることになった。「あした」は船の事故で死んじゃった人が一晩だけ愛する人と逢えるというファンタジー。尾道の船着場に霊界から船がやってくる。その場面の美しい事。ナンセンスユーモアも満載で、私はこの「あした」が「転校生」より好きで「風の歌が聴きたい」よりかはちょいと下の作品、ってややこしい表現をするな！「駅馬車」はジョン・フォードが監督でジョン・ウェインが主演の西部劇。西武デパートの紙袋をぶら下げて戦って「西武劇」というコントを昔やったことがあったな。そんな話はどうでもよくって、「あした」と「駅馬車」を交ぜて落語にするというのは難しい。私ぐらいしか出来ないだろう、というか私しかやらんだろう。どうなったかというと、「あした」の船を駅馬車に見立て、つまり霊界から船に乗ってくる人たちのドラマを「駅馬車」にしたのです。それで「あした」のドラマと合体をさせた。違和感なく出来ました。まるで猪豚の如く。どうでもいいが猪豚ってどんな例えだ！だってライオンと豹がくっついたレオポンは変じゃないですか。無理がありすぎる。猪豚は昔からいたみたいな顔をしているもの。もういいよ、その話。えー、当日の落語会の客席が豪華だった。何しろ「あした」のキャストが並んじゃったんだから。峰岸徹さん、ベンガルさん、高橋かおりさん、根岸季衣さんら。で、当然ながら大林監督。更に奥様でプロデューサーの恭子さん、映画評論家として活躍しているご令嬢。それから「あした」の照明さんまで。彼らの前で「あした」を語るなんて、これはしんどい。もうあしたを語らずあさってを語ろうかと思ったくらい。

　一番困ったのが峰岸さんだ。実はこの落語では峰岸さんの場面をまるごとカットしてしまっていた。あまりに難しい場面だったからだ。まさかおいでになるとは夢にも思わなかった。本番前にそれを知り、慌てて考えた、というかアドリブで峰岸さんの場面を語ったのだ。でもそれがかえって良い効果を生んで作品を引き締める結果となった。峰岸さん有難う。奥さん役の小林かおりさんにもお礼申し上げます。大林監督が終演後、「これから新作映画を作る時にはあらかじめ志らくさんに落語で語ってもらおう」とおっしゃってくれた。光栄であるが「理由」の時じゃなくてよかったよ。なにせ「理由」は100人以上のキャストがいるんだもの。

「あした」

　打ち上げも豪華だった。あの伊勢正三さんが来ちゃったのだ。大林監督の前作が「なごり雪」。そのつながりだ。「私、伊勢正三と申します」と言われた時はたまげた。「申します」といわなくたって知ってますよ。震えました。それから大林作品の常連で、私の憧れの柴山智加さんもいらした。「風の歌が聴きたい」「青春デンデケデケデケ」、素晴らしかった。今回おいでになるとは思ってなかったから、打ち上げの席で「初めまして」と挨拶されて一瞬誰だか分からなかった。きょとんとしている私に根岸季衣さんが「柴山智加さんよ！」と教えてくれた。途端に私は固まってしまい、あとは妙に気取って、彼女にお酌する姿はインチキバーテンであった。

　その晩の打ち上げは「あした」の同窓会になったのは当然の成り行き。でもこんな機会を与えてくれた大林監督に感謝いたします。また私の映画に出演して下さい。いや、大林監督の映画にエキストラでいいから出して下さいませ！

立川志らく氏が監督・脚本・音楽・主演を務めた新作インターネットムービー「不幸の伊三郎」の完成披露上映会が7月15日、築地本願寺内ブディストホールにて行われます。「よくぞこんなバカバカしい映画を撮ったもんだ」と志らく氏自ら語るドタバタ喜劇　共演は酒井莉加　詳細は194ページをご参照ください。

「映画を見ればわかること」

川本三郎

⑱「シルミド／SILMIDO」の『赤旗の歌』のことなど

韓国映画、カン・ウソク監督の「シルミド」に感動する。

金日成（キム・イルソン）暗殺という秘密の使命を敢行しようとした無名の兵士たちが、朝鮮半島の状勢の変化により、無用の存在となり、軍の手で抹殺されてゆく。国家のために尽くそうとした兵士たちが、他ならぬその国家によって非情に殺されてゆく悲劇。

最後、乗っ取ったバスのなかで自決を決意した、ソル・ギョング演じる班長はじめ、若い兵士たちが、自らの血でバスの床に名前を記してゆくところが胸を打つ。

彼らは、国家機密のために、存在を抹殺され、歴史から消されてゆく。それに抗うように、自分の名前を墓碑銘のように赤い血で記してゆく。自分たちは決して無名の人間ではない、名前を持っている、という最後の個の叫びである。ひとりひとり名前を持ったかけがえのない人間であるという必死の思いが込められている。

expendableという英語がある。戦争映画によく出てくる。「消耗品」、つまり、作戦のために死んでゆく無兵士のことを指している。「シルミド」の兵士たちも「消耗品」扱いされている。もともと死刑囚や犯罪者たちだから軍上層から見れば、いつ死んでもいい「消耗品」である。

その非情な国家権力に押しつぶされまいと、最後に彼ら兵士たちは、自らの血で、ここに我ありき、と名前を記してゆく。胸が熱くなる。

中盤のクライマックスもいい。兵士たちが厳しい訓練を終え、ついに金日成暗殺へと出発する（そのあと突然、作戦は中止されるのだが）。

アン・ソンギ演じる隊長が、若い兵士ひとりひとりと握手をして出陣を見送る。この場面でカン・ウソク監督は激しい雨を降らせている。またしても韓国映画における雨である。

兵士たちは降りしきる雨のなか、ずぶ濡れになりながら、死地に向かってゆく。イ・チャンドン監督「ペパーミント・キャンディー」（99年）の雨、クァク・キョンテク監督「友へ／チング」（01年）の雨、ポン・ジュノ監督「殺人の追憶」（03年）の雨。そしてこの「シルミド」の雨。韓国映画における雨は、ほとんど男たちの涙そのものだ。

「シルミド」には気になる歌が三度繰返される。女性をレイプして処罰される兵士がまず歌う。次にソル・ギョングが歌う。最後にバスのなかで全員が歌う。

どこかで聞いたことがある歌だと思った。歌詞を見て驚いた。日本の私などの世代もかつて歌ったことがある労働歌「赤旗の歌」ではないか。

昭和三十年代まで、デモやストライキ、あるいは、うたごえ喫茶などで歌われた。手元に、新宿のうたごえ喫茶「どん底」の歌集があるが、それに「インターナショナル」や「民族独立行動隊の歌」などと共に載っている。

〽高く立て赤旗を　そのかげに死を誓う
卑却者去らば去れ　われらは赤旗守る

イラストレーション　ムカサリツコ

古茂田信男ほか著『日本流行歌史』(社会思想社、70年)によると、原曲はなんとアメリカの労働運動の歌。ドイツ民謡「もみの木」を基にしているという。

一九二〇年代に作られ、日本では大正十年(一九二一)に労働者のあいだから歌い出され、全国に広まった。「『赤旗の歌』ほど長い間わが国の働く人たちに歌いつがれてきた歌はほかにはない」。

昭和三十二年(一九五七)に作られた稲垣浩監督の「太夫さんより　女体は哀しく」(原作は北条秀司)という、売春防止法施行直前の京都、島原遊郭の女性たちを描いた作品がある。田中絹代、淡路恵子主演。

一昨年のゆうばりファンタスティック映画祭で上映された。このなかに島原遊郭の近くにあるガス会社でデモが行われている場面がある。そこで労働者たちが歌っていたのが「赤旗の歌」だった。

そういう日本の労働運動の歌が「シルミド」の兵士たちによって、最後の白鳥の歌として歌われるとは。おそらく戦前、日本から朝鮮半島に伝わったのだろう。プログラムによれば、金日成率いるパルチザンの歌となり、以後、北では広く歌い継がれているという。

「シルミド」では、兵士たちが北に潜入するため、北の歌として覚える。死を前にした時、自分たちが全員で歌えるのは、この歌しかないと気づく。南の人間が北の歌を歌う悲しい逆説。同時にそこには、統一の思いが秘められているのかもしれない。

シルミド(実尾島)は、インチェン(仁川)の沖にある島だという。その港町、インチェンの現在を生きる五人の若い女性を描いたのが、チョン・ジェウン監督の愛すべき作品「子猫をお願い」。

気のいい女の子を演じるショートヘアのペ・ドゥナ(「ほえる犬は噛まない」)はじめ、貧しい家の娘で子猫を可愛がっているオク・ジヨンら女の子たちが全員魅力的。

彼女たちの友情や孤独に的が絞られていて恋愛がほとんどからまないのが新鮮。かわりに子猫がうまく使われている。オク・ジヨンの手から、子猫が次々に他の女の子たちのところへもらわれてゆくリレーの面白さ。「猫を嫌う男は女運がない」という、猫好きにはうれしいセリフもある。

トルコ映画「少女ヘジャル」にも、女の子が子猫を公園で拾う場面があったが、猫が出てくる映画はどれもいい！

「子猫をお願い」にも気になる歌が歌われる。冒頭、インチェンの港で五人の女の子たちが歌う。

戦友の屍を越えて、われは進むといった歌詞の、若い女性が歌うには不似合いの兵士の歌(「戦友よ静かに眠れ」という)。なぜ彼女たちは、この歌を歌うのか。

インチェンは、朝鮮戦争の時に、アメリカ軍が上陸したところとして知られる。とすると、この歌は、朝鮮戦争の時の歌なのだろうか。映画の背後に戦争がある。

韓国で百万部のベストセラーになったという漫画、シム・スンヒョンの『サランサラン　パペとポポの純愛メモリー』(文藝春秋)が素晴しい。漫画であり、絵本のようでもあり、詩のようでもある。レイモン・ペイネの絵を思わせる。

ここでも雨が降る。ある日の小学校。午後から急に雨が降り出した。授業が終わる頃、母親たちが傘を持って迎えに来る。みんな母親と一緒に帰ってゆく。一人だけ男の子が取り残される。いつまで待っても母親は来ない。それでも男の子は、雨のなか元気に歩き出す。石段を登ってゆく男の子のうしろ姿に、こんな言葉が添えられる。

「家に着いたとき　びっしょり雨にぬれていた。だから、こう思うことにした。雨が降るのは　ママがボクを抱きしめられないから　流している涙なのだと…」。

そのあとの漫画で、この男の子には両親がいないとわかって……思わずホロリ。「サラン」とは「愛」のこと。

「サランサラン　パペとポポの純愛メモリー」(文藝春秋／1260円)

連載

日本魅録（にほんみろく）㊱

香川照之

「北の零年」の面々②

ＮＨＫの朝ドラでヒロインをしている藤澤恵麻が現役の上智大学四年生だというので、先日、収録の合間に聞いてみた。

いま「就職活動」というのは、大学三年の夏休みから始めるそうだ。何と、私が大学生だった頃より丸一年は早まっている。

私が大学生だった頃――それはもう十七年も昔のことだけど――就職活動は四年の夏休みから始めても間に合う安パイの代物だった。バブル全盛の、就職難という言葉さえ知らなかった我々にとって、スーツを着て会社回りをする行為は「ああ、もうこのユルい大学生活もそろそろ終わるな」と思った頃に始動すればＯＫの、ささやかなイベントに過ぎなかった。

だから一九八七年の七月、卒業したら俳優というヤクザな仕事に就くことを決めていた大学四年の私は、銀行やら商社やらに足を運ぶ同級生を尻目に「就職活動しないのも何だな」と感じていた節もあって、親のコネを頼ってＴＢＳの『日曜劇場』というドラマのＡＤをさせてもらうことにする。幼い頃からずっと否定し続けた俳優業に、大学を出る頃突如「なってもいいか」と心変わりした男には、俳優がどういう風に働いているのかまず見ておくことが自分の「就職活動」になると思えたのだ。

何とも都合の良い話だったが、その甘ちゃんな人生設計への手厳しい返礼はキチンとやって来た。一日中立ちっぱなし、訳の分からない専門用語、どこにいて良いか分からない居場所の無さ――戦場のような撮影現場に、私のようなひ弱な学生は全く以てお邪魔虫だったのである。私は、婦人服バーゲン売り場で足手まといにウロウロしているおじさんのように、緑山のスタジオでただただ芝居を見学させてもらっている我が儘なお坊ちゃまでしかなかった。

後日、この二ヶ月間の記憶は「私の中から一刻も早く抹消したい過去リスト」の堂々ベスト3に入ったことは言うまでもない。今、これを書いている瞬間も実に不快で不本意である。しかし今回は、この二ヶ月間のＡＤ時代のことから書き出さねばならないのだ――。

旋回したボーイング777が滑走路に滑り込む。この新千歳空港に降り立つのは今年何度目だろう？　吉永小百合主演映画「北の零年」の撮影ももう佳境だ。

見慣れた夕張のロケセットに車が入った。――顔を見て少し安心した。ストレスから腸にポリープが何個も出来ていて、撮影が終わ

モニターをチェックする行定監督と中村裕樹。後ろは筆者

ったら即入院が決定しているのに、撮っても撮ってもまだゴールが見えずに北海道に釘付けになっている行定勲監督が、思いのほか元気そうだったからだ。「世界の中心で、愛をさけぶ」のスマッシュ・ヒットが大きく後押ししている膂力もあるのだろう、ギリギリの健康状態にもかかわらず、豹のようにしなやかな肢体を操るこの男には相変わらずのポーカーフェイスが宿っていた。

――苦い記憶が蘇る。

二年前、浜崎あゆみ主演の短編映画「月に沈む」で初めて会った時もやはりポーカーフェイスであった行定勲に、「初めまして、香川です。やっとご一緒出来ます、嬉しいです」と挨拶した私を待ち受けていたのは、顔から火が出るような失態であったのだ。

「え？ 違いますよ。昔、ＴＢＳで一緒だったじゃないですか」

「は？ ＴＢＳ？」

「はい。香川さん、あの時、〝弁当はこう配るんだよ〟とか僕に教えてくれたじゃないですか」

冷や汗が一気に出た。全く覚えていなかった。いち早く記憶から抹消したのだから仕方ない。しかし、今から十七年前――私と行定は、実は共に「日曜劇場」のＡＤとして出会っていたのだ。奇しくも、「世界の中心～」でサクとアキがカセットテープを交換していた一九八七年のあの夏――香川照之と行定勲もまた、初めての出会いをしていた訳である。

恥を忍んで書けば、当時熊本から上京したての行定勲よりもひと月だけ早く現場に滑り込んでいた三歳年長の私は、門外漢ながらも将来の巨匠に先輩風を吹かせていたのだという。一ヶ月ＡＤとして一緒にいたのに覚えていない、しかもその時の恥ずべき行動――行定勲の目にあの時の私はどう映っていたのだろうかと考えると、自分自身背筋が凍る思いだった。

けれども、どう足掻いても時計は反対には回ってくれない。過去を憂いても時は戻らない。十七年という歳月を経て、熊本から出て来た青年は押しも押されぬ名監督になってしまった。私に出来る償いといえば、この「北の零年」で自分に与えられた配役に全力を注ぐことしかないのだ。行定勲が、俳優が死力を尽くすに相応しい粘り強い撮り方を強いて来る本格派の監督に成長したことは素直に嬉しかった。あの緑山スタジオで弁当を配っていた時から現在に至るまで、この男が何を感じ、何を学んで来たのか、漫然と生きて来た私には到底計り知れない――。

今回が長編九作目になるという行定勲の、助監督時代に最も影響を受けた監督は岩井俊二であり、最も支持する監督は相米慎二であるという。だから行定も、とにかくよくフィルムを回してくる。

セリフの字面に沿った規格内の解釈をする長澤まさみと森山未來に、芝居がＮＧの理由を決して言わずに「もう一度」「もう一度」と、とにかくキャメラの前で彼らの「規格外の衝動」が想起してくるのを我慢し待ち続けた相米的執念は、「世界の中心～」を大きく開花させた。今回の「北の零年」でも、シーンのマスターショットを様々なパターンで押さえる手法を遂行、俳優陣は同じ芝居を一日に三十回はさせられている。しかし、監督がカット割りやつながりという「鎖」を俳優から出来るだけ遠ざけて「衝動」の噴出を待ってくれるのなら、俳優にとってこれほど有り難い現場はない。「鬼が来た！」で監督の姜文が、フィルムを湯水のように使いながらこの鎖を解き放ったおかげで、私はキャメラの前で衝動の大洪水になることが出来たのだ。

果たして、行定勲と私を巡るこの十七年は、私にどのような「衝動」を与えてくれるのだろうか？ 行定組常連の照明・中村裕樹、録音・伊藤裕規らも俳優の「衝動」を待つことには慣れている。まだ三週間以上撮影が残っているこの段階で、使ったフィルムはすでに三十五万フィート。行定勲は、やはり今回も本気なのである。

右から撮影の北信康、行定監督、照明の中村裕樹、録音の伊藤裕規

リレー・エッセイ

映画と私

渡辺あや

脚本家

好きな映画のことを話すのは、なんてむずかしいんだろうと、いつも思う。嫌いな映画の悪口なら、それは楽しく！　面白く！　我ながらナイスな比喩なんか思い付いたり！　までするのが、こと好きな映画となると、いきなりモジモジしてしまう。

もちろん素敵な映画に出会った時も、本当は言葉を尽くしたくなる。作品が心に映していった空気、流していった感情、それらを的確かつ負けないくらい美しく表現できれば、その映画とちょっと「お近付きに」なれるような気がして、誰にきかせるわけでもないのにドキドキしながら一人で頭をひねったりする。でも、私の言葉がそれに足りたためしがない。優れた映像表現の前には、どんな分析もレトリックも、だっさいラブレターみたいに無駄な気がしてきて、こんなんじゃ絶対フラれるにきまってる、と結局いつも心の中のそれをビリビリと破くことになる。

そんなわけで、きっと一生お近付きになんかなれないことは承知しつつ、一方的に「好き〜」とデレデレするのはやめられない（アイドルファンのおっさんみたい）。だって、胸に思うだけで生きる希望が湧いて来たり、名前を口にするだけで幸せになれたりする、そんな存在は貴重だもの。そういうものこそを人生の宝と呼びたい。「スモーク」「マイライフ・アズ・ア・ドッグ」「ノーバディーズ・フール」その他が、私にとってのそんな宝物の映画で、アイドルをおっかけるおっさんのように、私も無償の愛を捧げている。

ところで私は今、脚本を書く仕事をしているので、自分が関わる作品に大志を抱いたりもする。映画という表現には、内包される膨大な要素、映像、音楽、言葉、物語、役者、風景などなどなどを緻密に重ねていくことで（思いがけない蛇行も含めて）、最終的にたどり着ける場所が、私の好きな映画たちのようであることを夢みている。

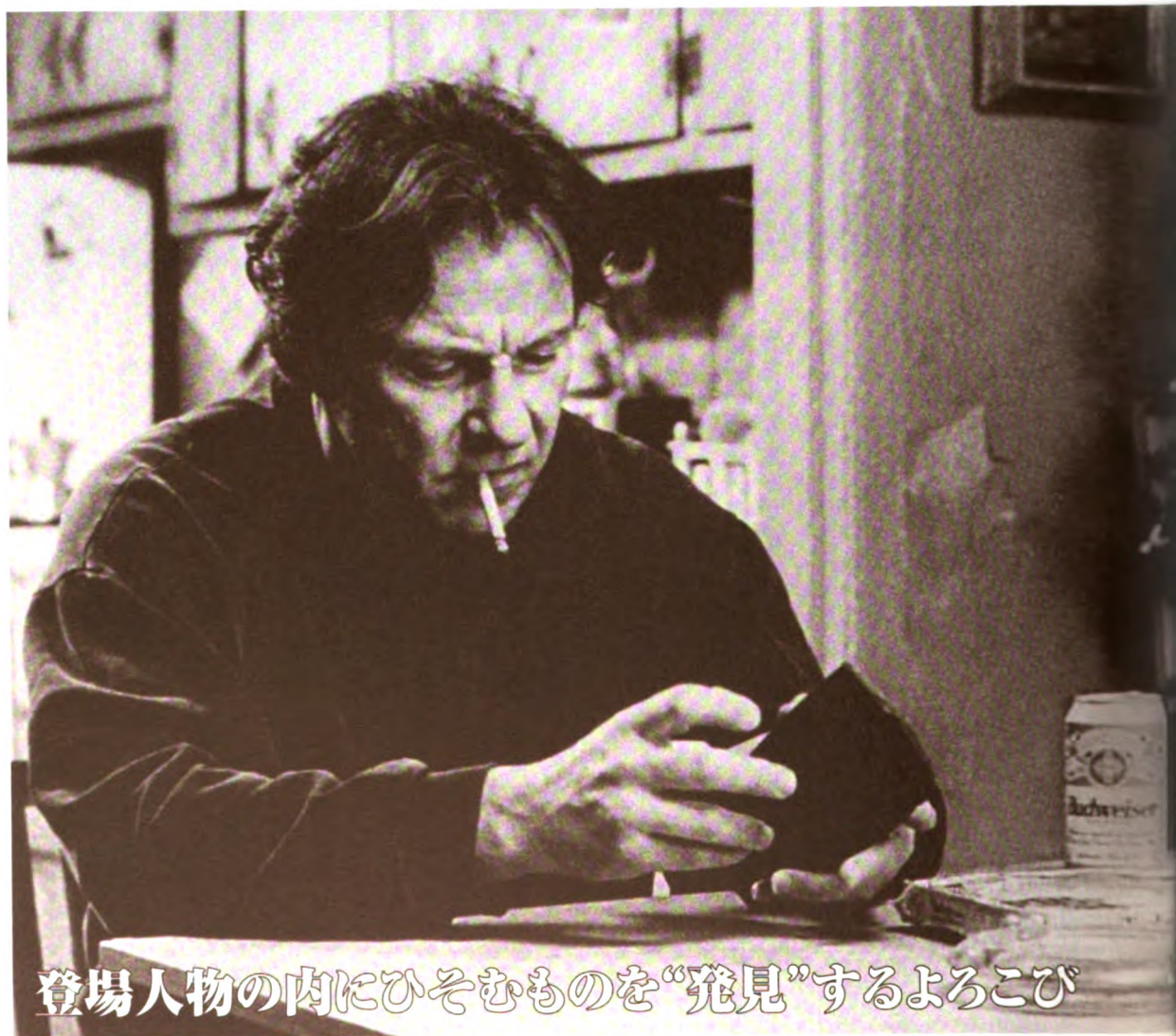
私の好きな映画はたいがい、明快な起承転結がなく、勧善懲悪でもなく、登場人物たちに飛躍的な成長なんかもみられない。でも、鑑賞後感がひたすら温かいのは、作り手の人たちの人間を見つめる目が、フェアで優しいことが伝わってくるからだ。どうしてこんなに繊細に物語を紡げたのだろう。途中でプロデューサーに「企画的フックに欠ける」とか「粗筋が観客の興味を惹起しない」とか怒られたりしなかったのかしら。その才能ももちろんだけど、環境が切実にうらやましい。

脚本の構成についてスタッフで話し合っているとき、よく「登場人物たちの成長」を求められる。確かに、登場人物が何かと出逢うことで起こる最終的な変化が「成長」に見えると、物語として明るく、分りやすくなる。「粗筋で観客の興味を惹起できる」ようになる。私自身も、スカッと胸のすく成長物語は大好きなのだけれど、自分の描く登場人物たちに対しては、むしろ成長させずにすむ方法をいつもさがしている。というのは、映画を観始めたときと、観終わったときの登場人物に対する印象が全く変っていても、それは「登場人物の成長」のせいではなく、「観ている人の発見」のせい、というのが自分の目指していたい表現なのだ。

たとえば、私の祖母は90歳を超え、もう結構ボケている。ある時、一緒に留守番をしていたら、ふと目を離したすきにいなくなった。慌て

てさがしていると、外で誰かと話す声が聞こえてくる。どうやら近所のおばあさんが（祖母よりさらにあやしい）家から迷い出てきてしまっているのを見つけて、心配して呼びとめに出たらしい。おばあさんに家に戻るよう丁寧に言い聞かせる祖母の顔はキリリと責任感に満ち、いつになく頼もしく見えた。同じことが子供で起こっていたら、単純に子供の「成長」と思ったかもしれない。でも、いかんせん祖母なのでそうは思わず、私の「発見」だと思った。祖母のことを「ボケてるし」と見くびっていた自分を反省した。

人の美しさは、いつもすでにその人の中にあるものなのかもしれない。たまたま、それがこちらにとって見えやすくなることを、勝手に「成長」と呼んでるだけなのかもしれない。エゴや性欲やその日の気分で、私の目はすぐにくもる。私の好きな映画たちは、とびきり透きとおった目に人を映して見せてくれる。観終った後に、私の目のくもりもちょっとはキレイになってる気がするのを、錯覚じゃないといいな、と思う。

わたなべ・あや
1970年兵庫県生まれ。99年に岩井俊二監督のオフィシャル・サイト「円都通信」内のシナリオ応募コーナー"シナリオどーんと来い"（現"しな丼"）に脚本を応募し始める。その中の「少年美和」が久保田修プロデューサーに認められ、数本のシナリオを書き下ろしている。そのうちの1本「ジョゼと虎と魚たち」(03)で脚本家デビューを果たした。

登場人物の内にひそむものを"発見"するよろこび

「スモーク」

成田陽子の忘れられないスター

第16回

エリザベス・テイラー

ELIZABETH TAYLOR

キラキラ輝く圧倒的な存在感
絶対“忘れられない”スター

1932年２月27日、イギリス、ロンドン生まれ。39年に渡米、10歳のときに端役で映画出演し、43年「家路」で大役を得てMGMと契約、少女ながらもスターとして活躍する。やがて、人気だけではなく実力も発揮して60年「バターフィールド８」、66年「バージニア・ウルフなんかこわくない」ではアカデミー賞主演女優賞を受賞。プライベートでのロマンスは数多く、マイケル・トッド、エディ・フィッシャー、リチャード・バートンらと結婚・離婚を繰り返した。84年からはエイズ撲滅活動を行い、92年エリザベス・テイラー・エイズ財団を設立。第65回（1992年）アカデミー賞ではジーン・ハーショルト友愛賞を受賞している。

自分の姿をスクリーンで見るのが大キライ

あの真黒な髪と太い眉という強烈なアクセントが普通のブロンド美人の百倍もの存在感、インパクトを与え、さらに濃いマツ毛に縁取られた大きな紫色の瞳と整った鼻筋と唇の美しさ、そして豊かな胸には大粒の宝石、砂時計型というより、８の字に近い、くびれたウエストが思わずの接触を誘発する

エリザベス・テイラー。少女時代に彼女のグラビア写真を見ては妙な興奮を覚えたものだった。美貌のシンボルのイングリッド・バーグマンやグレタ・ガルボにはない〝官能美〟がテイラーのホクロに始まって、あご、のど、肩から腹部からざわめき立ってくるのだ。ページから、湯気が立つように、スリー・ディメンションの肉感で迫ってくるテイラーの〝これでもか〟〝これでもか〟という官能の誘惑に、お茶漬の日本の一少女が引きずり込まれたとで

「ジャイアンツ」

「花嫁の父」

「じゃじゃ馬ならし」

「バージニア・ウルフなんかこわくない」

も言おうか。オードリー・ヘップバーンの妖精美は日本でこそ一大ブームを巻き起こしたが、肉食(当時は特に)ハリウッドでは美貌より性的アピールの方がはるかに好まれ、マリリン・モンローやジェーン・マンスフィールドのゆっさゆっさ曲線美に人気が殺到したのだ。しかし、テイラーには英国女性特有のリンとした気位とその裏にひそむ猟奇的な性的嗜好が見え隠れし(例えば、デボラ・カーみたいに)、加えて、あの好戦的にして、360度アングルOKの完璧美女というパッケージのパワーは凄まじかった。何百回眺めても倦きなかった、ページの上の、そしてスクリーンの上のエリザベス・テイラーのナマの姿をはじめて見たのは85年1月のゴールデン・グローブ授賞式で功労賞を受けた時だった。その時、53歳のテイラーは、黒と白のドレスにダイヤモンドのイヤリング、ネックレス、ブレスレットに指輪を天の川のようにキラキラと輝かせ、その過剰ぶりさえ、彼女の豪華さの脇役になってしまうという燦然たる存在感で現われ、まさに〝目のこやし〟という状況を味わうことができた。圧倒的な貫禄と自信に満ちた動作といまだに大輪の花の華やかな美しさを目のあたりにし、彼女の独特の甘いトーンの嬌声を聞き、私メの胸はじんじんと痛んだ程である。その時は儀式的な「評価されて光栄、まだまだ現役としてがんばりたい」てなコメントを言っていたが、

「正直なことを言うと私は自分の姿をスクリーンで見るのが大キライなの。顔も体も大キライ。私の声を聞くと身ぶるいが出てしまう。どうしてもっと上手に出来なかったのかしら、という疑問にさいなまれ、他の人は自分の声を聞くと私のようにゾーッとするのかしら、と考えたりして、居ても立ってもいられない。受賞ともなるとじっと会場に坐って、大うつしの自分の顔を見てなくてはならないのが苦痛で。本当は私の場面をうつしている間ずーっとトイレで隠れていたいのだけれど……」

と、思いがけない告白をしてきたのには驚いた。これまで、私メがヨダレをたらさんばかりに見つめていたテイラーの〝自分の顔が大嫌い〟という思考回路は理解しがたいものだったから。話は横道にそれるが、現在78歳のマリア・シェルは朝から晩まで数台のテレビで自分の若かりし頃の映画をじーっと見つめていると最近、弟のマクシミリアン・シェルが話していたが、少なくともその点ではテイラーはバランスを保っているようだ。

2年後の87年には香水のテレビCMで屈強な男どもに向かって「ちょっとお待ち!」と命令して巨大なダイヤモンドを見せるシーンに登場し相変らず

の超弩級セクシーさを見せてくれたのである。

以前にダイヤモンド展のプログラムに、テイラーほどダイヤが似合う女優は居ないと書き、昔はソフィア・ローレンとか、ジーナ・ロロブリジーダという豊満な女優たちの胸にあってこそ巨大な宝石との相乗効果が生まれ、今のグウィネス・パルトロウやジュリア・ロバーツらの貧弱な胸の上では全く映えないなどと書いたが、ナチを支持したドイツの財閥、クルップ一族に伝わる33・19カラットのホワイト・ダイヤモンドの指輪をはめこなすのは、何と言ってもエリザベス・テイラーのみであろう。リチャード・バートンにプレゼントされたこの呪われた石を毎日はめて「優しいユダヤ人の女の子(ナイス・ジュウイッシュ・ガール＝自分のこと)が、このダイヤを身に付けるって、何となく詩的だなあと思っているのよ」とぬけぬけと言うあたりが、この驕慢なスターの良いところではないか。ちなみにユダヤ人のエディ・フィッシャーをデビー・レイノルズから奪って結婚した際、ドラマが好きなテイラーはユダヤ教の信者になったそうで、事ある毎に自分を、ナイス・ジュウイッシュ・ガールにたとえて彼女なりの自己軽視呼称を使うのである。

いまだにバートンの夢をしばしば見ると言うテイラーは「彼が宝石をプレゼントしてくれる度に私は跳びはねてうれしがり、それから彼の上に飛び乗って、ブルガリの山に埋もれてメイクラブしたものだった」と述懐しているように、宝石と言っても数カラット程度のエメラルドなどでは性的興奮は得られないようで、ブルガリなどの最高級宝石商が金庫から捧げ出してくるクラスのジュエリーのみが、テイラーにつり合うようだ。

「バターフィールド8」

私は演技する必要なし だってスターですもの

さて、2度目に会ったのは92年9月10日、エイズ基金運動をはじめた頃の92年9月10日、

彼女は還暦の60歳、サンタモニカのホテルに濃いピンク色のスーツ（かなりきつ目でボタンとボタンの間の合わせ目がはじけていた）、当時、得意気にしていたツンツンとスパイク風におっ立っている髪型は黒と白の髪が混じってスカンクのようだが、彼女にかかると、何故かエレガント、愛犬マルチーズの〝シュガー〟の白いかたまりを毛皮のショールもどきに脇に抱え、お付きの人々に案内されて、傲然とした姿を現わしたのである。メイクは濃かったが、コントラストの強い輪郭は彼女のトレードマークゆえ、不自然ではなく、映画史に輝く美女のおもかげをしっかりと裏付けしていた。群衆の注目を栄養にして生きてきたスーパースターの無頓着な表情が、ゾクゾクする程にきれいだった。脇に置いた愛犬をゆっくりなでながら、よく通る、甘い声でしゃべりはじめる。

「エイズという病気がまだ全く知られていない頃から私は、この恐ろしい疫病の退治対策にかかわってきました。ロック・ハドソンがエイズにかかっているということも知らなかった頃です。もちろん、ロックはよく知ってましたけれど。友人の医者がエイズの伝染力、社会的な恥辱になるにちがいない状況などについて教えてくれてから私は大きな憤りを感じ、何とかしなければと思っていた矢先にロックがエイズにかかっていると発表し、その途端に世間が注目しだしたのです。それでも社会的な位置の認識は得られず、最初の資金集めディナーまで7カ月もかかってしまって。大ぜいの人が出席は辞退したい、お金は出しますが、とためらうばかり。以来、私はディナーだけでなく、人々が関わりたくないと言うエイズの撲滅のために戦おうと決心したのです」

この日はテイラーが自らの組織〝エリザベス・テイラー・エイズ財団〟をスタートするにあたっての記者会見だったため、質問はほとんどエイズについてだったが、数字を引き合いに出したり、ブッシュ（シニア）やクリントン大統領の態度をユーモラスに批判したりと弁舌もさわやかに堂々と答えて

いたのを思い出す。

「経費を少しでも節約したいと思い、まず人件費は友人の弁護士や会計士に無料で奉仕してもらい、俳優仲間にも色々と手伝ってもらい通信費や交通費は私が持ち、そう、切手や封筒は私の机のものを使ってね、ラリー（・フォーテンスキー・当時の7番目の夫）はボランティアとして秘書の役をしてくれたり、運転手になったりしてくれてます。私自身は商品として自分の名を利用し、出来る限り売り込んでいますのよ。会長として、健全で明朗な構造の組織を保つように目を光らせてもおりますからね」

封筒や切手などと身近なアイテムを思い出すあたりが、いかにも世間知らずの女王様だが、訴える力はさすがであった。

「今こそ戦うべきです！　敵はエイズなのです。もうロシアは憎っくき敵国ではありませんから防衛費の少しでもエイズ対策にさいてほしいのです。いったい、どの国が現在の敵なのでしょう？　宇宙のどこかの国なのかしらん？　私は政治家が苦手で、優しい紳士のジョン・ワーナーと結婚し、しばらくは素晴らしい日々を共に過ごしたのですが、ある日彼が政治の道に進むと宣言したので別れてしまいました。もしワシントンについて行ったら、アル中になって早死したにちがいありません。投票権？　幸運にも私は英国人なので権利を持っていないのですよ」

などと6番目の夫（いまだに現役政治家）まで引き合いに出してきた。

この朝、97歳になる母上が転んで手術をするという事故があり、このことについて質問すると途端に表情を険しくして、

「朝の3時か4時に転んで、足首と肋骨3本が折れ、19針も縫って、ショックを受けています。母のそばについていたいのですが、会見の義務を感じて出て参りました。一刻も早く病院に行こうと思っているのですが……」

と答えているうちに、突然、うつむいて涙声になってしまった。ウウウとうめくテイラーを左右から付き人が支え、「ミス・テイラーはもう話をする状態ではありませんので悪しからず」と部屋から連れ出していくのである。もちろん、最愛の御母堂を心配する娘の心境を分かっているものの、さすが現実をメロドラマに仕立て上げてしまう本もののドラマ・クイーンなのだな、と痛感。愛犬をショールよろしく抱いて登場するのも、半分、失神状態で支えられながら退場するのも、彼女の無意識のドラマ演出が身に付いているのだ。それが又、センセーショナルで、何とも言えない別世界の人間の特殊性につながり、せっかくの写真を一緒に撮るチャンスを逃しても、こちらは口を開けてポカンとしてしまうのである。という次第で今回は恒例のツーショットはナシなのであります。

その2年あとの94年「フリントストーン　モダン石器時代」に出演した際に再度、テイラーと会見する機会があった。

御母堂のことをたずねると、

「99歳まで、しっかり生きてくれました。私の叔父は102歳であの世に行ったりと私には長生きの遺伝子があるようね。でも正直な話、99歳まで生きたいとは思わないわ。でも、時たま、私は不滅なのではないかしらなんて考えてしまうのよ」

と、淡々と答えてくれた。44年に12歳で落馬し背骨を痛めて以来、10数回の大手術で何度も死線をさまよったテイラーならではの悟りのような心境が感じられるではないか。

「私は演技する必要がないのよ。だって私はスターですもの」と映画のクランク・イン前に言ったそうだが、半分冗談にせよ、エリザベス・テイラーがのたもうと劇的効果が高まり、我々はツバをのんでは憧憬の念を濃くしてしまうのである。

Erizabeth Taylor Filmography

1943	家路
1944	ジェーン・エア
	ドーヴァーの白い崖
1945	緑園の天使
1946	名犬ラッシー
1947	ライフ・ウィズ・ファーザー（V）
1948	スイングの少女
	奥様武勇伝
1949	若草物語
1950	花嫁の父
1951	クォ・ヴァディス
	可愛い配当
	陽のあたる場所
1952	黒騎士
1954	ラプソディー
	巨象の道
	騎士ブランメル（T）
	雨の朝巴里に死す
1956	ジャイアンツ
1957	愛情の花咲く樹
1958	熱いトタン屋根の猫
1959	去年の夏突然に
1960	スペインの休日
	バターフィールド8
1963	クレオパトラ
	予期せぬ出来事
1965	いそしぎ
1966	バージニア・ウルフなんかこわくない
1967	じゃじゃ馬ならし
	ファウスト悪のたのしみ
	禁じられた情事の森
	危険な旅路
1968	夕なぎ
	秘密の儀式
1970	この愛にすべてを
1972	ある愛のすべて
1973	夜をみつめて
	別離
1974	ザッツ・エンタテインメント
1976	青い鳥
1979	大統領の堕ちた日（V）
1980	クリスタル殺人事件
1988	トスカニーニ　愛と情熱の日々
1994	フリントストーン　モダン石器時代

※日本公開作品（劇場、ビデオ、テレビ）のみ対象
※テレビ作品は除く

連載5

あの娘ぼくがこんなシネマ撮ったらどんな顔するだろう

河原雅彦

イラスト＆題字　中村まこと

この物語は、明日の映画界の発展のため空前の話題作を生み出そうと七転八倒する、とある映画制作会社を舞台とした「机上の空論キャスティング小説」である。

シネマ2　疾風怒濤の作品チョイス編

「アニメや漫画の実写版リメイクがくると思うんだ」

満田の七色の声が会議室に響き渡った。薄い黄緑だった。

ここは映画製作会社アトミック・シモンズ㈱の会議室。社運を懸けた次作に向けての企画会議の真っ最中である。

「あのぉ……ちょっといいですか?」

アトミック・シモンズの良心、純情新入社員のあずさが満田の意見に待ったをかけた。

だって、そうだろう。

先日クランクインしたばかりの「実写版Dr.スランプ」は見事なまでに頓挫したのだ。その企画倒れぶりと言ったら、隅田川花火大会の終盤を見ているかのように、ある意味壮観ではあったのだが……。

「なんだ、言ってみろ。この毛じらみ」

旗畑があずさにそう促した。

「いくら先輩でも、意味なく後輩をおとしめる発言はやめてもらえませんか」

……常々あずさは旗畑にそう言ってやりたいのだが、中々踏み込めないでいるのが現状だ。以前、軽くそれらしいことをふったところ、旗畑ときたら「そんなん言ってないもん!」とほっぺをプ～っとふくらまし、頑なに認めなかったからである。

ちなみに旗畑は今年で三十七歳を迎える妻帯者だ。

さて、話は会議室に戻る。気を取り直してあずさが続けた。

「きます。つうか、実写版ブームはもうきていますけど、前回の反省を踏まえて今度は慎重に企画を進めないと……」

あずさの言うことはもっともだった。撮影中止に伴う金銭的ダメージはかなりの額だと予想された。しかも、このところただでさえズッコケまくりの作品を量産しているのだ。すでに社の財政は火の車と言ってよい。

が、しかし。

この会社での「もっとも」は例の怠慢女が決める。

そう、お茶くみアルバイター・ミミ、その人である。

「YOSHIKIがアラレ役って、まんずあり得なくねぇ?」

ミミが、ルービックキューブをこねくり回しながらそうのたまった。
「スランプといえばYOSHIKIでねぇ?」と連想ゲームのようなキャスティング案を出したのは他でもない彼女である。疲労骨折したろっ骨を押さえながらスタジオを去るヨレヨレのYOSHIKIに、「ホームオブハートに帰えれ、こぉの肩からセーター!」と罵声を浴びせたのも彼女である。驚いたことに、ミミはYOSHIKIとTOSHIを完全に間違えて認識していたらしい。
とはいえ、あずさは文句の一つも言いたい気持を抑えるのに必死だった。
なぜならミミは自分に都合が悪いことを言われると、両手で耳をパフパフして聞こえない振りをするからである。あれは本当に……本当にムカつく。
ちなみに、玉のような汗を拭いながらかれこれ一時間以上はやってるのに、ミミのルービックキューブはまだ一面も出来あがっていない……。
「ちょっと、早過ぎたかな……」
YOSHIKIの何が早くて何が遅かったんだかさっぱり分からないが、満田がそう言って憎々しく爪を噛んだ。
「鼻差でしたね~」
旗畑も苦みばしった顔でそう悔やんでいるが、そもそも誰と誰の鼻の差なのか?
「だが、実写版にはこだわっていきたいと思うんだ」
満田がキリリと真顔でそう言った。さっきよりちょっぴり薄い黄緑だった。だが、その表情はヒゲ面に関係なくいつになく風格が漂っている。
「それはどうしてですか?」
うんと期待を込めたあずさの問い掛けに満田がクイックで答えた。
「やけくそだ」
あずさは、「やけくそなんだ~」と一瞬にして言葉を失った。
旗畑が「『毒を喰らわば皿まで』ですね!」と陽気に続けると、「毒なんだ~」と、あずさは更に言葉を失った。
「いいんでねぇ」
すでにフリーズ状態に入ったあずさの耳にそんなインチキ東北弁が聞こえるわけもなく、あずさの脳内コンピューターが再起動するにはそれから二時間ものインターバルを置かねばならなかった……。
「……ハッ!?」
白目をむいて固まっていたあずさが我に返ると、どうやら会議はまだ続いていたようだ。満田と旗畑は身動き一つせず思案に暮れている。
「おはよう、みなしご」
あずさのぼんやりとした意識も旗畑の暴言に心乱され、次第に回復へと向かっていった。
「だいぶ決まってきたぞ」
満田のもはや黄緑とは言えないほど薄まりきった声であずさがホワイトボードに目をやると……あずさは一瞬にして再び失語症地獄に追い込まれるのだった。

アトミック・シモンズ㈱04年度企画第2弾
実写版「北斗の拳」

「……………」
「どうだ、カッコいいだろ?」
眩し過ぎる笑顔を浮かべた旗畑が力こぶをつくってそう言った。
「また少年ジャンプじゃないですかっ!!??」
「だから、やけくそだってさっき満田さんが言ったじゃないか!」
目を血走らせた旗畑がつま先立ちであずさをどやしつけた。なぜか満田はしなを作って照れている。もはやこの流れを食い止めることなどローマ法王にも出来やしない……。
満田がもはや無色の声で続けた。
「だが、キャスティングで煮詰まってな…」
見ればボードには以下のように記されている。

☆ケンシロウ…西岡徳馬?
☆ラオウ…西岡徳馬??
☆トキ…西岡徳馬???
☆南斗水鳥拳・レイ…沢田研二(往年の)
☆雲のジュウザ…オダギリジョー、葉月里緒奈
☆山のフドウ…曙太郎
☆「あべし!」って死ぬ人…大森南朋〈友情出演〉
☆「ひでぶ!」って死ぬ人…磨 赤兒〈友情出演〉
☆死兆星…横山ノック
☆暴れん坊将軍…松平 健

「……どこからツッコめばいいんだ」
ボードを前に、「ああ……ダウンタウンの浜ちゃんになりたい」と、そんな思いに激しく胸掻きむしられるあずさであった。
……ミミが「ふんぬぅ!」とルービックキューブを床に叩きつけたところで、次号けんけんがくがくの『炎のキャスティング編』に続く

アトミック・シモンズ㈱の人々

あずさ
映画を愛する新入社員の熱血純情青年。「実写版Dr.スランプ」で映画製作に初参加した。

満田
企画開発チームのリーダーながら世情に疎いプロデューサー。野性の勘だけで生きている。

旗畑
毒にも薬にもならない発言ばかりの宣伝チームのリーダー。若手に暴言をはく悪癖あり。

ミミ
無能なお茶汲みバイトで東北訛りの家出少女。満田の愛人でその意見がやたら重宝される。

撮影現場ルポ

釣りバカ日誌15

こんどは秋田で釣り三昧!?

取材・文＝**編集部**

前作「〜お遍路大パニック！」に続き、シリーズ2度目の登板となる朝原雄三監督

田沢湖畔の「ハーブガーデン」で行われた記者会見では、西田敏行さんが“大病”後の心境を語る一幕も

今年も夏の恒例、「釣りバカ日誌」の季節がやってきた。前作「〜お遍路大パニック！」の南国・高知から一転、北へ——今年の舞台はみちのく秋田。

4月17日に都内・大泉撮影所で始まった撮影は、神奈川県金沢八景（ハマちゃんの自宅＆釣り舟屋・太田屋のある場所）を経て、4月下旬から秋田県に場所を移し、〝なまはげ〟で知られる男鹿市、〝みちのく小京都〟角館町を中心に行われた。撮影現場を訪問した5月17日はすでにスケジュールは大詰め、角館および近隣の町村で主要キャストが揃っての撮影、しかし……。5月の東北地方は天候不順で、スケジュール通りに撮影が消化されていない模様。ちょうどこの日も、町内を流れる桧木内川での釣りシーンを撮る予定だったのが生憎の雨模様により予定変更、角館駅から車で15分ほどの西木村に風情ある佇まいの民家を借りて、屋内シーンが撮影されていた。

雨脚がますます強くなる中、カッパを羽織って慌しく往来するスタッフに混じって、地元のサポート・スタッフ（ボランティア）の姿も見受けられる。屋内では「テス

トいきます！」「はい、本番！」の声のたびに緊張が走り、我々マスコミは少しでも良いポジションでシャッターを切りたいと、焦る気持ちを隠せない。取材陣を入れると50名はいるかという〝人の重さ〟で、古い家屋の床が抜けてしまわないかと余計な心配も。

今回マドンナ役に抜擢されたのは江角マキコさん。ハマちゃん（西田敏行）が勤める鈴木建設へ人事制度改革のためやってきた経営コンサルタント会社のヤリ手社員・薫を演じる。ハマちゃんは、旅先で知り合った水産試験場に勤める哲夫（筧利夫）と、休暇で実家に帰省中の薫（実はこの二人は幼なじみ）の恋のキューピッドとなる。

この日見学できたのはラストシーン近く、二人が結納を交わす場面。酒を飲みすぎてグロッキー状態の哲夫を、薫がやさしく介抱する。薄桃色の着物を身に纏った江角さんの美しさに目を見張らされる。横たわる哲夫の周りではハマちゃん、スーさん（三國連太郎）、みち子さん（浅田美代子）、哲夫の母・信子（吉行和子）、薫の祖母・春江（浅利香津代）たちが心配そうに覗き込む。秋田出身の浅利さんが話す流暢な秋田弁、西田さんと三國さんの絶妙な掛け合いで物語はハッピーエンドへ……。深緑の木々に囲まれた茅葺の民家に響き渡る朝原雄三監督の「オッケー！」の声。

朝原監督は前作に引き続き2度目の登板となる。前作の公開前の取材では「（11～13作の）本木（克英監督）が今ほかの映画に入っているから、『お前が行け！』といわれただけ」と謙遜しつつ、西田、三國両大ベテランを向こうに回して演出する大変さを語っていたが、2度目ともなると、見えてくることも多くあったのでは？

「昔ながらのプログラム・ピクチャーの喜劇を作る楽しさというのは、出演者が擬似家族的になって仲良くなることです。地方ロケも2度目。西田さんが音頭を取って、スタッフが倒れるまで飲む。そんなことがやっぱり楽しいですね」

そんな監督を三國さんは、「若いし、素晴らしい熱情を持った監督だから我慢してやってみようと思っています。まあ、向こうも我慢してやってると思いますけど

〝釣りバカ〟といえばこの2人——今回はハマちゃんとスーさんの釣りのシーンは果たしてあるのか？

ハマちゃんと薫（江角マキコ）の出会いは秋田新幹線〝こまち〟の車中

主要キャストが勢揃いした秋田・角館ロケ。いつもハマちゃんの釣り旅行の留守を守るみち子さん（浅田美代子）が、地方ロケに参加するのは珍しい。また、秋田出身の浅利香津代さんが〝華麗な〟秋田弁を披露（写真・上）
今回のマドンナ役は着物がよく似合う江角マキコさん（写真・左）

（笑）」とちょっと皮肉交じりに評しながらも、「前作での問題点を踏まえて臨んでいるので、今回は本当に面白い喜劇になる気がします」とエールを送る一幕も。

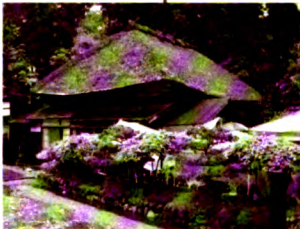
「西田さんや三國さんと共演できるのが夢のよう」と語る江角さんは、「秋田の女として、嫁いでいく気持ちを大切に演じたい」とコメント。

そんな江角さんを「ただただ素晴らしい」と絶賛するのは西田さん。「江角さんと並ぶと、見る側は距離感がわからなくなるらしい。俺の方が5メートルくらい前に出てるんじゃないかっていう……」

秋田名物"なまはげ"のいでたちで登場!?

「釣りバカ日誌15」

鈴木建設も遂に人事制度改革に乗り出すことに！　経営コンサルタント会社から送り込まれた早川薫（江角マキコ）らは早速、古くからの企業にありがちな悪しき風習を指摘するが、鈴木一之助社長＝スーさん（三國連太郎）はこうした急激な改革に不安を覚えていた。そんな時、浜崎伝助＝ハマちゃん（西田敏行）は新任の係長をまんまと言いくるめ、休暇を取り秋田への釣り旅行に出掛けていた。男鹿半島に到着したハマちゃんは早速釣り三昧。そこで出会った水産試験場勤務の福本哲夫（寛利夫）と意気投合する。

●監督／朝原雄三　プロデューサー／瀬島光雄、深澤宏　原作／作：やまざき十三　画：北見けんいち　脚本／山田洋次、朝原雄三　撮影／近森眞史　美術／須江大輔　音楽／信田かずお　照明／土山正人　録音／鈴木肇　編集／石島一秀　助監督／石川勝己　製作主任／村山大輔　製作担当／小松次郎、岩田均　スチール／中原一彦　ロケ協力／「釣りバカ日誌15」秋田ロケ支援委員会
●出演／西田敏行、三國連太郎、浅田美代子、江角マキコ、寛利夫、浅利香津代、吉行和子
●製作・配給／松竹
●8月21日より丸の内プラゼールほか全国松竹系にて

薫の実家のシーンは、風情のある民家を借りて行われた

秋田県角館周辺には川釣りのスポットもたくさん。有名な桜並木をバックに、桧木内川で鮎釣りに挑戦！　さて、今回の釣果は？

と周囲の大爆笑を誘った上で、「（江角さんには）『凛とした』という言葉がぴったりだね。原節子さんの再来かと思えるほど」と。するとすかさず三國さんが、「原さんよりずっと綺麗ですよ」と原節子との共演経験を踏まえた発言で〝追い討ち〟を。

こうしたコメントからもわかるように、今回は小津安二郎監督の名作「麦秋」を思わせる設定を、朝原流に換骨奪胎した正統派大船調喜劇に仕上がるのではという周囲の期待は大きい。無論、江角さんがどれほど原節子を髣髴とさせるのか、そんな楽しみもある。

さて、「釣りバカ」に欠かせないのはなんと言っても〝釣り〟のシーン。昨年の「～お遍路大パニック！」では残念ながらハマちゃんスーさん揃っての釣りシーンはなかったが、今回は果たして……。狙うは男鹿半島の真鯛か、それとも……。どんな大物が釣れるのか、こちらも大いに期待したい。

8月21日の公開に向けてただ今編集作業の真っ最中で、完成は8月初旬になる模様。今年も全国1000円興行を行うので、みなさまお忘れなく。

SPECIAL INTERVIEW

木村威夫

映画美術監督・木村威夫の新たな挑戦

取材・文■金澤誠

木村威夫(きむら・たけお)●1918年東京都出身。1945年の大映映画「海の呼ぶ声」で美術監督デビュー。54年に日活に移籍し、72年からフリーとなる。鈴木清順、熊井啓らの作品をはじめ、手掛けた作品は200本以上。近作には、「ピストルオペラ」「海は見ていた」「蕪発旅日記」など。

監督だけはするまいと思っていたけれど

鈴木清順監督や熊井啓監督作品をはじめ多くの日本映画を手掛けてきて、今年86歳になる映画美術界の巨匠・木村威夫。その彼が初の映画監督作となる中篇「夢幻彷徨」を完成させた。これまでは「監督だけはするまい」と思っていたというが、この映画に関しては「自分なりの手ごたえを感じている」とか。まずは企画の発端から、新人映画監督・木村威夫誕生のいきさつを伺った。

「昨年、川崎市市民ミュージアムで僕の絵画やデザイン、美術作品を300点ほど展示した展覧会をやったんです。この展示物を展覧会が終わって次のイベント・セッティングが始まるまでの3日間に、記録用に撮影しようという話が出たんですよ。そうしたらワイズ出版の岡田博さんが「そこに男と女を入れて、ドラマ仕立てに出来ないか」と言い出したんです。僕が「誰が撮るの?」と聞いたら、「あなたですよ」と言われたんです(笑)」

この展開に驚きはしたが、断りもしなかった。逆に木村威夫は、この機会を使って実験をしてみようと思ったらしい。

「自分の絵や展示物を主体にすれば、面白いものが作れるかもしれないと思いました。絵に人物が被るとどういうことになるのか、実験してみたくなったんです。劇映画を作るわけじゃないからストーリーは単純明快。撮る場所は川崎市市民ミュージアム内でほぼ全編を撮って、後は多摩川で半日ほどロケをしました。撮影日数は3日間です。とにかく朝から夜の9時まで怒鳴りながらスタッフと俳優を動かして、どんどん撮っていきました」

これは木村威夫の映画美術を主役にした、映像的なイメージの連鎖で構成されている。

「俳句で言えば、連句。それもイマジネーションで繋いだ連句ですね。僕は長年、映画の仕事をしてきたから映画の文法や表現形式は大体わかる。でも今回は、自分が覚えた技法をすべて棄てて現場に臨みました。段取りやストーリー展開ではなくシンボリックな状況を羅列していって、それがどうイマジネーションとして繋がるのか。これまでにない、まったく新しい方法論で撮ってみたんです」

そのイメージを繋ぐ、一応のストーリーはある。戦争の空襲の中で出会った男女。彼らは戦後、男は魂を求めてさすらい、女は売春をして生計を立てる。やがて二人は再び出会い、互いの愛を確認するというもの。

「この時代を背景にしたのは、最初にこのミュージアムで川崎製鉄所の黒々としたオブジェを見て、それが戦時中に鉄を作っていた日本の象徴のように思えたんですよ。テーマはそこからすぐに浮かんで、イメージができていったんです。それを山田勇男君が脚本にしてくれたんです。最初に男も女も目隠しをしている。これは、どちらも精神的に盲目だということです。女は心の目が見えないままに売春をして、やがて目

撮影中の木村威夫監督(右)

●出演／[illegible]、藤野羽衣子、秋桜子、佐野史郎、[illegible]、石川真希
●製作・配給／ワイズ出版
●ポレポレ東中野にて上映中／同時上映「街」
日本映画界における美術監督の巨匠・木村威夫が初めてメガホンを取り、自らの戦争体験に基づき、戦火の中で出会った男女の宿命的な恋の旅路を描く。

覚める。その時彼女は着ていたアメリカ国旗を脱ぎ捨てる。男は、彼女ではなくもう一人の女性を追い求めているけれども、やがて真実の愛に目覚める。一応の流れはあるんです。ただシーンごとにシンボリックなイメージが前面に出ていますから、整合性から考えるとおかしいんですよ。アメリカ国旗をまといながら日本刀を持って踊る主人公の女性を演じた藤野羽衣子君。彼女に「どういう踊りが出来るの？」と聞くと、「機関銃を持った踊りが得意」だと言う。でも機関銃を使うとお金がかかるから(笑)、日本刀を持って踊ってもらって、音だけ機関銃をかぶせた。そうすることでアメリカと日本という作品のテーマも含めて、複合的な表現形式が出来た。もうひとりの女性を演じる秋桜子君は、着物を着たいと言ってね。桜の柄の衣裳を持ってきた。これでまた、ひとつイメージが浮かんだんです。桜と言えば、今までの概念では女性なら古風な貞淑、男は潔く命を散らす象徴でしょう。でもここでは、桜というものにがんじがらめになっている日本国を象徴させているんです。俳優たちのアイデアや個性がイメージを広げる手助けになりました」

映像によるイメージをより際立たせるために、最初は俳優にセリフを言わせていたが、最終的な完成版ではセリフはサイレントで音楽を全編に流すことにした。

「俳優さんたちには悪い事をしました(笑)。撮っていく内に、これは音楽だけで行こうと思ったんです。挿入する音楽に関しては色々と具体的なイメージがあったんですが、原曲を使うと音楽著作権が高い。だから「星の流れに」は佐野史郎君の奥さん、石川真希さんに歌ってもらったし、僕は最後にベートーヴェンの「第九」の合唱を使いたかったけれど使用料が高いからドヴォルザークの「新世界」になってしまった。何せ予算がない仕事ですから。それでも仕上げには随分、お金を使わせてもらいましたよ」

表現は無限にあるという発見

デジタル合成などの仕上げには、約1年を費やした。

「スタッフは皆、他に仕事を持っていますから。1週間に一度集まって、僕が意見を言うんです。合成シーンはかなりの数に上りますよ。でも撮影監督と編集をやった白尾一博君が、見事に僕のイメージを掴んでくれました。撮っている時にはブルーバックやグリーンバックの紙でも、一番安いものを買ってきてね。それを繋いで使ったんです。予算のないところは知恵でカバーしました。結果、撮った総分数は45分ですが、35分にまとまりました」

映画監督として初めて演出をした感想は？

「この作品に関して言えば、俳優さんの細かい芝居があるわけではない。だから演出と言っても、劇映画とは違うと思いますね。ただこの中編自体、ある意味すべてを映画美術と観ることが可能ですよ。出てくる俳優さんすらも、オブジェのひとつとして観る事ができる。そういう意味でも、既成の表現にとらわれない実験が出来たのは嬉しかった。やってみて感じたのは、表現に限界はない。表現は無限にあるということがわかったのが、もの凄く嬉しいですね。作品そのものは、型破りで完成品じゃないようなものかもしれないけれど、自分にとっては新しい仕事の

SPECIAL INTERVIEW

木村威夫

木村威夫美術監督作品大回顧展

初監督作「夢幻彷徨」の公開に合わせて美術監督・木村威夫の軌跡をふりかえる大回顧展、文芸作からエンタテインメントまで29作品を集中上映する。
〈上映作品〉「雁」「或る女」「春琴物語」「黒い潮」「月は上りぬ」「警察日記」「女中ッ子」「自分の穴の中で」「續　警察日記」「ジャズ・オン・パレード1956年　裏町のお転婆娘」「乳母車」「ジャズ娘誕生」「霧の中の男」「陽のあたる坂道」「若い川の流れ」「硝子島」「霧笛が俺を呼んでいる」「紅の拳銃」「硝子のジョニー 野獣のように見えて」「肉体の門」「悪太郎伝　悪い星の下でも」「怪盗X　首のない男」「嵐来たり去る」「刺青一代」「みな殺しの拳銃」「昭和のいのち」「紅の流れ星」「昇り竜　鉄火肌」「蒸発旅日記」
開催期間＝7月3日～23日
会場＝ポレポレ東中野（☎03－3371－0088）
※各作品の上映日時は直接劇場にお問い合わせください。
※7月14日、23日、木村威夫来館、ゲストトークショーあり

「父と暮せば」
2004年・カラー・ビスタサイズ・1時間39分
●監督／黒木和雄　原作／井上ひさし　脚本／黒木和雄、池田眞也　撮影／鈴木達夫　美術／木村威夫　音楽／松村禎三　●出演／宮沢りえ、原田芳雄、浅野忠信　●配給／パル企画
●7月31日より岩波ホールほかにて公開
井上ひさしの同名戯曲を「TOMORROW／明日」「美しい夏キリシマ」の黒木和雄監督が映画化。原爆投下から3年たった広島が舞台。自分ひとりだけが生き残ったことに負い目を抱きながら生きる美津江の前に、死んだ父が幽霊として現れ、彼女の心を開かせようとするのだが……。

方法論を見つけたような気がします」

映画のタイトル「夢幻彷徨」には、木村威夫の美術監督としての真情が込められている。

「映画美術というのはいろんな方法論があるけれども、僕はいつも彷徨いながら手探りでやってきたんです。前にあった物を、真似事をして作るのではなくて、映画美術は見たことも聞いたこともないものを作る世界ですから。常に「どうするの？」という問いを突きつけられるんです。例えば鈴木清順監督の「ツィゴイネルワイゼン」で原田芳雄が演じた中砂が"地獄を見た"と脚本に書いてある。では、それはどんな地獄か。赤鬼が褌をはいて、煮えたぎった大釜の前にいるような地獄じゃないだろうと。"鋼鉄製の合板を4段階に置いて、そこにローソクや裸の女がいる"と。そこから新しい地獄のイメージが広がっていくわけです。映画美術は人によっても時代によっても、どんどん変わっていくものだと思うんです。その変化に挑戦するのが仕事。だから常に彷徨であり、迷いであり、夢うつつなんです」

「父と暮せば」の美術は人工的でリアルなものを

この「夢幻彷徨」の完成を記念して、東京・ポレポレ東中野では「木村威夫美術監督作品大回顧展」と題されたイベントが開催されている。このイベントでは、今回の映画と6分の短編監督作「街」、さらには木村威夫がこれまで美術監督を手掛けた29作品が上映される。

「この上映では僕がフリーになる前の、大映・日活での修業時代の作品を上映します。中には宍戸錠主演の「怪盗X首のない男」のように、僕も作った時に1回しか観ていない作品もある。中でもオススメは、54年の「或る女」ですね。豊田四郎監督の映画ですが、主演の京マチ子さんが実にいい。今回は特別にフィルムセンターからプリントを貸してもらう事になっていますが、滅多に観られない作品なんです」

最後に本業である、木村威夫の美術監督としての現在の仕事についてお聞きしよう。公開が目前に迫っているものには、黒木和雄監督の「父と暮せば」がある。

「これは終戦直後、焼け爛れた広島が舞台ですね。リアリティで言ったら、原爆投下後の広島は廃墟と化して何も残っていない。そこで焼け残った家を手入れして、主人公の女性が住んでいるというのがミソです。僕が「これは全部、原爆ドームの中の話ですよね」というアイデアを出したら、黒木監督も「それで行きましょう」と言ってくれました」

元々が舞台劇だっただけにすべてをリアルに作るのではなく、焼け跡になった広島を主人公の家によって象徴させている。映画の人工的なリアルが、見事に活きたセットなのだ。

「今では東洋でもほとんど残っていない床面が土のステージ。これが日活撮影所の第12ステージなんです。この中にまず道を作って、その両脇にドロを積み上げた。正面に家をこしらえて、周りをトラック3、4台分の廃材で覆ったんです。コンクリートやレンガ、いろんなものを運び込んでね。原爆の悲惨さを表す"原爆ガラス"。これも広島の博物館まで現物を観に行って、似た物を作りました。家の中にある新聞は、当時の新聞をコピーして紅茶などで汚したもの。そういう小物を教え子である日活芸術学院の学生が作ってくれたから、リアルでインパクトのあるセットが出来ましたね」

他にも昨年は水野晴郎監督の「シベリア超特急5」などを手掛けた。そして現在は、長年の盟友・鈴木清順監督と仕事をしている。このように本業も大忙しだが、今後映画監督の仕事にも意欲を燃やすのだろうか。

「「夢幻彷徨」は、ほとんどが20代のスタッフとの仕事でした。私は還暦の時に0歳宣言をしましたから、気持ちは今、26歳なんです。でも、やはり私は映画美術家なんです」

安西水丸の
4コマ映画館
㊻上手いだろうといった気味悪さ
「恋愛適齢期」

ニューヨークへ行き一週間で帰国、翌週イギリスへ行った。ニューヨークは約十三時間、イギリスは約十一時間で着く。飛行機のなかではほとんど眠れない（眠っているのかもしれないが）ので、機内で映画ばかり見ていた。ラインナップがいっぱいあり、結構楽しめた。

佐々部清監督の「半落ち」も見たが寺尾聰の、うーん、何というのかいかにも芝居じみた表情しか残っていない。小説は読んでいないが、この映画はあんがい「半落ち」という聞きなれない警察用語が一番インパクトがあるようだ。

ナンシー・メイヤーズ監督の「恋愛適齢期」も機内で見た一本だ。ジャック・ニコルソン、ダイアン・キートンというオスカー受賞者にまじって、キアヌ・リーヴスが青年ドクターに扮していつになく清々しい空気を漂わせていた。

この映画の原題は「SOMETHIN-GS GOTTA GIVE」で、直訳すると「何かを与えよう」になる。映画はこの直訳のタイトルでもよかったのではないかとおもうが、やっぱり「恋愛適齢期」の方がいいと考えたのだろう。これは今さらぼくが言っても仕方がない。

ダイアン・キートン扮するのは、バツ一の人気劇作家。ジャック・ニコルソン扮するのはそれなりにプレイボーイの実業家だ。見ていると、もう何だか、その上手さのイヤ味がたまらない。絵でもそうだけど、どうだ上手いだろうといったものほど厭なものはない。ぼくがグレゴリー・ペックを好きだったのは、彼にはそれがなかったからだ。アンソニー・クインも上手かったけど、上手いだろうはなかった。そういう点ではこの二人に加わったキアヌ・リーヴスは涼しい風だった。

映画の内容ははじまってすぐに終りが見え見えだったので、見終わるまで何度も気味悪いなあとおもった。まあこういった映画の面白がり方があってもいいだろう。

機内は「ラスト　サムライ」、「ミスティック・リバー」も上映していた。

茶の味 公開目前

「鮫肌男と桃尻女」「PARTY7」と、まるで異なるキャラクターを演じた浅野忠信。
石井克人監督とは、タランティーノにおけるジョン・トラヴォルタを想起させる我修院達也。
そんな、石井組というべき二人の俳優と当の監督が、まもなく公開される
新作「茶の味」そしてその現場について語ってくれた。

——特別企画——

我ら石井組!

鼎談 石井克人 我修院達也 浅野忠信

司会・文=石村加奈

撮影=吉岡誠

撮影中に孫が生まれちゃって、本当のオジイになっちゃった（我修院達也）

現実にいそうな「春野家」の人々

前日にカンヌ国際映画祭から帰国したばかりの石井克人監督と浅野忠信さん。ややくたびれた様子でソファに座っている。幸子役の坂野真弥ちゃんが浅野さんの側に近づき「どうして今日は帽子かぶってるの?」と威勢良く尋ねると、ニヤニヤして浅野さんが一言、「カッコつけてんだよ」。一同爆笑。隣室では、依然取材中の我修院達也さんが「山っ、山っ！」と叫んでいる。我修院さんの取材が終わり、いよいよ「茶の味」鼎談スタート。紙コップの中は、お茶ならぬ水を各々片手に。ここはやっぱりお茶ではないか!?　しかし三人はそんなことをちっとも気にする様子もなく、和やかに会話は始まった……。

新作の主人公は春風吹き抜ける山間の町に暮らす「春野家」一家。それぞれ春霞のような悩みを抱える彼らの、のほほんとピースな「和」の時間を優しく綴った「茶の味」。さて、カンヌでの反響はいかがでしたか？

石井克人監督（以下石井）「春野家について"最高の家族"だとたくさんの人に言われたのが面白かったですね。日本ではシュールな家族という意見の方が多かったから」

浅野忠信（以下浅野）「確かに面白いけど、よくよく考えると、春野家の人々って意外と現実に近いのかもって思いましたね。現実的な家族というか。おじいちゃん、おばあちゃんって結構勝手じゃないですか（笑）。うちのおじいちゃんなんて本当に勝手だったから。僕が家族を連れて遊びに行った時、『これ、うまいから食え』ってたくわんを食わせたりして。『ちょっとあげ過ぎなんだけどなぁ』って思いながら、黙って見てましたけど……」

監督、我修院さんがクスクス笑

我修院達也・俳優論

文＝塩田時敏

石井克人監督によって"再発見"されたと言っていい我修院達也。まゆ毛のつながった奇怪な殺し屋「鮫肌男と桃尻女」の山田役の怪演や、続く「PARTY7」の個性的な存在など、我修院は常に、ある種、石井監督の分身を演じていると言っていいだろう。その、ひきつっちゃう程エキセントリックな演技は、だからこそ、森直人が言うところの"自らの幼児性をどう相対化しているか"（本誌2000年12月下旬号）という石井作品の重要な部分を担い、正しく機能しているのだ。「茶の味」のオジイ役も、まったく同様。あまりの奇行ゆえか、通常のレベルを確認するかのように、常に音叉を耳に突っ込む超あやしい老人。ある意味、このオジイの存在は石井監督の理想の老後の姿なのではないか（笑）。その分、現在もしくは過去的分身は佐藤貴広へと分散されたわけだ。

いつも、何か離れの窓から覗いているような……。でもオジイの姿はない。でもやっぱり、あのとぼけたオジイは、実は家族一人一人を昔から見つめつづけ、素敵な絵にして残していたのである。このナイスなエピソード、シチュエーションは、そのまま「茶の味」のドラマ構造に直結し、皆、誰かに見守られているのだという、石井作品の本質を具現化しているわけだ。やはりオジイの存在こそは陰の主役であり、我修院達也こそが石井克人監督を物語る、何者にも替え難い裏主演なのである。

がしゅういん・たつや／1950年生まれ。1956年「異母兄弟」で映画デビュー。その後、作曲、編曲、歌手活動を行うも1977年にかくし芸としてやった郷ひろみの歌マネが評判となる。1992年、我修院達也に改名。1999年「鮫肌男と桃尻女」の怪演で再び注目を集めた。

う。つられて浅野さんも笑う。

浅野「（笑）でも、そのおじいちゃんも日記を書いてて、それがすっごく面白くて。それこそ（我修院さんが演じた）オジイのパラパラマンガに近かった！」

我修院達也（以下我修院）「へぇ～いいおじいちゃんだね。オレにとって春野家は理想の家族です。特にオジイは普段の自分に似てますから。奇々怪々な行動が、フフフフ。自分の世界に籠っちゃうんですよね。でもこれからはオジイを見習って、息子夫婦を見守っていかなきゃなって思いました。オレ、この撮影中に孫が生まれちゃったんですよ！　本当のオジイになっちゃいました」

石井、浅野「お～っ、それはおめでとうございます！」

我修院「（眉を動かしながら）だからパラパラマンガに近いものを残してあげなきゃいけないかなって今、考えてるんです。ただの変わり者で終わっちゃいけないなと」

浅野「いやぁ。我修院さんがおじいさんだったら最高ですよ！」

石井「そうですよ。バカなことをいっぱい見せてあげた方がいいと思うな」

我修院「そうですか？　カカカカ」

「もういいです」でなく「もっと見たいです！」

前二作に続く本作の出演となった浅野さん、我修院さん。二人とも石井組の常連である。

石井「オファーをしたのは、正式に映画を撮ることが決まってからです。でも、ま、出るだろうなとは思ってました（笑）。特にオジイは、台本を書き終えた時点で"これは我修院さんにしかできないだろう"と」

我修院「最初は驚きました。『三浦（友和）さんのオトーサンッ!?』って。でも特殊メイクの話なんかを聞いて、やっぱり普通のおじいちゃんじゃないんだなと（笑）」

ま、（二人とも）出るだろうなとは思っていました（石井克人監督）

いしい・かつひと／1966年生まれ。CMディレクターを経て、99年「鮫肌男と桃尻女」で長編監督デビュー。翌年の「PARTY 7」から、本作が4年ぶりの新作となる。

石井克人・監督論

文＝塩田時敏

「キューティーハニー」の俳優・石井克人は悪くなかった、監督にしては（笑）。代わりに「茶の味」では俳優・庵野秀明のテンション高い芝居が楽しめる。こういう交流はもっとあっていい。映画監督だけやってたり、映画評論だけやってたりする時代じゃもうあるまい。さて「茶の味」は、石井監督自身が出演しているわけではないものの、前２作に比べても最も石井本人の色、特質が煎じ出されているだろう。私小説ではないが、衣裳のひとつ、ギャグのひとつにまで石井監督のＤＮＡが感じられる。なにしろ主役のガキ（佐藤貴広）が弟のようにクリソツじゃねえか（笑）。

石井映画の笑いは、単にギャグそのものだけではない。例えば、お好み焼き屋で高校生がバカやってる。だから面白いのじゃなく、それをアキレ顔で見ている店のババアの切り返しショット。ここに生じる間こそが、その笑いの本質だ。懸命に逆上がりをやってる少女を、巨大な自分の顔が見つめている。部屋で囲碁打つ二人を、部活の先生が覗いている。誰かが見ている、誰かに見られている。こうした視線のズレや交錯が石井作品の笑いだ。思えば「PARTY7」はドラマ自体が覗かれる部屋の作品だった。

見られている、覗かれているは、やがて皆、誰かが見ていてくれる、見守ってくれている、というぬくもりへとつながる。ここに石井映画の独特なユーモアと人を見る目のやさしさがあり、観客をも包み込むわけだ。この優しさが"石井克人の味"。

本当に石井組って居心地いいですよ。現場自体が大家族みたいで（浅野忠信）

石井「今回は、僕がこういう映画を観たいというので、一年くらいネタを集めたものの中から台本を書いていったんです。歌はかなり早い段階で入れようと思っていたんですけど、やっぱり気持ち良く歌い切れるのは我修院さんじゃないと！ って（笑）。フリもね、きっと普通の人だと一生懸命やればやるほど、一生懸命さが出ちゃうから。それじゃ面白くない。そこで違和感がない人と言えば、もう我修院さんしかいなかった」

我修院「ありがとうございます」

浅野「（撮影現場で歌って踊る我修院を見て）大体は見てる方が『あ、やっぱ、もういいです』となってしまうところを、我修院さんの場合は『もっと見たいです！』っていうところまでやって下さるから、非常に羨ましかったですよ。そこは見習わなきゃなって」

石井「我修院さんも浅野クンも、単純に見ていて面白い。キャメラ前に立ってもらった時の瞬間がキャッチーというか。目を離せなくなる感じがある。そこが二人のいちばんすごいところじゃないかな。今回、オジイに関しては、僕が将来こうなりたいという明確なイメージがあったので、結構いろいろとやっていただいて。浅野クンの役（アヤノ）については、どうなるのか、僕が見てみたかったので、なるべく演出はしないで、台本を読んだままやってみてほしいと。結果、僕が最初に想像していたものより面白くなりましたね。やっぱり生身の人たちと作り上げた感じってすげぇ！ って。浅野クンと中嶋（朋子）さんのシーンなんて“こんないいシーンになるんだ！”って現場で感心してました」

　自分を振り、結婚する元恋人に「おめでとう」を伝えるためだけに何度も橋の上を行ったり来たりするアヤノ、少しボケ気味の奇人に見えつつも、実は家族を優しく見守っていたオジイ、監督の分身とも言われる、恋多き内気な高校

浅野忠信・俳優論

文＝塩田時敏

「鮫肌男と桃尻女」「PARTY7」と石井克人映画において主役を演じてきた浅野忠信。さすがに、この主役に自身を投影するには（浅野さんじゃ）カッコ良過ぎ、という監督の理性が働いていたからか、その部分は我修院達也に振り分け、作品と冷静に、適切な距離を保っていた。しかし「茶の味」はぐっと身近な世界となったために、浅野忠信は、田舎の実家に帰省中の叔父さんという絶妙な、作品全体の狂言廻し的立場を与えられている。普段、誰のどんな作品に出演しても、その独特の脱力演技の魅力で、あまり台詞の多くない浅野忠信だが、狂言廻しとあってか、ここではよく喋る喋る（笑）。こんな饒舌な浅野忠信は初めてだ。

　このシャベリが、持ち味の脱力テイストと溶け合って、まったくもって茶の味な春うらら感をかもし出しているのが面白い。それが最も良く出ている一つが、中嶋朋子との再会シーン。言葉が空回りする、気まずい、ぎこちない空気感は絶品である。余談になるが、この八百屋の店先のサクランボのポスターが“Chierry”（正しくはｉが不要）となっているのは、童貞世界にこだわる監督の仕込みか!? いまだ失恋を引きずるこの叔父さんとも、微妙にマッチ!?

　それにしても浅野忠信だ。縁側に、あるいは川岸に、ボーッと座っているだけで作品の世界観を表現してしまうとは、語らずとも狂言廻したる、なんと見事な俳優であろう。

あさの・ただのぶ／1973年生まれ。「バタアシ金魚」のスクリーン・デビュー以来、既に40作品以上の映画に出演。今年は「地球で最後のふたり」「父と暮らせば」「珈琲時光」「SURVIVE STYLE5⁺」「ヴィタール」などの公開が予定されている。
www.anore.co.jp / asano

生・ハジメ。シャイでかわいらしい、男の子特有の匂いが濃厚に漂うのだが……。

石井「特にかわいく見せたいって感じはありません！　ハジメのエピソードについて完全に『童貞物語』的なネタを集めてました。童貞って、僕的にはいちばん共感する部分なんですよ」

浅野「いいですよねっ」

我修院「最高ですっ！」

石井「〝分かる分かる〜〟って感じがするというか。いちばん吸収する時期ですからね」

浅野「知識だけが膨大になってゆく時で」

我修院「それも偶然そうなっちゃったって感じで。ムフフフフ」

楽しい話を成立させる楽しい現場作り

ここで監督のコップが空いているのに気づいた編集者が水を注ごうとするが、手をすべらせペットボトルを〝ガタン〟と倒してしまった……。

我修院「何か面白くないことがあったら、ものにあたらないで口で言ってよ！」

再び一同爆笑。新しいボトルを発見して鼎談再開。監督だけ笑い続けている。よく笑う監督だとは聞いていたが、現場でもこういう調子だったのだろうか？

石井「話の大きな流れが作れたら、

後はお客さんになったような感じで現場で役者さんの芝居を見ているのが僕は好きなんです。できれば何も言いたくないくらい（笑）。特に『茶の味』は基本的には楽しい話だから、スタッフも含めて、とにかく楽しい現場にしたいと思っていました。現場が楽しいかどうかってスクリーンに映るから。現場の雰囲気にいちばん気を使ってましたね、演出より（笑）」

浅野「本当に石井組って居心地いいですよ。今回は現場自体が大家族みたいなノリがあって。たくさんの世代の方がいて、みんなが和んでて。なんとも言えない感じがあって」

我修院「大好きですね。他の仕事では味わえないファミリー的な雰囲気が。タイトルもぴったりですよね。タリピッ！　ばっちりです」

石井「タイトルはコンテを描き終わった辺りで決めました。いろいろ考えた中でこれがいちばんしっくりくるかなって。最初はみんな悩んでいるから『○○の悩み』とか考えてたんだけど、当たり前すぎて面白くないと思って。絵コンテを見直してると、いろんなシーンでみんながお茶を飲んでいたので。別に茶の味なんて覚えちゃいないけど、結構飲んでる。それで全然意味不明なこと、味なんか全然覚えてないって感じで『茶の味』にしたんですけど」

浅野「……謎が深まるなぁ。監督と話してると"もしかしたらもっと面白いことを考えてるのかも"って感じるんですよね。僕の見えないところで、もっと面白いことをしてそうな気がする。そこはやっぱり見たいから、そうすると自分も一歩くらいは足を踏み入れないと見れないんじゃないかと思っちゃうんです。『僕、ここまでやるから見せてくださいよ！』という感じで石井監督の作品には参加してます。……なんかね～まだ全部見せてもらってない気がするんですよね（笑）」

破顔一笑。なんだか笑い過ぎだとも思うのだが、そうさせてしまうのが「茶の味」の"味"なのだろう。鼎談終了時刻が近づく頃には、三人のコップはすっかり空っぽになっていた。

「茶の味」
●2004年・日本・カラー・ヨーロピアン ヴィスタ・ドルビーSRD・2時間23分
●監督・原作・脚本・編集／石井克人　エグゼクティブ・プロデューサー／飯泉宏之　プロデューサー／滝田和人、和田倉和利　ライン・プロデューサー／鶴賀谷公彦　撮影／松島孝助　照明／木村太朗　美術／都築雄二　録音／森浩一　スタイリスト／宇都宮いく子　音楽／リトルテンポ　音楽プロデューサー／緑川徹　音楽監督／ANIKI　CGディレクター／林田宏之　振付／香瑠鼓
●出演／坂野真弥、佐藤貴広、浅野忠信、手塚理美、我修院達也、土屋アンナ、中嶋朋子、三浦友和、轟木一騎、森山開次
●配給／クロックワークス＝レントラックジャパン
●7月17日より、シネマライズにて公開

『山よ』音楽DVD発売！

本作「茶の味」劇中曲『山よ』が音楽DVDとして発売中！　歌のみならず、メイキングや振り付け講座などの特典映像付きだ。
定価：980円（税込）　発売：株式会社レントラックジャパン／BIG TIME ENTERTAINMENT

—特別企画—

韓国で女性映画人はどうなんだ？

東京国際女性映画祭、あいち国際女性映画祭、トリノ国際女性映画祭、台湾国際女性映画祭、ボルドー国際女性映画祭、フライングブルーム国際女性映画祭、クレテイユ国際女性映画祭、ドイツ・フェミナーレ女性映画祭、バルセロナ国際女性映画祭、アンカラ女性映画祭……。世界各国で女性映画祭が開催されている。自国の映画が活況を呈す韓国でも、今年で第6回を迎えるソウル女性映画祭が開かれた。多くの作品や作家を発見・紹介し、さまざまな問題を提起してきた女性映画祭。女性映画祭は、女性映画人の在り方とともにゆるやかに変化している。韓国の女性映画人はどうですか？　どんな変化を遂げていますか？

写真：チョン・ジェウン監督「子猫をお願い」より

韓国で
女性映画人は
どうなんだ？

1974年生まれ。成均館大学教育学部卒業後、舞台や短編映画で活躍。00年、イ・チャンドン監督「ペパーミント・キャンディー」で長編映画デビュー。続いて同監督「オアシス」（02）に主演。重度脳性麻痺の女性を演じ、02年ヴェネチア国際映画祭新人俳優賞受賞ほか国内外で高い評価を得た。本作は３作目。03年ストックホルム国際映画祭主演女優賞受賞。最新作は「孝子洞の理髪師」（03）。

INTERVIEW

ムン・ソリ
大いなる願いを込めて

取材・文＝佐藤結　撮影＝吉岡誠

韓国映画界活況の原因の一つとして、実力のある俳優たちの存在があげられることが多いが、そのほとんどは男優である。まだまだ、女優が力を発揮できる作品が少ない中で、出演作がたった4本にもかかわらず、「オアシス」と「浮気な家族」という2作品でその演技力を広く知らしめたのがムン・ソリだ。4月に行われたソウル女性映画祭で審査員を務めるなど、他の女優とは少し違ったスタンスで仕事を続ける彼女に、まずは、最近の女性映画人の活躍について聞いてみた。

「たしかに、女性監督やプロデューサーが増えたと思います。ただ、多様なスタイルの女性監督が出てきているとはいえません。もちろん、私自身、一度は女性監督と仕事をしてみたいという気持があります。男性監督が演出する場合、男性のキャラクターには監督の分身のような感覚があり、男性俳優たちは監督の内面を観察して自分の演技に利用することができますが、男性監督の作品の中の女性キャラクターは、ファンタジーであったり、抑圧の対象だったりすることがあり、なかなか同じようにはできません。そういった意味で、女性監督とは今までと違ったやり

「浮気な家族」●監督／イム・サンス　出演／ムン・ソリ、ファン・ジョンミン、ユン・ヨジョン　●6月16日より［シアター］イメージフォーラムにて公開

方でコミュニケーションがとれると思うので、ぜひ、やってみたいですね」

　女性映画祭では、将来仕事を共にできそうな、新しい才能と出会えたのだろうか。

「女性映画人がどんな映画を作っているのかという興味と、彼女たちを激励したいという気持で参加しました。今まで女性監督が作る映画というと、繊細ではあっても、ちょっと暗く、自分の内面を描くような作品が多かったという気がしていますが、もう少しダイナミックな映画が出てきたらいいなという願いもありました。参加してとても楽しかったです」

「オアシス」の記者会見の時にも感じたことだが、彼女はどんな質問に対しても、地に足のついた答えを自分の言葉ではっきりと返してくれる。

「私は25歳まで、教育学を学び演劇好きで、たまに舞台に上がるような人間で、映画俳優ではありませんでした。そして、その25年という時間は私が演技を続けていく上でとても大事なものだったと思います。今でも撮影がない時期は、運動や勉強をしたり、旅行をしたり、家族とごはんを食べたり、なるべく普通で平凡な人生を送ろうと努力しています。こういう部分も、よい俳優になるためにはとても大事だと思うし、俳優を長く続け、いろんな役を演じられるようになるためには必要なことだと思います」

　インタビューを始める前に渡した本誌6月下旬号に掲載されていたイザベル・ユペールの写真を見て「この女優さんが大好き。こんな風に年を重ねていきたい」と語った言葉からも、彼女が目指している先にあるものがうかがえる。作品選びも非常に慎重に行ってきた彼女だが、「浮気な家族」の脚本にはすぐに惹かれたという。

「1回読むだけでなく、2回、3回と読んでいくうちに、とても多くの内容が描かれているということがわかりました。韓国社会の家族の問題や、なかなか正直に話し合うことのできない人間関係の問題。家父長制の伝統が残る社会で、男性が生きていくことがいかに難しいか、もちろん、女性が生きていくこともですが……。私の演じるホジョンという人物の夫は韓国社会の抱える難しさを凝縮したような男性です。一方で、私が誘惑する隣の高校生は、韓国人男性として完成していないため、まだ、内面に困難を抱えている人物ではない。だからホジョンも彼に対しては欲望を自由に表現できたんだと思います」

　万国共通の男と女の話として見ることもできる作品だが、彼女の話を聞いていると、韓国という国の現在を色濃く反映していることがよくわかる。イム・サンス監督らしく、タッチはあくまでも軽く乾いているが。

「イム・サンス監督は、こだわりと考えが非常にはっきりしている方で、それが作品の力になっていると思います。俳優の演技についても「よかった!」、「だめだ」とはっきりおっしゃって、具体的な指示をすぐに出してくれました」

「浮気な家族」の後、韓国では、ソン・ガンホとの共演が話題の「孝子洞の理髪師」がすでに公開され、その次の作品の企画も進行中だ。韓国語で「りんご」と「謝罪」という二つの意味を持つ「サグァ」という言葉がタイトルの作品だという。

「20代後半の結婚を控えた女性たちを主人公に、彼女たちの愛や結婚に対する考え方や、結婚をした後に事情が変わり成長していく姿を描く作品です」

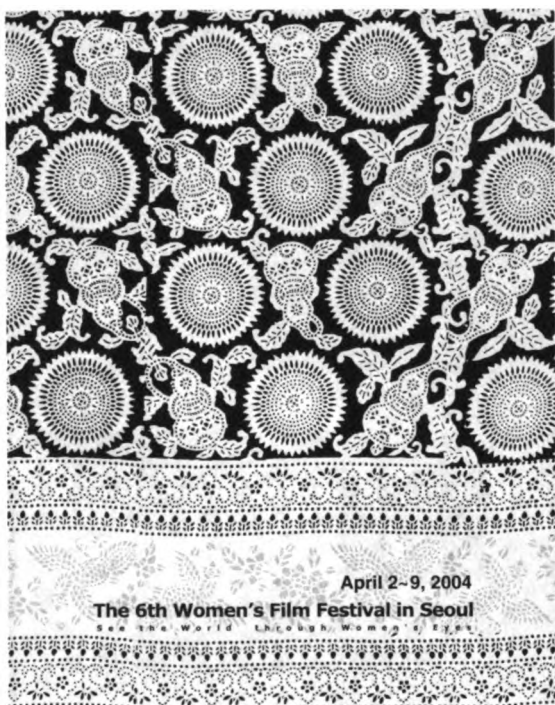
　と、聞くと、初めて彼女が「普段のムン・ソリ」に近い役を演じてくれるのかもしれない。同世代の女優たちとの本格的な共演も初めてのこととなる。

　韓国映画界にあっては、今のところ女性演技者としての可能性を一人で開拓している感も否めないが、彼女の存在と活動が他の女性映画人たちに力を与えてくれるような強さを感じる。本人は「私はムン・ソリなだけ」と笑って否定すると思うが。

Report：The 6th Women's Film Festival in Seoul

第6回ソウル女性映画祭
女性の視線を通して見る世界は温かい

文■東京国際女性映画祭ディレクター　大竹洋子

April 2~9, 2004
The 6th Women's Film Festival in Seoul

韓国で女性映画人はどうなんだ？

4月2日から9日まで、"女性の視線を通して世界を見よう"を合言葉に、今年第6回を迎えたソウル女性映画祭に参加した。

延世大学や梨花女子大学に近い学生街、新村（シンチョン）の2つの劇場、3スクリーンを会場に上映された20カ国73本の長短編は、何本かの例外を除いてすべて女性監督による。

これまで韓国の女性映画人と連携したいと願ってきたが、そのきっかけがつかめずにいた。それが昨年暮、ソウル女性映画祭（WFFIS）の実行委員長、イ・ヘギョンさんが突然来日、映画祭への出席を呼びかけられたことで、一気に交流が可能になったのである。コンペの審査員と国際フォーラムのパネリスト、この二役を私が受け持つことになった。

映画祭は、ここ2年間の各国の長短編やアニメを紹介する「新しい波」、「アジアの映画」、「各国のフェミニスト作品」、これがメインの「アジアの短編フィルムとビデオのコンペティション」、それに国際フォーラム2004「アジアの女性映画祭の交換と眺望」などで構成されている。

これらの中から、印象に残った事柄や人々について書き記したい。まず「新しい波」。シャンタル・アケルマン、カトリーヌ・ブレイヤ、ラクシャン・バニエテマドなどベテランの新作、韓国は「4人の食卓」（イ・スヨン）と「見えない光」（キム・ジナ）、日本は「沙羅双樹」（河瀬直美）、これら17本の中から、ジェーン・カンピオンの「イン・ザ・カット」がオープニング上映された。

ジェーン・カンピオンの人気はこの地でも高い。何人もから意見を訊かれるので、「彼女は男性になりたい人だと思う」と言ったら、シーンとしてしまった。

楽しみだったのが、すでに地位を確立している韓国の4人の短編集である。キム・ソヨン、イ・スヨン、パク・キョンヒ、イム・スルレ。これから韓国映画界を背負ってゆく人々は、女性に対する偏

見や差別もとうに跳ね返し、晴れやかに笑う。

「アジアの映画」は、"日本の古典映画にみる女性像"をテーマに、明治学院大学助教授（映画学）の斉藤綾子さんの主導で、日本の巨匠たちの作品の検証を行う。「瀧の白糸」（溝口健二）が、澤登翠さんの活弁つきで注目を集めていた。

さて、次はコンペティションについて。181本の応募作から15本をノミネート、審査員は韓国3名、トルコ1名、そして私の5人で、「オアシス」の主演女優ムン・ソリもその一人である。大賞に約50万円、優秀賞2本に各30万円、それに観客賞が贈られる。

選考会は各自が気に入った作品3本をあげ、小さな会社で働く新旧2人のOLの物語「うまくいってる?」（"Feel Good Story"リ・キヨンミ監督）が、すんなり大賞に決まった。優秀賞は韓国のアニメと台湾の作品を選んだが、いずれの場合も、作り手のフェミニストとしての姿勢が問われた。それにしてもムン・ソリの発言を聴いていると、この人の資質のすばらしさに驚いてしまう。私など、ムン・ソリさんと同じです、と言っていればよかったくらいである。閉幕式では彼女が観客賞を、最年長の私が大賞を手渡した。

「うまくいってる?」

WFFISの母体は女性文化芸術企画で、イ・ヘギョンさんはこの団体の代表でもある。初めは演劇を媒体に、"女性を文化の主人公に"の運動を展開していった。しかし、より同時代的、より普遍的な映画へと路線を変更、一九九七年に女性映画祭を誕生させた。

発足時はただ"女性映画祭"だったが、ソウル市の資金援助を受けて以来、ソウル女性映画祭と名乗ることになった。市は男女平等省と共に、約1億円の予算をWFFISに提供する。ソウル市はサッカーや他のスポーツのチームをもっていない。映画祭もプサン、プチョン、チョンジュなどに先を越されているから、これからもWFFISに力を注いでゆくだろうと、友人が話してくれた。

回を重ねるごとにWFFISは観客を集め、女性監督の数も質も向上した。今回の動員数はおよそ3万3千人、若い女性が圧倒的に多く、100人のボランティアの大半が女子学生である。毎年テーマを決めて、女性の支援活動も行う。今年は身体障害者の女性を資金面でバックアップ、閉幕式の舞台で共に踊る、身障者と健常者のパフォーマンスに感動した。

「オアシス」の監督で、文化観光大臣のイ・チャンドン氏は「女性の視線を通して見る世界は温かい」と、この映画祭について述べている。東京国際女性映画祭（TIWFF）がめざすのも、また同じ世界である。

これからは韓国の人々に、日本の女性監督作品をもっと見てもらいたいと願う。

日本からアニメが1本コンペに出品されたが、日本の若い女性は作品にも、発言にも、アピールする力が足りないようである。初めて参加したWFFISから得た熱い力を、今秋の第17回TIWFFに活かしてゆこうと思いながら、春爛漫のソウルを後にした。

前列左より、東京国際映画祭ディレクター大竹洋子さん、ソウル女性映画祭副実行委員長ビョン・ジェランさん、釜山映画祭実行委員長キム・ドンホさん、ソウル女性映画祭実行委員長イ・ヘギョンさん、チョンジュ映画祭実行委員長ミン・ビョンロクさん

韓国で
女性映画人は
どうなんだ？

女性の視点の先にあるもの

文＝佐藤結

映画雑誌『シネ21』を読んだり、映画祭に行ったりするたびに、「韓国の女性映画人はがんばっているなあ」という思いを強く感じてきた。「JSA」のシム・ジェミョン、「スキャンダル」「箪笥」のオ・ジョンワンといったプロデューサー、「子猫をお願い」のチョン・ジェウン、「4人の食卓」のイ・スヨンといった監督、プサン、プチョン、チョンジュ各映画祭のプログラマー、評論家、雑誌の編集者から、配給、セールス担当者まで、すぐに多くの人たちの名前が浮かぶ。日本と比べると映画界自体が小さいので目立って見えるということもあるかもしれないが、とてもうらやましい状況に見える。しかし、ソウル女性映画祭の副実行委員長で、評論家、大学教授でもあるビョン・ジェランさんにお話を聞くと、事はそんなに単純ではないようだ。

「映画を企画し観客に届ける制作や宣伝の分野では、女性が非常に重要な仕事をしていると思います。しかし、女性監督たちのほとんどは、依然として低予算の映画を作っています。そして、『子猫…』やパク・チャノク監督の『嫉妬は我が力』のように高い評価を受けた作品でも、（単館上映のない今の配給状況では）あっという間に上映が終わってしまいます」

観客動員1000万人という驚異的な作品が登場する一方で、作品規模が小さかったり、商業性の低かったりする作品の上映が難しくなっているのは、韓国映画界全体の問題でもある。映画人に会うたびに「韓国映画には多様性が必要」という言葉を聞くのも、こうした背景があるからだろう。その意味では、メインストリームの映画では取り上げられにくいテーマを扱うことの多い女性監督たちの作品は貴重だ。

「彼女たちの作品から、私たちの社会の周辺部の人々、阻害された人々、傷を受けた人々の話をいくつも見つけることができますね」

ビョンさんが「新人監督を発掘すると同時に、女性映画人たちの出会いの場としての機能を持つ」と話してくれたソウル女性映画祭のもう一つの意義もそこにある。予想したよりもずっと多くの男性を含む観客やボランティアたちは「普段見ることのできない、いろんな映画を見たい」という純粋な欲求に駆り立てられ、会場に集まっているように見えた。女性の存在や女性の視点をうたうだけでなく、その視点を通して、これまでと違った世界をいかに提示することができるのか、そのことこそが大事なのだということを実感した映画祭だった。

韓国の女性監督と日本公開作

監督	作品
ビョン・ヨンジュ	「ナヌムの家」「ナヌムの家２」「息づかい」「密愛」
イ・ジョンヒャン	「美術館の隣の動物園」「おばあちゃんの家」
イ・スヨン	「４人の食卓」
チョン・ジェウン	「子猫をお願い」
ユン・ジェヨン	「狐怪談」
イ・オニ	「アイ・エヌ・ジー（原題）」

＊文中に出てくるパク・チャノク監督「嫉妬は我が力」は2003年東京国際映画祭「アジアの風」部門で上映

「狐怪談」8月7日より新宿武蔵野館にてレイト

「4人の食卓」シネマスクエアとうきゅうにて上映中

大高宏雄の ファイト シネクラブ
Hiroo Otake Fight CineClub

Round 105 04年上半期映画界がんばったで賞決定

04年上半期、映画界がんばったで賞、今年も決まりました。だいたい、恒例。例によって、独断的ですので。

①ピーター・オトゥール：「トロイ」の王として、見事な風格を見せてくれたことに感謝。とくに、王子ヘクトルの亡骸を引き取りに、ブラピ＝アキレスのところに単身乗り込むシーンの何と感動的だったことか。「トロイ」にスピード感がなく、乗れないとか、往年の「Uボート」の演出力が、監督になくなったとか言っている人たちがいる。どこを観ているのかと言いたい。今日的なスペクタクル優先の時代のなかで、「トロイ」にはぎりぎり、それに抗おうとする意志があった。オトゥールの起用自体が、そのことを物語っている。

②「世界の中心で、愛をさけぶ」の大ヒット：最終興収八十億円(見込み)は、日本映画の歴代第九位に入る。この大ヒットが重要なのは、アニメでもなく、テレビ局製作作品でもなく、映画会社が主導的に製作を行ったこと。原作がほぼ八〇〇〇部段階で、広告代理店の博報堂が映画化権を取得、東宝が製作・配給を決めた。その後、部数がぐんぐん伸びていくことで話題は広がるが、これはまさに企画の先見性の勝利だろう。組織に目利きがいると、ジャンルやメディアの優越性を覆すことができる。映画会社主導の作品が、大ヒットしたことを知らしめた意味は大きい。

「世界の中心で、愛をさけぶ」

③秋葉原オリエンタルコミックシアターのオープン：秋葉原の電気街を抜けて、上野方面に向うと、そこはオタクのメッカだった。フィギュア、同人漫画誌、カルトDVDなどの店舗が割拠している。その地に、資本金二五〇〇万円を自前で捻出して会社を作り、アニメ専門ミニシアターをオープンした千田浩司は、なかなかの戦略家である。千田自身がオタクだから、オタクの気持ちを良くわかっている。まさに、オタクマーケットの創出であり、ここでの成功は、業界のいわゆるプロたちが触ることができない興行の新たな橋頭堡になるだろう。

④映連他主導「映画館に行こう！」の夫婦50割引：どちらか一方が五十歳以上の夫婦なら、映画料金が二人で二〇〇〇円という〝大英断〟。第一段階の割引として、評価したい。ただ、五十歳になったばかりのパートナーがいる三〇代後半のある女性は、「複雑な心境。それ、一種のシニア料金でしょ。五十代って、まだまだ若いのに」と言っていた。つまり、割引はうれしいが、本音としてそんなものはまだ年ではないのだから、使いたくないということ。一種、体裁が悪いということのようで、小金持ちが多い都会なら、こういうカップルが結構いるのではないか。まあ、様子を見ましょう。ただ一部ミニシアターが、除外されているのは問題。

⑤原正人著「映画プロデューサーが語る　ヒットの哲学」：何故、原さんの最初の書物が、ヒット云々といったマーケティング関連本として出版されたのか、私は不思議だった。何故、プロデューサーとして、宣伝マンとして、幾多の修羅場をかいくぐった人間ドラマとして、それは立ち現れなかったのか。それはおそらく、原さんの慎み深い性格と関わっているのだろうと思う。一読して、この書物に書かれていないことが、無性に知りたくなった。だからこそ、この書物の出版は貴重なのだ。

全国映画興行収入ランキングTOP10

日刊興行通信社調べ

今週	先週	タイトル	配給会社	公開日	公開週	上映館
6月1週目（5日・6日）						
1	—	デイ・アフター・トゥモロー	FOX	6・5	1	日劇1
2	1	世界の中心で、愛をさけぶ	東宝	5・8	5	日劇2
3	2	トロイ	WB	5・22	3	丸の内ルーブル
4	—	シルミド／SILMIDO	東映	6・5	1	丸の内東映
5	4	下妻物語	東宝	5・29	2	シャンテ・シネ
6	—	21グラム	G／H	6・5	1	丸の内ピカデリー2
7	—	天国の本屋～恋火	松竹	6・5	1	丸の内プラゼール
6	6	ビッグ・フィッシュ	ソニー	5・13	4	日比谷スカラ座1
5	3	クリムゾン・リバー2　黙示録の天使たち	アスミック・エース＝G／H	5・29	2	日劇3
10	8	スキャンダル	シネカノン＝松竹	5・22	3	シネカノン有楽町
6月2週目（12日・13日）						
1	1	デイ・アフター・トゥモロー	FOX	6・5	2	日劇1
2	2	世界の中心で、愛をさけぶ	東宝	5・8	6	日劇3
3	3	トロイ	WB	5・22	4	丸の内ルーブル
4	—	海猿　ウミザル	東宝	6・12	1	日劇2
5	4	シルミド／SILMIDO	東映	6・5	2	丸の内東映
6	5	下妻物語	東宝	5・29	3	シャンテ・シネ
7	6	21グラム	G／H	6・5	2	丸の内ピカデリー2
6	10	スキャンダル	シネカノン＝松竹	5・22	4	シネカノン有楽町
5	7	天国の本屋～恋火	松竹	6・5	2	丸の内プラゼール
10	8	クリムゾン・リバー2　黙示録の天使たち	アスミック・エース＝G／H	5・29	3	日比谷映画

品を次々とヒットさせているギャガだけに議論したうえでの判断と事情もあったのだろう。それにしても、ピカデリー2系は荷が重かったのでは。

「シルミド／SILMIDO」は前号で注目の韓国映画の1本と書いたが、苦しいスタートとなった。『冬のソナタ』を中心とする韓流のブームは韓国エンタテインメントを広く伝えることで大きな役割を果たしたが、一方で韓国映画史に大きな存在意義を残すことになるはずのこの作品が、ブームのなかのワン・アイテムとして流されてしまったようで残念だ。昨年も、韓国映画「二重スパイ」が東映邦画系で公開され苦戦したことから、「シルミド／SILMIDO」も同じチェーンでかけることに異をとなえる意見もあった。しかし、わたしは全国でこの作品を上映したことはよかったと考えている。それだけの意義がある作品だと思うからだ。ただ、韓流の流れに飲み込まれない、この作品の内容をしっかり伝えるプロモーションが足りなかったとも思う。メディアは韓国といってもヨン様以外は反応しないという情けない状態だから、それらを巻き込んで宣伝展開するのは大変だったとは思うが……。

「海猿　ウミザル」は全国259スクリーンで公開され、初日・2日間で動員15万0408人、興収2億1000万円強という上々のスタートとなった。初日の興収対比としては「模倣犯」(16億1000万円）の88・9％だから、10億円超は期待される。しかし、ムーブオーバーした「世界の中心で、愛をさけぶ」がこの時点でも圧倒的に強く「海猿　ウミザル」の健闘も目立たない状態である。

ところで、その「世界の中心で、愛をさけぶ」だが、最終興収80億円以上が見込まれ、邦画歴代興収10位以内に入ることが確定となった。東宝が主体となって製作した作品では黒澤明監督の「影武者」(80年／興収49億円）以来だという。

（掛尾良夫）

6月8日、「映画館に行こう！」キャンペーンの概要が実行委員会から発表になった。今まで、映画4団体（日本映画製作者連盟、全国興行生活衛生同業組合連合会、外国映画輸入配給協会、モーションピクチャー・アソシエーション）から組織される同委員会は、数回観客調査を行ない、その結果を分析し、7月1日から来年の6月30日まで、どちらかが50歳以上なら夫婦で入場料金2000円というキャンペーンを始めることになった。会見上で、このキャンペーンの委員長を務める岡田裕介東映社長は「いろいろなキャンペーンのアイデアが出たが、まずは人口分布で最も人口が多い50代をターゲットに行うことになった」と話した。今回はポスター、新聞広告など業界をあげて本気の展開をするというので、その効果を期待したいところだ。しかし、どうせやるなら、いっそシニア割引を50代からに下げたらどうだろうか。伴侶を亡くした方や熟年離婚も珍しくない。さらに、「真珠の耳飾りの少女」などに行くと賑やかなレディの方々がいっぱいで、彼女たちのグループ鑑賞を促進するとも考えられるのではないか（ただし、彼女たちは安くしなくても来場するという説も強いが）。

さて、6月に入って5日には「デイ・アフター・トゥモロー」(FOX／日劇1系)、「天国の本屋～恋火」（松竹／丸の内プラゼール系)、「21グラム」(ギャガ=ヒューマックス／丸の内ピカデリー2系)、「シルミド/SILMIDO」(東映／邦画系)、12日は「海猿　ウミザル」(東宝／邦画系)が出ている。

「デイ・アフター・トゥモロー」は地球に氷河期が到来するというパニック超大作。新春から広告を打つ気合いのいれようだったが、パニックものは外れるときはとことん外れることがあるので、その出だしに注目していた。その初日は全国614スクリーンで興収3億1100万円を超える大ヒットとなり、FOXとしては02年の「スター・ウォーズ　エピソード2」4億6100万円、00年の「スター・ウォーズ　エピソード1」4億5200万円に続く、歴代3位のスタートとなった。13日までの13日間で全国動員155万4891人、興収21億7000万円強をあげ、その力を持続している。最終的に65～70億円が見込まれている。4月以降「トロイ」(ワーナー）が最終予測45～50億、「世界の中心で、愛をさけぶ」(東宝）が最終予測80億円以上の大ヒットが続き、昨年上半期、邦洋配給会社11社の1～6月の累計興収772億円を抜くことは確実となった。今年は同11社の4月までの累計興収がすでに600億円に迫っているからだ。

「天国の本屋～恋火」は全国165スクリーンで公開され、初日・2日間で動員3万7591人、興収5200万円強という、少々さびしいスタートとなった。13日までの9日間では、動員9万4472人、興収1億2600万円をあげ、最終的には3億5000万円前後くらいか。原作の人気と「黄泉がえり」の竹内結子の組合わせはヒットの要素も強かったはずだが、「世界の中心で、愛をさけぶ」のブラックホールのような吸引力に観客を吸い取られてしまったのではないか。

「21グラム」はショーン・ペンをはじめとする演技派が顔をそろえた男女3人の人間ドラマ。鑑賞後の満足度は大変に高い作品なのだが、劇場に観客を呼び込むまでに苦戦している。この作品も、ミニ・チェーンでの公開の方が力を発揮できたのではないかという声もあるが、そこは単館公開作

全米新作興行成績ランキング 5月21日～5月27日

■封切り日は "The Five Obstructions" "Frankie and Johnny Are Married" は5月26日、他は全て5月21日 興収の（ ）内は5月21日～5月23日の週末3日分

[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	Yuva（マニ・パトナム）	ネット・イフェクド・メディア	21.1（21.6）
[illegible]	Stateside（レヴァージ・アンセルモ）	IDP	[illegible]（11.4）
[illegible]	Control Room（ジェヘーン・ヌジャイム）	マグノリア	5.2（2.7）
[illegible]	世界でいちばん不運で幸せな私（ヤン・サミュエル）	パラマウント・クラシックス	3.0（2.2）
[illegible]	My Mother Likes Women（イネス・パリス、ダニエラ・フェヤマン）	ノラドン・プロダクションズ	1.4（1.0）
[illegible]	Twist（ジェイコブ・ティアニー）	ストランド	0.6（0.4）
[illegible]	The Five Obstructions（ラース・フォン・トリアー、ヨルゲン・レス）	コッチ・ローバー	0.4（――）
[illegible]	Frankie and Johnny Are Married（マイケル・プレスマン）	IFC	[illegible]（――）

全米新作興行成績ランキング　5月28日～6月3日

■封切り日は「ドニー・ダーコ　ディレクターズ・カット」は6月2日、他は全て5月28日 興収の（ ）内は5月28日～5月31日の週末4日分

[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	デイ・アフター・トゥモロー（ローランド・エメリッヒ）	20世紀フォックス	[illegible]
[illegible]	Raising Helen（ギャリー・マーシャル）	ブエナ　ビスタ	[illegible]
[illegible]	Soul Plane（ジェシー・テラーノ）	MGM／UA	823.1（700.[illegible]）
[illegible]	Saved!（ブライアン・ダネリー）	MGM／UA	58.2（45.9）
[illegible]	Hum Tum（クナル・コーリ）	ヤシュ・ラジ・フィルムズ	41.3（[illegible]）
[illegible]	The Mother（ロジャー・ミッチェル）	ソニー・クラシックス	[illegible]（[illegible]）
[illegible]	Baadasssss!（マリオ・ヴァン・ピーブルズ）	ソニー・クラシックス	7.6（[illegible]）
[illegible]	Bukowski：Born Into This（ジョン・デュラガン）	マグノリア	5.4（3.7）
[illegible]	Word Wars（ジュリアン・ペトリーヨ、エリック・チェイキン）	セヴンス・アート	1.2（[illegible]）
[illegible]	The Burial Society（ニコラス・ラッツ）	リージェント・エンテインメント	0.9（0.8）
[illegible]	ドニー・ダーコ　ディレクターズ・カット（リチャード・ケリー）	ニューマーケット	0.8（――）
[illegible]	Wake（ヘンリー・ルロイ・フィンチ）	エシェロン	0.7（0.6）
[illegible]	Union Square（スティーヴン・スズクラスキー）	アライアンス・インターナショナル	[illegible]

Source：Nielsen EDI and Variety

今週の興行は、「シュレック２」以外は事実上は何もなし、ではなく、トップになってもおかしくないような数字を挙げている作品が存在している。

もちろんそれは、既に日本でも公開中の「デイ・アフター・トゥモロー」で、別表のように、公開から１週間でメガヒットの仲間入りをしている。妙な言い方になる（記録のための記録というところである）が、このローランド・エメリッヒ監督の新作の数字は、"興行成績第２位の映画"としては、史上最高なのである。ちなみに、昨年同時期の首位「ブルース・オールマイティ」の実績は、週末が8573万ドル余、１週間で１億0007万ドル弱であった。

当然ながら、市場全体の売り上げは昨年を大きく上回っており、具体的には、昨年の２億0220万ドル余と２億3560万ドル弱に対して、今年は２億4775万ドル余と２億9391万ドル余といった具合で、とにかく興行的には史上最高のメモリアル・デーを含む週末ならびに１週間となった。

そんな中、「トロイ」が29日に興収１億ドル突破を果たしている。これで、サマー・シーズンのスタート以来、各週末の目玉と考えられていた「ヴァン・ヘルシング」「トロイ」「シュレック２」、そして今週の「デイ・アフター・トゥモロー」と、いずれもが順調に(!?)、メガヒットにはなってきている。

さて、「デイ・アフター・トゥモロー」以外の今週のデビュー作の中では、ケイト・ハドソン主演の "Raising Helen" が、いわゆるハート・ウォーミングなコメディとして、「デイ・アフター・トゥモロー」には興味を持てないような客層にアピールするのではと、一定の期待があったのだが、やや物足りないスタートにとどまっている。批評家からの評価も、決して芳しいものではない。これとは対照的に批評家からの絶賛を集めているのが、"Baadasssss!"である。この作品は、監督の父であるメルヴィンが手がけた「スウィート・スウィートバック」製作の際の、数々の苦難をたどったもので、厳密な事実の再現ではないが、70年代初めのアメリカ映画界の一断面を活写しているとのこと。

なお、２日にシアトルで先行公開された「ドニー・ダーコ　ディレクターズ・カット」だが、こちらは、これまでには見られなかった20分の追加部分が含まれたヴァージョンである。

BOX OFFICE REPORT U.S.A.

ボックスオフィスレポートU. S. A. ――――濱口幸一

好況なサマー・シーズンの出だしを飾った「シュレック2」

［5月21日～5月27日］

純然たる今週のデビュー作は、別表のように全部で8本。これらだけを見るとサマー・シーズンなのに……と思われるかもしれないが、実際のところは超強力作品に敬意を払って（より正確には、恐れをなして）、正面衝突を避けた結果なのである。それというのは、19日に封切られた「シュレック2」のことで、このアカデミー賞長編アニメーション賞受賞作の続編は、今号の表には含められないものの、多大の成果を上げている。

ここで具体的な数字を記すと、先週の水曜日に3737館のスタートで、2日間で2095万ドル弱を売り上げた本作は、週末を迎えるにあたって4163館へと公開規模を拡大し、実に週末3日間だけで1億0804万ドル弱、1週間では1億4379万ドル余の興収といった次第。

これらのデータのうち、公開館数は北米映画史上最大、そして史上初の4000館超というのだから、これだけでも、いかに期待されていたかが、お分かりいただけるだろう。また、週末3日間の成果は、「スパイダーマン」デビュー時の1億1484万ドル余には届かぬものの、週末だけで1億ドルという快挙は、その「スパイダーマン」以来の達成になる。

さらに、今週の市場における「シュレック2」の圧倒的支配ぶりは、週末3日間は1億7073万ドル余、1週間では2億3011万ドル余という、市場全体の数字を考慮に入れると、まさに一目瞭然であろう。いずれにおいても実に6割超なのだから、すさまじいとしか言いようがない。

こういった「シュレック2」のおかげで、対前年比でも、やっと2004年が昨年を上回ることとなった。去年はと言えば、「マトリックス　リローデッド」が最初の週末を迎えた時期であったが、その際の週末3日間は1億6084万ドル余、1週間では2億1101万ドル弱という実績であった。敢えて言うなら、物足りなさがないでもないスタートであった2004年のサマー・シーズンも、ようやく本当にホットになってきたわけである。

ところで、興行的には地味な純然たる今週のデビュー作ではあるが、その中の"Control Room"は、アメリカ政府から何かと批判を受けている衛星放送局アル・ジャジーラを扱ったドキュメンタリーで、批評家からは高い評価を得ていることは特記させていただきたい。

なお、サマー・シーズンの開幕を飾った「ヴァン・ヘルシング」が、23日に興収1億ドルを突破した。つまりは今週、2本の映画がメガヒットのステータスを得たわけである。

［5月28日～6月3日］

メモリアル・デーの休日となる4連休を含む週、つい最近まではサマー・シーズンの起点とされていた、アメリカの映画興行でも最大のかき入れ時の一つである。それに向けて、28日に12本（全国一斉規模の2本を含む）が公開されたが、ここでも「シュレック2」の牙城は揺るがずといった結果になった。その数字は、週末が9558万ドル弱、1週間では1億1186万ドル弱で、トータルの売り上げは、29日に2億ドルを超え、2日には前作の最終売り上げを早々と凌ぐに至っている。ただし

"Control Room"

トピック・ジャーナル

川端靖男
指田　洋
鈴木　元

2004年夏の注目作と興行を占う

『夫婦50割引』キャンペーンがスタート

A　今回はまず、7月から始まった『映画館に行こう!』キャンペーンの話題から。

B　これは全国興行生活衛生同業組合連合会(全興連)、日本映画製作者連盟(映連)、モーションピクチャー・アソシエーション(MPA)、外国映画輸入配給協会(外配協)の映画4団体が協力して行うもので、去る6月8日の記者会見でその全貌が発表された。

C　映画館人口の増加を目指して、過去3年間にわたって行ってきた調査をもとに、この内容が決定されたという。

A　まず第1弾として『夫婦50割引』と銘打ち、7月1日から来年の6月30日まで実施される。

C　夫婦どちらかが50歳以上なら、2人合せて2000円で鑑賞できるというもの。劇場窓口で運転免許証など、年齢を確認できるものを提示すれば割引が受けられる。

A　劇場ではキャンペーン用のポスターを1万枚掲出、チラシを100万枚配布する。また劇場CMの上映、そして新聞紙上ではキャンペーン自体の広告だけでなく、今夏公開作品を中心に15社40作品の広告の中でキャンペーン・ロゴ(下記)を抱き込みで使用し、徹底的な告知を図るとしている。

C　和田誠さんのイラストがアニメーションになった劇場CMを、すでに目にした方も多いのでは。

B　中高年を対象にした割引では、今年3月に公開された「レジェンド・オブ・メキシコ/デスペラード」(ソニー)で50代1000円としたのが記憶に新しい。

C　「今度は夫婦で」ってこと。「たまにはデートでもしたらどうですか」という、ひとつの〝生活提案〟だということだ。

A　会見の席上岡田裕介実行委員長は、「興行収入は減ると思うが、少しでも多くの人に映画館に足を運んでもらいたい」と語った。

C　昨年は1億6234万人だった年間の映画人口を、2億人に乗せたいという希望があるようだ。

B　1年間このキャンペーンの効果を見て結論を出し、来年はまた違う世代を対象にしたキャンペーンを行うことを検討したいとも。

C　委員会では、今回対象の中高年がなぜ映画館に足を運ばないのかを分析しているようだが……。

A　「いつの間にか上映が終わっていた」とか「観たい映画がない」ことがその理由だと分析結果を明らかにしている。

B　こうした問題点への対応はできているのだろうか?　ただ料金を下げれば問題解決というわけにはいかないように思うが。

夫婦50割引
どちらかが50歳以上なら
夫婦で2,000円。

「映画館に行こう!」キャンペーン・ロゴ

C　つまり「入場料金の問題」だけではないということ。それがないとは言わないが、そもそも〝財布の中身〟に窮する世代ではない。それに60歳になればシニア料金１０００円で鑑賞できるようになるんだから、50歳～60歳の〝10歳分〟の客層を掘り起こすのに力を入れるよりも、若年層に目を向ける必要があるように思うよ。
B　安くするんだったら思い切って中学・高校生ってことだね。
C　そう。今、子供の小遣いは携帯電話やゲームに多くを割かれている。そこを少しでも映画に回すようにするために、その層に向けて映画料金を安くする。これは良いアイデアだと思うんだ。
A　確かに包括的に映画人口を増やしたいのだったら、「夫婦50割引」は良いとして、同時並行的に若年層対象のキャンペーンを実施し、その層に映画館の魅力を伝えることが急務だと思う。
B　もうひとつ言えば、1年間やって様子をみるとは言っていたが、夏休みは子供向け、または親子対象の割引キャンペーン、秋は恋愛映画で別の割引企画といったように、3ヵ月にひとつの割引キャンペーンを実施するというのはどうだろう。
C　興行だけでなく、作品同士で組んだキャンペーンを考えることも必要だね。
B　どうしても興行側任せになりがちなこうしたキャンペーンだが、今後配給側とどう連動して展開していくのかが肝要だろうね。
A　ともかく「映画館に行こう！」の初年度キャンペーンはスタートしたばかり。「映画館に観客を増やそう」という旗印の下、映画業界が一丸となって、具体的な行動に出たことは大いに評価したい。今後のキャンペーン効果に期待しよう。

夏興行を占う

A　続いてこの夏公開の作品を展望していこう。夏興行への〝助走〟はかなり良いんじゃないかな。
B　邦洋配給会社11社の1～5月の興収累計は７６４億円で、対前年１２０％と発表されている。5月22日公開の「トロイ」(ワーナー／ループル系)が公開23日間で興収30億円を突破、6月5日に公開された「デイ・アフター・トゥモロー」(20世紀ＦＯＸ／日劇1系)も好調で、公開16日間で興収30億９０００万円を記録している。
C　邦画では何といっても「世界の中心で、愛をさけぶ」(東宝／東宝系)の独走が目を引く。公開44日間で動員４５７万人超、興収61億円を超えた。最終的には75億円に到達する見込みだ。
A　この全体的な好調ぶりは夏興行へうまく継続していくだろうか。まず6月26日に全国８５０スクリーンで公開された「ハリー・ポッターとアズカバンの囚人」(ワーナー／ピカデリー1系ほか)から。
B　6月19日の先行オールナイトでは全国で30万２０００人を動員し、興収4億１０７９万円を記録したようだね。これは先行上映としては歴代3位の記録だ。
A　同じ3作目でも「ロード・オブ・ザ・リング」と違って〝完結編〟と謳えないよね。
C　監督がクリス・コロンバスからアルフォンゾ・キュアロンにバトンタッチされたために、作風が変ったと感じる人が多いようだ。
B　それでも全米では公開3日間で９２６４万ドルと、シリーズ最

「ハリー・ポッターとアズカバンの囚人」

2004年夏の注目作と興行を占う

高のスタートを決めたらしいよ。

C　ただ、シリーズ3作目ともなると観客の食いつきが多少心配だし、やはり前作の80％くらいと考えておくのが妥当だと思うよ。それでも大変な数字であることに違いない。

A　7月10日には「スパイダーマン2」（ソニー／日劇1系）が公開される。

B　2年前のシリーズ第1作はGW時期に公開して、興収73億円を挙げて大健闘だった。

A　続編の宿命で、この数字を多少は下回ってしまうのだろうか。

C　いや、作品の出来の良さと面白さが後押しして上回る可能性は十分あるよ。

A　次に、全米では公開5日間で1億2500万ドルの史上最高記録を樹立した「シュレック2」（UIP／スカラ座1系）は7月24日公開。

B　1作目は2002年の正月映画として公開されて、興収22億7000万円でした。

C　2作目は更にこれを大きく上回りそうな勢いがあるね。とても面白く仕上がってるし。興収50億円まで到達できるかもね。

A　話題の韓国映画では、6月26日から公開中の「ブラザーフッド」（UIP／スカラ座1系）がある。

C　「シルミド／SILMIDO」（6月5日公開／東映／東映系）は興収約5億円に止まりそうだが、「ブラザーフッド」はチャン・ドンゴン＆ウォンビンという韓国スターの共演、「シュリ」のカン・ジェギュ監督の新作だから売り易さは上だ。

B　「シュリ」の興収19億円にどれだけ迫れるか、というところかな。

A　ここまで見てきて、本命◎は「ハリー・ポッター～」、対抗○は「スパイダーマン2」で異論はないところだね。その他の作品で気になるところは？

B　大友克洋の「AKIRA」以来9年ぶりの新作「スチームボーイ」（7月17日公開／東宝／日比谷映画系）は注目の1本。

C　でも、「ハリー・ポッター」「スパイダーマン2」という人気シリーズにどこまで拮抗できるか。

B　「劇場版ポケットモンスター アドバンスジェネレーション 裂空の訪問者デオキシス」（7月17日公開／東宝／日劇2系）はハイレベルで安定した数字が見込める〝優良番組〟。昨年の興収45億円に近い数字は見込めよう。

A　「69 sixty nine」（7月10日公開／東映／東映系）はどうかな。

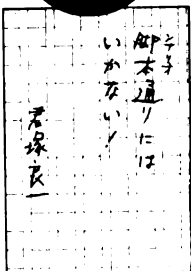
B　興収目標69億円？　まあそれはさておき、作品の評判はとてもいい。妻夫木聡主演、宮藤官九郎脚本で話題性は十分だ。

A　7月24日には「キング・アーサー」（ブエナ ビスタ／ループル系）が公開される。ヒットメーカーのジェリー・ブラッカイマー〝ブランド〟の大作だが。

B　主演がクライヴ・オーウェン、キーラ・ナイトレイというのがなんとも弱いよね。

C　「トロイ」をはじめ、史劇ものがこのところ成功しているが、その「トロイ」にしてもブラッド・ピットという絶対的な存在あってのこと。

B　ここ数年、洋画業界では新たなスターが誕生していない。トム・クルーズ、ブラピ、ジョニー・デップ、ディカプリオ以降がね。

A　オーランド・ブルームやコリン・ファレルといったスター予備軍はいるんだけどね。洋画業界はスターを作っていかないとダメだろう。

B　その点、「ハリー・ポッター」や「スパイダーマン」はキャラクターとして確立されているのが強みだよね。

C　8月7日には「リディック」（東芝エンタテインメント／ピカデリー2系）、「サンダーバード」（UIP／日劇3系）、「モナリザ・スマイル」（UIP／みゆき座系）が公開される。

B　「リディック」は厳しい興行が予想されそう。「モナリザ・スマイル」はジュリア・ロバーツ主演とはいえ地味な印象。「サンダーバード」には懐かしさを覚える人は多いかもしれないが、果たして実写で観たいと思うだろうかの危惧はある。

C　一方、「ウォルター少年と、夏の休日」（7月10日公開／ヘラルド／ピカデリー2系）は小品でもこの夏数少ないホノボノ系で、意外と健闘するかもしれない。

A　タイの格闘技ムエタイをフィーチャーした「マッハ！」（7月24日公開／ギャガ、クロックワークス／渋谷東急系）はどうかな。

B　「少林サッカー」を興収28億円のヒットに導いた配給コンビだね。

C　当初9月公開を予定していたものを急きょ早めたそうだ。その分、宣伝が行き届かないことが心配される。

A　ギャガは秋口に勝負作「ヴァン・ヘルシング」が控えているし、クロックワークスは夏にミニシアター系の作品を4本抱えている。どれだけ「マッハ！」に労力をかけられるか。

B　今の格闘技ブームに乗っかって、ムエタイでどハデなデモンストレーションでもやれば面白いんだけどね。

A　果たしてこの夏は予想を覆すヒット作は出るのか、はたまた予想通りに推移するのか、注目してみることにしよう。

「シュレック2」

スペシャルレポート

映画館主義 東劇篇

取材・文＝編集部

本誌の恒例特集〈映画館で映画を観る魅力〉を追求する「映画館主義」シリーズ。今回は「名作を大画面で！」という新路線を打ち出した東銀座にある東劇にスポットをあてる。

映画館にはそれぞれのカラーがある。ハリウッド大作、女性向けの映画、アクション映画、アート色の強い作品……。上映する作品の路線によって映画館のカラーが決まってくる。もっとも、今の拡大公開の劇場にはそれが薄れているが、単館系の劇場では、それ次第で明暗を分けることになるから必死である。そんな中で、ユニークな新路線を打ち出したのが、東銀座にある松竹の直営館・東劇である。そのカラーとは〝名作を大画面で！〟。松竹映画興行部副部長の秋元一孝さんと番組編成スタッフ三枝郁子さんにその詳細を聞いてみた。

「東劇は、昨年の6月渋谷東急系チェーンの改編期にチェーンを離れて、独自の路線に切り替えました。以降は、チェーン作品が強かったという事もあり、拡大公開作品やムーブオーバーで番組を編成しながら、〈東劇プロジェクト〉を結成して、新路線を模索していったんです。いろいろと論議する中で、東銀座といえば、歌舞伎座、新橋演舞場で、そこのメインの観客層は、年配のご夫婦や女性のお友達同士が多いこと、ここに注目したんです」

かつて東劇の向かいには大劇場の松竹セントラルや銀座松竹（後に松竹セントラル2）など3館の映画館があり、東銀座地区には東劇を含めて4館の映画館が軒を並べていた。しかし、99年ビルの解体にともない、松竹セントラルは42年間の歴史に幕を降ろした。だから、現在の東劇の周辺というと、歌舞伎座や新橋演舞場になるのである。

「シネコンのような複合映画館が主流になり、ポツンと1館だけというのは、本当にむずかしい時代になりました。単館にしても、銀座地区には単館の劇場が多数あるから、よほど個性的なカラーを打ち出さないとむずかしい。東劇の利点は何か。座席数が多くスクリーンが大きい（435席、縦6×横12メートル）。ここでお客さんは何を観たいのか、という根本の発想にかえり、歌舞伎座や新橋演舞場の観客層に合わせて考えると、ぴったりくるのがクラシック作品ではないか、という話にな

ったんです。昔観て感動した思い出の映画に、大きなスクリーンで再会してほしい。若い頃感動した作品を今度は旦那さんと、奥さんと、あるいはお子さんと観てほしい。そういう願いを込めて番組を組んでいこう。思い出に残る映画を上映する劇場というコンセプトに決定したんです」

その第1弾が、3月6日から公開したスティーヴ・マックィーン主演の「大脱走」だった。ある世代にとっては誰もが知っている戦争映画で、しかも数十年間、映画館にはかかっていない作品だった。

「しばらく映画館を離れていただろう世代の方から、おそらく初めて「大脱走」を観る学生さんまで幅広い観客層に来ていただけました。お父さんが小学生くらいの子供連れで観ている光景は、こちらの意図していたもので嬉しかったですね」

現在は、いまさら説明の必要がない名作「ゴッドファーザー」(デジタルリマスター版)を上映中。以降、7月17日から「ゴッドファーザーPARTⅡ」(ニュープリント版)、7月31日から「エルヴィス・オン・ステージ」と続く。しかし、旧作を上映し続けていくには越えなければならないハードルがいくつもある。

「上映プリントや権利のあるなしなどの物理的な問題も大きいのですが、いま観ても古びていない、新作よりも面白い映画という作品自体のチョイスも大きな条件になります。それに、ただ上映するのではなく、イベント性を持たせないと興行的にきびしいというのが実状です。8月16日のエルヴィス・プレスリーの命日に合わせて公開する「エルヴィス・オン・ステージ」は、今年がエルヴィスのデビュー50周年というポイントですし、「ゴッドファーザー」はDVD-BOX発売と連動する形で展開しています」

劇場経営は当然のことながら利益を生み出すことが目的である。そのためにも、作品選択やイベントの仕掛け方が慎重になってくる。しかし、その先には送り手の熱い意志がある。

「僕らの若い頃は過去の名作と出会うのは名画座でした。いまはビデオやDVDが大半でしょう。それは時代の流れですから。ただ、映画を観る環境は映画館の大画面に勝るものはないと思っています。昔観た映画をもう一度スクリーンで、というコンセプトは基本としてあるのですが、一方で、ビデオやDVDで観た若い映画ファンが、今度は大画面で観たい、と思って足を運んでもらえる、東劇がそんな空間になれればと思っているんです」

「そして、今度は東劇で何をやるのかな、というように上映番組が常にチェックされるようになることが目標ですね」

ところで、松竹の名作はラインナップに入らないのだろうか。

「もちろん、入りますよ。先日もテレビドラマのリメイクがヒットしたこともあって、「砂の器」をやろうという企画もあったんですが、タイミングを逸してしまい、実現には至りませんでした。来年は松竹創業110周年ですから、いい形で企画が組めればと思っています」

50代以上の世代が映画館に行かなくなった理由の一つに「観たい映画がない」という声が挙っている。東劇の新路線はまさにこの声に応えるものではないだろうか。加えて、映画ファンが育つために必要不可欠な、過去の作品に目を向けるきっかけとなる場所にもなっている。東劇の新路線はさまざまな理由から重要だ。ぜひ、大切にして継続していくことを強く期待したい。

最後にお二人から本誌読者に向けて「どんな作品を上映してほしいでしょうか」という質問を投げかけられた。ご希望のある方、読者ハガキで編集部宛てにお送りください。責任をもって、お二人にお届けいたします。

「ゴッドファーザー〈デジタルリマスター版〉」7月16日まで上映中

「ゴッドファーザーPART Ⅱ〈ニュープリント版〉」7月17日〜30日

「エルヴィス・オン・ステージ」7月31日〜

映画の授業

映画の授業　映画美学校の教室から

黒沢清ほか 著
青土社　2520円（税込）

review
目指すは最強のインディペンデント映画作家

高崎俊夫

ユーロスペースとアテネ・フランセ文化センターが共同で運営する映画美学校で行われた講義を纏めた本である。

巻頭で黒沢清が〈我々は映画作りのノウハウを伝授しようとは考えていない。我々が目指すのは最強のインディペンデント映画作家の養成である〉と宣言しているが、ある意味で、本書の性格はここに言い尽くされている。黒沢を含めた講師のほとんどは撮影所システムの崩壊以後、つまり1970年代半ばから自主映画を作り始めた世代に属するが、端からかつての邦画メジャーに代表される商業映画を志向していたわけではないからである。むしろ、彼らは助監督経験のないまま、自らの感受性と映画的教養を糧に路上で映画を撮り始めたヌーヴェル・ヴァーグの精神を継承しようと試みたといえよう。

そしてトリュフォー、ゴダールたちの理論的支柱としてアンドレ・バザンがいたように、当時の彼らに超弩級の影響力を及ぼしたのが蓮實重彦であったのは言うまでもない。実際、各講師の発言には、1970年代後半から80年代にかけて蓮實が〈映画を見るとは何か〉をめぐって展開した挑発的でラディカルな言説の痕跡が垣間見える。

たとえば「ダーティハリー」のディテールに即して、その主題論的な体系と説話的な持続の鮮やかな連携ぶりを語る万田邦敏は、かつて彼自身が洗礼を受けた〈ハスミ光線〉の威力を、生徒たちに再び伝授しているかのようだ。また、洗練の極に達した古典的アメリカ映画の効率的な〈語り〉の秘密を論じる塩田明彦も同様である。ただ、そこには、旧来の無邪気な作家主義的な視点に留まらない、幾多の現場経験を踏まえた上でのきわめて具体的で実践的な主張が盛り込まれている。

なかでも、まるで大和屋竺が憑依したかのように〈世界認識〉についての哲学的省察を生徒たちに問いかけながら、自らのヴィジョンを提示する高橋洋の「シナリオと映画」「プロットをたてる」「シナリオを書く」の章は、独特の凄味が感じられる。

ところで、実際に映画美学校から、将来の日本映画を担うインディペンデント映画作家が育つ可能性はあるのだろうか。たとえば、上質のミュージカルの振り付けをみるようなアクション感覚が冴える安里麻里の「独立少女紅蓮隊」、ツァイ・ミンリャンふうの孤独感の表出に優れる吉田良子の「ともしび」といった、最近「映画番町」シリーズでデビューした女性監督の作品を見ると、成果はすでに表れているようである。

現代映画ナビゲーター

鬼塚大輔＋新田隆男 編
フィルムアート社 1575円（税込）

review
映画読解の「正しさ」とは？

森直人

インターネット上では、映画についての意見が記名／匿名問わず膨大に飛びまくっている。言論の自由はむろん結構なことだけど、なら批評家の出番はどこに？ という問題は、ますます切実になっている。そんな何でもあり過ぎの状況の中、映画読解の「正しさ」を取り戻そうと試みているのが本書だ。基本姿勢は、鑑賞者としてのプロフェッショナリズムと、その立場からの教育的意志である。

その「正しさ」を実現する視点として、映画はあくまで「商品」「メディア」である、というシステム＝作品の社会的成立条件を、常に考慮に入れているのが特徴。これはカルチュラル・スタディーズの基本でもあるが、映画の中の内容だけで判断する素朴さとは一線を画すもの。編者の鬼塚大輔氏と新田隆男氏による各章の序文は、どれも刺激的だ。特にハッとさせられたのは、第4章「俳優／スターを読む」。複数のライターによる短い俳優評群が、鬼塚氏の序文によって、こちらの読み手意識に輪郭が与えられ、メディア・リテラシーのための最も等身大な参考例へと、いわば〝姿を変える〟のである。

「正しさ」とは厳しさでもあるので、正直大甘な読解者の僕には痛い部分も多かった。だが学ぶことは、あくまで楽しいことである。教科書というより、ここから読み手が自分で始めていく一冊であるべきだし、僕もボヤボヤしてる場合ではない、ということだ。

ヒーローと正義

（白倉伸一郎著／子どもの未来社刊／税込861円）
桃太郎は川でおばあさんに拾われたからヒーローになったが、海へ流れて鬼ケ島に着いていたら鬼の仲間になっていたかも。善と悪はそれくらい曖昧なものだ。仮面ライダーやウルトラマンからナチス・ドイツ、ブッシュ政権まで幅広い例を取って正義とは何かを問う。その内容は、面白くて深い。

老いてこそわかる映画がある

（古村英夫著／大月書店刊／税込1680円）
「モロッコ」「人情紙風船」から「おばあちゃんの家」「阿修羅のごとく」まで筆者の長年映画を見続けてきた選球眼は、新旧問わず、柔軟に作品を選び、読み説く。映画は世代を超えて共感できるもの。シニアでなくとも先輩の選ぶ作品を鑑賞の参考にしたい。

愛の教訓

（松久淳著／小学館刊／税込1050円）
恋愛映画から実際的な教訓が得られるかは別として、“「タイタニック」は豪華客船、身分の差、恋敵、沈没パニックを駆使した吊り橋効果検証映画である”または“ラブコメの肝は「親友」である”など名言とも暴言ともつかない筆者の見解に、己のラブ・ストーリー観を顧みる一冊。

荷風！ 特集・大人の新宿

（日本文芸社刊／税込880円）
“時を超えて楽しむ街歩き”を提唱する「荷風！」が新宿を特集。「新宿映画ベスト5！」「新宿騒乱の夜のアートシアター新宿文化劇場」「映画館の黄金時代　昭和33年、映画少年が歩いた新宿」など、シネマの街・新宿の歴史をディープにとりあげている。

サントラ・ハウス
sound track house

賀来　タクト

ミッシング

♪ジェームズ・ホーナー

4月21日発売／定価2520円
○ソニー・クラシカル
SICP-571

長女を誘拐された未亡人が父親と共に救出の旅に出る物語。ジェームズ・ホーナーにとっては、ロン・ハワードとの7度目の協力関係を築く作品であり、深い盟友関係の延長にあったという点でも、力の入った仕事になったようだ。

まず、映画の設定を汲み取った仕掛けとしては、ネイティヴ・アメリカンをめぐる音色が随所に巡らされている点が大きな特徴として挙げられる。トミー・リー・ジョーンズ扮する父親がアパッチ族の精神に帰依した男であり、娘を誘拐した一味の主犯格もまたネイティヴ、さらにそこに呪術的な側面も組み込まれているとなれば避けられぬ事態でもあったろうか。具体的には、恐らくサンプリングを駆使したであろうネイティヴ歌唱に、パンフルート(もしくは尺八)を絡めるという方法が採られており、時代設定的には西部劇の気分も同時に塗り込んでいるとしていい。一部にはネイティヴ特有の木管も挿入されていると思しき箇所もあり、ある種の異国情緒を喚起させている点では面白く聴く向きも多いだろう。

ホーナーのネイティヴ采配といえば、過去に「サンダーハート」があり「ウインドトーカーズ」があった。その意味では全くの新味があるわけではないが、今回、それ相応に聴き応えを強くもたらしているのはやはり旋律の強さである。正確には、旋律の反復使用による練り込みの深さとでもいうべきか。追跡劇としてのサスペンスを醸す作品は、実は父娘の長い葛藤の終結、すなわち和解へと至るドラマを軸としており、それをにらんだ上での旋律が絶妙な味わいと香りを醸し出している。基本的には弦によって奏されるそれは、さすがに抒情性を際立たせてあまりあり、豊かな情感を観る者に与えてやまない。そういった「肝」の部分を見据えた上で、近年「ビューティフル・マインド」「アイリス」などといった人間ドラマを遮二無二追いかけてきた作曲家の志向をここに眺望するのももちろん可能である。そんな信念の力が楽曲の活力となっている点はやはり否定できない。

ほかにも電子楽器や打楽器、金管楽器を限無く盛り込み、アクション部分での迫真も逃さない「巧さ」を知ることもできる手慣れた仕事であるが、ただし個人的にはこれを全面的に支持するものではない。確かにネイティヴ色の盛り込みにおいても、旋律配分の巧さにおいても、あるいはそれらを緊密に編んだ書き込みの深さにおいても遜色のない力作ではあるが、どうしても民族色と情感の線が乖離している感がどこかしてならない。それは、例えば最近のホーナー作品「サハラに舞う羽根」にも感じられた部分で、各論において成立しながら総論として説得力に欠けるといった居心地の悪さと喩えるべきか。無論、個人的には「サハラに舞う羽根」よりは素材の「融合」に成功しているとは思えるものの、例えば正義を全うする父親と人さらいネイティヴの差別化がどうしても明瞭にはならず、その戦いの決着を見守る白人の娘の位置に立っても、やはり最後にはお飾りの民族色、地域色に終わっている感がつきまとう。それが悔しい。それが惜しい。

見方を変えれば、これはまだ過渡期の作品なのかもしれない。ホーナーの旅がどのような山場を迎えるのか。刮目して待ちたい。

レジェンド・オブ・メキシコ　デスペラード
♪ロバート・ロドリゲス

2月21日発売／定価2520円
○ビクターエンタテインメント
VICP-62596

人気シリーズ第3弾は、監督自身が音楽の一切を取り仕切った。もちろん「スパイキッズ」シリーズの例を持ち出すまでもなく、ロバート・ロドリゲスの近年の志向を思えば、分かりやすい采配ではある。

音楽的には地域色を反映した響きにまとまっており、具体的にはメキシカン・ギター、ヴォイスを伝統音楽に絡ませて軽快に鳴らしまくっている。もっとも、アクション場面では管弦楽を交えた大仕掛けの楽曲もあり、さすがにもう一歩の感もありつつも、ダイナミズムを何とか出そうとした努力は大いに買っていい。オーケストレイションをめぐる補完作業については、ピート・アンソニー以下、9人の専門家を招く事態に、その熱心さを見ることができるだろう。今後も新時代を司る監督兼作曲家として、あるいは自主映画魂を頑なに貫くこだわり作家の敏腕を期待したいところか。

一方で、ロドリゲスは既成の楽曲も劇中に取り込んでいる。ジュノ・リアクター、ティト・ラリヴァ、マヌ・チャオ、マーク・デル・カスティーヨ、パトリシ・ヴォンヌ、ブライアン・セッツァーといったアーティストのそれらは、決してロドリゲス音楽の雰囲気を崩すものではない。むしろ、作品のパンク感を適切につないでいる印象がどこかある。また、ジョニー・デップが自ら演じるキャラクターのために書き下ろした旋律も劇音楽の一部として混じっており、映画ファンにはたまらない贈り物にもなっていようか。

カーサ・デラ・ムジカ
♪エンニオ・モリコーネ

5月7日発売／定価3200円
○ランブリング・レコーズ
RBCS-1076

エンニオ・モリコーネの来日公演を記念して編集された企画盤。日本独自の選曲により、全40曲、2時間16分に及ぶ楽曲が2枚組仕様で収録されている。

ジャンル別にまとめられたアルバムは、まず1枚目にコメディ、恋愛／青春、ホラー、戦争、ドキュメンタリー、アクションのための映画用楽曲を収録している。フランシス・ジロ監督作品「シルビア・クリステルのピンク泥棒」に始まり、「ミスター・ノーボディ2」「シシリアの恋人」「今のままでいて」「家庭教師」「非常の標的」「ザ・ビッグマン」などの作品が並ぶ。

2枚目にはウエスタン、エピック、サスペンス、ドラマ、アニメーションといったジャンルの楽曲が収録されており、「夕陽のギャングたち」「続・夕陽のガンマン」「ミスター・ノーボディ」「ウエスタン」「進撃0号作戦」「ケマダの戦い」「暴行列車」「海の上のピアニスト」「ニュー・シネマ・パラダイス」などが並ぶ。

既発売の他の編集盤を鑑みて、楽曲の重複を避けようとしている配慮もあり、中でも未公開作品の多数収録については歓待する向きもあるだろう。テレビ放映、ビデオ発売作品を除き、未公開作品の楽曲は計16曲。アルバムのラストを飾るアニメーション映画「森の中のアイーダ」の伸び伸びと明るく発展する楽曲を聴くだけでも面白いはずだ。また、コンサートを堪能した聴衆には「タタール人の砂漠」の収録も嬉しく、感動の追体験には持ってこいといったところか。

梶芽衣子　全曲集

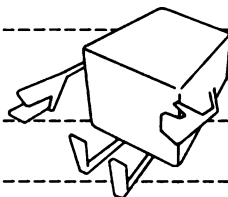
3月24日発売／定価3000円
○テイチクエンタテインメント
TECE-30463

「キル・ビル」人気を受けて、梶芽衣子のヴォーカル集が発売の運びとなった。

全20曲を収めたディスクには、出演映画の楽曲が5曲並ぶ。「さそり」シリーズからは〈怨み節〉〈女の呪文〉が、「修羅雪姫」からは〈修羅の花〉が、「明日なき無頼派」からは〈ジーンズぶるうす〉が、そして「銀蝶渡り鳥」からは同名主題歌が収録されている。

今年は梶にとって女優生活40年の節目の年。そんな長い実績の一方で、寂しげな抒情を伴った歌声は、凛とした美貌共々変わることなく、改めてその魅力を再認識させてくれる。

tele-jun

時評　石飛徳樹

MANDANブームがやって来た

　お笑い界は、どうやらピン芸人の時代に入ったらしい。ピン芸人とは一人で舞台に立つ人のこと。早い話が漫談家である。一時期、漫才やコントなど二人の掛け合いで見せる芸がもてはやされたが、今や若手芸人のトレンドは質・量ともにピン芸人へと移っている。

　紅白にも出たベース漫談のはなわや、「ゲッツ」のダンディ坂野、人形使いのパペットマペットらを第一世代だとすれば、「私だけでしょうか」のだいたひかる、小池栄子とのCMでも味を出す青木さやか、「間違いない！」の長井秀和らが第二世代と言えよう。

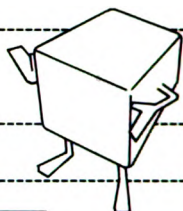
　そして今、和服姿でギターをかき鳴らして有名人の悪口をシャウトする波田陽区、木魚を叩きながら自虐的なお経を唱える南野やじといった第三世代の台頭が著しい。彼らの芸の特徴は思い切りひねりを利かせてシュールさを強調している点だろう。しかも、第一、第二世代も決して衰えておらず、まさに百花繚乱の趣である。

　ピン芸人の時代を牽引しているのは日本テレビ系の「エンタの神様」だ。昨春に日本テレビが行ったバラエティー番組のスクラップ・アンド・ビルドの中から生まれた番組。当初は、歌をはじめ、多彩なエンターテインメントを紹介していた。かなり手の込んだ作りの番組だったのだが、なぜか次第にお笑いに特化していった。現在は、芸人たちのネタをただ順番に見せるのみ、という大変シンプルな作りで落ち着いている。

　これはもちろん批判ではない。番組の中には、プロデューサーやディレクターが変に凝った構成にして自己満足し、視聴者が引いてしまうものが結構ある。それに比べ、芸人たちのネタを出来る限りたくさん見せるという、「エンタの神様」の純粋さは十分に称えられるべきだ。既にお笑い芸人の登竜門と化しているNHKの「オンエアバトル爆笑編」よりも、さらに徹底して純粋だと言えるかもしれない。

　さて、このピン芸人の時代、いつまで続くか。私は楽観できないと思う。彼らの多くが、二人組の芸人よりも飽きられやすい体質を持っているからだ。漫才やコントだと、シチュエーションやテーマを自在に変化させることが出来る。しかし、ピン芸人の芸は完璧に作りこまれており、融通が利きづらい。

　つまり芸がワンパターンに陥りやすいのだ。もちろん、ワンパターンだからこそ面白いという側面もあるが、テレビへの露出には、そのあたりを十二分に配慮しなければならない。その意味から言えば、「エンタの神様」のラストで、はなわが「ガッツ石松伝説」というネタを毎週披露しているのは、ちょっと心配である。

クリエイターズ・アイ　村松亮太郎

「LIGHT MY FIRE」
とあるカフェを舞台に、元カノと今カノそして彼氏というよくある三角関係から意外な物語が展開するショートフィルム。カフェネットワークの7月作品。
● 監督・脚本・編集／村松亮太郎　プロデューサー／大屋友紀雄　撮影監督／藤田秀紀　出演／原田佳奈、嶋田達樹、まきこ、清川均士　配給／NIZOO
※本格的なショートフィルムが全国のカフェで観賞できるネットワーク「NIZOO PICTURES LINE-CAFE NETWORK-」にて上映中。詳細は下のサイトへ。
http://www.nizoo.com/cafe/
（問い合わせ）info@nizoo.com

村松亮太郎

LIGHT MY

村松亮太郎（むらまつ・りょうたろう）
1971年生まれ。大阪府出身。映画監督。NIZOO主宰およびNAKED INC.代表。映画制作を志し、88年より役者として活動開始。自主映画の脚本・監督を経て、97年に映像制作集団"NAKED"を設立。CMやPVなど数々のアートディレクションワークを手がける。02年から本格的に映画制作を開始し、現在、監督したショートフィルム5本が世界の映画祭に続々ノミネートされているほか、長編映画「HOTEL555〜Air〜」を撮り終え、公開準備中。また、全国各地のカフェを結んでショートフィルムを上映する「NIZOO PICTURES LINE-CAFE NETWORK-」プロジェクトを7月より開始。

映画を日常の中にあるカフェで観られるプロジェクト

僕は映画が大好きです。観るのも創るのも大好きです。だから映画を創っています。

僕は映像のプロとして活動していますが、もはやプロとアマチュアの境界線は薄くなってきていると思います。差となるのは、そのクオリティのみです。僕は現在〝インディペンデント〟という形式を取っています……とはいうものの、誤解の無いように言えば、僕にとってプロのクオリティというのは重要。プロとはそのクオリティを責任をもって出せる人のことで、映画のプロとは映画というものに責任を持てることです。だから、僕は常に映画を創るプロフェッショナルでありたいと考えています。可能な限りピュアに純度が高いものを創っていきたいし、そうしてるつもりです。

そうやって創った僕の作品たちが現在、日本／ドイツ／アメリカ／韓国／オーストリアなど、世界中の映画祭をまわっています。世界中で様々な人に観てもらえるのはとても嬉しいことですし、その事実が日本の人たちにとって観るきっかけになってくれればなおのことです。

創ること自体は難しい時代ではありません。だから次はみんなにもっと映画を観てもらうことを考えるようになりました。日本の人たちがもっと映画を観るようになってほしい。それも、いわゆるメガなタイプの映画だけではなく、あらゆるタイプの映画です。もっと映画の良さが伝わるといいなあ、と思うんです。

そんなことを思ったときに、ショートフィルムというのはひとつの入り口としてアリなんじゃないかな、と考えました。やはり一般の人にとって二時間という時間を割いて、映画館に行くには相当パワーが必要なのだろう、と。だから「気軽に映画が観られる状況をつくりたい」……まずは映画っていいなあという体験を習慣にしてもらえること。それを形にしたのが、「NIZOO PICTURES LINE—CAFE NETWORK—」です。

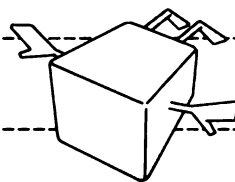
全国のカフェを結んで、ショートフィルムを上映していこうというこのプロジェクトが目指すのは、日常の中の非日常な体験として映画が認知されること。映画があくまでみんなの日常の中に存在して欲しいんです。

日本では、音楽に比べるとまだまだ映画を観るって行為は非日常的なんじゃないでしょうか？

プロとしてのクオリティを持った映画を、日常の中にあるカフェで気軽に観られることが、まずは定着すればいいな、と思っています。

最後に、僕は既に「HOTEL555〜Air〜」という長編も一本、撮り終えています。そちらに関しては映画館に足を向け、二時間というパワーを割いて観てください（笑）。その価値はある作品になっています。

tele-jun

テレビ・トラベラー　樋口尚文

「バトル・ロワイアルⅡ【鎮魂歌】」

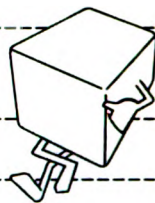
⑮暴力表現バッシング報道の暴力性

「オレンジデイズ」や「ホームドラマ！」など春のクールの力作についてそろそろ記さねばと思っていたところへ、佐世保の小六女児によるカッター殺人事件騒動である。加害者の少女が、犯行直前に見ていたミステリードラマの殺人シーンに刺激されたという報道があったために、類似した箇所のあるドラマが数本放映延期となり、さらにR－15指定でレンタルされていた映画「バトル・ロワイアルⅡ【鎮魂歌】」も少女が借りて刺激されたのではという報道を受けて、今秋発売予定だったDVD「バトル～Ⅱ特別篇 REVENGE」の発売が見合わせられた。

　青少年による特異な犯罪が発生するたびに、こうした報道やリアクションはつきものであった。近年印象的なところでは、97年のいわゆる神戸連続児童殺傷事件の際のテレビ東京のドラマ「エコエコアザラク」放映打ち切り、バタフライナイフによる若者の殺傷事件の頻発を背景にした翌98年のフジテレビ「きらきらひかる」へのバッシングや、木村拓哉がカッコよくバタフライナイフを操る、97年のフジテレビ「ギフト」の再放送中止騒動であった。黒磯市で起こった少年集団暴行致死事件の加害者であった19歳の少年が、拘置所の中から「ギフト」の再放送中止を訴える手紙を書いたことで、翌98年に某地方局での再放送が打ち切られ、以後なかなか放送が難しいものになってしまった。

　当時書きそびれたのだが、この少年が自分のような犯罪をおかす子どもが増えないように再放送を中止して欲しいという手紙を書いたと聞いた時は、いい加減にしてほしいと思うばかりであった。少年は自分の罪の原点はドラマにあると責任を転嫁しているが、何より問題とすべきは、虚構のドラマを見てはその表現をほいほい真似して現実の人間を傷つけたりする、この犯行当時の少年自身の途方もない感受性の貧しさである。しかも19歳にもなって、テレビのせいだというのは、いかにもその甘えにこそ犯罪の芽があったというほかないのではないか。だがなぜか、マスコミはこの若者をしおらしい改心者と解して、ドラマへのバッシングに傾いたのであった。

　私は、少なくともマスコミの言説にあっては、かかる暴力をドラマの表現に結びつけることに重々慎重を期してほしいと思う。なぜなら、仮にドラマの影響があったにしても、虚構と現実の敷居を超えるという大それたことをしてしまう加害者の資質は、もっと環境の深部で培われるものであるはずだ。そこを無視してただ暴力描写が犯行の「引き金」になったと記すのは、それ自体がペンの暴力であり、その理屈は稚ない加害者のわがままな自己弁護とさして変わらないものだ。

海外ドラマ・ウォッチ　池田敏

「SEX AND THE CITY」

『SEX AND THE CITY』は男も見ろ！

いま毎週楽しみなのは、WOWOWで第6シーズンを見ている『SEX AND THE CITY(SATC)』(写真／毎週土曜深夜12時00分～1時05分)だ。米国で放送しているHBO局が、男性向けに『ザ・ソプラノズ』を、女性向けに『SATC』を企画したのは有名で、日本でも人気に火がついているのはやはり女性ファンから。番組のファッションやニューヨークのロケ地が日本の女性誌で特集されるなんて、海外ドラマでは珍しいケースだ。

だが、女性向けの印象が強いおかげか、この番組を熱心に見ているという男性の声をあまり聞かない。なんで!? 男性なのでほとんど女性誌を手に取ることがない筆者ですら、毎回笑ったり、じーんと感動させられたりして、これが無くては一週間が終わらないのに。

筆者自身、実は第1シーズンにはノれなかった。まだこの頃は女性キャラ4人の描き分けが不足し、女性たちがイイ男を誘うだけのワンパターンな展開に早くもマンネリの危惧すら抱いた。また、ノンフィクションの原作『セックスとニューヨーク』の影響か、一般人のような男女(だが本当は俳優)が自分の性生活を語る擬似ドキュメンタリー風シーンもあったが、リアリティに欠け、演出的な効果はむしろマイナスだった。

同じことを製作陣も思ったのか、第2シーズン以降は擬似ドキュメンタリー場面が削られた(正解!)。さらに、ミランダ(シンシア・ニクソン)が夜の雨の中でスティーヴ(デイヴィッド・エイゲンバーグ)と熱いキスを交わすロマンチックな場面を筆頭に、女性キャラの恋のお相手にステディな関係性が加わった。同シーズン以降、『SATC』は本領発揮というべき面白さの飛躍を見せていく。特に第4シーズンから惜しくも番組がフィナーレを迎える第6シーズンまでは、ハズレ無しを思わせる高いクオリティである。台詞など練りに練られたシナリオ(徐賀世子による日本語吹替翻訳も素晴らしい)によって、極めて濃厚な約30分が毎回楽しめるのだ。

誤解されたくないのはこのドラマ、女性に男性を選り好みする権利があって当然という姿勢が明確なため男性には耳が痛くなるエピソードが多く、さながらダメ男カタログなのだが、そんな彼らに失望させられる女性陣のガッカリぶりもユーモラスに描いている点は極めて男女平等である。

最近もあるエピソードで男性器の〝袋〟の部分をティー・バッグに例える(笑)など、男が聞いても楽しいシモネタ・ギャグは健在。WOWOWは7月7日から第1～5シーズンを一挙再放送。この機に全『SATC』童貞(?)は、コメディのツボを押さえたその魅力をぜひ初体験してほしい。

七人の兄いもうと

【放送日】7月10日
(53) 監督／佐伯幸三　出演／長谷川季子、若尾文子、船越英二、根上淳

婦人警察官

【放送日】7月24日
(47) 監督／森一生　出演／轟夕起子、月丘夢路、小夜福子、戸上城太郎

▶「愛妻物語」の再放送もあり

長谷川季子「七人の兄いもうと」

1934年大阪府生まれ。51年に宝塚歌劇団に入団、同年に「若人の歌」で映画初出演。雪組で活躍する。退団後、大映に入社。父は俳優の長谷川一夫。

轟夕起子・月丘夢路・小夜福子「婦人警察官」

轟夕起子(中)／1917年東京都生まれ。32年に入団、花組で活躍する。月丘夢路(左)／1922年広島県生まれ。39年入団、雪組で活躍する。小夜福子(右)／1909年静岡県生まれ。22年に入団、月組で活躍する。

文＝浦崎浩實

長谷川季子というより、小野道子の名前で記憶している方も多いのではなかろうか。父は長谷川一夫、兄は林成年、大映映画の名優でもあった(二世)中村鴈治郎は伯父に当たり、中村玉緒はいとこ。長谷川季子はいわば芸能界セレブなのである。

彼女は宝塚歌劇団を56年に退団して大映に入社。芸名をそれまでの本名、長谷川季子から小野道子に変え、野村浩将監督版「祇園の姉妹」(56)の主役はじめ、準主役、脇役など数多く出演したのち、61年に再び、長谷川季子を名乗った。小野道子という芸名は5年ほどだが、その時期が映画の黄金期と重なるからだろう、小野道子の方が私たちには馴染み深いのである。

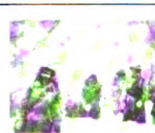
「七人の兄いもうと」は前期・長谷川季子(宝塚在籍)時代の出演作。身寄りのない彼女は若尾文子と親友で、若尾が奉公先の長男・船越英二と結婚すると、その家庭騒動に巻き込まれ、長谷川にも思いがけないことが判明する。むろん、ハッピーエンド。

船越ら7人の孫たちの祖父を演じる潮万太郎（実質主役!）が、いつもの手八丁口八丁と勝手が違い、見ものである。

「婦人警察官」は小夜福子(22年宝塚入団)、轟夕起子(32年入団)、月丘夢路（39年入団）という代々の宝塚トップが同級生という設定で出演。それがさして不自然に見えないのは、戦争をはさんだ彼女たちの転変が〝違う〟人生を歩ませたから、と観客は無意識のうちに〝映画の嘘〟を飲み込むのであろう。

敗戦後の物心の荒廃した中で、世の役に立とうと婦人警官になった小夜と月丘は、同僚男性(伊達三郎ら)や社会の偏見にさらされながら懸命に働いている。一方、敗戦で大陸からの引揚者となった轟は自堕落な生活で、同病相憐れむように復員軍人（戸上城太郎)に好意を寄せ、悪の道(どういう悪か?）に誘いこむ。

宝塚男役として爆発的人気だったという小夜福子が、ラスト近く、サイドカーで悪者を延々追跡するシーンもあり、娯楽的要素を盛り込んでいる。小夜・轟・月丘のトリオでは、47年の松竹正月映画「満月城の歌合戦」（マキノ正博＝当時＝監督）が先行する。

小夜福子の芸名は宝塚創設者・小林一三の百人一首好みから。赤染衛門「やすらはで寝なましものをさ夜更けてかたぶくまでの月を見しかな」が出典。芸名といえど、戦時下、宝塚の芸名だけでも、神代、神風、雲上、久邇、秩父、御門、雅御門、御幸、御剣や宮の付く〝不敬〟な名前が改名を強制された。自国民にも創氏改名(!)は及んでいたのだ。暗黒時代の再来許すまじ!

一夜の百万長者【放送日】7月6日よる11：30～
(57) 監督／斎藤寅次郎　出演／花菱アチャコ、春風すみれ、舟木洋一、若松和子

たそがれの東京タワー【放送日】7月13日深夜12：00～
(59) 監督／阿部毅　出演／仁木多鶴子、小林勝彦、三宅邦子、市田ひろみ

泣き笑い地獄極楽【放送日】7月20日よる11：30～
(55) 監督／浜野信彦　出演／船越英二、伏見和子、品川隆二、轟立のぼる

悪徳【放送日】7月27日深夜12：30～
(58) 監督／佐分利信　原作／船山馨　出演／佐分利信、木村功、清水一郎、水谷良重

▶「鉄路の弾痕」「軍国酒場」「指名犯人」「街の人気者」の再放送もあり

「たそがれの東京タワー」　c角川映画

「泣き笑い地獄極楽」　c角川映画

「悪徳」　c角川映画

「一夜の百万長者」　c角川映画

発掘！お宝大映シネマ

火曜深夜

スカイパーフェクTV!日本映画専門チャンネル

文＝藤田真男

戦前の松竹を代表する二大天才・島津保次郎と清水宏の監督作、二大名優・佐分利信と河村黎吉の出演作を全部見たい！　というのが僕の夢なのだが、先月は思いもよらず河村黎吉の「指名犯人」(今月再放送)を見せていただいて嬉しかった。今月はなんと、佐分利信監督・主演作を含む4本をTV初放映。

「一夜の百万長者」(57)は古典落語「芝浜」(柳家小三治の名演がオススメ)の現代版。脚本は戦前の松竹で「生れてはみたけれど」(32)など数々の名作喜劇を書いた伏見晁。監督の斎藤寅次郎は松竹退社後も常に伏見に意見を仰いでいたそうだが、戦後は2人ともかつての才気を失ったようだ。が、池広一夫(助監督)や松村正温(原案)が、こういう映画を土台にして大映時代劇コメディの傑作を作ったと思えば、それでよし。

「たそがれの東京タワー」(59)は貧しいお針子と社長令息のスレ違いメロドラマの小品。「めぐり逢い」(57)のエンパイアステートビルを東京タワーで代用して「シンデレラ」を足した、少女漫画になりかねない話(星川清司脚本)が少しも陳腐に見えない。好青年の令息・小林勝彦は、池広一夫監督、市川雷蔵主演の傑作「影を斬る」(63)でも恐妻家の庶民的な殿様を好演。

「泣き笑い地獄極楽」(55)は未熟な落語家と寄席の三味線弾きが結ばれるまでを描いた芸道メロドラマ。原案は助監督時代の村野鐵太郎。題名の泣きも笑いも不足気味だが、師匠役の古今亭志ん生を見られるのは貴重。

さて真打は佐分利信監督・主演「悪徳」(58)である。普通の会社の社長、よき家庭人を装いながら、手形詐欺、会社乗っ取り、殺人を重ねるパクリ屋一味のボスと若い手下の葛藤と破滅を描く。脚本は佐分利監督のパートナーで、脚本家・丸山昇一の師匠でもあった猪俣勝人。脚本は渋谷実監督「現代人」(52)と同工異曲だが、佐分利の悪役は晩年の「日本の黒幕」(79)にもつながる貫禄がある。

佐分利信の趣味は読書と散歩だけだったという。以前、ロケ先で映画のままの無愛想な顔をして散歩中の彼と一瞬目が合ったが、声をかける勇気はなかった。大滝秀治も、近所を散歩中の佐分利信(なぜか道路工事をじっと眺めていた)を見かけたとき、やはり声をかけられなかったそうだ。その佐分利信は今、わが家の近くの都営小平霊園に眠っている。豆腐みたいな形の粗削りな石がゴロンと横たわっているだけの無愛想な墓は、いかにも彼らしくて、親しみさえ覚える。今なら気軽に声をかけられそうな気がする。

DVD&VIDEO RELEASE

DVD&ビデオリリース

丸山尚輝&やまもとかほ

先取り情報

●東宝
8／27「ヤマトタケル」
●20世紀フォックス　ホーム　エンターテイメント
8／2「サンバード　フィルム・コレクション」8／6「アップタウン・ガールズ　特別編」「スパニッシュ・アパートメント」
●角川映画
8／6「手を握る泥棒の物語」
●ブエナ・ビスタ・ホーム・エンターテイメント
8／18「オーシャン・オブ・ファイヤー」8／25「ブラザー・ベア」9／3「ホーンテッドマンション　特別版」9／15「コールドマウンテン」「コールドマウンテン　コレクターズ・エディション」
●日活
9／10「めざめ」「アリスのレストラン」「エリック・ザ・バイキング バルバラへの航海」「モダーンズ」「ソフィー・マルソーの三銃士」
●アーティストフィルム
8／27「アイデン&ティティ」9／3「幸せになるためのイタリア語講座」
●松竹
8／25「飛ぶ教室」
●ユニバーサル・ピクチャーズ・ジャパン
8／25「ペイチェック　消された記憶」
●ポニーキャニオン
8／18「シービスケット」

TOPICS

「ニモ」300万枚出荷
「千と千尋」に並ぶ歴代日本一の記録!

★ブエナ・ビスタ・ホーム・エンターテイメントは「ファインディング・ニモ」(6／18)のDVDの初回出荷が300万枚に達したことを発表した。これは「千と千尋の神隠し」に並ぶ歴代日本一の記録。今後どこまでこの数字が伸びるか注目される。また〈DISNEY／PIXAR今だけセール〉として期間限定で発売されている5作品(「トイ・ストーリー」「バグズ・ライフ」「トイ・ストーリー2」「モンスターズ・インク」「スペース・レンジャーバズ・ライトイヤー／帝王ザーグを倒せ!!」)も「～ニモ」との相乗効果で合計で100万枚を突破した。
★東宝が昨年暮れにユーザーアンケートを実施した「想い出の映画リクエスト」キャンペーンの結果を参考に、昭和を代表する名作・傑作群の発売を8／27から開始。その第1弾作品となるのは、「無法松の一生」「人情紙風船」「青い山脈　前・後篇」「銀嶺の果て」の4作品。また、来年8／20の成瀬巳喜男生誕100年に合わせ、「浮雲」「めし」などを続々とリリース予定。
★8／6に発売される「着信アリ」(角川映画／VAP)が劇場映画としては世界初となる「PST(パーソナル・サラウンド・テクノロジー)」を採用。このシステムは通常のヘッドホンで5.1chサラウンドシステムを疑似体験できるというもので、自宅に5.1chシステムを整えていないユーザーにとってはうれしいニュースとなりそう。

ビデオレンタルランキングTOP20
[5月31日現在　月刊「ビデオ・インサイダー・ジャパン」より]

順位	前回	タイトル	発売元
1	[illegible]	ラスト　サムライ	ワーナー
2	43	バッドボーイズ2バッド	ソニー
3	4	キル・ビル　Vol.1	ユニバーサル
4	1	マトリックス　レボリューションズ	ワーナー
5	[illegible]	木更津キャッツアイ　日本シリーズ	TBS
6	5	陰陽師Ⅱ	角川映画
7	2	ティアーズ・オブ・ザ・サン	ソニー
8	3	座頭市	バンダイビジュアル
9	26	ブルース・オールマイティ	ポニー
10	8	リーグ・オブ・レジェンド／時空を超えた戦い	フォックス
11	[illegible]	死ぬまでにしたい10のこと	松竹
12	11	パイレーツ・オブ・カリビアン／呪われた海賊たち	ブエナ　ビスタ
13	21	S.W.A.T.	ソニー
14	6	フォーン・ブース	フォックス
15	16	ターミネーター3	東宝東和
16	7	フレディVSジェイソン	アミューズ、ヘラルド
17	[illegible]	24-TWENTY FOUR-シーズンⅡ vol.7	フォックス
18	[illegible]	24-TWENTY FOUR-シーズンⅡ vol.8	フォックス
19	[illegible]	g@me.	「g@me」製作委員会
20	22	トゥームレイダー2	東宝東和

月刊「ビデオ・インサイダー・ジャパン」(発行／ギャガ・クロスメディア・マーケティング)は、ビデオ販売店、レンタル店などで読まれている専門誌です。
お問い合わせは　03-3589-7636まで。

おすすめ新作 DVD

丸山尚輝

DVD

VIDEO同時レンタル
ソニー・ピクチャーズエンタテインメント
2003年・米・102分
監督／ロバート・ロドリゲス
出演／アントニオ・バンデラス、ジョニー・デップ、サルマ・ハエック
★3990円

7.28 S & R

レジェンド・オブ・メキシコ／デスペラード　コレクターズ・エディション
ONCE UPON A TIME IN MEXICO

シリーズ3部作完結編は曲者俳優が勢ぞろい！

●孤高のヒーロー、エル・マリアッチの活躍を描いた3部作の完結編!? 今回も華麗なるガン・ファイトは勿論のこと、ジャッキーも真っ青のバンデラスの体当たりアクションや、エキセントリックな演技で魅せるジョニー・デップが面白すぎ!! コーフン度MAX間違いなしだ。出演はほかに、サルマ・ハエック、ミッキー・ローク、ウィレム・デフォーら、豪華キャストが顔を揃えている。

尚、映像&音声特典として、ロバート・ロドリゲス監督による音声解説、撮影の舞台裏、未公開シーン集、フィルモグラフィ、DVD-ROM、オリジナル劇場予告編を収録するほか、初回生産分のみキャラクター・ポストカード4枚セットを封入する。また、高水準の画質と音質が楽しめる『SUPERBIT』版（4935円）と、「エル・マリアッチ」と「デスペラード」とを収めたお得な『トリプルパック』（8379円／初回生産限定）も同時発売される。

DVD

こちら葛飾区亀有公園前派出所 THE MOVIE2 UFO襲来！ トルネード大作戦!!

VIDEO同時レンタル
フジテレビ＝NAS＝集英社
2003年・日・100分
監督／高松信司　脚本／大川俊道　声／ラサール石井、森尾由美、平山あや
★3990円
●人気コミックの映画版第2弾。おなじみ両さんが、謎のUFO事件に遭遇!? ハワイと日本の下町を舞台に大暴れする。

7.14 S & R

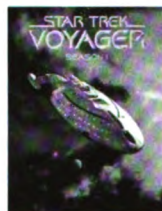
DVD

1980

VIDEO同時レンタル
東北新社
2003年・日・123分
監督・脚本／ケラリーノ・サンドロヴィッチ　出演／ともさかりえ、蒼井優、犬山犬子　★4935円
●舞台演出家、ケラリーノ・サンドロヴィッチが、三姉妹が巻き起こす騒動を80年代テクノ調に描いたコメディ。メイキングなどの映像特典付き。

7.7 S & R

DVD

スター・トレック ヴォイジャー DVDコンプリート・シーズン1
STAR TREK：VOYAGER

パラマウント　ホームエンタテインメント
95年・米・TV・736分　監督／ウィンリック・コルビー　出演／ケイト・マルグルー　★16590円
●スター・トレック ヴォイジャー編シーズン1を収めたBOX。映像特典も満載。おまけ付完全限定プレミアム・ボックス（21840円）も同時発売。

6.25 S

DVD

リクルート
THE RECRUIT

VIDEO同時発売
ポニーキャニオン
2003年・米・115分
監督／ロジャー・ドナルドソン　出演／アル・パチーノ
★3990円
●アル・パチーノとコリン・ファレル共演のサスペンス・アクション。未公開シーン集やインタビュー集、コリン・ファレルなどによるコメンタリーの特典付き。

7.14 S & R

DVD

かげろう
STRAYED

VIDEO同時発売
ポニーキャニオン
2003年・仏・95分
監督／アンドレ・テシネ　出演／エマニュエル・ベアール
★3990円
●エマニュエル・ベアール主演の官能ドラマ。監督&ギャスパー・ウリエルのインタビューやフォトギャラリーの映像特典。初回限定版のみポストカード封入。

7.14 S & R

DVD

ロズウェル／星の恋人たち DVDコレクターズ・ボックス2
ROSWELL

フォックス　ホームエンターテイメント
2000年・米・TV・540分　出演／シリ・アップルビー
★12600円
●NHKで放映された海外ドラマ・シリーズのBOX第2弾。第11話「母の愛」～第22話「幻の母」まで全12話を収録する。コメンタリー、オーディション風景などの映像特典付き。

6.24 S

★価格はすべて税込み。ただし、レンタルのみの場合は無表記。Sはセル、Rはレンタル、TFはテレビフィーチャー、OVはオリジナルビデオ。

DVD
幸福の鐘　デラックス版

VIDEO同時発売
ジェネオン　エンタテインメント
2003年・日・87分
監督・脚本／SABU
出演／寺島進、西田尚美　★4935円
●工場の閉鎖に伴い失職した男が遭遇する事件の数々。やがて、彼が辿り着いた先は……。メイキング、インタビュー、舞台挨拶風景などの映像特典付き。

7.23S&R

DVD
エイリアス～2重スパイの女 シーズン1 DVD COMPLETE BOX
ALIAS

VIDEOレンタル中
ブエナ・ビスタ・ホームエンターテイメント
2001年・米・TV・1005分　出演／ジェニファー・ガーナー
★15750円
●NHKのBS2で放映されたスパイ・アクション・シリーズの1stシーズン全22エピソードを収録した6枚組BOX。豪華映像特典付き。

7.23S／7.14R

DVD
ある女の存在証明【無修正版】
IDENTIFICAZIONE DI UNA DONNA

VIDEO同時レンタル
レントラックジャパン＝BIG TIME ENTERTAINMENT
82年・伊＝仏・123分
監督／ミケランジェロ・アントニオーニ
出演／トーマス・ミリアン
★2980円
●「イタリア映画名作コレクション」の第2弾として発売されるアントニオーニ監督のラヴロマンス。

7.16S

DVD
十戒　スペシャル・コレクターズ・エディション
THE TEN COMMANDMENTS

パラマウント　ホームエンタテインメント
56年・米・232分
監督／セシル・B・デミル　出演／チャールトン・ヘストン
★4935円
●映画史に残るスペクタクル大作がスペシャル版としてDVD化。約37分のドキュメンタリー映像、歴代予告編、キャサリン・オリソンによる音声解説付き。

7.23S

DVD
ガキンチョ★ROCK

VIDEO同時発売
バンダイビジュアル
2003年・日・85分
監督／前田哲　出演／西野亮廣、梶原雄太　★3990円
●人気の若手芸人コンビ、キングコングとロザンの4人が主演した青春コメディ。映像特典満載の初回限定「まいどおおきに!!スペシャルディスク」(5250円)も同時発売。

7.23S&R

DVD
ラブストーリー
THE CLASSIC

VIDEO同時レンタル
レントラックジャパン＝BIG TIME ENTERTAINMENT
2003年・韓・129分
監督／クァク・ジェヨン　出演／ソン・イェジン　★3990円
●「猟奇的な彼女」のジェヨン監督による切ない愛の物語。舞台挨拶などを収めた特典ディスクと2枚組。初回限定メロディ付きパッケージ。

7.16S&R

DVD
ZODA　ゾーダ
TRECK

VIDEO同時発売
アートポート
2002年・タイ・未公開・102分　監督／チャンチャイ・パンタシ　出演／ダナイ・スムスコチョーン
★3990円
●タイからやって来たモンスター・パニック編。"幻の象"を求めて密林へと足を踏み込んだ調査隊を待ち受けていたものとは……。

7.23S&R

DVD
緊急逃亡
PRESSURE

VIDEO同時発売
東芝エンタテインメント
2001年・米・TF・90分　監督／リチャード・ゲイル　出演／カー・スミス
★3990円
●「ドーソンズ・クリーク」のカー・スミス主演のサスペンス・アクション。とんでもないトラブルに巻き込まれた医学生の死闘を描く。

7.23S&R

DVD
半落ち

VIDEO7.9レンタル
東映ビデオ
2004年・日・122分
監督・脚本／佐々部清　脚本／田部俊行
出演／寺尾聰、柴田恭兵、原田美枝子
★5460円
●早くも本年度ナンバー1の呼び声高い、横山秀夫原作の人間ドラマ。日本映画界を代表する役者陣が、魅せます！　泣かせます！

7.21S／7.9R

DVD
タイムライン
TIME LINE

VIDEO同時発売
アミューズソフトエンタテインメント
2003年・米・116分
監督／リチャード・ドナー　出演／ポール・ウォーカー
★3990円
●マイケル・クライトン原作のSFアドヴェンチャー。メイキング、吹き替えを担当した玉木宏コメントなど映像特典満載。

7.23S&R

DVD
クライム・エンジェル
THOUGHTCRIMES

VIDEO同時レンタル
ユニバーサル・ピクチャーズ・ジャパン
2003年・米・未公開・90分　監督／ブレック・アイズナー　出演／ナビ・ラワット
★3990円
●ヤン・デ・ボン製作総指揮によるアクション。国家保安局のマイケルは、テレパシーを持つ女性・フレイヤに暗殺者の追跡を依頼する。

7.23S&R

DVD
アンテナ スペシャル・エディション

VIDEO同時レンタル
ハピネット・ピクチャーズ
2004年・日・117分
監督・脚本／熊切和嘉　出演／加瀬亮、小林明実　★4935円
●現代人の心の闇に迫る"スピリチュアル・サスペンス"。メイキング、インタビュー、TV特番、ヴェネチア国際映画祭風景などの映像特典付き。

7.23S&R

おすすめ未公開作品 これだけは見逃すな！

丸山尚輝

DVD

エムスリイエンタテインメント
77年・日・TS・1170分
監督／富本壮吉、降旗康男
出演／田宮二郎、松原智恵子、岡本富士太、野際陽子、伴淳三郎、長門裕之、ハナ肇、岡江久美子
★35280円

6.23 S

白い荒野

田宮二郎主演のテレビドラマ 待望のDVD化！

●唐沢寿明主演でリメイク、高視聴率をマークした『白い巨塔』。その78年のＴＶシリーズもＤＶＤ化されたことから、若い世代にもその名が浸透した田宮二郎が、73年から主演、ＴＢＳ系で放映された“白い”シリーズの５作目にあたる作品のDVD－BOX（ちなみに、シリーズはほかに『白い影』『白い滑走路』『白い地平線』『白い秘密』)。『ある女子高生の遺書』から『いつか緑の草原で』までの全26話と、映像特典として全話オリジナル予告編を併録する。監督は富本壮吉、降旗康男。出演は、松原智恵子、岡本富士太、野際陽子、伴淳三郎ら。主題歌を岸田智史。

“週刊毎朝”の敏腕編集長にして記者でもある仁科純一は、高校教師でオリンピック候補選手である田原を取材するうち、ひとりの女子高生の自殺事件に遭遇。彼女が遺した遺書を発端に、やがて暗い渦に巻き込まれていくのであった……。

DVD

マスター・アンド・コマンダー
MASTER AND COMMANDER THE FAR SIDE OF THE WORLD

VIDEO同時レンタル
ユニバーサル・ピクチャーズ・ジャパン
2003年・米・139分
監督／ピーター・ウィアー　出演／ラッセル・クロウ
★4179円
●アカデミー賞撮影賞ほかを受賞したアドヴェンチャー巨編。製作ドキュメント、未公開シーン、マルチカメラ撮影などの映像特典付き。

7.23 S & R

DVD

ブラディ・サンデー
BLOODY SUNDAY

パラマウント　ホームエンタテインメント
2002年・英＝アイルランド・未公開・110分　監督／ポール・グリーングラス　出演／ジェームズ・ネスビット　★4179円
●72年、北アイルランドで実際に起きた、一般市民と軍隊の抗争事件を描くドラマ。監督、原作者ほかによる音声解説などの特典付き。

7.23 S & R

DVD

チアーズ！２
BRING IT ON AGAIN

VIDEO同時レンタル
ユニバーサル・ピクチャーズ・ジャパン
2003年・米・未公開・90分　監督／デイモン・サントステファーノ　出演／アン・ジャッドソン＝イェガー　★3990円
●「チアーズ！」待望の続編。名門チアリーディング部を退部したふたりの女の子が、新チームを結成するが……。

7.23 S & R

DVD

嗤う伊右衛門

VIDEO7.7レンタル
角川映画
2004年・日・128分
監督／蜷川幸雄　脚本／筒井ともみ　出演／唐沢寿明、小雪
★4935円
●伊右衛門とお岩の物語を、新しい解釈で描いたドラマ。メイキング、インタビューなどを収録した特典ディスクと２枚組。尚、初回版のみ特製化粧箱入り。

7.23 S／7.7 R

DVD

ホーンブロワー 海の勇者 DVD-BOX1
HORNBLOWER

VIDEO同時レンタル
ハピネット・ピクチャーズ
98年・英・ＴＶ・401分　監督／アンドリュー・グリーヴ　出演／ヨアン・グリフィズ　★15960円
●ＮＨＫのＢＳ２で放映されたテレビ・シリーズの１stシーズンの第１話～第４話までを収録したＢＯＸ。第２弾は９／24発売。

7.23 S

DVD

ニューオーリンズ・トライアル/陪審評決 プレミアム・エディション
RUNAWAY JURY

VIDEO同時発売
東宝東和
2003年・米・128分
監督／ゲイリー・フレダー　出演／ジョン・キューザック
★3990円
●ジョン・キューザック、ジーン・ハックマン、ダスティン・ホフマン共演の法廷サスペンス。コメンタリー、メイキング、未公開シーン集などの特典付き。

7.23 S & R

★価格はすべて税込み。ただし、レンタルのみの場合は無表記。Ｓはセル、Ｒはレンタル、ＴＦはテレビフィーチャー、ＯＶはオリジナルビデオ。

No. 136 キネ旬DVDコレクション

10ミニッツ・オールダー
コレクターズ・スペシャル

「結婚は10分で決める」

「ライフライン」

「失われた一万年」

「女優のブレイクタイム」

「トローナからの12マイル」

「ゴア vs ブッシュ」

「夢幻百花」

10ミニッツ・オールダー コレクターズ・スペシャル

「TRUMPET」
◎2002年・ドイツ、イギリス・カラー、モノクロ・16:9LBビスタサイズ・5.1chドルビーデジタル・1時間28分
◎監督／アキ・カウリスマキ、ビクトル・エリセ、ヴェルナー・ヘルツォーク、ジム・ジャームッシュ、ヴィム・ヴェンダース、スパイク・リー、チェン・カイコー

「CELLO」
◎2002年・ドイツ、イギリス・カラー、モノクロ・16:9LBビスタサイズ・5.1chドルビーデジタル・1時間42分
◎監督／ベルナルド・ベルトルッチ、マイク・フィギス、イジー・メンツェル、イシュトヴァン・サボー、クレール・ドゥニ、フォルカー・シュレンドルフ、マイケル・ラドフォード、ジャン＝リュック・ゴダール

◎特典：メイキング、共同インタビュー集、オリジナル短編映画、予告編
◎7月9日発売／5985円（税込）
◎発売・販売元／日活

個性溢れる監督たちのそれぞれの生き方

文・新田隆男

ブロードバンドなどにも対応できることから、いわゆるスナックサイズ・ムービー、ショート・フィルムが空前のブームになっている。「Jam Films」や「セプテンバー11」など、それらの作品をコンピレーションした映画も劇場公開されているが、そんな中で誕生した究極の作品が「10ミニッツ・オールダー」の「TRUMPET（劇場公開時は『人生のメビウス』）」と「CELLO（劇場公開時は『イデアの森』）」だ。

「TRUMPET」「CELLO」あわせて15人の監督たちが参加しているが、その顔ぶれたるや、ベルナルド・ベルトルッチ、ジャン＝リュック・ゴダールといった"巨匠"から、アキ・カウリスマキ、ジム・ジャームッシュといった"個性派"まで、映画ファン垂涎の豪華な顔ぶれ。いずれも上映時間は10分と決まっているだけに、短い中に得意技を凝縮してくる監督が多く、ファンならニヤニヤ、逆にこれがその監督の出会いとなるような映画ファンなら、監督の個性を知る入門編として最良のテキストとなるだろう。

オモシロイ映画7本作品の「TRUMPET」

「TRUMPET」のトップバッターは、アキ・カウリスマキで、留置所から出たばかりの男が一人の女にプロポーズしてモスクワ行きの列車に乗る……「結婚は10分で決める」。代表作「過去のない男」のカティ・オウティネンとマルク・ペルトラ共演の10分間、といういきなりの豪華版である。削り取られたセリフと間合いで見せるカウリスマキ節全開だが、時間が短いだけに、いつもよりアップテンポ。カウリスマキは苦手、という人でもこれならイケ

るかも。
続く作品「ライフライン」はおどろくなかれ、ビクトル・エリセ監督作品！「ミツバチのささやき」「エル・スール」「マルメロの陽光」と70年代、80年代、90年代と10年に一本しか撮らない伝説の巨匠が挑んだ10分間なのだ。
　ベッドに寝ている新生児の腹のあたりに染み出してくる赤い血……隣で眠る母親はいつ気が付くのか、という静かなサスペンスを軸に、生命、死、過去、未来を暗示するショットがモノクロで展開される映像詩。密度の濃さはさすがである（しかし、次の新作は2010年代なのか?）。
「フィッツカラルド」や近作「神に選ばれし無敵の男」で文明や社会と人間というテーマを掘り下げたヴェルナー・ヘルツォークは、ここでも「失われた一万年」という作品で、近代文明に拘わらず生きた少数民族を描き出し、10分という時間と関係なくスケールの大きなテーマを取り上げる。
　その一方で、続くジム・ジャームッシュは「女優のブレイクタイム」という作品で、クロエ・セヴィニー演じる女優が、専用トレーラーの中で煙草を一本吸うだけの休憩を描き出し、相変わらずミニマリズムな描写の中に独自のセンスを発揮している。ヴィム・ヴェンダースの「トローナからの12マイル」はまさに〝ヴェンダース印〟のロード・ムービーだし、短い作品を監督したとしても、作家の個性というものはこれほど違うのだ、と改めて感心もする。「TRUMPET」にはほかにスパイク・リーとチェン・カイコーの作品も収録。

刺激的な映画 8作品の「CELLO」

　ベルトルッチやゴダールが参加している「CELLO」は「TRUMPET」に比べると観念的な作品が多くなっている。「リービング・ラスベガス」のマイク・フィッギスは、デジタルビデオによる「Timecode」で試した4分割画面をここでも応用したり（「時代×4」）、「メフィスト」などで知られるイシュトヴァン・サボーは劇中時間も10分で進行するリアルタイムの作品で主婦の日常がドラマティックに変貌する瞬間を捉えたり（「10分後」）、あるいは「ブリキの太鼓」のフォルカー・シュレンドルフは、終始宙を舞う実に特殊な視点から（それが何の視点かは見ての楽しみ）ひとつの家族を描いたり（「啓示されし者」）、実験作も多いのだ（変化球が多い中、「イル・ポスティーノ」のマイケル・ラドフォードが手がけた正統派SF「星に魅せられて」が案外、逆に新鮮だったりもする）。
　個人的に「CELLO」の中での最注目は、「スイート・スイート・ビレッジ」のイジー・メンツェル監督が、あの作品にも出演していたルドルフ・フルシンスキーを主演に、たった10分の中に過去の作品をコラージュして彼の人生を描いた「老優の一瞬」か。フルシンスキーは94年に亡くなったはずだが、どうやって〝新作〟を生み出したのかは、DVDに収録されているメイキングでも語られている。
なお、豪華監督の顔合わせとなるこのコンピレーション・シネマ、当然のようにメイキング映像もかつてない顔ぶれが揃い、ヴェネチア国際映画祭での記者会見風景など鳥肌もの。音へのこだわりを実演してくれるゴダールも貴重映像だろう。

「水の寓話」

「時代×4」

「老優の一瞬」

「10分後」「ジャン=リュック・ナンシーとの対話」

「啓示されし者」

「星に魅せられて」

「時間の闇の中で」

No. 137 キネ旬DVDコレクション

リタ・ヘイワース フィルム・コレクション

リタ・ヘイワース
フィルム・コレクション

「カバーガール」
◎1944年・アメリカ・カラー・スタンダードサイズ・ドルビーデジタル（モノラル）・1時間47分
◎監督／チャールズ・ヴィダー　共演／ジーン・ケリー

「今宵よ永遠に」
◎1945年・アメリカ・カラー・スタンダードサイズ・ドルビーデジタル（モノラル）・1時間32分
◎監督／ヴィクター・サヴィル　共演／リー・ボウマン

「地上に降りた女神」
◎1947年・アメリカ・カラー・スタンダードサイズ・ドルビーデジタル（モノラル）・1時間41分
◎監督／アレクサンダー・ホール　共演／ラリー・パークス

「カバーガール」

「ミュージック・イン・マイ・ハート」
◎1939年・アメリカ・モノクロ・スタンダードサイズ・ドルビーデジタル（モノラル）・1時間10分
◎監督／ジョセフ・サントリー　共演／トニー・マーティン

「雨に濡れた欲情」
◎1953年・アメリカ・カラー・スタンダードサイズ・ドルビーデジタル（モノラル）・1時間30分
◎監督／カーティス・バーンハート　共演／ホセ・ファーラー

「踊る結婚式」
◎1941年・アメリカ・カラー・スタンダードサイズ・ドルビーデジタル（モノラル）・1時間28分
◎監督／シドニー・ランフィールド　共演／フレッド・アステア

「晴れて今宵は」
◎1942年・アメリカ・カラー・スタンダードサイズ・ドルビーデジタル（モノラル）・1時間37分
◎監督／ウィリアム・A・サイター　共演／フレッド・アステア

◎特典：関連作品予告編、オリジナル劇場予告編、オリジナル・アート カード
◎発売中／17640円（税込）
◎発売・販売元／ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント

ショーシャンクの女神が舞う

文・細越麟太郎

晴天白日のファム・ファタール

秀作「ショーシャンクの空に」は誰もがご覧になっているだろう。

本誌の読者でもしご存じないとしたら、あなたは最近まで獄中で生活していた方だろう。いや、獄中にいても映画は見られる。無実の罪で服役中のティム・ロビンスは、調達屋のモーガン・フリーマンから、大きなリタ・ヘイワースのポスターを手に入れる。鑑賞のためだけでなく、壁に脱獄用に掘った穴を看守に見つからないように貼るためである。40年代。リタは男たちのアイドルであり、ゴッデス（女神）であり、セックス・シンボルだった。その夜もショーシャンク刑務所では彼女のヒット作「ギルダ」が上映されていた。そして雨の中、ティムはリタ・ヘイワースのポスターの裏から世紀の脱獄を決行したのだった。原作はスティーヴン・キングの短編「刑務所のリタ・ヘイワース」である。

とにかく当時のリタの人気は凄かった。日本にはほとんどの作品が戦後公開されたので、少々遅咲きだったのだが、あちらでは大戦の前後だから、ほとんどの

「今宵よ永遠に」

「地上に降りた女神」

「雨に濡れた欲情」

兵士は彼女のブロマイドを懐中に忍ばせて戦地に向かったと言われていた。

リタ・ヘイワースは40年代から50年代に活躍したコロンビア映画の大スターだったが、日本での人気がイマイチだったのは、公開が遅れてマリリン・モンローの時代にぶつかった不運のためである。芸人の一家に生まれたリタはミュージカル・スターを目指したのだが、当時はMGM社にスターが沢山いて、ワーナーはドリス・デイを売り、FOXにはモンローがいた時代。コロンビア映画でもミュージカルは製作していたが、戦後になって路線を変更し、リタ・ヘイワースは46年製作のフィルム・ノワール「ギルダ」がヒットしたために、犯罪映画のファム・ファタールを演じる羽目になってしまった。だから彼女には夜の妖艶な悪女のイメージが定着してしまったが、ほんとうのリタ・ヘイワースは陽気なダンサーだったのだ。

いま明らかになる リタの本領

今回DVD-BOXとして発売される7タイトルは、すべて彼女がコロンビア映画で主演したミュージカル作品である。ファム・ファタールの彼女の一面は、先に発売された「フィルム・ノワール・コレクション」に収録されているが、本来のショー・ガールとしてのリタの歌とナイス・ボディの踊りは、かくして初めて見られる訳。

「ミュージック・イン・マイ・ハート」は彼女のコロンビア映画での初めての39年製作ミュージカルで歌手のトニー・マーティンが共演している。舞台のあとに事故がきっかけで恋が芽生えるという、本邦初登場の貴重な一本である。

「踊る結婚式」はフレッド・アステアと踊る41年作品。好評なために翌42年にも同じくアステアと共演したのが「晴れて今宵は」だ。当時人気のラテン楽団ザビア・クガーも共演しているおしゃれな都会ミュージカル。

「今宵よ永遠に」は戦時下のロンドンを舞台にしたラブ・ストーリー。爆撃にもメゲずに唄い踊るダンサーの勇気と恋は「哀愁」のミュージカル版みたい。45年製作だ。

「カバーガール」は70年代にやっと日本でも公開された傑作で、ジーン・ケリーの共演。表紙モデルとして出世したリタが、結局は幼なじみのケリーのもとに帰ってくるという、心温まる絢爛総天然色のチャールズ・ヴィダー監督作品。

「地上に降りた女神」はアレクサンダー・ホール監督が自身の傑作「幽霊紐育を歩く」を47年にカラー・ミュージカルとしてリメイクした作品で、「ジョルスン物語」のラリー・パークス共演。リタはまさに女神として地上に降りてくるファンタジーだ。これも本邦初登場だから、ファンには必見の作品。「天国から来たチャンピオン」は、このモチーフを再利用している。

「雨に濡れた欲情」も再三映画化されたサマセット・モーム原作の「雨」で、ハワイを舞台にしたカーティス・バーンハート監督53年作品。ホセ・ファーラーが共演しているが、若きチャールズ・ブロンソンの顔も見られる。同じ年にコロンビア映画は同じハワイで秀作「地上より永遠に」を撮影していた。

「ミュージック・イン・マイ・ハート」

「踊る結婚式」

「晴れて今宵は」

No. 138　キネ旬DVDコレクション

マルクス・ブラザーズ
コレクターズ・ボックス

「マルクス捕物帖」

マルクス・ブラザーズ
コレクターズ・ボックス

出演／グラウチョ・マルクス、ハーポ・マルクス、チコ・マルクス

「オペラは踊る」（1935年・1時間31分）
◎監督／サム・ウッド

「マルクス一番乗り」（1937年・1時間49分）
◎監督／サム・ウッド

「マルクス兄弟珍サーカス」（1939年・1時間27分）
◎監督／エドワード・バゼル

「マルクスの二挺拳銃」（1940年・1時間20分）
◎監督／エドワード・バゼル

「マルクス兄弟デパート騒動」（1941年・1時間23分）
◎監督／チャールズ・ライナー

「マルクス捕物帖」（1946年・1時間25分）
◎監督／アーチー・L・メイヨー

◎特典：マルクス兄弟考／ハイ・ガードナー・ショー／傑作短編集／オリジナル劇場予告編／ドキュメンタリー／傑作アニメ短編集ほか
◎7月9日発売／9975円（税込）
◎発売・販売元／ワーナー・ホーム・ビデオ

最高最良最強のマルクス兄弟、DVDで一挙に笑え！

文・杉原賢彦

マルクス兄弟、MGMへ行く

コメディ映画の頂点から2番目（たぶん。でも、トップは誰なんだろう?）に位置するマルクス兄弟の、MGM時代の作品――「オペラは踊る」「一番乗り」「珍サーカス」「二挺拳銃」「デパート騒動」「捕物帖」のまとめて6作が、豪華5枚組みBOXセットとなってリリースされた。

ケッサク「我輩はカモである」を残してパラマウントを去ったマルクス兄弟が、名門MGMに移籍しての2年ぶり（その間、当時の人々がどれほどヤキモキしていたかは想像できないが）気合いの入った一発……じゃなかった、一笑（どころじゃないんだけれど）。とにかく、ハチャメチャなギャグをカマしたパラマウント時代から、洗練されたギャグを繰り出したMGM時代へ。さらにMGM後の「捕物帖」までを収めたこのBOXセットは、マルクス兄弟のみならず、ハリウッド・コメディの精髄（というか極致というか）がぎっしり詰まっているのだ。

そのマルクス兄弟の魅力については、全5枚のディスクに215分の長さにもわたって収められた特典映像を見てもらうのがもっとも手っ取り早いかもしれない。アメリカでも今年の5月にリリースされたばかりのBOXセットだけに、まさに満を持しての内容。作品に付されたコメンタリーや証言集、幕間のお楽しみ、ルーニー・テューンズをはじめとするカートゥーン集ではバッグス・バニーらが大暴れ、さらにはテレビ出演時の映像などなど。とり

わけ、「オペラは踊る」に収められたテレビ番組中でのグラウチョの素顔など（MGMの大プロデューサー、アーヴィング・サルバーグのことを語る）、映画のなかでは想像がつかないほどの真摯／紳士（?）な表情で、それだけで感動してしまうのであった。

壊れて弾けるマルクス・ワールド

ところで、パラマウント時代とMGM時代とのマルクス兄弟の作品には、大きな隔たりがある。自分たち自身が主役となり、ギリギリ当たるか滑るかのギャグの連打、スラップスティックな展開を身上としたパラマウント時代から、自分たちは脇に寄ってサブ・ストーリー（でもホントはこっちがメイン）でギャグを連射するようになってゆくMGM時代。サブ・キャラでありながらメイン・キャラ（もちろん、マルクス兄弟がホントの主人公なんだけれども、映画の設定上のとりあえずの、しかも善良な主人公）を食ってしまう可笑しみ。おまけに、コメディ・リリーフ的に登場するマーガレット・デュモンの堅物オバサンが、マルクス兄弟（たいてグラウチョだが）に振りまわされながらただひとりマトモなセリフを吐き続ける健気さ（?）にも、心うたれ笑いを禁じ得なくなるのだ。ついでに言っておくなら、MGMお得意のミュージカル・シーンへと突如としてずれ込んでゆく奇抜さは、どのミュージカル映画にも増してスリリングで映画的興奮と笑いが同居してパロディになり得ると同時に、ミュージカル映画のジャンルとしても突出した輝きを放っている。そしてそこにからむマルクス兄弟たるや……。

チコ、ハーポ、グラウチョの3人がそろった途端に、映画は狂い始めてゆく。もちろんそれはギャグの力によってなのだが、たとえば鴨川つばめが創造した『マカロニほうれん荘』で、ここは喫茶店だというのに突如としてきんどーちゃんがフレディ・マーキュリーに変身してゴリラダンスを始めてしまい、トシちゃん25才がカマキリ拳法の型をキメ、ところが沖田そうじは「なにやってんですか！」と叫ぶような画面の急転直下、ほとんどその変わり身の速さについていけなくて、頭のなかには無数の「?・?・?・?・?」が渦巻きながらも、なんかとんでもなく可笑しくヘンに壊れてしまうのだ。

が、その瞬間、瞬間風速1000メートルの暴風雨が襲ってピアノは壊れ、ストーリーは壊れ、ぼくも壊れ、ところがマルクス兄弟だけは平然としてギャグを連発し続ける。オペラの幕を滑り台にしての逃亡劇に、天井からぶら下がった電灯でターザンよろしく綱渡り、ご婦人の演説に象の雄叫びがかぶさり、卵茹で器の卵がなぜか鶏になってしまい、オペラすらもが『私を野球に連れてって』にすり代わってピーナツ売りが登場……荒唐無稽唯一無二なマルクス・ギャグを説明するなんてこと自体が不条理的なのだが、これを見ないでテロに遭うほうがもっと無条理かもしれない。

1本それぞれのお愉しみなんてことを言うのはムダというもの。ごっそりマルクス・ワールド、それも最高最良最強のマルクス兄弟をDVDで笑って笑いのめす愉楽歓楽極楽三昧の機会を逃すべからず！

「オペラは踊る」

「マルクスの二挺拳銃」

「マルクス一番乗り」

「マルクス兄弟デパート騒動」

「マルクス兄弟珍サーカス」

「マルクス捕物帖」

No. 139 キネ旬DVDコレクション

ウエスタン&ジョン・フォード監督作品

ワイアット・アープ
ロイ・ビーン
モガンボ
三人の名付親

「ワイアット・アープ」

「ワイアット・アープ」
◎1994年・アメリカ・カラー・16:9LBスコープサイズ・5.1ch ドルビーサラウンド・3時間10分
◎監督/ローレンス・カスダン　出演/ケヴィン・コスナー、デニス・クエイド、ジーン・ハックマン
◎特典：ドキュメンタリー/1994年テレビ特集「ワイアット・アープ：伝説と共に」/オリジナル劇場予告編

「ロイ・ビーン」
◎1972年・アメリカ・カラー・16:9LBスコープサイズ・モノラル・2時間3分
◎監督/ジョン・ヒューストン　出演/ポール・ニューマン、エバ・ガードナー
◎特典：オリジナル予告編

「モガンボ」
◎1953年・アメリカ・カラー・スタンダードサイズ・モノラル・1時間56分
◎監督/ジョン・フォード　出演/クラーク・ゲーブル、エバ・ガードナー、グレース・ケリー
◎特典：オリジナル予告編

「三人の名付親」
◎1948年・アメリカ・カラー・スタンダードサイズ・モノラル・1時間46分
◎監督/ジョン・フォード　出演/ジョン・ウェイン、ペドロ・アルメンダリス
◎特典：オリジナル予告編

◎7月9日発売/各3129円(税込)
◎発売・販売元/ワーナー・ホーム・ビデオ

志を高く生きた男たちの姿を描く

文・鬼塚大輔

DVDのリリースが活発となり、長らく観るチャンスのなかった古い作品をクリアな画面と音質で楽しめるのはもちろん喜ばしいことだが、新作でもなければクラシックでもない近作をもう一度じっくりと見つめ直すチャンスが与えられるのもありがたいことである。94年に公開された「ワイアット・アープ」がこの度、特典満載の2枚組で登場した。ここ数年不調の続いていたケヴィン・コスナーが、自作自演の快作西部劇「ワイルド・レンジ/最後の銃撃」でキャリアを正しい軌道に戻したかのように見える今、3時間を超える大作「ワイアット・アープ」にもう一度向き合ってみることは決して無駄ではない。

誰かがやらねばならなかった仕事

「ワイアット・アープ」が公開されてからまだ10年しか経っていないと言うべきか、それともいつの間にやら10年も経ってしまったと言うべきなのか。ケヴィン・コスナー(ワイアッ

ト・アープ)、デニス・クエイド(ドク・ホリデイ)、ジーン・ハックマン(アープの父)、マイケル・マドセン(バージル・アープ)というだけでも豪華な顔合わせだが、トム・サイズモア(バット・マスターソン、今よりかなり細い)、テア・レオーニ(サリー)、そしてジム・カヴィーゼル(ウォレン・アープ)など、この10年の間に大きな飛躍を遂げたスターたちがそれぞれ重要な役を演じていることに驚かされる。

数々の西部劇の題材となってきた名保安官ワイアット・アープの生涯を、ローレンス・カスダン/ケヴィン・コスナーのコンビはおそらくこれまで作られたどの作品よりも史実に忠実に描き出している。西部開拓の歴史に名高いOK牧場の決闘もきわめてリアルなタッチで描写されており、アープの人間としての苦悩もきっちりと描き込まれているがゆえに長尺作品となってしまっているわけだが、長尺作品をじっくりと楽しむのにもDVDというメディアは適している。

ゆったりとしたタッチと鮮烈な暴力描写で、ワイアット・アープの実像を描くという作業は、誰かがやらねばならなかった仕事であり、映画「ワイアット・アープ」は、今後さらに西部劇の歴史の中で異色の光を放っていくことになるだろう。

特典映像の中では、トム・スケリットを案内役にハリウッド製歴史映画の足跡をたどる「ワイアット・アープ:伝説と共に」(チャールトン・ヘストンやデイヴィッド・リーンも登場)が楽しい。

「ワイアット・アープ」

ヒーローたちの系譜

異色といえば、ジョン・ヒューストンがポール・ニューマンを起用して実在の"無法"判事(矛盾した言い回しですが)を描いた「ロイ・ビーン」はさらに変わり種。古い西部劇では悪役として登場することの多かったビーンを、ヒューストンは少年のように純粋な心を持った夢見人として描いている。ビーンに撃たれた人物の身体に空いた穴越しのショットなど、現在でも真似されることの多いテクニックにヒューストンの才気が光る。ニューマンの溌剌とした魅力(熊と戯れる場面の楽しさ!)が画面の隅々まで満ちあふれている。ロイ・ビーンが憧れ続けた大女優の役でエバ・ガードナーが特別出演している。

上記2本と同時発売となる残り2本は巨匠ジョン・フォード監督作品。三人の無法者が偶然名付け親となった赤ん坊を守り抜く「三人の名付親」はジョン・ウェインが西部劇の登場人物の一典型である"善良な悪人"を見事に演じきるクラシック。アニメ「東京ゴッドファーザーズ」と併せて鑑賞されることをオススメいたします。

最後の1本は西部劇ではなく、フォードが余裕綽々の態度で密林を舞台にしたラブ・ロマンスを綴る「モガンボ」。野生動物捕獲を生業とするクラーク・ゲーブルと元ショーガール、エバ・ガードナー、そして動物学者の妻グレース・ケリーとの三角関係が主眼のドラマ。

32年製作の「紅塵」のリメイク作品でゲイブルは22年ぶりに同じ役を演じて楽しそうである。ガードナーの美しさも特筆ものだが、自らの激情に忠実な女性というスターとしてのイメージとは違った役を熱演するグレース・ケリーの姿もめずらしい。

今回発売となる4作品は、ゲーブル、ウェイン、ニューマン、コスナーという主演男優たちの顔ぶれの点からも、ハリウッドが送り出してきた理想の男性像の変遷をたどる上で、すこぶる興味深いものとなっている。

「ロイ・ビーン」

「モガンボ」

「三人の名付親」

No. 140 キネ旬DVDコレクション

合衆国最後の日〈2枚組特別版〉

合衆国最後の日 〈2枚組特別版〉

◎収録／最長版（144分）、特別編集版（84分）
◎1977年・アメリカ、ドイツ・カラー・モノラル・最長版（スタンダードサイズ）、特別編集版（16:9 LBビスタサイズ）
◎監督／ロバート・アルドリッチ　出演／バート・ランカスター、リチャード・ウィドマーク、チャールズ・ダーニング
◎7月9日／4935円（税込）
◎発売・販売元／日活

ロバート・アルドリッチ監督の代表作

文・野村正昭

一筋縄ではいかない骨太の職人監督の代表作

　骨太な男たちの闘いを描かせては右に出る者なしのロバート・アルドリッチ監督の作品を、筆者が初めてリアルタイムで見たのは、「特攻大作戦」(67年)だった。今はなきシネラマ上映館テアトル東京で夢中になって見たものだ。そして30年代の不況下の中西部を舞台に列車にただ乗りするタフガイ・ヒーローと、それを阻止せんとする冷酷な車掌との闘いを描いた「北国の帝王」(73年)と、看守チームの、プロ・フットボールの試合をダイナミックに描いた「ロンゲスト・ヤード」(74年)の二作で、アルドリッチ熱は決定的なものになった。60年代から70年代にかけて、アルドリッチの映画が、鳴り物入りではなく、ごく普通に劇場公開されていた。その幸福を噛みしめたい。アルドリッチこそ、やや時代は遡るが、サミュエル・フラーやドン・シーゲルと共に、男気のあり方を身をもって教えてくれた恩人といえる。しかも単純な硬派ではない証拠に、「何がジェーンに起ったか?」(62年)や「甘い抱擁」(68年)では、女性心理をグロテスクなまでに容赦なく暴いてみせてくれたりもする。まったく一筋縄ではいかない油断できないオヤジだったのである。

　そのアルドリッチ監督の代表作の一本である「合衆国最後の日」(77年)がDVD化されることになった。公開当時は近未来だった81年という時代設定で、無実の罪に問われ服役していた元軍人が、仲間たちと共に脱獄し、ミサイル基地を占拠。合衆国崩壊の危機をはらんだ機密文書の公表を大統領に迫る。この要求を拒めば、ただちにミサイルは発射され、世界は核戦争に突入する。だが、文書が公

表されれば、アメリカの民主主義は根底から覆され、その威信は地に落ちる。二者選択を迫られ、苦悩する大統領と、大統領を犠牲にしても事件自体を揉み消そうとする政府首脳陣の思惑、基地に籠城する元軍人の怒りなどが、スリリングに交差し、火花を散らす。

元軍人役のバート・ランカスター、敵対する軍人役のリチャード・ウィドマーク、大統領役のチャールズ・ダーニングなど、重量級の役者たちの演技合戦は、四半世紀以上経った現在でも、見る者を圧倒する。

最長版、特別編集版の二種類を特典で収録

ところで危機的状況を観客に一瞬で伝えるため、アルドリッチ監督は、画面を二分割、あるいは四分割したマルチ・ショットで、サスペンスを大いに盛り上げる。最近では、海外テレビドラマ『24』でも効果的に使われていたので、ひょっとしたら『24』のスタッフも、本作や「ロンゲスト・ヤード」のマルチ・ショットを参考にしたのかもしれない。

また、基地のコントロール・センター内部には、制御装置のひとつとして、チューブの中にある化学物質をはずす場面がある。「少しでも傾ぐと破裂して、酸素と融合すると、死の水蒸気に変わる」と劇中でも説明される。その化学物質の名前はサリン。公開当時は耳慣れない名前だったが、今となっては時代の移り変わりを感じざるをえない。

アメリカの危機に、あくまでも誠実に対処しようとする大統領の存在も眩しい。史上最も愚かな大統領と呼ぶべきブッシュには、本作の大統領の爪の垢でも煎じて飲んでほしいくらいだが、そもそもブッシュには、このスティーヴンズ大統領の苦渋の意味さえ理解できないだろう。大統領側近のタカ派の閣僚の中には「この国は真実に耐えて生き残れると信じている」と語る人物もいて、アメリカの民主主義が立場を超えて存在した時代に、思わず衿を正したくもなる。また同時に、彼らが「大統領の代わりは、いくらでもいる」と、あっさり切り捨てる非常さにも慄然とさせられるが。

DVDには現存する最長の144分バージョンと、日本語吹き替えを重視した特別編集版84分バージョンの二種類が二枚組に収録されている。特別編集版の日本語吹き替えに収められている、リチャード・ウィドマーク＝大塚周夫の声を聞いていると、懐かしさで胸がいっぱいになってくるが、こういう感慨はTVの洋画劇場で育った世代にしか分からないだろうなあ。最長バージョンに比べると、特別編集版は大統領側の描写が大幅に割愛され、重要な登場人物のひとりが、物語の途中から消え、台詞のみで説明されていたりするが、それもまたご愛嬌。続けて比較しながら見れば、興味が倍増することは間違いなしと断言できる。

八甲田山 DVD発売記念 特別インタビュー

木村大作（きむら・だいさく）／1939年生まれ。58年に東宝撮影所に入社し、黒澤組、岡本組などの撮影助手を経て、73年の「野獣狩り」でデビュー、77年「八甲田山」の撮影で脚光をあびる。本作品の森谷司郎監督とのコンビ作は他に「聖職の碑」「海峡」「小説吉田学校」などがある。主な作品は「ブルークリスマス」「復活の日」「駅／STATION」「居酒屋兆治」「夜叉」「火宅の人」「あ・うん」「誘拐」「時雨の記」「鉄道員」「ホタル」「陽はまた昇る」「赤い月」など多数。

「八甲田山」撮影スナップ
森谷司郎監督（右）と
木村大作（キャメラ脇）

木村大作［撮影］
「八甲田山」はいかにして撮られたか

取材・文＝的田也寸志

もはや説明は無用であろう。森谷司郎監督による日本映画界未曾有の超大作「八甲田山」が、このたびハイビジョン・リマスターでDVD化された。今回は、同作品をはじめ後期森谷作品になくてはならない存在でもあった木村大作キャメラマンに、今や伝説ともなっている過酷な撮影エピソードや、森谷監督との思い出などを語っていただくことにした。

森谷司郎監督とどうしても組みたい

「森谷さんとは、もちろん黒澤組でこちらが撮影助手、あちらがチーフ助監督という時代はあったけど、そんなに接点はなかった。その後、森谷さんは監督に昇進して、いろいろ作品をやられていたけど、黒澤流の演出家だから、現場の雰囲気も黒澤組に似てるんだね。映画の質は繊細だし、本人は成瀬巳喜男さんを尊敬していたけど、現場は男っぽいんですよ。すぐグワーッとなるし（笑）、正直スタッフは怖いから就きたがらないんだな。でも、俺はそういう組がなぜか好きなんだね。だからいっぺん森谷組をやってみたいと思っていた。『潮騒』（71）のときに撮影助手を希望したんですよ。ただし『潮騒』はメイン・キャメラが中井朝一さんで、別班のキャメラは逢沢譲さんに決まってたんだけど、自分に別班のキャメラをやらせてくれって中井さんに1週間くらいお願いし続けたら、そのうち『お前、いい加減にしろ』と。それで諦めかけて撮影所内のサロンでお茶を飲んでいたら、中井さんと森谷さんがやってきて、本当にやりたいのか？って話になった。俺があんまりしつこいから、中井さんが森谷さんに話してくれたんだと思うんだよ。それで俺もまた『どうしてもやりたい！』と。そうしたら森谷さんが『大作に任せてみようよ』と言ってくれた。それで初めて森谷組を経験したわけです。『潮騒』で俺は実景の別班やらBキャメラやら、いろいろ撮ったんだけど、ラッシュを見て森谷さんは俺を認めてくれたんだね。本人から直接は聞いてないけど、『大作はサイズがいい』って中井さんに言ってくれたらしいです」

森谷監督との次が「日本沈没」（73）になる。このとき木村キャメラマンは「野獣狩り」（73）で一本立ちしたばかりだった。

「『日本沈没』はAキャメラが村井博さんで、俺がBキャメラ。でも、そのとき森谷さんが『これはほとんど黒澤システムでやるから』と言ってくれたんだ。つまり、現場では2キャメラで、お前に任せるから好きに撮ってくれということですよ。じゃあ、俺はどういうことをしたかというと、

普通Aキャメラが引いて撮るときは、Bキャメラは寄って撮るものだし、監督やメイン・キャメラマンの指示もある。でも俺は全部無視(笑)。つまりAキャメラが引いてても、俺も角度を変えて引いて撮ってるわけ。そういうのを平気でやってたなあ。『勝負!』なんて言いながらね(笑)。そうすると監督は、どちらかの画を使うことになるんだよな。ダビングにずっと立ち会って、これは村井さんの画、これは俺の画って全部チェックしてみたら、半分くらい俺の画を使ってくれてたね」

常人の神経で「八甲田山」は撮れない

そしていよいよ「八甲田山」の撮影に突入するわけだが。

「緒形拳が田代平のつつじが原で遊んでいる回想と幻想のシーン。そこが一番最初の撮影だったんですよ。それから春の実景とかね。確か昭和50年(1975年)の6月だったと思います。『とりあえず、そこだけ大作やってくれないか』ということで、森谷さん、プロデューサーの橋本忍さん、野村芳太郎さん、それと実景班の俺と助手ふたりが八甲田の民宿に泊まったんだけど、みんなでメシ食ってるときに『キャメラマン誰にしようか?』なんて、お三方が話してて宮川一夫さんとか川又昂さんとか、もう錚々たる名前が聞こえてくるわけ。そのとき俺は『またB班かあ』という感じになったね。まあ、その春の撮影のときは何も言わないまま東京へ帰ってきたんだけど、俺ももう一本立ちしてるわけだし、その後ちょっと考えちゃったんだな。それである日、あまり酒は飲めないんだけど森谷さんに『今日、飲みませんか?』と連絡したら、森谷さんは『おお、めずらしいことを言うなあ』と言ってわざわざ日吉から俺の住んでいる成城まで来てくれた。俺が行くんじゃないんだよ。森谷さんが来てくれたんだ(笑)。で、居酒屋で飲みながら頃合を見計らって、『この映画は3年はかかる。でも僕はBキャメラで3年もやってられません』と。そのとき俺は35歳ですよ。新人もいいところだし、後で考えると恐ろしいけど『どんな小さな映画でも、自分はトップでやりたい。だから申し訳ないけど、僕をBキャメラだとお考えのようでしたら、この作品はやりません』って言ったら、森谷さんは、そのときパッと考えを切り替えたんだろうな。『バカヤロー！　俺は最初からお前をメインと考えてるんだ！』って怒鳴られた。ずっと、誰にしようかなんてプロデューサーと話してたくせにね(笑)。まあ、それで俺も『では僕も、何年かかろうが、ぜひやらせてください！』ということになったんです。だから『八甲田山』というのは、言わば〝勝ち取った映画〟なんだね。あのとき黙っていたら、恐らく今の俺もなかった。また、あんな過酷な現場でカリカリしながらやってるわけだから、もし大キャメラマンの下でBキャメラをやってたら気が狂ってたね(笑)」

雪にまみれながらの撮影ということでの心積もりなどはあったのだろうか。

「あそこまで過酷とは思ってなかったね。実は当時あまり雪に詳しくなかった(笑)。それに、俺もその後いろんな雪国に行ってるけど、八甲田だけは全く別の世界。あれは魔の山だよ。これはもう行って体験してみないと理解してもらえない。3年前『ホタル』で久々に八甲田を撮りに行ったとき、助手たちから『あの映画は本当だったんですね』って言われたよ(笑)。低い山だけど風はすごいし、すぐホワイトアウトになる。原作には〝泳ぐ〟という文

DVD
「八甲田山　特別愛蔵版」
◎シネスコ・ドルビーデジタル・170分・ハイビジョンテレシネマスター版
◎映像特典／劇場公開時予告編、製作秘話(プロデューサー・脚本家橋本忍氏を囲んで)
◎初回特典／オリジナルポストカード付
◎発売中／5460円(税込)
◎発売元／スバック、エムスリイエンタテインメント
◎販売元／フィーストディストリビューション

章があって小説ならではの表現かと思ってたら、新雪だと本当に歩くというよりも泳がないと前に進めない。でも、そういうのは撮影して初めてわかったことで、やる前は大した事ないだろうくらいに考えてたね」

　映画の中の吹雪などは、全て本物が来るのをずっと待ちながら撮影した。

「ラストの八甲田に雪が降るところだけは合成でやったけど、後は全部本物の吹雪。普通なら道路脇とかで、扇風機とか使って撮りますよ。でも山奥だから、そんなものは使えないし、本物が来るまで待つしかない。だから高倉健さん以下、俳優たちを何時間も雪の中に立たせたりしてるわけですよ。俺らだって寒いし、早く帰りたい。でもあの当時、森谷さんが『これは自分たちの冒険だ』って言ってたけど、俺自身の意識もそうだったな」

　そんな状況下、作品のためなら現場では鬼になる木村キャメラマンの撮影ぶりは、今でも伝え聞かされる。特に壮絶なのは、体感温度零下30度の十和田湖湖畔で湖の中にどっぷり胸まで浸かりながらキャメラを回したという逸話だ。

「俳優さんが、もうあまりの過酷さに嫌になっちゃったんですよ。それで500メートル先の松の木まで移動してくださいって言っても、もう誰も動こうとしない。もう異様な雰囲気だったね。でもそのとき咄嗟に、俺の感覚的なものなのかな、つまり湖に入る必要なんかないのに入っちゃった。しかも胸の辺りまで。腰の辺りまでは価値がないでしょう。やるなら極端なことをやらないと。そして『キャメラ、ここー!』と叫んだら、森谷さんも俺の行動を理解してくれて、一緒に中に入ってくれた。ふたりとも狂ったんじゃないかって、みんな思ったみたい(笑)。でも、もう俺たちは狂ってるんだと。また、そうじゃないとあの映画は撮れない。あれを常人の神経でやったら10年はかかりますよ。で、『あちらへ移動してくださーい!』と叫んだら、ようやくみんな動いてくれた。そんなことがあって、健さんが他の俳優さんたちに『これからは、あいつの言う事だけは聞こう』と言ってくれたらしいね。

　それ以降、俺が不穏な行動に出たら止めようと思っていてくれていたらしく、健さんは自分の出番がないときでも、俺のそばに立っていた。あるとき、手袋をしてるとキャメラ操作の感覚がつかめないから素手になったんだけど、夢中になって金属のヘッドに触れて火傷しちゃって、それを離そうとしたら皮がベロッといっちゃって、血がピュッと飛んだ。それを見ていた健さんが、すぐに自分の軍手を脱いで渡してくれたんだけど、こっちも興奮してるから、思わず『そんなものはいらなーい!』と(笑)。もう時代劇の世界だね。そんな雰囲気でしたよ。そんな馬鹿馬鹿しい事、やらなくてもいいんだよね。でも、そうしないとあの過酷な状況の下、人間を動かす事なんかできなかった。もう戦争だったね。俺は武田の騎馬武者みたいなもんだよ。ホント、騎馬隊みたいに赤い旗竿まで差してたからね。あまりにも遠くの位置から望遠で狙うから、役者からするとキャメラがどこにあるかわからない。だからその赤い旗竿を目印に歩いてもらったりするわけ。衣装も上下ともに真っ赤。森谷さんは黄色ね。だから俺たちはアカレンジャー、キレンジャーって陰で言われてた(笑)」

　ついにはスタッフ&キャストから夜襲をかけられたこともあったとか。

「撮影が終わったある夜、みんなが宿の大広間で酒を飲んでたとき、俺はすぐ部

あまりの寒さに耐え切れず、脱走する俳優も出た。それほど過酷な撮影だった。

「八甲田山」
◎監督／森谷司郎　製作／橋本忍、野村芳太郎、田中友幸　企画／吉成孝昌、佐藤正之、馬場和夫、川鍋兼男　脚本／橋本忍　原作／新田次郎「八甲田山の彷徨」　撮影／木村大作　照明／大沢暉男、高島利雄　美術／阿久根巖　音楽／芥川也寸志　助監督／神山征二郎
◎出演／高倉健、北大路欣也、三國連太郎、加山雄三、丹波哲郎、小林桂樹、藤岡琢也、島田正吾、緒形拳、前田吟、森田健作、栗原小巻、加賀まりこ、秋吉久美子
◎製作／橋本プロ、東宝映画、シナノ企画　配給／東宝
◎初公開／1977年６月18日

◎日露戦争開戦を目前とした明治34年末、日本軍は対ロシア戦に備えて、寒地装備、寒地訓練を行うことを計画。その任務を命じられた青森第５連隊と弘前第31連隊は、生きては帰れぬ雪の八甲田山に足を踏み入れるのだが……。史実に基づく新田次郎の同名小説を森谷司郎監督、高倉健主演で完全映画化した本作は、製作決定から完成まで３年、製作費７億円をかけた、当時の日本映画としては空前の大作だった。氷点下30度、スタッフと出演者が遭難寸前で行われた撮影は、そのまま映画の迫力となり、興行的にも大ヒット、日本映画史上最高の記録を樹立した。

撮影現場での森谷監督と木村キャメラマン(右)。キャメラ位置がどこからでも分かるようにと木村氏は常に赤の防寒服を着込んで撮影していた。

除雪車に書かれたスタッフ、キャストたちの名前。

写真提供(上２点)／木村大作氏

屋に帰って寝てたら、いきなり10人くらいのスタッフと俳優が入ってきて、寝てる俺を大広間まで担ぎこんで、みんな馬乗りになって俺をぶん殴ったね。本当に俺の事を殺してやりたいとまで思った奴が随分いるらしい。その中の先頭が北大路欣也さんだったよ(大笑)。本番中も俳優たちが「冗談じゃねえよ!」「俺たちは牛や馬じゃねえんだ!」なんて言いながら歩いてるわけ。またその声が聞こえてくるんだな(笑)。こっちはこっちで「今言った奴は誰だー!」と。とにかくまともな精神状態では撮影できないって。そりゃみんな反抗したくもなりますよ。でもこっちだって反抗されようが何されようが、撮らなきゃいけないんだからね」

「八甲田山」が今の自分を作った

しかし、そうした撮影の狂気は、77年6月に公開されるや、配収26億円の大ヒットを記録することでようやく報われた。

「あの当時、600万人が観たんだからね。橋本さんや森谷さんは『絶対当てるんだ!』って言ってた。でも、正直俺は当たらないと思ってたんだ。だって雪の中を人が歩いてるだけで、ほとんど死んじゃう映画だよ(笑)。ただ、キャメラマンとしてはものすごく掻き立てられるものがある映画だった。それに、ある意味この映画でキャメラマンとしての自分を売り込もうと思っていた。もう世の中に出るために必死だったわけですよ。だからある種の欲望にかられて突っ込んでいった映画なんだけど、今振り返ると結局『八甲田山』が俺の映画作りそのものの原点になっている。だからよく代表作は何ですか? と聞かれても、俺はいろんな監督と組んでるから言わないようにしてるんだけど、でも出発は『八甲田山』であり、森谷司郎さんは恩人ですと。そう言って、どの監督も絶対嫌な顔はしないね。また、ただ歩いてるだけの映画かもしれないけど、その中から人間のエゴイズムというものが、一歩間違えただけでいかに多くの人を死に追いやるかということをものすごく表現している映画になってるよな。その意味でもこの映画は哲学だと、俺は思うよ」

「八甲田山」は、日本映画で初めてキャメラマンの名前が1枚タイトルで映し出された記念碑的作品でもある。

「しかも当時一番の新人だった、この俺がね。それは撮影が終わってから、橋本さんと森谷さんが『この映画は大ちゃんの力に負うところが大きすぎるから』という判断で、1枚で出してくれたんですよ。俺はこの映画に関して、現場のこと以外ほとんど覚えていない。でもその代わり、現場で一体何が起きていたかは、すべてといっていいほど語れますよ。そのくらい他のことは何も考えてなかった。撮るということしか考えてなかったね」

映画「八甲田山」で木村キャメラマンが学んだことは多々あるが、特に精神面で得たものは大きい。

「普通、撮影ってものは技術なわけだけど、正直俺は技術なんかいらないんじゃないかって思うときがあるんだよ(笑)。自然の成り行きに任せて撮る以外に方法がないのが『八甲田山』で、技術を凝らそうとしても何も出来ない世界。だから今『映画撮影とは何だ?』って問われたら『やみくもに撮ればいいんだよ!』って、若いキャメラマンや学生たちによく話すんだけど、キャメラマンってのは〝撮る人〟なんですよ。俺は『八甲田山』でその原点を学んだ。それに自然というものは、神が与えたもうた領域だから、こうやって撮りましたなんて技術論は何の用も成さない。ただお待ちして、撮らせていただきたい! と。躊躇しててもいけないし、後退も駄目。ただひたすら撮り続けること。それがいかに大変なことであるか、全てこの映画で学びましたよ」

最後に木村キャメラマンから日本映画&DVD界に広く提言しておきたいことがあると言う。「八甲田山」DVD化に際して、木村キャメラマンには製作サイドから何の連絡もなかったそうだ。今回だけではない。初ビデオ化のときからそうだったのだ。ビデオ&DVD化の際はその映画の撮影監督(旧作で故人の場合は、その助手など)が色補正など綿密な映像チェックを行ってマスターを完成させる。こうした作業は必ずしも全部に行われているわけではないが、木村キャメラマンは、そうしたチェックを行ってきた。

「『八甲田山』は自分の中でも特別な作品なだけに残念なんです。きっといろいろな問題があってのことなんだろうが、その映画の映像を任された者としては、やはりDVDの映像まできちんと責任を取りたい。これは自分だけの問題ではなく、撮影者全員の問題として、業界全体に受けとめてもらえるよう言っておきます。

日本映画紹介

データ表記■製作会社／配給会社／封切日／C＝カラー、BW＝モノクロ、PC＝パートカラー（使用フィルム：F＝フジ、EK＝コダック、A＝アグファ）／BU＝ブローアップ／FR＝フィルムレコーディング、LC＝レーザーシネマ／S＝スタンダード、V＝ヴィスタ、EV＝ヨーロピアンヴィスタ、CS＝シネマスコープ／D＝ドルビー、DSR＝ドルビーSR、S＝ステレオ、M＝モノラル／上映時間／映倫指定／封切代表館／M＝モーニングショー、E＝イヴニングショー、L＝レイトショー

hana&alice
〈花とアリス〉

Rockwell Eyes作品（プロデュース＊Rockwell Eyes）／東宝配給／04・3・13／C（）・V・DSR／125分／日比谷スカラ座2

スタッフ■監督／プロデューサー／脚本／編集／音楽■岩井俊二　アソシエイトプロデューサー■前田浩子　ラインプロデューサー■中山賢一　制作担当■橋本淳司／濱崎林太郎　撮影監督■篠田昇　撮影■角田真一　照明■樋浦雅紀／中須岳士　録音■益子宏明／岸直隆　美術監督■種田陽平　装飾■西尾共未　スタイリスト■申谷弘美　スチール■井上貴之　VE■佐藤隆彦　Character Effects／Character Created■A-T-Illusion　キャラクターエフェクツ・スーパーバイザー■伊藤太一

キャスト■荒井花…鈴木杏　有栖川徹子…蒼井優　宮本雅志…郭智博　滝津当郎…坂本真　有栖川加代…相田翔子　黒柳健次…平泉成　堤ユキ…木村多江　編集者現場担当…広末涼子　リョウ・タグチ…大沢たかお　アリスの母の連れの男…阿部寛　「冬の燕」スタッフ…吉岡秀隆　ディヴ・リー　石川伸一郎　相坂真菜美　矢上風子…黒澤愛　岸田茜　桑野東萌　三根麻由　久我未来　細山田隆人　笠原秀幸　児玉真菜　藤原ひとみ　篠原さや　嶋田絵里奈　池永亜美　松田一沙　圀原佑紀乃　池田沙織…伊藤歩　品田英雄　河井信哉　「漂流少年」監督…中野裕之　人気有名女優…叶美香　医者…テリー伊藤　室伏エリカ…アジャ・コング　森下能幸　猫田直　寺十吾　城明男　キムラ緑子　秋子さん役…虻川美穂子　「サルとルー」ホスト…ルー大柴　HARUMI…松尾れい子　楠木れんこ…ふせえり　「漂流少年」AD…大森南朋　CM制作会社スタッフ…梶原善　塩谷恵子　桜川博子　吉沢亜希子　齋藤真実　鈴木麗　山本みのり　相能美那子　樋口真未　小森あみ　石井里弥　榎本禅岳　榎本孝洋　ニコライ・イェンセン　ルイス・セレダ

解説■親友同士の女子高生と、彼女たちが想いを寄せる先輩男子が繰り広げる恋愛騒動を描いた青春映画で、インターネット配信された全3章4話構成のショート・フィルムの劇場版。監督・脚本は「Jam Films／ARITA」の岩井俊二。撮影監督に「べースボールキッズ」の篠田昇、撮影に角田真一があたっている。主演は、「Moon Child」の鈴木杏と「1980」の蒼井優、「リリイ・シュシュのすべて」の郭智博。

略筋■一目惚れした先輩・宮本と同じ落語研究会に入部した高校生のハナ。ある日、宮本がガレージのシャッターに頭をぶつけて意識朦朧として いるどさくさに紛れて、自分が今カノだと信じ込ませることに成功した彼女は、その嘘の為に幼なじみの親友で、モデルを目指すアリスを宮本の元カノ役■共犯者として巻き込んだ。ところが、このことがきっかけで宮本はアリスに好意を寄せるようになり、アリスもまた宮本に心惹かれるようになっていく。ハナに隠れてデートを重ねるアリスと宮本。しかし、そんな関係がいつまでも続く筈がなく、アリスはハナの為に身を引くが、ハナの嘘も宮本にばれ、彼女は失恋するのであった。その後、オーディションでバレエを披露し合格したアリスがファッション誌の表紙を飾り、それを機にハナとアリスは仲直りする。

花と蛇

東映ビデオ作品（製作協力＊ファム・ファタル）／東映配給／04・3・13／C（HD・F）・V・D／115分／R―18／銀座シネパトス

スタッフ■監督／脚本■石井隆　企画■石井隆／松田仁プロデューサー■清水一夫　制作担当■橋本寛　配給■守屋丈人　原作■団鬼六　撮影■佐藤和人／小松高志／柳田裕男　照明■安河内央之　編集■村山勇二　録音■北村峰晴　美術■山崎輝／髙橋俊秋／鈴木隆之／宮原啓輔　衣裳■南啓太／春原香代　音楽■安川午朗　音楽プロデューサー■石川光　スクリプター■田中小鈴　スチール■寺川真嗣　VE■佐藤隆彦　CG製作■G―スタジオ／鹿角剛　音響効果■中村佳央／勝亦さくら　緊縛指導■有末剛　SMアドバイザー■早乙女宏美　助監督■酒井直人／阿知波芳／斉藤雄仁

キャスト■遠山静子…杉本彩　遠山隆義…野村宏伸　田代一

平…石橋蓮司　森田幹造…遠藤憲一　野島京子…末向　ピエロの男…伊藤洋三郎　江口亮…山口祥行　川田一夫…中山俊　小林滋央　松田直樹　八下田智生　寺島進　飯島大介　有末剛　卯月妙子　川原京　ブレイク　クロフォード　ミスターブッタマン

解説■夫の裏切りによって、SMショウの生贄にされてしまった美貌の令夫人の姿を描いた官能ドラマ。監督は「TOKYO G.P.」の石井隆。5回目の映画化となる団鬼六の同名長篇を基に、石井監督自ら脚本を執筆。撮影を「行動隊長伝　血盟」の佐藤和人、小松高志、「白い船」の柳田裕男が担当している。主演は「ウルトラマンコスモス2　THE BLUE PLANET　ムサシ 13歳 少年編」の杉本彩。

略筋■〝遠山ビルディング〟社長・遠山隆義の妻にして、世界的タンゴ・ダンサーでもある静子は、彼女を我が物にしようと企むフィクサー・田代の奸計にまんまとはめられた夫の裏切りで、各界セレブ会員が集う円形コロシアムに生贄として差し出される。そこで、夜な夜な繰り広げられるSM殺人ショウのスタアに仕立て上げられるべく、様々な地獄の責めを受けることとなる静子。しかし、初めこそ抵抗を試みるも、ボディガードの京子が彼らの毒牙にかかったと知ると、流石の彼女も屈服するほかなかった。客の前で辱められ、その客たちにも凌辱されていく。そして、ショウの締めくくりは田代自ら彼女の肉体を堪能するのだ。だが、齢95の田代は腹上死。隙を見てコロシアムを逃げ出した静子は、迎えに来た夫に向けて銃爪を引く！　悪い夢に終止符を打つ為に……。

ヒバクシャ HIBAKUSHA 世界の終わりに

グループ現代作品／グループ現代配給／04・3・20（03・9・13　大阪・十三第七藝術劇場　M）／C（キネコ・16ミリ）・S・M／116分／渋谷ユーロスペース／M

スタッフ■監督＝鎌仲ひとみ　制作＝小泉修吉／川井田博之　撮影＝岩田まき子／家塚信　編集＝鎌仲ひとみ／松田美子／東京テレビセンター　録音＝東京テレビセンター　音声＝河崎宏一／村田次郎／中野威洋　音楽＝クリストフ・ヒーマン　字幕翻訳＝岩切なおみ／川久保麻子／庄山則子／田中純子

キャスト■ラシャ・アッバース　肥田舜太郎　ムスタファ・カーイリ　カーイリ家の人々　ジナン・ガーリブ・ハファン　ジュワード・アル・アリ　ワリード・アルジュブーリ　トム・ベイリー　ローラ・ベイリー　テリー・ベイリー　ルイーズ・ワインバーガー　リンダ・パンキパール　ボブ・ウィルソン　ケイシー・ルード　ケン・メルドラム　マイク・フォックス　ジム・スタッフル　ゲリー・マセット　池田早苗　石樽熙子　市川定夫　久保徳民　横山照子　岩佐幹三　大井輝子　小峰秀孝　嶋岡静男　高橋眞司　田中熙巳　中村彌　広畝百枝　福間由起子　丸屋博　山下兼彦　山下孫三郎　李点仙

解説■イラク・日本・アメリカ、世界各地に生きる〝ヒバクシャ〟たちの声を取材した長篇ドキュメンタリー。監督は、本作が劇場用初監督作となる「坂本龍一　銀行の未来—続 エデンの遺言」の鎌仲ひとみ。撮影を「授業としての入学試験」の岩田まき子と、家塚信が担当している。第77回本誌文化映画ベスト・テン第8位、日本映画ペンクラブ賞会員選出ベスト5ノン・シアトリカル第5位、芸術文化振興基金助成事業、国際交流基金助成事業作品。

内容■湾岸戦争後のイラクでは、白血病や癌にかかる子供の数が激増していた。米軍が使用した劣化ウラン弾から放出された放射能による〝体内被曝〟が原因と思われるが、未だその因果関係は科学的に証明されていない。98年、バグダッドの病院で知り合った14歳の少女・ラシャが白血病で亡くなったのをきっかけに、鎌仲監督は世界のヒバクシャたちの声を聞く旅に出る。自らも広島で被爆し、その後57年間、ヒバクシャの医療に携わってきた肥田医師。劣化ウラン弾によって汚染されたバスラに暮らす白血病の少年・ムスタファや、長崎で体内被曝した人々。そして、ワシントン州にあるプルトニウム製造のハンフォード工場の風下で農業を営むトム・ベイリーさんは、ヒバクシャと認められないまま死んでいった多くの犠牲者を代表し政府を訴え続けている。肥田医師が興味深い統計を纏めた。それによると、チェルノブイリ原発事故の丁度10年後、東北・北海道地方で乳癌や乳幼児の死亡率が格段に増えており、このことから、もし放射能と癌発生の因果関係が証明されれば、放射能は時間をかけて日本にまで降り注いでいると考えられるのだ。だがそれなのに、またしても米英軍はイラクに約2000トンもの劣化ウラン弾を落とし、日本でも53基の原発が稼働、六ヶ所村の再処理工場も試運転を始めようとしている……。

赤目四十八瀧心中未遂

赤目製作所提唱作品（提携＊T.M.R.／企画＊赤目製作所／

企画協力＊文藝春秋）／赤目製作所配給／03・10・25（03・9・25 大阪・あべの橋近鉄アート館）／C（F）・CS・DTS／159分／R－18／ポレポレ東中野

スタッフ■監督＝荒戸源次郎 製作＝河津秋敏／石川富康／村山治／橘秀仁 プロデューサー＝村岡伸一郎 協力プロデューサー＝林海象／福原稔浩 製作担当＝田嶋啓次 原作＝車谷長吉 脚色＝鈴木棟也 撮影＝笠松則通 照明＝石田健司 編集＝奥原好幸 録音＝柿澤潔 美術＝金勝浩一 装飾＝佐々木博崇 衣裳＝宮本まさ江 音楽＝千野秀一 選曲＝浅梨なおこ スクリプター＝大和屋叡子 スチール＝江森康之 視覚効果＝石井教雄 音響効果＝斎藤昌利 図匠＝清野俵一 刺青実技指導＝三代目 彫よし 迦陵頻伽＝浅草彫長本家 達磨人形製作＝加野正浩 題字＝守拙日諄 助監督＝佐藤英明

キャスト■生島与一…大西滝次郎 綾…寺島しのぶ 岸田勢子…大楠道代 彫眉…内田裕也 犀…新井浩文 真田…大楽源太 棄…大森南朋 晋平…榎田貴斗 眠り猫…大村琥珀 辻姫…沖山秀子 娼婦…内田春菊 売女…絵沢萠子 新世界…赤井英和 出痔亀…秋山道男 蝦の頭…麿赤兒 三白眼…渡辺謙作 父巡礼…牧口元美 母巡礼…上杉幸子 爺公…森下能幸 山根…金子清文 ぴの…江森楡男 少年…森山一裕 私刑の男…貫山侑哉 労務者…武田一度 順死の男…狸穴善五郎 不動明王…小園久史 桃太郎…小島博幸 売春の男…金堂修一 焼肉屋店員…丸山桂子 土産屋店員…岩井美智子 鉄板焼屋親父…辻本晴夫 精肉店親父…崎山雅隆

解説■関西の裏町で出会った男女の、死出の旅路を描くドラマ。監督は「ファザーファッカー」の荒戸源次郎。第119回直木賞受賞の車谷長吉同名小説を基に、鈴木棟也が脚色。撮影を「さよなら、クロ」の笠松則通が担当している。主演は、新人の大西滝次郎と「SIBERIAN EXPRESS 2〈シベリア超特急2〉」の寺島しのぶ。第77回本誌日本映画ベスト・テン第2位、日本映画主演女優賞（寺島しのぶ）、日本映画助演男優賞（大森南朋）、日本映画助演女優賞（大楠道代）、日本映画新人女優賞（寺島しのぶ）受賞、第58回毎日映画コンクール日本映画大賞、女優主演賞（寺島しのぶ）、女優助演賞（大楠道代）、撮影賞、スポニチグランプリ新人賞（大西滝次郎）受賞、第46回ブルーリボン賞作品賞、主演女優賞（寺島しのぶ）、助演女優賞（大楠道代）受賞、第28回報知映画賞主演女優賞（寺島しのぶ）受賞、第27回日本アカデミー賞最優秀主演女優賞（寺島しのぶ）受賞、第25回ヨコハマ映画祭2003年度日本映画ベストテン第4位、主演女優賞（寺島しのぶ）、助演男優賞（大森南朋）、撮影賞受賞、第16回日刊スポーツ映画大賞主演女優賞（寺島しのぶ）受賞、第13回日本映画批評家大賞新人賞（大西滝次郎）受賞、照明技術賞受賞、文化庁支援作品。

略筋■生きる目的を失い、尼崎へと流れ着いた喰詰者の元作家・生島与一。変わった人々が暮らす古いアパートの一室、焼鳥屋〝伊賀屋〟の女主人・勢子の世話で臓物を捌き串に刺す仕事を得た彼は、やがて隣人の綾に心寄せるようになる。ある晩、組の上納金に手を着けたヤクザな兄のせいで博多へ身売りされることになった綾と肌を重ね至福の時を味わった生島は、彼女に乞われるまま死出の旅に発つ。目指すは、赤目四十八瀧。しかし、ふたりは死にきれず大阪へ戻るのであったが、その途中、綾は生島と別れ、ひとり博多へ向かうのだった。

阿修羅のごとく

「阿修羅のごとく」製作委員会（東宝＝博報堂＝毎日新聞社＝日本出版販売）作品（製作＊東宝映画）／東宝配給／03・11・8／C（EK）・V・D SRD／135分／日劇PLEX

スタッフ■監督＝森田芳光 製作統括＝島谷能成／安永義郎／加藤春樹／古屋文明 製作＝本間英行 「阿修羅のごとく」製作委員会＝瀬田一彦／藤巻直哉／吉田恵／山崎康史／松山彦蔵／岡本文子／藤沢美枝子／小松賢志／根岸悟／白濱なつみ プロデューサー＝市川南 アソシエイト・プロデューサー＝春名慶／三沢和子 製作担当者＝川田尚広／橋本靖 原作＝向田邦子 脚色＝筒井ともみ 撮影＝北信康 照明＝渡邊孝一 編集＝田中慎二 録音＝橋本文雄 美術＝山崎秀満 衣裳コーディネート＝宮本まさ江 衣裳＝千代田圭介 音楽＝大島ミチル 音楽プロデュース＝長崎行男／北原京子 音楽エディター＝浅梨なおこ 音楽ミキサー＝田中信一 スクリプター＝森永恭子 スチール＝工藤勝彦 デジタル・エフェクト＝髙田智洋／根元輝久 CGディレクター＝大屋哲男 音響効果＝伊藤進一 題字＝山藤章二 助監督＝杉山泰一 主題歌＝Brigitte Fontaine「ラジオのように Comme a la Radio」

キャスト■三田村綱子…大竹しのぶ 里見巻子…黒木瞳 竹沢滝子…深津絵里 竹沢咲子…深田恭子 竹沢恒太郎…仲代達矢 竹沢ふじ…八千草薫 里見鷹男…小林薫 勝又静雄…中村獅童 陣内英光…RIKIYA 枡川貞治…坂

東三津五郎　枡川豊子…桃井かおり　土屋友子…紺野美沙子　赤木啓子…木村佳乃　緒方…益岡徹　宅間…佐藤恒治　里見洋子…長澤まさみ　マユミ…EMI　学生…内浦純一　対戦相手ボクサー…大和心　インタビュアー…春木みさよ　編集者…尾谷樽　里見宏男…柿本祐貴　土屋省司…小林鷹馬　少年ファン…香川拓海　赤ん坊…川田悠介／岩田瑞生　女中…北川さおり　コミッションドクター…小林尚臣　レフェリー…森田健　ゴング…松原暢宏　ボクサー…浜谷康幸／相川やすし／中村圭太　うなぎ屋の出前持ち…三浦景虎　カメラマン…安保隆　看護婦…嶋田葵子　女子社員…桂木ゆき　ウエイター…渡辺慎一郎　ボーイ…小池章之　案内係…林田河童　ナレーション…加藤治子

解説■父親の愛人発覚を端に浮かび上がる、4人の娘たちのそれぞれの愛の形を描いた人間ドラマ。監督は「模倣犯」の森田芳光。向田邦子による同名原作を基に、「不機嫌な果実」の筒井ともみが脚色。撮影を「仔犬ダンの物語」の北信康が担当している。主演は、「GO」の大竹しのぶ、「T.R.Y.」の黒木瞳、「踊る大捜査線 THE MOVIE2 レインボーブリッジを封鎖せよ！」の深津絵里、「陰陽師Ⅱ」の深田恭子。第77回本誌日本映画ベスト・テン第5位、第58回毎日映画コンクール日本映画優秀賞、技術賞（渡邊孝一）、田中絹代賞（八千草薫）受賞、第46回ブルーリボン賞監督賞受賞、第28回報知新聞賞助演女優賞（深津絵里）受賞、第27回日本アカデミー賞作品賞、最優秀監督賞、最優秀脚本賞、助演男優賞（中村獅童）、最優秀助演女優賞（深津絵里）、助演女優賞（八千草薫）、撮影賞、照明賞、編集賞、録音賞、美術賞、音楽賞受賞、第25回ヨコハマ映画祭2003年度日本映画ベストテン第7位、最優秀新人賞（長澤まさみ）受賞、第16回東京国際映画祭特別招待作品部門オープニング上映、第16回日刊スポーツ映画大賞作品賞、助演女優賞（八千草薫）受賞、日本映画ペンクラブ賞会員選出ベスト5日本映画第4位作品。

略筋■昭和54年、冬。70歳を越える父・恒太郎に、愛人がいることが発覚した。三女・滝子の呼びかけで、久しぶりに顔を揃えた竹沢家の四姉妹は、そのことを母・ふじの耳だけには入れないよう約束するが、この事件を機に4人それぞれが抱える問題が露呈してくる。出入りの料亭の主人との関係をその妻に勘づかれてしまった、華道の師匠で未亡人の長女・綱子。サラリーマンの夫・鷹男の浮気を疑っているが、波風を立てないことが女の幸せと、そこから目を背けるようにしている次女の巻子。父の調査を依頼した探偵・勝又に恋愛感情を抱いているものの、潔癖性が祟ってなかなか進展しない、図書館に勤める三女の滝子。そして、同棲中の無名のボクサー・陣内の子供を身籠もったことをきっかけに結婚を決めた四女の咲子。ある日、新聞にまるで竹沢家のことを書いたような投書が掲載された。果たして、誰が書いたのか？　季節が移り、漸く滝子と勝又が結婚した。だがその一方、今はチャンピオンの陣内が倒れ、意識不明の重体になってしまう。更に、夫のことで心乱れる咲子を見舞うアクシデント。しかし、それを救ったのは、普段、何かと彼女とぶつかることの多かった滝子だった。昭和55年、正月。恒太郎は、愛人から別れを告白される。しかしその矢先、ふじが愛人宅近くの公園で倒れ、そのまま還らぬ人となった。彼女は夫に愛人がいたことを知っていたのだ。知っていて、ずっと我慢し続けていたのだ。四姉妹は、母の人生と自分たちのそれを重ね合わせ、涙した。竹沢家に新しい季節がやって来た。巻子の夫の浮気騒動も相手の結婚で決着がつき、陣内の容体も奇跡的に快方に向かっていた。ただ、綱子だけは今も男と別れられないでいる。春、母の墓参りを終えた四姉妹は、母の抽斗から“投稿のお礼”なるものを発見する。そう、あの記事はふじが書いたものだったのだ。彼女は、ただ我慢していただけではなかったのだ。

TAIZO

映画「TAIZO」製作委員会作品（製作協力＊ザ・チューブ／制作＊ビーバット）／チームオクヤマ配給／03・11・29／C（VX2000・DLP）・S・／96分／渋谷シネ・ラ・セット

スタッフ■監督／撮影■中島多圭子　製作■奥山和由　企画協力■一ノ瀬清二／一ノ瀬信子　エグゼクティブ・プロデューサー■棚次隆　プロデューサー■高木真寿美／上田徳浩／茂出木龍太／山田宏司　協力プロデューサー■小松敏和　編集■山田宏司　VTR編集■甲斐伸吾／加藤昭信／佐藤彩　音楽■深町純　音楽プロデューサー■佐藤輝夫

キャスト■一ノ瀬泰造（声）…坂口憲二　一ノ瀬清二（声）…川津祐介　ナレーション…中島多圭子　一ノ瀬信子　井川一久　赤津孝夫　古森義久　米津孝　横木安良夫　Chim Lok　Chamroeun Chanlavy　Chamroeun　Chanlavuth　Chamrieun Sosivann　Chia Kim Lean　Hoang Van Cuong　Nguyen Xuan Lam　Tranchi Tuyet

解説■没後30年を迎えた戦場カメラマン・一ノ瀬泰造の足跡を、生前の彼を知る人々のインタビューや彼が遺した写真の数々、日記や手紙、映画「地雷を踏んだらサヨウナラ」(五十嵐匠監督)の映像などを交えて追った長篇ドキュメンタリー。監督は、本作が映画初監督作品となる中島多圭子で、中島監督自ら撮影も担当している。声の出演に「新仁義なき戦い 謀殺」の坂口憲二ら。

内容■1947年11月1日、佐賀県武雄市に生まれた一ノ瀬泰造は、陸軍飛行学校写真班教官であった父・清二さんの影響で、幼い頃から写真に興味を持ち、66年、日本大学芸術学部写真学科に入学。UPI通信社でのアルバイトを経て、72年3月、戦火のカンボジアへフリー・カメラマンとして入国すると、当時、誰も生還出来ないとされたクメール・ルージュの聖域だったアンコールワットへの一番乗りに情熱を燃やした。初めこそ一旗揚げようとしていた泰造だが、現地の人々との交流や戦場の恐怖や悲惨さを目の当たりにするうち、写真を撮ることに命を懸け始める。ところが翌年11月、親友へ宛てた手紙を最後に彼は消息を絶ってしまう。クメール・ルージュに処刑された泰造の亡骸が、カンボジアのプラダック村で両親によって確認されたのは、9年後の82年だった。そして、彼が遺した2万齣に及ぶフィルムは、清二さんと母・信子さんの手で現像され続け、2003年6月、亡夫と泰造の遺志を継いだ信子さんは遂に念願の写真集を完成させる。

映画 あたしンち
ATASHiNCHi

東映■テレビ朝日■シンエイ動画作品(製作*シンエイ動画■tv asahi/あたしンち製作委員会*テレビ朝日■シンエイ動画■東映■メディアファクトリー■ADK)/東映配給/03・12・6/C(デジタル・)・V・DDSR D—EX/95分/丸の内東映

スタッフ■監督■やすみ哲夫 演出■牛草健 作画監督■大武正枝 製作■木村純一/加藤良雄/長谷川貞雄 企画■遠藤茂行/福吉健 プロデューサー■増子相二郎/西口なおみ/斎藤幸夫/魁生聡 制作統括■早河洋/楠部三吉郎 制作デスク■馬渕吉喜/別紙直樹 原作■けら えいこ 原作協力■メディアファクトリー 脚本■両沢和幸/高橋ナツコ 撮影監督■箭内光一 編集■小島俊彦/岡安プロモーション 録音監督■大熊昭 美術監督■沢登由香 音楽■相良まさえ CGI■堤のりゆき 効果■西村睦弘 絵コンテ■やすみ哲夫/牛草健 色彩設定■野中幸子 色指定■下浦亜弓 主題歌■矢野顕子「あたしンち」/渡辺久美子、折笠富美子「さらば」

キャスト(声)■母…渡辺久美子 みかん…折笠富美子 父…緒方賢一 ユズヒコ…阪口大助 しみちゃん…的井香織 岩木…緑川光 ハトの田中さん…高木渉 月岡修造…拡森信吾 月岡修造(少年時代)野島健児 吉岡…沼田祐介 ゆかりん…池澤春菜 春山…田中理恵 大山…まるたまり のばら…倉田雅世 山本…大西健晴 村上先生…太田真一郎 英語の先生…速水奨 水島…愛川里花子 戸山…玉川紗己子 じーちゃん…糸博 熊田…片岡富枝 幹事…大川透 メガネザル…隈本克成 おじさん…宝亀克寿 おばさん…三浦雅子/原亜弥 おばあさん…瀧本富士子 TVアナウンサー…千葉一伸/荻野志保子 バスアナウンス…永島由子 駅アナウンス…北澤典子 ウェイトレス…皆見明希

解説■どこにでもありそうな一家・タチバナ家に巻き起こる奇想天外な騒動を、コミカルに描いた長篇アニメーション。監督は「爆転シュート ベイブレード THE MOVIE 激闘‼タカオVS大地」のやすみ哲夫。けら えいこによる原作コミックを基に、「KEEP ON ROCKI'N」の両沢和幸とTVシリーズ「あたしンち」の高橋ナツコが共同で脚本を執筆。撮影監督に「ザ★ドラえもんズ ゴール!ゴール!ゴール!!」の箭内光一があたっている。声の出演に、「映画 犬夜叉 鏡の中の夢幻城」の渡辺久美子、「千年女優」の折笠富美子ら。テレビ朝日開局45周年記念作品。

略筋■ある雨の日、歩道橋で足を滑らせた母とみかんがおでことおでこをぶつけた瞬間、雷が直撃。ふたりの体が入れ替わってしまった! 父の案で暫く様子を見ることになった母とみかんは、それぞれの役割を果たそうと大奮闘するが、そんな中、みかんの修学旅行と言う大問題が発生した。高校生活最大のイヴェントに参加したい。そこで、みかんの親友・しみちゃんの協力の下、みかんと母はふたりで参加することを決意。無事、楽しい旅行を終えるのだった。ところが、今度は母の同窓会と言う問題が持ち上がる。しかし、みかんは修学旅行のお返しにふたりで出席することを決め、お陰で母も懐かしい旧友たちとの楽しい一時を過ごすことが出来たのだった。こうして、図らずも互いの気持ちを理解し合えた母とみかんは、入れ替わったのと同じ条件の日、父やユズヒコ、同じ境遇の田中さんらの協力で、元の体に戻ることに成功する。

外国映画紹介

データ表記順製作国＊製作会社／配給会社／製作年／封切日／C＝カラー、BW＝モノクロ、PC＝パートカラー／上映時間／S＝スタンダード、V＝ヴィスタ、CS＝シネマスコープ／D＝ドルビー・ステレオ、U＝ウルトラ・ステレオ、DSD＝ドルビー・ステレオ・ディジタル、DTS＝デジタル・シアター・システム、SDDS＝ソニー・ダイナミック・デジタル・サウンド、SR＝スペクトラル・レコーディング／EP＝エグゼクティヴ・プロデューサー

コールドマウンテン

Cold Mountain（冷たい山（地名））

英＝伊＝ルーマニア＊ミラージュ・エンタープライズ＝ボナ・フィデ・プロダクション作品（ミラマックス・インターナショナル提供）／東宝東和配給／03＝04・4・24／C・CS・ドルビーSRD／155分 字幕＝戸田奈津子

スタッフ■監督＝アンソニー・ミンゲラ 製作＝シドニー・ポラック／ウィリアム・ホーバーグ／アルバート・バーガー／ロン・イエルザ EP＝イアイン・スミス 脚本＝アンソニー・ミンゲラ 原作＝チャールズ・フレイジャー 撮影＝ジョン・シール 音楽＝ガブリエル・ヤール 美術＝ダンテ・フェレッティ 編集＝ウォルター・マーチ 衣装＝アン・ロス キャスト■インマン…ジュード・ロウ／エイダ・モンロー…ニコール・キッドマン／ルビー・シューズ…レニー・ゼルウィガー／モンロー牧師…ドナルド・サザーランド／セーラ…ナタリー・ポートマン／ヴィージー…フィリップ・シーモア・ホフマン／ジュニア…ジョヴァンニ・リビシ／ティーグ…レイ・ウィンストン／スタブロッド…ブレンダン・グリーソン／サリー・スワンガー…キャシー・ベイカー／エスコー・スワンガー…ジェームズ・ギャモン／マディ…アイリーン・アトキンス／ボジー…チャーリー・ハナム／渡し舟の少女…ジェナ・マローン／パングル…イーサン・サプリー／ジョージア…ジャック・ホワイト／オークリー…ルーカス・ブラック

解説■南北戦争によって引き裂かれた男女の純愛を、壮大な叙事詩として描き上げたラヴ・ストーリー。監督・脚本は「リプリー」のアンソニー・ミンゲラ。製作は「アイリス」のシドニー・ポラックほか。原作はチャールズ・フレイジャーのベストセラー小説。撮影は「リプリー」「ハリー・ポッターと賢者の石」のジョン・シール。音楽は「リプリー」「抱擁」のガブリエル・ヤール。美術は「ギャング・オブ・ニューヨーク」のダンテ・フェレッティ。編集は「リプリー」のウォルター・マーチ。衣装は「リプリー」「アダプテーション」のアン・ロス。出演は「リプリー」「ロード・トゥ・パーディション」のジュード・ロウ、「ドッグヴィル」のニコール・キッドマン、「恋は邪魔者」のレニー・ゼルウィガー、「スペース・カウボーイ」のドナルド・サザーランド、「25時」のフィリップ・シーモア・ホフマン、「スター・ウォーズ」シリーズのナタリー・ポートマン、「ロンドン・ドッグス」のレイ・ウィンストン、「28日後…」のブレンダン・グリーソン、「彼女の恋からわかること」のキャシー・ベイカー、「ロスト・イン・トランスレーション」のジョヴァンニ・リビシ、「ケイティ」のチャーリー・ハナム、「ジョンQ／最後の決断」のイーサン・サプリー、「すべての美しい馬」のルーカス・ブラック、「ブロンド・ライフ」のジェームズ・ギャモン、「ロイヤル・セブンティーン」のアイリーン・アトキンス、「イノセント・ボーイズ」のジェナ・マローン、ロック・バンド"ホワイト・ストライプス"のメンバーであるジャック・ホワイトほか。2004年アカデミー賞助演女優賞、同年ゴールデン・グローブ賞最優秀助演女優賞ほか受賞。

略筋■南北戦争末期の1864年。南軍兵士としてヴァージニア州の戦場に送られたインマン（ジュード・ロウ）は、瀕死の重傷を負って病院に収容される。回復を待つ間、彼の脳裏に浮かぶのは、3年前に離れた故郷コールドマウンテンの情景と、出征前にただ一度だけ口づけを交わした恋人エイダ（ニコール・キッドマン）の面影だった。彼女への愛に駆り立てられたインマンは、脱走兵として死罪に問われるのを覚悟で、故郷への道を歩み出す。一方、その間に父のモンロー牧師（ドナルド・サザーランド）を亡くす不幸に見舞われたエイダは、裕福な環境から、明日の食べ物にも事欠く苦境に陥っていた。そんな彼女を見かねて、隣人のサリー（キャシー・ベイカー）は、流れ者の女ルビー（レニー・ゼルウィガー）をエイダの農場に向かわせた。ルビーの指導によって、エイダはたくましく生きる術を身につけていく。その頃、インマンの徒歩での旅路は困難を極め、黒人奴隷を妊娠させて追放された牧師のヴィージー（フィリップ・シーモア・ホフマン）と道連れになったはいいが、一見気のいい農夫ジュニア（ジョヴァンニ・リビシ）に義勇軍に売り飛ばされてしまう。なんとか脱走したインマンは、山羊飼いの老婆マディ（アイリーン・アトキンス）や、若き未亡人セーラ（ナタリー・ポートマン）に助けられつつ、コールドマウンテンを目指す。そしてついに、インマンとエイダは再会。二人

は結ばれるが、しかし幸せな日々も束の間。インマンは義勇軍と撃ち合って死亡してしまう。戦争終決後、エイダはインマンとの間に出来た娘と、ルビーの家族とで平和に暮らすのだった。

パッション

The Passion of The Christ〔キリストの受難〕

米＝伊＊アイコン・プロダクションズ作品／日本ヘラルド映画配給／04＝04・5・1／C・CS・ドルビーSRD／SDDS／127分　字幕＝松浦美奈（字幕監修＝岡野啓子）

スタッフ■監督＝メル・ギブソン　製作＝メル・ギブソン／ブルース・デイヴィ／スティーヴン・マクヴィーティ　EP＝エンゾ・システィ　脚本＝ベネディクト・フィッツジェラルド／メル・ギブソン　撮影＝キャレブ・デシャネル　音楽＝ジョン・デブニー　美術＝フランチェスコ・フリジェリ　衣装＝マウリツィオ・ミレノッティ

キャスト■イエス・キリスト…ジム・カヴィーゼル／マグダラのマリア…モニカ・ベルッチ／イエスの母マリア…マヤ・モルゲンステルン／善き死刑囚ゲスマス…セルジオ・ルビーニ／サタン…ロザリンダ・チェレンターノ／ローマ帝国の総督ピラト…ホリスト・ナーモヴ・ショポヴ／ピラトの妻クラウディア…クラウディア・ジェリーニ／イスカリオテのユダ…ルカ・リオネッロ／大司祭カイアファ…マッティア・スブラージア

解説■新約聖書をもとに、イエス・キリスト最後の12時間と復活を描いた物語。監督・製作・共同脚本は「ブレイブハート」のメル・ギブソン。撮影は「パトリオット」のキャレブ・デシャネル。美術は「マレーナ」のフランチェスコ・フリジェリ。衣装も「マレーナ」のマウリツィオ・ミレノッティ。出演は「ハイ・クライムズ」のジム・カヴィーゼル、「マレーナ」「マトリックス　レボリューションズ」のモニカ・ベルッチ、「ユリシーズの瞳」のマヤ・モルゲンステルンほか。

略筋■紀元1世紀のエルサレム。イエス（ジム・カヴィーゼル）は、十二使徒の一人であるユダ（ルカ・リオネッロ）の裏切りによって大司祭カイアファ（マッティア・スブラージア）が差し向けた兵に捕えられ、市の城壁の内に連行される。夜の裁判でカイアファはイエスに救世主なのかと問い、肯定したイエスに対し、冒涜者だと宣告する。イエスを救おうとマグダラのマリア（モニカ・ベルッチ）はローマ兵にすがるが、望みは聞き入れられない。イエスの身柄はローマ帝国の総督ピラト（ホリスト・ナーモヴ・ショポヴ）に委ねられ、彼はイエスを十字架に掛ける判決を下す。ローマ兵により鞭打たれるイエス。変わり果てたイエスの姿を見かねたピラトは、この問題から身を引くことを示し、群衆の望みどおりに処すことを兵に申し渡す。十字架を背負わされ、エルサレムの街をゴルゴダの丘へと歩むイエス。惨刑に薄れゆく意識の中、母マリア（マヤ・モルゲンステルン）と過ごした楽しき日々や、十二使徒との巡礼の道を懐かしむ。そしてゴルゴダの丘で、イエスは十字架に掛けられる。磔にされてもなお、彼を裁こうとする人々の為に祈るイエス。まもなくイエスの生涯は最期を迎えるが、しかし、それから奇跡が起こり、彼は復活するのだった。

ドーン・オブ・ザ・デッド

Dawn of the Dead〔死者の夜明け〕

米＊ニュー・アムステルダム・エンタテインメント作品（ストライク・エンタテインメント＝ユニヴァーサル映画提供）／東宝東和配給／04＝04・5・15／C・CS・ドルビーSRD／SDDS／100分　字幕＝岡田壮平

スタッフ■監督＝ザック・スナイダー　製作＝リチャード・P・ルビンスタイン／マーク・エイブラハム／エリック・ニューマン　EP＝トーマス・A・ブリス／デニス・E・ジョーンズ　脚本＝ジエイムズ・ガン　撮影＝マシュー・F・レオネッティ　音楽＝タイラー・ベイツ　音楽監修＝G・マーク・ロズウェル　美術＝アンドリュー・ネスコロムニー　編集＝ニーヴン・ハウィー　衣装＝デニーズ・クローネンバーグ

キャスト■アナ…サラ・ポーリー／ケネス…ヴィング・レイムス／マイケル…ジェイク・ウェバー／アンドレ…メキー・ファイファー／スティーヴ…タイ・バレール／CJ…マイケル・ケリー／テリー…ケヴィン・ゼガーズ／ニコール…リンディ・ブース／ヴィヴィアン…ハンナ・ロックナー／ルダ…インナ・コロブキナ／イーボム…バート／ルイス…ジャスティン・ルイス

解説■感染によりゾンビと化した死者たちに襲われる恐怖を描いたホラー。1979年作「ゾンビ」のリメイク。監督はこれがデビューとなるザック・スナイダー。脚本は「スクービー・ドゥ」のジェイムズ・ガン。撮影は「ワイルド・スピードX2」のマシュー・F・レオネッティ。音楽は「奪還 DAKKAN／アルカトラズ」のタイラー・ベイツ。音楽監修は「スパイ・ゲーム」のG・マーク・ロズウェル。美術は「トータル・フィアーズ」のアンドリュー・ネスコロムニー。編集は「穴」のニーヴン・ハウィー。衣装は「スパイダー／少年は蜘蛛にキスをする」のデニーズ・クローネンバーグ。出演は「死ぬまで

にしたい10のこと」のサラ・ポーリー、「M：I－2」のヴィング・レイムス、「ザ・セル」のジェイク・ウェバー、「8Mile」のメキー・ファイファー、「ブラックホーク・ダウン」のタイ・バレール、「アンブレイカブル」のマイケル・ケリーほか。

略筋■看護婦のアナ（サラ・ポーリー）は、愛する夫ルイス（ジャスティン・ルイス）と幸せに暮らしていた。しかしある朝、隣家のヴィヴィアン（ハンナ・ロックナー）が人間離れしたスピードでルイスに襲いかかる。彼は息絶えたあと、すぐに復活してアナに突進。屋外に逃げた彼女は、人と人が殺し合う恐ろしい光景を目にした。地獄と化した町を抜け、アナは4人の生存者と出会う。警察官のケネス（ヴィング・レイムス）、麻薬の売人アンドレ（メキー・ファイファー）とロシア人で妊娠中のルダ（インナ・コロブキナ）のカップル、電化製品の販売員だったマイケル（ジェイク・ウェバー）。彼らは無人となったショッピングモールへ逃げ込む。だがそこには先客がおり、CJ（マイケル・ケリー）、テリー（ケヴィン・ゼガーズ）、イーボム（バート）の3人組は、モール内を支配しようとする。真相は依然つかめないままだが、ウイルスが原因であり、感染者に噛まれた人間は躊躇なく頭を撃ち抜くしか術はなかった。やがてモールの駐車場に集まる感染者の群れをくぐり抜け、さらなる生存者がトラックでやってくる。だがその中に感染者予備軍がおり、モール内のメンバーにも感染が広がっていく。そこでアナたち生存者は、モールを脱出して、途中で加わったスティーヴ（タイ・バレール）の船で海に出ることを決意。だがその過程でメンバーはどんどん脱落していき、CJは自爆、マイケルもついに噛まれてしまう。結局、アナとケネス、テリーとニコール（リンディ・ブース）だけが、とりあえず船に乗り込み脱出するのだった。

スイミング・プール

Swimming Pool（水泳プール）

仏＊カナル・プリュス＝FOZ＝フィデリテ・プロダクションズ＝フランス2シネマ＝ギメージズ作品／ギャガ・コミュニケーションズ配給（ギャガ・コミュニケーションズ＝テレビ東京提供）／03＝04・5・15／C・V・ドルビーSR／ドルビーデジタル／DTS／102分　字幕＝松岡葉子

スタッフ■監督＝フランソワ・オゾン　製作＝オリヴィエ・デルボス／マルク・ミソニエ　脚本＝フランソワ・オゾン／エマニュエル・ベルンエイム　撮影＝ヨリック・ルソー　音楽＝フィリップ・ロンビ　美術＝ウオウター・ズーン　編集＝モニカ・コールマン　衣裳＝パスカリーヌ・シャヴァンヌ

キャスト■サラ・モートン…シャーロット・ランプリング／ジュリー…リュディヴィーヌ・サニエ／ジョン・ボスロード…チャールズ・ダンス／マルセル…マルク・ファヨール／フランク…ジャン・マリー・ラムール／マルセルの娘…ミレイユ・モセ

解説■スイミング・プールで起こった殺人事件をめぐって、謎が重層的に絡み合うシュールなミステリー。監督・脚本は「8人の女たち」のフランソワ・オゾン。共同脚本は「まぼろし」でオゾンと組んだエマニュエル・ベルンエイム。撮影は「ホームドラマ」など、初期のオゾン作品を担当していたヨリック・ルソー。音楽は「まぼろし」のフィリップ・ロンビ。衣裳は「8人の女たち」などオゾン作品常連のパスカリーヌ・シャヴァンヌ。出演は「まぼろし」のシャーロット・ランプリング、「8人の女たち」のリュディヴィーヌ・サニエ、「ゴスフォード・パーク」のチャールズ・ダンスほか。2003年ヨーロッパ映画賞最優秀主演女優賞受賞。

略筋■南フランス、プロヴァンス地方の高級リゾート地。ある夏の日、イギリスから人気女流ミステリー作家のサラ（シャーロット・ランプリング）が訪れ、出版社の社長ジョン（チャールズ・ダンス）の別荘に滞在し、新作の執筆に取り掛かる。ところがそこへ突然、社長の娘と名乗るジュリー（リュディヴィーヌ・サニエ）が現われた。自由奔放なジュリーは、毎夜ごと違う男を連れ込み、サラを苛立たせる。だがその嫌悪感は次第に好奇心へと変化していき、サラはジュリーの行動を覗き見するように。そんなある夜、ジュリーはまた別の男を連れて帰ってきた。彼は、サラが毎日のように通うカフェのウエイターで、彼女がほのかな好意を寄せているフランク（ジャン＝マリー・ラムール）だった。ジュリーはサラを挑発するようにフランクと踊り、やがてサラも体を揺らし始める。しかし翌朝、プールサイドのタイルの上に血痕が発見された。ジュリーが、逃げようとしたフランクを石で撲殺したのだった。それを知ったサラは死体遺棄を手伝い、ジュリーは別荘から去っていく。そのあと、サラは社長ジョンに「スイミング・プール」と題された新作の原稿を見せる。ジョンは気に入らないと言い、実は今までの一件は、サラが創作した小説の内容だった。サラはそれは分かっていたと返して、別の出版社で製本した本を彼に渡す。そして出版社を去ろうとした時、ジュリーとは別人の、本物の社長の娘が現われるのだった。

訃報

—映画・TV界—

ハリー・バビット氏（米／歌手）4月9日に死去。90歳。ビッグ・バンド時代にケイ・カイザー楽団で歌声を披露。日本劇場未公開の「プレイ・メイツ」41など7本の映画に出演したほか、"ウッドペッカー"の笑い声でも知られていた。

斎藤高順氏（さいとう・たかのぶ／作曲家、元警視庁音楽隊長）4月11日、虚血性心不全のため死去。79歳。小津安二郎監督と親しく、「東京物語」53、「早春」56、「東京暮色」57、「彼岸花」58、「秋刀魚の味」62など、小津作品後期の音楽のほとんどを手掛ける。72年に航空自衛隊航空中央音楽隊長に就任。76年からは警視庁音楽隊長を務め、86年に警視庁を勇退した後も作曲活動を続けていた。

鷺沢萠さん（さぎさわ・めぐむ／本名＝松尾めぐみ／作家）4月11日、自宅で亡くなっているのを発見された。35歳。大学在学中の87年、「川べりの道」で文学界新人賞を最年少で受賞してデビュー。主な作品は「少年たちの終わらない夜」「帰れぬ人びと」「葉桜の日」「君はこの国を好きか」「ほんとうの夏」「駆ける少年」など。映画化作品に「大統領のクリスマスツリー」96、「F（エフ）」98などがあり、本誌でも00年から「スターはアタシの手の上で」を連載していた。俳優で映画監督の利重剛氏と結婚していた時期もある。

牧港篤三氏（まきみなと・とくぞう／沖縄戦記録フィルム1フィート運動の会代表）4月14日、肺炎のため死去。91歳。83年、沖縄戦を次世代に伝えるために米国から記録フィルムをカンパで買い取る運動を進める"沖縄戦記録フィルム1フィート運動の会"設立に参加。記録映画「沖縄戦－未来への証言」を製作した。

横山光輝氏（よこやま・みつてる／本名＝横山光照／漫画家）4月15日に死去。69歳。自宅火災で大火傷を負い重体だった。54年「音無しの剣」でデビュー。代表作に「鉄人28号」「伊賀の影丸」「仮面の忍者赤影」「バビル2世」「魔法使いサリー」などがあり、その多くがアニメ化、映画化された。また、70年代以降は歴史長篇も手掛け、71年から20年間にわたり連載された「三国志」は累計7000万部を売り上げた。

サウンダリヤーさん（インド／女優）4月17日、乗っていたセスナ機が離陸直後に墜落して死去。32歳。日本でも公開された「アルナーチャラム 踊るスーパースター」97、「パダヤッパ いつでも俺はマジだぜ！」99、「バブーを探せ」98など100本近い作品に出演し、インドを代表する人気女優として活躍していた。

坂東吉弥氏（ばんどう・きちや／本名＝本間敏夫／歌舞伎俳優）4月23日、腹膜腫瘍のため死去。66歳。初代坂東好太郎を父に、女優の飯塚敏子を母にもち、53年に初舞台。その後、「次郎長血笑記 殴り込み荒神山」60、「右門捕物帖 南蛮鮫」61、「八荒流騎隊」61などの東映映画に出演し、62年に歌舞伎に復帰。ジャンルを問わず名脇役として活躍した。3月の東京・歌舞伎座「義経千本桜・すし屋」の弥左衛門役が最後の舞台となった。

ジョゼ・ジョバンニ氏（仏／映画監督、作家）4月24日、脳出血のため死去。80歳。第二次大戦後、暗黒街での活動が元で強制収容所に送られる。33歳で出所後に小説を書き始め、「穴」でデビュー。同作は60年にジャック・ベッケル監督により映画化され、自らも脚色に参加したのを機に映画界入り。「冒険者たち」67、「シシリアン」69などの脚本を手掛けたほか、「暗黒街のふたり」73、「ル・ジタン」75、「ブーメランのように」76などでは自ら監督も務め、フィルム・ノワールの作家として活躍。自伝の映画化「父よ」01では、死刑判決を受けた自分を救ってくれた父親との関係が描かれ話題を呼んだ。また、蔵原惟繕監督の「海へ See You」88の原案に自身の作品「砂の冒険者」を提供した。

ヒューバート・セルビー・ジュニア氏（米／作家）

4月26日、肺疾患のため死去。75歳。一時ホームレスの生活などを経て、64年に発表した小説『ブルックリン最終出口』が89年に映画化。78年の『夢へのレクイエム』も00年に映画化され、自ら脚色を手掛けた。

小鹿番氏（こじか・ばん／本名＝小鹿敦／俳優）4月29日、急性腎不全のため死去。71歳。57年、東宝現代劇第1期生となり、舞台を中心に活躍。『放浪記』の菊田一夫、『ラ・マンチャの男』のサンチョ、『マイ・フェア・レディ』のドゥリトルなど当たり役多数。73年、芸名を本名から「小鹿のバンビ」をもじった小鹿番に改名。91年『ゆずり葉』で第19回菊田一夫演劇賞を受賞。通算上演1７3 1回を記録した今年3月の『放浪記』が最後の舞台になった。映画作品は67年「君に幸福を　センチメンタルボーイ」で初出演後、「喜劇　駅前開運」68、「ブルー・クリスマス」78、「火まつり」85、「マルサの女2」88、「たどんとちくわ」98など。TVドラマにも多く出演しており、『前略おふくろ様』『あにき』『幸福』などがある。

小田切成明氏（おだぎり・なるあき／TV演出家、番組制作会社アズバーズ会長）4月29日、肝臓がんのため死去。70歳。『風の盆恋歌』『青春の門』『世にも奇妙な物語』『3番テーブルの客』など数多くのTVドラマを手掛けた。

柴田早苗さん（しばた・さなえ／本名＝森早苗／女優）4月30日、肝細胞がんのため死去。83歳。「愛の先駆者」46、「ホームラン狂時代」49、「憧れのハワイ航路」50、「泥だらけの青春」54などに出演したほか、48年から7年間、NHKラジオの人気クイズ番組『二十の扉』でレギュラー解答者を務めた。

アラン・キング氏（米／コメディアン、俳優）5月9日、肺がんのため死去。76歳。高校中退後、コメディアンの道に。人気バラエティ番組『エド・サリバンショー』に度々出演し、人気を集める。50年代からは映画にも進出し、「追憶」57、「探偵マイク・ハマー　俺が掟だ!」82、「敵、ある愛の物語」89、「虚栄のかがり火」90、「カジノ」95、「ラッシュアワー2」01など多数出演。

三橋達也氏（みはし・たつや／俳優）5月15日、急性心筋梗塞のため死去。80歳。44年、劇団〈たんぽぽ〉に入る。召集とシベリア抑留後、51年の「あゝ青春」の不良学生役で本格的デビュー。やがて、松竹専属となり、「愚弟賢兄」53などの青春映画に数多く出演。53年「新東京行進曲」で川島雄三作品に初出演、54年に日活移籍後も、「愛のお荷物」55、「あした来る人」55、「銀座二十四帖」55、「洲崎パラダイス　赤信号」56などの川島作品に出演し常連俳優となる。また、日活では「青春怪談」55、「こころ」55などの市川崑監督作品に出演する一方、「顔役」55、「無法一代」57などのアクション映画にも出演。その後東京映画を経て東宝に移り、黒澤明監督の「悪い奴ほどよく眠る」60、「天国と地獄」63で好演、66年の「女の中にいる他人」で毎日映画コンクール男優助演賞を受賞。「勇者のみ」65、「トラ・トラ・トラ!」70と日米合作映画にも出演後、『連想ゲーム』や『十津川警部』シリーズなどTV出演が増えたが、仏ナント三大陸映画祭の主演男優賞と毎日映画コンクール男優主演賞に輝いた「忘れられぬ人々」01、「Dolls（ドールズ）」02、遺作となった「CASSHERN」04など、近年は精力的に映画に出演し、貫禄ある演技を見せていた。61年に女優の安西郷子と結婚した。

南とめさん（みなみ・とめ／映画編集者）5月16日、老衰のため死去。93歳。33年、東宝の前身であるP・C・L録音部に入社、創設されたばかりの記録係（スクリプター）となる。その後フリーとなり、映画ネガ・フィルム編集の草分けとして活躍。「ビルマの竪琴」56、「名もなく貧しく美しく」61、「鬼婆」64、「他人の顔」66、「音楽」72、「青春の蹉跌」74、「はなれ瞽女おりん」77、「復讐するは我にあり」79、「ヒポクラテスたち」80、「泥の河」81、「乱」85、「トカレフ」94など、巨匠から若手の監督作品まで600本以上の作品を手掛け、96年まで現役で仕事を続けた。88年エイボン女性功績賞、91年日本アカデミー賞協会特別賞、95年毎日映画コンクール特別賞などを受賞した。

イベント

日本アニメーション映画史

長編・短編合わせて230本以上の国産アニメーションを上映し、その源流と展開を探る。
上映スケジュール＝7月6日(火)15時〈漫画映画の先駆者たち〉「蟹満寺縁起」「動倹貯蓄　塩原多助」「ノンキなトウサン竜宮参り」ほか　19時〈大藤信郎〉「煙り草物語」「馬具田城の盗賊」ほか
7月7日(水)〈大藤信郎〉15時「蛙三勇士」「沼の大将」ほか　19時「蜘蛛の絲」「雪の夜の夢」ほか
7月8日(木)15時〈大藤信郎〉「古事記抄　天の岩戸開きの巻」「古事記物語　第貳篇　八岐大蛇退治」ほか　19時〈山本早苗〉「教育お伽漫画　兎と亀」「教育線画　姨捨山」ほか
7月9日(金)15時〈山本早苗〉「五一ぢいさん」「兄弟こぐま」ほか　19時〈村田安司〉「猿蟹合戦」「蛸の骨」ほか
7月10日(土)〈村田安司〉13時「スクリーンミユジック　國歌　君が代」「漫画　おい等のスキー」ほか　16時「空の桃太郎」「海の桃太郎」ほか
7月11日(日)13時〈政岡憲三〉「難船ス物語　第壱篇　猿ヶ嶋」ほか　16時〈瀬尾光世〉「お猿の三吉　突撃隊」「元禄恋模様　三吉とおさよ」ほか
7月13日(火)15時〈瀬尾光世〉「桃太郎の海鷲」「海の神兵」　19時〈大石郁雄と芦田巌〉「動絵狐狸達引」「トーキーの話」ほか
7月14日(水)15時〈田中嘉次と持永只仁〉「煙突屋ペロー」「オモチャ箱シリーズ　第3話　絵本1936年」ほか　19時〈佐藤吟次郎と「マー坊」シリーズ〉「小鳥と兎」「マー坊の東京オリンピック大會」ほか
7月15日(木)15時〈片岡芳太郎と「お猿の三吉」シリーズ〉「漫画　おい等の生命線」ほか　19時〈荒井和五郎〉「お蝶婦人の幻想」「影繪映画　ジャックと豆の木」ほか
7月16日(金)15時〈熊川正雄と桑田良太郎〉「マングワ　新猿蟹合戦」「かんがーるの誕生日」ほか　19時〈横山隆一〉「フクチャンの潜水艦」「ふくすけ」ほか
7月17日(土)13時〈横山隆一〉「ひょうたんすずめ」「五万匹」16時〈薮下泰司〉「かっぱ川太郎」「うかれバイオリン」ほか
7月18日(日)〈戦前・戦中作品集〉13時「茶目子の一日」「あめや狸」ほか　16時「忍術火の玉小僧　江戸の巻」「火の玉小僧　山賊退治」ほか
料金＝500円／高校・大学生、シニア300円／小・中学生100円
会場＝東京国立近代美術館フィルムセンター・大ホール
問＝03・5777・8600
http://www.momat.go.jp/

第13回東京国際レズビアン&ゲイ映画祭

セクシュアル・マイノリティを題材にした29作品を上映する第13回東京国際レズビアン&ゲイ映画祭。話題の韓流「ロードムービー」、ドキュメンタリー作品「オール・アバウト・マイ・ファーザー」、吉行由美監督作「せつないかもしれない」などの長編のほか短編作品も上映する。
上映スケジュール＝7月15日(木)17時〈オープニング〉20時「ダイ・マミー・ダイ」＋オープニングレセプション
7月16日(金)12時30分〈ビギニングス〉〈ガールズ短編集〉14時30分「ゴールドフィッシュ・メモリー」16時30分〈えっ、ゲイ!?〉〈ボーイズ短編集〉19時「ヨッシ&ジャガー」21時「イベント」
7月17日(土)12時「ロードムービー」14時30分〈隣のデキごと〉〈日本インディーズ短編集〉17時「せつないかもしれない」＋〈メイキング＋舞台挨拶〉19時〈ビギニングス〉21時「ドゥー・アイ・ラブ・ユー?」
7月18日(日)12時「ヨッシ&ジャガー」14時「オール・アバウト・マイ・ファーザー」16時30分〈ビッグ・クィア・ラブ〉〈カナダ短編集〉18時30分「ブルガリアの愛人」20時30分「グランデコール」
7月19日(月)11時30分〈えっ、ゲイ!?〉13時30分「ロードムービー」16時「百合祭」＋〈ティーチイン〉18時30分「ゴールドフィッシュ・メモリー」
料金＝1600円(前)1400円／4回券5000円(前売限定)／フェスティバルパス14000円(前)12000円／平日マチネ1300円(前)1100円)※7月16日(金)12時30分、14時30分、16時30分
会場＝スパイラルホール(青山)
問＝03・5380・5760
http://www.tokyo-lgff.org/

ぴあフィルムフェスティバル来場ゲスト決定

7月5日(月)16時30分〈矢口史靖スペシャル〉に矢口史靖監督、19時15分「晴れた家」に村松正浩監督が来場。
7月6日(火)は11時「新ここからの景」に岩田ユキ監督、13時45分「382」に久保田裕子監督が来場。
7月7日(水)13時45分「青春プレイヤー／平凡プラネット」に池監督、16時30分〈風間志織スペシャル〉と19時15分「せかいのおわり　world's end girlfriend」に風間志織監督が来場。
7月8日(木)は11時「かりんとうブルース」「新しい予感」に川西良子監督、浅野晋康監督、19時15分「運命じゃない人」に内田けんじ監督が来場。

7月9日(金)17時の表彰式とグランプリ作品の上映に、最終審査員の若松孝二、みうらじゅん、緒川たまき、犬童一心、市山尚三が来場する。
http://www.pia.co.jp/pff/

舞台『夜叉ヶ池』チケット発売開始

三池崇史演出、長塚圭史脚色で泉鏡花の「夜叉ヶ池」が舞台によみがえる。演じるのは武田真治、田畑智子、松田龍平、松雪泰子ほか。東京公演、名古屋公演、大阪公演のチケットを7月11日より発売する。

〈東京公演〉
日程＝10月14日(木)～31日(日)
料金＝8500円
会場＝パルコ劇場
問＝03・3201・8116
http://www.t-onkyo.jp

〈名古屋公演〉
日程＝11月6日(土)
料金＝S席8500円／A席7000円
会場＝愛知厚生年金会館
問＝052・972・7466

〈大阪公演〉
日程＝11月9日(火)～14日(日)
料金＝8500円
会場＝シアター・ドラマシティ
問＝06・6377・3888(ドラマシティ予約センター／06・6377・7777)
http://www.dramacity.co.jp

Thai BAZZAR開催

今夏公開の「地球で最後のふたり～LAST LIFE IN THE UNIVERSE～」。タイを舞台にしたこの映画の公開に合わせて、タイ・バザールを開催。タイのニュー・カルチャー、音楽・フード・雑貨・ファッションをテーマにしたショップが期間限定でオープンする。
期間＝7月24日(土)～8月1日(日)12時～20時
会場＝Grey(渋谷区神宮前3－22－6 舘野ビル1F)

国際学生映画祭 NextFrame Nippon2004開催

学生の学生による学生のための映画祭「NextFrame 2004」の米国での受賞作品と、日本の学生によるショートフィルム、日本映画界で活躍する監督の秘蔵映像などを上映する。
上映スケジュール＝7月10日(土)15時〈A〉「忘れられた大地」「フリー・スタイル」「はい、先生」17時〈B〉「カタツムリ・ジャム」「ダドリー」「ファーストレーン」「笑う女」「紙飛行機と自画像」「マニマル」「愛しのジョセフィン」「惨敗」「キャンディ・マシーン」「箱の中の私」「ツナ・チャンプル」19時〈C〉「ジャパン・セクレション04」
7月11日(日)15時〈B〉17時〈A〉19時〈C〉
7月12日(月)15時〈A〉17時〈B〉19時〈C〉
7月13日(火)15時〈A〉17時〈B〉19時〈C〉
7月14日(水)15時〈A〉17時〈B〉19時〈C〉
7月15日(木)15時〈B〉17時〈A〉19時〈C〉
7月16日(金)15時〈A〉17時〈B〉19時〈C〉
料金＝1300円／1日券2800円
会場＝アップリンク・ファクトリー
問＝03・5441・9800
http://www.nextframe.info/

募集

第30回城戸賞作品募集

かつては大森一樹、野沢尚なども受賞、最近では「連弾」「棒たおし！」などが映画化されたシナリオ・コンクール「城戸賞」が作品を募集する。入選者には12月1日に授賞式が行われ、賞状、記念品、副賞50万円が贈呈される。
応募条件＝平成16年8月31日までに執筆完了した劇場用日本映画の脚本で未発表、オリジナルのもの。200字詰め原稿用紙250枚程度、300枚以内(ワープロ可。200字詰めに換算した枚数明記)。単独執筆に限り、劇場用映画の映画化が2本以上ある者、他のシナリオコンクール等で入選・受賞した脚本、過去に本賞に応募した脚本を改定等したもの、は対象とせず。
応募方法＝住所、氏名(ふりがな)、年齢、性別、電話番号、略歴及び執筆完了年月日、過去の執筆経験を明記し、あらすじ(5枚程度)及び登場人物表を綴じた応募脚本を2部郵送する。原稿は2箇所以上を紐で綴じる。応募脚本は返却不可。
応募締切＝8月31日(火)必着
問・応募先＝〒104－0061東京都中央区銀座2－15－2東急銀座ビル3階 社団法人日本映画製作者連盟 城戸賞係
03・3547・1800

あなたが選ぶ映画音楽リクエスト募集

NHKの番組「BSあなたが選ぶ映画音楽」が7月18日の放送で特集する「ファミリー・ファンタジー映画」のリクエスト曲を募集。「となりのトトロ」「宇宙戦艦ヤマト」「ハリー・ポッターと賢者の石」「小さな恋のメロディ」など番組ホームページのタイトル・リストから、もしくはリストにない曲でもリクエスト可。抽選で25組50名様をフルオーケストラが楽しめる生放送のスタジオ見学にご招待。
応募方法＝①氏名②住所③電話番号④スタジオ見学を希望するか⑤リクエスト番号(4曲まで。リストにない曲は映画タイトル記入)⑥リクエストした映画に対する思い出やエピソード。①～⑥を官製ハガ

キかFAXで。ホームページからもリクエストできる。番組当日まで受付
応募先＝〒150－8001　NHK放送センター「BSあなたが選ぶ映画音楽」係
問・FAX＝03・3481・8458
http://www.nhk.or.jp/eigaongaku

デジタルショートアワード「600秒」文字だけの映画「600秒：WORDS」作品募集

東京国際ファンタスティック映画祭2004が、10分＝600秒ジャストのデジタルショートと、600秒の映像作品の原作となるものを募集している。

〈デジタルショートアワード〉
応募条件＝エンドロールを含む作品時間600秒（1秒の過不足も不可）の映像作品。作品は「笑い」「泣き」「驚き」の3部門のいずれかで応募する。プロ・アマ問わず、自主制作によるデジタル作品であること。入選した場合、予選会、映画祭期間中の作品上映時に来場・参加が可能なこと。※応募作品、予告編は選考過程で放送、ネット配信される場合がある）。
応募方法＝作品と作品の1分間の予告編を収録したminiDV、文字資料（あれば添付）、応募用紙（映画祭公式サイトよりダウンロード）を送付する。送料は応募者負担、素材返却不可。ノミネートされた場合は、作品スチールと監督顔写真を送付する。※他人の映像や音楽、著作物を使用している場合、著作権の承諾を得てから応募すること。

〈文字だけの映画〉
応募条件＝映像化した場合600秒の作品となるものの原作で、脚本形式のもの。手書き不可、プロ・アマ問わず。作品が入選した場合、映画祭に来場・参加できること。
応募方法＝脚本と作品のプロットまたは企画書等文字資料（A4用紙）、応募用紙（映画祭公式サイトからダウンロード）を郵送、もしくはメールで送信する。送料は応募者負担、応募作品返却不可。ノミネートされた場合は応募作品のテキストデータと作者の顔写真を送付する。
応募締切＝8月31日(火)必着
応募・問合せ先＝〒201－0002　東京都狛江市東野川1－32－13　フォーラム・オフィス内　東京国際ファンタスティック映画祭「600秒」係
http://tokyofanta.com

青森県

■第13回あおもり映画祭
7月9日(金)18時20分「ラブストーリー」
料金＝入場無料・要整理券
会場＝ぱ・る・るホール（青森駅前）
問＝017・777・2000
7月10日(土)13時30分「月とキャベツ」15時20分「はつ恋」19時「昭和歌謡大全集」※ゲスト／篠原哲雄監督ほか
料金＝1500円（前1300円）
会場＝東奥はちのへホール※「昭和～」のみ八戸フォーラム
問＝017・744・3011
http://www.7-dj.com/jp/cinema/index.html

東京都

■映画監督・清水崇、ハリウッドへ
7月6日(火)16時30分「片隅」「4444444444」「呪怨」「怪談　こっちを見ないで…」「食卓の宇宙人」／19時15分「稀人」
料金＝1400円（前1200円）
会場＝シャンテ　シネ
問＝03・3265・1425

■現代中国映画上映会
7月17日(土)18時55分「聶耳」
料金＝1500円／会員1200円／入会金500円
会場＝文京シビックホール
問＝03・5689・3763
http://www.parkcity.ne.jp/~gentyuei/

■韓国映画鑑賞会
7月16日(金)18時30分「ホワイト・バッジ～白い戦争」
料金＝入場無料（先着150名）
会場＝韓国文化院大ホール（韓国中央会館8F）
問＝03・5476・4971
http://www.koreanculture.jp

■日比谷図書館映画会
「オキナワの少年」
7月14日(水)14時
料金＝入場無料
会場＝東京都立日比谷図書館
問＝03・3502・0101

■立川志らく監督・脚本・音楽・主演　最新インターネットムービー上映
「不幸の伊三郎」／志らくのニューヨーク落語公演ドキュメンタリー／トークショー
7月15日(木)19時
料金＝1800円
会場＝ブディストホール（築地本願寺敷地内）
問＝03・3754・6811
http://www.shiraku.net/

■追悼・中谷一郎
7月4日(日)～6日(火)13時「独立愚連隊」15時10分「青い野獣」17時10分「水戸黄門」19時「顔役暁に死す」
7月7日(水)～10日(土)13時「水戸黄門」14時50分「顔役暁に死す」16時50分「青い野獣」18時50分「独立愚連隊」
7月11日(日)～13日(火)13時「男の顔は履歴書」15時「戦国野郎」17時「狐のくれた赤ん坊」19時「続　網走番外地」
7月14日(水)～17日(土)13時「狐のくれた赤ん坊」15時「続網走番外地」17時「男の顔は履歴書」19時「戦国野郎」
料金＝1200円／シニア・学生1000円／会員800円／水曜均一1000円

会場＝ラピュタ阿佐ヶ谷
問＝03・3336・5440
http://www.laputa-jp.com

神奈川県

■嵐を呼ぶ！ 映画クレヨンしんちゃん祭り
7月10日(土)11時「クレヨンしんちゃん 嵐を呼ぶモーレツ！オトナ帝国の逆襲」14時30分「クレヨンしんちゃん 嵐を呼ぶアッパレ！戦国大合戦」
7月11日(日)11時「クレヨンしんちゃん 嵐を呼ぶ栄光のヤキニクロード」14時30分「クレヨンしんちゃん 嵐を呼ぶ！夕陽のカスカベボーイズ」
料金＝500円／小中学生300円／10回券4000円／「〜カスカベボーイズ」のみ1000円／小中学生600円
会場＝川崎市市民ミュージアム・映像ホール
問＝044・754・4500
http://home.catv.ne.jp/hh/kcm

大阪府

■中華民国（台湾）電影会
7月10日(土)18時30分「安安」
料金＝500円
会場＝大阪市立北市民教養ルーム
問＝0798・67・2300

広島県

■名作映画鑑賞会
7月10日(土)10時30分、14時、18時「東京の空の下には」
7月11日(日)10時30分、14時「楊貴妃」
7月16日(金)10時30分、14時、18時「狼」
7月17日(土)10時30分、14時、18時「夫婦善哉」
7月18日(日)10時30分、14時「生きものの記録」
料金＝440円／こども220円（「東京の〜」「夫婦善哉」はこども無料）
会場＝広島市映像文化ライブラリー
問＝082・223・3525

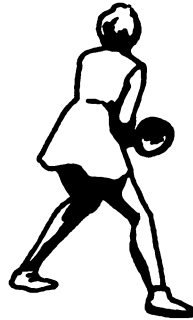
福岡県

■マジド・マジディ監督とイラン秀作映画特集
7月7日(水)14時「ぼくらのオリンピック」「裸足でヘラートまで」
7月8日(木)14時「少女の髪どめ」19時「ぼくは一人前」
7月9日(金)14時「スニーカーの少女」19時「ささやき」
7月10日(土)11時「私は15歳」14時「ささやき」17時「ぼくは一人前」
7月11日(日)11時「スニーカーの少女」14時「私は15歳」
■アジア・ファンタスティックムービー・フェス
7月14日(水)14時「ミステリー・オブ・ザ・キューブ」
7月15日(木)14時「アウトライブ」19時「ほえる犬は噛まない」
7月16日(金)14時「新生」19時「天下第一」
7月17日(土)11時「墓あらし」「笛吹きの恋」14時「北京オペラブルース」17時「霊幻師弟 人嚇人」
7月18日(日)11時「ゴジラVSスペースゴジラ」14時「ガメラ大怪獣空中決戦」
7月19日(月)11時「ミステリー・オブ・ザ・キューブ」14時「アウトライブ」
料金＝500円／大学・高校生400円／中学・小学生300円
会場＝福岡市総合図書館映像ホール・シネラ
問＝092・852・0600
http://toshokan.city.fukuoka.jp/

キネ旬ロビイ
kinejun lobby
読者の声

●ハシゴの問題

「シルミド／SILMIDO」を観ました。映画の内容に満足し、主人公達の理不尽な運命に憤りを覚えつつ劇場を出た所で問題が一つ。映画をハシゴしようとして事前に別の映画の当日券を購入していたのです。それも、具体的な作品名は書きませんが全く方向性の異なる作品の券を。案の定、その映画の内容はほとんど頭に入らず、観ながら関係者に対して申し訳ない気持ちになりました。やはり、出来るだけハシゴはしない方が良いですね。（福尾有希子・広島県呉市・清掃業・36歳）

●最近の韓国ブームに

韓国映画、立て続けに見て来ました。何かやたらと「北」を挑発するような内容で少しオドオドしてしまいました。それにしても、最近の韓国ブームには目をみはります。（後藤ゆう・愛知県名古屋市・会社員・26歳）

●日本人が忘れた"心"

最近、韓国映画が面白い。今の日本の状況から見ると古くさいところがあるようだが、それがかえって新鮮。日本人が忘れてしまった"心"が生きている。私ら世代にとっては、安心して映画に浸れるという感じである。（遠藤晴男・福島県大沼郡・59歳）

●思い出の映画館の再出発

この5月に閉館した広島市内にある東宝直営館「広島宝塚4」を同市内にあるミニシアター「シネツイン」がその後を継ぎ営業を再開した、というニュースには驚くとともに胸が熱くなりました。シネコンの波が押しよせる広島市にあって、映画館の灯を消さないために、それも敢えてミニシアターとして再出発することを英断された「シネツイン」の方に心から敬意を表したいと思います。広島で学生時代を過ごした私にとって「広島宝塚」も「シネツイン」も大変お世話になった思い出一杯の劇場。わが香川の映画館事情も深刻ですが、海を渡ってでも通いたい、応援したい、そう思わずにはいられない頼もしいニュースでした。（鎌田一也・香川県善通寺市・大学職員・32歳）

●今年の十大ニュース

「ピカチュウ」ならぬ「セカチュウ（世界の中心で、愛をさけぶ）」の勢いは止まりそうにない。4月、試写会で見た時、これ程の大ヒットを予測できなかった。この現象は出版界との相乗効果で倍倍ゲームになっているように思う。これから先、どこまでロングランするのか。今年の十大ニュースの一本になりそうだ。（平井悦夫・広島県福山市・地方自治体職員・53歳）

●「小さな恋のメロディ」

「世界の中心で、愛をさけぶ」の大ヒットにびっくりしました。長澤まさみさんが演じたアキの好きな映画の中の一本「小さな恋のメロディ」、DVD化されていないので早くDVDで発売して欲しいですね。（田中康一・神奈川県藤沢市・会社員・37歳）

●今どきの女子高生役も

最近、たまたま「深呼吸の必要」と「世界の中心で、愛をさけぶ」を立て続けに見ました。その中で対象的な女子高生を演じていた長澤まさみさんが印象的でした。短い人生の中のきらめきの中で精一杯、相手への想いを伝え続けたアキの役、どこまでも続くような暗い心のトンネルの中で出口を捜していた加奈子の役。特に後者では、持ち味の声を使わず、深い心の奥を表現していく様な役だったので、同時期の撮影で大変だったと思います。「クロスファ

イア」のあどけなさ、「ロボコン」でのさわやかさを経て、行定、篠原という旬の監督達に鍛えられ、着実にステップアップしている気がします。次は綿谷りさなどの今時の女子高生の気持ちを軽やかに演じる作品も見てみたい気がします。これからも、東宝以外の「他流試合」を経験しつつ、素直で伸びやかな演技を期待します。目指せ、平成の吉永小百合！（木田実・千葉県市川市・会社員・38歳）

●ショーン・ペンの変化

「21グラム」、ショーン・ペンはマーロン・ブランドに近づきつつあるのでしょうか。出演作品も渋いものが多いし、ハリウッド的映画には出演しないし、とてもあのマドンナの旦那だったとは思えません。（清水尚・新潟県新潟市・会社員・28歳）

●伏線がつながった時

「21グラム」、はじめは場面展開の多さに何？何？という感じだったが、その伏線が一つにつながった時、〝生と死〟の重みを感じました。（市岡由紀・広島県広島市・会社員・40歳）

●アジア系の役者が

「ブルー・イグアナの夜」から気になっている女優ナンバー1のサンドラ・オー。「（ハリウッドで）アジア系の役者が〝普通の人〟を演じるチャンスがもっと増えるといい」と言っている彼女の「トスカーナの休日」が楽しみだ。（白井美紀子・愛知県名古屋市・主婦・57歳）

●特集は俳優残酷物語

ＮＨＫ・ＢＳ2は5月半ばのアラン・ドロン特集。そう好みではないが、やはりなつかしくて作品ごとにチラチラ見てしまった。ラストを飾るＴＶムービーは01年というからドロンは66歳。老醜をさらけ出す（部分カツラではなかったような）まではいってないが、いまだにチンピラ風情が抜けない、というのが切ない。が、美形俳優の出演作を年代順に、というのは時の流れを一気に見せつけ、まさに俳優残酷物語。こうしてみると最晩年まで顔が崩れなかったのはケイリー・グラントぐらいか。にしてもドロンは自分のガニ股に劣等感はなかったのか、ずっと不思議でならない。彼の脚を見るたびに思い出すのは、高校時代（40年前！）に読んだ「映画の友」は小森和子さんの文。「ドロンは育ち盛りの十代に肉体労働のバイトをしたのでガニ股になったの。みなさんもバイトは考えて選んでね（このような感じだったか）」いまもって忘れられない。（加藤しんり・東京都豊島区・事務）

●体はたくましいけれど

「トロイ」のブラット・ピットのたくましい姿、何か顔だけ浮いてたなあと感じてしまいました。（坂川容子・東京都目黒区・会社員・24歳）

●腰が痛くても映画館

「カレンダー・ガールズ」こういう映画大好き。カレンダーを作るためにイギリスの普通の主婦たちがきれいになろうとする。見習わなくては。腰が痛くても、はりの先生に通いながら、映画館ではウォーマーをはいて首にはマフラー、ドリンクを飲み、一人で楽しむ。映画の話をする同年齢がいないのがさみしいです（彼女たちは「もう何年映画を見ないかしら」と言う）。（大野栄子・東京都杉並区・主婦・76歳）

●アメリカ劇場めぐり

アメリカ出張中に劇場めぐりをしたのですが、ほとんど「シュレック2」と「ハリー・ポッターとアズカバンの囚人」がスクリーンを占拠していました。が、僕は日本公開がなさそうな「SOUL SOUP」を観て来ました。……でもイマイチでした。（里吉純・東京都世田谷区・会社員・30歳）

lobby伝言板

▼クラシックな映画から60年代、70年代の洋画をこよなく愛する者です。この古き良き時代の映画について感想あるいは情報を交換しませんか。年齢性別不問です。（〒473－0902　愛知県豊田市大林町16－13－6マテイアス成田Ａ26号　太田雄介・38歳）

▼「ブルース・リーの復讐」「バトル・ドラゴン」「ブラック・サムライ」「ウォーキング・トール　怒りの街」のビデオをお持ちの方、ご連絡下さい。（〒990－0007　山形県山形市沼ノ辺町5－24　村田伸之）

スクリーンの魔術師

第20回 ルネ・クレマン

絵と文 すぎやまチヒロ

René Clément 1913〜1995年

短編から出発する。ついで動画。そして記録映画へと進み、そこで身につけたものを「鉄路の闘い」(46年)に結実させる。

「鉄路の闘い」(46年)

この長編デビュー作で見事第1回カンヌ映画祭グランプリを受賞する。注目の第2作「海の牙」(47) も冷静なセミ・ドキュメンタリー・タッチで仕上げ、社会派監督の名声を一気に高める。

名場面①
ブァ〜ン
転がっていくアコーデオンが鳴る。

名場面②
処刑される男がうつろな目で見つめる壁のクモ。

第2次大戦中ぼくは対独レジスタンス運動に参加してたんだよ

① 禁じられた遊び (1951年)

1940年、春。フランスの片田舎で独軍の空爆で父と母を失った5歳の少女がいた—。

ママー
ママー
ママは…
ポーレット
死んだの
出会ったのは牛追いの少年
ミシェル
お墓をつくろー
うちへおいでよ

十字架を盗んでハトやカエルやネコのお墓をつくる"禁じられた遊び"をするあどけないふたりー
いいとこへ行くんだよ
やがてくる別れー
ミッシェル
ママー ママー
駅の雑踏の中に消えていくポーレット

この小説は出版されるやいなや世界中に反響をよんだが、作者のフランソワ・ボワイエはその後、この作品を上まわるものを不幸にして創ることはできなかった—。

② 居酒屋 (1956年)

19世紀中頃、パリの下町に生きる女

常に山のような洗濯物をかかえている洗濯女のジェルベーズ。

朝から晩まで洗濯屋で働く生活。
ヒモのような男は
女郎屋通いをつづけたあげく
お父ちゃん行ってしまったよ
女の人と馬車にのって
やがて真面目な屋根ふき職人と結婚して幸せな生活に入る。
足がわるい
かわいい女の子ナナをさずかる

お人好しの亭主は舞いもどってきたヒモと一緒に住むことをすすめる。
いいのかい ほんとに
ああ一緒に暮らそう

とうとう無一文になったジェルベーズは
ママ
ママ
やがて居酒屋の隅で野たれ死ぬ。

原作者エミール・ゾラはバルザックとは対照的に向上の意欲をもちながら挫折をくり返し悲劇的な結末をたどる平凡な庶民、特に下層階級の生活を赤裸々に描いた。

「ある労働者一家のさけることのできない転落を描こうとしたんだよ」(エミール・ゾラ)

「海の牙」（47年）

ラストの船と船に挟まれて爆死する女を無表情で見つめるカメラが怖かった。

やがてフランス映画界にもそろそろ戦争の悪夢を追うのをやめて、本来の文学的テーマに回帰しようではないかという空気が広まる。

だから第3作めはギャバンを使ってみたんだよ

「鉄格子の彼方」（49年）

その次は「ガラスの城」（50年）を撮ったが、2作品とも評判はイマイチだったんだよ…

あんた泣いてんのね？

そこでやっぱり戦争をテーマにとり上げようと思い直したんだよ。

そして、貧困に追いつめられていく労働者を描いた①で、幼い子どもを通して戦争の無残を訴えた②

さすがー

やがて、旧世代派を完全に否定するヌーヴェル・バーグ派の台頭となるが……

そんなものまったく気にせずに自分なりに新しい映画をつくろうと思ったのよ

で、ご存知大ヒットとなる③

この作品の成功によって「社会派」のレッテルを自ら剥ぎ取ったが、その後、仏米合作のドキュメント④の監督に指名されたのは当然といえる。

「狼は天使の匂い」（72年）

この映画のあと1本撮って終える。

③太陽がいっぱい

（1960年）

音楽はニーノ・ロータ

ストーリイはご紹介するまでもないので印象的な名場面をどうぞ

トム・リプリーの計画は完全犯罪

これは何なの

イヤーン

ロープを切って漂うボートの中のトム

フィリップのサインを練習する

サンサンとそそぐ太陽のもとで

マルジュ〜

第2の殺人現場にとびちる野菜と肉

魚市場に並ぶ魚の眼はトムの眼と同じ

この映画の原作者パトリシア・ハイスミスの処女作は「見知らぬ乗客」（ヒッチコックが映画化した）。

④パリは燃えているか？

（1965年）

ハイルヒトラー

もし、敵の手中に渡すときには、パリは廃墟となっていなければならない

跡形もなく燃やすんだ！灰にしろ!!

1944年8月23日17時 ヒトラー総統命令

カール、これが新兵器だよ

こいつはわれば何でも一撃のもとだ

エッフェル塔もノートルダム寺院もですか？

IS PARIS BURNING?

IS PARIS BURNING?

パリは燃えているか？

ヒトラーのわめく声

ドキュメンタリー・タッチだけど、出演スターはすごい顔ぶれ（それでも米合）

工場の数は200。

パリ市街図

市内の48の橋、発電所、地下水道すべて5分で壊滅できる

レジスタンスによる激しい市街戦

ゲルト・フレーベ

ピエール・バーネマ

アラン・ドロン

オーソン・ウェルズ

レスリー・キャロン

風前の灯にあった「永遠の都」は廃墟となる運命を免れた。

ドゴール

アンソニー・パーキンス

グレン・フォード

カーク・ダグラス

J.L.トランティニアン

ジャン・P・ベルモンド

この映画の原作はラリー・コリンズとドミニク・ラピエールのふたり。

アメリカとフランスのジャーナリスト、世界的ベストセラー「第五の騎手」もある。

次回は野村芳太郎監督です

今号の筆者紹介

（ ）内の数字は掲載ページ

横森文　「スパイダーマン2」を見て大感動。好きこそものの上手なれ。サム・ライミが監督で本当に良かった！（4）

北川れい子　遅ればせながら村上龍原作「69 sixty nine」を読む。何だか自分も同じ体験をしたように当時の記憶が蘇って。（8）

佐藤結　ライター。自衛隊が多国籍軍の一員になるというニュース。こりゃ韓国のことばかり考えている場合じゃない。（11）

那田尚史　映像研究家。早稲田大学および東京工芸大学非常勤講師。専門はアヴァンギャルド映画、個人映像など。（12）

井口健二　SF映画評論家。一方が50歳以上なら、夫婦で2千円のサービス開始。映画館に通う回数が増えそうだ。（14）

嚶峨創三　映画評論家？　密かに始まった「春田花花幼稚園　マクダルとマクマグ」の試写は見逃すと一生の後悔もの。（16）

浅見祥子　ライター。市川崑監督作「トッポ・ジージョのボタン戦争」を見て本気で感動。主題歌の歌詞も素晴らしい。（27）

金澤誠　6月はロケ取材で、計5回北海道行き。「北の零年」のオープンセットは、かなりスケール感がある。（29）

轟夕起夫　文筆稼業。篠田昇さんの訃報を知った後、三上博史氏の舞台「ヘドウィグ～」へ。いろんな思いが？（31）

竹之内円　映画ライター。見損ねていた「ビッグ・フィッシュ」をやっと見ました。噂どおりに号泣でした……。（36）

野村正昭　映画評論家。武満徹全集完結。幻の「ナイト・オン・ザ・プラネット」収録を含めて、充実した内容だ。（37）

永野寿彦　矢口史靖監督「スウィングガールズ」にハマる。猪の場面が可愛くって可笑しくって……大好きです。（43）

朝熊五郎　脚本家。来年公開映画の仕込みで超多忙の毎日。脚本執筆に3年、ようやく半分完成。公開迄、苦闘の日々が続く。（45）

大口孝之　映像クリエータ。米国でオリジナル版の「ゴジラ」を見る。アメリカのオタクたちが一所懸命拍手していた。（46）

山下慧　映画系文筆業。湯浅政明監督「マインド・ゲーム」も衝撃的な傑作。アヴァンギャルドが生きている！（50）

佐藤友紀　アダム・クーパー、ウィル・ケンプの「兵士の物語」、「ブラック・ライダー」、トニー賞受賞の一人芝居など収穫大。（54）

黒田邦雄　映画評論家。サントリーホールでヘンツェの楽劇「裏切られた海」を鑑賞。現代音楽で味わう三島文学。（56）

舩橋淳　映画監督・映画批評。処女作「エコーズ echoes」が昨年日米で劇場公開されたニューヨークの若手映画監督。（59）

はせがわいずみ　ロバート・レッドフォードに会って仰天した。すっかりシワシワのシミだらけで、おじいちゃんの手だったよ～。（61）

宇田川清一　理屈ぬきに楽しい「アベニューQ」がトニー賞とはヤッタネ。夏は「スパイダーマン2」がオススメ！（62）

渡辺武信　「Into The Wood」は巧みな戯曲だがソンドハイムの歌曲がだめで、ミュージカルとしては失格。（67）

金子裕子　映画ライター。急激に〝嵐〟熱に冒された結果、言葉づかいの荒さを母にたびたび叱責される。うぜぇーよ！（69）

おかむら良　映画評論家。6月から夏、という暑さに戸惑いぎみ。本番の8月はいったいどうなるの!?（71）

河原晶子　本屋で。マイケル・ムーアの挑発的な本の隣りにレイ・ブラッドベリの「華氏451」が。奇妙な調和!?（72）

齋藤敦子　3年がかりで翻訳した「世界の映画ロケ地大事典」がようやく8月に晶文社から出版。買ってね、高いけど。（74）

高橋千秋　ライター・編集者。ノヴェライズの仕事がんばっています。信用できるのは自分だけ……はあ。（80）

信夫梨花　英国在住。86年作「プリティ・イン・ピンク」のモリー・リングウォルドにパーティで接見。時の流れを実感！（82）

荻原順子　職業病の肩と首のこりがひどくなったので、久しぶりにマッサージへ。45分間、つかのまの極楽～♪でした。（86）

鬼塚大輔　静岡英和学院大学教授。「フォッグ・オブ・ウォー　マクナマラ元米国防長官の告白」は傑作ですね。（95）

渡辺祥子　「あなた、私の息子の大好きなおばあちゃまにそっくりなの」とE・ベアールさん。二人で記念撮影しました。（96）

斉藤博昭　ライター。毎年、近所に来るカルガモ一家だが、母ガモが交通事故死。「グース」を思い出し巣立ちが心配。（97）

中西愛子　フリー。今年も横浜のフランス映画祭を取材。みなとみらい線、便利だけど高い！（98）

田中千世子　映画評論家。野村万之丞さんが亡くなった。狂言以外にも大田楽や真伎楽などたくさんのことをした人だった。（98）

佐藤忠男　映画批評家。上海映画祭に行ってきました。古い友人たちと再会し、新しい友人たちも出来て愉快。（99）

山根貞男　映画評論家。京都映画祭の企画立案が最終段階に入り、また一段と多忙の日々に突入。（100）

渡部実　映画評論家。「ざくろの色」（セルゲイ・パラジャーノフ）のDVD映像には、最近最も感心しました。（102）

西脇英夫　映画評論家。「コンクリート」に続く「青の塔」で、日本映画にやっと凄みが出てきた。（106）

稲垣都々世　向いのマンションのバルコニーからシェパード2頭がうるさく吠えかかってくる。何か勘違いしてないか？（108）

大場正明　評論家。「不死を売る人びと」、「それでもヒトは人体を改変する」などを読む。（108）

金原由佳　映画ライター。「下妻物語」に心酔し、ロココ調のスカートを購入。桃子のように強く生きたいものです。（108）

宮崎祐治　DVDと番組の演出をやったのが縁で綾戸智絵さんの「マイ・ライフ」（幻冬社文庫）の表紙を描きました。（110）

立川志らく　落語家。7月13日志らくのピン嵐山光三郎プロデュース。シネマ落語「真昼の決闘」。国立演芸場にて。（111）

川本三郎　評論家。義兄の俳優、富田浩太郎死去。端役出演だがビデオの「ここに泉あり」「森と湖のまつり」で見送る。(112)

香川照之　二月の猛吹雪から始まった「北の零年」も、いよいよ終盤。目指せ、五十万フィートの金字塔！(114)

成田陽子　ロンドンで「コンスタント・ガーデナー」撮影中のレイフ・ファインズに会い、奮起して植木作りに励む。(118)

河原雅彦　俳優・舞台演出・脚本。束の間の無為の日々も終わり、舞台『鈍獣』稽古に突入。あと7／7に30代を折り返します。(122)

中村まこと　俳優。ガキの頃観れなかった児島みゆき主演「ハレンチ学園」が観たい。あと、永島敏行の「ドカベン」も。(122)

安西水丸　タヒチに来ている。この連載の校正はタヒチのホテルで見ている。タヒチは今、日本でいう冬の季節です。(130)

石村加奈　ライター。多摩川散策の日々。カメラ越しに見た野っ原はワイエスの草の色。蕎麦茶を啜れば夏の匂い。(131)

塩田時敏　映画評論家。「茶の味」もコンペだときくプチョン国際ファンタスティック映画祭に審査員として訪韓。(133)

大竹洋子　映画祭PD。韓国にチプルスキのような俳優がいると、ワイダ監督に知らせました。イ・ビョンホンです。(140)

大高宏雄　映画記者。欧州選手権初戦でのデンマークに興奮。あの球回しは凄い。案の定、トッティ抜けた伊国が脱落。(143)

濱口幸一　芝居のプロデュース公演の打ち上げで、久々に日が昇るまで酒席に同席。まさに、翌日の後悔先に立たず。(146)

高崎俊夫　粉川哲夫さんの映画日記を編集中。試写室に集う非常識な輩の恐るべき生態が容赦なく暴かれています。(154)

森直人　今年もPFFアワード入選作の全作批評をやらせていただきました。パンフ&サイトにて。(155)

賀来タクト　文筆家。エンニオ・モリコーネの初来日公演、肌に合わなかったようで、えらくくたびれました。(156)

石飛徳樹　朝日新聞記者。篠田昇さんの訃報に接する。「世界の中心」の現場での元気な御姿が今も目に焼き付いている。(158)

樋口尚文　映画批評。鉄のアーティストに頼んでいた部屋全面の本棚が半年がかりで完成し、印税吹っ飛ぶの巻。(160)

池田敏　アメリカTVライター。刑事ドラマの革新的傑作『ザ・シールド』のビデオ・リリースが心から嬉しい。(161)

浦崎浩實　『戦場の精神史—武士道という幻影』（佐伯真一、NHKブックス）に感銘。時代劇観が変わりそう！(162)

藤田真男　ライター。宮崎駿氏の自宅と職場の中間に住み、宮崎氏が保全活動に関わる淵の森、全生園などを散歩。(163)

丸山尚輝　ライター。知人岡輝男脚本作「兄貴と俺Ⅱ　燃える菊紋」（加藤義一／オーピー）が7／17より公開。(164)

やまもとかほ　ビデオライター　久々のディズニーランド。3時間待ちの新&人気アトラクションは結局乗れずじまい……。(164)

新田隆男　ライター。テレビ東京日曜深夜『ファンタズマ～呪いの館』。シリーズ中盤の脚本書きました。(168)

細越麟太郎　ロシア映画「父、帰る」は非常にシャープで洗練されたミステリー作品として、最近の出色。(170)

杉原賢彦　映画批評／慶應義塾大学教養研究センター所員。今年フランス映画祭は不調。作品も映画祭も魅力薄。(172)

的田也寸志　フリー。パチンコで連日大ハマリ。今や尻の毛まで抜かれた絶望感……。しかし、翌日大爆発!!(178)

すぎやまチヒロ　女房は必ず出がけに「さぁ、人生をとりかえさなくっちゃ」と言って出かける。私は今日も漫画をかく。(198)

劇場招待プレゼント&上映スケジュール

●ご招待券（8月中有効）ご希望の方は本誌挟み込みのプレゼントハガキに希望劇場名を書いてお申し込みください。7月20日消印有効。
●劇場の都合により番組が変更になる場合がありますので、ご確認の上お出かけください。＊印は次回上映作品

上映期間：7/5（月）6（火）7（水）8（木）9（金）10（土）⑪（日）12（月）13（火）14（水）15（木）16（金）17（土）⑱（日）⑲（月）20（火）21（水）22（木）23（金）24（土）㉕（日）26（月）

地区	劇場名	TEL	招待組数	上映作品			
銀座	有楽町スバル座	03(3212)2826	2	セイブ・ザ・ワールド	海猿　ウミザル		
新宿	テアトル新宿	03(3352)1846	2	ラブドガン			
渋谷	渋谷東映	03(5467)5773	5	シルミド　SILMIDO	69 sixty nine		
渋谷	渋谷シネパレス1 渋谷シネパレス2	03(3461)3534	10	21グラム	ウォルター少年と、夏の休日		
				ハリー・ポッターとアズカバンの囚人			
渋谷	シネ・アミューズ イースト／ウエスト	03(3496)2888	2	〈イオセリアーニに乾杯！〉	箪笥		
				スキャンダル			
渋谷	シブヤ・シネマ・ソサエティ	03(3496)3203	2	スパン			
池袋	シネマサンシャイン	03(3982)6101	5	パッション	スパイダーマン2		
				デイ・アフター・トゥモロー			
				ハリー・ポッターとアズカバンの囚人〈字幕版〉			
				ハリー・ポッターとアズカバンの囚人〈吹替版〉			
				ハリー・ポッターとアズカバンの囚人〈字幕版〉			
				シルミド　SILMIDO	69 sixty nine		
池袋	シネマ・ロサ	03(3986)3713	10	ハリー・ポッターとアズカバンの囚人	キング・アーサー		
				21グラム	ウォルター少年と、夏の休日		
池袋	シネ・リーブル池袋	03(3590)2126	5	スキャンダル	永遠の片想い		
				友引忌			
池袋	テアトル池袋	03(3987)4311	2	危情少女～嵐嵐～	それいけ！アンパンマン　夢猫の国のニャニイ		
浅草	浅草中映劇場	03(3841)2400	5	ブロウ／さすらいのカウボーイ	マスター・アンド・コマンダー／ヘブン・アンド・アース　天地英雄	レジェンド・オブ・メキシコ　デスペラード／エージェント・コーディー	ルビー&カンタン　10億分の1の男
浅草	浅草名画座	03(3841)3028	5	続・男はつらいよ／ゼブラーマン／緋牡丹博徒　花札勝負	徳川一族の崩壊／昭和残侠伝　唐獅子牡丹／塀の中の懲りない面々	半落ち／女渡世人　座頭市御用旅	日本侠客伝　斬り込み／十三人の刺客／暗黒街の顔役
東京	早稲田松竹	03(3200)8968	3	ザ・エージェント／シカゴ	パイレーツ・オブ・カリビアン　呪われた海賊たち／レジェンド・オブ・メキシコ　デスペラード	28日後…／25時	ブラザー・ベア　ファインディング・ニモ
東京	三軒茶屋シネマ	03(3421)3322	10	ホテル　ビーナス／ジョゼと虎と魚たち	未定		
東京	下高井戸シネマ	03(3328)1008	10	殺人の追憶	みなさん、さようなら。	carmen.カルメン	女王ファアナ
東京	シネマアートン下北沢	03(5452)1400	5	〈オキナワ映画クロニクル〉	青の塔／〈少年エネルギー(仮)〉		
東京	バウスシアター	0422(22)3555	2	ハリー・ポッターとアズカバンの囚人	キング・アーサー		
				炎のジプシーブラス～地図にない村から～			
				トロイ	マッハ！		

※劇場によっては、土・日・祝日は招待券を使用できませんので、ご了承ください

地域	劇場名	TEL	招待組数	7/5 月・6 火・7 水・8 木・9 金	10 土・⑪ 日・12 月・13 火・14 水・15 木・16 金	17 土・⑱ 日・⑲ 月・20 火・21 水・22 木・23 金	24 土・㉕ 日・26 月
横浜	横浜日劇	045(251)1815	2	キル・ビル　キル・ビル 2　イン・ザ・カット	オーシャン・オブ・ファイヤー／ニューオーリンズ・トライアル		フレディVSジェイソン／テキサス・チェーンソー
	シネマ・ジャック	0120(198)009		〈犯罪劇場、四十九日。〉			
	シネマ・ベティ	0120(198)009		純愛中毒／気まぐれな唇	ハッピーエンド／悪い男	オアシス／花嫁はギャング・スター	恋愛適齢期／コールドマウンテン
	関内MGA	045(261)8913	2	イザベル・アジャーニの惑い			
新潟	新潟シネ・ウインド	025(243)5530		オアシス／エレファント／わらびのこう　蕨野行		エレファント／わらびのこう　蕨野行／悪い男／それいけ！アンパンマン　夢猫の国のニャニイ	
松本	松本エンギザ	0263(32)0396	5	ブラザーフッド　ハリー・ポッターとアズカバンの囚人	69 sixty nine／ウォルター少年と、夏の休日		
岐阜	シアターペルル	058(262)0871	5	幸せになるためのイタリア語講座	ウォルター少年と、夏の休日／幸せになるためのイタリア語講座		スイミング・プール　ウォルター少年と、夏の休日
愛知	名古屋シネマスコーレ	052(452)6036	10	ロスト・メモリーズ　4人の食卓	思い出の夏／愛にかける橋		HAZAN
	名古屋ゴールド劇場	052(451)0815	10	ロスト・イン・トランスレーション	トスカーナの休日		
	名古屋シルバー劇場	052(451)0815		パピヨンの贈り物			永遠の片想い
	名古屋シネマテーク	052(733)3959	5	バーバー吉野	犬と歩けば　チロリとタムラ	永遠の語らい	永遠のモータウン
	今池国際シネマ	052(732)1880	5	海猿　ウミザル	キッチン・ストーリー		箪笥
	今池国際劇場	052(732)1880	5	下妻物語		ポケットモンスター　裂空の訪問者デオキシス	
大阪	テアトル梅田	06(6359)1080	10	ラブドガン		午後の五時	
				テッセラクト			
	シネ・リーブル梅田	06(6440)5930	5	ロスト・イン・トランスレーション　＊茶の味			
				ロスト・イン・トランスレーション／友引忌		未定　＊永遠の片想い	
	シネ・ヌーヴォ	06(6582)1416	5	〈中国映画の全貌2004〉		ホストタウン　エイブル 2	
京都	祇園会館	075(561)0160	5	リーグ　オブ　レジェンド　時空を超えた戦い／ファインディング・ニモ〈吹替版〉			ラスト　サムライ／フォーンブース
神戸	シネ・リーブル神戸	078(334)2126	5	列車に乗った男			テッセラクト
				スイミング・プール			永遠の片想い
				ロスト・イン・トランスレーション　＊茶の味			
	シネ・ピピア	0797(87)3565	5	世界の中心で、愛をさけぶ	パッション		シュレック2〈吹替版〉
				クイール	ロード・オブ・ザ・リング　王の帰還〈字幕版〉	白い巨塔　氷点／ロード・オブ・ザ・リング　王の帰還〈字幕版〉	キング・アーサー〈字幕版〉
広島	広島サロンシネマ1	082(241)1781	10	ロスト・イン・トランスレーション	女王ファナ／友引忌		わが故郷の歌／アフガン零年
	広島サロンシネマ2	082(241)1781		純愛中毒／悪い男	4人の食卓		carmen.カルメン　ハッピーエンド
	広島シネツイン	082(241)7711		カレンダー・ガールズ		カレンダー・ガールズ　それいけ！アンパンマン　夢猫の国のニャニイほか1本	
	シネマモード	0849(23)3788	5	ロスト・イン・トランスレーション	69 sixty nine	スチームボーイ	
九州	シネテリエ天神	092(781)5508	10	列車に乗った男		テッセラクト／リアリズムの宿	
	KBCシネマ1	092(751)4268	10	ションヤンの酒家	ル・ディヴォース〜パリに恋して	キャンプ	ディープ・ブルー
	KBCシネマ2	092(751)4268		あなたにも書ける恋愛小説	ヴェロニカ・ゲリン	アメリカン・スプレンダー	
	シネサロン・パヴェリア	092(852)5650	5	ふくろう	ジャンプ		永遠の片想い
	シネ・リーブル博多駅	092(434)3691	10	スイミング・プール			永遠の片想い
				パピヨンの贈り物	ラブドガン		
	シネパラダイス	096(211)3360	5	ブラザーフッド	スパイダーマン2〈吹替版〉／ブラザーフッド		

◆次の各劇場へ今号の本誌挟み込み〈試写会ハガキ〉を持参されると、各劇場規定料金にて割引ご招待いたします。
【高知】●高知東映●ピカデリー1・2・3●あたご劇場（高知キネ旬友の会協力）　【高松】●高松東宝1・2・3（高松キネ旬友の会協力）
【松山】シネ・リエンテ●シネマサンシャイン　【福岡】●福岡中洲大洋●福岡東映劇場●駅前ロマン●福岡オークラ劇場（福岡キネ旬友の会協力）

Presents

プレゼントの応募は本誌とじ込みハガキでどうぞ。7月20日必着です。(「天国の青い蝶」試写会は7月16日必着)

試写会

天国の青い蝶

■ヤクルトホール(新橋)
■7月27日(火)
■18：30開場／19：00開映

余命数ヶ月と宣告された少年の夢は、美しい"幻の蝶"をひと目見ることだった……。夏休み、シネスイッチ銀座ほかにて〈提供：東芝エンタテインメント〉

5組10名

試写会

モナリザ・スマイル

■一ツ橋ホール(神保町)
■7月30日(金)
■18：00開場／18：30開映

ボストンの名門女子大を舞台に、助教授と学生たちとの交流を描く、ジュリア・ロバーツ主演最新作。8月7日よりみゆき座ほか東宝洋画系にて〈提供：ＵＩＰ〉

10組20名

「ザ・カップ／夢のアンテナ」

招待券

『群馬アジア映画祭』

■みかぼみらい館大ホール(藤岡市)
■8月8日(日)
■9：30開場／9：50開会

今年で10回目を迎える「群馬アジア映画祭」では「初恋のきた道」「ザ・カップ／夢のアンテナ」(写真) ほかの計4作品を上映〈提供：映画祭事務局〉

5組10名

Goods

ガキンチョ☆ROCK

オリジナルQUOカード

10代～30代に圧倒的な人気を誇る若手芸人"キングコング"と"ロザン"が共演したハチャメチャ青春コメディがビデオ＆ＤＶＤで7月23日にリリース。(ＤＶＤ2枚組：税込5250円、通常版：税込3990円)〈提供：バンダイビジュアル〉

5名

Goods

ニューオーリンズ・トライアル/陪審評決

オリジナル"勝訴"タオル

ダスティン・ホフマンとジーン・ハックマンの共演が話題の傑作法廷サスペンスがビデオ＆ＤＶＤで登場。裁判の裏と表で展開する頭脳戦はスリリングだ。ＤＶＤは7月23日発売（税込：3990円）〈提供：ジェネオン　エンタテインメント〉

3名

Goods

ホーンブロワー　海の勇者

メタリック電卓付世界時計

「マスター・アンド・コマンダー」の原点ともいえるセシル・スコット・フォレスター原作の海洋冒険小説がドラマ化、ＤＶＤ-ＢＯＸになって登場する。「ＢＯＸ1」は7月23日に発売(税込15960円)〈提供：ハピネット・ピクチャーズ〉

10名

Kinejun Information

編集部だより

■【お詫びと訂正】6月下旬特別号の表紙「天国の本屋～恋火」の表記に誤りがありました。また全州映画祭記事中、広報パーティーが昨年の東京国際映画祭期間中に実施との記述をフィルメックス期間中に訂正します。7月上旬号の『夏休み映画特集』にて「ＩＺＯ」のタイトル表記に間違いがありました。正しくは『Ｕ』が入りません。関係者、並びに読者の皆様に深くお詫び申し上げます。

出版部だより

■6月の新刊は次の2点。
○『オーケンの、私は変な映画を観た!!』大槻ケンヂ著（1470円）本誌で好評連載されたエッセイが大幅に加筆され1冊に。ド派手な表紙が目印。
○『男優倶楽部ＶＯＬ.16』(1000円) 目立つのを嫌がる安藤政信を無理やり説得して表紙実現。彼や妻夫木聡はじめ、ホンネのインタビューに注目。

営業部だより

■既刊フィルムメーカーズシリーズの『⑥宮崎駿』『⑰岩井俊二』の2点を重版いたします。

事業部だより

■8月21日(土)開催『映画製作セミナー』の受講生を募集中。「ジョゼと虎と魚たち」の犬童一心監督×久保田修プロデューサー、「スウィングガールズ」の矢口史靖監督×桝井省志プロデューサー、俳優の榊英雄氏をお迎えし『劇場公開作品の作り方』を講義していただきます。

キネマ旬報

2004年
7月下旬号
No.1409

●発行人
小林　光

●編集長
関口裕子

●副編集長
前野裕一

●編集スタッフ
山田正人
天本伸一郎
滝澤麻衣
神保憲史
川井英司

●広告スタッフ
島崎智明
上田真美

●表紙デザイン・レイアウト
島岡　進

●レイアウト
梅津由子

●発行
株式会社キネマ旬報社
〒106-0045
東京都港区麻布十番
1-2-3　プラスアストル
振替00100-0-182624
TEL 03-3589-8300(代表)
03-3589-8327(編集部)
03-3589-8325(営業部)
03-3589-8329(広告部)
FAX 03-3589-8302
http://www.kinejun.com/

●印刷・製本
三晃印刷株式会社

ISSN 1342-5412

編集後記

■数ある夏休み映画の中で最大級の注目を集めている「スパイダーマン2」。本作を観ると映画はストーリーと監督の演出だと改めて思わされた。
　これは「スーパーマンⅡ 冒険篇」でも感じたことだが、VFXによる特撮映像やアクションシーンの素晴らしさもさることながら、今回は複雑な人間関係や超人ゆえの悩み、MJとの恋の行方やドック・オクとの死闘などがバランスよく描かれている。これまでにも『アメコミ』の実写化映画は数あれど、日本人にはあまり馴染みのないキャラクターたち。でも単なる実写化というワクを超えて誰もが楽しめる一級の娯楽作品に仕上がっていると思う。
　さらに本作は続編でありながらキャラクターに埋れることなく、進歩したトビー・マグワイアの演技に光輝くものがある。とにかく上手い。観ていて安心する。若き日のハリソン・フォードみたいな匂いを感じる。パート3が楽しみだ。　山田

コレすごく面白かった！
「スパイダーマン2」
7月10日より日劇1系にて

■先日電車内で聞いた会話。「ヴアイブレータ貸して」「いいよ。明日持ってくる」。すっかり人前で言っても恥ずかしくない〝一般名詞〟に〝昇格〟した(?)ことを実感。DVDただ今発売中。川井

■大鐘賞授賞式後におこなわれた晩餐会にて、ひきもきらずやってくる記者たちに、食事もとらず笑顔で応対していたホ・ジュノ氏。今回の受賞が本当に嬉しかったのでしょう。　神保

■「海猿 ウミザル」といい「69 sixty nine」といいこの夏は夏にぴったりの青春映画が全国公開。両主演俳優のひと皮むけた演技は、映画ファンなら記憶にとどめておきたいところ。滝澤

■撮影の篠田昇氏が6月22日に急逝。「世界の中心〜」特集で中村裕樹氏と対談して頂いたのは4月10日のことで、その笑顔は鮮明に覚えている。篠田氏のご冥福をお祈りします。　天本

■字幕なしで「リディック」を観た。語学力がないので細かいところまではわからないが、「砂の惑星」みたいで面白かった。早く字幕付きでもう一度みたいと思う今日この頃。　山田

■いまの「荒野の決闘」は、ザナックによる削除や追加の末の版であることは知っていたが、ジョン・フォードが意図したオリジナル版が現存するとは！　FOXビデオに感謝。　前野

■7月上旬号で最終回を迎えた『照明技師・熊谷秀夫 降る影、待つ光』は秋に弊社より出版の予定です。筆者の長谷川隆さん、熊谷秀夫さん、一年間お疲れさまでした。また現在、好評連載中の川本三郎さん『映画を見ればわかること』も8月下旬にシリーズ第一弾の単行本化を予定しています。大槻ケンヂさんはじめ、続々と単行本となるキネ旬の連載。お楽しみに！　関口

次号予告

8月上旬特別号[No.1410]◎7月20日発売◎予価1,000円(税込)

巻頭特集

創刊85周年記念特集・前編

映画人から映画人へのリスペクト、双葉十三郎×川本三郎対談

表紙で綴るキネマ旬報の85年、読者賞受賞者インタビュー、私とキネマ旬報

作品特集

◎「シュレック2」◎「キング・アーサー」◎「父と暮せば」◎「マインド・ゲーム」

FACE●豊川悦司　Hot Shots●ルパート・グリント、エマ・ワトソン

キネマ旬報バックナンバー在庫一覧

☆＝定価（税込）　送料は各120円（2／下・臨時増刊は160円）

近刊バックナンバー

'04・7月上旬号「スチームボーイ」特集
☆820円◇送料120円

'04・6月下旬特別号「ブラザーフッド」と夏の韓国映画
☆860円◇送料120円

'04・6月上旬号「トロイ」特集
☆820円◇送料120円

'04・5月下旬号「世界の中心で、愛をさけぶ」特集
☆820円◇送料120円

'04・5月上旬特別号「コールド・マウンテン」特集
☆860円◇送料120円

'04・4月下旬号「恋人はスナイパー」特集
☆820円◇送料120円

2003

●1387・8月下旬号　☆820円
「パイレーツ・オブ・カリビアン／呪われた海賊たち」／「コンフェッション」／「フリーダ」／「ゲロッパ！」／追悼：キャサリン・ヘップバーン

●1388・9月上旬特別号　☆860円
「HERO」「ドラゴンヘッド」／「ファム・ファタール」／特別企画：韓国テレビドラマ／「木更津キャッツアイ」ルポ①

●1389・9月下旬号　☆820円
「恋は邪魔者」「座頭市」／「フォーン・ブース」／「ロボコン」／どう観た「踊る大捜査線 THE MOVIE 2」／「木更津キャッツアイ」ルポ②

●1390・10月上旬号　☆820円
「陰陽師Ⅱ」／「トゥームレイダー2」／「サハラに舞う羽根」／リスペクト－中平康　映画本座談会2003年上半期版／「木更津キャッツアイ」ルポ③

●1391・10月下旬号　☆820円
「インファナル・アフェア」／「リーグ・オブ・レジェンド」／「マグダレンの祈り」「木更津キャッツアイ」ルポ④／「阿修羅のごとく」ルポ前篇

●1392・11月上旬号　☆820円
「キル・ビル」「ティアーズ・オブ・ザ・サン」／「スカイハイ［劇場版］」／「木更津キャッツアイ」ルポ⑤「阿修羅のごとく」ルポ後篇

●1393・11月下旬号　☆820円
「阿修羅のごとく」／「マトリックス　レボリューションズ」「g@me.」／「昭和歌謡大全集」「木更津キャッツアイ」ルポ⑥／双葉十三郎が選ぶ日本映画男優100人

●1394・12月上旬特別号　☆860円
「木更津キャッツアイ　日本シリーズ」／「バッドボーイズ2バッド」「ブラウン・バニー」／「幸福の鐘」「ヴァイブレータ」

●1395・12月下旬号　☆820円
「ラスト　サムライ」／「ファインディング・ニモ」／「美しい夏キリシマ」／「MUSA」／どう見た「キル・ビル」／特別企画：小津安二郎生誕百年

2004

●1396・1月上旬号　☆820円
「2046」／「最後の恋，初めての恋」「ミシェル・ヴァイヨン」／「ジョゼと虎と魚たち」／「10ミニッツ・オールダー」／「アイデン&ティティ」「すべては愛のために」

●1397・1月下旬新春特別号　☆860円
KOREAN　MOVIE&STAR2004／「ミスティック・リバー」／「着信アリ」／「半落ち」／「25時」新春インタビュー：新藤兼人・鈴木敏夫・三谷幸喜・大林宣彦

●1398・2月上旬号　☆820円
「ドラッグストア・ガール」「シービスケット」「赤い月」／「ニューオーリンズ・トライアル」／「オアシス」特別企画：祝・主演100本　哀川翔

●1399・2月下旬決算特別号　☆1600円
2003年度ベスト・テン／公開作品リスト「喰う伊右衛門」／「この世の外へ　クラブ進駐軍」

●1400・3月上旬号　☆820円
「ロード・オブ・ザ・リング　王の帰還」「ヘブン・アンド・アース」「東京原発」「グッバイ・レーニン！」「マスター・アンド・コマンダー」

●1401・3月下旬号　☆820円
「ホテル　ビーナス」「ペイチェック　消された記憶」「イノセンス」／「花とアリス」／「ピカ☆☆ンチ　LIFE IS HARDだからHAPPY」／スクリーンで甦る「大脱走」

●1402・4月上旬号　☆820円
「クイール」／「イン・ザ・カット」／「殺人の追憶」「N.Y.式ハッピー・セラピー」／「卒業の朝」／第76回アカデミー賞のすべて

●1403・4月下旬号　☆820円
「恋人はスナイパー《劇場版》」「ディボース・ショウ」／「ピーター・パン」「バーバー吉野」／映画本座談会2003年下半期　クリント・イーストウッド論

●1404・5月上旬特別号　☆860円
「コールドマウンテン」「CASSHERN」／「キル・ビルVol.2」「ロスト・イン・トランスレーション」／山中貞雄監督入門／特集　イ・ビョンホン

●1405・5月下旬号　☆820円
「世界の中心で、愛をさけぶ」／「ビッグ・フィッシュ」／「パッション」　対談：犬童一心×山崎努・青島幸男×谷啓

●1406・6月上旬号　☆820円
「トロイ」／「21グラム」／「深呼吸の必要」／「クリムゾン・リバー2　黙示録の天使たち」／日本映画の曲り角

●1407・6月下旬特別号　☆860円
「ブラザーフッド」と夏の韓国映画／「デイ・アフター・トゥモロー」／「天国の本屋～恋火」「海猿」スペシャルインタビュー：寺島進

●1408・7月上旬号　☆820円
「スチームボーイ」／「白いカラス」／「ウォルター少年と、夏の休日」／「ハリー・ポッター」と夏休み映画64本／追悼：三橋達也

■本欄掲載以外の号の一覧もございますのでご希望の方はハガキ等でお申し込み下さい。
■バックナンバーのお申し込みは、最寄の書店に御注文いただくか、小社宛、現金書留または郵便振替用紙にて、定価に送料をあわせて御入金下さい。また、下記の書店にてバックナンバーを扱っておりますので、御利用下さい。

北上市　ブックスサンワ
仙台市　丸善アエル店
川口市　書泉ブックドーム
千葉県　芳林堂書店津田沼店・多田屋中央店
東京都　八重洲BC本店・三省堂書店本店・書泉グランデ・書泉ブックマート・書泉ブックタワー・大盛堂書店・リブロ渋谷店・リブロ池袋店・旭屋書店銀座店・教文館・紀伊國屋書店本店・紀伊國屋書店新宿南店・ブックファースト渋谷店・ジュンク堂書店池袋店・ジュンク堂書店プレスセンター店
横浜市　有隣堂イセザキ本店
静岡市　戸田書店静岡本店
名古屋　ちくさ正文館本店・リブロ名古屋店・ヴィレッジヴァンガード生活創庫店・ヴィレッジヴァンガードベイシティ
京都市　ブックファースト京都店
大阪市　旭屋書店本店・シネ・ヌーヴォ・ジュンク堂書店大阪本店・紀伊國屋書店梅田本店シネマシネマ
神戸市　ジュンク堂書店三宮駅前店
倉敷市　喜久屋書店倉敷店
広島市　リブロ広島店
福岡市　リブロ福岡店・ジュンク堂書店福岡店
長崎市　メトロ書店アミュプラザ店

スチームボーイ

an adventure story of STEAMBOY

僕は、未来を、あきらめない。

大友克洋 監督作品

04.7.17 in theatres

キャスト：鈴木 杏・小西真奈美・中村嘉葎雄・津嘉山正種・児玉 清・沢村一樹・斉藤 暁・寺島 進

原案・脚本・監督：大友克洋　脚本：村井さだゆき　音楽：スティーブ・ジャブロンスキー

製作：STEAMBOY製作委員会

（バンダイビジュアル・ソニー・ピクチャーズエンタテインメント・バンダイ・電通・TBS・サンライズ・東宝・IMAGICA・カルチュア・パブリッシャーズ）

配給：東宝

www.steamboy.net

定価820円 本体781円

雑誌 20723-7/15

4910207230741

00781

豊川悦司／ルパート・グリント＆エマ・ワトソン／「ローレライ」撮影現場ルポ／DVD情報も満載！
「シュレック2」「キング・アーサー」「父と暮せば」「マインド・ゲーム」

キネマ旬報

8月上旬
特別号
NO.1410
2004

85th 創刊85周年記念号①

映画人から映画人へのリスペクト

表紙で振り返る「キネマ旬報」の歴史／映画評論：双葉十三郎×川本三郎
私と「キネマ旬報」／キネマ旬報賞読者賞受賞者から

映画制作会社、
プロデューサー、
地方自治体、
シナリオライター、
映画監督、
自主映画作家の皆様へ

あなたの企画を

――東京テアトル

お聞かせください

Garinpeiro
東京テアトル株式会社

東京テアトルは、単館（もしくは単館拡大）で、なおかつ
エンターテイメント性のある作品の企画を広く募集致し、
弊社が提唱するガリンペイロレーベル作品として製作致します。
優れたアイディアさえあれば映画が作れる環境、
魅力的なコンテンツを創造するネットワーク作りにぜひご参加下さい

【企画の最優先事項はなにか】
ジャンルは問いません。
但し、あくまでより多くのお客様に満足いただける
"新しい""面白い"単館系エンターテイメント映画の企画を
随時募集いたします。
募集するものは企画案であり、
より魅力的なストーリーのアイデアです。
応募フォーマットは下記HPにてご覧ください。

【シナリオづくり】
マーケッティングなどを考慮に入れた上で、
企画提案者と東京テアトル担当者とで協議しながら
ディベロップしてゆきたいと考えます。

【資金調達】
東京テアトルが中心となって委員会を組織し、調達いたします。
企画提案者に自己資金があれば
製作委員会に加入することもできますが、
なくても結構です。

【プロダクション業務】
企画提案者が制作プロダクションである場合、
プロダクション業務はそのプロダクションに発注されます。
キャスティングは予算と配給ルートの規模に鑑みて、
協議の上、決定します。

【配給・興行ルート】
テアトル新宿、テアトル池袋（共にDLP設置）を中心とした
テアトル系劇場の興行ルートを使っての上映を基本とします。
また、それ以上の規模の作品は別途協議となります。

【成功報酬】
企画発案者に成功報酬が支払われる
システムを考案中です。

**テアトル池袋を新人発掘の場として
活用していただける上映企画も募集しております。**

『ワイルド・フラワーズ』
2004 春
テアトル池袋
公開
©『ワイルド・フラワーズ』製作委員会

『オーバードライヴ』
2004 秋
テアトル新宿、テアトル池袋ほか
全国順次公開
©『オーバードライヴ』製作委員会

『犬猫』
2004 秋
渋谷シネアミューズ公開ほか
全国順次公開
©『犬猫』製作委員会

『ゴーストネゴシエイター』
2004 冬
テアトル新宿、テアトル池袋ほか
全国順次公開
©『ゴーストネゴシエイター』製作委員会

詳しくは、ガリンペイロ HPをご覧下さい。
http://www.garinpeiro.com/

7月24日(土)リリース

DVD VIDEO

爆笑とペーソスでファンの心をつかむ人情喜劇4本が豪華DVD-BOX化!

渥美 清メモリアル 渥美清・もう一つの世界

「砂の器」野村芳太郎と「男はつらいよ」渥美 清の最強タッグが実現!!

- ●豪華ボックス仕様
- ●特典映像(予告編)
- ●特製ブックレット

品番:DA-0376
税込価格:15,960円

発売・販売元:松竹(株)ビデオ事業室

拝啓天皇陛下様

軍隊よいとこ一度はおいで!? 笑いと涙の人間模様

貧しい親戚の間をたらい回しにされてきた山正こと山田正助。昭和6年彼は初年兵として軍隊に入隊。山正にとって軍隊は衣食住の完備された天国。終戦の噂が流れると、山正は慌てて天皇陛下にもっと軍隊に置いてくれと手紙を書くのであった。

【キャスト】渥美 清/長門裕之/中村メイコ/左 幸子
【スタッフ】製作:白井昌夫/原作:棟田博/脚本:多賀祥介、野村芳太郎/撮影:川又昂/音楽:芥川也寸志/美術:宇野耕司/録音:栗田周十郎/照明:三浦礼/監督:野村芳太郎

1963年	日本映画	本編99分	片面一層	カラー	MPEG-2	複製不能	レンタル禁止
日本語(ドルビーモノラル)		16:9 LB シネマスコープサイズ		2 NTSC 日本市場向		DOLBY DIGITAL	

続拝啓天皇陛下様

ああ愉しき哉、軍隊。 怪男児、山口善助が巻き起こす波乱と爆笑!

支那事変まっただ中の昭和14年。召集令状を受け取った天涯孤独の男、山口善助。待ちに待った吉報だ。勇躍入隊した善助は、軍隊犬部隊に配属され飼育係に任命される。その日から元の飼い主ヤエノ夫人との文通が始まり、やがて憧れるように…。

【キャスト】渥美 清/藤山寛美/小沢昭一/久我美子/南田洋子/宮城まり子/岩下志麻/佐田啓二
【スタッフ】製作:白井昌夫/原作:棟田博/脚本:多賀祥介、山田洋次、野村芳太郎/撮影:川又昂/音楽:芥川也寸志/美術:宇野耕司/録音:栗田周十郎/照明:三浦礼/監督:野村芳太郎

1964年	日本映画	本編94分	片面一層	カラー	MPEG-2	複製不能	レンタル禁止
日本語(ドルビーモノラル)		16:9 LB シネマスコープサイズ		2 NTSC 日本市場向		DOLBY DIGITAL	

白昼堂々

※本作品はカラー作品です

ソレ行け万引き大集団! 個性豊かな配役で魅せる犯罪喜劇

スリの名人だったワタ勝こと渡辺勝次は、足を洗って真面目に働いていた。しかし会社が倒産、再びスリ稼業の仲間を集めて万引き集団を結成した。一時は順調に稼いでいた万引き集団だが、次第に警察の動きが活発になる。追いつめられワタ勝は最後の大勝負に出るが…。

【キャスト】渥美 清/倍賞千恵子/田中邦衛/佐藤蛾次郎/フランキー堺
【スタッフ】製作:杉崎重美/原作:結城昌治/脚本:野村芳太郎、吉田剛/撮影:川又昂/音楽:林光/美術:梅田千代夫/録音:栗田周十郎/照明:三浦礼/監督:野村芳太郎

1968年	日本映画	本編99分	片面一層	モノクロ	MPEG-2	複製不能	レンタル禁止
日本語(ドルビーモノラル)		16:9 LB シネマスコープサイズ		2 NTSC 日本市場向		DOLBY DIGITAL	

でっかいでっかい野郎

メシより好きな大暴れ! "二代目無法松"が繰り広げるモーレツ珍騒動

鬼殺しの松こと南田松次郎は、父親の故郷で働こうと決意し、若松の保護司・山口医院を訪ねた。院長の山口は就職を世話してやるが、仕事は長続きせず。しかし思わぬ事件のお陰で松は一躍話題の人に。"二代目無法松"と騒がれた彼は珍騒動を巻き起こしていく。

【キャスト】渥美 清/岩下志麻/財津一郎/長門裕之/伴淳三郎
【スタッフ】製作:杉崎重美/脚本:野村芳太郎、永井素夫/撮影:川又昂/音楽:林光/美術:重田重盛/録音:栗田周十郎/照明:三浦礼/監督:野村芳太郎

1969年	日本映画	本編91分	片面一層	カラー	MPEG-2	複製不能	レンタル禁止
日本語(ドルビーモノラル)		16:9 LB シネマスコープサイズ		2 NTSC 日本市場向		DOLBY DIGITAL	

渥美 清

1928年生まれ。'51年、浅草六区の「百万ドル劇場」「フランス座」の専属コメディアンとなり注目される。'59年にTVドラマ出演後、ドラマとバラエティの分野で活躍。'63年『拝啓天皇陛下様』でスターとして地位を確立。さらに'68年TVドラマ「男はつらいよ」が爆発的人気番組となり、翌年映画化され大ヒット。以後シリーズ化され、'95年の『寅次郎 紅の花』まで48作品が作られたことは周知の通り。'96年8月4日、肺ガンにて死去。68歳。

代表作 好評発売中 『男はつらいよ』シリーズ
品番:DKS-101~149 税込価格:各3,990円

野村芳太郎監督

1919年生まれ。父は松竹蒲田の初期の所長で大監督として知られた野村芳亭。'51年に黒澤明の『白痴』で助監督を務め、'52年に監督デビュー。代表作としては『張込み』『ゼロの焦点』『影の車』『砂の器』『鬼畜』『疑惑』といった松本清張ものが挙げられる。社会派監督として知られるが、一方で叙情味も失わず、野村調ともいうべき独特の画を作り出す。また、若き日の岩下志麻や緒形拳を演技開眼させるなど、役者の魅力を引き出す手腕にも定評がある。

代表作 好評発売中 『砂の器』
品番:DA-0129 税込価格:4,935円

SHV SHOCHIKU HOME VIDEO

松竹株式会社 ビデオ事業室 〒104-8422 東京都中央区築地4-1-1 TEL 03(5550)1611 FAX 03(5550)1651 http://www.shochiku.co.jp

営業課 〒104-8422 東京都中央区築地4-1-1 TEL 03(5550)1611 FAX 03(5550)1651
関西営業課 〒550-0015 大阪市西区南堀江2-1-3松竹ビル4F TEL 06(6537)1724 FAX 06(6537)1731
中部営業課 〒460-0008 名古屋市中区栄1-3-3朝日会館7F TEL 052(218)0088 FAX 052(218)0089
九州営業課 〒810-0801 福岡市博多区中洲5-1-22 TEL 092(281)1036 FAX 092(291)3894

7月24日(土) リリース

DVD VIDEO

娘の結婚

いつまでもお父さんのそばにいたい
いつまでも娘をそばに置いてはおけない
父娘の美しい情愛を繊細なタッチでドラマ化

夢のリメイクが実現! 市川崑×小津安二郎
小津生誕100年を記念して
巨匠・市川崑が『晩春』を撮った!!

2003年12月14日 WOWOWハイビジョン放映作品

記念すべき小津安二郎生誕100年の年(2003年)、日本映画界を代表する名匠・市川崑が「晩春」をリメイクした。設定を現代に置き換え、市川監督らしい新たな視点を提示しながらも、シンプルな構図で、オリジナルの格調を損なうことなく、放送時も大変話題となった本作。かつて原節子が演じた娘役には鈴木京香、笠智衆が演じた父親役には長塚京三を迎え、奥行きのある魅力的な人物像を打ち立てている。憧れの大先輩への深い敬愛を感じさせるようなショットもあり、小津ファンにとっても興味をかき立てられるに違いない。

■キャスト
雨宮規子:鈴木京香
雨宮周吉:長塚京三
杉山昌二:仲村トオル
坂本 綾:緒川たまき
高梨まき:藤村志保

【ストーリー】 中流サラリーマンの雨宮周吉(長塚京三)は娘の規子(鈴木京香)と2人暮らし。早くに母親を亡くしてしまった規子は、父親のことが心配で、いつまでもそばにいたいと願っている。しかし周吉は、娘が婚期を逃しそうになっていることを周囲に指摘され、どうにか結婚させようとする。その花婿には周吉の元部下の好青年、杉山(仲村トオル)を、と思い立ち、周吉は思い切って規子に気持ちをたずねてみるのだが…。

■スタッフ
原作:廣津和郎
脚本:小津安二郎/野田高梧(松竹映画「晩春」より)
潤色:久里子亭
撮影:五十畑幸勇
美術:桜井佳代
照明:斎藤 薫
録音:浦田和治
音楽:谷川賢作
監督:市川 崑
企画協力:堀地 巌
製作協力:アトリエ21
統括プロデューサー:青木泰憲(WOWOW)
プロデューサー:松橋真三(WOWOW)、鶴間和夫

■放送日・ネット
2003年12月14日 WOWOWハイビジョン放送

2003年 / 日本映画 / 本編約95分 / 片面二層 / カラー / MPEG-2 / 複製不能
日本語(ドルビーステレオ) / スタンダード / NTSC 日本市場向 / DOLBY DIGITAL

※ビデオ:HiFiステレオ

ビデオ(レンタル) SA-9357 10,290円(税込)
DVD(セル) DA-0370 3,990円(税込)
DVD(レンタル) DA-9370 10,290円(税込)

特殊ケース仕様(セルのみ)
映像特典:予告篇、メイキング
発売・販売元:松竹(株)ビデオ事業室

小津安二郎『晩春』

1949年に製作された小津安二郎の代表作。この作品で小津は脚本家の野田高梧と戦後再びタッグを組んだ。また、その後の小津映画のヒロインとなる原節子を初めて起用した点でも記念碑的な意味を持つと言えよう。「晩春」をもって「麦秋」「東京物語」をしのぐ最高傑作、と評する声もかなりある。いずれにしても、映画監督としての真の意味での円熟味が感じられることは間違いない。ここから小津は巨匠として大きな一歩を踏み出すこととなる。

「小津安二郎 第二集」
[収録内容]
「晩春」「麦秋」「お茶漬の味」「早春」「東京暮色」
DA-0268 24,675円(税込)
特典ディスク・特製ブックレット付

SHV SHOCHIKU HOME VIDEO
松竹株式会社 ビデオ事業室 〒104-8422 東京都中央区築地4-1-1 TEL 03(5550)1611 FAX 03(5550)1651 http://www.shochiku.co.jp
営業課 〒104-8422 東京都中央区築地4-1-1 TEL 03(5550)1611 FAX 03(5550)1661
関西営業課 〒550-0015 大阪市西区南堀江2-1-3松竹ビル4F TEL 06(6537)1724 FAX 06(6537)1731
中部営業課 〒460-0008 FAX 052(218)0089
九州営業課 〒810-0801 福岡市博多区中洲5-1-22 TEL 092(281)1036 FAX 092(291)3894

実写版

伊吹吾郎主演

さいとう・たかを原作

無用ノ介

さいとう・たかを時代劇画の傑作が復活！

DVD-BOX ①
7/22発売
さいとう・たかを直筆原画をBOX表紙に使用

DVD-BOX ②
8/25発売
さいとう・たかを秘蔵の直筆ポストカード付

永遠の女王・美空ひばりの隠れた名曲が無用ノ介を助太刀！

無用ノ介主題歌「一人行く」 歌：美空ひばり 作詞：石本美由起 作曲：小野透　副主題歌「無用ノ介」 歌：美空ひばり 作詞：さいとう・たかを 作曲：佐々永治

DVD-BOX ①
原作：さいとう・たかを　脚本：さいとう・たかを、猪俣勝人
小池一雄　監督：高橋繁男、下村堯二、土屋啓之助
キャスト：伊吹吾郎、南原宏治、山形 勲、伊丹十三、吉沢京子
馬渕晴子、岡田英次、中村梅之助、佐々木 愛、原 保美
大友柳太朗、左 幸子、内田朝雄、安部 徹
MRBF-1004　DVD-BOX 5枚組（片面一層×5枚）
¥17,850（税込）¥17,050（税抜）セル or レンタル
本編収録時間：各話48分×9話+全話予告編
カラー／モノラル／1969年／製作・著作：国際放映

DVD-BOX ②
原作：さいとう・たかを　脚本：さいとう・たかを、猪俣勝人
小池一雄、西沢 治　監督：高橋繁男、下村堯二
キャスト：伊吹吾郎、江見俊太郎、加藤 武、二瓶正也
里見浩太郎、山本 学、山本麟一、松川 勉、田中淳一、左 時枝
広瀬みさ、木村俊恵、草間靖子、大塚道子
MRBF-1005　DVD-BOX 5枚組（片面一層×5枚）
¥19,950（税込）¥19,000（税抜）セル or レンタル
本編収録時間：各話48分×10話
カラー／モノラル／1969年／製作・著作：国際放映

田宮二郎主演「白シリーズ」第1作

敏腕雑誌記者である主人公が、一人の女子高生の自殺記事を発端にして、暗い渦に巻き込まれていく…

真実とは

彼は見た

白い荒野

DVD-BOX

映像特典：全話オリジナル予告編

原案：山田信夫　脚本：山田信夫、重森孝子、秋川 峻　監督：富本壮吉、降旗康男、大槻義一、井上梅次、青木 敏
キャスト：田宮二郎、松原智恵子、岡本富士太、長門裕之、野際陽子、ハナ肇、神保美喜、岡江久美子、永井秀和、森島一夫
MRBF-1003　DVD-BOX　セット組・7枚（2枚入り3ケース+1枚入り1ケース）片面2層7枚（6枚：各4話収録、1枚：2話+全予告編収録）
価格¥35,280（税込）セル or レンタル　本編収録時間：各話約45分・全26話完全収録／カラー／モノラル／1977年／製作・著作：国際放映

発売元：エムスリイエンタテインメント株式会社　販売元：株式会社ファーストディストリビューション
〒107-0062 東京都港区南青山3-1-1プラザ246青山ビル3F TEL03-3746-1792 FAX03-3746-1797

劇場公開作品を作るには どうすればよいか？

キネマ旬報社主催

映画製作セミナー

日時：2004年8月21日（土）11：00〜17：00
会場：恵比寿・SPAZIO2（℡03-5725-4240）
料金：8400円（税込）

"作りたい映画の企画がある""映画を監督orプロデュースしたい""映画に出演したい"と考えている人々に向けて、第一線で活躍中の映画監督＆プロデューサー＆俳優が、具体的な作品を提示しながら、劇場映画製作の方法論をレクチャーするセミナーです。作品の成り立ちに沿って「企画の生み出し方」「シナリオのディベロップ」「資金調達」「キャスティング／演出／演技について」、また「今求められる企画」など多岐に渡るテーマで、深く掘り下げた講義を行います。奮ってご参加ください。

Lesson1■「ジョゼと虎と魚たち」はいかにして作られたのか？〜監督の視点・プロデューサーの視点1〜

講師：犬童一心（いぬどういっしん）氏（映画監督）×久保田修（くぼたおさむ）氏（プロデューサー／IMJエンタテインメント）

代表作：
「金髪の草原」
「ジョゼと虎と魚たち」
「死に花」

代表作：
「とらばいゆ」
「黄泉がえり」
「ジョゼと虎と魚たち」

Lesson2■ 新作「スウィングガールズ」はいかにして作られたのか？〜監督の視点・プロデューサーの視点2〜

講師：矢口史靖（やぐちしのぶ）氏（映画監督）×桝井省志（ますいしょうじ）氏（プロデューサー／アルタミラピクチャーズ）

代表作：
「アドレナリンドライブ」
「ウォーターボーイズ」
「パルコフィクション」

代表作：
「Shall We ダンス？」
「ウォーターボーイズ」
「タカダワタル的」

Lesson3■ 俳優・監督それぞれの役割

講師：榊英雄（さかきひでお）氏（俳優）

代表作：
「VERSUS―ヴァーサス―」
「あずみ」
「監督感染『終着駅の次の駅』（監督作品）」

※講師・演題はやむなき事情により変更の場合がございます。

申込方法：キネマ旬報社ＨＰの申込ページ（http://www.kinejun.com/events/index.html）よりお申込ください。パソコン環境の無い方は、お電話にてお申し込みいただくか、氏名（ふりがな）・年齢・職業・住所・電話番号・申込人数をご記入の上、下記宛に郵送かFAXにてお申込ください。折り返し、ご入金手続きをご案内いたします。

主催・問合せ：株式会社キネマ旬報社　事業部（月〜金10:00〜18:00）
〒106-0045　東京都港区麻布十番1丁目2-3プラスアストル4F
TEL／03-3589-8326　FAX／03-3589-8301　http://www.kinejun.com　seminor@kinejun.com

WAR CLASSICS

戦争クラシック・コレクション32

往年の傑作・名作戦争映画を一挙ラインナップ！ 32作品入り豪華BOX

MXBQ-28259 ★特製BOX収納

【収録作品】全32タイトル（37ディスク）

❶英空軍のアメリカ人（'41）
監督:ヘンリー・キング　出演:タイロン・パワー
❷トリポリ魂 —海兵隊よ永遠なれ—（'42）
監督:ブルース・ハンバーストン　出演:ジョン・ペイン
❸ガダルカナル・ダイアリー（'43）
監督:リイス・セイラー　出演:プレストン・フォスター
❹ミッドウェイ囮作戦（'44）
監督:ヘンリー・ハサウェイ　出演:ドン・アメチー
❺鮮血の情報（'47）
監督:ヘンリー・ハサウェイ　出演:ジェイムズ・ギャグニー
❻頭上の敵機（'49）
監督:ヘンリー・キング　出演:グレゴリー・ペック
❼地獄の戦場（'51）
監督:ルイス・マイルストン　出演:リチャード・ウィドマーク
❽砂漠の鬼将軍（'51）
監督:ヘンリー・ハサウェイ　出演:ジェームス・メイスン
❾砂漠の鼠（'53）
監督:ロバート・ワイズ　出演:リチャード・バートン
❿ならず者部隊（'56）
監督:リチャード・フライシャー　出演:ロバート・ワグナー
⓫あの日あのとき（'56）
監督:ヘンリー・コスター　出演:ダナ・ウィンター
⓬白い砂（'57）
監督:ジョン・ヒューストン　出演:ロバート・ミッチャム
⓭眼下の敵（'57）
監督・製作:ディック・ポウエル　出演:ロバート・ミッチャム
⓮若き獅子たち（'58）
監督:エドワード・ドミトリク　出演:マーロン・ブランド
⓯ビスマルク号を撃沈せよ！（'60）
監督:ルイス・ギルバート　出演:ケネス・モア
⓰脱走特急（'65）
監督:アーク・ロブソン　出演:フランク・シナトラ
⓱ブルー・マックス（'66）
監督:ジョン・ギラーミン　出演:ジョージ・ペパード
⓲砲艦サンパブロ（'66）
監督・製作:ロバート・ワイズ　出演:スティーブ・マックィーン
⓳パットン大戦車軍団 特別編（'69）2枚組
監督:フランクリン・J・シャフナー　出演:ジョージ・C・スコット
⓴深く静かに潜航せよ（'58）
監督:ロバート・ワイズ　出演:クラーク・ゲーブル
㉑633爆撃隊（'63）
監督:ウォルター・E・グローマン　出演:クリフ・ロバートソン
㉒大列車作戦（'64）
監督:ジョン・フランケンハイマー　出演:バート・ランカスター
㉓巨大なる戦場（'66）
監督・製作・脚本:メルヴィル・シェイヴルソン　出演:カーク・ダグラス
㉔遥かなる戦場（'68）
監督:トニー・リチャードソン　出演:トレバー・ハワード
㉕空軍大戦略 アルティメット・エディション（'69）2枚組
監督:ガイ・ハミルトン　出演:サー・ローレンス・オリヴィエ
㉖レマゲン鉄橋（'69）
監督:ジョン・ギラーミン　出演:ジョージ・シーガル
㉗マッケンジー脱出作戦（'70）
監督:ラモント・ジョンソン　出演:ブライアン・キース
㉘戦争の犬たち（'81）
監督:ジョン・アーヴィン　出演:クリストファー・ウォーケン
㉙遠すぎた橋 特別編（'77）2枚組
監督:リチャード・アッテンボロー　出演:ロバート・レッドフォード
㉚史上最大の作戦 アルティメット・エディション（'62）2枚組
監督:ケン・アナキン/アンドリュー・マートン/ベルンハルト・ビッキー　出演:ジョン・ウェイン
㉛トラトラトラ！
監督:リチャード・フライシャー/舛田利雄/深作欣二　出演:マーチン・バルサム
㉜大脱走 製作40周年記念 特別編（'63）2枚組
監督・製作:ジョン・スタージェス　出演:スティーブ・マックィーン

8.6 ON SALE（予定）

初回生産限定　全32タイトル収録
¥98,000（税込¥102,900）

単品同時発売（予定）

戦争クラシック・シリーズ — 全29タイトル —
各¥3,980（税込¥4,179）

※商品写真は見本ですので実際とは異なる場合がございます。※記載されている商品規格（音声・仕様等）、特典及び発売日は変更になる場合がございます。 http://www.foxjapan.com

発売元・販売元:20世紀 フォックス ホーム エンターテイメント ジャパン株式会社

DVD VIDEO

「戦争クラシック・コレクション32」のご注文は…　送料無料！新星堂の通信販売をご利用ください

通信販売にてお求めの方は

・表示価格は税込み価格となっております。

1.お電話でのお申し込み

0120-16-1614

■上記フリーダイヤルへお電話ください。
（営業時間:9:30〜18:30 土・日・祝日はお休み）

2.FAXでのお申し込み

FAX番号 **03-3393-5128** 24時間受付

1 ご注文の商品名、数量を記入の上
2 郵便番号・住所・電話番号・お名前
3 ご希望のお支払い方法（代金引換／クレジットカード※／分割払い）
※クレジットカードご利用の方は、カード会社名/番号/有効期限/一括/リボ払いをご記入ください　※18歳未満の方は保護者のご署名が必要です。
・お客様がFAX送信後、弊社で受信した内容を確認致します。
その後、確認事項がない限り、ご連絡はいたしません。予めご了承ください。

3 インターネットからのお申し込み

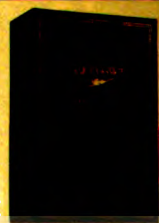
URL:http://www.shinseido.co.jp/eiga/war/

■お支払い方法
1.クレジットカード（一括/リボ払い）
JCB,VISA,UC,MASTER,NICOS,UFJ,DINERS,SAISON,AMEX,DC
2.代金引換（商品お届け時に一括払い）→別途手数料¥300が必要です。
※大島、八丈島を除く伊豆七島及び小笠原諸島の地域については
クレジットカードのみとさせていただきます。
3.分割払い:お支払い回数6回（手数料4%）／10回（6%）／12回（7%）
※詳細はお尋ねください。

■配送について
7月29日（木）までにご注文受付したものは、発売日の**8月6日**にお届け致します。それ以降の受付分に関しましては、お申込受け付けから1週間〜10日ほどでお届けとなります。

■その他
●送料は掲載商品に限り弊社負担とさせて頂きます。
●不良交換・キャンセルについて
万が一不良品がございましたら下記のお問合せ先までご連絡ください。
早急に良品と交換させていただきます
●その他の理由によるキャンセル、返品受付は致しかねますので
予めご了承ください。

■広告有効期限2004年10月末日まで

新星堂

10% OFF

戦争クラシックコレクション32
新星堂スペシャル・プライス
¥92,610（税込）

◆ご注文以外のお問合せ
〒167-6501 東京都杉並区上荻1-23-17
株式会社 新星堂 通販係
TEL:03-3393-8984（土、日、祝祭日を除く9:30〜16:30）
◆新星堂ショッピングサイト
http://www.shinseido.co.jp/

実写版完全映画化!

世界の危機と戦う
伝説の〈国際救助隊〉が
今、出動する!!

85 キネマ旬報創刊85周年

表紙で振り返る『キネマ旬報』の歴史

『キネマ旬報』が創刊されたのは1919年(大正8年)7月11日。以来、戦争による休刊などの中断がありながら、おかげさまで今年で85年をむかえることができました。

そこで本誌を彩った代表的な表紙をとりあげて85年にわたる『キネマ旬報』の歩みを振り返ってみたいと思います。

解説=小藤田千栄子

No.492
表紙：ジャネット・マクドナルド

No.128
表紙：ルス・ローランド

No.723
表紙：桑野通子

No.163
表紙：メアリー・フィンビン

No.725
終刊特別号　この号をもって廃刊、映画雑誌新体制へ参加

No.341
10周年記念号
表紙：ナンシー・カロール

1919年7月11日創刊号
毎月3回発行。アートペーパー2枚折の4頁で定価5銭

創刊・1919年～1940年
(大正8年～昭和15年)

アカデミー賞に先立つこと8年。1919年の7月11日に『キネマ旬報』は創刊された。

今年で85周年。宝塚歌劇が今年90周年だから、レビューのスタートより5年ほど後だが、日本では最も歴史のある映画雑誌である。

『キネマ旬報』が創刊された年、映画界の大きな話題は、D・W・グリフィス監督の「イントレランス」の公開(帝劇)だった。

日本映画では帰山教正監督の「生の輝き」(18)、アメリカ映画ではチャップリンの「担へ銃」(18)や「犬の生活」(18)などが公開されている。

当時のキネマ旬報を見ると、まず広告が面白い。

男優には「氏」が付き、女優には「嬢」という字が付いている。チャールズ・チャップリン氏、メアリー・ピックフォード嬢など。これは敬称ではなく、名前だけでは男優なのか女優なのか分からないからだと聞いたことがある。そういう時代だった。

キネマ旬報増刊 No.54
『ヨーロッパ映画大鑑』
表紙：ミシェル・モルガン

復刊特別号戦後 No.1
表紙：ラナ・ターナー

再建１号
表紙：ディアナ・ダービン
1946年に『映画旬報』の廃刊により再建１号創刊

キネマ旬報増刊 No.61
『テレビ大観』
表紙：ローズマリー・クルーニー

1951年８月下旬号 No.21
表紙：ヴィヴィアン・リー

再建16号
表紙：イングリッド・バーグマン

1953年７月上旬号 No.67
表紙：マリリン・モンロー

キネマ旬報増刊 No.48
『名作シナリオ選集』

再建79号
表紙：モーリン・オハラ
通巻815号にて出版不況にともない休刊

キネマ旬報増刊 No.81
『フランス映画大鑑』
表紙：ダニイ・ロビン

1940年代～50年代（昭和16年～34年）

戦中戦後のこの時代は、まず映画雑誌の統合からスタートした(『キネマ旬報』『新映画』『映画技術』が統合され『映画旬報』として通巻1000号まで出版)。内務省が、劇映画の製作本数その他にクチを出すようになり、国威発揚映画も登場した。だがこの時代、のちの巨匠、黒澤明、木下惠介などの登場も記憶しておきたい。英米の敵国映画は輸入禁止になり、映画の世界もまた暗い時代だった。

そして戦後。一気に映画時代の到来である。どっと入ってきたアメリカ映画は、人生の素晴らしさを語り、フランス映画は、ちょっとオシャレに人生の奥深さを教えてくれた。そして日本映画は、民主主義を語ることに始まって、G.H.Qによって封印されていた時代劇が復活したのも、この時代だった。

当時、映画雑誌の表紙は、〈欧米の美女が微笑む〉――これが定番だった。キネマ旬報には、ときに日本の美女も登場したが、数は少ない。

キネマ旬報増刊 No.200
「名作シナリオ集」
表紙：久我美子

キネマ旬報増刊 No.151
「世界映画監督大鑑」

キネマ旬報増刊 No.91
「イギリス映画大鑑」
表紙：クレア・ブルーム

1958年5月上旬号 No.203
表紙：ジョアン・ウッドワード

1957年1月上旬号 No.165
表紙：オードリー・ヘップバーン

1954年9月下旬号 No.100
表紙：岸惠子
復刊100号記念特集

1958年7月上旬号 No.208
表紙：ミリイ・パーキンス
創刊40年記念号

キネマ旬報増刊 No.183
「アメリカ映画大鑑」

1955年4月上旬号 No.115
表紙：エリザベス・テイラー

1959年6月上旬号 No.234
表紙：ドリス・デイ

1957年9月上旬号 No.185
表紙：デブラ・パジェット
通巻1000号記念特集

1956年5月下旬号 No.146
表紙：グレース・ケリー

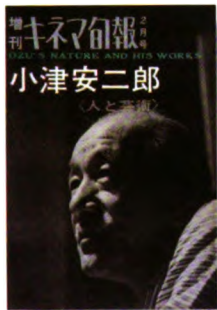
キネマ旬報増刊 No.338
『黒沢明・その作品と顔』

キネマ旬報増刊 No.300
「シナリオ名作読本」

1960年11月上旬号 No.270
表紙：ナタリー・ウッド

1963年12月合併号 No.354
表紙：ティッピ・ヘドレン

1961年12月下旬号 No.301
表紙：リタ・モレノ

キネマ旬報増刊 No.273
『日本映画監督特集』

キネマ旬報増刊 No.358
『小津安二郎・人と芸術』

1963年2月上旬号 No.332
表紙：オードリー・ヘップバーン
62年度ベスト・テン決算号

キネマ旬報増刊 No.288
『西部劇特集』

キネマ旬報増刊 No.363
『シナリオ3人集』
表紙：橋本忍、水木洋子、新藤兼人

1960年代（昭和35年〜44年）

60年代の前半は、フランスのヌーヴェル・ヴァーグ、イギリスのフリー・シネマ、そしてポーランド派の登場であり、新しい映画ファンを獲得した時代でもあったのだが、これが表紙に反映されることは、ほとんどなかった。

戦後復刊してから男優がキネマ旬報の表紙に登場したのは、「ブリット」のスティーヴ・マックィーンが最初である。他の映画雑誌を含めても、男優の登場は初めてだったはずである。この号は、たいそうな評判であった。そしてアメリカン・ニュー・シネマの時代になると、さらに表紙は自由になる。

この時代のキネマ旬報で注目したいのは、監督特集やテーマ別の特集、シナリオ集などの増刊が人気を集めたことである。黒澤明、小津安二郎、そして西部劇、ミュージカル、ＳＦ映画などの増刊号は、のちに古書店で高値をつけることでも知られていた。

キネマ旬報増刊 No.476
「ミュージカル・スター」

1967年2月上旬号 No.408
表紙：ウーラ・ヤコブソン
65年度ベスト・テン決算号

1964年9月上旬号 No.373
表紙：スー・リオン

1969年1月上旬号 No.487
表紙：スティーヴ・マックィーン

キネマ旬報増刊 No.445
『残酷シナリオ集』

キネマ旬報増刊 No.376
『新作洋画への招待』

1969年7月下旬号 No.500
表紙：ジャニス・ルール

1968年7月上旬号 No.471
表紙：オードリー・ヘップバーン
創刊50年記念号

1965年2月上旬号 No.384
表紙：サンドラ・ディー

キネマ旬報増刊 No.510
「世界ＳＦ映画大鑑」

キネマ旬報増刊 No.472
「サイケの世界」

1965年10月上旬号 No.400
表紙：ソフィア・ローレン
復刊400号記念特集

1975年９月下旬号 No.666
表紙：「愛の嵐」

1973年９月上旬号 No.612
表紙：「チャップリンの独裁者」
（イラストレーション・和田誠）

1970年９月下旬号 No.532
表紙：黒澤明

1975年10月上旬号 No.667
表紙：「ＪＡＷＳ　ジョーズ」

1974年８月上旬号 No.637
表紙：「ノストラダムスの大予言」

1972年11月上旬号 No.590
表紙：「フリッツ・ザ・キャット」

1976年２月下旬号 No.677
表紙：「ラッキー・レディ」
75年度ベスト・テン決算号

1975年５月下旬号 No.657
表紙：「タワーリング・インフェルノ」
（イラストレーション・和田誠）

1973年３月上旬号 No.600
表紙：「ポセイドン・アドベンチャー」

1976年11月下旬号 No.695
表紙：「キングコング」

1970年代 （昭和45年～54年）

映画の一場面が、ごく当たり前のこととして、キネマ旬報の表紙を飾るようになったのは、1970年代からである。巻頭特集の作品が、表紙にも登場したわけだが、これは他の映画雑誌にも大いに影響を与えたようだ。

和田誠さんのイラスト（1973年９月上旬号の「チャップリンの独裁者」など）、通常号に黒澤明監督の登場、外国製のイラストなど、表紙は、ますますヴァラエティに富んでいく。

ここに掲載されているのは、ほんの一部だが、それでも映画史の大まかな流れを掴むことが出来る。

70年代は、ブルース・リーの時代であり、「スター・ウォーズ」や「スーパーマン」のＳＦ映画、そして「サタデー・ナイト・フィーバー」が人気を集めた時代であることが分かる。

ベスト・テン号に主演男優賞と主演女優賞の２人（水谷豊、原田美枝子）が登場するようになったのは1976年度から。以後、定番となった。

1978年 8 月上旬号 No.740
表紙：「さらば宇宙戦艦ヤマト」

1978年 1 月下旬号 No.726
表紙：「スター・ウォーズ」

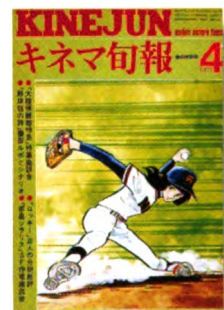
1977年 1 月下旬号 No.700
表紙：「シンデレラ」

1979年 7 月上旬号 No.764
表紙：「スーパーマン」

1978年 3 月上旬号 No.729
表紙：「未知との遭遇」

1977年 2 月下旬号 No.702
表紙：水谷豊、原田美枝子
76年度ベスト・テン決算号

1979年 9 月上旬号 No.768
表紙：「未来少年コナン」

1978年 4 月上旬号 No.731
表紙：「死亡遊戯」

1977年 4 月上旬号 No.705
表紙：「野球狂の詩」

1979年11月下旬号 No.774
創刊60周年記念号

1978年 6 月上旬号 No.736
表紙：「サタデー・ナイト・フィーバー」

1977年 8 月上旬号 No.714
表紙：山口百恵

1982年８月下旬号 No.842
表紙：「Ｅ.Ｔ.」

1981年11月下旬号 No.824
表紙：「レイダース　失われた〈聖櫃〉」

1980年１月下旬号 No.778
表紙：「地獄の黙示録」（フランシス・フォード・コッポラ監督）

1982年10月上旬号 No.845
にっかつ創立70周年記念号

1981年12月下旬号 No.826
表紙：「セーラー服と機関銃」

1980年12月下旬号 No.800
戦後復刊800号記念特集

1982年12月下旬号 No.850
表紙：「ウィーン物語　ジェミニ・ＹとＳ」

1982年４月上旬号 No.833
表紙：「刑事物語」

1981年５月上旬号 No.810
表紙：「エレファント・マン」

1983年１月上旬号 No.851
東宝創立50周年記念号

1980年代（昭和55年～平成１年）

鈴木清順監督「ツィゴイネルワイゼン」、黒澤明監督「影武者」にはじまった1980年代である。

70年代から話題を集めていた角川映画は、さらに話題を集めた。また巨匠たちと並んで新人監督が多く登場したのもまた80年代である。相米慎二監督「翔んだカップル」、伊丹十三監督「お葬式」、和田誠監督「麻雀放浪記」など。そして89年になると北野武監督「その男､凶暴につき」が登場する。

外国映画では､「クレイマー、クレイマー」「地獄の黙示録」にはじまった時代である。そして「Ｅ.Ｔ.」の時代でもあった。

アニメでは「風の谷のナウシカ」にはじまる宮崎駿作品のスタートであり、ミニ・シアターが定着した時代でもあった。

そして日本のソニーが、コロムビア映画を買収。時代の大きなうねりが、映画の世界にも押しよせてきた。

1988年 8 月上旬号 No.990
表紙：「グレート・ブルー」

1986年 6 月下旬号 No.938
表紙：「子猫物語」

1983年 4 月上旬号 No.857
表紙：「スター・ウォーズ　ジェダイの復讐」

1988年11月上旬号 No.996
表紙：「快盗ルビイ」

1986年 8 月上旬号 No.941
表紙：「天空の城ラピュタ」

1983年 8 月上旬号 No.866
表紙：「南極物語」

1989年 1 月上旬号 No.1000
戦後復刊1000号記念特集

1986年 8 月下旬号 No.942
松竹創立90周年記念号

1985年 1 月上旬号 No.901
戦後復刊900号記念特集

1989年 2 月上旬号 No.1002
表紙：「ダイ・ハード」

1987年 9 月上旬号 No.967
表紙：追悼・石原裕次郎

1985年11月上旬号 No.922
表紙：「バック・トゥ・ザ・フューチャー」

1998年10月下旬号 No.1268
表紙：追悼・黒澤明

1997年３月下旬号 No.1218
表紙：「新世紀エヴァンゲリオン劇場版　シト新生」

1990年10月上旬号 No.1043
表紙：「ゴースト・ニューヨークの幻」

1998年11月上旬号 No.1269
表紙：「踊る大捜査線 THE MOVIE」

1997年12月上旬号 No.1241
表紙：「タイタニック」

1994年11月上旬号 No.1146
表紙：「スピード」

1999年１月下旬号 No.1275
表紙：追悼・淀川長治

1998年１月下旬号 No.1245
表紙：「HANA-BI」

1996年９月下旬号 No.1201
表紙：追悼・渥美清

1999年10月上旬号 No.1293
創刊80周年記念号

1990年代（平成２年～平成11年）

89年のベルリンの壁崩壊にはじまり、90年代に入ると、なんとソ連邦の崩壊。20世紀は、こういう時代になってきたのである。

そして映画の世界は、デジタルの時代に入った。その象徴的な作品は「タイタニック」。作品そのものも面白かったけれど、興行的にも大成功で、ビデオやＤＶＤ販売も大きな数字を出した。

家庭用ビデオの普及は80年代から始まってはいたのだが、90年代になると、ごく普通の機器となり、やがてこれはＤＶＤに代わっていく。

キネマ旬報の表紙が「追悼特集」をうたっているのが黒澤明、木下惠介、笠智衆、三船敏郎、渥美清、淀川長治の各氏。20世紀の映画の、まさに象徴的な存在で、この方たちの作品から、あるいはお書きになったものから、私たちは、どんなにたくさんのことを学んだことだろう。

そして時代は、新しい世紀に入っていく。

2003年2月下旬号 No.1374
表紙：真田広之、宮沢りえ
2002年度ベスト・テン決算号

2001年12月上旬号 No.1345
表紙：東映50周年と「千年の恋 ひかる源氏物語」

2000年11月下旬号 No.1319
20世紀の映画監督外国篇特集

2003年6月上旬号 No.1382
表紙：「ブラザーフッド」

2002年3月下旬号 No.1352
表紙：「ロード・オブ・ザ・リング」

2000年12月下旬号 No.1322
表紙：「バトル・ロワイアル」

2003年12月上旬号 No.1394
表紙：「木更津キャッツアイ 日本シリーズ」

2002年6月下旬号 No.1358
表紙：「模倣犯」

2001年9月上旬号 No.1339
表紙：「ウォーターボーイズ」

2004年1月下旬号 No.1397
表紙：ペ・ヨンジュン

2000年～ (平成12年～)

ミレニアムから新しい世紀を迎え、なんと21世紀は9月11日に起きた同時多発テロからはじまった。湾岸戦争のときに実感した映像の時代を、さらなるショックと共に実感させたのが〈9・11〉であった。

その多方面からの影響を、映画の世界で表現したのは、まずはイラン、アフガニスタンなどの作品であり、これからも多くの作品が登場することと思う。

そして、それらの映画を見ることで私たちは、より深く世界を知ることになるだろう。

ここ数年の注目は、なんといっても韓国映画。〈韓流〉と言うそうだが、テレビドラマをも含めて、その巧みな展開に感心すること多し、である。

これからどんなふうになっていくのか。そして日本映画は、どんなふうになっていくのか。5年後の『キネマ旬報』創刊90周年が楽しみになってきた。

ウェルズ、ヘルツォーク、ギリアム

和田誠

「敬意を表したい映画人を表紙に描け」という編集部からの出題だが、これがむずかしい。「映画人」は監督に限らず、脚本、撮影、美術、音楽、プロデュースなど広いジャンルにわたるし、それが古今東西となると浮かんでくる名前は数十人になる。キリがないから外国の監督に絞っても、ぼくの場合咄嗟に挙げるのはワイルダーとヒッチコックになるけれど、さらにフォードもいればワイラーもいる。ヒューストンもジンネマンも好きだ。クレールもデュヴィヴィエもルノワールもカルネも無視できない。ラングはどうする、デ・シーカは、フェリーニは、リーンは、パウエル＝プレスバーガーは……それに若手だってたくさんいる。さあ困った。

とりあえず挙げたのは映画ファンであるぼくの好む作品を作る人たちだ。頭を切りかえてみる。ぼくは（時々だけど）映画監督でもある。その視点で考えると、少々違った人たちが浮かんでくる。真似することができない人たちだ。作品の質を言うなら誰の真似もできないのだが、影響くらいは受ける。ここで言いたいのは製作に関わる基本的態度のことである。

ウェルズ、ヘルツォーク、ギリアム。作風は異なるが、彼らは商業的見返りを度外視してスケールのでっかいことを考え、それに向かって邁進する。現場の過酷な条件と闘い、個性的な役者と闘い、プロデューサーと闘う。製作に長い年月をかけ、しかも未完のこともある。真似できない、と言うより、ぼくなら避けて通る茨の道をわざわざ選んでいるのだ。敬意を払わずにはいられない。

とりあえずこの三人。その線上にはキューブリック、ポランスキーもいる。古くはストロハイムがそうだった。

キネマ旬報 2004年 8月上旬特別号 No.1410

●表紙イラストレーション＝和田誠　●ピンナップ＝豊川悦司（撮影＝前田昭二）

『キネマ旬報』創刊85周年記念特集

85th

ANNIVERSARY
KINEMA JUNPO
1919-2004

2004

前編 リスペクト

今年、7月11日をもって、『キネマ旬報』は創刊85周年を迎えました。
長きにわたり、小誌をささえてくださった
読者の皆さま、執筆者の皆さま、そして映画人の皆さまへの感謝とともに、
8月上旬号、8月下旬号、2号にわたって記念特集を行います。
今号のテーマは《リスペクト》。
映画人の、評論家の、そして読者の皆さまのこれまでの功績を顕彰していくことで、
逆にこれからの日本映画界の在り方を考えていきたいと思います。
また次号、後編では、まず《時代劇》《ラブストーリー》《アニメーション》の3つの、
《ジャンル別オールタイム　ベスト・テン》を行います。ご期待ください。

グラビア：表紙で振り返る『キネマ旬報』の歴史

リスペクト――映画人から映画人へ
62名の映画人によるリスペクト・アンケート／インタビュー　山田洋次、中井貴一

『映画と評論』対談：双葉十三郎×川本三郎

読者寄稿：私とキネマ旬報

特集：キネマ旬報読者賞
和田誠、三谷幸喜、手塚治虫&田山力哉（原田雅昭）、尾形敏朗、秋本鉄次、内海陽子、野村正昭、藤田真男

1919

85
キネマ旬報創刊85周年

リスペクト
映画人から映画人へ――

2号にわたるキネマ旬報創刊85周年の記念特集。前編は、来年誕生110年となる映画を、〈リスペクト〉という視点で捉えた〈映画人から映画人へ――リスペクト〉から始めようと思います。

日本人は正面切って誰かを称えるのが苦手です。でも、未来のために、その110歳にならんとする成熟した文化である映画を検証するためには、まずこれまでの功績を認め、素晴らしいものは素晴らしいと互いに称え、すべてを受け止めなければ始まらないのではないかと思います。先人の功績を称え、それを記録することで、これから先の日本映画を確固たるものにする。85周年の記念としてまずこれをやりたいと思いました。それは、映画史的にも、また映画人を目指そうとする後進のためにも、意義があるのではないかと思っています。

この企画、ニューヨークのアクターズスタジオが主催するインタビュー番組や、AFI（アメリカン・フィルム・インスティテュート。1967年設立のハリウッドに直結した映画人養成学校。映画フィルムの修復作業や映画賞の運営も行っている）のよいものを率直に称える姿勢に学んだものです。本特集も内容こそ異なりますが、意図することは同じ。さらに深く理解していただくために、監督代表として山田洋次監督、俳優代表として中井貴一さんのお二人にお話をうかがいました。

誌面の都合上、本特集にご参加いただいたのは、監督、俳優という、ふたつのジャンルに属する映画の作り手の方々で、しかもそのごく一部の方と、少々バランスを欠いた形であることは認識しております。しかしこの企画はこれで完結させるものではありません。今後も、様々な形で監督、俳優に限らず、多くの映画人のお仕事を顕彰していけたらと思っております。

85周年以降も、「キネマ旬報」は、映画という文化の、素晴らしい過去と未来を伝えていきたいと思っております。

●参加していただいた皆さま（五十音順、敬称略）
朝原雄三・伊佐山ひろ子・市川崑・犬童一心・今村昌平・岩井俊二・柄本佑・遠藤憲一・大杉漣・大林宣彦・緒形拳・荻上直子・奥田瑛二・小沢昭一・恩地日出夫・香川京子・香川照之・風間志織・梶田征則・片岡礼子・河瀬直美・北大路欣也・北村有起哉・熊井啓・黒木和雄・小泉堯史・小林桂樹・斎藤耕一・新藤兼人・鈴木杏・鈴木一真・唯野未歩子・タナダユキ・塚本耕司・土本典昭・寺島しのぶ・遠野凪子・永島敏行・中井貴一・永瀬正敏・仲代達矢・西田尚美・野波麻帆・羽仁進・原一男・原田眞人・原田芳雄・東陽一・平山秀幸・富司純子・降旗康男・細谷佳史・前田哲・舛田利雄・光石研・村本天志・望月六郎・本木克英・森田芳光・山崎努・山田洋次・山本富士子

監督 to 監督

朝原雄三から 山田洋次さんへ

山田さんとはしばしば意見が合わない。

それは山田さんが正論の人であり、こちらにはヨコシマな気持ちがあるからだとよくわかっている。正論がつねに通るとは限らない現実、とくに映画製作の現場で頑張る山田さん。巨匠、名匠などでなくとも、たとえば助監督の一先輩であったとしても、きっと尊敬していただろうと思います。

監督最新作「釣りバカ日誌15」8月21日公開

『四騎の会』左から木下惠介、黒澤明、市川崑、小林正樹

監督to監督

市川崑から クロさんへ

黒澤さんと書かないで、クロさんと書く。クロさんは僕のことをいつもコンチゃんと呼んでいたし、僕もいつもクロさんと呼んでいたからだ。

僕が撮影所のセットで仕事をしている時、クロさんが不意に入って来ることがあった。「どうだい、やってるかい」「うん、やってるがな」「そうか」暫くそんな会話をして、親しみのある笑顔を残して出て行く。これは監督をやっている者しかわからないかもしれないが、なかなか他の監督のセットに用もないのに行けるものじゃない。クロさんのさりげないセット訪問に、僕は温かい人間味をひしひしと感じた。

黒澤明――やはり僕にとっては端倪すべからざる偉大な人間映画監督である。

俳優to撮影監督

伊佐山ひろ子から 姫田真佐久さんへ

姫田さんとはじめてお会いしたのは、デビュー作「白い指の戯れ」(72)。やさしいおじさんって感じで、ニコニコ笑いながら私のことをながめていた。カメラマンっていったらするどい眼でと思っていたのに意外だった。そして亡くなるまで、笑っている姫田さんの眼しか見たことがない。

身体が自由にならなくなってからも、車椅子でカメラをかつぎ、細い道にもドカドカ入って撮影して、「これだったらヤクザもいちゃもんつけにくいだろ！」なんておっしゃっていたらしい……。

ただただフツーに何も特別なことをする様子もなく、あたりまえに仕事を楽しんでいた。それが姫田さんのダイナミックさ、というか。

監督to監督

犬童一心から 市川準さんへ

ある日、突然電話がかかってきた。市川準監督からだった。僕は「二人が喋ってる。」(97)という映画を完成させていたが、東京での公開が決まらずにいた。

市川監督は共通の仕事仲間を通じて「二人が喋ってる。」のビデオを既に観ていた。用件は二つ。ひとつは「いつか、大阪を舞台にした映画を撮りたい。一緒にシナリオを書いて欲しい」もう一つは「あなたの新作は、本当に素晴らしいと思う。何か公開に向けて協力できることがあれば言って欲しい」。嬉しかった。僕は最初の観客を見つけたのだ。市川監督は常に若い才能を自分の作品に勇気を持って起用する。俳優も脚本家も。そして、それは人づてではない。

自分の目で確認し探し続けているのだ。その努力と勇気と自信は見習うべきものと思う。市川準の作品に常に感じる新鮮な空気はそんなところから生まれている。そしてそれは、市川監督自身が経験した不遇な時代から生まれてくる優しさだと思う。それから一年後、僕は「大阪物語」(99)書くことになる。

監督 to 監督

今村昌平から 小津安二郎さんへ

松竹に入ってすぐ小津組について、「麦秋」(51)「お茶漬の味」(52)「東京物語」(53)と何本か助手も務めている。しかし正直に言えば、小津さんの映画はあまり好きではない。

ある時期から小津さんの演出に疑問を持ち、影響を受けまいと心に決め、小津さんとは全く違う映画を作ってきた。にもかかわらず、振り返れば小津さんから多くを学んだと思う。それは、監督としての姿勢といったようなことだ。

松竹から日活へ移籍する時、小津さんに「日活から誘われているのだが」という相談をしたことがあった。その時小津さんは「行け行け」と言った。そのそっけない言い方に、むしろ力を認めてもらったのだと思った。

移籍後、監督した作品を小津さんが観たかどうか。おそらくは観たであろうが、たまに歯科ですれ違ってもそんな話にはならなかった。今でもちょっと聞いてみたいと思う。

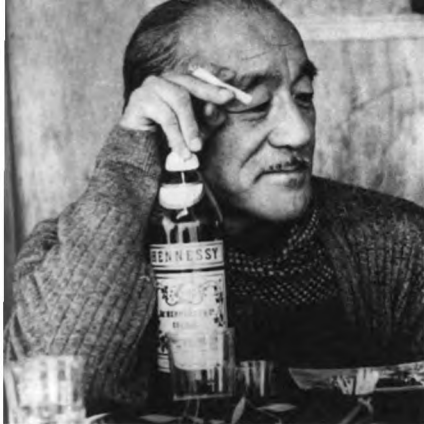
監督 to 監督

岩井俊二から 市川崑さんへ

職業として考えると、映画監督という職業に幻想は抱きにくい。現場でやることにそれほどの差があるわけではないし。オーラに包まれながら仕事してるわけでもないし。映画監督にとってみれば結局「完成品」がすべてだ。しかし完成品のよしあしでこの設問に答えてしまうと、それは一介の映画ファンのコメントになってしまう。まあ、あえて深く考えずに答えるならば、自分の場合、最も尊敬する、といえば、市川崑監督である。

「犬神家の一族」を観たのは中学二年だった。その瞬間が自分の中の「映画元年」になった。最初がこの映画だったのはあまりにもラッキーだった。単に完成度の高い映画を最初に観たとしても、単に全然わからないまま終わったかも知れない。この映画はいろんな情緒や風情やムードを持っていた。その正体や意味は今でもよくわからないところがあるが、当時はもっと全然わからなかった。ただ、その得体の知れない感覚に圧倒された。以後この映画が自分にとっての最初の教本になった。

数年前、市川崑監督御本人とお会いする機会を得た。太宰治という名前が出ると「ああ、太宰君ね。会ったことあるよ」。この一言に僕なんかはタイムスリップしたような衝撃だったが、思えば市川監督にとっては、それが普通の青春期の思い出だったりするのだ。ところが同業者同士の会話になると、こんなにも歳が離れているのに、「君のは逆光がベースだねぇ」とか、「岩井君、あのドラマのライティング好きだろう。僕も好きなんだよ」なんて光の話に打ち興じたりできる。お互いの言葉が誰よりもよく通じるのが心地よかった。

俳優 to 監督

柄本佑から 池田敏春さんへ

僕は池田監督の「ハサミ男」(04)という作品に出させてもらいました。池田監督は僕のイメージしていた監督そのもので、すごくカッコよかったです。監督はテストの時も本番の時もカメラの下から芝居を覗くようにして見ていました。その時の目がすごく印象的でした。監督の映画に出させてもらってから、池田監督の映画にすごくハマりました。僕は「天使のはらわた 赤い淫画」(81)が一番好きです。ジャングルジムでの真上からのカットがすごくカッコいいのです。池田監督の映画はすごく力強くて大好きです。池田監督は僕がものすごく尊敬している映画人の一人です。

リスペクト——映画人から映画人へ

俳優 to 監督

遠藤憲一から三池崇史さんへ

俳優、竹内力君の結婚パーティの2次会で、三池監督と初めて会った。俺はずっと会いたかった。三池作品に出てみたかった。酔っていた俺は、遅れて現れた三池さんに駆け寄った。「初めまして」と言うつもりが「なんで俺を使わねぇんだよ！」と暴言を吐いてしまった。俺は普段、酔って人に絡むことはしない。酔って女に抱きつくことはあっても、絡んだりはしない。しかし、なぜかこの日は三池さんに絡んだ。いや、本音をぶつけた。こんな乱暴な出会いをきっかけに、三池監督は俺を使い続けてくれた。三池作品の中で俺は、全裸にもされた。片足逆さ吊りにもされた。ゲリラ撮影で電車が近づく中、線路に寝かされもした。そのたびに俺の知らなかった俺の心を解放してくれた気がする。そんな三池監督が、10月のパルコ劇場での舞台（※）を初演出する。俺も出演させてもらう。新しいジャンルで、今度は何が飛び出すのか!? 今から楽しみだ。

（※）「夜叉ケ池」

俳優 to 俳優

大杉漣から笠智衆さんへ

笠さんとの出会いは、小津安二郎さんの映画でした。〈そこにいること、そこに在ること〉を大きく主張することなく出来る俳優だと強く感じました。俳優にとって〈自然な演技〉というものが、どのような道を歩くことによってたどり着くものなのか、ぼくにはわかりません。そう簡単に手に入ってたまるか！ その程度のことはわかります。後年笠さんの著書に触れた時、実は笠さん自身も〈自然な演技〉を手に入れるために演ずることと戦い続けていたんだと知り、それまで以上の親しみと勇気と敬意を持ったことを忘れることが出来ません。

映画作家 to 監督

大林宣彦から木下恵介さんへ

「ますます　たかくなる／ますます　うすくなる　にんじょう／ますます　むずかしくなる　えいが／さて　なんとしよう」。小津から学ぶべきことは、「世間」なるものに向う「眼力」と「自持」の有りよう。しかしぼくらは、まずその「作風」に眼が眩む。「世界のクロサワ」が認知された同時期、一方で「ただ感傷的なだけ」と切り捨てられた木下は、日本人自身の「外国コムプレックス」によって急速に無視されていく。おまけに「国民的映画」としての大ヒットが一部に「知的反感」を買い、「誤解」の根を深めた。

木下の本質は「古典を畏れ」「新しきを拓き」、「開かれた観察眼」と「激しい自己批評精神」、それに「上質の遊び心」と「類稀れな業」とで以って「日本の叙事的映画」を創造。「チャーミングな常識人」であり「もてなす人」であり、創作の「孤独」を知る。「日本のキノシタ」の「復権」が、明日の「日本映画」を切り拓くヒントになると思う。

監督最新作「理由」今秋公開

俳優 to 監督
緒形拳から池端俊策さんへ

今村昌平監督の「楢山節考」(83)は、地上に生きるものすべてに、同じようにフォーカスを合わせた秀作だ。

蛇係に池端俊策がいた。蛇係としてはドジなヒトだった。

「おがたさん、その内ぼくのホンで一緒にやりましょう」と声をかけられ「かけるの?」と不遜な返答をしてしまった。

よく話したら「楢山」の脚本にも携わっているという。

それから数年もたたない間に、NHKの渋いドラマを何本か、池端さんの脚本で出演した。人間のもつ、かげりのようなものを的確に描き出す傑作だった。

映画の第一回監督の「あつもの」(99)も出た。良い映画だった。二回目も是が非でも出演したいものだ。

この人の描く世界は間違いなく面白い、断言する。

監督 to 監督
荻上直子から阪本順治さんへ 林海象さんへ

私は、子供の頃から映画が好きで近所の映画館に通いつめ、いつの頃からか自分も映画監督になりたいと切望していたんです。というのは大きな嘘で、22歳で映画でも始めてみようかな、と思いつきで映画を始めるまで全く映画を見ていませんでした。だから、映画人に映画の話をされるとついていけません。「尊敬する映画監督は誰?」との質問にもうまく答えられないのです。でも、好きな監督はいます。阪本順治監督。阪本監督の描くダメ人間な男たちが好きです。私もダメ人間だから、ああ、わかるわかる、って思う。一度だけ一緒に飲んだことがあるのですが、手が綺麗なんですよ。私、手フェチなんで。あと、林海象監督。まだアメリカにいた頃に彼の映画のスタッフとして働いたことがあります。日本に帰国して他の作品のスタッフもやってみたけど、海象さんの現場の楽しさに匹敵するものはなかった。スタッフが楽しいと思える現場ってステキですよね。私もそんな現場の雰囲気を作っていきたいです。

俳優 to 俳優
奥田瑛二から三船敏郎さんへ

「映画ベストワンってなんですか?」
「椿三十郎」
「ベストツーはなんですか?」
「七人の侍」
「では、ベストスリーは?」
「用心棒」
「…ベスト…フォー…」
「蜘蛛巣城」
「それって外国映画も含めてですか?」
「そうですけど」
「黒澤ファンってことですか?」
「いえ、三船敏郎です」

1968年? 田舎で観ることのできなかった黒澤作品が一挙に東京、日比谷映画で特集公開された。ポケットのなけなしの金をつかみ毎日通った。胸が躍り、血がのぼり、全身、三船敏郎になっていた。子供の頃、田舎で観ていたチャンバラ映画がぶっ飛んだ。映画の意味、映画って何だ? 安保で揺れる大学とは無縁になった。映画俳優を真剣に目指した。1989年、憧れの三船敏郎と熊井啓監督作品、「本覺坊遺文・千利休」で共演した。

翌年、ヴェネチア映画祭、銀獅子賞、20分間、拍手が鳴り止まなかった。それは、全てといっていいほど三船敏郎さんに対するものだった。いまでも侍、三船の白いタキシードが焼き付いて離れない。

俳優to俳優

小沢昭一から森繁久彌さんへ

名作「夫婦善哉」（55）の演技の新しさに感動して以来、森繁久彌さんのお仕事に尊敬を抱き、お慕い申しあげております。

何といっても、その人生の深さ、そこはかとなく流れる甘い詩情、しかも一貫して失なわない軽ろみ、道化性。超大優であります。

後に、東宝の社長もの映画など、何度もご一緒させて頂きましたが、人間のつかみの的確さ、その表現のこまかさ、そして意外性。ひそかに、お手本とさせて頂きまして、及ばずながら、影響を頂戴していると思います。ありがたいことです。

誰しも「あこがれ像」があると思いますが、私、今も、遠くから、森繁久彌さんを仰いでおります。

監督to監督

恩地日出夫から今村昌平さんへ

今村さんの「赤い殺意」（64）と出会ったのは、70年の大阪万博に出した「太陽の狩人」を準備している時だった。はじめてのドキュメンタリーへの挑戦で混乱していたぼくにとってこの映画は、ひどく強烈な印象を残した。

それから10年、79年に『戦後最大の誘拐・吉展ちゃん事件』にたどりつくまで、フィクションとノンフィクションのはざまで迷いぬいている間「赤い殺意」は、ぼくのガイディング・スターだったと思う。

いや、79年の『吉展ちゃん』以降もずっと、そして現在でもこの問題は、ぼくの永遠のテーマであり、最新作「わらびのこう　蕨野行」（03）も、時代劇でおとぎ話ともとれるストーリィにもかかわらず、昔、日本のどこにでもあった実話のドキュメンタリーだと思って撮った。「赤い殺意」は、古今東西を通じて、ぼくの映画ベストワンなのである。

俳優to俳優

香川京子から原節子さんへ

映画界入りして半年も経っていない一九四九年の秋、写真家の秋山庄太郎さんから「原さんのお宅に一緒に行こう」と誘われて、狛江のご自宅に伺ったのが原さんとの初対面でした。私は、原さんに憧れて映画の道を志し、新東宝のニューフェースに応募したほどですから、感激は大変なものでした。

その四年後、新東宝を離れてフリーになっていた私は、松竹作品の「東京物語」（53）で、原さんの義理の妹の役で共演することができ、ロケ先の尾道の宿で仕事やそれ以外のいろいろなことを聞かせて頂きました。

その後もいくつかの作品で共演の機会に恵まれましたが「美しくて優しい」という印象は、変わりませんでした。

画面では神秘的なものさえ感じられた原さんですが、その素顔を思い浮かべると、私は「大きな業績の秘密は、お人柄の大きさと心の優しさにあったのでは」と思います。

俳優 to 俳優

香川照之から哀川翔さんへ

セリフの中やキャメラの前にあるのではない。俳優の本質は、日常生活のうちに全てが存在する。そこでどう生きるかという一点だけが、実は勝敗を蛇のように左右してくる。俳優という職種をやたら誇大視して特別なものと位置づけるある種の同業者は、日常の私生活をしばしば軽視しているものだ。しかしこれは間違っている。日々の生活を立派に健常に美しくこなしてこそ正しい俳優なのだ。

そういう意味で、「俺は絶対にこういう人にはなれないな」と直感し敬愛する同年代の俳優に、哀川翔がいる。「子供は一人より二人、二人より三人、三人より四人、四人より五人さ」という彼の名言。毎朝四時に起きて、一日に二升の米を食べるその五人の子を完壁に養いながら百の主演作を世に打ち出した哀川が私生活で背負っている重さは、現場でセリフや芝居をチマチマ考える俳優の演技など一吹きの元に吹き飛ばすだろう。シンプルで迷いのない意志は、いつの時代も最高の演技の母体なのである。

監督 to 監督

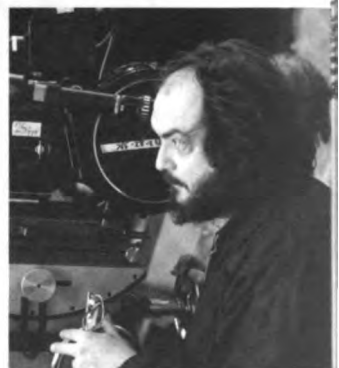
風間志織から鈴木清順さんへ

神出鬼没、奇々怪々、魑魅魍魎、あの、異様な美しさ。根底に、情念の川が、ふかくふかく流れている。たのしいね、人間て。そしてとっても、おそろしいね。

監督 to 監督

梶田征則からスタンリー・キューブリックさんへ

リスペクトとなると、作品の良し悪しだけでなく、その監督の作品に対する姿勢や物創りに関する考え方など内面的な部分も関係してくると思います。ただ私は助監督の経験がなく、残念ながら実際に接して影響を受けた監督というのはおりません。もちろん、一観客として敬愛する監督は何人かおり、その中で、どの作品も全て感嘆させられたのはスタンリー・キューブリック監督ただ一人です。

監督作「ミラーを拭く男」8月21日公開

俳優 to 監督

片岡礼子から橋口亮輔さんへ

この人に出会って私の映画人生が始まった。ほんとにホントに10年という時が経った今も感謝の気持ちでいっぱいである。悩んだ時には励まされ、またある時は叱ってもくれる、なくてはならない存在だった。

映画「ハッシュ！」(01)の撮影中に信じられないような事件というか事故が起きた。普通なら監督の機嫌が悪くなり現場のムードもむ〜んと暗雲がたちこめるような出来事である。しかし橋口監督は「映画の神様

監督 to 監督
河瀬直美からビクトル・エリセさんへ

初めて彼の作品を観たのは10代の終り。学校の授業でのことだ。「ミツバチのささやき」(72)と題されたそれは、主人公アナのスクリーンをも飛び越えてくるかのような、まっすぐなまなざしを介して、私に深い深い人の心の奥底にある大切なものの存在を教えてくれた。それは、人間ひとりひとりの中に確かに存在しているものではあるけれど、表現の世界において形にすることは難しく、あいまいなものとして抜けおちる場合が多い。彼は、むしろ、そのあいまいなものを形にしようとしているようだ。彼の約十年に一度の割合で発表される作品は、それだけの時間をかけるに値する内容を盛り込んでいる。それは、この時代にだけ受け入れられるようなものではなく、この先の未来や、もちろん過去にまでもさかのぼって、人々の共感を得ることのできる作品であり、その作品と共に、私は彼の在り方を尊敬する。

俳優 to 撮影監督
北大路欣也から岡崎宏三さんへ

はじめて岡崎宏三さんにお逢いしたのが、私が23歳の時、映画「千曲川絶唱」(67)のロケ現場でした。スタッフの先頭にたって、てきぱきと指示をし、ワンカット、ワンカット物凄い緊張の中で、精力的にカメラを回し続ける岡崎さんの姿に圧倒されました。私にとって映画の醍醐味を教えていただいた、まさに尊敬する偉大な映画人です。今でこそ、特殊撮影機械が発達しておりますが、その特機の先駆者が岡崎さんです。撮影現場の条件や状況に応じて、いろいろな素晴らしいアイデアを工夫され、ご自分で作り上げられました。岡崎さんの映像を通じて、大自然のいぶき、人間の血の滾り、そして深い愛が、魂が作品の中に込められているのではないでしょうか。現在も、新しい映像に意欲的に挑戦し続ける岡崎宏三さんを拝見して、是非又、映画でご一緒させていただきたいと夢みております。

はなかなかひとすじなわでは撮らせてくれないな」とボヤいていた。誰のせいにもしなかった。正直驚いた。私は、いざという時潔い人に敬意を抱く。きっとそれはその人の根っこに常に感謝の気持ちがあり、自立した心の持ち主でないと難しいことだから……。結局この時のピンチは皆のさらなる団結を生み、この映画にとってのチャンスだったように思える結果を出した。映画の神様はほほえんでくれたに違いない。年月を経てますます魅力的になる橋口監督。これからもかわらないでいて下さい(ね)。

監督 to 監督

熊井啓から田坂具隆さんへ

田坂氏は昭和二〇年に広島の歩兵連隊に入隊し、被爆。その後、放射線障害に苦しみながらも二七年に原爆をモチーフにした、「長崎の歌は忘れじ」（52）を発表。だが、心なき人々に「甘い映画だ」と批判された。氏は二九年に日活へ移られ、「女中ッ子」（55）を監督、私はこの作品から氏が日活を去るまで五年間、助監督として師事した。

ある「原爆映画」を観た日のことである。私が氏に「なぜ被爆体験をもとに、直接に、原爆を描いた映画をお作りにならないんですか」と訊くと、「いかなる手段をもってしても、原爆と被爆の苦しみを表現することは、不可能だからです」と言われた。

一昨年、氏の故郷の三原市で生誕百年祭が行われた折り、二七年の原爆忌に氏が知人・中野陽之助氏に送った書簡が紹介された。そこには「長崎の歌は忘れじ」を完成した当時の田坂氏の心境が吐露されている。

「今日（八月六日）は二度とあってはならない思い出の日です。あの日の様に朝からよく晴れてゐますが、私は家に居て再生の祈りをささげています」

俳優 to 監督

北村有起哉から今村昌平さんへ

デビュー作「カンゾー先生」（98）の撮影は七月から岡山県の牛窓でロケした。僕の撮影は九月からの予定でしたが、今村監督は「一日でも早く来い。先輩の演技を見て勉強しろ」と声をかけてくれました。それですぐに行ったら……実際は美術のペンキ塗り、照明の運び係、本番中の通行止め、録音部指令の蝉取りなどなど。終いには松坂慶子さん等に群がる野次馬を押しのける、スターさんの誘導係。真黒く日焼けしてヘトヘトになりながら、何度も我を振り返る。「俺、何しに来たんだったっけ？　なんだよ、ただの人手不足じゃねえか」とぶつぶつ……。到頭腐りかけてたら、すかさず監督が「もういいよ。明日東京へ帰るか？」。血の気がサーッと引きました。あの体験のおかげで、映画創りがどれだけ大変な作業であるかをわからせてもらいました。冷房の効いた楽屋で「まだかよ俺の出番！」なんてとんでもない。今村監督、そして今村組のスタッフの皆様、ありがとうございます。

監督 to 監督、元岩波映画社長

黒木和雄から 高村武次さんへ

私が映画界に入った時の最初の演出家です。岩波映画の監督でした。ジャーナリストからドキュメンタリー映画（短篇や宣伝映画が主でしたが）にすすんだ人で当時三十歳でした。私の親戚の高校大学時代の友人で、もう一人当時助監督だった増村保造監督も同級だったようです。岩波映画に入って高村さんの助監督になり「佐久間ダム」（54）という建設記録映画の現場に配属されました。先輩助監督が一人、キャメラマンと助手の五名が常駐スタッフでした。すべてが初体験で学生時代の生活とは違いまにす。数ヵ月で私はまいってしまい現場から無断で逃走、京都にまいもどったのです。もう諦めきった一月後でしょうか。高村さん達が私を捜し出して現場に連行、「あきらめずに映画の仕事を続けろ」と説得してくれたのです。思いがけない高村さんの恩情が心にしみました。それが再出発となり、その後の私の映画人としての生活が迷いのないものとなりました。高村武次、八十歳、ご健在です。

監督最新作「父と暮せば」7月31日公開

監督 to 監督

小泉堯史から 黒澤明さんへ

黒澤さんの最期の作品「まあだだよ」（93）は、準備稿のタイトルが「先生」でした。撮影終了後、インタビューの中で、黒澤さんは、「ある外国人が、今の教育は課目としての勉強を教えるだけだが、それよりもっと大切なものがあり、先生そのものから学ぶことが、教育の重大な部分を占めているということを今、忘れていやしないか、と云っているが、僕もそう思う」と、話しています。

このある外国人とは、ポール・ヴァレリーなのですが、何事も教える人間が、どんな人間かということが重要なのだと云うことでしょう。

黒澤さんや小津安二郎をはじめ、善き先師達の残してくれた作品は、生き生きと、美しいその姿を今に伝えてくれています。そこから学びつづけることが大切だと思っています。

俳優 to 元大映演技研究所所長

小林桂樹から 佐藤圓治さんへ

尊敬する方は「佐藤圓治さん」(故人)です。昭和十年代の旧日活から戦中戦后の大映演技研究所の所長をされ、俳優の養成に力を注いだ方です。現在も活躍されている女優三条美紀さんのお父上です。ご本人も無声映画時代の日活の俳優でトーキー時代になって引退、その豊かな見識から養成所を任されたのです。私はこの研究所の卒業生です。当時これといった養成機関が少なく、各映画会社それぞれといった所で、映画俳優はどちらかというと演劇俳優に比べ非力に見られていました。佐藤さんは基本的なことを演劇畑からもとめ、八田元夫氏、水品春樹氏、三好十郎氏、田中栄三氏など錚々たる演劇人を招き講師の充実をはかったのです。更に専門的分野だけではなく、むしろそれ以上に、社会人としての常識を身につけることに力を入れ多彩なカリキュラムを用意してくれました。ともすればお人形さんの住むような世界に思われる私達の世界ですが、地味でも常識を身につけた若者たちを世に送り出そうとした佐藤さんの熱い想いには、今でも感謝の気持ちがいっぱいです。

監督 to 監督

斎藤耕一から 今村昌平さんへ

ねばり、しぶとさと同時に、現場での繊細な仕事運びには定評があるが、時として発想するアイディアの大胆さと奇抜さは周辺にいた私たちスタッフの想像を越え、驚かせると同時に映画作りの楽しさも教えてくれた。

思えば今村監督と過ごした数年間は私にとって最も充実した勉強時代だった。

そして何よりもキャメラマンとして私が起用された「神々の深き欲望」(68)の時、撮影間際に突然起きた私の監督への転身話に、熟考の末、快く英断を下し許可された事への感謝は今でも忘れない。それは私にとっては正に分岐点であったし、今に繋がっているものだからである。

監督 to 監督

新藤兼人から 溝口健二さんへ

溝口健二はシナリオは書かなかった。だが映画を作ることはシナリオを作ることだと考えていた。異常なほどにシナリオ作りに執着した。

シナリオの第一稿ができるとスタッフを集めて検討した。自分の意見はあとまわしにして、まずスタッフの感想をきいた。それから自分の判断を下した。そして第二稿にかかった。

五稿、六稿に及ぶこともあった。その結果第一稿に戻りましょうと言って、シナリオライターを憤激させることもしばしばであった。

そして決定稿は撮影現場で役者と対決したときだときめていた。

セットに黒板を持ちこみ、撮影シーンのシナリオを写し、字で書いたシナリオと役者の個性との格闘を試み、決定稿とした。

映画を作るというより映画へ向けての体当りであった。その凄い集中力の渦にスタッフは恍惚と巻きこまれていった。

俳優to俳優 鈴木杏から大竹しのぶさんへ

私はたまにある禁断症状に陥ります。別名「会いたい会いたい症候群」。それは大竹しのぶさんに出会ってから発病し始めました。

子供の様な溢れんばかりの笑顔、こんな小娘にも真っ直ぐに向き合って下さるその瞳、たまに本音とも思わせるリアルなジョーク、運がよければ見ることが出来る死ぬ程かわいい変顔…
…その一つ一つに出会って私は初めて〈素敵〉という言葉の意味を心の底から感じることが出来たのだと思います。

この様にかなりメロメロな私なので、演技のアドバイスを頂いた時には、幸せの絶頂！

「一生ついていきます！師匠！」

と勝手に思ってしまうのです。しかもかなり本気で。そして気がつくと

「しのぶさんに会いたいなぁ～」

と呟いている私がいるのです。禁断症状。

あ～しのぶさんに会いたいなぁ……。

今度は映画で共演出来たらいいなぁ……。

大好きです！　師匠!!

俳優to俳優 鈴木一真から大杉漣さんへ 阿部寛さんへ

昨年、「監督感染　KE-NENN」という短編映画の脚本・監督をさせていただきました。その物語のクライマックスに登場する、ホームレスが沢山住む公園で生まれ育って50年の管理人でホームレスという無茶苦茶な設定のキャラクターを漣さんに演じていただき、物語の前半現れる不気味で突然下痢に襲われる借金取りを阿部さんに演じていただきました。撮影の初日に奇跡が起こりました。美術スタッフが三日間かけて公園に建て込んだホームレスの家（?）が崩壊寸前にまでになりそうな突然の豪雨。絶望感に包まれていた我々の前に漣さんが太陽と共に現場に登場！　漣さんの登場しているシーンだけが見事に晴れました。漣さんは映画の神様に守られています。撮影の最終日の打ち上げ会場では、阿部さんが三時間も撮影が遅れて会場入りした我々と一緒に乾杯するまで、目の前に置かれたビールに手をつけずに待ってくださっていて、そのお心遣いに一同感動しました。ホント尊敬します！

俳優to俳優 唯野未歩子からジーナ・ローランズさんへ

「フェイシズ」(68)では鮮やかに微笑んで、「ミニー&モスコウィッツ」(71)では少女のようにためらう。「ラヴ・ストリームス」(81)ではプールサイドで夫と子供を懸命に笑わせようとする。そこにカメラが存在していないかのように、いつもジーナ・ローランズは存在している。監督でもある愛する夫の為だけでもなく、不遇の夫の才能の為だけでもない、自分自身の内から生じるなにがしかの為でもなく、ただそこに映画があり、ただただそこに生きている。そんなふうに感じるのです。まるで映画そのものと生きていることそのものが、おんなじことみたいに。そんな美しい人がこの世にいるなんて信じられない、とひるんだ瞬間に、ジーナ・ローランズを心に浮かべます。するとたちまち勇気がでます。ジーナ・ローランズを教えてくれた人たちのことも心に浮かべたら、もうすっかり大丈夫になります。彼女のようになりたい、と願うことすらおこがましく思うくらいに、特別な存在です。

監督 to 監督
タナダユキから増村保造さんへ

増村初体験は「盲獣」(69)であった。その日カゼをひいていて熱があった。いまさら増村作品にどんな言葉をつけたところで私の語彙では限界があるので私の体調で表現したい。観終わって、熱がさらに上がった。そして翌日、カゼが治った。人間がカゼを引くと熱が出るのはウイルスを熱で死滅させるためだが、増村の映画は、私のカゼウイルスをハイパーな熱で一気に全滅させたのである。それから私は増村保造を心の師と勝手に仰いでいる。自分の監督名を増村保子としたいくらいだ。増村が描く女性たちは、哀しく美しい。そしてズルくてたくましくてエロい。それに対して男たちは、ただひたすらに、哀しい。私は、増村の人間を見つめる目がたまらなく好きだ。この人のあまりの人間好きは、いつだって本気だ。本気度が違う。その見つめ方には偽善的なやさしさなどない。偽善はたやすい。たやすい事は価値が無い。だから増村作品は、私にとって最も価値のある作品なのである!

記録映画作家 to 監督
土本典昭から羽仁進さんへ

私は中学・高校時代、砧の東宝撮影所の近くにいましたので、戦後の東宝の作品、作家、俳優を知る機会がありました。活動屋と左翼知識人の〝混血〟した方々に親しみ、格調高い映画を見せられてきました。縁あって二十八歳にして岩波映画製作所に雇員として入り、羽仁進さんとその「教室の子どもたち」(54)「絵をかく子どもたち」(56)を見て、その破格さと自由さに私の映画の〝常識〟を破られました。サヨクの硬直した観念ではなく、ラディカルな発想と映像で考えるという態度、かつ民主的な資質に学んだものです。

有名な羽仁五郎・説子の嫡流として、本物の大正リベラリズムを受け継ぎ、さらに天才的な写真作家名取洋之助を師として、欧米の優れた写真家の仕事、そしてヌーベルバーグの作風を自家薬籠中にしておられ、映画の思想と表現をゼロから組み立て得た作家でした。監督についたのは氏だけ、すべて共鳴と発見の日々でした。

俳優 to 監督
塚本耕司から塚本晋也さんへ

私が、まだ小学生の頃から、兄は8ミリで映画を撮り、今でも一つ道を突き進んでいます。そして今では「世界の塚本晋也」と言われる人物になりました。10年前に、兄はド素人の私を主演に「東京フィスト」を撮り、この映画で私はキネマ旬報ベスト・テン新人男優賞を頂きました。演技の基礎などなにもないことがかえって良かった面も少しはあるかもしれませんが、兄の苦労は絶えなかったことと思います。クランクイン直前に、8ミリで藤井かほりさんとの芝居を撮ってくれたのですが、私の演技に相当な危機感を受けたことでしょう。そして本番。兄は弟としてではなく、いち役者として接し続けてくれました。そこで私は、自分自身を真剣に感じ、人を感じる大切さを教えてもらえたのだと思います。今、多くの映画人の方々に感謝をしておりますが、この世界に導いてくれた兄に、敬意を表したいと思います。

俳優to俳優

寺島しのぶから富司純子さんへ

映画界という世界を知ってみたいなぁ～と私が思ったのは、きっと母である富司純子さんのお腹にいた時から。きっと存在してないけど、母の回りを因子として飛び回っていた頃だと思う。私は、まだちゃんと藤純子時代の作品を見たことがない。祖父でありプロデューサーの俊藤浩滋は、母のことをドル箱と言った。又ある人は、映画館で終わっても鳴りやまない拍手の藤と言い、又ある人は、藤純子が出ると映画館に来ている男は全員欲情したと言った。はぁ～どんな女優だったんだろう。知らないけど知ってる。知ってるけど知らない人。いつかちゃんと作品を見ることが出来るだろうか。

でも、同一人物である富司純子さんも相当いい！これは子バカではありません。「あ・うん」は忘れられない映画の一つです。私は、富司純子として、又色々な女性の生き様をスクリーンに焼きつけてくれることを願います。

早く実現して下さい。

俳優to俳優

遠野凪子から田中絹代さんへ

私の映画デビュー作品「日本の黒い夏～冤罪」(00)……この時熊井啓監督に「〝最後の本物の映画女優〟田中絹代さんの作品を全て観てから僕の現場に入りなさい」と言われました。これが私とスクリーンの中の田中絹代さんとの初めての出会いでした。

「サンダカン八番娼館　望郷」(74)……観る者の魂を揺さぶる圧倒的な存在感……。

私などが、どんな言葉を捜しても、田中絹代さんの素晴らしさを表現する事は、到底無理なような気がします。ただひとつ言える事は、今後私が向上心をもって女優の道を歩き続ける限り、田中絹代さんの偉大な女優魂が心の中に常に存在し続ける事だけは間違いないのだと思います。

田中絹代さん……誇りであり、励みであり、私の最大の目標の女性です。

俳優to監督

永島敏行から根岸吉太郎さんへ

映画の仕事を始めて二十八年、素晴らしい映画監督の皆様と仕事をさせてもらいました。尊敬する映画人をと問われて迷いましたが、私の俳優人生の転機となった「遠雷」(81)の監督根岸吉太郎さんのことを書かせてもらいます。「遠雷」の撮影現場はエネルギーが溢れていた。根岸監督は弱冠三〇才だが、スタッフ、キャストをまとめる現場監督であり、私たち若い役者をじっと待ち内面を掘り起こしフィルムの中に生かし、当時の都市化される近郊農家を適切に表現し、そこでしたたかに生きる人々として私たちを演出していた。私は朝令暮改の監督が好きだ。聞く耳は持つが自分のイメージが湧いたら変わってゆく。根岸監督は役者のイメージも聞き自分のイメージを膨らませてゆく。昨年の暮に「透光の樹」(04)で久しぶりに監督と仕事をした。多くは語らないが監督が演出する一言一言で自分の芝居が変わってゆくのが楽しかった。根岸監督、お願いです。もっと映画を撮って下さい。

主演作「透光の樹」今秋公開

俳優 to 俳優

中井貴一から高倉健さんへ

僕にとって、高倉健さんは、リスペクトなんていう言葉の幅では収まらない大きな存在の人。特別な感慨があります。

　東宝の撮影所で初めてお見かけしたとき、高倉さんは、優しい大きなオーラに包まれて、まるで太陽の光を一身に集めているかのように輝いて見えました。まだ十代だった僕は、このときまで人間が光り輝くとか、オーラなどということを考えてみたことがなかったし、信じてもいなかったのです。しかし、それを眼前につきつけられ、しばし唖然と立ち止まってしまいました。そして、その輝きがどこから出てくるものなのかということは、その後の僕の俳優生活のテーマにもなりました。

43頁よりインタビュー掲載

俳優 to 監督

永瀬正敏から相米慎二さんへ

不思議な人だ……。たとえば、偶然バッタリ出会う度、僕がその時期演じている役柄をさらりと的確に言い当てられたり（しかも、日常会話の中に実にさりげなく）……、監督作品を観る度、何度も衝撃を受けたり（しかも、別に大がかりなシーンではなく、実にシンプルな場面で）……、僕が体験した演出は、「もう、俺よりお前がそいつなんだから、俺に聞くな！　自分で考えろ」と何も指示がこない、考え様によってはとても乱暴なものなのに、最後は、何故か心地よく、包まれる感じがする……、まだ言葉で表現するには、足りない気がするが、兎に角、実に不思議な人だった。もし僕の中に（偉そうな事、言わせてもらうと）何かこの仕事をする上でのアイデンティティ？　癖？　があるとしたら、少し悔しい気もするが多分、あの人の影響が多大にあるのだと思う。直接「役者ってな、こういうモンなんだ！」なんて事は一言も言われてないのだが……。あっちの世界に行ってしまってからも、節々に、すぐ側にいて、憎まれ口叩かれている様な気がする、本当に相米のオヤジは実に不思議な人だ。

俳優 to 監督

仲代達矢から小林正樹さんへ

小林監督には、「黒い河」（56）「人間の條件」（59）「切腹」（62）と、二十代の駆け出しの頃から、よく扱かわれました。役者としてどう生きるのか、作品というものに対する考え方、時間と手間を惜しまない「ものづくり」の姿勢、どんなに悪状況の中でも決して妥協しないその確固とした揺るぎない信念……それは、芸術にたずさわる者の原点と言うか、生涯忘れてはならない生きざまのようなものでした。「用心棒」（61）や「影武者」（80）の黒澤監督にも、あくまで自分の作品を追求して已まない執拗さと執念がありました。だからこそ、世界にも通用する「日本映画」が作れた時代だったのではないかと思います。良い映画には長い時間との粘り強い格闘の部分があります。短時間に才知だけで仕上げた映画には、どうしてもスクリーンにその底が見えて来ます。じっくり何かを待ち、あくまでも追い求めるその姿勢……低予算とスピードの時代の現今にあっては、夢物語のような話かもしれませんが、それが私の受けた名匠たちの薫陶です。

俳優to監督

西田尚美から矢口史靖さんへ

私は「ひみつの花園」(97)という作品で御一緒したのですが、矢口監督はいい意味で人を巻き込む事が上手いお方です。私もまんまと巻き込まれてしまって、未だに女優をやっているわけです。映画の面白さを知ったのもきっと矢口さんと一緒に仕事をしたからだと思っています。巻き込み方が巧妙なのです。なんだか心地よいのです。

「ひみつの花園」以降の作品もずっと見ていますが、いろんな方々が巻き込まれていくのを感じています。

これからも面白いことを企み続けて欲しい監督さんです。

最新作の「スウィングガールズ」を見たのですが、私もちょっと出演させていただきまして……でも、もう少し若かったら……あのガールズになりたかった!!という悔しい思いがふつふつと……。

次はどんな面白い事をやるんだろうか……。是非また巻き込まれたいです!!

リスペクト――映画人から映画人へ

監督

羽仁進から未だ見ぬ友へ

つい先頃、「あの子を探して」(99)のビデオを見てとても面白かった。その二、三日後に中国の雑誌で、宋時代の佛像の写真を沢山みた。そして気がついたのは、「あの子を探して」に出てくる子供達の方が、佛像よりずっと心に訴えてくる力が強い、ということだった。この映画の物語は忘れてしまった。しかし、一人一人の子供達の、それぞれに勝手なことをしている姿や、顔が、凄いのである。おかしかったり、悲しかったりする。でもそのすべてが、「美しい」のである。

僕は、これこそ「映画」なのだ、と思う。物語を語っている映画は、結局のところ文字や演劇とあまり変らない。映像、という創作手段を、映画を通じて手に入れた我々は、すごいものを手に入れたことを、気づくべきだ。どうやらそれに感じる人が増えてきている。十年、十五年後に現れてくるだろう未来の天才たちに、はるかに共感のメッセージをおくりたい!

俳優to俳優

野波麻帆から原田美枝子さんへ

「愛を乞うひと」という映画で親子という形で共演させて頂いてから、役者としても、人間としても大好きです!! 映画作りの右も左もわからなかった私に、形ではなく心で芝居をする大切さを教えてくださいました。またいつかご一緒したいなぁ……。♥

監督 to 監督

原一男から浦山桐郎さんへ

自主製作・自主上映というスタートを切り業界の辺境で突っ走ってきた私が師と仰いでいる人が故・浦山桐郎監督である。

縁あって、その浦山監督を描くテレビドキュメンタリーを演出した。『映画監督浦山桐郎の肖像』（関西テレビ・1998）。浦山監督を愛した俳優たちや家族・親戚、監督たちやスタッフ、約70名の実に多様な方たちに会いインタビュー、昭和という時代を駆け抜けた映画人を浮き彫りにする作業に没頭したのだが、浦山監督を評して、多くの人たちの口からでた言葉が〝最後の無頼派〟だったという形容。まさしく、酒と女と映画を愛して、54才というあまりに早い壮絶な死だった。助監督としては一本しか現場についてないのだが、映画とはいかなるものであるべきかを懇切に教えてもらった。

「映画監督には教師型タイプとそうでないタイプとがいる」。もちろん浦山監督は前者。もっともっと生きて教えて欲しかった！

俳優 to 撮影監督

原田芳雄から宮川一夫さんへ

数々の名作を撮り生涯作品数123本、80歳を過ぎても現役の撮影監督を全うした宮川一夫さんとの30数年前の出会いが現在の私の映画への想いの原点のほとんどを決定づけているように思います。直向きな熱情と探求心。「最高のアングル」を求めて食事時間もおしんで縦横無尽に走り廻りルーペを覗く宮川さんの姿を私達は何度も目撃しております。「今だに何がどの様に撮られているのか判らないものだからぼくはすぐに現像所に出掛けてしまうのです」「役者さんだけではなく時にはカメラも演技しているんですヨ」とテレ笑いしながらおっしゃった。戦場に赴く直前に宮川さんがお撮りになった「無法松の一生」（43）を観た少年兵の「つくづくこの戦争はくだらんと思った」という主旨の手記があることを知った宮川さんが目に涙を浮かべながらポツリと「良いもの（映画）を残しておかなくては」とつぶやいたのが忘れられません。

出演作「父と暮せば」7月31日公開「ニワトリはハダシだ」今秋公開

監督 to 監督

原田眞人からハワード・ホークスさんへ

生涯の一本を「赤い河」（48）と決めることからスタートした監督業なので、ひとり選べと言われたら、黒澤明でもなく、サム・フラーでもなく、ピラミッドの前でエルンスト・ハースのカメラにおさまった「スポーティな巨人」ホークスをイメージする。72年、23才の自分が、この巨人に会うためにスペインを旅したことは、人生の大きな節目だった。そのことは、当時、『キネ旬』に短信として書いた。

人生半ばを越えた今、ホークスとの時間がより鮮明な価値観を持って自分の進むべき道を示している。円熟のホークスは、プロとプロとのリレーションシップを描き、ホークス的なる関係を保てるプロと仕事をする歓びが、自分の映画作りの根底にはある。

「赤い河」に描かれた旅の帰結は、「息子」が「父」との対決を経て、対等なるパートナー＝継承への道を切り開くことだった。

先達への敬意というものは、理想の父性に到達する旅に置き換えられると思う。

監督 to 監督

東陽一から今村昌平さんへ

尊敬する監督といえば、世界中で十数人をただちに思い浮かべるが、一人選ぶとなれば、ここでは三十代後半で「赤い殺意」（64）を撮った今村昌平の名をあげたい。かつて、今は亡き伊丹十三とこの映画をめぐって夜を徹して話し合ったこと、また同じく今は亡きキャメラマン姫田真佐久に、撮影についてあれこれ聞きただしたことなどを鮮明に記憶している。

「赤い殺意」の美しさはただごとではない。それが、伊丹とわたしの共通した意見だった。しかし、この映画は誰にも「影響」を与えることができないし、わたしも影響は受けていない。作品そのものが、だれかに影響を与えることを拒否して屹立している。今村はこの傑作一本だけによっても、世界の映画人のリスペクトを受ける資格がある。

監督最新作「風音」7月31日公開

監督 to 操演

平山秀幸から岸浦秀一さんへ

操演グループ「ローカスト」の親分である。撮影現場での仕掛けのあらゆる事につきあっていただいている。ある時は火薬の爆発から、ある時は吊り、ある時は俳優の身体の一部の固定まで。「困った時の岸浦サン」、一家に一人岸浦サンである。最初はスタッフの話を隅の方でおとなしく聞いている。そのうち「考えますよ」の一言が出ると、いつの間にか現場の中心になっている。「さて、これからどうしたもんかねェ…？」と迷っていると「とりあえずやってみましょうよ」がエスカレートして、「とりあえず爆破してみましょうよ」となる。操演というと力まかせのイメージが先行するが、彼の仕事は幾何学的な発想と綿密な計画から成り立っている。特撮やCGも重要だが、映画の現場はガムテープと細紐が支えているという事を教えてくれる。何より「現場力」を第一と考えている人である。ちなみに彼は、その風貌から撮影現場の「JB」と呼ばれている。

監督最新作「レディ・ジョーカー」12月11日公開

リスペクト
——映画人から映画人へ

俳優 to 監督

富司純子からマキノ雅弘さんへ

私の女優としての始まり、それは、マキノ雅弘監督との出会いからでした。

撮影所でお声を掛けて頂かなければ、映画出演はなかったでしょうし、出演させて頂いてからは、右も左もわからない私に、演技、所作など、本当にゼロからご指導して頂きました。それから、出演作品は100本近くになります。

監督が「いい女優になれたら、いい奥さんになれる」と私におっしゃった事が、今でも心に残っています。当時、私は何だか、それを目標にがんばっていた様にも思います。

今、こうして女優を続けていられるのも、やはり映画が大好きなのも、監督との出会いがあったからこそだと痛感しております。

監督 to プロデューサー

降旗康男から俊藤浩滋さんへ

リスペクトって何だろう？……かれこれ三十年前、「新網走番外地」(72)の八作目、マンネリの上塗りはもうやめましょうと恒例の如く駄々を捏ねていた時、大泉撮影所の中にあるテレビ・プロの団交で暴行があったとか無かったとか、管轄署から十数名に逮捕状が出たとか出る筈だとかの騒ぎがあった。つい三、四年前は組合員、昨日の仲間に臭い飯を食わせる訳にはいかないと「その連中をスタッフにつけて、即北海道ロケへ出発しましょう」と口走った。俊藤さんは「お前、そんなことしたらもう東映で仕事あらへんぞ」。僕「俊藤さんも京都へ引き揚げるらしいし同じことでしょう」。と瓢箪から駒。「それでいこか」とどんな手口を使ったか、言った通りを実現してくれた。「シャシンが出来れば会社は御の字よ」と本音を装った慰めか励ましの呟きと共に。まことに個人的な話ながら『吉良の仁吉は男じゃないか』って歌の文句が、要するにリスペクトってことではないかと思うところです。

監督 to 監督

前田哲から相米慎二さんへ

とても短い時間だったけど、一生忘れられない人です。映画そのものも、映画の作り方も、そして、生きざまも、真の意味でオリジナルだと思います。映画のどのシーンを取り出しても、どの撮影エピソードを聞いても、そして、どの場面での出会いも、相米監督ならではでした。CMのおまけビデオを劇場公開作品として監督デビューさせてくれた。いろんな困難の中、そんな無謀な事をやり遂げたのに、相変らずのとぼけ顔で、「ちっちゃくまとまんなよ」。その言葉が、今頃になって身に沁みます。スクリーンより大きな映画を生み出していった相米慎二監督に、出会えたことに感謝しています。

監督 to 監督

細谷佳史からクリント・イーストウッドさんへ

「ミスティック・リバー」(03)の取材の際に幸運にもイーストウッドと一緒に食事をする機会に恵まれた。取材陣から出る少々ひねった質問に対しても、彼の答えは実にシンプルでストレート。偉そうな雰囲気は微塵も感じられなかった。それどころか常に周囲への気配りを忘れず、俳優として映画監督としてあれだけ実績のある人が、人間的にもとても尊敬出来る人であったことに本当に感激した。この業界には、ちょっと名前が売れただけで生意気な態度を取る連中がいかに多いことか。「やはり本物は違う」というのがイーストウッド本人に会った印象だった。もちろん映画監督としても大いに尊敬している。全く無駄を感じさせないシンプルで完成度の高い演出ぶりや、人間ドラマに重きを置いた題材選びなど実にすばらしい。「ハリウッドの最後の巨匠」と言われるのも尤もだ。素晴らしい作品が人間的にも魅力のある人の手で作られているのを肌で感じられたのはいい励みになった。

俳優 to 監督
光石研から青山真治さんへ

生まれ持って、「華」など持ち合わせなかった者がこの道を択んだ時から、悪路は決っていた。30代に入った頃、「演者」という「病」に蝕れ、メッキは剥れ、急場埋立地に建てたビルの様に足元からズブズブと身体が傾き始めた。そんな私を当時、いろいろな監督がたすけてくれた。中でも、青山監督は、「演者」から解放し、映画で呼吸する事を教えてくれた。如何に演じるかより、如何に存在するか。青山監督、青山組スタッフが、言葉ではなく、映画への強い意識で教えてくれた。これからも太く深く根を張る映画を撮りつづけるであろう青山監督、そして青山組スタッフをリスペクト！

監督 to 監督
舛田利雄から成瀬巳喜男さんへ

ヤルセナキオという言葉が本当にぴったりくる。林芙美子原作の「浮雲」(55)は、まさしく最高傑作だと思います。僕の映画は、成瀬さんの映画とは正反対で男性的だとよく言われますが、自分のなかにも、〝ヤルセナキオ〟的な部分があり、シンパシーを感じます。クロさん（黒澤明）もすごいけど、成瀬さんにはかなわない、と。僕は「銀座化粧」（51）や「おかあさん」（52）で、成瀬さんの助監督をしました。「おかあさん」では、ムキになって突っかかる名脚本家の水木洋子さんの話を、淡々と聞いている姿が印象的でした。成瀬さんは余分なものは一切撮らないし、演技指導もしない。だから脚本は大切だし、自然で的確な芝居をする田中絹代さんのような役者を好むんです。「銀座化粧」の、帰ってこない子供を捜し歩いた田中さんがついに息子を見つけるシーン。安堵してしゃがみこんだ田中さんに、息子が飛びついてくる。すると田中さんは平手で頬を殴ります。なにが起きたか理解できず呆然とした後、猛然と泣き出す息子。印象深いシーンです。カットが掛けられると田中さんは少年を抱きしめ、路地裏に連れて行きました。するとそこにはバスケットいっぱいのお菓子があった。もののない時代です。彼は泣きながらもお菓子を頬張っていました。田中さんは、今日の芝居を実現するためにはお菓子が必要、とあらかじめ用意されていた。この辺りは田中さんのアイデアだったと思います。成瀬さんに話を戻すと、同じく「銀座化粧」。光を上からあてようとする照明さんに、欄間を外す許可を出しておきながら、その次のカットでは引きを指示する。それは外した欄間をまたすぐ嵌めなければならないということ。意地の悪い、と思いましたね（笑）。成瀬さんにはそんなところもありました。

監督 to スクリプター
村本天志から長坂由紀子さんへ

「監督が人前でそんな顔を見せてはいけません！」。長坂女史にそう言われたのはオレの初めての長編「MASK DE 41／マスク・ド・フォーワン」のクライマックス・シーンの撮影中で、主役の田口トモロヲがアクシデントでハイキックを後頭部に受けてしまい病院送りになった後だった。

オレはよっぽどひどい顔をしていたのだと思う。「どんな顔してました？」慌てて聞いたけど、彼女は笑ってそれには答えず「さっ、今撮れるものから撮りましょ！」と明るく言った。果たしてあのタイミングで長坂女史の一言がなければ、オレは気持ちを持ち直せなかったろうし、そうなれば

この映画は完成しなかったわけだから彼女はリスペクトだけでなく感謝して余りある映画人である。もし、次に映画を撮る機会が与えられたら間違いなくスクリプター長坂由紀子にファーストコールする。長坂さんに嫌だと言われなければだけど……。

監督作「MASK DE 41／マスク・ド・フォーワン」8月公開

監督 to 脚本家

望月六郎から 佐治乾さんへ

私はもともとシナリオでデビューした為かシナリオライターの先輩に青春を指導して頂く事が多く、自分では勝手に荒井晴彦の弟子だと思っていた。そんな荒井さんに最も感謝するのは、佐治先生を紹介して頂いた事です。「お前は少し映画を甘く見ている所があるから」と後で理由を聞かされたのだが、先生とのホン作りは正に脚の本造りだった。夜、深酒をする。すると中々起きられない私を尻目に先生は資料館、図書館とニコニコ廻っているのだ。一年、二年掛けて出来上がった脚本は岩の様に硬い、若い勢いだけでは、その内持たなくなる事、いかに映画と付き合い生きていくと言う事、佐治先生とお付き合いさせて頂いた十数年で楽しく教えて貰った。未だ映画にできないでいる脚本2本は、自分への一生を掛けた宿題だと思っています。

監督 to 録音技師

森田芳光から 橋本文雄さんへ

映画人である前に人間として素晴しい人でなければいけないと私は橋本文雄さんに学びました。そのキャリア、技術、向上心は日本一おそらく世界でも五本の指に入る録音技師であると思います。それだけでもスゴイことなのですが、映画界から外に出たとしても、品格、ユーモア、心の広さ、は驚くべきです。現場から一歩はなれ、パーティなどで必らず見るスーツ姿、そのダンディさと、華は、財界人の頂点を争う人とも敗けないオーラを保っています。何にでもある好奇心の源はいったい何なのでしょう。新しい人、新しい音楽にも興味をもち、かつベテランの技術があれば、こわいモノはありません。それでもって、肝心の耳の方の健康は、若い人よりすぐれているのですから、驚嘆するばかりです。そんな素晴しい人と私は一緒に仕事をしていること事体が奇跡です。橋本さんに何度も言われた「クソぼうず」を謙虚に受けとめ、私は少しでも近づきたいと思います。

監督最新作「海猫」11月13日公開

リスペクト——映画人から映画人へ

監督 to 監督

本木克英から 勅使河原宏さんへ

「利休」(89)「豪姫」(92)の二作品に助手として就いて以来、三年前に逝去されるまで師事しました。「美」に妥協しない豪勢な画作りにはただ感服するばかりでしたが、撮影所システムの末端にいた私にとっては、むしろ現場を離れて監督と過ごした豊かな時間がとても貴重でした。監督は映画の他に生け花の家元でもあり、書や陶芸にも秀でた芸術家です。その審美眼は、映画や舞台の鑑賞のみならず、企画や脚本を練る空間や、打ち合わせの際飲み食いするものなど、日常の行動すべてに発揮されました。まがいものは即座に見抜き、退屈を嫌いました。京都と江戸の遊び方を知り尽くし、私には想像すらつかなかった一流のものを見聞きさせて頂きました。

監督が再三教えてくださった、本物を見極める目は、残念ながら私には備わりませんでしたが、本物を知ったことを励みに、今は現場に立っています。「強要しない喜劇、これが一番難しいぞ」ともおっしゃっていました。

俳優 to 監督

山崎努から黒澤明さんへ

「天国と地獄」（63）のオーディションの時。

「じゃやってみようか。ぼくが相手役をやるよ」。黒澤さんがゆっくり黒眼鏡を外しました。じっと見つめ合って会話する長いくだりです。困った。情けない話ですが、当時僕はひどい赤面症で、他人と目を合わせることなどとても出来なかったのです。「スタート」。

（オレの目は今、醜く歪んでいる。相手もきっと困っているはずだ）

だが、テーブルをはさんで一メートル半くらいのところにある黒澤さんの目は、少しも動じていない。柔らかく、澄んでいて、なにもかも全て受け容れてくれていました。

（気にするな。平気平気）

僕は、吸い込まれるように、その目を見続けることが出来ました。うれしかった。そしてオーディション合格。

あの柔らかな目に助けられたのです。立往生している青二才の僕の背中を、黒澤さんがそっと押してくれたのです。

監督 to 脚本家

山田洋次から橋本忍さんへ

38頁よりインタビュー掲載

監督最新作「隠し剣　鬼の爪」今秋公開

野村芳太郎監督作品「ゼロの焦点」（61）、「砂の器」（74）の企画段階から脚本完成まで、まだ若かったぼくは当時名実ともに日本を代表する脚本家だったこの人と間近に膝を接して打ち合わせや脚本の構成、執筆の手伝いをする幸運を得た。そしてその緻密な仕事のすすめ方、すさまじい粘り、難関を乗りこえる時の身もだえするような苦悩を目の前にして、プロの仕事というのはこうなんだということを、大きな驚きのなかに学んだ。

――脚本を書くという仕事は、畑仕事に近いね。

そんな言葉を橋本さんが呟いたことがある。土を耕し、肥料を加え、種をまいて雨や日照りの心配をしながら成長を見守り、やがて収穫に到るその過程と脚本執筆。

――才能なんてあるとかないとか考えても意味がない。必要なのは粘りだな。農民のような忍耐力。

伊丹万作に教えを受けたこの人が、日本映画脚本の、特に"構造"に残した影響の大きさは計り知れない。

俳優 to 監督

山本富士子から衣笠貞之助さんへ

昭和28年に映画界に入り、ただもう夢中で仕事に取組んでいたが、昭和30年「湯島の白梅」で初めて衣笠貞之助監督と出会った。衣笠先生は女形の御出身で女のしぐさや、動き方を熟知されており、主人公お蔦の動きを一シーン毎にご自分で演じて見せて下さった。私は何とか自分のものにしたいと毎日くいいるように見ていた。そして、この湯島は私の記念すべき大きな一つのステップとなった。

その後も数多くの作品で御指導をいただいたが、「情炎」という作品の時に、食事をしようと浜町の料亭に連れて行って下さった。

「今晩は」という声と共に日本髪に裾を引いた一寸ほろ酔いの芸者さんが現れた時は思わず息をのんだ。

「ああ、私の今度やる浜町の芸者役そのものだ」と。あとで先生は「どう少しは役に立ったかな」とにっこりされた。

それは私に見せるための先生のひそかな演出だったのだ。

今は亡き先生に心からの感謝を捧げたい。

リスペクトの心を語る①

山田洋次 監督

橋本忍 脚本家
黒澤明 監督

一軒の家を建てる名人の大工のような厳しさ

「羅生門」(50)「生きる」(52)「七人の侍」(54)「真昼の暗黒」(56)「張込み」(58)「切腹」(62)「白い巨塔」(66)「上意討ち」(67)「砂の器」(74)……。日本映画史上、屈指の名脚本家の一人である橋本忍さんのことを尊敬する映画人は少なくない。山田洋次監督もその一人である。今回の「映画人から映画人へ　リスペクト」という企画に山田監督は橋本忍さんを選ばれた。助監督時代に橋本さんと机をはさんで二つの脚本を書き上げた山田監督に、偉大なる映画人・橋本忍を語っていただく。

取材・構成＝編集部

撮影＝前田昭二

鉛筆だけは手から離してはいけない

「出会いは、1950年代の終り、野村芳太郎監督の助監督だった僕が名作『張込み』の脚本直しなどの連絡のためにご自宅に通ったのが最初でした。続いて同じ松本清張原作の『ゼロの焦点』を野村さんと橋本さんで映画化することになり、橋本さんから僕にアシスタントとして手伝ってほしいと話があった。日本の脚本家として押しも押されぬ第一人者だった橋本さんの下で働くなんて滅多にない機会、躍り上るほど嬉しかったものです。その次が『砂の器』になります。これは脚本を書き上げたものの、なかなか撮影に入ることができず、10年後の74年に映画化され、大ヒットした作品です。

当時は、松竹、東宝、大映、日活、東映、新東宝などの映画会社が、それぞれの撮影所で映画を作っていた、いわゆる撮影所の時代で、各会社にそれぞれ映画作りについての流儀があった。松竹の場合は、大先生の下に若い弟子が何人もいて、大勢でワイワイと脚本を作るという形で進められていました。それに対して、橋本さんは、兵庫県でサラリーマンをしていたけど、どうしても脚本を書きたくて上京し、伊丹万作に師事して、独立独歩、自分の道を切り開いてきた人で、橋本さん流の独特の書き方や脚本家としてのライフスタイルを持っていて、最初は随分とまどいました。松竹の現場は、小津安二郎、野田高梧のお二人の仕事の仕方が有名だけど、ともかく温泉旅館にこもって毎晩酒を飲んだりマージャンをしたりして、その合間に脚本を書くという、誠にのんびりしたものだったので、僕も脚本というのは、そういう風に遊び半分で書くものだと思ってた(笑)。ところが橋本さんは、酒は飲まない、ご馳走食べようなんてことも言わない、ましてや芸者を上げるなんて(笑)。コッコッと一軒の家を建てる名人の大工のような厳しさ。時間的にも朝十時から夕方六、七時まで。日曜日は休み。最初の頃に橋本さんから言われたのが、"人間の頭脳というのは、本当に集中が持続するのは数分間で、トータルでは一日一時間か二時間くらい。だから、他の事を考えたりして頭を休ませるのはかまわない。ただ鉛筆だけは、トイレに行く時以外は手から離しちゃいけないよ"。だから、僕は常に鉛筆を持って原稿用紙に向かう。時々師匠の様子をチラッと見ると、師匠は黙々と書いている。僕も書く。そんなふうにして進めていったんですね」

その頃の橋本さんといえば、『黒い画集・あるサラリーマンの証言』『切腹』『白と黒』『仇討ち』など映画史に残る脚本を次々と執筆していた。

「奥さんが障子を開けて受賞の報告に来られるんです。"キネマ旬報から連絡があって、脚本賞を受賞なさったそうです"暫くしてまた顔を出されて"毎日映画コンクールから連絡がありました"などと伝えられても、橋本さんは原稿用紙をにらんだまま"うむ"でおしまい(笑)。僕も"おめでとうございます"と言わなくてはいけないと思うんだけど、そんな空気ではない(笑)。

ご飯などでひと休みするとき、橋本さんは"置こうか"と言う。大工さんの言葉で道具を置くという意味ですね。食事の時間になったので、ようやく受賞のお祝いを言うと、橋本さんは真顔でこんなことを言ったものです。"洋ちゃん、マスコミというのは、一人の作家に光を当てて持ち上げるけれど、その次は手のひらを返して悪口言い出すものなんだよ。だから褒められても、決して得意になってはいけない。君もいつかたくさん賞を獲る日が来ると思うけれど、自分の実力は、世間の評判の七割だと思いなさい。絶対世間の評価を鵜呑みにして思い上ってはいけない"。まさに師の言葉ですね。今でも賞を貰うたびに、この言葉を思い返します。橋本さんは賞に関してこんな話もしてくれました。"木下恵介監督は受賞したトロフィーを自宅の棚にずらりと並べて飾っているそうで、そのことをからかう人もいるけれど、僕はそうは思わない。正直なんだと思う。本当に賞なんてどうでもいいと思っているなら捨てればいい。今井正監督はそうしているらしい。でも、僕はそこまでできなくて押し入れに大事にとってあるんだ"(笑)。食事のときに、仕事から解放された橋本さんからそんな話や伊丹万作のこと、『羅生門』や『七人の侍』

「砂の器」（74）でキネマ旬報脚本賞を受賞された時の橋本忍（中央）さんと山田洋次さん、そして読者選出監督賞の野村芳太郎さん。

の頃の黒澤明のことを聞いたりするのは本当に楽しみでしたね」

何度も何度も書き直し苦しみ抜いて完成するシナリオ

こうして、シナリオを共作する中で、山田監督は橋本忍さんからいろいろなものを学んでいった。

「一番は脚本の構成だと思います。橋本さんは、実際に書き出す前に、何週間もかけてコンストラクション、ハコ書きと呼ばれるものを作る。各シーンの大体の内容をそれぞれカードに書いて畳の上に並べ、捨てたり足したりする。〝この辺が弱いなあ。洋ちゃん、何か考えられないか？〟と、カードの中に少しずつ書き加えたり消したりしていく。やがて構成が決まると、頭のシーンからセリフとト書きを書き始めるんです。僕が書いたものを橋本さんに見せると、〝なるほどね。もう一度別なものを考えなさい〟とつき返される。あるいは、シーンまるまるを書いてみる。例えば、喫茶店で男女が話をしているシーンだったら、ハコ書きの予定ではいきなり二人が向かい合っ

ているところから始まるわけだけど、橋本さんは、二人が喫茶店に来るところから書いてみてくれと命ずるのです。男と女どっちが先に来たのだろうか。男だとして、待っている間に何をしていたのか。何をオーダーしたのか。やがて、彼女が来る。『ごめんね、遅れて』『いいんだよ』。座って、まずは世間話が始まる。『お父さん元気だった?』とか『この間はごちそう様』とか。そうして、映画に必要なセリフのやりとりにたどりつく。そこまでを全部書いて、今度は二人の話が終った後のシーンも書いてみる。男は彼女といっしょに喫茶店を出たのか。一人でそこに残ったのか。そうしたら、始めにもどって、今度は喫茶店に彼女が先に来て待っているパターンを書いてみる。次は二人一緒に喫茶店に入ってくるパターン。そういうふうにして、一つのシーンでもいくつものパターンを考えるわけですね。『砂の器』でいうと、加藤嘉の親子がいろんな場所を旅して歩くシークエンスは、この映画で一番大切なところだと言われ、僕は何十通り書いたかわからない。放浪の旅というのは様々な出来事が考えられるので、僕がいくつもエピソードを考えて、その中から橋本さんが選ぶという作業が、ひと月もふた月も続いていくわけです」

橋本さんから学んだのはシナリオ作成の技術だけではなかった。

「『ゼロの焦点』は、原作の筋書きに相当無理があり、脚本の構成が本当に難しくて、橋本さんがとうとう〝この話は無理だ〟と言って中断した日があった。僕はこれでやめてしまうのかなと思って翌日おそるおそる行くと、橋本さんは苦笑しながら、こんなことを語りました。〝シナリオを書くにはいい素材と悪い素材がある。いい素材を脚本にするのは楽だが、僕たちの仕事は常にいい素材とは限らないんだ。タチのよくない筋立ての素材を、あらゆる技術を使い、時として相手を欺してでも強引に切りぬけて完成させる。それがプロの仕事なんじゃないか〟。あの言葉はとてもよく覚えています。あの日以後、僕は『寅さん』48作を書き、他の作品も含めて、何回〝もうダメだ〟と思ったか分からない。時には精神状態がおかしくなって、夜中にタクシーを拾って宿から家に帰ることもあったけれど、そんなときはいつも橋本さんの言葉を思い出して〝これでダメにしたんじゃ俺はプロじゃない〟と切り抜けてきました」

1965年、山田監督は、松本清張原作、橋本忍脚本の「霧の旗」を自らのメガホンで手掛けることになる。これは山田監督の作品中、唯一自身で脚本を書いていない作品だ。

「『霧の旗』は、僕が橋本さんを知る少し前に、東宝からの要請で橋本さんが脚本にしていたのだけれど、企画が倒れてしまってそのままになっていたんです。だったら、僕に撮らせていただけますかと頼みました。すると橋本さんは〝もし君が松竹で撮るなら、主役は倍賞千恵子にやらせてほしい。彼女を、思い切って悪女役に使いたい〟と。松竹でもすんなりとはいかず、いろいろ苦労して実現した企画でしたね。橋本さんのホンということで、僕にとってはチャレンジでした。ただ、この作品のテーマである〝かったいの瘡うらみ〟という見当違いの逆恨みが、シナリオにする上でも映画にする上でも少し無理があった。主人公の目標にしっかり焦点があったホンでないと、映画は力をもたないと思うんだけれど、この映画では、わざとずらしたところに目標を置いている。そこに映画自体の弱さがあると、撮影中から感じていました。ただ、いろいろな意味で、それまで僕が撮ってきた映画とは違う種類の作品なので、張り合いはありました。

〝構成の鬼〟と言われた橋本さんは、入り組んだ物語の糸を解きほぐすように映画を観る喜びみたいなものを、大切にしている方です。仕事の合い間をねらって〝今こんなストーリーを考えていますが、聞いてくれますか?〟とドキドキしながら話すと、橋本さんはノートを取り出してメモを取る。ああなってこうなって、と懸命に僕が話すのを〝うん、うん〟と聞いてくれる。僕がようやく語り終えると橋本さんが〝それで、どうなるの?〟〝それで終りです〟〝なんだそこから面白くなるんじゃないか〟と言われて、すっかり自信がなくなったりしてね(笑)。『たそがれ清兵衛』も、もし橋本さんに構想を話したら、あまりにシンプル過ぎて一本の映画にならないと言われるだろうと思いながら脚本を書いていました。まあそれが僕と橋本

さんの違いなんでしょうね。
僕は喜劇が多いから、脚本も橋本さんが目指している方向とは違う方へ行ってしまい、『霧の旗』以来ご一緒することはないけれど、機会があればお会いして、いろいろお話が聞けるのを楽しみにしています」

「まあだだよ」の撮影現場を訪ねられた山田洋次さんと黒澤明監督。

映画人同士の交流が必要 黒澤さんの言葉

橋本忍にシナリオ作法を学んだ山田監督は、晩年の黒澤明監督からも、違った形の影響を受けていた。そのきっかけになったのは「映画人の交流」を大切にした黒澤監督の想いだった。

「あるパーティーで初めて黒澤さんにお逢いした時、黒澤さんは、近頃外国の映画人に〝かつて日本映画には豊かな時代があったのに、何故こんなに衰弱してしまったのか〟と問われることが多いけど、僕に言わせれば理由はたったひとつ。小津、溝口の時代は映画人同士の仲がよく、撮影所や企業の枠を越えて、しょっちゅう酒を飲んだりしていたけど、今ではあまりにも交流がなさ過ぎるからだとか力説された。僕も宮川一夫さんから、山中貞雄が小津安二郎をどれほど尊敬していて、溝口健二が小津や清水宏といかに親しかったかとかいう話を聞いていたんだけど、黒澤さんは〝日本の監督同士が集まって、どんな映画を撮りたいか、どんな映画がいま求められているか、映画についてワイワイと語り合える場が必要なんだよ。そのために、僕を利用しろよ、いつでも家を提供するよ〟と言われたものです。僕の家が黒澤さんのお宅から近かったこともあって、その頃から度々伺うようになり、黒澤さんも心から歓迎してくれて、よくご馳走にもなりました。

『八月の狂詩曲』や『まあだだよ』の撮影現場に見学に行くこともありました。黒澤さんの演出を見ていて、『俺だったらこうするな』と思うことを黒澤さんに話すと完全に無視されたりして（笑）。黒澤さんも僕の映画を観て『俺だったらあの場面はこうするよ』と実に面白いアイデアを語ってくれたこともありました。僕はその頃時代劇を撮りたいという思いがあったので、一度時間をもらって相談にのって貰うつもりだったのですが、病気になられて、結局できなかった。思い返すだに残念でなりません」

リスペクトの心を語る②

中井貴一

俳優

高倉健 俳優

人間として経験を積み重ねてこられた輝き

81年「連合艦隊」でデビューし、すでに20年以上のキャリアを持つ中井貴一さん。その中井さんがリスペクトする人物は、「昭和残侠伝」(65～72)「網走番外地」(65～72)「八甲田山」(77)「幸福の黄色いハンカチ」(77)「遙かなる山の呼び声」(80)「駅/STATION」(81)「ブラック・レイン」(89)「鉄道員」(99)と様々な傑作映画に主演してきた俳優・高倉健さん。高倉さんのどんな側面に敬意を抱いていらっしゃるのか。おふたりの出会い、そしてじっ懇の間柄となってからエピソードなどから語っていただいた。

取材・構成＝春岡勇二

撮影＝迫田真実

そこだけ太陽の光が集まっているように輝いていた

リスペクトする人は誰か、その質問に対する中井貴一の答えは明解だった。

「高倉健さんです。僕にとって、高倉さんは、リスペクトなんていう言葉の幅では収まらない大きな存在の人。特別な感慨があるんです」

その特別な感慨について尋ねていく前に、そもそもの出会いから訊いていこう。

「初めてお会いしたのは……、いやお会いしたんじゃなくて、お見かけしたのが最初なんです。確か、僕がデビュー作の『連合艦隊』（81）を東宝の撮影所で撮っていたときです。あるとき、午前中の撮影がひと段落し、昼休憩に入り、スタジオから食堂に向かい歩いていると、遠くに見える第一ステージの入口のところが、ボッウと光っているように感じたことがあったのです。まだ、日も高く電気がついているわけでもないのに……などと考えながら歩いてゆくと、近づけば近づくほど、その光は強くなる。なんじゃこりゃですよ。入口の付近には何人かの人たちが集まって話をしている様子でした。その前を通りかかったとき、一緒に歩いていた宣伝部の人が『貴一君、高倉さんがいらっしゃるよ』と僕にささやいたのです。もう反射的というか、なんというか、思いっきり振り向きましたよ。そして、その光源がなんであったのか、そのとき理解したのです。そこにたたずんでいた高倉さんは、優しい大きなオーラに包まれ、まるでそこだけ太陽の光が集まっているように輝いていました。まだ10代だった僕は、このときまで人間が光り輝くとか、オーラなどということを考えてみたこともなかったし、信じてもいなかったのです。しかし、それを眼前につきつけられ、しばし唖然と立ち止まってしまいました。しかし、この輝きはどこから出てくるものなのか、その後の僕の俳優生活のテーマにもなりましたよ。そのときから一度お会いしてお話をうかがってみたいと思っていたのですが、なかなか機会がなくて、初めて、お話させていただいたのは、それから数年後、名古屋ででした。高倉さんは球場

「駅／STATION」（81）の高倉健さん

で、『ミスター・ベースボール』(93)の撮影中。僕はキャンペーンで京都にいたんですが、一緒にいた東映の方たちに、『これから名古屋に表敬訪問に行くので、一緒に行こう』と誘っていただいた。本当はもっときちんとした形でお会いしたかったんですが、結局ご一緒して……。いやもう、ご挨拶するのが精いっぱいで、あとはずっと隅っこにいました。帰りにタクシーの手配ミスで僕だけ乗れず、次の車を待つことになってしまった。その間、高倉さんは僕と一緒にタクシーを待ってくださるんです。僕が恐縮して、『高倉さん、どうぞ戻ってください』って言っても、『いいえ、わざわざ来てもらったんだから』っておっしゃって。やがてタクシーが来て乗り込んだものの、高倉さんは立っておられるのに、僕は座っている。その居心地の悪さと言ったら（笑）。さらに車が出るとき、高倉さんが帽子をとって、頭をさげていらっしゃるのが見えたんですよ。もう僕は慌てちゃって、思わずタクシーの後部座席で高倉さんに向かって正座しちゃいました。これ、ホントに冗談ではなく」

「四十七人の刺客」（94・上）「ホタル」（01・下）で共演する高倉さんと中井さん

大スター・高倉健が、周囲の人にみせるあたたかい気遣いや、示された方が恐縮するほどの礼儀の正しさは、多くの芸能人が、敬意をこめてよく語る。

「仕事で共演させていただいたのは、94年の『四十七人の刺客』が初めてでした。最初にお見かけしたときからだと13年くらい経ってますね。でも、これがまた辛かったんです。というのも、このときの役が、高倉さんが主役の大石内蔵助で、僕が吉良側の色部又四郎、敵対する二人なんですね。毎日ご挨拶はさせていただくものの、そのままそばにいたらいろいろとお聞きしたくなり、そういう雰囲気は敵対する役に差し障りがあるだろうと、ご挨拶以外はできるだけ遠くにいて、目も合わさないようにしてたんです。あれこれお聞きしたいことが山ほどあるのに、それをグッとがまんして。でも、撮影が全部終わったとき、高倉さんから声をかけていただいたんです、『気持ちはわかっていたよ』と。嬉しかったですね。それからです。いろいろとご相談させていただくようになったのは」

人間として礼を尽くすということを、身をもって示してくださる

果たして、高倉健は、後輩の俳優にどのようなアドバイスを与えるのだろうか。

「高倉さんの生きてこられた道筋というか、その背中を見ているだけで勉強になるんです。いろいろ教えていただきますが、それが決して押し付けがましくない。どうしろとは決しておっしゃらない。ただ気がつくと、例えば人間として礼を尽くすというのはどういうことなのかってことを、身をもって示してくださるんです。また、こっちから、どうしたらいいでしょうかってご相談させていただくと、『こうすれば』ではなく、『僕ならこうするかな』という形で教えてくださるんです。その上で、なぜそうするかをきちんと説明してくださるんですね。ありがたいです。最終的な判断は僕自身に委ねられるのですが、高倉さんのお話をうかがっているうちに、もうどうすべきなのかが見えているわけですから。何度かお会いしてお

話をさせていただくうちに、初めて高倉さんをお見かけしたときのオーラの源は、俳優としての輝きとか、旬の輝きとか、そういう小さなものではなく、もっと大きな、人間として、いろいろ経験を積み重ねてこられた上での輝きであるのだと理解できるようになったのです。とにかく教えていただくことは、物理的なことだけではないんですよね」

　ここまで聞いてくると、中井貴一の中の高倉健への敬意は、俳優としての先輩、あるいは人生の先輩であることも超えたなにかがあるように思えてくる。それが初めに言っていた、特別な感慨なのだろう。

「はい、そうですね。実はすごく失礼なお話なんですが、僕の中で高倉さんの姿は、父の姿とかぶってるんですよ。いや実際は、高倉さんの方が、亡くなった父よりずっとお若いし、ホント失礼な話ではありますが。ご存じのように、僕は父（佐田啓二）を2歳の時に亡くしているので、父の匂いとか皮膚の感覚とか一切記憶にないんです。子供の頃から、壁にぶち当たったとき、心の中で姿のない父に相談することしか解決方法がなかった。母や姉はいますが、女性には相談しづらくてね。けれども高倉さんと出会い、生き方について、さまざまなお話をうかがっているうちに、『おれの親父もきっとこう言ってくれるのではないか』と思えることがたくさんあったんです。それまで頼る人もなく、なんでも自分ひとりで決めなきゃいけなかったから。僕にとって、本当に高倉さんと出会えたことは大きいんですよ」

　その高倉健との出会いが、中井貴一に中国の辺境の地で行われた中国・アメリカ合作の映画「ヘブン・アンド・アース」の過酷な撮影への参加を決意させ、フー・ピン監督、ヂャン・ウェン、チャオ・ウェイら中国の才能と四つに組む仕事を成し遂げさせた。

「ええ、そうですね。『ヘブン・アンド・アース』の仕事に、肚をくくって飛び込んでいけたのは、高倉さんのアドバイスのおかげです。この仕事は、皆からやめた方がいいのではないかと言われたんですよ。20代ならともかく、もう40の男がね……（笑）。中国の辺境の地に、日本人が一人で行くのが、どんなに大変かわかっているのかって。僕は基本的に負けず嫌いなんで、あまりそう言われると、よし、行ってやろうって気になるんです（笑）。それでもう70％ぐらいは決めていたのですが、残り30％がどうにも重い時期があって、それで高倉さんにご相談申し上げたんです。そしたら高倉さんは『なにを悩んでるんだい』とおっしゃられる。『確かに大変だろうな、一人で中国に行って撮影に参加するのは。想像できないような苦労もきっとあると思う。でも、君がすすんでそういう苦労をし、自分を逆境に追い込んだ仕事を成し遂げたとき、きっと君の中でなにかが変わるだろうし、君を見る世間の目も変わるだろう。僕は見てみたいなあ、そういう苦労を経験してきたあとの俳優・中井貴一を』と。その一言で、目の前をもやもやと被っていた霧が晴れたというか、なにをすべきか確信が持てたというか（笑）。高倉さんはこういうことを実に適切に、そしてさらりと示唆してくださる。こういうことからも人間的な深み、器の大きさを感

じます。それでいてフランクで、どこでもパッとご自分で車を運転していかれるような方でもある。いかに自然体で力を持続できるか、ということでしょうか」

自国の伝統や文化を知ることが、俳優という仕事への誇りにつながる

「ヘブン・アンド・アース」での貴重な体験の数々、また実際に見聞きすることで広がった見識は、今ではなにものにもかえがたい財産となった。

「それはもう、大変な財産ですよ。中国での生活はとてもきつかったけれど、中国という国の大きさがわかり、伝統の蓄積を目の当たりにし、中国という国を好きになりましたからね。また一人で行ったことが、日本をよく考える機会となったことも大きな収穫です。日本という国は、どこかで自分たちがアジアで一着だなんて思っている。その反面、国際社会において日本人は、自分の国に対し、もっとも誇りを持っていない国民だと思うのです。人間が生活していく上で〈利便〉を追求していくのは当然ではあるのですが、それだけに偏らず、中国に負けない日本の伝統文化、国民性を、もっともっと大切にすべきであるということも、外から見てすごくよくわかったのです。だから、もし僕が、若い俳優さんたちに伝えることがあるとすれば、もっと自分たちが住んでいる国の伝統や文化、あるいは精神風土の豊かさや強さ、また逆に脆さや弱さを勉強した方がいいということかなと思います。それがきっと、俳優という自分たちの仕事に誇りを持つことにつながっていくと思うし、これから資金的なものだけでなく、実質的な合作が多くなっていくなかで、自国のことを知らないでは済まされないですからね。それらすべて『ヘブン・アンド・アース』で、中国へ行ったから実感できるわけで、ひいては高倉さんのおかげだと思っています」

　実際、中国から帰国したあとに出演した「壬生義士伝」で、俳優としてさらに大きな成長を遂げたことを、日本アカデミー主演男優賞受賞という形で認められている。それを中井貴一はこう言う。

「賞を撮って実感したのは、賞というのはその映画に携わった全ての人に向けられたものであるということ。皆が喜んでくれることがこれほど嬉しかったことはないですね」

　まさに人間的な深みを獲得したことをも証明してくれた。そんな中井貴一に、これからのヴィジョンを訊く。

「自分に正直に生きたいと思います。僕は舞台もやらせていただきますが、舞台上での自分の立ち位置などを考えるとき、頭のなかで想像する画は、生の舞台じゃなくてスクリーンの中の舞台なんですよ。それも必ず、ドン引きの画。そういうことを考えると、自分はやっぱり映画畑から出てきた人間なんだなあと思いますね。だから、そういう出自を大切にするというか、映画を軸とした仕事を大事にしていきたい。もちろん、テレビや演劇も、芝居をする、役を作るという意味ではなんら変わりなく面白いですし、大切にしていこうと思っていますよ。

　それと、正統派でいくということ。いまファッションでも着崩しがはやっていたり、映画でもアウトローのほうがもてはやされますが、それも基準となる核があるからこそだと思うんです。見得を切れば注目を集めますが、ふつうに生活をしている人をきちんと演じることのほうが数段難しい。そういう意味では評価もされにくいのですが、あえて正統派の道を貫いてみようかなと思っています。

　あとは仕事にストイックであること。自分で選んだ職業ですから、一生懸命にやるのは当たりまえなんです。よく僕はまじめだと言われますが、僕ごときがまじめだなんて言われてるうちは、日本の芸能界もまだまだだと思いますね（笑）。ただ、映画は娯楽でもあるので、それだけでは引き出しが偏ってしまう。基本的には人生を楽しみたい、謳歌したいと思っています。僕の父は37歳で亡くなったんですが、今、40歳を越えた僕は親父の知らない世代を生きている。いつか親父に会ったら、『親父が知ることができなかった40代ってのはなかなかいいよ、面白いよ』ってぜひ言いたいんです。だから、これからも充実した日々を生きたい。俳優としてだけでなく、人間としてね。そうすれば、きっと親父も喜んでくれるんじゃないかと」

双葉十三郎×川本三郎

85th

『キネマ旬報』創刊85周年
記念対談

映画と評論
―映画について何を書き、何を伝えていくか―

『キネマ旬報』が85周年を迎えるにあたって、映画評論誌としての側面をもつ小誌では、映画評論について原点に立ち返って考える機会をもちたいと思う。
そこで、『キネマ旬報』を創刊当初より知る双葉十三郎氏、本誌連載も含め、数々の誌面で健筆を振るわれている川本三郎氏のお二人に、評論とは何かをテーマに対談していただいた。
これまで映画評論というものについてどのように考えていらしたか、そして、これからの評論にどのようなことを望まれるかなど、話は広きにわたった。

司会＝関口裕子
構成＝佐藤結

大正期に生まれた映画評論の初期

川本　まず、日本で最初の評論家というと、どなたあたりになるんでしょう。

双葉　「キネマ旬報」の初期の同人の方々。清水千代太さん、飯田心美さん、内田岐三雄さん、飯島正さん、岩崎昶さん、北川冬彦さんといった、大正に入ってから関東大震災をちょっと過ぎるまでの時期に出てこられた方々が、いわゆる評論家の第一陣じゃないですか。あと、もう一人、特別に森岩雄さんね。あの方は(「姿三四郎」や「七人の侍」などの)プロデューサーとしての方が大きいけれど、評論家としても非常にいいものを書いておられてね。それから少し後で岸松雄さん。

川本　そうした方々が第一世代で、双葉先生は、やや弟の世代という感じですか?

双葉　僕や滋野辰彦、藤本真澄たちは関東大震災の後で「キネマ旬報」がちゃんと雑誌らしい形になってから、寄稿欄というのに原稿を載せてもらっていた仲間です。その連中を飯田心美さんと岸松雄さんがまとめて、新人会っていうのを作ってくださった。だから僕たちは、「キネマ旬報」の第1回卒業生となるんですね。

川本　その頃の映画評論のスタイルや書き方には何かお手本になるというものはあったのでしょうか。あるいは、みなさんが独学、独流で始められていたんですか?

双葉　お手本なんて全然ないですよ。「ニューヨーク・タイムズ」の日曜版に書いてたボスリー・クローザーなんかを知ったのはずっと後ですからね。勝手なことばかり書いて、他に言いようがなかったから、それを評論とか批評とか言ったんですよ。「映画雑文」とも言えないですから(笑)。

川本　文芸評論や絵画の評論など、他のジャンルの評論を参考にすることはありましたか。

双葉　ありません。文芸評論とは世界が違っていたんです。世間的にも映画っていうのは認められてなかった。映画は観るもので、書くものじゃないという考えがどこかにあったんじゃないかな。

川本　大正時代は、谷崎潤一郎が自分で映画を作ったり、また昭和に入って、川端康成が脚本を書いたりして、文学者もずいぶん映画に関心を持ちましたね。

双葉　当時の文士のみなさんは映画が大好きだったんですけど、マスコミでは映画の評論というのは、文芸評論と同じ水準には置いてもらえなかった。映画評論が社会的に認められたのは、ずっと後になってからで。後になってからも、認められたかどうか知らないけど(笑)。

川本　先生の場合、その頃は誰に向かって評論を書いていらしたのですか?

双葉　自分のメモのために書いていたという方が正しいんじゃないでしょうか。

——当時、評論家の影響力は、どのくらいあったんですか。

双葉　そんなもの、何にもないです。

川本　でも、キネマ旬報のベスト・テンに入ると入らないでは全然違いましたよね。

双葉　キネマ旬報ベスト・テンは別ですよ。ただ、一般的な話として、批評家なんてものは、問題にならなかったということ。

川本　今だってそうですよ。テレビに出ているタレントさんは知りませんけれど、普通の評論家の名前なんて、一般の人は知らないですよね。

双葉　まことに残念ですけれども、そういうことになっちゃうんですね。ただ、映画関係の出版文化は、すごく進歩してるってわけでしょ。

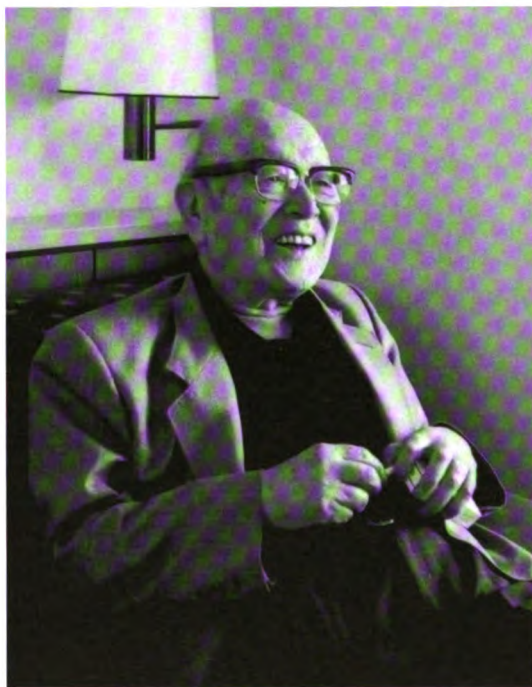
川本　映画の本と雑誌の数だけはものすごく増えました。

双葉　最近はグラフ的なものが多いですね。私が今の多くの映画の記事で非常に不満なのは、ともかく字数が与えられないために、中途半端なものしか書けないということです。それから、これは先生の悪影響だと思うんですが(笑)、採点表ばかりが増えてしまって、映画評というと、映画の採点をするものだというふうに思われてしまっているところに疑問があります。

双葉　そうですね。

川本　先生はもちろん、「ぼくの採点表」というお仕事の一方では非常に長い評論もいくつもお書きになっているわけです。その部分を忘れてしまって、ただ、これは星三つ、星二つと言いあってるのは、どうもよくないような気がするんです。普段、あんまり映画を見ない方には、手っ取り早い映画ガイドになるのかもしれないけれど、映画ファンには物足りない気がします。

双葉十三郎
ふたば・じゅうざぶろう

1910年東京生まれ。東京大学経済学部を卒業後、住友本社に入社するものの終戦と同時に退社、戦後復刊当時の『キネマ旬報』の編集にたずさわる。映画評論家としての活躍のかたわら、テレビ番組の構成、海外ミステリの翻訳なども手掛けている。52ページで紹介のほか『アメリカ映画史』『映画の学校』などの著書がある。

双葉　すぐ、（星を）つけてくれっていうからね。悪いこと考えちゃった（笑）。

評論家・双葉十三郎の多岐にわたる仕事ぶり

川本　先生は洋画からスタートされたんですか？

双葉　そんなことないです。

川本　邦画から？

双葉　伊藤大輔の「侍ニッポン」（31）なんか書いたり、ずいぶん、日本映画のことも書いている。外国映画は、ちょうどトーキーが始まる頃で、「モロッコ」（30）とか、ルーベン・マムーリアンが出てきて「喝采」（29）を作ったりしていて、そういうのに感激しまして、一所懸命書いていた。外国映画専門ということにされちゃっているんだけど、そうじゃないんですよ。

川本　『スクリーン』が創刊されたのは戦後からですか。

双葉　洋画ファン誌ははじめに『映画世界』という雑誌があって、それが『映画之友』になった。『スクリーン』がない頃ですから、僕もはじめは『映画之友』に書いていたわけです。戦後『スクリーン』ができたんで、呼ばれていって手伝うようになった。

川本　当時、『スクリーン』『映画之友』『キネマ旬報』と代表的な三誌共に原稿をお書きになっていたんですか。

双葉　いや、僕は同じ種類の雑誌には書かないようにしています。『映画之友』の後で『スクリーン』ができたから、『スクリーン』に移動した。その後『映画之友』の方には随筆みたいなものしか書かないようにしていました。

川本　そうだったんですか。以前、小林信彦さんとの対談で、一番多い時で1カ月に４００字詰めの原稿用紙２５０枚ぐらいお書きになったっておっしゃっていましたね。

双葉　そうかもしれません。

川本　すごい分量です。

双葉　『文藝春秋』関係の、『オール讀物』なんかの匿名のものもいろいろあったから。

川本　映画雑誌以外の雑誌ですね。

双葉　映画欄に匿名で書いていたこともあるし。地方の新聞もあったし。探偵小説を書いたりもしてた頃は、それくらいにはなったんでしょう。

川本　その頃は、映画の本数もすごく多いですよね。日本映画だけでも、5社あったわけですから、たいへんな数でした。それをすべて見るとなると、時間的にも大変だったのでは？

双葉　二本立てでしたから、映画は短かめでした。割と苦労はしなかったです。

川本　前に、同じようなことをお元気な頃の淀川長治先生に質問したら、「その頃は確かに本数は多かったけれども、ある流れというものがあった」っておっしゃってました。たとえば、ハリウッドならハリウッド、フランス映画ならフランス映画と。今みたいに、ある日突然イランの映画が来た

り、突然、アフガニスタンの映画が来たりということがなく、「流れで見てたからそんなに苦にはならなかった」とおっしゃっていました。

双葉　それはありますね。

テーマ同様に画を語る克明な批評の斬新さ

川本　先生は、ビデオもない時代にものすごく丁寧な映画批評をお書きになっています。場面ごとにカメラの動きやカット割にも言及されて。あれは、何回もご覧になってメモをとっていらしたんですか。

双葉　僕はたいてい一度しか見ない。

川本　えー！

双葉　メモですね。昔のシャシンはだいたい2時間止まりで短いですから、100円の薄いノート1冊が映画1本分にちょうどいいんです。それを持っていって。全部ってわけじゃないですよ。好きな監督とか、これは書いておいた方がいいなと思うようなシャシンは書いておくんです。

川本　当時の批評家の方々は、みなさんメモをとられてたんですか？

双葉　ないですね。あんまり。

川本　淀川さんはとられなかったとおっしゃっていました。

双葉　長さんはとってない。

川本　植草甚一先生は「メモをとっていた」とご著書にお書きになっています。やはりビデオのない時代ですものね。

双葉　彼はちら、ちらっとはとってましたね。だけど僕は全シーンを、シーンごとにとってあったから。

川本　それであんなに克明な批評ができたわけですか。

双葉　思い違いをしているところもあるかもしれないけど、割とちゃんと場面ごとに書けたわけですよ。映画を見ながら「こりゃすごい」って感心しながら書いていただけです。今はもうやっていませんよ。お断りしておきますけど（笑）。

川本　先生の批評というのは、内容やテーマもさることながら、画面といいますか、構図や絵柄といいますか、そういったものに、すごく注目されてます。それは、当時の批評の中でもかなり新鮮だったんじゃないでしょうか。だいたい、あの時代はテーマ批評が多かったですよね。

双葉　そうかもしれません。

川本　画面のおもしろさ、構図のおもしろさというのをよくお書きになっています。今でこそ、映像を細かく分析する批評はいくらでもありますけど、あの頃では珍しいですね。

双葉　そういう性質でやってきたから、CGになると嫌になってしまうんです。一つ一つの画(え)で見ていく見方だから「あれは映画じゃねえ」ってことになっちゃう。映画っていうのはストーリー以上に映像表現ですから。よくストーリーばかり気にしている人がいるけど、それなら原作を読みな

川本三郎
かわもと・さぶろう

1944年東京生まれ。東京大学法学部を卒業後、朝日新聞社「朝日ジャーナル」を経て、現在評論家として活躍。「荷風と東京」で読売文学賞、「林芙美子の昭和」で毎日出版文化賞を受賞。主な著書に「映画の昭和雑貨店」「君美わしく――戦後日本映画女優讃」、編著に「映画監督ベスト101」、翻訳に「叶えられた祈り」などがある。

取材協力＝ 渋谷 エクセルホテル東急

さいといいたくなる。

川本　先生が「シェーン」(53)のことをお書きになった評のことをよく覚えています。だいたい、他の評論では「流れ者の哀愁」とか、「少年の視点」とかそういうことばかり書いてあるんですけど、先生の評は「画面の中で、人物が向こうに向かって歩いていくシーンがとても多い」ということを指摘されているんですね。「そのことによって、画面に奥行きが出る」と、縦の構図について指摘された。その「シェーン」の批評を読んだ時に、「映画ってこういうふうに見るのか」とびっくりした覚えがあります。

それと、先生の批評が、もうひとつすばらしいと思うのは、芸術映画と娯楽映画を同じように熱意を込めて語られたことです。ヒッチコックの映画もウィリアム・ワイラーの映画も、それと、何といっても私の世代でうれしかったのは、ジョン・スタージェスを絶賛してくださったことなんです。「ゴーストタウンの決闘」(58)を、今、「傑作だ、傑作だ」と言えるのは、双葉先生があれだけ評価してくださったからです。たとえば岩崎昶先生や飯島正先生だったら、「ゴーストタウンの決闘」なんて取り上げなかったでしょう。

双葉　そりゃ、鼻もひっかけないよ。岩崎さんだったら(笑)。

川本　それを双葉先生は、きちんと取り上げてらっしゃって。

双葉　何でも好きなんだから。

――ダメな時は、はっきりダメとおっしゃって、その理由もおっしゃいます。

双葉　映画っていうのは、いいところと悪いところが必ずあるんだからしょうがないよね。最近は年でもって気が弱くなりまして、あまりけなさないようにしています(笑)。第一、けなしたら監督さんが困っちゃいますよね。商売に差し支える。

川本　双葉先生にけなされたということ自体がショックじゃないですか。

双葉　そんなことないですよ。景気のいい時代は、映画評論家が悪口いったくらいのことで監督の仕事がなくなるなんてことはなかったですけどね。

映画界における評論家の立ち位置

――双葉先生は評論家として、実作者である監督や俳優の方などと深く知り合うのを避けていらっしゃったと以前うかがいました。

双葉　僕は恥ずかしがりやだから、人とあまり付き合わない。昔は内在批評と外在批評なんて、言葉があってね。くわしく映画のことを勉強するなら、監督と知り合いになって、撮影所のこともよく知っていなければならない、というのが内在批評。一方で、そういう事情は全然知らないでスクリーンの上が勝負だ、というのが外在批評。僕は自分の性格に都合がいいように、「スクリーンの上が勝負だ」ってやってるんで。

川本　私もどちらかといえばそちらですね。ジャーナリストの人たちは、インタビューとか、ロケ

双葉十三郎の著書

「西洋シネマ大系 ぼくの採点表Ⅴ 1990年代」
(2001年・キネマ旬報社刊・4410円)

1990年1月号～1999年12月号まで「スクリーン」誌に連載された氏の星取り評を収録。それ以前の作品の評を収録したⅠ～Ⅳ、戦前の作品をまとめた別巻がトパーズプレスより刊行されている。

「日本映画ぼくの300本」
(2004年・文藝春秋刊・861円)

左の「ぼくの採点表」は外国映画にかぎった星取りであったが、優れた日本映画300本を選出して、新たに星取り表が編まれている。同じ新書シリーズで「外国映画ぼくの500本」もある。

「大いなる眠り」
(1959年・東京創元社刊・630円)

アメリカの人気ミステリ作家レイモンド・チャンドラー作品の訳書。双葉氏は「ミステリ・マガジン」などでも執筆をされるなど、海外ミステリの紹介にも力を入れていた。

のルポとかを書くので、内在的にならざるを得ないと思うんですけど、批評家の場合、そこまで必要かなという気はします。ただ、後になって、昔の映画を見た時に「このとき、この監督にこういうこと聞いとけばよかったな」と思うことはありますね。特にロケ地とか、撮影の場所なんかを知りたい時は、すごくあります。

双葉　それでもね、銀座なんか歩いていると、なんとなく両方で会釈しちゃって、前から会っているような顔して「お茶飲みましょうか」なんてことは、ずいぶんありましたよ。この前、亡くなった三橋達也さんだとか、フランキー堺さん、田村高廣さんなんかと。

――そういった意味も含めて、映画評論と映画の間の距離というのはどのくらいであるべきなんでしょう。

双葉　一歩。必ず一歩離れている。つまり、映画の中にのめり込むことは絶対に必要だけれども、反面は、一歩、隔たって見て、客観性を持つということです。

川本　一年に一回あるかないかのことなんですが、私が一番うれしいのは、私の評を読んだ映画監督に「自分の映画ってこういう映画だったのか。驚いた」と言われることです。私はその映画から触発された何かを語っているにすぎないにもかかわらず、映画監督も考えたことがなかったことが書けることがある。あくまでも基本は映画にあるんですけれども。

双葉　それはやっぱり、一歩離れたとこがあるから言えるんですよ。中へ入りこんでるんだけど、一歩離れて、客観的に見てないとね。一回、突っ放して見ることも必要なわけだから。

川本　その点、映画のロケ地に行ってインタビューしてしまうと批評を書く時に困ることがありますね。なまじ、情報がわかってしまうから。

双葉　一番困るね。一歩、離れられない。

川本　監督の製作意図はわかるけど、製作意図とできあがったものはまた全然違いますからね。

――映画評論とはどうあるべきなんでしょう。

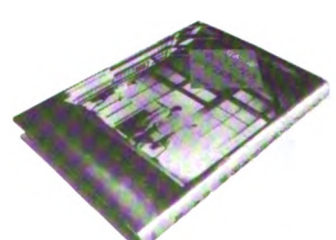
双葉　結局、僕が書いている批評っていうのは、映画を見た後でお茶を飲みながら気の合うやつと話をする、そのおしゃべりの延長のようなものです。

川本　でも、そのおしゃべりにも質がある。単に良し悪しで○×をつけるのではなくて、監督の方でも思ってもみなかったことを批評家が付け加えることによって「そういう世界もあったんだ」と広がってゆくべきですよね。

　私が、近年、先生の批評で一番びっくりしたのは、三谷幸喜の「みんなのいえ」(01)。あの作品の批評の中で、先生は幸田露伴の『五重塔』の〝のっそり十兵衛〟を持ち出されたんですよ。もう、まさに目から鱗が落ちました。ああいった、思いもかけないものを持ってくるレファレンスの力というのが批評にはすごく大事です。先生のように、たくさんの映画を見れば見るほど、ある新しい映画を見た時に、作品世界が一気に広がるような、過去の記憶を取り出すことができる。

川本三郎の著書

『美しい映画になら微笑むがよい』
(2004年・中央公論新社・2415円)
90年代後半以降、ミニシアターで公開された作品を中心にまとめられた評論集。チャン・イーモウ、イ・チャンドンらアジアの監督たち9人へのインタビューも採録。

『ロードショーが150円だった頃 思い出のアメリカ映画』
(2000年・晶文社・1995円)
昭和30年代、まさに映画が映画館で150円で見ることができた時代。少年期の氏が心躍らせたアメリカ映画全52作品が、当時のエピソードを交えながら解説されている。

『今ひとたびの戦後日本映画』
(1994年・岩波書店・2400円)
昭和20年代の映画黄金期に作られた数々の名作の中に映し出された、戦争未亡人や復員兵、戦災孤児などの戦争の影をすくい取って戦後日本映画史を論じた書。

双葉　こっちはなんとなく、雑談のつもりでやってるんだけど。

川本　評論家と名乗るからには、作品を語ることが第一であって、自分は一種、黒子に徹するというスタンスも大事にしたいです。ところが、最近は「私、これ嫌い、これ好き」と、映画をだしにして自分を語っているようなものが多いですね。映画評論というのは、まず、映画を語るべきであって、自分はあくまでも背後にいるべきだと思うんです。

双葉　まず、自分を捨てることです。自分を捨てて映画の中に入ること。

川本　高い所から映画を見下して、これは×、これは○なんて、20代のやつがやっているとぶん殴ってやりたくなる(笑)。20代の時なんて、映画をたくさん見ることが大事なんだから。

双葉　今の人たちは自分を出したいんだね。

川本　ただ、若い人にこういう意見を言うと、「編集者に要求される」って言うんですよね。「こんな評論ぽい文章はおもしろくないから、もっとあなたがどう思ったかを書きなさい」と、編集者から言われるという。その映画を気に入ったか気に入ってないかということは、当然、書かないといけないことなんだけれども、そのためには「僕はこの映画が好き。僕はこの映画が嫌い」という言葉ではない表現を使わなければいけない。

双葉　若い人には、作品の性質に従って作品の中へ入って見るということを勧めたいですね。はじめから自分の角度を決めちゃって見に行ったってしょうがない。

若い世代への助言　映画評論に望むもの

川本　話は変わりますが、ビデオの時代になってから、時系列がめちゃめちゃになってしまって、20代や30代の批評家が平気で山中貞雄を論じたり、戦前のプレストン・スタージェスを論じたりすることがあります。そういうのを読むと、もちろん、便利になるのはいいことなんだけど、やっぱり同時代の映画を語ってほしいなという気になります。

双葉　そうですね。回想で語るならいいけれど、若い評論家が古い映画を現時点で論じたら困る。

川本　今の映画を見るときの参考として見る分にはいいんですけれど。

双葉　映画はその時点で見なきゃ。舞台の場合は、再演すればそれがその場で現在見ているという感じになるけれど、映画の場合は古いままですからね。そこが難しいとこだなあ。

川本　小津安二郎の映画が評価されるっていうのは、どうも、ビデオ時代の影響じゃないかと思うんです。あれは、変わらない世界を描いているから家で繰り返し見るに堪える。でも、たとえば、60年代の「イージー・ライダー」(69)なんていう映画は、あの時点で見ているからいいんで、今、家でビデオ見ても、あんまり興奮しないですよね。

双葉　終わりにあっけなく殺されちゃうところが、一種のショックだったんだけれども、今見ると、なんとなくあっけなさすぎて、昔みたいな印象がない。ただ、それを今の時点で論じられちゃうと困る。評価が違ってくるわけだよ。

——では、これからの評論家にどのように活動していくことを望まれますか？

双葉　これだけ情報社会になってくると、批評というものが入り込む余地がなくなるような気がすると同時に、批評と宣伝がだぶるという可能性がすごく強くなってくると思うんですけどね。

川本　それは、ほんとうに嫌ですね。世の中の大半の人たちは、映画評論家というと、テレビに出て「この映画はおもしろいですよ」と言ってる人だと思ってます。それは、ほんとうに困ります。そうじゃないんだって、いくら説明してもわかってもらえない。

双葉　一番心配なのはそこです。

川本　先生は、ほとんど、新聞広告のコメントってお出しになってないですね。

双葉　ほとんど書いてない。気に入った時だけ。年に1度あるかないかです。

川本　その点もご立派だと思います。映画会社の人には申し訳ないと思うんですが、あれはなるべく避けたいですね。やっぱり、もろに宣伝と結びついてしまうというのは……。

双葉　これからますますひどくなるでしょう。ですから、「キネマ旬報」さんが根拠地になって、映画評論というものを独立させて、育てていっていただきたいですね。

風と共に去りぬ

双葉十三郎

この作品が世に出てからすでに十三年の歳月が流れている。それでもなお、通俗小説映画化の最高峰たる地位は揺がないようである。未曾有の規模を持つという点だけではなく、映画化の方法においても立派な範例たるを失わない。或いはひと、三時間四十八分も使えるならどんな丁寧にだって出来るよと負け惜しみを云うかも知れないが、いくら丁寧にやってもこの長尺を飽きずに見させることは容易な業ではない。私としては、あまり心をうたれる作品ではないが、ひととおり飽きずに見させるこれだけのものをつくりあげたということに感心しないではいられない。

内容については改めて触れるまでもないが、底を割ってみれば他の通俗映画と五十歩百歩の人物配置である。自我のつよい南部美人スカアレット・オハラと、クラアク・ゲイブルそのもののようなレット・バトラアの関係は、いわゆる喧嘩友達の方程式に則ったものである。この二人の主人公は共に性格がつよいので、この対象にアシュレイとメラニイの一組が配される。スカアレットはアシュレイに憧れ、その憧れを愛と信じて苦しみつづける。ところがそれは幻にすぎず、肉体的魅力を加えた本当の愛というものはレットにあったという。このあたりが通俗小説の通俗小説たる所以で、膨大な分量の物語のからくりとしては甘すぎるが、甘い読者大衆には丁度いい湯加減なのであろう。

しかしデヴィド・O・セルズニックは、湯加減を云々する隙を与えぬ大上段の構えで観者を圧倒する作戦に出た。物量にものを云わせた攻勢である。南北戦争の戦闘場面は軽く省略してあるが、その雰囲気で場面を包むことには成功し、戦闘の余波的な場面、すなわちアトランタ市の混乱、収容された無数の戦傷者がうごめいている光景、町の炎上、等を示してスケールの大きさを観客に印象ずけているのである。ヴィクタア・フレミングもこの点を充分に心得て、空間の広がりを強調してカメラを用い、ヴォリュウムを出すことに成功している。構成から見ても、堂々たる正攻法で、物語の順序を追って一段ずつがっちりとまとめ積重ね、小手先きの技巧を弄していない。下手な凝り方をすると、その部分はよくてもあとが利かず破綻を起す場合があるが、この作品ではその危険を避け、段落ごとに第一幕の終りといった感じの大向うに受けそうなドラマティクなポオズを用意し、極めて常識的な方法で次の段落へつないでいる。スカアレットが父親と共に我が家の土地を見渡すパアスペクティヴをきかせたショット(画面の手前に老樹あり。二人はその傍に立ち、はるか彼方、土地を隔て邸の建物が象徴的に見える——このショットはラストでスカアレットが一人でたたずむシインと対照をなす)などがその代表的な一例である。

休憩をはさむ前半と後半で描写の中心をかえていることも飽きさせぬ一因である。これは原作に従った結果でとくに脚色の功績ではないといえるかも知れないが、前半では人物の出没と事件の展開が興味の中心であったのに対し、後半ではスカアレットの性格悲劇の角度が狙われ、没落したわが家を再興せんとして女夜叉と化したスカアレットの言動が前篇とは別個な興味を煽り、それに加えて女性向きの子供を枷にした家庭悲劇の趣向を売る。甚だ抜目ない方法である。私たちの眼からみると、この辺いささかモタついてくるが、この部分で感激する種類のファンも多いにちがいない。どのみち通俗小説の域を脱せず、人間的な感動などを求めるのは無理だが、ミイハア族に近い広凡な層をひきつけ楽しませるには遺漏なき戦術の成功というべきであろう。

出演者はヴィヴィアン・リイが最高。クラアク・ゲイブルこれにつぎ、レズリイ・ハワアド、オリヴィア・デ・ハヴィランド、タマス・ミッチェル以下はいずれも好演だが一長一短。なお色彩は、今日に比べればずいぶん劣るが、いまさら何を云っても仕方ない。むしろ私は、当時としては非常にすぐれていると讃辞を呈したい。「白昼の決闘」と同じようなホリゾント効果が活用されているのも注目に値する。いずれにせよ、この作品は映画史上に不朽の一頁をとどめるものである。しかしながらその一頁を満すのは、通俗的にうまく映画化されているということではなく、三時間四十八分の色彩超大作をでっちあげ空前のヒットとなったという一事であろう。換言すれば「風と共に去りぬ」というとてつもない作品をつくってすごい商売にしたハリウッド映画事業の在り方である。すなわち、この一篇こそハリウッドにおける映画事業の在り方の一つの象徴であり、部分的にどこがうまいとかまずいとかいうことは日ならずして忘れさられてしまうだろう。

※「キネマ旬報」1952年10月下旬号より転載。一部漢字表記を簡略した。

『キネマ旬報』創刊85周年

読者寄稿

私とキネマ旬報

創刊85周年を記念し、読者の皆様に『私とキネマ旬報』というテーマで
エッセイを募集したところ、購読歴1年未満の方から50年以上の方、
また、年齢も10代の方から90代の方まで、
幅広い層にわたってたくさんのご応募をいただくことができました。
誠にありがとうございます。
ご自身の映画人生を小誌とリンクさせて綴っていただいた
読み応えのある原稿ばかり。
小誌をこんなに愛してくださっている皆様がいることを再確認し、
編集部一同、より一層努力していこうという思いを強くした次第です。
今回はその中から9人の方々の原稿を掲載いたします。

「キネ旬ロビイ」をきっかけにした交流

岩瀬美智子
愛知県西尾市／46歳／会社員

創刊八十五周年おめでとうございます。貴誌を愛読し始めて三十年近く、映画を観始めた中学生の頃は、映画ファンのバイブル的雑誌で憧れていた記憶がついこの前のような気がします。そう言えば、あんなに難しく感じていた貴誌が近年とても読み易く以前にも増して魅力的になったのは、もちろんスタッフの方々のたゆみない努力の賜物ではないかと感謝しています。

初めて『キネ旬ロビイ』に投稿した拙文が活字になった時の感激は、今でも鮮明に残っていて、小踊りした記憶があります。

当時は、番地まで掲載されたので、これをきっかけにお手紙を下さった方と文通が続いています。お顔も知らない方が私の文面から心配して下さったり、また、その逆もあったり、とても良い交流が続いています。

そして、なんと今年は『第七十七回キネマ旬報ベスト・テン第一位映画鑑賞会と表彰式』に初めて参加させていただき、私の映画ファン人生において記念すべき年でもあります。スタッフの方々がお若いのと精力的に働いていらっしゃるお姿を目のあたりにして頭の下がる思いでした。また、開場前に私の前に並んでいらした東京の方と話が弾み、待ち時間さえ楽しいひと時でした。御上りさ

んの日帰り強行軍でしたが、感動はなかなか治まらず、しばし夢見心地でした。

映画から、いったいどれ程多くのことを学ばせていただいたか。そして、どんな場所でも初めての方と気軽に話せるという万国共通語が映画であると近年、特に感じています。

何気なく書いた雑文を掲載していただけるのは下手な文章でもとても嬉しいです。憧れ続けた雑誌でしたから。もちろん今でも。

百周年のお祝いの頃には、私も定年を迎えていますので、映画三昧の日々を想像している今日この頃です。

今後、一層のご繁栄をお祈りしつつ、末永いお付き合いをお願い申し上げます。

毎月5日と20日は特別な日

田中　透
東京都調布市／20歳／大学生

キネ旬を初めて手にしたのは14歳の時。竹中直人監督の「東京日和」特集の号でした。表紙のセンスの良さになんとなく、といった感じだったと思います。駆け出しの映画ファン(?)だった私は、その後〝キネマ旬報ベスト・テン〟の存在を知り、「映画ファンたるもの、映画界の発展のために1票を投じるのが義務！」と、己が双肩に日本映画界の未来を背負ったがごとき気持ちで(笑)、98年度ベストテン読者投票に応募したのです。

翌99年2月のこと。私立高校入試の合格発表の日でした。発表前に買った決算号に目を通していると、〝読者が選んだベストテン〟に自分の名前を発見したのです(ほんとですよ、確かめてみてください☆)。高校合格なんかまあどうでも良くって、ただただ舞い上がりました。単にコメントが載っただけなのですが、駆け出し映画青年にとって、それは映画ファン・映画人としての確固たる証を得たような、そんな気がしたのです。

それ以来、キネ旬の購読はずっと続いています。毎月5日と20日は自分にとって特別な日です(笑)。今年で購読6年目。私の映画ファンとしての日々は常にキネ旬と共にあります。何十冊ものバックナンバーの重みで本棚の天板はへこんでいたりもしますが、それらを眺めていると、映画とは関係のない出来事まで思い出されるから不思議です。

キネマ旬報を読み続けたことで自分の映画生活はとっても豊かなものになってきたのだと思います。山田洋次、阪本順治、金子修介、黒沢清、そして相米慎二……監督や俳優・興行・評論に対する知識も豊富になったし、映画を見る目も変わったかもしれません。昔に比べるとやや誌面の密度が薄くなった感も否めませんが、それでもキネ旬ほど映画をあらゆる角度から見つめ、洋高邦低状況の中、ともすれば埋もれてしまいがちな日本映画にも光を当ててくれる雑誌はほかにないと思います。85周年おめでとう！　日本映画の未来はキネ旬にかかってます！

戦災で灰となったが

井上光旺
神奈川県川崎市

大正末期から昭和にかけて、書店では日本映画の各社別専門誌が十指にあまる賑わいであった。私共活動仲間はこれを肴に談笑している処へ、先輩の大学生に〝君たち、こういうものをみたまえ〟と出されたのは初めて見る『キネマ旬報』だった。確か裏表紙が「幌馬車」(23)であったと記憶している。

私の住んでいたのは阪神電車の香櫨園で、大阪と神戸の丁度真中にあたる。六甲を源とする夙川が海に注ぐ、大阪の浜寺と西の二大海水浴場として知られ、両側は松林の土堤で海岸に続く。その東側の土堤下に家並があり、そのうちの一軒の二階家が、上も下も、戸を開け放たれ、多勢の男たちが騒いでいた。

近くにいた私が表札を見ると、〝キネマ旬報社〟とあった。

関東大震災のため、洋画の日本支社が神戸に移転していた。キネマ旬報社もそのひとつであった。

昭和になって、月三回発行の『キネマ旬報』の購読を始めた。

時を経て太平洋戦争となり、私も遠くソロモン群島派兵の一員となり、終戦までの三年間連日の銃爆撃にさらされ、辛うじて命永らえ、昭和二一年五月に帰国することができた。

戦災にあった我が家の焼跡を見て、『キネマ旬報』を始めとする数多の映画資料は勿論、あとかたもない灰となったのだが、私は今でも『キネマ旬報』を始めとするこれらが身代わりになってくれたのだと思っている。

叔父の秘密の宝物

田中美紗子
神奈川県伊勢原市／19歳／学生

初めてキネマ旬報に出会ったのは、母の実家のある部屋でのことでした。その部屋の主は叔父で、彼は幼い私にとって脅威でした。顔をあわせる度にいじめるのです。あるお正月、叔父は部屋に閉じこもっていました。おそるおそる戸を開けると、明かりもつけず、整然と積み上げられたおびただしい量の雑誌の前に叔父は座っていました。私に気づくと「でていけ!」と怒りました。逃げながら、あの本の正体が気になりましたが、どうせたいした本ではないだろうと思っていました。

私が初めて観た映画は「ゴジラVSデストロイア」(95)で、ゴジラの一時的な最期を見届けてから、映画を観るようになりました。スクリーンの輝かしい世界は私をとりこにしました。ある日叔父が先輩映画ファンであると知りました。怖い叔父にそんなすてきな趣味があるなんて思いもよりませんでした。私にとって映画をいちばんよく知っているのは叔父ですから、叔父に見習おうと決めました。彼の実家で、謎の雑誌の正体を確かめました。約三十年分のキネ旬でした。番号順にきれいにそろえてある、彼の秘密の宝物でした。それからキネ旬の購読を始めました。キネ旬を読み始めてから叔父は優しくなりました。今年の二月、「キネ旬ベストテン表彰式」に叔父と一緒に行きました。キネ旬を三十年読み続けている叔父にとっても、私にとっても初めての体験でした。

私はキネ旬を通じて、映画に関わる様々な人々を知り、将来映画界で働きたいと願うようになりました。九月からイギリスの大学に進学します。以前は映画学部一筋でしたが今はこだわっていません。様々な才能を映画界が欲している今、どれだけ自己の資質を磨いてそれを映画製作に生かせるかが重要だと感じます。イギリスで映画とキネ旬があたえてくれた夢を支えにがんばりたいです。

一枚のハガキが、距離をぐっと縮めてくれた

間瀬知洋
愛知県名古屋市／50歳／会社員

七年前、出張先で血便が出た。はやりの大腸菌かと病院で検査を受けたところ、食中毒どころではない、なんと結腸に進行癌が見つかったのである。上映中にプリントの切れた映画のような、時間の流れが止まってしまった感覚。それから二ヶ月間の入院と手術、映画館は遠いところへ行ってしまった。髭の伸びた私に、それまで亭主の映画館通いに苦言を呈していた女房が、黙って真新しいキネ旬を届けてくれた。ベッドで手にしたピカピカのキネ旬には、今まで覚えたことのないずっしりした重みがあった。

高校時代に映画好きの友人の薦めで初めて手にして以来、キネ旬との付き合いも三十数年になるが、振り返ればあの日から、私のキネ旬への関わり方が大きく変わったように思える。ページを繰るたびに、読者をやめたりしたら許さないぞ、とでも語りかけてくるようなたたずまいが、確かにあの日のキネ旬にはあった。巻末の綴じ込みハガキが目に留まった。就職してからというもの、ほとんど触れたことのない読者投稿用のハガキである。ベッドに備え付けのテーブルで思いを綴り、何度も読み返してから投函した。

ひと月後、キネ旬ロビイに自分の名を見つけた。不思議なことだが、自分の文章に自分が励まされているようで、久し振りに笑いがこみあげた。そんな私につられて、やつれ気味だった女房も笑ったように思えて、キネマ旬報という一介の雑誌が、とてつもなく親しみのある存在に感じられた。一枚のハガキが、私とキネ旬との距離をぐっと縮めてくれたのである。

そして、退院後初のキネ旬を書店で手にしたとき、再びあのずっしり感が訪れた。きっと、綴じ込みハガキの重さに違いなかった。もっと積極的に"読者"になろう——自分で自分に約束し、以来七年間、つたない文面でハガキを出し続けている。中年オヤジに書生っぽい気概は似合わないかもしれないが、キネ旬の懐の深さは、充分にそんな私を受け止めてくれているようである。

大人の世界への入り口だった

唐澤達志
長野県長野市／会社員

もともとアニメーションが好きで、それが高じて映画好きになったとこ

ろがありますが、私の生まれたところは、映画館が一軒（スクリーンは2つ）しかなく、数カ月遅れて映画が公開されることが度々ありました。そのころ、私にとって外国映画の1シーンが一杯掲載された映画雑誌は、満たされない欲求を満たしてくれる一手段であり、写真やあらすじを通して想像力を膨らませたものです。

それが、大学生になって、映画館がたくさんある地域で暮らすようになって、『キネマ旬報』を本屋でふと手に取ったことから、私の映画に対する考え方が変わったように思います。それまで購入していた映画雑誌とは異なり、低調な日本映画も積極的に取り上げ、活字ばかりの批評文のページが大半を占め、最初は内容のよく分からない記事も多々ありました。それでも、現在までの16年間一時も欠かさず購読してきたのは、「国も時代も問わず、本当にいい映画を多くの人に伝えたい」という意気込みをいつも『キネ旬』に感じ取ることができたからです。予想もしなかった切り口から書かれた批評文に出くわしたときは、「さすが専門誌」と感心しました。その中で私の映画に対する意識も形成されていったのです。

今考えると、『キネ旬』を手に取った時期が大人の世界への入り口だったのかなと思います。数年前、友人の外国人が「『キネマ旬報』はデータが詳しくていい雑誌だね」とほめてくれました。その時は、日本人として本当にうれしかった。『キネ旬』は私の映画のバイブルです。

心の支えと癒し

木村弘　東京都小平市／75歳

日本が敗戦色の濃い一九四五年（昭和二十年）、当時私は旧制中学の十六歳。東京浅草の伯父宅に寄宿していた。近所にあった貸本屋の店先には、大正から昭和初期の『キネマ旬報』が積み上げられ、私は毎日二〜三冊借りに通っていた。

内容は敵国といわれていたアメリカの映画の華やかさが紹介され、当時の日本の暗い現実との対比が極端なのにがっかりした。

三月九日未明、伯父宅もこの貸本屋も激しい空襲の戦火に見舞われ、一夜のうちに全て焼失した。敗戦後しばらくはわが生活も苦しく、愛称『キネ旬』との縁もぷっつり切れてしまった。

昭和二十四年、私はある官庁に就職した。上司に新宿ムーランルージュ・大映映画の俳優出身という履歴の人がいて、ドーラン焼けの真黒な顔と長身の苦味走った好い男であった。彼は読書家でもあり、昼休みに読んでいる本をひょっと見ると、モノクロの金髪と思われる女優の写真と『キネマ旬報』の文字が目に飛び込んできた。数年振りに出会った懐しの『キネ旬』であった。紙質は悪く頁数も少かったが、最新邦洋画の紹介、批評等、充実した記事ばかりであった。それからというものは、毎回『キネ旬』は上司から私の手許に回ってきた。映画の新知識がまさに〝干天の慈雨〟となり、心の支えとなった。

以後、現在に至るまで毎回『キネマ旬報』を愛読している。再び私の手許にもどってきた『キネ旬』は、戦後の昭和二十年代からの特集号は手許に置き、後は映画好きの中学三年の孫、自称映画批評家の近所の大学生、地域の小劇団の研究生等に回して喜ばれている。

私はいま、「慢性骨髄性白血病」という病気で、これからの人生は先が見えている。

私を現在まで心の支えと癒してくれた『キネマ旬報』に〝本当にありがとう〟とお礼を言いたい。

彼があんまり嬉しそうに話すので

川船ますみ
東京都杉並区／39歳／主婦

私が『キネ旬』読者デビューしたのは、古くからの熱心な愛読者の皆様からすると、まだまだひよっこの、1999年2月下旬号からです。きっかけは、その前年の暮れに再会してつきあうことになった、大学時代の先輩、かつ元バンドのリーダーでもあった彼が、1998年度の『読者選出外国映画ベスト10』のページに掲載されたことです。ちなみに、彼はその年の読者選出外国映画第2位の「タイタニック」(97)の選出評が採用されました。彼があんまり嬉しそうに、そしてちょっと自慢気に話すので、すぐに書店に駆け込み、それまで敷居が高くて(?)手が出せなかった『キネマ旬報』の"ベスト・テン号"(2月下旬決算特別号)という分厚い雑誌を手に取り、レジへ……。

それから一年後、元々映画が好きで、休みの日には一人でも映画館に通っていた私は、彼と二人で『キネ旬』のオススメ映画を観まくり、その暮れの『読者選出映画ベスト10』に応募するまでになっていました。そして、初めて自分の選評が載った時は、すごく嬉しくて、両親や友達にも思わず自慢しちゃいました！しかも、いち早く書店で購入した彼が、「ますみの読者評が載ってるよ！」と携帯で報せてくれたので、喜びはひとしおでした。一年前の彼の気持ちが、初めて実感出来ました。だから、この年初めて私の読者評が載った「ライフ・イズ・ビューティフル」(98)という作品は、今でも私の宝物です。

あれから五年……。私と彼は、今年もまたステキな作品と出逢う為に、そして、これが"本年度ベストワン"と自信を持って推奨出来る各々の一本を決める為に、『キネ旬』片手に、映画館通いの日々です。ちなみに、彼は今、私の映画の師匠兼旦那様です。

『キネ旬』は文化の教科書

豊原清明
兵庫県神戸市／27歳

僕にとって『キネマ旬報』とは、文化における、教科書だった。13歳の頃、映画に病みつきになって、単純な夢、映画監督になりたい！と思うに至ったのも、『キネマ旬報』に出会ってからだ。

同時にその頃、詩を書き始めて、どちらかと言えば文学少年。文学の方が映画より向いている少年。その僕の揺れる心を安定させたのはその時、読んでいた『キネマ旬報』の80年代日本映画ベスト・テンに、読者も順位を決めて参加できるという、お得な制度にこっくりと生唾ものだった。

その後の僕の文章は残念ながら『キネ旬ロビイ』にはなかなか掲載されなかったが、故・田山力哉氏の連載『シネマ・ア・ラ・モード』が、大、大、大、大ファンで、孤高の映画評論家、本当に憧れていて、落選してもそれから毎号、買っている。その時に「映画について書く」という職業があるんだァと、発見したものである。

96年、第1回中原中也賞を受賞した僕は一寸忙しくなったが、とにかく『キネ旬ロビイ』に載りたいと毎号出した。念願の『キネ旬ロビイ』初掲載は、悲しきかな、田山力哉氏の追悼文だった。97年5月上旬号No.1221。まさか、追悼文だとは思わなかった。ショックだったが、その後数回、載った。その後は単純に読むことで満足しているが、胸にあるのは一つ、「映画のことを書きたい」。青春の浅き午睡。生きている。

僕にとっての『キネ旬』とは、参加型。初夏と年末に出かける『キネマ旬報関西読者の会』のベスト・テン。

毎回出席して、この頃、少なくなってきているのは寂しいが、故人の人の魂は『キネ旬』に生きていると思う。

キネマ旬報
創刊85周年

特集

キネマ旬報読者賞

キネマ旬報読者賞＝1973年に設立。その年で一番面白かった連載が読者による投票形式で選ばれる賞

その年で一番読者に支持された連載。31年の歴史をふりかえる。

キネマ旬報読者賞全解説

文＝鬼塚大輔

おにづか・だいすけ／1963年生まれ。94年本誌「読者の映画評」欄に投稿を始め、翌年「劇場公開映画批評」(「ラスト・アウトロー」）でライター・デビュー。主要編著書に「活劇帝王70s／マグナムアクション映画列伝」、「現代映画ナビゲーター」（新田隆男氏と共編著）、訳書にクリストファー・フレイリング「セルジオ・レオーネ／西部劇神話を撃ったイタリアの悪童」（以上すべてフィルムアート社）他。

73年・第1回、79年・第7回、85年・第13回、94年・第22回受賞

お楽しみはこれからだ

和田誠

◎73年10月上旬号〜76年3月下旬号／79年4月上旬号〜80年6月下旬号／85年4月上旬号〜86年7月上旬号／93年3月上旬号〜96年11月下旬号

■言わずと知れた、という言葉をつけたくなる名連載である。エンターテイナー、アル・ジョルスンの伝記映画「ジョルスン物語」からのセリフ（ジョルスン本人の決めゼリフでもあった）をタイトルとした和田誠氏の『お楽しみはこれからだ』は、映画の名セリフの巧みさに感心したり、可笑しさににやりとしたりする上に、和田氏の洒脱な文章と見事なイラストを毎号楽しむことができるものだったのだ。連載開始当時はまだまだ家庭用ＶＴＲなどなかった頃。映画ファンになったばかりの少年（そのうちの一人がぼくです）にとって、この連載は過去の名作への扉であり、『お楽しみはこれからだ』はこのコラムの次回を待ちわびる気持ちそのものであった。

◎単行本／文藝春秋（全7巻）

74年・第2回受賞

日本映画縦断

竹中労

◎73年7月上旬号〜76年11月上旬号

■「日本映画を、〝映画の原点〟から捉え直さねばならないと、私は思う。亜洲の長い旅から戻って、この国の性急な時の流れに戸惑いながら、……とりわけてそう思う」。伝説のジャーナリスト、竹中労氏は『日本映画縦断』を、こんな言葉からはじめている。ジャーナリストが扱うテーマとしては一段（あるいはもっと）低いものと考えられていた〝芸能〟にこだわり続けた竹中氏は、日本におけるカルチュラル・スタディーズの先駆者であったのだと思う。この連載で竹中氏が対話し、見つめていった映画人は南部僑一郎氏、伊藤大輔氏、嵐寛寿郎氏他。「いわゆる映画史の叙述の定石に、私はしたがわない」と宣言し、縦横無尽に日本映画史を縦断していこうとした竹中氏の文章はひたすら熱い。

◎単行本／白川書院（全3巻）

75年・第3回、76年・第4回受賞

シネマ・プラクティス

落合恵子、矢崎泰久、山藤章二

◎74年1月下旬号〜76年12月下旬号（隔号）

■落合恵子女史と矢崎泰久氏が同じ一本の映画を肴に語り合い、交代でエッセイを執筆し、そこに山藤章二画伯の絶妙なイラストが加わる（山藤画伯が語り合いの中に参加することもあり）。一本の作品から連想される様々なことへと語らいは拡がり、飛翔する（ブルース・リーの「燃えよドラゴン」では〝腹上死〟にコダワリ続ける）。「映画の楽しみ方はさまざまである。それでいいというのが、このページにおけるわれわれの主張でもある」というマニフェスト通りの連載で、こんな形で映画を楽しむのもアリだよな、と思わせてくれる、めいっぱい映画を楽しむためのまさに〝プラクティス（練習）〟

であった。

77年・第5回、80年・第8回受賞

小林信彦のコラム

小林信彦

◎77年1月上旬号〜81年3月上旬号／83年4月上旬号〜88年8月下旬号

■双葉十三郎氏の「ぼくの採点表」（スクリーン誌）と小林信彦氏によるコラムのどちらにも全く影響を受けなかった映画ライターは少なくともぼくの周囲にはいない。もちろん、ぼく自身、単行本の形にまとめられた両方を繰り返し繰り返し読み返し続けている。小林氏の文章はすっきりとしていて実に読みやすいのだが、実はこの〝すっきり〟がくせものなのである。氏の〝こだわり〟が文章に強靭な腰を与えている。これぞハードボイルド。小林氏の〝こだわり〟に反応できる自分で居続けたいと思う。小林氏が〈小さなライフワーク〉（ぼくはちっとも小さいとは思わないのだが）と呼ぶところのエンターテインメント定点観測は、媒体（中日新聞）を変えて現在も続いている。

◎単行本／「コラムは踊る」「コラムは笑う」筑摩書房（文庫あり）、以下中日新聞連載分「コラムはご用心」（筑摩書房、以下新潮社）「コラムの冒険」「コラムは誘う」「コラムの逆襲」

78年・第6回受賞

ニッポン個性派時代

秋本鉄次、内海陽子、尾形敏朗、野村正昭、藤田真男

◎77年10月上旬号〜81年11月下旬号

■読者評の出身の秋本鉄次、内海陽子、尾形敏朗、野村正昭、藤田真男の各氏が、日本の映画やテレビで活躍していた（いる）脇役、あるいは個性派の俳優たちに迫っていく連載インタビュー。第1回高橋明氏、第2回下條アトム氏、第3回佐藤蛾次郎氏、第4回常田富士男氏、第5回池波志乃氏……。名前を書き写しているだけで嬉しくなってくるような面々が毎回登場。個性派にぶつかっていく格インタビュアーの個性や考え方もそれぞれのインタビューに反映されていて、そのことが陽の当たることの少ない名脇役たちの本音や人間性を引き出すことに大いに貢献していたように思う。

◎単行本／小社（改題「シネマ個性派ランド」）

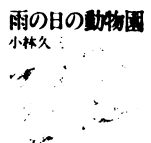
81年・第9回、83年・第11回受賞

雨の日の動物園

小林久三

◎81年7月上旬号〜84年3月下旬号

■昭和四十九年「暗黒告知」で江戸川乱歩賞を受賞することになる推理作家小林久三氏は当初映画監督を目指しており、松竹ヌーベル・バーグの末期に同社に〝和製ヒッチコック〟を夢見て助監督として入社し、後に脚本家、製作補として活躍した。この連載は小林氏の松竹入社から始まる一種の青春記となっている。そしてこの連載は、心に迫る多くの青春記がそうであるように挫折の物語でもある。作家として大成した小林氏の綴る映画製作の裏側、次々と登場する映画人の横顔はすこぶる興味深く、資料としても一級品だが、それ以上に読ませるのは小林青年が激変する日本映画界の中で夢を見、夢破れ、それでも夢を見続けようと奮闘する姿である。

◎単行本／小社

82年・第10回、84年・第12回受賞

淀川長治自伝

淀川長治

◎82年4月上旬号〜85年1月上旬号

■淀川長治氏は、映画の語り部であると同時に、ご自分自身が一個の見事な芸術作品であったと思う。スターたちのことを語る時、語られる人物よりも淀川氏の方が輝きを放っていたし、氏の語りの中で再現される映画は、しばしば実物よりもはるかに面白かった。そんな淀川氏の自伝が面白くないわけがない。二歳の時（1911年！）に、白い障子越しに映る風景を〝発見〟した氏は〈光〉〈影〉〈動く〉の三要素に夢中になり、その後両親に連れて行かれた活動写真との出会いによって氏の映画人生は始まっていく。淀川長治氏の語り口の魅力はそのまま文章にも反映され読む者の眼前には〝画〟が広がる。淀川長治氏の人生と同じように、文章もまた映画なのだった。

◎単行本／中央公論社（文庫あり）

86年・第14回受賞

観たり撮ったり映したり

手塚治虫

◎82年3月下旬号〜87年8月下旬号（隔号）

■今や日本が世界に誇る文化としての地位を確立したMANGAそしてANIMEだが、今日の隆盛の礎を築いた巨人が手塚治虫氏であることに異論を唱える人はいないだろう。殺人的なスケジュールで知られた手塚氏も、「キネマ旬報」に連載を持っておられた。「観たり撮ったり映したり」というタイトルにふさわしく、コラムの話題はアニメに限らず、氏の抱腹絶倒の体験、映画界への鋭い洞察他多岐に及ぶ。手塚氏のマンガと同様に親しみやすくスピーディな文体は、読者の関心をがっちりと捉えた。毎回添えられた氏によるイラストも今となっては貴重な物だ。マンガ（映画）の巨匠の創作エネ

ルギーの源がそこかしこにうかがえるのが大きな魅力であった。

◎単行本／小社

87年・第15回受賞

降っても、晴れても

川本三郎

◎86年9月上旬号～88年8月上旬号

■自分の知っていることを、知らない人に教えるのは難しい。ぼくのように教員という「教えてやる」という態度が許される仕事をしていてもそうである。ましてや、嫌みなくさりげなく読者に自らの膨大な知識の一端を披露するのは至難の業である。その至難の業を易々とやってのけているように見えるのが川本三郎氏の連載だ。現在も「映画を見ればわかること」として続いている川本氏は「降っても、晴れても」の頃から、ぼくたちに静かな名調子で映画に関するいろいろなことを教えてくれている。アメリカやフランスそして日本の文化や文学に関する該博な知識を支える氏の"見識"が読む者の頭と心にすんなりと染みいってくるのである。

◎単行本／小社（「ダスティン・ホフマンは「タンタン」を読んでいた」に収録）

88年・第16回受賞

シネマ・ストリート

安西水丸

◎86年8月下旬号～89年8月下旬号／「PART2」91年3月上旬号～93年2月上旬号

■村上春樹氏との名コンビぶりで知られるイラストレイター、安西水丸氏の名物連載。大人気だった先達和田誠氏の連載を引き継ぐプレッシャー第一回の冒頭で吐露しておられるが、実際にはのびのびと、悠々とした筆致で縦横に映画を語り、そして描く。「……と言えば」とか「話はちょっとそれるけど」というフレーズが頻発し、一見すると脈絡のない話が続いていく。だが、その自在な語り口はシンプルなものであるが故に魅力的であり、力強いものであることに読者は気づかされることになる。氏の文章を彩ったイラストの数々がそうであったようにだ。あまりにも淡々と語っているので見落としがちだが、安西氏の映画に関する見識は広く深い。

◎単行本／小社

89年・第17回受賞

試写室のメロディー

連城三紀彦

◎86年3月上旬号～90年1月上旬号（隔号）

■直木賞を受賞した『恋文』をはじめとして映画化作品も多い小説家、連城三紀彦氏による連載エッセイ。早稲田大学在学中にシナリオ研究のためパリに留学したことのある連城氏だけに映画に関する造詣も深い。透徹した眼差しで映画を語り、映画に関連した自らの思い出を語っていく。美しく繊細な文章なので、厳しい視点もあるのだが、時には大胆なユーモアが顔を覗かせる。子供の頃純粋な愛情を捧げた怪獣はモスラだったと書いた後の「今でも、日本の列車はデザインが悪いと言いながら、新幹線だけを大目に見ているのは、あの形がモスラに似ているからとしか思えない」というくだりは数年ぶりに読み返して爆笑してしまった。

90年・第18回、95年・第23回受賞

シネマ・ア・ラ・モード

田山力哉

◎89年2月上旬号～97年4月上旬号

■毎回、ひりひりとするような緊張感を感じながら読んでいたことを思い出す。一回目から「イージーに仲間ボメするようなアホ批評家（という名称すら当てはまらない）が余りにも多いのに、あきれるほかはないからだ。「キネ旬」に登場する批評家にもそういう輩は多い。おい、ソッポを向くな。お前さんのことだよ」などとオソロシイことが書かれているのである。あらゆる権威に背を向け、多くの場合実名で納得のいかぬ輩を攻撃していく。真っ当に、愚直に、真剣に映画というメディアと向かいあい続けた田山氏はもういない。だが「お前さんのことだよ」という言葉は時を超えて、読者から書き手へと変わったぼく自身の喉元に突きつけられたままなのだ。

◎単行本／講談社（改題「辛口シネマ批評／これだけは言う」93年6月上旬号分まで収録）、小社（改題「さよなら映画、また近いうちに」97年4月上旬号分まで収録）

91年・第19回受賞

巨人と少年　黒澤明の女性論

尾形敏朗

◎91年1月上旬号～92年2月上旬号

■世界的な名声を博しながらも「女を描くことができない」と言われ続けてきた黒澤明監督。尾形敏朗氏はこのテーゼに疑問を投げかけ、〈少女〉と〈女〉というシンプルな女性観が黒澤作品の根底にあり作品世界を支えていることを実証的に解き明かしていく。尾形氏の論考から浮かび上がってくるのは、〈男性主義〉、〈権威主義〉という言葉と共に語られることの多い〈天皇〉黒澤明の〈巨人〉としての鎧の中に隠れた繊細で純粋な〈少年〉の姿なのである。尾形氏は作品の作られた時代背景を丹念に浮かび上がらせた上で、黒澤作品に登場する女性たちを分析していく。「僕は黒澤明の笑顔が好

きだ」という氏ならではの愛情に満ちあふれた連載であった。

◎単行本／文藝春秋

92年・第20回受賞

竹中直人の少々おむづかりのご様子

竹中直人

◎91年10月下旬号〜93年1月下旬号（隔号）

■テレビ画面に登場する竹中直人氏は、なんだかめちゃくちゃにシャイな人間がメチャクチャにシャイであることを隠すためにメチャクチャをやっているという感じがする。萩本欽一氏の番組に出た竹中氏がそのあたりを指摘されてしどろもどろになってしまった瞬間が、やたらとスリリングだったことを覚えている。泳ぐことをやめると死んでしまう鮫のごとく、竹中氏の文章も絶え間なく走り続ける。憧れの映画人にあった感激、監督として映画撮影中に感じた熱い思いを語りたいんだけど、やっぱり照れくさくて恥ずかしくなってよけいに暴走してしまう竹中直人（ここだけ敬称略）なのであった。暴走の裏側の繊細な照れと羞じらいが魅力の連載だった。

◎単行本／角川書店（文庫あり）

93年・第21回受賞

関根勤のサブミッション映画館

関根勤

◎93年3月下旬号〜95年1月下旬号（隔号）

■関根勤氏というコメディアンは、テレビで観ていると、童顔のなで肩（連載一回目の本欄の弁）で、人なつっこい笑顔を浮かべていることが多いのだが（っていうか、ほとんど常にそうなのだが）、ごくたまにギラリとした鋭いユーモアのセンスを見せることがあり、「おれらはけっこうやばいこと言ってます」と見せつつ、実は絶対安全な場所にいる幾多のコメディアンにはない隠れた狂気のようなものを、ぼくは常々感じていた。この連載を読むようになって、自分の考えは正しかったのだと知ってなんだか嬉しかった。トロマ映画「悪魔の毒々モンスター東京へ行く」に手弁当で参加し、しかししっかりとロケ弁当は食べた体験談は特に読ませます。

◎単行本／社会思想社

96年・第24回、99年・第27回受賞

立川志らくのシネマ徒然草

立川志らく

◎96年7月上旬号〜連載中

■幸いなことに何度か志らく師匠の高座を楽しむ機会に恵まれたことがある。スピーディな語り口に翻弄されていると本質を見失ってしまうのだが、志らく落語（シネマ落語も含めて）の本当の魅力はしっかりとしたデッサン力と共に、自らの理想の落語像が師匠の頭の中には確固として存在し、志らく師匠はその理想像に正直であろうとしている点にあるとぼくは思う。師匠は理想の映画像に関しても正直であり率直だ。たとえ名作といわれているものでも、巨匠といわれている監督の撮ったものでも、自分の物差しで「つまらない」、「おもしろくない」と率直に言い切る。そしてその言い切り、独断がちゃんと芸になっているのが魅力の人気連載である。

◎単行本／小社（99年12月下旬号分まで収録）

97年・第25回受賞

映画戦線異状なし

大高宏雄

◎95年3月上旬号〜99年12月下旬号

■「映画評論家たちにも言っておく。前に言った覚えがあるが、映画の質を己の嗜好性に自足して論じられる時代は終わった」という文章が連載一回目から登場する大高宏雄氏の名物連載。「己の嗜好性」を超えたものとして、個々の作品の持つ「興行価値」を一つの基準としつつ、作品や映画界を論じていく、などと書くと数字重視の冷たい文章を想像されるかも知れないが、事実は全くの逆。「映画戦線異状なし」どころか「異状」だらけだった時代（現在もだが）と大高氏は真っ正面から熱く斬り結んでいく。〝商品〟である映画を〝商品〟としてまずは捉えるという、当たり前の、しかし疎かにされてきた大切な作業の記録である。

98年・第26回

これもまた別の話

和田誠、三谷幸喜

◎98年5月上旬号〜99年4月下旬号／第1弾「それはまた別の話」96年6月上旬号〜97年5月下旬号

■「お楽しみはこれからだ」で映画コラムに新風を巻き起こしたイラストレイター和田誠氏と人気脚本家、三谷幸喜氏の連載対談。個人的なことになりますが、ワタクシ、学生の頃新宿に「北北西に進路を取れ」のリバイバルを観に行って和田氏をお見かけし、教員になってからやはり新宿に「北北西に進路を取れ」のリバイバルを観に行って三谷氏をお見かけしたことがあります。語り部和田氏の胸を借りながらも、ストーリーテラーとしての視点で作品を分析していく三谷氏。二人のコンビネーションは抜群で、映画を愛する二人の掛け合いは心地よく読む者の胸に響いてくる。「お楽しみはこれからだ」以来の和田フリークを自認する三谷氏が、和田氏に敬意を払いつつ、しかし時には三谷流のジョークも臆せず繰り出し、和田氏はそんな三谷氏の攻撃(?)を余裕たっぷりに受け止める。シネフ

イル、などという言葉より、敬意を込めて"映画ファン"と呼ばせて頂きたいお二人である。第1弾のタイトル「それはまた別の話」は三谷脚本のTVドラマ「王様のレストラン」に使われたセリフだが、原典はもちろんビリー・ワイルダー監督の「あなただけ今晩は」より。

◎単行本／小社、「それはまた別の話」文藝春秋（文庫あり）。

00年・第28回受賞

シナリオ
脚本通りにはいかない！
君塚良一

◎00年3月上旬号～02年4月下旬号

■もはや"「踊る大捜査線」のある……"で通ってしまう大人気脚本家・君塚良一氏によるすこぶるエキサイティングな連載である。様々な意味で君塚氏が刺激を受けてきた作品を取り上げ、あくまでも現役脚本家としての目で斬っていく。と言っても、シナリオを直接読み解くのではなく、あくまでもできあがった作品の中にシナリオを読み込んでいくのだ。なぜなら「脚本家はそうしている。いい映画に出会ったとき、本能的に、フィルムから脚本を読もうとする」からである。面白い脚本を執筆するために君塚氏が読み込んできたノウハウが惜しげもなく披露される。君塚氏のこの連載で、読者である僕たちに、実作者ならではの視点を共有させてくれたのだ。

◎単行本／小社

01年・第29回、02年・第30回受賞

映画を見ればわかること
川本三郎

◎01年9月上旬号～連載中

■「降っても、晴れても」の頃と変わらず、川本三郎氏の文章は洒脱で楽しいものなのだが、やさしい語り口の中に、例えば試写室の現状や批評家たちのあり方に対しての苦渋に満ちた批判が顔を覗かせることが多くなっている。「映画を見ればわかること」というタイトルの連載だが、川本氏の博識と視点を持っていてこそ「わかること」を読者は毎号教えてもらうことができる。そしてこの「わかること」の中には、ただ単に知識として「わかること」だけではなく、映画ファンであれば「わかるべきこと」、「わかっていてほしいこと」も含まれている。それは多分、映画を通して学ぶべき、人としてのマナーや、他人を思いやる心といったようなものだと思う。

◎単行本／小社より今秋刊行予定

03年・第31回受賞

日本魅録
香川照之

◎03年1月上旬号～連載中

■「現場で俳優として私が役を創っていく過程で、私が見たり感じたりした"ナマの"感覚、感動、感銘、共感、震撼、あるいは反発。そういったものを現場からしか生まれえない視点で私的に捉えていくことしかできない」と連載第一回に香川照之氏は書かれている。「ことしかできない」どころではない。ここで書かれたとおりのことを続けておられるところにこそ、この連載の類い希なる価値があるのだ。映画とテレビの世界の最前線で、そして時には国境を越えて、日々戦い続けている俳優香川氏の語り口はあくまでも熱い。想像の苦しみと喜びが"ナマ"で伝わってくる。香川氏が「役を創っていく過程」で出会った"戦友"たちを語る筆致は特に感動的である。

キネマ旬報読者賞一覧表

1973 お楽しみはこれからだ――和田誠
1974 日本映画縦断――竹中労
1975 シネマ・プラクティス――落合恵子、矢崎泰久、山藤章二
1976 シネマ・プラクティス――落合恵子、矢崎泰久、山藤章二
1977 小林信彦のコラム――小林信彦
1978 ニッポン個性派時代
――秋本鉄次、内海陽子、尾形敏朗、野村正昭、藤田真男
1979 お楽しみはこれからだ――和田誠
1980 小林信彦のコラム――小林信彦
1981 雨の日の動物園――小林久三
1982 淀川長治自伝――淀川長治
1983 雨の日の動物園――小林久三
1984 淀川長治自伝――淀川長治
1985 お楽しみはこれからだ――和田誠
1986 観たり撮ったり映したり――手塚治虫
1987 降っても、晴れても――川本三郎
1988 シネマ・ストリート――安西水丸
1989 試写室のメロディー――連城三紀彦
1990 シネマ・ア・ラ・モード――田山力哉
1991 巨人と少年　黒澤明の女性論――尾形敏朗
1992 竹中直人の少々おむづかりのご様子――竹中直人
1993 関根勤のサブミッション映画館――関根勤
1994 お楽しみはこれからだ――和田誠
1995 シネマ・ア・ラ・モード――田山力哉
1996 立川志らくのシネマ徒然草――立川志らく
1997 映画戦線異状なし――大高宏雄
1998 これもまた別の話――和田誠、三谷幸喜
1999 立川志らくのシネマ徒然草――立川志らく
2000 脚本通りにはいかない！――君塚良一
2001 映画を見ればわかること――川本三郎
2002 映画を見ればわかること――川本三郎
2003 日本魅録――香川照之

キネマ旬報読者賞スポットライト

「お楽しみはこれからだ」「これもまた別の話」

和田誠 インタビュー

インタビュアー＝編集部

――和田さんは『お楽しみはこれからだ』の四回に加えて『これもまた別の話』と計五回の読者賞を受賞されています。史上最多ですよ。

和田　それは嬉しいですね。映画を作ってもお客さんが来てくれないと、どんなに自信作であっても寂しいものです。それと同じで、文章を書いても読んでもらえないとね。ただ、映画は客の入りがすぐわかるけど、自分のページが読まれてるかどうか、ほとんどわかりません。読者賞はいいバロメーターですね。それはそれとして、読者がとっつきにくいような地味な記事で、とてもいいものがあります。賞の対象にはなりにくいけど高度な記事。そういうページの存在も忘れないようにしたいと思ってます。

――『お楽しみはこれからだ』は読者賞が設立されて第一回の受賞作でしたね。

和田　そうでしたっけ。もう忘れてる。

――しかしビデオのない時代に、あれだけのセリフを記憶だけで書かれていたじゃありませんか。

和田　あの頃は記憶力がよかった。というより、学生時代からサラリーマン時代まで、クラスメイトや同僚と映画の話をしょっちゅうしてたんですよ。話すことによって、一度観た映画をおさらいしているのね。それでインプットされる。それにビデオに頼らない分、映画館で一瞬もおろそかにしない、という覚悟で観てるから、その点もよかったんでしょう。

第1回キネマ旬報読者賞(1973年度)の表彰式にて

「お楽しみはこれからだ」は1973年10月上旬号からスタートして、多くの映画ファンを生み、育てた。

――連載のきっかけは？

和田　まず文藝春秋の編集者松浦伶さんが、書きおろしで映画の本を作らないか、と言ってくれたこと。彼は映画のセリフの本なんかどうですかと提案してくれたんです。書きおろしは無理だよなんて言ってグズグズしてたら、『キネ旬』の当時の編集長白井佳夫さんに、テーマは何でもいいから四ページの連載をしてくれと言われてね、松浦さんのアイデアを生かすことにしたというわけです。結果的に文春で七冊の本になりました。後半はビデオ時代がやってきて、記憶だけでは書きにくくなりましたね。ビデオでチェックする読者に間違いを指摘されるから。大間違いは恥ずかしいですが、愛嬌のある記憶違いはある種個人的な映画の観方でもあると思うけど。

――『これもまた別の話』の第1弾『それはまた別の話』の連載のきっかけを教えて下さい。

和田　文春からビリー・ワイルダーの伝記が出た時、『本の話』という文春の雑誌で、PR対談を三谷幸喜さんとしたんです。短いものだけど面白かったので、これを長くしたら、しかも一本の映画に絞って話をしたらもっといいんじゃないかと思って、ぼくが勝手に売り込んだんですよ。

――二十四本の映画を取りあげましたが、ほかにも語りたい作品はありましたか。

和田　あるある。たくさん。三谷さんはファンの立場と脚本家の立場で語れるから、ぼくの気づかないシナリオの面白さを教えてくれることもあって、勉強になるんです。その上彼は途中から監督もするようになったんで、異業種監督同士で話すというのも楽しいことでしたね。機会があったらまたやりたいと思ってます。

『これもまた別の話』

三谷幸喜インタビュー

インタビュアー＝編集部

——『これもまた別の話』連載時のことをうかがいたいと思います。

三谷　あまりよく覚えてないんですよね。嫌なことでもあって幼少の記憶がないのかと思っていたら、いまや大学時代のことも覚えてない（笑）。単に記憶力がなかったんです。こんなの（紙面を見て）大嘘で、後から随分加筆したじゃないですか。和田さんの記憶量は本当にすごいんですけど。

——そんなことありませんよ。ひとつの映画から派生した話題を、「昔見たこの映画では」と展開させてらっしゃったじゃないですか。

三谷　それは予習していくからです。そもそもぼくは好きなことしか覚えられない。映画評論家の方って大変だなと思いますよ。どんどん新しい映画が出てきて、新しい役者の名前も覚えなくちゃならない。キルスティン・ダンストとか（笑）。

——連載を始められたきっかけを教えてください。

三谷　みんなが『スクリーン』や『ロードショー』を読んでいた中学の頃から、ぼくは『キネ旬』派でした。当時あったシナリオ採録も勉強になったし。『キネ旬』で連載できればいいなと思っていたら、たしかエッセイの依頼があって……。

——『映画と私』ですね。

三谷　そう。そのあと連載をやりませんかという話になったはずですが、その後の経緯は記憶にない（笑）。文藝春秋で和田さんと対談させてもらったのが発端だったと思います。ぼくは、自分の文章がそのままの形で人の目に触れることに抵抗があるんです。だから基本的にはエッセイの連載は断っていて、書いても並行してはやらない。でもこれは対談だし、お相手は一度お会いしてる和田さん。ぼくにとって和田さんの『お楽しみはこれからだ』と、和田さんと山田宏一さんの『たかが映画じゃないか』は、何回読んだかわからないバイブルみたいなもの。その和田さんと、しかも映画について対談するのはプレッシャーでした。

——和田さんは、三谷さんの脚本家としての視点に気づかせられた点も多いとおっしゃっていました。

三谷　必死ですから（笑）。それしかアイデンティティはないし。

「99年2月下旬号」受賞グラビアより

「それはまた別の話」「これもまた別の話」で合計24本の映画が語られた。

——連載は、語り口の面白さを楽しむ映画書であり、脚本家志望者にとってのよい教科書になっていますね。

三谷　というか、映画ファンじゃないと全然面白くない（笑）。この対談と同時期に、『月刊カドカワ』できれいな女優さんと対談する『気まずい二人』というのをやっていたんですが、本になったものを読んだうちの祖母から、『気まずい二人』は面白かったけど、これはなんのことを話しているのかわからなかったと言われました（笑）。

——では映画ファンのために（笑）新たなる対談を！

三谷　面白いエンタテインメントをたくさん作られてきたビリー・ワイルダーの作品を系統だてて話してみたいです。年代を追って話すことで、作風も流れで追えるかもしれないし。とりあえず、ぼくは来年、映画に取り組む予定なんです。和田さん、さ来年いかがでしょうか？

『観たり撮ったり映したり』『シネマ・ア・ラ・モード』

手塚治虫と田山力哉

文＝原田雅昭（担当編集者）

　僕は映画少年になる以前に、まず漫画少年だった。もの心ついたときから家には兄たちが読んでいる漫画雑誌が散乱していたので、当然のように漫画を読んでいて、そして、当時の漫画少年の多くが同じ認識だったと思うのだが、手塚治虫は神様だった。

　神様は、僕ら漫画少年の成長と呼応するかのように、青年漫画の秀作をも継続的に発表してくれて、何よりも奇跡的な傑作『火の鳥』を連作して漫画青年の心を離さなかった。

　僕が運良くキネマ旬報社に入社できて、まず考えたのは、立場を利用して(!)神様に近づきたいということだった。何しろ、この神様は年間300本以上もの映画を見続けている熱狂的な映画フリークであることを知っていたからだ。もちろん本誌の読者にとっても「手塚治虫」のエッセイは絶対的な魅力があるに違いない。

　それからは、神様に接近するための涙ぐましい(?)作戦を展開。「スーパーマン」などSF映画の話題作の座談会出席依頼など、神様の好きそうなメニューで〈実績〉を積んだ上で、ある日、マネージャーのK氏に恐る恐る連載を申し出た。隔号の月1回。当然のごとく拒否された。これ以上、手塚先生の仕事は増やしたくない。予想通りの返答だった。

　でも、何回か交渉して根負けしたK氏がやっと先生にお伺いを立ててくれた。すると、即決でOK。実は手塚先生に話が通れば、絶対承知してくれるという自信があった。案の定、先生が承知してくれた理由は、「映画を仕事として観ることができる」。事務所には常時、漫画雑誌の担当編集者が何人も泊りがけで原稿を待っているので、試写のときは隠れてコソコソと出かけていたそうだ。これで「大事な試写がありますから」と、キネ旬の連載を理由に大手を振って映画を観に出かけられる。当然、僕は、K氏や担当編集者から怨嗟の目で睨まれたことは、言うまでもない。

　連載開始と同時に新たな闘いが始まった。原稿取りである。まず、この連載を受けるに際して、手塚先生とマネージャー氏の間で取り決めがあったらしい。キネ旬の原稿は仕事場では書かない。つまり〝遊び〟という認識らしい（確かに原稿料は破格に安かった）。家にもほとんど帰る時間の無い先生はどこで書くかというと、たまに外出するときの移動の車の中が書斎なのだ。いやはや、神様にはまったく休む暇は無いのです。

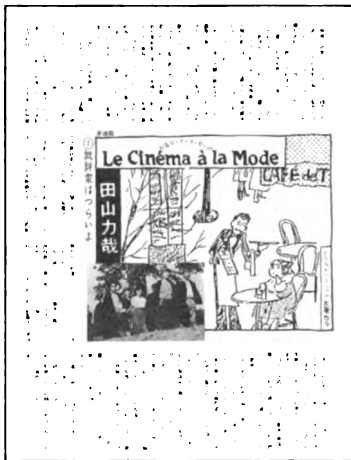
　毎回400字詰め原稿用紙6枚に、カットが1点。あの超多忙のなか、よく書き続けていただけたものだと改めて思う。連載約5年間、オチたのは確か2回。

『87年2月下旬号』受賞グラビアより

天才・手塚治虫の知られざる一面が垣間見られるエッセイ。文章とともに載るカットも楽しかった。

日本テレビ『24時間テレビ』の長編アニメの制作と締め切りがかち合ったときだ。何しろアニメの納品が放送30分前という離れ業をやっていたのだから無理もない。
映画への溢れる想いをつづった文章も面白かったが、ふと内面の弱気な部分を吐露することも多く、また結構辛口な部分もあり、人間・手塚治虫の意外な一面を垣間見たような気がして、エッセイならではの魅力に富んだ連載であった。
読者賞の表彰式(ベスト・テン表彰式)は、表彰が式の最後だったので、ぎりぎりで駆けつけてくれた。満面の笑顔で受賞の言葉を述べられる神様を見て、僕にとっても、わが生涯の最良の日であった。
田山さんは、酒場で会う度に怒っていた。怒りを肴に酒を飲んでいたというべきか。低落する一方の日本映画界について、それを取り巻く志の低い映画人に対して。
田山さんは、1984年に肝硬変で倒れ、半年後に奇跡的に生還したのだが、そのとき見舞いに来てくれた森谷司郎、浦山桐郎監督など友人たちが、次々と鬼籍に入るたびに、自分に代わって彼らが神に召されたのではないか、と本当に悩んでいた。その想いが、過激な発言に拍車をかけていたような気がする。退院後きっぱり断っていた酒も、いつの間にか復活していた。
「酒場でクダを巻くだけではなく、その怒りをキネ旬に書きませんか? その代わり世間の嫌われ者になる覚悟が必要ですが」との提案に、「やってやろうじゃないか!」と乗ってきた。僕としても、馴れ合い的な

表彰式にて受賞スピーチをする
田山力哉氏

文章が大勢を占めつつある本誌を活気づかせるカンフル剤として、辛口な原稿の必要性を考えていた時期だった。だからといって、執筆者が誰でも良いというわけにはいかない。映画の知識が豊富で、キャリアがありながら、向こう見ずの一匹狼。喧嘩は売りもするが、買うのも嫌いじゃない人。目の前に「田山力哉」がいた。
そして連載がスタート。田山さんは、駄作を撮る監督に噛み付き、宣伝部の怠慢を面罵し、監督にヨイショする同業者(評論家)にも怒りの矛先を向けた。田山さんは、見事に〈嫌われ者〉の役目を果たしてくれた。思ったとおり読者の反応は良かった。歯に衣着せぬ文章は読者の声なき声の代弁であり、圧倒的な支持を得た。もちろん否定的な意見もあったが、それも反響のうちと勝手に前向きに解釈した。
業界内の反発も予想通りあったが(間接的に僕の耳に入ってきた)、田山力哉流〈正論〉に恐れをなしたのか、直接の反論は皆無だった。だが、意外にも敵は城中にいた。
ある日、地方に出張中の上司から電話がかかってきて、「田山の連載をすぐに中止しろ!」と怒鳴っている。どこかの誰かに何かを言われたらしい。おいおい、部下と筆者を守るのがあんたの仕事じゃないのか。いつも「もっと過激に」と煽っている僕が、連載を止められるわけがない。しかし、以前、今回とは正反対で、地味ながら映画史的な価値があるとして、山口猛著『宮島義勇回想録』を、上司の中止命令をかわしながらも数年間、連載を続けた実績(?)が僕にはある。上司が怖くて編集がやってられるか、との気概もあった(結局、出張から戻った上司は田山さんの連載のことは、なぜか言い出すことはなかった)。

毎回ヒヤヒヤして読んでいた人も多いはず。

連載が2年くらい続いた頃に、僕はキネ旬を退社することになった。そして、その年の読者賞受賞、本当にうれしかった。発表の夜、田山さんと朝まで祝杯をあげ続け、心地良く泥酔した。さらに93年、僕の編集により『辛口シネマ批評 これだけは言う』(講談社刊)として単行本になり、僕にとっての『シネマ・ア・ラ・モード』は、完結した。

「巨人と少年・黒澤明の女性論」

最後の記念写真

文＝尾形敏朗

〈女が描けない〉が定説の黒澤明作品、実はその女性像にこそ創作の秘密がある、という視点で書いた『巨人と少年・黒澤明の女性論』の構想は「クロサワの美少女たち」と題する19歳頃のメモ書きにはじまる。以来、モチーフは持ち続け、資料を集めたり、ある程度まで書いてもみたが、生来のナマケモノ、なかなか進まない。

「大学卒業までに何とか!」が「30歳までには!」に変り、やがて30代も半ばを過ぎた。さすがに僕も、ヤバイ! と焦る気持ちがふくらみ、今度こそ、という気になった。

人と運に恵まれた。企画書と原稿の一部を青木眞弥さんを通して編集部に提出。植草信和編集長の英断で異例のページ数を割いての連載が決まった。担当は同じ愛媛出身の高橋千秋さん。一年余りの連載の後に読者賞までいただいたのだから、本当にうれしかった。

僕にとって〈読者〉とはまず、一度もお会いしたことがない黒澤監督その人だった。

「創造力は記憶力」とよく答える黒澤監督ならば、映画の人物やエピソードには、実生活でのモデルなり体験が色濃く反映しているに違いない。それを徹底して追求してみた。

一方でそれは、見ず知らずの人間が秘密の小部屋に勝手に入り込む行為であり、ご本人にとっては不愉快かつ迷惑なことだったろう。

毎回熱心に読まれていると複数の関係者から耳にしていたが、連載の後半に入って激怒されているという話に変わってきた。特に愛娘・和子さんと作品を関連づけた記述を気にされていたそうだ。

ただ当時の僕は、確信犯のような開き直りがあり、指摘のいくつかは当っていたからだろうと自惚れてもいた。

しかし今、あの怒りは何だったのかとあらためて思う。

連載が終了し『巨人と少年・黒澤明の女性たち』として文藝春秋から上梓した半年後に僕は結婚し、一年後に娘が生まれた。

自分も父親になって思うのは、あの時の監督の怒りは、家族を守ろうとする一人の家庭人としての怒りではなかったか、ということだ。

作家には、家族や周辺を自分の創作世界に巻き込んでしまうことがある。よき家庭人である前に、創造者であることを選んだ宿命に、映画監督・黒澤明は〈激怒〉という形で反応したのではないか?

結局お会いする機会は永遠に訪れなかった。98年9月、黒澤スタジオでのお別れの会に参列し、合掌させていただいた。

その数日後「これ、尾形さんじゃないの?」と知人が朝日新聞夕刊に載ったお別れの会の記事を差しだした。よく見ると、遺影の前で献花する参列者の写真に僕の姿がある!

3万5千人という参列者だから、思ってもみなかった。じっと見つめながら、僕なりのささやかな因縁を思った。

これが黒澤監督との最初で最後の記念写真となった。

「92年2月下旬号」受賞グラビアより

誰も考えつかない新たな切り口による黒澤論。

座談会　秋本鉄次×内海陽子×尾形敏朗×野村正昭×藤田真男

27年後の『ニッポン個性派時代』

司会＝編集部　取材写真＝谷岡康則

『読者の映画評』投稿から連載のインタビュアーに

――まずは、「ニッポン個性派時代」が始まったいきさつを教えて下さい。

野村　確か編集長が白井佳夫さんから黒井和男さんになった頃で、筆者の血を新しくしようということで始まったんだと思います。その前段階として読者による大林宣彦監督の「HOUSE ハウス」の撮影現場ルポという企画があって（77年6月下旬号）、それに内海さんと僕が呼ばれたことがあったんです。

尾形　宮崎祐治さんもイラストで参加していますね。

野村　そこで当時、編集長の黒井さんと編集部の酒井良雄さんにお会いして、それがきっかけになって、あまり時間をおかずに酒井さんから銀座の松屋そばのルノアールに、秋本さん、内海さん、藤田さんと僕が呼ばれて、読者評出身のライターによるインタビューができないかというアイデアを聞かされたんです。その後に尾形さんにも加わってもらって、という形が出発点だったと思います。

藤田　よく覚えているなあ（笑）。

野村　僕と尾形さんは、秋本さん、内海さん、藤田さんより少し年下なので、後輩という意識が強くて。学生時代に皆さんの読者評を読んでましたから、緊張して臨んだ記憶がありますね。

内海　その頃の2～3歳は大きいですもんね。

尾形　僕は『読者の映画評』に載ったことって3、4回くらいしかないし、この中でやれるんだろうかとすごく緊張しましたね。

――それまで皆さんは、『読者の映画評』の投稿で活躍されていたわけですよね。

秋本　そうですね。まだ正式には、キネ旬から原稿料もらってやるということはあまりなかったと思うんで。

野村　編集長が白井さんから黒井さんに代わった過渡期の隙に（笑）、ところてん式に若い僕らのところに話が来たんじゃないかな。

「79年2月下旬号」受賞グラビアより

秋本　まあ読者に声を掛ければ喜ぶだろうと（笑）。でも、何か新しいものが始まる時って、大方そういうもので、純粋に企画が成立する上に、外部的なものがあるもんだよね。

内海　それから、この企画を川本三郎さんがバックアップしてくれたんですよ。これは大きかったと思います。誰かから背中を押してもらわないと、酒井さんも勝手なことはできなかったと思いますし。

秋本　いくつものいい力が働いていたんだと思う。

尾形　多分、白井さんには自分が『読者の映画評』を始めたという思いが強くあるから、その後も親切にしていただきました。

野村　だから、生みの親が白井さんで、育ての親が黒井さん、みたいな意識がありますね。

内海　手間隙かけて大事に育てていただいたという意味ではありがたかったですね。

――脇役の俳優さんをメインにしたインタビューというのもめずらしかったのでは？

藤田　当時あった『ムービーマガジン』などでも脇役にスポットを当てるインタビューがあったでしょう。もっと溯れば、ピラニア軍団とか、脇役が注目

される流れがあって、高平哲郎さんや梅林敏彦さんがインタビューをしていた。

秋本　外国映画の方でも、川本三郎さんと小藤田千栄子さんの『脇役グラフィティ』などもあって、主役だけが映画の魅力ではないという動きが全体的にあったんでしょうね。

尾形　『ムービーマガジン』で川谷拓三が表紙を飾り、インタビューが掲載されたのは、その象徴だったんじゃないですか。

野村　もともと、『ニッポン個性派時代』は『脇役グラフィティ』の日本人版をやりたいね、というところから始まったと当時聞いた記憶があります。ただ、『脇役グラフィティ』は対象が洋画だからいいけど、日本の俳優さんに面と向かって、『脇役』とは言えないだろうと。そこで、悩んだ末に『個性派』というネーミングに落ち着いたようですね。

藤田　連載担当者の冷泉さとしさんが付けたんだと思う。

秋本　もちろん、その前から『個性派』という言葉はあったけど、脇役やクセのある俳優を、『個性派』と呼ぶのは、この連載が定着させたのかもしれない。

――こうして、連載は77年10月上旬号からスタートするわけですが。

藤田　僕は最初に会ったのが誰かも覚えてない。皆、覚えてる？

尾形　藤田さんは常田富士男でしょ。

秋本　僕は高橋明さんで連載の1回目だった。それでいきなりインタビューの後、お家にお邪魔して酒盛りになって、（取材って）こういうもんかなと思って（笑）。

野村　僕は下條アトムさん。

尾形　佐藤蛾次郎さん。

内海　私は池波志乃さんで、千駄木のそばのご自宅を訪問したんですが、お父様の（金原亭）馬生師匠が、取材が終わる頃を見計らうように覗くんです。それで結局出ていらして酒盛りになっちゃって、畳鰯なんかも出てきて、もう下町情緒って感じで全部が作られた話のような（笑）。馬生師匠はお客さんが来ると飲めるということで、いつも狙っているらしくて、冷泉さんは男の子だから「もっと飲め飲め」って（笑）。

――俳優さんにインタビューするというのは、初経験だったんですか。

藤田　読者参加みたいな企画ではあったんですが、面と向かって一対一の取材は初めてでしたね。

秋本　そういう意味では、主役、準主役級の人ではなく、地味めの俳優さんたちだったから少しは緊張しないですんだのかもしれない。

内海　私たち皆子供だったから、親切にしてくれましたよね、インタビューを受けて下さる方が。それに『キネマ旬報』という雑誌の信用も大きかった。私は女の子で子供でしたから、特に年配の方なんて面白がってくれましたね。山谷初男さんなんて、取材の後にゴールデン街に連れて行ってもらって、優しくしていただきました。

尾形　冷泉さんが僕らを紹介するときに「読者の方です」と断って、ちょっと失礼なことがあっても大目に見て下さい、というような思いがあったんでしょう。僕らもシドロモドロのインタビューだったから、プロとは全然違ったんだけど、質問はファンでなければ聞けないような細かいことばかりだったので、俳優の方たちも、しっかり自分の映画を見てくれているんだと思ってくれて、いろいろ話してくれたんでしょうね。皆いい人ばかりでしたよ。まあ、いい人になってくれたのかもしれないけど（笑）。

――連載の反響はどうだったんですか。

秋本　ああいう形のものが他になかったから、新鮮に思えたんじゃないですか。自分たちに近い目線で俳優に接触して話を聞くというスタイルに、何か親しみを覚えてもらったのかもしれな

藤田真男
1952年、三重県生まれ。大学を留年、中退。各種アルバイトをした後、月刊誌『バラエティ』の映画ページを編集。その後は主にビデオ業界の隅っこで雑文を書きながら現在に至る。故伊藤勝男氏らと共著の『珍作ビデオのたのしみ』ほか著書少数。趣味は山歩きとサイクリング。『ニッポン個性派時代』の名カメラマン・西川浩司氏の親戚の店で23年前に買った自転車を今も愛用。本誌に『お宝大映シネマ』の解説を（隔号）連載中。

内海陽子
1950年、東京都生まれ。高校卒業後、OL、アルバイト生活8年ほどを経て『キネマ旬報』からインタビュアー、ライターとして出発させていただく。座談会の内容でも知られるとおり、かれこれ25年も映画評論界にいるが、まだまだ発展途上人と痛感。しっかりやらなければと思っている。「週刊ザテレビジョン」「共同通信」「ワンダーマガジン」などに執筆。

野村正昭
1954年、クリント・イーストウッドや鈴木京香と同じ5月31日、山口県生まれ。中学生時代に長距離ランナーか映画評論家になるか迷い、後者を選択。18歳から数年間は年間1200本もの古今東西南北の映画を見て、せっせと本誌「読者の映画評」に投稿を続け、映画会社宣伝部、広告代理店を経て82年フリーに。若い頃からの癖が抜けずに、実写のみならず記録映画やアニメーションなど何でも見ようという好奇心だけは旺盛で現在に至る。

い。あるいは、俺だったらこうやるのに、なんて思いながら読んでくれていたのかも（笑）。

内海　雑誌の真ん中の一番いいページに置いて、デザイナーの友成修さん、カメラマンの西川浩司さんを起用して丁寧な誌面づくりをして下さった。そういう編集部の〝これを売り出す〟という姿勢が、読者の方にも伝わったんじゃないかなとも思うんです。

――若い世代がこれまでにない新しい企画で、読者の支持を得る。ヌーヴェル・ヴァーグのようなものだったんでしょうか。

秋本　そんなに大げさではないと思うけど（笑）、どうしても評論家というのはある程度年齢がいかないとダメだというイメージがあるし、インタビューは、ベテランの映画記者みたいな人が多かった時代に、若い世代の人たちが『キネ旬』のセンターフォールドのページで、名前を入れて取材する、しかも主役ではなく、脇役の俳優さんのシリーズというのは画期的だったんですよね。

藤田　あの頃の撮影所育ちの人って本当に個性的な人がいっぱいいたよね。

秋本　いわゆる変人奇人というか、映画界全盛期だったから生きて来れたと思えるような（笑）、すごいエピソードをもつ人々。

藤田　そういう人たちに取材する機会に恵まれたということも大きかったでしょうね。僕が取材した人たちって、昭和一桁や二桁生まれの人が多いんだけど、取材後に皆バタバタと亡くなってるんだよね。岸田森さん、草野大悟さん、青木義朗さん、南原宏治さんとか。野村さんが取材した菅貫太郎さんも50代で亡くなった。あの人もヘンな人だったけど、ただの奇人変人ではない。非常に知的な人が多かった。

秋本　お亡くなりになった方は多いけど自殺してしまったのは古尾谷雅人さんだけ。小林稔侍さんと古尾谷さんは、取材してから20年ぐらい経って今では置かれているポジションも違うから、「その後の個性派時代」みたいな感じでやったら面白いね、と話した記憶があるんですけど、古尾谷さんの場合は願っても叶わなくなってしまったから……ちょっとまだ引きずってます。

野村　僕の担当では夏目雅子さん。

内海　何か自慢しているね（笑）。

尾形　連載に登場した人は、大映や東映の脇役ももちろんだけど、日活ロマンポルノの脇役も欠かせなかった。秋本さんの高橋明さんや丹古母鬼馬二さんとか、僕が取材した風間杜夫さんも、そこから、つかこうへいの芝居でブレークした。つか劇団で言えば、根岸とし江（現・季衣）さん、平田満さん。それから亡くなった三浦洋一さんは、内海さんの担当でしたね。東京乾電池の柄本明さんも「赤塚不二夫のギャグポルノ・気分を出してもう一度」に出演した時お願いしました。ゴールデン街で飲んで「彼女です」と紹介されたのが角替和枝さんで、結婚はしてないけど一緒に住んでるって言ってましたね。結局5、6時間付き合ったかな。

秋本　取材の時間が面白かった、楽しかったということで、その後飲みに、という流れになるわけで。

尾形　山本麟一さんは3、4時間も話してくれた後、冷泉さんが謝礼を渡したら「こんなもの受け取れねえよ」と。「それでは……」「だったら一応俺は受け取った。でもお前たちにやる」って（笑）。

藤田　で、どうしたの？

尾形　一応もらいました（笑）。

内海　野村さんの場合は結構カワイコちゃん系ね。

野村　冷泉さんから「野村くんには若い女優さんをメインにしてあげるから、その代わりじいさんもやれ」と（笑）。さっき話に出た夏目さんや風吹ジュンさん、真行寺君枝さんは当時大ファンだったからうれしかったけど、桑山正一さんや梅津栄さんへの取材も面白くて、貴重な経験でした。ビデオがない時代だから、2日間くらいかけて『キネ旬』のバックナンバーをひっくり返して、役柄を全部チェックして。

――俳優さんの選択は皆さんの希望で？

秋本　それがすべて通るとは限らないですけど。僕がリクエストで是非とい

秋本鉄次
1952年、山口県生まれ。広告代理店、情報誌編集を経て、フリーに。モットーは"映画は俳優（特に女優）で見る""飲む、打つ、見る"。レギュラー執筆誌（紙）は「日刊ゲンダイ」「ザテレビジョン」「Men'sアクション」「漫画大衆」など。麻雀誌、競馬誌にも寄稿し、競馬場に歩いて行けるところが"終いの住処"と宣して、府中市に在住。映画以外で最近好みのパツキンは、イタリア女子バレーのフランチェスカ・ピッチニーニ！

尾形敏朗
1955年、愛媛県大洲市生まれ。広告代理店に勤務のかたわら映画評論活動。著書として『巨人と少年・黒澤明の女性たち』（文藝春秋刊・キネマ旬報読者賞）『異説・黒澤明』（共著・文春ビジュアル文庫）など。最近では「キネマ旬報」2月上旬号に長編評論「〈自然〉の法則-黒澤明脚本『海は見ていた』を読む」を発表。

77年10月上旬号からスタートして81年11月下旬号まで100人の個性派俳優が取り上げられた。

うのは山口美也子さん、永島暎子さんかな。

内海　それは鉄ちゃんのいい感じが出ましたよね。

藤田　『個性派』はイメージアップになるから、事務所からの売り込みもあったよね。

内海　映画人の方が、このコーナーに注目してくれたということで、それはすごく嬉しかったですよね。

——そうして、連載が始まって2年目で読者賞を受賞するわけですね。

尾形　冷泉さんや酒井さんがすごく喜んでくれましたよね。

内海　表彰式には、尾形さんの御両親が愛媛から出ていらして（笑）。ちょっとしたお披露目の会でした。

秋本　僕はまだサラリーマンをやってましたから、賞とかもらうと、その気にもなるじゃないですか。だからライター業に専念しようと踏ん切る一つの要因にはなったかもしれないですね。いま思うとね。

野村　僕はこれで少しは食べられるようになるかな、と思ったら大間違いでした（笑）。

秋本　表彰式で黒井さんが「この中の何人かが、映画批評家に育っていくのを楽しみにしています」とおっしゃったんですけど、皆さん一応、映画の周辺で仕事をなさってるし、ありがたいといえばありがたい。

内海　この連載が宣伝になったわけですよね。名刺代わりというか。

秋本　インタビューの仕方の基礎みたいなのを教わったという気持ちはありますね。

藤田　でも、何回やってもぶっつけ本番だったけど。

27年の時が過ぎて映画をめぐる状況も変わった

——「ニッポン個性派時代」がスタートしてから27年。映画に関しての状況が随分変わったと思います。雑誌も増え、インタビュー記事も増える一方で、逆に映画批評というのが少なくなっている。そういう現状や映画界全体についてどう思われますか。

藤田　この連載をしている時に、日活撮影所の一部が壊されて、住宅が建てられていたけれど、まだ辛うじて映画界というものがあった。いまは映画界とは言えないでしょう。それに、昔は行き当たりばったりで見ていても面白い映画に当たったけど、いまは本当に少ないし、ハリウッド映画なんてサイレント映画に逆戻りだよね。派手なスペクタクルをCGでやってるだけで、ものすごく原始的な映画だもの。口コミも当てにならなくて、例えば最近見た中で「夏休みのレモネード」なんてすごく好きだったけど、誰も褒めていない。内海さんは褒めていたけど。「ドニー・ダーコ」は『キネ旬』のベスト・テンに誰も入れてないんだよ。

秋本　ただ、それはいつの時代も同じでしょう。「ミネソタ大強盗団」や「夕陽の群盗」だって、当時の評論家には評価されなかった。

野村　それに近年は公開本数が多過ぎるという事実もありますね。

藤田　ヒットするのは、ハリウッドの紙芝居みたいなものばかり。くだらない映画がヒットするのも、ベスト・テンに入るのも困ったことだけど、それはいまに始まったことではない。もっと問題なのは、世界中が保守化しているなかで、例えば「ドニー・ダーコ」の作者たちのようにアメリカの保守化に異議を唱える映画人もいる。それが理解されない日本はアメリカ以上に恐ろしいほど保守化、閉塞しているんじゃないか。見る方も退化してるのかと思うよ。まあ、言っても仕方ないことかもしれないけどさ。

尾形　いや、藤田さんはそう言い続けた方がいいですよ。[illegible]、80年代あたりからビデオが登場して、映画は映画館だけで見るものじゃなくなって、映画の見方も書き方もまったく変

わってきたでしょ。批評も、記憶だけでは書けなくて、ビデオという記録で裏づける必要が出てきた。もっとも、記憶の方が記録よりも正しい場合もあるんだけどね、映画は時間の流れで見た印象が重要だから。ビデオが広がって、オタク文化が生まれ、いろんな形の批評も出てきましたが、それに振り回されても仕方がないから、僕は僕なりに自分の興味のあることをコツコツ書いて行くと言うしかない。

野村　細分化され過ぎているような気がする。例えばホラーならホラー、ＳＦならＳＦだけの人とか、そこだけで手一杯になっちゃっているから、下手するとうんと狭い世界の中でお山の大将になってしまって、他ジャンルへの説得力がまったくなくなっちゃう危険がある。僕なんかは広く浅くの人がもっと出てほしいと切実に思いますね。

秋本　インタビューの形式は、事務的というか機能的、合理的になってきて、密度や接近度が昔より少なくなっているでしょうね。

野村　いまはどの雑誌も90％以上がパブリシティーの延長になっていますから。

内海　編集者の方も、取り上げる情報が多過ぎてお忙しいじゃないですか。捨てられないことが多いと、あるひとつのことに時間を費やすことができにくくなって、それが密度にもなりますよね。ファックスやメールで原稿を送れるようになって、編集者と筆者との関係性も浅くなると、それがインタビュアーと相手先との関係にも反映されると思いますしね。

野村　でも、隙間を見つけて独自の企画を考えれば、いまでも十分可能だと思うんだけど。数年前に僕が「キネ旬」で掲載させてもらった「デビュー作の風景」の場合、取材を受けてくれた監督たちは、すごく乗ってくれて面白い話をたくさんしてくれたし。

内海　あれは労作でしたね。

秋本　やっぱりパッケージされた中での取材だと限界があるけど、そこから外れたところの突出した企画であったりすると、向こうもキャンペーンの一環ではない形で受けてくれるというのはありますね。その余裕を、雑誌も取材する側もされる側も、どれだけもっているかということですね。

内海　欲望の問題もありますね。その点では忸怩たるものがありますが、こちら側の情熱なども反映されますね。

秋本　極端にいえば、映画が作られて、公開する場があれば、批評やインタビューってなくても済むものかもしれないですけど、ないと寂しいものでしょう。でもこれは受け手あってのことだから、読者の人が情報だけで十分ということになれば、どんどん少なくなっていく。さらに、批評家を目指す人も育たなくなるわけです。一方で、ｗｅｂ上のサイトの口コミの方が影響があったりするわけじゃないですか。そうなると、自分で書いていてもどこまで有効なのかな、と思ったりするんですね。だから僕の場合はパッキン女優偏愛などの自分の趣味に走って、それでも奇特な編集者の人とかが認めてくれれば、それが自分の書く立場なのかなあと。しかし、間口がせまくなるジレンマがありますよ。

内海　編集者の方の目の光らせ方が、ライターを活性化させるということはあると思います。どうしても日々の仕事に流されてるんじゃないかなあという気はするんです。映画批評というのも、一つの自己表現ですから、自分である程度アピールもしていかなきゃいけないし、映画とも立ち向かわなきゃいけない。でも、そこで大事なことは、"誠意"みたいなことがどれだけ込められるかだと思うんです。もちろん文章は芸ですから、芸としての面白さも重要ですし、そのあたりで差別化していくしかない。亡き相米慎二監督から「ただ見するなよ」と言われたことがあるんです。一瞬、試写室でなく、映画館でお金を払って見ればいいのかなと思ったんですが、相米さんがおっしゃったのは、見たことを映画に反映するような文章なり記事を作れということだったんです。いまある映画もそうですし、これから作られていく映画にも、何か役に立つ存在じゃなきゃいけないなあと。それはどんな状況になっても忘れてはいけないことだと、いまでも思い返します。

——映画に関する文章の存在意義を指摘した、いい言葉ですね。我々もそれを心に留めながら86年目に突入していきます。本日はありがとうございました。

（構成＝服部香穂里）

「ニッポン個性派時代」のメンバー再び

服部香穂里／1977年福井県生まれ　大阪府在住。「東京上空いらっしゃいませ」を観て、「読者の映画評」へ初投稿、掲載される。以後も投稿を続け、02年9月上旬号「ピンポン」評でデビュー。以降、本誌、「Meets」などに執筆。

創刊85周年特集・第1弾はいかがでしたでしょうか。
さて、次号の第2弾では

『ジャンル別オールタイム ベスト・テン』を特集いたします。

記念号には欠かせない『オールタイム ベスト・テン』ですが、今回は趣向を変えて、ジャンルを分けてのベスト・テンを行います。

時代劇（日本映画）
ラブストーリー（外国映画）
アニメーション（日本映画＋外国映画）

この三つのジャンルを約50人の映画評論家、著名人が選出します。

時代劇に、黒澤明作品や東映時代劇が何本入るのか、宮本武蔵、座頭市、丹下左膳は？
ラブストーリーは、やはり「カサブランカ」「風と共に去りぬ」「ローマの休日」といった名作が強いのか。
アニメーションでは、ディズニーとジブリがどうなのか。
みなさんのそれぞれの思いを重ねて、ベスト・テンをお楽しみ下さい。

次号8月下旬特別号は8月5日発売です。ご期待下さい！

85th
ANNIVERSARY
KINEMA JUNPO
1919-2004

*FACE*04

豊川悦司

時代劇は面白い

取材・構成／金澤誠　撮影／前田昭二

丹下左膳 百万両の壺」で、隻眼隻手の主人公・丹下左膳を演じた豊川悦司。これまで様々な役を映画で演じてきた彼だが、時代劇ヒーローに扮するのは今回が初めてだ。

「最初に話をもらった時には、『何で俺なんだろう?』と思いました。丹下左膳に関しては、おぼろげなイメージしかなかったですから。ただ隻眼隻手ということから来る、翳を持ったキャラクター。そういうものは好きな方ですから、面白いと感じました。この作品は山中貞雄監督作品のリメイクなんですが、お話をいただいてから原典の映画を観たんです。面白かったですね。こんないい映画があるんだから、リメイクしなくてもいいんじゃないかとも思いました(笑)。でもプロデューサーの江戸木純さんの熱意が凄かったんです。それで今回作るものが模倣になるのか、新しい何かを感じてもらえるのかは、お客さんが判断すればいい。とにかくこれを少しでもいい作品にしようというテーマで現場に臨みました」

撮影に入る前、大河内傳次郎が主演した山中貞雄監督の「丹下左膳餘話 百萬兩の壺」の他に、戦後に大友柳太朗が主演した2本の丹下左膳映画を観たという。

「3本とも左膳のキャラクターが全然違うんです。あまり参考にはならなかったんですが、逆に言えば作品によって勝手に作ってもいいキャラクターなんだなと感じました。結果的には、大河内左膳をモデルにしたところがあります。それはこの映画の原典というのが一番ですが、大河内さんの左膳が好きでしたから。僕自身は分らないんですが、撮影の後半に行くと大河内さんが乗り移っていると思うぐらい、似ているとスタッフに言われました」

原典の山中貞雄版は左膳映画の中でも異色作。いわゆる人情コメディを基本にしているが、今回もその味わいがベースになっている。

「僕の中では、圧倒的にホームドラマのつもりで演じていました。人のいい愛すべきバカ親父の左膳がいて、その手綱を持っているしっかり者のお藤がいて、その家に孤児のチョビ安が迷い込んでくる。その3人が暮らすうちに愛情で結ばれていくというね。これは時代劇でなくても、日本映画でなくても成立する普遍的な擬似家族の話だと思うんです。そこが一番面白かったですよ」

丹下左膳と言えば、権力に支配されない反骨のアンチ・ヒーローとして描かれることが多い。隻眼隻手は、その左膳の生き方をアピールするトレードマークでもあった。しかし、豊川版左膳のポイントは、そこにはない。

「左膳は刀を抜けば滅法強いという設定がありますから、撮影前に左手1本での立ち回りをする準備をしました。片目だと距離感が掴めなくて最初は苦労しましたが、徐々に慣れましたね。面白かったのは撮影も中盤を過ぎると、スタッフの誰もが左膳は隻眼隻手だと意識しなくなったことです。つまりテーマはそこではなくて、もっと人間同士の触れ合いのほうに視点がいっていると思いました。ですから、立ち回りにしても人間ドラマを活かすサビとして織り込まれている感じですね」

監督の津田豊滋とは、初めての仕事。この映画で津田監督は、撮影監督も兼任したが……。

「撮影と監督を兼任されている方との仕事は初めてでした。他の現場では監督とカメラマンがアングルやカット割りについて話し合う時間があるんですが、それが今回はまったくないですから段取りはスムーズでしたね。津田監督は狙いどころがハッキリしていますから、こっちも安心してやれました。それと津田監督にしても、脚本を書いた江戸木純さんにしても、山中さんの原典にケンカの姿勢で挑んでいない。そこに凄く好感が持てました」

今回はこれまで豊川悦司が演じた、例えばガンに侵された人間の内面に肉薄した「命」(02)のように、メンタルな面で役に近づいていくアプローチではない。見た目から丹下左膳というキャラクターに化けている感じで、それが実に楽しそうなのだ。

「それは今回初めて時代劇を本格的にやってみて、面白いと思ったひとつのポイントですね。言い方は悪いかもしれないですけれど〝翔べる、遊べる〟面白さがありました。勿論、自分の内面と役の内面をすり合わせていく作業も楽しいけれども、この映画ではそういうことがあまり必要なかったですから。また時代劇はやってみたいですね。今度はアンチ・ヒーローの匂いが強い左膳をやってみようとか、津田監督と2作目の話もしていました」

今回の映画は恵比寿ガーデンシネマの開館10周年記念作品。洋画のイメージが強いこの映画館で上映されることが彼は嬉しいという。

「こういう映画館で、もっと日本映画を上映して欲しいんです。どの国の映画かで垣根を作るのではなく、お客さんに伝えるためにはどこで上映されればベストなのかを基本に上映して欲しい。作り手とお客さんとの間にある映画館が、きちんとそれを仲介してくれるのは作り手のひとりとして嬉しいことですね」

「丹下左膳 百万両の壺」
●監督/津田豊滋 共演/和久井映見、野村宏伸、武井証、麻生久美子 ●恵比寿ガーデンシネマにて上映中

FACE.

豊川悦司

とよかわ・えつし／1962年生まれ。89年「君は僕をスキになる」で映画デビュー。「12人の優しい日本人」「きらきらひかる」「Love Letter」「八つ墓村」「傷だらけの天使」「顔」「命」など代表作多数。「ハサミ男」「レイクサイド・マーダー・ケース」「北の零年」などが公開待機中。

フロントインタビュー68
俳優

ウィリアム・ハート

取材・文＝吉川マサ

現実は仮想現実とどう共存するか？

1985年「蜘蛛女のキス」でアカデミー主演男優賞受賞。以後、翌年「愛は静けさの中に」、翌々年「ブロードキャスト・ニュース」と連続ノミネートのハート。ハリウッド映画のみならず、ヨーロッパ映画にも積極的に出演、ユニークな活動を続ける。最新作は、脳腫瘍の少年と昆虫学者の交流を描くカナダ映画「天国の青い蝶」。この映画に出ることでハートには伝えたいことがあった。

生命の素晴らしさを人は知るべき

おっきい人やなあ。半袖ポロシャツにジーンズと野球帽というカジュアルな格好で現れたハートは

1m90㎝近い長身だ。

「脚本を読んで気に入ったんだ。少年と私が演じた役の男同士の人間関係に惹かれた。私の子供たちも話がすごく気に入っていたし」

出演の経緯から聞いてみる。きちんとした応対だが、簡潔な答え。物静かで感情を抑えたような話し方のせいか、やさしい感じではあるが、なんとなく「壁」を感じてしまう。インタビュー嫌いだと聞いていたのが頷ける。

「家族にとって蝶のイメージは重要だった。母の墓石には蝶が彫ってある。母が死の床にいた時は蝶のモチーフの物で囲まれていた」

無類の蝶好きの母を持ち、昆虫に親しんでいたハートは、自分が演じた、アラン役のモデルとなった昆虫学者ジョルジュ・ブロッサールがモントリオールに建てた昆虫博物館にも行っていた。

「子供を連れて行ったんだ。彼の写真があって、『この人こそ本物だよ。素晴らしい人物だ』と子供に言ったよ。何年もして自分が演じるなんて思いもよらなかった」

撮影にずっと立ち会ったブロッサール。初対面の印象ではけんかすることになりそうな予感がしたとか。だが今では親しい友達だそう。その彼が毎日の撮影後に見せてくれた様々な虫や生き物たち。

「さそり、巨大なカブト虫、蝶…驚くべき体験だったよ。海、ジャングル、砂漠にいる生命の素晴らしさを人は認識してない。特に都会の人は全く分かっていない。そういうものを経験するチャンスがないからだよ。井の中の蛙みたいなものだね」

蝶から、そして自然について話すうちに熱が入ってきた。今回の作品もそのテーマゆえに、プロモートに積極的だという噂を聞いた。

「ニューヨーク(郊外)、パリ、オレゴンの三カ所に住んでいるけど、その一つは隣家までさえすごく離れているし、一年の半分以上は自然に囲まれて暮らしているよ」

そう語るハートは、国連信託統治領の監督官であった父親の関係で、世界各地で育った。

「南太平洋、アフリカ、エジプト…様々な場所で育ち、いろいろ見てきた。ジャングルにも住んだし、キリマンジャロのベーステントにも泊まった。ハワイのワイキキにホテルが4軒しかない頃に行った。英語を話さない地元の人たちと一緒にカヌーで海に出て、大波に乗ったりもした。白人の子供は自分だけだったよ。アラブ人に命を救われた事もある。パキスタンにも行った。どれも子供の頃の話だよ」

世界各地に行ってはいるが、観光での旅は人生で3、4度のみだと言う。だがその一つが、自然に親しんで育った彼にショッキングな経験をもたらした。

「25歳の時に昔の火山噴火口が湖になっている場所を訪れた。湖を見た子が母親に『ごらんお母さん。絵はがきそっくり!』と言ったんだ。その瞬間がぼくの人生を変えた。その子の肩をたたいて、『違うよ。絵はがきがこれにそっくりなんだよ』と言ってあげた。その後の30年間近く、私の大きなテーマは『現実がバーチャル・リアリティとどう共存するのか』になった。現実世界にある自然。それは再生を繰り返す生命を創り出し続ける、この世の全てのものの中でいまだに最も驚くべき自然界のコンピューターなのさ」

破壊を呼ぶのは、己の無知

自然に関する話題をきっかけに「プライベート」で打ち解けない印象だった人が、オープンになった。それにしてもその経験と知識の豊富さには驚かされる。すごく頭の良い知識人だ。

「世界にはまだまだ多くの素晴らしいものが残されている。それは類型化されたり、絵はがきなんかになるべきものじゃない」

「天国の青い蝶」のロケ地のコスタリカは今回の撮影で初めて訪れたが、語り尽くせないほどの逸話があると言う。何千匹もの蛙が一斉に鳴く驚異的な轟音、決まった時間に鐘の音に似た鳴き声をあげる鳥の群れ、本物の青い蝶を目撃した時の信じられないような体験……。コスタリカの人は自然とうまく共生しているという。エクササイズで走っている途中、巨大なニシキヘビに至近距離で遭遇した。

「天国の青い蝶」8月上旬よりシネスイッチ銀座、新宿武蔵野館、関内MGAほか全国にて順次公開

その場には地元の人も居合わせた。「これがアメリカだったら、蛇を殺すことが誇りになるだろう。でも彼は蛇を殺そうなんて考えもしない。蛇に生きていて欲しいと思う。蛇について知識が多少あれば、咬まれないのは分かる。だがそれを恐れるパラノイアのせいで、自然に対して我々が抱く脅威と不安のおかげで自然が破壊されていく。そして我々は破壊を誇りに感じたりしている。そんなの卑しむべきことだ、犯罪だよ」

　自然に対する愛を語る発言の中に彼の哲学が見え隠れする。その姿には禅なり哲学の悟りを開いたような雰囲気がある。

「自分は希望というものを捨て去ってから、気持ちが楽になった。誤った希望、という意味だけど」

そんな発言まで飛び出してくる。しかし自然保護、環境問題に関する話はもう止まらない。

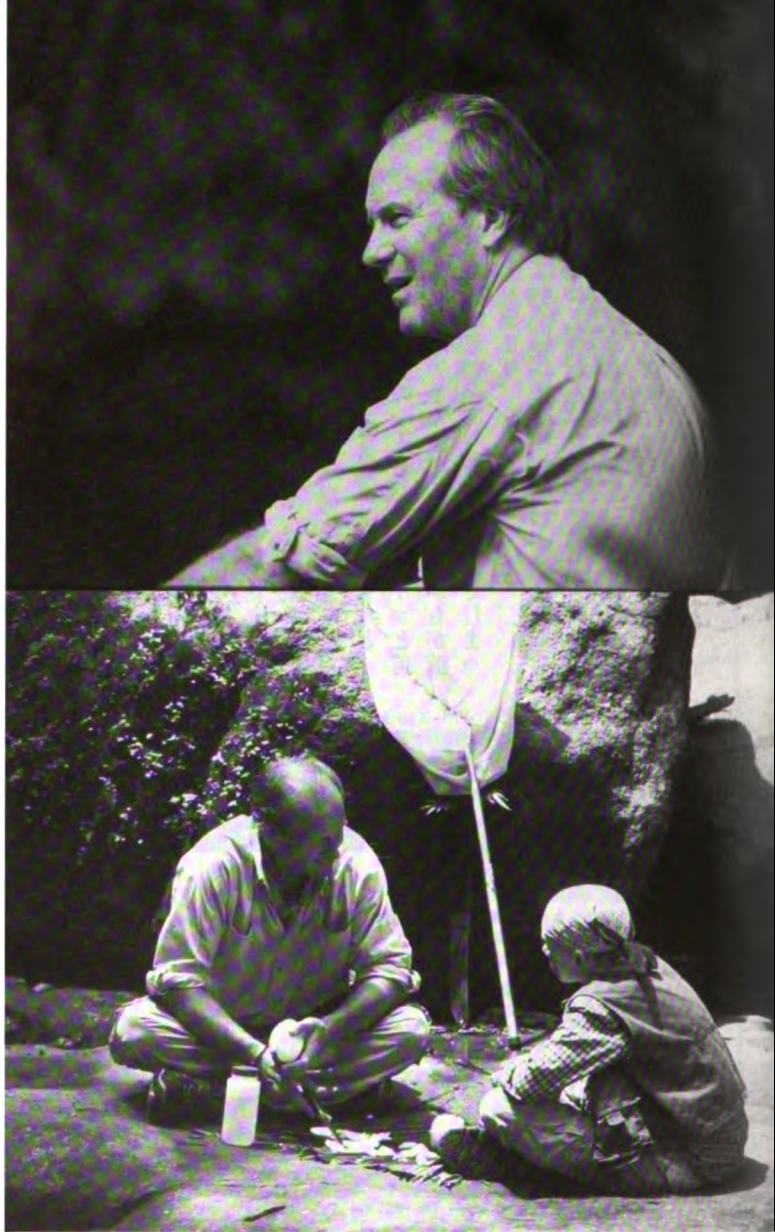
「ウエストナイル病で亡くなった人には悪いけど、だからと言って米国北東部に存在する蚊を全滅させようなんて無茶苦茶だ。生態系を破壊してしまう。それは蚊だけの滅亡の問題ではなく、多くの種の動物を殺すことにつながるんだ。本当にバカげた話だ」

　今回のような映画を作るのも自然保護の思いがあるからだという。自然の多いコスタリカを訪れる人へのアドバイスもしてくれた。

「特別な経験や楽しみを、努力しないで得られることを多くの人が求める。そのため奇跡のような光景もチープな観光イベントになってしまい『奇跡』を殺してしまう。きれいなホテルのない所、田舎に行きなさい。帽子片手に、金だけが全てじゃないという気持ちで、そこにある物を学ぶ姿勢で、そこで遭遇する未知の物事に対して敬意を払う気持ちで臨まなければ」

　その哲学は、少年のガンが不思議と治ったことについての見解と通じるものがある。

「可能性に対してオープンだったことが関係していると思う。我々の理解を超えた事はたくさんあるのだから」

　広重、北斎が好きだというハートは、日本に一人旅をしたこともあるという。思いつきで輪島に行き、全く英語の通じない日々を過ごしたが、それが楽しかったらしい。打ち解けてみれば自然と子供を愛する心優しい人だった。

WILLIAM HURT／1950年米ワシントンD.C.生まれ。父の仕事の関係で少年期は南太平洋で過ごす。が、親の離婚、再婚で生活は一変。当初、神学を学ぶが演劇科に転向。ロンドンと、ニューヨークのジュリアードで演劇を学ぶ。80年、ケン・ラッセル監督「アルタード・ステーツ／未知への挑戦」で映画デビュー。85年、「蜘蛛女のキス」でアカデミー賞主演男優賞受賞。86年「愛は静けさの中に」、87年「ブロードキャスト・ニュース」でも同賞ノミネート。

映画の都を継承する上映会

鎌倉で映画と共に歩む会

文・松本志代里

鎌倉とはかつて映画の都だった。1936年に松竹大船撮影所が開所され、小津安二郎が「晩春」「麦秋」など、鎌倉を舞台に数々の名作を撮った。また、川喜多長政・かしこ夫妻などの映画関係者が多く住み、こよなく愛した街でもある。しかし現在、鎌倉市には1軒の映画館もない。

最後の映画館〝テアトル鎌倉〟は88年に閉館した。当時、映画にゆかりの深い街から劇場が消えてしまうことを惜しむ人たちによって、〝テアトル鎌倉の灯を守る会〟が起こった。その代表の一人として活動した藤本美津子さんは語る。

「閉館しないでほしいという署名が7千人以上も集まり、それをもって鎌倉市にかけあったんですが駄目でした。本社のテアトル東京(株)でも残したいという意見もあったそうですが、経営難に加えて、古い建物が消防法に触れるということがあって」

そして2000年には大船撮影所も閉所に。映画を愛する人々の心に空洞ができてしまう。

「じわじわとくるんですね。映画の香りというのは空気みたいに当たり前にあるものだと思っていたんです。でも撮影所がなくなってしまうと、スーッと何もかもが消えてしまった」

藤本さんは、そんな映画への想いを抱いて、5人の仲間と一緒に「鎌倉で映画と共に歩む会」を発足した。現在は年に2度の映画上映会と川喜多記念館の建設支援に向けて活動している。

テアトル鎌倉閉館の折の活動により、公共施設に35ミリ映写機が設置されたことも、ここにきて大いに役立っている。04年6月25日には「ヘブン・アンド・アース」を上映した。当日は主演の中井貴一も駆けつけ、平日の上映にもかかわらず370名が来場した。映画の撮影記をまとめた著書「日記」のサイン会も行われ、多くのファンが中井の手を包むように握手を求めていた。その時の言葉は〈おかえりなさい〉。

「鎌倉は中井さんにとって、お父様の佐田啓二さんが映画を撮っておられた御縁のある街です。皆さんはそのこともよく知っておられて、消えてしまった映画の香りを、中井さんが身に纏って帰ってらしたように思ったんでしょうね」

独立した自主団体が映画を上映するには、多くの困難がある。書店や喫茶店にチラシやチケットを置いてもらい、会が終わるごとに一軒一軒をお礼と回収にまわるのだそうだ。鎌倉市からは〝後援〟という名前をとりつけても補助金は出ないし、会場費が安くなるわけでもない。しかし広報に告知が出るので、それだけでも助かる。

「映画という性質上、私たちは自由でありたいんです。上映する映画を選ぶときも、自分たちが本当に観たい映画を選んでいます」

藤本さんたちは市民映画館を夢見ている。映画の香りが放たれ、人々が睦まじく語れる場所だ。文化の町・鎌倉に劇場がないのは本当に寂しいことだ。ぜひとも実現してほしいと想う。

「ヘブン・アンド・アース」が上映され、主演の中井貴一が駆けつけた（鎌倉生涯学習センターにて）

—鎌倉で映画と共に歩む会・活動内容—

上映作品

〈2001年〉

1. 大船を去らなかった男——川又昻撮影作品レトロスペクティブ
2. フレデリック・ワイズマン映画祭
3. 2本立ての楽しみ「大江戸五人男」「フィツカラルド」

〈2002年〉

4. 大江戸五人男
5. 山の郵便配達
6. 浅草キッドの浅草キッド

〈2003年〉

7. BALLET アメリカン・バレエ・シアターの世界
8. 折り梅

〈2004年〉

9. ヘブン・アンド・アース
10. 忘れられぬ人々

会報「Monsieur Cinéma」発行（年1回）

協力　鎌倉市主催　川喜多記念館建設等基金推進映画会（年4回）
鎌倉同人会主催　映画鑑賞会（年1回）

—お問合せ—

鎌倉で映画と共に歩む会　(代表)藤本美津子　TEL　0467－23－3935

キネ旬フロント

5年で観客動員50倍

韓国映画上映の老舗シネマコリアの悩み

文・シネマコリア代表　西村嘉夫

今夏もシネマコリア2004が開催される。まだ配給会社が買い付けていない日本初公開の韓国映画を4作品、名古屋・東京・札幌・大阪にて上映。総観客数は4千人以上を見込んでいる。今でこそ、数千人の動員が可能となったが、99年の4月、あの「八月のクリスマス」が劇場公開される2ヶ月前に開催された第1回での観客数はわずか74名。5年で50倍以上という観客数の変化は、そのまま日本における韓国映画の認知度アップを示す一つの指標となりえるだろう。元々、名古屋で始まったシネマコリアだが、02年からは東京と札幌でも開催するようになり、本年からは関西ファンからのラブコールに応える形で大阪でも開催することになった。その他の地域からの開催要請も数多く寄せられている。昨年後半からの本格的な韓流ブームの影響か、地方ファンからのみならず、地方自治体や有力企業からのお誘いが増えたのも今年の特徴だ。

さて、順調に規模を拡大してきたシネマコリアだが、最近困った問題が出てきた。加熱する一方のブームに、シネマコリアとしての供給力が追いつかなくなってきたのだ。昨年「純愛中毒」のチケット前売りを開始したところ東京会場では3日で完売。今年も東京会場でチケットぴあに割り当てた前売券のうち土日分は発売開始1時間で全作品完売と、年々チケットの入手が困難になっている。前売りとは別に当日券の枠を設けるなど、チケットを入手できるチャンスを増やす工夫はしているものの、根本的な解決には至っていない。

「オー！　ブラザース」

また、お誘いはいただくものの、これ以上、地方会場を増やすのは極めて難しい状況だ。なぜか？シネマコリアは映画祭なので、映画を上映する権利を購入しているわけではない。なので、どこで何回上映するかは、韓国の配給会社と逐一交渉しなければならないのだ。非営利の文化交流を目的とした映画祭ということで、韓国の会社は作品を提供してくれるわけだが、その一方でシネマコリアでの上映がきっかけとなって作品の権利が日本の配給会社に売れることも期待しての出品であるので、劇場公開時に悪影響が出ないよう上映回数は必要最小限に、というのが韓国側の立場。無条件に何回でも上映して良い、というわけでは全くないのだ。この問題を解決するには、作品の権利を購入した上で開催するしかないのだが……。既に来年の開催に向けて悩む毎日である。

「春の日のクマは好きですか？」「品行ゼロ」

「先生、キム・ボンドゥ」

—シネマコリア2004—

期間＆会場：
7月31日(土)〜8月1日(日)　名古屋：愛知芸術文化センター
8月7日(土)〜10日(火)　東京：キネカ大森
8月22日(日)　札幌：アーバンホール
8月28日(土)〜29日(日)　大阪：第七藝術劇場

上映作品：
「オー！　ブラザース」(2003年、韓国)
「先生、キム・ボンドゥ」(2003年、韓国)
「品行ゼロ」(2002年、韓国)
「春の日のクマは好きですか？」(2003年、韓国)
※全作品、日本初公開
※札幌会場は「オー！　ブラザース」「先生、キム・ボンドゥ」のみ

お問い合わせ
名古屋会場：アジアスーパーシネセンター　TEL　052-453-3110
東京会場：キネカ大森　TEL　03-3762-6000
札幌会場：月原　TEL　070-5612-1336
大阪会場：第七藝術劇場　TEL　06-6302-2073

公式サイト　http://www.seochon.net/cinemakorea/

キネ旬フロント

第3回トライベッカ映画祭

2004 Tribeca Film Festival, MAY 1 - 9

アメリカ屈指の映画祭になり得る予感

文・吉川マサ

5月9日、第3回トライベッカ映画祭は大盛況のもとに幕を閉じた。42カ国250本以上の作品に加え、パネルディスカッション、ファミリーフェスティバル、懐かしのドライブイン上映、コンサートなど、イベント盛りだくさんの9日間。運営の大混乱ぶりは相変わらずで困ったものだが、第1回を知る者としてはその急成長ぶりには目を見張る。閉会セレモニーで発起人の一人ジェーン・ローゼンタールが、ワールドプレミアの作品数が増えた（第1回めに13本だったのが今年は48本）ことを成功の鍵と呼び、応募作品数も1800本から3300本に増えたと言う。プレミアの本数が増えただけでなく、その作品の質が伴っていたのが重要だ。それなりのレベルの海外からのワールドプレミア作品を集めたことは評価できる。それと同時に、トップレベルの作品とは別に、悪い出来の作品が以前ほどひどくなかったこと、ひどい出来の作品が減少したことが印象的だった。

閉会セレモニー（授賞式）の主役となったのはドラマ部門最優秀作品賞と最優秀新人監督賞のダブル受賞を果たした中国作品「グリーンハット」。これが初監督作である劉奮闘（リュウ・フェンドウ）は脚本家出身。実はこの作品、カンヌ国際映画祭から招待されたのだが、すでにトライベッカへの出品を約束していたので、ワールドプレミアを条件にするカンヌ映画祭を断ってこちらでプレミア上映をしたという曰く付き。それだけのことはある新人とは思えない実力と才能を感じさせる出来栄えで、ダブル受賞も頷ける。去年の受賞作が、既にベルリン映画祭銀熊賞を獲っていた作品だったのと比べ、ここでデビューした作品が受賞に値する秀作だという方が映画祭としては盛り上がるしね。

マーティン・スコセッシ監督から賞を贈られるパウロ・サクラメント監督 ©Bryan Bedder／Getty Images／AFLO FOTO AGENCY

ダブル受賞のリュウ・フェンドウ監督に賞を贈るスコセッシ監督

トライベッカ映画祭の会場前

初監督作がドキュメンタリー部門で受賞したブラジルのパウロ・サクラメントは、マーティン・スコセッシから賞を授与され、「自分のヒーローからもらえるなんて」とスコセッシの腕にもたれて感涙にむせぶ光景もこの映画祭の魅力を示していた。セレモニーの終わりにステージ上に現れた発起人の一人ロバート・デ・ニーロの嬉しそうな姿も印象的で、皆の楽しそうな様子が大成功を物語っていた。

大きな目玉がない印象の今年だったが、それなりにスター、話題作は揃った。デイヴィッド・ドゥカブニーの監督デビュー作「ハウス・オブ・D」(ロビン・ウィリアムス出演)、クレア・デーンズ出演最新作、エド・バーンズ監督最新作など、話題作のワールドプレミアにはスターが集って華やかな面を見せていた。ドキュメンタリーでは南米の巨匠、フェルナンド・ソラナスが政界から映画界復帰後の第一作を伴って参加。会場でグレン・クロースとすれ違って、あ、と思ったら彼女は審査員だったしね。映画祭の大きな魅力は来場する監督・出演者（上映後の観客との質疑応答）なのだが、日本作品は「座頭市」「恋愛寫眞」など作品数が少ない上に、日本からの監督・俳優のゲストがゼロ。なんとも淋しい限りだ。

古い名作の上映も見逃せない。8本上映されたうち、「エデンの東」はこの部門の共同キュレーターであるスコセッシが個人所有しているプリントを提供して実現している。

興味深いパネルディスカッションが多くあるのもこの映画祭の魅力。一番人気はスコセッシが自分の作品について音楽からの影響を語る「スコセッシと音楽」。ほかにもニューヨークの映画人が揃ってニューヨークで映画を撮る魅力とこだわりについて語るもの、ドキュメンタリーで利益を得ることとモラルの問題を扱ったもの、映画でのセックス描写をテーマにしたパネル（出席者の一人はシャロン・ストーン）など幅広いテーマが並んだ。女性の映画界での進出をテーマにしたパネルは会場の90%が女性だったのには驚いたが、映画製作における女性の苦労と視点、そして現状を知る格好の機会だった。

(写真上段左から)映画の中のセックス描写についてのパネル ©Peter Kramer/Getty Images/AFLO FO TO AGENCY/監督のデイヴィッド・ドゥカブニー、ジュリアン・ムーア、ロビン・ウィリアムス ©Scott Gries/Getty Images/AFLO FOTO AGENCY/女性の映画界での進出をテーマにしたパネル ©David S. Holloway/Getty Images/AFLO FOTO AGENCY/クレア・デーンズ、発起人のロバート・デ・ニーロとジェーン・ローゼンタール ©Evan Agostini/Getty Images/AFLO FOTO AGENCY/映画祭クロージングの模様/フロナンド・E・ソラナス(右)

今回の大成功、このまま順調に成長すれば、近い将来サンダンスに肩を並べるアメリカ屈指の映画祭になり得る予感を抱かせた。資金面は主要スポンサーのアメリカン・エキスプレスが全面的にバックアップ（メイン会場のシネコンはアメックス本社の隣）、発起人デ・ニーロ、スコセッシという有名かつ強力な中心人物（と彼らの周囲のスターたち）、ニューヨーク映画界を挙げての後援、9・11後のニューヨーク復興という大義名分と官民合わせた地元の協力、世界の映画関係者に強いつながりを持つ映画祭のディレクター、そして将来につながる地元映画界の振興と若手の育成活動……今後発展していく要素を兼ね備えていることを鮮明に見せつけてくれた。昨年の映画祭開幕の記者会見で、「いつトライベッカはサンダンスに追いつくのか？」と問われ、デ・ニーロは「そんなこと全く考えていない。全然違うものだよ」と答えたが、今年を見る限りその方向に進んでいきそう。さてトライベッカ映画祭が今後どこまで発展するか、ちょっと目が離せなくなってきた。

●クレジットのない写真はすべて吉川氏撮影

「ブリット」

©Thos Robinson/Getty Images/AFLO FOTO AGENCY

©Peter Kramer/Getty Images/AFLO FOTO AGENCY

ラッセ・ハルストレム　ジュリアン・ムーア

マックイーン演じる「ブリット」のキャラクターが現代に蘇る

68年に故スティーヴ・マックイーンが演じたタフガイ刑事「ブリット」を、ウォルフガング・ペーターゼン監督で復活させる計画が発表された。オリジナルは、ロバート・L・パイク原作の“Mute Witness”という小説を、ピーター・イエーツ監督で映画化したもの。今回の計画では、フランク・ブリットのキャラクターは登場するものの、物語は原作に拠らないということで、つまりこれはリメイクではなく、偉大なキャラクターの復活ということだ。現代化させた脚本は、ジョエル・シルヴァー製作“The Brave One”などを手掛けるシンシア・モートが執筆する。因みに、オリジナルでは、サンフランシスコを舞台に、坂道をジャンプしながら疾走するカーチェイスのダイナミックな描写が話題となったものだが、今回の計画でそれは復活するのかどうか。ペーターゼンなら、まずそこを再現しそうな感じだが、期待したいところだ。キャスティングは未定。ただし本作では、オリジナルの権利を故人が所有していたということで、製作には遺児のチャド・マックイーンが参加している。俳優だったこともあるチャドは、現在は40代半ばのはずだが、父親の跡目を継いで復活ということはあるのだろうか。

トム・ハンクス&ジュリアン・ムーア主演ラッセ・ハルストレムが監督する西部劇

ラッセ・ハルストレム監督、トム・ハンクス、ジュリアン・ムーア共演で西部劇の計画が発表されている。作品の題名は“Boone's Lick”。ラリー・マクマトリーの原作から、原作者とダイアナ・オサナの脚色で映画化するもので、開拓時代にミズーリ州ブーンズ・リックからワイオミングの砦まで、夫の後を追って家族を引き連れ、ぼろぼろの幌馬車で向かって行った女性を主人公とした物語。この女性をムーアが演じ、ハンクスは行動を共にする夫の弟役。さらにこの旅には、4人の子供と彼女の父親も加わっているというものだ。そして物語は、彼女と義弟が恋に落ちるという展開になるようだが……。なお計画は、ハンクス主宰のプレイトーンが進めているものだが、実は、監督と主演女優が決定されるまでは計画の存在自体が秘密にされていたということだ。それがようやく発表されたもの。ただし監督には、先にヒース・レジャー主演の“Casanova”の計画が発表されており、今回の計画が直ちに実現という訳ではない。しかし監督からは1年以内に実現したいという意向も伝えられているようだ。いつも圧倒的な迫力でドラマを展開するハルストレムだが、今回はどんな作品となるのだろうか。

WORLD NEWS

「マッハGo Go Go」

「ハリー・ポッター」演出中のクリス・コロンバス

エディ・マーフィ

©Carlo Allegri／Getty Images／AFLO FOTO AGENCY

懐かしの和製アニメ『マッハGo Go Go』の実写版映画化計画

前回の『鉄腕アトム』に続いて、こちらも待望久しい日本アニメーションの実写ハリウッド版の計画で、『マッハGo Go Go』"Speed Racer"に新しい動きが公表された。因みにこの計画、元はトム・クルーズやジョニー・デップの出演も検討されたが、レースシーンの再現に巨額の製作費が予想され、レースシーンを最小限とする計画変更が迫られていた。そこで今回公表されたのは、"Dodgeball"が全米第1位を記録したばかりのヴィンス・ヴォーンが立てた企画で、原作アニメの大ファンという彼は、主人公の行方不明だった兄を演じることになっている。そして物語は、兄の出現を巡る家族ドラマを中心とし、これなら映画化も可能なものになるということだ。とは言えこの作品にレースシーンは欠かせないはずで、それをどうするのか、完成が楽しみだ。

クリス・コロンバス コミックスの映画化で監督業に復帰

「ハリー・ポッター」の第3作以降は製作に廻ったクリス・コロンバスの、監督復帰の計画がユニヴァーサルから発表された。計画されているのは、"Sub-Mariner"というマーヴルコミックス原作の映画化で、海洋王国の王子を主人公とした冒険物語。海洋汚染や、侵略、戦争などを扱った壮大な内容ということだが、主人公は必ずしも人類の味方ではないようだ。またこの主人公は、実はコロンバスが長年フォックスで進めていた"Fantastic Four"の登場人物でもあるそうだが、独立したシリーズでも発表されているということで、今回はその独立シリーズの映画化ということになる。因みにコロンバスは、"Fantastic Four"の計画からはすでに離れたようだが、関連した計画を他社で進めるとは、よほどこの原作に愛着があるということなのだろうか。

父親役が板についたエディ・マーフィに新たなコメディ企画浮上

「シュレック2」では久々のマシンガントークが炸裂、活きの良い声を聞かせてくれたエディ・マーフィの出演で、シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』をモチーフにしたタイトル未定の計画が、ドリームワークスから発表されている。ただしこの計画、実は恋人たちの両親の視点から描いたお話ということで、最近は「チャーリーと14人のキッズ」などで父親役が板に付いてきたマーフィにはピッタリの作品になりそうだ。脚本は、70年代のマーフィの『サタデー・ナイト・ライヴ』時代からの盟友で、「ナッティ・プロフェッサー」なども手掛けたバリー・ブラウスタインとデイヴィッド・シェフィールド。息の合ったコメディを期待したい。なおマーフィの次回作には、レヴォリューションで「チャーリー～」の続編"Daddy Day Camp"が予定されている。

http://www.enpitu.ne.jp/usr4/47635/も見てください。

A　S　I　A

ワールド・ニュース｜アジア｜暉峻創三　Sozo Teruoka

2004年のスポークスマンにはレオン・ライを起用。

香港電影金像奨にて最優秀女優賞のセシリア・チャン

釜山への対抗軸めざす香港国際映画祭

すでに28回の歴史を誇り、とりわけアジア映画の情報発信拠点として長年代表的な地位を誇ってきた香港国際映画祭が、近年、釜山国際映画祭と韓国映画の台頭に押されて、若干その存在感に危険信号が灯り始めていたことは、本誌でも嘗て触れたことがある。

その危機の打開策として、ここ数年、同映画祭はコンペティション部門の導入、映画祭運営の独立性確保をはじめとする、プログラム、行政両面からの改革を断続的に挙行してきたが、来年はその断続的な改革の一つの完成形がついに本格的な姿を現す年となる。

釜山国際映画祭がアジアを名実共に代表する映画祭として発展し、世界中の映画人が集まる賑わいにも恵まれたのは、そのプログラミングの秀逸さに加えて、ＰＰＰというアジア映画の企画マーケットが始められたことによる部分も大きい。それに対して香港国際映画祭は基本的には上映オンリー型の映画祭として専らそのプログラミングの秀逸性で評価を集めてきたイベントであり、見た目の派手さや、業界人が商取引を繰り広げる場としての機能には劣っていた。

これが来年度から、現行のプログラミング上の売りの部分はそのまま維持しつつも、多分に釜山の成功を意識したと思われる統合的な映画イベントへと変身を遂げる。まず香港国際映画祭の開催期間である３月22日から４月６日までを〈香港影視娯楽博覧〉（エンタテインメント・エクスポ）という名称で映画・映像関係の博覧会週間に設定。その期間に、国際映画祭を始めマーケットから映画賞まで多数の映画イベントを集中開催する計画だ。具体的には、アジア映画を中心とするフィルム・マーケットＦＩＬＭＡＲＴを３月22日から24日にかけて開催、また01年に一時的に開催されて好評を博したＰＰＰ型のアジア映画企画マーケットＨＡＦ（香港アジア・フィルム・ファイナンシング・フォーラム）もＦＩＬＭＡＲＴの一部門として同時開催する。そして３月27日には、香港のアカデミー賞とも呼ばれる香港電影金像奨も、同エクスポの一環として開催。ほかにＰＣゲームやデジタル・アニメなどデジタル系映像を対象として開催されてきた香港数碼娯楽傑出大奬コンペも、期間中に開催される予定となっている。

10月開催の釜山に対しこの時期の香港はちょうど６カ月の時を置いた絶好のタイミング。香港国際映画祭は釜山の対抗軸的重要映画祭として定着していくことになるだろう。

WORLD NEWS

「マクダルの話」

「麥兜　菠蘿油王子」

ベールを脱いだ「マクダル」第二弾

「マクダルの話」（02年東京国際映画祭〈アジアの風〉で上映）で香港アニメの底力を見せつけたブライアン・ツェー（原作）、アリス・マク（原画）、トー・ユエン（監督）コンビによる待望のマクダル映画第二弾、「麥兜　菠蘿油王子」が6月末、ついに香港で公開された。前作「マクダルの話」が、その前に彼ら制作チームによって作られ一世を風靡する大成功作となっていたテレビ・アニメ・シリーズ『春田花花幼稚園　マクダルとマクマグ』の言わば総集編的な企画、物語内容であった（さらに『春田花花〜』自体も、その前に原作者らによって書かれた本のアニメ化だった）のに対し、今回の「麥兜　菠蘿油王子」は、本作のために新たにブライアンによって書き下ろされたオリジナル・ストーリーのアニメ化だ。

アヌシー国際アニメ映画祭でのグランプリをはじめとする前作の世界的成功を反映して、今回の新作にはその自信を基にした渾身の野心作、とでも言った匂いが充満している。これまで登場することのなかったマクダルの父が初めて登場し、最後にはチェロ奏者のヨーヨー・マまで登場するその難解なストーリーを要約することはとても一筋縄には行かないが、単なる子供向けのお話というイメージを大きく逸脱し、香港の歴史、現在、そしてその社会の行方にがっぷり四つに関心を寄せた気迫には、ただただ感動しないわけにはいかない。時に政治的とも見なせるほどのその社会性は、到底子供に理解され、興味を持ってもらえるものとは思えないが、それでも子供たちはこの新作に釘付けとなり、大爆笑し続けているのもまた、何か奇跡のようだ。

映画はマクダルの父が語る香港の過去（そして現在への絶望）、母が行動で示す現在への現実的な生き方、そしてそのなかでビンボーゆすりを持病として抱えながら育つマクダルを、時代と舞台を自在に交錯させながら描いていく。その点では、続編と言いつつも、徹底して現在の香港のローカルな話であった前作とは好対照をなしさえする。だがそれでも前作と共通するのは、なおも希望は捨てたくないという作者たちの固い意思の存在だ。

なお「春田花花幼稚園」はすでに日本の一部ケーブルＴＶで放映開始。それに合わせて開設されたウェブサイト（http://www.chooch.tv/haruda-hanahana/index.html）では、この最新劇場アニメに言及したブライアンのインタビューも近日中にアップされる予定だ。

イ・チャンドン

パク・ヘイル

アン・ソンギ（中央）らが反対運動に参加

イ・チャンドン監督 文化観光部長官を辞任

ノ・ムヒョン政権発足と同時に文化観光部長官に就任したイ・チャンドン監督が、6月30日に行われた内閣改造にともなって長官を辞任した。就任中は気さくな人柄そのままに、権威主義と形式主義の一掃に力を入れたため、部内での自由な討論や、現場とのコミュニケーションが活発化し、職員達の評価も高かったという。政策面では、文化芸術政策のフレームと実践可能な具体案を盛り込んだ"文化ビジョン"や、"新しい芸術政策"など、今後の文化芸術政策の指針となるような成果を残した。しかし、映画監督でもある長官が、在任中にスクリーンクォーター制の縮小を発表しなければならなかったなど、現場と政策担当者の壁も大きかったようだ。今後は、監督業に復帰するということで、次回作の完成が待たれる。

パク・ヘイル注目の次回作は"韓国版"「ビッグ」

「殺人の追憶」での不気味な容疑者役も記憶に新しいパク・ヘイル。韓国では「スキャンダル」のチョン・ドヨンと共演した「人魚姫」が公開され、日本でもラブ・ストーリー「菊花の香り」の公開が控えているが、早くも次の出演作が決まった。"韓国版"「ビッグ」ともいわれる「13歳の恋人」は、貸し漫画屋で働く女性への強い思いから青年の姿になった13歳の少年の話。映画の中では"年上キラー"として知られるパク・ヘイルが、トム・ハンクスばりの名演を見せてくれるかどうか楽しみだ。一方、彼と並ぶ若手演技派でイム・グォンテク監督の「下流人生」でも好演したチョ・スンウは、舞台で『ジキルとハイド』を演じる。「ラブストーリー」と「H」での彼の豹変ぶりから考えて、こちらも期待の高まる作品だ。

スクリーンクォーター制縮小に反対する映画人たちのCD

文化観光部がスクリーンクォーター制縮小に向けた動きを示したことに対し、反発する映画人たちがCDを録音することになった。アン・ソンギ、パク・チュンフン、パク・ヘイルらの俳優、「悪い男」のキム・ギドク、「JSA」のパク・チャヌク、「殺人の追憶」のポン・ジュノ、「春の日は過ぎゆく」のホ・ジノらの監督、プロデューサーを含む20人が参加し録音するのは『スクリーンクォーター連帯歌』。この曲はスクリーンクォーター守護活動の様子を収めたドキュメンタリー映像やCFなどと共にCD化され、広報用に配布されるほか、「韓米投資協定阻止とスクリーンクォーターを守る映画人対策委員会」のホームページからもダウンロードすることができるようになる。

ソウル週末興行成績 6.28-7.4

順位	作品（公開日）	動員
❶	「スパイダーマン2」（6月30日）	17万1514人
❷	「シュレック2」（6月18日）	11万人
❸	「人魚姫」（6月30日、韓国）	5万6509人
❹	「知り合いの女」（6月25日、韓国）	4万5000人
❺	「デイ・アフター・トゥモロー」（6月4日）	2万8150人
❻	「霊」（6月18日、韓国）	1万6600人
❼	「トロイ」（5月21日）	1万2300人
❽	「俺も行く」（6月25日、韓国）	5300人
❾	「モンスター」（6月18日）	1950人

E U R O P E WORLD NEWS

| ワールド・ニュース | ヨーロッパ | 吉武美知子 | Michiko Yoshitake |

"Poligono sur"

歌い踊るジプシーたちの生活に密着したドキュメンタリー

全編からフラメンコが溢れ出るドキュメンタリー"Poligono sur"は、セビリア南部に住み着いたジプシー集団の中にカメラ（ジャン＝イヴ・エスコフィエの遺作の1本）を持ち込んで彼等の日々の生活を追う。驚いたことに、この映画に見る限り、彼等は常に歌い踊り音楽浸けで暮らしているのだ。まさに老若男女、誰しもが直ぐに歌い出す。それも鼻歌ではなく力唱。そして皆んな、やたらに上手い！　全員がプロと言える歌唱力で、これがジプシー文化というものかと唸ってしまう。男達は老いも若きもいつも道端やカフェにたむろしていて、女性の姿は希。たまに出てくる女性達は、男達に比べてピシッとしていて威厳がある。ジプシー社会は一見マッチョに見えるが実は女性が実権を握っているようだ。監督はドミニク・アベル（女性）。

"Le rôle de sa vie"

近年のフランス映画の凡庸さを物語るアニエス・ジャウイ主演作

最近のフランス映画は、平均的な出来で凡庸な映画が多すぎる。今をときめくアニエス・ジャウイ（女優・脚本家・監督、最新作「みんな誰かの愛しい人」がカンヌで脚本賞を受賞）と、30代の女優の中で突出して来た感のあるカリン・ヴィアールを競演させて、スター女優とその秘書となる平凡な女性の関係の変遷を描く。ありがちでいて料理のしようによっては幾らでも面白くなりそうなテーマに挑戦した"Le rôle de sa vie（彼女の人生の役割）"もまた、破綻なく流麗に物語が綴られるだけで、特に何も観客の心に残さず目の前を通りすぎて行った1本だ。フランソワ・ファヴラ監督の初長編であるが"熱"が感じられない。TVのプライムタイムでかけられる映画にだけファイナンスが集まる昨今のフランス映画界のヤバイ傾向を代表する1本。

"Illumination"

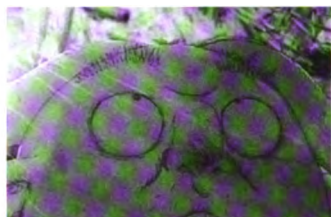
地味だがキラリと光るパスカル・ブルトンの初長編作

「彼女の人生の役割」と比較するとセールスポイントに欠け、案の定、闇から闇に葬られてしまった"Illumination（イルミネーション）"は素通り出来ない作品だった。主人公のイルダットを見ているとちょっと苛々して来る。全く現代社会に適応していない青年で、反応が鈍いのか内気な性格なのか、こちらが期待するような行動に出てくれないのだ。そんな彼がクリスティナに一目惚れする。もちろん彼女へのアプローチもぎこちなかったり唐突だったりするのだが。でもこの恋が彼を少しずつ変えて行く。地に足が着き、自分の人生探しを始める。真摯に前向きに舵を取るイルダット、その姿勢がこの映画の姿勢でもある。地味のどこが悪い？　と言いたくなる。パスカル・ブルトン（女性・初長編）監督の映画界の現況に迎合しない気概が頼もしい。

【お詫びと訂正】7月上旬号19ページ当欄右段16行目の「10話」を「10 ON TEN」と訂正させていただきます。著者並びに読者、関係者のみなさまにご迷惑をおかけしたことをお詫びします。

「世界の中心で、愛をさけぶ」撮影中の篠田昇カメラマン(右)

カメラマン、篠田昇さん死去

岩井俊二監督の「Love Letter」や行定勲監督の「世界の中心で、愛をさけぶ」などで知られる名カメラマン篠田昇氏が6月22日、肝不全のため亡くなった。52歳だった。篠田さんは85年、相米慎二監督の「ラブホテル」で撮影監督としてデビューし、井筒和幸監督、岩井俊二監督らと約40本の映画を手がけた。27日、東京・信濃町の千日谷会堂で営まれた通夜では木村拓哉、歌手の浜崎あゆみ、遺作となった「世界の中心〜」の大沢たかお、柴咲コウ、長澤まさみら約1000人が参列。最もたくさんの作品でコンビを組んだ岩井監督が葬儀を演出。映画の撮影現場のようなセットが組まれ、愛用のカメラが飾られた。「北の零年」を撮影中の北海道から駆けつけた行定監督は大沢と肩を抱き合って、泣き崩れ、「代わりがいない人。信じられない」と目を真っ赤にしていたという。

「頭山」

「頭山」がザグレブ映画祭で最高賞

山村浩二監督の短編アニメーション映画「頭山(あたまやま)」が第16回ザグレブ国際アニメーション映画祭（クロアチア、6月14日〜19日）のグランドコンペティション部門で最高賞グランプリを受賞した。同映画祭は国際アニメーションフィルム協会（ASIFA）が公認するもので、2年ごとに開催。フランス·アヌシー、オタワ、広島とともに重要な位置を占めている。もともとはカンヌ映画祭のアニメーション部門から独立した。「頭山」は頭から桜の木が生えた男の悲喜劇を描く同名落語をモチーフにした約10分の作品。米アカデミー賞短編アニメーション賞にノミネートされ、昨年6月にはアヌシー映画祭でグランプリを獲得した。同部門には77本が出品されていた。昨年、宮崎駿監督はこの映画祭で功労賞を受賞。84年に、故・手塚治虫さんがグランプリを受賞している。

野沢尚氏

野沢尚氏が自殺

映画「その男、凶暴につき」「ラストソング」「破線のマリス」、TV『青い鳥』『眠れる森』などで知られる脚本家、作家の野沢尚氏が6月28日、東京·目黒区内の事務所で首吊り自殺した。44歳。遺書が残されていたが、内容は明らかになっておらず、動機などは不明。20年来の付き合いになる鶴橋康夫ディレクターが受け取ったメモには「夢はいっぱいあるが、お先に失礼します」と書かれていたという。野沢氏は83年、「Vマドンナ大戦争」で城戸賞に準入賞したことを機にデビュー。脚本から小説と活動の幅を広げた。最近はNHKの大河ドラマ『坂の上の雲』(07年以降放送）の第1稿を書き上げたほか、吉川英治文学新人賞を受賞した自作『深紅』の映画化企画が進むなど順調だったという。7月4日、東京·築地の本願寺で営まれた葬儀には役所広司、鈴木京香、妻夫木聡ら約550人が参列した。

WORLD NEWS

「木村威夫さんの出版を祝う会」より

木村威夫、出版パーティに映画人が集合

日本の映画美術界の重鎮で、現在公開中の「夢幻彷徨」では監督も手掛けた木村威夫氏が、自身の仕事をまとめた『映画美術　擬景・借景・嘘百景』(ワイズ出版刊／4410円)を上梓、6月27日には、東京・赤坂プリンスで『木村威夫さんの出版を祝う会』が行われた。席上で熊井監督が「木村さんがいないと困るんです。なのに木村さんは忙しい方で、いつも独占できないのですが、一度だけ『深い河』のインドロケでは、さすがに他の作品に行けず、ようやく僕の作品に専念したもらえました」と冗談を交えてスピーチしたのをはじめ、黒木和雄、原田芳雄、奥田瑛二、秋吉久美子、桂小金治、中野良子、薬師丸ひろ子、佐野史郎ら多彩な顔ぶれの映画人が、それぞれに木村氏の功績を称えた。本書は木村氏が映画美術60年に携わった作品の、さまざな技術を語ったもの。

「ホテル　ビーナス」受賞会見より

「ホテル　ビーナス」モスクワ映画祭で栄冠

SMAPの草彅剛が主演した「ホテル　ビーナス」(タカハタ秀太監督）が第26回モスクワ国際映画祭(6月18〜27日)の新人監督作品を対象に今年新設された「パースペクティブ部門」で最優秀賞を受賞した。タカハタ監督は「映画の製作に協力してくれた多くのスタッフに感謝したい」と喜んだ。応援団として同行した稲垣吾郎、香取慎吾とともに映画祭に参加した草彅はひと足先に帰国。受賞の知らせは飛行機に乗り込む直前、空港の喫茶店で聞いたそうで、関係者と抱き合って喜んだ。「取れると思わなかったので、びっくり。機内でだんだん実感して、ちょっと感動して涙が出ました」と話した。同部門は主演男優賞はなく、監督に贈られる最優秀賞が最高賞。全編韓国語セリフで臨んだ草彅は舞台挨拶前には「本当に作品賞が取れればうれしい」と話していたが、それが現実になった。

MO VIE!! OCTOBER 2004

東京国際映画祭で黒澤明賞新設

第17回東京国際映画祭(10月23〜31日)の角川歴彦ゼネラルプロデューサー＝角川ホールディングス社長＝は、その年に世界で活躍したプロデューサーと監督を対象にした「黒澤明賞」を新設すると発表した。賞金はコンペ部門のグランプリと同額の10万ドル（約1100万円）を予定。映画祭最終日に授賞式を行う。角川GPと高井英幸・財団法人東京国際映像文化振興会理事長＝東宝社長＝の新体制で、改革に積極的に取り組んできた。ベルリンやカンヌなど海外の映画祭を視察してきた角川GPは「映画祭のグローバリゼーションの一環として、今年は六本木ヒルズ・渋谷BunkamuraのWメイン会場展開、フィルムマーケットの同時開催がある。さまざまな映画祭が群雄割拠するサバイバル・ゲームの中で、東京国際映画祭を成功させたい」と意気込んでいる。

日本映画製作情報

World News Japan

成島出監督作第2弾撮影中

「笑う蛙」「T.R.Y.」「新仁義なき戦い／謀殺」などの脚本を手掛け、初監督作品「油断大敵」では藤本賞・新人賞を獲得した成島出が、監督第2作「フライ，ダディ，フライ」(製作：配給：東映／製作協力：セントラル・アーツ)を撮影している。

作品は、2001年度の映画賞を総ナメにした「GO」の原作者・金城一紀が書き下ろしたオリジナル脚本(自身による小説は講談社より刊行)の映画化。オチコボレ高校生と中年サラリーマンの奇妙なひと夏の交流を描く。

撮影にあたり成島監督は「この映画の脚本を読んで、主人公の2人が他人であることにも関わらず、親子とも友人とも取れる信頼関係を築き、お互いが強くなる過程を描いてみたいと思いました。こんな時代だからこそ、誰もが楽しめる愚直で胸のすくような映画を目指したいと思います」と話している。

主人公の高校生に扮するアイドルグループ・V6の岡田准一は「金城さんの小説がもともと好きで『フライ〜』を読んで、すごくこの作品に出演したいと思っていました。実現してとても嬉しいし最高の光栄です」

中年のサラリーマンを演じる堤真一は「父親の役は初めて。娘のために頑張るお父さんの姿を父親世代にも子供達にもぜひ観て欲しい」と語っている。

共演は、松尾敏伸、坂本真、愛華みれ、星井七瀬、須藤元気、モロ師岡、塩見三省ら。

作品は今秋完成し、2005年春以降、全国東映系公開予定。

少年犯罪をテーマにした浅野忠信最新作

浅野忠信が主演する社会派ドラマ「ニケの風(仮題)」(製作：ワコー、パル企画)が6月クランク・アップした。

本作は、黒木和雄監督の「スリ」「美しい夏キリシマ」の助監督を務めた日向寺太郎監督が初めてメガホンをとるもので、お互いの心の傷を抱えた新婚夫婦が、ようやくつかんだ幸せを少年犯罪によって壊され、犯人である少年への復讐と慈悲の間で揺れ動く夫の姿を描く問題作。脚本は、日向寺監督の原案をもとに加藤正人が執筆。

出演は、主人公の夫・民郎に浅野忠信、妻・亜弥子に小田エリカ、民郎の幼馴染のマリに池脇千鶴、殺人を犯す少年に小池徹平、他に宮下順子、烏丸せつこ、香川照之、小倉一郎ら。

スタッフは、撮影・川上皓市、美術監修・木村威夫、美術・丸尾知行、録音・弦巻裕ら。

公開は2005年春、全国にて。

「仮面ライダー」シリーズ最新作

東映配給「劇場版仮面ライダー剣(ブレイド)／MISSING ACE」「特捜戦隊デカレンジャー THE MOVIE フルブラスト・アクション」の製作発表が7月8日、東京・丸の内の東京会館で2作品のスタッフ・キャストが出席して行われた。

シリーズ4作目を迎える「仮面ライダー剣(ブレイド)」は、TV作品の世界観を受け継ぎつつ新たな物語として製作。普通の若者に戻った主人公たちと劇場版オリジナルライダー、そして再び甦ったアンデッドとの三つどもえのバトルを最新の特撮技術を駆使して描く。石田秀範監督は「パワフルでスタイリッシュな絵(シーン)がとれている」と語っている。キャストは椿隆之(ブレイド)、森本亮治(カリス)、黒田勇樹(グレイブ)、杉浦太雄(ランス)ら。

併映作「特捜戦隊デカレンジャー〜」は、戦隊シリーズ初の刑事もの。宇宙警察地球署に配属された5人の刑事たちの活躍を描く特撮アクション。キャストは、載寧龍二、林剛史、石野真子らに加え、新山千春、遠藤憲一がゲスト出演。「ハリケンジャー」に続いて劇場版2度目のメガホンとなる渡辺勝也監督は「上映時間は38分で密度の濃い作品になっている」と語っている。

製作は東映、東映アニメーション、テレビ朝日、東映ビデオ、アサツーDK、東映エージェンシー、バンダイの7社。8月に完成、9月11日全国東映系公開。

作品特集

シュレック2

SHREK 2

●2004年・アメリカ・カラー・ビスタサイズ・DTS、SRD、SDDS・1時間33分

●監督／アンドリュー・アダムソン、ケリー・アズベリー、コンラッド・ヴァーノン　製作総指揮／ジェフリー・カッツェンバーグ　製作／アーロン・ワーナー、デイヴィッド・リップマン、ジョン・H・ウィリアムス　脚本／アンドリュー・アダムソン、ジョー・スティルマン、J・デイヴィッド・ステム、デイヴィッド・N・ウェイス　原作／ウィリアム・スタイグ　音楽／ハリー・グレグソン・ウィリアムス　音楽監修／クリス・ドゥリダス

●声の出演／マイク・マイヤーズ(濱田雅功)、エディ・マーフィ(山寺宏一)、キャメロン・ディアス(藤原紀香)、アントニオ・バンデラス(竹中直人)、ジュリー・アンドリュース、ジョン・クリース、ルパート・エヴェレット、ジェニファー・ソーンダース、ラリー・キング(ジョン・カビラ)

●配給／ＵＩＰ

●７月24日より日比谷スカラ座１ほか全国東宝洋画系にて公開

●KELLY ASBURY(左)／「プリンス・オブ・エジプト」(98)、「チキンラン」(00)、「シュレック」(01)に参加。「スピリット」(02) で監督デビューを果たす。
●ANDREW ADAMSON(中)／視覚効果として「トイズ」(92)、「トゥルーライズ」(94) に参加。前作「シュレック」が監督デビュー作となる。
●CONRAD VERNON(右)／「アンツ」(98)、「エル・ドラド／黄金の都」(00) のストーリーボードを担当、本作で監督デビュー。

「シュレック2」の生みの親

アンドリュー・アダムソン ケリー・アズベリー コンラッド・ヴァーノン 監督インタビュー

――取材・文＝横森文

みんなで話し合ってアイデアを練る

実は前作の時に取材でドリームワークスのスタジオを訪れた時、スタジオにはたくさんの〝長ぐつをはいたネコ〟の絵が飾られていた。そんな風に以前から続編のアイデアはかなり練り込まれていた様子。そこで3人の監督に続編が作られるまでの経緯を聞いてみた。

アンドリュー(A)「あれはレイアウト担当がアイデアを出した時の絵だよ。僕は小さい頃から『長ぐつをはいたネコ』のキャラクターが好きだったんだ。もともとの話の中にネコが怪物を退治する話があるから、これは『シュレック2』にいいぞと思った。実は頭初イギリス上流階級のキャラクターで考えていたんだ。パート1ですでに悪人をやったし。コンラッドがいろいろ考えている間に、長ぐつをはいたネコは〝ゾロ〟バンデラス！っていう風に思いついたんだ」

ケリー(K)「アンドリューとコンラッドは〝長ぐつをはいたネコ〟のアイデアをたくさん出しあってたよ」

A「毛玉を吐くのはコンラッドのアイデアだったよ。とにかく彼はとってもおかしなヤツなんだ」

K「彼も毛玉をたまに吐くしね(笑)」

――ではひょっとしてあのウルウルした目になるシーンもコンラッドさんのアイデア？

コンラッド(C)「そうだね。ネコって怒られた時にああいう顔をしないかい!? 思わずすべてを許したくなるような」

K「実は最初、ネコの目は全体的に完成品とは違っていたんだよ。でもバンデラスが声を担当することになって変えたんだ。なにしろバンデラスといえば目が印象的だからね。彼の目もとにキャラクターの目を近付けたんだ。それと姿

「シュレック」愛の奇跡

文＝山下慧

「シュレック」

醜い怪物シュレックが囚われのフィオナ姫と結ばれるまでを、古典的おとぎ話のパロディを基調して描いたファンタジー。己の醜さを自覚した心やさしいシュレックが、領主ファークアード卿との取り引きにより、ロバのドンキーを相棒に冒険に出発、おとぎ話通りの結婚を求めていたフィオナと恋に落ちる。その彼女は夜に醜い姿となる呪いをかけられていて、最終的に二人とも醜い姿で結ばれるという展開。原作はウィリアム・スタイグの絵本『みにくいシュレック』だが、姿も心も醜い怪物の嫁探し冒険譚から、『美女と野獣』をふた捻りしたかたちにアレンジされた。おとぎ話キャラクターの追放という導入部に象徴されるように、それは、ディズニー・アニメ的な〝古典的おとぎ話の否定〟であり、かつ内面の美やありのままの自己肯定といった主題が組み込まれた〝現代的おとぎ話の再生〟である。全体は個性的キャラクターによるコメディを基調とし、パロディ満載の娯楽作に仕上がった。人間キャラを本格的に登場させた3DCGアニメーションとしての技術力も高く、実写映画のキャメラワークを採用した点が意欲的。米国の興行は大成功、アカデミー賞長編アニメーション部門作品賞も獲得した。

シュレック
●頑丈な身体と強力なパワーの持ち主。見かけによらず思いやりと勇気を心の底に秘める。

ドンキー
●達者な口で、ドラゴンの心も捉えてしまったおしゃべりロバ。シュレックのよき相棒でもある。

勢もバンデラスに合わせて変えることにしたんだよ」

——相当に力が入ったキャラクターですよね。ひょっとしてみんなネコ好き？

K「皆、ネコ好きさ。僕は2匹飼ってる」

C「僕は妻がネコ・アレルギーだから今は飼っていないけどね。昔は飼ってたよ」

——パロディなどネタがたくさんありますけれど、そのアイデアの出し方は？

A「とにかく皆で集まってブレインストーミングするんだ。監督や脚本家、皆でアイデアを出すんだよ。例えばスターバックスなどは、シュレックを沼地とは正反対のところに行かせたいという思いから考えたんだ。もちろんスターバックスから許可はもらったけどね。映画のパロディは別に全部が全部好きな作品ではないんだ。正直、バカにしてやりたいと思った作品もあったし。もちろん好きだからオマージュしたのが多いけど」

C「例えばハネムーン・シークエンスなんて相当にアイデアを出したよ。100個出しては4つがOKになり、次に100個出しては2つが採用になる。そんな感じだったからね」

K「一番完成させるのに時間が掛かったのもハネムーン・シークエンスかな」

C「いやいや、レッド・カーペットのシーンさ。だってあそこでは鳩が飛ぶわ、紙吹雪は舞うわ、群衆はいるわ。お城に旗もはためいているし。ものすごく複雑だった。あそこだけで4～6カ月くらいはかかったよ。全体で3年～3年半だから、その長さがわかるだろ？」

K「ほとんどのシーンは3～4週間で出来上っているからね」

C「最終的な決定権は誰か1人ということはないんだ。皆とコンセンサスを取りながらだ。誰か1人がいいと思っていても、他の人達が〝え～〟って不満の声をあげたらもうダメだし。基本的には多数決さ」

A「ただ途中から僕は別のプロジェクトで忙しくなったので、ケリーがイニシアティブをとるようになったんだよね」

K「そう、ドリームワークスは皆がアチコチに関わるのさ。例えば僕は「シュレック」に1年10カ月ほど関わって、その後「スピリッツ」の仕事をし、それが終わってから「シュレック2」の仕事についたんだ」

——皆がそうやってアチコチの作品に関わっているとビシッと柱が通らないのでは？

K「感覚的にはラジオでAMとFMをカチカチ変えているようなものだから平気さ」

——気になるパート3だけど。

A「1作目でシュレックは愛されることを知り、2作目で人を愛することを知る。3作目では、自分自身を愛するということを知るんだ。子供がいる方にはわかると思うけど、親になる前にまずは自分自身を知って愛するのが良いってこと。それがヒントかな」

K「多分、僕は次は関わらない。僕はクライヴ・バーカーの子供用ファンタジー・フィルムを作りたいな。ただし実写でね」

C「僕もしばらくはタヒチあたりでゆっくりしたいな。その後はわからない」

A「僕は次は「ナルニア国物語」に着手するよ。プロデューサーが「シュレック」を見て僕の仕事を気にいってくれて話が舞い込んだんだ。楽しみだよ」

「シュレック4-Dアドベンチャー」

テーマパークのユニバーサル・スタジオ・ジャパンで体験できる多感覚体感型アトラクション。3-D立体映像と、シアターや座席シートに装備された特殊効果システムとが組み合わされ、独自の映像世界を体感できる。物語の内容は「シュレック」と「シュレック2」を橋渡しする展開になっていて、映像制作は映画と同じくPDI／ドリームワークスのスタッフが担当、声優も一部を除いて同じキャストが登板した。約7分間のプレショーでは、前作ラストでドラゴンに食われたファークアード卿の幽霊が登場してショーの設定を説明、続いてメインシアターにて12分間の3-D映像を体感する。シュレックとフィオナ姫はドンキーを伴って新婚旅行へ出発、しかしファークアード卿の幽霊がフィオナを誘拐し、シュレックたちはドラゴンに乗って姫奪還の冒険に出るというストーリー。この映像に合わせ、座席は揺れ、香りやシャボン玉が辺りに漂い、脚までくすぐられるといった仕掛けだ。必ずしも映画とアトラクションをセットにすべきではないが、こうしたアトラクションはテレビ版やゲーム版と同様に映画シリーズを補完し、一方で、映画がアトラクションをより愉しませるといった関係において有効に機能する。

アニメーション制作にはルールがない

製作総指揮 ジェフリー・カッツェンバーグ インタビュー

取材・文＝永野寿彦

JEFFREY KATZENBERG／スティーヴン・スピルバーグ、デイヴィッド・ゲフィンとともに映画スタジオ・ドリームワークスＳＫＧを設立。現在、同スタジオのプリンシパル・パートナーを務める。

ドリームワークスのアニメーション部門のトップとして、「シュレック2」の製作総指揮を務めるジェフリー・カッツェンバーグ。本国アメリカでは古巣であるディズニー作品の記録を軽々と追い抜き、アニメ史上最高ヒット作だったピクサーの「ファインディング・ニモ」の座をも奪った本作の記録的大ヒットにはかなり満足しているらしく、目の前に現れた彼も今までにないほどご機嫌な様子。そんな彼によれば、そのヒットの要因は「前作よりも共感できるストーリー」とのこと。

「家族や嫁姑問題、人間関係などテーマも普遍性のあるものだし、個性豊かなキャラクターたちにも共感できる。それに面白いし、おかしいしね。1作目もかなり面白かったと思うんだけど、それよりも面白かったって言われるよ。大体続編というと繰り返しになってしまって、マンネリ化するんだけど、この映画には新しい驚きの要素がいっぱいあるんだ。続編の陥る落とし穴にハマらなかったのがヒットした要因だろうね」

それは続編製作が決まった時には、もうすでに考えられていたことであり、最初から狙っていたことだったという。

「前作が終わった時点で、色んな疑問が残ったと思う。フィオナってどこのお姫さまなの？ どうして塔に閉じこめられていたの？ 誰が呪いをかけたの？ とか。色々あったと思う。だからどういうストーリー展開になるかはその時点でもう決まっていたんだよ。それは今回のパート2が終わったところでも同じこと。そもそもシュレックがなぜ沼地で1人暮らしをしていたのか、どうして人嫌いになったのかとか、まだ説明されていないしね。今後の作品ではそういう物語が展開されるはず。詳細は決まってないけれど、今ここで話せるぐらいストーリーはもうできあがっているよ。もちろん秘密だけど(笑)」

その言葉通り、すでに続編2本の製作は確定。しかもそれは前作を作る時から計画していたことだ

「シュレック2」

前作のメイン・キャストが勢揃いした正式続編は、シュレックとフィオナ姫が新婚旅行から帰った時点から始まる。姫の両親である国王・王妃が挨拶に来いということで、ここで描かれるのは〝おとぎ話のその後〟。めでたしめでたしで終息した物語にもその後の展開が存在するという虚構の現実的な側面を提示し、表層と内面の問題をさらに追求したかたちだ。国王は頑なにおとぎ話的な婿養子を望み、ハンサムなチャーミング王子がその座に収まろうと、妖精のゴッドマザー共々企みを施す。シュレックは姫の立場を思って二枚目になる薬を飲み、内面に似合った外面の在り方が問われた。今回は長ぐつをはいたネコが旅の仲間に加わり、前作では顔見せに終わった有名おとぎ話キャラクターも終盤で活躍。古典的おとぎ話で絶対的な正義に位置づけられる魔法使い(妖精)と王子様は悪役にされ、その行動の欺瞞が暴かれるわけだ。コメディ面では著名映画のパロディが増量され、映画ファンほど笑える場面が多い。形骸の国ビバリーヒルズを模した王国の描写もシニカル。3DCGアニメーションの技術的発達は言うまでもなく、アニメならではのスピードを獲得した動きの演出は完成型の域にある。

フィオナ姫
●幼いときに魔法をかけられ、高い塔に閉じ込められていた。白馬に乗った王子様が助けに来ると信じていたが…。必殺技はカンフー。

ったらしい。

「1作目を作っている時から、構想としてはもっと大きな物語の1部を作っているという意識があった。すでに全4話としてできあがっていたんだよ。でも『ロード・オブ・ザ・リング』のような勇気が無くてね(笑)。1作目だけにしておいた。2作目がヒットしたおかげで、3作目、4作目の製作が確実なものになった。3作目が2006年11月公開、4作目が2009年夏公開です。だから、この物語が完結するまで8年もかかるということになるね」

と、長期的展望までも意欲的に語るカッツェンバーグ。彼は、先日発表された角川ホールディングスとのパートナーシップにもドリームワークス・アニメーションとしての新たな可能性を感じているようだ。

「彼らが私たちを選んだんだ。実は角川社長自身がいらして、非常に野心的に自分の会社を成長させていきたいということを語られた。配給やビデオ発売に関して意欲的にやっていきたいという話を熱心にされて。私はそこに心打たれたんだ。それに映画をプロモーションしていく、マーケティングしていくというツールも持ってますからね、彼らは。この角川さんとのパートナーシップを通じて、日本で何が流行っているのか、何が受けているのかといった情報なども取り入れていきたい。ドリームワークスでは今敏監督の『千年女優』に続いて、押井守監督の『イノセンス』の全米配給も決まっていますから。これからも気に入ったものがあれば、日本のアニメを公開していきたい。実は宮崎駿監督の『ハウルの動く城』をちょっとだけ見たんですよ、前回来た時に。ヒュー！(口笛)凄かったね。アメージング！　彼は現代のウォルト・ディズニーだよ」

そのカッツェンバーグの表情からは、彼が心からアニメーションを愛していることがヒシヒシ伝わってくる。

「アニメーションが大好きな理由は2つある。まず、すべてが人の想像であるということ。人の想像力が世界を作ってしまうところが素晴らしいね。そしてもう1つが、チームプレイであるということ。タイガー・ウッズみたいな天才が全部1人でやるのとは違う。チーム、つまりは共同作業なので、成功の喜びを一緒に分かち合えるし、失敗したら失敗したでその辛さも分かち合える。そういうところが好きなんだよ」

アメリカでは、ディズニーが手描きのアニメ製作を縮小（スタジオの閉鎖等）したことに代表されるように、劇場アニメの主流は3DCGになりつつある。そんな中、ドリームワークス・アニメーションはどんなアニメーション作りをしていくのだろうか。

「新しいものが必要だと思うんだよ。今のままの2Dだと古い感じがする。CGの方が確かに新しいし、興味深い。けれど、何か新鮮に見せる方法があれば2Dだってやらないわけじゃない。何よりも大切なのは常に質の高い作品を続けて作っていくこと。これからも『シャークテイル』や『ウォレスとグルミット』、『マダガスカル』と様々なタイプの作品を作っていくよ。もしかすると、ドリームワークス作品に日本のアニメのテイストを取り入れることだってあるかもしれない。どんなことだって可能さ。アニメ作りにルールはないから(笑)。良い作品を作り続けることでドリームワークスというブランドが確立できればいいなと思うね」

長ぐつをはいたネコ
●「怪傑ゾロ」のような殺気漂う出で立ちでシュレックに挑む!? 必殺技はウルウルさせた眼差し。

キャラクターに魂をふきこむ女優たち
インタビュー

取材・文＝[illegible]文

ジュリー・アンドリュース

JULIE ANDREWS／1935年、英国生まれ。デビュー作「メリー・ポピンズ」(64)でアカデミー賞主演女優賞を受賞。主な作品は「サウンド・オブ・ミュージック」(65)

リリアン王妃
●フィオナ姫の母親で娘の善き理解者。しかし娘も知らない秘密を持つ。

「1作目が大好きだったから、女王役の話がきた時、10秒で〝ありがとう、やります！〟と答えていました。今まで即答した作品は、『プリティ・プリンセス2』くらいかしら。ゲイリー・マーシャル監督と仕事をするのが好きだったからすぐにイエスと返事して。あとは主人のブレイク・エドワーズが演じてほしいという役も即答で受けるけれど(笑)」

そう答えてくれたジュリー・アンドリュース。一体、1作目のどこが気にいったのか!?

「とても新鮮な感じがしたし、エッジも効いていた。それと同時に子供も楽しめる作品だというのが良かったんですよ」

考えてみれば彼女は子供向けのいろんな作品にこれまでも出演してきた。

「別に子供を楽しませる作品を優先させて選んでいるわけではないんですよ。でもやっぱり子供は好きなので(笑)、子供向けの本も出しているんです。子供向けの本を書くのは簡単に見えて大変なんですよ」

残念ながら病気でもう昔のように歌うことができなくなり、「シュレック2」でも彼女の歌声は聞けない。けれども今後も様々な分野で活躍していきたいと言う。

「これからもいろいろな役を演じていきたいし、それに私は〝書く〟ことも大好きなのです。もうすぐ14世紀のフランスを舞台にした『ドラゴン』という若者向けの小説も発売されるんですよ。日本でも翻訳して頂けたら嬉しいですね」

キャメロン・ディアス

CAMERON DIAZ／1972年、米カリフォルニア生まれ。94年に「マスク」で映画デビュー。前作に引き続き、フィオナ姫の声を担当する。主な作品は「チャーリーズ・エンジェル」シリーズ。

フィオナ姫

今回の物語は、フィオナ姫が嫌がるシュレックを無理やり実家へ連れ帰るところからアドベンチャーが展開していく。

「フィオナは、自分が怪物と結婚したことを知ったら両親はショックを受けるというのはわかっていたと思う。でも彼女は同時に夜になると怪物に変化する自分を両親が塔に閉じ込めたのは、両親が自分を愛しているからだと信じている。だから両親がありのままの自分を愛してくれるなら、彼のことも愛してくれると思っている。私自身、人は外見では判断できないと考えているし」

どうやら前作よりもかなり深くフィオナ姫を理解して演じることができたようだ。

「とにかく、この作品に参加できたというだけでハッピーなのよ。すごく素晴らしい作品でメッセージも持っているし。新しい登場人物たちも最高で可笑しく、とても才能のある人たちがまた見事に演じている。それだけで出演した甲斐があったわ」

特集

キング・アーサー

KING ARTHUR

●2004年／アメリカ／カラー／ドルビー・デジタル、DTS、SDDS／2時間6分
●監督／アントワン・フークア　脚本／デイヴィッド・フランゾーニ　製作／ジェリー・ブラッカイマー　製作総指揮／マイク・ステンソン、チャド・オーマン、ネッド・ダウド　撮影／スラヴォミール・イジャック　プロダクション・デザイン／ダン・ウェイル　編集／コンラッド・バフ　衣裳／ペニー・ローズ　音楽／ハンス・ジマー
●出演／クライヴ・オーウェン、キーラ・ナイトレイ、ヨアン・グリフィズ、スティーヴン・ディレイン　ステラン・スカルスゲールド、レイ・ウィンストン、ティル・シュヴァイガー、ヒュー・ダンシー、ジョエル・エドガートン、マッツ・ミケルセン、ジレイ・スティーヴンソン
●配給／ブエナ ビスタ インターナショナル（ジャパン）
●7月24日より、丸の内ルーブル、丸の内プラゼールほか、全国松竹・東急系にて

キング・アーサー

アーサー王伝説の真実

伝説を歴史に戻す、映画「キング・アーサー」の大胆な試み

文＝伊藤盡（杏林大学外国語学部講師／中世英国・北欧文学研究者）

後世のイメージを確定した中世のロマンス

　歴史はいつ伝説になるのか？　そして伝説はいつ神話になるのか？「事実は、いったい何年間、陽の目を見ないと、作り話に貶められてしまうのか？」と尋ねたのはアメリカのSF作家アン・マキャフリーだった。ある一つの歴史上の出来事は、時を経るうちに輪郭がぼやけ、細部が見えなくなってしまう。そこで多くの人々はその輪郭や細部を想像力で補っていく。その時、事実は伝説という衣を纏った姿に変身しているのだ。映画「キング・アーサー」は伝説を歴史に戻す大胆な試みである。作中、英雄アルトリウス（アーサー）に関する噂を既に耳にしていたグウィネヴィア（後の王妃）が言う「父から貴方の話を聞いていたけれど、それはおとぎ話だったわ」。伝説の裏には一体どのような人間が生き、苦悩し、血を流していたのだろうか？

　アーサー王と円卓の騎士の物語は中世ヨーロッパの十二世紀ルネサンス華やかなりし頃に、フランスのノルマンディー公爵であり、同時にイングランド王だったヘンリー二世の宮廷において非常にもてはやされた。古典物語とは異なり、当時の人々の用いるフランス語で書かれたこうした物語は「ローマ以来の言葉で書かれた物語」として「ロマンス」と呼ばれた。現在ラブ・ロマンスと呼ばれるドラマの原型はこうして生まれたのである。中でもブリテン島の最も栄ある王であるアーサーと彼のもとに集まった円卓の騎士が登場するロマンスはフランス、イングランドばかりでなく、ドイツなどにも波及し、一つの文学潮流を作った。

　後世のアーサー王のイメージを確定したのはこの中世のロマンスであり、その中に描かれる「騎士道」精神である。一人の英雄たる王の周りに有名な騎士たちが集い、そこに様々な冒険や恋が織り込まれ、「レディー・ファースト」という女性を敬う現代西欧の習慣の素となった「宮廷風恋愛」も描かれた。そもそも中世の文学の愛好家（パトロン）には女性が多かった。政争に明け暮れる現実世界の男とは異なり、女性を助け、決して報われぬ純粋な愛を捧げる騎士たちの登場する想像世界「ロマンス」こそ、円卓の騎士のイメージを作り上げる素地となった。このような様々な中世ロマンスから題材を取り、アーサー王の伝説と円卓の騎士の冒険譚を一

大散文物語に纏めたのが、十五世紀のイングランド人サー・トマス・マロリーだった。こうして、騎士トリスタンの悲恋や騎士ランスロットの道ならぬ恋、聖杯探求などのそれまでバラバラだった全てのエピソードが互いに絡み合う、今日言われる〝アーサー王伝説〟の完成を見たのである。中世に広まったアーサー王伝説体系は、十九世紀にはドイツのワグナー楽劇『トリスタンとイゾルデ』『パルジファル』を生み出し、イングランドでは桂冠詩人テニソンに『国王牧歌』を書かせ、ラファエロ前派に影響を与えた。この伝説の系譜はカナダの『赤毛のアン』や日本の夏目漱石の作品にまで連綿と続く。現在までに作られたほとんど全てのアーサー王に関連する映画はこの伝説体系に基づいており、例えばジョン・ブアマン監督の「エクスカリバー」(81)は、マロリーの『アーサー王の死』の見事な再話となっている。

新学説に基づく映画化

しかしその伝説の始まりは、イングランドの深い霧の中に包まれてほとんど見えなくなってしまっている。西暦五世紀前半に生きたウェールズの僧侶ギルダスは、一人の武将によって率いられたブリトン人がブリテン島に侵略してきたゲルマン人と戦い、四九六年頃にベイドンの丘の戦でブリテン側が勝利し、侵入者との間に一時的な平和が得られたと記した。この武将の名前はローマ風であったが、歴史の流れの中で記憶や情報は乱れていった。九世紀の初めにウェールズのネンニウスの書いた『ブリトン人の歴史』と『カンブリア年代記』はアーサーの名前を初めて記した書物である。そこでは五一六年にアーサーが三日三晩十字架を描いた楯を持ちながら戦場を駆けめぐって、ベイドンの戦いに勝利をもたらしたと書かれている。しかし、このアーサーの出自はまったく記されていない。父も母もなく、突然歴史の中に降って湧いた謎の人物である。ここで言えるのは、年代記などに記録されるまでに、アーサーと目される人物がウェールズ人の間で口承伝説の中に既に広まっていたということだ。

しかしながら、このような記述はアーサーが実在したかどうかという歴史的実情には何も触れていない。そこに出てきたのがアーサー王と円卓の騎士たちの由来をサルマート人に求めた或る仮説だった(リトルトン+マルカー著『アーサー王伝説の起源』辺見葉子、吉田瑞穂共訳/青土社刊)。この仮説の根拠は、ローマ帝国が版図を拡げていた二世紀半ば、時のローマ皇帝マルクス・アウレリウスが、カスピ海の北側から東欧に移って来た騎馬民族たちとの激戦を制し、重装備の騎馬傭兵八千人をローマ軍に提供することを条件に和平をなした史実だった。そして五千五百人もの騎馬傭兵がブリテンに駐留するローマ軍に組み込まれたというのである。この騎馬民族は広くスキタイ人として知られ、中でもカスピ海北辺の一派はサルマート人と呼ばれた。サルマートとはギリシャ語の「サウロス」に由来すると思われるが、恐竜の「ティラノサウロス」にもあるように「サウロス」とは元来「とかげ」を意味し、竜に似た動物を信仰の対象とし、吹き流しのような竜を竿につけそれを自分たちの旗印にしていたと、学説は唱える。実際、馬に乗り、蛇状の吹き流しを持つ戦士を描いた石碑がイングランドのチェスターで見つかっているが、それをサルマート人の子孫がブリテン島にいた証拠とみなしているわけだ。この学説を支持する者は国際学会においてまだ多くはない。しかし、この新風の学説に想像力を刺激された映画人によって遂にアーサー王伝説誕生の瞬間が描かれた。映画「キング・アーサー」の中で騎士たちが吹き流しのような旗幟を手にしているのも、実は新学説に基づいている。歴史的な考証を忠実にスクリーンに復元しながら中世以来の伝説をも巧みに取り込んでいるわけだ。日本のアーサー王ファンにとってもたまらない妙芸と言えよう。

アーサー王伝説を通して味わう西欧文化の民族的なねじれ

今回の映画では、当時のブリテン島の複雑な民族情勢が描かれている。土着のブリトン人はケルト系で、元々好

戦的な性格で、体に色を塗って戦った。彼らを文明化したローマ人はブリテン島に住み着き、キリスト教化し、ブリトン人との間に混血が進んでいた。ただし初期のキリスト教教義にはまだ揺れ動きがあり、帝国の末期にあって生き残りをかけたローマ教会は教皇権を強化しようとするあまり神の前の「平等」を唱える者を異端視した。一方、ゲルマン民族は大移動と呼ばれる歴史的事件の最中にあった。北ドイツのザクセンやユトランド半島からブリテン島に侵入してきたゲルマン民族の一派はアングル人やサクソン人と呼ばれた。キャスティングにおいても侵略者側の役は大陸のスウェーデンやドイツの俳優を起用し、ブリテン島を守ろうとする役にはイギリス人を起用するという工夫が見られたが、実はイギリス人の多くも同じゲルマン人、大陸からやってきた侵略者の子孫にあたるのだ。

このような西欧文化の民族的なねじれをアーサー王伝説を通して味わうことは、この映画の面白さの一つだ。例えば中世ロマンスと結びつけられた騎士の洗練されたイメージは、西欧男性像の一つの典型であるが、五世紀末にもしアーサーが実在していたならば、彼の周りに集う騎馬傭兵たちはそのような洗練とは無縁であったろう。同様に、現在ブリテン島に住んでいる人々の多くが、アーサー王と戦った侵略者の子孫だということは、皮肉な事実である。我々が現在用いる「英語(イングリッシュ)」は、「アングル人の言葉」という意味であり、元々はアーサーの敵とされるゲルマン人一派の言語だ。アーサーの時代の後、ブリトン人はゲルマン人に土地を追われ、現在ウェールズと呼ばれるブリテン島西部やフランスのブルターニュ地方に逃げていった。映画「ウェールズの山」(95)では、ブリトン人の末裔であるウェールズ人が、イングランドとの境をなす山々を、侵略者から自分たちを守った自然の砦として誇りにしている様子が描かれている。つまり、歴史的に見るならば、アーサーは敗北者たちの英雄なのだ。アーサーは決して最終的な勝利者にはなり得ない。歴史が既に結論を下している。しかし、だからこそ私たちはアーサー王という英雄像に理想の伝説を求めるのだろう。目の前に敗北しか見えていない時の希望の光として私たちはアーサーに望みを託す。一度は歴史に埋もれながらも伝説の王として甦った彼に。こうして私たちは彼のことを「キング・アーサー」と呼ぶ。しかし「キング(king)」という言葉自体、侵略者たちの言葉であった古英語「キュニング(cyning)」に由来することを思えば、映画の終わりに叫ばれる「キング・アーサー」という言葉も少しほろ苦い。

interview

［偉大なる王　アーサー役］

クライヴ・オーウェン

取材・文＝斉藤博昭

CLIVE OWEN

1964年イギリスのワーウイックスシャー生まれ。84年に王立演劇学校へ入学し、ヤング・ヴィク・シアター入り。「ブルーム」(88)で映画デビュー。主な出演作に、「クローズ・マイ・アイズ」(91)「ベント／堕ちた饗宴」(97)「ゴスフォード・パーク」(01)「ボーン・アイデンティティー」(02)「すべては愛のために」(03)など。"Closer" "Savage Grace"などの新作が待機中。

欧米では英雄の原点として語り継がれ、その伝説は何度も映画の題材になっているアーサー王。今回、アーサーを演じるのは「すべては愛のために」などで知られるイギリス人俳優のクライヴ・オーウェン。意外な抜擢だが、なかなかシブいキャスティングでもある。

「僕自身にとっても、ちょっと意外。この手の大スケールの作品は、トップクラスのハリウッド・スターを集めればいいのにとも思った(笑)。でもジェリー・ブラッカイマーや監督と会った翌日には役をオファーされ、ただ興奮するしかなかったよ」

クライヴにとっても、今回のアーサー像は斬新なものだったと言う。

「もともとアーサー王の神話は何百年もかけて作られたので、真偽のほどは判断できない。脚本を書いたデイヴィッド・フランゾーニに話を聞いたとき、彼がこれまでの絵本や映画で描かれたアーサー像の嘘の部分を剥がしていくことから始めたと知った。リサーチを経て、アーサー王伝説がローマとブリトン人のハーフを基にしているという事実が突き止められたんだ。だから僕が演じるヴァージョンは、他の伝説に負けない正当性があると、自信を持って言えるね」

ふたつの民族の狭間で揺れるという設定以外にも、アーサーは、ブリテンを支配しながらも守り、正義と自身の欲望で葛藤するなど、内面の相反する要素が際立っている。

「僕の好きなキャラクターの成長過程は、何かを強く信じていた者が、周囲の行為によって信念に疑問を持ち、変化していくというもの。まっすぐな人間より、そういう葛藤を持った役柄をつねに追い求めている」

映画全体に感じられるのはリアリティ。俳優たちが自ら危険なアクションに挑戦している姿が、スクリーンから伝わってくる。

「映画の中で馬に乗るのは今回が初めてだったので、乗馬の訓練はしっかり受けた。そのおかげで馬に乗るシーンが楽しくてたまらなくなったよ。この映画ではそれぞれの俳優に専属のスタント・コーディネーターが付いて、俳優自身がどれだけアクションをこなせるかを判断してもらった。みんな、かなり危険なアクションを自分でこなし、僕なんか、馬ごと火の中に飛び込むシーンもやったくらいさ」

撮影はアイルランドで行われ、キャストは夜な夜なパブで酒をくみかわしたとか。

「円卓の騎士を演じた俳優たちともパブで飲んだけれど、現場の外では、あくまでも民主制を貫いたよ(笑)」

イギリス俳優らしい格調の高さに、知性とユーモアを巧みに使い分けるクライヴは、今後も意外性のある役で、われわれを驚かせてくれそうだ。

interview キング・アーサー

[戦う王妃　グウィネヴィア役]

キーラ・ナイトレイ

取材・文＝斉藤博昭

KEIRA KNIGHTLEY
1985年イギリスのミドルセックス生まれ。舞台俳優の父と劇作家の母の間に生まれる。9歳で映画界入りし、「スター・ウォーズ　エピソード1／ファントム・メナス」(99)「ベッカムに恋して」(02) などで注目を浴びる。主な出演作に、「イノセント・ライズ」(95)「パイレーツ・オブ・カリビアン／呪われた海賊たち」「ラブ・アクチュアリー」(03) など。2本の「パイレーツ〜」続編や "Tulip Fever" などの新作が待機中。

「パイレーツ・オブ・カリビアン／呪われた海賊たち」「ラブ・アクチュアリー」と、出演作ごとに注目度が増すキーラ・ナイトレイ。この「キング・アーサー」でもヒロインのグウィネヴィア役を射止め、さらにスター街道をばく進する気配だ。

「グウィネヴィアのオーディションを受けたのは、『パイレーツ・オブ・カリビアン』が完成する前。アントワン・フークア監督と食事をして、とても話が合ったので、"よし、この役はもらえそうね！"と喜んでいたら、その後、4カ月くらい連絡はなし。諦めていた頃、今度はクライヴ・オーウェンとの読み合わせに呼ばれたの。それから役が決まるまで1カ月。とても長いプロセスだったわ」

今回のグウィネヴィアは、数多く存在するアーサー王伝説のなかでも極めて異例なほど、強いヒロインとして描かれている。

「正直言って、何度も映画になっているアーサー王の伝説を、いまさらなぜ改めて映画化するのかと思っていたの。でも脚本を読んで、これは神話の裏側にあるリアルな物語を追求する作品であることを知り、ワクワクしたわ。実際に（舞台になる）イギリスは11世紀まで母系社会で、"女性＝弱い"という図式は当てはまらなかった。私、けっこう歴史には強いのよ（笑）。伝説やこれまでの映画で描かれたグウィネヴィアは、囚われの身で、周囲に起こっていることを見ているだけ。でも今回は、より強いキャラクターになっているから、現代の女性にもアピールするのではないかしら」

彼女の言葉どおり、劇中のグウィネヴィアは自ら戦闘にも身を投じるが、闘う姿は想像をはるかに超える凄まじさだ。

「じつは今回いちばん楽しんだのは戦闘シーンなの。撮影前に3カ月間、ウェイト・リフティングやアーチェリー、斧の使い方をみっちり特訓したわ。筋肉が付いて、体重がちょっと増えてしまったかも。その他、ボクシングや乗馬も練習したのに、撮影では使わなかったのが、とっても残念！」

ジェリー・ブラッカイマーのお気に入りとしてハリウッド超大作への出演が続くキーラだが、当分は基盤をロンドンに置くのだと言う。

「私は根っからのロンドン・ガールだから、ハリウッドに来るとまだ違和感があるの。だからと言って意識的にイギリス映画に出演しようと思っているわけでもない。すべては脚本の良し悪しね。私の父は俳優で母が劇作家だから、この仕事に波があるってことも教えこまれている。"自営業"としての女優の厳しさは自覚しているつもり」

憧れの女優として、キャサリン・ヘップバーン、ベティ・デイヴィスの名を挙げるキーラ。まだ19歳にもかかわらず、その素顔や言動には、本格派女優の貫禄も漂い始めている。

interview

［最強の戦士　ランスロット役］

ヨアン・グリフィズ

取材・文＝斉藤博昭

IOAN GRUFFUDD

1973年イギリスのカーディフ生まれ。14歳でテレビシリーズ“Pobol y Cwm”(74)に出演。18歳で王立演劇学校入り。98年から放送されたテレビシリーズ「ホーンブロワー　海の勇者」の出演で人気を獲得。主な出演作に、「オスカー・ワイルド」「タイタニック」(97)「102」(00)「ブラックホーク・ダウン」(01)「ギャザリング」(02)など。“This Girl's Life”“Y Mabinogi”などの新作が待機中。

映画「キング・アーサー」は、少年時代のランスロットが故郷ローマを離れる場面から始まる。その意味で、本作はランスロットの物語としても観られるわけで、彼に感情移入すれば、また違った感慨があるだろう。演じるヨアン・グリフィズは、テレビシリーズ『ホーンブロワー　海の勇者』で注目され、映画では「タイタニック」「ブラックホーク・ダウン」などに出演。英国ウェールズ出身の、彫りの深い二枚目俳優だ。

「ヨーロッパの中でも、とくにウェールズ人は、アーサー王が自分たちの祖先だと主張する傾向が強い。アーサー王は北ウェールズの海岸に〝休んで〟いると伝えられている。死んではおらず、騎士たちが迎えに来るのをいまでも待っているというわけさ。だから、ウェールズ人の僕にとって、アーサーの映画に関われることは、この上なく光栄なことなんだ」

キャスティングされて3日後には、役のトレーニングに参加するために現場に向かったとか。

「『タイタニック』に出演したとき、これほど大きなセットにはもう二度とお目にかかれないと思ったけれど、『キング・アーサー』は、それ以上だった。1キロ以上の長さで古い城壁が続き、まるでローマ時代に戻ったような信じられない光景が広がっていた」

ランスロットと言えば、円卓の騎士の中でもっともポピュラーなキャラクターであり、ハンサムとしても有名。演じるうえでの心構えは？

「観客はすでに、過去の映画や小説、詩などを通してランスロットに対して先入観を持っている。だから演じる側としては気が重かった。でも『ハムレット』のように有名な役は、多くの俳優に演じられ、それを観客が観に行くわけで、自分のランスロットを出せばいいと決めたんだ。一般的には甲冑をまとった光り輝くイメージが強いけれど、僕のランスロットは少しダークな雰囲気にしてみたよ」

劇中には、ランスロットがグウィネヴィアに密かに想いを寄せるシーンが、さり気なくちりばめられている。

「ふたりは触れ合うことはないけれど、ランスロットからグウィネヴィアへの愛情は映画の中にきちんと残そうと、監督らと相談した。グウィネヴィアはつねにアーサーへ意識を向け、その関係にランスロットは嫉妬してしまう。表面的ではなく、見えない部分でその感情を表現しようと心がけたんだ」

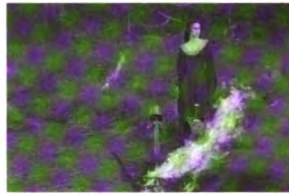
ランスロットが迎える運命については、あえてここでは書かないが、クライマックスでのグリフィズの渾身の演技は一見に値する、とだけ言っておこう。

interview

［監督］

アントワン・フークア監督

取材・文＝斉藤博昭

ANTOINE FUQUA
1966年アメリカのピッツバーグ生まれ。ウエスト・ヴァージニア大学工学部卒業後、CMやミュージック・ビデオの監督として注目され、98年の「リプレイスメント・キラー」で映画監督デビュー。監督2作目「トレーニング デイ」(02)では、主演のデンゼル・ワシントンにオスカーをもたらした。他の監督作に、「ワイルド・チェイス」(00)「ティアーズ・オブ・ザ・サン」(03)などがある。

「たしか12歳の頃だったと思う。翌朝は学校があるのに、僕は深夜2時くらいまでテレビで映画を観ることが多かった。そのときに観たのが『七人の侍』。ギャングもいるスラムで育った僕にとって、日本語は分からなくても、映画のテーマが身近に感じられたんだ。ユニヴァーサルな人間社会を描いていることに圧倒された。映画監督を志したのは、あのときクロサワに出会えたことと大きく関係しているし、これまでの自分の監督作もつねにクロサワを意識してきた」

黒澤明への深い尊敬を抱くアントワン・フークア監督にとって、この「キング・アーサー」は、念願の作品だったと言う。

「依頼をもらったときは本当に興奮した。ついに自分なりの『七人の侍』が撮れるんだとね。他人のために自分を犠牲にする騎士たちの物語なので、彼らを〝浪人〟のように描こうと思った。アーサーや円卓の騎士たちは、家を持たず、劣勢にある人々のところに戻って来るわけだから」

しかし、ジェリー・ブラッカイマー製作で、ヒットを期待される大作である。「トレーニング デイ」でデンゼル・ワシントンにオスカーをもたらしたとはいえ、38歳の監督にとってプレッシャーは大きかったことだろう。

「これだけの大作をどうまとめるか必死で、現場では自分自身も戦士のような精神状態になるように努めたよ。だから撮影が終わると毎日ぐったりさ。重圧のため、撮影終了日を指折り数えたりもした(笑)。そんなときは、クロサワや侍に関する本を読み、インスピレーションを受けるんだ。撮影用のトレイラーには、クロサワが描いたストーリーボードも貼ったよ。でも映画が完成したいま、もう一度同じことができるかと問われたら『ノー』と答えてしまうかもしれないな(笑)」

そう言いつつも、フークアは次の目標をしっかりと見据えている。

「『キング・アーサー』のリサーチをしているとき、同時代には黒人の戦士も存在していたことを発見した。いま、アラビアでの黒人騎士の物語を構想中で、『キング・アーサー』の成績次第では、近い将来、映画化できるかもしれない。現代の黒人の子どもたちは、祖先のことと言えば奴隷制度ばかりで、自分たちのルーツに偉大な人物がいたことを知らされていない。だから僕は、映画というパワフルな媒体を使って、祖先の物語を作りたいんだ。クロサワが、日本人の祖先である侍を描いたようにね」

最後まで、答えの端々に黒澤監督への熱い思いを込めてしまうフークア監督。「キング・アーサー」に、黒澤映画のエッセンスがどう受け継がれているのか、日本の映画ファンとしては確かめる必要がある。

特集

父と暮せば

●2004年・日本・カラー・ビスタサイズ・DTSステレオ・1時間39分
●監督／黒木和雄　脚本／黒木和雄、池田眞也　原作／井上ひさし　撮影監督／鈴木達夫　美術監督／木村威夫　音楽／松村禎三　企画／深田誠剛　製作／石川富康、川城和実、張江肇、金澤龍一郎、松本洋一、鈴木ワタル　プロデューサー／河野聡、木谷奈津子、桑島雅直、大村正一郎、奈良聡久、大橋孝史　照明／三上日出志　録音／久保田幸雄　美術／安宅紀史　編集／奥原好幸
●出演／宮沢りえ、原田芳雄、浅野忠信
●配給／パル企画
●7月31日より岩波ホールにて

つちもと・のりあき(写真・左)／1928年生まれ。56年岩波映画製作所と契約、翌年フリーに。「ある機関助士」(63)で監督デビュー。71年より水俣病をテーマに求め、「水俣ー患者さんとその世界ー」(71)「医学としての水俣ー三部作ー」(74)「不知火海」(75)「水俣の図・物語」(81)を製作した。他に「ドキュメント・路上」(64)「パルチザン前史」(69)「海盗りー下北半島・浜関根ー」(84)、「よみがえれカレーズ」(89)など。
※最新作「みなまた日記ー甦える魂を訪ねてー」(04)の上映を含む「土本典昭フィルモグラフィ展」が開催される（7月23日よりアテネ・フランセ文化センターにて）

くろき・かずお(写真・右)／1930年生まれ。54年岩波映画製作所に入社、記録映画を発表し、62年フリーに。66年、「とべない沈黙」で劇映画デビュー。70年代はＡＴＧを代表する監督として、「日本の悪霊」(70)「竜馬暗殺」(74)「祭りの準備」(75)といった秀作を次々と発表した。88年に「TOMORROW／明日」でキネマ旬報監督賞を受賞、「美しい夏キリシマ」(03)では再び同賞を受賞するとともに、ベスト・テン第1位に輝いた。ほかに「キューバの恋人」(69)「浪人街」(90)など。

—対談—

黒木和雄監督 土本典昭監督

取材・構成＝藤原敏史　撮影＝吉岡誠

「父と暮せば」を「黒木和雄監督の最高傑作だよ」と言う土本典昭監督。岩波映画製作所以来の親友同士だ。黒木は最新作で原爆で生き残ったヒロインを描き、土本は30年間追い続けた水俣で、水俣病を生き延びた人々を撮った「みなまた日記」を完成させたばかりだ。共に昭和ひとけたの焼け跡世代。「まさか自分たちが生きているあいだに日本が戦争前夜になるとは思わなかった」と語る二人が、「父と暮せば」と生き残ることの問題を語り合った。

「世界中の人に見せて欲しい」

土本　あなたは戦争が終わったとき何歳だったの?

黒木　15歳です。

土本　僕は17歳だったけど、世の中ってなんだろう、政治ってなんだろう、自分の人生ってなんだろう、って考え始める時期でしょう? 大変な経験をして、それがやっぱり、今、この歳になって映画として成熟して来るってのには、僕は興奮を感じたね。今までにない黒木君があるって思ったね。

黒木　10年前に見た芝居が大きかった。映画にしたいな、って思ったんだけど、でも作者がOKはしないだろうと思ったんですよ。演劇でしかできない表現であり、時間もね。ヒロインの家だけで、彼女と、幽霊と。演劇ならではの特権的な世界だからね。

　これまでいろんな優れたシナリオライターや劇作家の人と映画を作って来たけど、優れた劇作家の書いたホンというのは、ダイアローグが非常にいい。「父と暮せば」もそうなんですが、ダイアローグが優れたホンというのは、僕にとって憧れの的なんですよ。自分ではなかなか書けないものですから。

土本　「美しい夏キリシマ」の前に作ろうとしてたんだって?

黒木　その前からですね。「山中貞雄」と「父と暮せば」は、ずっと作りたいと思っていた企画だった。ただ実現は難しいだろう、まず井上（ひさし）さんに断られると思ってました。ところが快諾されましてね。映画化権料も要らな

主人公・美津江の思いは、私自身の感情でもあります（黒木監督）

いとおっしゃる。「タダほど怖いものはない」と言いますから一応お支払いしますが（笑）。ただひとつだけお願いがある、と。「芝居はフランスとロシアではやったのだけど、海外に持って行くのはとてもお金がかかる。映画だったら持って行きやすいから、世界中でこの映画を見せてほしい」と。あとは内容には一切口を出さない、「お好きなようにやって下さい」と言われました。

　最初から僕はシナリオは要らないと思ったんです。戯曲の通りにやってやろうと。ただ映画というのは設計図としての台本がないと、スケジュールも組めない。一応シーン割りをして、あとは原作通りにやろうと思ったのですが、魔がさしたのは、初恋の相手の木下青年（浅野忠信）を画面に出したということ。

土本　芝居では話題に出てくるだけなんだ？

黒木　ええ。だから大変な変更なんですよ。原作はすべて彼女の家のなかだけ、木造のね。平屋の、焼け跡に建てたバラックなんですよ。そこは僕のイメージで、ヒロインが住んでいるのが原爆ドームの中にあるということにしたのです。

土本　イメージとしてでしょ？　あなたがそう言うから頭から見直したんだけど、最初からそうはなってないものね。

黒木　それから逆算した美術の設定になっていて、洋館のホテルになってレンガになって、だから原爆ドームとはつながるわけですよ。原爆ドームの下でもおかしくない、と。美術は「祭りの準備」以来おつきあいして頂いている大先輩の木村威夫さんにお願いしました。

土本　あのセットはいいね。あと青年が集めている原爆の資料がたびたびアップでインサートされるけど、あれは作ったの？

黒木　木村さんのところの若い人たちが全部、見よう見まねで、試行錯誤を重ねて、ガラスを吹いたりして作ったんですよ。広島に行くお金もないから、原爆資料館から借りた写真だけを見ながら。

土本　たいしたもんだね。あと最初の方で出てくる饅頭をくるんでいる新聞。二回目に注意して見たんだけど、記事の内容が昭和23年当時のそのまま。実に考証がしっかりしているのに感心したよ。木村さんはたいした人だね。

黒木　撮影は土本さんもよくご存じの鈴木達夫さん（註：土本、黒木と共に岩波映画製作所の出身。土本とも「ドキュメント・路上」で組んでいる）。鈴木さんが「スパイ・ゾルゲ」（02・篠田正浩監督）でCGを経験していたので、CGも生かそうという話になって、それで１９４５年８月６日と、３日後の８月９日、それに１９４８年の復興が始まってる広島と、米軍の基地はCGを使いました。鈴木さんは「ゾルゲ」でやり尽くしているからお手のものなんですよ。

　原作通りという当初の構想から外れたのはCG使用と、丸木夫妻の原爆絵画を入れたことですね。で池田眞也君というシナリオ修業中の青年に手伝ってもらって。

土本　どういうことを期待したの、その若い人には？

黒木　整理ですね。戯曲を四日間にわけて整理すること。シナリオ作業は三日ぐらいかけてアレンジしただけで、台詞もなんの変更もない。増えたところは一行もないんです。芝居は1時間15分なんで、青年のところとか、焼け跡のぶんで20分ぐらい増やしただけ。あっけない話なんですよ。だから僕は井上さんの天才に〝おんぶにだっこ〟でね、なにもしてないんですよ。

土本　いや、あなたはよく〝おんぶにだっこ〟って言うけどね。そりゃ

違うよ。あなたの原作に対する共鳴ってのはね、すごくユニークだよ。全部成功してるとは言わないけど、これまでのものを見てもね、あなたの原作に対する共鳴性とか、画の発見性ってのは独自だよ。

〝原爆〟を語れなかった時代

土本　僕は今の若い人にどうしても理解して欲しいんだけど、昭和23年と言えば、原爆はまったく話題にできなかった。原爆を受けた人が病院に行くのも、本当に隠れて行くみたいなね。オープンに出来ないし、モルモットにされたもんだからね。だからあそこで原爆のモノを探してる青年ってのは、大変だね、やっぱり。米軍占領下でどうなるか分からないくらいの大変な禁を犯してる。美津江（宮沢りえ）の台詞にもあるけどね。そういうことを調べた上ですごく時代考証を頭に入れて井上さんが書いてるでしょ。

黒木　ええ。

土本　原爆資料を預かるというのは、どれだけヤバいものを預かるってことかをね。そういうのは二回ぐらい見てもらえば若い人にも分かると思うんだけど、あの時代を実によく調べてる。

黒木　原田芳雄さん演じる父の幽霊がやる『エプロン劇場』。あのデータはやはり戦後50年のデータですよね。何万何千度で太陽が二つぶんの熱というのは、ぜんぜん当時は分からなかった。幽霊だからなんでも出来るわけで。当時「ABCC」っていう原爆病の研究所ができたのだけど、ぜんぜん治療しないんですよね。診断するだけで。

土本　そのデータも日本では発表しない。丸木夫妻が原爆絵画の第一作を出したのも、昭和25年だからね。その時も「原爆」とは言えなくて、「8月6日」って題名で確か出したはずなんだよ。「原爆」って言えた最初は、確か僕が山村工作隊で牢屋に入っていた昭和27年の夏に出た『アサヒグラフ』だったと思うな（註：土本は当時全学連の公然メンバーで、共産党の小河内ダム建設反対運動に派遣され、公務執行妨害で逮捕された）。占領が終わった年だね。合法的にやるため朝日新聞はその時期まで待った。それが出たって言うんで牢屋に差し入れがあってね、見て本当に震え上がった記憶があるよ。それまで丸木さんたちの絵が発表できないとか知ってたからね。丸木さんの絵が唯一のドキュメントだったんだよ、あの当時。嘘がないわけだよ、皮膚が溶けてダラダラ垂れ下がってたりする。

黒木　すごいですよね。

土本　いやな絵だけど、全部写実なんだよ。（丸木）位里さんがね、「俺はこの絵が好きじゃない。絵は美しくなくてはいけないはずなのに。でもどうにも（妻の）俊はああいう風にしか書けなかった。それをようやく俺も分かって来た」って。映画で使っていたのは主に火の絵、彼らの第2作だと思うけど、あれで位里さんは初めて手法的に参加できるんだよ。とにかくあの時代の記録性があるイメージ

は……。

黒木　写真でなくて絵だったというわけか。

土本　映画でも図書館に入っても閲覧禁止でしょう？　そういう時代を戦後7年、原爆が落ちてからずっと持ったということは、ずいぶん原爆についての我々の知識を遅らせたし、反対運動は本当に遅れた。昭和29年のビキニ環礁の水爆事件で、第五福竜丸のことがあって、やっとそこから起こるんだから。そこで初めて原爆のことにさかのぼって反対運動のターゲットになるんだから……。そういう戦後史だったからね。

生き残った自分が後ろめたい

黒木　「TOMORROW／明日」の前にアメリカとの合作の話があって、これは音楽の権利の問題とかで中止になってしまったんですが、その時にアウシュヴィッツをロケハンしたんですよ。で、そのことを聞きつけた九州の民放でドキュメンタリーの演出を引き受けることになって。『かよこ桜の咲く日』という番組で、その取材で長崎の街をずいぶん歩いて被爆者の話を聞いたんです。そのなかでいろいろショックを受けたんです。全身が火傷のまま寝たきりのおばあさんに会って……。僕が会ったのは85年ごろだったから、１９４５年から40年間、全身が動かない。痒くても掻けない。飯も食えない。目だけ生きていて、後は全部ケロイドなんですよ。インタビューしたら「死にたい」とおっしゃるんですね。「生きていてもひとつも楽しくない」と。そして、きれいな涙を流されたんですね。それはもう非常に大きなショックで。

私もクラスメートが11人、周りで死んだ経験があるので、それが重なって、「これは長崎と広島で大変なことがあったんだな」と具体的に知ったのです。そんな時に、土本さんともよく一緒に飲んだ新宿の「ナルシス」という酒場にしばしば来ていた井上光晴が『明日』という小説を書いたんですよ。45年の8月9日の、あの24時間前から始まり、原爆が落ちたところで終わる。その間の日常生活を描きたいと思ったんです。あのおばあさんたちがケロイドで動けなくなる、それ以前を知りたいと思った。あの人たちを五体満足で生かしたい、という思いがあって、その数年後に実現したのが「TOMORROW／明日」なんです。

すでに新藤兼人さんとか今村昌平さんとか、大勢の方々の優れた作品がありますが、長崎に続き広島を描きたいなぁと、それからも思っていたんです。この時の、僕の長崎の取材と……。井上ひさしさんは2年間の取材と、一万人の手記を読んだ上で『父と暮せば』を書かれたんです。オリジナルな台詞がひとこともないんですよ。全部彼が一万人の証言からとったものなんですね。2年間かけてピックアップした……。

そこで共通しているのがやっぱり、生き残って後ろめたい、死んだ連中に申し訳ない、と思っている人が多いことなんです。長崎でも、広島でも。戦後何十年間も生きているのが恥ずかしいし悔しいし、申し訳ないと。それに較べれば僕の体験なんて小さいんですけど、周りで11人がみんな死んで僕だけ生き残ったというのがやはり後ろめたいんですよ。介抱もせず、病院に運ぶこともせず、逃げた自分が(03年12月下旬号フロントインタビュー参照)。そういうことが重なって来ましてね。そこで「TOMORROW／明日」を作り……「～キリシマ」でもその「後ろめたい」という感情を主人公の少年に一貫させたんですよ。その原点は「父と暮せば」のヒロインの思いだっ

たんですね。

「父と暮せば」の父親の台詞ですが、「生き残った者は後ろめたいと思うな。それくらいなら自分たちが死に別れた悲しみと苦しみを大勢の人に語ってほしい」――申し訳ないと思うなら、語り伝えることで贖罪してほしい。図書館で働いているお前なら……映画監督であるお前なら、表現をする仕事の人間がそれを語らないでどうするんだ。この思いは『かよこ桜〜』で強まり、「〜キリシマ」で強まり……でも少しも後ろめたさは癒されないんですね。土本さんの仕事場に座って話している今も、おんなじなんですよ。ひとつも晴れやかな気持ちになれない。15歳で人生が止まってしまった11人の連中が、生き延びてのうのうと映画なんて作っている自分を見てどう思っているかと思うと、依然として後ろめたいんです。

悲劇を生き延びた者の使命

土本　いやぁ……(沈黙)。それに焦点を合わせた劇映画にせよ芝居にせよ、悲劇は描くよ。僕が今度の映画の父親の台詞でね、「お前は生かされてる」って言うでしょ？　これが偶然なのかも知れないけど、水俣で生き残って今も頑張ってる人たちが、15年くらい前からしきりに私に対して言うんだよね。「私は生かされとる」って。「生きようと思って生きているのではなくて、生きなければならないように私がある」と。死んだ人たちに、後世に語り継ぐように生かされているというのも含めてね。

僕らは普通「俺は生きている」と思うじゃない。自分で努力してると。でも被害者ヅラしてもおかしくない人たちがこうやって苦しんでいる。この問題をどうやって解決するのかというのは、やっぱり大きいんだよね。「選択と運命」(ツィピ・ライベンバッハ)というイスラエルのドキュメンタリーがあってね、この女性監督の両親は強制収容所を生き延びた人たちなんだけど、40年近く経っても、親からその話を聞いたことがないんだよ。親といればいつでも話を聞く機会があるのに、聞くと厭がるということを彼女は理解している。ああいう絶滅的な被害を生き延びた人が語れない。自己解放って言うか、それができないで苦しんでいる。

「SHOAH　ショアー」(85)にもあるよね。自分も一緒に行きたいと言ったら、「いや、あなたは生き残って語り伝えてくれ」と言われて、それで生き残った人の証言がある。でも彼は戦後何十年も、(「ショアー」の監督の)クロード・ランズマンに会うまで誰にも語っていないんだよ。生き残った人たちが語るべきなのに語れないという、そこのところを「父と暮せば」は描いている。

あんな惨いこと、やっちゃいけないことだってのは分かりきっているよ！　アウシュヴィッツにしても、水俣病にしても、もちろん原爆にしても、加害者被害者と言っているだけなら楽だよ。でも生き残った人たちはどうするのか？

「父と暮せば」で感心したのは、お父さんが「お前は生かされている」と言う。娘が「自分が恋人と結婚して幸せになることは出来ない」と言うと、父親が「代わりを出せ」って言うじゃない。誰かと思うと「孫だ」って言うでしょ。あれだよ。

生き残った人はやっぱり暮らしを続けるしかないし、女性なら愛して子供を作っていくじゃない。でも子供を作ってみてやっと、しみじみ分かる話だよ。でも親には洞察があって、お前が語らないなら孫に語ってもらいたい、と。そこで娘がぱーっと開ける。ここに僕は感動したね。

直接体験した世代だけではなんともしがたい。あなたにしても作品を作ってるわけだし。自分の作品は子供みたいなものでしょう？

黒木　うんうん。

土本　証言とか事実とかはね、やはりなんらかの表現を通さなければ、残せない。

黒木　それはありますね。

土本　今度の映画はそこを見事に射たと思ったね。

父と暮せば

悲劇を「記憶」として語り継ぐ意志を示すスター映画

作品評＝馬場広信

黒木和雄の「戦争レクイエム三部作」完結編、原作は井上ひさしの名作戯曲、全編は「たそがれ清兵衛」で予想外に映画女優へと変貌を遂げた宮沢りえと、原田芳雄のほぼ二人芝居……映画「父と暮せば」は様々な話題に満ちている。

そんななか、スタッフ表に注目したい。撮影鈴木達夫、美術木村威夫、録音久保田幸雄、出演原田芳雄。この布陣が一堂に会する黒木作品は、意外にもこれが二本目なのだ。それも一九七五年の「祭りの準備」以来、29年ぶりである。「原子力戦争」以降の黒木演出が、含羞を感じさせる、時には晦渋な作風に変化していったことを考えると、この布陣が揃った黒木監督の新作に、なにかが起こる期待を覚えずにいられなかった。

その結果は、予想とかなり異なる形で結実している。全編の印象は、50年代の日活映画、それも森永健次郎監督の文芸作品あたりを彷彿とさせる。古き良き清冽で純情なスター映画に通じるものがあり、日本映画斜陽期を支えてきたスタッフが腕を揮い、スター宮沢りえに捧げた映画の観すらある。

だから昭和23年の話にしては、美津江を演じる宮沢りえの血色が良すぎるとか、浅野忠信が当時はあり得ない長髪だと、不備を指摘するのは野暮である。舞台版のキャストと比べ、宮沢―原田の父娘が美男美女に過ぎると批判するのは論外。数多の名作舞台が、スターをキャストして映画化されてきたように、「父と暮せば」は、井上ひさしが言うところの「演劇的時空間」を「ジャンル映画的リアリズム」に変換した作品なのだろう。

岩波映画出身の黒木監督や鈴木撮影監督が、五社協定時代のスター映画を志向するとは、奇妙に見えるかも知れない。だが日活撮影所で、準備期間も撮影期間も短い早撮りという条件の下、撮影所出身かつ低予算映画の経験も豊富な木村美術監督の下、戯曲世界を映像化する過程で、作り手たちの映

画屋的記憶が吹き出したのではないか。その記憶が、竹造役の原田芳雄という、現代では珍しく広いファン層を誇るスターの肉体を通じて、宮沢りえに向けて放射される緊張が、この映画にはある。

これは決して悪いことではない。湾岸戦争以降、テレビが日常的に戦場と殺戮の映像を垂れ流し続け、「戦後」という言葉が30歳の日本人にも過去の歴史上の文字でしかなくなった今日、原爆の悲劇を、従来通りの手段で新しい世代に伝えられるはずがない。

だからこの映画には、出演当時30歳の宮沢りえの肉体が必要だったのだろう。かつてバブル期に「屈託のない美少女」として日本中を跳梁した彼女が30歳になる〝いま〟を正当に受け止めなければ、「反戦」「ヒロシマ」「ナガサキ」の言葉を、教科書という墓場から蘇生させる方法は見つかるまい。「自衛隊イラク派兵反対」が半年と経たずに「イラク派兵は仕方がないが、多国籍軍＝米軍参加は反対」へと流れてゆく世論を前に、どう核の記憶を提示するか？「反戦」を「非戦」と言い換える言葉遊びは、「戦後」を生きた記憶がある世代にしか、意味を持たないだろう。現代日本の反戦映画において、過去の表現手段の踏襲は、作り手の自己模倣ないしは従順な学習の成果でしかないのだ。

この映画は「戦後」を過去として、現代から分断することで、改めて原爆の悲劇を「記憶」の形式で再現する試みである。木村氏の美術は終戦直後のリアリズムより、「記憶」としての戦後日本の土着を感じさせる〝虚〟の装置として機能する。そこに鈴木氏の白い光を基調とした陰翳深い撮影が加わる。宮沢りえの肌のきめ細かさ、彼女が着るブラウスの白さ、窓から注ぎ込む陽光、それがCGを用いた原爆の閃光へとつながってゆく設計は、「記憶」を〝虚〟の日常性として現出させる。

先に述べたスター映画的清潔感は、歴史を過去化することで、〝虚〟のリアリズムとして描こうとした結果ではないか。それは現実に戦争を体験したスタッフたちが、その体験談すら直に聞かされることなく育ったであろう世代に向けて、「ヒロシマ」のテーマを開いてゆこうとする挑戦なのだ。その意味で「父と暮せば」は実験映画の趣を漂わせている。

思えば「戦争レクイエム三部作」で、極力戦争の被害の場面を描かなかった黒木監督の姿勢は、彼の記録映画作家としての資質が生んだものかも知れない。ここには亀井文夫的「やらせ」への反発であると同時に、小川プロの「私はその場にいた」式映像への疑問も孕み、「何を見せるのか／見せないのか」という問題意識から来る、表現の模索がある。

どうすればあの原爆投下の現実を、現実の「記憶」として、知らない人に伝えられるのか？　作り手たちのこうした必死の格闘が、最良の形で表れているのは、原田芳雄が全編で唯一カメラに向かって一人芝居を見せる『エプロン劇場』の場面である。ここには表現し、伝えることの苦しみと葛藤、そして歓びが凝縮されている。

そして物語軸から見ると、美津江の「うちはしあわせになってはいけんのんじゃ！」という生き残った痛みの言葉が、野蛮と暴力だけが残った豊かな現代に生きる若い世代の心を揺り動かすかもしれない。それは〝悲劇の感覚〟を喪失した日本のフィクションが、自己慰撫的生き方の中で繰り返している言葉と偶然合致するがゆえに、そこに「記憶」を〝いま〟に伝える可能性があるかもしれない。

キネ旬チョイス
Kinejun's Choice

マインド・ゲーム

インタビュー
湯浅政明監督 アニメーションの面白さをとことん追求

取材・文＝永野寿彦

●2004年・日本・カラー・スコープサイズ・ドルビーデジタル・1時間43分
●監督／湯浅政明　原作／ロビン西　企画制作／STUDIO 4℃　製作／田中栄子　総作画監督／末吉裕一郎　美術／ひしやまとおる　CGI監督／笹川恵介　設定・作画監督補／久保まさひこ　色彩設計／鷲田知子　動画監修／梶谷睦子　編集／水田経子　音楽／山本精一　音楽プロデューサー／渡辺信一郎　海外プロデューサー／ジョエル・シルヴァー
●声の出演／今田耕司、藤井隆、山口智充、中條健一、前田沙耶香、たくませいこ、坂田利夫、島木譲二
●配給／アスミック・エース
●8月7日よりシネクイントにて公開

ゆあさ・まさあき
劇場版「ちびまる子ちゃん」(画面設定、原画)や「クレヨンしんちゃん 嵐を呼ぶジャングル」(設定デザイン、原画)などで異彩を放ち、その奔放な発想によるデザインセンスに注目が集まった期待のアニメーター。「マインド・ゲーム」で劇場用長編アニメの監督デビューを果たす。主な作品に「ホーホケキョ　となりの山田くん」(原画)「ねこぢる草」(演出、脚本、絵コンテ、作画監督)などを担当する。

イメージ豊かなアニメーション映像

アニメ界の大物監督たちの新作が偶然にも出揃い、色々な雑誌でアニメ特集が組まれるほど注目が集まる中、隙間を切り裂くような勢いで、とんでもない作品が現れた。「マインド・ゲーム」である。

ロビン西原作の同名コミックをアニメ化した作品で、あらすじを簡単に説明すると、好きな女のコとさえまともに付き合えないダメ青年・西が、ひょんなことからヤクザに無様に殺されるハメに。神様の前に立った彼は神様に逆らい、再び現世へと舞い戻るが……この先はもったいなくて書けない。というよりも、本当ならあらすじなんて一言も書きたくなかったくらい。なぜならこの映画は観てナンボの、動く絵でこそ本当のドラマが伝わる、まさにアニメーションならではの作品なのだ。

その監督を務めたのは、「ちびまる子ちゃん」「クレヨンしんちゃん」などのアニメーターとして活躍してきた湯浅政明。本作が劇場長編監督デビュー作となる。

「作品が完成して、正直やっと終わったって感じですかね。最初は劇場用アニメとして面白くなかったらどうしようというプレッシャーもありましたけど、あまり気にせずにやってました。でも、初号で絵が流れ始めた時、急に〝ハウッ！〟と過呼吸になって、苦しくて気を失うんじゃないかと思いましたよ(笑)。その瞬間に我にかえって全国で公開されるんだって思い、ちょっとビビりました」

湯浅監督の言葉とは裏腹に、映画はそんな心配など微塵も感じさせないほど自由奔放で、驚くようなイメージ豊かなアニメーション映像が次から次へと展開される。

「(原作も)イメージの非凡なところが面白いなと思いました。僕にとってはやりやすい題材なんじゃないかとは思いましたけど、今の自分でやれるのかな。でも勢いでやれば、なんとかなるかも」と謙遜気味に語る湯浅監督だが、アニメーターとしての仕事は〝天才〟と称されるほど、絵とその動きが魅力的な人物。特に「クレヨンしんちゃん　ヘンダーランドの大冒険」の城での奇想天外なチェイス・シーンなどはファンの間では有名だ。

「あそこは絵コンテもやらせてもらいました。スケジュールもなかったんで、あんまり緻密には動かしてはいないんですけれど。なんか一緒に走っているような感じで、ああ登ってこう登るっていう、そういうのが楽しいですね」

気持ちも動くアニメーション

「マインド・ゲーム」では、そんな彼のセンスが全編で大爆発。生身の役者を使った実写から写真背景、3DCGまで取り込み、アニメーションの面白さをこれでもかっとばかりに見せてくれる。

「(登場するキャラクターは)大阪弁なんで、ダメモトでとりあえず吉本興業さんに当たってみよう。そしたら〝ハイ分かりました〟って話が進んじゃいました(笑)。キャスティングはみんなキャラクターに合わせたかのようにそっくりで。運もありますけど、後から思えばその人しかいなかったかなってくらいにハマりましたね。アニメに合わせて実写を撮っているので、ちょっと不自由な感じにはなりましたけど、とにかくできるだけ勢いよく見せたかった。描きたい絵だけ描いて、それで物語が成立すればそれがベストだと。基本的には〝全体的〟ですね。バランスが取れているかとか、絵も実写も色もそれぞれバラバラなんだけれど、全体として見るとなんとなくまとまっている感じになるよう心がけました」

そうして描かれるのは、人生の未来の可能性と他者と共に生きる人生の素晴らしさ。一見、ハチャメチャな映像がある種の人生賛歌、人生応援歌として胸に迫ってくるところが感動的だ。

「僕も若い時は〝絵が描けるから他の人とはちょっと違うんだよ〟なんて生意気なところがあったんですよ。でもふと、世の中のことって全部誰かがデザインして作っているんだよなって思った。この机も、椅子も、壁も。その中で僕は暮らしている。その中の1人でしかないと。それをアニメでも表現したかった。生きていること自体ドラマチックというか面白いことだと思っていたので、そういう感じが出せればいい。別に最後の方には失敗する姿も出てくるんですけど、それはそれで頑張っているんだから。結果じゃなくて頑張っている過程が大切。ま、そんな頑張ってなくてもいいんですけど(笑)」

絵の動きによってドラマを語る、言わば〝気持ちを動かすアニメーション映画〟を完成させた湯浅監督。この後は逆に絵を動かさない作品に挑んでみたいという。

「弱点補強の練習というわけではないんですけど(笑)。最近、映画みたいなテレビアニメが増えてきたのがイヤで。背景も雑な感じの動かさない絵で、ドラマが面白いテレビアニメをやりたい。そして、そこでドラマ演出を勉強したら、それをふまえてまた娯楽性の高い、ドラマチックな、動きもあるヤツを作りたい。最終的には昔の東映動画の長編みたいなものをやってみたいですね」

西くん役の今田耕司(左)とみょんちゃん役の前田沙耶香(右)

感情のままに描写されるキャラクターたち

作品評

閉塞を吹き飛ばす――アニメーションの根元的驚異に満ちた作品

文＝氷川竜介

昨年末からの予感どおり二〇〇四年はアニメーション映画にとって大変な節目の年になりつつある。巨匠の大作攻勢、アニメ・マンガ原作の実写化は予定どおりだが、『機械のからだ』を持つアニメ映画「アップルシード」という伏兵の衝撃も覚めやらぬ中、今度はアニメーションの根元的な「おもしろさ」を究める方向からエネルギーに溢れかえった意欲作が登場した。それがスタジオ4℃と湯浅政明監督の「マインド・ゲーム」である。

アニメーションの特性を活かしたパワフルな画面構成

まず映像表現が驚きの連続だ。荒々しいタッチと色彩効果で感情表現を支える背景美術。豪快に空間を歪ませまくったレイアウト。ヘタウマ系で感情のおもむくまま表情を崩しまくるフレキシブルなキャラクターは、シリアスになると声を演じる吉本興業の役者たちにいきなり実写変身してしまう。

こんな風に、画面のテイストがどんどんと変化していくから、初恋の幼なじみ、みょんちゃんに偶然再会した主人公の西が、大阪の横町にある焼き鳥屋に行くという序盤の日常的展開だけでも、充分にワンダーに満ちた空間が拡がっていく。その闊達さは最初、とまどいを感じるほどだが、これに慣れてくると、既存表現の枠組みからの解放感が次第に快感に転じていく。

重要なのは、表現が単に奇をてらった実験に終わらず、物語に寄りそって常に瑞々しい感情を伝えてくれることだ。相手にフィアンセがいると知りつつ、初恋以来の気持ちをストレートに伝えることのできない西。格好をつけてはみるものの、それは本当は臆病な保身的行為と知っているからこその自己嫌悪と、内心のたぎる思いとの行ったり来たりが、さまざまに変化する映像(花火の表現が秀逸)で描かれ、観ているこちらの鼓動とも共鳴していく。

静謐なる中で高まる心の内圧は、ヤクザに主人公が最高に格好悪い方法で射殺されてしまうという展開を契機にして、一気にはじけ飛んでしまう。さらに復活後はストーリー展開にもドライブがかかり、カーチェイスや銃撃戦までエスカレートしていくが、勢いづいた驚きの先には、あらゆる予想を超えた巨大な驚きが待っているのだ。

映画の果たす大事な役割のひとつには、「日常的な閉塞からの解放」がある。本作品は、アニメーションならではの特性をフルに活かしきって、その要求に応えている。その特性とは、実感を抽出して連続した絵の動きの中に塗り込めることだ。湯浅監督は『クレヨンしんちゃん』などでも知られる優れたアニメーターなので、動画技術だけ注目しても、「主人公がひたむきに走る」と画面の時空間全体が「ひたむき化」してしまうほど凄まじいパワーを放っている。本作ではそれに留まらず、ありとあらゆる映像表現を動員して、色彩や抽象化のレベル設定まで微妙に変化させながら、観客の根元的な生理からエネルギーを引き出そうとしているようだ。それが、「人生を前向きに生きるための活力」と直結するところに、快感の源があるのだろう。

きちんとしたレイアウト、崩れないキャラクター、破綻のないストーリーと、この十年あまりのアニメ作品は「商品としてきれいなもの」を追求してきたようなところがある。それはそれで理由と意味のあることだったが、「もうそろそろ充分じゃないか」「この先には何もなさそうだ」と作り手も観客も思い始めている兆候が顕れている。だから筆者も「大作ラッシュの後は、アニメーションの根元的な手描きの魅力に回帰した作品が出る」と予想していた。だが、「後」ではなく「最中」の登場で、他作品とまったく重ならない角度からの挑戦だったところをとても嬉しく感じた。

「もっと好きなように暴れたらええやん」という破壊的で未来につながるアニメーション・パワーは国境を越えるのか、ジョエル・シルヴァーによる海外配給も予定されているという。作品外のサプライズも含め、驚異に満ち満ちたアニメーション体験をぜひ「マインド・ゲーム」で感じて欲しい。

KinejunInterview

国境を越えたコラボレーション作「地球で最後のふたり」を生んだ

監督 ペンエーグ・ラッタナルアーン

素晴らしい才能やセンスを共有できたよろこび

インタビュアー＝久保玲子

映画「地球で最後のふたり」は、「6ixtynin9」「わすれな歌」で知られるタイ人監督ペンエーグ・ラッタナルアーン、浅野忠信、クリストファー・ドイルという顔ぶれによって製作発表時から注目を集めてきた。そのコラボレーションの成果は、切ないムードをたたえた邂逅の物語の主演・浅野がヴェネチア国際映画祭コントロコレンテ部門の主演男優賞を受賞したことによっても証明された。

——自殺に取り憑かれたケンジの物語はどのようにして生まれたのですか。

「仕事で疲れきって、友達と〝このまま死ねたら完璧だね〟と交した話から生まれたんです。電話に出なくていいし、メールも読まなくていい、映画祭にも行かなくてもいいと。ケンジの自殺願望も、生きる意味が掴めないといった意味合いが強い。そんな男が次第に人生の意味を見出していく自己発見の旅であり、旅の過程の物語です」

——今回、初めて恥ずかしさに苛まれなかった作品と語っていましたが。

「具体的にうまく言えませんが、間違いを犯した数がこれまでに比べてずっと少ない気がします。前2作は分かりやすい筋書きを追う映画でしたが、今回はもっと曖昧なニュアンス、ムードを大切にしたかった。恐らく今までは、僕自身そういう作り方ができなかったんです」

——撮影前に多くの知人から〝ドイルと組むと映画を乗っ取られるぞ〟と忠告されたそうですが、スタイルの変化、成功は彼とのコラボレイトの成果ですか。

「正直、撮影監督によって自分自身の意識がここまで変わるとは思っていませんでした。もう以前の感覚とかスタイルに戻ることは難しいと思います。なぜクリスがあんなにニュアンスを取り込めるのかは謎です。言えるのは、彼が視覚的に取り憑かれた人間だということぐらい。視覚も独特ですが、話す方も饒舌で、活字人間でもある。そういったヴィジョンや音楽の趣味を共有できたことも助けになりましたね」

——撮影現場では、監督が腕組みをして静かに熟考し、ドイルが険しい顔してカメラを担いで動き回るという好対照が印象的でした。

「クリスとは良い意味で毎日が喧嘩でしたが、基本的に彼にもアサノにも好きなように動いてもらいました。ただクリスの度が過ぎたときだけ、それは僕の望むところじゃないと伝えて。もともと僕は、撮影現場での監督の仕事は観客のようにその場に居て見つめることだと思うんです」

——浅野さんは、俳優としての意識の変化がケンジの変化と重なったと語ってい

PEN-EK RATANARUANG／1962年タイ、バンコク生まれ。77年に渡米してグラフィックデザイナーとして働く。タイに戻ってCMを監督するようになり、手掛けた作品がカンヌ国際広告祭などで数々の賞を獲得。映画デビューは97年の「FUN,BAR,KARAOKE」。長編2作目の「6ixtynin9」(99)がベルリン国際映画祭審査員特別賞に輝き、世界的に脚光を浴びた。その他の作品に「わすれな歌」(02) がある。

ました。
「ケンジの変化は脚本にあったものですが、何を考えているのか分からないアサノの雰囲気はケンジにぴったりでした。ノイの家でケンジが振り向いて『マイ・ネーム・イズ・ケンジ』という時の顔、あれはアサノならでは！　あの瞬間からケンジは単なるアートフィルムのキャラから血の通った人間に変わったんです」
——どこか永遠の物語のようにも感じられるロケーションはどのように選んだのですか。

「地球で最後のふたり」

LAST LIFE IN THE UNIVERSE
バンコクの日本人センターで働くケンジはある日、日本のセーラー服をまとった女ニッドに出会う。だが、彼女は、自殺を考えていたケンジの目の前で車にはねられて死んでしまった。一方のケンジは、日本からヤクザに追われ逃げてきた兄ユキオのトラブルに巻き込まれ、殺人を犯してしまう。行き場を失った彼はニッドの姉ノイのもとを訪れ……。●監督・脚本／ペンエーグ・ラッタナルアーン　脚本／プラープダー・ユン　撮影／クリストファー・ドイル　出演／浅野忠信、シニター・ブンヤサック、ライラ・ブンヤサック、松重豊、竹内力　配給／クロックワークス　●7月31日渋谷シネ・アミューズほかにて

「最も重要なのはノイの家でした。クリスがあの家に恋したように惚れ込んで、寝食を忘れて撮りまくるから、撮影が進む進む！　スケジュールは遅れるものと思っている僕なんて〝何かおかしいんじゃ？〟とプロデューサーに相談したくらい。家自体は僕には大きすぎる感もあったんですが、それでもここにひとつの宇宙を創造できる、またケンジの到来によって宇宙が変化する様を描けるんじゃないかと。それにプールがあったのは神の恵みです。あのプールのおかげで映画は『サンセット大通り』の雰囲気を備えることができた気がします」
——三池崇史監督の出演はどういう経緯で？
「ロッテルダム映画祭で彼の『オーディション』と『DEAD OR ALIVE 犯罪者』を見て、こいつは狂ってるぞ！　とファンになりました。今回、彼には竹内力さんのブランド衣裳で全ヤクザ役のスタイリストまでしてもらって。夢が叶いました！」
——現在のタイ映画界の状況はどういったものですか。
「ここ2年の間、まったく知らない業界外の人から電話で『お金を出すから映画作らないか』と言われることが度々ありました。人材やキャパを考えるとタイ映画は年間10本が妥当なのに、今では年間60本以上。駄作も多いから映画ファンは興味を失い、タイ映画から離れていく。悪循環です」
——アジアの合作は欧米に比べて数十年遅れをとっているといわれますが、今後、進んで行くと思いますか。
「大金を要する映画製作や配給を一国で賄うというのは意味がないし、避けられない状況だと思います。組みたい人と組めれば、言葉や経験の違いはさほど問題でない上に、才能やセンスを共有できることを体験したので、合作の機会が増えるのは嬉しいですね」

中野香織

㊹不運で幸せなフランス的愛

お勧めいただいた「モナリザ・スマイル」を観てきました。いやあ、最初のほうのシーンはひとごとと思えなかった。おそろしく知識だけはある生徒たちに初授業でうちのめされ、じゃあやってやろうじゃんかとばかり次回からはシラバス無視でいく気負いすぎ教師ってもう、遠い遠い日のわたくし…。ハズカシ。それもあってか「教師もの」ってどうも居心地悪くて、冷静な目で見られません。この映画はもう、この秋冬のトレンドの「50年代レディ・シック」の動くカタログとして堪能いたしました。

ウエディングドレスをしずしずとまとってうそっぽい50年代風「スマイル」をきめるキルスティン・ダンスト、笑えるなあと思っていたら、次の日に観た「スパイダーマン2」ではウエディングドレスを着て走ってました。なんだかな。

それはそうと、「フランスでは感動学園ものというジャンルが存在しえない」という敦子さんのご指摘になるほどと思ったんですが、フランスにしか存在しえないジャンルというのもありません？　ブノワ・ジャコの「イザベル・アジャーニの惑い」とフランス映画祭横浜で上映していたティエリー・クリファの「あなたを待つ人生」を

ドーバー越えて

往復連載

齋藤敦子
中野香織

「イザベル・アジャーニの惑い」
シネスイッチ銀座にて上映中

服飾史家である中野香織さんと、映画評論家で字幕翻訳家の齋藤敦子さんの往復書簡的コラム。ファッション誌の映画コラムニストとフランス映画社宣伝部員として出会った中野さんと齋藤さんは、以来十数年、友情を育む。この連載では、イギリス文化とフランス映画という専門分野をベースに映画談義が交わされる。

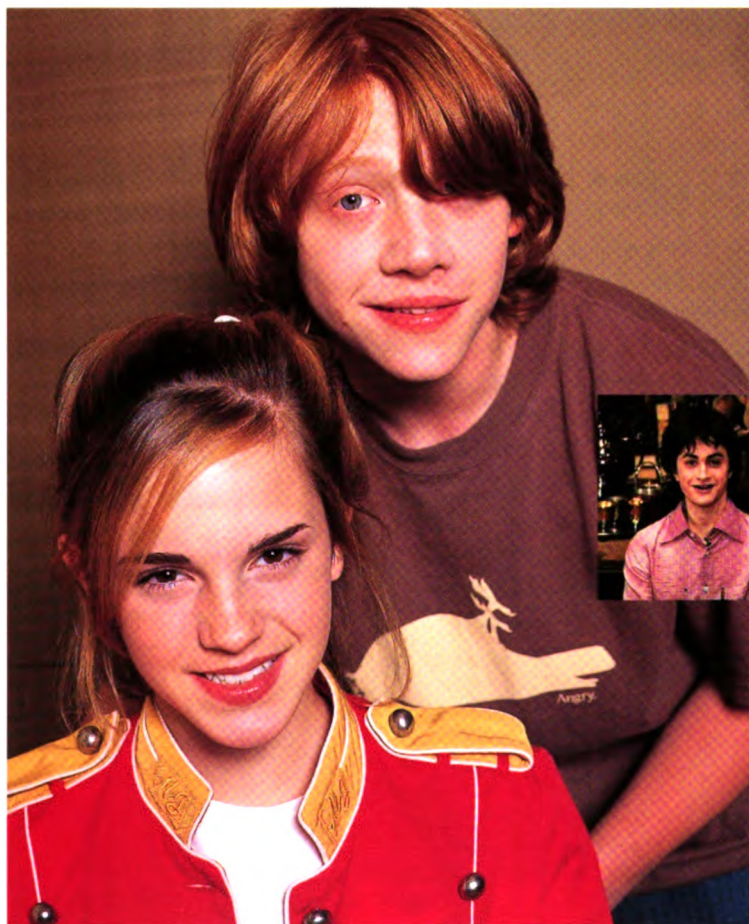
オブジェ制作＝井上陽子

観て感じたことですが、つまり「切れる・切れないのずるずる(不倫)愛もの」というジャンル。切れたいはずなのにやっぱりずるずると引き戻され…という先のない泥沼ずぶずぶ状況そのものを娯楽映画にしちゃう（そういう映画を受け入れる観客も存在する）という例は、イギリスやアメリカには思い当たらない気がする（あったら教えてください）。日本の「失楽園」の二人にしても「切れたい」なんてことはなくて、二人で一つになって死ぬという「幸福な」（単純な?）選択をするわけだし。フランスの愛人たちのような複雑さはない。

あ、そもそも、二人で一つになって死ぬというそのやり方にしても、フランス映画の恋人たちは格が上(というのか)ですよね。ヤン・サミュエルの「世界でいちばん不運で幸せな私」のギョーム・カネ(ラブ!)とマリオン・コティヤールのことですが。自分たちにしか通用しないルールのゲームにとらわれた幼なじみ、という設定がまた遠い遠い日のわたくし(笑)を思いださせてあまり冷静に見られなかったところもあるとはいえ、「フランス映画っぽくない」破天荒で大人気ないラブストーリーの結末には、笑うやらあきれるやら涙するやら。制御不可能なあらゆる感情の奔流は「愛」そのもの？　なんちて。ともかくフランス映画における愛の描写の幅広さというか底力にあらためて圧倒されるこの頃です。

取材・文＝横森文　撮影＝[illegible]

ルパート・グリント&エマ・ワトソン

「ハリー・ポッター」シリーズと共に著しい成長を遂げる！

RUPERT GRINT
シリーズ第1作「ハリー・ポッターと賢者の石」でハリーの親友ロンを演じ、映画デビューを果たす。その他の出演作は「サンダーパンツ！」(02) がある。

EMMA WATSON
ハリーの親友ハーマイオニーを演じる彼女もまた「賢者の石」で映画デビューを果たす。映画出演はこのシリーズのみ。

●既にシリーズ第4作の撮影に入っているため衛星会見となったダニエル・ラドクリフ。

「ハリー・ポッターと
アズカバンの囚人」

●監督／アルフォンソ・キュアロン　共演／ゲイリー・オールドマン、アラン・リックマン、エマ・トンプソン、マギー・スミス、マイケル・ガンボン
●丸の内ピカデリー1ほか全国松竹・東急系にて上映中

ハリー・ポッターの親友であるロン役のルパート・グリントとハーマイオニー役のエマ・ワトソンが、「ハリー・ポッターとアズカバンの囚人」で初来日を果した。

「CGを使ったシーンが多いから、撮影時はテニス・ボール(目線棒)相手に演じなくちゃいけないのよ。でも助監督がバックビーク(馬ワシ)のイメージを真似てくれたり、手助けしてくれたから助かったわ」(エマ)

特に自分で頑張ったシーンは？ と聞くと、「スコットランドで撮影した時、一度山を下りて、それからもう一度登って撮ることがあった。その時は頑張ったかなって」と静かな口調で答えるルパート。その横で「スタントを基本的には自分自身でやったことかしら。暴れ柳の枝につかまって振り回されたり。ルパートなんかも犬に引きずられるシーンは自分でやったりしたのよ」ともの静かなルパートの分まで答えるエマ。さすが撮影が長いだけあって息がピッタリ。どうやらハーマイオニーのようにエマはしっかり者で、ルパートはロンのようにドジではないがおとなしい様子。でもこれだけ何年も同じ役をやっていて正直な話、飽きないのだろうか!?

「全然！ だって一作ごとに新しい映画をやっている感じだし。それにハーマイオニーを演じたいと思っている人って何十万人といるのよ。その中から選ばれたのはラッキーだと思うし、感謝しなくちゃ」(エマ)

「僕も飽きないな。ま、数十テイクも撮り直しがある時はウンザリすることもあるけどね。あとコメディ映画にも挑戦してみたいよ」(ルパート)

「私は舞台にも立ってみたい」(エマ)

2人とも成長してさらに俳優業への情熱が高まったようだ。KJ

取材・文＝中西愛子　撮影＝イエハラトキオ

ジュール・シトリュク & ジョゼフィーヌ・ベリ

「ぼくセザール　10歳半　1ｍ39㎝」の子役たちのプロ意識

6月恒例のフランス映画祭で、今年から設けられた観客賞を見事獲得した「ぼくセザール　10歳半　1ｍ39㎝」。3人の少年少女たちの愉快でスリリングな冒険を描いた、心温まる痛快コメディだ。太めの男の子セザールを演じるジュール・シトリュクと、転校生の美少女サラを演じるジョゼフィーヌ・ベリが、映画の中と変わらぬ愛らしさをたたえて来日。

「自分が出演した作品だけど、鑑賞中はそれを忘れて物語にすっかりのめり込んでしまったよ。肉体的にも精神的にも肥満の子を演じるのは大変だった。太めに見えるようラテックス製のものを胸から膝の辺りまでつけてたんだ。心地悪いものだったし、重くて場所をとる。装着に30分くらいかかるから、食事の時もつけたままで食べづらかったよ」

肥満に悩むセザールの感情表現にも苦労したというジュールは、芸歴10年らしい堂々たる役作りぶりだ。本作の監督リシャール・ベリの愛娘ジョゼフィーヌは今回が初の映画主演。「お父さんが監督なので演技はやりやすかったと思う。分からないことがあったら気軽に聞きに行けたから。共演したアンナ・カリーナはとっても優しい人だったわ。撮影の最初の日と最後の日にプレゼントをくれたのよ」

今後も2人は俳優業を続けるのですかという質問に、ジュールは「もちろん！　でも、俳優人生はいつ終わるか分からないから、勉強もきちんとやりたい。監督やプロデューサー業も経験したいな」と語り、ジョゼフィーヌは「両親はまずは勉強をして大学まで行くことを望んでる。女優の仕事はたくさんの人に会えるし、たくさんの場所に行けるからこの仕事を続けていきたい」と頼もしい発言。彼らの輝かしい未来が楽しみだ。KJ

「ぼくセザール　10歳半　1ｍ39㎝」

●監督・脚本／リシャール・ベリ　共演／マボ・クヤテ、アンナ・カリーナ　●7月31日より日比谷スカラ座2、新宿武蔵野館にて

JULES SITRUK／1990年パリ郊外生まれ。3歳より子役として活動し、02年「バティニョールおじさん」の主人公シモン役で映画デビューを果たした。

JOSEPHINE BERRY／1992年パリ生まれ。父は本作の監督リシャール・ベリ。01年父の初長編作品でも子役として登場している。

取材・文＝よしひろまさみち　撮影＝吉岡誠

トニー・ジャー

「マッハ！」に主演したアクション映画の新星

TONY JAA／1976年、タイ・スリン県生まれ。子供の頃から武道とマーシャルアーツに興味を持ち、10代から映画スタントを学ぶ。97年、「モータル・コンバット2」でロビン・ショウのスタント・ダブルをやり注目され始める。本作の主演で映画デビューを果たした。

「マッハ！」
●監督／プラッチャヤー・ピンゲーオ　共演／ペットターイ・ウォンカムラオ、プマワーリー・ヨートガモン
●7月24日より渋谷東急ほか松竹・東急系にて

格闘技ブームも一段落ついた日本だが、この映画を観たら「古式ムエタイってスゴイ！」と思わずにはいられない。とにかく飛ぶ飛ぶ。人間がワイヤーワークを使わずに、こんなにも飛ぶもんか、と驚かされた。それが「マッハ！」最大の見せ場といってもいいだろう。「危険なスタントシーンは、きちんと訓練されたもので計算ずく。古式ムエタイばかりではなく、テコンドー、空手、カンフー、柔道など、あらゆる格闘技をマスターしてきたからできるんだよ」と語るトニー・ジャー。彼を中心に、出演のスタントマンたちの息づかいが聞こえるほど、切れ味満点のアクションを繰り出している。これほど完璧なアクションができるなら、プロのスポーツ選手としての生活も夢ではなかったのでは？ と聞くと「ムエタイのプロ選手になってしまうと、ルールに縛られてしまうし、アクションができるのはリングの中だけ。それじゃ物足りない。映画の中ならいろんなことができると思ったから、スタントのトレーニングを積んだんだよ。それに、僕が映画に出ることで、今ではタイでもみられなくなった古式ムエタイを、世界に紹介できるいい機会になると思ったんだ」と、あくまで意欲的だ。

彼は「モータル・コンバット2」でのスタント・ダブルで注目を浴び、本作でブレイク。作品自体も、本国では興収記録を更新するばかりでなく各国映画祭やアジア諸国でも絶賛を浴び、あのリュック・ベッソンがヨーロッパ7カ国での配給権を取得したという。ビッグになった彼の目標は「ブルース・リーのスピード感、ジャッキー・チェンのコミカルさ、ジェット・リーの柔軟さ」だという。アジア発のアクション新星に期待したい。

取材・文＝佐藤友紀

ルズ、キルスティン・ダンスト、マギー・ギレンホール

「モナリザ・スマイル」

●KIRSTEN DUNST(中央)／1982年アメリカ・ニュージャージー州生まれ。主な出演作は「ヴァージン・スーサイズ」(99)「チアーズ！」(00)「スパイダーマン」(02) と現在公開中の「スパイダーマン2」ほか。●JULIA STILES(左)／1981年アメリカ・ニューヨーク市生まれ。主な出演作は「セイブ・ザ・ラストダンス」(01)「ボーン・アイデンティティー」(02) ほか。●MAGGIE GYLLENHAAL(右)／1977年アメリカ・カリフォルニア州生まれ。主な出演作は「サンキュー、ボーイズ」(01)「アダプテーション」(02)「セクレタリー」(02)「カーサ・エスペランサ～赤ちゃんたちの家～」(7月31日公開) ほか。

「母もこの業界(ショウビズ)で働いていたから、〝仕事か家庭か？〟などという二者択一をしなくちゃならない人生なんて、正直、考えた事もなかったわ。キルスティンだってそうでしょ？ 子供の頃から俳優をやっているわけで、演じるのが自然の呼吸みたいなものよね」

弟ジェイクの恋人キルスティン・ダンストとインタビューの場についたマギー・ギレンホールの落ち着いた知的な話しぶりは、同性をもざわざわさせる何かがある。

「そうね。だからこそ今回の私の役って、本当に挑み甲斐があったわ(笑)。とにかくクラスの誰よりも早く結婚するのが〝勝ち〟という価値感。その生活の中味よりも、結婚指輪を見せつける方が大事っていう(笑)。もちろん私の実人生には絶対侵入して来ない考え方だけど、そういう価値感にがんじがらめにされていた女性がいたっていう事は、役を演じていて、自然に合点がいったわ。彼女が、心の底からその生き方に納得していないから、なおさら演じるのが面白かったのよ。でも、マギーもいかにもアヴァンギャルドな女性の役、楽しそうだったじゃない」

「まさにそう(笑)。『セクレタリー』の被虐的なヒロインとは180度違うから、本物の私を知らない人は〝極端な女だ〟と思ってるでしょうね(笑)」

優等生役のジュリア・スタイルズの選択は、この映画のテーマ「自らの意思で生き方を選ぶ」を体現している。

「たぶん私なら、どんなことがあったって、仕事を諦めるなんていう選択肢は選ばないと思うけど、それはそれで一つの生き方ですものね。逆に今回の役を演じた事で、私個人レベルでも女優という仕事に対する新しい感覚が生まれてきたような気がするわ。つまり、演じる機会が与えられているだけでも、おまえは幸運なんだぞって事かな。この事を再確認できたのが嬉しかったわ」

そのジュリア。現在アーロン・エックハートとロンドンで『オリアナ』の舞台に出演中だ。KJ

ジュリア・ロバーツ、ジュリア・スタイ

トップ女優と若手がそれぞれの魅力で演じるアメリカ女性の生き方

「モナリザ・スマイル」
●監督／マイク・ニューウェル　共演／マーシャ・ゲイ・ハーデン、ジュリエット・スティーヴンソン、ジニファー・グッドウィンほか
●8月7日よりみゆき座ほか全国東宝洋画系にてロードショー

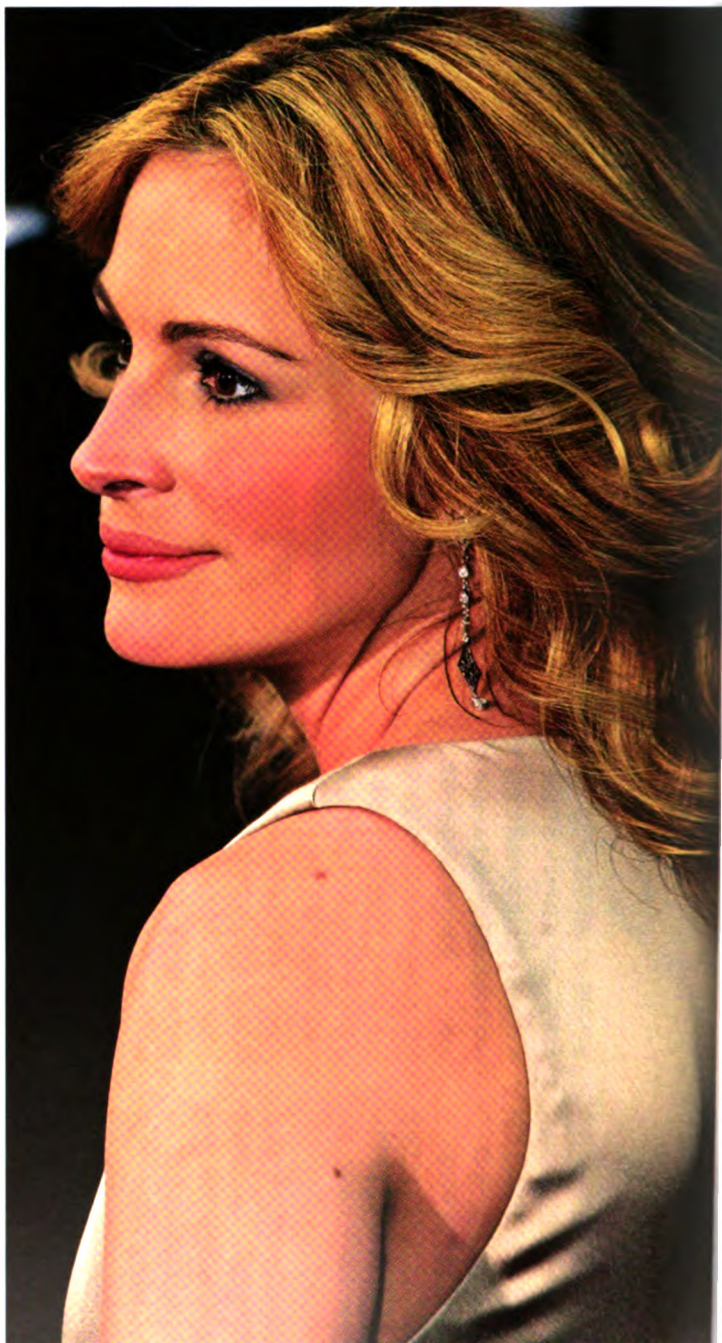
「自分より若い世代の女優たちとの仕事が、こんなに刺激になるなんて、想像もしなかったわ。もちろん役を演じている時は、自分や相手の年齢の事など全然頭に浮かんだりしないんだけど、ふとした瞬間、“私『ミスティック・ピザ』に出てた頃は、マギーやキルスティン、ジュリアたちみたいにはしっかりしてなかったなあ”って(笑)。それでも当時はいっぱいいっぱいだったのよ、私としてはね(笑)」

ジュリア・ロバーツから、「若い頃」の話を聞く日が来るとは、ついぞ思わなかった。「モナリザ・スマイル」でも、名門女子大学の美術史の教授役を演じているが、時おり「師と生徒」という上下関係よりも、「女同士」の横の関係の方が強く見える。

「だって、教師といえども、彼女も現在進行形で人生について学んでいるんだもの。学生たちと見に行った本物のジャクソン・ポロックの絵に感動するシーン。演じている私自身も感動した大好きなシーンだけど、ああいう事って本当にあると思う。自分の生き方をも変えてくれるというか。強い影響を及ぼすアーティストとの出会い。私の場合、それはスティーヴン(・ソダーバーグ)だわ。彼の何かを創り出す時の姿勢は、まさに“芸術家”そのもの。創作、表現に関わる人間なら尊敬しないではいられない。だからこそ、彼の映画には、どんな小さい役でも出たい、ずっと関わっていたいと思ってしまうのよ」

かつて、「女優にとってのいいシナリオ(役)は、まず私のところに回ってくる」と、高額出演料No.1よりも、そのことの方を「本当に私って幸運だわ」と喜んでいたジュリア。が、マイク・ニコルズ監督の「クローサー」の主役は、第一候補ケイト・ブランシェットの妊娠によって手に入れた役である。その後、ジュリアも双子を妊娠。

「この映画には、女性が自分の意思で生き方を選ぶ事の重要さが描かれている。どんな形であれ、その意思を全うできるのは、素晴らしい事だと思うわ」

©Frank Micelotta／Getty Images／AFLO FOTO AGENCY

JULIA　ROBERTS／1967年アメリカ・ジョージア州に生まれる。主な主演作は「プリティ・ウーマン」(90)「ペリカン文書」(93)「ノッティングヒルの恋人」(99)ほか。2000年に「エリン・ブロコビッチ」でアカデミー主演女優賞とゴールデン・グローブ賞を受賞した。

取材・文＝木俣 冬

「ローレライ」

終戦末期の潜水艦戦を描くアクション大作

ドイツ軍から接収した戦利潜水艦『伊507』艦長の絹見真一少佐役の役所広司

満を持して超大作で初監督に挑む樋口真嗣(右)

精巧にリアルにつくられた潜水艦のセットの中に入った。そこは発令所、操舵室と言われる潜水艦の中心。撮影後半となったこの時期、そこだけしかなかったが、以前は撮影所いっぱいに各部所が連なったセットが圧巻だったそうだ。3カ月ほどかけて建て込んだという。「ちょっとしたアミューズメントパーク」と特殊潜航艇の操舵手・折笠役の妻夫木聡はたとえ、艦長・絹見役の役所広司も「この年齢になっても、おお！と興奮しました」と笑った。

ドイツ語に日本語で訳が書かれている各種メーターの表示、鉄錆などが再現された操舵室は、6畳くらいの印象だ。天上も低く圧迫感がある。しかもなぜか床面が微妙に傾いている。わずかだが、徐々に三半規管に影響を与えて感覚を狂わせそうな気がする。

「実際に揺れるし、ちょっと気持ち悪くなる時もありますが、セットがリアルなほうが演技を助けてもらえます。パイプに水滴なんかもつけられているんですよ」(妻夫木)

この中に、俳優、スタッフが十数人ひしめく。基本的にカメラが入る一箇所だけ開けることはあっても、あとはすべて天上と壁で覆われる。不自由な環境下、天上を這うパイプの一部にカメラを吊ったり、小回りの利く撮影機材を使用し、変化の多い画を撮っていく。実際の潜水艦でもクルーがみっちり中にいるわけで、ここでの生活の大変さは相当なものだろう。

「実際の僕らは戸惑うけれど、役の上では、この生活が当たり前という感覚を見せなければならないんです」(役所)

監督・樋口真嗣は「こういう緊張感の中に日本の役者さんの身を置かせたいと思った」と構想を語る。「使命とか宿命とか、いろいろな状況で闘う男たちのかっこよさを描きたい」と。製作発表でも〝男祭り〟と言われていたが、出演者は男ばかり。現場でも、ひたすらに凛として硬派な空気が漂っている。海上に出て方位を確認するシーンで、柳葉敏郎扮する先任将校の木崎が使用した六分儀という機器に、「『エヴァンゲリオン』のシンジのお父さんの旧姓はここから取ったんだよね。エヴァの名前はみんな海に関係するものになっているから」とかいう話題でしばし盛り上がるスタッフたちの姿を見て、独自な世界だと痛感したりもする。

「男が惚れるかっこよさですが、女の人にもお勧めしたいですよ。みんな洋画の俳優がかっこいいっていうけど日本人の男だってこんなにかっこいいんだって」(樋口)

信頼、裏切り、生と死等々様々な感情が、狭い艦内でビリヤードの弾

艦橋部のセット。バックはCG処理のためブルーバック

東宝スタジオに組まれた巨大な伊507艦内セットの外観

左が潜水艦の指揮をとる操舵室（発令所）のセット。この6畳位の狭いセット内でキャストとスタッフがひしめきあうことになる。上は、そのセットの外観。このセット全体が油圧式で上下し、傾かせることができる

小型潜航艇で特攻する回天特別攻撃隊員だったが、能力を買われて「伊507」に引き抜かれた折笠征人役の妻夫木聡

「ローレライ」

同盟国のドイツが降伏し、日本の敗戦も濃厚となった1945年8月。絹見少佐は、海軍軍令部作戦課長の朝倉大佐の命により、独軍開発の特殊兵器「ローレライ・システム」を搭載した戦利潜水艦「伊507」で、原子爆弾を積んだ輸送船攻撃の任務に就く。しかし、この任務と特殊兵器には、ある秘密が隠されていた……。福井晴敏の原作「終戦のローレライ」（講談社刊）を基に、第二次世界大戦末期、日本への3発目の原爆投下を阻止すべく、たった一隻の潜水艦で戦った兵員たちの姿を描くアクション大作。

●監督／樋口真嗣　原作／福井晴敏　出演／役所広司、妻夫木聡、柳葉敏郎、香椎由宇、上川隆也、堤真一　配給／東宝

●全国東宝洋画系にて、2005年春公開

のようにビシビシとぶつかり、はじけ合う。

樋口は撮影に当たり、20キロ体を絞ったことで自ら緊張感を見せつける。今作は〝平成ガメラ〟シリーズ等の特技監督として日本の特撮界を担ってきた樋口の初監督作だ。彼はこれまで自分の担当パートには絵コンテを描いてきた。特撮は何もないところからつくり込むものだから、できあがりのイメージを明確にする必要がある。それにしても彼の絵は実に細かく、コンテがひとつの作品として成立するほどのものだが、今回は目の前に出来上がったセット、深い演技をする役者がいる。

「役者さんの芝居に即して撮り方を変えています。発想を切り換える時に混乱もありますが、自分の想像をはるかに上回る濃密なものが、役者さんの演技で生まれています」

本編監督への印象も変わってきたとかで、非常にフレッシュな感覚を味わっているようす。

「撮影が後半になってきて、役者さんがひとりひとりクランクアップしていく時、監督としてもっと盛り上げなくちゃいけないのに、そういう状況に慣れてない未熟さを感じます」と照れ笑いを浮かべた。「終わりが近づくと、当たり前ですがもう撮れないというあせりもありますし」。これまでの樋口は粘ってカットを多くおさえていくという印象があったが「大人になって、撮りこぼすことのないよう気をつけています」と謙虚な回答が出た。個人の力でどうにでもなる作業から、たくさんの人の手で出来ていく共同作業の中心にはじめて身を置いての試行錯誤。狭いセットだが、モニターで確認するのではなく、なるべくカメラ横で見るようにもしている。物語の男たちと共に樋口も初監督という状況に立ち向かう。

「潜水艦ものには思い入れがあったのですが、実際自分でやってみると、今まで見ていたものは嘘だったことがわかった。〝艦長〟というイントネーションも本当は語尾を上げるんだそうです。潜水艦に乗っていた方のアドバイスを受けて、ひとつずつ覆していこうかなと思っています」

「ローレライ」は、潜水艦映画というひとつのジャンルに対しての闘いでもある。KJ

GOES ON

©Mark Mainz／Getty Images／AFLO FOTO AGENCY

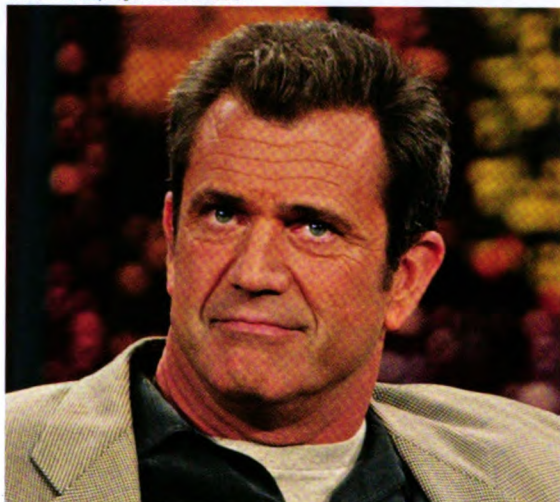
ランキング ●荻原順子

有力者セレブリティ100人

アメリカのビジネス誌フォーブスが、収入、インターネットでのヒット回数、テレビ・ラジオでの言及回数、メディアでの総合露出度から、セレブリティの"有力度"を評価してランキングした恒例の"ザ・セレブリティ100"を発表。第1位には、最近では話題性と興行成績共にダントツだった「パッション」を製作・監督したメル・ギブソンが選ばれた。映画人では他に、4位にトム・クルーズ、9位にスティーヴン・スピルバーグ、10位にジョニー・デップがそれぞれ就けているが、クルーズはこの1年の年収が4,500万ドルで、最もギャラを稼ぐ男優とされている。最もギャラを稼ぐ女優は、14位に就けているキャメロン・ディアスで、年収は3,300万ドル。最も有力度の高いセレブ・カップルは、ジェニファー・アニストン（17位）&ブラッド・ピット（36位）とされているが、去年、芸能ゴシップ界を騒がせまくったジェニファー・ロペス（去年は4位）とベン・アフレック（去年は7位）は、共に今年の100人の中に選ばれておらず、芸能界メディアの関心スパンの短さを物語っている。

©Kevin Winter／Getty Images／AFLO FOTO AGENCY

©Carlo Allegri／Getty Images／AFLO FOTO AGENCY

©Frank Micelotta／Getty Images／AFLO FOTO AGENCY

ミスター・パッション＝メル、通好みの作品の合間で悪ノリ演技もすてきなジョニー、常に全力投球のトムと、選ばれし理由は様々。セレブってつまり、うわさの種にのぼりやすい人ってこと？　それってうれしいのかな？

レゴラス、大人気

「ロード・オブ・ザ・リング」三部作で弓の名手、レゴラスを演じたオーランド・ブルームが、イギリスの映画サイトが投票を募った〝イギリスで最もセクシーな男優〟に選ばれたのに続いて、アメリカの芸能誌、ピープルによる〝最もホットな独身男性50人〟特集号の表紙を飾った。〝最もセクシーな英国人男優〟には、これまで、ジュード・ロウやユアン・マクレガーが選ばれることが多かったが、「ロード…」や「パイレーツ・オブ・カリビアン」というヒット作に恵まれたこともあって、今年はブルームが、ロウやマクレガー、ヒュー・グラント、クリスチャン・ベール等をおさえて堂々1位に就いた次第。一方、ピープル誌では、トム・クルーズ、ジェイク・ギレンホール、コリン・ファレルらと一緒に、〝最もホットな独身男性50人〟の仲間入りをしているブルームだが、先輩にあたる美形スターたちが俳優として選択してきたキャリアを参考にしているとのこと。〝彼らは最初、人気スター的イメージを創りあげたが、その後でそれに反する役を選んでいる。そうしないと駄目なんだろうね〟と語るブルーム、今後も賢いキャリア選択をしていってもらいたいものです。

©Dave Hogan／Getty Images／AFLO FOTO AGENCY

端整だがどうも"第一の子分"顔なブルーム。そのくらいが彼氏にはいいのか。

HOT SHOTS HOLLYWOOD

what happen?

とにかく一番が好き？ ハリウッドなんでも

©Amanda Edwards／Getty Images／AFLO FOTO AGENCY

なにかこう、絶妙のタイミングでやってくれるベン。次はなにかな？ ずっと見守りたいですね！

ベン・アフレック、ポーカー・チャンピオンになる

ベン・アフレックが、6月20日、ロサンゼルス郊外のコマースで行なわれたカリフォルニア州ポーカー選手権で優勝した。優勝スピーチでは、"自分はラッキーだっただけ。全くの期待はずれに終わらずに済んで良かった"と殊勝なことばを述べていたそうだが、この選手権は90人のポーカーの名人たちが集まるメジャーなイベントで、セレブリティで優勝したのはアフレックが初めてだとのことである（ちなみに、同選手権にはトビー・マグワイアも参加したそうだが、1日目であえなく敗退したとか）。主催者側も、アフレックの実力は認めており、"決勝戦のテーブルでベン・アフレックを観るのはこれが最後ということはなさそうです。彼は、ポーカーの精鋭集団の尊敬を集めるメンバーになったし、これからも彼の腕を磨き続けていくことでしょう"とコメントしている。今回の優勝でアフレックが得た賞金は35万6400ドル。「ジッリ」、「ペイチェック」、「ジャージー・ガール」と、ここのところ、主演作が軒並みコケて、俳優としてのキャリアが低迷気味なアフレックに対し、"ポーカーのプロになっても生活していけるんじゃない？"などと失礼かつ意地悪なことも囁かれているようだ。

©Show Bizlreland／Getty Images／AFLO FOTO AGENCY

「フェリスはある朝突然に」でサボることばっかり考えてたマシューも今はよいパパ。サラとの仲もよい感じ。ずっとこのままでね！

"最優秀父親賞"は……

ロンドンに在る世界最古の理髪店で、英国王室、チャールズ・ディケンズ、ウィンストン・チャーチル、ローレンス・オリヴィエ、フレッド・アステアなどを過去の顧客に持ち、王室御用達の整髪・バス用品も製造しているトゥルーフィット＆ヒル社が、今年から父の日に"最優秀父親賞"を授与することになり、記念すべき第1回の受賞者にマシュー・ブロデリックが選ばれた。ブロデリックには、サラ・ジェシカ・パーカーとの間に2002年10月に生まれた息子、ジェームズ君がいるが、トゥルーフィット＆ヒル社の社長は"非常に献身的な親で父親役をとても真剣に受け止めている。仕事の上でも社交の面でも並外れて多忙なのに、息子への愛と養育に対する熱心な献身ぶりは全く賞賛に値する"と受賞の理由を述べている。ブロデリックには、最優秀父親賞に選ばれた御褒美として、理髪店での髭剃り、トゥルーヒル＆フィット社整髪・バス製品1年分が贈られることになっているそうである。

New Cinema Rush

ニュー・シネマ・ラッシュ
新作紹介

7・8月

キング・アーサー
KING ARTHUR

ジェリー・ブラッカイマー製作によるエンタテイメント巨編。英国の実力派俳優クライヴ・オーウェンを主演に、アーサー王伝説が斬新なアプローチで描かれる。イギリスがブリテンと呼ばれ、ローマ帝国の支配下にあった時代。ローマ軍の司令官アーサーは愛のために、王となる宿命に目覚めていく。

DATA ●監督／アントワン・フークア 出演／クライヴ・オーウェン、キーラ・ナイトレイ、ヨアン・グリフィズ 配給／ブエナ ビスタ ●7月24日より丸の内ルーブル、丸の内プラゼールほか全国松竹・東急系にて（2004年・米・126分）
http://www.movies.co.jp/kingarthur/

シュレック2
SHREK 2

ドリームワークスの精鋭スタッフが結集し、3年以上をかけて作り上げた史上最強ファンタジー。新キャラクター"長ぐつをはいたネコ"の活躍ぶりにも注目。国王の住む遠い遠い国に戻ってきた新婚夫婦シュレックとフィオナ姫たが、チャーミング王子と妖精のゴッドマザーの企みにより幸せを阻まれる。

DATA ●監督／アンドリュー・アダムソンほか 声の出演／マイク・マイヤーズ、キャメロン・ディアス、エディ・マーフィ、アントニオ・バンデラス 配給／ＵＩＰ ●7月24日より日比谷スカラ座1ほか全国東宝洋画系にて（2004年・米・93分）
http://www.shrek2.jp/index2.html

Mの物語
L'HISTOIRE DE MARIE ET JULIEN

フランスの巨匠ジャック・リヴェットが、「美しき諍い女」のエマニュエル・ベアールと再びタッグを組み、男女の幻想的な愛の物語を紡ぎ出す。時計技師ジュリアンはミステリアスな女マリーと久しぶりに再会する。やがて共に暮らし始める2人だったが、マリーは彼に大きな秘密を隠し持っていた。

DATA ●監督／ジャック・リヴェット　出演／エマニュエル・ベアール、イエジー・ラジヴィオヴィッチ、アンヌ・ブロシュ、ベッティナ・キー　配給／ファインフィルムズ　●7月31日より銀座シネパトスにて（2003年・仏・150分）
http://www.finefilms.co.jp/m/

バレエ・カンパニー
THE COMPANY

巨匠ロバート・アルトマンが放つバレエ団群像ドラマ。原案・製作・主演に挑んだネーヴ・キャンベルが、かつてダンサーだった腕を発揮し見事な踊りを披露する。下積みのバレエ団員ライは、代役で踊った舞台が成功し高い評価を受ける。それでも心満たされぬ中、ライは心の支えとなる男性と出会う。

DATA ●監督／ロバート・アルトマン　出演／ネーヴ・キャンベル、マルコム・マクドウェル、ジェームズ・フランコ　配給／エスピーオー　●7月24日よりBunkamuraル・シネマ、シャンテ・シネにて（2003年・米＝独・112分）
http://www.thecompany.jp/

ドリーマーズ
THE DREAMERS

巨匠ベルナルド・ベルトルッチが1968年のパリを舞台にして描く青春ストーリー。フィリップ・ガレルの息子ルイなど、主役を演じる3人の若手俳優たちの存在感が光る。アメリカ人留学生マシューは、双子の姉弟テオとイザベルという美しいシネフィルたちと奇妙な友情を結び、性のゲームに巻き込まれる。

DATA ●監督／ベルナルド・ベルトルッチ　出演／マイケル・ピット、エヴァ・グリーン、ルイ・ガレル、ロバン・レヌーチ　配給／日本ヘラルド　●7月31日よりシネスイッチ銀座、新宿武蔵野館にて（2003年・英＝仏＝伊・117分）
http://www.herald.co.jp/official/dreamers/

マッハ！
ONG-BAK

世界で話題沸騰中のタイ産ムエタイ・アクション超大作。主演のトニー・ジャーが魅せる、CG、スタント、ワイヤ・ワークを使わない生身のアクションが圧巻。仏教とムエタイの国、タイ。敬虔な仏教徒の村から信仰の象徴ともいえる仏像が盗まれる。青年ティンは奪還のため町へ向かうのだった。

DATA ●監督／プラッチャヤー・ピンゲーオ　出演／トニー・ジャー、ペットターイ・ウォンカムラオ　配給／クロックワークス、ギャガ＝ヒューマックス　●7月24日より渋谷東急ほか全国松竹・東急系にて（2003年・タイ・108分）
http://www.mach-movie.jp/

カーサ・エスペランサ～赤ちゃんたちの家～
CASA DE LOS BABYS

名匠ジョン・セイルズがオスカー女優や超個性派女優ら、粋な顔ぶれのキャスティングを実現して贈る女性映画。養子を求める6人のアメリカ人女性の葛藤をリアルに描く。南米のとある国。職業も年齢も考え方も違う女性たちは、養子縁組の成立を待ち構えている。彼女たちにはそれぞれの苦悩があった。

DATA ●監督／ジョン・セイルズ　出演／マギー・ギレンホール、ダリル・ハンナ、マーシャ・ゲイ・ハーデン、スーザン・リンチ、リリ・テイラー　配給／ギャガ　●7月31日よりテアトルタイムズスクエアにて（2003年・米・95分）
http://www.casa-esperanza.net/

地球で最後のふたり
LAST LIFE IN THE UNIVERSE

ヴェネチア国際映画祭で浅野忠信がコントロコレンテ部門の主演男優賞を受賞した話題作。タイの尖鋭ペンエーグ・ラッタナルアーンが、国境を超えたラヴストーリーを描く。バンコクから最も近いリゾート地、バンサーン。世間の喧騒を嫌うケンジと奔放で勝ち気なタイの女ノイはいつしか心を通わせる。

DATA ●監督／ペンエーグ・ラッタナルアーン　出演／浅野忠信、シニター・ブンヤサック、ライラ・ブンヤサック　配給／クロックワークス　●7月31日より渋谷シネ・アミューズにて（2003年・タイ＝日＝オランダ＝シンガポール・107分）
http://www.klockworx.com/chikyu/

dot the i／ドット・ジ・アイ
DOT THE I

メキシコ出身の注目俳優ガエル・ガルシア・ベルナルをはじめ、期待の若手俳優たちが競演するラヴサスペンス。二転三転する先の読めないスリリングな展開が繰り広げられる。カルメンは南米からやって来た青年キットと出会い恋に落ちる。しかし、彼女の婚約者バーナビーは2人の関係に嫉妬し、ある手段に出る。

DATA ●監督／マシュー・パークヒル　出演／ガエル・ガルシア・ベルナル、ナタリア・ヴェルベケ、ジェームズ・ダーシー　配給／エスピーオー　●7月31日よりシネセゾン渋谷にて（2003年・英＝スペイン・92分）
http://www.dot-the-i.jp/

カンヌ　SHORTS 5

ここ数年のカンヌ国際映画祭短編部門で上映され絶賛された作品を結集。ハリウッド映画300本から6万5千のモンタージュを駆使して作った「FAST FILM」、観客参加型のＣＧアニメ「Do You Have the Shine？」、日常に潜む少年たちの狂気をイギリスの田園風景に描いた「field」など全5本が並ぶ。

DATA ●監督／ヴァージル・ヴィドリッチ、ヨハン・ターフェル、デュアン・ホプキンス、エッサー・ロッツ、コーネル・ムンドルッツォ　配給／アップリンク　●7月31日よりUPLINK Xにて（2001～03年・68分）
http://www.uplink.co.jp/film/

写真は「FAST FILM」

エルヴィス・オン・ステージ
ELVIS : THAT'S THE WAY IT IS

亡き今も世界中から愛され続ける世紀のロック・スター、エルヴィス・プレスリー。今年デビュー50周年を迎える彼の伝説のステージが、ドルビー・デジタル版で甦る。1970年ラスヴェガスのステージの全貌。さらにこの夏、残された膨大なフィルムを再編集しスペシャル・エディションとして登場する。

DATA ●監督／デニス・サンダース 出演／エルヴィス・プレスリー 配給／シナジー、コダック ●7月31日より東劇にて（1970年・米・96分）

好きと言えるまでの恋愛猶予
LE BANDE DU DRUGSTORE

60年代パリに生きる若者たちの不器用さと純粋さを綴った青春ラヴストーリー。名優ジャック・ペランを父に持つ新人マチュー・シモネが甘い個性で主演する。少女シャルロットは18歳のフィリップと出会い、互いに意識し始める。だが、本音を打ち明けられず、接近しながらも関係は平行線を辿ってしまう。

DATA ●監督／フランソワ・アルマネ 出演／マチュー・シモネ、セシル・カッセル、オレリアン・ウィイク、アリス・タグリオーニ 配給／アートポート ●7月31日よりシブヤ・シネマ・ソサエティにて（2002年・仏・94分）
http://www.renaiyuyo.jp/

ぼくセザール 10歳半 1m39cm
MOI CESAR 10ANS1/2 1m39

名優リシャール・ベリが監督を手掛けた子供たちのハートウォーミング・ストーリー。先ごろのフランス映画祭では観客賞を獲得し話題を呼んだ。ちょっぴり太めの少年セザールは、転校生の美少女サラ、クールな少年モルガンと大の仲良し。そんな3人は、ひょんなことから親に内緒でロンドンへ向かう。

DATA ●監督／リシャール・ベリ 出演／ジュール・シトリュク、マリア・ド・メデイルシュ、ジャン＝フィリップ・エコフェ、ジョゼフィーヌ・ベリ 配給／アスミック・エース ●7月31日より日比谷スカラ座2にて（2003年・仏・99分）
http://boku10.com/

藍宇 ～情熱の嵐～
LAN YU

香港出身の異才スタンリー・クワンが、天安門事件に揺れる北京で禁断の愛に身を投じた2人の男の10年間に及ぶ愛の軌跡を描く。1988年、北京。政府高級幹部の息子ハントンはバイセクシュアルのプレイボーイ。貧乏学生ラン・ユーと一夜限りの関係を結んだはずが、いつしか互いに愛に溺れ同棲し始める。

DATA ●監督／スタンリー・クワン 出演／フー・ジュン、リィウ・イエ、スー・ジン、リー・ホァディアオ、ルー・ファン 配給／ケンメディア ●7月31日より新宿武蔵野館にてモーニング＆レイト（2001年・香・86分）

箪笥

장화홍련、A TALE OF TWO SISTERS

「クワイエット・ファミリー」の鬼才キム・ジウンが贈る驚愕のコリアン・ホラー。S・スピルバーグが史上最高額でリメイク権を獲得したことでも話題に。長期入院を終えた美しい姉妹スミとスヨンは、ソウル郊外の一軒家で継母と共に暮らし始める。しかし、その日以来、奇怪な出来事が2人を襲うのだった。

DATA ●監督／キム・ジウン 出演／イム・スジョン、ムン・グニョン、ヨム・ジョンア、キム・ガプス 配給／コムストック ●7月24日よりシネマミラノにて（2003年・韓・115分）
http://www.tan-su.jp/

父と暮せば

「TOMORROW／明日」「美しい夏キリシマ」に続き、巨匠・黒木和雄が贈る戦争レクイエム三部作の完結編。井上ひさしの名戯曲を、宮沢りえと原田芳雄の主演により映画化。ヒロシマ。原爆投下から3年後の夏。図書館に勤める美津江の前に父・竹造が姿を見せる。彼は娘の恋の応援をすべく現れた幽霊だった。

DATA ●監督・脚本／黒木和雄 脚本／池田眞也 原作／井上ひさし 撮影／鈴木達夫 美術／木村威夫 出演／宮沢りえ、原田芳雄、浅野忠信 配給／パル企画 ●7月31日より岩波ホールにて（2004年・日・99分）
http://www.pal-ep.com/chichitokuraseba/chichitokuraseba-top.htm

機関車先生

昨年「ヴァイブレータ」で注目を集めた監督・廣木隆一が、伊集院静原作の同名小説を映画化、坂口憲二が、口のきけない主人公という難役に挑む。瀬戸内海に浮かぶ小島。島で唯一の小学校にやって来た新任教師・吉岡は、「口をきかんから“機関車先生”だ」と慕われ、7人の生徒たちと絆を深めていく。

DATA ●監督／廣木隆一 脚本／加藤正人、及川章太郎
原作／伊集院静 撮影／鈴木一博 出演／坂口憲二、倍賞美津子、大塚寧々、伊武雅刀 配給／日本ヘラルド ●7月31日よりテアトル新宿にて（2004年・日・123分）
http://www.herald.co.jp/official/kikansha/index.shtml

風音

芥川賞作家目取真俊の原作・脚本を名匠東陽一が、沖縄を舞台に美しく映画化。沖縄で監督に見いだされた人々やオーディションで選ばれた島育ちの少年たちが映画に溶け込む。夏の沖縄。強い海風が吹くと聞こえる不思議な“風音”の謎が、島の人々の記憶に重なり合いながら明らかになる。

DATA ●監督／東陽一 脚本・原作／目取真俊 撮影／蔦井孝洋 出演／上間宗男、加藤治子、つみきみほ、光石研、北村三郎、治谷文夫 配給／シグロ ●7月31日よりユーロスペースにて（2004年・日・106分）
http://www.cine.co.jp/fuon/index.html

千の風になって

天国へ旅立った最愛の人へ残された者たちが書いた手紙を募る長寿ラジオ番組をモチーフにした感動作。「君は裸足の神を見たか」で監督デビューした金秀吉がメガホンを取る。“天国への手紙”の取材を続ける女性記者・紀子は夫婦関係に悩んでいたが、人々に話を聞くうち心に変化が起こり始める。

DATA ●監督・脚本／金秀吉　撮影／金徳哲　出演／西山繭子、伊藤高史、南果歩、水谷妃里、桂木梨江、吉村実子、綿引勝彦　配給／シネカノン　●7月31日より新宿ジョイシネマ3にて（2004年・日・107分）
http://www.sennokaze.jp/

誰も知らない　Nobody Knows

今年のカンヌ国際映画祭で14歳の新人柳楽優弥が史上最年少の主演男優賞を受賞した話題作。是枝裕和監督の即興を生かした演出も見事だ。都内の２ＤＫのアパートに母と幸せに暮らす４人の兄妹。しかし、彼らは学校に通うことなく、存在すらも周囲に知られていなかった。そんなある日、母が家を去る。

DATA ●監督・脚本／是枝裕和　撮影／山崎裕　出演／柳楽優弥、北浦愛、木村飛影、清水萌々子、韓英恵、ＹＯＵ、串田和美　配給／シネカノン　●8月7日よりシネカノン有楽町、渋谷シネ・アミューズにて（2004年・日・141分）
http://www.daremoshiranai.com/

ハーケンクロイツの翼

ポップなセリフとみすみずしい映像感覚で若者たちの三角関係を描いた青春ストーリー。「あずみ」「ロボコン」などで注目の若手俳優・小栗旬が無口の主人公を好演。人生に嫌気がさしたRIKUOは、行動派のGASと出会い共に馬鹿騒ぎを繰り返す。だが、昔の同級生NAMIKOをめぐり２人の間に諍いが起こる

DATA ●監督・脚本／片嶋一貫　出演／小栗旬、伴杏里、山根和馬、宮本武士、渋谷亜希、EDDIE、榎謙治、遠藤雄弥　配給／リベロ　●7月24日より新宿ジョイシネマ3にてレイト（2004年・日・90分）
http://haken.movieweb.jp/

青の塔

家族や思春期の若者をテーマにドキュメンタリーを手掛けるＴＶディレクター坂口香津美が、「カタルシス」撮影前に制作した作品。ひきこもり青年の内面世界と自立へのめざめを描く。19歳の青年・透は、母と２人暮らしの家でひきこもり生活をしている。ある時、孤独な少女と出会い心を通わすのだった。

DATA ●監督・脚本／坂口香津美　撮影／長谷川貴士　出演／中村佑介、さわ雅子、前沢美沙、弦間和男、大塩晴香、梅原愛　配給／アルゴ・ピクチャーズ　●7月24日よりシネマアートン下北沢にて（2000年・日・146分）
http://www.supersaurus.jp/bluetower.html

セクシードリンク大作戦～神様のくれた酒

「東京ハレンチ天国～さよならのブルース」で2001年ゆうばり国際ファンタスティック映画祭グランプリを受賞した本田隆一の長編映画第２弾。60年代テイスト炸裂の痛快コメディ。アルコール依存症のミキは恋人のために奇妙な漢方薬を飲んで酒断ちの決意をする。が、それは想像を絶する試練の始まりだった。

DATA ●監督／本田隆一 脚本／佐藤佐吉 出演／山本浩司、片桐華子、千原浩史、森下能幸、大山英雄、森三中、並樹史郎 配給／エス・エス・エム ●７月31日よりシネマアートン下北沢にて（2004年・日・66分）

DDDにおける池田爆発郎とwattの本名

浅野忠信監督作「トーリ」など話題作を生産し続けるＤＤＤレーベルが、気鋭のクリエイター２名による鮮烈な映像博覧ムービーを放つ。シュールなアニメ「PiNMeN」が注目された池田爆発郎の「池田爆発郎劇場の『音楽って素晴らしい』」、watt監督のイマジネーション溢れる「jack tv」が登場する。

DATA ●監督／池田爆発郎、watt 配給／IMAGICAエンタテインメント ●７月31日より渋谷シネ・ラ・セットにてレイト（2004年・日・80分）
http://www.ddd-dvd.jp/news.html

写真は「jack tv」

うめく排水管

「富江」シリーズなど多くの作品が映画化されている恐怖漫画界のエース伊藤潤二のシュールな１本を、俊英・及川中が映像化したネオ・ファンタスティック・ホラー。度を越える潔癖症の母と暮らす美人姉妹、令奈と真理。令奈を遠くから見つめる怪しげな男・滑井は、やがて悲劇の道を歩む。

DATA ●監督・脚本／及川中 原作／伊藤潤二 撮影／六波羅正博 出演／栗原瞳、岩佐真悠子、フジヤマ、播田美保 配給／アルゴ・ピクチャーズ ●７月31日より吉祥寺バウスシアターにてレイト（2004年・日・75分）

フーチャ～旋律の彼方へ…

萩原聖人主演、クリヤ・マコトのピアノで綴ったある１人の作曲家の物語。1987年。作曲家・澤村健二は「シーサイド・マリン」を作り、それを歌ったアイドル葵しずかと結婚する。それから17年。世から名前すら忘れられた彼は、ひょんな仕事の依頼でかつて来た新婚旅行の地へ向かう。

DATA ●監督／秋原正俊 脚本・デザイン／落合雪恵 音楽／クリヤ・マコト 撮影／中村健勇 出演／萩原聖人、村松利史、森下千里、藤真美穂 配給／KAERU CAFE ●７月31日よりテアトル池袋にてレイト（2004年・日・42分）
http://www.toshiba.co.jp/webstreet/programs/drm05/

劇場公開映画批評

このページの批評は作品の結末にふれているものもあります。ご了承の上、お読み下さい。

スパイダーマン2

SPIDER-MAN2
ソニー・ピクチャーズ配給
7月10日公開

新藤純子

9・11の影響で、ワールド・トレード・センターの映像がすべて使えなくなったという不運から始まったサム・ライミの「スパイダーマン」シリーズ。その前作は、「大いなる力には責任がともなう」という意味深なテーマを掲げながらも、出来上がった映画はひたすら軽く明るく、スパイダーマンがビルの谷間を飛びまわる爽快感もあってか、多くの観客の支持を集め、大ヒットを記録した。そのかわり、前作にはライミの個性はほとんど現れず、「力と責任」というテーマもうわっつらだけのものとなり、どんなに活躍しても悪者扱いされるスパイダーマンの苦悩も、ウィレム・デフォー扮する悪役の複雑さも、能天気な明るさの陰に隠れてしまった。

そして第二作。前作の大ヒットで、ライミは自分の個性を打ち出す自由を得たようだ。成長したトビー・マグワイア、ジェームズ・フランコは演技に深みを増し、ヒロインのキルスティン・ダンストは前作よりも溌剌として見える。スパイダーマンとして生きることに疑問をもつ主人公の悩み、父を殺された復讐心に燃える友人の思い、そして、人類のためと思って開発した機械に支配されてしまう科学者ドック・オクの葛藤といった人間描写がきめ細かく描かれ、ドラマとしての充実感が格段にアップした。特に、アルフレッド・モリーナが演じるドック・オクがすばらしい。彼は「フランケンシュタイン」からティム・バートンの「バットマン」シリーズに至るまでの苦悩する怪人の系譜に連なる人物であり、また、SFでおなじみの、暴走する科学技術の恐怖を体現してしまう人物でもある。もともとは妻を愛する好人物で、人類に無害なエネルギーをもたらすことだけを考えてきた科学者が、その結果、自分の開発した機械に支配され、暴走する悪魔と化してしまうのだ。

このドック・オクの部分では、サム・ライミの手腕は冴えに冴えまくっている。蛇のように動く金属の触手の描写もすごいが、金属の表面を鏡のように使って見せる映像がみごとだ。善と悪の境で揺れる人間を、暗くなりすぎずに描くあたりもライミらしくて好もしい。もちろん、モリーナの演技のおかげもある。映像はシャープに、人間はマイルドに——この按配がなんともいえず、いいのだ。

ドック・オクがスパイダーマンと対比されていることも忘れてはならない。心の迷いから力を失ったスパイダーマンは、やがて、救うべき人々がいて、自分が力をもっているなら、その力を使うべきだと気づく。ドック・オクもまた、人類のためを思って科学の力を使ったのだが、彼の場合は使い方を誤り、力が暴走してしまう。しかも行使した本人がその力に取り込まれ、それを正当化するようになってしまう。人のために力を使うのはよい。だが、「大いなる力には責任がともなう」。9・11の影響をもろに受けたシリーズは、今度は現在のアメリカのジレンマをそのまま映し出しているようだ。

ハリー・ポッターとアズカバンの囚人

HARRY POTTER AND THE PRIZONER OF AZKABAN
ワーナー・ブラザース映画
6月26日公開

中西愛子

人気シリーズも3作目。小さかった子供たちは、今ではびっくりするほど大きくなった。小説のストーリー・ラインに忠実であろうとする姿勢と、緩急のない盛り上がり方が子供向けエンタテイメント全開の勢いを見せていたクリス・コロンバス版が、特に原作ファンから支持されシリーズの人気を保証していたにも関わらず、3作目でなぜか監督変更、しかも一筋縄ではいかないメキシコ人監督アルフォンソ・キュアロンを指名したのだから、製作者はなかなかのクセモノ、冒険者である。

毎度お馴染み、ダーズリー家から始まる映画の冒頭からして、これまでの2作とは明らかに違う空気が漂っている。ハリーがもぐるベッドのロング・ショットはすでにどこか奇妙だし、ハリーが意地悪な魔法を一家にもたらすシーンになる頃にはダークなトーンが出来上がっている。キュアロンと撮影監督マイケル・セレシンは、早くもコロンバス版のピーカンのファンタジー・ワールドをぶち壊し、続くバスが街を暴走するシーンではジャズを流してスマートかつモダンなテイストを注ぎ込んでしまう。

キュアロンが今回起用されたのは、かつてワーナーで撮った児童文学の映画化「リトル・プリンセス」(95)や、その後も思春期の子供たちの心情を深く理解する映画に臨み成果を見せていたからだろう。役柄に関するエッセーをラドクリフら子供たちに書かせるなど、彼ら自身の成長を映画にうまくリンクさせた演出のアプローチはさすがだし、だからこそ、彼らはトーンのこれほど変化した映画の中に同じキャラクターのままに違和感なく存在できたのに違いない。「天国の口、終わりの楽園。」(01)のようなお色気要素はさすがに持ち込まなかったが、少年少女の鋭く繊細な心を、陰影ある映像に美しく織り交ぜて描き得たことは、キュアロンにとっても満足のいく仕事だったのではないか。ともかく彼は後戻りできないくらいシリーズの方向を変えてしまった。この結果に賛否両論はあろうが、私は変化するシリーズの発展を今後も見守りたい。

白いカラス

THE HUMAN STAIN
ギャガ=ヒューマックス配給
6月19日公開

鬼塚大輔

ロバート・ベントンという監督最新作にして、ニコール・キッドマンとアンソニー・ホプキンスの顔合わせ。助演陣もエド・ハリスにゲイリー・シニーズという強力な布陣なので大いに期待をして観たのだが、その期待には応えてもらえなかった。

現代アメリカ文学の俊英フィリップ・ロスの書いた原作は未読だが、映画作品としては様々な要素を詰め込みすぎて、どの要素も十分に熟成しないままでエンディングを迎えてしまっているのである。

脚色は脚本作のみならず、監督作も多く、しかも小説家出身というニコラス・メイヤー。全体がある登場人物の回想形式なのに、その中でまた別の人物の回想が始まってしまうというのが、そもそも映画の形式としてはルール違反なのだが、それ以外の点においても、視点がばらついているために、自らのアイデンティティを二重に葬り去った老人と、転落を重ねた中年女とのどん底での純愛が、見ているものの胸に迫ってこないのである。文学的には多用な視点を効果的に使うというテクニックはあり、映画においても不可能ではない（もっとも有名な例は「羅生門」）のだが、その場合

でも様々な視点を統一する強力な語り口が必要なのである。
「政治的正しさ」というやつの虚妄、帰還兵問題、人種問題などをストーリーの中に散りばめながら、モニカ・ルインスキー事件の報道を基調音とすることで、「モラル」というテーマで全体を貫こうとした狙いはわかるのだが、それらの工夫がかえって、散漫な印象を強める結果となってしまっている。一つ一つの場面を丁寧に演出し、繊細な画面作りをすることがベントン監督の長所なのだが、今回ばかりはそれが裏目に出ている。ただし、ローカル・カラーのたたずまいを画面に焼き付けるセンスは、相変わらず優れている。

優秀な俳優たちが揃っているのだが今回ばかりは少々辛い。やはりこの役にニコール・キッドマンはミスキャストと言わざるを得ないだろう。キッドマンは娼婦を演じようが、犯罪者を演じようが〝堕ちた〟という感じにならない威厳というか美しさがあって、それが女優としての大きな武器になっている。だが、この作品の役にはうらぶれた感じがどうしても必要なはずだ。

アンソニー・ホプキンスは健闘しているし、ゲイリー・シニーズの一歩引いた演技もホプキンスを引き立てている。エド・ハリスは演じている役が平面的なものであるために、実力を出せていない。

ホプキンスの役をギリシャ文学研究者とし（劇中アキレスに例えられる部分がある）、全体をギリシャ悲劇仕立てにしている仕掛けは面白いのだが、主人公たちに訪れる運命が、必然の悲劇ではなく、機械仕掛けの神のごとく唐突なものに見えてしまうのが辛い。「アキレスの踵」と洒落たいところだが、実際のところこの作品には弱点が多すぎる。大きな可能性を持った作品だけに残念な結果だ。

メダリオン

THE MEDALLION
日本ヘラルド映画配給
6月19日公開

的田也寸志

ジャッキー・チェン主演映画は、ファンならずとも絶対に期待を裏切らない信頼のブランドだ。パチンコでいえば絶対損はさせない優良台みたいなもので、打てば必ず儲けが出る（即ち心が潤う）。しかし、ハリウッド進出を果たしてからは、期待こそ裏切らないまでも、会心の出来といったものに未だめぐり合えてない。これまたパチンコでいえば、確変1セット終了みたいなもので、かつての「プロジェクトA」「ポリス・ストーリー」シリーズみたいな大爆裂を毎回期待するのも酷な話と頭では承知しつつ、やはりどこか割り切れないものが残ってしまう今日この頃。そこに来て「メダリオン」だ。今回は製作サイドも香港主体、またアクション監督には旧友サモ・ハンということで、古巣に戻って伸び伸びしたジャッキーの勇姿を拝めるかとワクワクしながら映画館に駆け込んだのだが、あにはからんや、89分という今どき嬉しい上映時間は演出がもたついていて妙に間延びし、悪役ジュリアン・サンズ以下欧米演技陣の魅力も中途半端。そして何よりも肝心のアクションが小振りという、少なくとも80年代以降のジャッキー映画の中でも1、2を争うつまらなさという哀しい結果に終わっている。いや、70年代ブレイク前の旧作群も、アクション（クンフー）のすさまじさという点では本作より遥かに上だ。一体全体どうしてこんなことになってしまったのか。本作のジャッキーは一度死んでしまうのだが、神秘の力で蘇る。そこまではいいとして、問題はそこで超人的パワーまで身につけたという設定にもあるようだ。少なくとも、これまでジャッキー・チェンは常にあくまでも生身の男が命がけのアクションを展開するという、そこにこそ観客が賞賛するポイントがあったように思う。ところが本作の後半のジャッキーは、いわばスーパーマンで、にも拘らずアクションは従来より興奮度薄ときては、がっかりして当然。ジャッキー映画は、まず生身のアクションと、次に皆を幸せにする笑顔。これさえあれば、VFXなど別にあってもなくてもいいのだ。

下妻物語

東宝配給
5月29日公開

服部香穂里

いい小説を忠実に映画化するのがいかに困難であるかは、原作ものの数多くの失敗例が物語っている。適度な上映時間に収めるべく端折る、作り手の原作への思いが強過ぎて気合が空回りする、ミスキャストなど敗因は様々だが、本作が大成功したのは、中島哲也監督の主な拠点がCMであり、原作との絶妙な距離感を保てたからだろう。

ロリータ娘・桃子（深田恭子）がヤンキー娘・イチゴ（土屋アンナ）と運命的に出会うまでの間に、スピーディーに語られる桃子の半生。ロココ時代から現代、おフランスから尼崎まで自在に時空を旅する中で、桃子の超マイペースな人格がいかに形成されたかを瞬時に見せる語り口の鮮やかさや、それに付随する情報量の多さは、技術の特性を知り尽くしたCMディレクターの面目躍如だろう。

桃子とイチゴが奇妙な友情を育むに従い、中島監督も桃子との距離を縮めていく。未だ多くの一般人にとってイメージ上の生きものであるロリータは、イメージを売るCMには格好の素材なのか、序盤の桃子はジャスコのように笑いのタネとなることもなく、商品として丁重に扱われる。演出過剰な自伝ドラマや友達がテーマのTV討論会でも、ブラウン管内で超然としている桃子は、さながら高級品のCMモデルのようだ。

しかし、「裏切ると書いて人間と読むの」「私はミジンコでいい」など不道徳な名言を連発してきた桃子が、その型破りな外見に似合わず相当純粋なイチゴに半ば強引に人間界に引きずり出され、神のような人物から必要とされるプレッシャーを初体験して柄にもなく手に汗する様を、冷ややかしつつも温かく見守る中島監督は、遂にクライマックスで、ヤンキーの血を引く生身の桃子に肉迫する。それまでの浮遊感漂う姿と打って変わり、正に阿修羅のごとき大立ち回りを演じる深田は、彼女のキャリアの集大成といった力演を見せ、対する土屋も、恐れを知らぬ映画初主演ゆえの暴走ぶりが、実に爽快だ。

原作、監督、キャストが見事に噛み合った、奇跡のような好篇であった。

天国の本屋～恋火

松竹配給
6月5日公開

©2004「天国の本屋～恋火」フィルムパートナーズ

渡辺武信

ピアニストの健太（玉山鉄二）がオーケストラからリストラされてヤケ酒を飲んでいると、アロハシャツの男・ヤマキ（原田芳雄）に拉致され〝天国の本屋〟でバイトをすることになる。彼は自殺未遂の結果、寿命を全うするために、しばらく天国に居てやがて甦生するのだ。一方、現世では香夏子が、商店街の活性化のため、将来を嘱望されたが早世したピアニストの叔母・翔子（竹内結子二役）の青春時代にはあった花火大会を復活しようとしている。彼女は街の長寿から〝恋火〟と呼ばれ、それを一緒に見た男女は必ず結ばれると信じられていた特殊な花火があったことを聞く。その花火を造った職人・滝本（香川照之）は、翔子の恋人であり、花火の事故で彼女の聴覚を奪ったことを悔いて花火師を辞めていた。翔子は〝天国の本屋〟で健太と出会う。

本作は松久淳と田中渉共作による小説「天国の本屋」シリーズの第一作と第三作を合体させたもので、こういう構想はえてして冗長になり易いものだが、狗飼恭子による脚本は健太と翔子を出会わせることでストーリーに良い意味の膨らみを与えている。映画は現世では〝恋火〟が復活し、天国

では翔子が未完成のうちに死んだ組曲の最後の一曲を健太の協力で完成させることが重なり合って閉幕するからだ。

竹内、玉山も自然な演技で好演、原田と香川の助演も堅実とあって、ファンタジックな設定に不自然さを感じさせないのは、さすが篠原哲雄の演出力の成果と言える佳作だ。

しかし気になるのは最近「黄泉がえり」「星に願いを。」など、死からの復活というファンタジーをキー・ポイントにした青春映画が続いていることである。リアルな作風で観客の信頼を得てきた篠原までがこの路線に参加したことには大いに疑問を抱く。いま「山猫」完全復元版を見てきたばかりだが、この映画でB・ランカスター演じる老貴族は、A・ドロンとC・カルディナーレが演じる若い婚約カップルに向かって「時々死を考えることがある。しかし若い君たちに存在しないも同然なことだ」と語りかけるが、本当にそうなのだと思う。

死を意識しないのは若さの特権であり、青春映画とはその前提の上に作られて「青い山脈」（49・今井正）から「がんばっていきまっしょい」（98・磯村一路）まで、あるいは最近では「チルソクの夏」や「スイングガールズ」のような佳作を生み出してきたのだ（「愛と死を見つめて」的な〝難病もの〟は別のジャンルと考えたい）。しかし最近のファンタジー青春映画は、死を意識しないで済む若さの特権を活かさず、かといって人間は必ず死ぬという、いつかは意識せざるを得ない真実を教えないで、若者に人生というものはやり直しの利くものだという安易な幻想を与えているのではないか。映画の出来とは別に、この問題をファンタジック青春映画の作家や製作者たちに問い返したいものである。

ホストタウン／エイブル2

イメージフォーラム配給
4月24日公開

佐藤忠男

障害のある人たちのスポーツの国際的な祭典が二〇〇三年にアイルランドのダブリンで開かれた。そこでその近郊の小さな町が日本の参加者たちを受け容れるホストタウンになった。この映画はこの町のパーセル家という一家についてのドキュメンタリーである。

十八歳の娘エイミーはダウン症の知的障害がある。彼女もこの大会に体操で参加したかったが、選手には選ばれなかった。しかしそれにもめげず、セクレタリーになりたいという夢を持ってトレーニングセンターで電話受付の勉強をしている。

障害者のスポーツというのは、はたして彼らにこんな競技ができるのだろうかと思うようなプレイをするところで目を開かれるものであるが、ダウン症の少女が企業の電話受付をやるというのも、それ以上に、あっと驚く冒険のように思える。成功してくれればいいという思いと、失敗してがっかりしなければいいがというおそれとで、ゆったりとした心あたたまるホームドラマのような展開であるにもかかわらず、ずいぶんサスペンスがある。不在の人にかかってきた電話の扱いが何度やっても上手くゆかないで彼女は涙ぐむ。それを指導員がどう励ますか。内容的にはそういうところがいわばヤマ場であるが、それをむしろ、日常的ななんでもない情景のヒトコマのようにさり気なく描いているあたりがこの映画の美点である。

なにしろ町は、日本人たちを受け入れるという珍しい経験でうきうきしているし、やはりダウン症のケビンという少年が日本からやってきた水泳の少女たちと親しくなってゆく過程なども微笑ましいエピソードとして巧みにとらえられ、盛り込まれている。他にもエイミーの家の家庭の事情など、取材は多面的、多角的であるが、それらが全て、障害者の仕事のトレーニングというような、地味な日常的な行動に理解のある社会全体の気風を示すものとして渾然と描かれている。共通する主題の前作「エイブル」に続く小栗謙一監督の秀作である。

ブラザーフッド

태극기 휘날리며
UIP配給
6月26日公開

田中英司

ある映画を「素晴らしい」と呼ぶのは簡単だ。映画による感動を声高に叫ぶことには、微量な快感もある。だから世間には、映画に対する「素晴らしい」という声があちこちで微笑ましく響きわたっている。その音色に触れすぎて、が少々やかましく思えてしまうと、私のように小さな悲劇に見舞われる。「素晴らしい」などとは簡単にいうまい。たとえ感動しても「素晴らしい」なんて全面的な肯定を述べるのはやめようと思い、少々ナナメから映画を見るようになってしまうのだ。

当然、映画から受け取る純粋な、感覚的な楽しみは半減し、そのかわりとして、映画を吟味して見るようになり、時間とお金が節約にはなるが、味気ない人生だ。

そんな私にも、映画を見て「素晴らしい」と叫びたい瞬間が何年かに一度や二度はおとずれる。グッと唇をひきしめて、感嘆のタメ息を押し殺して、劇場を後にするのだが、気がつくと普段あまり買わないパンフレットを大切そうに抱えている。つまり、私の感動のバロメーターとは、映画鑑賞後、その作品のパンフレットを買うか、買わないかによるらしいのである。

キネマ旬報に寄稿する身として恥かしいのだが、今年になって初めて、私はパンフレットを購入した。その映画こそが「ブラザーフッド」であった。

この映画に私は感動した。本当にいい映画だと思った。見始めてから三十分くらいで、秀作であることを確信し、映画とは「素直さ」「純粋さ」を描くだけでいいのだと、あっけなくそんな考えに脳を泳がせてしまった。「ブラザーフッド」の冒頭の三十分で描かれる、単純で素朴な家族愛の描写を見ながら、ひねくれたような洗練を、斬新な手法で映画的に描くことのバカバカしさに思いをめぐらせた。生きることに懸命な人たちに、束の間おとずれる至福の瞬間。それを描くことが、どれだけ美しい映像を生むのかということの証拠をつきつけられたような気持ちになり、高度経済成長前の日本映画には、このパワーがみなぎっていたから面白かったのだと、思考は心地良く気ままに飛躍した。

しかし、上映時間が進むにつれて「ブラザーフッド」は、単純、素朴な映画などではなく、恐るべき仕掛けがほどこされた複雑きわまりない映画であることが明らかになっていった。二人の男（兄弟）がまったく違った人間になってゆくのを、「変貌」と「成長」に見事に色分けする技量には驚愕した。戦場にたちこめる異様な空気感と、移動する過程におけるそれぞれの「場所」の差異を明確に描き出すことも忘れていない。戦争映画はどこも同じ場所のように見えてしまいがちだが、「ブラザーフッド」にはそのミスが見事にない。

けれども「ブラザーフッド」において、映像技術うんぬんなどは大きな問題ではないというのが私の本音だ。要するこの映画には「誰かに伝えたい」という原始的な力があふれていることが、最も重要なのである。

スカした、媚びたようなエンターテインメントではなく、真正面から「これを見てくれ」「忘れないでくれ」と訴えかける力強さがしっかりとあるからこそ、賞賛に値するのだと私は思う。テーマとされている「兄弟愛」「家族愛」「母国愛」などが、古くさいという批判はどこかから湧いているのだろうが、多くの優れた映画は単純な一言を伝えるために、気が遠くなるほどの手間と時間と労力を要しているものなのだ。「愛してる」ことを確認するために、世界の中心へと出向かなくては、人々は感動しない。その馬鹿とも呼べる、狂気の沙汰のすれすれをやってきたからこそ、映画は文学や絵画や音楽に拮抗し、多くの人々を惹きつけ、目覚めさせてきたのである。私は「ブラザーフッド」に対して、単純に声をはりあげて「素晴らしい」と叫んでみたいのだが、そのあまりにお手軽な行為を想像すると赤面し、映画評論の淋しさを思い知る。

ピンク映画時評

切通理作

「団地の奥さん、同窓会へ行く」はまずタイトルがトボけている。Hな単語が含まれていないのに、ピンク映画でしかあり得ない題名。

男優の川瀬祐司（川瀬陽太）は普段夫婦関係がご無沙汰なのにピンク映画の撮影がある日になると猛烈に欲情して妻の明子（佐々木ユメカ）を抱く。台所の蛇口から水がポトポト垂れる朝、妻のパンツを後ろからズリ下げながら迫るのだ。祐司は大金持ちのタレントになることを夢見ているが、明子はピンク映画が映画などとは認めず「屁みたいなもの」と言う。

撮影場所である郊外の一軒家に着いた祐司だが、朝一度抜いてしまっているためベッドシーンに勢いがない。本番はしないもののその芝居に満足できない監督（小林節彦）が何度もやり直しを命じ、生真面目な助監督（古館寛治）も祐司の演技へ向う態度には手厳しい。

一方、明子は同窓会に出かけていたが、二百人以上が招待されたはずなのに男女5人しか集まっていないのを見て唖然とし泣き出して会場を飛び出すものの、ちょうど入ってきた元恋人の真悟（向井新悟）とぶつかって唇が触れる。「ブスが。死ねアホ」と言う真悟。テーブルに足を投げ出した真悟は、同席の風間（清水大敬）に昔の応援団のノリで場を盛り上げろと命令。「ハイ！」と風間は「この場でやります。犯します」と明子にのしかかる。「こりゃ面白くなってきたぞ」と平然としている真悟。展開のこうした突拍子のなさ以前に、ラッパー風情の真悟とモロ中年男の風間、それに他の三人も世代がマチマチなのだが誰も問題にしていないのがトボけている。

ピンクの現場では監督が祐司に本番を命令していた。だが相手役の愛子（風間今日子）がギャラ交渉でゴネる。「帰る」と言う愛子に追いすがるマネージャー（女池充）を彼女が蹴り飛ばすと、二階の窓ガラスが割れ、マネージャーの身体が落下する様が外からロングショットで示される。意味のないアクションシーンに手間をかけているのが妙だ。

監督は休憩を取り別室で愛子とセックスする。そこで自分が抜いてしまったため急に本番を取りやめ演出も淡白になる監督に祐司がキレ、撮影現場の険悪ムードは頂点に達する。ここではピンク映画のあり方をめぐってディスカッションめいたやり取りが行われる。

一方、同窓会場で風間が明子にインサートするのを見ていた真悟だが、達する寸前でのしかかっていた風間を殴り飛ばし「明子は俺の女だ。ずっと昔からな」と外に連れ出しホテル街をえんえんと歩く。

全編登場人物を突き放し切っているのは監督サトウトシキ、脚本小林政広のコンビにとっていまに始まったことではない。オチはその日色々あった夫婦がふたたび固く結ばれ、夫はピンク男優として「今あるところから」から「夢」をコッコツ一緒に見ていきましょうと理解する妻との絆を確認する。しかしこれはたとえば「ピンク映画もどっこい頑張っています」というような自画自賛なのだろうか。

登場人物のすべてが実は感情がよくわからない、上すべりの面白さで映画はまとまっている。何度も回数を重ねて見る映画ではなく、一回見てどう受け止めるか試されているような感じだ。

この夫婦は自らが日常で輝けていないと思っている。だが当の自分の欲求は分散していて曖昧だ。大人になっても泣き笑いを隠さないが、それでいて自らに恥じ入るということがない。彼らの心は何も映らない鏡のようだ。だがそこに徹底するとき、冒頭で出てくる、ピンク映画というものが果たして映画なのかという表現主体の問われ方が逆説的に哀切味を伴ってくる。

それは「映画は監督中心」と言いつつ空洞化してしまう、この映画の中で撮られているピンク映画の現場とも断絶しつつ並存していく。

このことはピンク映画に限らず、「表現」というものが自明としてあることへの異和感の表出であり、その異和感にしか「表現」の根拠はないということになるだろう。映画という「ウソ話」の語りの場で、ギリギリ捉えられる本当のことが見えたような気がした。

文化映画紹介

渡部実

「熊笹の遺言」

日本映画学校作品

「スタッフ」製作総指揮／原一男　監督・編集／今田哲史　プロデューサー・編集・ナレーター／原田芙有子　撮影／剣持文則　録音／大地正芳　音楽／松本頼人　出演／谺雄二、浅井あい、鈴木時治、吉田大基　協力／国立ハンセン病療養所栗生楽泉園、ハンセン病裁判を支援しともに生きる会、金沢市立伏見台小学校　製作・著作／日本映画学校　完成／02年　DV・60分

［内容］この映画は、長年ハンセン病と闘ってきた人々に密着取材を敢行し、彼らの日常生活を記録した作品である。ハンセン病とそれに対する国の非人道的な政策、被害に遭った患者たちの実態と起こされた裁判、患者側の全面勝訴という結果などについては、一般社会にも知られるようになった。具体的には、２００１年にハンセン病患者に対する強制隔離政策を違憲とする第一次判決が熊本地方裁判所で出され、90年の長期にわたった国の政策の誤りが明らかにされた。その後、政府は控訴を断念し、患者側の原告団は決定的な全面勝訴を勝ち取った。この出来事は記憶に新しい。もっとも、国を相手にした裁判には勝訴しても、心身にわたる患者本人の心の傷は癒えるものではない。特に１９４５年、アメリカで開発された特効薬プロミン使用の予算化を日本政府が渋ったことは、本来治癒されうるハンセン病患者を苦しめ続けた。

この映画に登場するのは、裁判終結後、群馬県草津市にある国立ハンセン病療養所の栗生楽泉園に暮らしている数人のハンセン病患者であった人々――谺雄二さん(72歳)、浅井あいさん(82歳)、それに鈴木時治さん(76歳)の各氏である。本作の題名にある「熊笹」とは、この土地に生い茂る熊笹からきている。そして「遺言」とは、自分の遺骨を故郷の利根川に流してほしいという鈴木時治さんの「遺言」のことである。

楽泉園は静かな雰囲気に支配され、そこで鈴木時治さんはひたすら絵を描いている。しかしその手は、病気の後遺症で不自由であるので、絵筆を腕に巻いてもらい、創作に勤しむ。鈴木さんは弱視でもあるので、妹の千代さんに生活の手助けをしてもらっている。時治さんの描く絵は、昔、偏見と差別の時代に自殺した妹の肖像画である。

浅井あいさんは目が不自由ながらも身の回りのことを自分で行っている。彼女は当時の医療の不備で、29歳の時、失明した。高齢者の浅井さんは自分の生涯についての取材に答える際、実に淡々と語る。質問には率直に答えられるし、ふだんの浅井さんは園内で配り物をしたりと元気そうである。

谺雄二さんは三人の中では最も精力的な運動を続けている人といえよう。イン

タビューに答えるにも今までのハンセン病に対する国の失政への怒りが込められている。だが、その怒りの言葉もご本人の歴史を感じさせ、説得力に満ちている。冴さんは裁判に勝訴後は栗生楽泉園を総合医療福祉施設にするために運動を展開している。

ふれあう二つの世界

冴さん、浅井さん、鈴木さんの発言は各人の歴史を感じさせそれぞれに重い。この映画は何よりも患者たちの「現在」を記録している。その意味では各人ひとりひとりの人間記録としても充分に一本の映画が出来ることだろう。私は特に本作で浅井さんのエピソードが印象に残った。裁判後、患者たちの里帰りが可能になり、里帰りを果たした浅井さんは、その折り、石川県金沢市の小学校に通う吉田大基(ひろき)君(9歳)という一人の少年と出会う。実は大基君も全盲ではないが目が不自由で、文通などを通して目の不自由な二人の交流が始まった。

ある年の11月に二人は久しぶりの再会をすることになった。今まで子供の存在とは縁の少なかった浅井さんではあるが、快活な性格の大基君が自分の住まいを訪ねに来てくれることは何よりも嬉しいという。大基君の到着を待つ浅井さんの期待感と高揚感。お菓子などの用意をする浅井さんの様子は見ていて微笑ましい。日常生活における浅井さんの内なる優しい世界、それに反応する小学生の大基君の屈託のない快活な性格。——肉体の障害を超え、ここには人生の黄昏を迎えた人と、人生の入り口に入ったばかりの少年との出会いという、二つの世界のふれあいがある。おばあちゃんと孫との関係とも思える二人の出会いの姿は心を打つものがあった。

撮影スタッフは、長らくハンセン病と闘ってきた三人の人々の懐に飛び込んでいく。それによって、浅井さんの孫のような大基君への温かな愛情も伝えられ、その肉親の愛情にも近い世界は、観客にも普遍的なものとして感じられる。また冴雄二さんが、荒川土手で凧揚げをするラストのエピソードも印象深い。空高く上がった凧。冴さんとその凧を結ぶ糸との長い距離感は、ご本人の辿ってきた波乱の人生を象徴しているようにも感じられるのだ。

ドキュメンタリー映画の可能性は、作り手と観客がその作品によって新しい世界を見ることである。そこに未知であった人々との関係性を発見することが出来る。未知の新しい世界を知ろうとすることは勇気のいることだが、この映画は今田哲史監督(1976年生まれ)の、対象となる人々を見つめる前向きの姿勢に、冴さん、浅井さん、鈴木さんたちも優しく寛容さを持って心を開いてくれたという感じがする。新しいドキュメンタリー映画に向ける若い作り手たちの活躍に、期待をしたいと思う。(問合せ先=CINEMA塾　TEL03-5360-1668)

読者の映画評

●第一次審査通過（応募総数161通）
坂本晶隆（「コールドマウンテン」）、川船統太（「ロスト・イン・トランスレーション」）

列車に乗った男

笠原美保
東京都世田谷区
22歳・フリーター

古い家具に囲まれ15年前と変わらない部屋で暮らすマネスキエは変化を嫌い、安定した日々を送る男である。だが放浪者のミランの着ている革ジャンに西部保安官の格好良さを、また拳銃に非情な男のクールさを思い描き、ドラマティックで変化に富んだ生活を夢みている。

一方、サーカス団員から銀行強盗になってしまったミランは変化の中で生きてきた男だが、靴ではなく室内履きを履いてみたり、また使い捨ての煙草ではなくパイプをくわえたりして一つの場所に根を下ろしたいと心のどこかで思っている。全く逆の生き方をしてきた二人の男が偶然出会い、互いの人生に憧れ、魅かれ、そして第2の人生を始めようとする。

「列車に乗った男」は人間誰もが持つ「憧れ」というものに一歩近づこうとした男達の物語である。静と動という対照的な二つの人生は偶然の交差をきっかけに、徐々に影響し合い、変化していこうとする。そこには相手への嫉妬心などは無く、愛情を帯びた憧憬が存在していた。また無駄がなく人物達の感情が溢れんばかりに籠められている、詩の様に素晴らしい台詞も手伝って観ていて非常に心地良い。

だが彼らは違う生き方に魅かれていくと同時に、どこかで今の自分を愛している。長年過ごしてきた人生のスタイルは自ら紡ぎ出したものであり、結果的に自分に一番合っているのだ。しかし手の届かぬ憧憬があるからこそ生きる希望が湧いてくるのも事実である。頂点に夢があるから人生という階段を上って行けるのであり、人は永遠に自分には無いものを追い求めて生きてゆくのだ。

一見悲劇に見えるラストには、丁度ウディ・アレンの「カイロの紫のバラ」にも見られるような、監督の主人公への優しさが感じられる。マネスキエとミランは結局死に向かうがもし彼らが現実世界で新たな人生を歩み出したとしたら、いつかは限界を感じるに違いない。夢は夢であるから魅力的に思えるのである。ルコントは彼らの憧憬が失望へと変わらぬよう、このようなラストにして二人の夢を守ったのであろう。

バーバー吉野

丸山哲也
埼玉県所沢市
39歳・自衛官

●応募要項
住所、氏名（ペンネーム使用の方は本名を忘れずに）、年齢、職業、電話番号を明記の上、800字～900字で、縦書き。原稿用紙、またはワープロ打ちされたものでご応募ください。レポート用紙不可。字数厳守のこと。
●宛先
〒106-0045　東京都港区麻布十番１－２－３
プラスアストル　キネマ旬報編集部
「読者の映画評」係まで

皆様のご応募お待ちしております

「大人になるって、どういうこと？」主人公の少年、慶太が父親に聞く。しかし、父親はうまく答えられない。口下手だからではない。照れ臭いからでもない。わからないのだ。

この問いかけに答えられる大人が、今、一体どれだけいることだろう。世の中の急激な変化に呑まれて意気消沈している人々は口を閉ざし、「勝ち組」と呼ばれる人々はそんなことを考えるゆとりなどない。大人の世界の入り口に立っている少年達にとって最も知りたい、そして知るべきことを、私達はきちんとした言葉で語ることができないでいるのだ。

しかし、本作を観た今、私は自信を持って言える。「大人になるとは、寛容の心を持ち、互いに妥協点を見いだす知恵を身につけること」だと。

全ての少年達に「吉野ガリ」という奇妙な髪型をさせている小さな町に、東京から転校生がやってくる。古くからの伝統であり、また、宗教的意味合いのあるこの「吉野ガリ」を、町の人々はこの転校生の少年にも強要する。案の定、彼はそれに反発する。まあ、これは至極当然な反応であろう。ただ、彼はその時こんなことを言うのだ。「髪型を強要するのは人権侵害」、「憲法違反」、「表現の自由を奪うな」。

確かに大人の側からの理不尽な押しつけは良くない。「伝統だから」「しきたりだから」では子供を納得させることなどできはしない。しかし、「人権」だの「憲法」だのという生硬な物言いは互いの関係を悪くするだけだ。「個性は大事」という紋切型の思い込みを盾にとり、あの不思議な髪型がなぜ今まで存続してきたのか、大切にされてきたのかを顧みない依怙地さは不気味ですらある。

互いの主張を認めあい、折れるところでは折れ、柔軟に物事を考えるのが真の「大人」というものだ。自分の言いたいことだけを言い、後はただぶつかり合うというのは「ガキ」のすることであろう。

本作における争いを解決に導いたのは、子供達の思いやりと、町の人々の寛容さだった。こういう穏やかな作品を観ると「大人になるって、悪くない」と思えてくる。

コールドマウンテン

三吉啓司
東京都多摩市 45歳・会社員

A・ミンゲラ監督の、時間をさばく手腕の確かさは「イングリッシュ・ペイシェント」で存分に観せてもらっている。それは単に現在と過去のカットバックの巧みさを言うのではない。二つの時間が互いの気分を刺激したり侵したりしながら進行し、やがて一つに収束したときには目の覚めるような真実が立ち現れるのである。

この新作でも監督は、同じ興奮を開巻から味わわせてくれる。戦場の今と美しい故郷の回想が並行し、カットバックを重ねるにつれて過去はしだいに現在に近付いてくる。野戦病院でN・キッドマンの手紙が読み上げられたとき、二つの時間はついに一つとなり、今回もまた真実が立ち現れる。人が命を投ずるに値するものは、愛する人と故郷のほかにはない、ということだ。

かくしてJ・ロウは故郷に向けて歩き出す。映画の見せ場はこれからだ。監督は時間に代わって、二つの空間をさばいてみせる。その間は数百キロも隔たるが、距離を示すものは地形や季節ではない。「生」と「死」の在りようだ。

J・ロウは悲惨な戦場に在る。ここは彼岸だ。死は絶え間なく彼をおびやかし、捕らえられた脱走兵たちは味方の銃で撃ち殺される。折り重なった死体の下からよみがえったJ・ロウは、鎖につながったいくつもの死体を引きずり、なおも歩き続けようとするのである。男は死を逃れるだけで精一杯なのだ。

いっぽうN・キッドマンは美しい故郷コールドマウンテンに在る。ここは、いわば此岸である。彼女は生き延びるために働く。柵を築き畑を耕す。手は荒れ髪は崩れ、顔も農婦の表情に変わっていく。

二人の再会で、空間は一つになり物語は終局に向かう。このとき監督は、二つの時間と二つの空間を一またぎにして見せるのだ。すなわち、19世紀半ばのアメリカと、21世紀初頭の西アジアである。二つの時間と空間をつなぐものは戦争と無益だ。しかし監督の本意に反して、私たち観客の胸に立ち現れるのは大いなる絶望と、ほんのわずかな希望でしかない。

スパイダーマン2

監督／サム・ライミ　出演／トビー・マグワイア、キルスティン・ダンスト、ジェームズ・フランコ（ソニー・ピクチャーズ配給）●日劇1ほか全国東宝洋画系にて公開中

人気アメリカン・コミックが原作のシリーズ第2弾。正体を隠し、ヒーローとしてNYの治安を守る自分と、日々の生活に追われる自分とに苦悩するピーターは、スパイダーマンを辞める決心をするが……。

西脇英夫

イジイジと悩む主人公に少々苛立つところもなきにしもあらずだが、それも計算の上。アクション・シーンで一気にはじける痛快さは比類がない。前作をはるかに超える摩天楼を飛翔するヒーローの躍動感は、まさに奇跡のようだ。周囲に誤解されながらも、捕らわれた恋人を決死のダイビングで助けるというストーリー展開は、幼児でもわかる単純明快さだが、そのおおらかさがすがすがしく、好感度もバツグン。最後に面が割れる作りも意外性があって面白いが、次回作どうするのかな。

★★★★

北川れい子

予め大ヒットが約束されているような娯楽大作ではあるけれども、そういった驕りがあまり感じられないのがいい。貧乏学生とスパイダーマンの1人2役の主人公の、学生の部分、悩める青春の部分を丁寧に描こうとしたからに違いない。お約束ごとのCG合成アクションは、悪玉のドック・オクが強大だけに観応えがあるが、ヒーローが勝つのもお約束ごとだから安心して楽しめる。ヒロインのMJが二股愛に走り、フト〝冬ソナ〟を連想したりするが、これも青春の揺れ、この辺も巧み。

★★★

田中千世子

スーパー・ヒーローになっても少しもえばらない主人公同様映画の方も慢心せず大層好もしい。ブルーな気分でスパイダーマンに変身すると、出る糸も出なかったりで〈猿も木から落ちる〉の教訓がよく利く。感心したのはスパイダーマンの飛び方が変化したこと。前回のぶらあぁんぶらあぁんはクモらしくて楽しかったが、今度は続編にふさわしく一段と進化して空中を点から点へ移動。脚本を大ベテランに変えるなど、人間ドラマに力を注いだ。サム・ライミ監督はモラリストなのだと思う。

★★★★

轟夕起夫

傑作である。ツッコミどころ満載でも、それを凌駕するエモーショナルな内容、胸のすく美しいアクションに血中濃度が上がった。途中、われらがウルトラセブンの最終回「史上最大の侵略」（脚本・金城哲夫）を思い出し、シューマンのピアノ協奏曲を幻聴した（↑分かってもらえます？　未見の方はぜひ！）。で、例えばアンヌ隊員こと菱見百合子（現・ひし美ゆり子）のほうがK・ダンストより断然キュートだが、S・ライミのパースペクティブの歪んだ世界では逆になってしまうのだろう、きっと。

★★★★

69 sixty nine

監督／李相日　出演／妻夫木聡、安藤政信、金井勇太、水川あさみ、太田莉菜、新井浩文、岸部一徳、国村隼、柴田恭兵（東映配給）●丸の内東映ほか全国東映系にて公開中

村上龍の自伝的小説を宮藤官九郎が脚本化。1969年の長崎県佐世保が舞台の青春映画。高校生のケンたちが計画した映画・演劇・ロックを融合させたフェスティバルは、学校のバリケード封鎖に発展し……。

西脇英夫

60年代末期の青春賛歌、もっと面白く、懐かしく感じていいはずなのにいま一つ盛り上がらないのは、演出と脚本がどこか今風で、当時の若者の熱い心情が伝わってこないからだろう。例えば「チルソクの夏」のように、一挙に観客の思いを30数年前に戻してしまうような、現代の若者とのズレ、つまり野暮ったさとか、古風さがほしいところなのだが、概して主人公達はカッコよく、画面にすんなり収まっている。イケメン俳優のすっきりした顔立ちのせいもあるのだろうが、それだけではないはず。

★★

北川れい子

「下妻物語」に続いてこの作品と、もう嬉しいったらない。主人公たちはよく走るが、〝山の彼方〟に向って走るのではなく、〝目の前の人参〟のために走っているのが実に痛快だ。その〝人参〟は女の子だったり、学校だったり、基地だったり、とにかく今、目の前にある気になるものに向かって、ガムシャラに走る。会話、演出、演技の一体感もみごとだし、バカをしててもバカじゃないという、そのキワキワ感のみごとなこと。大口で叫ぶ妻夫木が最高で、安藤政信も適役。ありがとう。

★★★★

田中千世子

ふんぞりかえるほど若さがえばってる。69年が出てきてもこの映画、ノスタルジーをはじきかえす。大学紛争の学生たちと違って高校生は純粋に孤立していく例が多かったからその悲痛さは想像できる。教師ははっきり敵だ。しかし、被害者ぶるのはセンチメンタル。ランボーの詩も海も太陽も、今この瞬間の若さのためだけにある。そして世界はきらきら輝く。これはひょっとして新世紀ヌーヴェルヴァーグかもしれない。妻夫木は「勝手にしやがれ」のベルモンドだ。若さは何度も脱皮する。

★★★★

轟夕起夫

キャッチーで洒脱なオープニング・タイトルが、李相日監督の、原作に対する姿勢を明確にしている。すなわち、バリ封とフェスティバルに燃えた69年の若者たちの心象を、現在の目線で〝グラフィック化〟すること。つまり、あの時代への憧れと共感と、「だってウソやもん」の一言で映画全体を宙に浮かすクールな眼差し。夏の暑さ（と熱さ）をとらえた柴崎幸三のカメラ、種田陽平の美術が秀逸。妻夫木&安藤のコンビもいいが、劣等感を引きずるイワセ（金井勇太）の右往左往ぶりが染みる。

★★★★

スチームボーイ

監督／大友克洋　声の出演／鈴木杏、小西真奈美、中村嘉葎雄、津嘉山正種、児玉清、沢村一樹、斉藤暁、寺島進（東宝配給）
●日比谷映画ほか全国東宝洋画系にて公開中

©2004大友克洋・マッシュルーム／STEAMBOY　製作委員会

19世紀の英国を舞台にした冒険活劇アニメーション。発明一家スチム家のレイ少年は、超高圧蒸気を高密度に圧縮して空前絶後のパワーを生み出す画期的発明品スチームボールの争奪戦に巻き込まれる……。

これが大友作品？　と思わせるような質感の違いに少々戸惑ってしまった。近未来ではなく、過去を背景にしているせいもあるのだろうが、どこか宮崎駿作品を感じさせるノスタルジックな装いが気になった。大友作品には、つい世紀末的な過激さやおどろおどろしたダイナミズムといった強烈な毒を期待してしまうのだが、今回は別の要素をクリエイトしているようだ。それにしても、さすがに映像の独自性は変わらず、アニメを超えた、リアルなタッチと見事な想像力の結晶を観ることができる。

★★★

夢と希望は過去にしかない!?　いや、過去もまた大きな失敗を繰り返してきたのだった。でも過去には必ず未来がある。大友監督が産業革命の時代にストーリーを設定したのは、逆にそれほど、現実、そして未来に夢も希望も見出せなかったということなのだろうか。セルアニメの感触を残したフルデジタル映像の、立体感のある精密さに心底驚嘆しつつ、それがいささか気になった。ラストのパビリオンの崩壊は現実世界にもつながっていたが、レトロとノスタルジーで未来を語られても……。

★★★

天才大友の仕事である。機械油のにおいが画面から立ち上る。そしてシュッシュッのスチームのパワー。チャップリンの「モダン・タイムス」やラングの「メトロポリス」に対抗して、それからチェコアニメにも対抗して、なおかつ宮崎駿を意識したように思われる。天才はいろんなところに目が届く。情感は乾いているのにストーリーは人情噺めいているのは何故だろう。観客の感情移入をはねつけながら感情を引き寄せようという難しいことをさらっとやっているが、時間の映画的構築に問題が残る。

★★★

黒澤明や宮崎駿のダイナミズムを彷彿とさせる空想冒険活劇。ついに姿をあらわした〝スチーム城〟を観て想起したのは、現代アートの気鋭ヤノベケンジがEXPOタワー解体に立ちあった際に発したコンセプト「落下する未来」だ。どんなに輝かしき未来も、いつかは廃墟になる。だがそこには〝未来の果実〟の種子が宿っており、地に落ちてはまた新たな芽を吹く……そんなイマジネーションの羽ばたきを映画にも感じた。要は、大友克洋も〝未来の果実〟を求め続けるララ科學の子なのである。

★★★

マッハ！

監督／プラッチャヤー・ピンゲーオ　出演／トニー・ジャー（クロックワークス＝ギャガ・ヒューマックス配給）
●7月24日より渋谷東急ほか全国松竹・東急系にて

CG、ワイヤ、スタントなどを使わず、生身の肉体による実演を活かした格闘アクション。タイのとある村で盗まれた守護神の像を取り戻すため、村一番のムエタイの使い手ティンはバンコクへ捜索に向かう。

B・リーの初期作品を髣髴とさせる、質素で素朴で、哀しみに充ちたキャラクター表現がいい。アクション・シーンの迫力とリアル感は、確かに他に比べようもなくぶっ飛んでいて、異常なほどだ。敵キャラが主人公に、手当たり次第に身近な家具をここまでやるかというくらい叩きつけていく場面など、この執拗さが日本の娯楽映画にも欲しいとさえ思ってしまった。物語の中心に村の守り神を据えるというアジアン・テイストたっぷりなのも素直で好感が持てる。元気なアジア映画を観るのは楽しい。

★★★

アクションにもインチキなし、という公約を信じたわけではないけれども、ブルース・リーやジャッキー・チェンの初期映画を連想させるのは事実。ただいくら生身のアクションといっても、映画である以上、相手役がいて演出する人がいるわけだから、呼吸と手順の問題ってことになる。けれどもジャッキーはそれでも怪我をしているし、本作のトニー・ジャーも怪我をしているらしい!?　ストーリーが凡庸なのと、ジャーに愛敬がないのがものたりないが、手造り障害物競走活劇の味は上々。

★★

紛失した宝を取り戻す。壺の丹下左膳も運動靴のイランの少年も呼吸するのは同じ空気、映画の原点の空気だ。村の守り神オンバクの仏頭を探しにバンコクへ出た若者が、ここに新たに加わって、滝のごとく汗を流し奮闘する。ワイヤーなしの生のアクションとは、飛んで蹴る肉体の動きと、輝く汗だ。汗で光る体の美しさ。ヒーロー誕生のファンファーレが鳴り響く。キメのアクションは映画内アンコールで角度を変えたり、スローモーションにして繰り返し見せびらかす。負けました。

★★★★

予告編の公約通り「CG、ワイヤー、スタント、早回し」を排し、格闘アクションの原点に回帰したムエタイ戦士、新星トニー・ジャーの肉体の躍動が素晴らしい。これがさながら、ブルース・リー、ジャッキー・チェンの〝世界制覇時〟を彷彿とさせるスーパーな飛翔ぶりなのだ。盗まれた仏像「オンバク」をめぐる物語は平板だが、ヒジとヒザを駆使する〝神業〟、トゥクトゥク（3輪タクシー）の爆走チェイスが見応えあり。水中に眠る、隠された仏像のシーンもなかなかシュールで忘れ難い。

★★★

★★★★…必見！　★★★…一見の価値あり　★★…悪くはないけど　★…私は薦めない

ドリーマーズ

監督／ベルナルド・ベルトルッチ 出演／マイケル・ピット、エヴァ・グリーン（日本ヘラルド配給）
●7月31日よりシネスイッチ銀座、新宿武蔵野館ほかにて

ベルトルッチが「ラストタンゴ・イン・パリ」から30年ぶりにパリを舞台にした新作。1968年５月革命直前のパリ、美しい双子の姉弟と、アメリカ人留学生の三人が織り成す妖しい人間模様を描く。

河原晶子

68年5月、パリ。シネマテーク。ゴダールの引用。コクトーの「恐るべき子供たち」への目配せ。映画という密室の夢と路上革命の現実との対比。パリに帰ったベルトルッチの、遥かなる青春期へのかなわぬ想いが、フレッシュな3人の俳優たちの若く美しい裸身に注がれる。虚しいノスタルジー！　まだ63歳にして彼はもう老境に入ってしまったのか。同年代のベロッキオの反骨心をみよ！　リヴェットやオリヴェイラの豊潤さをみよ！　ずっと敬愛してきた監督に星2つとは哀しすぎる。

★★

稲垣都々世

ベルトルッチを敬愛していた。だから「革命前夜」とは似ても似つかぬこの映画に面食らう。処女礼賛の「魅せられて」と並ぶ珍作だ。双生児近親愛の物語か、ヌーヴェル・ヴァーグへの愛と五月革命へのノスタルジーの結晶か。その気持ちがわかるだけに、文句を言うのも大人げないとは思うが、愛する映画のシーンを登場人物に真似させて〝オマージュ〟と言われると寒くなる。自分がこの映画に登場させられているのを見たら、ラングロワもトリュフォーも驚くに違いない。

★★

大場正明

アパルトマンで共同生活を始める双子の姉弟とアメリカ人留学生。三人のシネフィルにとって、映画はまず何よりも逃避のためにある。彼らは映画を生きることで深く結びつく。しかし、親密になれば、映画を生きられない生身の肉体や欲望が様々な不協和音を生みだし、彼らをそれぞれに傷つける。それでも三人の幸福を求めるなら、そこには映画のなかの死に倣う道しか残されていないが、五月革命という台風の目のなかで夢を見ている彼らに、吹き荒れる嵐が通過儀礼の終わりを告げるのだ。

★★★

金原由佳

「１９００」「魅せられて」などベルトルッチは処女喪失の模様（「ラストタンゴ・イン・パリ」はその変形）を描いた。本作のエヴァ・グリーンもまた傲慢なまでに輝かしい少女性がセックスによって褪せていく過程を魅力的に表現する。けれど、今の時代、「処女喪失」がどれだけ映画的に意味を持つのか。巨匠の少女観に違和感を覚える。ただ、本作自体が激動の１９６８年に直面した若者たちの通過儀礼の構図となっている点は興味深い。引用される映画が、人に覚醒や挑発を促すために、機能する点にも。

★★

アメリカン・スプレンダー

監督／シャリ・スプリンガー・バーマン、ロバート・プルチーニ（東芝エンタテインメント配給）
●ヴァージンシネマズ六本木にて上映中

自身のぱっとしない日常を漫画にすることで脚光を浴びたコミック作家ハービー・ピーカー。その生きざまが、ドラマと現実の映像、そしてコミックを組み合わせるかたちで描かれていく。

河原晶子

平凡でサエない男の日常がコミックスの世界で人気を集める小さな成功物語。主人公ハービーを演じる俳優と、ハービー本人とコミックスのハービーと、3つのシチュエーションを混合させた、ドキュメンタリーのような、そうでないような世界。アイディアはユニークだが、こういう小手先の発想が映画の未来を貧しくしているのではないか。最近こういう映画が多い。マイケル・ムーアの発想にも同じようなものを感じる。創造とは無縁のマイノリティの笑いだ。

★★

稲垣都々世

冒頭の少年時代のエピソードに大笑い。病院の事務員をしているしがない男の何でもない生活をスケッチしただけなのに、切り取り方一つでこんなにユーモラスな映画になる。これぞ〝日常〟の面白さ、人生のリアリティ。そこにある小さな幸せを感じるのが映画を見る者の喜びでもある。ハービーの笑わない怖い顔もいいが、彼を完全に食ってしまう奥さんのブッ飛び方が好きだ。前半のビョーキが後半で本物の病気になった途端、ヒューマン・タッチになってしまうのが寂しいが。

★★★★

大場正明

題材がスタイルを規定するということが、この映画の場合には、作り手に興味深い発想をもたらし、ユニークな作品を生みだすことに繋がっている。ハービーは、自分の日常生活をネタに棒線でコミックを描き、様々なアーティストが作画を担当し、様々なイメージが生まれ、彼の人生にも影響を及ぼす。ハービーとはもはや単なる個人ではない。ドキュメンタリーにフィクション、コミックのイメージやテレビ番組の映像が融合したこの映画は、そんなハービーという存在を浮き彫りにしている。

★★★★

金原由佳

ハービーは勤め先の病院でこの地で生まれて死んだ患者のカルテを見て、自分の生活の漫画化を決意する。それは単純な有名人志向ではなく、自分がここにいることの根源的な叫びだ。だから有名人を紹介するレターマン・ショーでズレてしまい、そんな自分へのシニカルな視点が映画にも生きている。同僚が漫画の登場人物にされた自分を見て笑う自虐的な姿や、ハービーの妻ジョイスが周囲の人間を病理的に分析する姿に爆笑後、胸が衝かれる。彼らの「変」こそアメリカ文化の輝き（スプレンダー）なのだ。

★★★

友引忌

監督／アン・ビョンギ　出演／ハ・ジウォン、ユ・ジテ、キム・ギュリ、チェ・ジュンヨン(松竹配給)
●シネマミラノ、銀座シネパトスにて上映中

「ボイス」で脚光を浴びたアン・ビョンギが2000年に手掛けた監督デビュー作。大学時代の仲間たちが、自殺した少女に引っぱられるように、ひとりまたひとりと奇怪な最期を遂げていく恐怖を描く。

ジャパニーズ・ホラーのおどろおどろしさ。ハリウッド学園ホラーの暴力的残虐性。その他にも今までどこかで観てきたような〝恐怖〟を盛り込んだ少女の怨念映画。大学時代の仲良し7人組の歪んだ〝友情〟の得体の知れぬ暗さは、最近の佐世保で起きた2人の少女の悲劇を思い出させて後味が悪い。ホラー映画に罪はないが、こうした映画を自室でたったひとり観ている少年少女を連想すると無気味だ。子供たちの夏のお化け屋敷大会の楽しさ(?)はどこへ消えてしまったのだろう。 ★

どうもこの手のホラーには鈍感で、怖かったためしがないのだが、これもしかり。論理的な説明を求めるつもりはないが、なぜ彼女がいじめられたのか、自殺に到ったのか、よくわからなかった。つまり、なぜ仲間が殺されねばならないのか理解できなかった。思わせぶりな構成と、おどろおどろしい効果音と、血みどろの死体で脅されても、鈍感な者は怖がれぬ。即物的な映像だけでは恐怖も絵空事になる。韓国は〝恨〟の国なのだから、もっと彼女の心が見えてもいいはずなのに。 ★

この映画には、複数の恐怖の要素がある。ギョンアは、悲劇を招き寄せる宿命を背負っているらしい。彼女はヘジンのことを想いつづけている。ヘジンとソネは、ギョンアの自殺と無関係ではない。ヘジン以外の五人の仲間には秘密がある。こうした要素からは、異なる恐怖が生まれる。死んだ人間が蘇るのは恐ろしい。しかし、生きている人間が秘密をめぐって仲間割れし、醜悪さを曝け出すのも恐ろしい。この映画は、そういう恐怖の違いを際立たせていくのではなく、単純に並べてしまう。 ★★

黒髪の麗人、ギョンアは何故、村人たちから忌み嫌われたのか？　彼女の生い立ち、家族の背景には、韓国社会に潜む差別問題などが絡んでいるのだろうか？　しかし、映像を見る上ではわからない。肝心のホラー描写も清楚な美少女ハ・ジウォンをはじめ、端整な美人女優に白目をむかせたり、おどろおどろしい表情をさせたり、美しい者を汚すことに策があり、それもなんだかな。大学中の才媛、秀才が集まったサークルに異質なギョンアが入ることで芽生えるエリートの悪意の方が薄ら寒い。 ★

茶の味

監督／石井克人　出演／三浦友和、浅野忠信、手塚理美（クロックワークス、レントラックジャパン配給）
●渋谷シネマライズにて上映中

「PARTY 7」から4年ぶりの石井克人監督の新作。山あいの町で、思春期の恋心、自我の目覚め、仕事への意欲など、それぞれに小さな希望と不安を抱えつつ静かな日常を送る一家の姿をほのぼのと描く。

縁側のある懐しい日本家屋に住む家族の物語と、シュールで破天荒なコミックスの世界の不可思議なブレンド味。春野家の人々を演じる俳優たちの一見バラバラなキャラクターも、次第に妙に調和してみえてくる。祖父役の我修院達也のハイ・テンションにあっけにとられた。織り込まれるいくつかの寸劇風エピソードの暴走が作品からはみ出してしまっているような気もするが……。末娘の逆あがりのシーンに拍手が起きたというカンヌ映画祭の観客に素直な反応を感じる。 ★★

人にはそれぞれ喜びや悲しみ、夢や悩みがある。けれど、違う個性の人間が、同じ夕焼けを見ることもある。そのとき、彼らの心に何かが通ずる。いいエンディングだ。しかし、ここに到る家族の〝日常〟の羅列にはまいった。作為だらけの〝自然〟な描写。平凡で退屈な日々をそのまま見せることで普遍的なリアリティが生まれるものか？　戯画化された映像を挿入してスタイルの一貫性を破ればアートになるか？　変な〝ジジイ〟のキャラクターと大仰な演技に監督は何を込めたのだろう。 ★★

たとえば、「下妻物語」は、時間の流れが逆回転しようが、人物紹介がアニメになろうが、そこには生きたキャラクターがあり、心の痛みなどの感情が伝わってくる。だが、石井監督の作品は、「鮫肌男と桃尻女」にしても「PARTY7」にしても、最後まで作られたキャラクターが動かされているようにしか見えない。新作は、平凡な日常というこれまでとはまったく違う世界を描いているが、本質は変わらない。やはり作られたキャラクターが、寒いギャグを連発しているようにしか見えないのだ。 ★

どこと特定されない緑豊かな田園風景。10年前なら、日本の中心の東京とは違う地域的な断絶や隔離が描かれただろう。しかし、春野家の男は伝説的なアニメーターで、嫁の美子も同じ仕事をし、ぶらぶらと帰省中の美子の弟アヤノも東京ではスタジオミキサーと、文化の発信側の一端であることがわかる。家族の在りようも同様で、各自全く違う心象風景を抱えながらも平穏に暮らす、作品のパラレル感に強く共感。微かだが、確実に繋がる本作の人間関係こそ、実は今の時代の理想像では！ ★★★★

★★★★…必見！　★★★…一見の価値あり　★★…悪くはないけど　★…私は薦めない

試写よりの使者
The envoy from previews.

宮崎祐治 68

「ゲイは女の気持ちがわかるの」という台詞や美男勢揃いで、この監督もゲイだなとわかる「靴に恋して」。ひりひりと5人の「神経衰弱ぎりぎりの女たち」の不幸なエピソードを編んでいく。自分に合わない靴を履き替えようとする彼女たちは「原因は愛」で空回りばかり。マドリッドやリスボンの町にまで疲労感が漂う。「モーターサイクル・ダイアリーズ」はバイクで南米大陸を走破しようとするふたりの青年の冒険ロードムービー。ボロボロなバイクで走り出すオープニングから、その期待感だけで泣ける。バイクは壊れて旅は停滞してしまうが、彼らは、それから一気に精神的な成長を遂げる。

少年と昆虫学者が蝶を追って走り出すだけで泣けてしまうのは「天国の青い蝶」。実話だそうだからもう少し正攻法で見せてもよかったのでは。ハリウッド的なCGや美術に毒されているのが、時々見え隠れする。ジャングルの昆虫や植物など丁寧に撮られているだけに、余計残念。

以上心優しいのは大変だという3本。

「靴に恋して」の女性たちはシミやシワを隠さずに見せる。まるで傷のようだ。みんな何かを求めて疲れ、フラフラしてるその足元を象徴的に描いている。不幸なのは、「グッチの靴が悪いのよ」と言って男の気をひこうとするアンヘラ・モリーナ。

チェ・ゲバラの青年時代を英雄として描かないのがいい。「モーターサイクル・ダイアリーズ」。何で旅をするんだ？と聞かれ「旅するための旅だ」と答える。親友役ロドリゴ・デ・ラ・セルナがガエル・ガルシア・ベルナルを懐深く支えている。

実話の映画化「天国の青い蝶」の昆虫学者役はウィリアム・ハート。「蝶のことだけ考えようよ」と少年に諭されたりして大人の彼の方も心が開かれていく。

立川志らくのシネマ徒然草

187「キューティーハニー」から見る映画評論のあり方

映画「キューティーハニー」について、とやこう言うというのは野暮な気もするが、観ていて変なのは、元々アニメのものを映画にして、またアニメっぽく描いているところだ。アニメ作品をせっかく実写にしたのに、わざわざアニメっぽく描くことぁない。だからどんなに人間を描こうとしてもそこにリアル感がなく、大人は思わず「ふざけるな!」と怒り出したい衝動にかられるのだ(といきなり『読者の映画評』みたいに真面目なトーンになってしまいました)。「少林サッカー」との決定的な違いがそこで、こちらの映画はサッカーというリアルなスポーツを思いきって劇画調にして、「んなわけないだろ」という感想を「そこまでやるならいい!」という賞賛に転化させることが出来たのだ。もし「少林サッカー」がリアルな作品だったら? つまり本物のサッカーと同じ感動をこしらえようと、CGは使わず、少林寺のテクニックのみでサッカーの試合をしたら? 想像しただけで面白くもなんともない映画になってしまいますね。野球映画の大半がつまらないのは普通に野球をやっているからだ。本物の試合を観た方が面白いに決まっている。元がアニメのものは極力普通に描いた方が面白い。CGなんて使わないことだ。キューティーハニーが敵と戦う場面もジャッキー・チェンばりのアクションでやる。怪物も着ぐるみは使わず、リアルな化け物にする。「エクソシスト」のリーガンみたいなメイクで、とにかく怖い。そしてキューティーハニーを取りまく人々をホームドラマの如くきちんと描く。木下惠介ばりの悲劇にするのだ。そうすればひょっとしたらアニメよりも凄い作品が出来るかもしれない(「こんなのハニーじゃない!」というオタッキーなファンの言葉は当然出るだろうが、無視しましょう)。私はそういった映画が観たい。リアルな『ドラえもん』だとか、リアルな『天才バカボン』とか。

　まあ、佐藤江梨子のハニーは可愛かったけどね(私のイメージは釈由美子なんだが。どうでもいいですか、ハイ)。彼女のプロモーションビデオだと思えば腹が立たないと人に言われたが……。サトエリはパチンコの「CRイエローキャブ」で散々見ているからな、ってパチンコを知らない人には分からないか。ちなみにサトエリは確変です。ちなみに私は4番の森ひろこが好みです。そうそう、キューティーハニーって元々は「多羅尾伴内」のパロディなんだよね。それを結構皆忘れている。思い出したからなんだといわれるとなんでもないんだけど。「ある時は片目の運転手……」、片目だと免許を取れないというギャグがあったね。自己紹介している間、悪者は何にもしないんだよ。じっと聞いている。撃っちまえばいいのに。

　えー、「キューティーハニー」の良いところも書きましょう。最後はホロッとなった。愛は何より強いという定番だが、ハニーがけなげで泣ける。だからもう少しアニメっぽさをなくしたら号泣出来たのに。

「キューティーハニー」

　とやこういちゃもんをつけてまいりましたが、でもこの映画はこれでいいのかもしれない。というのも永井豪の原作の匂いをちゃんと出していたから。あのギリギリのいやらしさも、悪党のパサンクローの間抜けぶりも描けていた。だから合格点なのです。ただ映画として、もっとこうすればいい、というか、私の趣味ならばこうだと、ただそういうことです。所詮、映画評なんてそんなもんでしょ。こっちの趣味の押し売り、決め付け。それを本質の如く世間に発表する。いい加減なもんだ。

　サトエリがキューティーハニーの役をもらえて喜びの余り泣いていたのをテレビで見たが、あの涙には誰もいちゃもんはつけられません。だから本当はもっと優しい目で作品を見てあげなくてはいけません。酷いと思ったら取り上げない事。それが本当の映画評論だと思う。ただこれだけは許せん! という時のみ怒る。それ以外はなるべくいい所だけをクローズアップしてあげる。それが本当の映画評論です。私の場合はというと……えー、いちゃもん並びに上げ足取り、あとは趣味の押し付けです。最後は映画評論の本質を語りつつ、自己弁護でござんした。

映画を見ればわかること

川本三郎

㊅「ワイルド・レンジ／最後の銃撃」のことなど

古いアメリカ映画のビデオを出しているユニークな会社、ジュネス企画の新作情報を見ていたら、近く、オーディ・マーフィ主演のB級西部劇、ドン・シーゲル監督「抜き射ち二挺拳銃」(52年) が発売されるとあって、うれしく驚いた。

オーディ・マーフィは一九五〇年代から六〇年代にかけて「テキサスから来た男」(50年)や「赤い連発銃」(57年) などのB級西部劇で活躍したスターだが (拙著「ハリウッド大通り」参照)、その西部劇はほとんどビデオになっていない。「抜き射ち二挺拳銃」のDVDが出れば、西部劇ファンの渇は癒される。

このところDVDでは、ジョン・フォードの「荒野の決闘」(46年) が発売され、売行き好調と聞くし、他にグレゴリー・ペック主演の「拳銃王」(50年)や、日本未公開だったヘンリィ・フォンダ主演の「牛泥棒」(43年、ウィリアム・A・ウェルマン監督。増淵健著『西部劇映画一〇〇選』秋田書店・76年、によれば、一九七四年に「オックス・ボー事件」のタイトルでテレビ放映されている)、さらにファン待望のグレン・フォード主演、デルマー・デイヴィス監督「決断の3時10分」(57年) など往年の西部劇が次々に発売されている。西部劇ファンが健在と思うとうれしい。

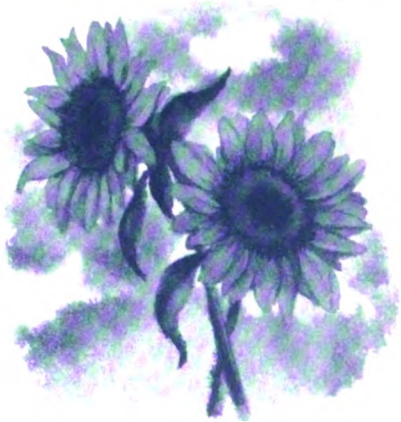
そんな折り、ケヴィン・コスナー監督・主演の新作「ワイルド・レンジ」は正統的西部劇として実に見ごたえがある。

牧場を持たずに牛を自由に移動させて育てる昔ながらのカウボーイ (ロバート・デュヴァル、ケヴィン・コスナーら) が、牛を囲いこもうとする大牧場主 (マイケル・ガンボン) と対決する。「荒野の決闘」と同じ構図である。

ラスト、約20分間にわたるガンファイトが迫力充分で見せるが、この映画がいいのは、「荒野の決闘」や「シェーン」(53年) がそうだったように生活感があること。カウボーイの生活や、町の人びとの生活を丁寧に描いている。

草原にテントを張る時、雨水が入りこまないようにあらかじめテントのまわりに溝を掘っておく工夫など西部劇ではじめて見た。大雨のために町の通りに水があふれ、濁流となって押し寄せるところも凄い。雨で水がぬかるのは「シェーン」にもあったが、こんな洪水のような激しい流れが描かれるのは西部劇ではじめてだろう。フロンティアの生活の厳しさがわかる。

アネット・ベニングが東部からやってきたレディで、医師という設定も生活感がある。「荒野の決闘」における東部から来たクレメンタイン (キャシー・ダウンズ) が教師になるのに対応している。

彼女は家の周りに花を育てている。母の形見というティー・カップを大事にしている。花やお茶で厳しい開拓地での暮しに潤いを添えている。

イラストレーション　ムカサリツコ

ケヴィン・コスナーが、彼女の大事にしていたティー・カップを誤って割ってしまい、決闘の前に、雑貨屋に行き、「カタログ」で同じ品物を注文するところも細部の充実である。「シェーン」のヴァン・ヘフリンが雑貨屋で「カタログ」を見たのを思い出す。開拓者にとって「カタログ」は生活の必需品だった（シアーズ・ローバックはこの時代に生まれている）。

昔の西部劇だったらウォルター・ブレナンが演じただろう老人（マイケル・ジェッター）が出て来て、デュヴァル、コスナーに手を貸すのも、古き良き西部劇の味。

カナダでロケされたというが、緑豊かな風景がまた素晴しい。花が咲き乱れる大草原をカウボーイが馬に乗ってゆく（馬上でビーフジャーキーをかじる）。遠くで雷鳴が聞える。原題は〝Open Range〟（広々としたところで牛を育てる意味）だが、広大な風景の美しさに目を奪われる。

往年の西部劇の監督はジョン・フォードはじめアンソニー・マン、デルマー・デイヴィス、ジョン・スタージェスらいずれも風景描写を大事にした。「シェーン」もまたあのワイオミング、グランド・ティトン周辺の緑したたる草原の風景なしには語れない。

ラスト、ケヴィン・コスナーがアネット・ベニングと結ばれるのも「荒野の決闘」を受継いでいる。名前についてのやりとりがあるのも。

そしてこの映画がいいのは、何よりも、ガンファイトが暴力のための暴力になっていないこと。あくまでも名誉と誇りのための戦いである。いい意味で古風。ただ一ヶ所、敵のガンマンがアネット・ベニングを盾にとった時、ケヴィン・コスナーがひるむどころか、一発で敵を仕止めたのには驚いた。昔の西部劇では、こういう場合、女性が危ないから、いくらヒーローとはいえ撃たなかったものだが（「真昼の決闘」のクーパーのように）。

ケヴィン・コスナー、よほど射撃に自信があったのか。思いがけず彼が撃ったのでアネット・ベニングがびっくりした表情を見せるのが微苦笑を誘われた。

「ワイルド・レンジ」には「最後の銃撃」というサブタイトルが付けられている。「最後の銃撃」といえば、西部劇ファンなら、一九五六年に作られたリチャード・ブルックス監督、ロバート・テイラー、ステュアート・グレンジャー主演の同名の西部劇を思い出すだろう。

一八八〇年頃の西部でのバッファロー狩りを描いている（原題は〝Last Hunt〟）。ロバート・テイラーが珍しく悪役。黒ずくめのハンターで、野牛の群れを狂ったようにウィンチェスター銃で殺してゆく。

狩りというより殺戮。撃ち続けるので銃が熱くなり、その銃に水をかけてまた取り憑かれたように撃つ。狂気そのものだった。

それでも、このロバート・テイラーが、朝、ひげを剃る時、銃身を鏡に見立てて、そこに映った顔を見ながらナイフを使うところは、西部の男を感じさせた。

バッファローはこうした異常な殺戮で絶滅の危機に瀕してゆくのだが、「最後の銃撃」は、バッファローが保護されているノース・ダコタ州で撮影された。

それから約四十年後、やはりバッファローが保護されているサウス・ダコタ州で撮影されたのがケヴィン・コスナー監督・主演の「ダンス・ウィズ・ウルブズ」（90年）で、こちらはスー族による神聖な儀式としてのバッファロー狩りが、敬虔に描かれた。

「ワイルド・レンジ／最後の銃撃」

連載

日本魅録（にほんみろく）37

香川照之

タカハタ秀太、ふたたび

国際映画祭の朗報は、いつも真夜中にそっともたらされる。

その時も日曜深夜一時、さて今回は何を書こうかとこの誌面のことを思案していた矢先——モスクワ映画祭の新人監督部門のコンペで「ホテル　ビーナス」が最優秀作品賞を受賞したという一報が飛び込んで来たのだった。

気がつけば——パソコンのキーを叩き出していた。この「ホテル　ビーナス」を不屈の意志と万感の想いで世に送り出したタカハタ秀太監督の苦労が報われたことに一気に興奮し、もう圧倒的に祝福したくなったからだ。

タカハタ監督、本当におめでとう！　あの時の濃密な撮影がこうして映画史に刻まれたことを、我々出演者は誇りに思います。

けれども、である。

モスクワからのビッグニュースの感激を少し醒まして冷静に振り返ってみれば、一つの映画が賞を獲得するほどに評価されるには、やはり、現場でしかるべき「生け贄の献上」がなければあり得ないことを今回も思い知らされたと言うほかない。生け贄の献上とは硬い言い方だが、つまりそれは、俳優が流す「血」のことだ。

映画を良質なものにするためには——現場がただ楽しかったり共演者同士の仲がすこぶる良かったりする「仲良し現場」では決して表出しない真実の苦しみ、皆が現場に行きたくて仕方がないような「楽しい撮影」では絶対に流れ出ない真実の血を、俳優たちが進んで受けに行かねばならない。監督の目指す理想のために、理不尽だろうが意味不明だろうが同じ芝居を何度繰り返させられようが、そしてたとえそのことで心の血が噴出しようが、涼しい顔で黙々と肉体と心根を映画に捧げ切ることが我々俳優には必要なのだ。この聖なる奉納こそが、観客の賞賛を引き寄せるのだ。楽をしていて栄冠はありえない。

そう考えると、映画の現場とは「我慢」以外の何物でもないかもしれない。逆に言えば、我慢を強いられないような現場は映画ではない。いつ終わるとも知れぬ時間の堆積を忍耐する、その我慢に「真の映画空間」は立ち現れて来る。

ではいったい、我々は何を我慢すればいいのか——。

映画というのは元来「無駄」な産業である。映画などなくても地球は立派に回っていく。だからこそ、この無駄な産物を一本仕上げるには、無駄の神様が微笑んでくれるほどの大いなる無駄を重ねる必要があると私は思っている。つ

「ホテル　ビーナス」の面々と。右上がタカハタ監督

まり俳優には、現場に転がるあらゆる「無駄」を我慢しなければならない義務があるのだ。

　ところがここがミソなのだが、人間、無駄だと分かっていることに全力を傾けるのは結構難しいものなのである。「ホテル　ビーナス」もずっとそうだったけれど、「こんなに撮ってどこに使うんだ」と分かっていながら延々と回り続けるキャメラの前で、百パーセントの状態を保ち続けるのは本当に苦しい。人は誰しも、回りくどい無駄は短縮してしまおうとする癖を無意識に持っている。

　太古の昔、人類は己の環境を少しでも便利にするために「文明」を編み出した。我々は雨風を凌ぐために家を造り、暑さ寒さを和らげるために冷暖房というものをこしらえ、そして車や飛行機、電話やテレビを発明してアッという間に便利で安楽な世の中を形成した。人類の歴史とは、いかに怠けられるかを競うショートカットの歴史だ。かつてこれだけかかっていたものを、いかに短縮し疲れず効率よく出来るか——それを我々人間はいつも思案して来た。

　そしてこの効率性の日進月歩こそ、実は私たち日本人の得意としてきた分野なのである。第二次世界大戦で我が日本が広大な満州を目指したのも全てはそこに原因があったように、国土が狭く資源の乏しい日本がここまで経済大国になれたのは、少ない資源をいかに有効に効率よく使って利潤を上げるか苦心した経緯があったからだ。無駄を省かせたら日本の右に出る国はない。ましてや時代は、移動やサイクルやコストの短縮にいよいよ拍車がかかる二十一世紀である。いかに効率よく無駄を省くかという人類の営みは、ついに最終形に突入した感すらある。

　だから「問題」は日増しに大きくなっている——映画を撮るという行為は何かの「短縮」ではなく、単なる「無駄」を悠長に堪え忍ぶ、時代の流れに真っ向から逆らう性質のものだからである。

　システムの違いもある。

　撮影に臨むに当たって、マリブ・ビーチだかに籠もって一年みっちりトレーニングし、その間も家族の中で良き親をじっと担い続けるハリウッド俳優ならいざ知らず、分刻みのスケジュールの中で本番に次ぐ本番のスタジオ収録を要求され、その場その場の瞬発力だけが肥大化させられる日本の俳優にとって、キャメラ前でじっと何かを粘り強く耐えたり、無駄だと思われる繰り返しに音を上げずに「血」を流し続けることは、実に苦痛な作業に違いない。

「今日はあと切り返しのカット撮れば終わりだな」「え、もう一回やるの？」「ひざ下、映ってなければ靴下履いていいですか」

　悲しいかな世界一ショートカットが上手なこの国では、「勘の良い」俳優たちは常に「短縮」のことを考えている。状況を、血を流さないように流さないように、自ら遠ざけてしまっている。

　加えて、資源が少ない国ならではの貧乏性で「フィルムをいかに効率よく使うか」と現場は躍起になって、あらかじめ小ぎれいにカットを割って「時間」を分割し、俳優を苦痛から易々と解放しようとしている。しかし本来映画とは、時間が止まったような手作業の末にやっと珠玉のカットが一つ生まれてくるものではなかったか。

　——「ホテル　ビーナス」のことに話を戻そう。

　タカハタ秀太は（私が好む監督は皆そうだが）、シーンをカットで割って時間を切り取る演出はしなかった。彼がキャメラマンに切り取らせたのは、時間ではなく「空間」だった。「時間」は切り取らずに丸ごと俳優に預けてくれた。もっと言えば、彼が俳優に与えたヒントはこの「時間」の流れだけだった。カット割りや、「何が駄目なのか」といったNGの詳しい理由は俳優には教えない。「勘の良い」「短縮好きの」俳優には、現場の全貌を安易につかませてはいけないことを無意識に判っているのだ。何度も何度も繰り返す本番の洪水を俳優に飲ませて何が起こっているのか判らなくさせ、カットごとの「つながり」やあらゆる時間軸から俳優を自由にした上で、ただ曖昧模糊とした「空間」の中でバタつかせる——「血」が、大量に流れ出さない訳がない。

　と、ここまで言い放っときながら、「『ホテル　ビーナス』続編やりまーす」とか言ってまた韓国語を勉強せねばならない状況が生まれたら、「え、撮影なんて楽しくやればいいじゃん、血なんか流さなくていいじゃん」とマジにビビってる私なのであった。オヨヨ。

［お詫びと訂正］　7月下旬号の当欄、115ページ2段目20行目の「一九八七年の〜」は、正しくは「一九八六年の〜」となります。関係者、並びに読者の皆様に深くお詫び申し上げます。

リレー・エッセイ

映画と私

209

古家正亨

ラジオDJ、日韓音楽文化交流コーディネーター

韓国映画の躍進が続いている。「シルミド／SILMIDO」や「ブラザーフッド」、「スキャンダル」など、日本での公開作が相次いで大ヒット。先日は、カンヌ国際映画祭で、パク・チャヌク監督の「オールド・ボーイ」がグランプリを受賞し、周囲の人間から事ある毎に「おめでとう。よかったね」と言われるようになった。断っておくが、私は韓国人でもなければ、韓国映画の関係者でもない。ラジオを通して韓国の音楽の魅力を伝えている、ディスク・ジョッキーである。接点と云えば「韓国」という共通のキーワードの元で仕事をしていることと、少し、ペ・ヨンジュンに似ているということくらいか。

それだけ今、日本で「韓国」が旬な話題であるということだろう。きっかけは勿論、ドラマ『冬のソナタ』の国内での放映だが、一本のドラマが日本人の韓国感をここまで大きく変えるとは、私には全く想像できなかった。しかし、今、韓国ドラマにハマっている人が、いちばんそう感じているに違いない。「まさか、韓国ドラマにハマるとは思わなかった……」

何かに夢中になるきっかけは、どこにでも転がっている。しかし、それに気づくかどうかはまさに運命と言っていい。実は、私が映画に夢中になるきっかけを作ってくれたのは、小学6年生の時に書店で偶然手にしたキネマ旬報との出会いだった（以来18年間、私はキネマ旬報を買い続けている。本当である）。1987年2月下旬決算特別号、そこには1年間に公開された映画の全てが詰まっていた。それまで何となく映画を見ていた小学生が、映画マニアへの道を歩みだしたのは、この瞬間からである事は、説明するまでもないだろう。そんな決算号との出会いが、僕の映画人生にとって最高の作品とめぐり逢わせてくれた。熊井啓監督作品の「海と毒薬」である。

第二次世界大戦中、九州の医大で捕虜を使って人体実験を行ったという、実話をベースにした遠藤周作の同題の小説を、社会派の熊井監督が映画化したもので、1986年度のキネマ旬報日本映画ベストテンの第1位に輝いている。当時、外国映画にしか関心が無かった私だが、邦画を観るに当たって、まずは、ベストテンで1位の作品が妥当だろうという、安易な気持ちでこの作品を選んだというのが本音で、もとから関心があったわけではなかった。しかし、最初に見た作品が「海と毒薬」で本当によかった。そして、この作品を観たときのショックは決して忘れられない。

当時、小学校の社会科の授業では、現代史を学ぶ時間がほとんど無かった。教科書で割かれたページ数もごくわずか。それも「時間が無いから」といって授業ではほとんど取りあげず、「自宅で読んでおけ」という担当教員のいい加減な指導だけで片付けられたため、この時代、日本が一体何をしてきたのか、知る由もなかった。そのような状況で、捕虜となった米兵の生体解剖を行っていたという現実を、衝撃的な映像を通して知ってしまったがために、数日間、そのショックから立ち直れなかった。

全編モノクロの映像は、当時を全く知らない私でも、まるでその時代に生きていたかのような錯覚を引き起こし、同時にかなりグロテスクな解剖シーンのリアリズムを和らげる効果を生み出していた。そして、主人公である医大生を演じた2人の演技は、当時小学生だった私でも心打たれる完璧なものだった。奥田瑛二は、良心の呵責に悩みながら、実験の参加を拒否できずに、流されていく医大生の役をクールに演じ、渡辺謙は「自分は人間として、何かが欠如しているのではないか」と悩む医大生の役を熱情的

に演じていた（この時の渡辺謙の演技は、「ラスト サムライ」よりもずっと良いと思うのは僕だけだろうか）。そして、手術中、苦しそうな米兵を見て看護婦が「モルヒネを吸入させましょうか」と医者に尋ねたとき、「いらん。これは患者じゃない！」と言ったシーンは、この映画で最も重要なシーンであると同時に日本映画を代表する名シーンの1つだと思う。大げさではなく、人間としての存在価値や、窮地に追い込まれたときに人間はどうなってしまうのかと言うことを、如実に現すことに成功した、日本映画界を代表する名作であり、僕自身にとってこれまでのベスト作品である。

最近こうした社会的力作が、なかなか邦画で観ることができなくて寂しい気がするが、一方韓国映画界はこうした社会的な問題をエンターテインメントに昇華させる力を持っている。南北分断という特殊な状況が与える影響も少なくないが、こうした作品が普通に作られ、大ヒットするようになったのは、韓国社会が成熟してきたからではないだろうか。そう考えると、自分の事のように、なぜか嬉しくなってくる。

最近、周囲の人間から事ある毎に「おめでとう。よかったね」と言われるようになった。今度同じことを言われたら「うん、ありがとう」と言ってみようと思う。

ふるや・まさゆき／1974年5月22日、北海道北見市出身。大学卒業後、カナダ、韓国に留学。INTER-FM「K-GENERATION」、「FM NORTHWAVE」「Beats-Of-Korea」など、韓国の大衆音楽プログラムのＤＪ、構成を手がける。また、韓国のMTV KOREAでは、日本の大衆音楽を紹介するＴＶ番組「MTV J-BEAT」で、ＶＪ、構成も担当。日韓を往来しながら両国の音楽文化交流に力を注いでいる。

何かに夢中になるきっかけは、どこにでも転がっている

「海と毒薬」

成田陽子の

忘れられないスター

第17回

ピーター・フォーク

PETER FALK

気さくでスターぶらない コロンボそのままの庶民派

1927年９月16日、アメリカ、ニューヨーク出身。３歳の時、腫瘍のため右目の視力を失い義眼を入れている。28歳で演技を学び、56年オフブロードウェイで初舞台。58年「エヴァグレイズを渡る風」で映画デビューを飾り、58年「殺人会社」と61年「ポケット一杯の幸福」でアカデミー賞助演男優賞の候補に。71年から始まるテレビドラマ『刑事コロンボ』の一見とぼけた風采だが、実は有能な刑事である独特のキャラクターはあまりにも有名。

朝起きて今日の事件は？なんて考えることも

『刑事コロンボ』のヨレヨレのレインコートにボサボサの髪、しょぼくれた葉巻を口に、「それでは失礼します……」と退去の姿勢を見せ、犯人がホッとするとドアのノブをつかんだまま「あー、それから……ちょっと思い出したんですが、車のドアは右側がこわれていたんですよね。そして、どうして、右側から入れたのですかねー」と得意の寝ワザ兼ワナの消極的応戦をするパターンが大嫌いだった。犯人は常にリッチで権力を持つ美男美女のジョージ・ハミルトンやザ・ガボール系がいとも疑しい行動をするもののゴージャスな暮らしぶりがカッコ良く、野暮天で煮えきらず、ぐずでのろまに振舞うコロンボにいらついてしまうのである。スノッブな金持ちを最後にはぎゃふんと言わすボロ刑事に庶民は溜飲を下げたというので大人気だったと言

「こわれゆく女」

「七人の愚連隊」

うが、へそ曲がりにして、長者ライフスタイルに憧れる私メのようなアンチ・コロンボも、アンチ巨人の心理と似て大勢いたのではなかろうか。なかなか部屋を出ないという毎度の場面に、気が短かく、テンポがかき廻されると腹が立つタイプは、つまらぬ長電話中にトイレに行きたくなるような、むやみにからかわれる不快感を持ってしまうのだ。

そのコロンボのイメージが先行してしまい、ちーと気が向かないフォークの会見は過去に約4回あったが、どれも仰天する程にコロンボなのである。と言うより、スターぶらない地に足がついた、気配りの庶民派で関西の漫才師のような〝おどけ〟に満ちていて、今回のツーショットにあるように（次頁参照）、まるで酔っ払いのトラックのおっつぁんもどきに「おーい仲良くすんべーや」といったニュアンスでスキンシップごしごし、カメラ気にすんな、日本人大好き、日本人コロンボ大好き、いいねえ、この調子、と言うわけで、娯楽派に徹しているとでも言おうか。

最初に会ったのは93年、リバイバルした『刑事コロンボ』シリーズにフェイ・ダナウェイがゲスト出演した時で、主演、製作、時には脚本も手がけ、特にこの回は約7年温めてきた脚本にダナウェイがのったため、上機嫌で現われ、初対面にして、このでれでれぶりを見せてくれたのだ（以来、3回余りの会見でのエスカレート場面は自制編集でカット）。

――コロンボ刑事とピーター・フォークとごちゃまぜになったりしませんか。

「キミ、コロンボのファーストネームを知っているかい？　ルーテナント（日本語で刑事と訳している）って言うんだよ。彼のランクはルーテナントじゃなく、ただのディテクティヴ（刑事）なんだからね。大勢のファンが同じ質問をしてくるが、僕はコロンボと同じぐらいだらしのないところがあるね。しかし彼ほど頭が良くないから、難問にぶつかるとどうして解決できないんだ！　とコロンボでない自分を痛めつけたりする。30年近くも同じ役を続けていると自慢ではないが朝起きて自分がコロンボだと思って今日の事件は、なんて考えてしまったり。いや本当だよ」

――同じような役ばかりのオファーが来るのでは？

「昔、親父が言っていた。しっかり稼いで金が入る限り文句は言うなってね。同じ役ばかり来ると言っても、ガンになったわけではないんだからうれしく受けますよ。コロンボのおかげで選択する余裕も出たし、レストランに行けば良いテーブルに案内してくれるし、おまわりは敬礼してくれる、プロバスケの切符がタダで手に入る、と良いことずくめで文句など言えません」

――少しは後悔することもありませんか。

「僕と同様にTVシリーズに出ていた俳優も同じことを言っていたが、金と知名度は得たものの、俳優としての才能を伸ばすチャンスをかなり失っただろうと思うね。異なった役を演じていれば、努力や苦悩も大きいが俳優としての幅や深さもかなりストレッチできたと思うから。ま、しかし、コロンボを手がけていたおかげで金ももちろんだが、脚本を認められたり製作にも参加できるようになり、それはそれで僕の強大なエゴがかなり満足させられているね」

――こんなに人気が出た理由は何でしょうか。

「68年2月に最初の回が放映され、今年（取材した93年）で25年目ですよ。間にブランクがあるとはいえ、エスキモーからアズテックのインディオたち、ビヴァリーヒルズのマダムの間にどんな共通点があるかと言うと、〝コロンボの大ファン〟なのですよね。短身で服の着方も英語もマスターせずに、目が不ぞろいなコロンボの活躍が、サラブレッドを捕えるちっぽけなモングレルに等しく、それに快哉を叫ぶことがクセになったのでは、と思っているよ」

――少し変化を持たせたら、などと思いませんか。
「僕の理論は、人は変わらないということなんだ。20年前にイヤだったことは今でも同じ位イヤだし、同じ食べものが好きだし。役を手がけていて幸福だったら変更する必要はないと思うね。役に満足してなくて不幸だったら変更を試みるが。幸いにして、僕の役はナポレオンではなかったからね。数十年もナポレオンを続けて演じていたら精神病院行き確実だろうが、僕はコロンボと共に生きていけるから、このままで充分なのさ」
フォークのニューヨーク訛りの話し方、首をかしげる仕草、背が低いわりに大きな手を大きく動かすゼスチュア、タバコ（葉巻は吸わない）、相手の反応を確める覗くような目つき、すべてがコロンボなのである。コロンビア人かギリシャ人のようにダークな肌にベージュのゴルフウェアというスタイルはコロンボよりずっとスタイリッシュで、ラスヴェガスのゴルフプロのようだが、あまりに気取らなくてかえってコロンボ意識が格調のある俳優の姿勢を邪魔しているのでは、と心配してしまう程であった。

「ブリンクス」(上)「ベルリン・天使の詩」(下)

「仲良くすんぺーや」

「ちょっと、カメラ、カメラ」

無事、撮影

若い頃はスパイになりたかった

――若い頃の思い出を。
「三歳の時、知っている人は知っているだろうが悪性の腫瘍で右眼を失ってね、だから俳優になるなんて思ってもみなかった。シンシン刑務所の近くで育ち、父は服や雑品を売る店を持ち、母は父の店で会計などして僕はひとりっ子で甘やかされてね。僕にはポーランドの血が25パーセント、あとはチェコ、ロシア、ハンガリーが混じっていてね、祖父はシナゴーグの祭式係だったからユダヤ系なりの教育重視の環境のために常に学校では級長をして、将来はスパイになりたいと思っていたものの、第二次世界大戦が始まり、商船乗りとなって船に乗り込み料理を手伝う仕事をした。行きには兵隊が少なく何もしないで航海を楽しんだが、帰りにGIが三千人も乗り込んできて毎日毎日、ポークチョップばかり三千個を料理してね。そのためにポークチョップはとても食べられないんだ。
大学で政治学を、シラキューズ大では社会実務の学位を取り、いざCIAのスパイに応募したがダメでコネチカット州の官吏になってね、ある日、劇場に入ってナマの舞台を見て俳優たちが大声で話す会話の文明度の高さに圧倒された。これはホントの話なのだよ。それまで、僕は舞台の仕組みなど全く知らなかったから、ああいう知的な会話をしたいと俳優に憧れたのだ。あとになって役者たちは舞台がハネると僕らと同じようにバカな会話をすると知ったのだが、毎週水曜日、仕事を早目にきり上げてウェストポートにあるエ

成田陽子の

ヴァ・ルガリエンという演技コーチの教室に通い出してね。毎度遅刻して来る僕にエヴァが怒って、もっと真面目に出席しなさいと言うから、実は仕事先から直接来るので……、と説明し、ここのクラスはプロの俳優専用だったから官吏の僕はもうダメだとあきらめて白状したのだが、反対に彼女がびっくりして『あなた、そんなマトモな職業についていたの。本物のプロかと思っていたのに。良いわ、役所を辞めてもあなたならプロの俳優になれると思う』と言ってくれてね。すぐに仕事を辞め、ニューヨークに行き、それからは役にあぶれることなく、ずーっと仕事を得るラッキーなスタートだったのだ」

58年、ニコラス・レイの「エヴァグレイズを渡る風」(日本では劇場未公開)で映画デビューした彼にコロンビア映画は長期の契約をオファーしようとしたものの義眼を理由に手を引いたというエピソードがあるが、当時のフォークは相も変わらず映画スターになろう、などという意識はまるで無かったようで、それどころか、95年「最高のルームメイト」(日本ではビデオのみ)の時の三度目の会見では、

「実はね、僕、5回も逮捕されたことがあって、それも5回ともちがう国なんだ。パリで一回、ベルグラードにハバナにモスクワ、それからトリエステとどれも僕は本物の罪を犯してないのに間違って捕った。48年頃のユーゴスラビアに行って、ある女の子と恋に落ちてね、コッカースパニエルを連れてジープに乗っているブロンド娘で、僕はアメリカの200ドルに値するイタリアの金を持っていたから二人でトリエステのレストランで大いに飲み食いし、これで充分だろう、と紙幣を出すとオーナーが出てきてその金は使えないと逮捕されたり。『エヴァグレイズを渡る風』の映画の役で真黒なヒゲを生やしていたんだけど、ちょうど山に隠れていたカストロが出てきてハバナを占拠して、僕はクリスマス休暇でハバナに行き、たった4ブロック歩いただけでカストロと思われ警察官たちにぶち込まれる始末。ベルグラードでは共産主義のもと貧困にあえいでいる人々が店に届いた品物を奪うように取っていく様子を写真に撮ったらオマワリにカメラごと取られて逮捕されたが、どこでも四番目に職業はと質問してきて映画俳優と答えると、バート・ランカスターのことを教えてくれと決まって頼んできてね。バート・ランカスターの映画のことや彼のエピソードなどを話すと全員しーんとなって熱心に聞いてくれて、あとは解放してくれるんだ。バート・ランカスター様々の古き良き時代だったよね」

フォークは同じフレーズを、例えば、ブロンドの女の子に恋して、――かわいいブロンドの女の子とブロンドの犬に恋したって言ったっけ――と時には5回ぐらい繰り返してうれしそうに興奮して話すのである。ちょうど横町のオヤジが、「一杯飲み屋のおかみはオレには特別突き出しを余分にくれるのだゾ」と自慢するように、天真爛漫な、邪心のない繰り返しなのだが、何たってオスカー候補2回(「殺人会社」「ポケット一杯の幸福」)、トニー賞、エミー賞(『刑事コロンボ』他)は多々の受賞、アーティストとしても「ほら、あのカンヅメの絵で有名になった有名な画家、あのテの絵なんだよ」と謙そんするが彼の絵画はつとに評判、と世界レベルの名優なのである。

95年、92歳の母親が詐欺に遭い百万ドル相当の被害を訴えた際、息子は検事に「コロンボ刑事はニューヨークの捜査権を持ち合わせてないもので」と弁明したと言う。

昨年『コロンボはナイトライフがお好き』という71回目のエピソードにカムバックし、「2年前にタバコをやめたからコロンボも葉巻をやめるべし」と忠告している。愛すべきコロンボ・フォークは今も健在であります。

Peter Falk Filmography

1958 エヴァグレイズを渡る風(T)
1960 悪の実力者
殺人会社
紫暗礁の秘密(T)
漂流・カリブ海の怪船(T)
1961 ポケット一杯の幸福
1962 おかしな、おかしな、おかしな世界
1964 七人の愚連隊
1965 グレート・レース
1966 泥棒がいっぱい
美人泥棒
1968 アンツィオ大作戦
1969 明日よさらば
大反撃
1970 ハズバンズ
1972 シシリー要塞異常なし
1974 こわれゆく女
裏切りのメロディー
名探偵登場
1976 マイキー&ニッキー／裏切りのメロディー(V)
1977 オープニング・ナイト
1978 名探偵再登場
ブリンクス
1979 あきれたあきれた大作戦
1981 カリフォルニア・ドールス
マペットの大冒険／宝石泥棒をつかまえろ!(V)
1986 ビッグ・トラブル(V)
1987 ベルリン・天使の詩
プリンセス・ブライド・ストーリー
恋する大泥棒(V)
1988 バイブス秘宝の謎
1989 私のパパはマフィアの首領(ドン)
1990 ラジオタウンで恋をして
イン・ザ・スピリッツ(V)
1992 ザ・プレイヤー
1993 時の翼にのって／ファラウェイ・ソー・クロース!
1995 最高のルームメイト(V)
2000 消滅水域(V)
2001 コーキー・ロマーノ　FBI潜入捜査官?(V)
2002 デッドロック

※日本公開作品(劇場、ビデオ、テレビ)のみ対象
※テレビ作品は除く

連載6

あの娘ぼくがこんなシネマ撮ったらどんな顔するだろう

河原雅彦
イラスト&題字　中村まこと

この物語は、明日の映画界の発展のため空前の話題作を生み出そうと七転八倒する、とある映画制作会社を舞台とした『机上の空論キャスティング小説』である。

シネマ2　炎のキャスティング「実写版　北斗の拳」編

☆ケンシロウ…西岡徳馬?
☆ラオウ…西岡徳馬??
☆トキ…西岡徳馬???
☆南斗水鳥拳・レイ…沢田研二(往年の)
☆雲のジュウザ…オダギリジョー、葉月里緒奈
☆山のフドウ…曙太郎
☆「あべし!」って死ぬ人…大森南朋〈友情出演〉
☆「ひでぶ!」って死ぬ人…磨　赤兒〈友情出演〉
☆死兆星…横山ノック
☆暴れん坊将軍…松平　健

このところ泣く子も黙る失敗作をへっちゃら顔で連発しているアトミック・シモンズ(株)次回作は、社の最高責任者である満田のやけくそパワーも手伝って、「実写版　北斗の拳」に決定した。

で、そのキャスティング案が前記である。

イラン人との口約束並みにアバウトな会議についていけず、しばし卒倒していたあずさにとってそれはまさに寝耳にサリンな衝撃であった。

「どう思う？　和田勉」

先輩・旗畑の、意見を求めてるのかケンカ売ってんのか分からない問いかけに、あずさは心の中で考える。

「主役の三兄弟、全部西岡徳馬でどうすんの!?　うっわ、暑苦しっ！　つうか、どんどん疑問が増してんなら考え直そうよ。沢田研二(往年の)って何だ？　あまりに失礼だろ！　だって、アレでしょ？『麗人』の頃のジュリーでしょ？　気持ちは分かるけど心の中にしまっとこうよ。雲のジュウザはオダギリ君でよくない？　浮き雲のように乱世を生きるこの二枚目キャラ、彼ピッタリだと思うけど。"気まま"ってだけで葉月里緒奈って子供の発想じゃん！　しかも女だし。フドウは……ま、いっか。てか、死兆星って星でしょ？　いくらゲーハーでも横山ノックにやらすなよ！　まあ、とても不吉な感じは増すけれども……」

まだまだツッコミきれてないあずさに満田が七色の声で語りかける。

「君が考えてることは手に取るように分かるよ」

余裕に満ち満ちたその声は、嬉し恥ずかしサーモンピンク。

「大森南朋と磨赤兒の親子競演は話題性十分だと

言いたいんだろう?」
「マストっスよ！　今の邦画、南朋、マストっスよ！」
何度この光景を目にしただろう…。旗畑が壊れたさとう玉緒みたいに潤んだ瞳で満田にかぶせた。
「……絶対え、出ねえよ」
そう言いたいのをグッと堪えて、あずさが重い口を開く。
「……でも、『友情出演』て誰と仲良しなんですか?　やっぱ、オダギリ君?」
「なわきゃ、ないだろう」
満田がだいだい色の声でズバリ続ける。
「ミミ君だ」
「はあああああ!!??」
すかさず赤点アルバイターが純情社員に更なる追い打ち。
「しかも、赤兒の方ズ」
「あ、赤兒っ!?」
……そういえば、そうだ。
先日、社内掲示板に大駱駝艦の公演チラシがマグネットで留められていたのをあずさは確かに目撃している。しかも下の名で呼び捨て御免ときたもんだ。
「我が身は天地一体だもんさ」
幻想的な動きをしながらミミがしみじみそう述べた。聞けば、稽古中に赤兒が振り付けで行き詰まった時は決まってミミが助け舟を出すという。この女、全くもって底が知れない。
「友情出演の件は分かりました。でも、もう一つだけいいですか……?」
持ち前の正義感で会議を正常化しようと、あずさが今まさにパンドラの箱を開けようとしている……。出来れば触れずに済ませたいところだが、日本映画を愛する一人の人間としてそれは決して許されないことであった。
「暴れん坊将軍て、なんスか?」
NGワード連発上司が意気揚々と冷や水を浴びせる。
「よくぞ聞いてくれた、どん百姓」
あずさは能面のような顔でそれをさらりと聞き流す。
「この方はなあ、将軍職にありながら町人に身をやつして悪を成敗する……」
血も凍るほど的外れな説明を電光石火で遮るあずさ。
「『北斗の拳』関係ないですよねえ?　暴れん坊将軍」
そんな素朴過ぎる疑問に真っ青の声で答えてみせたのは満田だ。
「脚色だよ。考えてみたまえ！　世紀末の荒野を白馬にまたがった松平健がちょんまげつけて駆け巡るんだぞ?　ドキドキするじゃないかっ！　映画人たる者、遊び心を忘れちゃいかん」
「そうなると、やはり主役の三兄弟ですね」
あずさの中で将軍問題が依然未消化のまま、旗畑の声で会議は本題に突入。
しかし、ここは冷静に頭を切り替えなければいけない。だってそうだろう。話の主軸である三兄弟がみんな西岡徳馬じゃ観る方も演じる徳馬も大変だ。
「ケンシロウ役に春一番を大抜擢……」
旗畑が急転直下のアイディアを口にしたまさにその時……。
「諸君、ちょっといいかなあ」
満田がいつになく重い声で仕切り始めた。真っ赤っかだった。
「ここは一つ目先を変えてみるのはどうだろう?　発想の転換というやつだ。一子相伝の名のもとに受け継がれる北斗神拳……。運命的な家系に生まれた三人にケンシロウ達を任せてみては」
「運命的な家系ですか……」
あずさがここで言葉を詰まらせると、会議室には内山君級の重苦しい空気が流れた。
と、その時だ。
「石原ファミリーでいいんでねぇ?」
退屈しのぎに声を上げたのはミミだった。
あずさは「……まずい」と心の中で呟いた。
「……目から鱗だよ」
満田がいつものように全く推敲もせずミミの意見に乗っかりだした。真っ黄っきだった。
「そうですよ！　慎太郎・伸晃・良純だったら血統的に申し分ないですもんね！」
旗畑も無駄にテンションを上げ始めた。
「ちょ、ちょっと待って下さい！　うち二人は政治家ですよ！　拳法、できませんて！　しかも片方、大臣！　もう片方、めちゃくちゃ都知事！」
慌てふためくあずさを尻目に満田が声を張り上げた。
「それ、いただきっ！」
……奇跡的に全てのオファーがまとまり、次号「嵐のクランクイン編」に続く

アトミック・シモンズ㈱の人々

あずさ
映画を愛する新入社員の熱血純情青年。「実写版Dr.スランプ」で映画製作に初参加した。

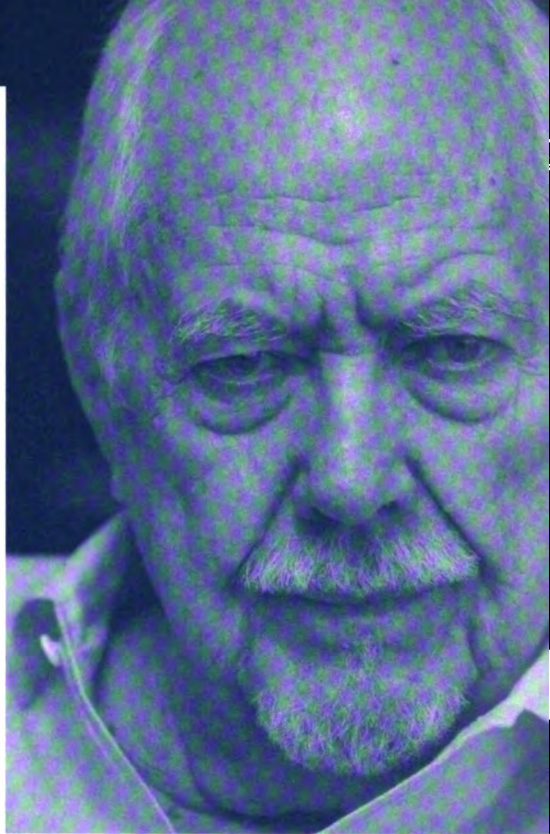
満田
企画開発チームのリーダーながら世情に疎いプロデューサー。野性の勘だけで生きている。

旗畑
毒にも薬にもならない発言ばかりの宣伝チームのリーダー。若手に暴言をはく悪癖あり。

ミミ
無能なお茶汲みバイトで東北訛りの家出少女。満田の愛人でその意見がやたら重宝される。

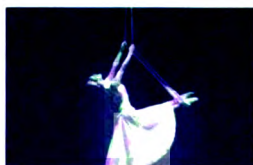
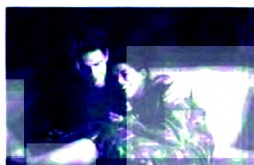
「バレエ・カンパニー」

ロバート・アルトマン監督インタビュー

取材・文＝佐藤友紀

「ネーヴ・キャンベルとジェームズ・フランコの共演場面には、いつも〝マイ・ファニー・ヴァレンタイン〟を流して、まるでダンスのパ・ド・ドゥのように2人を撮ったよ。男女が出会い、恋をして、幸福になる。そんな雰囲気をかもし出そうとしたんだ。2人の間でダンスが創り出されていくという感じでね」

かつて女優になる前はプロのバレエ・ダンサーを目指したというネーヴ・キャンベル自らの企画による「バレエ・カンパニー」。シカゴを拠点とする実在のジョフリー・バレエ団の全面協力を得て、ダンサー、そして経営する側のさまざまな生態を描いたドキュメンタリー・タッチのアルトマン作品だが、この中でネーヴは、ダンサーの恋人と別れた後、フランコ扮するコックと恋におちるバレリーナの役を演じている。アルトマン監督自身「バレエそのものを描く意図は全くなかった。その演目がいい演目なのかどうか、そのダンスが優れているかどうかには全然興味はないんだよ」とハッキリ言う――これで、映画で取り上げられている演目への疑問、特にラストの〝青い蛇〟への「?」が少し解消した！――一方で、いつの間にか「パ・ド・ドゥ」などという専門語がとび出すところが面白い。

「私には、ダンスは一つの題材にしかすぎなかった。この企画を引き受けた最大の理由はダンサーという種族に対する興味であり、監督してみて感銘を受けたのも、やはり彼らの生き方だった。彼らは、金や名声のためにではなく、ただ〝踊りたい〟という欲求にかられて踊る、通常はとても幼い時に踊り始め、厳しいレッスンに励む。その中で、一級のダンサーになるのはほんの一握りだが、それでも日々の鍛錬を彼らはいとわないんだよ。たぶんそうした訓練を通じて、達成感や喜びを味わえるんだろうね。一般的に言うところの〝成功〟以前に。だから、踊ることでどれだけ稼げるかなんてことは関係なくなるわけだ。こうした意識は、現代社会では稀有なものになってきてるがね、残念ながら」

インタビューを行なったアルトマンのオフィスは、N.Y.の10番街と11番街の間のけっしてきれいとは言えないビルの中にある。昼時だったせいか、中華やピザの出前の人間などが行き交う混雑ぶりはかえってアルトマン映画の世界に似合

「バレエ・カンパニー」／THE COMPANY
●2003年・米＝独・カラー・スコープサイズ・ドルビーデジタル、ＤＴＳ・１時間52分
●監督／ロバート・アルトマン　●出演／ネーヴ・キャンベル、マルコム・マクダウェル、ジェームズ・フランコ　●配給／エスピーオー　●7月24日よりBunkamuraル・シネマ、シャンテ・シネにて

ROBERT ALTMAN

●1925年、米ミズーリ州カンザス・シティ生まれ。「THE DELINQUENTS」(57)で監督デビュー。70年には「M★A★S★H」でカンヌ国際映画祭パルムドールを受賞、名実ともに一流監督の仲間入りを果たす。主な監督作は「ストリーマーズ／若き兵士たちの物語」(83)、「ザ・プレイヤー」(92)、「ショート・カッツ」(93)、「ゴスフォード・パーク」(01)など。

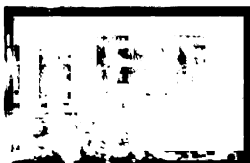
っていたが、そのダンサーの生き方、権威などとは一切無縁のアルトマン監督の映画人生に通じるものがあるのでは？

「そうだね。ダンサーだけでなく、人生において、あるいは何かを表現する際には、それを自分自身のためにすることが必要だ。誰かのためっていうんじゃなくてね。それこそが喜びなんだから。私が映画を撮る唯一の理由は、私の物の見方を示すため、と言える。例えばこの『バレエ・カンパニー』では、ジョフリー・バレエをモデルにしたバレエ団という一つの楽団の人々が、人生で何かを大切にし、何を得ているのかを表現した。まさにダンサーの日常を。私にとっては、映画作りは絵を描くのに似てるんだよ。ストーリーを語るというよりも、ペインティング！」

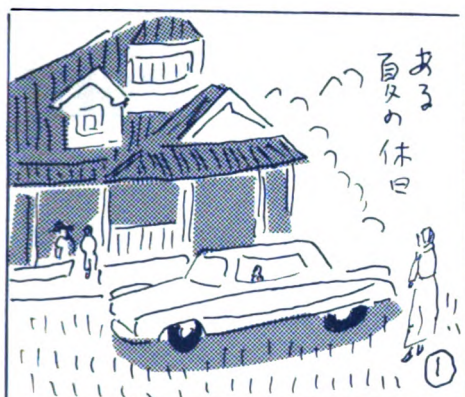
そう言えば、オフィス内には次回作「ペイント」のためのイメージの素がいろいろ飾られてあり、中には主演女優サルマ・ハエックが描いたフリーダ・カーロの絵も。

「それはサルマの2枚目のフリーダの絵だよ。貴重なんだ(笑)」

着々と進むこうした次回作の準備も含め、こちらが『ゴスフォード・パーク』でのヘレン・ミレンとクライヴ・オーウェンの関係。その前にミレンの舞台『地獄のオルフェ』を見ていたから、そこでの彼女と流れ者役スチュワート・タウンゼントとの恋愛関係にミスリードされました」と告げると、本気に嬉しそうにヒャッヒャッと笑って「ヘレンのその舞台は見てないけど、『地獄のオルフェ』はもちろん知ってるからね」というアルトマン監督の79歳とは思えない好奇心、生気、活力。やはり特別と言うしかない。

「好奇心があるから創作できる。いや、私の場合は〝好奇心と人生への愛〟かな。生きていくための人間の行いを見て、時の経過を眺める。そこには特別なプランはなく、何をどうかしたいとか、何かを宣言するつもりもない。誤解を恐れずに言えば、戦争、平和といった問題も、私にはどうでもいいことなんだよ。もちろん関心はあるけどね。たぶん、それは、画家がアトリエに入り、花の絵を描かないと決めるようなものだろうな。数週間、彼は花を描いたが、最終的には花を描くのをやめる。でも、壁にはまだ花があるし、花を描くのに彼が費やした時間は無駄ではない。花を描くための時間は創作的で、気持ちを集中していた。そういう風に、時を過ごすのは悪いことじゃないんだよ。私にとって〝経験〟は映画以上のものがある。映画が完成して、それを見て、一休みする。そしてそのサイクルが人生の一部となる。もしナッシュビルについての映画を撮らなければ、私はナッシュビルに行くことはなかっただろうからね(笑)」

安西水丸の
4コマ映画館

㊼二人の名優が演ずる傑作な爺さん

ウォルター少年と、夏の休日

前回飛行機内で見た映画のことを書いたが、今回もそのつづき。

ティム・マッキャンリーズ監督の「ウォルター少年と、夏の休日」はニューヨークから帰る機内で見た。この映画は東京の映画館（「イン・ザ・カット」を見た時）で予告編を見た時から気になっていた。

映画は繊細な十四歳の少年の夏休み物語で、あんがいこの手の作品は多いのだが、役者がなかなかいいので見たい見たいとおもっていた。

父親のいないウォルター（ハーレイ・ジョエル・オスメント、この少年はそのうちエドワード・ノートンのような役者になりそうだ）は十四歳で、奔放な性格の母親にテキサスの田舎に預けられる。そこにはガース（マイケル・ケイン）とハブ（ロバート・デュヴァル）という二人のお爺さんがいて、二人はこの突然の来客に大いに戸惑う。ガースとハブというこの二人の爺さんがとんでもない男たちで、ウォルター少年の方でも大いに戸惑う。

ぼくはマイケル・ケインもロバート・デュヴァルも大ファンで、この映画を見たいとおもったのはそんな理由も強かった。

お互いになじめないままずごすのだが、ある日ウォルターは女性の古い写真を発見、ガースとハブがかつてフランスの外人部隊に所属して北アフリカにいた時、ハブが一人の女性と恋に落ち、写真の女性が彼女だったことを知り、彼は二人の老人に親近感を深めていく。

映画は二人の老人が若かりし頃の、つまり外人部隊にいた時の回想シーンを映すのだが、ぼくにはこれがすこし長すぎて漫画っぽくなっていたようにおもえてならなかった。

テキサスの田舎町の風景はとてもよく、おもったとおりマイケル・ケインもロバート・デュヴァルもいい雰囲気を出していた（少しはしゃぎすぎてはいたが）。二人の住んでいる家もなかなかよかった。

夏休みというのは、青い夏空と入道雲とともに、大人になっても何故か心の奥に残っているものだ。

大高宏雄のファイトシネクラブ
Hiroo Otaka Fight CineClub

Round 106 もうひとつの「深呼吸の必要」

篠原哲雄監督、お元気ですか。ここ最近のご活躍、本当にうれしく思っております。篠原さんの最近作の「深呼吸の必要」を観ました。

「深呼吸」は観終って、気持のいい作品でしたね。観客の評判も非常に良かったと聞いています。しかし、ヒットしませんでした。何故、ヒットしなかったのでしょう。そのあたりを今回、私なりに少し考えてみようと思いました。

人が映画を観て、好感触を得たことと、人が観に行きたくなる、いわゆる大衆訴求力がそれに備わっていることとは、かなり意味が違うのだと思います。「深呼吸」は、大衆訴求力の点で、弱かったのではないでしょうか。それは、フラットなドラマの故だと思います。登場人物をめぐる幾多の要素をはぎとり、意図的にシンプルなドラマ展開にしたことが、少し裏目に出た気がするのです。

若者たちが寄宿することになる沖縄の家に、人のいいオジイ、オバアと言われる老人がいます。オジイは、サトウキビの刈り入れが遅れれば、先行き大変な苦労を背負うことになります。実を言えば、この作品で一番焦っているのが、オジイなのです。しかし、表面上はそれを出しません。このオジイのキャラクターを、もっと膨らませたら、どうだったでしょう。

生活者としてのオジイを描くのです。たとえばオジイは表面上は優しいが、内心動揺を隠しきれず、それがはっきりとした形で、若者たちにわかってしまう。若者たちは、オジイの生活のために精根こめて仕事に邁進するのです。生活者の悩みと若者たちの悩みがぶつかり合い、一つの目標に向って突き進んだとしたら、感動はもっと大きくなるのではないでしょうか。

「深呼吸の必要」

若者たちは、男二人、女三人という人数ですが、同じ場所に寝起きしながら、何もないというのは、やはり不自然な気がします。あえて、男女間のそういう面を切り捨てたのは、観ればすぐわかります。目標に立ち向かう過程を優先させ、愛やセックスの部分をなくしたのでしょう。しかし、果して、それでよかったのでしょうか。

確かに、とってつけただけの陳腐な恋物語ならいりません。しかし、沖縄のあの夏の舞台で、男女の間に何もないというのは、悲しすぎます。悩める日本の若者に〝必要〟なのは、深呼吸とともに、やはり愛の力なのです。その愛のドラマの膨らませ方いかんが、大衆訴求力と大きな関係をもつのだと私は考えます。

ドラマは、その過程において幾つかの劇的要素が必要です。一つの大きなドラマの終着点があったとして、そこに到達するまでに、幾つかの難所を迂回していく劇構成が大事だと思います。その劇的要素が、大衆訴求力につながります。複雑な人間関係を超えていく果てに、サトウキビの収穫があったとしたら、感動は幾倍にも広がるのではないでしょうか。

篠原さん、以上、釈迦に説法だとは思いましたが、映画の〝作り〟にこだわってみました。映画は、観客に好反応だったとしても、動員が良くなければ、その理由を探るべきだと思います。もちろん、私の指摘が動員につながる保証はありませんが、私なりに考えたのが、そうしたポイントだったのです。次回の作品に、少しでも参考になれば、幸いだと思っています。

全国映画興行収入ランキングTOP10

日刊興行通信社調べ

今週	先週	タイトル	配給会社	公開日	公開週	上映館
6月3週目（19日・20日）						
1	1	デイ・アフター・トゥモロー	FOX	6・5	3	日劇1
2	2	世界の中心で、愛をさけぶ	東宝	5・8	7	日劇3
2	4	海猿　ウミザル	東宝	6・12	2	日劇2
4	3	トロイ	ワーナー	5・22	5	丸の内ルーブル
5	5	シルミド／SILMIDO	東映	6・5	3	丸の内東映
6	6	下妻物語	東宝	5・29	4	シャンテ・シネ
7	―	メダリオン	ヘラルド	6・19	1	ニュー東宝シネマ
6	―	白いカラス	G／H	6・19	1	みゆき座
9	7	21グラム	G／H	6・5	3	丸の内ピカデリー2
10	8	スキャンダル	シネカノン＝松竹	5・22	5	シネカノン有楽町
6月4週目（26日・27日）						
1	―	ハリー・ポッターとアズカバンの囚人	ワーナー	6・29	1	丸の内ピカデリー1
2	1	デイ・アフター・トゥモロー	FOX	6・5	4	日劇1
3	2	世界の中心で、愛をさけぶ	東宝	5・8	8	日劇3
4	―	ブラザーフッド	UIP	6・26	1	日比谷スカラ座1
5	3	海猿　ウミザル	東宝	6・12	3	日劇2
6	4	トロイ	ワーナー	5・22	6	丸の内ルーブル
7	5	シルミド／SILMIDO	東映	6・5	4	丸の内東映
6	6	下妻物語	東宝	5・29	5	シャンテ・シネ
5	8	白いカラス	G／H	6・19	2	みゆき座
10	9	21グラム	G／H	6・5	4	丸の内ピカデリー2

のところ大健闘といえる。15億〜20億という数字が軽く飛び交うが、数年前なら、韓国映画で８億円なんていう数字は考えられなかった。「シュリ」「ＪＳＡ」に続いて、なんとか韓国映画３本目の10億超作品になってもらいたい。また、申し訳ないが不安を感じていたＵＩＰの宣伝も大変がんばったと思う。

この夏ナンバー・ワンが期待される「ハリー・ポッターとアズカバンの囚人」は予想どおりの大ヒットスタートをきった。全国820スクリーンで公開され、初日・２日目で動員146万9755人、興収18億7116万4300円をあげた。この数字は、初日・２日目では「マトリックス　リローデッド」(148万3234人、興収22億1706万4750円)、「ハリー・ポッターと秘密の部屋」(161万0138人、興収20億5487万8350円）に続く歴代３位となる。同シリーズは「〜賢者の石」が203億、「〜秘密の部屋」が173億(前作比85%)で、この「〜アズカバンの囚人」が前作比85%なら149億、70%なら121億となる。３作目に入って、観客層のうち成人の比率が下がり、単価も下がっていることが目立つという。前作比の70%、80%といっても凄い数字である。このあと「スパイダーマン２」「シュレック２」といった期待作が出るが、夏興行全体でどこまでいくかが注目される。

×　　　　×

最近は携帯電話でのチケット予約や、画面をかざすだけで入場できる劇場が増えてきた。そこで問題が発生しているという。つまり、携帯でチケット予約した人が劇場に来なかった場合、興行会社の口座にクレジットカードから引き落とされるが、配給会社にはその数字がつかめない。いわゆる前売券なら、未着券の数に応じた映画料が配給会社に支払われるが、携帯予約だと未着の数が把握できない。さらに、携帯画面をかざすだけの電子チケットになれば、半券が残らず、配給会社には入場者数も把握できない。劇場と配給は信頼関係の上になりたっているが、難しい問題である。

（掛尾良夫）

BOX OFFICE REPORT
日本ボックスオフィスレポート

それでもすごい！「ハリー・ポッター」

チーム全体の年俸がＮＹヤンキースの３分の１でありながらヤンキースと同様の年間100勝以上の結果を残すオークランド・アスレチックスのＧＭ(ゼネラル・マネージャー)、ビリー・ビーンのマネッジメントが『マネー・ボール』(講談社刊)で紹介されている。彼の徹底したデータ主義の成功から、他チームでは野球経験のない一流大学出身のアナリストがフロントに携わるようになったという。ハリウッドでは15年ほど前からピーター・グーバーをはじめとする、スタジオ経験のない一流大学のロウスクール出身者が経営に参加するケースが増えた。彼らの功績かどうかは別として、1989年にはじめて50億ドル台に乗せた興行収入は03年には91億ドルにまで急上昇した。一方、この間、ハリウッド映画は大味になり、つまらなくなったという声もきくようになった。映画と野球というアメリカの２大文化がアナリストにコントロールされるのは、なんとも夢のない時代になったものである。

× ×

昨年以上の成績で折り返せることはほぼ確実と

「ハリー・ポッターとアズカバンの囚人」

なった2004年上半期最後の６月は、19日に「白いカラス」(ギャガ＝ヒューマックス／みゆき座系)、26日には「ブラザーフッド」(ＵＩＰ／日比谷スカラ座１系)、「ハリー・ポッターとアズカバンの囚人」(ワーナー／丸の内ピカデリー１系ほか) といったところが出ている。

「白いカラス」はロバート・ベントン監督、ニコール・キッドマン、アンソニー・ホプキンス、エド・ハリスらが出演する、現在のハリウッドで良質な作品を作る上でのベスト・メンバーが顔をそろえた作品だ。かつて、みゆき座といえば、こういった文芸映画がかけられ、常連客の感動をしみじみと誘ったものである。わたしは、同じフィリップ・ロス原作の「さよならコロンバス」をこのみゆき座で69年に見ている。しかし時代は変わり、しみじみとした感動は単館の役割となり、みゆき座のイメージは曖昧なものとなってしまった。「白いカラス」は期待どおりの秀作で、初日・２日目、みゆき座では両日ともに1000人以上、キャパの小さい新宿武蔵野館では80%近い座席稼動という、まずまずのスタートとなった。それでもヒット感に欠けるのは、やはり拡大公開だからか。「21グラム」もそうだったが、ミニ・チェーンでかける手もあるのではと思う。

韓国歴代ナンバー・ワン・ヒットの「ブラザーフッド」は韓国映画ファンとして、不安と期待を抱いて初日を注目していた。全国305スクリーンで公開され初日・２日目で２億円弱の興収だという。予想どおりローカルの出足が鈍いが、１週目４億円、最終的に10億円超が微妙なところか。大ブレイクのペ・ヨンジュンの「スキャンダル」が８億前後、「シルミド／SILMIDO」が５億前後と予測されているが、「ブラザーフッド」は現在

全米新作興行成績ランキング　6月4日～6月10日

■封切り日は“Imelda”は6月9日、他は全て6月4日
興収の（　）内は6月4日～6月6日の週末3日分

順位	タイトル	配給会社	興収　万ドル
[illegible]	ハリー・ポッターとアズカバンの囚人（アルフォンソ・キュアロン）	ワーナー	1億2306.5（9368.7）
[illegible]	The Corporation（ジェニファー・アボット、マーク・エイクバー）	ザイトガイスト	5.0（　2.9）
[illegible]	The Story of The Weeping Camel（ビャンバスレン・デイヴァー、ルイジ・ファルコーニ）	シンクフィルム	3.4（　2.2）
[illegible]	Firedancer（ジョード・ワッセル）	シネマ・フォー	0.5（　0.2）
[illegible]	Imelda（ラモナ・S・ディアズ）	ニコ・エンタテインメント	0.4（──）

全米新作興行成績ランキング　6月11日～6月17日

■封切り日は「アラウンド・ザ・ワールド・イン・80デイズ」“Seducing Doctor Lewis”は6月16日、他は全て6月11日 興収の（　）内は6月11日～6月13日の週末3日分

順位	タイトル	配給会社	興収　万ドル
[illegible]	リディック（デイヴィッド・トゥーヒー）	ユニヴァーザル	3308.3（2428.9）
[illegible]	ガーフィールド（ピーター・ヒューイット）	20世紀フォックス	3101.7（2172.8）
[illegible]	ステップフォード・ワイフ（フランク・オズ）	パラマウント	3025.2（2140.7）
[illegible]	アラウンド・ザ・ワールド・イン・80デイズ（フランク・コラーチ）	ブエナ　ビスタ	278.6（──）
[illegible]	Napoleon Dynamite（ジェアド・ヘス）	フォックス・サーチライト	21.1（　11.7）
[illegible]	Broadway：The Golden Age（リック・マッケイ）	ダダ・フィルムズ	2.4（　1.7）
[illegible]	Imagining Argentina（クリストファー・ハンプトン）	アリーナス・エンタテインメント	0.6（　0.4）
[illegible]	Seducing Doctor Lewis（ジャン＝フランソワ・プリオ）	ウェルスプリング	0.3（──）

全米新作興行成績ランキング　6月18日～6月24日

■封切り日は“White Chicks”「華氏911」は6月23日、他は全て6月18日 興収の（　）内は6月18日～6月20日の週末3日分

順位	タイトル	配給会社	興収　万ドル
[illegible]	Dodgeball：A True Underdog Story（ローソン・マーシャル・サーバー）	20世紀フォックス	4867.1（3007.0）
[illegible]	ターミナル（スティーヴン・スピルバーグ）	ドリームワークス	2790.5（1905.3）
[illegible]	White Chicks（キーネン・アイヴォリー・ウェイアンズ）	ソニー	750.3（──）
[illegible]	Lakshya（ファーハン・アクター）	UTV・コミュニケーションズ	46.7（　38.0）
[illegible]	華氏911（マイケル・ムーア）	ライオンズ・ゲイト	15.8（──）
[illegible]	Facing Windows（フェルゼン・オズペテク）	ソニー・クラシックス	5.7（　3.6）
[illegible]	The Hunting of the President（ハリー・トマソン、ニコラス・ペリー）	リージェント・エンタテインメント	3.4（　2.3）
[illegible]	I'll Sleep When I'm Dead（マイク・ホッジス）	パラマウント・クラシックス	2.0（　1.3）
[illegible]	Howard Zinn:You Can't Be Neutral on A Moving Train（デブ・エリス、デニス・ミューラー）	ファースト・ラン	1.4（　0.5）
[illegible]	You'll Get Over It（ファブリス・キャゼヌーヴ）	ピクチャー・ディス・エンタテインメント	0.9（　0.5）
[illegible]	Father and Son（アレクサンドル・ソクーロフ）	ウェルスプリング	0.7（　0.5）
[illegible]	Saints and Sinners（アビゲイル・オナー、ヤン・ヴィジンバーグ）	アヴァタール・フィルムズ	0.4（　0.2）
[illegible]	Swing（マーティン・ギギ）	RMH・メディア／ドミニオン	不詳（　0.3）
[illegible]	Bound for Pleasure（デイヴィッド・ブライス）	ハーグローブ・エンタテインメント	不詳（不　詳）
[illegible]	Grand Theft Parsons（デイヴィッド・キャフリー）	スワイプ・フィルムズ	不詳（不　詳）
[illegible]	Anonymous（トッド・ヴェロウ）	バンゴール・フィルムズ	不詳（不　詳）

Source：Nielsen EDI and Variety

と言うよりも論議を呼んだ「華氏911」。23日からニューヨークの2館だけで封切られ、各回とも売り切れという大盛況のスタートとなった。その勢いは、25日からのドキュメンタリー作品としては従来にない規模での公開へと引き継がれたが、それについては次号で。ただ“The Hunting of the President”という作品も、この週に登場していたのは、偶然なのかどうか、特筆しておいていいだろう。こちらは、前クリントン大統領に対する右翼の陰謀と呼ばれるものを探った作品で、つまりは大統領追い落としというキーワードで括れそうな映画が揃ったわけである。

ところで本来ならば（？）首位デビューとなりそうな、スピルバーグ監督でトム・ハンクス主演の作品が、今回は別表のような控え目なスタートになっている。トップとなったのは、ベン・スティラーとヴィンス・ヴォーンが共演した、ドッジボールを扱ったコメディで、これはアメリカの市場ならではの現象と言えるのではなかろうか。

なお今週の全体興収は、2億1785万ドル余（1億3682万ドル弱）で、「ハルク」が封切られた昨年の2億1438万ドル余（1億8419万ドル余）を、先週と同様の展開で上回っている。また24日に、「ハリー・ポッター」が興収2億ドルを突破している。

BOX OFFICE REPORT U.S.A.

ボックスオフィスレポートU. S. A.————濱口幸一

強力なシリーズ作２本の牽引でサマーシーズンはますます好調

［６月４日～６月10日］

今週は、強力な作品のデビューに対して他社は全面降伏とでも言えるような陣容となった。実際、その強力な作品が3855館で封切られたのに対して、他の４本のニュー・フェイスは単館か２館のみという、興行的な勝負など最初から考えられていないのは明々白々な次第。

さて、それほどに業界から認められていた今週唯一の全国一斉公開作品「ハリー・ポッターとアズカバンの囚人」であるが、別表にある通り、まずは期待通りのダッシュを見せている。週末３日間の売り上げは、６月封切り作品としての歴代最高で、７日には、本年登場の映画としては７本目となる興収１億ドルに到達している。

このシリーズ第３作は批評家からの評価も上々で、滑り出しとしては、第２作の第１週と週末それぞれの実績、１億0613万ドル余と8836万ドル弱を上回っている。はたしてこの結果が、封切り時期を従来の感謝祭に向けての11月からサマー・シーズンに移行した成果なのか、それとも第２作から今作へのインターバルがあったため（第１作が01年の11月、第２作は02年の11月）なのかは、何とも言えないが、関係者にすれば前者の方を願っているところではないだろうか。

"The Hunting of the President"

一方、先週までの市場のリーダー「シュレック２」も、まだまだ人気は衰えておらず、５日に累計で３億ドルを突破するなど、今週さらに5342万ドル余の売り上げを積み上げている。市場全体の売り上げも、２億5763万ドル弱（１億8800万ドル余）に上っており、「ファインディング・ニモ」が登場した昨年同時期の実績（順に、２億4008万ドル弱、１億7518万ドル弱）を着実に上回っている。「シュレック」と「ハリー・ポッター」の両シリーズ様々といったところである。

［６月11日～６月17日］

４本の一斉公開作品を含む８本が新たに市場に加わったが、第１位ならびに２位の座は、つい直前に様々と呼ばせてもらった２本（「シュレック２」は、アニメーション映画としての新記録を樹立）が占める結果となった。

今週の一斉公開作品は、続編、コミックの映画化、リメイクと、それぞれに一定のネーム・バリューがある作品。さらに主演も「リディック」がヴィン・ディーゼル、「ガーフィールド」はビル・マーレイ（主人公の声）、「ステップフォード～」ではニコール・キッドマン、そして、「アラウンド・ザ・ワールド・イン・80デイズ」がジャッキー・チェンと、キャストの面でも著名な人材が含まれている。その割にはというのが、これら作品が挙げた数字に対する興行面からの評価だろう。批評家の反応も、いずれも芳しいものではなく、直前の３週間に比べると、やや弱い新作といった印象は否めない。それでも、市場全体の売り上げは２億2919万ドル弱（１億5914万ドル余）で、昨年同時期の２億2491万ドル余（１億6350万ドル弱）と比べても、週末の分は後の平日で凌ぐといった形で、好況に水をさすような具合にはなっていない。

［６月18日～６月24日］

春先の「パッション」に優るとも劣らぬ、話題

エキプ・ド・シネマの三十年

高野悦子 編著

講談社刊　2520円（税込）

review

非商業映画を成功させたのはひたむきな主張

佐藤忠男

岩波ホールは出版社の岩波書店が講演会その他の文化的な催しをするためにつくって一九六八年に開場したものだった。総支配人はそのときから高野悦子さんだ。当初はだから、演劇や学術講座を含むさまざまな催しをやっていた。

そのひとつに古い日本映画を関係者の講演つきで上映するいくつかのシリーズがあって、ときに古い作品で適当な関係者がいない場合など、私も何度か講演をしたことがある。なにしろ高野さんはフランスの映画大学校イデックの出身だから映画にはとくに知識と見識を傾けたのであろう。作品の集め方は興味深いものであった。

こうしたあり方が、一九七四年に発足した"エキプ・ド・シネマ"の運動に発展してこの小さなホールを今日に至る最も格式の高いアート系、社会派系の映画専門の上映の場とする。アート系ミニシアターとして先行していたアートシアター・ギルドが興行的に自信がなくて上映しなかったサタジット・レイの「大樹のうた」を大成功させたのがその輝かしい出発点である。志の高さでは劣るものではなかった筈のアートシアターが挫折したこと、つまり商業的ではない質の高い映画をミニシアターの長期興行で上映を成り立たせるということが、なぜ岩波ホールでは成功したのか。その理由はこの本を読むと分る。ただなんとなく良い映画として定評のあるさまざまな作品を並べるというのではない。どういう映画なら受けるかとウロウロするのでもない。興行者自身が自分の思想と好みと審美眼をはっきりと持っていて、その主張をひたむきに打ち出してゆくこと。作品の選び方と宣伝の仕方にはっきりと一貫したメッセージ性があって、観客に語りかけるようにして提出してゆくことである。

もちろん観客の反応によってそれが軌道修正されてゆくということはあるだろうし、この本に収録されたこれまで三十年間の全作品の流れを見てゆけばそれは鮮やかに分る。しかしそれは、どんな作品が受けるかと人々の好みを追うのではなく、あくまで主体性を持って観客をリードしようとする態度のなかで行なわれている。それが多くの観客の信頼と賛同を得たわけなのだ。たくさんの作品からお好みで選んで見て下さいというのではなく、全作品を一貫した主張の流れとして見てもらうという強い自負と自信と誠実さと努力がこの本を読むと具体的に分る。

密林★南海映画美女図鑑 知られざるヒロインの系譜

児玉数夫 著
本の友社刊 2940円（税込）

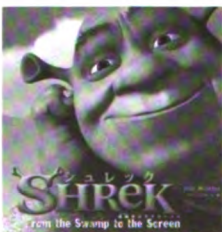
review

ページから立ち昇る美女の香り

小谷承靖

近頃の映画はどうして、小綺麗で、無臭なのだろうか？ 時代劇も、流行（はやり）の地方発信の青春映画も……汗の臭いがしない、雨の後の草いきれが嗅ぎ取れないのである。このコダマ・コレクション（1920's－1950's）は今、僕らの時代が失ってしまった、南海の孤島の噎（む）せ返るような美女たちの汗と喘（あえ）ぎとその豊満な肢体に再会できる宝発見ミュージアムである。「タブウ」(31)のレリに始まり、「妖花」(40)のマレーネ・ディートリッヒ、「モガンボ」(53)のエヴァ・ガードナー、「雨に濡れた欲情」(53)のリタ・ヘイワースと百花繚乱。それは単なるクロニクルで済む筈はなく、著者が幼少の砌（みぎり）より敬愛する父母と手に汗を握り、銀幕を見詰めた想い出に強く裏打ちされている―。

彼が訪れたい外国（とつくに）はパリ、ニューヨークではなく、十一歳、赤坂溜池、葵館でみた「タブウ」のポリネシア、ボラボラ島である。そのボラボラに僕は活動屋になっていたお蔭で訪れることが出来た。「南太平洋の若大将」(67)の助監督で。後年、トム・コタニで「バミューダの謎」(77)を撮った時、児玉さんにTV評で扱って貰った。あれも、南海で、怪獣で、コニー・セレッカ（美女？）が…。

兎も角、これは八十年に亘る活動狂、児玉さんの偏愛の証（あかし）であり標本箱でもある。君も少年の頃を思い出し、そっと開けてみたら？ 香（かぐわ）しいちょっとエッチな匂いがホラ、立ち昇る―。

シュレック

（ジョン・ホプキンス著／島田聖子、数又景子、小林薫訳／白夜書房刊／税込3000円）
おなじみのシュレックやドンキー、新キャラクターの長ぐつをはいたネコなど、色鮮やかで生き生きとした絵と、「シュレック」誕生秘話、技術解説、キャラクターへのインタビューなどが合体した「シュレック」「シュレック2」メイキング本。

69 sixty nine オフィシャルガイドブック

（宝島社刊／税込1300円）
妻夫木聡と安藤政信、主演二人が撮影エピソードからお互いの近況や夢を語る対談ほか、爆笑の出演者座談会、李相日監督インタビュー、原作者・村上龍と安藤が演じたアダマのモデルとなった室田氏の対談、69年のキーワード解説など、読み応え十分の映画「69 sixty nine」公式ガイドブック。

ワールド・シネマ・ヒストリー

（アンドレア・グローネマイヤー著／豊原正智、犬伏雅一、大橋勝訳／晃洋書房刊／税込2520円）
リュミエール兄弟の初の映画上映から1990年代後半のデジタル方式までの映画史を総括的にたどる。映画理論の教科書用にと訳された本だが、本文の脇に入る短い解説や写真などから読むと内容に入りやすい。

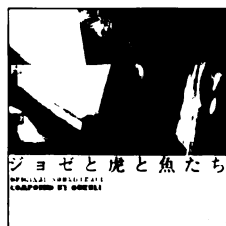
青山真治と阿部和重と中原昌也のシネコン！

（青山真治、阿部和重、中原昌也著／リトル・モア刊／税込1575円）
男3人が少年のようにオタク映画について語る。くだらないネタで盛り上がっているかと思うと、深い読み・冴えた意見が飛び出したりで気が抜けない。中原氏が持ち込んだジェス・フランコ作品に他2人がハマる一夜の章は特にアツい。

サントラ・ハウス
sound track house

賀来　タクト

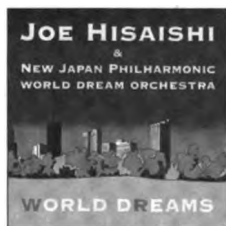
ジョゼと虎と魚たち
♪くるり

ジョゼと虎と魚たち

2003年11月5日発売／定価1890円
◎スピードスター・レコーズ
VICL-61220

犬童一心による瑞々しい青春映画の音楽は、くるりの手に託された。

ギター、ドラムス、電子楽器を主とした楽曲は、いわゆるロックの範疇で語られていい仕事である。時にピアノ、弦も混じり、情感をくゆらせる箇所もあるが、概して乾いた感覚が作品と合致して心地よく映えた。その意味では雰囲気、気分の演出に徹した内容であり、3人組の同グループとしては無理なく等身大で向き合えた仕事だったろう。それゆえ、現代的な生々しさが随所に息づくことにもなった。ディスクには妻夫木聡、池脇千鶴の台詞も収録。

ワールド・ドリームス
♪久石譲ほか

JOE HISAISHI & NEW JAPAN PHILHARMONIC WORLD DREAM ORCHESTRA
WORLD DREAMS

6月16日発売／定価3059円
◎ユニバーサルミュージック
UPCI-1003

久石譲×新日本フィルハーモニー交響楽団のポップス・プロジェクトは〈新日本フィル・ワールド・ドリーム・オーケストラ〉なるユニット名を得て、いよいよ本格的に発進した。その第一歩を記すアルバムには、これまた新規楽団名にちなんだ表題が掲げられ、久石以下チームの固い意志が選曲、演奏に如実に表れることになった。

ディスクを紐解けば、久石お気に入りの映画楽曲が彼自身の新編曲のもと、気持ちよく耳に飛び込んでくる。いわく「ハードボイルド・オーケストラ」と銘打ったそこには「007」シリーズのミニ・メドレーがあり、「ピンク・パンサー」があり、そして「チャイナタウン」「鬼刑事アイサンサイド」があったりするが、重苦しい緊張感からは遠い。「天空の城ラピュタ」「HANA-BI」といった自作が混じっている点も大きいのか、全体的にまろやかな気分がにじみ出ており、万人向けポップスとしての開放感を損なっていない。その決定的な理由を、もちろん表題曲〈ワールド・ドリームス〉が導入を飾っている辺りに求めてもよく、同楽曲が放つ温もりこそ恐らく久石＝新日本フィルが今後、聴衆に訴えていく指針となっていくのだろう。

編曲の面から眺めると、これまた久石色に染まっている部分が大きく、それだけでも作家好みでアルバムを購入したとしても期待をそがれることはない。個人的には「チャイナタウン」が選曲されている点に興味が深く、他の60～70年代の映画用楽曲を選ぶ感性、嗜好共々、どこか久石の素顔が垣間見えて楽しい。苦くやるせない探偵物語が淡く香り高きポップス・ロマンへと変換される仕掛けは、これまた新ユニットならではの醍醐味であろう。

その「チャイナタウン」を始め、ティム・モリソンがゲスト・トランペット奏者として招かれている辺りにも目を配っていい。モリソンといえば、もちろんボストン・ポップス・オーケストラの首席トランペット奏者であり、いわば久石が今回の企画の目標軸として掲げる同楽団への敬意、挑戦がそんな奏者選択にもにじみ出ているといえる。

清廉たる野心と評すべきか。指揮の面白さを徐々に積み上げてきた映画音楽家のこだわりは、コンサート活動、アルバム制作を通じて、さらなる「答え」を提示してくれるだろう。実りある発展を期待する。

トロイ

♪ジェームズ・ホーナー

6月9日発売／定価2520円
©ワーナーミュージック・ジャパン
WPCR-11879

ホメロスの叙事詩に材を得た史劇大作。ジェームズ・ホーナーにとっては「パーフェクト ストーム」に続いて、2度目のウォルフガング・ペーターゼンとの顔合わせとなった。

導入部、重厚な打楽器群に乗せて民族色豊かな女声合唱が早々に立ち上がる。音楽の基本解釈はここにほぼ語られているとしてよく、史劇としてのスケール感と地中海北岸の地域色をいかに絡めるかという意志表示の明快な表れだろう。重さという点では、最大時で118人の奏者を集めている事実からも遜色なく、もちろんホーナーの作品歴を顧みても最大級の規模といっていい。女声合唱についてはロンドンのブルガリア合唱隊20人が担ぎ出されており、ソロ歌唱を務めるマケドニア人女性歌手ターニャ・ツァロフスカ共々、異国情緒を逃していない。

ヒロイズムの発露という点でも抜かりはない。ギリシャ戦乱の英雄たちへの配慮、特にアキレスに対する動機付けは明確で、その活躍の場において劇的な味つけを徹底させている。その手練れぶり。当然のことながら、情感の盛り込みについても豊かな経験値が働いており、人間ドラマの側面をきちんと音楽的に成立させている。そもそも監督のペーターゼンその人が音楽の情感的機能にうるさい男であり、そういう期待感を改めて満たすに足る仕事であったことは間違いない。わけても、アキレスとブリセウスをめぐる愛の主題の采配は麗しく、線のハッキリした旋律といい、使い方といい、さすがにうまい。さらにその旋律をエンド・クレジットの主題歌の主旋律とつなげる仕掛けは憎らしいほどに巧妙で、もちろん「タイタニック」を始めとする過去作品にも明らかな作曲者ならではの常套手段と了解しつつも、無理なく観客を一本の軸に乗せている。そこに商魂の臭みを覚える向きもあろうが、正統派のラヴ・バラードをここまで正面から仕立てられる映画音楽家も少ないだろう。ギリシャ戦士も裸足で逃げ出す巧妙な戦術だ。

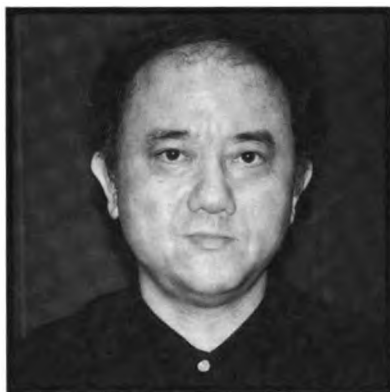
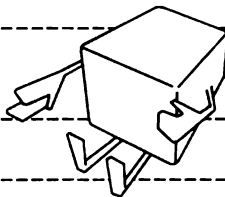
疑問に思う箇所がないわけではない。例えば、楽曲の一部はあまりにドミトリ・ショスタコヴィチの作品に似て、ほかにもベンジャミン・ブリテン、レイフ・ヴォーン・ウィリアムズといったクラシックの巨人の影が付きまとう。ゆえに、徹頭徹尾、完全な独創とは言い切れず、やはり鈍いうめきは抑えられない。もっとも、これがわずか13日間の作曲期間しか与えられなかった仕事だったといえば、それもやむなしの声も上がるのではないか。そう、本作品は完成の土壇場になって作曲家の交代劇が起こった曰く付きの映画だった。

当初、音楽担当に選ばれていたのはガブリエル・ヤレドである。試写で悪評を招いたとされるその音楽はヤレドのホームページにて耳にできるが、出来は決して悪くない。むしろ、念入りに書き込まれた力作であり、近年のヤレド作品を振り返っても高く評価すべき内容に仕上がっている。ただ、非常に古風な伝統的手法、視点に貫かれた仕事であり、そこからにじみ出てくる感触が実にウェットであった。換言するなら、悲劇性が強調された音楽ともいえ、時としてセンチメンタルに過ぎる嫌いもある。思えば、ヤレドは過去にビレ・アウグストとの「レ・ミゼラブル」でも降板の憂き目に遭っているが、そのときのアウグストの証言がまた象徴的だ。曰く「彼の音楽はセンチメンタルすぎて使えなかった」。

あえてヤレドの仕事を感情過多のそれとするなら、対するホーナーの音楽は情感に富みながらも、どこか抜けのいいドライ感がある。ペーターゼンの礼儀と思いやりをわきまえない暴挙は許せないが、娯楽性という観点からすれば、ホーナー音楽が採用された結果は決して理解に難くない。

実のところ、民族合唱采配はヤレドが1年かけて培ってきた試みだった。ホーナーはそれをそのまま盗み、我が物顔にしているという見方もでき、一部では彼を非難する声が後を絶たない。しかし、個人的には時間的制約の厳しさも含め、ホーナーの努力を責めることはできない。少なくとも、程よい現代性と開放感を獲得している点で、その仕事は耳に楽しい。勝利者の狡猾は一個の勲章でもあろう。

tele-jun

時評　石飛徳樹

命を削って作品を紡いだ野沢さん

野沢尚さんが自ら命を絶った。一報を聞いた時、全く信じられなかった。脚本に小説にと、精力的に作品を発表する野沢さんのイメージが、自死という負のベクトルを持つ行為と全然一致しなかったのだ。

しかし日が経つにつれ、自死という選択と野沢さんの姿が、一つの像を結んでいった。私は、ご本人とは、取材等で数度しかお目にかかったことがない。従って、その像は、彼の作品から築かれた虚構の野沢さんに過ぎないのだけれど。

野沢さんは全力疾走の人だった。常に自分の全人格をぶち込んで作品を生んできた。時に過剰とも思える掘り下げが、彼のアイデンティティーだった。時代に寄り添うことは決してしなかったにもかかわらず、彼の作品はしばしば大ヒットした。マーケティングが支配する現代のドラマ界にあって、自らの熱いモチベーションで視聴率を驚掴みにする仕事ぶりは一種の奇跡だった。それだけに一本一本がさぞ厳しい状況だったことは容易に想像できる。

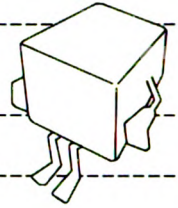
厳しいのは、野沢さん個人の資質だけではない。90年代の連ドラ黄金期を支えた60年前後生まれの脚本家たち――野沢さんはじめ、北川悦吏子、岡田恵和、野島伸司といった人々――が今、ターニングポイントを迎えていることが背景にあると思えてならないのだ。

彼らは若さに任せてトレンディードラマ後の連ドラを牽引してきた。しかし、彼らも既に40代半ば。数字だけでなく向田賞などで芸術性も評価されるに至り、少し立ち止まって今後の針路を探っているように見える。作風を変えたり、実験的手法に挑んだり、自作を振り返ったり。現在のドラマが停滞しているように感じられるのは、彼らのそんな気分が反映しているせいだ。野沢さんも新しい道を模索していた。40代にとってそれは他人事ではない。

もう一点、気になっていたことがある。野沢さんは『砦なき者』や映画「破線のマリス」などで、視聴率至上主義に侵されたテレビ業界を糾弾してきた。それは大変重要な主題だ。しかし、自らが所属する社会を撃つと、銃弾は必ず一周りして自分に戻ってくる。特に突き詰めるタイプの野沢さんには、自身の銃弾をまともに受け止めてしまうことがあったのではないか。

私がお会いした現実の野沢さんは、書くものの尖鋭さとは異なり、大層シャイな方だった。「野沢さんのファンだけど、会うのが怖かった」と告白すると、よく言われるんだと笑っておられた。私たちが今やるべきは悲しむことではない。彼の笑顔を脳裏に焼き付けつつ、命を削ってまで刻んだ作品群を繰り返し見て、残されたメッセージの意味を考えることだ。それだけの価値のある作家であった。

tele-jun

シネマタイム　豊﨑岳彦

「ブラッドワーク」（Blood Work／2002年／アメリカ／110分）WOWOWにて8月15日12：00＆18：00より放映予定
原作／マイクル・コナリー　製作・監督・主演／クリント・イーストウッド　脚本／ブライアン・ヘルゲランド
出演／ジェフ・ダニエルズ、アンジェリカ・ヒューストン、ワンダ・デ・ヘスス、ティナ・リフォード、ポール・ロドリゲス

もしも借りを返すことが善人の条件ならば

心臓移植手術を受けた元FBI捜査官が、心臓提供者の死の謎を追う。初めは単純なコンビニ強盗だと思われた事件だが、少しずつ犯人の尋常ならぬ狂気が暴かれる……というスリラー。

いきなり爺さんがあんなに走れば発作も起こるよな、と観客に得心させる老獪な導入部。さらに続く部分は、全力疾走してると思えば顔が違うわ、壁越えて入れ替わるわと、あからさまな代役なのだが、よく考えると、この物語そのものがボディダブルが生んだ悲劇なのだと思い直せば、以降すべてが対の概念（代役？）に裏打ちされている徹底ぶりは感動的ですらある。刑事は犯人以上に殺しに生活のすべてを浸した殺人マニアなのだし、タフガイ主人公は胸から腹から傷だらけのジジイだし、守護天使ふたりは女性かつマイノリティだ。

思えば彼の映画は、ほぼすべて価値の時代的変容に関する、数値的（グラフィカル）な報告書なのだとも言える。愛も誇りも道徳も時々刻々姿を変えていく時、共通語は暴力だけという諦観なのだろう。

さて本作は全米ベストセラー『わが心臓の痛み』の映画化である。製作順は前後するが、オスカーを得た「ミスティック・リバー」の才人がその後に書いた脚本だけに、翻案の匙加減は絶妙。例えば防犯ビデオで犯人がつぶやくのは小説では「カノーリを忘れるな（ドント・フォーゲット・ザ・カノーリ）」になっている。カノーリはシチリア菓子のこと。「ゴッドファーザー」でクレメンザが草原で小便しながら暗殺を仕切る場面の直前、女房がいう台詞だ（ちなみにGFの字幕では「ケーキを忘れないで」）。日常と殺しが交錯する象徴なんだけど、これ確かに視覚化は難しいよ。驚くのは犯人を変更していることかも。結果、原作では終盤突如として〝対〟のない行動に出る犯人をどうにかイーストウッド節に引き戻すことができたのだ。

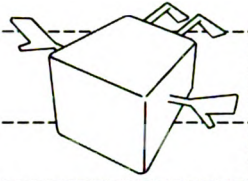
必見！ レア作品

ピアノ・ブルース
（2003・米）

御大がらみで見逃せない番組が、WOWOWでもうひとつふたつ。昨年にM・スコセッシが製作総指揮し、ヴェンダースやM・フィッギスが監督、ストーンズやクラプトンらが豪華競演。晩夏の日本で順次劇場公開される「THE BLUES Movie Project」の7本のうち、地味なためか劇場にはかからないイーストウッド編「ピアノ・ブルース」が独占放送という形で登場する。先頃亡くなったレイ・チャールズはじめデューク・エリントンなど広くジャズやR＆Bのフィールドからもチョイスしているあたり、趣味が爆発でそれもよし。また18日に放映の「続　夕陽のガンマン　地獄の決斗」は、昨年にスコセッシが監修＋御大も再吹替えで参加した3時間超の復元版だ！

WOWOWにて8月15日22：10より放映予定

tele-jun

テレビ・トラベラー　樋口尚文

「砦なき者」（テレビ朝日系にて、2004年4月2日放送）

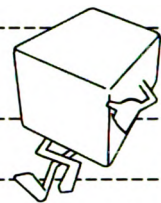
152 異才は奈辺に踏み出そうとしていたのか

野沢尚が、突然自ら逝った。私は野沢尚本人とはついに会うことがなかったけれども、本欄の読者の方ならご存じのように、近年の野沢脚本や著作については熱心にフォローしてきたつもりだ。氏もその評をこまめに読んでくれていたようで、別の雑誌で二三度ほど対談やインタビューの相手として氏が指名してくれたことがあったのだが、たまさかのっぴきならぬ仕事が重なってかなわず、今となっては悔やまれて仕方がない。

最近も本欄で鶴橋康夫演出によるテレビ朝日『砦なき者』における脚本と演出の綱引きについて記したばかりだったが、これを読んだ鶴橋氏から届いた手紙には「その通りです。小生と野沢の果ての無い会話であり、対決でもありました。そして、二人とも自爆です。脚本家と監督がお互いに別々のモチーフを持つのもわるくはないだろうと……」と記されていたが、もとより野沢脚本はこの強烈な綱引きの相手をこそ求めるものであったはずだ。

そもそも名シナリオ作家には、潔癖に完成されたホンを忠実に再現して撮ったほうがいいタイプと、むしろそのまま撮るべきではないタイプがいると思う。前者が山田太一や荒井晴彦だとすれば、野沢はきっと後者である。野沢の仕掛ける野心的な虚構は、常にどこか紙に書かれたものとしての無理があって、それを映像として定着するには演出家の側に相当な技巧や詭計が求められたように思う。マスコミは野沢の代表作は『破線のマリス』『青い鳥』『眠れる森』と記したが、それらの力作が必ずしも野沢の夢想したロマンを無理なく成就させていたとは思わない。野沢の夢想が、それに拮抗する演出を得てまっとうに実ったのは、なんと言っても『雀色時』『喪服のランデブー』であり、或いは『リミット』『緋色の記憶』の線ではなかろうか。

言わば野沢脚本は、それ自体が映像化する上での無理を抱えていても、そこをねじ伏せようとする演出家を焚きつけ、力量を試すかの如きものだった点で、ごく優れたシナリオのひとつのありかたを示したはずだ。そして、師の鶴橋康夫のような飛びぬけた作家の演出によって難点が呑みこまれた時、野沢のたくらむ特異なロマンの訪れがあった。

ただし野沢＝鶴橋コンビの最終作となった『砦なき者』は、ロマンを拒む社会派ふうの脚本と、それをロマンの方へ牽引する演出がいつものような融点を迎えずに、確かに綱引きの極で「自爆」していた感があった。そのいつも以上に傲岸な野沢の意地は、彼にまた何か新しい地平を期すところがあるのかもと思わせずにはおかなかったが、もはやその答えを作品として知る術はない。

海外ドラマ・ウォッチ　池田敏

「スティーヴン・キングのキングダム・ホスピタル」

スティーヴン・キングVSラース・フォン・トリアー!?

一昨年の『バンド・オブ・ブラザース』、昨年の『スティーヴン・スピルバーグ／TAKEN』と、米国産ミニ・シリーズの最新作が夏の風物詩(?)になってきたWOWOW。今年は日本初公開の『スティーヴン・キングのキングダム・ホスピタル』(写真／8月7日スタート／土曜夜10時00分〜12時00分)だ。鬼才ラース・フォン・トリアーが監督(共同)したデンマーク産のカルトなドラマ『キングダム』(日本では劇場公開)の1・2を、米国で人気作家キングが企画・製作総指揮(共同)・脚本(共同)をつとめ、リメイク。そう聞いてすぐ「キングが『キングダム』をリメイクって、駄洒落かい！」と思ったのは筆者だけじゃない!?

しかし場所を限定して(この場合は病院)物語を転がす手法や、少女の幽霊や誰が運転しているか分からない救急車(「クリスティーン」風?)など、原典『キングダム』に登場する各要素自体がキング的なモチーフばかり。いやむしろ、「ドッグヴィル」を米国3部作の第1作と謳ったフォン・トリアー、『キングダム』は先がけて米国文化の象徴の一つ、TVの病院ドラマを彼なりに解釈した作品だったのではないかと筆者は想像する。事実、米国版昼メロであるソープオペラ同様、『キングダム』も複数の物語が並行して、行き当たりばったり的に展開するものだった。

やっぱり気になったのでWOWOWにお願いして、『キングダム・ホスピタル』第1話を見せてもらった。

まず驚いたのは、『キングダム』の各要素を多くそのまま受け継いだこと。前出の少女霊や救急車、仮病を使って入院する女性(ダイアン・ラッド)、子供だか大人だか分からない男女などが原典からほぼそのまま引用されている。あれ、キングが他人の作品を映像用に脚色し直したのは今回が初めて!? キングは原典を相当気に入って、ノリノリでリメイクしたようだ。

一方、ひき逃げされて動けなくなった画家(ジャック・コールマン)というオリジナル・キャラが新登場。これは「ミザリー」風と思ったが、何とキング自身の体験がモデルだとか！

第1話を通して見た筆者だが、やっぱりキングだよなぁという印象を、まずは抱いた。手馴れたTV脚本家なら、「A→B→C→D→A→B→C→D」と要素をちりばめるのを、キングは自作を面白がりすぎて(?)、「A→B→B→C→D→D→D」のようにしてしまうのだろう。だがこれって、実はキングの小説とよく似た構成のように思える。

もっとも、悪ノリに近いその疾走感は優等生的なドラマにない、まさしくカルトな味があり、どこまで疾走ならぬ暴走するか、見届けたいと思うのだ。

まごころ【放送日】8月7日あさ10：00～
(39)原作／石坂洋次郎　出演／入江たか子、高田稔、悦ちゃん、村瀬幸子

秋立ちぬ【放送日】8月21日あさ10：00～
(60)出演／乙羽信子、加東大介、夏木陽介、河津清三郎

▶「夜の流れ」の再放送もあり

「まごころ」ⓒ東宝

成瀬巳喜男劇場
THE THEATER OF M.NARUSE
隔週土曜あさ10時から（再放送あり）
スカイパーフェクTV!日本映画専門チャンネル

文＝田中眞澄

「秋立ちぬ」ⓒ東宝

人呼んでヤルセナキオ。成瀬巳喜男は人づき合いが苦手な孤独な男だった。

東京四谷の生まれ。家は没落士族。父は刺繍職人。貧しかった。おそらくその貧しさの故、中学（旧制）には進まず、築地の工手学校に入る。月島の埋立て地にはよく行った。図書館で文学書を濫読するだけが楽しみの、孤独な少年時代。十五歳のとき父を失い、二十一歳で母をなくした。

彼の映画で子供が中心になる映画は、さほど多くはないが、何れも不幸の影を背負っているのが特徴的である。「おかあさん」の戦争体験、「コタンの口笛」の民族差別といった、歴史的社会的な大きな問題でなくても、成瀬映画の子供たちは常に大人たちの事情によって条件づけられ、屈折せざるを得ない。彼らは清水宏の映画の子供たちのように、天真爛漫であることはできない。

一九六〇年の「秋立ちぬ」は成瀬自身がプロデューサーもつとめた。彼の監督作品としては珍しく、笠原良三のシナリオで、最初は「都会の子」と題されていた。

ところは東京築地界隈。父が死んで信州上田から母と上京した少年が主人公。八百屋の伯父の家に厄介になり、母は旅館に住込みで働くが、やがて男ができる。少年の友達はカブト虫と旅館の女主人の女の子だった。しかし、カブト虫は捨てられ、彼が再び手に入れたときには、妾の子だった少女との交友も、大人の事情によって断ち切られる。

この映画の疎外された子供たちに、成瀬の孤独な少年時代を重ねることは不可能ではあるまい。束の間のユートピアは、やはり海辺の埋立て地であった。成瀬の非情な人間認識、人生の真実をうかがわせるこの映画は、スター・ヴァリューも乏しい小品ながら、六〇年代成瀬の一群の〝女性映画〟と比べて、実ははるかに重要に思われる。

石坂洋次郎の小説を成瀬自身が脚色した一九三九年の「まごころ」は、少女小説のつくりだけに、表面的には女の子たちの友情に希望が与えられている。だが、一皮めくれば、背後の大人たちの世界は相当複雑である。もっとも、この映画では、都会っ子風の髪型の少女、母親をママと呼んだり、家にピアノがあったりといった家庭の側が、損な役割である点に注意したい。それは戦時下にあってリベラルなモダニズムが退潮する比喩なのである。

寡黙な成瀬巳喜男は自分の子供にも遠慮がちで、飼犬も彼にはなつかなかったという。

「あさき夢みし」写真提供：A・T・G

「忍者武芸帳」

あさき夢みし

【放送日】8月5日、ほか
(74) ●監督／実相寺昭雄　出演／ジャネット八田、岸田森、花ノ本寿、寺田農

忍者武芸帳

【放送日】8月19日、ほか
(67) ●監督／大島渚　声の出演／小沢昭一、山本圭、小山明子、佐藤慶

ATG アーカイヴ

隔週木曜よる放送
スカイパーフェクTV!日本映画専門チャンネル

文＝森直人

実験作ぞろいの大島渚監督作の中でも、とりわけ思い切った手法を採用したのが67年の「忍者武芸帳」だ。59年から62年にかけて刊行され、マルクス主義と革命論を盛りこんだ残酷活劇という内容が当時の学生たちに熱狂的に支持されていた白土三平の長編劇画の原画を、そのまま使って映画にしたのである。つまりコマをセル画のように使用して編集し、声優のアフレコを加え、簡易アニメーションのようなものにリミックスしたのだ。今から数年前、日立マクセルが発売した〝まんがビデオ〟を覚えてる人なら、あれを先取りしたスタイルだと説明すれば分かりやすいだろうか？リアルタイム文脈でいうと、静止画（スチール写真）を全編使用した映画の先行例としてクリス・マルケルの「ラ・ジュテ」（62）があったし、大島自身も、「ユンボギの日記」（65）でスチール映画を試みているので、それらの発展型と位置づけられるだろう。しかしそもそも、劇画の文法で動性が完成されている表現を、その流れを切断して別の器に移し替えるというのは完全に倒錯行為なのだが、こういった蛮行（？）も大胆に行なわれた前衛時代のノリを伝えているという点で、必見の異色作である。ちなみに大島がATGと関わったのは本作が初めて。

実相寺昭雄が鎌倉時代の京都の宮廷世界を描いた74年の「あさき夢みし」は、中世日本の貴族社会のデカダンスを映し出した絵巻風の映画である。原作は、宮廷女房である中院源雅忠の女二条の手記『とはずがたり』。四条と呼ばれる彼女（演じるのはジャネット八田）が、御所（花ノ本寿）や霧の暁（寺田農）、高僧の阿闍梨（岸田森）らトップエリートの男たちと、愛と性の遍歴を重ねる物語。内容は古典的だが、映像は幻想的な暗闇に覆われ、人物の姿がよく見えないことも多い。その一種のもどかしさが、官能的なムードを醸し出している。映画的なダイナミズムを捨ててまで、静止画的な美しさと、エロティックな空気感を追求した作品といえるだろう。

「妻二人」©角川映画

「刺青」©角川映画

刺青【放送日】8月12日よる11時〜
(66)原作／谷崎潤一郎　出演／若尾文子、長谷川明男、山本学、佐藤慶

妻二人【放送日】8月26日よる11時〜
(67)原作／パトリック・クェンティン　出演／若尾文子、岡田茉莉子、高橋幸治、江波杏子

▶「兵隊やくざ」「清作の妻」の再放送もあり

増村保造 レトロスペクティブ

隔週木曜よる（再放送あり）

スカイパーフェクTV!日本映画専門チャンネル

文＝轟夕起夫

最初女が、見せているのは〝仮の姿〟である。だがそれは、何かのキッカケで脱ぎ捨てられ、女はその本性をむきだしにし始める。

一体どれだけ、こういった展開を描いてきたことだろう。増村保造がこだわり造形してきたヒロイン変貌の構図。大ヒットした「卍」(64)に続いて谷崎潤一郎の耽美世界に挑んだ「刺青」は、そんな嗜好をスクリーンに塗りこんだ彼の代表作だ。

悪だくみにかかり、背中に一面、刺青師（山本学）の手で女郎蜘蛛の紋様を彫られてしまったお艶（若尾文子）。しかしもともと勝気な商家のひとり娘で、墨を入れられる前から、駆け落ちした使用人（長谷川明男）を翻弄していた。つまり〝魔性の女〟の性（さが）は眠っていただけで、刺青が契機となって彼女は、本来の自分を開放／解放したというわけだ（たとえそれで悪の道をひた走ろうとも）。

谷崎の原作で、刺青師は駕篭から見えた女の足に魅かれ、その肉体に墨を入れることを欲す。映画は着物の裾からチラリとお艶＝若尾の足首を見せ、刺青師に視線を追わせている（ここで予告的に言っておく。増村は足フェチの作家だ！）。

脚本の新藤兼人は、谷崎の『お艶殺し』もプラスして血みどろの修羅場を用意、名手・宮川一夫のキャメラが風格を与え、優美にして凄絶な〝スパイダーウーマン〟の映画となった（ウォン・カーウァイ、お気に入りの1本でもある）。

ところで〝仮の姿〟とは偽りの姿ではない。本性は擬態の中にこそ隠れている。すなわち、若尾文子と岡田茉莉子が競演した「妻二人」とは、そういう映画である。

原作は『二人の妻をもつ男』（創元推理文庫）。米国のミステリ作家パトリック・クェンティン（リチャード・ウェブとヒュー・ホイーラーの合同ペンネーム）が55年に発表した小説を、やはり新藤兼人が翻案したもの。

ここで若尾が演じているのは大出版社の社長令嬢で、「清く正しく美しく」という社風さながら自らも生きてきたのだが、運命の歯車が狂い、殺人を犯してしまう。しかし、歯車はさらに狂って、夫（高橋幸治）の元恋人が容疑者としてあげられる。この〝日陰の女〟に扮した岡田茉莉子が素晴らしい！　あらゆる局面で〝仮の姿〟を選択してゆくのだが、擬態の中に哀しい真実が滲み出てくる。そう、これは、二人の女の擬態がフーガを呈してゆく、バロック的な映画といえよう。

最後に——。小悪党役で両作に色を添えるのが大映の名バイプレイヤー、木村玄（のちに元に改名）。この人の助演ぶりにも注目を！

海壁【放送日】8月1日よる11時30分～
(59)監督／黒木和雄　ナレーション／長門裕之

盲導犬クイールの一生【放送日】8月8日よる11時30分～
(02)写真／秋元良平　文／石黒謙吾　朗読／鈴木京香

老人と海【放送日】8月15日よる11時30分～
(90)監督／ジャン・ユンカーマン　音楽／小室等

沖縄列島【放送日】8月22日深夜12時～
(69)監督／東陽一

ユンボギの日記【放送日】8月29日よる11時～
(65)監督／大島渚　原作／イ・ユンボギ

▶「グーッド　グーッド　ヤッピとワイズとゾーラの物語」「夜明けの国」「日独裁判官物語」の再放送もあり

「海壁」

C 角川映画　秋元良平・写真／石黒謙吾・文／文藝春秋刊

右上「盲導犬クイールの一生」
左上から「老人と海」「沖縄列島」「ユンボギの日記」

ドキュメンタリー傑作選

日曜よる（再放送あり）
スカイパーフェクTV!日本映画専門チャンネル

文＝藤原敏史

黒木和雄、東陽一、そして大島渚。今日では劇映画の巨匠である三人のドキュメンタリー。岩波映画時代の黒木のPR映画大作「海壁」は、今時の劇映画では不可能なド迫力のスペクタクル性にまず圧倒される。東京電力が横須賀近くに建てる発電所のため広大な埋め立て地を作って行くその記録は、なにしろCGでなく本当に山に発破をかけ、本物の巨大なコンクリのケーソンを海に沈め、本物の台風の大波に晒される堤防がどこまで持つのかのサスペンス。35ミリ・シネスコの画面作りも実にスタイリッシュ。CS放送は地上波より高画質なのだし、出来る限り大きな画面で見たい作品だ。

PR映画で高度成長の活力を捉えた岩波映画出身の監督たちは、時代の矛盾にキャメラを向けるドキュメンタリー作家となっていく。東陽一もそうした一人であり、返還前の沖縄を撮ったのが「沖縄列島」だ。ヴェトナム戦争の空爆基地でもある沖縄。復帰を前提にすでに票の取り込みを図る自民党。本土復帰を願う一方で、戦争中に日本に見捨てられて膨大な死者を出した悲惨の記憶。アメリカの占領に反対する一方で、基地がなければ経済が成り立たない現実。沖縄の人々のインタビュー、二人の語り手が交互に語るナレーション、松村禎三の前衛的な音楽がスタイリッシュに構成される。

出発点が劇映画だった大島が、物語自体は小説の映画化である「ユンボギの日記」で見せる自由さ。軍政時代の韓国の貧民街に生きる少年の物語が、本人を演ずる少年の声とナレーションで構成される音響トラック。そこで見せられて行くのは、その貧困のなかで生き延びる少年たちのドキュメンタリー写真。一枚一枚のスチルに写る、それぞれに別人の少年たちが、大島の手で彼らの総体であるユンボギという少年の思いにまとめられ、昇華されていく。

スチル写真しかない盲導犬の一生を、ベストセラーにもなったその写真とナレーションで見せて行く「盲導犬クイールの一生」。一方「老人と海」は与那国島の老漁師を、「これは○○さんで」と言うような説明的なナレーションを一切排し、生活から切り取った映像を淡々とつなげることで島そのもの、そこで生きる人間そのものを見せようとする。映画を「生きものの仕事」と論じたのは土本典昭だが、劇でもドキュメンタリーでも、キャメラ自体はそこに写る個々の人々やものごとしか見せられない。作家の演出と構成が個々の物語の底に横たわる普遍性を見いだすとき、我々は感動する。

DVD&VIDEO RELEASE

DVD&ビデオリリース

丸山尚輝&やまもとかほ

先取り情報

●ビクターエンタテインメント
9／10「ホテル　ビーナス」
●アミューズソフトエンタテインメント
8／27「殺人の追憶」
●東芝エンタテインメント
8／18「ナコイカッツィ」8／27「アドルフの画集」
●新日本映画社
8／27「キクとイサム」「真空地帯」「武器なき斗い」
●日本ヘラルド映画
8／25「ふくろう」
●アスミック
9／10「25時　スペシャル・エディション」
●IMAGICA
8／21「子供たちの王様」「双旗鎮刀客」「アリス」「フェイドtoブラック」
●レントラックジャパン/BIG TIME ENTERTAINMENT
8／25「きょうのできごと　a day on the planet　プレミアム・セット」「きょうのできごと　a day on the planet　スペシャル・エディション」
●フォックス　ホーム　エンターテイメント
8／20「ドラムライン」9／23「スター・ウォーズ　トリロジーDVD BOX」
●ブエナ・ビスタ・ホーム・エンターテイメント
8／18「オズボーンズ　2ndシーズン〈コンプリート〉」
●ワーナー・ホーム・ビデオ
8／27「H【エイチ】特別版」「ロスト・メモリーズ　特別版」9／10「ゴシカ　特別版」「薔薇の名前　特別版」
●ソニー・ピクチャーズ　エンタテインメント
8／25「ピーター・パン　コレクターズ・エディション」9／1「N.Y.式ハッピー・セラピー　コレクターズ・エディション」
●パラマウント　ホーム　エンタテインメント
8／27「グッド・ガール」
●ハピネット・ピクチャーズ
8／27「気まぐれな唇」

TOPICS

アスミック・エースが初の連ドラ製作で新機軸

★アスミック・エースが初の連続ＴＶドラマの製作に乗り出す。それが、コンビニを舞台に個性溢れる面々の日常を描く「駄目ナリ！」。監督・脚本は「演じ屋」の野口照夫。全12話で８／５～９／30まで、関西地区限定の放映となる。特筆すべきは、放送の翌日に関西地区のTSUTAYA約230店限定でビデオ・ＤＶＤレンタル開始という、業界初のパッケージリリース方式。つまり第１回放映日は８／５、レンタル日は８／６というわけだ。まずは関西圏で盛り上げ、全国区に展開していく模様。尚、セルＤＶＤは最終回放映翌日にこれまた関西地区限定で発売。初の連ドラ製作、地域限定戦略、放映翌日レンタルと同社の新たな試みに注目が集まる。

★「ファインディング・ニモ」が６／18の発売からわずか３日間で150万本を消化（ＤＶＤ130万枚、ＶＨＳ20万本）。これは前作「モンスターズ・インク」の３倍にあたる消化スピードで、ディズニー作品史上最高の記録となっている。

★松竹ホームビデオがラインナップ発表会を開催し、「クイール」(８／25)、「飛ぶ教室」(８／25)、「花嫁はギャングスター」(秋)、「CASSHERN」(秋）など今後のリリース作品を紹介。この他、2005年の松竹110周年プロジェクトに触れ、その目玉として木下恵介監督作品のＤＶＤ化を発表した。

★アイ・ヴィー・シーがサマー・コメディ・キャンペーンを実施。これは８／１発売の「バスター・キートン傑作選」など12作品を、2800円の低価格で提供するというもの。

★昨年12月、アジアの良質なＴＶシリーズをリリースする新レーベル「亜州惑星」を立ち上げたマクザムが、新たに香港最大のＴＶ局・ＴＶＢと契約、９月より「ＴＶＢコレクション」として年間６～10の旧作ドラマシリーズをリリース予定。第１弾はレスリー・チャンとマギー・チャン主演の大河アクション「武林世家」。その後もチョウ・ユンファやイーキン・チェン主演作が控えている。

★「この世の外へ　クラブ進駐軍」(松竹）の６／25ＤＶＤ発売を記念して、阪本順治監督ほか、ラッキー・ストライカーズこと萩原聖人、松岡俊介、村上淳、MITCHが一堂に会したイベント座談会が行われた。

おすすめ新作DVD

丸山尚輝

DVD

VIDEO同時レンタル
日活
2002年・米・97分
監督／ジェームズ・フォーリー
出演／エドワード・バーンズ、ダスティン・ホフマン、レイチェル・ワイズ、アンディ・ガルシア
★3990円

8.6S&R

コンフィデンス

CONFIDENCE

実力演技派俳優4人による最上級のエンタテインメント・ムービー

●芸術的とも言える信用(コンフィデンス)詐欺の手口を使って、天才詐欺師のジェイクがゲットした大金。だが、それは裏社会の大物・キングのものだった。窮地に陥ったジェイクは、逆にキングの懐へ仲間と共に飛び込むと、大胆にも彼と手を組んでデカいヤマに挑もうとするのだが……。

エドワード・バーンズ、ダスティン・ホフマン、レイチェル・ワイズ、アンディ・ガルシアの4大スターが共演する、流行りのグリフト・ムービー。軽快なテンポ、目まぐるしいほどのカットの数、練りに練られた脚本……あなたは、巧妙に仕掛けられた罠に騙されず、謎を見抜くことが出来るか？　監督は、「NYPD15分署」のジェームズ・フォーリー。脚本はダグ・ユング。尚、メイキング、監督&主要キャスト4人のインタビュー、予告編の約60分に及ぶ映像特典を同時収録する。

DVD

解夏

VIDEO7.9レンタル
フジテレビ＝幻冬舎＝電通＝アルタミラピクチャーズ
2004年・日・114分
監督・脚本／磯村一路　出演／大沢たかお、石田ゆり子、富司純子　★6300円
●さだまさし原作、大ヒットを記録した感動ストーリー。メイキング、インタビューなど収録の特典ディスクと2枚組。

7.30S/7.9R

DVD

ウィークエンド

WEEK-END

IMAGICA
67年・仏＝伊・104分
監督／ジャン＝リュック・ゴダール　出演／ミレイユ・ダルク　★5040円
●田舎への週末旅行に出かけた若いカップルは、数々のとばっちりを受け……。ゴダールが独特のセンスで文明を風刺したドラマ。特報、予告編、ポスター画像の映像特典付き。

7.24S

DVD

エブリデイ・イズ・バレンタイン

EVERYDAY IS VALENTINE

VIDEO同時レンタル
カルチュア・パブリッシャーズ
2001年・香・未公開・100分　監督／バリー・ウォン　出演／レオン・ライ
★3990円
●お互いを〝運命の人〟と思い込んだ男女の恋愛模様。主演は、香港四天王のひとり、レオン・ライと「少林サッカー」のセリシア・チャン。

7.23S&R

DVD

ゴジラ×モスラ×メカゴジラ 東京SOS スペシャル・エディション

VIDEO7.9レンタル
東宝
2003年・日・91分
監督・脚本／手塚昌明　脚本／横谷昌宏
出演／金子昇、吉岡美穂　★6300円
●3大怪獣が激突するシリーズ第27作。特撮メイキング、特殊合成未公開カットなどを収めた特典ディスクと2枚組。監督らによるコメンタリー(2種)付き。

7.30S/7.9R

DVD

エロリスト　欲望のお宝探し大作戦!

NIGHT CALLS : THE MOVIE 2

VIDEO同時発売
コンマビジョン
98年・米・未公開・91分　監督／モックテズマ・ロバト　出演／ドリア　★2940円
●ホステスのドリアは、億万長者の叔父の遺産を戴こうと、仲間を引き連れて、邸へ乗り込んで行くのだが……。プレイメイトたちが大ハッスルするエロティック・ドラマ。

7.30S&R

DVD

バグズ

BUGS

VIDEO同時レンタル
ユニバーサル・ピクチャーズ・ジャパン
2003年・加・TF・85分　監督／ジョセフ・コンティ　出演／アントニオ・サバトJr.　★3990円
●巨大昆虫軍団とS.W.A.T.チームの戦いを描いたモンスター・パニック。監督は「ブラックホーク・ダウン」の特撮マン、ジョセフ・コンティ。

7.23S&R

★価格はすべて税込み。ただし、レンタルのみの場合は無表記。Sはセル、Rはレンタル、TFはテレビフィーチャー、OVはオリジナルビデオ。

DVD

ジーパーズ　恐怖の都市伝説
MONSTER MAN

VIDEO同時発売
アットエンタテインメント
2003年・米・未公開・91分　監督／マイケル・デイヴィス　出演／エリック・ジャングマン　★3990円
●巨大トラックで人々を襲い、内臓を喰らうクリーチャーの恐怖!!　ショッキング・シーン満載のモンスター・ホラー。本国トレーラー付き。

8.6S＆R

DVD

アップタウン・ガールズ　特別編
UPTOWN GIRLS

VIDEO同時レンタル
フォックス　ホーム　エンターテイメント
2003年・米・92分　監督／ボアズ・イエーキン　出演／ブリタニー・マーフィ、ダコタ・ファニング　★4179円
●名子役、ダコタ・ファニング共演のコメディ。製作秘話、メイキング、未公開シーン集などの映像特典付き。

8.6S＆R

DVD

ザ・セフレ　SEX・フレンズ
SENSUAL FRIENDS

VIDEO同時発売
コンマビジョン
99年・米・未公開・94分　監督／ジェイ・マディソン　出演／ブランディ・デイヴィス　★2940円
●"PLAYBOY CINEMA"レーベルのエロティック・ストーリー。10年振りに再会した学生時代の友人たち。元カレ・元カノだった彼らは、昔を懐かしみ……。

7.30S＆R

DVD

地獄の戦艦
A GLIMPSE OF HELL

VIDEO同時発売
エスピーオー
2001年・米＝加・87分　監督／ミカエル・ソロモン　出演／ジェームズ・カーン　★4179円
●米海軍船艦"アイオワ"で起きた爆発事故の真相を描くサスペンス。ドキュメンタリー映像、スタッフ＆キャスト・プロフィールなどの映像特典付き。

8.6S＆R

DVD

エマニエル　小さなふくらみ
EMMANUELLE IN RIO

VIDEO同時発売
アットエンタテインメント
2003年・米・未公開・87分　監督／ウーラ・ヒー　出演／ルドミラ・フェラス　★5040円
●30周年を迎えた"エマニエル"シリーズ最新作。リオを舞台に写真家・エマニエルの官能の世界が展開する。スタッフ＆キャスト紹介付き。

8.6S＆R

DVD

サイレンス　血の呪
LE PACTE DU SILENCE

VIDEO同時レンタル
ソニー・ピクチャーズエンタテインメント
2002年・仏・未公開・89分　監督／グラハム・ギット　出演／ジェラール・ドパルデュー　★3990円
●「天使が見た夢」のエロディ・ブシェーズ、ジェラール・ドパルデュー共演のサイコ・サスペンス。呪われた血で繋がった双子を巡る恐怖。

8.4S＆R

DVD

ジョゼと虎と魚たち　特別編

VIDEO同時レンタル
アスミック
2003年・日・116分　監督／犬童一心　脚本／渡辺あや　出演／妻夫木聡、池脇千鶴　★4935円
●脚の不自由な娘・ジョゼと大学生・恒夫の愛を描いた感動ドラマ。初回限定版のみ、番外編ショートフィルムなどを収録した特典ディスクと2枚組。

8.6S＆R

DVD

カトリーヌ・スパーク・フィルムズ
DICIOTTENNI AL SOLE / LA VOGLIA / LA MATRIARCA

ブロードウェイ
62､68年・伊・304分　監督／カミロ・マストロチンクェ　出演／カトリーヌ・スパーク　★12600円
●60年代、キュートな魅力で人気を得たアイドル女優、カトリーヌ・スパーク主演作3作品『太陽の下の18才』『狂ったバカンス』『女性上位時代』を収めたDVD－BOX。

8.6S

DVD

ザ・コード
LA MENTALE

VIDEO同時レンタル
ソニー・ピクチャーズエンタテインメント
2002年・仏・未公開・107分　監督／マニュエル・ボーシンハーク　出演／サミュエル・ル・ビアン　★3990円
●服役し更生した筈の男が、再び仁義なき抗争の世界に呼び戻されていく様を描いたフレンチ・アクション。

8.4S＆R

DVD

スパニッシュ・アパートメント
L'AUBERGE ESPAGNOLE

VIDEO同時レンタル
フォックス　ホーム　エンターテイメント
2003年・仏＝スペイン・122分　監督／セドリック・クラピッシュ　出演／ロマン・デュリス　★4179円
●スペイン・バルセロナのとあるアパートで、国籍の違う7人の留学生たちが繰り広げる青春コメディ。

8.6S＆R

DVD

サイレント・ワールド
POST IMPACT

VIDEO同時レンタル
ハンド
2004年・米・未公開・95分　監督／クリストフ・シュラーエ　出演／ディーン・ケイン　★5040円
●巨大彗星の衝突によって氷河期となった地球を舞台に、人類は生存の道を模索する……。壮大なスケールで描くSFパニック巨編。予告編付き。

8.6S＆R

DVD

ロード・オブ・ザ・リング 王の帰還 コレクターズ・エディション
THE LORD OF THE RINGS : THE RETURN OF THE KING

VIDEO7.24レンタル
日本ヘラルド映画
2003年・米・200分　監督／ピーター・ジャクソン　出演／イライジャ・ウッド　★4935円
●昨年度アカデミー賞作品賞以下、11部門に輝いたファンタジーシリーズの最終章。145分の特典映像ディスクと2枚組。全作セット（14805円）も同時発売。

8.4S／7.24R

おすすめ未公開作品 これだけは見逃すな！

丸山尚輝

DVD

VIDEO同時レンタル
ファインフィルムズ
2002年・韓・未公開・104分
監督・脚本／キム・ヒョンソク
出演／ソン・ガンホ、キム・ヘス、鈴木一真、伊武雅刀、チョ・スンウ
★3990円

8.6S&R

爆裂野球団！

YMCA BASEBALL TEAM

野球に青春を懸けた男達の熱いドラマ！

●今、最も映画の熱い国、韓国が放つスポ根エンタテインメント。20世紀初頭の朝鮮を舞台に、野球に青春を懸けた男たちの姿を描いた、胸熱くなる感動作だ。スポーツ好きの学士を軸にして、様々な人間模様や時代背景を織り込んだ脚本はピカイチ。見せ場を用意したクライマックスでは、思わず涙を流した。主演は、「シュリ」や「殺人の追憶」で知られるソン・ガンホ。彼が心を寄せる女性監督に「愛の群像」のキム・ヘス。日本からも、見た目はイチロー、でも役名は“野村ヒデオ”の鈴木一真と、その父親役で伊武雅刀が出演している。2003年度福岡アジア映画祭グランプリ受賞。映像特典として、オリジナル予告編と特別予告編を同時収録する。

学士の家系でありながら、野球に夢中のホチャン。彼が入団した“YMCA野球団”は、国を代表する最強のチームへと成長するが、そんな彼らの前に日本の占領軍チームが立ちはだかる……。

DVD

MUSA－武士－特別版

MUSA

VIDEO同時レンタル
ワーナー・ホーム・ビデオ
2001年・韓・133分
監督／キム・ソンス
出演／チャン・ツィイー、チョン・ウソン
★3129円
●韓国と中国のトップスターのコラボによる時代活劇。メイキング2種、インタビュー2種、NG集、Favorite Musicなどの映像特典付き。

8.6S&R

DVD

ブラック・デモンズ

BLACK DEMONS

VIDEO同時発売
タキコーポレーション
91年・伊・未公開・90分　監督／ウンベルト・レンツィ　出演／ジョー・バロフ
★4935円
●「人喰族」などで知られるU・レンツィ監督が、その才能を遺憾なく発揮したスプラッタ・ホラー。気の弱い人＆心臓の弱い人、ご注意!!

8.6S&R

DVD

着信アリ

VIDEO同時レンタル
角川映画
2004年・日・112分
監督／三池崇史、脚本／大良美波子　出演／柴咲コウ、堤真一　★4935円
●「世界の中心で、愛をさけぶ」の柴咲コウ主演のホラー。80分に及ぶ特典映像入りディスクと2枚組。おまけ付き、3枚組初回限定版（7140円）も同時発売。

8.6S&R

DVD

悪い男

BAD GUY

VIDEO同時発売
エスピーオー
2001年・韓・103分
監督／キム・ギドク
出演／チョ・ジェヒョン　★5040円
●「魚と寝る女」のキム・ギドク監督が描くラヴ・ロマンス。ビデオクリップ、関係者インタビューなどの映像特典のほか、豪華BOX仕様、縮刷版劇場パンフレット付き。

8.6S&R

DVD

ぼくは怖くない

IO NON HO PAURA

VIDEO同時レンタル
ハンド
2003年・伊・109分
監督／ガブリエーレ・サルヴァトーレス
出演／ジュゼッペ・クリスティアーノ
★4935円
●ニコロ・アンマニーティのベストセラー小説を映画化した、純真な少年の物語。監督来日インタビュー、メイキングなどの映像特典付き。

8.6S&R

DVD

ハッピーエンド　特別版

HAPPY END

VIDEO同時レンタル
ワーナー・ホーム・ビデオ
99年・韓・100分
監督／チョン・ジウ
出演／チョン・ドヨン、チュ・ジンモ
★3129円
●「スキャンダル」のチョン・ドヨンが大胆な濡れ場を魅せるラヴ・サスペンス。Q＆A、About Character、Music Videoなどの映像特典付き。

8.6S&R

★価格はすべて税込み。ただし、レンタルのみの場合は無表記。Sはセル、Rはレンタル、TFはテレビフィーチャー、OVはオリジナルビデオ。

美しい夏キリシマ

黒木和雄が描く戦争レクイエム

文・新田隆男

本誌昨年十二月下旬号のインタビューで、出演者の小田エリカはこんなことを語っている。

「黒木監督がこれはOKでこれではNGとか、一切おっしゃらないことに不安も感じたんです。そして、ある日意を決して、監督にお伺いしたんです。（中略）監督はびっくりなさったみたいで、役者が出してくる自然なものを撮ってゆく主義だと説明してくださったんです」

このインタビューには後日談がある。今回、発売されるDVDにはさまざまな映像特典が収録されているが、その中のひとつである監督インタビューに、そうした演出方法の真意を説明している箇所があったのだ。

「歴史的な知識を勉強しておいてもらおうとはまったく思わず、むしろそうした知識は詰め込んでもらわないほうが良かったんです。日常を生きるためにかえって、どうやって飯を食うか、どうやって泣くか、どうやって叱るか、どうやって歩くか、ということに専念してもらったほうが時代のリアリティが出る、と。そういう考え方でいるものですから。俳優さんたちが、薩摩弁を使って日常の仕事をいつものようにやってくれるだけでいい、という演出だったんです」

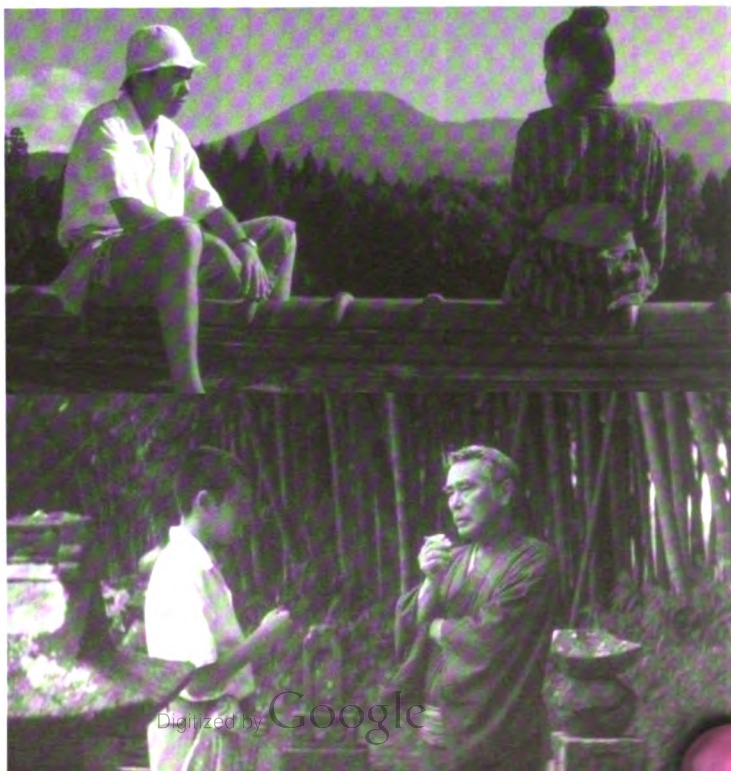
すでに敗戦を目前としながら、そのことを知らぬまま淡々と生きる人々。「美しい夏キリシマ」はまさに全編に亘って、1945年という「今」をただひたすらに生きた人々を描く、ということを貫いているのだ。

キネマ旬報日本映画作品賞&監督賞受賞

03年度本誌ベスト・テンで第一位を獲得し、同時に日本映画監督賞、新人男優賞も受賞したこの作品。受賞コメントの中で監督は今回のテーマについて、「正直、映画化したくない題材、一番描きたくない世界でした。だから、当初は戸惑いまし

美しい夏キリシマ

◎2003年・日本・カラー・16:9LBスコープサイズ・ドルビーデジタル・1時間58分
◎監督／黒木和雄　出演／柄本佑、原田芳雄、香川照之、左時枝、寺島進、小田エリカ
◎特典：メイキング、監督インタビュー、劇場予告、撮影風景スチル・ギャラリー、TV特番『黒木和雄のレクイエム』（テレビ宮崎制作）、黒木和雄監督&映画批評家・佐藤忠男氏による本編コメンタリー

◎8月27日発売／4935円（税込）
◎発売元／東芝エンタテインメント
販売元／ハピネット・ピクチャーズ

た。少年時代の思い出が私自身にとっては非常に恥ずかしいことでしたし、それを再現するのは自己弁明になってしまうのではないかと……」と語った。「美しい夏キリシマ」で物語の中心となる主人公の康夫は、数カ月前、グラマン機の機銃掃射によって、親友を失っている。康夫はその時のことを親友の妹に、「おいは兄さんを、助けきらんかった…こげんして、尻もちをついて…兄さんは両手をおいの方に差し出して、おいに助けを求めたときに、おいは恐ろしゅうて逃げてしもた。兄さんの頭は、ザクロんごとまっぷたつに割れちょって…」と、説明する。

今回のDVDには、当時の体験を振り返る監督の姿も収録されているが、本編を見てからそのインタビューを見れば、そこで監督の口から語られる言葉がおどろくほど康夫の話そのものであることがわかるだろう。監督は、この作品が自伝的と評される毎に、「フィクションの部分も多い」と語るが、この部分に関しては間違いなく自伝的、いや自伝なのだ。

「どうしても気が進まずにずっと見送ってきてたのですが、やはり死んだ友人たちのためのレクイエムとして、映画を作る必要があるのではないかと日増しに思うようになりました。それと同時に、今の時代の空気が、私の少年時代に非常に似てきた感じがするんですね」

と、これも本誌日本映画ベスト・ワン、及び日本映画監督賞受賞の際のコメントである。最新作は、長崎への原爆投下の前日を描いた「TOMORROW／明日」、今回の「美しい夏キリシマ」とともに戦争三部作とも言われている「父と暮せば」。今度は広島の原爆投下から3年、生き残った後ろめたさから幸せになることを拒絶するヒロイン、美津江の物語となる。「父と暮せば」にある「幸せになってはいけないのではないか」というヒロインの重い問いかけは、明らかに「美しい夏キリシマ」の康夫の背負った思いとイコールである。

「霧島」ではなく「キリシマ」

そういえば、なぜ、「美しい夏キリシマ」で、霧島は片仮名なのか。これに関して監督はメイキングの中でこう謎解きをしている。

「広島や長崎は、原爆のヒロシマ、原爆のナガサキという形で片仮名で表現されることが多くなりました。霧島をあえて片仮名にしたのも、戦争はもっと早く終わるべきだった、そうであれば、霧島の夏も美しい夏だったに違いない、という思いを込めたかったからなんです」

ナガサキ、キリシマ、そしてヒロシマ。それぞれの場所、それぞれの時代を「今」として描き続ける監督自身が誰よりも、平成十六年の「今」、敗戦から60年を経た「今」をきっちりと生きている。凛とさせられるのは映像の丹精な美しさと完成度だけではなく、その姿に、でもあるのだ。

No.
142
キネ旬DVDコレクション

油断大敵

油断大敵

◎2004年・日本・カラー・16:9LBビスタサイズ・ドルビーステレオ・1時間50分
◎監督／成島出　出演／役所広司、柄本明、夏川結衣、菅野莉央、前田綾花、水橋研二、津川雅彦、奥田瑛二、淡路恵子
◎特典：インタビュー（役所広司、柄本明）
◎7月23日発売、4935円（税込）
◎発売元／カルチュア・パブリッシャーズ
販売元／ケンメディア

今後が非常に楽しみな成島出監督のデビュー作

文・滝矢直

警察の取調室。刑事になりたての仁（役所広司）が、盗みの常習犯〝ネコ〟（柄本明）を聴取している。これまで35回も捕まりながら、6回に1回はうまく釈放に持ち込むという口達者ぶりに乗せられて、男やもめの苦労話や、娘が通う教会の先生に惚れてることなどを話し始める仁。おいおい、犯人相手にそんなことまでしゃべっちゃっていいの？なめられちゃってんじゃない？　ところがそんな仁に「手柄、立てさせてやっから」と言うと、ネコは自供を始めるのである。

〝油断大敵〟な刑事と泥棒の不思議な関係

「油断大敵」の原作『捕まえるヤツ　逃げるヤツ』（文藝春秋社刊）は、群馬県警の刑事官、警察本部課長、警察署長などを歴任した飯塚訓氏が、現役やOBの警察官、泥棒を取材し、彼らにまつわる人情味あふれるエピソードを綴ったノンフィクションの短編集。映画は、その中の〝ネコさん〟を通り名とする泥棒と刑事の実話を軸に、いくつかの驚いたり笑ってしまう警察と泥棒の裏話が織り込まれている。

飯塚氏によると、取調室での刑事と犯人のやりとりは心理合戦。頭の中で量刑を計算しながら黙秘したり、自供を巧みに小出しにしていく犯人。一方、犯人を〝落とす〟＝自供させたい刑事は「鰻丼食べるか？」といったドラマのようなセリフを使ったり、肉親を面会させて情に訴えたり、「自白してくれ」と土下座して犯人に頼んだ（！）なんていうエピソードまで、原作には登場する。前述のように、身の上話や世間話で気を許

させることも、勿論アリなのだ。犯人の方も「この刑事だったら信頼できる」と思ったときには、余罪まで全て話してくれることもあるとか。またベテランの泥棒が、これはと見込んだ若い刑事を育てるべく、泥棒の手口や哲学などを伝授したりもするのだ。かくして刑事と犯人の間には、あるときはライバル、あるときは師弟といった不思議な関係が成立するのである。

成島出監督

信頼とリスペクトに支えられた映画

成島出は監督デビュー作にして、役所広司、柄本明という豪華な顔合わせを実現したが、これまでに役所主演の「大阪極道戦争・しのいだれ」「シャブ極道」で脚本を、柄本が初監督した「空がこんなに青いわけがない」では助監督を務めるなど、両氏との関わりは深い。二人に加え、淡路恵子、津川雅彦、奥田瑛二といったキャストについて監督は「宝物と思っていた人たち」と答えている。一方、俳優陣も口を揃えて「映画界でもっとも監督デビューを期待されていた」と成島出を賞賛するなど、監督がこれまでのキャリアで築いた俳優との信頼関係が、特典で収録されているインタビューから伝わってくる。役所広司と柄本明を「メジャーのトップとマイナーのトップ」と、舞台挨拶で紹介した津川雅彦は言い得て妙だったが、その日本映画界のツー・トップはインタビューの中で、お互いの演技を「直球」「変化球」とキャッチボールに例えている。役所の実直さと柄本の飄々としたクセ者ぶり、本作ではそれぞれが醸し出す雰囲気が、絶妙のコンビネーションを生み、刑事と泥棒の奇妙な友情話に人間的なふくらみを持たせているのだ。

ネコに素質を見込まれた仁が、刑事として成長し、出所したネコに「お互い健康に注意して頑張りましょう」などと一升瓶の酒を送られるまでになった頃、再びネコが捕まった。取調室で、またしても訥々と自分のことを話し始める仁。娘の反対で教会の先生との再婚をあきらめたこと。そんな娘が、天職を見つけ自らの翼で飛び立とうとしていること。役所の10分に亘る一人台詞を、無言の演技で受ける柄本。才能を認めあう2大俳優が見せる名場面に、「泥棒のぞくぞくするような快感は、いい刑事がいればこそ」というネコの言葉が思い浮かぶ。快感を知れば知るほど、きっと刑事も泥棒も俳優もやめられない。泥棒を天職と思っているネコの過去を調べた仁は、「ネコさんも初めて盗みをやったとき、娘と同じ翼を手に入れたんじゃないかな」と語りかける。いまや一人前の泥棒刑事となった仁の言葉に、ネコがついに〝落ちた〟と思ったら……後にはしたたかな彼らしい〝オチ〟がついていた。うう〜む、まさに油断大敵！

特典映像で、舞台挨拶のたびに柄本が「この映画を宣伝してください」と言っていたのが印象的だった。公開時は単館上映で、話題性的にやや埋もれてしまったのが残念だが、人生を背負った人間の顔をしっかり描き、監督としての翼を得た成島出にとっては大きく羽ばたくデビュー作となったのではないだろうか。

No. 143 キネ旬DVDコレクション

渥美清メモリアル
渥美清・もう一つの世界

渥美清メモリアル
渥美清・もう一つの世界

◎監督／野村芳太郎　撮影／川又昂　出演／渥美清
◎特典：予告編、特製ブックレット
◎7月24日発売／15960円（税込）
◎発売・販売元／松竹ホームビデオ

「白昼堂々」

観る人の心をつかむ人情喜劇

文・野村正昭

渥美清さんの訃報に接したのは、JR新橋駅改札口近くでの見知らぬ人たちの会話だった。「渥美清が死んだらしいよ」と。96年8月7日、暑い昼下りだった。

慌てて知人に連絡し確認し、衝撃を受けた。実際に亡くなったのは8月4日で、その間に茶毘に付されていたという。69年に始まった「男はつらいよ」シリーズは全48作で終了した。何作か短評を書かせてもらう機会があり、中には苦言を呈した作もあったが、日本映画史上に燦然と輝くシリーズであることには敬意を表していた。何しろ中学生の頃から劇場でリアルタイムに見ていた観客だったから、初期作品（特に「続男はつらいよ」69年）には「映画のいろは」を教わったような気さえする。

「男はつらいよ」以外の渥美さんの出演作4本が、「渥美清・もう一つの世界」と題してDVD-BOX化されることになったが、これは同時に監督の「野村芳太郎BOX」であり撮影の「川又昂BOX」でもある。二人の関わった秀作「左ききの狙撃者・東京湾」（62年）や「影の車」（70年）「疑惑」（82年）もDVD化されることを願いつつ、この稿を記

「拝啓天皇陛下様」
◎1963年・日本・カラー・16:9LBスコープサイズ・ドルビーデジタル（モノラル）・1時間40分
◎原作／棟田博　共演／長門裕之、中村メイコ、左幸子

「続拝啓天皇陛下様」
◎1964年・日本・カラー・16:9LBスコープサイズ・ドルビーデジタル（モノラル）・1時間34分
◎原作／棟田博　共演／藤山寛美、小沢昭一、久我美子、南田洋子

「白昼堂々」
◎1968年・日本・カラー・16:9LBスコープサイズ・ドルビーデジタル（モノラル）・1時間39分
◎原作／結城昌治　共演／倍賞千恵子、田中邦衛、佐藤蛾次郎

「でっかいでっかい野郎」
◎1969年・日本・カラー・16:9LBスコープサイズ・ドルビーデジタル（モノラル）・1時間31分
◎共演／岩下志麻、財津一郎、長門裕之、伴淳三郎

そうと思う。

渥美清の出世作
「拝啓天皇陛下様」2作

「拝啓天皇陛下様」は63年4月28日に公開された。ゴールデンウィークの看板作品であり、松竹も力を入れていたことが分かる。主人公・山田正助は極貧育ちゆえに、軍隊ほど住み心地の良い所はない。雨が降っても三度のメシは食えるし、戦友もできた。上官に殴られ、理不尽な仕打ちにあっても、彼にとって軍隊は天国だ。物語は正助の戦友である作家（長門裕之）の視点から語られ、庶民の善良さ、小狡さを渥美清は絶妙に演じて、彼の出世作となる。軍隊の機構を正攻法で描くのではなく、角度をずらして見せたことにより、ラストの「拝啓天皇陛下様。陛下よ、あなたの最後のひとりの赤子が、この夜、戦死をいたしました」という字幕が、なまじの反戦映画より、よほど胸に響く。

「拝啓天皇陛下様」

「続拝啓天皇陛下様」は64年1月1日に公開された。堂々たる正月映画である。続編といえ物語は別物だが、原作者は同じ棟田博であり、主人公の山口善助も、前作の山田正助と、ほぼ同じキャラクターである。脚本には野村監督と多賀祥介に加えて、後年「男はつらいよ」で名コンビを組む山田洋次監督が参加している。

「続拝啓天皇陛下様」

前半は北支戦線が舞台だが、主人公の設定を民間からの献納犬を飼育する軍犬兵にしたところがユニークだ。元の飼主ヤエノ（久我美子）との交流や、友人である中国人・王万林（小沢昭一）、その妻（南田洋子）と、渥美清との丁々発止のやりとりは、さすがに見応えがある。

スリ集団のリーダー、
そして2代目無法松

68年10月26日に公開された「白昼堂々」は結城昌治原作で、九州の筑豊に実在した泥棒集落の物語。炭鉱が閉鎖され、都会に出稼ぎに来た万引集団の中心人物が渥美清であり、かつてのスリ仲間で今はデパートの保安係（藤岡琢也）と、昔世話になったスリ係の刑事部長（有島一郎）の3人の切れ味の良い演技には唸らされる。子供がデパートに展示されている水槽を見て、「（魚は）泳がなければ死んでしまうんだね」という何気ない呟きが、藤岡の胸を搏つ件りは秀逸。集団万引でしか生きられない登場人物たちの心理を的確に伝えていると思う。

同じ題材で、東宝で坪島孝監督「喜劇泥棒大家族・天下を盗る」（72年）が、同じ原作で、松竹で森﨑東監督「女咲かせます」（87年）が作られたが、この「白昼堂々」が一番面白い。

「白昼堂々」

69年4月26日に公開された「でっかいでっかい野郎」は、渥美清版〝無法松の一生〟。どこへ行っても厄介者で無鉄砲な2代目・無法松きどりの主人公が大暴れし、劇中でも露骨に「無法松」の名前が口にされる。但し、吉岡夫人代りのヒロイン（岩下志麻）がマドンナではなく、主人公の恋心は中川加奈に向けられて、ふられてしまう。松竹とは縁が深いにもかかわらず、48作も製作されながら一度も登場しなかった「男はつらいよ」シリーズでの岩下志麻の不在の意味も考えさせられたりするのだが、渥美清の人気をいかに定着させるか、その魅力の生かし方を探る試行錯誤の1本といえるだろう。そして4カ月後の69年8月27日「男はつらいよ」第1作が公開される……。

「でっかいでっかい野郎」

No. 144 キネ旬DVDコレクション

ドッグヴィル コンプリートBOX

ドッグヴィル
コンプリートBOX

ドッグヴィル
◎2003年・デンマーク・カラー・16:9スコープサイズ・5.0chドルビーサラウンド・2時間57分
◎監督／ラース・フォン・トリアー　出演／ニコール・キッドマン、ポール・ベタニー、クロエ・セヴィニー、ジェームズ・カーン
◎特典：関連予告編／テスト撮影シーン／ヴィジュアル・エフェクト解説／記者会見風景／カンヌ国際映画祭リポート／インタビュー（ニコール・キッドマン、ラース・フォン・トリアー監督、ヴィベケ・ウィンデロフ（製作））

ドッグヴィルの告白
◎監督／サミ・サイフ　出演／ラース・フォン・トリアー、ニコール・キッドマン

◎7月23日発売／7140円（税込）
※それぞれ単品も同時発売（「ドッグヴィル」・4935円／「ドッグヴィルの告白」・3990円）
◎発売元／アーティストフィルム　販売元／ジェネオン　エンタテインメント

ドッグヴィルの迷路をたどり直す コンプリートなスペクタクル

文・杉原賢彦

133分の特典映像が語る

ラース・フォン・トリアーの「ドッグヴィル」は、奇妙さと、正統性と、そして必然性の映画だ。スリリングな実験性と、めまいのような眩惑性と、突発的な笑譃性によって、映画を生きることの困難をほのめかすような映画だ。いや、いったいそれは映画なのだろうか。いや、映画に違いない。ぼくたちは、「ドッグヴィル」の177分のなかに、間違いなくスペクタクルを見いだすし、俳優たちがさらけ出してゆくそれぞれの人物の生と日常にいつしかまなざしを奪われ、心は魅入られてしまうからだ。

このたびリリースされた「ドッグヴィル　コンプリートBOX」は、フォン・トリアーの魅惑の作品「ドッグヴィル」の、未分明の秘密を探るにまさに恰好の素材と機会だ。

初回限定生産となる「ドッグヴィル　コンプリートBOX」は、「ドッグヴィル」本編に加えて現場のキャスト&クルーを追ったドキュメンタリー「ドッグヴィルの告白」、加えて総尺数133分におよぶ特典映像によって構成されている。いわば「ドッグヴィル」という町の全体像が見渡せる仕様となっているのだ。そしてBOXに含まれた特典映像を見たとき、ぼくたちはさらなる感動に心を鷲づかみにされずにはおかない——。

定番メニューともいうべきトレーラーやキャスト&クルーへのインタビュー、地元デンマークのテレビ局が制作したカンヌ国際映画祭レポート、「ドッグヴィルの告白」の抜粋映像＋αに

よって構成された「告白部屋」などがぎっしり並ぶなか、「テスト撮影」と「ヴィジュアル・エフェクト」という項目に注目してほしい。「ドッグヴィルの告白」のなかのベン・ギャザラのセリフではないが、《狂った》映画だと納得せずにはいられなくなる内容。……が、その狂い方のなかに、壊れんばかりに真摯なフォン・トリアーの映画への愛を、俳優たちが壊れていった現場のすさまじさをうかがい知る。ありうべきアナザー・ドッグヴィルと言うべき「テスト撮影」でそもそもの企画と方法論について語るフォン・トリアーの執念、「ヴィジュアル・エフェクト」のなかで視覚担当のピーター・ヒョースが語る、156台（!）の天井に設置されたDVを使った俯瞰撮影の映像の秘密……。

シチュエーション・ドラマの試み

ところで、「ドッグヴィル」のストーリーそのものはシンプルだ。アメリカ・ロッキー山脈の麓に位置する小さな町ドッグヴィルに、ギャングたちから逃れてきた女グレース（ニコール・キッドマン）がたどり着く。彼女に同情し、ギャングたちから匿うことを決議した町の人々との奇妙な営みが開始される。……小さな町の景観は、家々や道路の境界を示すまるで交通標識のような白い線によって表され、壁のない家の内部にはごくわずかの家具が置かれ、住民たち――豪華と言って過言ではない俳優たちが演じる――の日常が描かれる。まるで舞台にしつらえられた書き割りのようなセット。徹底的に簡素化されたこの記号のような町のなかで、156台の天井からの俯瞰キャメラが住民の一挙手一投足を見つめ、フォン・トリアー自身が操作する手持ちキャメラが住民の表情を切り取る。

虚構の、偽の町。だがこれを演劇的と呼ぶことは不可能だ。演劇には不可能な視座とまなざしが、「ドッグヴィル」を支配する。グレースと町の人々の間に構築されてゆく関係と、その背後に経過する町の人々の日常の、錯綜する関係が透かし見える奇妙な眩惑。やがてぼくたちは、自身の眼が158台目のキャメラになっていることに気づく……。そう見つめる者のまなざしによってつくられてゆく、ひとつの町と人々の物語……。

自らが157台目のキャメラとなったフォン・トリアーの秘かな狙いは、あるシチュエーションを構築／提示することではなかったのだろうか、と思う。とりわけ、白痴集団に遭遇した女性の混乱を描いた「イディオッツ」と高い親近性を持つであろう「ドッグヴィル」は、ある状況下に人を投げ入れ真実を探った「イディオッツ」やあるいは「ダンサー・イン・ザ・ダーク」の、いわばシチュエーション・ドラマを極限まで突き詰め煮詰められたものとして現前しうるのではないか。トム役のポール・ベタニーが「告白部屋」で「きっとラースは、前にこの作品を撮ろうとして『イディオッツ』になったんだ」と漏らすのは、ある意味で的を射ていたのだ。このシットドラマはそれゆえ、人物を演じるキャストの高い志と演技力を要求し葛藤を与える。カサヴェテスとは方法論を異にしながらも、同じように人物の真実に迫ろうとした「ドッグヴィル」は、ドッグヴィラジャーの物語であると同時に、それ以上に俳優たちのドキュメンタリーとなるだろう。「ドッグヴィル　コンプリートBOX」をご覧あれ。町と人々に交錯する迷路をたどり直せ。映画を生きることの困難と狂気の愛の、まごうことなき真実に心うたれよ。

日本映画紹介

データ表記■製作会社／配給会社／封切日／C＝カラー、BW＝モノクロ、PC＝パートカラー（使用フィルム：F＝フジ、EK＝コダック、A＝アグファ）／BU＝ブローアップ／FR＝フィルムレコーディング、LC＝レーザーシネマ／S＝スタンダード、V＝ヴィスタ、EV＝ヨーロピアンヴィスタ、CS＝シネマスコープ／D＝ドルビー、DSR＝ドルビーSR、S＝ステレオ、M＝モノラル／上映時間／映倫指定／封切代表館／M＝モーニングショー、E＝イヴニングショー、L＝レイトショー

メシア —伝えられし者たち—

ケイエスエス＝スター・バレー作品（制作協力＊フイルムフェイス）／ケイエスエス配給／04・1・10／C（DLP）・V・S／95分／テアトル池袋

スタッフ■監督／脚本＝千葉誠治　製作＝仁平幸男／藤井淳史　企画＝川上泰弘／神長大　プロデューサー＝前島良行　ライン・プロデューサー＝萩原淳　原案＝川上泰弘　撮影＝袴田竜太郎　照明＝木村匡博　編集＝三條知生　録音＝吉田憲義　美術＝髙橋俊秋　衣裳＝沢谷良　音楽＝大坪直樹　音楽協力＝前橋侯志　スクリプター＝野林香里　スチール＝中居琴子　スチール応援＝増本雅人　VFX＝井手広法／岩谷和行　音響効果＝村田裕子　アクション監督＝下村勇二　アクション協力＝UDEN FLAME WORKS　操演＝吉田宗生　助監督＝猪腰弘之　主題歌＝Mira Hoshine「蒼い夏」

キャスト■紀紗…森田彩華　龍示…松田悟志　八重…清水あすか　北主守鏑…浅井星光　北主守ヒトマサ…松重豊　樋浦勉　松田賢二　潤…崎本大海　筒井万央　鶴岡大二郎　井元由香　玉城満　田中淳子　福嶌徹　園村健介　内ヶ崎ツトム　村山健太　関田法拳　岩尾隆明　原田直輝　佐藤友一　川上大吾　櫻井太郎　知名剛　大城彰利　当館由亮　大城孝充　大渡忍弘

解説■沖縄の離島を舞台に、琉球王朝時代からの主守家の血を引く少女の戦いを描いたアクション。監督は「巌流島 GANRYUJIMA」の千葉誠治で、脚本も監督自ら執筆。撮影を「ＲＥＤ ＨＡＲＰ ＢＬＵＥＳ」の袴田竜太郎が担当している。主演は、「船を降りたら彼女の島」の森田彩華と「仮面ライダー龍騎 ＥＰＩＳＯＤＥ ＦＩＮＡＬ」の松田悟志。

略筋■沖縄のある離島に暮らす中学生の紀紗は、琉球王朝時代から続く南主守家の後継者。ところが、長年、南主守に兵として使われていた北主守の血を引く新当主・ヒトマサが積年の恨みを晴らし、王朝復興の為に隠した財宝の在処を記した巻物を奪おうと島に乗り込んで来た。紀紗を守るべく、戦いを挑む護衛の龍示と八重。壮絶な戦いの末、ふたりはヒトマサ率いる鏑をはじめとする北一族との前に力尽き倒れるが、その時、当主としての紀紗の眠れるパワーが覚醒。ヒトマサを退治した彼女は、それまで忌み嫌っていた南主守の新しい当主として、島で生きていくことを誓うのであった。

CASSHERN

松竹＝プログレッシブ ピクチャーズ＝エレクトリック・ゴースト＝衛星劇場＝テレビ朝日＝朝日放送＝タカラ＝伊藤忠商事＝ＴＯＫＹＯ ＦＭ＝イーソリューションズ＝菱和ライフクリエイト＝ビッグショット提供作品（企画協力＊RADIANT PICTURES／制作プロダクション＊プログレッシブ ピクチャーズ）／松竹配給／04・4・24／C（HD・FR・EK）・CS・DDS RD—EX／141分／丸の内ピカデリー2

スタッフ■監督／撮影監督／編集＝紀里谷和明　製作代表＝大谷信義／岩崎美範／紀里谷和明／石川富康／早河洋／西村嘉郎／佐藤慶太／伊藤英介／伊達寛／佐々木経世／西岡進／村山創太郎　製作＝久松猛朗　「ＣＡＳＳＨＥＲＮパートナーズ」＝野田助嗣／伊東森人／浅田伸／松浦強／原田達哉／山田久美子／中川滋弘／溝口靖／木村純一／福吉健　須田博文　深沢義啓／久保弥／竹川洋志／瀧川正靖／吉田雅尋／黒坂修／古川一博／荒川みず恵／鳴島誠一郎／田中迪／大島和樹／高中裕二　プロデュース＝宮島秀司／小澤俊晴　プロデューサー＝若林利明　アソシエイトプロデューサー＝野地千秋／田中誠／姉川佳弘　ラインプロデューサー＝椋樹弘尚　コーディネイト＝浅田有一　製作担当＝武石宏登　配給＝北川淳一　原作＝竜の子プロダクション「新造人間キャシャーン」　脚本＝紀里谷和明／菅正太郎／佐藤大　撮影＝紀里谷和明／森下彰三　照明＝渡部嘉　録音＝矢野正人　プロダクションデザイナー＝林田裕至　コンセプチュアルデザイン＝木村俊幸／林田裕至／庄野晴彦／DK　アートディレクター＝平井淳郎　セットデザイナー＝平井亘／浅野誠　セットデコレーター＝赤塚佳仁　アートプロデユース＝赤塚佳仁　衣裳＝北村道子　〝キャシャーン〟コンセプチュアルデザイン＝Ｋｅｎ　アンドロ軍団ラバースーツデザイン＝百武朋　ラバー

スーツ造型／特殊メイク＝TOMO 音楽＝鷺巣詩郎 音楽スーパーバイザー＝本田優一郎／沖田英宣 音楽プロデューサー＝高石真美 ミュージックエディター＝秋山和恵／佐竹央行 スクリプター＝櫛川泰子 スチール＝沖村アキラ／廣田美緒 VFXスーパーバイザーズ＝木村俊幸／野崎宏二 CGIプロダクション＝N-DESIGN CGディレクター＝野崎宏二 CGスーパーバイザー＝庄野晴彦 モーションキャプチャー・スーパーバイザー＝山路和紀 サウンドエフェクトスーパーバイザー＝柴崎憲治 サウンドエフェクトエディター＝伊藤瑞樹 ヘア アンド メイクアップアーティスト＝稲垣亮弐 アクションディレクター＝諸鍛冶裕太 バトルシーンコンテ＝樋口真嗣 操演＝羽鳥博幸／宇田川幸夫／高見澤利光 CLAY ANIMATION＝I TOON 総監修／デザイン＝伊藤有壱 アニメーションディレクター＝長井勝見 アニメーター＝溝口広幸 造形＝山下健一郎 助監督＝野間詳令 主題歌＝宇多田ヒカル「誰かの願いが叶うころ」

キャスト■東鉄也／キャシャーン…伊勢谷友介 上月ルナ…麻生久美子 ブライキング・ボス…唐沢寿明 東博士…寺尾聰 東ミドリ…樋口可南子 上月博士…小日向文世 アクボーン…宮迫博之 サグレー…佐田真由美 バラシン…要潤 上条中佐…西島秀俊 内藤薫…及川光博 坂本…寺島進 上条将軍…大滝秀治 老医師…三橋達也 ブライキング・ボスの妻…鶴田真由 池上…りょう 関口…玉山鉄二 ルナの母親…森口瑤子 老軍人…伊藤幸純／山本哲也／児玉頼信／戸沢佑介 東博士助手…戸田昌宏／亀石太夏匡／伊藤淳史／水谷ノブ 聴衆…坂本宗一郎／桜井聖 兵士（鉄也）…嶋田達樹 兵士…鷹見洋介 隊長…清水昭博 秘書…浜崎貴司 親衛隊…潮見諭／石川治雄／城戸暁人／北浪／かとべ／白石義清 青年…吉家明仁／佐野大樹 操縦士…道躰雄一郎／山本忠 新造人間…猪又輝之／小笠原真愛 幼少の鉄也…寺島涼音 幼少のルナ…森迫永依 戦場の子供…谷端奏人 戦場の母親…野辺陽子 第7管区子供…中條友彪／山口愛／飯塚雅己／柿澤崇之／柿澤司 坂本の娘…佐藤未来 ブライキング・ボスの子…福島翔大 上条将軍の女…山下由紀子 上条将軍の看護婦…はるか／ルチアーノ／松田ひみこ／泉愛子 カメラマン…村松秋彦 第7管区の人々…TAKURO／HISASHI／河瀬直美／広澤草／松江勇武／遊人／木村貴史／猪股克介 ナレーション…納谷悟朗 （ボディダブル）鉄也…山本忠／夏山剛一 ルナ…小笠原真愛 ブライキング・ボス…猪又輝之／竹内康博 アクボーン…平田茂雄 バラシン…葉都英樹 サグレー…本多剛幸／佐野弥生 ミドリ…野辺陽子 池上…高橋マナミ 関口…都成信智 兵士…原田光規／矢島聖児／笹川大輔／葉都英樹

解説■架空の世界を舞台に、人類と新生命体との戦いを収めるべく立ち上がった新造人間・キャシャーンの活躍を描いたSFアクション。監督は、本作が初の劇場用作品となるヴィジュアル・アーティストの紀里谷和明。往年のヒーロー・アニメーションを下敷きに、紀里谷監督と「攻殻機動隊 STAND ALONE COMPLEX」の菅正太郎、「COWBOY BE—BOP」の佐藤大が共同で脚本を執筆。撮影監督及び撮影に紀里谷監督、撮影に「双生児 GEMINI」の森下彰三がそれぞれあたっている。主演は「赤い月」の伊勢谷友介。

略筋■50年続いた大戦に勝利した大亜細亜聯邦共和國。ところが、その繁栄の裏側では様々な病気が人類を脅かしていた。そんな中、重い病に苦しむ妻・ミドリの為に、人間のあらゆる部位を自在に造り出す〝新造細胞〟理論を提唱していた東博士は、軍部の援助により本格的に研究を開始するが、実験場から新生命体〝新造人間〟が誕生。大多数は軍によって始末されるも、生き延びたブライキング・ボスら数名の新造人間たちは、生きる為に容易に戦いの道を選んでしまう人類の世界を破壊しようと、攻撃を仕掛けて来た。再びの戦火。それを収めるべく立ち上がったのは、先の大戦で戦死し、新造細胞によって蘇生した東博士の息子・鉄也だった。上月博士の開発したボディスーツを着用し、新造人間〝キャシャーン〟として生まれ変わった彼は、新造人間たちとの共存への道を模索しながら、しかし戦いを強いられていく。そして、破滅。だが、キャシャーンは愛する恋人・ルナの魂と共に憎しみのない世界の創世を夢見て、新天地へと飛び立つのであった……。

CUTIE H♡NEY キューティーハニー

キューティーハニー製作委員会（トワーニ（東芝＝ワーナー・ブラザース映画＝日本テレビ放送網）＝バップ＝日本テレビ音楽＝バンダイ＝WOWOW＝東急レクリエーション＝LATERNA）作品（企画協力＊ダイナミック企画／制作＊トワーニ／制作協力＊シネバザール）／ワーナー・ブラザース映画配給 04・5・29／C（HD24p、デジカム・FR・EK）・

V・DSRD／映倫／丸の内シャンゼリゼ

スタッフ■監督＝庵野秀明 製作＝加賀義二／加藤鉄也 キューティーハニー製作委員会＝平井文宏／毎熊邦夫／佐藤敦／水田伸生／稲垣貫思／重松修／大島満／岡本東郎／田村学／吉岡正敏／金谷勲夫／堀込祐輔／東聡／竹内淳／浜野隆／青木竹彦／武田吉孝／会田郁雄／山本裕三／板垣彰宏／小俣明徳／高見義雄／北﨑広実 企画＝奥田誠治／中嶋哲也 企画協力＝樋口真嗣／山賀博之／伊藤伸平／関根真吾 プロデューサー＝甘木モリオ／川端基夫 制作担当＝梶川雅也 原作＝永井豪 脚本＝高橋留美／庵野秀明 撮影＝松島孝助 照明＝吉角荘介 編集＝奥田浩史 録音＝橋本泰夫／白取貢 美術＝佐々木尚 装飾＝嵩村裕司 ハニー&パンサークロー衣裳制作＝S.O.C. パンサークロー衣裳制作＝竹田団吾 四天王衣裳制作＝坂根真美子／植松かおり／岩淵玲子／渡辺葉子 戦闘員&OL制服制作＝鈴木雅子／野村奈央 スタイリング＝島津由行 スタイリスト＝村田由紀／田中円香 音楽＝遠藤幹雄 スクリプター＝河島順子 Bキャメラ＝ウォン・オン・リン ステディカム＝金子雪生 音VE＝柳慎二／千葉清美 音響効果＝伊藤進、／西村洋一 サウンド編集＝浅梨なおこ ビューティー・ディレクター＝柘植伊佐夫 特殊メイク＝原口智生／森田誠／伊藤成昭 キャラクターデザイン＝寺田克也／安野モヨコ／出渕裕／貞本義行／すぎむらしんいち アクション監督＝山田一善 武術指導＝シンシア・ラスター 操演＝羽鳥博幸／宇田川幸夫 監督補＝尾上克郎／摩砂雪 助監督＝水村秀雄 主題歌＝倖田來未「キューティーハニー」「Into your heart」 (特撮) 特撮監督＝神谷誠 特撮＝特撮研究所 撮影＝中根伸治 照明＝安藤和也 美術＝松浦芳／花谷充泰／山崎巧嗣 操演＝中山亨／横井豊／梶政幸 ジルタワー製作＝大澤哲三／田島勇／田島喜志子／皆川由己／中原裕典 (視覚効果) VFXプロデューサー＝大屋哲男 VFXスーパーバイザー＝佐藤敦紀／道木伸隆 視覚効果＝マリンポスト／モーターライズ／日本映像クリエイティブ／マットガールズ／H.E.A.T. (アニメーション) 演出＝今石洋之／平松禎史 キャラクターデザイン／作画監督＝平松禎史 アニメーション製作協力＝LATERNA／ガイナックス／東映ビデオ アニメーション制作＝東映アニメーション プロデューサー＝北﨑広実／松井俊之／佐藤裕紀 プロデューサー補＝松村俊輔 製作担当＝松坂一光 デジタル撮影＝三晃プロダクション／広川二三男／大西弘悟／緒方美佐子／花見早苗 編集＝後藤正浩 美術＝美峰／加藤浩／小椎尾佳代／野村正信／八木琴美／澤田朋子 スクリプター＝小川真美子 特殊効果＝下川信裕／TOEI ANIM SFX-D5 絵コンテ＝今石洋之 色彩設計＝辻田邦夫 演出助手＝大塚隆史

キャスト■キューティーハニー／如月ハニー…佐藤江梨子 秋夏子…市川実日子 早見青児…村上淳 シスター・ジル…篠井英介 ブラック・クロー…及川光博 ゴールド・クロー…片桐はいり コバルト・クロー…小日向しえ スカーレット・クロー…新谷真弓 執事…手塚とおる リヨウ宇津木…京本政樹 鬼谷京子…吉田日出子 NSAクライアント…松田龍平 加瀬亮 岩松了 松尾スズキ 嶋田久作 倖田來未 虻川美穂子 伊藤さおり 井口昇 石井克人 三木俊一郎 轟木一騎 大崎章 田中要次 出渕裕 佐藤左吉 大河内浩 森下能幸 山賀博之 山崎潤 菅原卓磨 神谷誠 小川敏明 金剛地武志 眞島秀和 澤田千作 清水一哉 玉一敦也 山本貴浩 堀内俊成 福知幸太 高槻祐士 保科光志 田中良 伊達久光 岡本敏幸 四方宗 福島匡幸 重見成人 武田滋裕 吉田瑞穂 マーク武蔵 秋山智彦 横山誠 小野廣巳 柴崎岳史 林佳 小鉄 渡辺麻由 西門えりか しりあがり寿 永井豪

解説■美少女戦士・キューティーハニーの活躍を描いたアクション・コメディ。監督は「式日 SHIKI-JITSU」の庵野秀明。永井豪による同名コミックを下敷きに、「顔」の高橋留美と庵野監督が共同で脚本を執筆。撮影を「さゞなみ」の松島孝助が担当している。主演は「プレイガール」の佐藤江梨子。

略筋■如月博士によって開発された“Iシステム”の研究を受け継いだ宇津木博士が、“シスター・ジル”率いる謎の秘密結社“パンサークロー”に誘拐された。彼らが狙うは、永遠の美をもたらすIシステムの本体であるハートのチョーカー。そして、それを持っているのが如月博士の愛娘・如月ハニーこと愛の戦士“キューティーハニー”だ。チョーカーに触れることでキューティーハニーに変身出来るアンドロイド、ハニーは、警察庁公安8課の女警部・秋夏子や毎朝新聞記者の早見青児と協力して、父を殺したパンサークローから宇津木博士を救出すべく戦いを挑む。そして、シスター・ジルが送り込んで来る“四天王”戦士たちを倒し、シスター・ジルを消滅させたハニーは、実はアメリカ課報機関のエージェントだった早見と警察庁を辞職した夏

子と共に、探偵事務所を始めるのだった。

GET UP!（ゲロッパ！）

シネカノン＝電通＝ハピネット・ピクチャーズ＝グッドニュー＝メモリーテック＝アーティストフィルム作品／シネカノン（A Line）配給／03・8・16／C（EK）・V・DDSRD―EX／112分／銀座シネ・ラ・セット

スタッフ■Directed by＝井筒和幸 "Get up!" Soul Bros＝李鳳宇／遠谷信幸／川島晴男／平川容豊／川崎代治／甲斐真樹 Executive Producer＝李鳳宇 Producer＝石原仁美 Line Producer＝﨑 映 Production Manager＝杉原奈実 Written by＝羽原大介／井筒和幸 Cinematographer＝山本英夫 Lighting Director＝渡邊孝一 Film Editor＝冨田伸子 Sound Mixer＝白取貢 Art Directors＝大坂和美／須坂文昭 Wardrobe＝浜井貴子 Music Supervisor＝高宮永徹 Music Coordinator＝馨紀子 Script Continuity＝森直子 Still Photographer＝小餅利也 Special Effects＝船橋誠 Sound Effects＝北田雅也 Special Make-up Artists＝松井祐一／福雅朗／三好史洋／山口深雪 Tatoo Artist＝霞涼二 Stunt Supervisor＝中瀬博文 1st Assistant Director＝小笠原直樹 主題歌＝SOULHEAD『GET UP!』

キャスト■羽原大介…西田敏行 上原かおり…常盤貴子 太郎…山本太郎 金山正男…岸部一徳 晴彦…桐谷健太 健二…吉田康平 岡部優夫…長塚圭史 上原歩…太田琴音 ウィリー…WILLIE RAYNOR 田中…益岡徹 金山ひとみ…藤山直美 高井…ラサール石井 木下…木下ほうか 村山…田中哲司 緒方…塩見三省 佐藤和子…根岸季衣 美容室のミツ＆寿司屋のタツ…篠井英介 藤沢香織…寺島しのぶ 沼田…小宮孝泰 羽原の妻…奥貫薫 駅員…徳井優 有名ロック歌手…トータス松本 正体不明の男…岡村隆史 日向丈 鈴木想生 田中要次 児玉謙次 及川以造 長原成樹 森安建雄 鹿野浩明 岩崎ひろし 嶋崎伸夫 加藤満 坂上和子 日高奈留美 KING OF SOUL（ドン勝本、ニック岡井、マイケル鶴岡） 中谷健 森進伍 大原真美 ひばり ケイスケ JIMMY ANGEL LAURA WINDRATH 桐島優介 春木みさよ 宇藤大騎 塚越小幸 片山佳 村木仁 山賀教弘 井上夏葉 松川真也 松本智代美 宮川宏司 池上リョヲマ 児玉偉久 井上真吾 千頭麗 森下雅美 森下里美

解説■ソウル・ミュージックの帝王"ジェイムズ・ブラウン"誘拐計画や生き別れた娘との再会など、収監を目前に控えた組長を巡って繰り広げられる騒動を描いた人情コメディ。監督は「ビッグ・ショー！ ハワイに唄えば」の井筒和幸。脚本は、「Dolphin Through」の羽原大介と井筒監督の共同。撮影を「新仁義なき戦い 謀殺」の山本英夫が担当している。主演は、「釣りバカ日誌13」の西田敏行と「千年の恋 ひかる源氏物語」の常盤貴子。第77回本誌日本映画新人女優賞（寺島しのぶ）受賞、第58回毎日映画コンクール男優主演賞（西田敏行）受賞、第46回ブルーリボン賞主演男優賞（西田敏行）、助演男優賞（山本太郎）受賞、第28回報知映画賞最優秀主演男優賞（西田敏行）受賞、第27回日本アカデミー賞優秀主演男優賞（西田敏行）受賞、文化庁支援作品。

略筋■収監を目前に、組を解散し引退を決意した羽原組組長・羽原大介には、やり残したことがふたつあった。ひとつは、25年前に生き別れた娘・かおりとの再会。もうひとつは、大好きなジェイムズ・ブラウンの名古屋公演に行くこと。そこで、そんな羽原の為に弟分の金山組組長・金山は、子分の太郎たちにJBの誘拐を命ずるが、JBを良く知らない太郎たちは、マリンリゾート"ラグーナ蒲郡"で行われるものまねショウに出演すべく来日していたJBのそっくりさん・ウィリーを誤って拉致してしまう。ところが、そのショウを取り仕切るプロダクションの社長がかおりだったことから、羽原は図らずもかおりと再会を果たし、行方不明になったウィリーの穴を羽原がステージに立って埋め合わせてくれたお陰で、かおりの羽原に対する長年のわだかまりも解ける。そして、羽原収監の日。偶然にも時の総理の恥ずかしい写真をゲットしていた金山のお陰で超法規的措置が取られ無罪となった羽原は、かおりと一緒に孫娘・歩の学校の創立記念式典に出席し、皆でダンスに興じるのであった。

呪怨2

パイオニアLDC＝日活＝オズ＝ザナドゥー＝角川書店＝東京テアトル作品（製作プロダクション＊オズ／製作協力＊あおぞらインベストメント）／ザナドゥー＝東京テアトル配給／03・8・23／C（EK）・V・DTS／92分／渋谷シネ・アミューズ

スタッフ■監督／脚本＝清水崇 製作＝熊澤芳紀／川上國雄／沼田宏樹／江川信也／松下晴彦 「呪怨2」製作委員会＝辻畑秀生／山口敏功／柴田一成／高延寛子／寺嶋博礼／永江信昭／福田豊治／一

瀬隆重／松野久美子／宇田川昭次／赤井淳司／森好文／榎本憲男　プロデューサー＝一瀬隆重　ライン・プロデューサー＝金子哲男　製作担当＝岩下真司　撮影＝喜久村徳章　照明＝才木勝　編集＝高橋信之　録音＝小松将人　美術＝常盤俊春　衣裳＝横田祐子／樋口仁巳　音楽＝佐藤史朗　音楽プロデューサー＝慶田次徳　選曲＝佐藤啓　スクリプター＝湯澤ゆき　スチール＝石原宏一　視覚効果＝松本肇　デジタル・エフェクト＝豊直康／足立麻沙子　サウンド・エフェクト＝柴崎憲治　助監督＝安達正軌　主題歌＝推定少女「間違い」

キャスト■原瀬京子…酒井法子　三浦朋香…新山千春　大国圭介…葛山信吾　千春…市川由衣　山下典孝…堀江慶　佐伯伽椰子…藤貴子　佐伯俊雄…尾関優哉　石倉将志…斎藤歩　石倉薫…結城しのぶ　大林恵…山本恵美　宏美…黒石えりか　原瀬亜紀…水木薫　DJ…秀島史香　石倉和正…影山英俊　少女役の俳優…戸田比呂子　監督…ジーコ内山　助監督…眞島秀和　産婦人科医…伊藤幸純　相馬…中村靖日　渡辺…山上賢治　医師…田邉年秋／寺十吾　看護婦…野島千佳／嘉川澪　男の子…松川尚瑠輝　少女の伽椰子…鎌田悠／鎌田咲良

解説■呪われた家を訪れた人々を襲う怨霊の恐怖を描いたホラー・シリーズの劇場版第2作。監督・脚本は「呪怨」の清水崇。撮影を「黄泉がえり」の喜久村徳章が担当している。主演は「それいけ！アンパンマン　ゴミラの星」の酒井法子。

略筋■TV番組「心霊特番！呪われた家の真実・謎の怪死事件に迫る！」のロケで、〝呪われた一軒家〟を訪れたホラー・クィーンの異名を持つ女優・原瀬京子。そこで、少年・俊雄と彼の母・伽椰子の霊に取り憑かれた彼女は、帰り道、フィアンセの将志と共に交通事故に遭い、将志は意識不明の重体で入院、自身も流産してしまう。そしてそれ以後、ロケに参加したレポーターの朋香やメイクの恵をはじめとするスタッフ、ディレクターの圭介、更に京子主演の映画でエキストラに来ていた女子高生・千春にも俊雄と伽椰子の呪いが波及し、命が奪われていった。そんな中、流産した筈の京子が赤ん坊を出産した。だが、その子は……伽椰子！　数年後、呪われた子と知りながら、母性愛から伽椰子を育て続けていた京子は、しかし彼女に歩道橋から突き落とされ死亡する。

映画　犬夜叉　天下覇道の剣

「犬夜叉」製作委員会（小学館＝読売テレビ放送＝サンライズ＝小学館プロダクション＝日本テレビ放送網＝東宝＝読売テレビエンタープライズ）作品（アニメーション制作＊サンライズ）／東宝配給／03・12・20／C（デジタル・FR・F）・V・DD／98分／日比谷スカラ座2

スタッフ■監督＝篠原俊哉　演出＝西澤晋／小倉宏文／成田歳法／高木茂樹／篠原俊哉　キャラクターデザイン＝本橋秀之／菱沼義仁　総作画監督＝本橋秀之　作画監督＝中島里恵／羽山淳一／長屋侑里子／浜津武広／池平千里／橋本英樹／吉川真一／森下博光／吉崎誠／大浪太　「犬夜叉」製作委員会＝亀井修／小石川伸哉／吉井孝幸／斎藤裕／奥田誠治／藤原正道／田中光昭／植田文郎／山崎敏文／長谷川一／浅井認／窪康男／備前島幹人／高原建二／佃健二／弘中謙／金井塚悦子／松山浩士／乙部恭子／松本拓也／米倉功人／藤井義行／菊池浩志／大塚峰子／内田健二／富岡秀行／安齋進／竹内雅紀／小川健／佐藤可奈子／平井文宏／門屋大輔／宮崎啓子／平方真由美／斎春雄／村田祐一／山木戸徹／深井昭彦／角田博昭／冬柴正則　企画＝諏訪道彦／植田益朗　プロデューサー＝諏訪道彦／植田益朗／岩田幹宏　アシスタント・プロデューサー＝斎藤朋之／北田修一　原作＝高橋留美子　原案協力＝都築伸一郎／三上信一／熊谷崇／村上正直　脚本＝隅沢克之　撮影監督＝八木寛文／高橋雄大　撮影＝旭プロダクション／XEBEC CG　編集＝JAY FILM／山森重之　音響監督＝鶴岡陽太　録音＝名倉靖　美術監督＝石垣努　美術＝野村裕樹　音楽＝和田薫　音楽ディレクター＝高畑裕一郎／大泉浩之　音楽プロデューサー＝長澤隆之　音楽コーディネーター＝深井昭彦／眞野昇　背景撮影＝長谷川洋一　撮影協力＝真空管　CG監督＝古川貴之　CGプログラム＝日高一弘　CG協力＝デジキーノ　デジタル特効＝村上宜隆／中野剛／桜井英明　音響効果＝森川永子　絵コンテ＝篠原俊哉／西澤晋／筱雅律　色彩設計／色彩設定＝歌川律子　色指定＝河内山律子／鈴木依里／宮崎昌志／中里智恵　主題歌＝安室奈美恵「Four Seasons」

キャスト（声）■犬夜叉…山口勝平　日暮かごめ…雪乃五月　殺生丸…成田剣　叢雲牙…立木文彦　刹那猛丸…松本保典　犬夜叉の父…大塚明夫　十六夜…井上喜久子　弥勒…辻谷耕史　珊瑚…桑島法子　七宝…渡辺久美子　鞘…肝付兼太　冥加…緒方賢一　刀々斎…八奈見乗児　邪見…長島雄一　りん…能登麻美子　じいちゃん…鈴木勝美　ママ…百々麻子　草太…中川亜紀子

絵理…増田ゆき　由加…清水香里　あゆみ…岡本奈美　田中一成　西前忠久　川田紳司　水島大宙　望月健一　高階俊嗣　田中一永　安元洋貴　志乃宮風子　今井麻美　服部加奈子　子供たち…小学館アフレコ体験者（栗田大樹／加藤聖大／菅原雲花／下村直大／風見ゆうな／熊沢忠相／富﨑友香／大倉理恵）

解説■天下覇道の三剣を巡って繰り広げられる、半妖の少年・犬夜叉の戦いを描いた長篇アニメーション・シリーズの第3作。監督は「怪傑ナガネギマンとドレミ姫」の篠原俊哉。高橋留美子の原作コミックを下敷きに、「映画 犬夜叉　鏡の中の夢幻城」の隅沢克之が脚本を執筆。撮影監督に「映画 犬夜叉　鏡の中の夢幻城」の八木寛文と、高橋雄大があたっている。声の出演に、「名探偵コナン　迷宮の十字路」の山口勝平、「映画 犬夜叉　鏡の中の夢幻城」の雪乃五月ら。

略筋■かつて、犬夜叉の父が携えていた天下覇道の三剣のひとつであり、冥界を制する"叢雲牙"の700年に及ぶ封印が解けた。犬夜叉に取り憑き、冥界の門を開いて人界を取り込もうとする邪悪な意思を持つ叢雲牙。叢雲牙を破壊するには、犬夜叉が父から受け継いだ人界を制する"鉄砕牙"と犬夜叉の兄・殺生丸が持つ天界を制する"天生牙"が力を合わせるしかない。だが、反目する犬夜叉と殺生丸は戦いを繰り返すばかり。そんな中、かごめの念珠の力により犬夜叉を解放した叢雲牙が、今度は犬夜叉の父の恋敵であった猛丸を新たな使い手として冥界より呼び戻し、犬夜叉と殺生丸に戦いを挑んできた。果たして、対立しながらも叢雲牙と戦う犬夜叉と殺生丸は、遂に力を合わせ叢雲牙を破壊することに成功する。

※お詫びと訂正

7月下旬号（№1409）に掲載致しました作品データの一部に記載漏れがありましたので、ここに追加・訂正させて戴くと共に、読者の皆様及び関係者の方々にお詫び申し上げます。

「ヒバクシャ　HIBAKUSHA　世界の終わりに」

C（βカム・キネコ・16ミリ・EK）・S・M

「映画　あたしンち　ATASHIn'CHI」

C（デジタル・FR・F）・V・DDSRD―EX

外国映画紹介

データ表記■製作国＊製作会社／配給会社／製作年／封切日／C＝カラー、BW＝モノクロ、PC＝パートカラー／上映時間／S＝スタンダード、V＝ヴィスタ、CS＝シネマスコープ／D＝ドルビー・ステレオ、U＝ウルトラ・ステレオ、DSD＝ドルビー・ステレオ・ディジタル、DTS＝デジタル・シアター・システム、SDDS＝ソニー・ダイナミック・デジタル・サウンド、SR＝スペクトラル・レコーディング／EP＝エグゼクティヴ・プロデューサー

ビッグ・フィッシュ

Big Fish〔巨大魚〕

米＊コロンビア・ピクチャーズ・コーポレーション＝ザ・ザナック・カンパニー＝ジンクス・コーエン・カンパニー作品（コロンビア映画提供）／ソニー・ピクチャーズエンタテインメント配給／03＝04・5・15／C・V・SDDS／SRD／ドルビー／125分 字幕＝戸田奈津子

スタッフ■監督＝ティム・バートン 製作＝リチャード・D・ザナック／ブルース・コーエン／ダン・ジンクス EP＝アーン・L・シュミット 脚本＝ジョン・オーガスト 原作＝ダニエル・ウォレス 撮影＝フィリップ・ルースロ 音楽＝ダニー・エルフマン 美術＝デニス・ガスナー 編集＝クリス・リーベンゾン 衣裳＝コリーン・アトウッド

キャスト■若き日のエドワード・ブルーム…ユアン・マクレガー／エドワード・ブルーム…アルバート・フィニー／ウィル・ブルーム…ビリー・クラダップ／サンドラ・ブルーム…ジェシカ・ラング／ジェニファー・ヒル&魔女…ヘレナ・ボナム・カーター／ノザー・ウィンズロー…スティーヴ・ブシェミ／エーモス・キャロウェイ…ダニー・デヴィート／若き日のサンドラ・ブルーム…アリソン・ローマン／ドクター・ベネット…ロバート・ギローム／ジョセフィーン…マリオン・コティヤール／巨人カール…マシュー・マグローリー

解説■自分の人生をお伽話のように語る男と、彼の家族との絆を描いた感動作。監督は「PLANET OF THE APES／猿の惑星」のティム・バートン。脚本は「チャーリーズ・エンジェル」シリーズのジョン・オーガスト。原作はダニエル・ウォレスのベストセラー小説。撮影は「PLANET OF THE APES／猿の惑星」のフィリップ・ルースロ。音楽は「PLANET OF THE APES／猿の惑星」「シカゴ」のダニー・エルフマン。美術は「オー・ブラザー！」のデニス・ガスナー。編集は「PLANET OF THE APES／猿の惑星」「トリプルX」のクリス・リーベンゾン。衣裳は「シカゴ」のコリーン・アトウッド。出演は「スター・ウォーズ」シリーズのユアン・マクレガー、「背信の行方」のアルバート・フィニー、「あの頃ペニー・レインと」のビリー・クラダップ、「私は「うつ依存症」の女」のジェシカ・ラング、「PLANET OF THE APES／猿の惑星」「記憶のはばたき」のヘレナ・ボナム＝カーター、「スパイキッズ」シリーズのスティーヴ・ブシェミ、「オースティン・パワーズ ゴールドメンバー」のダニー・デヴィート、「マッチスティック・メン」のアリソン・ローマン、「銀幕のメモワール」のマリオン・コティヤールほか。

略筋■自分の人生をお伽話のように人々に語り続ける有名な男、エドワード・ブルーム（アルバート・フィニー）。未来を予見する魔女（ヘレナ・ボナム＝カーター）のこと、若き日の自分（ユアン・マクレガー）が一緒に旅した巨人カール（マシュー・マグローリー）のこと、人を襲う森とその先にある美しい町のこと。そんな彼の話には誰もが楽しい気分になった。しかしジャーナリストとして活躍する息子のウィル（ビリー・クラダップ）は、自分の結婚式の祝宴でエドワードが巨大魚の話をして注目をさらってから、父親に憤りを抱いている。しかしある日、母親のサンドラ（ジェシカ・ラング）から、患っていた父の容態が悪化したとの報告。ウィルは出産間近の妻、ジョセフィーン（マリオン・コティヤール）と共に実家へと向かった。エドワードは一日のほとんどをベッドで過ごしつつも、相変わらず思い出話を語っている。ジョセフィーンはサンドラとの恋愛話を聞かされ、そのロマンティックな内容に心を打たれた。だがウィルはそれが事実ではなく作り話であることに苛立つ。しかしそんな時、ウィルは、エドワードの話の中に出てきた彼の戦死を告げる電報をサンドラが見つけたことで、お伽話の中に真実が隠されていたのに気づいて衝撃を受ける。まもなくエドワードの容態は急変。人生の最期を迎えた父に、枕元でウィルは父の物語を豊かに創作してしゃべって聞かせる。そしてエドワードの葬式には、彼が語った物語に出てきた人々がたくさん集まってくるのだった。

トロイ

Troy〔トロイ（地名）〕

米＊ワーナー・ブラザース映画＝レイディアント・プロダ

クションズ＝プランBティルムズ作品／ワーナー・ブラザース映画配給／04＝04・5・22／C・CS・SRD／DTS／163分　字幕＝菊地浩司
スタッフ■監督＝ウォルフガング・ペーターゼン　製作＝ウォルフガング・ペーターゼン／ダイアナ・ラスバン／コリン・ウィルソン　脚本＝デイヴィッド・ベニオフ　撮影＝ロジャー・プラット　音楽＝ジェイムズ・ホーナー　美術＝ナイジェル・フェルプス　編集＝ピーター・ホーネス　衣裳＝ボブ・リングウッド
キャスト■アキレス…ブラッド・ピット／ヘクトル…エリック・バナ／パリス…オーランド・ブルーム／ヘレン…ダイアン・クルーガー／アガメムノン…ブライアン・コックス／オデッセウス…ショーン・ビーン／メネラオス…ブレンダン・グリーソン／プリアモス…ピーター・オトゥール／ブリセウス…ローズ・バーン／アンドロマケ…サフロン・バロウズ／テティス…ジュリー・クリスティー
解説■古代ギリシャのトロイ戦争における愛憎のドラマを描いた歴史スペクタクル。叙事詩人ホメロスによる「イリアス」にインスピレーションを受けている。監督・製作は「パーフェクト　ストーム」のウォルフガング・ペーターゼン。脚本は「25時」のデイヴィッド・ベニオフ。撮影は「ハリー・ポッターと秘密の部屋」のロジャー・プラット。音楽は「すべては愛のために」のジェイムズ・ホーナー。美術は「パール・ハーバー」のナイジェル・フェルプス。編集は「ハリー・ポッターと秘密の部屋」のピーター・ホーネス。衣裳は「タイムマシン」のボブ・リングウッド。出演は「オーシャンズ11」のブラッド・ピット、「ハルク」のエリック・バナ、「ロード・オブ・ザ・リング」シリーズのオーランド・ブルーム、「ミシェル・ヴァイヨン」のダイアン・クルーガー、「X－MEN2」のブライアン・コックス、「ロード・オブ・ザ・リング」シリーズのショーン・ビーン、「コールドマウンテン」のブレンダン・グリーソン、「ファイナル・ステージ」のピーター・オトゥール、「スター・ウォーズ　エピソード2／クローンの攻撃」のローズ・バーン、「フリーダ」のサフロン・バロウズ、「ルーヴルの怪人」のジュリー・クリスティーほか。
略筋■スパルタの王メネラオス（ブレンダン・グリーソン）とトロイの王子ヘクトル（エリック・バナ）は、長年にわたる両国の戦いの集結を祝って宴を開いていた。しかしそんな中、ヘクトルの弟パリス（オーランド・ブルーム）と、メネラオスの妻ヘレン（ダイアン・クルーガー）が、許されぬ恋に落ちてしまった。侮辱を受けたメネラオスは、ヘレンの奪回を決意。彼の兄アガメムノン（ブライアン・コックス）は、4万ものギリシャ軍をトロイへと進軍させる。トロイのプリアモス王（ピーター・オトゥール）は苦悩の末、ギリシャ軍との全面戦争を選択。難攻不落のトロイへの攻撃の鍵を握るのは、ギリシャ軍最強の戦士と呼ばれるアキレス（ブラッド・ピット）だ。自分自身のためのみ戦う彼は、預言者である母テティス（ジュリー・クリスティー）から死の予言を受けつつも、トロイへと赴く。その激動の中、運命の女ブリセウス（ローズ・バーン）と出会う。やがてアキレスはヘクトルと一対一で対決し、ヘクトルが敗れて死亡。彼の死体を自分の陣地へ持ち帰ったアキレスだが、そこに危険を承知でプリアモス王が訪ねてくる。彼は息子ヘクトルの死体と、ブリセウスと共にトロイへ帰った。そしてアキレスも含むギリシャ軍の兵士たちは、トロイに運ばれた木馬に忍び込み、一気にトロイを攻める。その戦いの中で、プリアモス王が死亡。まもなくアキレスも、パリスが射った矢に倒れて息を引き取るのだった。

レディ・キラーズ

The Ladykillers（婦人殺人者たち）
米＊タッチストーン・ピクチャーズ＝ジェイコブソン・カンパニー作品／ブエナ　ビスタ　インターナショナル／04＝04・5・22／C・V・DTS／ドルビーデジタル／SDDS／104分　字幕＝石田泰子
スタッフ■監督＝ジョエル・コーエン／イーサン・コーエン　製作＝イーサン・コーエン／ジョエル・コーエン／トム・ジェイコブソン／バリー・ソネンフェルド／バリー・ジョセフソン　脚本＝ジョエル・コーエン／イーサン・コーエン　撮影＝ロジャー・ディーキンス　音楽＝カーター・バーウェル　音楽総指揮＝T・ボーン・バーネット　美術＝デニス・ガスナー　編集＝ロデリック・ジェインズ　衣裳＝メアリー・ゾフレス
キャスト■ゴースウェイト・ヒギンソン・ドア教授…トム・ハンクス／マンソン夫人…イルマ・P・ホール／ガウェイン…マーロン・ウェイアンズ／パンケイク…J・K・シモンズ／将軍…ツィ・マー／ランプ…ライアン・ハースト
解説■犯罪グループと老婦人の奇妙な対決を描くサスペンス・コメディ。1955年作品「マダムと泥棒」のリメイク。監督・製作・脚本は「デ

ィボース・ショウ」のジョエル・コーエン&イーサン・コーエン（イーサンは監督としてクレジットされるのはこれが初）。撮影も「ディボース・ショウ」のロジャー・ディーキンス。音楽も「ディボース・ショウ」のカーター・バーウェル。美術は「ビッグ・フィッシュ」のデニス・ガスナー。衣裳は「ディボース・ショウ」のメアリー・ゾフレス。出演は「キャッチ・ミー・イフ・ユー・キャン」のトム・ハンクス、「9デイズ」のイルマ・P・ホール、「最・新・絶叫計画」のマーロン・ウェイアンズ、「スパイダーマン」のJ・K・シモンズ、「ラッシュアワー」のツィ・マー、「タイタンズを忘れない」のライアン・ハーストほか。2004年カンヌ国際映画祭審査員賞受賞。

略筋■敬虔なクリスチャンであるマンソン夫人（イルマ・P・ホール）の家に、ゴースウェイト・ヒギンソン・ドア教授（トム・ハンクス）と名乗る中年男がやってくる。空き部屋ありの看板を見たという彼は、紳士的な態度でマンソン夫人の厳しい審査をパスした。寝室の他にも、教授は教会音楽の演奏のために地下室を借りたいと申し出る。マンソン夫人はしぶしぶ承諾。やがて地下室に、楽団のメンバーが到着する。実は彼らは教授が集めた犯罪グループであり、楽器など演奏したことのない面々ばかり。教授と、潜入と偵察専門のガウェイン（マーロン・ウェイアンズ）、トンネル掘りの天才の将軍（ツィ・マー）、格闘では負け知らずのランプ（ライアン・ハースト）、爆破アーティストのパンケイク（J・K・シモンズ）の5人は、カジノ船の地下金庫を狙うため、地下室の壁にトンネルを掘り始める。彼らはあっけなく金庫の大金を手に入れるが、最後の最後に、パンケイクの仕掛けた時限爆弾が誤作動し、犯罪の現場をマンソン夫人に目撃されてしまう。教授はマンソン夫人を言葉巧みに言い包めつつ、彼女を殺害する計画を立てる。刺客はグループの中から、くじ引きで選ぶことに。しかしマンソン夫人を殺す役割を負った者は不運にも次々と死に至り、ついには教授も死亡して、グループは全滅。マンソン夫人は、彼らが盗んだ金が地下室にあることを警察に報告するが、なんとその金は彼女のものになった。そしてマンソン夫人は全額、自分が関わるキリスト教系の大学に寄付するのだった。

デイ・アフター・トゥモロー

The Day After Tomorrow（明後日）

米＊セントロポリス・エンタテインメント＝ライオンズ・ゲイト＝マーク・ゴードン・カンパニー作品／20世紀フォックス映画配給／04＝04・6・5／C・CS・ドルビーSR／SRD／DTS／124分　字幕＝戸田奈津子

スタッフ■監督＝ローランド・エメリッヒ　製作＝マーク・ゴードン／ローランド・エメリッヒ　EP＝ウテ・エメリッヒ／ケリー・ヴァン・ホーン／ステファニー・ジェルマン　脚本＝ローランド・エメリッヒ／ジェフリー・ナクマノフ　撮影＝ユーリ・ステイガー　音楽＝ハラルド・クルーサー　美術＝バリー・チューシッド　編集＝デイヴィッド・ブレナー　衣裳＝レニー・エイプリル

キャスト■ジャック・ホール…デニス・クエイド／サム・ホール…ジェイク・ギレンホール／ローラ・チャップマン…エミー・ロッサム／ジェイソン・エヴァンス…ダッシュ・ミホーク／フランク・ハリス…ジェイ・O・サンダース／ルーシー・ホール医師…セラ・ウォード／J.D.…オースティン・ニコルズ／ブライアン・パークス…アージェイ・スミス／ジャネット・タカダ…タムリン・トミタ／パーカー…サーシャ・ロイス／テリー・ラプソン…イアン・ホルム／ベッカー副大統領…ケネス・ウェルシュ／ゴメス…ネスター・セラーノ／ブレイク大統領…ペリー・キング

解説■氷河期の到来により世界がパニックに陥った中、とある父と息子の絆を描くスペクタクル。監督・製作・脚本は「パトリオット」のローランド・エメリッヒ。撮影は「ブラック・ナイト」のユーリ・ステイガー。音楽は「13F」のハラルド・クルーサー。美術は「パトリオット」「デアデビル」のバリー・チューシッド。編集は「パトリオット」「〝アイデンティティー〟」のデイヴィッド・ブレナー。出演は「エデンより彼方に」のデニス・クエイド、「グッド・ガール」のジェイク・ギレンホール、「ミスティック・リバー」のエミー・ロッサム、「54〈フィフティ・フォー〉」のセラ・ウォード、「ロード・オブ・ザ・リング」のイアン・ホルムほか。

略筋■古代の気象を研究する気候学者のジャック・ホール（デニス・クエイド）は、地球の温暖化により、新たな氷河期が到来する不安を察知していた。すぐに手を打たねばいけないとアメリカ政府に警告するジャックだが、副大統領ベッカー（ケネス・ウェルシュ）は、経済コストを盾に彼の主張をいなしてしまう。しかしやがて、南極の氷棚から巨大な氷河が崩落。そこから東京、ハワイ、ニューデリー、

ロサンゼルスと、世界中で深刻な異常気象が立て続けに起きていった。そして本当に氷河期がやってくる。その頃、ジャックの17歳の息子サム(ジェイク・ギレンホール)は、友人の女の子ローラ(エミー・ロッサム)たちと参加した高校生学力クイズ大会の開催地であるニューヨークに足止めされていた。南の地への全米規模の大移動が始まる中、あわやというところで公立図書館に逃げ込んだサムたちは、そこにとどまって本を焼いて暖を取り、生き抜こうと必死に試みる。やがて、決死の覚悟でニューヨークにやってきたジャックが救出に駆けつけ、サムたちは無事に保護された。そして死亡した大統領の代わりに新大統領に就任したベッカーは、今までの行いを反省して、世に環境問題の大切さを訴えるのだった。

21グラム

21 Grams〔21グラム〕

米＊ディス・イズ・ザット・プロダクションズ＝Yプロダクションズ作品/ギャガ＝ヒューマックス共同配給/03＝04・6・5/C・V・ドルビーSR/ドルビーデジタル/124分　字幕＝松浦美奈

スタッフ■監督＝アレハンドロ・ゴンサレス・イニャリトゥ　製作＝アレハンドロ・ゴンサレス・イニャリトゥ　EP＝テッド・ホープ　脚本＝ギジェルモ・アリアガ　撮影＝ロドリゴ・プリエト　音楽＝グスターヴォ・サンタオラヤ　美術＝ブリジット・ブロシュ　編集＝スティーヴン・ミリオン　衣装＝マーレーナ・スチュワート

キャスト■ポール・リヴァース…ショーン・ペン/クリスティーナ・ペック…ナオミ・ワッツ/ジャック・ジョーダン…ベニシオ・デル・トロ/メアリー・リヴァース…シャルロット・ゲンズブール/マリアンヌ・ジョーダン…メリッサ・レオ/クローディア…クレア・デュヴァル

解説■1つの心臓をめぐって交錯する、1人の女と2人の男の皮肉な運命を描いた人生ドラマ。監督・製作は「アモーレス・ペロス」のアレハンドロ・ゴンサレス・イニャリトゥ。脚本も「アモーレス・ペロス」のギジェルモ・アリアガ。撮影は「アモーレス・ペロス」「25時」のロドリゴ・プリエト。音楽は「アモーレス・ペロス」のグスターヴオ・サンタオラヤ。美術も「アモーレス・ペロス」のブリジット・ブロシュ。編集は「コンフェッション」のスティーヴン・ミリオン。衣装は「ティアーズ・オブ・ザ・サン」のマーレーナ・スチュワート。出演は「ミスティック・リバー」のショーン・ペン、「ザ・リング」のナオミ・ワッツ、「ハンテッド」のベニシオ・デル・トロ、「ぼくの妻はシャルロット・ゲンズブール」のシャルロット・ゲンズブール、「デスティニー/愛は果てしなく」のメリッサ・レオ、「『アイデンティティー』」のクレア・デュヴァルほか。2003年ヴェネチア国際映画祭主演男優賞、助演男優賞、観客賞ほか多数受賞。

略筋■ニューメキシコ。ある日、クリスティーナ(ナオミ・ワッツ)に不幸な知らせが届く。夫と娘がトラックに轢き逃げされたのだ。悲しみの余り脱力したクリスティーナは、やめていたドラッグにまた手を出してしまう。そのトラックの運転手は、信仰に没頭することで人生をやり直そうとしている前科者のジャック(ベニシオ・デル・トロ)。とっさに逃げた彼だが、事故の真相を知ると、妻マリアンヌ(メリッサ・レオ)の制止を振り切って警察に出頭した。一方、クリスティーナの夫の心臓は、余命1カ月と宣告されていた数学講師のポール(ショーン・ペン)に移植され、彼の命を救った。しかし手術が成功すると、彼は妻メアリー(シャルロット・ゲンズブール)との心の溝が広がっていることを再確認する。そんな中、ポールは調査会社を使ってドナーの身元を突き止める。思い切ってクリスティーナに声をかけ、やがて心臓のことを告白するポール。最初は混乱するクリスティーナだったが、徐々にポールを愛し始め、すべての悲しみを終わらせるために、ジャックを殺してくれとポールに頼んだ。一方、ジャックは証拠不十分で釈放。ポールはジャックを探して会い、彼を殺したふりをしてクリスティーナの待つモーテルの部屋に戻る。しかしそこに自分の罪を感じているジャックが現われる。混沌とした場の中、ポールは自分で自分を撃ち、病院に運ばれ意識を薄れさせてゆくのだった。

訃報

—映画・TV界—

マリカ・レックさん（独／女優、歌手）5月16日に死去。90歳。エジプト生まれ。主にナチス・ドイツ時代に活躍し、「乞食学生」36、「さんざめく舞踏会の夜」39、「美貌の敵」44などに出演した。

トニー・ランドール氏（米／俳優）5月17日に死去。84歳。昨秋受けた心臓のバイパス手術後、肺炎を患っていた。41年にブロードウエーにデビュー。50年代初めにはTVにも進出し、75年にエミー賞に輝いた「おかしなカップル」、"Mr. Peepers" "Love, Sidney"などで活躍したほか、映画も「夜を楽しく」59、「恋をしましょう」60、「恋人よ帰れ」61、「花は贈らないで!」64、「キング・オブ・コメディ」83、「恋は邪魔者」03などに出演した。

リチャード・ビッグス氏（米／俳優）5月22日に死去。44歳。SFドラマシリーズ「バビロン5」など、TVを中心に活躍していた。

ニーノ・マンフレディ氏（伊／俳優）6月4日に死去。83歳。舞台俳優から映画界入りし、ディーノ・リージ監督の「ベニスと月とあなた」58、「ナポリと女と泥棒たち」66や、「あんなに愛しあったのに」74、「さまよえる人々」95などに出演。初監督作"Per Grazzia Ricevuta"71ではカンヌ国際映画祭新人監督賞に輝いた。

エドマンド・ディジュリオ氏（米／映画撮影技師）6月4日に死去。76歳。ステディカムなどを開発し、「バリー・リンドン」75などに携わる。02年にはアカデミー賞功労賞を受賞した。

ロナルド・レーガン氏（米／俳優、第40代米大統領）6月5日、肺炎のため死去。93歳。94年からアルツハイマー病を患い、自宅で療養していた。地方ラジオ局のスポーツアナウンサーを経て、37年に映画デビュー。「愛の勝利」39、「カンサス騎兵隊」40、「戦場を駈ける男」42、「命ある限り」49、「バファロウ平原」55などに出演するかたわら、民主党員として活動するが、50年代の"赤狩り"により62年に共和党員に転身。64年の「殺人者たち」を最後に映画界を退き、66年にカリフォルニア州知事に当選、2期8年を務める。80年の大統領戦で、現職のカーター大統領を破り、史上最高齢の69歳で大統領に就任。保守主義に基づき、ソ連に強硬な姿勢をとった後、当時のゴルバチョフ書記長との対話を進めて冷戦終結へと尽力し、89年までの2期を全うした。尚、俳優時代、日本では、ロナルド・リーガンと呼ばれていた。

コロムビア・トップ氏（本名＝下村泰／漫才師、元参議院議員）6月7日、呼吸不全のため死去。82歳。97年に胃がんの手術を受けた後、仕事を続けながら闘病していた。復員後の46年、漫才コンビ・青空トップ・ライトを結成し、風刺のきいた時事漫才が人気を呼び、TV、ラジオなどでも活躍する。参院議員当選後はコンビを解消し、司会や漫談など一人での活動が主となった。「おけさ鴉」58、「ニュージーランドの若大将」69、「西のペテン師 東のサギ師」71、「KUMISO」02などにも出演していた。

滝口康彦氏（たきぐち・やすひこ／本名＝原口康彦／作家）6月9日、急性循環器不全のため死去。80歳。運送会社事務員、炭鉱員などを経て執筆活動に入り、「高柳父子」「かげろう記」「霧の底から」などを発表。また、58年のサンデー毎日大衆文芸賞受賞作「異聞浪人記」は「切腹」62として、「拝領妻始末」は「上意討ち 拝領妻始末」67として映画化された。

冨田浩太郎氏（とみた・こうたろう／俳優）6月10日、肺炎のため死去。79歳。劇作家を志して上京するも、俳優に転向。52年の「真空地帯」で映画初出演後、「原爆の子」52、「胸より胸に」55、「森と湖のまつり」58、「あつい壁」70、「連合艦隊」81などに出演する。TVでは「ウルトラマン」「少年探偵団」など。また、俳優の指導にも熱心で、「俳優の音声訓練」「舞台と映像の音声訓練」などの著作も

ある。

野村万之丞氏（のむら・まんのじょう／本名＝耕介／狂言師）6月10日、神経性内分泌がんのため死去。44歳。4月中旬に発病、その後退院したが、病状が急変した。人間国宝の七世野村万蔵（現・野村萬）の長男として生まれ、3歳で初舞台。95年に万之丞を襲名。狂言師として活躍する一方、聖徳太子の時代の伎楽を復活させた〝真伎楽〟を創作し、世界公演の企画を進め、今年4月に北朝鮮で上演した。また、TVドラマの出演、NHK大河ドラマ『利家とまつ』の演技指導、長野パラリンピック閉会式の演出など多彩に活躍。99年のドキュメンタリー映画「萬歳楽」では監督、主演を務めた。田楽をよみがえらせた〝楽劇大田楽〟の構成、演出で93年度文化庁芸術祭賞受賞。来年1月に八世野村万蔵を襲名する予定だった。

レイ・チャールズ氏（米／ミュージシャン）6月10日、肝臓病のため死去。73歳。昨夏受けた人口股関節の手術後、体調を崩していた。極貧生活を送り、7歳で緑内障のため失明。15歳で孤児となるが、盲学校で独学で作曲を学び、ダンスホールで演奏を始める。ブルース、ジャズなどとゴスペルを組み合わせ、リズム&ブルース、ソウルなど新たな音楽ジャンルを築き、多くのミュージシャンに影響を与える。60年近いキャリアの中で、グラミー賞を12回獲得し、86年には米の〝ロックの殿堂〟入り。映画では、「シンシナティ・キッド」65、「夜の大捜査線」67の主題歌を手掛けたほか、「ブルース・ブラザース」80、「スパイ・ハード」96などに出演している。

イベント

日本漫画映画の全貌

いまや国際的にも評価の高い日本のアニメーションの原点である「漫画映画」200本を紹介。資料の展示や作品の上映などでその魅力を体感できる。

期間＝7月15日(木)～8月31日(火)10時～18時（入場は閉館30分前まで）

上映スケジュール＝
7月25日(日)12時「セロ弾きのゴーシュ」15時〈チェロとピアノのコンサート〉
8月7日(土)12時「ルパン三世 カリオストロの城」15時〈座談会〉
8月8日(日)12時「どうぶつ宝島」15時「風の谷のナウシカ」
8月14日(土)12時「わんぱく王子の大蛇退治」15時〈座談会〉
8月15日(日)12時「平成狸合戦ぽんぽこ」15時「パンダコパンダ」「パンダコパンダ雨ふりサーカスの巻」
8月28日(土)12時「龍の子太郎」15時〈座談会〉
8月29日(日)12時「アリーテ姫」15時「となりのトトロ」

料金＝1000円／中高生800円／小学生500円
会場＝東京都現代美術館
問＝03・5245・4111
http://www.mot-art-museum.jp

第20回あきる野映画祭

「映画館のない町で映画にふれる機会を」をテーマにスタートしたあきる野映画祭も20回目をむかえ、今年もあらゆる世代が楽しめるバラエティー豊かな作品が上映される。

上映スケジュール＝7月22日(木)11時40分〈オープニング・セレモニー〉12時10分「解夏」14時30分「伊豆の踊子」16時40分「阿修羅のごとく」19時15分「インファナル・アフェア」
7月23日(金)10時「花とアリス」12時35分「ホテル・ハイビスカス」14時30分「ドラッグストア・ガール」16時35分「ホテル ビーナス」19時「名もなきアフリカの地で」
7月24日(土)10時「キリクと魔女」11時30分「ジョゼと虎と魚たち」13時50分「g@me.」16時5分「座頭市」18時25分「ラスト サムライ」
7月25日(日)10時「名探偵コナン 銀翼の奇術師」12時10分「踊る大捜査線 THE MOVIE2 レインボーブリッジを封鎖せよ！」14時50分「半落ち」15時15分「ラブ・アクチュアリー」

料金＝一日通し券・1500円(前)1200円)／中高生1200円(前)1000円)／小学生600円(前)500円)／全日通し券3000円
会場＝秋川キララホール
問＝042・558・1893

スチームボーイ 19世紀ロンドン展

映画「スチームボーイ」の舞台となった19世紀ロンドンの街並、産業、技術などに着目。美術監督・木村真二氏の映画の美術背景原画を中心とした展示で、産業革命による都市構造の変化を表現する。

会期＝7月24日(土)～9月5日(日)10時～22時（入館は閉館30分前まで）
料金＝600円／大学・高校・専門生500円／4歳～中学生300円
会場＝森都市未来研究所（六本木ヒルズ森タワー50F）
問＝03・6406・6637
http://www.muf.jp/

韓流サマーキャンペーン 100名にプレゼント

海外ドラマやグルメ番組、トークショーなどを放映するエンターテイメント・チャンネルLaLa TVが8月の韓流番組放送を記念して、チャン・ドンゴン、ウォンビン、ソン・スンホンのポスターやDVD、オリジナルサウンドトラックなどを100名にプレゼントする。

受付＝～8月10日(火)
応募先＝http://www.lala.tv
問＝0120・977・888

映画連続講座vol.2開催 ～日本映画を関西から～

映画人を講師に招き、関西の映像文化の活性化を目的とする映画連続講座の第2弾が、7月30日(金)からスタートする。

7月30日(金)18時30分〈映画と動くこと―その考古学的考察〉講師：蓮實重彦
8月28日(土)14時〈他者としての自分を語る〉講師：吉田喜重
9月4日(土)14時〈映画に何ができるか〉講師：大森一樹
10月1日(金)18時30分〈映画における美術の位置付け〉講師：井川徳道
10月16日(土)14時〈映画表現ひた走る・その2〉講師：中島貞夫
10月30日(土)14時〈映画が幸せだった頃〉講師：田中徳三

料金＝1回券1500円／全通し券7200円
問＝06・6261・3563

TIGRAF ユースコンテスト U-23開催

23歳以下による3DCGアニメーション作品のコンテストが開催される。ノミネート作品の上映や表彰式のほか、クリエーター育成のためのセミナーも開かれる。

7月22日(木)13時〈入選作品上映〉17時30分〈表彰式〉
7月23日(金)13時〈セミナー1／ゲームクリエイターから見た必要な人材像とキャリアパスについて〉14時45分〈セミナー2／プロダクションが望む人材像とその教育につい

て）16時30分〈セミナー3／メイキング・オブ・マインド・ゲーム〉
料金＝無料（入場には事前登録が必要／http://www.tigraf.com/u-23/html/registration.html）
会場＝SKIPシティ 彩の国ビジュアルプラザ 映像ホール（埼玉県川越市）
http://www.tigraf.com/u-23

「キル・ビル2」モデルルーム、オープン

お台場の33階建超高層ツインタワー「THE TOWER ODAIBA」にタランティーノ監督作「キル・ビル2」をイメージしたモデル・ルームがオープン。非日常的な奇抜なアイデアを見所とする斬新でスタイリッシュな空間が楽しめる。
入室時間＝10時～18時
場所＝江東区青梅1丁目（りんかい線東京テレポート駅より徒歩1分）
問＝0120・924・526
http://www.towerdaiba.com

募集

シナリオ・センター公開講座

「娘道成寺 蛇炎の恋」の監督・脚本の高山由紀子氏がシナリオの発想から映画製作までを語る。
8月20日(金)13時30分（華麗な女形舞踏の世界をモチーフにして）18時30分（オリジナルシナリオの書き方と監督するということ）
料金＝1700円（「娘道成寺」鑑賞券付昼の回もしくは夜の回）／2200円（鑑賞券付昼夜通し）
会場＝シナリオ・センター3階（地下鉄表参道駅徒歩5分）
申込・問＝03・3407・6936／FAX03・3407・6946／e-mail：info@scenario.co.jp
※電話・FAX・メール（氏名・連絡先・券の種類を明記）で受付。メールは件名に「娘道成寺公開講座」と明記すること。

TSSショート・ムービー・フェスティバル作品募集

テレビ新広島が主催するショート・ムービー・コンペティションで作品を一般公募する。受賞作品は映画館上映、テレビ放送、ネット配信などで公開される予定で、賞金総額は50万円。フェスティバル最終日の11月5日に表彰式が行われる。
応募条件＝2003年1月以降に自主制作された15分以内の映像作品で、著作権が出品者本人に帰属していること。作品内で使用する音楽はフリーユースかオリジナルであること。ジャンル、プロ・アマ不問。他のコンペティションに出品した作品は発表歴、受賞歴を明記する。
応募方法＝①作品（S-VHSかVHS。一次・二次審査に合格した場合はminiDV）②応募用紙③約款を送付する。②③には署名、捺印する。
応募締切＝8月13日(金)必着
応募先＝〒734-8585 広島市南区出汐2-3-19 テレビ新広島 2004 TSSショート・ムービー・フェスティバル事務局
問＝082・256・2202
http://www.tss-tv.co.jp/

東京都

■スターライトシネマ～恵比寿ガーデンシネマ・セレクション～
各日19時より上映
7月30日(金)「クジラの島の少女」
7月31日(土)「セントラル・ステーション」
8月1日(日)「過去のない男」
料金＝入場無料
会場＝恵比寿ガーデンプレイス・センター広場
※18時より整理券配布、18時30分より入場、上映開始以降は整理券不要。荒天の場合、中止もあり
問＝03・5423・7111
http://www.gardenplace.co.jp

■日比谷図書館映画会
7月28日(水)14時「マルセルのお城」
料金＝入場無料
会場＝東京都立日比谷図書館
問＝03・3502・0101

■竹久夢二生誕120年記念祭
7月16日(金)～25日(日)13時、19時「夢二人形」「三面夢姿繪」「夢現坐乱事」
料金＝2000円
会場＝Dolls & Art Museマリアの心臓（渋谷区神南1-20-9パークウェイビルB1）
問＝03・3499・1508

■アニメーションおもしろ七変化！ 岡本忠成の世界
7月24日(土)10時30分「ふしぎなくすり」「ようこそ宇宙人」「キツツキ計画」
7月31日(土)10時30分「花ともぐら」「チコタン ぼくのおよめさん」「日本むかしばなし さるかに」
料金＝小・中学生100円／幼児無料／（引率）一般500円／高校・大学・シニア300円
会場＝東京国立現代美術館フィルムセンター
問＝03・5777・8600
http://www.momat.go.jp/

■無声映画鑑賞会
7月28日(水)18時30分
「怪談 有馬猫」「福寿草」
出演弁士＝澤登翠ほか
料金＝1800円（前1500円）／学生1600円／会員1000円
会場＝門仲天井ホール
問＝03・3605・9981

■ドキュメンタリー映画「にがい涙の大地から」上映会
7月30日(金)18時30分
料金＝1000円（前800円）／学生・60歳以上800円（前650円）

会場＝東京ウイメンズプラザホール（青山）
問＝03・3357・5140

■山形国際ドキュメンタリー映画祭2004プレ・イベント
7月21日(水)18時30分「GREAT SOCIETY」「一緒の時」「10 Minutes Older（オリジナル）」〈トークショー〉
料金＝1300円
会場＝アテネ・フランセ文化センター
問＝03・5362・0672

神奈川県

■日本のネオ・ホラーフィルム
7月24日(土)13時30分「CURE」16時「回路」
7月25日(日)13時30分「呪怨」16時「呪怨2」
7月31日(土)13時30分「富江」16時「富江replay」
8月1日(日)13時30分「富江re-birth」16時「富江最終章〜禁断の果実〜」
8月7日(土)13時30分「リング」16時「らせん」
8月8日(日)13時30分「リング2」16時「リング0〜バースデイ〜」
料金＝500円／小中学生300円／10回数券4000円
会場＝川崎市市民ミュージアム・映像ホール
問＝044・754・4500
http://home.catv.ne.jp/hh/kcm

■夏休み子ども映画会
7月29日(木)10時「ムーミン―はばたけ！ペガサス―」「北極のムーシカミーシカ」
7月30日(金)10時「プーさんとはちみつ」「わんぱくナージャの竜王退治」
7月31日(土)10時「魔女の宅急便」
料金＝入場無料（先着220名）
会場＝神奈川近代文学館ホール・展示館2階
問＝045・622・6666

■絵画制作ドキュメンタリーフィルム「鼓動」特別上映会
8月9日(月)13時「鼓動」
料金＝1000円
会場＝横浜市開港記念会館
問＝080・5520・2334
http://www.geocities.co.jp/CollegeLife.Cafe/7620/

■「こんばんは」上映会
7月27日(火)10時30分、14時「こんばんは」
料金＝950円
会場＝麻生市民館大ホール
問＝044・930・3373
http://movie007.hp.infoseek.co.jp/

新潟県

■市民映画を作る会第70回例会「ロスト・イン・トランスレーション」
7月25日(日)12時30分、14時50分、17時10分、19時30分
料金＝1700円(前)1400円／学生1500円／小学生・シニア1000円
会場＝長岡市立劇場
問＝0258・33・1231

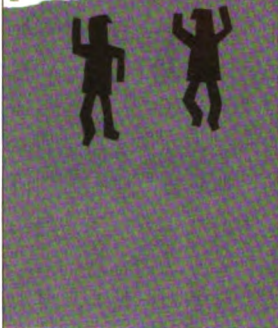
京都府

■モノクロームの子どもたち
7月22日(木)13時30分、17時「生れてはみたけれど」
7月23日(金)13時30分、17時「峠」「煙突屋ペロー」
7月24日(土)13時30分、17時「生れてはみたけれど」
7月25日(日)13時30分、17時「峠」「煙突屋ペロー」
7月29日(木)13時30分、17時「路傍の石」
7月30日(金)13時30分、17時「太陽の子」
7月31日(土)13時30分、17時「路傍の石」
8月1日(日)13時30分、17時「太陽の子」
料金＝常設展チケットで鑑賞可（500円／大高生400円／中小生300円）
会場＝京都文化博物館映像ホール
問＝075・222・0888
http://web.kyoto-inet.or.jp/org/bunpaku

■山形国際ドキュメンタリー映画祭2003セレクション
7月31日(土)14時、16時、18時「一緒の時」（同時上映「ショート・ジャーニー」）
料金＝1000円／会員700円
会場＝ひと・まち交流館 京都
問＝075・344・2371
http://dofil87.hp.infoseek.co.jp

兵庫県

■KEN-VI名画サロン
7月30日(金)10時30分、15時30分「黄色い大地」13時「菊豆〈チュイトウ〉」
7月31日(土)10時30分、15時30分「菊豆〈チュイトウ〉」13時「黄色い大地」
料金＝1200円(前)800円／大学生・シニア・障害者1000円／小中高生500円
会場＝兵庫県立美術館ミュージアムホール
問＝078・332・7050

■寺山修司◉映像詩展
7月24日(土)13時〈実験映画集B〉＝「青少年のための映画入門」「疱瘡譚」「ローラ」「審判」15時〈中編作品〉＝「草迷宮」「消しゴム」「二頭女」17時〈実験映画集C〉＝「檻囚」「トマトケチャップ皇帝」「ジャンケン戦争」「書見機」19時〈実験映画集B〉
7月25日(日)13時〈実験映画集B〉15時〈中編作品〉17時〈実験映画集A〉＝「蝶服記」「迷宮譚」「一寸法師を記述する試み」「マルドロールの歌」19時〈実験映画集C〉
7月26日(月)〈実験映画集B〉15時〈中編作品〉17時〈実験映画集C〉19時〈実験映画集A〉
7月28日(水)13時〈実験映画集A〉15時〈実験映画集C〉17時「初恋・地獄篇」19時〈中編作品〉
7月29日(木)13時「初恋・地獄篇」15時〈実験映画集A〉17時「上海異人娼館」19時〈中編作品〉
7月30日(金)13時「上海異人娼館」15時「初恋・地獄篇」17時「トマトケチャップ皇帝」19時〈中編作品〉

7月31日(土)13時「トマトケチャップ皇帝」15時「上海異人娼館」17時「初恋：地獄篇」19時〈中編作品〉
8月1日(日)13時〈中編作品〉14時30分「書を捨てよ町へ出よう」17時「田園に死す」19時30分「さらば箱舟」
8月2日(月)13時〈中編作品〉14時30分「さらば箱舟」17時「書を捨てよ町へ出よう」19時30分「田園に死す」
8月4日(水)13時〈中編作品〉14時30分「田園に死す」17時「さらば箱舟」19時30分「書を捨てよ町へ出よう」
8月5日(木)13時〈中編作品〉14時30分「書を捨てよ町へ出よう」17時「田園に死す」19時30分「さらば箱舟」
8月6日(金)13時〈中編作品〉14時30分「さらば箱舟」17時「書を捨てよ町へ出よう」19時30分「田園に死す」
料金＝1500円（前1300円）／学生1300円／シニア・小学生1000円／3回券3600円（前3300円）
会場＝神戸アートビレッジセンターB1
問＝078・512・5500
http://kavc.or.jp

広島県

■名作映画鑑賞会
7月24日(土)10時30分、14時、18時「桃太郎　海の神兵」
7月25日(日)10時30分、14時「白蛇伝」
7月30日(金)10時30分、14時、18時「少年猿飛佐助」
7月31日(土)10時30分、14時、18時「西遊記」
8月1日(日)10時30分、14時「安寿と厨子王丸」
8月4日(水)10時30分、14時、18時「はだしのゲン」
8月5日(木)10時30分、14時、18時「はだしのゲン2」
料金＝440円／こども220円
会場＝広島市映像文化ライブラリー
問＝082・223・3525

山口県

■コミュニティシネマ山口
「アフガン零年」
7月31日(土)13時、16時、19時
8月1日(日)13時、16時
8月2日(月)19時
料金＝1000円／会員・学生800円
会場＝山口情報芸術センター・スタジオC
問＝083・901・2222

福岡県

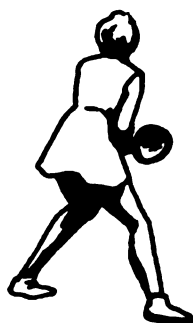
■アジア・ファンタスティックムービー・フェス
7月22日(木)14時「墓あらし」「笛吹きの恋」
7月23日(金)14時「霊幻師弟人嚇人」19時「北京オペラブルース」
7月24日(土)11時「ガメラ　大怪獣空中決戦」14時「ゴジラVSスペースゴジラ」17時「天下第一」
7月25日(日)11時「新生」14時「ほえる犬は噛まない」
■南インド映画特集
7月28日(水)14時「魔法使いのおじいさん」
7月29日(木)14時「エスタッパン」19時「対面」
7月30日(金)14時「シャドー・キル」19時「最後の舞」
7月31日(土)11時「魔法使いのおじいさん」14時「エスタッパン」17時「対面」
料金＝500円／大学・高校生400円／中学・小学生300円
会場＝福岡市総合図書館映像ホール・シネラ
問＝092・852・0600
http://toshokan.city.fukuoka.jp/

キネ旬ロビイ
kinejun lobby

読者の声

●マラソン大会で

友人の誘いで家の近くのマラソン大会に参加したら水谷妃里さんがゲストで来ていた。疲れているだろうに嫌な顔一つせず、レース後はサインと写真に応じてくれた。彼女が主演した「チルソクの夏」は、誰にでもある初恋の切なさを描いた素敵な映画でした。キネ旬の新人賞をとって、来年のベスト・テン表彰式で再会できる事を楽しみにしています。(水野順一・千葉県船橋市・建築業・34歳)

●85周年おめでとう

キネ旬85周年おめでとうございます。私は1972年4月下旬号からの参加です。今、独立開業の準備でバタバタしながら、あと21年でキネ旬の半分以上に参加したことになるんだな、とへんな計算をしています。(西村重喜・千葉県千葉市・会社員・51歳)

●飛びたくなりました

今、岩手県の映画館で上映されている中で、一番面白いのは「下妻物語」だと思う。私は、落ちこんでいる友人、疲れている友人には、あの映画を観るよう薦めている。だって、笑えるんだもーん。まず、余計なものは、ひとつもない。見習え!「ロスト・イン・トランスレーション」。「ハリー・ポッターとアズカバンの囚人」はヒッポグリフが助かって良かったなーと。あと、前回、声が出なくて息も絶え絶えだった校長先生が、しっかり声が出ており(当たり前だ)ルックスが同じなだけに不思議な感じ。作品としては前回の方が良かったと思う。「スパイダーマン2」が楽しみ。「スパイダーマン」を観たあと、私は岩手県庁から盛岡市役所まで飛びたくなりました。今度は、東京丸の内ビルの間を飛びたくなるかもしれない。(皆川悦子・岩手県花巻市・会社員・35歳)

●勝手ながら同志宣言

新宿4月某日。平日真昼間の人もまばらな映画館。そのど真ん中の席に陣取って、映画を見ながら泣いているおっさんがおりました。実は私、映画は「タカダワタル的」。本誌6月下旬号の「日本魅録」を読み返して、こんな事を白状する気になりました。「生活の柄」を口ずさみ、「ブラザー軒」で感極まって、涙がとまらなくなりました。「これ見て泣いてるやつなんか果たして」ここにもおります。香川照之さん、あなたは同志です。私が勝手にそう決めました。(井上繁・東京都品川区・会社員・57歳)

●「見る」だけじゃなく!

ジャッキー・チェン日本公開50作記念映画「メダリオン」を見に行きました。公開第一作「ドランク・モンキー 酔拳」を初めて見た時の衝撃は今でも忘れません。それ以来のJ・チェンファンですが、以前はよく出来もしないのにJ・チェンのアクションのマネをしたものです。気がつけば最近、ただ「見る」だけのファンになりつつあるオヤジになっている自分に気がついて、50歳のJ・チェンのマネをしようと、足を振り上げたら足がつってしまいました……が、久し振りに重くなった身体を動かしてみました。もう少し「見る」だけのファンにならないように頑張ろうっと! まだ46歳だし。(石塚雅晴・埼玉県行田市・調理師・46歳)

●進化する若き女優

昨年、初めて鈴木杏さんの生の演技を目にしました。舞台「奇跡の人」における大竹しのぶさんとの全身全霊バトルは、正しく〝壮絶〟の一語。彼女をデビュー時から応援しつづけている私ですが、もう末恐ろしさを

感じるというより、現時点でもすでにタダモンじゃない!! 進化する若き天然女優から、これからも目が離せません。「ヒマラヤ杉に降る雪」で実証済みですが、杏さんはワールドワイドな器ですよ!!（高井昌彦・東京都葛飾区・ホームヘルパー・39歳）

●韓流で充実の一日

日曜の朝、またまた早起きをして名古屋に出掛けました。今日の予定は、「ブラザーフッド」「4人の食卓」「ロスト・メモリーズ」の3本。「ブラザーフッド」は絶賛してある記事が多いので、あまり期待しないようにと思っていたのですが、強制的につれていかれるシーンで涙があふれ、最後は号泣。上映直後、フィルムの位置がずれていて、勇気あるおとなりの方がすぐ係の方に訴えて下さり、仕切り直し。その5分程の遅れで「4人の食卓」に間に合わないかもしれないと、顔をくちゃくちゃにしたままダッシュでなんとか入れ替えにOK。ホッとしたのも束の間、ポスターとは裏腹に怖いストーリー（悲しくも）。そのまま「ロスト・メモリーズ」も鑑賞でき、まさに分刻みのスケジュール。チャン・ドンゴンの全く違う役柄も堪能出来、帰路に就く。またまた充実の一日でした。（岩瀬美智子・愛知県西尾市・会社員・46歳）

lobby 伝言板

▼詩と評論の同人誌「PF」で映画をテーマにしたエッセイを連載しています。最新号ご希望の方は140円分の切手をお送り下さい。エッセイのみご希望の方は80円切手で。コピーをお送り致します。（〒350-1126 埼玉県川越市旭町1-23-25秀和コーポB205 いのうえまほ）

映文振センターレポート
第82回監名会

「現代人」

5月15日、京橋のフィルムセンターで開催された第82回「監名会」（NPO法人映文振センター主催）の上映作品は渋谷実監督の「現代人」（製作・配給は松竹）。フツーの人が理解できない突拍子もない行動や言動で人々を驚かせる若い世代の人々を、よく「恐るべき○○歳」とか「今どきの人」と揶揄とも尊敬ともつかぬ表現をするようだが、そのルーツは「現代人」にあるのだろうか？ ふとそう思った。

上映後、本作に主演した俳優の池部良さんが撮影秘話などを話された。都会的なマスクとニヒルで知的な雰囲気を漂わせ、日本映画界のトップスターでありつづける池部良さん。池部さんが演じた〈小田切徹〉の生き方は、無鉄砲なのか、合理的なのか、称賛に値する自己犠牲的生き方なのか？ 製作されてから50数年を経た今、再び議論するに値するだろう。

1952年（昭和27年）度の本作。建設局の中で起こる収賄事件を題材にし、戦後日本社会のダークな面が描かれるが、池部さんは「昭和27年という年は、敗戦による人心の荒廃が顕著だった。そういうものに対して渋谷監督は社会的なメッセージをこめた作品を作りたかったのだと思う」と語った。

大学卒業後、東宝映画文芸部に入社したが、間もなく島津保次郎監督に見出され、以後数多くの映画に出演、本作のオファーがきた時点では既にトップスターの地位を確立していた。その池部さんの前に厳然と立ちはだかっていた「五社協定」という壁を無視して出演した本作についてはどんな思いを持たれているのだろう。

「それまでは俳優という仕事に少しもプロ意識をもてずズルズルやってきていたが、本作出演以来、俳優というものは男子一生の仕事であるという気持ちが生れた。そういう意味で「現代人」は自分にとってターニングポイントとなった記念すべき作品だ」と語った。

ゲストの池部良氏

本作が公開された時、〈小田切徹〉は"現代的"に映ったのだろうが、平成の世に生きる現代人は本作をどう観るのだろうか？ 価値観の変容を知る意味で興味津々だ。（文・桑島まさき 写真・竹下資子）

スクリーンの魔術師

第21回 野村芳太郎

絵と文 すぎやまチヒロ

「張込み」スタート

で、その映画はどのくらいかかるの？
2ヵ月以上です
この以上に意味があったの……
まず、ロケハン（ロケーション・ハンティング 撮影する場所をさがす）に1か月をついやす。
あの建物も入れたいなあー
あのビルを下から撮ろう
結局、東京のロケだけで1か月かかってしまう……

そして急行「筑紫」の一両を借り切って、80人のエキストラとともに車内の撮影をつづけながら佐賀へ乗り込んだのである。
佐賀でもねばりにねばった――
撮影開始前の記者会見で
この作品にカントク生命を賭ける
と言っただけあって
天候が変わるまでは動かない
だった。
会社からは「もう帰って来い」の電報を40日続けて打ってきた。
結局、夏に始まった撮影は年の暮れにやっと終わった（たしか2ヵ月以上）
封切は大幅におくれて翌年（58年）の1月15日だった。

名作トリオ

こうして「娯楽派」監督から「芸術派」に脱皮したと同時に、名作トリオ松本清張（原作）橋本忍（脚本）が誕生したのである。
このトリオは16年後にあの「砂の器」もつくったんだよ
日本の風土を四季の風景を織り込みながら
放浪する父子を丹念にカメラに収めた
この映画も並々ならぬねばり腰ってかんじだったネ
ぼくの手帳には常に10以上の企画が詰まってるんだよ
映画を撮りたいんだけど映画会社がOKを出してくれないんだよ
1990年談
松本清張氏
橋本忍氏

原作

ジャンルを問わずいろいろな原作を映画化したんだよ
よく出来てて感心したよ

64年 五瓣の椿 山本周五郎
花形役者が殺された…… 現場に残る椿の花
次は悪役医者が

78年 事件 大岡昇平
さすがだよ
工員です
職業は？
女性が殺される 犯人は19才の少年 姉を殺して妹と同棲
殺人及び死体遺棄
殺意はあったのか 法廷で暴かれる新事実
どうせ少年法で
どっちがウソつきだか
静かに

79年 配達されない三通の手紙 エラリー・クィーン
マンフレッド・リー フレデリック・ダネイ
ふたりのペンネームなんだよ
地方の名門銀行のオーナー一族の家に、ひとりの男がもどってくる――
日付はすべてこれからやってくる日である――
妹へ 妻は死んだ
妹 妻が病気になった
妹 妻は重体だ

81年 真夜中の招待状 遠藤周作
原題は「闇のよぶ声」だよ
婚約者の兄が2人とも真夜中にふらっと出たまま帰らないの
心の海の底を暴くことになりますよ
もうあれ以上よくはなりません

85年 危険な女たち アガサ・クリスティ
ポワロは登場しないわよ この「ホロー荘の殺人」には
犯人は誰なんだ……
この女たちのなかにいる……

次回はウィリアム・ワイラー監督です

今号の筆者紹介

（　）内の数字は掲載ページ

小藤田千栄子　映画評論家。この夏ミュージカルの来日公演が多い。2度目の来日でも、やはり行ってしまう。（1）

佐藤結　ライター。オーナーだけで野球ができるなら、やってみろ！ってんだ。がんばれ、古田と選手会。（48）

原田雅昭　編集者。いよいよ「エルヴィス・オン・ステージSE」公開。やはり大スクリーンで観るエルヴィスは凄い！（68）

尾形敏朗　映画評論家。〈個性派〉座談会の後は酒場で盛りあがる。四半世紀を振り返り、楽しい同窓会でした。（70）

金澤誠　北海道、「北の零年」の現場で篠田昇さんの訃報を聞く。スタッフが篠田さんの祭壇を作っていたのが印象的。（77）

吉川マサ　W・ハートはかつて一人旅で日本に行き、思いつきで輪島を訪れたそうで。その話も面白かったんだけどね〜。（81）

松本志代里　編集者。双葉先生の皆の文章に「しゃっちょこだって喜ぶ」という言葉を発見、最近心の中で実演している。（84）

西村嘉夫　シネマコリア代表。名古屋では中心街の映画館が次々と閉館。以前は毛嫌いしていたシネコンに通う毎日。（85）

井口健二　SF映画評論家。応援しているサッカーチームの調子が多少上向き。まだ勝てないが、観戦に力が入る。（88）

暉峻創三　映画評論家。生まれて初めてのマニラ訪問へ。言葉も地理もわからず、かなり心配だ。（90）

横森文　連日、取材やら原稿書きで早起き続き。夜は夜で芝居の稽古三昧。でもこの忙しさが心地よかったりする私は変？（98）

山下慧　映画系文筆業。「週刊スター・ウォーズ　ファクト・ファイル」が121号で完結。「エピソード3」の分は？（98）

永野寿彦　昔からその独特の動きの作画が大好きだった湯浅監督に会えて大感激！「マインド・ゲーム」は必見です。（100）

伊藤盡　大学講師。「氷の国のノイ」を見た。アイスランドが懐かしい。中世の霧の中から暑中お見舞い申し上げます。（104）

斉藤博昭　ライター。ベン・スティラー、そこまでやるか！　と大爆笑の「ドッジボール」も、やはり日本公開は微妙なの？（107）

藤原敏史　アモス・ギタイの「アリラ」のために作ったメイキングが仏カイエで褒められ、ちょっと嬉しい。（112）

馬場広信　映画研究。昨年ヴェネチア金獅子賞の「父、帰る」は、ソ連崩壊以降のロシア映画では最大の収穫。正直ホッとした。（117）

氷川竜介　アニメ特撮文筆業。来年公開の樋口真嗣監督「ローレライ」特撮現場で潜水艦ミニチュアの出来に激烈感動！（121）

久保玲子　オリンピックを前にアンゲロプロス映画祭が。しかし日程的に彼の風景と暗闇で相目見えること叶わぬと分かり悔し涙。（122）

中野香織　仕事増でも収入は増えない。プロフィットレス・プロスペリティ（無利益の経済成長）と呼ぶのだそう。（124）

中西愛子　フリー。「プレイ・ウィズアウト・ワーズ」を観て、マイク・フィギスの4分割画面をふと思い出した。（126）

よしひろまさみち　ライター。韓国で観た「私の彼女を紹介します（原題）」。ベタだけど泣けたわ〜。楽曲には驚きだけど。（127）

佐藤友紀　文化五輪の取材でアテネ。古代劇場で見るギリシャ悲劇とユーロ2004勝利の街の熱狂で不思議な感覚の夜。（128）

木保冬　ライター。編集者。ひょんなことから韓国の劇場用アニメをDVDで見た。メーキングにビックリ、感心！（130）

荻原順子　「華氏911」を初日初回に観に行ったら、平日の正午だというのにほぼ満席で大いに盛り上がって楽しかった。（132）

新藤純子　五十年代ベトナム情勢を描いた「愛の落日」、父と息子の神話「父、帰る」。どちらも見応えあり。（141）

鬼塚大輔　静岡英和学院大学教授。待ちに待った夏休み到来！　体を休めつつも、新たな仕事に取りかからねば。（142）

的田也寸志　フリー。初めて小説を書きました。竹書房文庫「狐怪談」ノヴェライズ。ぜひ、ご高覧のほどを。（143）

渡辺武信　映画研究。昨年ヴェネチア金獅子賞の「父、帰る」は、ソ連崩壊以降のロシア映画では最大の収穫。正直ホッとした。（144）

服部香穂里　ライター。寝苦しい夏、暑さに弱い犬の朝は異常に早く、目覚ましいらずの日々が続く。とほほ……。（145）

佐藤忠男　映画批評家。ポプラ社から「誇りと偏見」という本を出します。一種の映画論でもある内容です。（145）

田中英司　最近は暑いので休間はファミリーレストランにこもっています。アイスコーヒー中毒になりました。（146）

切通理作　文化批評。秋刊行予定の山田洋次論書いてます。一番味わい深かったのは「学校Ⅲ」。小林稔侍いいですね。（147）

渡部実　映画評論家。50〜60年代の連続テレビ映画での船床定男監督、小川寛興の音楽の仕事を再評価したい。（148）

西脇英夫　映画評論家。またも凄味のある映画「誰も知らない」を観た。いま邦画が凄い！（152）

北川れい子　「LOVERS」の金城武はわが「薄桜記」の市川雷蔵そっくりでニンマリ。あの雪のラスト。（152）

田中千世子　映画評論家。7月下旬、瀬戸内海の島に行く。立川高校同級生のブルーベリー畑で収穫の助っ人が名目のツアー。（152）

轟夕起夫　文筆稼業。新作「ゴジラ」で轟天号に乗るドン・フライ、好きな映画はフォードの「捜索者」だった！（152）

河原晶子　新国立劇場でオペラ「ファルスタッフ」を3000円（！）で観る。国が行なうめったにないメリット。（154）

稲垣都々世　少し家を空けている間にシソとバジルが繁ったが、旅先の食あたりが尾を引いて過酷な収穫を免れている。（154）

大場正明　評論家。「快楽通りの悪魔」、「ロサンゼルスの魔力」などを読む。（154）

金原由佳　映画ライター。「北の零年」の静内ロケを訪ねたその日、篠田昇さんの訃報が届く。お世話になりました。(154)

宮崎祐治　『昭和の風景』という写真集で私が昔小劇団のために描いたポスターを発見。いま昭和にハマっています。(156)

立川志らく　8月5日『志らくのピン2』最終回。落語が元ネタの「幕末太陽傳」を落語に戻します。国立演芸場にて。(157)

川本三郎　評論家。ロシア映画「父、帰る」が素晴らしい。北の森や湖の冷たい美しさに息をのんだ。(158)

香川照之　「21グラム」のベニシオ・デル・トロに感服。が、私より2歳年下とは……父親役でも可能だと思うけど……。(160)

成田陽子　ミュンヘン映画祭に来て、まずは大好きな豚足ローストの皮を噛み噛み、おいしいビールで乾杯してます。(164)

河原雅彦　俳優・舞台演出・脚本。7／31初日の舞台『鈍獣』の稽古に追われる日々。愉快な大人と美女に囲まれ中。(168)

中村まこと　俳優。野球のせいで知らないうちに首が焼けている。そうだ！　オリックス・近鉄合併反対！　身売りせよ！(168)

安西水丸　タヒチからさらに飛行機で約四時間のヒバ・オア島でポール・ゴーギャンの墓参り。青い海を見下ろす丘にあった。(172)

大高宏雄　映画記者。経営者の陰謀と選手会の弱腰。野球界の混乱は、日本社会の縮図。この時代のスト破りは誰だ。(173)

濱口幸一　日本のプロ野球の市場縮小を望ましいとする考えは全く理解不能。ただ、もう興味のない、どうでもいい話。(176)

小谷承晴　監督。モト、キネ旬の藤倉博プロデューサーと「ペレの家」で映画のポスター、チラシを眺めながらの暑気払い。(179)

賀来タクト　文筆家。「スチームボーイ」音響セミナーに出席。ジャブロンスキーらとの再会は本当に楽しかった。(180)

石飛徳樹　朝日新聞記者。ピナ・バウシュの新作に大笑い。彼女の描く日本はある意味、「ロスト・イン〜」よりすごい。(182)

豊崎岳彦　虚業。「ブルース・ムービー・プロジェクト」のイーストウッド編がTV放映のみと聞き残念無念。(183)

樋口尚文　映画批評。古尾谷雅人、鷺沢萠、そして野沢尚。もっとしぶとく、どぎつくてもよかったのに……。(184)

池田敏　アメリカTVライター。やっと日本でもDVDでリリースされた「ロー&オーダー」を楽しく見ています。(185)

田中眞澄　「ジゴマ」「ファントマ」上映会で司会・講演者が尾上松之助をオガミマツノスケといったのに驚く。(186)

森直人　ガス・ヴァン・サントの「ジェリー」が素晴らしかったです。山下敦弘監督の「くりいむレモン」も。(187)

丸山尚輝　ライター。8／7、知人岡輝男脚本作「兄貴と俺Ⅱ」の舞台挨拶があります。来る勇気があれば来てね。(190)

やまもとかほ　本広克行監督、矢口史靖監督、三谷幸喜監督にインタビュー。それぞれ貴重な話が聞け感動・感謝。(190)

新田隆男　及川奈央さんやホンジャマカの恵さんの初監督作の脚本書きました。TXの日曜深夜！(194)

滝矢直　ライター。この夏ビーチサンダルの楽さ加減にハマッてしまいました。夏はビーサンも正装にしてくれないかな。(196)

野村正昭　映画評論家。土本典昭監督「みなまた日記——甦える魂を訪ねて」を見て、7〜8月の土本展に通う決意。(198)

杉原賢彦　映画批評／慶應義塾大学教養研究センター所員。ラス・メイヤーコンプリート映画祭ってすごすぎ！(200)

すぎやまチヒロ　「今日も漫画をかく」と言ったら、「勝手にかけば」と言われた。で、今日も漫画をかく。(220)

劇場招待プレゼント&上映スケジュール

●ご招待券（8月中有効）ご希望の方は本誌挟み込みのプレゼントハガキに希望劇場名を書いてお申し込みください。8月5日消印有効。
●劇場の都合により番組が変更になる場合がありますので、ご確認の上お出かけください。＊印は次回上映作品

地区	劇場名	TEL	招待組数	上映スケジュール（7/20火〜8/10火）
銀座	有楽町スバル座	03(3212)2826	2	海猿　ウミザル
新宿	テアトル新宿	03(3352)1846	2	ラブドガン → 機関車先生
渋谷	渋谷東映	03(5467)5773	5	69 sixty nine → 劇場版　金色のガッシュベル!! 101番目の魔物
渋谷	渋谷シネパレス1 渋谷シネパレス2	03(3461)3534	10	ウォルター少年と、夏の休日 ハリー・ポッターとアズカバンの囚人 → キング・アーサー
渋谷	シネ・アミューズ イースト／ウエスト	03(3496)2888	2	〈イオセリアーニに乾杯！〉 → 箪笥 スキャンダル → 地球で最後のふたり
渋谷	シブヤ・シネマ・ソサエティ	03(3496)3203	2	スパン → 好きと言えるまでの恋愛猶予
池袋	シネマサンシャイン	03(3982)6101	5	スパイダーマン2 デイ・アフター・トゥモロー → サンダーバード ハリー・ポッターとアズカバンの囚人〈字幕〉 ハリー・ポッターとアズカバンの囚人〈吹替〉 → マッハ！〈吹替〉〈字幕〉 ハー・ポッターとアズカバンの囚人〈字幕〉 → 箪笥 69 sixty nine → 劇場版　金色のガッシュベル!! 101番目の魔物
池袋	シネマ・ロサ	03(3986)3713	10	ハリー・ポッターとアズカバンの囚人〈字幕〉 → キング・アーサー → リディック ウォルター少年と、夏の休日 → リディック
池袋	シネ・リーブル池袋	03(3590)2126	5	永遠の片想い → ドリーマーズ ホテル　ビーナス → スイミング・プール → 永遠の片想い
池袋	テアトル池袋	03(3987)4311	2	それいけ！アンパンマン　夢猫の国のニャニイ
浅草	浅草中映劇場	03(3841)2400	5	ルビー&カンタン 10億分の1の男 → アンデッド テキサス・チェーンソー → タイムリミット シャンハイ・ナイト → [illegible]
浅草	浅草名画座	03(3841)3028	（5）	[illegible] → 日本侠客伝　斬り込み／十三人の刺客　暗黒街の顔役 → 男はつらいよ　寅次郎夢枕　修羅の伝説　若き日の次郎長　東海一の若親分 → 極道の妻たち　地獄の道連れ　新兵隊やくざ　火線／必殺5　黄金の血
東京	早稲田松竹	03(3200)8968	3	28日後.../25時 → ブラザー・ベア ファインディング・ニモ → オアシス ジョゼと虎と魚たち → 女神が家にやってきた　恋愛適齢期
東京	三軒茶屋シネマ	03(3421)3322	10	キル・ビル／キル・ビル2 → 幸せになるためのイタリア語講座　恋愛適齢期 → 幸せになるためのイタリア語講座 ションヤンの酒家
東京	下高井戸シネマ	03(3328)1008	10	carmen.カルメン → 女王ファナ → コールドマウンテン → グッバイ、レーニン!
東京	シネマアートン下北沢	03(5452)1400	5	〈オキナワ映画クロニクル〉 → 〈少年エネルギー〉
東京	バウスシアター	0422(22)3555	2	ハリー・ポッターとアズカバンの囚人〈字幕〉 → キング・アーサー 炎のジプシーブラス～地図にない村から～ トロイ → マッハ！
横浜	横浜日劇	045(251)1815	2	オーシャン・オブ・ファイヤー　ニューオーリンズ・トライアル → フレディVSジェイソン　テキサス・チェーンソー → ゴシカ／悪霊喰　ドーン・オブ・ザ・デッド → スターシップ・トゥルーパーズ2　シルミド SILMIDO　タイムリミット

※劇場によっては、土・日・祝日は招待券を使用できませんので、ご了承ください

<table>
<tr><th></th><th>劇場名</th><th>TEL</th><th>招待組数</th><th>7/20 火</th><th>21 水</th><th>22 木</th><th>23 金</th><th>24 土</th><th>25 日</th><th>26 月</th><th>27 火</th><th>28 水</th><th>29 木</th><th>30 金</th><th>31 土</th><th>8/1 日</th><th>2 月</th><th>3 火</th><th>4 水</th><th>5 木</th><th>6 金</th><th>7 土</th><th>8 日</th><th>9 月</th><th>10 火</th></tr>
<tr><td rowspan="3">横浜</td><td>シネマ・ジャック</td><td>0120(198)009</td><td rowspan="2">2</td><td colspan="18">〈犯罪劇場、四十九日。〉</td><td colspan="4">〈平和映画祭 in 横浜04夏〉</td></tr>
<tr><td>シネマ・ベティ</td><td>0120(198)009</td><td colspan="4">オアシス 花嫁はギャング・スター</td><td colspan="14">恋愛適齢期／コールドマウンテン</td><td colspan="4">〈平和映画祭 in 横浜04夏〉</td></tr>
<tr><td>関内MGA</td><td>045(261)8913</td><td>2</td><td colspan="22">イザベル・アジャーニの惑い</td></tr>
<tr><td>新潟</td><td>新潟シネ・ウインド</td><td>025(243)5530</td><td></td><td colspan="11">エレファント／わらびのこう 蕨野行／悪い男／それいけ！アンパンマン 夢猫の国のニャニイ</td><td colspan="11">わらびのこう 蕨野行 悪い男／それいけ！アンパンマン 夢猫の国のニャニイ／ラブドガン</td></tr>
<tr><td>松本</td><td>松本エンギザ</td><td>0263(32)0396</td><td>5</td><td colspan="22">69 sixty nine／ウォルター少年と、夏の休日／ポケットモンスターAG 裂空の訪問者 デオキシス スチームボーイ</td></tr>
<tr><td>岐阜</td><td>シアターペルル</td><td>058(262)0871</td><td>5</td><td colspan="4">ウォルター少年と、夏の休日</td><td colspan="18">ウォルター少年と、夏の休日／スイミング・プール ＊モナリザ・スマイル</td></tr>
<tr><td rowspan="6">愛知</td><td>名古屋シネマスコーレ</td><td>052(452)6036</td><td>10</td><td colspan="4">思い出の夏 愛にかける橋</td><td colspan="7">HAZAN</td><td colspan="7">HARUKO ハルコ</td><td colspan="4">機関車先生</td></tr>
<tr><td>名古屋ゴールド劇場</td><td>052(451)0815</td><td rowspan="2">10</td><td colspan="18">トスカーナの休日／カーサ・エスペランサ 赤ちゃんたちの家</td><td colspan="4">地球で最後のふたり</td></tr>
<tr><td>名古屋シルバー劇場</td><td>052(451)0815</td><td colspan="4">デイ・アフター・トゥモロー</td><td colspan="14">永遠の片想い／ラブドガン</td><td colspan="4">サンダーバード</td></tr>
<tr><td>名古屋シネマテーク</td><td>052(733)3959</td><td>5</td><td colspan="4">永遠の語らい</td><td colspan="7">永遠のモータウン</td><td colspan="7">〈木村威夫特集〉</td><td colspan="4">ハナのアフガンノート／午後の五時</td></tr>
<tr><td>今池国際シネマ</td><td>052(732)1880</td><td>5</td><td colspan="4">キッチン・ストーリー</td><td colspan="14">箪笥</td><td colspan="4">茶の味</td></tr>
<tr><td>今池国際劇場</td><td>052(732)1880</td><td>5</td><td colspan="22">ポケットモンスターAG 裂空の訪問者 デオキシス</td></tr>
<tr><td rowspan="5">大阪</td><td rowspan="2">テアトル梅田</td><td rowspan="2">06(6359)1080</td><td rowspan="2">10</td><td colspan="11">午後の五時</td><td colspan="11">dot the i</td></tr>
<tr><td colspan="11">ラブドガン</td><td colspan="11">機関車先生</td></tr>
<tr><td rowspan="2">シネ・リーブル梅田</td><td rowspan="2">06(6440)5930</td><td rowspan="2">5</td><td colspan="11">ロスト・イン・トランスレーション</td><td colspan="11">茶の味</td></tr>
<tr><td colspan="4">ホテル ビーナス</td><td colspan="18">永遠の片想い</td></tr>
<tr><td>シネ・ヌーヴォ</td><td>06(6582)1416</td><td>5</td><td colspan="11">ホストタウン エイブル2</td><td colspan="11">〈小津安二郎の藝術〉</td></tr>
<tr><td>京都</td><td>祇園会館</td><td>075(561)0160</td><td>5</td><td colspan="4">リーグ・オブ・レジェンド 時空を超えた戦い ファインディング・ニモ（吹替）</td><td colspan="18">ラスト サムライ／フォーン・ブース</td></tr>
<tr><td rowspan="5">神戸</td><td rowspan="3">シネ・リーブル神戸</td><td rowspan="3">078(334)2126</td><td rowspan="3">5</td><td colspan="4">列車に乗った男</td><td colspan="7">テッセラクト</td><td colspan="11">花咲ける騎士道</td></tr>
<tr><td colspan="4">スイミング・プール</td><td colspan="18">永遠の片想い</td></tr>
<tr><td colspan="11">ロスト・イン・トランスレーション</td><td colspan="11">茶の味</td></tr>
<tr><td rowspan="2">シネ・ピピア</td><td rowspan="2">0797(87)3565</td><td rowspan="2">5</td><td colspan="4">パッション</td><td colspan="18">シュレック2</td></tr>
<tr><td colspan="4">白い巨塔 氷点 ロード・オブ・ザ・リング 王の帰還（字幕）</td><td colspan="18">キング・アーサー</td></tr>
<tr><td rowspan="5">広島</td><td>広島サロンシネマ1</td><td>082(241)1781</td><td rowspan="3">10</td><td colspan="4">女王ファナ 友引忌</td><td colspan="7">わが故郷の歌 アフガン零年</td><td colspan="11">パリ・ルーヴル美術館の秘密 みなさん、さようなら。</td></tr>
<tr><td>広島サロンシネマ2</td><td>082(241)1781</td><td colspan="4">4人の食卓</td><td colspan="14">ハッピーエンド</td><td colspan="4">ドラムライン</td></tr>
<tr><td>広島シネツイン1</td><td>082(241)7711</td><td colspan="11">カレンダー・ガールズ／それいけ！アンパンマン 夢猫の国のニャニイほか1本</td><td colspan="11">父と暮せば</td></tr>
<tr><td>広島シネツイン2</td><td>082(246)7787</td><td></td><td colspan="22">スキャンダル</td></tr>
<tr><td>シネマモード</td><td>0849(23)3788</td><td>5</td><td colspan="18">69 sixty nine／スチームボーイ</td><td colspan="4">劇場版 金色のガッシュベル!! 101番目の魔物</td></tr>
<tr><td rowspan="7">九州</td><td>シネテリエ天神</td><td>092(781)5508</td><td>10</td><td colspan="11">テッセラクト／リアリズムの宿</td><td colspan="11">茶の味</td></tr>
<tr><td>KBCシネマ1</td><td>092(751)4268</td><td rowspan="2">10</td><td colspan="4">キャンプ</td><td colspan="14">ディープ・ブルー</td><td colspan="4">機関車先生</td></tr>
<tr><td>KBCシネマ2</td><td>092(751)4268</td><td colspan="11">アメリカン・スプレンダー</td><td colspan="7">花咲ける騎士道</td><td colspan="4">ドリーマーズ</td></tr>
<tr><td>シネサロン・パヴェリア</td><td>092(852)5650</td><td>5</td><td colspan="4">ジャンプ</td><td colspan="14">永遠の語らい</td><td colspan="4">父と暮せば</td></tr>
<tr><td rowspan="2">シネ・リーブル博多駅</td><td rowspan="2">092(434)3691</td><td rowspan="2">10</td><td colspan="11">スイミング・プール</td><td colspan="7">いつか、きっと</td><td colspan="4">マインド・ゲーム</td></tr>
<tr><td colspan="4">ラブドガン</td><td colspan="18">永遠の片想い</td></tr>
<tr><td>シネパラダイス</td><td>096(211)3360</td><td>5</td><td colspan="22">スパイダーマン2〈吹替〉</td></tr>
</table>

◆次の各劇場へ今号の本誌挟み込み〈試写会ハガキ〉を持参されると、各劇場規定料金にて割引ご招待いたします。
【高知】●高知東映●ピカデリー1・2・3●あたご劇場（高知キネ旬友の会協力）　【高松】●高松東宝1・2・3（高松キネ旬友の会協力）
【松山】シネ・リエンテ●シネマサンシャイン　【福岡】●福岡中洲大洋●福岡東映劇場●駅前ロマン●福岡オークラ劇場（福岡キネ旬友の会協力）

Presents

プレゼントの応募は本誌とじ込みハガキでどうぞ。8月5日必着です。(「巨星　小林正樹の世界」は7月28日必着)

試写会
バイオハザードⅡ　アポカリプス

■サイエンスホール(竹橋)
■9月2日(木)
■18：00開場／18：30開映

ミラ・ジョヴォヴィッチが主人公を熱演するシリーズ2作目。9月11日より丸の内ピカデリー2ほか東急・松竹系にて〈提供：ソニー・ピクチャーズ〉

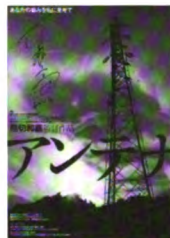
10組20名

「人間の條件」

招待券
「巨星　小林正樹の世界」

劇場招待券（三百人劇場にて有効）

三百人劇場映画講座vol.15では、小林正樹監督を特集する。軍隊に抗う男を描いた「人間の條件」、記録映画の名作「東京裁判」など、17作品を上映。7月31日から8月15日まで三百人劇場にて〈提供：アルゴ・ピクチャーズ〉

5組10名

Goods
アンテナ

加瀬亮サイン入りプレス

主演に若手注目株・加瀬亮を迎え、ベストセラー作家、田口ランディの世界観を完全映像化。現代社会の闇と、家族の再生を描く。ビデオ＆ＤＶＤは7月23日リリース（ＤＶＤセル：税込4935円）〈提供：ハピネット・ピクチャーズ〉

3名

Goods
バンド・オブ・ブラザース

放送記念プラモデル

来る10月3日に『第56回エミー賞授賞式』をＡＸＮでは日本独占放送する。また8月からは、2002年に同賞を受賞したＳ・スピルバーグ＆Ｔ・ハンクス製作総指揮の『バンド・オブ・ブラザース』が同局にて一挙放送〈提供：ＡＸＮジャパン〉

3名

Goods
春田花花幼稚園　マクダルとマクマグ

特製クリアファイル

香港で大人気のかわいい子ブタ、マクダルとマクマグのＴＶアニメシリーズがいよいよ日本上陸。チューズチャンネル(ケーブルＰＰＶサービス“エラボ”911ch)にて現在好評放送中。〈提供：ジャパンケーブルキャスト〉

20名

Goods
スマイル・ファスナー付ケース

(コンドーム2個入り)

忘れがちなエイズの危険性――「スマイリー・フェイス」のコンドーム使用推進は「STOP　AIDS」活動の一環です（スマイル・ショップ〈原宿〉にて販売中、980円）〈提供：ハーベイ・ボール・ワールド・スマイル財団・日本支部〉

5名

Kinejun Information

編集部だより

■今号と次号8月下旬号の2号にわたり、小誌85周年記念特集を行います。ご協力くださった皆様、本当にありがとうございました。次号の特集は、「ラブストーリー」「時代劇」「アニメーション」の3ジャンルのオールタイムベスト・テンです。

出版部だより

■大槻ケンヂ著『オーケンの、私は変な映画を観た!!』の出版を記念し、6月26日に新文芸坐で行われたオールナイト「オーケンのなんじゃこりゃ映画祭」は、大入り満員・予想以上の好評で関係者一同大喜び。劇場、ビデオ店の皆様、ぜひ本書を番組編成、棚作りのご参考に。

営業部だより

■228ページのバックナンバー在庫一覧に掲載されている号の中には、在庫僅少品も含まれております。お求め忘れの号などございましたら、お早めにお近くの書店、または弊社営業部までお問合せください。

事業部だより

■「ジョゼと虎と魚たち」「スウィングガールズ」といった具体的な作品に基づいて、劇場公開映画製作の方法論をレクチャーする「映画製作セミナー」の受講生を募集中！　定員になり次第締切となりますので、お申込はお早めに。詳細はhttp://www.kinejun.comにて。

キネマ旬報

2004年
8月上旬特別号
No.1410

●発行人
小林　光

●編集長
関口裕子

●副編集長
前野裕一

●編集スタッフ
山田正人
天本伸一郎
滝澤麻衣
神保憲史
川井英司

●広告スタッフ
島崎智明
上田真美

●表紙デザイン・レイアウト
島岡　進

●レイアウト
梅津由子
渡部浩美

●発行
株式会社キネマ旬報社
〒106-0045
東京都港区麻布十番
1-2-3　プラスアストル
振替00100-0-182624
TEL 03-3589-8300(代表)
03-3589-8327(編集部)
03-3589-8325(営業部)
03-3589-8329(広告部)
FAX 03-3589-8302
http://www.kinejun.com/

●印刷・製本
三晃印刷株式会社

ISSN 1342-5412

編集後記

同型DVカメラによる撮影、同一予算という同じ土俵で、日本映画界で活躍する監督と気鋭の新人監督がそれぞれの作品を持ち寄り、劇場でガン飛ばし合うという主旨の『映画番長』シリーズ。その第2弾エロス番長編の4作品のうちの1編が「ラブ　キル　キル」だ。

西村晋也の長編初監督となる本作は91分の尺内で、無駄なく画が構成されている印象。ひと目ぼれしたサユリを勝手に我が結婚相手と思い込んだ公務員サトシが、偶然出会ったナオを利用して何とかサユリをモノにする。だがふたりの関係は……。

物語としては、とくに斬新な展開が待っているわけではない。また、全体を通じてカメラが大きく動くこともなく、カット割が多いわけでもない。とはいえ、さもすると過剰に映ってしまいそうな津田寛治の怪演をさらりと軽さをもって切り取り、描かれた嫉妬と征服欲に説得力をもたせることに成功していた。　**滝澤**

コレすごく面白かった！
「ラブ　キル　キル」
8月よりユーロスペースにて

■米ロックバンド"The Pixies"の曲が近日公開の「16歳の合衆国」「歌え！　ジャニス～」に使われていて大いに感激。「Fuji Rock」で来日するけど、山奥まで観に行く元気は……。**川井**

■先日、韓国のテレビ局から"韓流"に関する取材を受けた。現地で放送されたようで、韓国人の友人から「見たよ」と言われたものの、どう扱われていたのか？　なんか気になる。**神保**

■PFFにて風間志織監督「せかいのおわり」鑑賞。中村麻美&KEE改め渋川清彦、長塚圭史とそれぞれの俳優の持ち味が活きる作品だが、公開未定とのこと。ぜひ公開して！　**滝澤**

■野沢尚氏の訃報に驚く。氏の書くドラマは常に野心的で、何度も衝撃や感動を与えられた。もう新作を観られないのは残念で仕方ない。次々号で追悼記事を組ませていただきます。**天本**

■85周年を表紙で振り返ってみたがまだまだ載せたい個性的な表紙がいっぱい。キネ旬OGの小藤田千栄子さんならではの解説は非常に勉強になりました。まだまだ勉強しなければ。**山田**

■森田芳光監督の「海猫」の撮影現場へ。南茅部の漁港で行われている撮影を見学していると、切なくも美しい大人の恋愛映画になることを確信。映画ファンの皆さん、ご期待下さい。**前野**

■60年代生。映画の観客動員のピークを過ぎていた。諸先輩方によく「いい時を知らず気の毒」と言われるが、体験してないので実感がない。逆に底は経験してるので恐いものはない。そう林海象監督と話した帰り、香川京子さんのタクシーに同乗させていただいた。降り際財布を出す私の手を握り、首を振る香川さん。私は手の汗を悟られまいと財布を握り締めていた。**関口**

次号予告

8月下旬特別号[No.1411]◎8月5日発売◎特別定価1,000円(税込)

巻頭特集
創刊85周年記念特集・後編
ジャンル別オールタイムベスト・テン
時代劇、ラブストーリー、アニメーション、3ジャンルのベスト・テンが決まる!

作品特集
◎「サンダーバード」◎「誰も知らない」◎「モナリザ・スマイル」◎「リディック」

FACE●藤原竜也　Hot Shots●マイク・マイヤーズ、柳楽優弥、「阿修羅城の瞳」撮影現場ルポ

キネマ旬報バックナンバー在庫一覧

☆＝定価(税込)　送料は各120円(2／下・臨時増刊は160円)

近刊バックナンバー

'04・7月下旬号 「69 sixty nine」特集
☆820円◇送料120円

'04・7月上旬号 「スチームボーイ」特集
☆820円◇送料120円

'04・6月下旬特別号 「ブラザーフッド」と夏の韓国映画
☆860円◇送料120円

'04・6月上旬号 「トロイ」特集
☆820円◇送料120円

'04・5月下旬号 「世界の中心で、愛をさけぶ」特集
☆820円◇送料120円

'04・5月上旬特別号 「コールドマウンテン」特集
☆860円◇送料120円

2003

●1388・9月上旬特別号　☆860円
「HERO」／「ドラゴンヘッド」「ファム・ファタール」／特別企画：韓国テレビドラマ／「木更津キャッツアイ」ルポ①

●1389・9月下旬号　☆820円
「恋は邪魔者」「座頭市」「フォーン・ブース」／「ロボコン」／どう観た「踊る大捜査線 THE MOVIE 2」「木更津キャッツアイ」ルポ②

●1390・10月上旬号　☆820円
「陰陽師Ⅱ」「トゥームレイダー2」「サハラに舞う羽根」／リスペクトー中平康／映画本座談会2003年上半期版／「木更津キャッツアイ」ルポ③

●1391・10月下旬号　☆820円
「インファナル・アフェア」「リーグ・オブ・レジェンド」／「マグダレンの祈り」／「木更津キャッツアイ」ルポ④／「阿修羅のごとく」ルポ前篇

●1392・11月上旬号　☆820円
「キル・ビル」／「ティアーズ・オブ・ザ・サン」／「スカイハイ［劇場版］」「木更津キャッツアイ」ルポ⑤／「阿修羅のごとく」ルポ後篇

●1393・11月下旬号　☆820円
「阿修羅のごとく」「マトリックス　レボリューションズ」「g@me.」／「昭和歌謡大全集」／「木更津キャッツアイ」ルポ⑥／双葉十三郎が選ぶ日本映画男優100人

●1394・12月上旬特別号　☆860円
「木更津キャッツアイ　日本シリーズ」「バッドボーイズ2バッド」「ブラウン・バニー」／「幸福の鐘」／「ヴァイブレータ」

●1395・12月下旬号　☆820円
「ラスト　サムライ」「ファインディング・ニモ」／「美しい夏キリシマ」「MUSA」／どう見た「キル・ビル」／特別企画：小津安二郎生誕百年

2004

●1396・1月上旬号　☆820円
「2046」／「最後の恋, 初めての恋」「ミシェル・ヴァイヨン」「ジョゼと虎と魚たち」／「10ミニッツ・オールダー」「アイデン&ティティ」／「すべては愛のために」

●1397・1月下旬新春特別号　☆860円
KOREAN MOVIE&STAR2004／「ミスティック・リバー」「着信アリ」「半落ち」／「25時」／新春インタビュー：新藤兼人・鈴木敏夫・三谷幸喜・大林宣彦

●1398・2月上旬号　☆820円
「ドラッグストア・ガール」／「シービスケット」「赤い月」「ニューオーリンズ・トライアル」／「オアシス」／特別企画：祝・主演100本　哀川翔

●1399・2月下旬決算特別号　☆1600円
2003年度ベスト・テン／公開作品リスト／「嗤う伊右衛門」／「この世の外へ　クラブ進駐軍」

●1400・3月上旬号　☆820円
「ロード・オブ・ザ・リング　王の帰還」／「ヘブン・アンド・アース」／「東京原発」／「グッバイ・レーニン！」「マスター・アンド・コマンダー」

●1401・3月下旬号　☆820円
「ホテル　ビーナス」／「ペイチェック　消された記憶」／「イノセンス」「花とアリス」「ピカ☆☆ンチ LIFE IS HARDだからHAPPY」／スクリーンで甦る「大脱走」

●1402・4月上旬号　☆820円
「クイール」「イン・ザ・カット」／「殺人の追憶」「N.Y.式ハッピー・セラピー」「卒業の朝」／第76回アカデミー賞のすべて

●1403・4月下旬号　☆820円
「恋人はスナイパー《劇場版》」「ディボース・ショウ」「ピーター・パン」「バーバー吉野」／映画本座談会2003年下半期　クリント・イーストウッド論

●1404・5月上旬特別号　☆860円
「コールドマウンテン」「CASSHERN」／「キル・ビルVol. 2」／「ロスト・イン・トランスレーション」／山中貞雄監督入門　特集　イ・ビョンホン

●1405・5月下旬号　☆820円
「世界の中心で、愛をさけぶ」／「ビッグ・フィッシュ」／「パッション」／対談：犬童一心×山崎努・青島幸男×谷啓

●1406・6月上旬号　☆820円
「トロイ」「21グラム」／「深呼吸の必要」／「クリムゾン・リバー2　黙示録の天使たち」日本映画の曲り角

●1407・6月下旬特別号　☆860円
「ブラザーフッド」と夏の韓国映画「デイ・アフター・トゥモロー」／「天国の本屋～恋火」／「海猿」スペシャルインタビュー：寺島進

●1408・7月上旬号　☆820円
「スチームボーイ」／「白いカラス」「ウォルター少年と、夏の休日」「ハリー・ポッター」と夏休み映画64本　追悼：三橋達也

●1409・7月下旬号　☆820円
「69 sixty nine」／「スパイダーマン2」／「ドリーマーズ」「丹下左膳　百万両の壺」／「茶の味」鼎談：石井克人×我修院達也×浅野忠信　特別企画：韓国映画の女性たち

■本欄掲載以外の号の一覧もございますのでご希望の方はハガキ等でお申し込み下さい。
■バックナンバーのお申し込みは、最寄の書店に御注文いただくか、小社宛、現金書留または郵便振替用紙にて、定価に送料をあわせて御入金下さい。また、下記の書店にてバックナンバーを扱っておりますので、御利用下さい。

北上市　ブックスサンワ
仙台市　丸善アエル店
川口市　書泉ブックドーム
千葉県　芳林堂書店津田沼店・多田屋中央店
東京都　八重洲BC本店・三省堂書店本店・書泉グランデ・書泉ブックマート・書泉ブックタワー・大盛堂書店・リブロ渋谷店・リブロ池袋店・旭屋書店銀座店・教文館・紀伊國屋書店本店・紀伊國屋書店新宿南店・ブックファースト渋谷店・ジュンク堂書店池袋店・ジュンク堂書店プレスセンター店
横浜市　有隣堂イセザキ本店
静岡市　戸田書店静岡本店
名古屋　ちくさ正文館本店・リブロ名古屋店・ヴィレッジヴァンガード生活創庫店・ヴィレッジヴァンガードベイシティ
京都市　ブックファースト京都店
大阪市　旭屋書店本店・シネ・ヌーヴォ・ジュンク堂書店大阪本店・紀伊國屋書店梅田本店シネマシネマ
神戸市　ジュンク堂書店三宮駅前店
倉敷市　喜久屋書店倉敷店
広島市　リブロ広島店
福岡市　リブロ福岡店・ジュンク堂書店福岡店
長崎市　メトロ書店アミュプラザ店

このたびは創刊85周年記念特別号に、
御協賛、御協力いただいましてありがとうございます。
ご愛読者並びに、各社、各団体の方々に
あらためて厚く御礼申し上げます。
引き続きご支援ご鞭撻の程、宜しくお願いいたします。

キネマ旬報社 一同

P2 映倫管理委員会
(協)日本映画監督協会
(協)日本映画撮影監督協会
(協)日本映画製作者協会
(協)日本映画・テレビ編集協会
(財)川喜多記念映画文化財団
(財)日本映画海外普及協会(ユニジャパンフィルム)
(社)シナリオ作家協会
(社)映画産業団体連合会

P3 (社)映像文化製作者連盟
(社)外国映画輸入配給協会
(社)日本映画製作者連盟
城戸賞運営委員会
(社)日本映画テレビプロデューサー協会
(社)日本音楽著作権協会
全国興行生活衛生同業組合連合会
東京都興行生活衛生同業組合
群馬アジア映画祭
(株)スキップシティ

P4 東京国際ファンタスティック映画祭2004
ゆうばり国際ファンタスティック映画祭2005
アルゴ・ピクチャーズ(株)
(株)アルタミラピクチャーズ
(有)ヴォイド
(株)NHKエンタープライズ21
大蔵映画(株)
(株)オズ
(株)オムニバス・ジャパン

P5 (株)ガル・エンタープライズ
共同映画(株)
(株)近代映画協会
(有)こぶしプロダクション
(株)桜映画社
(株)ジー・カンパニー
(株)ジェンコ
(株)シグロ
松竹(株)

P6 UIP映画
ブエナビスタインターナショナルジャパン
(株)セップ
東映(株)
東映アニメーション(株)
東宝(株)
(株)東宝映画
(株)プルミエ・インターナショナル
(株)マスト

P7 (有)アルファエージェンシー
(有)オフィスまとば
(株)コア
(有)マッシュ
(有)アニープラネット
(株)オフィス・エイト
(株)スキップ
(株)トライアル
(株)P2

P8 (株)メイジャー
(株)メディアボックス
(有)ライスタウンカンパニー
(株)樂舎
(株)足立コミュニティ・アーツ
イオンシネマズ(株)
(株)井出プロダクション
岩波ホール
OS(株)

P9 (株)歌舞伎座
九州東宝(株)
三和興行(株)
(有)シネパラダイス
(株)松竹シネプラッツ
(株)松竹マルチプレックスシアターズ
スバル興業(株)
大旺映画(株)
大弥(株)

P10 中央興業(有)
東亜興行(株)
(株)東急文化村
東京テアトル(株)
(株)東京楽天地
東宝東日本興行(株)
中日本興業(株)
南部興行(株)
(株)ヌーヴォ

P11 籏興行(株)
(株)ヒューマックスシネマ
藤沢映画興行(株)
藤本興業(有)
三葉興業(株)
武蔵野興業(株)
有楽興行(株)
ユナイテッド・シネマ(株)
アミューズメントメディア総合学院

P12 (株)シナリオ・センター
日活(株)
日活芸術学院
日本映画学校
ニューシネマワークショップ(株)
(株)クリエイティブ・エース
(有)クリエイティブ・オズ
(有)クリエイティブ・ルーム・エムケー
コミュニケーションプラス(株)
(有)ダッド・クリエイション

P13 東宝アド(株)
(株)マツモトデザインセンター
(有)メディア企画シーズ
(有)シーズADプロダクション
大村紙業(株)
伸光印刷(株)
(株)竹尾
(株)田村洋紙店
四葉印刷(株)
丸紅(株)

P14 (株)SSコミュニケーションズ
(株)ザジフィルムズ
(株)プロデューサーズアカデミア
三映印刷(株)

P15 凸版印刷(株)
丸住製紙(株)
丸紅紙パルプ販売(株)
(株)ローヤル企画

P16 三晃印刷(株)

映倫管理委員会

管理委員長 **清水英夫**

〒104-0061 東京都中央区銀座三丁目九番一八号
東銀座ビル二階
電　話（〇三）三五四一－二七一七
FAX（〇三）三五四一－二七一九

協同組合 日本映画監督協会

理事長 **崔　洋一**

〒150-0044 東京都渋谷区円山町三－二　五階
TEL（〇三）三四六一－四四一一
FAX（〇三）三四六一－四四五七
http://www.dgj.or.jp/

JSC SINCE 1954

協同組合 日本映画撮影監督協会

理事長 **兼松熈太郎**

〒160-0022 東京都新宿区新宿1の25の14
第2関根ビル5階
TEL（〇三）三三五六－七八九六
FAX（〇三）三三五六－七八九七
http://www.jsc.or.jp

協同組合 日本映画製作者協会

代表理事 **新藤次郎**

〒一〇七－〇〇五二　東京都港区赤坂五－四－一六
シナリオ会館6F
TEL（〇三）三五八二－二六五四

協同組合 日本映画・テレビ編集協会

理事長 **井上　治**

〒141-0022 東京都品川区東五反田2－14－1
㈱IMAGICA内
TEL・FAX 03－3440－6347
URL:http://www.mmjp.or.jp/jse1983/index.htm
E-mail:jse1983@an.email.ne.jp

J.S.E.

KAWAKITA
MEMORIAL FILM INSTITUTE

財団法人川喜多記念映画文化財団
理事長　岡田正代

〒102-0082　東京都千代田区一番町18番地
川喜多メモリアルビル1階
TEL(03)3265-3281　FAX(03)3265-3276
URL　http://www.kawakita-film.or.jp/

財団法人 日本映画海外普及協会（ユニジャパンフィルム）

会長 **与謝野　馨**

UJF

〒104-0061 東京都中央区銀座二丁目十一番六号
竹田ビル五〇五
TEL 〇三（五五六五）七五[illegible]
FAX 〇三（五五六五）七五[illegible]

シナリオ講座 通信講座

シナリオ作家協会

理事長 **山内　久**
会　長 **加藤正人**

〒107-0052 東京都港区赤坂五－四－一六
シナリオ会館内
TEL（〇三）三五八四－一九〇一～二

社団法人 映画産業団体連合会

会　長 **岡田　茂**

東京都中央区銀座二ノ十五ノ二
東急銀座ビル三階
TEL（〇三）三五四七－一八五五

祝キネマ旬報創刊85周年

社団法人
映像文化製作者連盟
副会長　大須賀武
副会長　塚田芳夫

〒一〇五－〇〇〇一
東京都港区虎の門一ノ十七ノ一
視聴覚ビル
TEL（三五〇一）〇二三六
FAX（三五〇一）〇二三八
http://www.eibunren.or.jp

社団法人
外国映画輸入配給協会
会長　古川博三

〒一〇四－〇〇六一
東京都中央区銀座二ノ十五ノ二
東急銀座ビル3階
TEL　〇三(三五二四)四一一四
FAX　〇三(三五二四)四一一三

社団法人
日本映画製作者連盟
会長　松岡功

城戸賞運営委員会
委員長　松岡功

社団法人
日本映画テレビプロデューサー協会
会長　杉田成道

〒150-0042
東京都渋谷区宇田川町四－一－八
渋谷ビデオスタジオ五階
TEL（〇三）三四七七－七三五五
FAX（〇三）三四七七－七三四〇

社団法人
日本音楽著作権協会
理事長　吉田茂

〒一五一－八五四〇
東京都渋谷区上原三－六－十二
電話　〇三(三四八一)二一二一
FAX　〇三(三四八一)二一五〇

全国興行生活衛生同業組合連合会
会長　大藏滿彦
会長代理　岡島朝太郎
会長代理　柳勲
会長代理　佐藤進

〒105-0004
東京都港区新橋六丁目八番二号
全国生衛会館六F
TEL（〇三）五四〇八－五四四六
FAX（〇三）五四〇八－五四四七

東京都興行生活衛生同業組合
理事長　大藏滿彦

〒105-0004
東京都港区新橋六丁目八番二号
全国生衛会館六F
TEL（〇三）五四〇八－五四四六
FAX（〇三）五四〇八－五四四七

大人前売 1,000円
小中高生前売 500円

第10回 群馬アジア映画祭
Gunma Asian Film Festival Vol.10
2004年8月8日(日)
場所　みかぼみらい館
群馬県藤岡市藤岡2728
電話0274-22-5511
①初恋のきた道(中国・米合作)
②サマー・ヌード(日本)
③呪怨(日本)
④ザ・カップ(ブータン・オーストラリア合作)
※4本立＋サロンコンサート　途中入退場自由

株式会社スキップシティ
代表取締役社長　秋元勝弘

〒333-0844
埼玉県川口市上青木3-12-63
TEL 048-264-7777
FAX 048-264-7778

祝キネマ旬報創刊85周年

アルゴ・ピクチャーズ株式会社

代表取締役社長 岡田 裕

〒一〇七-〇〇五二
東京都港区赤坂四-一〇-二十一 八幡ビル2F
電話 03-3584-6237
FAX 03-3584-6238
e-mail mail@argopictures.jp

YUBARI INTERNATIONAL FANTASTIC FILM FESTIVAL 2005

東京国際映画祭協賛企画
ゆうばり国際ファンタスティック映画祭2005
2.24▶2.28

〒068-0403
北海道夕張市本町4丁目51番地
NTT夕張ビル1F
TEL01235-3-2002
http://yubarifanta.com

映画のある街 夕張

ありがとう20周年!!

20TH TOKYO INTERNATIONAL FANTASTIC FILM FESTIVAL

東京国際ファンタスティック映画祭2004
20th Anniversary

会場 新宿ミラノ座
期間 10月14日(木)-10月17日(日)
http://tokyofanta.com

NHKアジア・フィルム・フェスティバル

サンダンス・NHK国際映像作家賞

NHKエンタープライズ21
渋谷区神山町4-14 第3共同ビル3F
Tel:03-3481-7850/Fax:03-3481-7788
www.nhk.or.jp/sun_asia/

VOID

TV Program
Documentary
Short Movie
Opening Vision
Promotional Clip
TV Spot / Trailer

代表取締役
塚本修史

有限会社ヴォイド
〒153-0041 東京都目黒区駒場4-7-8 2F
tel:03/5738-5105
fax:03/5738-5106
mail@void-jp.com

Check It Out!!

今年のアルタミラは、
音楽話題作3連発!!

スウィングガールズ
9月全国東宝洋画系ロードショー

ワンモアタイム
11月テアトル新宿にてロードショー

タカダワタル的
全国絶賛上映中

株式会社アルタミラピクチャーズ
ALTAMIRA PICTURES, INC.
TEL 03-5456-8581

OMNIBUS JAPAN
COMPUTER GRAPHICS & POST PRODUCTION

代表取締役社長
山下 欽也

株式会社オムニバス・ジャパン
〒107-0052
東京都港区赤坂7-9-11
Tel.03-6229-0601
Fax.03-6229-0604

株式会社 オ ズ

代表取締役 一瀬隆重

〒150-0012
東京都渋谷区広尾1-1-39
恵比寿プライムスクエアタワー11階
PH:03-5775-1830/FX:03-5775-1840

大蔵映画株式会社

代表取締役社長 大藏滿彦

〒104-0061
東京都中央区銀座五-一三-十二
壱番館ビル9階
電話 03(3573)5566

祝キネマ旬報創刊85周年

祝キネマ旬報創刊85周年

祝キネマ旬報創刊85周年

Digitized by Google

祝キネマ旬報創刊85周年

藤沢映画興行株式会社

代表取締役社長　手塚　茂

〒二五一－〇〇五二
神奈川県藤沢市藤沢九三番地
電話　〇四六六－二二－九一〇一

ヒューマックスシネマ

wonderful time
HUMAX

代表取締役社長
林　瑞峰

〒162-0067 東京都新宿区富久町13-19
TEL(03)3351-1181
FAX(03)3351-1185

籏興行株式会社

代表取締役　籏　功泰

〒104-0061 東京都中央区銀座四丁目四番五号
銀座籏ビル六階
TEL〇三(三五六一)四一六三

武蔵野興業株式会社

取締役社長　河野勝雄

〒160-0022 東京都新宿区新宿三－二七－一〇
電話(三三五二)〇〇五二(代)

三葉興業株式会社

代表取締役　小林　力

〒160-0023 東京都新宿区西新宿一－五－十一
新宿三葉ビル
TEL(〇三)三三四二－〇五五一
FAX(〇三)三三四二－〇七六〇

藤本興業有限会社

取締役社長　藤本慎介

藤本興業本社　福山市笠岡町四番四号
電話〇八四(九二四)一八二〇
FAX〇八四(九二六)〇五一四

アミューズメントメディア総合学院

理事長　吉田尚剛

〒150-0011 東京都渋谷区東2-29-8
TEL.03-3406-5050

UNITED cinemas　UNIVERSAL

ユナイテッド・シネマ株式会社

代表取締役社長
塚田哲夫

〒107－0052
東京都港区赤坂2－22－24 泉赤坂ビル4階
TEL (03)3224－3200代　FAX (03)3224－3212

有楽興行株式会社

YURAKU KOGYO

〒810-0802
福岡市博多区中洲中島町2－3
福岡フジランドビル
TEL092(271)4455 FAX092(271)4484
代表取締役 野中康宏

●鹿児島シネシティ文化1・2・3・4・5・6／福岡シネテリエ天神
●魚菜や「有楽市場」福岡キャナル店
●居酒屋「朝次郎」福岡天神ビル店・大名店・鹿児島店・長崎店
●パブ・キリン　福岡天神ビル店
●魚菜や「炉庵」鹿児島店・炭火炙り「炉庵」長崎店〈9月17日新規オープン〉
●鹿児島ミッテ10
●魚菜や「朝次郎」アミュプラザ鹿児島店

祝キネマ旬報創刊85周年

日本映画学校

理事長 今村昌平
校　長 佐藤忠男

〒215-0004
川崎市麻生区万福寺
1丁目16番30号
TEL 044(951)2511(代表)
www.eiga.ac.jp

日活株式会社
代表取締役社長 中村雅哉

日活芸術学院
学院長 三浦朱門
〒182-0023 東京都調布市染地2の8の12
(0424)八五-二四四三

㈱シナリオ・センター
代表 小林幸恵
〒107-0061 港区北青山三-十五-十四
TEL 〇三(三四〇七)六九三六

新たな創造

DESIGN OFFICE
creative OZ

(有)クリエイティブ・オズ
磯谷茂　鈴木則久
〒104-0041 東京都中央区新富2-4-4アクアビル4F
TEL.03-3553-6638 FAX.03-3553-6270
e-mail:info-oz@axel.ocn.ne.jp

C.A

代表取締役
廣木貢

株式会社 クリエイティブ・エース
〒104-0045
東京都中央区築地3-7-5 築地AIビル4F
TEL：03-3545-2171　FAX：03-3545-2814

New Cinema Workshop

ニューシネマワークショップ株式会社
主宰　武藤起一
代表取締役　竹平時夫
http://www.ncws.co.jp
〒162-0042 東京都新宿区早稲田町73 村橋ビル2F
tel:03-5285-7455 fax:03-5285-7457
email:info@ncws.co.jp

DESIGN IS FATHER
FOR ADVERTISEMENT

DAD
CREATION

有限会社 ダッド・クリエイション
代表取締役 三浦正悦
〒106-0032 東京都港区六本木5-2-1
ほうらいやビル701E
TEL.03-5785-4223 FAX.03-5785-4224
E-MALL：design@dadcreation.co.jp

Communication C Plus P

コミュニケーション プラス株式会社
〒106-0032
東京都港区六本木3-4-33 マルマン六本木ビル2F
TEL.03-6229-2800(代) FAX.03-6229-2801
http://www.c-plus.co.jp

GRAPHIC DESIGN. ART DESIGN
PRINT ADS. ILLUSTRATION.
PHOTOGRAPHY. PACKAGING etc.

MK

CREATIVE ROOM MK
INCORPORATED
No.2 KATAYAMA Bldg. 2F 4-14-19 GINZA CHYUO-KU TOKYO 104-0061
TEL 03-3545-0508 FAX 03-3545-0509

ZAZIE FILMS, INC.
株式会社 ザジ フィルムズ
東京都目黒区目黒2-10-8 第2アトモスフィア青山7F
TEL.03-3490-4148 FAX.03-3490-4149
http://www.zaziefilms.com

TAN de REPENTE
ある日、突然。

アルゼンチンの新しい才能 ディエゴ・レルマン監督作品
2002年 ロカルノ国際映画祭 銀豹賞 受賞
2002年 ハバナ映画祭 グランプリ・特別賞 受賞
2002年 ブエノスアイレス国際映画祭 観客賞・審査員特別賞 受賞
シネ・アミューズにて8月上旬レイト・ロードショー
テアトル梅田にて9月公開、順次全国公開予定

株式会社 SSコミュニケーションズ

定期刊行物

生活が楽しくなるヒントがいっぱい
レタスクラブ

親子で楽しむ子どものファッション誌
sesame セサミ

差がつくお金の情報誌
MONEY JAPAN

いちばんやさしいお金の本
マネープラス

50代からの暮らしイキイキマガジン
毎日が発見

〒101-8467 東京都千代田区神田錦町3-18-3 錦三ビル
TEL.03(5283)0220(代)

高級美術オフセット印刷
三映印刷株式会社
代表取締役社長 猿丸安良
本社・工場 東京都練馬区貫井四丁目一番七号
〒一七六-〇〇二一 電話(三九九九)一一五六～九番(代)
営業所 東京都中央区銀座一ノ十八ノ二(タツビル六階)
〒一〇四-〇〇六一 電話(三五六二)三六九一～四番(代)

第4回日本映画エンジェル大賞
応募作品募集中 7月30日締切り
詳細は www.angel-award.com

角川出版事業振興基金信託
コンテンツビジネス出資プロジェクト運営事務局
株式会社プロデューサーズアカデミア
取締役会長 原正人
〒一〇六-〇〇四一
東京都港区麻布台一丁目四番三号
エグゼクティブタワー麻布台一三〇二
電話 〇三(三五六〇)三二八八

丸住製紙株式会社

〒799－0196
愛媛県四国中央市川之江町826番地

凸版印刷株式会社

代表取締役社長
足立直樹

〒一〇一－〇〇二四
東京都千代田区神田和泉町一番地
電話〇三(三八三五)五一一一(代)

株式会社ローヤル企画

代表取締役
松浦豊

〒一〇一－〇〇五四 東京都千代田区神田錦町三－十四
電話 〇三(五二八〇)〇五七一

丸紅紙パルプ販売株式会社

取締役社長
黒沢慶治

東京都千代田区三崎町1丁目4番17号(東洋ビル)
TEL (03) 5217－5611 (代表)

三晃印刷株式会社

〒一六二－八五三〇
東京都新宿区水道町四番十三号
電話〇三(三二六八)六二一一

世界が泣いた!!

かわいい子トラの兄弟が、この秋 劇場で待っています。

"ボクが守ってあげる"

その日、ジャングルに一発の銃声が響いた。

両親を奪われた幼いトラの兄弟クマルとサンガ。
兄クマルはサーカスに売りとばされ・・・・
弟サンガは少年に助けられた・・・・
兄弟は再び出会うことができるのか、
もし、出会った時、兄弟ということを憶えているだろうか――

クマルとサンガを苛酷な運命が待ちうけていた。

誰にも うばえない、
愛と友情と、命の輝き――。

前売鑑賞券絶賛発売中!(一部劇場を除く)

一般券 1300円/ジュニア券(3才以上中学生まで)800円

※料金は消費税込み

クマルとサンガの肉球携帯クリーナープレゼント!

劇場窓口にて前売鑑賞券をお買い求めの方に限り
(限定品につきお早めに!!)

表 裏

「セブン・イヤーズ・イン・チベット」「子熊物語」
ジャン=ジャック・アノー監督 早くも最高傑作の呼び声!

トゥー・ブラザーズ

提供:パテ 出演:ガイ・ピアース/ジャン=クロード・ドレフュス/フィリピーヌ・ルロワ=ボリュー/フレディー・ハイモア/オアー・ニュイアン "トゥー・ブラザーズ" 脚本:アラン・ゴダール&ジャン=ジャック・アノー トラのトレーニングと監督:ティエリー・ル・ポルティエ
音楽:スティーヴン・ウォーベック 編集:ノエル・ボワッソン 撮影監督:ジャン=マリー・ドルージュ A.F.C 美術:ピエール・クフュレアン 衣装:ピエール=イヴ・ゲイロー 音響:エティー・ジョセフ
特殊効果:フレデリック・モロー ライン・プロデューサー:ザビエル・カスターノ プロデューサー:ジェイク・エバーツ/ジャン=ジャック・アノー 監督:ジャン=ジャック・アノー 仏英合作:パテ・レン・プロダクション(パリ)/トゥー・ブラザーズ・プロダクションズ・リミテッド(ロンドン)/TF1・フィルムズ・プロダクション 製作協力:キャナル・プリュス

小説版&ビジュアル・ブック:評論社刊 サントラ盤:ユニバーサル クラシックス
配給:日本ヘラルド映画
www.herald.co.jp TwoBrotherS

東京 丸の内ピカデリー1 大阪 梅田ピカデリー 名古屋 名古屋ピカデリー 福岡 福岡中洲大洋 札幌 札幌シネマフロンティア

他 全国松竹・東急系にて9月ロードショー

特別定価1000円 本体952円
雑誌 20721-8/1
4910207210842
00952

藤原竜也／中村福助／柳楽優弥／イザベル・アジャーニ／オドレイ・トトゥ／クライヴ・オーウェン
マイク・マイヤーズ／「阿修羅城の瞳」「イズ・エー」撮影現場ルポ／ＤＶＤ情報も満載！

キネマ旬報

8月下旬
特別号
NO.1411
2004

85th 創刊85周年記念号②

ジャンル別オールタイム ベスト・テン

時代劇／ラブストーリー／アニメーション／お楽しみ番外編

「サンダーバード」
「モナリザ・スマイル」
「リディック」
「誰も知らない」
「16歳の合衆国」

9.10
VHS&DVD RELEASE

キネ旬レヴューで満点を獲得!!★★★★（3月上旬号）

アルトマンからアルモドバルへと連なる現代的な映画の語り口。——ル・モンド紙

スペインからフランスへ——。
ラテンの調べに導かれ、
孤独な人生たちが出逢う。

めざめ
Carnages

2002年／フランス＝ベルギー＝スペイン＝スイス合作／本編127分／カラー／シネマスコープサイズ
監督+脚本:デルフィーヌ・グレーズ
出演:キアラ・マストロヤンニ『デブラ・ウィンガーを探して』『クレーブの奥方』
アンヘラ・モリーナ『ライブ・フレッシュ』『欲望のあいまいな対象』
ジャック・ガンブラン『クリクリのいた夏』『レセ・パセ　自由への通行許可証』

2002年カンヌ国際映画祭"ある視点"部門正式出品《ヤング賞》受賞

2004年全国ロードショー公開作

めざめ

定価¥4,935（税込）
¥4,700（税別）

DVF-81　5.1chドルビーデジタル
音声①オリジナル〔フランス語〕
5.1chドルビーデジタル 日本語字幕

ンヌ受賞のショートフィルムほか
華特典収録!
督自身が語るフィルモグラフィー
ショート・サーキット』（約10分）
ンヌ国際映画祭監督週間部門賞
空中楼閣』（28分）
ャスト&スタッフ解説
告編（フランス版、日本語版）
※特典、ジャケット・デザイン等は都合により予告なく変更する場合がございます。

:ユーロスペース／エレファント・ピクチャー／日活
HS&DVD同時レンタル開始!

エドワード・バーンズ「15ミニッツ」
レイチェル・ワイズ「ハムナプトラ」
アンディ・ガルシア「オーシャンズ11」
and ダスティン・ホフマン「ニューオーリンズ・トライアル」

コンフィデンス
CONFIDENCE

4大スターが激突する、極上のクライム・エンターテイメント!!

PLAYER 天才詐欺師
THE BAIT 美貌の女スリ
THE LAW 執念のFBI捜査官
THE KING 暗黒街の大物

仕掛け。裏切り。ドンデン返し。誰を信じてもダマされる。

メイキング、インタビュー、予告篇…など、
約60分に及ぶ特典映像満載!

8.6 FRIDAY ON DVD

特典		
■メイキング	■予告篇、TVスポット	■スタッフ&キャスト解説
■スタッフ&キャスト・インタビュー	■コメンタリー	■ピクチャー・ディスク

STAFF
監督……ジェームズ・フォーリー「NYPD15分署」
脚本……ダグ・ユング
撮影監督……ファン・ルイス・アンシア「ノー・グッド・シングス」
プロデューサー……マーク・ピュターン「ルールズ・オブ・アトラクション」
プロダクション・デザイナー……ウィリアム・アーノルド

DVD
DVF-79／16:9LBシネマスコープ・サイズ
音声1:オリジナル＜英語＞5.1ch（ドルビーサラウンド）
音声2:日本語吹替（ドルビーステレオ）
字幕1:日本語　字幕2:吹替用字幕

全国劇場公開作品　2002年／アメリカ／97分／カラー

¥3,990（税込）　¥3,800（税別）

UR FRIENDS CLOSE AND YOUR MONEY CLOSER. KEEP YOUR FRIENDS CLOSE... DECEIVE 5,000,000 DOLLARS FROM THE MAFIA!!

全ての映画ファン待望の往年の名作4作品も同時リリース!

YANKEE DOODLE DANDY　GASLIGHT　GRAND HOTEL　DR.JEKYLL AND MR.HYDE

ヤンキー・ドゥードゥル・ダンディ
スペシャル・エディション(2枚組)　初DVD化

アカデミー賞®3部門に輝く、実在の"ミュージカルの父"を描いた名作!
『カサブランカ』の名匠、マイケル・カーチス監督&"ギャングスター"ジェームズ・キャグニー主演!

第15回アカデミー賞®3部門(主演男優・ミュージカル音楽・録音賞)受賞

©A.M.P.A.S.®

●約163分に及ぶ超豪華映像特典収録のスペシャル・エディション!

※掲載のジャケット、ピクチャーレーベル及びスペックは変更になる場合があります。

ガス燈
コレクターズ・エディション　初DVD化

1944年版と1940年版 2作品収録

夫に追いつめられていく若妻の恐怖にせまる傑作サスペンス。
1944年版と1940年版の2作品と映像特典を収録したコレクターズ・エディション!

第17回アカデミー賞®2部門(主演女優・室内装置賞)受賞

©A.M.P.A.S.®

【1944年版】イングリッド・バーグマン主演&『マイ・フェア・レディ』のジョージ・キューカー監督作!
初ソフト化【1940年版】44年版の原点となった知られざる名作!

※掲載のジャケット及びスペックは変更になる場合があります。

グランド・ホテル
特別版

豪華キャストが贈る、"グランド・ホテル"で交錯する人間ドラマ。
グレタ・ガルボ、ジョーン・クロフォードを始めハリウッド黄金期のスターによる華麗なる競演!

第5回アカデミー賞®作品賞受賞

©A.M.P.A.S.®

●約42分に及ぶ豪華映像特典!

※掲載のジャケット及びスペックは変更になる場合があります。

ジキル博士とハイド氏
コレクターズ・エディション

1932年版と1941年版 2作品収録

一人の男の善と悪を描き出す怪奇映画の傑作!
1932年版と1941年版の2作品を収録したコレタククターズ・エディション!

第5回アカデミー賞®主演男優賞受賞

©A.M.P.A.S.®

【1932年版】『スタア誕生』のフレデリック・マーチ&『絹の靴下』のルーベン・マムーリアン監督作!
初ソフト化【1941年版】『花嫁の父』のスペンサー・トレイシー&イングリッド・バーグマン主演!

※掲載のジャケット及びスペックは変更になる場合があります。

EVERGREEN SELECTION

お買い求めは、CDショップ、有名電器店、大型ビデオショップなどDVDソフト取扱店でどうぞ。

DVD&ビデオ最新情報は➡http://www.whv.jp/ ⓘhttp://www.whv.jp/i/

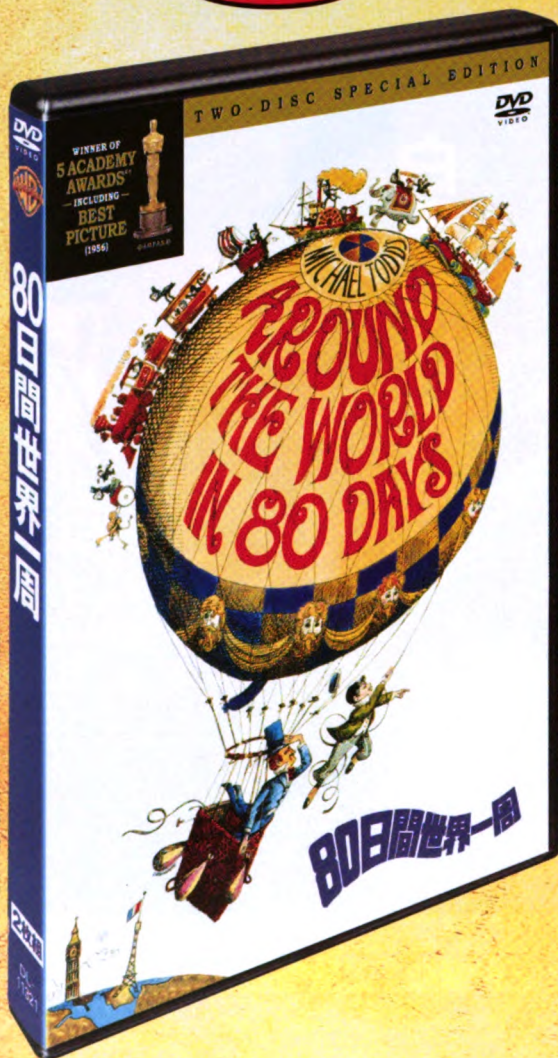
DVD VIDEO

アカデミー賞®5部門に輝く、
映画史上に残る最高のエンターテイメント！

80日間世界一周

スペシャル・エディション
（2枚組）

初DVD化

AROUND THE WORLD IN 80 DAYS

131分にも及ぶ
超豪華映像特典付の2枚組！

DISC ONE

イントロダクション
- ロバート・オズボーンによる（約8分）

80日間世界一周の世界
- 未公開シーン集（約16分／11シーン）
- スチール・ギャラリー（84枚）

オリジナル劇場予告編（1956年）
リバイバル版予告編（1983年）

DISC TWO

マイケル・トッドの世界
- ドキュメンタリー マイケル・トッドの世界（約51分）
- ロサンゼルス・プレミア試写（約3分）
- 1957年アカデミー賞®（約3分）
- 1957/10/17 テレビ放送"プレイハウス90"（約49分）
- スペインへ（約1分）

特別出演のフランク・シナトラ、
マレーネ・ディートリッヒ、
バスター・キートンを含む、
総勢47名もの豪華キャスト!!

第29回アカデミー賞®5部門
（作品・脚色・音楽・編集・カラー撮影賞）受賞

※掲載のジャケット、ピクチャーレーベル及びスペックは変更になる場合があります。

8.6 ON DVD

ハリウッドクラシックス
希望小売価格
各 ¥2,980（税抜）／¥3,129（税込）

ワーナー エンターテイメント ジャパン株式会社　ワーナー・ホーム・ビデオ

ヘルスィ〜

元気足りてる?

ドラッグストア ガール

本木克英監督作品

デラックス版

毎日に不足しがちな
笑いと涙と元気を補う
“サプリメント+コメディ”

8.25 ON SALE

DVD ¥4,935(税込)
税抜¥4,700

初回生産分のみのスペシャル特典!

★飛び出す!3Dジャケット(マウスパッド仕様)
★豪華ピクチャー・ブックレット封入(12P)

▶ブックレット

▲マウスパッド

DVDは豪華特典を満載したデラックス版!

特典内容

- ●HD24Pマスターよりダウンコンバートした高画質スクイーズ仕様
- ●田中麗奈、本木克英監督の対談音声(本篇副音声)
- ●DVD用に新たに制作したメイキング「田中麗奈が語る『ドラッグストア・ガール』のすべて」(24分)
- ●田中麗奈インタビュー(5分)
- ●バンブーボーイズ(柄本 明、三宅裕司、伊武雅刀、六平直政、徳井 優)インタビュー(6分)
- ●全国キャンペーン舞台挨拶(16分)
- ●劇場公開初日舞台挨拶(6分)
- ●劇場版オリジナル予告篇&TVスポット(2分)
- ●隠しコマンド付き
- ●キャスト&スタッフ・プロフィール(静止画)

STAFF 監督:本木克英 脚本:宮藤官九郎
CAST 田中麗奈/柄本 明/三宅裕司/伊武雅刀/六平直政/徳井 優
余 貴美子/荒川良々/藤田弓子/根岸季衣/今福将雄/永澤俊矢
篠井英介/山咲トオル/(特別出演)杉浦直樹・三田佳子

GNBD-1005

『ピンポン』『GO』のヒットメーカー 宮藤官九郎脚本 × 田中麗奈主演

DVDの最新情報をメールでお届け! 無料メールマガジン「New Disc Flash Mail」会員募集中! 詳しくはホームページをご覧ください。 http://www.geneon-ent.co.jp/movie/

TATSUYA FUJIWARA

キネマ旬報　2004年８月下旬特別号　No.1411　藤原竜也（「ムーンライト・ジェリーフィッシュ」）　撮影／冨永智子

「七人の侍」

和田誠

時代劇のベストを選ぶ、ときいた時、トップにくるのは「七人の侍」だろうなあ、と思った。当たっても別に自慢にはならない。多くの人が予想しただろうから。

それよりも、途中経過で追いあげてきて「七人の侍」を超えそうになったのが「十三人の刺客」だというのが意外だった。「十三人の刺客」はよくできた作品でぼくも好きだが、「七人の侍」に次いで人気の高いのは黒澤作品なら「用心棒」、そのほかで言うと「血槍富士」「切腹」などではないかと思ったのだ。

ぼく自身の好みを言えば、「七人の侍」が選ばれたことに何の苦情もないが、黒澤作品なら「隠し砦の三悪人」「椿三十郎」が上質の痛快娯楽作品として気に入っている。

ぼくの中で上位に入る時代劇は、古くは「丹下左膳餘話　百萬兩の壺」「赤西蠣太」、リアルタイムで観たものでは市川崑「雪之丞変化」(洒落っ気と映像の美しさ)、マキノ雅弘の「次郎長三国志」シリーズのうち「海道一の暴れん坊」、「東海道四谷怪談」(怖さと映像美)、「沓掛時次郎　遊侠一匹」、「御金蔵破り」(「地下室のメロディー」時代劇版。面白い)、「座頭市」シリーズのうち「座頭市千両首」、岡本喜八アクション・時代劇版「戦国野郎」といったところ。

内田吐夢の遺作となった「宮本武蔵」番外篇の「真剣勝負」(実際は遺作と言うより未完なのだが)が異色作として忘れ難い。雷蔵さんでは「忍びの者」ですかねえ。

そうそう、あまり人が言わない傑作がある。久松静児の「飛びっちょ勘太郎」。「スカラムーシュ」みたいな話で、二枚目森繁久彌が仇の丹波哲郎と大立回りをする痛快篇であります。

85
キネマ旬報創刊85周年

ジャンル別オールタイムベスト・テン

時代劇

ジャンル別
オールタイム　ベスト・テン［日本映画］

第1位 七人の侍

(1954年・東宝)
■監脚黒澤明脚橋本忍、小國英雄撮中井朝一出三船敏郎、志村喬、津島恵子、島崎雪子、藤原釜足、加東大介、木村功、千秋実、宮口精二、小杉義男、左卜全、稲葉義男、土屋嘉男、東野英治郎、高堂国典、多々良純■黒澤映画の最高峰と賞される日本映画の金字塔的作品。戦国時代、百姓の村を守るため集められた七人の侍と、野武士の壮絶な戦いを描くスペクタクル大作。

第2位 十三人の刺客

(1963年・東映京都)
■監工藤栄一脚池上金男撮鈴木重平出片岡千恵蔵、嵐寛寿郎、西村晃、内田良平、里見浩太朗、山城新伍、藤純子、月形龍之介、丹波哲郎、阿部九州男■将軍の弟で明石藩主の暴君を抹殺するべく送り込まれた13人の暗殺隊は、中山道のとある宿場を出口のない迷路に作りかえ、参勤交代途中の明石藩の武士たち一行を迎え撃つ。豪華キャストを配した“集団抗争時代劇”の代表作。

第3位 座頭市物語

(1962年・大映京都)
■監三隅研次脚犬塚稔撮牧浦地志出勝新太郎、天知茂、万里昌代、島田竜三、柳永二郎、毛利郁子■子母沢寛の随筆集「ふところ手帖」に収められた“座頭の市”をもとに映画化されたシリーズ第1作。居合抜きの達人の市（勝新太郎）は、後に“スーパーヒーロー”的イメージが定着していくが、本作では盲目のハンデからの、世をすねたような心情が描写されている。

第3位 宮本武蔵［五部作］

(1961～65年・東映京都)
■監内田吐夢脚内田吐夢、鈴木尚之撮(1～2部) 坪井誠、(3～5部)吉田貞次出中村錦之助、入江若葉、木村功、三國連太郎、高倉健■吉川英治の原作を、内田吐夢監督が5年がかり(年1本ペース)で映画化。中村錦之助が宮本武蔵に扮し熱演を見せた。特に第4部の「一乗寺の決斗」における、武蔵対吉岡一門73人の対決場面は圧巻の名殺陣シーンといわれる。

第7位 人情紙風船

(1937年・前進座＝P・C・L)
■監山中貞雄脚三村伸太郎撮三村明出中村翫右衛門、河原崎長十郎、山岸しづ江、霧立のぼる、中村鶴蔵、市川楽三郎■夭折の映画作家・山中貞雄が出征前、28歳の時に撮った遺作。貧乏長屋に住む人々の日常を苦悩に満ちたタッチで描いており、製作された昭和10年代という時代の不安が、作品の根底に色濃く流れている。

第5位 東海道四谷怪談

(1959年・新東宝)
■監中川信夫脚大貫正義、石川義寛撮西本正出天知茂、若杉嘉津子、北沢典子、江見俊太郎、大友純、中村竜三郎、池内淳子■鶴屋南北原作の『東海道四谷怪談』を、怪談映画で名を馳せた中川信夫監督が映画化。音で表現した伊右衛門(天知茂)の心理描写、小道具の使い方の巧さなど、工夫を凝らした演出で、見る者に鮮烈な印象を残す。

第5位 用心棒

(1961年・東宝＝黒澤プロ)
■監脚黒澤明脚菊島隆三撮宮川一夫出三船敏郎、仲代達矢、山田五十鈴、東野英治郎、加東大介、司葉子、河津清三郎、山茶花究■ふたりの親分が縄張り争いを繰り広げる宿場町にやってきた浪人・桑畑三十郎(三船敏郎)が、巧みな戦略で両者を戦わせ、街を“一掃”して去ってゆく痛快娯楽時代劇。敵役のニヒルな殺し屋役を演じた仲代達矢の存在感も素晴らしい。

第9位 薄桜記

(1959年・大映京都)
■監森一生脚伊藤大輔撮本多省三出市川雷蔵、勝新太郎、真城千都世、三田登喜子、香川良介■最愛の妻を5人組に犯されたことを知った丹下典膳(市川雷蔵)が、苦悩の末復讐を果たすという話を、中山安兵衛(勝新太郎)との交流を絡ませながら、赤穂浪士の討ち入りを背景に描いた正統派時代劇。クライマックスで深手を負いながら闘う典膳の美しさは特筆もの。

第7位 幕末太陽傳

(1957年・日活)
■監脚川島雄三脚田中啓一、今村昌平撮高村倉太郎出フランキー堺、石原裕次郎、南田洋子、左幸子、芦川いづみ、小林旭、小沢昭一、二谷英明■落語の「居残り佐平次」「品川心中」などを元ネタにした川島雄三監督の代表作。明治維新間近の文久2年、品川の遊郭を舞台に、無一文で“居残り”させられた佐平次(フランキー堺)と、同じ宿に居合わせた者たちをテンポ良く活写した。

第10位 丹下左膳餘話　百萬兩の壺

(1935年・日活京都)
■監山中貞雄脚三村伸太郎撮安本淳出大河内傳次郎、喜代三、宗春太郎、沢村国太郎、花井蘭子、深水藤子、高勢実乗■山中貞雄監督の現存する3作品のひとつ。伊藤大輔によって手掛けられた大河内傳次郎の「丹下左膳」シリーズを、人情喜劇ものとしてアレンジした。“コケ猿の壺”を巡る騒動を、ユーモアたっぷりに描く。

ラブストーリー

ジャンル別
オールタイム ベスト・テン

［外国映画］

第1位 ローマの休日

Roman Holiday（1953年・アメリカ）
■監ウィリアム・ワイラー脚イアン・マクレラン・ハンター、ジョン・ダイトン撮アンリ・アルカン、フランツ・F・プラナー出グレゴリー・ペック、オードリー・ヘップバーン、エディ・アルバート■オードリー・ヘップバーンを一躍スターダムにのしあげた名作。きゅうくつな暮らしに飽き飽きしてローマの町に飛び出した小国の王女と新聞記者の、短くせつないロマンスをみずみずしく描く。スペイン階段で食べるソフトクリーム、スクーターに二人乗りする姿などは、時代を超えていまなお観客をひきつける。スレンダーなスター・オードリーの誕生が、グラマラスな女性がもてはやされてきたハリウッドで女優の概念を大きく変えることにもなった。

第2位 男と女

Un Homme et une Femme（1966年・フランス）
■監撮脚クロード・ルルーシュ脚ピエール・ユイッテルヘーベン出アヌーク・エーメ、ジャン＝ルイ・トランティニャン、ピエール・バルー、ヴァレリー・ラグランジュ■フランシス・レイ作曲のメロディがスタンダードとなった大人の恋物語。妻に自殺されたカーレーサーと、スタントマンである夫を目の前の事故で失った女性。同じ寄宿学校に子供を通わせていたことから知り合ったふたりは次第に惹かれ合い、その情熱に気持ちに身をゆだねようとしながらも、互いに過去の傷から抜け出せない。若くはない男女の葛藤する姿を、洗練されたモノクローム映像と効果的なパートカラーで綴っている。アヌーク・エーメの悲しげな美しさも話題となった。

第3位 アパートの鍵貸します

The Apartment（1960年・アメリカ）
■監脚ビリー・ワイルダー脚I. A. L. ダイアモンド撮ジョゼフ・ラシェル出ジャック・レモン、シャーリー・マクレーン、フレッド・マクマレイ、レイ・ウォルストン■サラリーマンの悲哀とお人好しな恋のドタバタを、洒脱な台詞とユーモラスな物語運びで描いたワイルダーの代表作の一本。出世のために、自分のアパートを上役たちの逢引きの場に提供していた男は、ある日上司が連れてきたお相手を知ってショックを受ける。それは彼がずっと思いを寄せてきた女性だったからだ。平社員を演じたジャック・レモンの軽妙な演技、マドンナ的なエレベーターガールに扮したシャーリー・マクレーンの可憐なコメディエンヌぶりが、多くの観客を魅了した。

第4位 シェルブールの雨傘

Les Parapluies de Cherbourg（1964年・フランス、西ドイツ）
■監脚ジャック・ドゥミ撮ジャン・ラビエ出カトリーヌ・ドヌーヴ、ニーノ・カステルヌオーヴォ、アンヌ・ヴェルノン、マルク・ミシェル■すべての台詞を歌にするというオペラ的な試みがなされた名作ミュージカル。港町シェルブール、傘屋の一人娘とガレージで働く青年は一途な恋をはぐくんでいる。だが、青年は召集されて戦争に行き、彼の子をみごもっていた娘は青年が戦死したと思い込んで富豪の男性に嫁いだ。復員し別の女性と結婚した青年と、富豪の妻となったヒロインは偶然に再会するが、互いの幸福を思い、何も言わず別れる……。ミシェル・ルグランのせつないメロディ、ドヌーヴの輝くような美しさが忘れがたい悲恋物語。

第4位 隣の女

La Femme d'á côté（1981年・フランス）
■監脚フランソワ・トリュフォー脚シュザンヌ・シフマン、ジャン・オーレル撮ウィリアム・ルブシャンスキー出ジェラール・ドパルデュー、ファニー・アルダン、アンリ・ガルサン■トリュフォー晩年の代表作の一本。妻と幼い息子と三人で平凡に暮らす男が、隣に引っ越してきた夫婦を見て衝撃を受ける。年の離れた夫と共にやってきた女性が、かつての自分の恋人だったからだ。たがいの伴侶のため、すべてを隠し通そうと約束する二人。だが、秘密を共有していることが、二人の愛を再燃させてしまった……。トリュフォーの最後の恋人ファニー・アルダンが、許されない愛に身を投じる人妻を激しく美しく演じている。

第6位 逢びき

Brief Encounter（1945年・イギリス）
■監脚デイヴィッド・リーン脚ノエル・カワード撮ロバート・クラスカー出シリア・ジョンソン、トレヴァー・ハワード、スタンリー・ハロウェイ■ノエル・カワードの戯曲を映画化したラブロマンス。家族を大切にする主婦であり、貞淑な妻でもあるヒロインが、毎週木曜日に買い物に出かける町の駅で、ふとしたことからひとりの医師と知り合う。彼は毎週木曜にこの町に往診に来ていたのだ。週に一度、束の間の逢瀬を重ねる二人だったが、恋が募るほどにうしろめたさに耐えがたく、やがて別離を決意する……。平凡な主婦が平和な日常の中で出合ってしまった恋心を、デイヴィッド・リーンが写実的な演出で巧みに描いた大人の恋物語。

第6位 愛の嵐

The Night Porter（1973年・アメリカ、イタリア）
■監脚リリアーナ・カヴァーニ脚イタロ・モスカティ撮アルフィオ・コンティーニ出ダーク・ボガード、シャーロット・ランプリング、フィリップ・ルロワ■倒錯した性愛と愛憎半ばする複雑な感情で結ばれた男女の物語。かつてナチスの親衛隊であり、今は夜のホテルでフロント係をしている男は、ひとりの女性客を見て驚く。彼女は少女時代、収容所のユダヤ人捕虜であり、生きるために彼の異常な性の餌食となっていたのだ。いつしか妖しい愛へと変わっていた彼らの関係が、時を超えて再燃したとき、悲劇に結びつく。エロティシズムの究極のような愛の狂気に翻弄される男女の姿が、退廃美あふれる映像で描かれる。

第6位 恋人たち

Les Amants（1958年・フランス）
■監脚ルイ・マル脚ルイ・ド・ヴィルモラン撮アンリ・ドカー出ジャンヌ・モロー、アラン・キュニー、ジャン・マルク・ボリー、ジョゼ・ルイ・ド・ビラロンガ■「死刑台のエレベーター」に続いてルイ・マルがジャンヌ・モローをヒロインに撮った愛の物語。新聞社主の妻であるヒロインは、ブルジョワ暮らしにも、愛人との逢瀬にも飽き飽きしている。だが、ひょんなことで家に招くことになった若い考古学者との出会いが、彼女の眠っていた人間らしさを呼び覚ました。まっすぐな恋に導かれ、夫も愛人も豊かな暮らしも捨てて屋敷をあとにする。けだるさと生命力をあわせもつモローの美しさが輝き、特に月夜のラブシーンは名場面と話題を呼んだ。

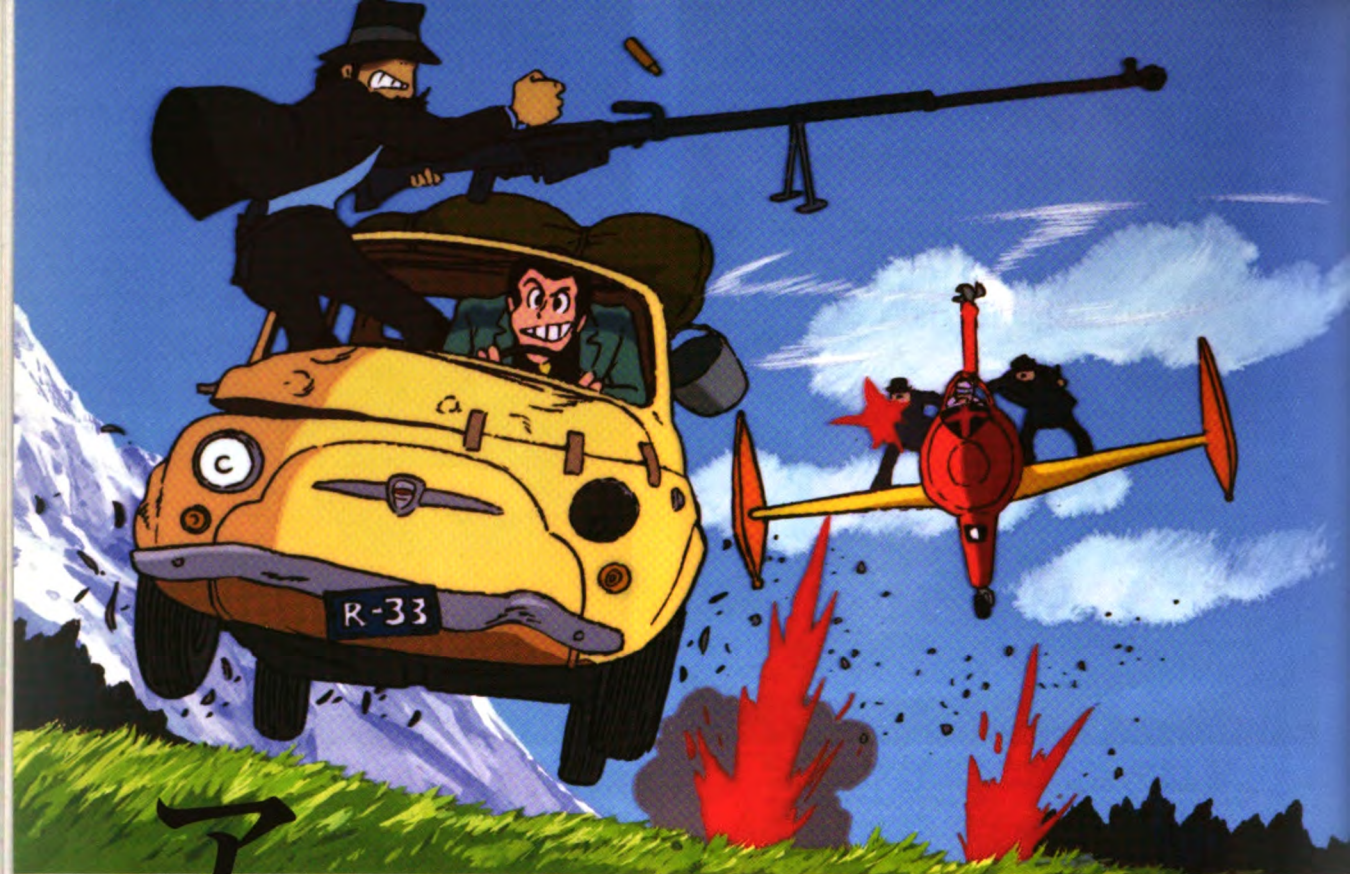
第6位 イングリッシュ・ペイシェント

The English Patient（1996年・アメリカ）
■監脚アンソニー・ミンゲラ撮ジョン・シール出レイフ・ファインズ、ジュリエット・ビノシュ、ウィレム・デフォー、クリスティン・スコット＝トーマス、コリン・ファース■第二次世界大戦も終わりに近い頃、記憶のない傷病兵、おそらくイギリス人であろうことから『イングリッシュ・ペイシェント』と呼ばれる一人の男が、イタリアの古城跡で、女性看護兵の世話を受けながら、砂漠での激しい恋とその悲劇的な結末を思い出してゆく。エキゾティックな砂漠を舞台にした激しい愛と、戦下で静かにはぐくまれるロマンス、ふたつの恋のゆくえをドラマティックに描き、米アカデミー賞を軒並みさらった大河ラブストーリー。

第6位 旅情

Summertime（1955年・イギリス、アメリカ）
■監脚デイヴィッド・リーン脚H・E・ベイツ撮ジャック・ヒルドヤード出キャサリン・ヘップバーン、ロッサノ・ブラッツィ、イザ・ミランダ■公開当時、多くの人にとってはまだ憧れの遠い地だったヴェネチアを舞台に、旅の恋に胸を焦がす女性の姿を初々しく描いたロマンス。キャリアを重ねた秘書が、やっととれた休暇旅行先で中年のイタリア人男性と知り合い、束の間のロマンスに夢心地になる。だが、その先に待つものを感じ取った彼女は、自らその地を後にした。ヘップバーンが演じたヒロインの心情は、時を経てもどこか現代的。ヴェネチアンガラスの赤い色、美しい風景が異国情緒を鮮やかにかきたてる。

第6位 昼下りの情事

Love in the Afternoon（1957年・アメリカ）
■監脚ビリー・ワイルダー脚I.A.L.ダイヤモンド撮ウィリアム・メラー出ゲイリー・クーパー、オードリー・ヘップバーン、モーリス・シュヴァリエ■ワイルダーの洗練された演出とワイルダー＆ダイヤモンドの洒落た台詞の数々、そしてヘップバーンの可憐な魅力が絶妙なロマンティック・コメディ。プレイボーイの紳士と、恋に慣れたふりを装いながら実はうぶな小娘、たわむれのつもりで始まった奇妙な恋の行く末は……。ベテランの余裕を見せるゲイリー・クーパーのコミカルなカサノヴァぶりと、背伸びするヒロインを演じたヘップバーンのみずみずしい魅力がきわだっていた。老探偵を演じたモーリス・シュヴァリエの小粋さも印象的。

ジャンル別オールタイム ベスト・テン アニメーション［日本映画・外国映画］

©モンキー・パンチ／TMS・NTV

第1位 ルパン三世 カリオストロの城

（1979年・日本）
■監脚宮崎駿脚山崎晴哉作画大塚康生声山田康雄、島本須美、石田太郎、納谷悟朗■劇場用「ルパン三世」のシリーズ第2作。宮崎駿は本作で監督デビューを果たした。国際的大泥棒のルパンが、カリオストロ公国の謀略を暴きつつ小公女クラリスの危機を救う。同作テレビ・シリーズ（71〜72）の後期演出も手掛けた宮崎は、モーリス・ルブランや黒岩涙香等の怪奇推理小説に材を採り、東映動画やテレビで培った技術を総動員してゴシック・ロマン風の冒険活劇に仕上げている。初公開時の興行成績はふるわなかったが、テレビ放映等で後々に評価を高めた。

第2位 ファンタジア

(1940年・アメリカ)
■製ウォルト・ディズニー製監ベン・シャープスティーン監サミュエル・アームストロング他■ディズニー・アニメの長編第3作。音楽に乗せてアニメーションを展開する短篇映画「シリー・シンフォニー」シリーズの発展型で、8曲のクラシックに合わせ、8つの台詞のない物語を描く。演目は『トッカータとフーガ』『くるみ割り人形』『魔法使いの弟子』『春の祭典』『交響曲第六番・田園』『時の踊り』『禿山の一夜』『アヴェ・マリア』。実写解説を間に挟み、挿話別に技術も趣も異なった絢爛豪華な映像が繰り広げられる音楽アニメの金字塔だ。

第2位 となりのトトロ

(1988年・日本)
■監脚宮崎駿作画佐藤好春声日高のり子、坂本千夏、糸井重里、北林谷栄■昭和30年代の関東近郊を舞台に、幼い姉妹と塚森に住む不思議な生物トトロとの交流を描いたファンタジー。国籍不明もしくは異世界での物語を綴る国産アニメーションが多い中、日本人が懐かしく感じる原風景を精緻に捉え、子供たちを喜ばせる映画が目指された。宮崎監督の切望に反しなかなか製作は実現しなかったが、「火垂るの墓」との二本立て興行でようやく可能に。結果、キネマ旬報ベスト・テンでは批評家・読者双方のベストワン獲得という快挙を成し遂げた。

第6位 AKIRA

(1988年・日本)
■監脚大友克洋脚橋本以蔵作画なかむらたかし声岩田光央、佐々木望、小山茉美■2019年のネオ東京を舞台に、超能力者アキラをめぐって暴走族少年、新たな超能力者、政府組織等が入り乱れ争うＳＦサイバーパンク。漫画家の大友克洋が自身の作品を映画化、製作費10億円、セル画数15万枚という前代未聞の規模で制作された。精緻な作画、実写的な構図やカット割をもって都市破壊のカタルシスを描き出し、以後のアニメーションに大きな影響を与えている。日本より海外で高く評価され、俗に言うジャパニメーションの先駆的代表作となった。

第5位 白雪姫

(1937年・アメリカ)
■製ウォルト・ディズニー監デイヴィッド・ハンド脚テッド・シアーズ、オットー・イングランダー他声アドリアナ・カセロッティ、ハリー・ストックウェル■世界初のカラー長編アニメーション。グリム兄弟の有名童話に基づき、キャラクターをふくらませて映画化、それまで劇映画の添え物短篇にすぎなかったアニメーションの地位を大きく向上させた。マルチプレーン・カメラやプレスコ方式、俳優の実写映像に基づく作画など様々な技法を施した大作であり、フルアニメの動画様式や音楽劇的スタイルを含め、ディズニー・タッチがすでに完成している。

第7位 映画クレヨンしんちゃん 嵐を呼ぶモーレツ！オトナ帝国の逆襲

(2001年・日本)
■監脚原恵一作画原勝徳、堤のりゆき、間々田益男声矢島晶子、津嘉山正種、小林愛■劇場版「クレヨンしんちゃん」のシリーズ第9作。世を20世紀の生活に戻そうと企む秘密組織と、幼稚園児・しんのすけの戦いをギャグ混じりに描く。70年代的風土へ還れと提唱する悪の組織に大人の観客はノスタルジーをもって共感し、一方で自身の未来を獲得しようとする子供たちの姿に新たな希望と責任を見出した。テレビ番組の延長かつ子供向けの枠で作られながら、強い批評性と娯楽性を兼ね備え、日本的な商業用アニメーションの高い到達点を示す。

第10位 太陽の王子 ホルスの大冒険

Ⓒ東映

(1968年・日本)
■[監]高畑勲[脚]深沢一夫[作画]大塚康生[声]大方斐紗子、市原悦子、平幹二郎、東野英治郎■アイヌ・ユーカラ「オキクルミと悪魔の子」および深沢一夫「チキサニの太陽」を原典に、悪魔グルンワルドの侵略に立ち向かう村人たちの姿を描く。高畑勲の長編デビュー作であり、スタッフも東映動画の若い人材が自主的に参加、労働争議を背景に論議を重ねつつ制作された。高畑と宮崎駿のコンビはここから始まる。東欧アニメの影響下、労働や心理の描写、共同体思想へも積極的に踏み込み、興行は惨敗したものの、日本アニメにひとつの転機をもたらした。

第10位 トイ・ストーリー

ⒸTHE WALT DISNEY COMPANY

(1995年・アメリカ)
■[監]ジョン・ラセター[脚]ジョス・ウェドン、アンドリュー・スタントン、ジョエル・コーエン、アレック・ソコロウ[声]トム・ハンクス、ティム・アレン■世界初の全編3DCGによる長編アニメーション。ふとした弾みで外界へ飛び出てしまった木製人形と最新式人形の冒険と友情を描く。一般にディズニー・アニメとされるが、実質的にはCG工房であるピクサー社の作品。ゲーム等で先行したCGとは一線を画すアクション、よく練られた脚本により3DCGアニメに親しみを与え、米国アニメがセル・アニメから撤退する流れを作り上げた。

第10位 モンスターズ・インク

ⒸDISNEY/PIXAR

(2001年・アメリカ)
■[監]ピート・ドクター[脚]アンドリュー・スタントン、ダニエル・ガーソン[声]ジョン・グッドマン、ビリー・クリスタル、スティーヴ・ブシェーミ■ディズニー&ピクサーによるフル3DCGアニメーション。子供の悲鳴をエネルギーとするモンスター世界へ、人間の子供が紛れ込んだことから生じた騒動を、コミカルに描く。非人間キャラクターによるCGアニメでは定評を得たピクサー社が人間キャラを大きく取り上げ、お馴染みのシニカルさを交えつつ、モンスターと少女の友愛を人情味豊かに紡ぎ出し、大人・子供を問わず観客の涙を誘った。

第10位 やぶにらみの暴君

Ⓒ1952 LES FILMS PAUL GRIMAULT

(1952年・フランス)
■[監][脚]ポール・グリモー[脚]ジャック・プレヴェール[声]ピエール・ブラッスール、フェルナン・ルドウ■アンデルセン童話「羊飼いの娘とエントツ掃除人」を脚色したフランス初の長編アニメーション。肖像画の暴君が本物の王となり代わり、やはり絵から抜け出した少年少女の恋路を邪魔する。ある鳥が語った寓話劇のかたちをとり、階層的な王宮や巨大ロボットなどの魅惑的な映像と動画をもって圧政を風刺した。本作は資金難の問題から未完のまま公開され、グリモー監督は79年に改訂新版の「王と鳥」を発表、しかし原版ほどの評価は得ていない。

Ⓒ二馬力・徳間書店

第4位 風の谷のナウシカ

(1984年・日本)
■[監][脚]宮崎駿[作画]小松原一男[声]島本須美、榊原良子、納谷悟朗、永井一郎■当時連載中だった宮崎駿による同名漫画の映画化。巨大産業文明崩壊後の地表を舞台に、軍事大国の抗争・侵略に立ち向かう少女の姿を神話的に描く。人間のエゴ、現代文明風刺、環境問題といった様々なテーマを含んだスペクタクル・ロマンは、アニメーションの子供向けイメージを払拭し、キネマ旬報ベスト・テン第7位(読者は1位)等に評価され、宮崎の名を一般に広く認識させた。いわゆる宮崎アニメのスタイルがここで確立され、スタジオ・ジブリ設立に発展する。

第8位 千と千尋の神隠し

Ⓒ2001 二馬力・TGNDDTM

(2001年・日本)
■[監][脚]宮崎駿[作画]安藤雅司、高坂希太郎、賀川愛[声]柊瑠美、入野自由、夏木マリ、菅原文太■神々の世界に迷い込んだ少女が、様々な困難を乗り越え現実世界に戻るまでを描いた冒険ファンタジー。宮崎版「不思議の国のアリス」であり、無気力な10歳の少女が湯屋での労働や異人たちとの交流を通し生の力を取り戻していく過程に、種々の社会批評まで読み取らせ、評価・興行ともに大成功。興行収入は300億円超の歴代1位を記録、さらにベルリン国際映画祭金熊賞、日本アカデミー賞最優秀作品賞、米アカデミー賞長編アニメ作品賞まで獲得した。

第8位 長靴をはいた猫

Ⓒ東映

(1969年・日本)
■[監]矢吹公郎[脚]井上ひさし、山元護久[作画]森康二[声]石川進、藤田淑子、榊原ルミ■シャルル・ペローの名作童話を映画化、庶民の青年と猫のペロが、魔王に囚われた姫を助け出すまでを軽妙洒脱に描く。ディズニーの追随を離れ日本独自のアニメーション・スタイルを得た東映動画が、原作にコメディ・リリーフのサブ・キャラを加えつつ、これぞ〝まんが映画〟といった趣で上質のユーモアとアイデアを盛り込んで、初期東映アニメの最高傑作に仕上げた。興行もヒット、ペロは東映動画のマスコットとなり、ペロ主演の姉妹編も作られる。

キネマ旬報 2004年 8月下旬特別号 No.1411
●表紙イラストレーション＝和田誠 ●ピンナップ＝藤原竜也（撮影＝冨永智子）

『キネマ旬報』創刊85周年記念特集

ジャンル別オールタイム ベスト・テン

時代劇
日本映画

ラブストーリー
外国映画

【投票規定】
ジャンル別オールタイム　ベスト・テンは後に記す規定に基づき、投票されました。3ジャンルに共通するのは、原則として日本で劇場公開された映画を対象としていること。以下、それぞれの対象範囲となります。

①時代劇
日本映画の中から、明治維新以前に時代設定された、短編・長編を問わないすべての時代劇を対象とします。

②ラブストーリー
日本映画以外の、短編・長編を問わないすべてのラブストーリー映画を対象とします。

③アニメーション
邦画・洋画、短編・長編、セル・アニメーションやＣＧアニメーション、またパペット・アニメーションやクレイ・アニメーションなどを問わず、すべてのアニメーション映画を対象とします。シリーズ作品は１作品毎にわけていますが、前後編で同時公開された一部の作品に関しては、あわせて１作品としております。

アニメーション

日本映画・外国映画

85 ANNIVERSA
KINEMA JUN
1919-2004

創刊85周年記念特別号の後編は《お祭り》！
ジャンル別オールタイム　ベスト・テンで、ご一緒に思う存分楽しんでいただけますと幸いです。

前編では、興行的側面でも確固たる成果をあげ始めた日本映画界をけん引する、
《映画人から映画人へのリスペクト》を行いました。
１８９８年に映画製作の第一歩を記してから、早や１０６年。
日本映画は、ひとつの芸術として充分な成熟を遂げたことを実感しています。
ただし、ほかの芸術と異なり、映画は産業とのバランスのなかで存在してきました。
成熟した文化と、闊達に新陳代謝をはかろうとする産業。
このふたつが常に均衡を取り続けることなど、どう考えても不可能なことと思います。
にも関わらず、いま新たなるバランス感覚を身に付け、新しい展開を遂げようとしている映画界。
『キネマ旬報』は、そんな様々なプラスマイナスを吸収し変わろうとする、
映画界と対峙し、並走し、そして観客と映画の掛け橋でありたいと思っています。

さて今回、掲載するのは、
日本映画より《時代劇》、外国映画より《ラブストーリー》、国境を定めず《アニメーション》という3ジャンル。
いずれも、現在、日本の映画界でもっとも注目されるジャンルです。
評論家、作家ほか、それぞれのジャンルに精通した方々が選ばれた3ジャンルのベスト・テンが、
今という時代の空気をたっぷり吸収して、ここに実を結びました。

さあ、節目に放つ、創刊85周年記念ジャンル別オールタイム　ベスト・テンの幕開けです！

ジャンル別オールタイム ベスト・テン 時代劇［日本映画］ランキング

11「沓掛時次郎　遊侠一匹」(66)

順位	タイトル	得票数
1	七人の侍	26
2	十三人の刺客	23
3	座頭市物語	19
4	宮本武蔵［五部作］（61～65年・内田吐夢）	19
5	東海道四谷怪談	17
	用心棒	17
7	人情紙風船	16
	幕末太陽傳	16
9	薄桜記	15
10	丹下左膳餘話 百萬両の壺	14

順位	タイトル	得票数
11	沓掛時次郎　遊侠一匹	12
	切腹	12
	椿三十郎	12
14	次郎長三国志［九部作］（52～54年・マキノ雅弘）	11
	関の彌太ッペ（63年・山下耕作）	11
	たそがれ清兵衛	11
	羅生門	11
18	血槍富士	9
19	赤西蠣太	8
	斬る（62年・三隅研次）	8
	忠次旅日記［三部曲］	8
22	雨月物語	6
	鴛鴦歌合戦	6
24	隠し砦の三悪人	5
	心中天網島	5
	反逆児	5
	ひとり狼	5
	十兵衛暗殺剣	5
29	蜘蛛巣城	4
	河内山宗俊	4
	西鶴一代女	4
	忠臣蔵外伝四谷怪談	4
	竜馬暗殺	4
34	暗殺	3
	一心太助　天下の一大事	3
	雄呂血（25年・二川文太郎）	3
	元禄忠臣蔵　前篇・後篇	3
	子連れ狼　三途の川の乳母車	3
	御法度	3
	座頭市（89年・勝新太郎）	3
	山椒大夫	3
	上意討ち　―拝領妻始末―	3
	千利休　本覺坊遺文	3
	大菩薩峠［三部作］（57～59年・内田吐夢）	3
	大魔神	3
	近松物語	3
	血煙高田馬場	3
	徳川いれずみ師　責め地獄	3

■選考委員［五十音順・敬称略］
秋本鉄次・浅野潜・安西水丸・石上三登志・植草信和・上野昂志・浦崎浩實・大高宏雄・尾形敏朗・おかむら良・奥田均・垣井道弘・桂千穂・金澤誠・川本三郎・河原畑寧・北川れい子・切通理作・金原由佳・黒須洋子・黒田邦雄・小藤田千栄子・佐藤忠男・佐藤利明・塩田時敏・品田雄吉・芝山幹郎・高橋聡・竹入栄二郎・田中千世子・田中眞澄・土屋好生・寺本直未・轟夕起夫・西村雄一郎・西脇英夫・野島孝一・野村正昭・春岡勇二・樋口尚文・双葉十三郎・前村和夫・松島利行・松田政男・的田也寸志・宮崎祐治・森卓也・森遊机・山口猛・山田和夫・山根貞男・渡辺武信・渡部実

11「椿三十郎」(62)

11「切腹」(62)

ジャンル別オールタイム ベスト・テン 時代劇 ランキング

順位	作品	票
69	忠臣蔵 (58年・渡辺邦男)	1
	忠臣蔵 櫻花の巻・菊花の巻 (59年・松田定次)	1
	天狗飛脚	1
	天と地と	1
	髑髏銭	1
	濡れ髪剣法	1
	眠狂四郎 無頼控	1
	旗本退屈男 江戸城罷り通る	1
	旗本退屈男 謎の決闘状	1
	華岡青洲の妻	1
	必殺!	1
	必殺4 恨みはらします	1
	ひばりの森の石松	1
	風雲将棋谷	1
	武士道無残	1
	蛇姫様	1
	ポルノ時代劇 忘八武士道	1
	魔界転生 (81年・深作欣二)	1
	魔像	1
	股旅 三人やくざ	1
	待って居た男	1
	瞼の母 (31年・稲垣浩)	1
	瞼の母 (62年・加藤泰)	1
	壬生義士伝	1
	宮本武蔵 (54年・稲垣浩)	1
	柳生一族の陰謀	1
	弥太郎笠 (32年・稲垣浩)	1
	弥太郎笠 前後篇 (52年・マキノ雅弘)	1
	雪の渡り鳥	1
	妖刀物語 花の吉原百人斬り	1
	夜の鼓	1
	浪人街 [三部作] (28年・マキノ正博)	1
	浪人街 (90年・黒木和雄)	1
	乱	1
	若様侍捕物帳 謎の能面屋敷	1
	ワタリ	1
69	国定忠治 (58年・小沢茂弘)	1
	くノ一忍法	1
	くノ一忍法帖 柳生外伝	1
	鞍馬天狗 角兵衛獅子	1
	鞍馬天狗 横浜に現る	1
	映画クレヨンしんちゃん 嵐を呼ぶアッパレ! 戦国大合戦	1
	血斗水滸伝 怒濤の対決	1
	下郎の首	1
	剣鬼	1
	恋や恋なすな恋	1
	子連れ狼 冥府魔道	1
	御用牙 かみそり半蔵地獄責め	1
	御用金	1
	さくや/妖怪伝	1
	佐々木小次郎 完結篇	1
	座頭市地獄旅	1
	座頭市血煙り街道	1
	真田風雲録	1
	SABU/さぶ	1
	侍	1
	新人斬馬剣	1
	三匹の侍	1
	忍びの者	1
	ジャズ大名	1
	春秋一刀流	1
	新座頭市物語	1
	新座頭市物語 折れた杖	1
	新釈四谷怪談 前篇・後篇	1
	素浪人罷通る	1
	戦国群盗伝 (37年・滝沢英輔)	1
	戦国野郎	1
	続大岡政談 魔像篇	1
	続忍びの者	1
	大殺陣	1
	大殺陣 雄呂血 (66年・田中徳三)	1
	大菩薩峠 (66年・岡本喜八)	1
	抱寝の長脇差	1
	ちいさこべ	1
34	幕末残酷物語	3
	股旅	3
51	仇討	2
	荒木又右衛門 決闘鍵屋の辻	2
	影武者	2
	昨日消えた男 (41年・マキノ正博)	2
	国士無双 (32年・伊丹万作)	2
	五条霊戦記//GOJOE	2
	座頭市血笑旅	2
	助太刀屋助六	2
	浪花の恋の物語	2
	楢山節考 (83年・今村昌平)	2
	忍者狩り	2
	眠狂四郎 女妖剣	2
	人斬り	2
	ひばり・チエミの弥次喜多道中	2
	紅孔雀 [五部作]	2
	まぼろし城	2
	雪之丞変化 (35年・衣笠貞之助)	2
	雪之丞変化 (83年・市川崑)	2
69	赤ひげ	1
	赤穂浪士 天の巻・地の巻	1
	仇討崇禅寺馬場	1
	阿部一族	1
	天草四郎時貞	1
	危し! 伊達六十二万石	1
	家光と彦左と一心太助	1
	右門捕物帖 片眼狼 (51年・中川信夫)	1
	歌ふ狸御殿	1
	運が良けりゃ	1
	エノケンのどんぐり頓兵衛	1
	婉という女	1
	鬼婆	1
	御誂次郎吉格子	1
	怪談	1
	帰って来た木枯し紋次郎	1
	狐の呉れた赤ん坊 (45年・丸根賛太郎)	1
	斬る (68年・岡本喜八)	1

ジャンル別オールタイムベスト・テン
時代劇
［日本映画］

※内田吐夢監督版「宮本武蔵」は“五部作”として挙げさせていただいた方と第四部「一乗寺の決斗」を挙げていただいた方がいらっしゃいましたので、集計においては同一作品とみなしました。

＊マキノ雅弘監督の東宝版「次郎長三国志」は“九部作”として挙げていただいた方と、作品別に挙げていただいた方がいらっしゃいましたので、集計においては同一作品とみなしました。

秋本鉄次 映画評論家

宮本武蔵　一乗寺の決斗(※)
座頭市物語
斬る(62年・三隅研次)
十三人の刺客
沓掛時次郎　遊侠一匹
幕末太陽傳
さくや／妖怪伝
徳川いれずみ師　責め地獄
大魔神
忠臣蔵外伝四谷怪談

95年刊の『日本映画オールタイム　ベスト・テン』でのわが10本の中に時代劇が1本も入っていない事に気がついた。別に時代劇が嫌いなわけでもないのに何故？なのだが、その無意識の自分に殉じたい。きっと僕は、現代及び近過去に興味を優先させる人間なのだろう。

どうせベスト・ワンは「七人の侍」なのさ、と思っているせいか、急に黒澤時代劇をあえて外したくなった。ベスト・ワンは中1の正月に初めて1人で映画館に見に行って大いに興奮した作品を。今でも武蔵＝錦兄ィなのだ。五部作コミという形でも構わない。勝新好きの親父の薫陶よろしく座頭市シリーズも毎回楽しかった。第1作に代表させたい。勝新とくれば雷蔵だろう。そして集団抗争時代劇へ、さらに加藤泰股旅映画へ、川島雄三へ、さらに石井輝男刺激路線へと駆けめぐる。比較的近年の作品では深作時代劇と「さくや／妖怪伝」をチョイス。前者は高岡早紀、後者は松坂慶子のビジュアルも含めて、である。

浅野潜 映画評論家

忠次旅日記(三部曲)
雄呂血(25年・二川文太郎)
丹下左膳餘話　百萬両の壺
七人の侍
羅生門
人情紙風船
雨月物語
宮本武蔵　一乗寺の決斗(※)
続大岡政談・魔像篇
十三人の刺客

無声映画がほとんどなくなってしまった。「忠次旅日記」はフィルム・センターの努力でやっと復元された。広島での完成試写を見た日の感動が忘れられない。日程を間違えてあらわれなかった滝沢一さんのことを思い出す。不思議なことに今年、旧宅が焼失した。5000冊を超す時代劇関連の本が全焼している。あの試写の日、見終ったあとで広島で飲む約束が果たせなかったことが残念で仕方がない。

「雄呂血」は残存する貴重な作品で阪妻さんがマキノプロから独立した第一作。妨害されて独立が難かしかった時代、長谷川一夫の事件にダブって古い京都のことが思い出される。

山中貞雄の戦病死はいたましい。わずか5年半で23本の作品を残して中国戦線で死んでいった。しかも残っているのは3本だけ。戦争がイラク戦争に重なって重い。

「十三人の刺客」は群衆太刀回りの代表作としてあげた。

安西水丸 イラストレーター

用心棒
椿三十郎
暗殺
七人の侍
隠し砦の三悪人
蜘蛛巣城
侍
東海道四谷怪談
血槍富士
紅孔雀(五部作)

黒澤明監督の時代劇はほとんど好きだ。

「暗殺」は佐々木唯三郎に扮した木村功がいい。

「侍」は新珠三千代がきれいだったことと、井伊大老暗殺の激闘シーンが凄じかった。

「東海道四谷怪談」は天知茂が好きだから。

「血槍富士」は内田吐夢作品ではベスト・ワンだ。

「紅孔雀」は思い出がたくさんある映画。浮寝丸の東千代之介が恰好よかった。悪役の三条雅也も好きだった。

石上三登志 映画評論家

佐々木小次郎・完結篇
旗本退屈男　江戸城罷り通る
若様侍捕物帖　謎の能面屋敷
鞍馬天狗　角兵衛獅子
右門捕物帖　片眼狼(51年・中川信夫)
荒木又右衛門　決闘鍵屋の辻
次郎長三国志　次郎長売出す(＊)
弥太郎笠　前後篇(52年・マキノ正博)
まぼろし城
昨日消えた男(41年・マキノ正博)

またぞろ「七人の侍」などなどなんてベスト・テンも〈芸〉がないから、ここはひとつ、戦中の大本営的な制約、戦後のGHQ的な制約が、一気にはずされたあの時の、時代劇の花たちの再開花のみにしぼってみよう。あの三年、本

14「たそがれ清兵衛」(02)

14「関の彌太ッペ」(63)

14「次郎長三国志」(52〜54)
※写真は「海道一の暴れん坊」

当にワクワクドキドキしましたねェ！　時代劇って、こんなに面白いんだとねェ！　最後の二本は、これは戦前戦中作の戦後再公開での、やはりワクワクドキドキでした。

植草信和　フリー編集者

反逆児
宮本武蔵（五部作）（※）
関の彌太ッペ（63年・山下耕作）
座頭市物語
十三人の刺客
用心棒
幕末太陽傳
戦国野郎
三匹の侍
東海道四谷怪談

「忠次旅日記」も「御誂次郎吉格子」も「抱寝の長脇差」もまともに見られなかった時代劇ファンにとって内田吐夢監督の「宮本武蔵」をリアルタイムで見られたことが唯一の誇りだ。正統派時代劇（伊藤大輔、内田吐夢）、股旅もの（山下耕作、加藤泰）、ミュージカル時代劇（沢島忠、マキノ雅弘）で傑作を残した錦ちゃんは、神様。「柳生一族の陰謀」という佳作もあったけど、「武蔵」最終作で船宿の背景のブルーバックの海を目撃したときはショックのあまり寝込んでしまった。

「七人の侍」が一位になるのは当然なので敢えて外し、多分誰も挙げないであろう「戦国野郎」と「三匹の侍」という隠れた傑作を挙げた。奇を衒ったわけでも捻くれ根性でも懐古趣味でもなく、岡本喜八のシャープ、五社英雄のパワーは本当に素晴らしかったのだ。同じ意味で「梟の城」などという、どうしようもないものを撮るずっと前の篠田正浩の「暗殺」（あるいは「異聞猿飛佐助」）なんかも挙げたかった。

上野昂志　映画評論家

次郎長三国志・海道一の暴れん坊（＊）
血槍富士
東海道四谷怪談
薄桜記
座頭市物語
関の彌太ッペ（63年・山下耕作）
十三人の刺客
幕末残酷物語
十兵衛暗殺剣
忍者狩り

思いつくままに、記憶に残る時代劇の傑作、秀作を挙げていったら、四十本を超えてしまったので、山中貞雄、伊藤大輔はいうに及ばず、森一生の「大阪商人」などの戦前の作品をすべて落としたが、それでもまだ十本に収まらない。ならば、いっそ、黒澤、溝口ら巨匠は人に任せ、ついで内田吐夢の「宮本武蔵（五部作）」のような大作もはずそうと荒療治を施し、さらに未練の後ろ髪をばっさり切った挙げ句が、ご覧のような選択になったという次第。並べた順序は公開年次順で、結果として一九五四年から六四年まで、すなわち戦後日本映画の黄金期から凋落へ向かう時期ということになった。わたしがガキから青年になる頃でもあるが、あの頃は、飛び込んだ映画館で、これはという映画に出会うことが少なくなく、ここに挙げた多くもそうして見たものだ。にしても「忍びの者」や「眠狂四郎」のシリーズを落とし、「遊侠一匹」や「怪談・蚊喰鳥」や「侍」を削らねばならないとは……。

浦崎浩實　激評家

危し！　伊達六十二万石
濡れ髪剣法
忠臣蔵　櫻花の巻・菊花の巻（59年・松田定次）
東海道四谷怪談
家光と彦左と一心太助
瞼の母（62年・加藤泰）
雪之丞変化（63年・市川崑）
十三人の刺客
十兵衛暗殺剣
仇討

公開日順。なるべく同時代的に接したものを挙げ、戦前の名作などは容赦なく割愛しました。時代劇映画の質的頂点は昭和三十年代（1955〜1964年）にあり、その後、当時を超える作品は一本も生まれていないと思います。”たそがれ”ナントカを時代劇の秀作にカウントしてくれるな、というのが黄金時代を知る者の切ない願いです。世話物っぽいものは避けたいところでしたが、東映「瞼の母」（62）のオールセットは、東映京都撮影所美術部の力量をまざまざと示して驚異的です（美術＝稲野実）。大映京都の美術はよく語られますが、明るい光量のもと、絢爛たる東映京都撮影所の美術にはかねてから敬意を払ってきました。戦後の時代劇俳優で、天才と呼べるのは、錦之介ただ一人、という私見も揺るぎません。さて、韓国映画「シルミド／SILMIDO」ですが、ラスト、バス中の”名乗り”は松竹「忠臣蔵」（54）のラストの”いただき”では？　と想像を逞しくし慶賀しております。

大高宏雄　映画記者

十三人の刺客
竜馬暗殺
七人の侍
座頭市物語
宮本武蔵　一乗寺の決斗（※）
蜘蛛巣城

14「羅生門」(50)

18「血槍富士」(55)

19「赤西蠣太」(36)

次郎長三国志・海道一の暴れん坊(＊)
用心棒
薄桜記
血煙高田馬場

私の同時代日本映画の年間選出と違って、まずは、無難なところに収まりました。自分でも、驚きですね、このまっとうさは。

東映の集団抗争時代劇の白眉、「十三人の刺客」が好きですね。冒頭のあのナレーション。あのぞくぞくするような暗さ。全編を覆っている日本的な心性、土着的な暗さが、興奮を誘います。

「七人の侍」は、はずせないでしょう。この作品をはずせるほど、へそ曲がりではありませんから、私は。「用心棒」は、音楽の迫力とともに、脇役の俳優陣の充実ぶりがいいですね。

実は、「竜馬暗殺」だけが、同時代に観た時代劇。あのざらざらした画面の感触とともに、原田芳雄、松田優作、桃井かおり、石橋蓮司らの躍動感が忘れられない。われらの時代の青春映画でもあります。

別の機会に選ぶと、半分ぐらい変わる気がします。こればかりは、仕方ないですね。

尾形敏朗 CMプランナー

次郎長三国志(九部作)(＊)
血槍富士
人斬り
沓掛時次郎　遊侠一匹
素浪人罷通る
丹下左膳餘話　百萬兩の壺
ひばり・チエミの弥次喜多道中
斬る(62年・三隅研次)
用心棒
西鶴一代女

最初のリストアップで多かったのが伊藤大輔、内田吐夢、マキノ雅弘、三隅研次の監督作品だった。しかし時代劇は、スターの映画でもある。一作品一監督一スターの原則を課して選んでみたが、やはり無理が出た。日本映画史上ベストテンよりも、ずっと迷った。勝新座頭市も雷蔵狂四郎も「不知火検校」「薄桜記」「剣鬼」「ひとり狼」も入らない。錦之助なら宮本武蔵も一心太助も「関の彌太ッペ」も「ちいさこべ」も入らない。千恵蔵「大菩薩峠」「鴛鴦歌合戦」、右太衛門「八百万石に挑む男」、柳太朗「仇討崇禅寺馬場」も入らない。「下郎の首」や「暴れん坊街道」も。監督では稲垣浩、岡本喜八、工藤栄一が入らない。チャンバラメインで考えても、やはり溝口健二は無視できないしなぁ…。…というわけで、とりあえずこうなった次第だが、実は今でも迷っている。

おかむら良 映画評論家

心中天網島
楢山節考(83年・今村昌平)
人情紙風船
羅生門
薄桜記
剣鬼
鬼婆
赤西蠣太
婉という女
千利休・本覺坊遺文

時代劇のハイライトはなんと言っても、にぎやかなチャンバラやリアルな斬り合いだと思うが、こうして好きな時代劇を選んでみると人間ドラマが多くなった。それでも森一生監督の「薄桜記」の硬質で華麗な斬り合いと、三隅研次監督の「剣鬼」のラストシーンはものすごく印象に残っている。それはたぶん主演していた市川雷蔵が、文句なくクールでカッコよかったからだ。いっぽう時代劇に描かれるヒロインの生き方がずっと気になっていた。「鬼婆」のものすごい母親像や、「婉という女」のトコトン堪え忍ぶヒロインは強烈で、時代劇だからこそリアリティが成立していた。「心中天網島」と「楢山節考」はヒロインのウエイトが大きく、男性の目を通して描かれてたことが共通する。女性が印象的な時代劇という意味で勅使河原宏監督の「豪姫」、山田洋次監督の「たそがれ清兵衛」も入れたかった。

奥田均 関西外国語大学短期大学部講師・映画評論家

七人の侍
たそがれ清兵衛
関の彌太ッペ(63年・山下耕作)
赤穂浪士　天の巻・地の巻
子連れ狼　三途の川の乳母車
座頭市物語
SABU／さぶ
反逆児
鴛鴦歌合戦
くノ一忍法

古今東西、西部劇を時代劇に入れるとしても、「七人の侍」のベスト・ワンは変わらない。なにより、西部劇の傑作「荒野の七人」が証明している。オリジナル版はモノラルから4チャンネル・ステレオ(電気的に音源を立体音響化)、デジタル・マスター(モノラル)と変遷。いまから35年前、初めてみたのは黒澤明監督が自ら再編集した「海外版」だった。現在、お目にかからないが、どうなっているのだろう。「たそがれ清兵衛」は本格的時代劇を初めて撮った山田洋次監督の渾身作。これからも語り継がれる映画だ。人気歌舞伎俳優・中村獅童のおじ、中村錦之助主演「関の彌太ッペ」は晩年師事

22「隠し砦の三悪人」(58)

22「鴛鴦歌合戦」(39)

19「斬る」(62)

した山下耕作監督初期の名作。ラストシーンを、きのうのことのようにしゃべる名調子。もう一度聞いてみたい。数ある忠臣蔵ものから戦後の総天然色第1号を選び、以下それぞれ思い入れあるものを選んだ。「くノ一忍法」は中島貞夫監督、倉本聰脚本で描いたユニークな忍者もの。

垣井道弘 映画評論家

七人の侍
人情紙風船
赤西蠣太
薄桜記
幕末太陽傳
大菩薩峠（三部作）（57〜59年・内田吐夢）
暗殺
楢山節考（83年・今村昌平）
忠臣蔵外伝四谷怪談
たそがれ清兵衛

いつも感じることだが、過去の膨大な作品群の中からオールタイム ベスト・テンを選ぶのは難しい。映画史的に考えると「羅生門」や「用心棒」を欠かせないが、それでは黒澤作品ばかりになってしまうので一監督一作品という条件をつけ、思い浮かぶまま列挙してみた。すると内田吐夢監督の「宮本武蔵（五部作）」や篠田正浩監督の「沈黙」が抜け落ちてしまった。シリーズものやリメイクが多いのも時代劇ならではの悩みで、三隅研次監督の「座頭市物語」や山本薩夫監督の「忍びの者」、池広一夫監督の「眠狂四郎 女妖剣」なども入れたかった。工藤栄一監督の「十三人の刺客」や、最近では中野裕之監督の「SF サムライ・フィクション」や大島渚監督の「御法度」があるじゃないか。どうもままならない。こうなれば初志貫徹で一監督一作品にこだわらなければ収まらない。時代劇の魅力の一つは殺陣だが、やはり人間ドラマとしてよくできた作品が記憶に残っている。

桂千穂 脚本家

赤西蠣太
丹下左膳餘話 百萬兩の壺
仇討崇禅寺馬場
東海道四谷怪談
十三人の刺客
幕末太陽傳
反逆児
宮本武蔵（五部作）（※）
座頭市物語
徳川いれずみ師 責め地獄

お答えしようとしてハッとなった。一口に時代劇と言われても範囲が広すぎる！「羅生門」は時代劇か？「雨月物語」も「西鶴一代女」も「花の吉原百人斬り」も「漂流」も十把ひとからげに〈時代劇〉でくれるものだろうか。「東海道四谷怪談」は怪奇映画ではないのか。「幕末太陽傳」は喜劇としか言えないではないか。「真田風雲録」となると、もうジャンルのつけようがなくなってくる。考えているうちに頭が痛くなってきたので、エイッとばかりに見切りをつけ、私の偏愛してやまない〈時代劇〉を思い出すままに10本並べようとした。だが、困ったのはそれからだ。あれも面白かった、これも凄かったというのがどんどん出てくる。

目をつぶってリストアップしたのがこの十作品だ。だから、このリストは私にとって絶対的なものではない。別の日に、もっと違った気分の時に選んだら、ガラッと変ったテンになるかもしれない。ゴメンナサイ。

金澤誠 映画ライター

用心棒
十三人の刺客
座頭市物語
薄桜記
関の彌太ッペ（63年・山下耕作）
次郎長三国志・海道一の暴れん坊（※）
宮本武蔵 一乗寺の決斗（※）
股旅
股旅 三人やくざ
たそがれ清兵衛

膨大な数から10本は辛い選択だが、今観ても面白い、1監督1本、主演俳優の魅力というところから作品を選んだ。戦前の伊藤大輔や山中貞雄作品を抜いたのは、その全貌が現在の視点から追えないからである。「七人の侍」がないのは、黒澤時代劇から1本だけを選んだためである。勝新太郎、市川雷蔵、三船敏郎、中村錦之助といった戦後時代劇スターの作品は外せないが、選に漏れたところでは近衛十四郎、若山富三郎の主演作も入れたかった。マキノ雅弘、沢島忠などの娯楽時代劇のベテラン監督はもっと評価されていい。マキノ監督の「次郎長三国志」シリーズは全作入れたいし、沢島監督の「暴れん坊兄弟」なども抜群に面白い。「十三人の刺客」は黒澤時代劇と比肩できる工藤栄一監督の秀作。近年ではやはり「たそがれ清兵衛」は挙げておきたい。個人的には一番同時代性で選んだのが、市川崑監督の「股旅」。この青春時代劇はTV「木枯し紋次郎」と共に思い入れがある。

川本三郎 評論家

宮本武蔵 一乗寺の決斗（※）
椿三十郎
十三人の刺客
血槍富士
上意討ち ―拝領妻始末―

29「蜘蛛巣城」(57)

24「反逆児」(61)

24「心中天網島」(69)

関の弥太ッペ(63年・山下耕作)
座頭市物語
ひとり狼
十兵衛暗殺剣
たそがれ清兵衛

好きなのは、一匹狼の流れ者を主人公にした股旅もの。そして、強大な権力にたちむかってゆく侍たちの意地と誇りをかけた戦い。
となると、おのずとこういう顔ぶれになる。
「宮本武蔵　一乗寺の決斗」の錦之助武蔵の死闘、「血槍富士」の千恵蔵の孤軍奮闘、集団時代劇の傑作「十三人の刺客」(あるいは同じ工藤栄一の「十一人の侍」)で侍たちが最後に見せる斬り込み。何度見ても胸が熱くなる。
時代劇の対決でいちばん迫力があるのは、本当は斬りたくない相手と戦わなければならない非情の対決。
「上意討ち」の三船敏郎と仲代達矢。「座頭市物語」の勝新太郎と天知茂。そして「たそがれ清兵衛」の真田広之と田中泯。時代劇三大対決と呼びたい。
股旅ものを代表して一匹狼が似合った市川雷蔵の「ひとり狼」。豪腕近衛十四郎から一本選ぶと「十兵衛暗殺剣」。黒澤明は明るい「椿三十郎」を。

河原畑寧　映画評論家

七人の侍
切腹
御用金
薄桜記
宮本武蔵(五部作)(※)
十三人の刺客
忍びの者
反逆児
隠し砦の三悪人
座頭市物語

時代劇というと、やっぱりサムライが出てきてチャンチャンバラバラ……というイメージで選ぶことになってしまいます。「人情紙風船」「丹下左膳餘話　百萬両の壷」「河内山宗俊」「赤西蠣太」といった山中貞雄、伊丹万作映画は、とても愛着がありますが、時代劇オールタイム　ベスト・テンとなると、ちょっとちがうかナーという感じで、入れるのはやめました。しかし、選んでみると、どうも悲愴で暗い感じが濃厚なベスト・テンですな。「用心棒」「椿三十郎」を入れて、明るい時代劇ベスト・テンを考えてもよかったのにナー。

北川れい子　映画評論家

赤西蠣太
丹下左膳餘話　百萬兩の壺
薄桜記
椿三十郎
上意討ち　―拝領妻始末―
仇討
十三人の刺客
幕末残酷物語
座頭市地獄旅
壬生義士伝

天才は猫まで自由に演出する、とは「赤西蠣太」についてお喋りしていた時の桂千穂氏のことばだが、それにしても伊丹万作監督といい、「百萬兩の壺」の山中貞雄監督といい、その洒脱なユーモアとモダンな演出には、不滅の面白さがある。しかもどこか品がいい。時代劇という枠など軽やかに飛び越えた、ウキウキする痛快さ。とはいえ、戦後に作られた秀作時代劇の多くは、チャンバラの楽しさよりも、封建制度で金しばりとなった人々の悲劇を描いたものが多く、わがリストにもそういった作品がいくつか並んだが、それとはまた別の意味で「薄桜記」の滅びの美は、心をふるわせるものがある。時代劇はまたスターが魅力的で、雷蔵、錦之助らの二枚目系ではなくても、誰もが際立って個性的なのも面白い。「十三人の刺客」は群像劇だが、チャンバラとアクションの壮快な結合として画期的な作品だ。他にも「一心太助」シリーズほか書き出したい作品は沢山あるが、ごめん……。

切通理作　文化批評

たそがれ清兵衛
映画クレヨンしんちゃん　嵐を呼ぶアッパレ！戦国大合戦
七人の侍
新座頭市物語　折れた杖
運が良けりゃ
子連れ狼　三途の川の乳母車
座頭市血笑旅
子連れ狼　冥府魔道
大魔神
沓掛時次郎　遊侠一匹

「たそがれ清兵衛」「映画クレしん　戦国大合戦」を見ていて、時代劇の世界が自分たちの住んでいる「いま」と同じ時間上にあるということを、理屈ではなく初めて実感できたような気がした。「七人の侍」の侍が揃うまでの面白さは娯楽映画で人物描写にここまで(上映)時間をかけたものという点で画期的なのはもちろん、肝心なのは、いまに至る映画の歴史の中でもまたそれは途絶しているということだろう。その意味で黒澤同期の本多猪四郎による「ゴジラ」とともに日本映画昭和29年の宝物だと思う。勝兄弟による1970年前後の、時代劇というよりは終末的荒野とも呼ぶべき殺戮の地平はトラウマ的原風景となった。もともと北野武と通じる地平と思ったが同じ座頭市でもたけしのものだけがヴェネチアで賞を取ったと

29「忠臣蔵外伝四谷怪談」(94)　29「西鶴一代女」(52)　29「河内山宗俊」(36)

いうのはある無常を感じざるを得ない。日本映画史に勝新太郎ありと世界に示したい思いだ。

金原由佳　映画ライター

鴛鴦歌合戦
斬る(62年・三隅研次)
椿三十郎
血煙高田馬場
眠狂四郎　無頼控
近松物語
幕末太陽傳
華岡青洲の妻
丹下左膳餘話　百萬兩の壺
切腹

物心ついたときには既に時代劇の映画史的な評価、基準が定まっていた世代としては、どの作品、俳優、監督をきっかけに見るようになったか、という入口と偏愛でしか時代劇を語れないような気がする。個人的にはマチズモ（男性優位主義）的な力関係に支配された時代劇（私にとってそれは「七人の侍」や「座頭市物語」だったりする）よりも、市川雷蔵の中性的なキャラクターが活躍する作品や、「鴛鴦歌合戦」「幕末太陽傳」の方がずっと身近であったりする。女性を主人公にした時代劇の傑作は数が少なく、だからこそ溝口健二の特異性を感じたりもする。ちなみに『大辞林第二版』(三省堂)によると明治時代以前までの時代に取材した劇や映画が時代劇。その意味では明治半ばの「緋牡丹博徒　花札勝負」(69）はこのジャンルの範疇に入らないが、現在より100年前の一昔を描いている点でもはや時代劇とこじつければ、上記のベスト・テンの中のかなり上に入ることを蛇足ながら付け足しておきたい。

黒須洋子　歴史ライター

七人の侍
用心棒
十三人の刺客
幕末太陽傳
斬る(62年・三隅研次)
関の彌太ッペ(63年・山下耕作)
ひとり狼
座頭市物語
たそがれ清兵衛
五条霊戦記／／GOJOE

歴史映画ではなく、あくまで「時代劇」という考え方で選びました。歴史もののジャンルもあれば滝口康彦原作の作品や戦国武将もの、忠臣蔵、新選組などが入ってきますが……。宮本武蔵も歴史ものとみなし、入れませんでした。「七人の侍」は、私は歴史映画とは見ていませんので、ここへ入れましたが、この作品はジャンルに関係なく大名作ですよね。

ベスト・テン企画には、なかなかランク・インしないのが〝股旅もの〟ですが、日本人の人情を描いた佳作が多く、個人的に大好きなジャンルですので二作入れました。

座頭市はシリーズ全部を書くわけにいかないので一作目のみとしました。

平成に入ってからの作品として、全く趣の違う二作を代表で選びました。山田洋次、石井聰亙両監督とも時代劇ではニューフェイス、これからも時代ものを作りつづけてほしいお二人です。邦画界に面白い時代劇がどんどん創られることを願ってやみません。

黒田邦雄　映画評論家

宮本武蔵(五部作)(※)
大菩薩峠(三部作)(57～59年・内田吐夢)
血槍富士
浪花の恋の物語
妖刀物語　花の吉原百人斬り
雪之丞変化(35年・衣笠貞之助)
蛇姫様(40年・衣笠貞之助)
武士道無残
ひとり狼
羅生門

私にとって時代劇は、内田吐夢と衣笠貞之助の作品につきる。とはいえ、彼らの最盛期(戦前)の傑作を殆ど観ていないので大きなことは言えないのだが、衣笠の「小判鮫」で時代劇の面白さに目覚めた身には、長谷川一夫の美男ぶりと衣笠の華麗な演出が時代劇のすべてだったのだ。男と女を演じ分ける長谷川の両性具有的魅力にとりつかれ、「蛇姫様」「雪之丞変化」へとさかのぼることになるのだが、長谷川の相手役をつとめた山田五十鈴の色気も絶品だった。そして、中国から帰国した内田の復帰第一作「血槍富士」の衝撃！

時代劇の風格とはこれなのかと思い知り、「宮本武蔵（五部作）」で完全に陶酔したのであった。衣笠が軟の美学であったのに対し、内田はまさに反対の硬の美学であったが、共通項は映画美への徹底したこだわりである。内田の演出する殺陣シーンは凄絶を極めるが、その迫力は常に美をまとい、寸分の乱れもない。いい俳優がいたことも、さいわいだった。

小藤田千栄子　映画評論家

丹下左膳餘話　百萬兩の壺
人情紙風船
阿部一族
元禄忠臣蔵　前篇・後篇
羅生門
西鶴一代女
宮本武蔵(54年・稲垣浩)
雨月物語
山椒大夫

34「雄呂血」(25)

34「一心太助　天下の一大事」(58)

34「暗殺」(64)

蜘蛛巣城

　10本選んだら、なんだか昔の作品ばかりになってしまいました。学生時代に、フィルムセンターや名画座に通って、感銘を受けた作品が半分以上です。いい映画ばかりが並びました。時代劇といいましても、私は、アクション系が好きではないのです。リアルな殺陣はイヤなのです。ましてや残酷なチャンバラなんてトンデモナイ。そういうことです。

佐藤忠男　映画批評家

河内山宗俊
山椒大夫
羅生門
七人の侍
たそがれ清兵衛
次郎長三国志(九部作)(*)
新釈四谷怪談　前篇・後篇
元禄忠臣蔵　前篇・後篇
宮本武蔵(五部作)(※)
血槍富士

　私があげた10作品のうち、いまでは一般に殆んど忘れられてしまっている作品が数本ある。ひとつは「元禄忠臣蔵　前篇・後篇」で、これは戦争中の作品であるため、大石良雄が勤皇の志あつく、そのため討入りを皇室は認めてくれるかどうかと悩むというバカげた設定になっている。その意味では忘れられて当然とも言えるのだが、他方、集団演技と移動を多用したカメラワークの見事さは比類がない。溝口健二の様式美の極致を示すものである。もう一本は木下恵介の「新釈四谷怪談　前篇・後篇」。これも怪談としてはとくに怖いわけではないし、センチメンタルすぎるので評価されないのかもしれないが、田中絹代のお岩が殺される場面での佐田啓二の小仏小平とのラブシーンひとつだけでも、そのロマンチックな幻想の美しさにおいてやはり類のない傑作と言うべきである。

佐藤利明　娯楽映画研究

丹下左膳餘話　百萬両の壺
エノケンのどんぐり頓兵衛
鴛鴦歌合戦
次郎長三国志　海道一の暴れん坊(*)
七人の侍
東海道四谷怪談
切腹
十三人の刺客
座頭市血笑旅
沓掛時次郎　遊侠一匹

　山中貞雄、山本嘉次郎、マキノ正博の三作は、それぞれのモダニストぶりが堪能できるエンタテインメント時代劇。エノケン映画数あれど「どんぐり頓兵衛」は当り狂言の最良の映画化の一本。「鴛鴦歌合戦」は急遽の映画にもかかわらず、その楽しさは色あせない。森繁石松の「海道一の暴れん坊」は、東宝モダニズムとマキノの心意気で、滅法面白く、せつない次郎長ものとなった。「東海道四谷怪談」は中川信夫の映画職人としてのキャリアとセンス、そして黒沢治安の美術、大蔵怪談、いや日本の怪談の最高峰となった。橋本忍脚本の「切腹」は松竹京都が生んだ最良の一本であり、山田洋次時代劇への精神的支柱になっているのでは？　片岡千恵蔵、アラカンなどベテランのアクション篇「十三人の刺客」は、東映京都ならではの娯楽要素満載。大映京都のプログラムピクチャーの高水準の象徴としての「座頭市血笑旅」は、同じ三隅研次の「眠狂四郎勝負」などの代表として。加藤泰の「遊侠一匹」で渥美清が演じた身延の朝吉こそ車寅次郎の原点だろう。

塩田時敏　映画評論家

鴛鴦歌合戦
人情紙風船
ポルノ時代劇　忘八武士道
幕末太陽傳
東海道四谷怪談
忠臣蔵外伝四谷怪談
竜馬暗殺
徳川いれずみ師　責め地獄
御用牙　かみそり半蔵地獄責め
御法度

　同時代的に映画を観るようになった頃は、ジャンル映画としての時代劇は消滅していたと言っていい。いわゆる名作ものも、ほとんど後追い状況で観ているので、このジャンルにさしたる思い入れは持ち合わせていない。しかし、ジャンルとしての時代劇ではなく、サムライのいた頃を背景とした、非現代劇ととらえれば、これは逆にどんなジャンルもOKの世界であり、選んでみれば結果として、ミュージカルありホラーあり、エロありグロあり涙ありと、なかなか思い入れ深いチョイスとなった次第だ。

品田雄吉　映画評論家

七人の侍
羅生門
西鶴一代女
河内山宗俊
心中天網島
忠次旅日記(三部曲)
人情紙風船
雨月物語
東海道四谷怪談
幕末太陽傳

　どうも名作路線になってしまった。「宮本武蔵」(稲垣浩版および

内田吐夢版）などを挙げるべきだったと反省している。

芝山幹郎 翻訳家

雨月物語
丹下左膳餘話　百萬兩の壺
人情紙風船
河内山宗俊
七人の侍
用心棒
春秋一刀流
天狗飛脚
鴛鴦歌合戦
薄桜記

月形龍之介主演の「水戸黄門」ものを見ていると、危機に陥った黄門様が、「助さん、格さん、ひとり残らず斬り捨てい」と眉間にしわを寄せて声をひきつらせる。

ところが、大河内伝次郎主演の、というより山中貞雄が脚本を書いた「水戸黄門」三部作では、同じ状況の黄門様の台詞が、「助さん、格さん、遊んでおやり」となる。このふわりとした感覚は、なんとも魅力的だ。山中貞雄という天才はこの資質を後年の作品に滲み出させたが、丸根賛太郎の「天狗飛脚」やマキノ正博の「鴛鴦歌合戦」にも、「ふくみ笑い」は正しく受け継がれているのではないか。

とはいうものの、「ふくみ笑い」だけが時代劇の魅力を形づくるものではない。「雨月物語」の美しさは空間と人間の両方を恐るべき明晰さで捉えたところにあるし、「七人の侍」のダイナミズムや「薄桜記」の破滅的な殺陣には、何度見ても唸らされてしまう。時代劇の横顔は、正面から見た顔とかなり異なるようだ。

髙橋聰 大阪日日新聞編集局次長

用心棒
紅孔雀（五部作）
十三人の刺客
関の彌太ッペ（63年・山下耕作）
大殺陣　雄呂血（66年・田中徳三）
雪の渡り鳥
東海道四谷怪談
ひとり狼
丹下左膳餘話　百萬兩の壺
国定忠治（58年・小沢茂弘）

時代劇は東映—のキャッチフレーズの時代に映画を見始めたので、「笛吹童子」「紅孔雀」などが映画鑑賞の原点。スターは中村錦之助（萬屋錦之介）、東千代之介、大友柳太朗、女優は高千穂ひずる、田代百合子、千原しのぶらに憧れた。子ども心のワクワク感が今は懐かしい。そして、「凄い」と胸躍ったのが、黒澤時代劇で、「用心棒」で、仲代達矢らと対峙し、三船敏郎が懐から両手を出し走りだすシーン。佐藤勝の音楽。大チャンバラの「十三人の刺客」「大殺陣雄呂血」もそうで、前者の片岡千恵蔵らの俳優と、後者の市川雷蔵に唸った。一番泣けたのが「関の彌太ッペ」の錦之助の名セリフと十朱幸代。正調股旅歌謡映画「雪の渡り鳥」の主題歌（三波春夫）と、長谷川一夫。中川信夫美学「東海道四谷怪談」、市川雷蔵の股旅究極「ひとり狼」、山中貞雄と大河内伝次郎に畏敬の念を込め「丹下左膳餘話　百萬兩の壺」、千恵蔵御大の極め付け「国定忠次」にも一票を。

34「千利休・本覺坊遺文」(89)

34「山椒大夫」(54)

34「御法度」(99)

竹入栄二郎 業界紙記者

羅生門
七人の侍
幕末太陽傳
座頭市物語
大菩薩峠(66年・岡本喜八)
椿三十郎
助太刀屋助六
浪人街(90年・黒木和雄)
魔像
たそがれ清兵衛

どんな映画のベスト・テンでも、俳優や監督のベスト・テンでも、昭和初期の作品、人物より、近年のそれの方が得点が高いのは年齢別映画ファンの絶対数の差から、近年の方が有利なのは確かだ。だが、年配の人は、若い時に見た映画の感動が不滅だから、その点は昔の映画の方が有利だ。とすると、昔も今も得票的には同格なのか。

で、やはり昔の映画への思い入れが濃いことが我ながら歴然とした。

黒澤映画への投票が多いのは仕方がなかろう。俳優では勝新、三船、阪妻など。同じ時代劇でも、リアリズムを追求したものと、華麗なチャンバラ映画とは区別しなければいけないのだろうが、後者を拾うとなると、東映華やかなりし頃のチャンバラは多く捨てがたい。その流れを残像したものが崗本喜八の「助太刀屋助六」だと素人考えで思う。

なお、阪妻映画にはもっと多くの作品があるが、タイトルが浮かばないのは何故か。

田中千世子 映画評論家

戦国群盗伝(37年・滝沢英輔)
丹下左膳餘話　百萬兩の壺
下郎の首
血槍富士
元禄忠臣蔵　前篇・後篇
血煙高田馬場
幕末太陽傳
七人の侍
沓掛時次郎　遊侠一匹
宮本武蔵　一乗寺の決斗(※)

伊藤大輔から何本、内田吐夢から何本という風に決めてから選べばよいのか、思いつくままワッと選ぶほうがよいのか迷っている内に10本になった。まっさきにあげたのは滝沢英輔監督の「戦国群盗伝」だ。東映時代劇と共に育ったから毎年のように派手やかな忠臣蔵を見ていたが、あげるとなると溝口の白黒映画だ。時代劇というとチャンバラがないといけないと思い、心中ものはしりぞけた。

田中眞澄 文化・映画史研究

忠次旅日記(三部曲)
御誂次郎吉格子
反逆児
血槍富士
大菩薩峠(三部作)(57〜59年・内田吐夢)
宮本武蔵(五部作)(※)
恋や恋なすな恋
国士無双(32年・伊丹万作)
ちいさこべ
ひばり・チエミの弥次喜多道中

伊藤大輔のサイレント時代の作品だけ、十本並べることができるなら、どんなに幸せだろう。結局、時代劇映画はそこにはじまって、そこに帰る(のではないか)。だが、あいにく私たちはそのような幸運な世代ではない。

日本映画には幻の名作が多すぎる。特に時代劇に損失は甚だしい。衣笠貞之助もマキノ正博(当時)も稲垣浩も山中貞雄も、現存作品より失われた作品のほうがすばらしかったに違いないのだから、敢えてここに挙げる気にならなかった。従って、戦後の内田吐夢は右総代のつもり。「恋や恋〜」は通常の時代劇とは異なるが、巨匠を知る上で欠かせない。

大輔のパトスも吐夢の情念も、今の世に失われて久しい。だが、大きな人間から発せられた豪速球を、正面から受けとめないで何とする。時代劇という狭い縄張り意識など超えてしまえ。その意味で時代劇神話を相対化する時代劇映画も加えたが、どさくさ紛れに、個人的趣味も最後に入れておいた。

土屋好生 読売新聞記者

七人の侍
蜘蛛巣城
用心棒
人情紙風船
西鶴一代女
幕末太陽傳
宮本武蔵(五部作)(※)
切腹
心中天網島
たそがれ清兵衛

ガキのころから時代劇、つまりチャンバラを見て育った世代。といっても団塊の世代だから、ものごころついたころは、錦ちゃんに橋蔵、桜町弘子に丘さとみ見たさに、十円玉三枚握って映画館へ馳せ参じたものだ。

そんなガキが〝黒澤〟に出会ったのだから、これはもう革命的体験といっていい。兄と見た「七人の侍」や、母と見た「蜘蛛巣城」、中学校の映画教室でワイワイ騒ぎながら見た「用心棒」は、いまだに心のスクリーンに焼きついている。小学生のころ母と見た「彼岸花」や「秋日和」などの小津作品

51「影武者」(80)

34「幕末残酷物語」(64)

34「大菩薩峠」(57〜59)

は退屈きわまりなかったから〝黒澤党〟になるのも無理はない。

リバイバルで見た「西鶴一代女」や「幕末太陽傳」「切腹」にも感心はしたものの、正直いって「人情紙風船」に脱帽したくらいで、やはり映画はリアルタイムで見なければと思った次第。くやしいけど、いまだに黒澤の呪縛から逃れられない自分が悲しい？

寺本直末 映画ライター

旗本退屈男　謎の決闘状
座頭市物語
座頭市血煙り街道
沓掛時次郎　遊侠一匹
忠臣蔵(58年・渡辺邦男)
眠狂四郎　女妖剣
必殺4　恨みはらします
七人の侍
歌ふ狸御殿
ひばりの森の石松

「七人の侍」を選ばずに10本と考え、完璧にスター主義で選んでみた……。が、やはり「七人の侍」は、選んでしまった次第。日本のミュージカルにはどうしても違和感を覚える私が、「歌ふ狸御殿」に関してはこんなやり方もあったのか！　と目から鱗の思いがした。北野武の「座頭市」を入れてもよかったほど好きなので、北野監督にはぜひ続編も撮っていただきたい。

轟夕起夫 文筆業

次郎長三国志　海道一の暴れん坊(＊)
一心太助　天下の一大事
浪花の恋の物語
座頭市物語
十三人の刺客
関の彌太ッペ(63年・山下耕作)
忍者狩り
十兵衛暗殺剣
沓掛時次郎　遊侠一匹
子連れ狼　三途の川の乳母車

一監督、一作品で選出(もちろん順不同、製作年度ごとに並んでます)。後ろ髪を引かれたものは無数にあるが、結局、中村錦之助の映画が好きなのだと再確認(〝萬屋錦之介〟時代よりも)。萬屋錦之介といえば、物心ついたときには〝拝一刀〟としてブラウン管の中にいたが、それより以前、筆者にとってのTV時代劇のヒーローは〝素浪人花山大吉〟こと近衛十四郎で、この人のおかげでオカラが好きになった。のちに個人的な〝アイパッチ〟好きも重なって、映画での当たり役、柳生十兵衛キャラには小躍りした。その「十兵衛暗殺剣」、近衛vs大友柳太朗の殺陣が最高である。あと、「㊙女郎市場」(72)、「㊙女郎責め地獄」(73)などの日活ロマンポルノ、猥雑でアナーキーな東映の「ポルノ時代劇　忘八武士道」(73)、「好色元禄㊙物語」(75) 等も入れたかった。山中貞雄と黒澤明の時代劇は別格ということで。

西村雄一郎 映画評論家

椿三十郎
用心棒
切腹
十三人の刺客
宮本武蔵　一乗寺の決斗(※)
続忍びの者
座頭市物語
千利休・本覺坊遺文
人斬り
幕末太陽傳

最初の七本は、一九六一年から六三年までの映画である。この〝時代劇ルネッサンス〟というべき時期に出会うことによって、私は映画開眼したといっていい。日本映画史のなかでも燦然と輝く時代劇の一大宝庫の時期。それは「用心棒」と「椿三十郎」という二本の三十郎シリーズが、革命をもたらし、他の時代劇に多大な影響をもたらした時代だった。それを象徴するのが、バシャ、ドシュッ！という斬殺音。以後の時代劇になくてはならない効果音となった。

もっといえば、時代劇ルネッサンス、残酷時代劇、集団抗争時代劇は、滅び行く東映娯楽時代劇の最後の仇花だった。これ以後、東映はヤクザ映画に移行していくことになる。それにしても、現在の時代劇の不振を見るにつけ、あの凝縮した時期に見せた活動屋の裂帛の気合を、もう一度味わいたい気がする。

西脇英夫 映画評論家

七人の侍
用心棒
隠し砦の三悪人
切腹
薄桜記
関の彌太ッペ(63年・山下耕作)
幕末太陽傳
十三人の刺客
上意討ち　―拝領妻始末―
人情紙風船

10本なんて、とても選びきれない。残念なのでせめてもれた作品をあげておく。「羅生門」「椿三十郎」「西鶴一代女」「雨月物語」、内田吐夢の「宮本武蔵(五部作)」、同じく「大菩薩峠(三部作)」、マキノ雅弘「次郎長三国志」シリーズ、「座頭市」シリーズ、「眠狂四郎」シリーズ、加藤泰の「瞼の母」、同じく「遊侠一匹」、「ひとり狼」「血槍富士」「柳生武芸帳（二部作)」「幕末残酷物語」「十一人の侍」「十兵衛暗殺剣」「忍びの者」

51「昨日消えた男」(41)

51「五条霊戦記//GOJOE」(00)

51「座頭市血笑旅」(64)

シリーズ、などなど。まだまだもれているようで心配でたまらない。とにかく時代劇はつきつめれば最高の殺人劇、戦争映画に批判的な者も、実は楽しんで時代劇を見ているはず。筆者にとってはどちらも同じエンタテイメントにすぎないのだが。

野島孝一 映画ジャーナリスト

雄呂血(25年・二川文太郎)
宮本武蔵　一乗寺の決斗(※)
七人の侍
椿三十郎
用心棒
十三人の刺客
大殺陣
座頭市物語
薄桜記
切腹

黒澤明監督の三本は不動だが、「隠し砦の三悪人」あたりまで入れるかどうか。ここまで偏ってよいものかと考えてしまう。「宮本武蔵」は稲垣浩監督、加藤泰監督の作品も捨てがたいが、ここは内田吐夢作品を取るべきだろう。

工藤栄一監督の「十三人の刺客」「大殺陣」は東映時代劇にカツを入れた忘れ難い作品で、その後の工藤監督がまったく精彩がなくなったのは残念だ。座頭市なら北野版より、やはり元祖勝新版を尊重すべきだろう。

小林正樹監督には「上意討ち－拝領妻始末－」というすばらしい作品があるが、やはり「切腹」か。

阪妻には敬意を表して「雄呂血」を入れた。

野村正昭 映画評論家

椿三十郎
次郎長三国志　海道一の暴れん坊(※)
丹下左膳餘話　百萬両の壺
東海道四谷怪談
十三人の刺客
幕末残酷物語
眠狂四郎　女妖剣
座頭市(89年・勝新太郎)
斬る(68年・岡本喜八)
帰って来た木枯し紋次郎

1位の「椿三十郎」は数年前、浅草東宝のオールナイトで見直し、他の上映作と比べて圧倒的に面白かったという思い出に。しかし、時代劇といってもいろいろあるからなあと、しばし思案にくれて、「雨月物語」や「残菊物語」「鴛鴦歌合戦」「天狗飛脚」「幕末太陽傳」「雪之丞変化」(63)「股旅　三人やくざ」「無頼漢」「牡丹燈篭」「竜馬暗殺」「真田幸村の謀略」「御法度」「忠臣蔵外伝四谷怪談」などは、どれも大好きな作品だけど、一寸ちがうかなあと外し、「七人の侍」「用心棒」「宮本武蔵　一乗寺の決斗」「赤毛」「座頭市」(03)を入れようかどうしようかと最後まで迷い、むしろ「剣鬼」「眠狂四郎　無頼剣」「座頭市千両首」「座頭市あばれ凧」「座頭市海を渡る」「女狐風呂」「戦国野郎」「野盗風の中を走る」「子連れ狼　冥府魔道」などの、あまり世間では脚光を浴びていない秀作群を落としたことの方が気にかかり、結局こういうテンになりました。

春岡勇二 映画評論家

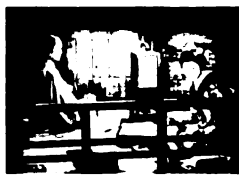
用心棒
椿三十郎
沓掛時次郎　遊侠一匹
関の彌太ッペ(63年・山下耕作)
鴛鴦歌合戦
丹下左膳餘話　百萬両の壺
近松物語
薄桜記
十三人の刺客
座頭市物語

黒澤作品の中で、実は「七人の侍」より好きなのが「用心棒」と「椿三十郎」。「用心棒」は、学生時代、教室で宮川一夫先生から撮影ノートを見せていただいたことが忘れられない。「椿三十郎」は随所に散りばめられたユーモアがいい。入江たか子と団令子の母娘がよく、入江にかなわないという三十郎が好きだった。「遊侠一匹」と「関の彌太ッペ」は股旅ものの傑作。時代劇という範疇でも外せない。加藤泰監督と山下耕作監督は時代劇でも巨匠だと思う。マキノ雅弘監督の「鴛鴦歌合戦」と山中貞雄監督の「百萬両の壺」は映画を観る愉しさにあふれている。今思い出しても頬がゆるむ。「近松物語」の美しさは溝口作品の中でも最高。長谷川一夫はやはりメロドラマだ。森一生監督の「薄桜記」は鬼気迫る主人公の姿が、演じる市川雷蔵に重なって……。「十三人の刺客」と「座頭市物語」は純粋に面白く、工藤栄一監督、三隅研次監督の名前も、やはり忘れるわけにはいかない。

樋口尚文 映画批評家

丹下左膳餘話　百萬両の壺
忠次旅日記(三部曲)
薄桜記
御法度
椿三十郎
宮本武蔵　一乗寺の決斗(※)
斬る(62年・三隅研次)
沓掛時次郎　遊侠一匹
関の彌太ッペ(63年・山下耕作)
忠臣蔵外伝四谷怪談

たったの十本を選ぶなんてとても無理なのでとにかく一作家は一本に絞るのだが、これが既にしん

51「楢山節考」(83)

51「浪花の恋の物語」(59)

51「助太刀屋助六」(02)

どい。山中貞雄なら現存する全作品が本来は選ばれるべきだろうし、黒澤明や内田吐夢といったら宝の山である。伊藤大輔も然りであるし、他に伊丹万作やマキノ雅弘までがあぶれているのはバチ当たりなことだ。そう言えば溝口健二の「雨月物語」や「山椒大夫」もれっきとした時代劇だし、深作欣二が入っているのに「十三人の刺客」の頃の工藤栄一がいないのもモンダイである。「幕末太陽傳」「忍びの者」「鴛鴦歌合戦」そのほか気がかりなものを挙げだしたらキリがない。「座頭市」シリーズや東映の石井輝男、鈴木則文らのラインもねじこみたい気分満々。といったわけで選出の理由にはさっぱりなっていないが、近年の時代劇まがいのひどいアクション映画もどきを撮る作り手は、これらをもう一度しっかり味わい直して勉強した方がいいと思う。

双葉十三郎　映画評論家

忠次旅日記(三部曲)
浪人街(三部作)(28〜29年・マキノ正博)
抱寝の長脇差(32年・山中貞雄)
弥太郎笠(32年・稲垣浩)
国士無双(32年・伊丹万作)
雪之丞変化(35年・衣笠貞之助)
七人の侍
幕末太陽傳
東海道四谷怪談

宮本武蔵(五部作)(※)

外国映画と同じく年代順に一監督一作品として択びました。「宮本武蔵」はもちろん、「忠臣蔵」、「新選組」、その他、日本の時代劇には同じ題材のくりかえし製作が多いので整理に困ります。

前村和夫　東京新聞記者

羅生門
七人の侍
用心棒
影武者
乱
雨月物語
幕末太陽傳
心中天網島
千利休・本覺坊遺文
御法度

思い出すままに……。当時、感動した作品を。ただ、今、ビデオで見直しても同じ感動を得られるのか、それは疑問。時代も、自分も変わっている。目に焼きついているのは、「御法度」のラストシーン。爛漫と咲くサクラの枝をビートたけしが一刀のもとに斬り落とす、あのシーン。大島渚監督が、あのラストシーンに込めた思いを聞いてみたかったが、それもかなわぬ夢。

松島利行　映画評論家

斬人斬馬剣
狐の呉れた赤ん坊(45年・丸根賛太郎)
用心棒
椿三十郎
東海道四谷怪談
薄桜記
暗殺
宮本武蔵(五部作)(※)
切腹
十三人の刺客

高校一年のころから荻窪文化で「次郎長三国志」を次々と見た。そのシリーズを加えないのに「新吾十番勝負」「眠狂四郎」「座頭市」などを挙げる気にはなれない。また「西鶴一代女」「雨月物語」、あるいは「一心太助　天下の一大事」「幕末太陽傳」などもやめた。時代劇とはチャンバラという解釈である。フィルムセンターで見ても「斬人斬馬剣」こそ、これぞ時代劇と知った。初めて見た映画は昭和二十年の初春、笹塚館での中山安兵衛ものと「三尺左吾平」の二本立てだった。「高田馬場前後」と推測されるが、確証がない。ただ、その殺陣の連鎖は「宮本武蔵一乗寺の決斗」に記憶の中でつながっている。「狐の呉れた〜」は疎開先で美しいプリントで見て戦後の平和を意識できた特別な作品、「大江戸五人男」のころまでは時代劇に不幸な占領下が続いた。ひばりが杉作を演じた大曾根辰夫監督の「鞍馬天狗」なども選びたかったが、黒澤作品も好きな二本にとどめた。

松田政男　映画評論家

風雲将棋谷
髑髏銭
まぼろし城
鞍馬天狗横浜に現る
人情紙風船
隠し砦の三悪人
東海道四谷怪談
天草四郎時貞
真田風雲録
魔界転生(81年・深作欣二)

前半の5本は戦前から、後半の5本は戦後から選ぶとまず決めて、戦前のほうは与那国島出身の亡母から長男として台北市で生まれ育った私は、なぜか昭和十年代後半に大人たちに連れられて映画館によく行っており、戦時下にもかかわらず東京とほぼ同時公開で時代劇をよく見ていたことを、懐かしく思い出す。題名どころか主演の阪妻や嵐寛のちょっとした仕草までが脳裏に明滅するのは、幼少の頃から私は物覚えがよかったのだろう。当然にも山中貞雄も同時代に見ており、その「人情紙風船」を戦後への架け橋に後半の5本を

60「赤ひげ」(65)　51「紅孔雀」(54〜55)　51「人斬り」(69)

強引に選ぶと、黒澤明は定番の「七人の侍」よりも「隠し砦の三悪人」で藤田進が「裏切り御免!」と叫んだのが今も記憶に生々しく、あと中川信夫の「東海道四谷怪談」がとにかく怖かった。大島渚と加藤泰は60年安保の総括として、ひたすら「政治的」に評価。やがて職業評論家になってからの選出が、故・深作欣二によるジュリー版「魔界転生」だけとはいささか淋しい。

的田也寸志　フリー

羅生門
一心太助　天下の一大事
切腹
竜馬暗殺
柳生一族の陰謀
ジャズ大名
座頭市(89年・勝新太郎)
天と地と
くノ一忍法帖　柳生外伝
五条霊戦記//GOJOE

1監督1作品で年代順。黒澤明は「七人の侍」(54)「用心棒」(61)、沢島忠は「暴れん坊兄弟」(60)「股旅　三人やくざ」(65)、岡本喜八は「大菩薩峠」(66)「斬る」(68)など、皆その日の気分でコロコロ替わるし、また明日にはこれら全てが大映時代劇に替わっているかもしれません。山中貞雄もマキノ

雅弘も松田定次も伊藤大輔も稲垣浩も衣笠貞之助も滝沢英輔も河野寿一も加藤泰も工藤栄一も山下耕作も三隅研次も森一生も池広一夫も大曾根辰保も篠田正浩も五社英雄も市川崑も入ってないのは、ひとえに10本しか選ばせてくれない編集部のせいですが(?)、「座頭市」以降は個人的こだわりで、特に「天と地と」はこれぞ良くも悪くも角川映画の代表作だと確信しています。「沈黙」(71)「空海」(84)など宗教テイストの作品や「東海道四谷怪談」(59)「牡丹燈籠」(68)などの怪談映画、「歌麿夢と知りせば」(77)「北斎漫画」(81)のようなエロスものも加えたかった……。

宮崎祐治　イラストレーター

七人の侍
血槍富士
十三人の刺客
用心棒
たそがれ清兵衛
竜馬暗殺
薄桜記
斬る(62年・三隅研次)
人情紙風船
股旅

時代劇をチャンバラというアクション映画のひとつとして捉えると、このベスト・テンもだいぶ違

うものになる気がする。封建時代の制度や因習の下で抑えられていた主人公の感情が、解放されたり爆発したりするときに、刀という命にかかわるぎりぎりの手段が使われるカタルシス。そういう瞬間を人間的なユーモアや哀しみとうまく結びつけた映画をほぼ選んでみたつもりだ。なによりも人間ドラマで優れている時代劇こそが、ジャンルとして映画の深みになっている気がする。それは、大河ドラマ『新選組!』を批判する中に、時代考証や史実との違いをマニアックというかヒステリックに指摘するものがあったけれど、ドラマの面白さを何よりも優先して見るべきなのに思うのと同じだ。

森卓也　映画評論家

忠次旅日記(三部曲)
丹下左膳餘話　百萬両の壺
河内山宗俊
赤西蠣太
人情紙風船
七人の侍
東海道四谷怪談
用心棒
座頭市物語
沓掛時次郎　遊侠一匹

ベスト・テンを喜々として選ぶのは、限られた数しか見ていない人なのではあるまいか。

今回は、点数順位制でないだけいいが、それでも常にテン外に追いやられる作品群が不憫でならず、渋面で封切順に並べた。

そもそも、太平洋戦争前の日活作品で、いま見られるものが極めて少ない。横浜シネマ現像所に預けてあったネガが、一九六〇年に倉庫の火災で焼失したためだ(という事実さえ今や忘れられている)。わずかに現存する作品が、例えば広島で発見され、FCに修復所蔵された「忠次旅日記」のように、欠落はあっても面白さと迫力にシビれたり、都筑道夫の随筆に、山中貞雄の「森の石松」が、一見なんの哀感もない明るい場面でも「涙が流れて止まらなかった」などとあるのを読むにつけ、いま70歳の私でも、時代劇のテンなどおこがましくて、という気持になり、日本のフィルムの保存状況が、今更のごとくハラ立たしいのである。

森遊机　映画研究者

雪之丞変化(63年・市川崑)
椿三十郎
昨日消えた男(41年・マキノ正博)
待って居た男
股旅
隠し砦の三悪人
斬る(62年・三隅研次)
座頭市(89年・勝新太郎)

●●「天草四郎時貞」(62)

●●「阿部一族」(38)

●●「仇討崇禅寺馬場」(57)

赤西蠣太
大魔神

「雪之丞変化」(市川崑版)は、時代劇とモダンアートの甘美な結合にうっとり。「椿三十郎」は、もうただただ面白く、個人的には前作「用心棒」よりも好み。「昨日消えた男」「待って居た男」は、共に小國英雄脚本＝マキノ正博監督によるミステリ時代劇で、謎解きの面白さに加えて、独特の、うす気味悪いスリラー的ムードが忘れがたい。「股旅」はそのオフビートな演出とカメラワークの新鮮さに、「斬る」は息苦しいばかりの三隅様式美と市川雷蔵の品格に、「座頭市」は勝監督の豪腕演出&演技ぶりに、「隠し砦〜」は「裏切り御免!」の名セリフに、「赤西蠣太」は片岡千恵蔵のしょぼくれ快演に、「大魔神」は特撮時代劇のほとんど唯一の成功作として、それぞれ一票を。山中貞雄「人情紙風船」、中川信夫「エノケンのとび助冒険旅行」、工藤栄一「十三人の刺客」、深作欣二「柳生一族の陰謀」「魔界転生」「必殺4 恨みはらします」なども入れたかったのですが。

山口猛 映画評論家

七人の侍
羅生門
雨月物語
宮本武蔵(五部作)(※)
怪談
切腹
人情紙風船
幕末太陽傳
赤西蠣太
座頭市物語

単に時代劇というだけで十本を選ぶことはいかに酷か。先日初めて見て驚いた不完全版「忠次旅日記」、母親コンプレックスには堪らない「沓掛時次郎 遊侠一匹」も敢えて圏外になってしまった。その中で黒澤明は別格であり、「酔いどれ天使」の三船敏郎が外国コンプレックスに苛まれていた私に日本映画の素晴らしさを教えてくれたのと同様、「七人の侍」の骨太の構造、「羅生門」の京マチ子の美しさには言葉もないほど。骨太といえば「宮本武蔵(五部作)」はそのまま俳優中村錦之助の成長であり、ヴィルドゥングスロマンになっている。また小林正樹作品は私の師匠の携わった映画だけに思い入れもあるが、やはり「切腹」は撮影の妙につき、白黒映画の極北をいくものだろう。その意味で「雨月物語」もまた、贅をつくした日本映画の微妙なあわい、それがまた日本独特の幽霊像とも重なりあっている。さらに伊丹万作ならではのユーモア、おとぼけは尋常ではないし、話は尽きず……。

山田和夫 映画評論家・日本映画振興会議代表委員

忠次旅日記(三部曲)
赤西蠣太
人情紙風船
瞼の母(31年・稲垣浩)
東海道四谷怪談
荒木又右衛門 決闘鍵屋の辻
七人の侍
切腹
夜の鼓
たそがれ清兵衛

最近時代劇映画の歴史を見直す機会があり、日本映画史で時代劇が占める位置と意義の大きさを再認識した。アメリカ映画的アクションを最初に導入したのも、ソビエト映画のモンタージュを意識したのも、時代劇が現代劇を超える大衆的魅力を持ち、リアリズムの面でも競い合ったことも、大切な映画史的側面だ。「忠次旅日記」は時代劇のリアリズムを一歩進め、「赤西蠣太」は伊丹万作の近代的リベラリズムが尖り、「人情紙風船」は暗い谷間の時代を証言した。稲垣版「瞼の母」のヒューマニズム、中川信夫が前衛的な色彩美でおどろかした「東海道四谷怪談」。「決闘鍵屋の辻」は黒澤のリアリズム・シナリオを森一生が的確に映像化したし、黒澤自身の傑作「七人の侍」の金字塔はゆるがない。小林正樹の「切腹」は宮島義勇のカメラがさえ、独特の造型美をつくり上げた。今井正の「夜の鼓」は三國連太郎の下級武士像が光り、山田洋次の「たそがれ清兵衛」に受け継がれた。

山根貞男 映画評論家

雄呂血(25年・二川文太郎)
忠次旅日記(三部曲)
人情紙風船
次郎長三国志(九部作)(*)
七人の侍
東海道四谷怪談
薄桜記
座頭市物語
十兵衛暗殺剣
沓掛時次郎 遊侠一匹

十本とはキツイ。一監督一本に絞っても工藤栄一「十三人の刺客」や山下耕作「関の彌太ッぺ」や深作欣二「柳生一族の陰謀」が落ちた。池田富保も溝口健二も稲垣浩も衣笠貞之助も内田吐夢も沢島忠も増村保造も田中徳三も中島貞夫も、片岡千恵蔵も市川右太衛門も嵐寛壽郎も月形龍之介も長谷川一夫も山田五十鈴も入ってない。しかも戦前はわずかしか見ていない(フィルムが残っていない)ので、バランスに欠ける。「忠次旅日記」は部分しか見ていないが、絶対的に凄いと確信して選び、「次郎長三国志」は全九作を1本と見なし

「危し！伊達之十二万石」(57)

「運が良けりゃ」(66)

「婉という女」(71)

た。いろいろ不備不満の選考だが、この十本は時代劇という枠を外しても傑作である。もともとジャンルで映画を分けることに情熱を感じないほうではあるが、時代劇には猛烈な愛着を覚え、伊藤大輔だけでも、あるいはマキノ正博（雅弘）だけでも、十本の傑作を選べると確信するから、次の機会があれば、せめて五十本にしてもらいたい。

渡辺武信　映画評論家

次郎長三国志(九部作)(＊)
七人の侍
一心太助　天下の一大事
血斗水滸伝　怒濤の対決
斬る(62年・三隅研次)
十三人の刺客
新座頭市物語
沓掛時次郎　遊侠一匹
ひとり狼
助太刀屋助六

順不同という条件ゆえ製作年代順に並べた。また明治以降を背景にした任侠映画も一種の時代劇だが、それらは対象外とし、いわゆるチャンバラ映画に絞った。「次郎長三国志」シリーズはマキノ監督だけでも東宝と東映（鶴田浩二主演）にあるが、ここで選んだのは52年の東宝映画「次郎長売り出す」に始まる小堀明男の主演作。

同じ監督から一本だけを原則にしたため、岡本喜八「ジャズ大名」、三隅研次「座頭市物語」「真田風雲録」、池広一夫「中山七里」、黒澤明「用心棒」などの傑作を除外せざるを得なかった。「怒濤の対決」は〝時代劇の東映〟が盆と正月に製作していたオールスター作品「任侠東海道」「任侠中山道」の系列に属し、お決まりのエンターテインメントとしてはこれが一番印象深い。実は今回確認するまでは前記二作と同じ松田定次監督作であると決め込んでいて、佐々木康と分かってから「彼もなかなかやるもんだ」と思った。

渡部実　映画評論家

切腹
人情紙風船
ワタリ
東海道四谷怪談
赤ひげ
羅生門
影武者
近松物語
心中天網島
山椒大夫

「切腹」を初めて見た時は驚いた。小林正樹の演出、橋本忍の脚本、宮島義勇の撮影、戸田重昌、大角純一の美術、蒲原正次郎の照明、西崎英雄の録音、武満徹の音楽、仲代達矢、三國連太郎、丹波哲郎らの俳優陣の演技。映画は総合芸術であるとはいえ、これほどまでにスタッフ、キャスト各々の才能が爆発的に投入された映画は珍しい。映画製作における創造者たちのはかり知れない深さ、大きさに圧倒された。一転して80年代の「影武者」は華麗な作品だ。武田信玄の動向をめぐる物語構成の面白さ、いぶし銀のような色彩美術。人物描写でも短い出番ながら織田信長の後見役の小姓、森蘭丸の描写などは、世阿弥の(時分の花)を伝え感銘を与える。黒澤映画の子どもたちはどうしてこんなに素晴らしいのだろうか。「ワタリ」の白土三平の原作を1950年代－60年代に連続テレビ映画で数々の傑作を発表した船床定男監督が忍者の抗争劇の中に子どもの童心を美しく歌い上げたファンタジーである。監督の映画遺作としても忘れがたい。

ジャンル別ベスト・テン番外篇
五番勝負　その一

「男はつらいよ」

選者　立川志らく（落語家）

第1位　口笛を吹く寅次郎（第32作／83年）
第2位　寅次郎相合い傘（第15作／75年）
第3位　噂の寅次郎（第22作／78年）
第4位　寅次郎あじさいの恋（第29作／82年）
第5位　新・男はつらいよ（第4作／70年）
第6位　寅次郎純情詩集（第18作／76年）
第7位　知床慕情（第38作／87年）
第8位　男はつらいよ（第1作／69年）
第9位　寅次郎と殿様（第19作／77年）
第10位　寅次郎夢枕（第10作／72年）

「口笛を吹く寅次郎」が第1位。これが一番優れた作品であるとは言わない。でも好き。マドンナの竹下景子とのラブストーリーがいい。二人は愛し合っていた。だけど彼女はお寺の娘。一緒になるには、寅さんは坊さんの修行をしなくてはならない。だから二人は別れた。ラストの柴又駅のプラットホーム。切なくて全身から涙が溢れた。

「寅次郎相合い傘」、シリーズ中最高の作品がこれ。マドンナは浅丘ルリ子。寅さんと真剣に喧嘩出来るマドンナだ。二人とも粋、それがいい。有名なメロン騒動は爆笑を呼ぶ。雨の柴又駅での二人の相合い傘の場面は邦画史上に残る名場面。

「噂の寅次郎」は、シリーズ中最高に綺麗なマドンナ大原麗子が出演。グレイス・ケリーよりも綺麗だと思う。そしてこの時の渥美清はジャン・ギャバンより渋くカッコ良い。

「寅次郎あじさいの恋」は、渥美清の体調がすぐれない為、寅さんに元気があまりなくて困ったと山田洋次監督はおっしゃっていた。しかし、それが功を奏し、実に味わい深い純文学の香りがする秀作が出来た。寅さんの寝ている部屋にそっと入るマドンナのいしだあゆみの色っぽさ。脚だけを映したカメラアングル。見事！

おいちゃん役の森川信が一番面白いのが「新・男はつらいよ」。渥美清との演技の食い合い。見応えがある。物語は少々荒っぽい。

「寅次郎純情詩集」はマドンナ（京マチ子）が死んでしまうというシリーズ最大の悲劇。寅さんがこの悲劇によって恋することに少々疲れ、第20作「寅次郎頑張れ！」から若人に恋の指南をするようになったと私は睨んでいる。

「知床慕情」は、後期の最高傑作。寅さんとマドンナの竹下景子との恋よりも三船敏郎と淡路恵子の熟年の恋の方が素敵に描かれている。

シリーズ第1作は、アウトローだった頃の寅さんの魅力が最も詰まっている。博のお父さん役を演じている志村喬が素晴らしい。さくらと博の結婚式での感動的なスピーチは泣ける。

「寅次郎と殿様」は、嵐寛寿郎と三木のり平、そして渥美清。これだけで文句なし！

「寅次郎夢枕」は、照れてマドンナの八千草薫をふってしまう寅次郎に男の美学を見た。

「男はつらいよ　口笛を吹く寅次郎」

ジャンル別ベスト・テン番外篇
五番勝負　その二

松本清張原作映画化

選者　桂千穂（脚本家）

第1位　点と線（58年／監督：小林恒夫）
第2位　張込み（58年／野村芳太郎）
第3位　砂の器（74年／野村芳太郎）
第4位　黒い画集・あるサラリーマンの証言（60年／堀川弘通）
第5位　霧の旗（65年／山田洋次）
第6位　けものみち（65年／須川栄三）
第7位　黒い画集・寒流（61年／鈴木英夫）
第8位　鬼畜（78年／野村芳太郎）
第9位　ゼロの焦点（61年／野村芳太郎）
第10位　黄色い風土（61年／石井輝男）
次点　愛のきずな（69年／坪島孝）

ブラボー！　創刊以来85年、日本映画と共に歩いてきた『キネマ旬報』さん！

だが、推理サスペンスが日本映画界に定着した時期は太平洋戦争後の50年間にすぎない。世界各国で古くから親しまれ名作も多いのに、わが国だけはほとんど作っていなかったのだ。信じられないほど過酷な検閲のせいだが、人間の苦悩をしんねり見据える作品が傑作で、人殺しを面白おかしく描くなど愚劣で低俗だと、映画人が思い込んでいたからでもあった。敗戦後、世界中から新しい文化や思想が流れ込んだお陰で、傑作、愚作とりまぜて推理小説がどっと紹介され、刺激を受けた和製推理小説も推理映画も、質量ともにブレイクした。が、依然作り手や観客の偏見は強かった。エログロスリラーという批評が映画誌にまかり通っていた時代だったのだ。こんな状態を打破したのは松本清張原作小説の映画化だ。氏の力が推理映画を日本映画の主流に押し上げたと言える。

全部で35作。本数も多いが、ジャンルも百花繚乱の趣きがある。

そんななかで「点と線」を1位に据えたのは、捜査側が論理的に推理を展開した初めての日本映画だからだ。高峰三枝子が病床で練りあげた時刻表トリックをはじめ、後発のわが推理サスペンスのすべてがこの一編に詰まっている。「張込み」の2位は第一線で働く刑事たちの地を這うような努力が地道に、だが絢爛たる技術で描かれている。清張刑事物の原点だ。日本サスペンス映画の代表に挙げられる「砂の器」を3位に落とした理由は、橋本忍＝山田洋次の脚色と構成、野村演出のスケール、堂々たる音楽的処理、四季にわたるロケーションの素晴らしさに作品価値があり、原作の力ではないから。生活者を待ち受ける社会の陥穽を抉るのも清張ミステリの魅力、その代表として4位と7位に「黒い画集・あるサラリーマンの証言」「同・寒流」をいれた。小林桂樹と池部良がそれぞれ罠に陥ちた男を好演。5位「霧の旗」は孤立無援の小娘が逆に大弁護士を罠にかける。当時衝撃的な新鮮味があり、これで山田洋次ファンになった。6位「けものみち」は日本版〈わらの女〉の池内淳子が哀れ。8位「鬼畜」の極悪非道な母親像が凄い。岩下志麻が凄いのだ。9位「ゼロの焦点」、10位「黄色い風土」は華やかなメロドラマ。9位の久我美子、高千穂ひづると10位の佐久間良子が美しい。「愛のきずな」の薗まりも妖しくてよかった。

「点と線」

ジャンル別ベスト・テン番外篇
五番勝負　その三

ヤクザ映画

選者　橋本　一（映画監督）

はしもと・はじめ／90年に東映に入社。「御宿かわせみ」「科捜研の女」などＴＶドラマの監督を手掛け、03年「新　仁義なき戦い／謀殺」で劇場用映画の監督デビュー。現在次回作を準備中。

○博奕打ち　総長賭博（68年／山下耕作）
○緋牡丹博徒　お竜参上（70年／加藤泰）
○仁義なき戦い（73年／深作欣二）
○仁義なき戦い　広島死闘篇（73年／深作欣二）
○仁義なき戦い　頂上作戦（74年／深作欣二）
○仁義の墓場（75年／深作欣二）
○総長の首（79年／中島貞夫）
○日本の仁義（77年／中島貞夫）
○「極道」シリーズ（68～74年／若山富三郎主演）
番外　怪談昇り竜（70年／石井輝男監督）

困った。
　ヤクザ映画ベスト・テン、さてと考え込めば脳裏に浮かぶあの顔この顔。月並で恐縮だが、10本限定などとても無理、順位づけなど論外……引き受けたことを後悔しつつも、悩み抜いた挙句、熟考せずに直感霊感命じるままに、11秒で選んだ「個人的ベスト」10本プラス1、簡単にコメントを。
「総長賭博」はヤクザ映画＝悲劇ということの見本。この作品を見て泣かない男は、信用しないことにしている。
「お竜参上」、〝おんな〟と〝ヤクザ〟を見事に融合させた、ヒロイン・アクション映画の傑作。藤純子は女侠客のベストだ！
「仁義なき戦い」は、敢えて3本選んだ。それぞれがこのシリーズとヤクザ映画の違う側面を持っているから。
　一作目は、もはや聖典の域に近い。ヤクザのみならず集団生活を営む人間のバイブル。上司とは、部下とは、同僚とは、その問いと答えがこの中にある。日本の企業は社員研修にこの映画を使うべきだ。
「広島死闘篇」、大友勝利（千葉真一）はヤクザ映画史上に燦然と輝くベスト・キャラ。そしてベスト・ヒットマン山中（北大路欣也）の哀感。深作アクションの切れ味も最高潮。
「頂上作戦」はブラック・コメディの傑作。かつて文芸坐オールナイト上映時の場内爆笑の渦は忘れがたい。
「仁義の墓場」、実録ヤクザ映画の極北。真夏でも鳥肌の立つ寂寥感と荒んだタッチは、イマドキのホラーに近いものがある。繰り返しては見たくない、鮮烈な一本。
「総長の首」は路線的には実録モノなのだが……舞台設定の奇妙さ、随所に弾けるアクション、シュールな描写の数々が相まって、不思議な世界を作り出しているのが魅力的。
「日本の仁義」、菅原文太が広能とは違った意味で人間的なヤクザ・須藤を熱演。
「極道」はシリーズ通して見れば魅力倍増、という事で乱暴ながらシリーズ括って選んだ。島村親分（若山富三郎）は、ヤクザ映画＝キャラの映画であるということを痛感させる。
　番外で石井輝男監督の「怪談昇り竜」。梶芽衣子の魅力に加えて、前人未踏・空前絶後のヤクザ・ホラーという試み。ヤクザ映画というジャンルの奥深さを実感する一本。
　……と、ここまで選んでほぼ全部東映作品であることに気づく。でも決してこれは身びいきじゃなく、僕にとっての面白いヤクザ映画がそうであっただけのことなのだが……製作本数も圧倒的に多いし。
　えっ？　ベスト・テンには一本足りないじゃないかって？　そりゃ、「個人的ベスト・テン」なんだから、一番思い入れが深い作品って……自分のシャシンでしょ？　そうじゃない？

「博奕打ち　総長賭博」

ジャンル別オールタイム・ベスト・テン ラブストーリー［外国映画］ランキング

順位	タイトル	得票数
1	ローマの休日	18
2	男と女	11
3	アパートの鍵貸します	8
4	シェルブールの雨傘	7
	隣の女	7
6	愛の嵐	6
	逢びき (45)	6
	イングリッシュ・ペイシェント	6
	恋人たち	6
	昼下りの情事	6
	旅情	6
12	哀愁	5
	ある日どこかで	5
	カサブランカ	5
	花様年華	5
	草原の輝き	5
	突然炎のごとく ジュールとジム	5
	夏の嵐	5
	初恋のきた道	5
	ベティ・ブルー 愛と激情の日々	5
	冒険者たち	5
	めぐり逢い (57)	5
	ライアンの娘	5
24	アニー・ホール	4
	奇跡の海	4
	恋人たちの予感	4
	卒業	4
	天井桟敷の人々	4
	トーク・トゥ・ハー	4
	ノッティングヒルの恋人	4
	ひまわり	4
	道	4
	ラヴソング	4
	リトル・ロマンス	4
	猟奇的な彼女	4
36	ある愛の詩	3
	いつも2人で	3
	ウェディング・シンガー	3
	おもいでの夏	3
	かくも長き不在	3
	風と共に去りぬ	3
	勝手にしやがれ	3
	髪結いの亭主	3
	恋におちたシェイクスピア	3
	恋のエチュード	3
	心の旅路	3
	終着駅	3
	スプラッシュ	3
	ドクトル・ジバゴ	3
	ピアノ・レッスン	3
	陽のあたる場所	3
	ヘッドライト	3
	ぼくの美しい人だから	3
	マイライフ・アズ・ア・ドッグ	3
	欲望の翼	3
	恋恋風塵	3
	忘れじの面影	3
58	愛人ジュリエット	2
	愛すれど心さびしく	2
	愛に関する短いフィルム	2
	アデルの恋の物語	2
	アメリ	2
	インティマシー／親密	2
	うたかたの恋 (35)	2
	麗しのサブリナ	2
	オアシス	2
	汚名	2
	過去を持つ愛情	2
	気狂いピエロ	2
	草の上の月	2
	クライング・ゲーム	2
	恋	2
	恋に落ちたら…	2
	恋におちて	2
	恋のためらい フランキーとジョニー	2
	魚と寝る女	2
	さらば、わが愛／覇王別姫	2
	シーズ・ソー・ラヴリー	2
	シェルタリング・スカイ	2

12「花様年華」(00)

36「ある愛の詩」(70)

114「汚れた血」(86)

■選考委員［五十音順・敬称略］
秋本鉄次・安西水丸・石井美由季・石津文子・内海陽子・襟川クロ・大竹洋子・大森さわこ・おかむら良・荻原順子・折田千鶴子・垣井道弘・賀来タクト・桂千穂・金城一紀・河原晶子・川本三郎・河原畑寧・きさらぎ尚・北川れい子・北小路隆志・金原由佳・黒田邦雄・小藤田千栄子・今野雄二・佐藤友紀・品田雄吉・新藤純子・杉原賢彦・高沢瑛一・田中千世子・寺本直未・中西愛子・中野翠・永野寿彦・中山治美・野島孝一・野村正昭・萩尾瞳・双葉十三郎・増田統・松島利行・的田也寸志・三留まゆみ・宮崎祐治・村山匡一郎・森直人・山口直樹・大和晶・横森文・吉田真由美・和久本みさ子・渡辺祥子・渡辺武信

順位	作品	票
114	バッファロー'66	1
	ハネムーン・キラーズ	1
	ハバナ	1
	パリ、テキサス	1
	巴里の女性	1
	パリのめぐり逢い	1
	春にして君を想う	1
	ハロルドとモード　少年は虹を渡る	1
	美女と野獣 (46)	1
	美女と野獣 (91)	1
	ヒズ・ガール・フライデー	1
	火の接吻	1
	フォー・ウェディング	1
	ふたりだけの微笑	1
	ふたりだけの森	1
	ふたりでスローダンスを	1
	フリークスも人間も	1
	ブレイブ	1
	フレンズ　ポールとミッシェル	1
	ヘヴン	1
	ベスト・フレンズ・ウェディング	1
	ベティ・ブルー　インテグラル〈完全版〉	1
	望郷	1
	ボーイ・ミーツ・ガール	1
	ボーイズ・ドント・クライ	1
	ポーラX	1
	ぼくの小さな恋人たち	1
	慕情	1
	ポンヌフの恋人	1
	マーティ	1
	マイ・ラブ	1
	街角（桃色の店）	1
	真夜中のカーボーイ	1
	真夜中の虹	1
	緑の光線	1
	MUSA	1
	ムーラン・ルージュ	1
	邂逅（めぐりあい）	1
	めぐりあう時間たち	1
	めぐり逢えたら	1
	めまい	1
	モスクワは涙を信じない	1
	モンスター	1
	モンパルナスの灯	1
	野性の夜に	1
	ユー・ガット・メール	1
	夕なぎ	1
	汚れた血	1
	夜の人々	1
	ラ・パロマ	1
	楽園の瑕	1
	ラスト・コンサート	1
	ラブ・オブ・ザ・ゲーム	1
	リアリティ・バイツ	1
	離愁	1
	ルトガー・ハウアー／危険な愛	1
	レッズ	1
	レディ・イヴ	1
	レベッカ	1
	ロシュフォールの恋人たち	1
	ロスト・イン・トランスレーション	1
	ロミオとジュリエット (54)	1
	ワイルド・アット・ハート	1
	わが青春のマリアンヌ	1
	忘れられない人	1
114	傷ついた男	1
	ギター弾きの恋	1
	キャリントン	1
	キルトに綴る愛	1
	キング・コング (33)	1
	グリーン・カード	1
	黒いオルフェ	1
	ゲット・ア・チャンス！	1
	恋する女たち	1
	恋する惑星	1
	荒野の決闘	1
	極楽特急	1
	ゴッド・アンド・モンスター	1
	この空は君のもの	1
	こわれゆく女	1
	砂漠の流れ者	1
	さよならの微笑	1
	さよならをもう一度	1
	さらば青春	1
	サンライズ	1
	シェーン	1
	ジェーン・エア	1
	ジェニーの肖像	1
	ジェラシー	1
	シャーロック・ホームズの冒険	1
	シャンドライの恋	1
	シュア・シング	1
	終電車	1
	純愛日記	1
	情事	1
	情婦マノン	1
	ショコラ	1
	ジョンとメリー	1
	白樺の林	1
	ZOO	1
	スタン・ザ・フラッシャー	1
	すてきな片想い	1
	素晴らしき哉、人生！	1
	スミス夫妻	1
	セイ・エニシング	1
	世界の涯てに	1
	双頭の鷲	1
	存在の耐えられない軽さ	1
	第三の男	1
	太陽と月に背いて	1
	太陽の年	1
	チェイシング・エイミー	1
	菊豆〈チュイトウ〉	1
	鶴は翔んでゆく（戦争と貞操）	1
	ディーバ	1
	ティファニーで朝食を	1
	テオレマ	1
	デッドゾーン	1
	テルマ&ルイーズ	1
	天国から来たチャンピオン	1
	年上の女 (59)	1
	とまどい	1
	トリコロール／青の愛	1
	永遠の愛に生きて	1
	ナインハーフ	1
	流されて…	1
	眺めのいい部屋	1
	嘆きのテレーズ	1
	ネイティブ・ハート	1
	激しい季節	1
	バタフライ・キス	1
	バタフライはフリー	1
	パッション・ダモーレ	1
58	仕立て屋の恋	2
	シベールの日曜日	2
	死んでもいい	2
	早春	2
	タイタニック	2
	小さな恋のメロディ	2
	チューズ・ミー	2
	チョコレート	2
	散り行く花	2
	追憶	2
	月の輝く夜に	2
	テス	2
	トゥルー・ロマンス	2
	肉体の悪魔 (47)	2
	八月のクリスマス	2
	ピクニック (36)	2
	白夜 (57)	2
	悲恋	2
	ファントム・オブ・パラダイス	2
	ブーベの恋人	2
	ブエノスアイレス	2
	フォロー・ミー	2
	プリティ・ウーマン	2
	ボイジャー	2
	街の灯	2
	みじかくも美しく燃え	2
	モロッコ	2
	柔らかい肌	2
	ラストタンゴ・イン・パリ	2
	ラブ・アクチュアリー	2
	ラブINニューヨーク	2
	リービング・ラスベガス	2
	恋愛小説家	2
	ロミオとジュリエット (68)	2
114	アイ・エヌ・ジー	1
	愛情萬歳	1
	アイス・キャッスル	1
	愛と哀しみの果て	1
	愛のコリーダ	1
	愛のメモリー	1
	哀愁花火	1
	アウト・オブ・サイト	1
	赤い靴	1
	明日に向って撃て！	1
	アタラント号	1
	アバウト・ア・ボーイ	1
	アメリカン・ビューティー	1
	或る夜の出来事	1
	苺とチョコレート	1
	愛しのローズマリー	1
	愛しのロクサーヌ	1
	妹の恋人	1
	ウエスト・サイド物語	1
	浮気な家族	1
	エイジ・オブ・イノセンス　汚れなき情事	1
	M・バタフライ	1
	大いなる遺産 (97)	1
	大人は判ってくれない	1
	俺たちに明日はない	1
	女はみんな生きている	1
	カーラの結婚宣言	1
	カイロの紫のバラ	1
	帰らざる夜明け	1
	輝きの海	1
	悲しみは空の彼方に	1
	彼女の彼は、彼女	1
	カミーラ	1
	危険な関係 (88)	1

12「哀愁」(40)

12「ある日どこかで」(80)

12「カサブランカ」(42)

ラブストーリー

ジャンル別 オールタイム ベスト・テン

[外国映画]

秋本鉄次 映画評論家

冒険者たち
ある日どこかで
トゥルー・ロマンス
早春
ブーベの恋人
月の輝く夜に
恋のためらい　フランキーとジョニー
ぼくの美しい人だから
ベティ・ブルー　愛と激情の日々
ラブ・オブ・ザ・ゲーム

世界の中心でさけんだり、冬のソナタがバカ受けしたり（キネ旬出版物も好調だそうで、御同慶の至りです）、今や〝恋愛至上主義〟の世の中だ。ラブストーリーが流行する時代が良い時代なのか否かは判然としないが、永遠不滅のジャンルであることは確かだろう。

ガキの男女のすべった転んだ恋のメロディはドーでもいい。せめて〝殺し〟をロマンチック！　と言える「トゥルー・ロマンス」でないと映画気分にはなれない。年上の女性ものでは「早春」「ぼくの～」の歪んだ味わいを選んだ。本当は「おもいでの夏」が一番好きなくせに。青春期のバイブルだった「冒険者たち」を入れるのは、この年になって気恥ずかしさもあったが……。ジェーン・セイモア、クラウディア・カルディナーレの作品は彼女たちへのラブレターとして選んだ。今いちばんしっくり来るのは「恋のためらい」や「ラブ・オブ・ザ・ゲーム」などの大人の恋愛妙味だ。今年なので入れなかったが、「恋愛適齢期」も大好き！

安西水丸 イラストレーター

ドクトル・ジバゴ
おもいでの夏
ライアンの娘
男と女
草原の輝き
モンパルナスの灯
さよならをもう一度
ローマの休日
シベールの日曜日
パリのめぐり逢い

「ドクトル・ジバゴ」はロシアという国の広さからくるスケールの大きさがいい。別れた二人がまったく遠く離れた土地で逢ったりする、そんなところが好きだ。何度見ても感動する。

「おもいでの夏」は少年と年上の女という、一度はみんなそんな思い出があるとおもう。音楽も頭から離れない。

「ライアンの娘」は人妻と若い将校という古典的なストーリーじたてだが、好きな映画だ。二人が馬でブルーベルの咲く森で逢いびきするシーンは官能的だ。

「草原の輝き」はウォーレン・ベイティとナタリー・ウッドのコンビがよかった。

「モンパルナスの灯」ジェラール・フィリップとアヌーク・エーメがいい。

「さよならをもう一度」「ローマの休日」「シベールの日曜日」「パリのめぐり逢い」はぼくの好きな役者が出ていて、くり返しくり返し見ている。

石井美由季 映画ライター

ローマの休日
ルトガー・ハウアー／危険な愛
愛の嵐
ひまわり
冒険者たち
ベティ・ブルー　愛と激情の日々
ワイルド・アット・ハート
ドクトル・ジバゴ
ある愛の詩
ウェディング・シンガー

祝85周年記念。オールタイムのベスト・テンということで、少ない知識ながらも極力古い作品を含めました。ポイントはまず涙。クサいとボヤきながらも瞳が潤んだ恥ずかしい記憶が残る「ある愛の詩」、素直に泣ける「ローマの休日」は月並みな表現ですが、まさに永遠のラブストーリーです。「ひまわり」や「冒険者たち」や「ドクトル・ジバゴ」は、音楽や風景といったムードの印象が映画を忘れがたくしている典型。非日常的にロマンチックで、夢を見させてくれます。歪んだ愛の形に憧れてはいませんが、純真な10代の頃に「ルトガー・ハウアー／危険な愛」を見た時の衝撃は大きく、映画観が変わった個人的な作品です。他にも変態愛が目立ちますが、良く言えば一途な愛ということで。それにしても、ハッピーエンドが一握りしかないって一体……。後半は順不同。迷ったあげく「シングルス」、「ブリジット・ジョーンズの日記」、「アパートメント」、「奇跡の海」、「ピアノ・レッスン」、「恋人たち」、「かくも長き不在」、「黒い瞳」などを外しました。

12「夏の嵐」(54)　12「突然炎のごとく　ジュールとジム」(61)　12「草原の輝き」(61)

石津文子　文筆業

アパートの鍵貸します
ベティ・ブルー　インテグラル〈完全版〉
ノッティングヒルの恋人
汚名
追憶 (73)
恋人たちの予感
ティファニーで朝食を
スプラッシュ
昼下りの情事
突然炎のごとく　ジュールとジム

ディテールにこだわってこそ恋愛映画。「アパート〜」の鏡をはじめ、この10本は何度観ても発見があります。ビリー・ワイルダーはコメディの名手であるだけでなく、ロマンスの名手。笑いの中に、艶があるのが最高です。年齢を重ねるごとに違った良さが味わえるのも、恋愛映画の醍醐味。「追憶」はその代表でしょう。若い頃はただ別れが悲しくて泣きましたが、大人になって観ると、愛していても別れを選ぶことを理解しつつ胸が痛む。他にも「フォー・ウェディング」「プリティ・イン・ピンク」「恋人までの距離〈ディスタンス〉」は、泣く泣く次点にしました。またジャック・レモン好きの私としては「幸せはパリで」の、中年のおとぎ話のせつなさも捨てがたいのですが、「アパート〜」のおかしみと悲しみと喜びを超えるものはないのでこちらに絞りました。それにしても「ノッティングヒル〜」の杏の蜂蜜漬けは食べてみたいな。

内海陽子　映画評論家

愛すれど心さびしく
砂漠の流れ者
ネイティブ・ハート
ゲット・ア・チャンス！
恋に落ちたら…
キャリントン
ヘヴン
帰らざる夜明け
草の上の月
輝きの海

青春と恋愛に縁のない映画はない。10本を選ぶために思い出を反芻していると膨大な数の映画が浮かび、その豊かさにめまいがする。「ローマの休日」や「風と共に去りぬ」といった人気作品ではなく、個人的な感動を抱えている映画を選んだ。若き日のソンドラ・ロックの「愛すれど心さびしく」とジェイソン・ロバーズの「砂漠の流れ者」は、20代の初めからずっと思い続けている2本。トム・ベレンジャーの「ネイティブ・ハート」、ポール・ニューマンの「ゲット・ア・チャンス！」、ロバート・デ・ニーロの「恋に落ちたら…」は、犯罪やアクションがらみの粋な映画たち。「キャリントン」と「ヘヴン」は死にいたる思いの純度の高さが忘れられない。「帰らざる夜明け」の未亡人シモーヌ・シニョレの死もこれに近い。ひいきの女優、レニー・ゼルウィガーの初期の佳作「草の上の月」とレイチェル・ワイズの「輝きの海」は、愛するとは孤独に耐えることだと凛とした表情で告げる。

襟川クロ　映画パーソナリティ

ある日どこかで
恋におちたシェイクスピア
ぼくの美しい人だから
恋愛小説家
初恋のきた道
ラブ・アクチュアリー
ローマの休日
さらば、わが愛／覇王別姫
プリティ・ウーマン
ショコラ

どんなジャンルの映画にもロマンスが入っているのは周知の事実。コテコテの恋愛ドラマも嬉しいがラブストーリーとプラス何かが合体した作品には昔から弱いです。年の差から身分違い、時を超えてとハンディがあればあるほど燃えさせてくれるから。「ある日どこかで」「ぼくの美しい〜」「レディホーク」「ゴースト　ニューヨークの幻」「フェノミナン」など、同レベルで愛してます。主演スターが「プリティ・ウーマン」「ローマの休日」のように美男美女カップルならなおよろし。昔は「恋しくて」に号泣し、「あなたが寝てる間に」「月の輝く夜に」を観てNYにハマったっけ。そうそう、頑固オヤジのバイブル（？）「恋愛小説家」もベストにいれておかないと。甘いセリフ、アタシもそうなりたい憧れに切なさ、とろけそうな音楽、そして少しの遊び心。「街の灯」や「ひまわり」、犬と主題歌が忘れられない「忘れられない人」など悲恋ものも大好きです。

大竹洋子　東京国際女性映画祭ディレクター

シェルブールの雨傘
ピクニック (36)
カミーラ
愛の嵐
八月のクリスマス
追憶 (73)
ハバナ
苺とチョコレート
白樺の林
ユー・ガット・メール

まず「シェルブールの雨傘」。なんと切なく美しいラストシーン、いちばん好きな映画です。次に、愛することで人生をはかなくしてしまったルノワールの「ピクニック」。パンパのロミオとジュリエ

12「冒険者たち」(67)

12「ベティ・ブルー　愛と激情の日々」(86)

12「初恋のきた道」(00)

ットと呼ばれるアルゼンチンの「カミーラ」。つづいて全編が愛の情念に覆われる「愛の嵐」。韓国映画のラブストーリーの始まり「八月のクリスマス」。ロバート・レッドフォードが本当にハンサムだった「追憶」。そのロバレがギャンブラーに扮してキューバ革命を助ける「ハバナ」。男女の愛も、同性愛も、国家への愛もみんな描いたアレアの「苺とチョコレート」。愛と死の不安に揺れるワイダの「白樺の林」。私の好きなラブストーリーは、生きることの切なさを共有するところにあるようです。そして例外的に初めから終わりまで幸せな気分に包まれる「ユー・ガット・メール」、これで10本です。「嵐が丘」(39)「狂熱の孤独」「カサブランカ」も入れたかったのですが。

大森さわこ　映画評論家

インティマシー／親密
チューズ・ミー
リービング・ラスベガス
クライング・ゲーム
アメリカン・ビューティー
ピアノ・レッスン
トーク・トゥ・ハー
アニー・ホール
存在の耐えられない軽さ
花様年華

ラブストーリーというジャンルになると、どうしても、自分の中の男と女のイメージに添った作品を優先してしまう。昔から、どこか都会を漂うような男と女の姿にひかれる。魅惑的な音楽と映像に彩られて、夜の官能的な時間にすべり落ちていくような、そんな男と女のイメージをとらえた映画が好きだ。「アメリカン・ビューティー」だけは、〝ラブストーリー〟とは呼べない気がするが、ここで描かれる夫婦の浮遊感には、すごいリアリティがあったので、あえて入れた。個人的には男女の関係性（＝コミュニケーション）の複雑さを描いた作品に興味がある。男と女はお互いに違うからこそ、ひかれ合い、すれ違ってもいく。そんなむずかしい時間を、重ね合うことで、愛は育っていくのだろう。愛を重ねることの素晴らしさを描いた映画としては、「アイリス」にも感動したが、ちょっと作品系譜が違うので、今回のテンからはずした。

おかむら良　映画評論家

過去を持つ愛情
黒いオルフェ
勝手にしやがれ
火の接吻
シーズ・ソー・ラヴリー
ギター弾きの恋
マイライフ・アズ・ア・ドッグ
ハロルドとモード　少年は虹を渡る
春にして君を想う
花様年華

どんな映画にも何かの形で愛が描かれている。どこからどこまでがラブストーリーで、どこからそうでないのか？　と途中から混乱してしまった。「黒いオルフェ」などミュージカルと言われたらそれまでだけど、わたしにとってはやっぱりラブストーリーとして存在していて、アントニオ・カルロス・ジョビンの音楽が忘れられない。名画座で見た「過去を持つ愛情」はポルトガルのファド歌手アマリア・ロドリゲスと出会った作品で、彼女のビデオまで持っている。さらに「少年は虹を渡る」と「ギター弾きの恋」も音楽が印象的に使われていて、愛と音楽は切っても切れない関係にあるのだ。こうして作品を並べてみると、子供の愛、青年の愛、大人の愛、シニアの愛と、愛の形は年令によってなんと変わっていくのだろうかと思う。

萩原順子　在米映画ジャーナリスト

恋人たち
眺めのいい部屋
アタラント号
ピアノ・レッスン
突然炎のごとく　ジュールとジム
男と女
パリ、テキサス
ひまわり
モスクワは涙を信じない
ローマの休日

〝恋愛映画のベスト・テンを選んでください〟と頼まれて、すぐに頭に浮かんだのは、ルイ・マル監督の「恋人たち」と「眺めのいい部屋」。恋愛映画として有名な作品ではないけれど、恋のきまぐれさと恋する時の高揚した気持ちがとても良く出ている作品だと思う。残りの作品は鑑賞ノートをひっくり返しながら選んでみたのですが、我ながら気づいたのは、〝アイラブユー！〟と大恋愛する作品より、〝ジュテーム……〟と静かに愛を囁きなにげなく恋に落ちる作品の方が好きみたいだということ。それにしても、選んだ半分が、両親の世代が懐かしく思うような〝往年の名画〟になってしまった。でも名画は年をとらないから、これで良いのです。昔観て、胸を熱くした記憶のある作品も多いのだけれど、それでも10代の初々しい少女が主人公の作品より、30代のセクシーな年増女性（死語？）がヒロインになっている作品が目立つのは、私って昔からオバサン・マインドだったってこと……??

24「恋人たちの予感」(89)

24「アニー・ホール」(77)

12「ライアンの娘」(70)

折田千鶴子 映画ライター

男と女
哀愁
カサブランカ
めぐり逢い（57）
ローマの休日
夕なぎ
髪結いの亭主
恋する惑星
猟奇的な彼女
ベティ・ブルー 愛と激情の日々

何度観ても胸がジンジン痛くなる。それが味わいたくて、また観てしまう映画を選出。〝大人の恋〟っていうものの複雑さに憧れた「男と女」。アヌーク・エーメのシットリ感は、それだけでもう陶酔もの。言葉少なな2人の寄り添い、離れ、そして再会に恋の真髄を見た感じ。マイ号泣ベスト1、2の「哀愁」と「めぐり逢い」。相手を想って身を引く、という自分には到底できない健気さに、涙涸れるほど陶酔。一方、フィルムノワール系の男のヤセ我慢が大好き。「カサブランカ」の、ボギーのキザさと男の美学を貫くためのヤセ我慢に痺れる。「ローマの休日」は少女時代、映画を観始めるきっかけとなった1本でもあり、その初恋っぽい爽やかさは、初心忘るべからず的マイ・バイブル。ほぼ大人になってから観た「夕なぎ」以降、「ベティ・ブルー」や「髪結いの亭主」など、まさにファム・ファタル的なヒロインに翻弄される男を描いた作品に妙に魅かれる傾向があるのかも。

垣井道弘 映画評論家

男と女
勝手にしやがれ
道
愛の嵐
かくも長き不在
マイライフ・アズ・ア・ドッグ
仕立て屋の恋
花様年華
カーラの結婚宣言
チョコレート

誰でも知っている名作「ローマの休日」「風と共に去りぬ」「卒業」「タイタニック」などを書き出してみたのだが、どうもピンとこない感じがした。ほとんどの映画に恋愛が絡むのであれもこれもと収拾がつかなくなり、思い入れの深い作品と並べ替えることにした。ラブストーリーというと、男優よりも女優の顔を思い出すのは僕が男性だからなのか。学生のころ「男と女」のアヌーク・エーメを見て過去を断ち切れないでいる大人の女性に憧れたことがある。「道」のジュリエッタ・マシーナを見て、世の中にはこんな無垢な女性がいるのだろうかと思った。「愛の嵐」のシャーロット・ランプリングを見て、異様に頽廃的な女性の魅力にゾクゾクッとした。最近では「花様年華」のマギー・チャンのチャイナドレスが悩ましかったし「チョコレート」のハリー・ベリーも忘れられない。やっぱり女優が魅力的でなければつまらないし、不健全なニオイのする作品に心を引かれる。

賀来タクト 文筆家

麗しのサブリナ
天国から来たチャンピオン
みじかくも美しく燃え
テス
街の灯
シーズ・ソー・ラヴリー
恋に落ちたら…
M・バタフライ
グリーン・カード
ドクトル・ジバゴ

「麗しのサブリナ」贔屓のビリー・ワイルダーからまずこの一本。「カサブランカ」よりこっちのボギーに憧れた。「天国から来たチャンピオン」基本は喜劇だが、ベイティとクリスティのロマンスが心に焼き付く。同じクリスティならジョセフ・ロージーの「恋」もかなりいい。「みじかくも美しく燃え」どうしようもなく切ない道行。「テス」ポランスキーが亡き妻に捧げた点でも愛に満ちた古典的悲劇。同じトマス・ハーディ原作ならマイケル・ウィンターボトムの「日蔭のふたり」も悲痛でたまらない。「街の灯」古典といえば、最後の"You"という一語が効くチャップリン作品。「シーズ・ソー・ラヴリー」惚れてるんだから仕方ないでしょと、家庭を捨てて昔の男のもとへと飛び出していくロビン・ライト・ペンが鮮やか。「恋に落ちたら…」惚れた女のために体を張るデ・ニーロに燃えた。「M・バタフライ」後背位性交の果ての悲劇と喜劇。前を確認しなかったのか？「グリーン・カード」ジェラール・ドパルデューのヴォーカルをロマンティックに活用したウィアー作品。「ドクトル・ジバゴ」大名作。同じリーンなら「ライアンの娘」もいい。

桂千穂 脚本家

レベッカ
忘れじの面影
ローマの休日
情婦マノン
天井棧敷の人々
肉体の悪魔（47）
恋人たち
アパートの鍵貸します
イングリッシュ・ペイシェント
魚と寝る女

24「天井桟敷の人々」(45)

24「トーク・トゥ・ハー」(02)

24「ひまわり」(70)

リストを作ってみて驚いた。ラブロマンスがいちばん大量に輸入されるアメリカ映画から、私はたった4本しか選んでいない。また90年代以降の作品は「イングリッシュ・ペイシェント」と「魚と寝る女」の2本だけで、あとは40年、50年代に集中している。私が年を取って、みずみずしい恋愛描写に感じなくなったせいもあるのだろうが、練達のラブ・ロマンをスクリーンに織りなせるスタッフや、現れただけで吐息をつかせるような美女、美男が、世界の映画界から消えてしまったからではないかと、邪推したくなってくる。もうひとつ、私の好みからか主役二人がハッピーに結ばれる作品がほとんど無く、恋する女――または男性――の死や別離におわるものが大部分を占めている。なかで「情婦マノン」には身体が慄えるほど感動し、私の見たすべての恋愛映画のうちでベスト・ワンと断言してはばからない。未見の方はビデオも出ていることとだし、ご覧になることをお奨めする。

金城一紀 物書き

恋のためらい　フランキーとジョニー
トーク・トゥ・ハー
チョコレート
トゥルー・ロマンス
初恋のきた道
イングリッシュ・ペイシェント
シェルブールの雨傘
男と女
キルトに綴る愛
アパートの鍵貸します

いくら作品としての完成度が高くても、いくら素晴らしいストーリーでも、好みのタイプの女優が出ていない作品はベスト・テンには入れませんでした。そんなわけで、〈好きな女優ベスト・テン〉も兼ねています。歳を取るごとに好みは変わっていくもの、とはよく言われることですが、十年後にこのベスト・テンを見返して、自分の好みが変わったかどうか確かめたいと思います。

河原晶子 映画評論家

愛に関する短いフィルム
男と女
奇跡の海
シェルタリング・スカイ
ベティ・ブルー　愛と激情の日々
夏の嵐
ピアノ・レッスン
インティマシー／親密
トーク・トゥ・ハー
恋人たち

ラブ・ストーリー、というと、まずハリウッド流の甘くセンチメンタルな作品を思う。そうではなくて、あえて恋愛映画と呼びたい、愛の重さをみつめる作品を選んだ。恋の不可解な感情や性の深淵にまで踏み込んでゆく作品群。けっして予定調和のハッピーエンドや紅涙を誘う悲劇で終わることのない作品群。全身に揺さぶりをかけ、別の世界を発見させてくれる作品群。

となると、やっぱりヨーロッパ映画が中心だ。たとえ現実にはめったに訪れない恋の歓びや苦悩を描いても、そこには必ず恋の本質が語られている。キェシロフスキにはもっともっとそんな作品を作ってほしかった。ベルトルッチには往年の濃密さをとりもどしてほしい。今、そうした恋愛の側面に情熱とリアルさをもって迫れるのは、やはりジェーン・カンピオンにペドロ・アルモドバル、そしてパトリス・シェローだろう。

川本三郎 評論家

シェーン
荒野の決闘
第三の男
激しい季節
かくも長き不在
おもいでの夏
マーティ
太陽の年
仕立て屋の恋
八月のクリスマス

「シェーン」は西部劇であると同時にアラン・ラッドと人妻ジーン・アーサーの秘められた恋物語として深く心に残る。キスひとつせず別れてゆく切なさ。同様に「荒野の決闘」もまた無骨な西部の男の純情が微笑しい。「第三の男」のジョセフ・コットンの未練は他人事ではない。

「激しい季節」のエレオーラ・ロッシ・ドラゴの妖艶。「おもいでの夏」のジェニファー・オニールの清純。年下の若者や少年によってあおぎ見られる年上の人妻はなんと美しかったことか。

戦争の傷、苦しみのなかにさえ愛を求めようとする「かくも長き不在」とポーランド映画「太陽の年」。「ひまわり」もいいがこの二本は忘れ難い。

およそ美男美女にほど遠い二人のういういしい恋を描いた「マーティ」、恋はたったひとりでするものと語りかけた「仕立て屋の恋」、そして涙なしには見られなかった「八月のクリスマス」。ゴージャスな恋より、片隅の恋に惹かれる。

河原畑寧 映画評論家

哀愁
悲恋
わが青春のマリアンヌ
逢びき(45)
愛人ジュリエット

24「猟奇的な彼女」(01)

24「ラヴソング」(96)

24「道」(54)

アパートの鍵貸します
かくも長き不在
ローマの休日
恋のエチュード
ジェニーの肖像

まったく自分の私生活とは関係ない、甘くて哀しいロマンスを選んだので、実に簡単、短時間で決まりました。青春のファンタジーです。

きさらぎ尚 映画評論家

ローマの休日
旅情
草原の輝き
男と女
卒業
小さな恋のメロディ
ある愛の詩
ロミオとジュリエット（68）
アニー・ホール
恋人たちの予感

映画を語る時、恋愛はいつも大テーマだ。なかでも「ローマの休日」は別格。オードリー・ヘップバーンの本物の宝物を思わせる輝きとグレゴリー・ペックの思慮深い振舞い。お伽話と知りつつ何度も魅入った。反対に先日亡くなったキャサリン・ヘップバーンが「旅情」で見せた生身の女の恋する心情は時代を超えて共感できる。ワーズワースの詩〝あの草原の輝きは決して戻らない。華やぎも。嘆くまい。後に残った強さを見出そう〟と、青春の憂鬱＋人生の哀れと、そしてウォーレン・ベイティとナタリー・ウッドの初々しさが見事に調和した「草原の輝き」。多感な時期に見て大人の切実な恋に衝撃を受けた「男と女」。教会に闖入して花嫁を奪った「卒業」。子供同士の可愛い恋は「小さな恋のメロディ」。恋を燃え上がらせた難病に家柄、別れを決意させた生き方の違いも胸に響く。さて現在は空前の純愛の時代。この現象が今の自分にロマンチックな夢を抱けない大人の諦めが過去への郷愁に向かってのことだとしたら複雑だ。

北川れい子 映画評論家

或る夜の出来事
嘆きのテレーズ
夏の嵐
愛の嵐
年上の女（59）
ライアンの娘
ラヴソング
イングリッシュ・ペイシェント
ブエノスアイレス
魚と寝る女

都会的で洗練されたキャプラ作品は別にして、恋愛には孤独と残酷さが良く似合う。よく、究極の愛は相手が死ぬことだ、というけれども、昨今流行の難病とか事故死ではなく、その人を愛したことで世界の全てを閉め出してしまい、結果として死を招くような恋。悲劇で終わっても奇妙な達成感がある。で、わがリストはそんな作品が中心になったのだが、痛ましさが伴う多くのラブストーリーが大人の男女の愛というのもいいなと思う。「イングリッシュ・ペイシェント」の人妻との恋など、国を裏切り、友を捨て、砂漠の中に迷い込む。ある意味、ラブストーリーはどれほど壮大なドラマよりも、人生や運命、そして人間の真実に迫るものがあるのかも。「ブエノスアイレス」と「魚と寝る女」は、主人公たちの関係が異色で、監督の世界観も一筋縄ではいかないが、狂おしいほどの孤独と残酷さは愛のなせる技。それともう一つ、秀れた恋愛映画はキャスティングが100％成功している。

北小路隆志 評論家

忘れじの面影
恋のエチュード
恋恋風塵
白夜（57）
恋
散り行く花
サンライズ
街の灯
汚名
タイタニック

映画史を引っくり返して作品を洗い出したり、特別に調べ直すようなことはせず、いつものように(?)、ほぼ衝動的というか思いつきで……。我ながら何とも脈略のないラインアップですが、恋なんて衝動的なものだし、調査してどうにかなるものじゃなく、ましてや脈略もクソもあったものじゃありません。それでも、ラブストーリーにおける僕の急所が、二人の男女間の克服しがたい距離――むろん、この〝距離〟が恋愛を可能にします――を雄弁かつ効果的に視覚化するツールとしての〝手紙〟であると明らかになった気がするし、もうひとつが――それと表裏一体のものとして――いきなり何の前触れもなく男の前から立ち去る女、何というか、相手の〝他者性〟にこちらが打ちのめされるシチュエーションであると思われます。なぜ、この二つに僕が弱いかといえば……ここから先は精神分析の領域ですし、誰にとっても興味の対象外でしょうから、この辺りでやめにしておきます。

金原由佳 映画ライター

愛情萬歳

「おもいでの夏」(71)

「風と共に去りぬ」(39)

「勝手にしやがれ」(59)

奇跡の海
欲望の翼
愛のコリーダ
クライング・ゲーム
アメリ
猟奇的な彼女
天井桟敷の人々
チェイシング・エイミー
リービング・ラスベガス

アメリカ映画協会が百周年を機に選んだ恋愛映画ベスト100の上位に入った「カサブランカ」「風と共に去りぬ」「ローマの休日」はもちろん素敵だと思う。しかし、お姫様と新聞記者が恋に陥ることがあり得る、という恋愛の無邪気なまでの可能性を純粋に楽しむことができない。むしろこの10年、愛する人を見つけることの困難さを描いた作品がよりリアルに胸に引っかかってくる。ツァイ・ミンリャンは人と愛し合うという行為の悲しいまでの難しさを現代人の孤独と結びつけて描く〝愛の孤高の作家〟。彼も含め、ラース・フォン・トリアーもウォン・カーウァイも恋愛の相互の思いを描くよりも、むしろ妄想の域に近い、一方的な想いに取りつかれた自己愛の強い人物像を強烈に描く作家であり、こうなると彼らの作品が恋愛映画かどうか、その定義すら揺らぐ。また、「猟奇的な彼女」「チェイシング・エイミー」のように性差に鋭く追求する作品でなければ、今の時代の恋愛映画とは言えないのでないだろうか。

黒田邦雄 映画評論家

夏の嵐
終着駅
モロッコ
哀愁
双頭の鷲
陽のあたる場所
逢びき（45）
悲恋
過去を持つ愛情
うたかたの恋（35）

ラブ・ストーリーというより、恋愛映画と呼びたい作品を選んだ。つまり、仰々しくも古典の香りがする恋愛もの、である。当然、結末は悲劇でなければならない。この十本の恋愛映画は、その悲劇性ゆえに思い出すたび胸が痛くなる。若い時はもちろん、今もそうである。感動した恋愛映画は不滅なのだ。「夏の嵐」のアリダ・ヴァリ、「終着駅」のモンゴメリー・クリフトの孤独と哀しみは、今も私の中に息づいている。人を好きになることは孤独地獄に耐えることなのだ、とこれらの映画に教えてもらった。

恋愛映画は少々泥臭いほど大仰である方がいい。ヒロインが身も世もなく嘆き悲しむ姿こそ、恋愛映画の醍醐味である。しかし、彼女たちは、か弱いから嘆き悲しむのではなく、強いから泣き崩れるのだ。記憶に残る恋愛映画のヒロインは、何より強さを感じさせる女優によって演じられている。その凛々しさが悲劇に見舞われる時、傑作が生れる。

小藤田千栄子 映画評論家

モロッコ
うたかたの恋（35）
望郷
カサブランカ
風と共に去りぬ
逢びき（45）
天井桟敷の人々
陽のあたる場所
ローマの休日
シェルブールの雨傘

ドラマって〝ラブ・ストーリー〟のことだと思っておりますので、オールタイムで10本選ぶのは、とてもむずかしいことです。で、勝手にひとつの基準を作りました。その出会いが、つまり恋に落ちたことが、その人たちの人生を変えてしまったということです。これをポイントにしました。昔の作品が多くなってしまったのは、こちらの年齢ゆえでしょう。

今野雄二 映画評論家

赤い靴
めまい
死んでもいい
恋する女たち
真夜中のカーボーイ
アニー・ホール
シェルタリング・スカイ
菊豆〈チュイトウ〉
ゴッド・アンド・モンスター
ロスト・イン・トランスレーション

ラヴ・ストーリーが映画のジャンルとしてもっともありふれて、もっともつまらないという印象はとりあえずフランス映画を観るだけで充分に納得がいくであろう。それはともかく、製作、あるいは公開年順に列挙したリストを眺めて、我ながら驚いたのは70年代のウディ・アレン作品を最後に、リアル・タイムのラヴ・ストーリーがそれ以降はまったく衰退してしまったことである。

ジャンルとしてのラヴ・ストーリーとは基本的には文学的であり、スリラーやミステリー、アクションに較べればあまり映画的とはいえない。アレン以降、80～90年代の主流を占めたのはCGIを駆使したファンタジーであることに思い当たるまでもなく、純然たるラヴ・ストーリーはもはや、前世紀の遺物にも等しいことを実感させ

36「ピアノ・レッスン」(93)

36「終着駅」(53)

36「髪結いの亭主」(90)

られていた矢先、ソフィア・コッポラの傑作が出現した。
アレンから四半世紀を経て、新世紀の最初にして希有なるラヴ・ストーリーが生まれた。

佐藤友紀　フリーランス・ライター

バタフライはフリー
傷ついた男
草原の輝き
夏の嵐
バタフライ・キス
死んでもいい
シベールの日曜日
情事
愛すれど心さびしく
ジェラシー

思いっきり正直に告白するが、実人生の恋愛模様が平坦な分、子供の頃から激しい恋に憧れていたような気がする。それも、ハッピーエンドよりも、やるせない思いが残るラブストーリー。パトリス・シェローの「傷ついた男」はファスビンダーの「自由の代償」にもつながるし、「バタフライ・キス」のサスキア・リーヴスのラストの解放感は、「ベティ・ブルー」のジャン＝ユーグ・アングラードのそれと同じだな、と。好きな映画の連鎖もうれしくて。「バタフライはフリー」に関してはなんであんなにはまったのか自分でもわからないが、東京中の名画座を追っかけ回したのみならず、ある芝居を見た時のアンケートに「舞台でもやって！」と記入、それが実現したということもあった。メリナ・メルクーリ、モニカ・ヴィッティのようなうんと年上の女の恋に憧れ、パトリシア・ゴッジや若き日のソンドラ・ロックの恋に胸しめつけられ。告白ついでに、「草原の輝き」のウィリアム・インジは、私の卒論テーマです！

品田雄吉　映画評論家

哀愁
アニー・ホール
隣の女
柔らかい肌
シェルブールの雨傘
愛の嵐
ライアンの娘
恋人たちの予感
アパートの鍵貸します
美女と野獣（46）

挙げたい映画がたくさん頭に浮かび、困ったし、混乱した。もう一度選べといわれたら、別な10本が出てきそうだ。拙速のベスト・テンである。

新藤純子　映画評論家

風と共に去りぬ
心の旅路
旅情
草原の輝き
ロミオとジュリエット（68）
シャーロック・ホームズの冒険
恋
隣の女
奇跡の海
オアシス

ラブストーリー？　はてさて困った。ラブストーリーの範囲がよくわからない。どんなジャンルにもラブストーリーはあるのだから。でも、ジャンルとしてのラブストーリーなら、1に恋愛、2に恋愛、3、4がなくて5に恋愛、ほかの要素が入る余地がないくらい、恋愛メインの映画にちがいない。
というわけで選んでみた。誰もが認める定番もあるが、「哀愁」よりも「心の旅路」、「突然炎のごとく」よりも「隣の女」、「昼下りの情事」よりも「シャーロック・ホームズの冒険」を選んだのは私の趣味（「ホームズの冒険」の、白いパラソルがモールス信号を送る別れのシーンはラブストーリーならではの名場面だと思う）。最近の映画からは「奇跡の海」と「オアシス」。どちらも神様だけが知っている自己犠牲的な愛だが、「ブルース・オールマイティ」にもこのパターンがあったことを付け加えておこう。

杉原賢彦　映画評論、慶応大学教養センター所員

ピクニック（36）
忘れじの面影
恋恋風塵
シェルブールの雨傘
鶴は翔んでゆく（戦争と貞操）
悲しみは空の彼方に
ラ・パロマ
ボーイ・ミーツ・ガール
夜の人々（49）
この空は君のもの

AFIの映画百年シリーズでもあるまいが、この候補範疇の広さはどうしたもの。文学なら、「日々の泡（うたかたの日々）」「スノーグース（白雁）」「死都ブリュージュ」「天国での婚姻」（翻訳されていないが）……と、苦労せずに挙げられるのだが……（なんといっても、一生に読める本は、一生に見られる映画の数より少ないのだから）。おそらくかなりの候補作をこぼして、思いつくままに挙げた作品のうちで、ルノワールの「ピクニック」だけは別格におきたい（「ゲームの規則」すらこぼしたのだから）。ルビッチも入れたいと思いながら、コメディ的要素のあるものは、

58「クライング・ゲーム」(92)

58「アデルの恋の物語」(75)

36「ぼくの美しい人だから」(90)

結果として入れなかった。いや、ゴダールが言うように映画はすべてラヴ・ストーリーだというなら、トリュフォーの「映画に愛をこめて アメリカの夜」を次点にしよう。そして、まだ見ぬ映画たちに、限りのない愛とみじめさをこめて、つたない選考をおくことにしよう……。

高沢瑛一 映画評論家

カサブランカ
白夜(57)
めぐり逢い(57)
愛人ジュリエット
ローマの休日
男と女
ヘッドライト
シェルブールの雨傘
初恋のきた道
ラヴソング

いいラブストーリーには、必ず名シーンがある。「カサブランカ」は名シーン、名セリフだらけ。「白夜」での雪の中、娘が恋人を待つシーン。「愛人ジュリエット」でジェラール・フィリップが忘却の彼方に踏みこむラスト。「シェルブールの雨傘」で子連れのふたりが別れる雪のラストシーン。どれもこれもストイックな愛ゆえの名シーン。それに、美しいラブストーリーには、必ず、〝道〟がある。「初恋のきた道」でチャン・ツーイーが恋人を待ち続ける道。「ヘッドライト」で男と女を乗せてトラックが走る道。「ローマの休日」のローマ市街の道。愛は常に道をさまよい、道で相手を待ち続けるというわけか。それにしても、欧米では50～60年代に愛の名作が多かった。そして、この20年間は、中国語圏その他のアジア映画に傑作が多い。それだけ世界の恋人たちは、愛のカセから解き放たれたというわけか。せめて映像で、胸のつまるような純粋な愛を味わいたいものである。

田中千世子 映画評論家

愛の嵐
突然炎のごとく ジュールとジム
男と女
ハネムーン・キラーズ
初恋のきた道
花様年華
めぐり逢い(57)
昼下りの情事
ブーベの恋人
緑の光線

大島渚の「愛のコリーダ」はフランス映画だから入れてもよかった。「愛の嵐」と「突然炎のごとく」はラストが愛の道行きだが、「ハネムーン・キラーズ」は殺人の道行きが愛の証。愛と死とセックス以外の叙情的な恋愛映画として「初恋のきた道」。ロマンティックな雰囲気や香りは「花様年華」や「男と女」。人情的には「めぐり逢い」と「ブーベの恋人」。オードリー・ヘップバーン主演映画のなかから好きなのを選んで「昼下りの情事」にしてみた。「緑の光線」はこのなかで一番ラブストーリーらしくないかもしれないが、恋と幸福の一致が素敵だと思う。

寺本直未 映画ライター

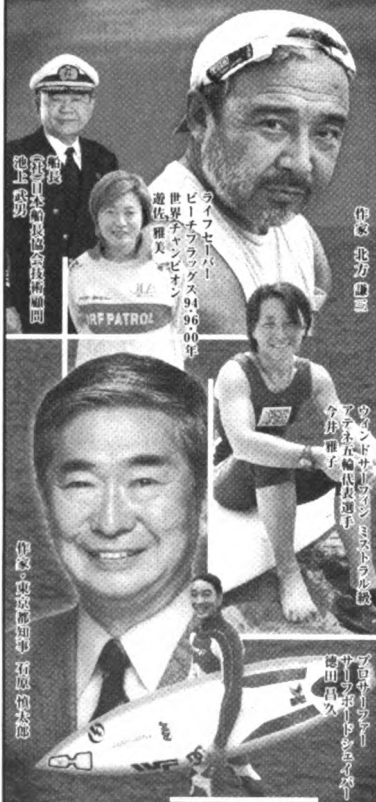
大いなる遺産(97)
フレンズ ポールとミッシェル
小さな恋のメロディ
リアリティ・バイツ
世界の涯てに
めぐり逢えたら
昼下りの情事
ひまわり
隣の女
ナインハーフ

「フレンズ」「小さな恋のメロディ」「ひまわり」は思春期に観て、くり返し映画館に通った作品。「大いなる遺産」のイーサン・ホーク、「世界の涯てに」の金城武自身のファンであることとキャラクターが好きなので、この二作品をベスト・テンの杭ともいえる箇所に挙げてみました。「隣の女」は悲恋ものが好きではない自分なのだが、何度観ても衝撃を受けてしまう傑作だと思う。「ナインハーフ」はキム・ベイシンガーが好きで、80年代半ばの良き思い出とともに、浮かんでしまう異色の恋愛映画なのだ。

中西愛子 フリー

アメリ
いつも2人で
奇跡の海
草の上の月
シャンドライの恋
トーク・トゥ・ハー
隣の女
とまどい
パッション・ダモーレ
フォロー・ミー

10代の終わりから30代半ばの今に至るまでの間にめぐりあい、偏愛し続けている我が心のラブストーリー10本。特にこのジャンルは、オーソドックスな名作よりも、むしろ小粒な隠れた傑作タイプを個人的にはついつい大切にしてしまいます。〝ロマンティック〟という心地よいレベルを超えて、ちょっとばかり狂気じみた、あるいはどこかイビツな恋愛を描いたものに惹かれます。「奇跡の海」「草の上の月」「トーク・トゥ・ハー」「隣の女」「パッション・ダモーレ」

は、激しく切なく、死が結末に絡むラブストーリー。現実では背負いきれない究極の愛を体験できるのは、映画ならではの楽しみ！「いつも2人で」「フォロー・ミー」に結婚の理想と現実を考えさせられ、「アメリ」「シャンドライの恋」のみずみずしい官能にどれだけ淀んだ気持ちが洗われたことか。「とまどい」は年を重ね、観る度に新しい発見がある1本です。

中野翠 コラムニスト

極楽特急
レディ・イヴ
スミス夫妻
麗しのサブリナ
シュア・シング
道
ライアンの娘
流されて…
真夜中の虹
フリークスも人間も

喜劇仕立てのラブストーリーが好きなので、「極楽特急」から「シュア・シング」までは、その線で選びました。

「道」から「流されて…」は若い頃に見て、男女の心の不思議に触れたようで感動したもの。今見たらどうかわかりませんが。

「真夜中の虹」は大好きなアキ・カウリスマキ監督作品の中からとにかく一本と思って。最初に見た映画がこの映画でした。カウリスマキの映画はどれも美男美女が出て来ないけれど、「かわいそうとは惚れたってことよ」的な愛が描かれている感じがして、ホロリとしてしまいます。

「フリークスも人間も」は奇妙なエロティシズムとリリシズムあふれる傑作。登場人物のほとんど全員が性愛につき動かされて、堕ちて行くというか崩れて行くところが面白い。

永野寿彦 イラストライター

ファントム・オブ・パラダイス
アパートの鍵貸します
猟奇的な彼女
すてきな片想い
ラブINニューヨーク
ノッティングヒルの恋人
ウェディング・シンガー
愛しのロクサーヌ
ある日どこかで
リトル・ロマンス

ラブストーリーを10本選んでみたら、なんだかとってもコメディ色が濃厚になってしまった。どうやら僕は基本的にコメディアン系の俳優が演じる恋愛に不器用なキャラクターに共感したり、カップルの前に立ちはだかる困難がいかにも映画的なものだったり、カップルそのものよりも彼らのために仲間たちが頑張ってしまうようなストーリーにハマる率が高いようだ。候補としてリストアップしていた作品も「マネー・ピット」や「ストリート・オブ・ファイヤー」と、とてもラブストーリーとは思えぬものばかりだったし。できるだけラブストーリーという趣旨に合うものを、と選んだつもりだが、どうしても外せなかったのが「ファントム・オブ・パラダイス」だ。人によってはこれはラブストーリーじゃないと突っ込みたくなるだろうが、僕にとっては紛れもない純愛ドラマなのだ。愛する女性のために命を張って奮闘暴走する主人公ウィンスローの最後の姿は、涙無くしては見られない。

58「さらば、わが愛／覇王別姫」(93)

58「タイタニック」(97)

58「プリティ・ウーマン」(90)

中山治美　映画ライター

忘れられない人
ラヴソング
アウト・オブ・サイト
ローマの休日
妹の恋人
恋におちて
ノッティングヒルの恋人
ムーラン・ルージュ
愛と哀しみの果て
オアシス

今回、ベスト・テンを選出して気が付いた。どうも自分は〝報われぬ恋〟に心惹かれるようだと。「忘れられない人」のクリスチャン・スレーターは病で死に、「ラヴソング」に至っては10年にわたるすれ違い。「アウト・オブ・サイト」は警察官と犯罪者、「ローマの休日」は王女と記者、「ムーラン・ルージュ」は売れっ子ダンサーと貧乏作家と、いずれも身分違いの恋で成就せず、「報われないのは自分だけじゃないのね」と妙な共感を覚えるというのもあるが、やはりハッピーエンドよりも余韻が深くて後を引き、ついつい何度も見てしまう。中でも特に印象深いのが「忘れられない人」と「妹の恋人」。こんなに愛らしくて、人を優しい気持ちにさせてくれる作品が当時、同時上映で公開。しかも大してヒットしなかった。「こんな扱いでいいのか！」という怒りはいまだ冷めず。おかげで良くも悪くも〝忘れられない〟作品となった。

野島孝一　映画ジャーナリスト

ローマの休日
旅情
慕情
終着駅
昼下りの情事
めぐり逢い(57)
アパートの鍵貸します
逢びき(45)
ラストタンゴ・イン・パリ
タイタニック

ラブストーリーというジャンルは、どこまで入れるべきなのか、ちょっと迷う。例えばフェリーニの「道」はラブストーリーに違いないのだが、男女の愛よりももっと人間性の問題に迫っている気がするので、ここには入れにくい。「カサブランカ」「卒業」「ヘッドライト」なども当然入れておかしくない。ラブストーリーを男女の恋愛と限定したくなる私の度量が小さいのか。

野村正昭　映画評論家

ぼくの美しい人だから
隣の女
リトル・ロマンス
初恋のきた道
早春
エイジ・オブ・イノセンス　汚れなき情事
マイ・ラブ
純愛日記
ラブＮニューヨーク
ロシュフォールの恋人たち

完成度は別にして「ぼくの美しい人だから」にはラブストーリーに求める要素の全てが、ぎっしりと詰まっていて、僕にとっては究極の恋愛映画です。以下も大好きな作品ばかり。「夏の嵐」「ブーベの恋人」「卒業」「おもいでの夏」「フォロー・ミー」「追憶」「ジョンとメリー」「さよならコロンバス」「ラストタンゴ・イン・パリ」「夜霧の恋人たち」「個人教授」「アデルの恋の物語」「悪魔のような恋人」なども様々な意味で捨て難く、迷ったのですが、こうしてみると、若い頃に見た恋愛映画に、本当にいろいろなことを刷り込まれて、現在の自分が形成されたんだなあと複雑な思いがします。最近は胸が締めつけられるようなラブストーリーが少なくなったような気がするのは、世間擦れした自分のせいか、はたまた映画のせいなのか、たぶん前者なのでしょうが、そうした点に気を遣って、極力最近の映画をテンに選ぶようにしましたが、やはりそうもいきませんでした。

萩尾瞳　映画評論家

風と共に去りぬ
ある日どこかで
旅情
恋におちて
スプラッシュ
月の輝く夜に
ローマの休日
カサブランカ
カイロの紫のバラ
街角(桃色の店)

なんたって「風と共に去りぬ」。ヴィヴィアン・リーとクラーク・ゲーブルのまぶしさ、ドラマのスケール感はとびきりだ。「ローマの休日」は、オードリーの美しさと切ないラストが忘れ難い。キャサリン・ヘップバーンの「旅情」は年を重ねて味わい深くなる名作。「恋におちて」も、挿入歌「アズ・タイム・ゴーズ・バイ」が印象的な名作「カサブランカ」も、やはり大人の味わいだ。「カイロの紫のバラ」は、映画への愛もあふれるラブ・ファンタジー。ファンタジーはもう2本。愛らしい「スプラッシュ」と、エレガントな「ある日どこかで」。どちらも切ない。一方、都会的なロマ・コメ「月の輝く夜に」のラストは幸福感いっぱい。と、9本ま

114「愛と哀しみの果て」(85)

88「モロッコ」(30)

88「街の灯」(31)

では即決したけれど、10本目は「恋人たちの予感」か「恋のためらい」か、はたまたと悩んだ。で、やっぱりルビッチの小粋なラブ・コメを入れたくて「街角」に。リメイク版「ユー・ガット・メール」もよかったけれども。

双葉十三郎 映画評論家

さらば青春
巴里の女性
邂逅
哀愁
逢びき(45)
ローマの休日
ロミオとジュリエット(54)
恋人たち
突然炎のごとく ジュールとジム
ある愛の詩

年代順です。一監督一作品として択びました。すでにあちらこちらに選んでいる作品ばかりなので、重複をおそれ、あらためて説明しないでおきます。

増田統 映画ジャーナリスト

いつも2人で
恋のエチュード
フォロー・ミー
ぼくの小さな恋人たち
こわれゆく女
ディーバ
チューズ・ミー
髪結いの亭主
欲望の翼
ラヴソング

思い浮かぶまま1監督1作品で絞り込むうちに、古典的名画がすり落ち、さらに生年以前の、いわゆる〝後追い作〟を惜しみつつ切り捨てた。こうして、個人的思い入れ作ばかりが残り、「何という青臭さ！」と呟くも、「いや、これぞ私の〈ラブストーリー〉！」と開き直る。「ぼくの小さな恋人たち」の草いきれ満つ茫漠たる田舎道、「ディーバ」の青い夜明けの庭園散歩、「ラヴソング」の喧騒のNYでのすれ違い……今、なお当時の情感が鮮明に甦る。そして、かつて多くの時を過ごした名画座の暗闇への〝愛の記念〟に。

松島利行 映画評論家

陽のあたる場所
終着駅
肉体の悪魔(47)
ローマの休日
ヘッドライト
旅情
道
恋人たち
男と女
卒業

「明日では遅すぎる」「わが青春のマリアンヌ」「巴里のアメリカ人」などに始まり、たくさんありすぎる。帝都(日活)名画座で見たような「望郷」「カサブランカ」などは加えなかった。「ロミオとジュリエット」なども素敵だが、一九世紀以前の古典的恋愛小説の映画化作品も避けた。ジョセフ・コットンとジョーン・フォンティーンの「旅愁」の「セプテンバー・ソング」をはじめ、「慕情」「過去を持つ愛情」などの音楽も、その悲しい愛の物語とともに脳裏を去らない。記憶の中で主題歌と不可分の作品をやや優先した。ヴァディムの「素直な悪女」、アントニオーニの「さすらい」、ベルトルッチの「ラストタンゴ・イン・パリ」などを本当は選びたかった気もするが、ジャンル分けがむずかしい。ヴァージニア・メイヨとジョエル・マクリーの「死の谷」が西部劇的で選びにくいように「死刑台のエレベーター」も選びにくい。甘い青春の思い出に任せた感じである。

的田也寸志 フリー

永遠の愛に生きて
ふたりだけの微笑
リトル・ロマンス
ふたりでスローダンスをテス
アイス・キャッスル
ラスト・コンサート
ひまわり
ジェーン・エア
ライアンの娘

生来ガサツな男だし、ラブストーリーは……などと思いつつ、振り返ると結構タイトルが挙がってきたのには、我ながら驚き。ついつい懐かしくなったので、今回は「永遠の愛に生きて」を別格に、10代の多感な時期に観た作品に絞り、あえて古典は外しました。「ふたりだけの微笑」「ふたりでスローダンスを」「アイス・キャッスル」は地味な小品ですが、自分にとってはかけがえのない名作です。その他「小さな恋のメロディ」(71)「フォロー・ミー」(72)「アデルの恋の物語」(75)「グッバイガール」(77)「さよならの微笑」(76)「小さな初恋」(78)「夢追い」(79)「コンペティション」(80)「フランス軍中尉の女」(81)「恋におちて」(84)などが当時のお気に入り。日本人監督の「エーゲ海に捧ぐ」(79)「エデンの園」(80)も、音楽の素晴らしさゆえに割と好意的です。また最近、戦場版「青い珊瑚礁」たるジョン・ヒューストン作品「白い砂」(57)をDVDで観直して、感銘を受けました。

114「或る夜の出来事」(34)

114「俺たちに明日はない」(67)

114「ギター弾きの恋」(99)

三留まゆみ イラストライター

ファントム・オブ・パラダイス
ある日どこかで
恋恋風塵
心の旅路
アデルの恋の物語
ラストタンゴ・イン・パリ
デッドゾーン
冒険者たち
ふたりだけの森
愛のメモリー

「すべての映画はラブストーリーである」と思いつつも、ラブストーリーというジャンルは苦手で常に優先順位が下になってしまう。てなわけで悩みに悩んで選んだ映画は愛の物語というよりも、愛についての物語。「ファントム〜」の主人公ウィンスローはラストでヒロインに名前を呼ばれ、その魂は救われるが、「愛のメモリー」のエンディングは踊るような映像や音楽とは逆に愛の無間地獄を暗示する。愛する人を守るために未来の大統領（マーティン・シーン！）を暗殺しようとする「デッドゾーン」のクリストファー・ウォーケンのせつなさ。「アデル〜」の狂気へと昇華した想い。そう、要は想いなのだ。「ある日どこかで」のクリストファー・リーヴは想いで時間を超えた。小田原の小さな映画館でこの映画を観たとき、ラストシーンで前の席のおばちゃんがつぶやいた。「いかないで」。その瞬間、「ある日どこかで」は一生ものの映画となった。

宮崎祐治 イラストレーター

さよならの微笑
アデルの恋の物語
隣の女
アパートの鍵貸します
道
レッズ
おもいでの夏
草原の輝き
リトル・ロマンス
イングリッシュ・ペイシェント

30年以上ずっとほぼ同じペースで映画を観ているのに、こうやってオールタイム　ベスト・テンを選んでみると、若い頃5年間ぐらいで観たものがずらっと並んでしまう。当時は私のほうの心が柔らかくて、素直に愛や恋が受け容れられたのか。このごろは身も心もすさんでしまって、愛なんか信じられなくなってしまったのか。つい最近、浦山桐郎の「私が棄てた女」を観なおしたら、10代の頃わからなかった「大人の恋愛」の深さに大いに泣けた。「ジョゼと虎と魚たち」に通じる「仕方がない」愛の終わり。恋愛映画も年齢によって感じ方がぜんぜん違う。憧れや純粋な愛から、しがらみや打算の中にある「仕方のない愛」を描くラブストーリーに心が動かされるようになった。単純な人間だから、屈折したり歪んだりしている恋愛映画が苦手なのは変わらないが。

村山匡一郎 映画研究者

散り行く花
キング・コング(33)
哀愁
心の旅路
ヘッドライト
恋人たち
突然炎のごとく　ジュールとジム
ウエスト・サイド物語
シェルブールの雨傘
ポンヌフの恋人

記憶に残るラブストーリーを思いつくまま選んでみたら、アメリカ映画が5本、フランス映画が5本という結果になった。それも若い頃に見た作品が多い。やはり恋愛に対して感受性が強かった年頃に見たものが心に焼きついているのは、当然といえば当然のことだろうか。ラブストーリーはメロドラマと切っても切り離せない関係を映画史上では保ってきたため、ここでは恋愛メロドラマといわれるものも入っているが、ストーリー的に男女の恋愛に焦点が強く当たっているものを取り挙げた。「キング・コング」が入っているのを不思議に思う人もいるかもしれないが、ラブストーリーの典型だという思いからランキングに入れた。番外にはニコラス・レイの1949年作「夜の人々」を挙げておきたい。「俺たちに明日はない」(67)につながる切ないまでのラブストーリーが描かれており、恋愛映画の傑作といえる。

森直人 ライター

アバウト・ア・ボーイ
ベティ・ブルー　愛と激情の日々
汚れた血
俺たちに明日はない
気狂いピエロ
冒険者たち
バッファロー'66
マイライフ・アズ・ア・ドッグ
スタン・ザ・フラッシャー
ベスト・フレンズ・ウェディング

「アバウト・ア・ボーイ」は、三十路を迎えてからの心の一本。毎日観て泣いている、くらいの勢いです。

山口直樹 ライター

哀戀花火
イングリッシュ・ペイシェント
髪結いの亭主

114「トリコロール／青の愛」(93)

114「存在の耐えられない軽さ」(88)

114「グリーン・カード」(90)

危険な関係(88)
恋におちたシェイクスピア
さらば、わが愛／覇王別姫
卒業
ボイジャー
ローマの休日

ラブストーリーは、評価するものではなく、体感するものだと気づかされた。とりあえず思い出されるまま10本を挙げたら、それを見た当時の自分のことまでもが浮かび上がってきて、気恥ずかしくなってしまった。正直言って、「卒業」と「ローマの休日」は、10代のときに見て以来一度も見直していないが、どちらも永遠の名作として心に刻み込まれてしまっている。とはいえ、年齢を重ねたからか、テイストの異なる作品がほどよく並んだので、そのまま選出することにした。

それゆえ、各作品については、うまく語れないので、論評を控えさせて欲しい。ただ、ラブストーリーは女優の魅力にも大きく左右される。「ローマの休日」のオードリー・ヘップバーンはいうまでもなく、「哀戀花火」の寧静、「髪結いの亭主」のアンナ・ガリエナ、「危険な関係」のミシェル・ファイファー、「ボイジャー」のジュリー・デルピーの美しさに、目眩すら覚えたことは間違いない。

大和晶 映画評論

テオレマ
大人は判ってくれない
勝手にしやがれ
ZOO
野性の夜に
欲望の翼
楽園の瑕
ブエノスアイレス
ブレイブ
MUSA

私の映画の原点は、中学2年の時、仙台の名画座で、タイトルも知らずに入って観て、衝撃のあまり呆然自失のまま映画館を出、その時点で初めて〝18才未満おことわり〟の貼紙に気がついた「テオレマ」である。それから、主にヨーロッパ映画を中心に、様々な映画を名画座や二番館で観ながら10代を過ごした。遅ればせながら仏ヌーヴェル・ヴァーグの存在を知り、トリュフォーの「大人は判ってくれない」に心打たれて涙し、ゴダールの「勝手にしやがれ」でパリのシャンゼリゼ通りに憧れた。やがて社会に出て映画の仕事に就き、ライターのはしくれとなった頃、再び、立ち上がれないほどのショックを与えたのが「欲望の翼」、そしてウォン・カーウァイ監督とレスリー・チャンだった。それが〝映画ライター・大和晶〟のスタート地点とも言えるだろう。

横森文 映画ライター

猟奇的な彼女
ノッティングヒルの恋人
恋愛小説家
美女と野獣(91)
ウェディング・シンガー
ラブ・アクチュアリー
セイ・エニシング
フォー・ウェディング
愛しのローズマリー
スプラッシュ

ラブストーリーの場合は〝回数を観たベスト・テン〟に加え、〝ハッピー気分になれるベスト・テン〟ということで選んでみた。というのも回数を見たラブストーリーということであれば、「ベティ・ブルー」や「シド・アンド・ナンシー」など、ヘビーな結末をもたらす作品もかなり好きだからだ。でも気分的に今はハッピーでいたいという気持ちから、こんなベスト・テンになった。特に最近はアメリカのラブストーリーより、イギリス産と韓国産にやられてしまうことが多い。特に韓国映画「猟奇的な彼女」は感動しつつも、非常に悔しい気持ちになった作品。だって日本でも十分に撮れる1本だったからだ。いやはや頑張っていただきたいっ！

ちなみに自分でベスト・テンのラインアップを見て、けっこう主人公がなりふり構わず愛に直進する映画が好きだというのもわかってきた。こういう自分の傾向がわかるという意味でもベスト・テンというのは面白いものだ。

吉田真由美 映画評論家

明日に向って撃て！
テルマ&ルイーズ
彼女の彼は、彼女
太陽と月に背いて
ボーイズ・ドント・クライ
モンスター
女はみんな生きている
めぐりあう時間たち
浮気な家族
アイ・エヌ・ジー

かねてより世間一般の「恋愛」の概念に違和感を抱いていたワタクシ。「就社」や「就学」と同様、社会への従属表明である「結婚」が視野のどこかに入っているような関係を恋愛とは思わない。

こいつとなら死ねる「明日に向って撃て！」(69)「テルマ&ルイーズ」(91)。日常メルヘン「彼女の彼は、彼女」(94)、非日常メルヘン「太陽と月に背いて」(95)。こんな女のために殺されるなんて「ボーイズ・ドント・クライ」(99)、こんな女のために殺すなん

114「めぐりあう時間たち」(03)

114「ポンヌフの恋人」(91)

114「パリ、テキサス」(84)

て「モンスター」(03)。世代をつなぐ「女はみんな生きている」(01)、時代をつなぐ「めぐりあう時間たち」(02)。家庭内でLOVEする離れ業、母&息子の逆手編「浮気な家族」(03)、母&娘編の順手編「アイ・エヌ・ジー」(03)。

20世紀は〝映像の世紀〟であったが、〝恋愛映画〟には乏しかった。お楽しみはこれからだ。

和久本みさ子 映画評論家

みじかくも美しく燃え
愛に関する短いフィルム
ボイジャー
天井棧敷の人々
柔らかい肌
隣の女
トリコロール／青の愛
冒険者たち
気狂いピエロ
ポーラX

ラブストーリーはこうだという概念から私たちを解放したのは、ポーランドの監督クシシュトフ・キェシロフスキだった。彼は愛と同時に死にもこだわったが、ドキュメンタリー作家として出発したキェシロフスキが、やがてドラマ作家に転向した裏には、ドキュメントの限界に気づいたことがある。人間の最も個人的な物語――愛と死――の〝現場〟にカメラが立ち入ることはできないとキェシロフスキは言う。が、感情が煮詰まり、爆発するこの宝庫を撮らなくて、なにが映画と言えるだろう。かくて、キェシロフスキはその二つ、特に愛にこだわる映画を撮り続けた。当然ながら、それはストーリーを語るためではなく、その時の感情に深く深く潜入して、その感情を〝語る〟ことであった。その感情は私たちの息の根を止めるほどに強く、つらいものであるけれど、キェシロフスキは、打ちのめされ、絶え絶えの私たちの前に、愛の崩壊を支える奇跡のような現実(愛)を提示してくれるのである。

渡辺祥子 映画評論家

逢びき(45)
夏の嵐
終電車
男と女
イングリッシュ・ペイシェント
昼下りの情事
花様年華
プリティ・ウーマン
ローマの休日
恋におちたシェイクスピア

こんな恋がステキ、こんな恋がしたい、と思って楽しんだ恋のドラマです。どれをとっても残念ながら私の現実には起こりえないからこそ、忘れ難く心の片隅に焼きつき、永遠に残ることになりました。

渡辺武信 建築家・映画評論家

ヒズ・ガール・フライデー
カサブランカ
素晴らしき哉、人生！
ローマの休日
旅情
めぐり逢い(57)
昼下りの情事
いつも2人で
卒業
ジョンとメリー

順不同という条件ゆえ製作年代順に並べた。同じ監督から一本だけにしたのでワイルダー「アパートの鍵貸します」「麗しのサブリナ」「お熱い夜をあなたに」を除外せざるを得なかったし、「幸せはパリで」も候補作だった。また「裏窓」や「グレン・ミラー物語」もラブロマンスと言えようが、サスペンス映画、音楽映画のベスト・テンもあるかも知れないので、取り置きにした。監督は一作にしたが、スターを見るとオードリー・ヘップバーンが三作、ケイリー・グラント、ダスティン・ホフマンが二作あるのは、この三人が都会派ラブロマンス向きの芸質を持っていることを示すのだろう。それにしても〝オールタイム〟となると1970年代以降の映画が入ってこないのは、私の世代的感覚か？ ラブロマンスというジャンルの衰退を示すものか？ 70年代以降にも「アニー・ホール」(77)、「リトル・ロマンス」(79)等の候補があったが歴史的名作の強力な布陣には入り込む余地がなかった。

ジャンル別オールタイム ベスト・テン

ラブストーリー

[外国映画]

ジャンル別ベスト・テン番外篇
五番勝負 その四

「007」

選者 石上三登志（映画評論家）

第1位 ゴールドフィンガー（第3作／64年）
第2位 ドクター・ノオ（殺しの番号／第1作／62年）
第3位 サンダーボール作戦（第4作／65年）
第4位 ロシアより愛をこめて（危機一発／第2作／63年）
第5位 007は二度死ぬ（第5作／67年）
第6位 美しき獲物たち（第14作／85年）
第7位 死ぬのは奴らだ（第8作／73年）
第8位 女王陛下の007（第6作／69年）
第9位 私を愛したスパイ（第10作／77年）
第10位 ダイ・アナザー・デイ（第20作／03年）

　かつて、未訳の原作は無理して原書で読み、新人シーン・コナリー主演の映画化情報を発見して勝手にときめき、テレンス・ヤング監督の未見作まで探しまわって納得し、ついに銀座〈ガス・ホール〉での「007は殺しの番号」試写にもぐり込んだ私としては、なんたって最初の四作が基本である。新人氏のシャカリキぶりには、男の〈色気〉さえ、感じられたと思う。

　原作もそうなのだが、このシリーズの本来の大魅力は、SFスレスレの気分で描かれた超悪党と、その奇ッ怪な大犯罪から生れてくる。従って、それのあまりない「ロシアより愛をこめて」を最高傑作と考える人々と、私は与しない。あれはフツーのスパイ活劇に近い。

　ジョン・バリーの音楽も重要。第一作目はモンティ・ノーマンの担当で、例の「007のテーマ（デンデコデンデン……）」はだから彼の作曲なのだが、しかし演奏していたのは〈ジョン・バリー・セヴン〉だったのだから、バリーのサウンドととらえてかまわない。このユニークなサウンド・ロゴ、やはり他人の曲はあまり使いたくないのか、次第におざなりになっていったのは、残念……！

　それじゃ、コネリー＝ボンド以外はどうなのかというと、初期の四作を無視してしまえば、それなりには面白いと私も思う。でも、大オーバーなアクションを、「笑わせる」ことによってゴマカしてしまう。たとえばムーア＝ボンドにくらべると、初期のコネリー＝ボンドはそんなこと全然ないシャカリキさで、だからこそ男の〈色気〉ではあった。本物の危機感もあった。それこそが原作者イアン・フレミングの「世界」でもあったのだ。

　ちなみに昨年、「教養主義！」（フリースタイル刊）という本で世界のエンタテインメント小説の50選を担当した時、私はフレミングではやはり「ゴールドフィンガー」をあげ、このシリーズの特色を「……構造的にはほとんど〝空想〟で〝荒唐無稽〟な、だからこそ面白さ抜群の冒険大活劇シリーズである。殺人許可の00ナンバー、悪玉はすべてサディストなどなどのそれなりの凄みと、様々に造型、装飾された〝メカ〟の魅力などが、この〝荒唐無稽〟を〝大人の読み物〟にしているわけ」とまとめている。

　初期の映画化作品も、まさしくそういう面白さだった。あの〝竜〟擬装のタンクが出てくるかこないかが、分岐点ではあった……。

「ゴールドフィンガー」

ジャンル別 オールタイム ベスト・テン アニメーション ランキング
[日本映画・外国映画]

85 キネマ旬報 創刊85周年

14「GHOST IN THE SHELL／攻殻機動隊」(95)

18「木を植えた男」(87)

18「連句アニメーション「冬の日」」(03)

順位	タイトル	得票数
1	ルパン三世　カリオストロの城	21
2	となりのトトロ	18
	ファンタジア	18
4	風の谷のナウシカ	17
5	白雪姫	15
6	AKIRA	14
7	映画クレヨンしんちゃん　嵐を呼ぶモーレツ！オトナ帝国の逆襲	13
8	千と千尋の神隠し	10
	長靴をはいた猫	10
10	太陽の王子　ホルスの大冒険	9
	トイ・ストーリー	9
	モンスターズ・インク	9
	やぶにらみの暴君	9
14	GHOST IN THE SHELL／攻殻機動隊	8
	天空の城ラピュタ	8
	もののけ姫	8
	わんぱく王子の大蛇退治	8
18	木を植えた男	7
	バンビ	7
	火垂るの墓	7
	連句アニメーション「冬の日」	7
22	アイアン・ジャイアント	6
	ウォレスとグルミット　ペンギンに気をつけろ！	6
	エースをねらえ！	6
	機動警察パトレイバー　劇場版	6
	白蛇伝	6
	雪の女王	6
28	ウォレスとグルミット　チーズ・ホリデー	5
	うる星やつら2　ビューティフル・ドリーマー	5
	霧につつまれたハリネズミ	5
	銀河鉄道の夜	5
	伝説巨神イデオン　接触篇／発動篇	5
	ナイトメアー・ビフォア・クリスマス	5
	バッタ君町に行く	5
	話の話	5
	美女と野獣	5
	ファインディング・ニモ	5
38	イノセンス	4
	ウォレスとグルミット　危機一髪！	4
	おこんじょうるり	4
	紅の豚	4
	セロ弾きのゴーシュ	4
	ピノキオ	4
44	イエロー・サブマリン	3
	王立宇宙軍　オネアミスの翼	3
	鬼	3
	機動警察パトレイバー2 the Movie	3
	シュレック	3
	新世紀エヴァンゲリオン劇場版 THE END OF EVANGELION Air／まごころを、君に	3
	スチームボーイ	3
	空飛ぶゆうれい船	3
	ダンボ	3
	東京ゴッドファーザーズ	3
	パンダコパンダ	3

■選考委員［五十音順・敬称略］
浅野潜・安西水丸・石上三登志・内海陽子・浦崎浩實・襟川クロ・大口孝之・大森望・おかだえみこ・尾形敏朗・おかむら良・奥田均・垣井道弘・賀来タクト・金澤誠・河原畑寧・北川れい子・切通理作・金原由佳・黒田邦雄・佐藤忠男・品田雄吉・進藤良彦・高橋聰・田中千世子・寺本直未・中島紳介・永野寿彦・西村雄一郎・西脇英夫・野島孝一・野村正昭・萩尾瞳・原口正宏・春岡勇二・氷川竜介・樋口尚文・日野康一・藤津亮太・松島利行・的田也寸志・三留まゆみ・宮崎祐治・村上泉・望月信夫・森卓也・森直人・森遊机・山口猛・山口直樹・山下慧・山田和夫・横森文・渡部実

アニメーション ランキング

93	道成寺	1
	どうぶつ宝島	1
	ドラえもん　のび太の日本誕生	1
	ナーザの大暴れ	1
	茄子　アンダルシアの夏	1
	忍者武芸帳	1
	眠れる森の美女	1
	ノートルダムの鐘	1
	飲みすぎた一杯	1
	呪いの黒猫	1
	バグズ・ライフ	1
	腹ペコ狼	1
	ピーターパン	1
	火の鳥2772　愛のコスモゾーン	1
	PINGU　世界で一番元気なペンギン	1
	ピンチクリフ　グランプリ	1
	ファウスト	1
	ファンタジア２０００	1
	ファンタスティック・プラネット	1
	太りっこ競争	1
	フリッツ・ザ・キャット	1
	平成狸合戦ぽんぽこ	1
	ペイネ／愛の世界旅行	1
	ヘヴィメタル	1
	ぼくらと遊ぼう！	1
	ボビーに首ったけ	1
	マジンガーＺ対暗黒大将軍	1
	水玉の幻想	1
	ミトン	1
	名探偵コナン　時計じかけの摩天楼	1
	雌牛	1
	メトロポリス	1
	MEMORIES	1
	桃太郎の海鷲	1
	森の伝説	1
	指輪物語	1
	呼べど叫べど	1
	夜の蝶	1
	ラマになった王様	1
	リロ＆スティッチ	1
	ロジャー・ラビット	1
93	アルプスの少女ハイジ	1
	ある街角の物語	1
	あれはだれ？	1
	アンツ	1
	田舎狼と都会狼	1
	ヴィンセント	1
	映画クレヨンしんちゃん　雲黒斎の野望	1
	映画おじゃる丸　約束の夏　おじゃるとせみら	1
	エスパー魔美　星空のダンシングドール	1
	悦楽共犯者	1
	男のゲーム	1
	鬼恋歌	1
	親指トムの奇妙な冒険	1
	COWBOY BEBOP　天国の扉	1
	火宅	1
	カムイの剣	1
	キリクと魔女	1
	クジラの跳躍	1
	クロモフォビア	1
	劇場版 機動戦艦ナデシコ　The prince of darkness	1
	西遊記	1
	桜（春の幻想）	1
	三匹の子ぶた	1
	シャーロットのおくりもの	1
	ジャイアント・ピーチ	1
	ジャングル大帝	1
	ジャンピング	1
	ジャングル・ブック	1
	少女革命ウテナ　アドゥレセンス黙示録	1
	新選組	1
	スピリット	1
	せむしのこうま	1
	千年女優	1
	ターザン	1
	ダイナソー	1
	チェブラーシカ	1
	チキン・ラン	1
	庭園	1
	鉄扇公主	1
	地球（テラ）へ…	1
	トイ・ストーリー２	1
	風車小屋のシンフォニー	3
	ふしぎの国のアリス	3
	魔女の宅急便	3
	ムーラン	3
59	悪魔の発明	2
	頭山	2
	アラジン	2
	安寿と厨子王丸	2
	映画クレヨンしんちゃん　嵐を呼ぶ！夕陽のカスカベボーイズ	2
	映画クレヨンしんちゃん　嵐を呼ぶアッパレ！戦国大合戦	2
	おもひでぽろぽろ	2
	風が吹くとき	2
	哀しみのベラドンナ	2
	カメラマンの復讐	2
	機動戦士ガンダム　逆襲のシャア	2
	銀河鉄道９９９	2
	くもとちゅうりっぷ	2
	皇帝の鶯	2
	サウスパーク〈無修正映画版〉	2
	さらば宇宙戦艦ヤマト　愛の戦士たち	2
	じゃりン子チエ	2
	シュレック２	2
	少年猿飛佐助	2
	人狼　JIN-ROH	2
	ストリート・オブ・クロコダイル	2
	線と色の即興詩	2
	千夜一夜物語	2
	超時空要塞マクロス　愛・おぼえていますか	2
	ドラえもん　のび太の恐竜	2
	ネオ・ファンタジア	2
	浮浪雲	2
	101匹わんちゃん	2
	殺人　MURDER	2
	真夏の夜の夢	2
	桃太郎　海の神兵	2
	ルパン三世　ルパンVS複製人間	2
	老人と海	2
	わんわん物語	2
93	アイス・エイジ	1
	あたしンち	1
	アリス	1

22「アイアン・ジャイアント」(99)　22「ウォレスとグルミット ペンギンに気をつけろ！」(93)　22「エースをねらえ！」(79)

ジャンル別 オールタイム ベスト・テン
アニメーション
【日本映画・外国映画】

浅野潜 映画評論家

連句アニメーション「冬の日」
千と千尋の神隠し
火垂るの墓
風の谷のナウシカ
銀河鉄道の夜
ルパン三世　カリオストロの城
太陽の王子　ホルスの大冒険
映画クレヨンしんちゃん 嵐を呼ぶモーレツ！オトナ帝国の逆襲
となりのトトロ
長靴をはいた猫

このところ興行収入のベスト・テンを見ると、アニメの上位独占状態が続いている。テレビ放映した劇場版をシーズンごとにはめこんでいる興行側の姿勢が影響していることもたしかだが、低年層を中心にした観客の思考も無視できない。

もっとも宮崎駿・高畑勲を中心にしたスタジオジブリの国産アニメ製作の体制がそれだけ充実してきたことも見逃せない。ハリウッドさえその風力への驚異を抱かせはじめたことは凄い。東映動画時代の会社側の圧力に負けなかった地力の結果として評価しておきたい。これからもあくことない成長を期待している。

「冬の日」は収穫だった。日本的な、あまりにも日本的な世界を見事な努力と才能で結実した。さわやかで、皮肉で、美しい画面はひたすらに心をゆすぶり、あたためてくれた。昨年の日本映画界の収穫といえる。一般映画としても上位に位置する作品である。

安西水丸 イラストレーター

となりのトトロ
千と千尋の神隠し
ファンタジア
バンビ
白雪姫
ピノキオ
ジャングル大帝
風の谷のナウシカ
ダンボ
ジャングル・ブック

アニメーションはあまり見ていない。ディズニー作品は思い出が多い。なかでも「ファンタジア」と「バンビ」を見た時はただただ驚いた。「となりのトトロ」は姉妹の妹の泣いた顔が可愛い。

石上三登志 映画評論家

ロジャー・ラビット
紅の豚
ナイトメアー・ビフォア・クリスマス
トイ・ストーリー
アイアン・ジャイアント
チキン・ラン
ダイナソー
メトロポリス
東京ゴッドファーザーズ
ファインディング・ニモ

アニメーションは映画の技法の一つだったのが、いつの間にか映画の一つのジャンルとなり、今やむしろ別のメディアといってもいいくらい。これからはこのメディアが映画のすべてになってしまうようにも思える今日このごろではある。アニメの技法の一つが映画だ……なんてネ。

というわけで、だから古典はすべてはずして、近ごろの未来形〈映画〉のみに徹して並べてみました。

内海陽子 映画評論家

わんわん物語
眠れる森の美女
ふしぎの国のアリス
ファインディング・ニモ
アルプスの少女ハイジ
風の谷のナウシカ
ルパン三世　カリオストロの城
千と千尋の神隠し
映画クレヨンしんちゃん 嵐を呼ぶモーレツ！オトナ帝国の逆襲
映画クレヨンしんちゃん 嵐を呼ぶ夕陽のカスカベボーイズ

サンタクロースはどうにも信じられなかったが、「魔法」は信じられた。アニメーションは「魔法」だ。ディズニー・アニメが「魔法」の代表であり、子どものころは新作を見るたびにうっとりしていた。今はだいぶひねくれてしまったが、「魔法」を信じたい心は変わらない。「魔法」はどんどん進化するからすばらしい。人間も進化しているように思えるではないか。それにしても「ディズニー」と「ジブリ」と「しんちゃん」と、今後は「ピクサー」があれば済んでしまうようで、個人的には確かに済んでしまうので、ほかの優れたアニメの数々を思うと申し訳ない。

浦崎浩實 激評家

ファンタジア

28「うる星やつら2 ビューティフル・ドリーマー」(84)

22「雪の女王」(57)

22「白蛇伝」(58)

ピノキオ
ダンボ
バンビ
白蛇伝
安寿と厨子王丸
太陽の王子 ホルスの大冒険
AKIRA
もののけ姫
新選組

アニメについて体系的に把握していないので、ほとんどナツメロ気分で選びました。再見しているのは「ファンタジア」だけです。ディズニーはとにかく面白かった。象のダンボが空を飛ぶ時の、劇場が揺れるようなどよめきを懐かしく思い出します。むろん、戦後初の日本公開＝1954年で接し、他も、同様です。

「白蛇伝」冒頭の大川博社長の〝あいさつ〟というか、演説はおかしかった。あれ、ビデオやDVD版にも付いているのだろうか？「安寿と厨子王丸」の息をのむような美しい画調、優美な人物たち。「もののけ姫」の地を這うイノシシ・ウワバミみたいな生きものは、イヨネスコ「犀」みたいなものなんでしょうね。市川崑「新選組」をアニメといっていいかどうか分かりませんが、票を投じてみます。

猿川クロ 映画パーソナリティ

アイアン・ジャイアント
美女と野獣
シュレック
トイ・ストーリー
となりのトトロ
映画おじゃる丸 約束の夏 おじゃるとせみら
映画クレヨンしんちゃん 嵐を呼ぶモーレツ!オトナ帝国の逆襲
ウォレスとグルミット チーズ・ホリデー
ファンタジア
モンスターズ・インク

物語、音楽、ボイス・キャスト、映像と、どのパートも品よくバランスがとれてないとイケません。だから、四方八方から凄まじい音で驚かせるダケのものとかハイテクを使い放題の凝った手法のみが売りの作品はそのとき限り。胸に感動、目に涙。たまに笑わせハラハラしたりシミジミさせるファミリー系がいい。極上の喜怒哀楽体験は子供も大人もないから。この確固たる信念（ってほどのものでもないが）は、物心ついたころに観た「ダンボ」にあり。

個人的にはサントラの占める割合が大。となるとエルトン・ジョンの歌がたっぷり入った「エルドラド 黄金の都」や、涙で画面が見えなくなった実話ベースの「バルト」、「魔女の宅急便」「天空の城ラピュタ」など昔の宮崎ワールド、「ニモ」「ラグラッツ・ムービー」「イエロー・サブマリン」もベスト・テンに入れてあげたかった。

大口孝之 映像クリエータ

わんぱく王子の大蛇退治
ファンタジア
映画クレヨンしんちゃん 嵐を呼ぶモーレツ!オトナ帝国の逆襲
ルパン三世 カリオストロの城
老人と海
シュレック2
霧につつまれたハリネズミ
木を植えた男
風の谷のナウシカ
カメラマンの復讐

「わんぱく王子」は東映動画で一番好きな作品。「長靴をはいた猫」も捨てがたいですが。「ファンタジア」はディズニー作品で最も劇場で繰り返し見た1本。「カリオストロの城」は定番。「クレヨンしんちゃん」は「戦国大合戦」や「温泉わくわく大決戦」も好きなんですが。「老人と海」は油彩IMAXアニメの力作。「シュレック2」はフル3DCGアニメから1本選ぶとしたら、今はこれかな。「ファインディング・ニモ」も好きですが。「霧につつまれた」はノルシュテイン作品で、「話の話」とどっちにしようか悩む。「木を植えた男」「ナウシカ」も定番。「カメラマン」はロシアのヴワジスワフ・スタレーヴィチの昆虫人形アニメ。キリギリスが自転車を漕ぐ姿が最高。でも、本心で言うなら「マインド・ゲーム」が最高！公開前なので選べないのが残念。ゼマン、ハリーハウゼン、オブライエン、マクラレンなどの作品も選べないのも辛い。

大森望 翻訳家

新世紀エヴァンゲリオン劇場版 THE END OF EVANGELION Air／まごころを、君に
王立宇宙軍 オネアミスの翼
うる星やつら2 ビューティフル・ドリーマー
モンスターズ・インク
ナイトメアー・ビフォア・クリスマス
超時空要塞マクロス 愛・おぼえていますか
銀河鉄道の夜
ルパン三世 カリオストロの城
少女革命ウテナ アドゥレセンス黙示録
機動戦士ガンダム 逆襲のシャア

往年の名作を入れはじめるとキリがないので、この四半世紀に劇場公開された商業アニメ映画に対象を絞り、一監督一作品に限定。「映画」より「アニメ」にウェイトを置いた結果、国産TVアニメの劇場版が半数以上を占めることになってしまったが、アニメ産業の中心がそっち側にある以上、当然といえば当然か。とくに奇をてらったわけでもなく、過去に年間ベスト・テンで選んできたような

28「ナイトメアー・ビフォア・クリスマス」(93)

28「伝説巨神イデオン　接触篇／発動篇」(82)

28「銀河鉄道の夜」(85)

作品を並べただけ。まあ、こういう（アニメおたく的）オールタイムベスト・テンがあってもいいでしょう。「モンスターズ・インク」はピクサー作品の、「逆シャア」はガンダム映画の代表としてそれぞれ選出。「映画」に限定しなければ、宮崎アニメのベストは「未来少年コナン」なんだけど……。

おかだえみこ　アニメ研究家

白雪姫
バッタ君町に行く
皇帝の鶯
やぶにらみの暴君
雪の女王
桃太郎の海鷲
長靴をはいた猫
ルパン三世　カリオストロの城
じゃリン子チエ
モンスターズ・インク

いろいろ考えているとキリがありませんので、純粋に好きな作品だけ。指定はありませんが、長編のみ、そして一作家一作品のみ、と勝手に決めました。「やぶにらみの暴君」は27年後に完成した「王と鳥」（「王と鳥」は日本では劇場未公開）ではなく、1952年にできたバージョンの方です。

信条として、こういうベスト・テンには加わらないことにしていますが、参加しないと日本のアニメだけがズラリと並んでフライシャーやトルンカなんか知らないよという配列になる可能性もなくはない、と考え、このジャンルのみ参加させていただきます。

尾形敏朗　CMプランナー

桃太郎　海の神兵
白蛇伝
千夜一夜物語
となりのトトロ
殺人　MURDER
イエロー・サブマリン
木を植えた男
トイ・ストーリー
サウスパーク〈無修正映画版〉
連句アニメーション「冬の日」

ANIMATEの意味が「……に生命を吹き込む」ということを、あらためて実感させてくれたのが「桃太郎　海の神兵」だった。敗戦まぢかの昭和20年に公開され、当時学生だった手塚治虫に影響を与え、後に「ジャングル大帝」の動物たちの合唱シーンへと結ばれる。鬼畜米英を鬼ケ島に見立てた戦意高揚映画ではある。しかし、厳しい状況下でコツコツと瀬尾光世監督たちが描いた絵の連続には、生命への愛おしみや祈りのようなものが、たしかに宿っている。〈気〉というものは、ちゃんと映るのだ。昨今のCG処理で作られる映画の多くに欠けているのも、それである。スケール感やダイナミズムの計算はあっても、ワンダーがない。専門的に系統立ててアニメ映画史を追ったわけではなく、また実験映画や個人映画をどう扱えばいいかも迷い、「冬の日」に代表させてもらった。

おかむら良　映画評論家

ファンタジア
木を植えた男
風の谷のナウシカ
火垂るの墓
頭山
AKIRA
ウォレスとグルミット　チーズ・ホリデー
サウスパーク〈無修正映画版〉
ナイトメアー・ビフォア・クリスマス
風が吹くとき

こうして10作品を選んでみると、クリエイターたちが環境や社会に強い問題意識を持って、「風の谷のナウシカ」「木を植えた男」「風が吹くとき」といった作品でメッセージを発信していたことがわかる。実写ではなかなかできないけれど、アニメだからできる表現がいくつかある。そのひとつが〈飛ぶ〉シーンだと思うので、わたしはついつい飛ぶシーンに目をこらしてしまう。「風の谷のナウシカ」でナウシカが風にのって疾走ではなく疾空するシーンは、そのテーマがどんなにシリアスだとしても、わたしにとっては爽快感にあふれている。「ファンタジア」で妖精がヒューイーンと優雅かつチャーミングに飛ぶのも好きだし、「ウォレスとグルミット」の「チーズ・ホリデー」でウォレスと愛犬グルミットが月に飛び立つシーンまで好きだ。このリストには日本作品が4本も入っていて、日本のアニメのレベルの高さと実力を再認識すると同時に、がんばってほしいと思う。

奥田均　関西外国語大学短期大学部講師・映画評論家

わんぱく王子の大蛇退治
機動警察パトレイバー2　the Movie
少年猿飛佐助
千と千尋の神隠し
ファンタジア
ドラえもん　のび太の恐竜
映画クレヨンしんちゃん　嵐を呼ぶアッパレ!戦国大合戦
ルパン三世　カリオストロの城
名探偵コナン　時計じかけの摩天楼
美女と野獣

「わんぱく王子の大蛇退治」は東映動画（かつてアニメはこう呼ばれた）が作った日本製アニメのベストといえる1本。映画を見るきっかけは「ゴジラ」（54年）。今年、製作50周年を記念して初めてオリジナル版が全米で公開。伊福部昭

30「セロ弾きのゴーシュ」(82)

29「おこんじょうるり」(82)

28「話の話」(79)

作曲の映画音楽初お披露目だった。映画好きにしてくれた伊福部先生が「手がけたなかで、一番印象に残る作品は」と聞かれると答えるのはこのアニメ。意外な気がするが「自由に作曲できた」という言葉で納得できる。クレジットされていないが、宮崎駿監督が参加していたのはうれしい。「機動警察パトレイバー2」は公開当時、「フォトジェニー」と書いたが、いまも気持ちは変わらない。「少年猿飛佐助」も東映動画。小学校の講堂か体育館だったか出張映写で見た記憶があるオールタイムのなかでも、珍しいリアルタイム・アニメ。外国アニメでは、2本のディズニー・アニメを選んだが、「ファンタジア」は音楽映画の金字塔だ。

堀井道弘　映画評論家

風の谷のナウシカ
火垂るの墓
AKIRA
頭山
ファンタジア
ナイトメアー・ビフォア・クリスマス
木を植えた男
ウォレスとグルミット　チーズ・ホリデー
アイアン・ジャイアント
モンスターズ・インク

かつては子供のものだったアニメ作品に特別な関心を持っていたわけではない。「宇宙戦艦ヤマト」「銀河鉄道999」「地球（テラ）へ…」などをなんとなく見ていた。しかし、宮崎アニメ「風の谷のナウシカ」を見て、ある種のカルチャーショックをうけた。環境破壊に対する考え方やアニメならではの表現力の豊かさに圧倒されたのだ。その後は宮崎アニメの新作を待つのが大きな楽しみになっている。ディズニーの教育映画的な部分はあまり好きになれないので、ティム・バートンが製作・原案・キャラクター設定を担当した「ナイトメアー・ビフォア・クリスマス」の毒気のテンコ盛りがおもしろかった。高畑勲監督の「火垂るの墓」とブラッド・バード監督の「アイアン・ジャイアント」は反戦アニメの傑作として忘れられない。CG技術はアニメと実写の境界を取り外しつつあるが、新しい技術と作家性が一体になった作品が生まれるのは、まだまだこれからのような気がする。

賀来タクト　文筆家

さらば宇宙戦艦ヤマト　愛の戦士たち
エースをねらえ!
浮浪雲
もののけ姫
太陽の王子　ホルスの大冒険
ムーラン
木を植えた男
マジンガーZ対暗黒大将軍
ルパン三世　ルパンVS複製人間
鬼

ヒマさえあれば何度も見返す作品を思うがままに並べた。「ヤマト」は鑑賞回数だけなら間違いなくトップに立つ作品で、戦争映画として出色の出来。「エースをねらえ!」は出崎演出が輝く逸品。迫力の試合場面、まぶしい青春像、そして「雨の夜はゴエモン蹴飛ばす!」などの名台詞の数々。「浮浪雲」の美術、画面構成、可笑しみ。「もののけ姫」は作家の問題意識と葛藤が躍動的なドラマとなって跳ねる力作。「ホルス」にみなぎる創作の情熱は今見てもアッチッチ。「ムーラン」のドジで果敢なヒロイン像、ゴールドスミス音楽のうねり。「木を植えた男」はフレデリック・バックの人柄が映えた良心作。「マジンガーZ」のクライマックス、グレートマジンガーが救出に現れる場面はいつ見てもシビれる。「ルパン」のエロ+バカの楽しさ。「鬼」は老婆の顔が鬼に変わる瞬間にビックリ。川本喜八郎作品は全部スゴイ。スゴイといえば、もちろんユーリ・ノルシュテイン、カレル・ゼマン、フライシャー兄弟、ハンナ&バーベラ、岡本忠成、押井守（以下大勢）もスゴくて楽しいんだけど。

金澤誠　映画ライター

ルパン三世　カリオストロの城
うる星やつら2　ビューティフル・ドリーマー
太陽の王子　ホルスの大冒険
長靴をはいた猫
GHOST IN THE SHELL／攻殻機動隊
セロ弾きのゴーシュ
風の谷のナウシカ
天空の城ラピュタ
映画クレヨンしんちゃん　嵐を呼ぶモーレツ!オトナ帝国の逆襲
森の伝説

選んでみると、やはり自分にとってのアニメの基点は宮崎駿であった。どれだけ宮崎アニメを絞れるかと考えたが結局監督作3本、彼がスタッフとして参加した作品が2本入っている。難しいのは実写以上にアニメのテンポや表現方法が、時代性を背負っていることである。製作から数十年を経て再評価されるアニメが実写に比べて非常に少ないことが、それを証明している。ここに挙げた作品も、それだけに80年代以降のものがほとんど。この10本なら、かろうじて今の観客にも面白さが伝わるはずだ。因みに「攻殻機動隊」はジャパニメーションの認知度を高めた作品として、「森の伝説」はアニメ作家・手塚治虫の代表作として入れた。岡本忠成、川本喜八郎に関しては語れるほど全作を観ているわけではないので作品を挙げ

44「イエロー・サブマリン」(68)

44「王立宇宙軍　オネアミスの翼」(87)

44「機動警察パトレイバー2 the Movie」(93)

なかった。おそらく今回のベスト・テンは、2Dアニメが王道だった時代の最後のベスト・テンになるのだろう。10年後には3Dアニメが上位に食い込んでいるかも。

河原畑寧 映画評論家

ファンタスティック・プラネット
バンビ
となりのトトロ
やぶにらみの暴君
火垂るの墓
シュレック
アイス・エイジ
連句アニメーション「冬の日」
GHOST IN THE SHELL／攻殻機動隊
クジラの跳躍

手塚治虫の短編「ジャンピング」を、いったんは入れてみたのですが〝日本で劇場公開〟というところで考えこんでしまい、ここに追加することにしました。これ、カンヌ国際映画祭で短編コンペに出品されたのを、偶然見てたいへん誇らしく思ったのです。

印象度でいえば、アニメーションは短編に限るという気もします。ディズニーの「シリー・シンフォニー」はじめ、久里洋二「人間動物園」、和田誠「殺人 MURDER」、ラウル・セルヴェ「夜の蝶」「ハーピア」etc、etc……。DVD時代に入って、短編アニメーションに触れるチャンスは、どんどん増えて行くでしょう。

北川れい子 映画評論家

火垂るの墓
もののけ姫
AKIRA
東京ゴッドファーザーズ
MEMORIES
ファンタジア
ファンタジア2000
ファウスト
話の話
白雪姫

映画技術の驚異的進歩でハリウッド映画の大作はほとんどアニメーション化してしまい、いわゆるアニメ映画との境界は壊れつつあるように思うのだが、それでも、いのちを持った絵が自由に動き回るアニメ世界はワクワクさせるものがある。「となりのトトロ」と同時公開された「火垂るの墓」は、リアルで痛ましい野坂昭如の戦争体験を、生々しく再現、命のシンボルのようなホタルの映像も素晴らしい。サクマのドロップ缶のカタカタいう音、おにいちゃんと叫ぶ幼女の声、いまこう書いていても感動で胸が熱くなる。私の永遠のベスト・ワンアニメである。アニメは絵が命ではあるけれども、やはり脚本とイメージの飛躍がしっかりしていないと、ただの平面画と同じになるってこと。2本の「ファンタジア」はとにかくアレヨ、アレヨの美しさ。色、動き、音楽とも最高。アート・アニメのシュワンクマイエルとノルシュテインは短編が多いので選ぶのに困った。この2作家の作品はみな好き。

切通理作 文化批評

となりのトトロ
パンダコパンダ
天空の城ラピュタ
風の谷のナウシカ
ルパン三世　カリオストロの城
映画クレヨンしんちゃん　嵐を呼ぶモーレツ!オトナ帝国の逆襲
機動警察パトレイバー　劇場版
ジャイアント・ピーチ
どうぶつ宝島
空飛ぶゆうれい船

自然の中にいる子どもにとって世界がどう反応するか、ドラマとしてよりリアルタイムに「体験」させてしまう「トトロ」。幼い頃に見たその原型の一つ「パンコパ」を真っ先に挙げないわけにはいかない。「ラピュタ」でパズーの身体に弾がかすりわずかに血が出ただけで動揺したのには、見ている自分がいつの間にか画面に入り込まされてしまっている怖ささえ感じた。「ナウシカ」の冒頭腐海内の造形力そしてその周辺の生活描写の十数分にたっぷり己を委ねることが出来るのは至福の時間だ。「カリ城」では劇場用演出作品で初めて展開された宮崎駿の「縦の構図」を思う存分味わうことが出来た。「オトナ帝国」「劇パト1」はそうしたアニメの体験力を前提に、風景とともに人間すらも移りゆくという提起として受け止めた。「どうぶつ」「ゆうれい船」はまさに〈まんがまつり世代〉の原体験として挙げた。

金原由佳 映画ライター

ぼくらと遊ぼう!
ミトン
チェブラーシカ
となりのトトロ
GHOST IN THE SHELL／攻殻機動隊
クロモフォビア
ストリート・オブ・クロコダイル
ウォレスとグルミット　チーズ・ホリデー
白雪姫
トイ・ストーリー

イジー・トルンカ、ユーリ・ノルシュテイン、ヤン・シュワンクマイエル、岡本忠成、川本喜八郎もいれるべき、ラウル・セルヴィは「夜の蝶」にすべきかも、と散々悩んだが、この一年、見た頻度で決めた。「ぼくらと遊ぼう!」は「チェコアニメ映画祭2000」で初めて知り、主人公のくまが自

44「東京ゴッドファーザーズ」(03)

44「新世紀エヴァンゲリオン劇場版 THE END OF EVANGELION Air／まごころを、君に」(97)

44「シュレック」(01)

由自在に形を変えるだけでなく、セル画とパペットアニメーションが子供の「見たい！」という欲望に非常に刺激的な形で融合している点に驚きと悦びを感じた。2日に一度は見ているのに、その度に発見があり、驚きがある。そして、言葉がわからなくても、子供の心を釘付けにする。まさにアート。ロマン・カチャーノフやラウル・セルヴィの仕事を初めて日本に大々的に紹介した吉田久美子さんの功績はもっと知られていいと思う。押井守、クエイ兄弟の心の闇に忍び込む世界観は大人だから許される悦楽で、本当はこのラインにシュワンクマイエルの「悦楽共犯者」が次点に控えている。

黒田邦雄 映画評論家

バンビ
白雪姫
ファンタジア
美女と野獣
トイ・ストーリー
ウォレスとグルミット 危機一髪！
ウォレスとグルミット ペンギンに気をつけろ！
風の谷のナウシカ
ルパン三世 カリオストロの城
AKIRA

　ブラザーズ・クエイの作品をここに入れるべきなのか悩んだが、アート系アニメ映画は除外した。

アニメ映画本来のターゲットであるファミリー向けに絞ったのだが、そうなるとやはりディズニー作品。私にとってディズニーは、今も「バンビ」「白雪姫」など、ウォルト・ディズニー本人の製作作品につきる。その理由は背景とキャラクターが見事に調和していたからで、近年の作品は背景の超リアリズムとキャラクターのマンガチックな造型に違和感を覚える。しかし、「美女と野獣」はミュージカル的な展開が素晴らしかった。ピクサー・アニメスタジオの技術が圧倒的だった「トイ・ストーリー」も、新時代アニメ映画の幕を開けた画期的な作品だった。

　個人的にもっとも好きなアニメ映画は、ニック・パーク監督の「ウォレスとグルミット」シリーズ。アイデアも技術も言うことなしだが、編み物をしたり嫉妬したりする犬のグルミットが、たまらなくチャーミングだ。

佐藤忠男 映画批評家

となりのトトロ
風の谷のナウシカ
おこんじょうるり
風車小屋のシンフォニー
GHOST IN THE SHELL／攻殻機動隊
桜（春の幻想）
鬼
話の話
鉄扇公主
線と色の即興詩

　少し日本の作品をひいきしすぎたかもしれないが、それだけ日本のアニメーションが充実していることは自負していいと思う。岡本忠成など「チコタン」や「南無一病息災」も入れたいし、そうなればノルシュテインだって「霧につつまれたハリネズミ」を外せないということになって、どんどんリストはふくらんでゆくことになる。ただ昔はあれほど素晴らしく思えたディズニーが「シリー・シンフォニー」の一篇だけで十分であるような気がするのはなぜだろう。そこにアニメーションについての考え方や感受性の大きな転換があったのであろう。「鉄扇公主」は中国作品だが私はこれを日中戦争中の小学生のときに見た。アジアで最初の長篇アニメーションと記されていて、その面白さに驚いたものである。

品田雄吉 映画評論家

千と千尋の神隠し
天空の城ラピュタ
となりのトトロ
ファンタジア
白雪姫
やぶにらみの暴君
悪魔の発明
ルパン三世 カリオストロの城
モンスターズ・インク
GHOST IN THE SHELL／攻殻機動隊

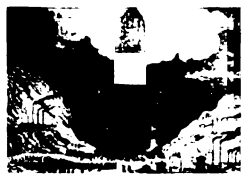
　戦後、「やぶにらみの暴君」を見たとき、大きな衝撃を受けた。それが今でも忘れられない。

進藤良彦 ライター

ルパン三世 カリオストロの城
うる星やつら2 ビューティフル・ドリーマー
ジャンピング
ボビーに首ったけ
天空の城ラピュタ
エスパー魔美 星空のダンシングドール
機動警察パトレイバー 劇場版
新世紀エヴァンゲリオン劇場版 THE END OF EVANGELION Air／まごころを、君に
映画クレヨンしんちゃん 嵐を呼ぶモーレツ！オトナ帝国の逆襲
映画クレヨンしんちゃん 嵐を呼ぶ夕陽のカスカベボーイズ

　「キネ旬」のこの手の投票に参加するのは初体験なので、緊張するなぁ……。10本すべてを「クレヨンしんちゃん」で埋めてやりたい衝動にもかられつつ、やはり自分の"アニメ映画史"に忠実であろうと決めた。海外作品に関しては、どうしても局所的にしか見ていないため、「トイ・ストーリー」「サウスパーク〈無修正映画版〉」「ストリート・オブ・クロコダイル」くらいしか思いつかない。ここは割り切って国内作品に絞ることに

50「機動戦士ガンダム　逆襲のシャア」(88)

50「風が吹くとき」(86)

50「悪魔の発明」(52)

し、前記3作は泣く泣く外した。

……というわけで、この10本。宮崎・押井・原恵一の私的"御三家"を2本ずつ。押井は「パトレイバー2」その他、原は「暗黒タマタマ大追跡」「ブタのヒヅメ大作戦」にも後ろ髪ひかれる。残りの4本はあくまで自分の欲望に従いながら、88年以来のアニメイヤーである2004年を刻印する1本として、「カスカベボーイズ」を選ぶ。伊藤高志の「SPACY」はアニメじゃないか？　と最後まで気にしつつ。

高橋聰　大阪日日新聞編集局次長

ルパン三世　カリオストロの城
火垂るの墓
うる星やつら2　ビューティフル・ドリーマー
映画クレヨンしんちゃん　嵐を呼ぶモーレツ!オトナ帝国の逆襲
ドラえもん　のび太の日本誕生
紅の豚
となりのトトロ
ノートルダムの鐘
ファンタジア
茄子　アンダルシアの夏

アニメに目覚めるのが遅かったもので、昔のディズニー映画や、東映動画の時代の名作は見ているけど、格別な印象はない。ただ、音楽と融合した名作「ファンタジア」と、近年の「ノートルダムの鐘」はスーッとタイトルが出てきた。そして、やっぱり、宮崎駿アニメの数々が凄いと思う。中でも「ルパン三世　カリオストロの城」はずば抜けており、「紅の豚」が一番のお気に入りである。「となりのトトロ」では子ども心に帰らせてもらった。近年、「ドラえもん」と「クレヨンしんちゃん」のシリーズが楽しみで、前者の「オトナ帝国の逆襲」は、押井守の名作「ビューティフル・ドリーマー」を思わせた。高畑勲の「火垂るの墓」に泣かされ、高坂希太郎の「茄子　アンダルシアの夏」の風の爽やかさに和まされた。「エヴァンゲリオン」「攻殻機動隊」などは苦手だが、「イノセンス」で少し押井映画を見直さねばならないのかもしれない。

田中千世子　映画評論家

風の谷のナウシカ
千と千尋の神隠し
銀河鉄道の夜
映画クレヨンしんちゃん　嵐を呼ぶモーレツ!オトナ帝国の逆襲
うる星やつら2　ビューティフル・ドリーマー
霧につつまれたハリネズミ
真夏の夜の夢
ネオ・ファンタジア
シュレック
アリス

日本のアニメーションから5本選んだところで思い切って外国のアニメに変えた。何の基準もなく選んだような気がしたが、物語性を私は愛しているようだ。絵が美しいノルシュテインの「霧につつまれたハリネズミ」も友だちのコグマくんを訪ねるハリネズミが森のなかで心細くなる心理の起伏がスリリングで面白い。当たり前のことだが、アニメーションとは映画なのだ。

寺本直未　映画ライター

美女と野獣
天空の城ラピュタ
PINGU　世界で一番元気なペンギン
ウォレスとグルミット　チーズ・ホリデー
ウォレスとグルミット　危機一髪！
AKIRA
もののけ姫
となりのトトロ
101匹わんちゃん
千と千尋の神隠し

子どもの頃はディズニー映画のアニメ一辺倒で、紙芝居とレコードを持っていたという世代。ところがこうやって順位をつけてみると、いかに自分がクレイアニメ好きか、ということが浮かび上がり、我ながらびっくりする。宮崎アニメに目覚めたのが実は遅く、「となりのトトロ」以降で、それ以後は全て試写で見せていただいたのだが、「ラピュタ」はオールナイトのリバイバル上映で見て、その場の空気とともに心に焼き付いたことが大きかった。

中島紳介　アニメ&特撮系ライター

長靴をはいた猫
やぶにらみの暴君
雪の女王
パンダコパンダ
火宅
ルパン三世　ルパンVS複製人間
伝説巨神イデオン　接触篇／発動篇
ナーザの大暴れ
ウォレスとグルミット　ペンギンに気をつけろ！
スチームボーイ

こういうアンケートの場合、いつも決まって「わんぱく王子」「ホルス」「エースをねらえ！」などと同じ作品ばかり選んでしまうので、今回はあえて外し、コミックボックス『世界と日本のアニメーションベスト190』とはダブらないようにした。そのせいか、これだけ絞るのに地獄の3日間を要した。「アニメは映画だ!!」と目を開かせた作品が、まだまだこんなにもあったとは！　自分が閉館の決まった名画座の館主で、ラストショーのプログラムを決めろといわれたら、アニメのラインナップはこれで行きます。10本目の「スチームボーイ」は、2004年夏の現時点で日本が生んだ最新

にして最高のアニメ。デジタルがどーしたこーしたじゃない、いつの時代も物語とキャラクターが映画を動かすのだ！

永野寿彦 イラストライター

アイアン・ジャイアント
ルパン三世 カリオストロの城
機動警察パトレイバー 劇場版
スチームボーイ
モンスターズ・インク
ウォレスとグルミット ペンギンに気をつけろ！
ムーラン
映画クレヨンしんちゃん 雲黒斎の野望
パンダコパンダ
長靴をはいた猫

これぞアニメ史上に残る名作……なんてことはどうでもよく、どれくらいその映画が好きかということ、そしてなるべく同じ作家たちの作品が重ならないように選んだ結果がコレ。オールタイムということでアレも入れたいコレも入れたいとかなり悩んだけれど、こうして並んだタイトルを眺めると自分らしいベスト・テンにはなったと思う。絶対面白いに違いないと信じてアメリカまで渡った「アイアン・ジャイアント」、今の人気ぶりが信じられないほど場内がガラガラだった初日に駆けつけた「ルパン三世 カリオストロの城」……と、初めて観た時の衝撃と感動が思い出となって蘇ってくる映画ばかりだ。泣く泣く落とした作品も数多いが、中でもピカピカの新作「マインド・ゲーム」が公開タイミングの関係で入れられなかったのが残念無念。アニメが持つ動きの楽しさを、大人こそが味わえる人生賛歌テーマと絡めてしまったこの快作、今観ておかないと損するよ。マジで。

西村雄一郎 映画評論家

ファンタジア
ピーターパン
わんわん物語
千と千尋の神隠し
もののけ姫
となりのトトロ
白蛇伝
わんぱく王子の大蛇退治
映画クレヨンしんちゃん 嵐を呼ぶアッパレ！戦国大合戦
忍者武芸帳

ウォルト・ディズニー作品では、クラシック音楽とアニメを融合させた「ファンタジア」が時代を超えた傑作。これが六十年以上も前の映画とは、とうてい信じられない。「ピーターパン」は、実写を含む、他のリメーク作品がかすむほどの素晴らしさ。フック船長とワニの掛け合いは、何度見ても笑える。

宮崎アニメは、「千と千尋の神隠し」の俗物の描写、「もののけ姫」の文明批評など、アニメがここまで深遠な思想を言えたのかということが、まず驚きだった。「となりのトトロ」は大人のメルヘン。

東映動画は、第一作の「白蛇伝」に敬意を表して。「わんぱく王子の大蛇退治」は、伊福部昭の音楽が傑出している。大島渚監督の電気紙芝居「忍者武芸帳」は、アニメの範疇に入るのかと迷ったが、熱烈な白土三平のファンゆえに、一票を投じた次第。

50「さらば宇宙戦艦ヤマト　愛の戦士たち」(78)

50「サウスパーク〈無修正映画版〉」(99)

50「銀河鉄道999」(79)

西脇英夫 映画評論家

モンスターズ・インク
トイ・ストーリー2
ファインディング・ニモ
AKIRA
トイ・ストーリー
スピリット
バグズ・ライフ
アンツ
あたしンち
ファンタジア

正直に言う。幼い頃から映画が好きだったが、アニメ嫌いで、小学校でディズニー・アニメを観に行く時が一番つらかった（こういう選者が一人くらいいてもいいでしょ）。なぜ嫌いかというと、いろいろあるが、まずあの平面的な画面がつまらないことと、キャラクターの嘘くさい、大げさなオーバー・アクションになじめなかったのだ（いやなガキだと思うが）。そういうことで、ベスト・テンのほとんどがフルCG（これは大好き）アニメになってしまった。今後ますますCGアニメがふえてくるだろうと思うと嬉しくなってしまう。

野島孝一 映画ジャーナリスト

千と千尋の神隠し
もののけ姫
となりのトトロ
おもひでぽろぽろ
紅の豚
魔女の宅急便
白蛇伝
バンビ
白雪姫
美女と野獣

アニメには詳しくないので、なんだかお恥ずかしい結果になってしまいました。

野村正昭 映画評論家

風の谷のナウシカ
となりのトトロ
イエロー・サブマリン
ふしぎの国のアリス
モンスターズ・インク
もののけ姫
天空の城ラピュタ
ヘヴィメタル
ウォレスとグルミット ペンギンに気をつけろ！
連句アニメーション「冬の日」

宮崎アニメをなるべく外そうと思いながら組み立てましたが、何と4本も入ってしまった。だって面白いんだもん。古典や新作を含めて、いろいろ気になる作品も多かったのですが、こういう結果になりました。むしろ正式に劇場公開されたかどうかは別にして、短篇アニメーションで強烈な印象を残す作品が気にかかり、順不同でベスト15を挙げれば、「話の話」「木を植えた男」「おこんじょうるり」「牧笛」「色彩幻想・過去のつまらぬ気がかり」「道成寺」「火宅」「岸辺のふたり／ファーザー・アンド・ドーター」「ジャンピング」「パワーズ・オブ・テン」「夜の蝶」「ピーズ・ゲーム」「スクリーン・プレイ」「心象風景（風景画家）」「殺人 MURDER」となり、これら総てをひっくるめて「連句アニメーション「冬の日」」に思いのたけを込めたつもりです。なおTVシリーズ「未来少年コナン」を別格として挙げておきたい。これぞ漫画映画の醍醐味なのですが。

萩尾瞳 映画評論家

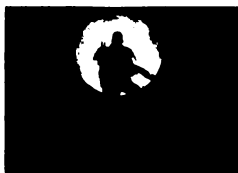
ファンタジア
天空の城ラピュタ
となりのトトロ
白雪姫
白蛇伝
ナイトメアー・ビフォア・クリスマス
ふしぎの国のアリス
AKIRA
ピノキオ
指輪物語

ディズニー・アニメと宮崎アニメだけで6本も選んでしまった。さすが、日米の〝アニメの神様〟の作品は粒揃いだし。ディズニー作品では、世界初の長編カラー・アニメ「白雪姫」は落とせないだろうし、「ふしぎの国のアリス」や「ピノキオ」は、音楽が魅力的なのが大きなポイントだ。そして、「ファンタジア」。アニメならではの美しい世界を見せてくれる、とびきりの名作だと思う。

宮崎アニメは、比較的初期のシンプルなもののほうが好みなので。「天空の城ラピュタ」「となりのトトロ」は、久石譲の音楽の魅力も言い落とせない。「ルパン三世 カリオストロの城」も傑作だけど、10本には入らなかった。日本初のフルモーション長編アニメ「白蛇伝」にはオマージュを。新しい方では「AKIRA」を。映像、内容ともに今も新鮮だ。そして、ティム・バートンの「ナイトメアー・ビフォア・クリスマス」のホロ苦く切ないファンタジーは、もちろん落とせない。

原口正宏 アニメーション研究家

白雪姫
バッタ君町に行く
呼べど叫べど
飲みすぎた一杯
くもとちゅうりっぷ
わんぱく王子の大蛇退治
哀しみのベラドンナ

50「ストリート・オブ・クロコダイル」(86)

50「人狼　JIN-ROH」(02)

50「じゃりン子チエ」(81)

エースをねらえ！
天空の城ラピュタ
機動警察パトレイバー　劇場版

自分にとってのベスト（＝フェイバリット）を選ぶべきか。もっと客観的に、アニメーション史上のエポックな作品を選ぶべきか。悩んだ末、前者でいくことにした。10本はどれも映画的なスケールと叙情にあふれ、何度でも観たくなる作品。観るたびに新たな発見と感動がある作品。観終わったあと、明日を生きる活力をもらえる作品……である。本当はとても10本には絞れないのだが、1人の作家からは1本のみ、と泣く泣く制約を決めて厳選した。だから個々のタイトルの裏には、ウォルト・ディズニー、フライシャー兄弟、テックス・エイヴリー、プジェチスラフ・ポヤル、政岡憲三、芹川有吾、森康二、大塚康生、月岡貞夫、永沢詢、山本暎一、杉井ギサブロー、出崎統、杉野昭夫、小林七郎、宮崎駿、高畑勲、押井守、小倉宏昌へのつきせぬ思いが広がっているのである。なお、海外公開のみの作品もOKなら、ここにチャック・ジョーンズの「不思議なカエル」を加えるところ。

春岡勇二　映画評論家

おこんじょうるり
わんぱく王子の大蛇退治
太陽の王子　ホルスの大冒険
鬼恋歌
千夜一夜物語
ルパン三世　カリオストロの城
となりのトトロ
機動警察パトレイバー　劇場版
映画クレヨンしんちゃん　嵐を呼ぶモーレツ！オトナ帝国の逆襲
AKIRA

昭和33年生まれの自分が、初めて観たときに強い衝撃を受けた作品、ということで選んでみた。「おこんじょうるり」は岡本忠成作品をぜひ入れたかったので。もちろん、話の中身も好きだ。「わんぱく王子」は幼い頃に本当にワクワクして観た。「わんぱく王子」は今でも胸が高鳴るし、「太陽の王子」は演劇的な人間関係というものを初めて意識して観た気がする。「鬼恋歌」は林静一のエロティシズムに圧倒された。赤い椿の花は、今でもトラウマになっている。「千夜一夜物語」は手塚作品に潜んでいたエロティシズムがついに前面に出てきて、凄いなと思ったし、元気のいいデタラメさも好きだった。後の5本は、比較的近年の作品で好きだったもの。「パトレイバー」はTV版の特別長編も傑作だったと思う。「オトナ帝国の逆襲」は今に続く〝懐かし〟ブームに初めっから警鐘を鳴らしていたのが凄い。大友克洋もやはり入れておかなくては。

氷川竜介　アニメ特撮文筆業

わんぱく王子の大蛇退治
エースをねらえ！
王立宇宙軍　オネアミスの翼
イノセンス
スチームボーイ
伝説巨神イデオン　接触篇／発動篇
ルパン三世　カリオストロの城
ターザン
銀河鉄道999
アイアン・ジャイアント

こういう選出にはいつも悩みますが、今回はリアルタイムで劇場に足を運び、自分が暗闇の中でドスンと何か受け取った気になって明るい場所に出たものということを重視してフィルターをかけています。それと、なるべくクリエイターや製作母体を幅広く取りたいということも加味しました。観るタイミングというか、時期や場所なども映画の味のうちだと思いますし、ディズニーが「ターザン」なのも現地で観た好印象が大きいということなんです。「宇宙戦艦ヤマト」や「機動戦士ガンダム」、「新世紀エヴァンゲリオン」などが落ちてしまうのは、衝撃はテレビの方だったたから。「パンダコパンダ」が入らないのは後追い鑑賞だからです。こうやって作品名を増やすのはズルですか？（笑）今年の作品を2本も入れたのは、「旬」の感じが大きく作用しているということもありますが、やはりそれだけ大事な節目の年だという想いがあるからですね

樋口尚文　映画批評家

白蛇伝
太陽の王子　ホルスの大冒険
GHOST IN THE SHELL／攻殻機動隊
哀しみのベラドンナ
エースをねらえ！
火の鳥2772　愛のコスモゾーン
空飛ぶゆうれい船
風の谷のナウシカ
銀河鉄道999
映画クレヨンしんちゃん　嵐を呼ぶモーレツ！オトナ帝国の逆襲

世界のアニメから十本というのは、あまりに膨大で、ディズニー初期の「白雪姫」「ピノキオ」「ダンボ」「バンビ」あたりで相当な試みをやりきっているようにも思われるのだが、そうなると余りにも面白味を欠くベスト・テンになってしまうので、思いきって極私的オールタイムベスト・テンにした。結果、自分にとって「東映動画」（東映アニメーションではない）がいかに嬉しいトラウマになっているかが判った。文字通りそこには、とても美しくナイーブなた。「動画」ならではの力が溢れていた。幼少時にはディズニー旧作の再映もあったが、それより東映動

59「千夜一夜物語」(69)

59「ドラえもん　のび太の恐竜」(80)

59「ネオ・ファンタジア」(76)

画の味わいが自分にはヒットした。

日野康一　映画評論家

三匹の子ぶた
ファンタジア
バンビ
長靴をはいた猫
話の話
木を植えた男
魔女の宅急便
アラジン
GHOST IN THE SHELL／攻殻機動隊
ファインディング・ニモ

ものごころついてから小学生まで戦前の日劇地下で見たディズニーの「シリー・シンフォニー」シリーズ短編（32〜41）に衝撃を浴び、映画の道に進んだ。今日はその中から「三匹の子ぶた」を選んだがDVD発売は少ないものの「シリー・シンフォニー」は世界のカラー・アニメの出発点、「うさぎとかめ」「丘の水車」「みにくいあひるの子」など、粒よりである。前衛的な大自然描写と音楽との結びつきは「ファンタジア」(40)に、動物描写は「バンビ」(42)に発展した。いま店頭に並ぶ「ミッキーマウス」（28〜53）の大部分や「トムとジェリー」(43〜53）も、半世紀以上前に作られたのである。その後もディズニーの長編アニメにどっぷりつかり、日本アニメを育てあげて苦闘した東映動画出身の人たちと語り合い、「さらば宇宙戦艦ヤマト」(78）や「ルパン三世　カリオストロの城」(79）を楽しんだ。ソ連の「話の話」（79）、カナダ人の「木を植えた男」(87)も忘れがたい。「ファインディング・ニモ」(03）にはCGアニメの未来を見出す。

藤津亮太　アニメ評論家

太陽の王子　ホルスの大冒険
エースをねらえ！
超時空要塞マクロス　愛・おぼえていますか
AKIRA
機動戦士ガンダム　逆襲のシャア
機動警察パトレイバー2　the Movie
人狼　JIN-ROH
平成狸合戦ぽんぽこ
新世紀エヴァンゲリオン劇場版　THE END OF EVANGELION Air／まごころを、君に
東京ゴッドファーザーズ

好み優先で「枠」を国内外に広げるよりも、自分の仕事に引きつけてテーマを設定し選出したほうが、引き締まったベスト・テンになると考え、そのようにした。このリストのテーマは「アニメにおける〝本当のこと〟」である。日本の作品に絞ったのは、単に自分の仕事の領域ということだけではない。日本のアニメは記号の塊を構成していく表現手段でありながら、記号へと還元不可能な「本当のこと」を語ろうとする、ある種のねじれを色濃く持っているからだ。このねじれは「絵で物語を語る・映画を作ること」の本質を考える時に決して避けて通れないものだと思う。そのため、当然ながら自分の好みとは、少々異なる作品も入っている。もちろんもうちょっとリストをいじることで、精度は上がるかもしれないが、それをやることにそれほどの意味はないと考え、これで提出することにした。

それにしても、出来上がったリストを見直してみて、宮崎駿が1本もないことに気づき、それはそれで自分でも興味深かった。

松島利行　映画評論家

桃太郎　海の神兵
白雪姫
バッタ君町に行く
バンビ
長靴をはいた猫
101匹わんちゃん
ルパン三世　カリオストロの城
風の谷のナウシカ
AKIRA
セロ弾きのゴーシュ

幼い頃にアメリカの短編漫画映画を、アメリカ帰りで都庁に勤めていた大叔母の家で見たことはあったが、映画館では母の実家があった疎開先、大分県三重町の三栄館で見た「フクチャンの潜水艦」が最初のアニメになった。同じころもう一つ見たのが「空の神兵」だったと思う。八〇年代に松竹の倉庫の奥から発見されたときに改めて見た。戦後の東京の小学校の映画教室で見たものが多いが、「ガリバー」や「せむしのこうま」ははずした。「ルパン三世」は毎日映画コンクール大藤信郎賞の審査で一九七九年、初めて選定委員になった横山隆一がそれまで憂き目を見る宿命にあった長編娯楽アニメを断固たる態度で推した。そのとき日本のアニメは新しい時代を迎えたように感じた。「AKIRA」がベルリン国際映画祭フォーラム部門で深夜に上映されたときのことも決して忘れない。超満員の観客の興奮は渦となり、エンド・マークとともに唸り声を上げてみんな総立ちで拍手を続けた。

的田也寸志　フリー

劇場版 機動戦艦ナデシコ The prince of darkness
カムイの剣
エースをねらえ！
伝説巨神イデオン　接触篇／発動篇
浮浪雲
さらば宇宙戦艦ヤマト　愛の戦士たち
水玉の幻想
ピンチクリフ　グランプリ

59「真夏の夜の夢」(59)

50「老人と海」(99)

93「アイス・エイジ」(02)

くもとちゅうりっぷ
地球（テラ）へ…

邦洋併せてとは無茶な注文なので1監督1作品、そして最初は邦画だけに絞ろうと思いつつ、「水玉の幻想」は自分に映画の魅力をとくと教えてくれたカレル・ゼマン作品として、ノルウェイ人形アニメ「ピンチクリフ グランプリ」は未だビデオ&DVD化もなされてない幻の作品として、共に外せませんでした(洋画は以下「ガリバー旅行記」39「ファンタジア」40「雪の女王」57「真夏の夜の夢」59「牧笛」63「話の話」80「木を植えた男」86「ガンダーラ」87が今の気分)。邦画は手塚、宮崎、高畑、押井、大友作品などがこぼれてしまうほどに、その質の高さを改めて実感（「ルパン三世 カリオストロの城」79「じゃリン子チエ」82「ジャンピング」84「天使のたまご」85は入れたかった)。「機動戦艦ナデシコ」は、良くも悪くもアニメで育った世代の前向きな代弁者という意味でも、我が生涯のベスト・ワンです。「浮浪雲」は乞DVD化！「地球(テラ)へ…」は佐藤勝・音楽の素晴らしさゆえに。

三留まゆみ イラストライター

長靴をはいた猫
映画クレヨンしんちゃん 嵐を呼ぶモーレツ!オトナ帝国の逆襲
フリッツ・ザ・キャット
雪の女王
ネオ・ファンタジア
霧につつまれたハリネズミ
ヴィンセント
機動警察パトレイバー2 the Movie
ルパン三世 カリオストロの城
親指トムの奇妙な冒険

最初に観た映画は「バンビ」だった。だけどやっぱり原点は「長猫」。アニメの、というよりも、映画の楽しさを教えてくれた作品だった。「オトナ帝国～」は大人になった私のもう一本の「長猫」ともいうべき存在で、もうすべてが奇跡のように素晴らしく、そしてせつない。どんなに愛してもやまない特別な一篇である。それにしても10本というのは過酷な話で、たくさんの大好きな作品がこぼれてしまった。トルンカ、カチャーノフ、シュワンクマイエルがはずれてしまったのは、作品を絞りきれなかったから。「モンティ・パイソン」時代のテリー・ギリアムも入れたかったのだが、〝劇場公開されたアニメーション〟というしばりが邪魔をした。「ピンチクリフ グランプリ」「天空の城ラピュタ」「ウォレスとグルミット チーズ・ホリデー」……涙を飲んだ作品多数。話は違うけど、「シュレック2」のケリー・アズベリーって絶対に「長猫」ファンだと思う（特に3匹の殺し屋猫の）。

宮崎祐治 イラストレーター

魔女の宅急便
あれはだれ？
トイ・ストーリー
白雪姫
悪魔の発明
太陽の王子 ホルスの大冒険
ルパン三世 カリオストロの城
おもひでぽろぽろ
霧につつまれたハリネズミ
殺人 MURDER

子供の頃、母親や隣のおばさんに連れてってもらったディズニー映画や東映アニメは、最高級の宝物のように輝いていた。今の子供たちはポケモン映画版でそういう経験ができているのかな。映画をたくさん観始めて、いつの間にかアニメーションは実写の劇映画と線を引き、分けて観るようになった。純粋にアニメーションを楽しむことができず、アイデアや実験的テクニックの新鮮さで評価したりする時もあった。「自分はオタクではない」というのが内心あって、素直にアニメーション映画を観ていないというのが正直なところかもしれない。しかし、実は自分に娘ができたらキキという名前にしようと決めていた。残念ながら子供はできず、キキという名前は私のメールアドレスの中に残っていたりするのだから、まあ何をか言わんやなのだけれど。

村上泉 ライター

セロ弾きのゴーシュ
王立宇宙軍 オネアミスの翼
おこんじょうるり
となりのトトロ
ルパン三世 カリオストロの城
AKIRA
千年女優
人狼 JIN-ROH
イノセンス
トイ・ストーリー

作家性の強い芸術作品や実験作は外し、アニメ制作に不可逆な変化をもたらした商業作品を重視して選出した。現時点で視聴可能であり、今日の観客にも楽しめる作品を考えた結果、80年代以降が中心になった。「ゴーシュ」や「王立」は、商業的要請や制約からは生まれなかった作品。「なにかの間違いで」世に出たといっても良い、大事にしたい作品である。「ゴーシュ」は高畑作品の中でも特に勧めたい一本だ。岡本忠成のモデルアニメーション作品も同様に、商業的映画とは別次元のクオリティの追究と挑戦がある。多くの名作があるが、ここでは「おこんじょうるり」を推しておく。宮崎作

「悦楽共犯者」(96)

「カムイの剣」(85)

「クジラの跳躍」(98)

品では「トトロ」が個人的にはベスト・ワンである。「AKIRA」の大友克洋は、現在のアニメーターが持つ巧さの源流だと思う。「人狼」と「イノセンス」は、アナログとデジタルの到達点として参照される作品。富野由悠季や出崎統といった、TVシリーズにベスト作がある監督の作品を選べないのが惜しい。

望月信夫 映画評論家

田舎狼と都会狼
太りっこ競争
腹ペコ狼
線と色の即興詩
道成寺
アラジン
バッタ君町に行く
やぶにらみの暴君
真夏の夜の夢
長靴をはいた猫

アニメーションの場合、劇場公開作品と限定されると少なからず不本意な思いをしなくてはならない。「田舎狼と都会狼」「太りっこ競争」を選べるテックス・エイヴリーは上首尾だとしても、チャック・ジョーンズ（「腹ペコ狼」）は彼のベストを選んだとはいえないし、ポール・ドリエッセン、ヨーゼフ・ギーメッシュらとなれば対象外。アレクセイエフもアウトとしなくてはならないようだ。

本来なら長編2本、短編8本といった線が妥当だと思うが、結果はご覧のとおり半々。悩んだのは、宮崎作品。どれかひとつを選ぼうと考えたが「オールタイム ベスト・テン」に日本の長編が複数では、バランスを欠く。ここでは宮崎の大活躍が伝えられている東映動画の快作を選んだ。

森卓也 映画評論家

風車小屋のシンフォニー
白雪姫
バッタ君町に行く
皇帝の鶯
呪いの黒猫
やぶにらみの暴君
雪の女王
霧につつまれたハリネズミ
ルパン三世 カリオストロの城
ウォレスとグルミット ペンギンに気をつけろ！

アニメーションのベスト・テンで問題なのは、日本で劇場公開されたかどうかが確認し難いことだ。今回、本国封切順に挙げた中でも、例えば「皇帝の鶯」は「皇帝のナイチンゲール」というタイトルで、まず教育映画として16ミリ版でリリースされた。劇場公開はずっと後である。「呪いの黒猫」はTV、ビデオ先行で、劇場では99年に、やっと。ハナ&バーベラの「トムとジェリー」シリーズも、私が最も好きな作品はTV、ビデオのみ。ワーナーのC・ジョーンズの傑作「不思議なカエル」（55）も、TVのみである。もっとも、このへんも加えると、テンの枠はさらに窮屈になる。カートゥーンの別枠が欲しい。

もう一つ、ディズニーの短編など、再公開のたびに題名が変わるから困る。劇映画と違って、配給サイドの扱いからして行きあたりばったりなのだ。

並べてみて、自分がいかにエンタテインメント人間なのかがわかる。アート派の方はそういう作品をどうぞ。

森直人 ライター

ペイネ／愛の世界旅行
風の谷のナウシカ
伝説巨神イデオン 接触篇／発動篇
風が吹くとき
映画クレヨンしんちゃん 嵐を呼ぶモーレツ！オトナ帝国の逆襲
ウォレスとグルミット 危機一髪！
悦楽共犯者
夜の蝶
ファンタジア
ドラえもん のび太の恐竜

TVアニメの我が三強は「ルパン三世」「アルプスの少女ハイジ」「機動戦士ガンダム」なんですが、映画だと自分のモードがちょっと変わるようです。でも、あんまりCGの方には意識が向いていませんね～。手作り感覚のものが好きです。「ペイネ／愛の世界旅行」は、脳がとろけそうな大甘の世界（観）に麻薬的効果があるので、ストレス解消によく使ってます（DVDを）。

森遊机 映画研究者

ルパン三世 カリオストロの城
空飛ぶゆうれい船
じゃりン子チエ
銀河鉄道の夜
風の谷のナウシカ
わんぱく王子の大蛇退治
ピノキオ
風車小屋のシンフォニー
やぶにらみの暴君
トイ・ストーリー

邦洋合わせて、という選出方式はいかにも無理で、選ぶのに苦労しました。今やアニメはジャンル的に細分化されすぎており、一つの価値観ですべてを語りきれないところがありますが、やはり、アニメの基本である〝動き〟がしっかりしていて、全体の構成が確かな作品に惹かれます。で、もしも1本だけと言われたら、迷わず「カリオストロの城」を選ぶ。わが国における、いわゆる〝劇場アニメ世代〟と〝テレビアニメ世代〟を

93「千年女優」(01)

93「チェブラーシカ」(74)

93「火の鳥2772 愛のコスモゾーン」(80)

つなぐ、貴重にして充分な接点だと思うから。選出した10本以外にも、浦山桐郎「竜の子太郎」、出崎統「SPACE ADVENTURE コブラ」、押井守「機動警察パトレイバー 劇場版」（1作目）など気になる作品は多く、また手塚治虫「ジャンピング」、和田誠「マーダー MURDER」、久里洋二「ケメ子のLOVE」、ノーマン・マクラレン「水平線」、ウィル・ピントン「マウンテン・ミュージック」といった実験的短編も入れたいところ。

山口 猛 映画評論家

風の谷のナウシカ
もののけ姫
ダンボ
ストリート・オブ・クロコダイル
男のゲーム
庭園
話の話
AKIRA
セロ弾きのゴーシュ
GHOST IN THE SHELL／攻殻機動隊

初めて見たアニメーションは、小学生の時に見た「ダンボ」であり、それは強烈だった。当時は、日本ではそれほど高度な技術を持ったアニメーションはなかった。ただそれからカラー、デジタル化によって、表現の幅もはるかに広くなったものの、ディズニーのアニメの背後にある恋愛観、家族観、ひいては思想は変わらなかった。それはアメリカのキリスト教原理主義、ピューリタニズムを擬人化しただけに過ぎず、それ以来ディズニーへの関心は薄れてしまったし、デジタル化を最も生かしたのは日本のアニメーションだろう。ただし、片や東欧のシュワンクマイエル、イギリスのクレイ兄弟の「ストリート・オブ・クロコダイル」には、そのとてつもない発想の豊かさ、シュールレアリスムを含めた西洋のよい伝統が生かされていた。それと似て、日本という風土が取り入れられながらも、西洋どころかアジアの広がりが垣間見えるところに宮崎アニメの素晴らしさがある。

山口直樹 ライター

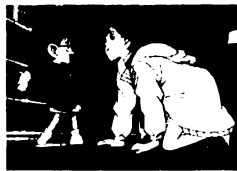
千と千尋の神隠し
イノセンス
AKIRA
銀河鉄道の夜
イエロー・サブマリン
シュレック2
ファンタジア
ファインディング・ニモ
ウォレスとグルミット 危機一髪！
老人と海

アニメの世界は多彩なので、なるべくテイストの異なる10作品を選びたいと思い、同じ監督、プロダクションの作品は1作品に絞って選出。また、人形アニメ作家ヤン・シュワンクマイエルの作品は、生身の人間を主体にしているため、今回は見送ることにした。

こうして振り返ると、特にアニメファンではないが、心に残る作品の多さに驚かされる。イマジネーションを心地よく刺激してくれた「ファンタジア」と「イエロー・サブマリン」。人間の肉体と精神をも変える未来を体感させてくれた「イノセンス」と「AKIRA」。名作小説に新たな命を吹き込んだ「銀河鉄道の夜」と「老人と海」。悩める現代人にユニークな冒険を通じてエールを送った「千と千尋の神隠し」と「ファインディング・ニモ」。かつてないファンタジー世界で遊び心を満喫させてくれた「シュレック2」と「ウォレスとグルミット」。アニメ、そして人間の持つ創造力の素晴らしさにあらためて気づかされた。

山下慧 映画系文筆業

やぶにらみの暴君
長靴をはいた猫
太陽の王子 ホルスの大冒険
キリクと魔女
ファンタジア
伝説巨神イデオン 接触篇／発動篇
白雪姫
連句アニメーション「冬の日」
雪の女王
イノセンス

アニメーションが映画のジャンルである以上に映像表現の一型式であることを考えれば、さらに人形アニメ・日本アニメ・ディズニー・短篇・3DCG等々のカテゴリー別にベストを選びたくもなろうが、それは個人の愉しみとすべきか。ひとまずここでの10本は、例年のベスト・テンで現実的に文化映画ではなく通常のベスト・テンに選ばれ得る、すなわち商業用長編作品を対象とした。人形アニメは、光と空気を撮影する観点からやはり別ジャンルと考えている。それにしても「鉄腕アトム」「鉄人28号」の再放送に間に合い、「ヤマト」「ガンダム」「エヴァ」の社会現象に親しく併走してきた身としては、どうしても日本の同時代アニメが評価の起点となることを告白しておく。注釈を加えるならば、「ファンタジア」は「シリー・シンフォニー」の代理で、「イノセンス」は押井守最新作の意として挙げた。アニメはある面で、古典はより古典に、新しきはより新しきに価値がある。

93「名探偵コナン　時計じかけの摩天楼」(97)

93「ペイネ／愛の世界旅行」(74)

93「ピンチクリフ　グランプリ」(75)

山田和夫

日本映画復興会議代表委員・映画評論家

話の話
せむしのこうま
雪の女王
やぶにらみの暴君
白雪姫
カメラマンの復讐
火垂るの墓
木を植えた男
となりのトトロ
連句アニメーション「冬の日」

アニメーションは映画創成期からの歴史をもち、そのジャンルは多様。そのなかで作家の創造性と芸術的完成度では、ユーリ・ノルシュテインの「話の話」が群を抜く。旧ソ連時代の二作――「せむしのこうま」「雪の女王」は手塚治虫、高畑勲、宮崎駿らに強烈なインパクトをあたえた。フランス・アニメのエスプリを結晶させたのが、ポール・グリモオの「やぶにらみの暴君」、ただし監督自身のリメイク版よりオリジナルを推す。

ウォルト・ディズニー・アニメでは「シリー・シンフォニー」を推したいが、一本となればディズニー・スタジオ最盛期の「白雪姫」だ。「カメラマンの復讐」はヴワジスワフ・スタレーヴィチによる帝政ロシア時代の作品だが、まさに人形アニメの古典。カナダのフレデリック・バックの入魂の名品「木を植えた男」、日本アニメの新時代をきずいたジブリの二名作「火垂るの墓」「となりのトトロ」、そして国際合作連句アニメ「冬の日」。

横森文

映画ライター

モンスターズ・インク
アイアン・ジャイアント
ラマになった王様
ウォレスとグルミット ペンギンに気をつけろ!
ムーラン
シャーロットのおくりもの
機動警察パトレイバー　劇場版
リロ&スティッチ
紅の豚
COWBOY　BEBOP　天国の扉

アニメは勝手に〝回数を観たベスト・テン〟ということで選んでみた。それでもかなり苦渋の選択となり、何度書いては消したかわからない。「ファインディング・ニモ」「スチームボーイ」「AKIRA」「ルパン三世　カリオストロの城」「地球(テラ)へ…」「いじわるドッグ」「ナイトメアー・ビフォア・クリスマス」「クレヨンしんちゃん」シリーズなど、他にも入れたい作品は何本もあったのだが。10本に絞るというのはシンドいものだ。他にもテックス・エイヴリー、チャック・ジョーンズの作品も何か入れたかった。さらに惜しむらくは今年のベスト3に入ること確実の湯浅政明監督作「マインド・ゲーム」が公開前だということで入れられなかった点。マジでオススメなのでアニメファンは是非ともチェックを! あと日本は12月に公開の「Mr.インクレディブル」も100%ベスト・テンに入ると予想しているので、今から本当に楽しみで仕方ない。

渡部実

映画評論家・日本大学芸術学部講師

おこんじょうるり
鬼
離牛
少年猿飛佐助
西遊記
安寿と厨子王丸
連句アニメーション「冬の日」
ある街角の物語
白雪姫
わんぱく王子の大蛇退治

子ども時代、漫画家への願望を抱いていた自分にとって漫画は同時代に読んだ手塚治虫、横山光輝、石ノ森章太郎、寺田ヒロオ、石川球太らの少年漫画。アニメーションは東映動画の長編動画作品に尽きるものだった。「おこんじょうるり」「鬼」「離牛」は少年期を離れても、あらためてアニメーションの持つ根源的な感動を与えてくれた作品として挙げた。「安寿と厨子王丸」(1961年／薮下泰司監督・脚本・田中澄江)は劇映画にも「山椒大夫」(1954年／溝口健二監督／脚本・依田義賢、八尋不二)があるが、このアニメーションも平安時代を舞台に登場人物たちのキャラクターが優しく美しい。その印象は現在、見ても変わらない。「ある街角の物語」は手塚治虫と虫プロダクションの最も純粋な世界が描かれていると思う。この映画を白亜のビルであった虫プロダクションの屋根裏部屋!? の試写室で見せてもらった小学生時代を懐かしく思い出します。

ジャンル別ベスト・テン番外篇
五番勝負 その五

『映画の本』

選者 植草信和（フリー編集者）

「ぼくの採点表」（トパーズプレス、キネマ旬報社）
「映画術 ヒッチコック／トリュフォー」（晶文社）
「お楽しみはこれからだ 映画の名セリフ」（文藝春秋）
「ザナック ハリウッド最後のタイクーン」（早川書房）
「映画脚本家 笠原和夫 昭和の劇」（太田出版）
「小津安二郎周游」（文藝春秋）
「日本映画史」（岩波書店）
「黒澤明ドキュメント「デルス・ウザーラ」製作記念号」（キネマ旬報社）
「日本の喜劇人」（新潮社）
「古本屋「シネブック」漫歩」（ワイズ出版）

まだビデオが普及していないその昔、開高健が「ヨーロッパ映画作品全集」（キネマ旬報社刊）を折々ページを繰って楽しんでいたという話は、「本で映画を手許に置く」のが唯一の手立てだった時代の心温まるエピソードとして忘れられない。

ぼくにとって「いい映画の本」というのはそういうことで、いつも手許に置いておきたい「好きな映画」「好きな監督」「好きな俳優」について書かれた本ということになる。だから10冊を選ぶとサドゥール「世界映画史」等の名著も入る隙間がない。

ここに挙げた10冊に順位はつけられないが、座右の書として手離せないのが「ぼくの採点表」。8867本の映画が五つの星で採点され、双葉十三郎氏のコメントがついた世界で類のない映画ガイド・ブックだ。最大の特色は史上の名作だけでなく、B級C級の映画もたくさん収録されていて、映画の海、映画の宇宙はまだまだ深くて広いと教えてくれる。これが評論家によって書かれた映画書のベストだとすれば、監督によって書かれた（語られた）最良の書が「映画術」だ。トリュフォーへの質問に答えるかたちでヒッチコックが自作に沿って「映画とは何か?」「演出、脚本とは何か?」を語り、その的確でスリリングなQ&Aは読む者を興奮させずにはおかない。映画監督でもある和田誠氏が映画ファン時代の頃から書き始めた「お楽しみはこれからだ」で、ここには美しいセリフ、洒落たセリフ、洗練されたセリフが散りばめられていて、お気に入りのセリフを我がものにしておける幸福な映画本だ。

L・モズレー著「ザナック」は主にジョン・フォードとの確執を描きつつ、プロデューサーの仕事とは何かを解明すると同時に、映画製作のダーク・サイドにも光をあて、巻置くに能わずの面白さ。小林信彦著「日本の喜劇人」はそれまでちゃんと論じられたことがなかったエノケン、ロッパの草創期からビートたけしまでを俯瞰した画期的な演劇・映画論だ。「黒澤明ドキュメント」は星の数ほどある黒澤本のなかにあって群を抜く迫力で「黒澤組」の殆どのスタッフがマエストロ・クロサワを語るその熱気、その崇拝はまさに映画そのもの。中でも小國英雄の「黒澤が死んだら俺が、俺が死んだら黒澤が葬儀委員長になるという仲だからな」の映画的名セリフが泣かせる。

ちょっと古めの本ばかりになってしまったが、最近の本で文句なく面白いのが「映画脚本家 笠原和夫 昭和の劇」。取材絶対主義者の脚本家がいかに現実と格闘したかの灼熱の語りは感動的だ。田中眞澄著「小津安二郎周游」は従来の作家研究的アプローチとはまったく異なるスタイルをとった作家論として秀逸。中山信如著「古本屋「シネブック」漫歩」は日本で初めて書かれた映画書ガイドブックとして忘れられない一冊。最後になったが佐藤忠男著「日本映画史」は現在の視点で書かれた最良の映画史で、日本映画を知りたいと思う者にとっては必読。この正史に対する裏面史である竹中労著「日本映画縦断」と併せ読めば日本映画110年の歴史が鳥瞰できる。

「西洋シネマ大系
ぼくの採点表 別巻（戦前篇）」
双葉十三郎・著 トパーズプレス刊

アジアの映画雑誌編集長から――映画と映画ジャーナリズムの現在、そしてお祝いの言葉

韓国より　「シネ21」キム・ソヒさん、「FILM2.0」イ・ジフンさん
香港より　「電影双週刊」チャン・バクサンさん

韓国
『シネ21』
編集長　キム・ソヒさん

「シネ21」は、1995年、韓国初の映画週刊誌として創刊されて以来、十年目を迎える本年まで、韓国を代表する雑誌として評価されてきた。創刊当時の韓国は、軍部独裁政権から政治的自由を取り戻し出した時代で、韓国映画もこうした自由な空気を取り込みながら蘇り始めた時だった。この時期、1980年代の政治闘争に参加した20～30代の若い世代の多くの人々の関心が文化面に移っていき、"文化爆発"の兆しも見えた。進歩主義的な新聞として知られるハンギョレ新聞社は、このような文化爆発の中心に映画があると判断し、それまで市場の中心を占めていた月刊誌ではなく、移り変わる韓国社会の速度に対応できるような週刊誌の創刊を決定した。

本誌のアイデンティティーは、こうした背景の下に形成された。当時の韓国映画は、ハリウッド映画に押され、国内のマーケットシェアの20パーセントにも満たないような状況にあったにもかかわらず、韓国映画を前面に立てる編集方針をとった。国内の映画産業と積極的に連係しながら、ニュースや映画評などを、適切な時期に提供すると同時に、韓国の俳優、監督、製作者などのイメージアップに努めた。また、当時、頭角を現わしつつあったシネフィルたちを執筆者として活用することで、質の高い記事を提供する週刊誌という信頼を得た。さらに、映画以外にも、TV、漫画、ゲーム、インターネットなど、当時の映像文化を広く反映するように誌面を構成した。

幸運にも、韓国映画界全体が、当時から現在までの10余年にわたって好調を続けている。そのような中で「シネ21」は、韓国映画の発展に寄与してきた雑誌として、映画界及び質の高い読者の全幅の信頼を得てくることができただけでなく、販売部数が毎週5万部を超える、世界的にも

類のない週刊誌に成長することができた。現在、本誌が読者に提供しようとしているものは、これまでと変わらない。今後もこれまで築いたアイデンティティーと市場におけるポジションを維持しながら、読者と映画産業の変化に柔軟に対応していける道を模索している。

　現在、韓国は、多様性と躍動性の両面においてパワーを持つ映画を生み出す国という評価を世界的に受けている。1年間に登場する作品のほとんどが、監督デビュー作や、第2、3作目となる新人監督たちの作品である。こうした若い監督たちを支えているのが、プロデューサー・システムだ。経験豊かでありながら、いまだ大部分が40代のプロデューサーたちが製作システムを管理している。

　また、韓国現代史の傷（トラウマ）が作家たちに非常に豊かなインスピレーションを提供しており、そうして生まれる作品に観客たちも熱狂的に応えている。「シュリ」「JSA」「シルミド／SILMIDO」「ブラザーフッド」など、観客動員記録を塗り替えてきた作品のすべてが、こうした題材を取り上げている。このような状況を反映し、韓国経済の深刻な不況にもかかわらず、映画界には質の高い人材が多数、集まってきている。

「シルミド／SILMIDO」

　しかし、こうした映画産業の好況が、映画雑誌の持続的な成長を保証してくれるわけではない。世界有数のブロードバンド大国である韓国では、観客たちがインターネットを通じて映画情報を入手し、意見を共有する傾向が非常に強いからだ。また、古典的な美学主義を好む評論家たちの見解と、個別的で体系的でなく、自由な感想を求める読者たちの間の格差も鮮明になってきている。

　このような状況で映画雑誌は、専門的で少数の読者を対象にするものと、新しく形成された若い観客たちに向け、より大衆的な形態を目指していくものとに二元化されていくことが予想される。『シネ21』の未来も、長期的に見れば、こうした流れの中で決まってくるだろう。昨年、本誌がハンギョレ新聞社から独立してシネ21株式会社という新しい会社を設立した理由もここにある。

　日本映画界の経験、特に『キネマ旬報』を含めた、日本の映画雑誌の歴史と現在の状況が私たちに多くの示唆を与えてくれることと信じている。韓国の大衆文化は、日本の大衆文化から少なくないインスピレーションを得ており、今後、『シネ21』と『キネマ旬報』も、映画を媒介にして両国の文化に寄与する方法を一緒に模索していくことができると期待する。

韓国

『FILM2.0』

編集長　イ・ジフンさん

　韓国映画は2004年のはじめに「シルミド／SILMIDO」と「ブラザーフッド」という核弾頭のような作品で、観客1千万人動員という不可能の扉を開けた。5月までの韓国映画のマーケットシェアが60パーセントを超し、年間1億人以上が劇場に足を運ぶ韓国映画市場において、現在、韓国映画はどの時代にもなし得なかった栄光を享受している。また、韓国のスターたちは、香港、台湾、日本、中国で韓流旋風をおこしている。現

在、韓国の大衆文化の中で唯一、資本を回収することができているのが映画だ。すべてのことが韓国映画の明るい未来を予言しており、こうした期待感ゆえに、映画界の中にさえ「これ以上、スクリーンクォーター制は必要ない」という極端な意見が存在している。

しかし、すべては未熟な空想に過ぎない。化け物のような韓国型ブロックバスターの成功は、映画界に投機的な性格の短期金融資本の流入を促したが、これらの資本が望んでいるのは、あっという間に過ぎ去ってしまう流行に便乗するような低級な企画の映画だけだ。一方、こうした、映画界からいつ離れてしまうかわからないような資本をつかまえることにあくせくしている映画製作会社は、速戦即決で作られる水準以下の映画を量産している。今年の1月以降に製作された韓国映画の大部分がこうした見方を証明している。韓流旋風は、テレビドラマの単発的なスター・イメージに便乗した、危うげな土台の上に立っているだけであるし、スクリーンクォーター制を不必要と感じるのは、ハリウッド映画を含めた世界映画全般が沈滞期にある、ほんの短い間だけだろう。

「ブラザーフッド」

見かけは派手に、のびのびと育っているように見えるが、内側は不実で、危険な状態にある。このような奇形的産業構造の中では、残念なことに、人々の関心も産業的な基準で作られた映画に集中している。極端に言えば、現在の韓国において、映画自体の内的な進化と成長について考えている人は、ごく少数の作家主義の監督たちと、何人かの、ものの分かったプロデューサーたち以外にはいないように見える。そしてこれは、非常に危険なことに、観客たちが映画から得ることができる"まっとうな楽しみ"が、この先、新たには登場しないような、暗たんたる未来を予感させる。

まさに、ここに、韓国の映画ジャーナリズムの役割がある。映画ジャーナリズムの最大の目標は、映画が提供することのできる快楽の多様な種類と方法を、観客と共に絶えず研究し、適用し、提示することだと思う。映画の快楽は、時の流れと共に多次元的に変わっていく。特に、最近の韓国では、これまで楽しいと感じていたものとはずいぶん違ったものが、新しい楽しみとして登場している。重い歴史的現実をひっくり返してみたり、難しく複雑な知識さえ、それを認知して耽読することで新しい楽しさを感じるような、新快楽主義時代を迎えているといえる。大衆文化の帝王として君臨する映画は、絶え間なく流れ込む他の大衆文化の影響はもちろん、世の中のすべての要素を飲みこんで、ますます複合的で新しい楽しさを作り出している。映画ジャーナリズムは、このように成長し、変化していく快楽の流れを、観客と一緒に後押しする時にその存在価値を持つ。危険な崖っぷちでよそ見をしているような現在の韓国映画の状況の中で、映画ジャーナリズムは、分析と提案のフレームを前進させ、一歩先んじて提案し、開発し、発見するところにまで行かなくてはならない。

「箪笥」

FILM2.0がしようとしていることは、まさに、この映画の快楽の中にある。映画の最終目標は、観客に楽しさを与えることだという前提の下、映画がジャンルの中で遊戯する映画的快楽、映画が世の中と関係を結びながら生み出す新しい認識のフレームを、観客の健全で進歩的な快楽のパラダイムの中に吸収させ再生産させること。それが映画の内的な進化を心より願いながら、絶えず観客に新しい映画の見方を提案するFILM2.0の究極の目標だ。このような意図の下では、伝統的な意味での映画批評も当然、変化しなければならない。

映画の価値を評価する新しい基準を提示し、見過ごされてきた価値を浮上させ、時代の流れとの接点をとらえて映画の立場を再確立させること、そこに新しい映画批評の道があるとFILM2.0は信じる。

このような映画ジャーナリズムの役割と批評の進歩は、ただ一つの媒体だけで成しうることではない。連帯し、共に構築していくことは、世界のジャーナリズムの義務であり、日本の映画媒体、そして映画ファンたちに望むこともそれだ。韓国映画が日本に入っていると同時に、たくさんの日本映画も韓国に入ってきている。私たちが警戒しなければならないのは、スターたちを含む大衆文化の表面的なイメージが作り出した虚像と、大衆商業映画の伝統的な慣習がもたらした一時的な幻覚だ。そういったものを取り除き、それぞれの映画が孤軍奮闘しながら捜し出そうとしている新しい快楽の形態や、進歩の流れを後押ししてほしい。それは映画ジャーナリズムが生きる道であるだけでなく、世界映画の健全な成長の一助となり、私たち自らの生を擁護し尊重する道でもある。

香港

『電影双週刊』

編集長　陳柏生（チャン・バクサン）さん

『電影双週刊』は1979年の創刊以来、日本の方から、「キネマ旬報」のような路線をいく雑誌だ」とよく言われてきました。でも、私から言わせると、恥ずかしながら、『電影双週刊』は「キネマ旬報」には、まだまだ程遠い存在だと思っています。

「キネマ旬報」は、85年という長い歴史を持ち、多くの優秀で力のある映画人や評論家と、とても良い関係を築き、日本の映画界に大きな貢献をされてきました。

毎年、評論家によって選出される「キネマ旬報ベスト・テン」も、これによって、より一層、作品を的確に評価することに貢献していると思いますし、また、「キネマ旬報ベスト・テン」は、「香港アカデミー賞」にも影響を与えていると思われます。

私は『電影双週刊』を作る際に、いつも、「キネマ旬報」同様、香港映画のさらなる推進力となれればと思っています。

「キネマ旬報」は、かなり早い段階から積極的に香港映画を日本の観客に紹介し、香港映画の日本への普及に大きな力を貸してくださいました。香港映画界を代表し、「キネマ旬報」の大いなる努力に心から感謝いたします。

さらなる飛躍とご成功をお祈りいたします。

「インファナル・アフェア　無間序曲」

「2046」

シリーズ化、決定！

創刊85周年特集・第2弾
『ジャンル別オールタイム　ベスト・テン』はいかがでしたでしょうか。
やはり「○○○○」が1位だったか、とか、どうして「×××」が入っていないんだ！
などなどいろいろな声が聞こえてきそうですが、いかなるベスト・テンも絶対的評価ではありません。
時代背景や相対的価値、またいまならDVD発売のタイミングなどによっても変動するのではないでしょうか。
この順位をネタに、皆さんの間での映画談義に花が咲けば幸いです。

ところで、どうして時代劇、ラブストーリー、アニメーションの3ジャンルだけなの？
と思われた方も多いのではないでしょうか。
おっしゃるとおりです。そこで、

『ジャンル別オールタイム　ベスト・テン』のシリーズ化を決定いたしました。

ラインナップは
『サスペンス・ミステリー』『コメディ』『ラブストーリー（日本映画篇）』『ホラー』『西部劇』など。

第1弾は
『サスペンス・ミステリー　ベスト・テン』
秋頃の掲載を予定しております。

ご期待下さい！

FACE04

藤原竜也

作品に捧げたひと夏

取材・構成／轟夕起夫　撮影／冨永智子

お待たせしました！ と元気よく、ほんのり額に汗を滲ませて、藤原竜也は姿をあらわした。つい先ほどまで、NHK大河ドラマ『新選組！』の収録に追われていたという。きっと彼の頭の中はいま、〝沖田総司〟の役の余韻を断ちきって、これから喋ることになる新作映画「ムーンライト・ジェリーフィッシュ」の記憶へと、急いでモード転換しているところに違いない。

しばしの沈黙。目と目が合う。第一声はこうだった。

「脚本を読ませていただいて、ストーリーそのものにとても魅力を感じたんです。でも最初は、僕とヤクザ役って結びつかないんじゃないか、と客観的に思った。演じるのは難しいだろうなあ、と。そうしたら監督（本作で劇場映画デビューの鶴見昴介）が〝そんなに構えなくてもいいのでは〟って助言してくれたんです。このセイジって男は、病気の弟のためにお金が必要なのであって、それで歌舞伎町を根城に、ヤクザという世界で生きているだけなんだって」

セイジの弟ミチオ（木村了）はムーンライト・チルドレンと呼ばれている。紫外線を浴びると皮膚ガンを起こす難病ゆえ夜しか出歩けない身。つまり、セイジという主人公はどこまでも〝闇〟の世界に囚われてしまっているのだ。

「ムーンライト・チルドレンについては、TVでドキュメンタリー番組を観て、知識としてはあったんですよね。それで、そのことを忘れかけてたときに映画の話をいただいて、〝そういえば俺、あのときすごく考えさせられたよなあ〟と思いだして。うん、ムーンライト・チルドレンという題材に興味を惹かれたのは確かですね。だからこれは〝ミチオの映画〟なんですよ。演じた木村くんは大変だったはず。作品も世界観も彼を中心に回っていて、芝居がシッカリしていないとすべてが崩れてしまうわけですから。木村くんとのシーンはどれも忘れ難いですね」

社会から見放され、またそんな社会を突き放そうと二人の世界を作って、日陰で生きていく兄と弟。「バトル・ロワイアル」シリーズしかり、舞台で挑戦した『ハムレット』しかり、藤原竜也には〝苦悩〟のキャラクターがよく似合う。

「映画では、世間に対し背を向けた二人にヒロイン（岡本綾）が手を差し伸べるんですが、そこまで腹を括ったセイジがパッと出会った女性にそう簡単に心を許せるのか？ そこは現場で演じながら監督とかなり話しあいましたね」

鶴見監督とはすっかり気心の知れた関係になり、初号を観たあとも、二人で飲み明かしたそうだ。

「ええ。反省会を(笑)。監督とは互いに何でも言いあえる間柄になったので、完成作を観て、いろいろ話しあったんですよね。僕の目からすれば〝こうした方がよかったかな〟って演技があって、それで監督に〝まだ間に合うからこういう風にリテイクしましょうよ〟なんて提案したり(笑)。でも監督は〝大丈夫、本当に大丈夫だから〟って。結局朝方まで、そんな話を肴にして飲んでましたね」

去年ひと夏をあげて参加した映画。「それだけの意味のある作品になったと思う」と彼は胸を張る。

「拘束時間でいえば、〝深作組〟よりもタイトで大変でしたね。あと夏の暑さ。でも限られた境遇の中でひとつのものをみんなで作りあげていこうという姿勢が僕は好きなんですよ。スタッフの、作品への愛情をヒシヒシと感じた。それが毎回、映画の現場の楽しさのひとつなのかなって思います」

その楽しさを教えてくれた深作欣二監督が残した遺産を最近、よく観直している。特に好きなのが『県警対組織暴力』(75)。実は本作の中にも深作映画の有名なシークエンスが盛り込まれていた。

「映画の前半、ミチオがフルーツを嫌がって食べないシーンがあるんですが、ミニカーに果肉を乗せて、汽笛の真似をするのは僕のアイデア。『仁義なき戦い 広島死闘篇』(73)の、北大路欣也さんからインスピレーションを受けたんです。北大路さん扮する山中正治は拳銃を撃ったあと、モノ悲しく口笛を吹くんですよね（ちなみにメロディは『予科練の歌』）。それに衝撃を受けたら、ああいう形で反映されてしまった(笑)。舞台でもあるんですよ。あれだけ稽古で台詞のやりとりをしていても、何かの拍子で生まれた芝居がうまくハマったりする。こういうことって本当によくあるんです」

12月には『ハムレット』に続く鈴木杏との共演、『ロミオとジュリエット』（日生劇場ほか）の舞台も。なるほど、さまざまな〝引き出し〟が藤原竜也を厚みのある役者にしているのだ。

「ムーンライト・ジェリーフィッシュ」
●監督／鶴見昴介　共演／岡本綾、木村了、石立鉄男、石橋蓮司　●8月7日より新宿トーアにて

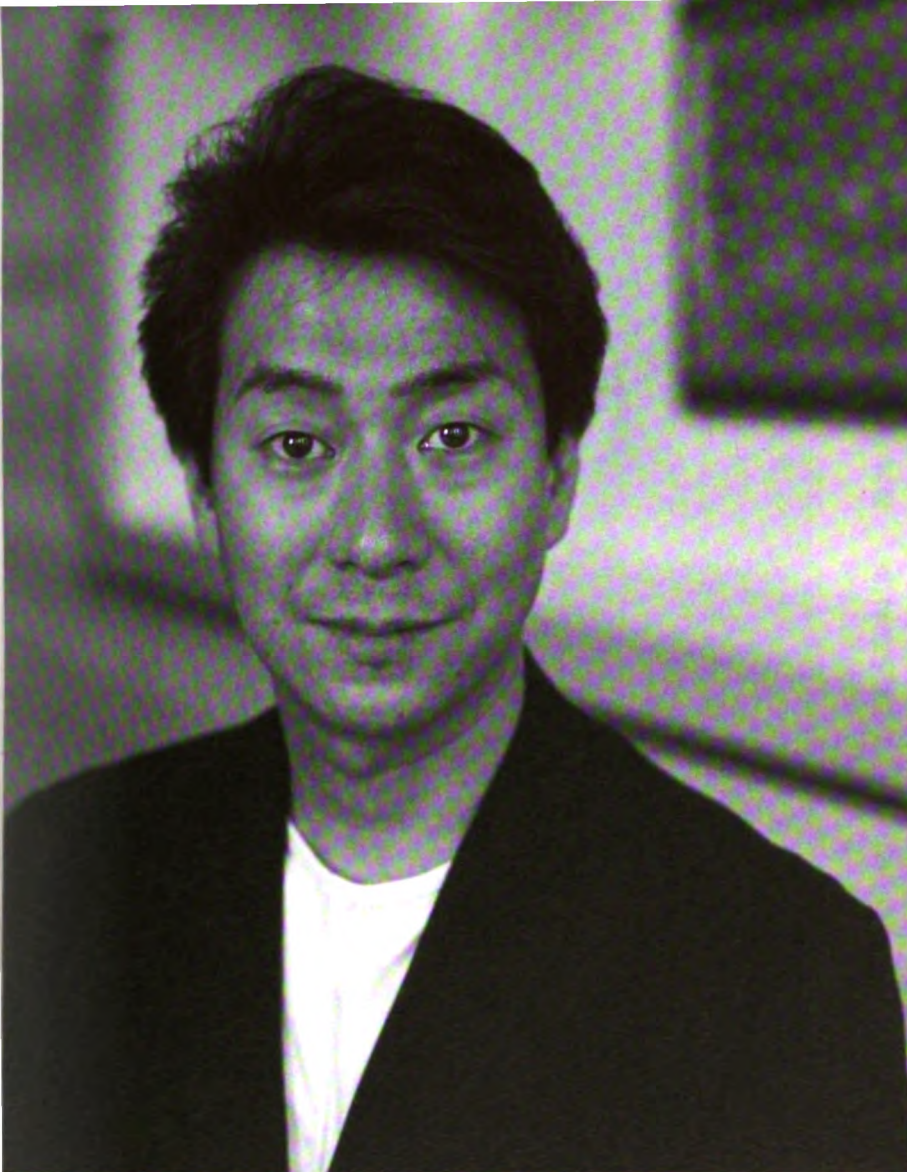
FACE

藤原竜也

1982年埼玉県生まれ。97年舞台『身毒丸』でデビュー。その後、現在出演中のＮＨＫ大河ドラマ『新選組！』をはじめとしたテレビドラマや舞台での活躍はもとより、「仮面学園」(00）や「バトル・ロワイアル」(00)「ＳＡＢＵ～さぶ～」(02)「バトル・ロワイアルⅡ［鎮魂歌］」(03)など映画でもさまざまな役柄を演じる。

フロントインタビュー69
歌舞伎役者

中村福助

取材・文＝萩尾瞳
撮影＝吉岡誠

題材が『娘道成寺』。これは是非やりたい、と

歌舞伎界の名門にして、女形として実力、人気ともに高い中村福助さん。彼が初めて映画に主演した。高山由紀子監督の「娘道成寺　蛇炎の恋」である。演じているのは、芸に執念を燃やす当代一の女形の役。まさにぴったりの役を演じ、タイトルにもなった名作舞踊を披露した彼に、撮影体験、『道成寺』という踊りへの思いなどを伺う。

自分自身に向かう踊りをフィルムに

「映画の題材が『道成寺』ですからね。万障繰り合わせてやらせていただきました。高山由紀子監督と岡本みね子プロデューサーのご熱意もありましたが。『道成寺』と

いえば女形の舞踊の最高峰。成駒屋（福助さんの屋号）にとっても大切な舞踊のひとつ。尊敬する大伯父の六代目歌右衛門が『娘道成寺』という映画を残してますが、私自身も、やれる間にきちんとした形でフィルムに残していただければ、と。今回は作品の一端かも知れないけど、ビデオやDVDではなくて、フィルムで撮るという点に食指が動いたんです」

映画「娘道成寺　蛇炎の恋」主演の動機を、こう語る。映画は、牧瀬里穂演じるバレエ・ダンサー詩織が、双子の妹の自殺の理由を知ろうと彼女が師事していた当代随一の女形・村上富太郎に弟子入りするが、自身も富太郎と彼が執念を燃やす踊りに魅了されていく、というちょっぴりミステリアスな味わいのラブ・ストーリー。その富太郎を演じるのが、中村福助さんだ。それにしても、初主演にして、劇中では高野山や京都南座で大作『道成寺』も披露するヘビーな撮影。しかも、歌舞伎の公演も抱えている身である。時間的、体力的にも大変だったはず。

「本当のこと申し上げて、映画の撮影の大変さを後で思い知りましたね（笑）。最初はお芝居（歌舞伎）出演の合間に撮る話をしていたのが、突き詰めていく間に、体力的にも精神的に難しいのではないかということになり、ご相談申し上げて映画に専念できる時間を取っていただいたんです」

そんなこともあって、当初は昨年春先だったクランク・インも、昨夏にまで延びたのだった。

「7月に高野山での撮影でしたが、それで良かったと思います。金剛寺の仮設舞台で『道成寺』を踊ったのですが、寒さはもちろん、あれだけの規模のものは春先の撮影だったらできなかったでしょうね。ロケ準備もですが、自分自身にも精神的余裕が持てましたから」

つまりは、それほどまでに『道成寺』の踊りに心魂傾けていたということ。実際、高野山のシーン

1960年東京都生まれ。曽祖父は五代目中村歌右衛門、父は七代目中村芝翫という梨園の名門の長男として生まれる。弟は中村橋之助。6歳で五代目中村児太郎として初舞台。92年九代目中村福助を襲名。襲名披露で演じて以来、「京鹿子娘道成寺」の白拍子花子ははまり役。本作が映画初主演作品。

「娘道成寺〜蛇炎の恋」
●監督／高山由紀子　共演／牧瀬里穂、須賀貴匡、風間トオル、真矢みき
●8月28日より東劇ほか全国にて公開

の鮮烈さは見ものだ。

「高野山では、宿坊に泊めていただき踊る前に座禅をさせていただいて、弘法大師の手の中に抱かれたような気持ちで務めることができました。普段よりもっと多くのものが見えてきたようで、自分自身に問う踊りをキャメラに収められたのではないかと思います。一節だけですし、その通り（映像に）表われてるかは分からないけど」

よく知られているように、『娘道成寺』は白拍子・花子の恋物語。恋しい僧・安珍を追い求める花子が、ついには蛇へと化身して鐘の中に隠れた彼を鐘もろとも焼き滅ぼしてしまうという舞踊劇だ。楚々として可憐な花子が、柔らかに艶やかに変貌していき、最後には激しい情念を見せる心情表現は女形の集大成。「引き抜き」の手法を使った華やかな衣裳の変化も鮮やかな大作だ。その『道成寺』を、

「私にとってライフワークなんです。子供の頃から踊りたかったし、（福助）襲名の時にも踊りました」

と言うように、彼の人生の節目節目にこの作品は登場している。

「父（芝翫）が『道成寺』をやるとなると家中が臨戦体制だったんです。食事も気を付け、家中がピリピリして。それほど大変な作品なのに、眠くなったりする自分が情けなくて、歌舞伎に専念するため学校にも決別しましたし」。

そんな芸への執念、厳しさは、演じる富太郎にも反映している。

「みんなを犠牲にしても舞台に懸けちゃう、という面はありますから。その意味では、この役を演じるのに歌舞伎役者で楽だった（笑）。自分も死ぬまで舞台で台詞を言っているだろうな、とか気持ちが重なる部分があって。高山由紀子脚本の切り口もすごい。女性にしか書けない感じがありますね」

スタッフ全員が踊れた『道成寺』

息子の児太郎さんが、富太郎の子供時代を演じているのも話題だ。

「（岸部）一徳さんと毬谷（友子）さんと共演する修業シーンで『違う！　ピシッ！』とかやられてポロッと涙を流したんです。我が息子ながら、すごい感性だなって感心してたら『だって、本当に痛かったんだもん』って言うの（笑）」と、嬉しげに語る。嬉しいといえば、初主演の撮影現場もかなり嬉しい感動だったよう。

「舞台は役者ありき、なんですね。スタッフはいるけれど。でも、映画は違う。たった5秒を撮るのに、みんながひとつになる。いろんな人が携わる集団作業の密度が映画作りの面白さ。それが直に分かって、すっかりやみつきになりました。それに、スタッフ全員が『道成寺』をみんな踊れちゃうくらい熟知してくれたのも嬉しかった。南座での撮影なんか、加藤（雄大）さんのカメラが僕と一緒に踊るんですから。そりゃあ快感でした」。

映画主演は初だが、歌舞伎界では新しいことに果敢に挑戦してきた。児太郎時代は市川猿之助の「スーパー歌舞伎」の舞台に立ち、今は中村勘九郎の「平成中村座」にも参加。野田秀樹の書き下ろし歌舞伎『研辰の討たれ』『鼠小僧』にも出演すれば、新演出の「コクーン歌舞伎」にも出演している。

「やっぱり、お客様が楽しくなくちゃ。"傾く(かぶく)"という言葉も、そうでしょう。伝統は大切だけど、新しいこともしたい。突飛なことという意味じゃなく、ちゃんと裏打ちがあっての上でね」

その姿勢は色へのこだわりにも出ている。歌舞伎座で瀬戸内寂聴の新作『阿国』を演じ、鮮やかな紫色の衣裳で観客の目を楽しませた。また「コクーン歌舞伎」の『三人吉三』でお嬢吉三を演じ、従来なら黒の衣裳を朱に変えて纏った。

「阿国はあれぐらいの色を着ただろうし、お嬢吉三も（衣裳担当の）日比野こずえさんの意見に同調したから。それに、昔の絵を見るとすごく派手な色を使っている。現代の方がおとなしくて、だいたい大正時代から色が失われているんです。昔は、着物屋と結託して（笑）、芝翫茶とか坂東柿とか新色をどんどん出していたのにね。今度の映画でも、高野山の衣裳で白を赤に変えたところがあります。反対する方もいるかも知れないけど。映画に描かれる歌舞伎界の詳細も実際とは違う点があるけれど、それはそれでいいと思うんです」

かつては舞台のみで姿を見せていた福助さん、三谷幸喜脚本の大河ドラマ『新選組！』でも孝明天皇を演じるなど、今やすっかり映像にも積極的な姿勢。これからも新しい顔を見せてくれそうだ。

17th TOKYO INTERNATIONAL FILM FESTIVAL
2004.10.23～10.31

キネ旬フロント

第17回 東京国際映画祭 始動

文・編集部

秋の東京を彩る映画の祭典「東京国際映画祭」(以下、TIFF)。17回目を迎える今年は10月23日から31日までの9日間の日程で、渋谷・東急Bunkamuraと六本木ヒルズの2会場をメインに開催される。

"ダブル"メイン会場――格調高いBunkamuraと、話題の新都市・六本木ヒルズ――にすることで、"伝統"と"革新"が融合した、新しいTIFF誕生の予感がする。オープニング・セレモニーは六本木ヒルズで行い（華やかなレッドカーペットも昨年に引き続き実施）、クロージングは従来どおり渋谷Bunkamuraにて行う予定だ。

「TIFFを盛り上げていくためには、華やかなイベントが必要」という角川歴彦ゼネラルプロデューサー（以下、GP）体制となって2回目となる今年、新たな企画としてフィルムマーケットの実施と「黒澤明賞」の創設が、先ごろ行われた記者発表会で明らかにされた。

"日本ブランド"を世界へ発信していくことをビジョンのひとつに掲げるTIFF。映画はもとより、日本が誇るビジュアル・コンテンツを世界に紹介し、これらの輸出促進につながるビジネスチャンスの創出となるフィルムマーケットは、角川GPの念願でもあった。映像作品をはじめコミック、ゲームも出展される「東京国際エンタテインメントマーケット2004(TIEM)」は、10月22日～24日に幕張メッセ（6000坪のスペース！）にて開催される。もちろん一般ユーザーも入場可能だ。また映像作品の上映権、パッケージ化権等の取引に特化した「TIFCOM 2004」は25日～27日の日程で六本木ヒルズ内にて実施される。

新設の「黒澤明賞」については、「その年に世界的な活躍を見せた映画監督、プロデューサーに贈る賞として位置づけ、恒久的に続けていきたい」とした上で、受賞者にはなんと「コンペティション」部門グランプリと同額の賞金10万ドルが贈られるという。角川GPは「TIFFに出席できて、願わくば黒澤監督を尊敬している人に贈りたい」と付け加えた。

さて、気になる上映作品はただ今選定中とのことで、8月下旬の第2回記者発表会で明らかになる予定だ。自主企画の「コンペティション」部門（16作品を上映予定）、「特別招待作品」部門（同20作品）、「アジアの風」部門（同17作品）のほか、百花繚乱の協賛企画とあわせて9月頃に続報をお届けしたい。

左より境真良・映画祭事務局長、角川歴彦GP、高井英幸・財団法人東京国際映像文化振興会理事長

記者発表会

キネ旬フロント

福助さんに富太郎を演じて欲しかった理由

文・高山由紀子
「娘道成寺～蛇炎の恋」監督

杉の巨木に囲まれた静寂の中に、突如三味線の音が鳴り響く。高野山山頂の聖地壇上伽藍。ライティングされ、夜の闇に浮かび上がる朱塗りの大塔をバックに、純白の衣裳を身にまとった福助さんの踊る「娘道成寺」の開始だった。やがて純白の衣裳は真紅に変わり……それは演じる白拍子花子を超えて、清姫の化身そのものだった。

「舞台で先生の道成寺を観た時、私にはとても男らしい行為に感じました。涙が出るほど心を打たれました」

これは牧瀬里穂さん演じる遥香が、富太郎に云う台詞である。

そしてこれはそのまま私自身が福助さんの舞台姿に感じることでもあった。

女形の役者さんに男らしいというのは失礼なことかもしれない。けれど、美しく、可憐で、妖しい、生身の女ではとても辿り着けないほどの女性を演じるということ、そのエネルギー、そのパワー、その繊細な心、そして演じきるということ、私にはこの上なく男らしい行為に見えるのだ。

私の中で、福助さんは富太郎であり、富太郎は福助さんなのかもしれない。

あるインタビューで、「福助さんがOKしてくれなかったらこの企画は封印してたと思う……」と答えたことがあったけれど、たぶんそうしていただろう。

女を男が演じるということ。それは「虚構」の世界である。

「私は舞台以外誰も愛したりはしない」と云い、「舞台に嘘の花を咲かせるそれが私だ」と云う。

「虚構」の世界を演じきるということ。そして富太郎は「虚構」の世界を生きる。

嘘の花を幻と知りつつ手を伸ばし、その手に掴み取ろうとする。そのとき「虚構」はこの世で最も真実に近づくのではないだろうか。

真実にとって代わるのかもしれない。

水に映る月が、時として天空にかかる月よりも美しいように……。

京鹿子娘道成寺の一節。

〽われも五障の雲晴れて　真如の月を眺め明かさん

五障とは人間が悟れない五つの障害であり、真如の月は宇宙の心理とでも云うのだろうか。男が女を踊る、というのが私の中のひとつのテーマだったけれど、富太郎は真如の月を求め、そして福助さんは私の中の富太郎を心ゆくまで演じてくれたと思う。

「娘道成寺～蛇炎の恋」
舞踊家の妹の自殺の真相を知るべく、彼女が《娘道成寺》を学んだ女形・富太郎に師事するダンサーの姉・遥香。稽古に集中する遥香に、富太郎への愛が芽生える。

キネ旬フロント

「ミラーを拭く男」、3年ごしの劇場公開

脚本(ホン)で楽しみ、演出で楽しみ、編集で楽しんだ(梶田征則監督)

文・おかむら良

梶田征則の劇場用長編監督デビュー作「ミラーを拭く男」は、本人の言葉を借りると撮影から公開まで「3年ごし」になった。わたしが仙台周辺のロケを見たのは02年の夏で、梶田はジーンズにTシャツ、頭にタオルを巻いて動きまわり「エネルギッシュな監督」という印象だった。初めての作品にいろいろな思いがあったに違いないが、なぜそんなに時間がかかったのかという疑問もある。

「一番の理由は作品全部に関わりたかったからで、自分で脚本を書き、撮影をし、編集も全部自分でやった。脚本の段階で迷ったところは撮影でも引きずり、編集した後も迷っています。突然、雨が降ったとか、主演の緒形拳さんが手にケガをした、といったハプニングが起きたところは迷ってないですね」

梶田は67年、東京都出身。高校卒業後いくつかのアルバイトを経て、映画サークルに参加し、24歳で3分のビデオ作品を撮る。その後VTR作品を何本か手がけ、「赤い帽子の女」などの「映画・発禁本カストリキネマ」3作品を監督する。「ミラーを拭く男」はサンダンス・NHK国際映像作家賞2002の受賞作の映画化だ。

「カーブミラーを拭くという非現実的な行為とリアリティをどう融合させるか、演出でも編集でも葛藤しました。どちらかに固まるのではなく、その不安定な雰囲気を出したかった。僕は基本的にナレーションとか心情をうたう映画はあんまり好きじゃないので、そこ

梶田征則監督

「ミラーを拭く男」撮影現場

にはいかない方がいいかなと。撮影はハイビジョンだったので映像は全部パソコン上にあって、あらゆることができる。フィルムのように一度切ったら戻せないわけじゃないからよけいに迷って、編集に半年くらいかかりました。もともと映像は40時間くらい撮っていて、それ自体が撮りすぎで」

「ミラーを拭く男」は定年を前にしたサラリーマン・皆川勤が主人公。彼は交通事故を起こしたのをきっかけに仕事をやめてカーブミラーを拭きはじめ、家族が振り回されていく。皆川を緒形拳が演じ、妻は栗原小巻。「今そのへんにいそうな子供にしたかった」と、DA PUMPの辺土名一茶と国仲涼子が長男と長女役に起用された。

「女の子がカーブミラーがなくて事故で亡くなったという新聞記事と、マンションの駐車場で管理人さんか誰か初老の男性が、リュックをしょってカーブミラーを拭いている姿が、ずっと印象に残ってました。どちらもワンアイデアだから映画にならない。でも父親が定年前に鬱病になって仕事をやめたのがきっかけで、この脚本を書き始めました。父は交通事故を起こしたこともあるんです」

鬱病が治ったお父さんが「オレのことを映画にすればいいのに」と言ったことを、母を介して聞いたことも梶田の背中を押した。

撮影は「ハッシュ!」などの上野彰吾。舞台のほとんどは皆川がミラーを拭く北海道から東北で、みどりの濃い風景が美しい。

「絵コンテを描いて撮影しましたが、ミラーにスタッフが映り込むので打ち合せが欠かせなかった。編集段階でミラーに映る上野さんをCGで消したところもあります。

「ミラーを拭く男」
監督・脚本／梶田征則　出演／緒形拳、栗原小巻、辺土名一茶、国仲涼子、津川雅彦　配給／パル企画
8月21日よりテアトル池袋にて

変わった形のミラーはドラマの流れを切るのでやめ、誰でも知っている風景もやめたので、函館の山がさり気なく映っている程度です。僕が演出するというよりも、カーブミラーが演出したという部分もあります」

梶田はこの作品の完成までを「わがままですが今になれば、結果的に脚本で楽しみ、演出で楽しみ、編集で楽しんだ」と言う。そのプロセスの中で彼が体験した葛藤や迷いハ大切なもので、これからの作品にどう反映されていくのかが問題という気がする。

緒形拳、皆川を語る

撮影現場での緒形拳さん

「皆川はずっと組織の中で生きてきて、何の目的も見つからなかったと思う。それがミラーを拭くようになって、これは悪くないなーと思ったんだろうな。人間ってせっかく生まれてきたんだから、何かやりたいんだよ」

主人公のミラーを拭く男・皆川勤を、緒形拳はこう語る。監督の梶田は父親をモデルに皆川を創造し、緒形をイメージしながら脚本を書いた。では似ているのかと思うと「僕とお父さんはぜんぜん似てないらしいよ」という。

「これは男がひとりで雄々しく生きる話ではなく、家族の話でウソっぽくない感じがした。皆川は何もしゃべらないしダイアローグもないけど、上野という男が出てきて大阪弁でダラダラしゃべるのがおもしろいんだ」

では撮影はどうだったのだろう。

「淡々とミラーを拭くのかなと思っていたら実は、アクション映画だった。自転車に脚立を乗っけて走るというのは、リキがいるんだ。片手を離すとフラッとするし、横をダンプが走っただけでフワーッと浮くように揺れる。まるで帆掛け船を走らせているような感じだね」

ダイアローグはなく、セリフも非常に少ないのだが、だからこそ皆川がミラーを拭くひたむきさだけがクローズアップになる。

HOLLYWOOD

|ワールド・ニュース|ハリウッド|井口健二| Kenji Iguchi |

©Stephen Shugerman／Getty Images／AFLO FOTO AGENCY

レニー・ハーリン

「黒い絨毯」

新作公開間近のレニー・ハーリン監督 構想15年のバイキング映画に挑む

「エクソシスト」の発端を描いた新作“Exorcist：The Beginning”の公開を控えるレニー・ハーリン監督が、古代から北欧で活躍してきた海洋民族バイキングたちを主人公にした映画に挑戦する計画が発表された。この作品は、“The Northmen”という題名で、ショーン・オキーフとウィル・ステイプルスの脚本によるもの。2人のバイキングの兄弟が、誘拐してきたイギリスの王女に恋心を持ったことから始まるドラマを描くものだそうだ。元々スカンディナヴィアの出身で、幼い頃からいろいろな民話などを聞かされて育ってきたハーリンにとっては、バイキングは言わば心のヒーローのようなもの。15年以上前から彼らについての映画を撮りたいと考えていたということだ。その夢がようやく実現するものだが、ハーリンは、「表面はラヴロマンスだが、映画では古代バイキング社会の複雑な内情を克明に描きたい」としている。因みにハーリンは、95年「カットスロート・アイランド」で海賊映画を手掛けたことがあるが、今一つ成果を挙げることが出来なかった。今回はその分も含めて期待したいものだ。なお、ハーリン監督の作品では、他に“Mindhunters”が来年日本公開予定だ。

パニック映画「黒い絨毯」のリメイクを 脚本家ジョナサン・ヘンスレーが脚本監督

54年に、ジョージ・パル製作、バイロン・ハスキン監督、チャールトン・ヘストン、エレノア・パーカー主演で映画化されたパニック映画「黒い絨毯」“The Naked Jungle”を、「アルマゲドン」などの脚本家ジョナサン・ヘンスレーの脚本監督でリメイクする計画が発表されている。オリジナルは、1901年を時代背景にして、南米奥地のジャングルで農園を経営する男と、彼の許に手紙だけを頼りにやってきた花嫁のドラマを軸に、その農園を襲う集団殺人蟻マラブンタの恐怖を描いたもの。黒い絨毯のように野山を覆いながら進む集団蟻を当時最新の特撮技術で描いていた。因みにパル＝ハスキンのコンビは、特撮映画として多様なジャンルの作品を手掛けたが、その中で本作は動物パニック映画の走りとも呼べるものだ。そして今回リメイクを手掛けるヘンスレーは、「オリジナルは、今見ても充分通用する作品と思うが、リメイクでは最新のＣＧＩエフェクトを導入して、さらに次元の違った作品にしてみせる」と抱負を語っている。なお、本作はパラマウント傘下のアルファヴィルというプロダクションで制作されるが、同社では、先にヘンスレーの監督デビュー作“The Punisher”も手掛けている。

WORLD NEWS

「ドラゴンボールZ」

脚本家が発表された『ドラゴンボールZ』実写ハリウッド版計画

これで3回連続となるが、こちらも待望久しい日本アニメーションの実写ハリウッド版の計画で、フォックスが進めている『ドラゴンボールZ』に、ベン・ラムゼイという脚本家の名前が発表された。彼は、先にコロンビアで進められているマーヴル・コミックスの映画化"Luke Cage"や、同じくコロンビアで進行中の"Static"という作品も手掛けているようだ。ラムゼイが本作にどのような思い入れを持っているかは不明だが、タイトルに"Z"が付いているということは、主人公の悟空が地球壊滅を目論むサイヤ人の血を引くことが判明する青年期の物語。展開やアクションのスケールも最大になる部分を映画化する訳で、大いに期待したいところだ。因みに今回の報道で本作は、日本製のmangaを原作としたanimeの映画化と紹介されていた。

©Mark Mainz／Getty Images／AFLO FOTO AGENCY

クエンティン・タランティーノ

"Sin City"の製作にゲスト監督として参加したタランティーノ

ロバート・ロドリゲス監督のDGA脱退に発展した映画"Sin City"の製作で、テキサス州オースティンのスタジオで進められている撮影に、クエンティン・タランティーノが予告通りゲスト監督として参加したことが報告された。この製作では、ロドリゲスが原作者のフランク・ミラーを共同監督としたことが、DGA規定に違反しているとされたものだが、タランティーノは、映画の最終章の中の1シーンを担当、クライヴ・オーウェン、ベニシオ・デル・トロ、ブリタニー・マーフィらの出演シーンを監督している。なお、この監督料は1ドルで、これは「キル・ビルVol.2」の音楽をロドリゲスが1ドルで引き受けてくれたことへのお返しだそうだ。またタランティーノは、今回の撮影に使用されているデジタルカメラも使ってみたかったということのようだ。

ホワイトハウスには亡霊が住みついている？

ホワイトハウスの幽霊の伝説をモチーフにしたホラー映画

夏の納涼という訳でもないだろうが、幽霊映画の計画が続けて発表されている。1本目はソニー／コロンビアの計画で"Ghost Story"。如何にもという題名だが、この幽霊の登場する場所がホワイトハウスというのが味噌で大統領府を巡るいろいろな伝説を新大統領の11歳の息子の目を通して描くものだ。因みにジョン・フェルスンと共に脚本を執筆したラスティ・ゴーマンによると、ウェブで"White House"ghostと入れ、検索すると15000件以上ヒットするそうだ。もう1本はモーガン・クリークから、"The In-Between"という作品で、高校生の少女が、死んだ元ボーイフレンドの幽霊につきまとわれるというもの。彼は死後の世界で一緒に暮らそうと言い寄るのだが……。ジョン・グラスコーの脚本で、アメリカ配給はユニヴァーサルが担当する予定。

http://www.enpitu.ne.jp/usr4/47635/も見てください。

A S I A

|ワールド・ニュース|アジア|暉峻創三| Sozo Teruoka |

「マグニフィコ」

「プロスティ」

「マグニフィコ」、フィリピンの映画賞を席巻

今回から、時にではあるがフィリピン映画情勢も扱おうと思う。理由はただ一つ。フィリピン映画界に、確実に何かが起き始めたからだ。まだ韓国映画界のように好景気を享受しているわけではない。が、香港や台湾のニューウェイブ胎動期にも似た明るい気配が、微かに漂う。巨匠リノ・ブロッカの流れを汲む鬼才マリオ・オハラの傑作「防波堤の女」が、本年度カンヌ映画祭監督週間に異例の大抜擢をされたこと。新世代旗手エリック・マッティのフィリピン版「スパイダーマン」とでも形容すべき新作「ガガンボーイ」が、香港、ウディネ(イタリア)、プチョンなど目利きのプログラミングで定評のある国際映画祭に相次いで招待されたこと。ベルリンでの「マグニフィコ」(後述)の児童映画部門での受賞。……などなど、世界の目も少しずつフィリピン映画の最新の相貌に着目し始めた(因みにマッティの前々作「プロスティ」は、昨年の東京国際映画祭で上映)。そんなわけで後の日本での新しいフィリピン映画受容の下地を準備すべく、当面は日本と縁のある作品・人を中心にニュースを紹介していく。

その初回は、昨年から今年にかけてのフィリピン映画代表作を俯瞰するには絶好の、フィリピンのアカデミー賞とも称されるFAP(フィルム・アカデミー・オブ・ザ・フィリピンズ)アワードの話題。7月3日に開催された第22回のこの賞を席巻したのは、昨夏のアジアフォーカス福岡映画祭がいち早く紹介した「マグニフィコ」だった。本作は作品賞、監督賞(マーリョ・J・デ・ロス・レイエス)、主演男優賞(ジロー・マニオ)、助演女優賞(グロリア・ロメロ〔祖母役〕)、音楽賞(ルトゥガーズ・ラバッド)、脚本賞(ミチコ・ヤマモト)の各最優秀賞を受賞。それ以前に開催された幾つかの映画賞でも本作は主要賞を総なめにしており、名実共にここ一年の代表作と目された格好だ。主演男優、脚本両部門の受賞者は、名前が示す通り日本人の血を引く。その他の各部門最優秀賞は、「フィリピナス」が主演女優賞(マリセル・ソリアノ)を、「クライング・レディース」が助演男優賞(エリック・キソン)を、"Malikmata"が録音賞(アルバート・マイケル・イディオマ)、編集賞(ヴィト・カジリ)を、そしてマッティが「プロスティ」と「ガガンボーイ」の間に撮った"Mano Po 2"が美術賞(ロデル・クルス)、撮影賞(J.A.タデニャ)を、それぞれ受賞した。

WORLD NEWS

「LOVERS」

アジア各地でベールを脱いだ張藝謀の「LOVERS」

香港の名プロデューサー、ビル・コンが製作した張藝謀の「LOVERS」が、同氏製作の「僕の彼女を紹介します」に続いて中国、台湾、香港などで一斉お披露目された(日本では8月28日公開)。「僕の彼女〜」同様、監督のネームバリューはもちろんのこと、章子怡、金城武、アンディ・ラウという豪華主演陣、さらに香港(程小東)、日本(ワダエミ、梅林茂)などアジア圏を股にかけた著名スタッフ編成、加えて本来なら出演予定だったアニタ・ムイの逝去など、完成前から今年のアジア映画で最も話題の一本だったと言ってよい。

しかし結論から言えば本作は、監督の技以上にむしろビル・コンの巧みなプリセールス術(作品完成前に各国に公開権を前売りすること)の方が際立つ一本となってしまったようだ。実際、そのセールスは成功を収めたが、いざ完成した作品を目にすると、「僕の彼女〜」さながら作品そのものに対する厳しさの欠如が浮きあがって見えてしまう。

複雑な組織関係や人物関係の物語に陥りがちな時代劇、武侠ものというジャンルを借りながら、敢えて物語を金城と章子怡、そしてアンディの間の愛と謀略の三つ巴関係に絞りきったのは、今日こうしたジャンルの作品を作るに際しての卓見ではあったろう。しかしこの思いきった単純化が、画面そのものまでをも単純で平板なものにしてしまっているのはどうしたことか。武侠ものでありながら、シーンの重要な部分は大スターのうち一名か二名を寄り気味にとらえたショットで占拠され、他に馬、小道具、大道具のアップ・ショット(特撮も含む)への依拠もいつになく目立つ。時に大軍団や群集も登場するものの、それらはまるで連続テレビアニメの背景画のように、主人公たちと関わりを持たないままで存在し続けている。大スター同士のスケジュール調整が難しかったのか、天候やアニタの死など不慮の要因に左右され、予定したコンテ通りに撮ることが叶わなかったのか、あるいはロケ場所そのものの制約か、とにかく活劇的空間としての輝きはめったにそのショットに懐胎しない。各場面の内容も、キン・フーからアン・リー、はては「インファナル・アフェア」のアンドリュー・ラウまで先人たちが演出した名場面、名設定の再演集といった趣だ。それもまた、既にネームバリューのあるものの組合せで売るというプリセールス術に奉仕するための算段だったのかもしれないが。

ウォンビン

「誰にでも秘密はある」

イラク派兵に反対する映画人たち

ウォンビン兵役のため 2年間スクリーンを離れる

「ブラザーフッド」が7月22日から公開される香港に、プロモーションのためウォンビンが訪れた。14日にカン・ジェギュ監督と共に行った記者会見には、香港だけでなく、中国や台湾からも集まった報道陣100人余りが参加。この席でウォンビンは来年末から兵役に就くことを宣言。「2年間、映画界を離れたらファンが私を忘れるのではないかと心配だが、もし忘れられてしまったら、始めからやり直す心の準備がある」と入隊に臨む覚悟を打ち明けた。一方、カン・ジェギュ監督は「これからは韓国人のためだけではなく、アメリカなど全人類のための映画を作る」と宣言したとのこと。また、この訪問中ウォンビンが、韓中香合作映画の出演問題を協議する秘密裏の会談をしたのではないかというニュースも伝えられた。

イ・ビョンホン次回作で アクション・ノワールに挑戦

韓国での封切前に早くも日本公開が決まった新作「誰にでも秘密はある」とオムニバス映画「スリー　モンスター」の封切りを控えるイ・ビョンホンの次回作が「クワイエット・ファミリー」や「箪笥」のキム・ジウンが監督する「甘い人生」となることが明らかになった。“アクション・ノワール”となると見られているこの作品でイ・ビョンホンは、冷徹な知性と判断力でボスから全幅の信頼を受ける魅力的なホテルマネージャー役を演じる予定で、本格的なアクションにも挑戦するという。また、ドラマ『美しき日々』で、イ・ビョンホンの妹役を演じたシン・ミナが、尊大さと純粋さが共存するヒロイン役で出演する。コメディ、ホラーで、実力を発揮してきたキム・ジウン監督が新しいジャンルで見せる手腕も楽しみだ。

SQ制度死守のためのデモに 映画人3000人が集結

7月14日、ソウル、クァンファムン付近の路上で「スクリーン・クォーター制度（SQ制度）死守のための映画振興法改訂要求及び韓米投資協定阻止のための対国民報告大会」が開かれた。この日の集会にはアン・ソンギ、チャ・スンウォン、チャン・ヒョク、イ・ウンジュなどの映画俳優のほか、監督、プロデューサーなど、合わせて3000人が参加。これだけの数の映画人が集まった大規模集会は、99年以来、初めてのことで、韓国映画製作家協会は、この日行われる予定の映画製作を全面中断して集会に備えた。また、映画人たちは、イラクへの派兵反対にも大きく声をあげており、7月12日発売の『シネ21』にも、パク・チャヌク、ポン・ジュノ監督らによる宣言文と共に、派兵に反対する650人が名前を掲げた。

ソウル週末興行成績 6.28 7.4

順位	作品	観客数
❶	「ハリー・ポッターとアズカバンの囚人」（7月15日）	13万4300人
❷	「狼の誘惑」（7月23日、韓国）	10万人
❸	「キング・アーサー」（7月23日）	9万6571人
❹	「あいつは格好よかった」（7月22日、韓国）	6万人
❺	「私の彼のロマンス」（7月16日、韓国）	5万7600人
❻	「華氏911」（7月22日）	5万5300人
❼	「シュレック2」（6月18日）	1万1000人
❽	「回し蹴り」（7月23日、韓国）	9681人
❾	「達磨よ、ソウルへ行こう」（7月9日、韓国）	9572人
❿	「スパイダーマン2」（6月30日）	9200人

"Ae Fond Kiss"

ケン・ローチ最新作は閉鎖的な社会が阻む若い男女の恋愛物語

ケン・ローチの新作"Ae Fond Kiss"では、グラスゴーを舞台にパキスタン人移民2世の青年とアイルランド人女性の恋愛が描かれる。社会派ローチが描く恋愛にはとかく問題がつきまとい、この作品では閉鎖されたパキスタン人移民社会によって、またカトリック教会によって若い男女の恋は危機にさらされる。両親から押し付けられた婚礼を破棄した主人公の青年が、パキスタンから連れてこられた婚約者に引き合わされ、婚礼がキャンセルされていないことを知るシーンがこの作品のカギといってもいい。青年と、このシーンを目撃する主人公の女性の驚きと怒りは、熟練された演出とカット割りで臨場感を持って私たちに迫ってくる。この後に用意された結末の甘ったるさが、そのままローチの詰めの甘さにつながっているようで、少し興醒めする。

"Te doy mis ojos"

スペインの女性の自立をリアルに描いたイシアル・ボリャン

ローチの「大地と自由」(95)に出演していたイシアル・ボリャンが監督した"Te doy mis ojos"は、今年7部門においてスペインのゴヤ賞を獲得している。時代は変わったとはいえマッチョな男たちが多いスペイン社会において、暴力的な夫への恐怖を克服し妻はどうやって自立していくのか？夫の暴力に耐え抜いた母親世代、理解ある伴侶に恵まれた若い世代の妹、そして離婚を躊躇する主人公、と違ったタイプの女性がいるかたわら、妻への暴力を自制できない男たちがいる。夫たちの合同セラピーのシーンは傑作で、登場する男たちの姿は可笑しくも哀しくもある。更生するという夫の言葉を信じたものの再び暴力の犠牲となる主人公は、夫との肉体の悦びと自己の自立の中で揺れ動く。その微妙な心理を、女優ライラ・マルルが見事に演じる。

"Folle embellie"

映画デビューから30年進化し続ける女優ミュウ=ミュウ

この夏は女優ミュウ=ミュウの姿がスクリーンで目立つ。まずはドミニク・カブレラ監督の"Folle embellie"で、彼女はナチスの占領下にあるフランス東部の精神病院を脱走した一家の母親役を演じる。狂気の発作を起こす夫（ジャン=ピエール・レオー）に比べ、無口で控えめな妻には、狂気と正気の狭間を綱渡りしているような危なっかしさに加え、無限の包容力が同居している。マルグリット・デュラスの小説を忠実にミシェル・ポルトが映画化した"L'apres-midi de Monsieur Andesmas"で彼女は、アンデスマス氏（ミシェル・ブーケ）の工事を請け負う業者の妻役を、前作とは全く異なる知的で謎めいた雰囲気で手堅く演じている。今年54歳、映画デビューからは約30年、彼女が「バルスーズ」(73)で見せた、はにかんだ笑顔は今も変わらない。

JAPAN

|ワールド・ニュース|日本|

大林宣彦監督

大林宣彦監督が16年ぶりに音楽ビデオを監督

大林宣彦監督が16年ぶりに音楽プロモーションビデオのメガホンを取った。これは今年4月にデビューした男性デュオ「CANCION（カンシオン）」の第2弾シングル『嘘つき』（8月4日発売）を題材にした約10分の短編映画とプロモーションビデオ。大林作品の熱狂的なファンの古谷智志、繁本穣が大林監督のところへ出向き、ギターで同曲などを生演奏したところ、大林監督が快諾した。大林監督が音楽PVを演出したのはKANの『BRACKET』以来となる。大林監督は広島・尾道の自宅に演技経験がない2人を住まわせ、演技を指導。6月下旬から、新尾道3部作の第3作「あの、夏の日～とんでろじいちゃん」以来となる故郷での撮影となった。同作品は8月上旬からCANCIONの公式サイト（http://www.bmgjapan.com/cancion）で公開される。

野沢尚さんの小説『深紅』映画化へ向けて始動

6月28日に自殺した作家で脚本家の野沢尚さんの小説『深紅』（講談社文庫）の映画化計画が、テレビ朝日で進められていることが同社の広瀬道貞社長の定例社長会見で明らかにされた。同局幹部も「権利関係をクリアにして映画化を実現させたい」と話している。同小説は修学旅行中に父、母、2人の弟をハンマーで惨殺された少女がやがて、大学生となり、正体を隠して、自分と同い年の加害者の娘に近づいていくというサスペンス。吉川英治文学新人賞を受賞しており、野沢小説の最高傑作とも評されている。脚本は野沢さん自らの手によって、完成しており、水面下でキャスティングも進んでいる。野沢さんとテレビ朝日とは役所広司、妻夫木聡主演のドラマ『砦なき者』（4月放送）や「21世紀新人シナリオ大賞」の選考委員を務めるなど関係が深かった。公開は来年見込み。

「スチームボーイ」

「スチームボーイ」ヴェネチアの閉幕作に

「AKIRA」などで知られる大友克洋監督のアニメ映画「スチームボーイ」が第61回ヴェネチア国際映画祭（9月1～11日）の特別招待作品として、クロージング上映されることが決まった。日本のアニメが開幕や閉幕を飾るのは初めて。主人公の声を務めた鈴木杏と現地入りする予定の大友監督は「こういった立派なものを目指して作ったわけではないのですが、思いがけず、クロージングという大役に選んでいただき、光栄に思います」。同映画は19世紀産業革命後のイギリスを舞台に、世界的な発明品“スチームボール”をめぐり、発明好きの少年レイの活躍を描く構想9年、製作費24億円の大作。アメリカ、ヨーロッパ、アジア各国など海外公開が決定済み。9月のフランスをはじめ、ヨーロッパ、12月にはアカデミー賞に照準を合わせ全米で公開される。既に続編の製作も発表された。

WORLD NEWS

「ヴァイブレータ」

「ヴァイブレータ」マニラ映画祭でグランプリ

寺島しのぶが主演した「ヴァイブレータ」(監督・廣木隆一)がフィリピン・マニラで行われた第6回シネマニラ国際映画祭(7月1日～12日)でグランプリを受賞した。芥川賞候補にもなった赤坂真理の同名小説が原作で、幻聴に悩まされているヒロインとトラック運転手(大森南朋)の恋、欲望を細やかに描いて評価され、寺島の大胆な濡れ場が話題になった。国際映画祭は昨年9月のヴェネチア国際映画祭を皮切りにこれまで30か所で上映。東京国際映画祭での優秀女優賞を始め、独・マンハイム国際映画祭特別賞、仏・ナント三大陸映画祭主演女優賞などを受賞しており、今回で7冠目になる。製作サイドによれば、今後もポーランドのニューホライゾン国際映画祭、オーストラリアのブリスベーン国際映画祭に招待されている。また、韓国を始め、6か国での上映も決定した。

映画大使任命式より

筑紫哲也、阿川佐和子映画大使に任命される

映画館で映画館を見ることの素晴らしさをアピールする「映画館に行こう！」(主催：全興連、映連、MPA、外配協)が、夫婦50割引に続く、キャンペーン第2弾として、筑紫哲也さん、阿川佐和子さんを映画大使に任命した。この任命に対して筑紫さんと阿川さんは「50歳以上の方に観てもらいたい映画を推薦して、映画ってこんなに面白いものだったと思ってもらえるよう広くアピールしていきたい」「筑紫さんと違って、私は普段ほとんど映画館へ行かないのですが、もちろん昔は映画好きでした。いま新しい映画館の時代が始まっているとのことで、そんな私がどこが変わり、どこが不便なままなのかを伝え、大使としての任を全うしたい」とそれぞれ話している。尚、大使の二人には1年間全国の映画館に無料で入場できるパスが贈られた。

「トニー滝谷」

「トニー滝谷」がロカルノのコンペに

イッセー尾形、宮沢りえが主演する映画「トニー滝谷」(市川準監督、来年公開)がスイスの第57回ロカルノ国際映画祭(8月4～14日まで)のコンペティション部門に出品されることが7月15日、正式発表された。同映画は村上春樹さんの同名短編小説が原作。孤独な男、トニー滝谷(イッセー尾形)と、交通事故で亡くなった妻の面影がある、ひとりの女(宮沢)の交流を描くもの。宮沢が1人2役に挑戦している。また、NHKが共同制作したカザフスタン映画「ハンター」(監督セリック・アプリモフ)も同部門に出品。カザフの大自然を背景に、狩人とオオカミ、人間と動物の世界を一人の少年の成長を通じて描いている。同映画祭はカンヌ、ヴェネチア、ベルリンの3大映画祭に次いで、知られるもの。コンペ部門には世界から16本がノミネートされ、頂点の金豹賞が競われる。

日本映画製作情報

World News Japan

小栗康平監督 8年ぶりの新作

小栗康平監督が「眠る男」以来8年ぶりに手掛ける新作「埋もれ木」が、現在、三重県鈴鹿市をメインに撮影されている。

映画は、架空の町を舞台に、そこに住む女子高生まちと彼女の友達が空想する夢と現実をスイッチバック式に描くファンタジー。タイトルの「埋もれ木」とは、火山噴火によって、立ち木のまま地面にとじ込められた森のこと。製作は、大手学習塾5社と劇団ひまわりによる製作委員会方式で、小栗監督も自らプロデューサーを務めている。

主人公のまち役には、全国公募により7000人から選ばれた新人、夏蓮(かれん)が扮し、登坂紘光、田中裕子、平田満、浅野忠信、大久保鷹、坂田明、左時枝、酒向芳、坂本スミ子、岸部一徳、松坂慶子、中嶋朋子らが共演する。

撮影は6月30日にクランクイン、8月中旬のアップを目指している。年内に完成し、公開は05年3月の予定。

佐々部清監督最新作「カーテンコール」

「半落ち」「チルソクの夏」の佐々部清監督が手掛ける最新作「カーテンコール」の撮影が、7月15日福岡にてクランクインした。

映画は、下関の映画館を舞台に、普遍的な親子像をテーマに描く感動作。福岡のタウン誌で働くライター・香織は、60年代に映画館「みなと劇場」で、映画と映画の間に登場して歌や手品を披露する幕間芸人として活躍していた安川の取材を命じられる。彼を調べていくうち香織は、彼と彼の家族が背負ったきびしい人生を知り、それらに深く関わっていくのだが……。

出演は、主人公の香織に伊藤歩、幕間芸人に藤井隆、彼の娘に鶴田真由、他に奥貫薫、井上尭之、津田寛治、藤村志保、井原剛志、夏八木勲、栗田麗らが共演。

撮影は八幡、下関を中心にロケーションを敢行、8月22日クランクアップの予定。公開は05年。

俳句にかけた青春「恋は五・七・五!」

「バーバー吉野」が今年のベルリン国際映画祭でスペシャルメンションに選ばれた荻上直子が、5月から撮影に取り組んで来た最新作「恋は 五・七・五!」(製作:東北新社、シネカノン、スターダストプロダクション/製作協力:東北新社クリエイツ)が、完成した。

作品は、四国・松山を舞台に毎年夏に開催される「全国高校俳句甲子園」に題材を得た青春映画。たまたまテレビのニュース番組で「~俳句甲子園」を見た林哲二プロデューサーが企画を立ち上げ、荻上監督にオリジナル脚本の執筆を依頼し、実現した。日本を代表する俳人、正岡子規、高浜虚子らを輩出した松山を舞台に、漢字も書けない帰国子女のヒロインら17歳の少年少女5人が、17文字のことばの格闘技、俳句甲子園に挑む姿を淡い恋を織り交ぜて描く。

キャストは、ヒロインの女子高生にオーディションで選ばれた新人、関めぐみが映画初出演で初主演。ほかに杉本哲太、高岡早紀、もたいまさこ、柄本明らが共演。

公開は、シネカノン配給・Aライン作品として今年12月の予定。

栗山千明主演「下弦の月」

柴咲コウ主演「soundtrack」を手掛けた二階健監督の第2作、松竹配給「下弦の月 ラスト・クォーター」(製作:スペースシャワーピクチャーズ、読売新聞社、伊藤忠商事、日販、BBケーブル、ビッグショット/製作協力:セップ、オフィス・クレッシェンド)が、このほど完成した。

作品は、少女漫画家・矢沢あいの同名原作(集英社りぼんマスコットコミック)を実写映画化するファンタジー。19年に一度起こる"下弦の月(ラスト・クォーター)"の奇跡を描く切ない恋愛ストーリー。脚本は二階監督が担当。

出演は、ヒロイン・美月に「キル・ビル」の栗山千明、恋人・知己に「あずみ」の成宮寛貴が扮し、黒川智花、伊藤歩、陣内孝則(特別出演)、緒形拳、HYDEらが共演する。

公開は今秋10月、シネ・リーブル池袋ほかで。

特集

サンダーバード

THUNDERBIRDS
●2004年・イギリス・カラー・ビスタサイズ・ドルビーSR、DTS、SDDS、SRD-EX・1時間35分
●監督／ジョナサン・フレイクス　製作／ティム・ビーヴァン、エリック・フェルナー、マーク・ハッファム　製作総指揮／デブラ・ヘイワード、ライザ・チェイシン　原案／ピーター・ヒューイット、ウィリアム・オズボーン　脚本／ウィリアム・オズボーン、マイケル・マッカラーズ　撮影／ブレンダン・ガルヴィン　美術／ジョン・ベアード　編集／マーティン・ウォルシュ　衣裳／マリット・アレン　キャスティング／メアリー・セルウェイ、フィオナ・ウィアー
●出演／ビル・パクストン、アンソニー・エドワーズ、ソフィア・マイルズ、ロン・クック、フィリップ・ウィンチェスター、レックス・シャープネル、ドミニク・コレンソ、ベン・トージャーセン、ブラディ・コルベット、ベン・キングズレー
●配給／UIP
●8月7日より日劇3ほか全国東宝洋画系にて公開
※『キネマ旬報』7月上旬号のHOT SHOTSにてソフィア・マイルズのインタビュー記事あり

「サンダーバード」データファイル集

Tuhderbird 1

スコット・トレイシー
（フィリップ・ウィンチェスター）

◎サンダーバード1号は、国際救助隊の先鋒を務めるロケット航空機。パイロットは長男のスコット。事件の際に出来る限り早く危険地帯へ到着し、現場状況を把握すると共に必要な専門装備を確認、その後、救助活動の指揮・監督を行なう。格納庫のＴＢ１は直立状態で待機し、プール下の発射場から垂直発射したのち水平飛行に移る。現場での着陸も水平状態で。なお救助隊のメカはおよそジェフの発案によりブレインズが開発したものだ。

「サンダーバード」の系譜

文＝山下慧

TV版『サンダーバード（以下TB）』は、ジェリー・アンダーソン率いるAPフィルムズが製作し、ATV／ITCグループによって65年から英国で放映開始されたSF人形劇である。大富豪ジェフ・トレイシーの創設した国際救助隊が、大規模な事故・災害の現場に駆け付け、最新救助メカを駆使し無償で救助活動を行なう。隊員はジェフの息子たち、加えて天才科学者ブレインズと諜報部員ペネロープが彼らを補佐するが、その正体は秘密裏にされ、南太平洋の孤島にある秘密基地の存在も明らかにされていない。こうした斬新な設定と救助活動のドラマ性、重厚かつリアルな特撮映像が視聴者を魅了し、『TB』は全世界98カ国にセールスされる超人気作となった。今回の実写映画化もその恒久的な人気を承けたものだが、その道のりは必ずしも順風満帆と言えなかったのが実情だ。

　まず『TB』は、音声に同期して口が動く大型マリオネット劇＝スーパーマリオネーションの第4弾であった。『スーパーカー』『宇宙船XL－5』『海底大戦争』に続く、集大成的作品として『TB』が登場したのだ。『宇宙船XL－5』は米国で全国放映された初の英国TVシリーズであり、『TB』も米国輸出を前提の大作として製作、メディア・ミックスや関連商品戦略も大規模に繰り広げられる。1時間枠に拡大された第1シーズンは無事ヒット、すぐさま第2シーズンと劇場版の製作が開始されたのであった。

　ところがATV／ITCは米国の全国放映セールスに失敗し、突

サンダーバードにおけるメカ等の開発に尽力を傾ける科学者ブレインズ

南洋の孤島に存在する、国際救助隊サンダーバードの秘密基地。

バージル(中央)、ゴードン(右)、ブレインズ(左)が2号機に搭乗し、救出に向かう

Tuhderbird 2

◎サンダーバード２号は、救助用の予備機材や小型救助メカを災害現場へ運搬する貨物輸送機である。パイロットは三男のバージル。胴体部に救助メカを収納するが、ＴＶ版では６つのポッド（コンテナ）別に救助メカが決められ、現場の状況に応じて装備するポッドを選定、基地内で換装したのち発進する。映画版ではポッドの脱着はなく、前方下部のハッチを開けて救助メカを排出。ＴＢ２の基地からの発進は、椰子の木の並ぶ滑走路より。

バージル・トレイシー
（ドミニク・コレンソ）

如番組打ち切りを決定する。人気は急激に冷め、66年の劇場版「サンダーバード」も興行不振。それでも劇場第2作のゴーサインは出され、TVの次作『キャプテン・スカーレット』と並行して「サンダーバード6号」が製作されるが、半年間のお蔵入り後68年に静かに公開されるだけだった。『TB』は全32話と劇場版2本で完結、こうして再起を待つことになる。

日本では66年にNHKで初放映(放映コードにより一部名称を変更)、67年TBSの再放送と映画第1作の公開で人気に火がつき、TBブームを巻き起こした。特に今井科学のプラモデルは大ヒット、模型商品は後年に至るまで息の長い人気を保持している。一方の米国では独立系でひっそりと放映されたのみ、一般の認知度はきわめて低い状況だ。やがて90年代に入ると、復刻版全国放映やLD発売により日英で人気が再燃し、第2次TBブームが沸き起こる。

この間、『TB』の復活や米国進出が考えられなかったわけでもない。70年代に実写TV番組を企画、80年代に再編集TVムービーを米国放映、90年代はアニメ版を企画するなど、多々の復活案が試みられたのである。そして94年、ついにITCが米国で実写映画化を発表。しかしITCはポリグラムに買収され結局企画は立ち消えに。そのポリグラムの子会社、ワーキング・タイトルが続いてオリジナルの精神に忠実な実写版の製作に乗り出し、諸々の困難を乗り越えようやく実現に至ったという次第だ。

そのオリジナル『TB』の諸設定は、実は不明瞭な点が多い。トレイシー家の母親の存在が謎のままだったり、背景年代や兄弟順が公式ガイドブックの設定と劇中とで異なるといった有様だ。これに対し現在の権利保持者カールトン社は00年に設定を統一、背景年代も2065年と決定した。今回の実写映画はTV版より45年前の事件を描くが、ここでまた年代設定が改められ、米国観客を強く意識した人物設定が加えられている。旧米のファンは、リニューアルされたCG製救助メカを賞味しつつ、これら細部の変更点を探してみるのもいいだろう。

サンダーバードの秘密を暴こうとする最大の敵ザ・フット(変装中)

「サンダーバードVol.1」
○発売元/東北新社 ¥3,990(税込)
単巻DVD Vol.1〜6発売中
◎1965年(日本は1965年)から放送されたオリジナルTVシリーズで世界中の災害や事故に立ち向かう国際救助隊の活躍を描く人形劇。1巻に2話入でペネロープを黒柳徹子が吹替えた日本語音声も収録。

「サンダーバードフィルム・コレクション」
○発売元/フォックス ¥6,279(税込)
◎火星探検で遭難したゼロX号の救出に向かう「サンダーバード」(66)と、豪華飛行船スカイシップ1の危機についに6号が登場する「サンダーバード6号」(68)の劇場用2作に特典映像満載の2枚組。

Tuhderbird 3

◎サンダーバード3号は、衛星基地との往復や宇宙空間における災害の救援活動を担当する1段式宇宙ロケットだ。パイロットは、TV版では末っ子のアラン、映画版では四男のゴードンとなっている。活動初期は宇宙基地となるサンダーバード5号の建設に活躍し、以後も物資補給や乗員交代のため定期的に運行。救助活動ではスコットが同行する。発射場はラウンド・ハウス下のサイロにあり、垂直に発射しそのまま大気圏外へ脱出できる。

ゴードン・トレイシー
(ベン・トージャーセン)

アラン・トレイシー(オリジナル版)

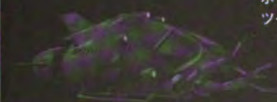
サンダーバードは実際に出動出来るのか!?

文=鶴田浩司

TVシリーズでは、サンダーバード（国際救助隊）が活躍している時代は、制作当時から百年後の2065年と設定されていた。だが、実写版では2020年とされている。これは、近年の急激な科学技術の進歩により、1965年では、まだ夢の範疇であった劇中登場メカが、今では現実化しつつある為、45年も溯らせたという事である。確かに、サンダーバード5号の様に、地球の軌道上の人工衛星では各国の宇宙飛行士や科学者たちが常駐し観測や実験を続け、3号の様に、スペースシャトルは地球上と宇宙空間を何度も往復し、4号の様に、深海でも活動出来る潜航艇も実現化され、2号の様な、リフティング・ボディの大型航空機も開発されようとしている。

ところで、もしサンダーバードの様な組織が2020年に発足したとして、本当に国際救助活動なんか出来るのだろうか？　取り敢えず、2004年現在の現実問題と照らし合わせて検証してみよう。

まず、難しいのが、事故や災害が起きた国への入域だ。いくら救助活動の為と言っても、サンダーバードの様に、秘密基地から飛んで来た正体不明、国籍不明の航空機では、直ぐにその国の防衛隊の迎撃対象になり、撃墜されてしまうかも知れない。仮に、サンダーバードの様に、最高、最新の技術を搭載した航空機なら撃ち落とされないとしよう。しかし、その場合には、被害者を救出する為に編成されていたその国の軍や警察の部隊が、サンダーバード迎撃隊の応援に駆り出され、救出活動に差し障りが出る恐れもあるのだ。下

Tuhderbird 4

◎サンダーバード４号は、海上・水中・深海での作業を目的とした小型の潜水救助船だ。パイロットは、ＴＶ版では四男のゴードン、映画版では五男のアラン。映画でのアラン出動は臨時措置で、のちにＴＶ版通りの担当に代わることも想像できる。ＴＢ４はＴＢ２での移動を前提とし、ＴＶ版では４番ポッドに収納、映画版ではＴＢ２に常時搭載されている。機体前部に救助用ツールを備え、ＴＶ版の投光器は映画版でロボットアームに変更。

アラン・トレイシー
（ブラディ・コルベット）

ゴードン・トレイシー（オリジナル版）

手をすると、その国の敵対国からの侵略行為と間違えられて、紛争や戦争を引き起こす原因となる可能性もある。また、大事故や災害のニュースと合わせて、正体不明機が防衛隊の迎撃をかわして自国領空に侵入と報道されれば、その国の国民が、パニック暴動を起こしてしまうかも!?

ちなみに、今現在、心ならずも領域侵犯してしまう可能性の有る海上事故に対処する上で、様々なトラブルを避ける為、国際海事機関で、海上捜査救助に関する国際条約というものを取り結んでいる。その中の幾つかの項目を、噛み砕いて記すと、以下の通りである。

①関係国間に特別な協定がない限り、他国の救助部隊が自国の領海・領空・領土へ入域する事を、速やかに許可しなければならない。

②入域する国は、派遣予定部隊の詳細、及び必要性を、許可した国に明らかにしなければならない。

③救助活動は、入域を許可した国の救助調整本部、又はその国が指定した当局により調整される。

以上の③の項目中の、〝許可した国の救助調整本部、又はその国が指定した当局〟については、国の公的機関でなくてもよいという条文もある。つまり救助調整は、入域を許可した国が認めさえすれば、部隊を派遣する国は勿論、その他の国の公的機関だけでなく、サンダーバードの様な個人的組織でも良いという事なのだ。ただし、条文にはその様に明記されているものの、実際には、いずれかの国の公的機関が救助調整にあたり、民間組織が主導権を握ったという記録は見当たらない。

さて、サンダーバードの面白さの一つに、そのメカを我が物にして悪用しようと企む悪役ザ・フッドの存在がある。その様な悪巧みから守る為にも、サンダーバードは正体も基地も秘密にしている訳である。ところが前記の通り、サンダーバードは個人的な組織である。つまり、NGO(非政府組織)・NPO(非営利民間組織)となる。ここで問題なのが、ほとんどの国で、NGOやNPOが活動する為には、事前の登録や申請が必要で、その実態を明らかにしなければならないという事。

やはり現在の様な国際情勢では、2020年になっても、サンダーバードの出動は難しいかも？

Tuhderbird 5

◎サンダーバード5号は、秘密の静止軌道上に位置する巨大通信衛星（宇宙ステーション）である。パイロットは次男のジョン。TV版では、ジョンとアランが交替で勤務することになっていて、やはり映画以降のシフト体制が想像できよう。世界中の災害や事件を24時間体制で監視し、あるいは地球全土からの救難信号をキャッチして、トレイシー・アイランドの秘密基地に連絡するのが主な任務。宇宙モニター担当者は孤独な勤務となる。

ジョン・トレイシー
（レックス・シャープネル）

ジョナサン・フレイクス（監督）

◎撮影＝吉岡誠

JONATHAN FRAKES／1952年、米ペンシルバニア州生まれ。70年代後半からドラマに出演し、77年に始まったＴＶシリーズ「新スター・トレック」のライカー副艦長役で大人気となり、数本の演出も手掛ける。96年には「ファースト・コンタクト／STAR TREK」で監督デビュー。その他に人気ＴＶシリーズ『ロズウェル　星の恋人たち』で演出のほか製作総指揮も担当している。

「僕はみんなが思うほどSFファンじゃないんだ。『新スター・トレック』に出ていたから、僕のジャンルはSFと決まってしまっただけ（笑）。でもおかげで今回の依頼があったわけなんだ」

アメリカでは『サンダーバード』は一部でしか放送されていなかったためジョナサン・フレイクスは依頼があって初めて見たとか。今ではふたりの子供とともにハマっているらしい。だが映画はTVとはいくつかの相違点がある。

「映画はTVシリーズより前の話なんだ。サンダーバードに憧れるアラン少年の成長も、父と子の関係も描けて、ファミリー向きのいい物語になったよ。でもお約束のカウントダウンやテーマ曲はそのままだし、メカもオリジナルを踏襲したデザインにして、キャストもマリオネットに似た俳優を使うようにして、コアなファンも新しいファンも楽しめるように作ったんだ」

この第1作がいわば結成前夜的な物語だけに続編が期待される。

「今回は活躍できなかったほかのボーイズを続編ではフィーチャーしたいね。それからサンダーバードは国際救助隊なので、国際都市である東京も舞台にしたいとプロデューサーと話しているんだ。日本にはこんなにサンダーバードの人気があるしね」

取材・文＝竹之内円

ベン・キングズレー（ザ・フッド役）

アカデミー賞受賞者であり、英国を代表する俳優のひとりとして知られるサー・ベン。彼が敢えて本作のような娯楽巨編への出演を決めたのは何故か。

「この作品の脚本を貰ったのは、『砂と霧の家』を撮り終えたばかりの頃だった。私は俳優として貴重な体験をするとともに、極度の疲労も味わっていた。そこから回復するには休暇を取るのではなく、全く違う種類の演技をするのがいいのではないかと考えた。撮影は楽しかった。各俳優は自分独自の一貫したスタイルで役に取り組んだ。オペラを作っているようだった」

シェイクスピア劇のごとく、澱みなく雄弁を振るう。いつまでも話を聞いていたくなる知性の輝きを放つ人だった。

取材・文＝信夫梨花

BEN KINGSLEY／1943年、英ヨークシャー生まれ。王立演劇アカデミーなどの舞台に立ち、82年には映画「ガンジー」でアカデミー賞主演男優賞受賞、ドラマからホラーまで幅広く出演。

FAB-1

ペネロープ・クレイトン＝ワード
（ソフィア・マイルズ）

アロイシャス・パーカー
（ロン・クック）

◎FAB-1は、諜報部員ペネロープ・クレイトン＝ワード専用の特殊装備6輪車である。運転手は、ペネロープの執事アロイシャス・パーカー。ペネロープは英国公爵の令嬢にして国際救助隊ロンドン支部エージェント。元金庫破りのパーカーを執事兼運転手に雇い、パーカーはレディ・ペネロープのボディガードを務めながら諜報活動を共に行なう。ちなみにＴＶ版のFAB-1はロールスロイスだったが、映画版ではフォード車になった。

ヴァネッサ・アン・ハッジェンス（ティンティン／ミンミン役）

VANESSA ANNE HUDGENS／ドラマに出演していたが、03年にホリー・ハンター主演の「サーティーン」でデビューし本作が2作目。舞台では『エビータ』、『王様と私』などに出演。

「オードリー・ヘップバーンとナタリー・ウッドの大ファン」というヴァネッサは、髪を束ね上げ、映画で観るより大人っぽく、ほんのりとした色気すら感じられる。

「同世代の女の子が見て、私の役に感心してくれたら素晴しいわね。私は女の子が暴れまくるアクション映画が好き。『トゥームレイダー』とか『キル・ビル』は最高」

記者のひとりから「未成年だから、『キル・ビル』は観られないんじゃないの？」と言われ、「しまった」と口を押さえるヴァネッサ。だが、舞台出演の経験豊富な彼女は、ライブ・パフォーマンスには慣れているようで、取り乱すこともなく、落ち着いている。終始ほがらかで、笑みが絶えないヴァネッサだった。（信太）

トレイシー・ボーイズ（イケメン俳優5人組）

◎撮影＝吉岡誠

左下からブラディ・コルベット、フィリップ・ウィンチェスター、レックス・シャープネル、ドミニク・コレンソ、ベン・トージャーセン

「サンダーバード」の主役はメカとそれらを操縦する5人のトレイシー・ボーイズ。15歳から24歳までの明日の映画界を担うイケメン俳優たちで、まるで本当の兄弟のように仲がいい。

フィリップ「実はビル・パクストンが本当のお父さんのように土曜はみんなを集めてサッカーや食事をして、夜はクラブに連れて行ってくれた。そこでいろいろみんなと話せて、本当の兄弟のようになれたんだ」

ドミニク「この映画はセットも素晴らしい。SF映画はほとんど合成だと思われるかもしれないけど、屋内シーンやメカのコックピットはすべてセットで、CGなのは窓の外だけなんだ」

ブラディ「僕なんかセイシェル島でジャングルの撮影があって、とても暑くて熱中症になっちゃったよ」

レックス「今回はブラディが主役だからね。続編では僕らも救助するほうになって活躍したいよ。その前に5号を修理しなきゃ（笑）」

ベン「続編では日本でロケするってプロデューサーから聞いていて、今から楽しみにしてるんだ」

レックス「1号だったら日本まで10分で行ける（笑）」

ブラディ「サンダーバードならロスの渋滞も関係ないしね。僕の人生の半分は渋滞で台無しだもん（笑）」

（竹之内）

ジェット・モグラ

◎救助用重装備のひとつで、地中活動用のジェット推進式穿孔機。下部運搬車で地上を移動し、上部掘削機が分離して地中を進む。ＴＶ版ではＴＢ２の５番ポッドから出動した。

interview

ロン・クック（アロイシャス・パーカー役）

RON COOK／舞台ではローレンス・オリヴィエ賞受賞を始め多くの功績を残し、映画では「コックと泥棒、その妻と愛人」(89)、「秘密と嘘」(96) から「102」(00)まで幅広く出演。

英国の秀作、話題作には欠かせない存在のロンも、エージェントからこの作品の話が来た時は「やった！」と思ったという。

「でも、すぐにどうしようと思った。キャラクターが有名であればあるほど、演じるのは難しい。テレビシリーズをただコピーするのは間違いだと思った。オリジナルを基に自分で役を作り上げた」

長いキャリアを誇るロンだが、初めての娯楽大作への出演で、数々の新鮮な体験をしたようだ。

「CGは凄いね。なにもない空き地で撮影したのに、後で映像を見ると、そこへ宇宙船が舞い降りてきたり、びっくりする。だからこそ、演じる上で、もっと想像力が必要になってくる」

ユーモアに包まれた穏やかな語り口が魅力的な俳優である。（信夫）

ソレン・フルトン（ファーマット役）

SOREN FULTON／大叔母に「お熱いのがお好き」のジョアン・ショーリーを持ち、8歳から演技を始め多くのドラマに出演。映画では「フェイス・トゥ・フェイス」(01)などに出演。

「僕とファーマットとの共通点はあまりない。僕も読書やテクノロジーは好きだけど、泳げない彼と違って、水泳やサーフィンが好き」

自分と演じた役との違いを強調するソレンだが、素顔の彼も饒舌で、ちょっとした学者のように話す。共演のヴァネッサ・も「秀才」と公言するソレンの学校の成績はオールA。

「最近、読んだ『ハリー・ポッターとフェニックス勲章』はシリーズのなかでは一番面白かった。出演依頼が来たら、ぜひ引き受けたい」

将来に関し、「心理学に興味があるから、そちらの方向に進むかも。僕は家庭を持ちたいから、身を固める直前に俳優の仕事は辞める」とコメントし、13歳の少年は会見場を沸かせた。（信夫）

「サンダーバード」の実写化を可能にした技術

文＝大口孝之

「サンダーバード」の六百〜七百に及ぶＶＦＸショットを、全て一社で担当しているのは、ロンドンのフレームストアＣＦＣだ。彼らは、サンダーバードのメカの描写にミニチュアを使わず、全てＣＧで表現することにした（映画全編を通して、ミニチュアが使用されたのは、炎上する海底石油掘削リグと、テムズ川に落下するモノレールだけ）。そして、メカの表面を構成するパネルの塗装の微妙な違いや、汚れなどを研究し、テレビシリーズ版のメカが持っていた重厚感を再現することに成功している。トレイシー・アイランドも、全てＣＧと３Ｄマットペインティングで作られた。ただし格納庫の内部は、カメラに近いエリアのみ実際にパインウッドスタジオに作られており、ＣＧで奥の方まで拡張されている。救助メカは実物大で作られ、実際に稼動するものもあるが、ジェット・モグラの回転するドリルなどはＣＧで表現された。ペネロープが乗るＦＡＢ−１は、フォードが実際に稼動する車体を制作している。だが、様々な形態への変形が出来なかったため、こうしたシーンでは当然ＣＧが活躍している。

ビル・パクストン
（ジェフ・トレイシー役）

アンソニー・エドワーズ
（ブレインズ・ハッケンバッカー役）

特集 モナリザ・スマイル

Mona Lisa Smile

●2003年・アメリカ・カラー・ビスタビジョン・ＤＴＳ、ＳＲＤ、ＳＤＤＳ：ＳＲ・２時間

●監督／マイク・ニューウェル　脚本／ローレンス・コナー＆マーク・ローゼンタール　製作／エレイン・ゴールドスミス＝トーマス、デボラ・シンドラー、ポール・シフ　製作総指揮／ジョー・ロス　撮影／アナスタス・ミコス　衣裳デザイン／マイケル・デニソン　音楽／レイチェル・ポートマン　音楽監修／ランドール・ポスター

●出演／ジュリア・ロバーツ、キルスティン・ダンスト、ジュリア・スタイルズ、マギー・ギレンホール、ジニファー・グッドウィン、ドミニク・ウェスト、マーシャ・ゲイ・ハーデン

●配給／ＵＩＰ

●８月７日よりみゆき座ほか全国東宝洋画系ロードショー

マイク・ニューウェル監督インタビュー

女優たちは砂漠で生き残るための闘いをしているようなもの

取材・文＝佐藤友紀

「『プリティ・リーグ』は僕の大好きな映画だ！『グループ』も『ミス・ブロディの青春』も、今回、僕が『モナリザ・スマイル』を撮るに当たって改めて見直した2作だし。人はよく本作を『いまを生きる』の女性教師版だろうと指摘するけれど、その見方は映画の本質をとらえていないと思うよ。ジュリア(・ロバーツ)扮する教師は、ロビン・ウィリアムズのような、マジシャンではないからね」

　イージーな〝女性映画〟というくくりは好きではないが、一部では「古臭い」という批判もある「モナリザ・スマイル」が、なぜ自分はこんなにも好きなのかを考えてみたら、いくつかの〝女性が社会状況と闘いながらも自分の生き方を模索する映画〟のタイトルが思い浮かんだ。「エデンより彼方に」なども含むこれらの作品。マイク・ニューウェル監督自身、「モナリザ・スマイル」を撮るに当たって、「強く意識した」というのがうれしい。

「君が今題名を挙げた映画の全部が、ある意味で、40年代、50年代というあの時代の中で自分を解放し自由になった人たちの話、あるいはその抑圧から脱出できなかった、またあえて脱出しなかった人たちの話だからね。この映画はテーマ的にはその辺と関わりがあるわけだ。僕がこの物語を面白いと思った理由の一つは、50年代初期という時代背景にある。この時代は精神分裂気味の時代でね、表面的には何もかもが素晴らしい、ハリウッドには輝かしい太陽が照り、ドリス・デイがにこやかに微笑む映画が賞をもらう。ところが、そんな表面の明るさとは裏腹に、もうちょっと深く潜ってみれば、かなり野蛮な権威主義がまかり通っていた。冷戦、赤狩り、広島・長崎の惨事を反省するどころか、原爆はどんどん作られたし、こういった正反対のものが共存していたってのは、言葉は悪いが、実に面白い時代と言えると思うよ」

　ニューウェル監督は、「映画で男を描く時のアプローチには、一般的な方程式のようなものがあるような気がする」と言う。

「男には〝言ってる意味、わかるだろう？〟とか〝説明しなくてもわかるよね？〟みたいな言葉が使えるんだけど、女性にそれを使うと〝言ってる意味なんてわかんないわ！〟とか〝一体、何をわかって欲しいわけ!?〟みたいな答えが返ってくる感じなんだ(笑)。だから中途半端なアプローチは絶対できない。それはジュリア・ロバーツという女優に対しても言えることで(笑)、彼女と僕はNY大学に行って講義を聴いたり、教授に会ったり。そうそう、チャーム・ス

MIKE NEWELL
1942年、イギリス・ハートフォードシュワーに生まれる。テレビ・ドラマの監督を経て「ピラミッド」(80)で映画監督デビューを果たす。「ダンス・ウィズ・ア・ストレンジャー」(84)「フォー・ウェディング」(94)「フェイク」(97)「狂っちゃいないぜ！」(99)「魅せられて四月」(99)などの話題作を監督する一方で、「200本のたばこ」(98)「ハイ・フィデリティ」(00)の製作、「トラフィック」(00)の製作総指揮などとしても活躍している。次回作として、ハリー・ポッター第4弾「ハリー・ポッターと炎のゴブレット」を監督することが決まった。

クールに行って50年代初期の女性の立ち居振舞いとかも勉強して来たよ。そういう準備を終え、ジュリアとはいったん解散した(笑)。数ヵ月後のクランク・イン当日、彼女は完全に役を自分のものにして現れたよ。編集スタッフが〝ジュリアはどんな状況でも、ありとあらゆる角度から演技している!〟って驚いたぐらいにね」

「女優たちは砂漠で生き残るための闘いをしているようなもの。いつもいつも干ばつに悩まされている。潤してくれる水が常に足りないんだ」と、男優に比べて、女優にチャンスが少ないことを心底理解しているニューウェル。だからこそ、主要な役だけでなく、「その他大勢」の女子学生役の女優たちに対しても容赦ない。サム・メンデスとロブ・マーシャルが、舞台『キャバレー』を演出した際、いわゆるキャバレーのバック・ダンサー役の出演者たちに対してすら、「自分の役柄が、これまでどんな人生をおくり、ベルリンのキャバレーまで流れて来たか、常に意識しろ」と厳しく言い渡したのと同じだ。

「まさにそのやり方だよ。朝、撮影所にやって来て、その日一日、麻袋に入れられた穀物のように皆同じ顔をしてゴチャゴチャと群れているんじゃない、ってね(笑)。女子学生たちは各々、キルスティン・ダンストやマギー・ギレンホール、ジュリア(・スタイルズ)と同じように自分のライフ・ストーリーがあるはずなんだから。僕もその日その日の彼女たちの別々の状況に合わせた細かい演出をしたよ。その点、男の子たちはNYの舞台俳優の中からキャスティングしたから、そうした訓練は受けていた。コニーのBF役の男優に目をつけた? アハハ、彼は才能あるし、近い将来、注目されると思う。ケヴィン・モスバッハラックという名だから覚えておくといいよ(笑)」

ちなみに、イギリス人であるニューウェル監督。「自分にとっての人生最高の教師は父だった」とキッパリ言う。

「父はアマチュアの演劇ファンで物凄い読書家だった。ベケットの『ゴドーを待ちながら』が出版された18ヵ月後には、あの劇を自分の素人劇団で上映したぐらいなんだからね」

「そうだ! ジュリア(・ロバーツ)がこの映画に入れ込んでくれたもう一つの重要な理由を思い出したよ。本作は『エリン・ブロコビッチ』と全くかけ離れたものではない。彼女が演じたヒロインは、二人とも下の方から闘いながら上に上がっていくというヒーローだし、その闘いも自分一人のためのエゴイスティックなものじゃなく、周りの人のため、そして理想のための闘いでもある。ジュリアはその部分にこそ惹かれたんだ、と僕は確信しているよ」

次回作は「ハリー・ポッターと炎のゴブレット」。この分ではハーマイオニーが主役!?

MARCIA GAY HARDEN／1959年、アメリカ・テキサス州に生まれる。1990年にコーエン兄弟の「ミラーズ・クロッシング」で映画デビュー。映画、舞台、テレビで、個性派、演技派として活躍している。「ポロック　二人だけのアトリエ」(00) でアカデミー賞助演女優賞を受賞。「ミスティック・リバー」(03) でも同賞にノミネートされた。

マーシャ・ゲイ・ハーデンいわく
本当に世の中はいい方向に進んでいるの？

取材・文＝佐藤友紀

「あの時代の女性が20歳そこそこで結婚した本当の理由、知ってる？」

結構真顔でこう尋ねるマーシャ・ゲイ・ハーデン。映画の中のキルスティン・ダンストではないが、「誰よりも早い結婚こそ価値がある」からだろうか？

「違うわよ。理由はね、SEX！　今と違って50年代は、普通の家庭というか、それなりにちゃんとした家庭で育った女性は、結婚でもしない限り、異性とのセックスは許されなかった。でも、時代が違っても若い男女の性の欲求なんて、そう変わるもんじゃないでしょ。で、結婚年齢が今よりぐんと低かったというわけ。私がリサーチした女性たちも、最初のうちは本音を語ってくれなかったけど、気心が知れてくると〝実は…〟と次々に真相を教えてくれたわ(笑)」

「カリスマ主婦と言われたマーサ・スチュワートがインサイダー取引というダーティなことをやっちゃう時代ですものね(笑)」と皮肉を効かせながらハーデンは言葉をつなぐ。

「女子学生たちにテーブルマナーとか客のもてなし方とか、良妻賢母としての生き方を教えながら、じゃ、自分自身の生き方は？　と問われた時につまってしまうのが私の演じている役。ジュリア扮する風雲児先生の対極にいるように見えて、〝この生き方こそ正しい〟と固く信じている点はどこか似ているのよ。ジュリアは途中から学生たちの影響を受け入れ、成長の糧とするようになったけど、第一良妻賢母って、一体何？　マーサ・スチュワートもそうだし、私、バーバラ・ブッシュ夫人には何の恨みもないし、知的で素敵な女性だとは思うけど、息子たちを見ていると彼女には全然責任ないの？　と思ってしまう。マイク(・ニューウェル監督)とも話したんだけど、「モナリザ・スマイル」に強く反応してくれるのは、50年代に女子学生だった現在の70代、80代の女性。そして大先輩たちにこんな葛藤があったなんて知らない10代から20代初めの若い世代。でも一番深い吐息をつくのは40代以上の、フェミニズムの洗礼を当たり前のように受けた世代だねって。本当に世の中はいい方向に進んでいるのか？　自分たちで一回は開いた扉を閉めてしまっていないか？　男たちとのスクラムは？　なんかカタい言い方になっちゃうけど、「モナリザ・スマイル」は一つの特殊な時代、社会だけを描いた映画じゃないというのが、これでわかると思うわ。当時のファッションとかに目くらましされそうだけど、実は案外、噛みごたえのある映画なのよ」

作品評

いつの時代でも人生の選択を迫られる女性たち

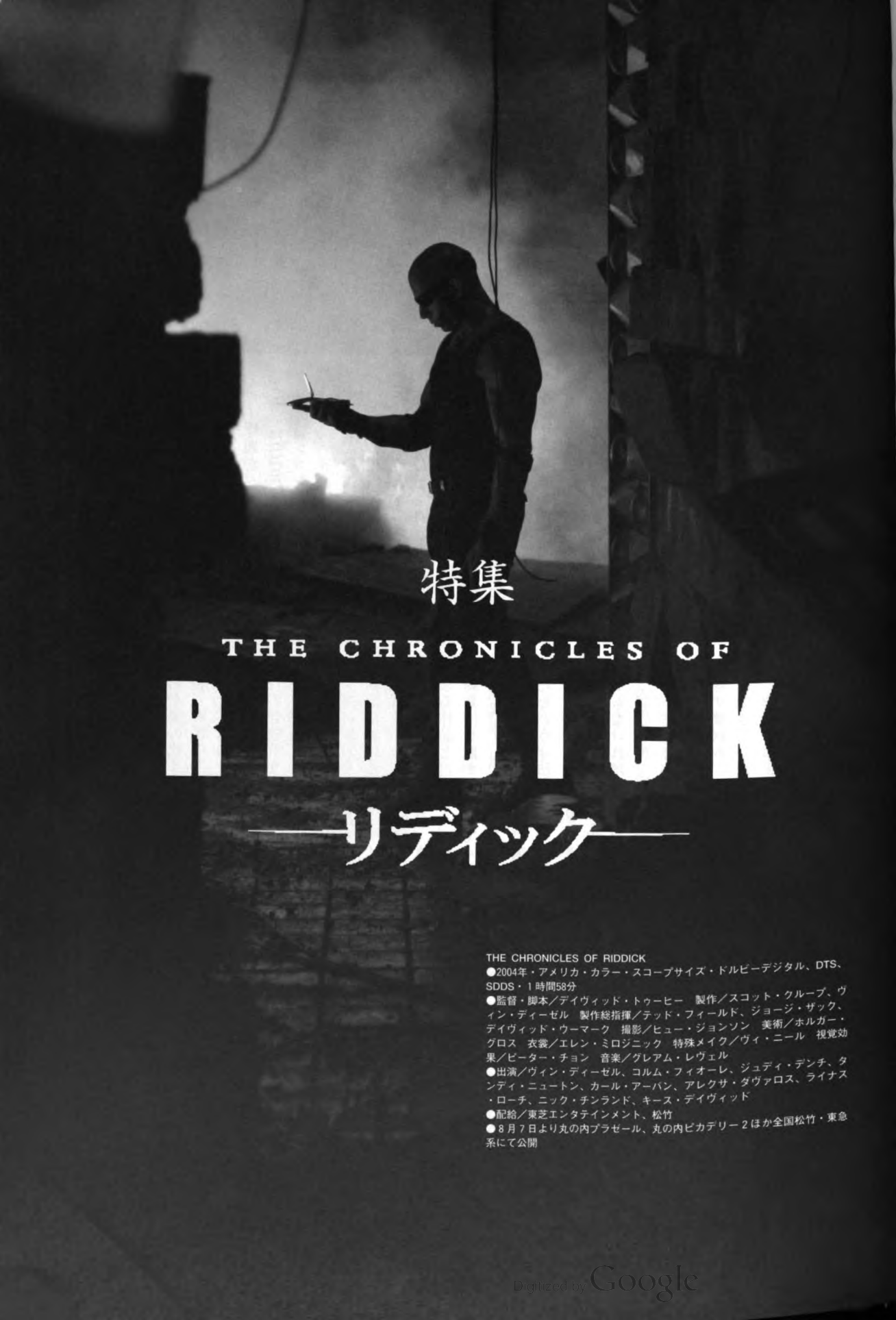
文＝荻原順子

伝統にがんじがらめになった米国東部の名門校に、リベラルで型破りな教師がやってきて、飼い慣らされた羊のごとく従順に学業に励んでいた生徒たちの眼を開かせるというプロットゆえ、「モナリザ・スマイル」は、アメリカでの公開当時、〝女性版「いまを生きる」〟と形容されることが多かった。しかし、この2作品が決定的に違うのは、「いまを生きる」に登場する名門私立男子校で学ぶ少年たちの大部分がゆくゆくは国をリードしていくエリートとなっていくのに対し、「モナリザ・スマイル」に登場するウェルズリー大学の女子学生たちは、大学を卒業して親と学校の管理下から解放されても、夫や社会の管理下に置かれることになるという点だろう。

1950年代に最高学府で学んだ若き女子大生たちの多くは、どんなに良い成績を収めた優秀な生徒であっても、結婚し、家庭に入って、夫に尽くしつつ子育てに専念することが期待されていた。1870年創立の名門女子大であるウェルズリーでさえ例外ではなかったのだが、そこへ、ジュリア・ロバーツ扮する新任の美術史教授、キャサリン・ワトソンがカリフォルニア生まれの自由主義を持ち込んでくる。それに猛反発するのは、母親もウェルズリー出身で同大学の理事を務めている超保守的な優等生タイプのベティ。彼女は、ハーヴァード大学在学中のフィアンセと近く結婚することになっており、自分を学内一の〝勝ち組〟だと思っている。ベティを演じるキルスティン・ダンストは、金髪碧眼のWASPでいかにも東部の名家出身の高飛車な御嬢様といった感じのベティを憎々しげに好演している。そのベティの親友で成績優秀なジョーンは、単にカリキュラムをなぞるだけではなく学生たちに芸術の意味を深く追究させようとするキャサリンの姿勢に刺激を受け、フィアンセがいる身でありながらイエー

ル大学の法律学部を目指すことを考える。ジョーン役のジュリア・スタイルズは自身も、現在、コロンビア大学で学ぶ才媛ゆえ、低めの声に知性が滲み出ていてピッタリの配役。

この2人のクラスメートとして登場するのは奔放な異性交遊を楽しむ〝バッドガール〟のジゼルと、逆に異性のことになると途端にシャイになる〝みにくいアヒルの子〟的存在のコニーだ。ジゼル役のマギー・ギレンホールは、ドライで冷めた性格をしているようでいて実は傷つきやすく優しい心を持つジゼルを、繊細に演じているし、コニー役を演じている新人のジニファー・ゴールドウィンは、容姿のことでコンプレックスを持つ女子大生が恋をしたことによってキラキラした輝きを見せる過程を非常に初々しく体現し、観客の共感を呼ぶ。

一方、キャサリンの同僚で女子学生たちに礼儀作法を教える教授に扮しているマーシャ・ゲイ・ハーデンは、恋人を第二次大戦で失ってからは恋することに臆病になっているようにすら見える寂しげなオールドミスの心情を目つき一つ、声のトーン一つで適確に表現して、相変わらずの芸達者ぶりを披露しているし、キャサリンに魅かれていくイタリア語教授を演じているドミニク・ウェストも、つまらない嘘をついたりするが憎めないチャーミングなプレイボーイを軽妙に演じて、脇をしっかり固めている。

しかし、このような演技力では定評ある俳優を揃えていながら、彼らが演じる登場人物たちの役どころが、一昔前の学園ものの少女漫画のようにハッキリし過ぎており、類型的になってしまっているのは、かなり残念。ストーリーも、先の展開がかなり読めてしまうような部分が多く、「フェイク」や「フォー・ウェディング」等でセンスの良い演出を見せてくれたマイク・ニューウェル監督にしては、やや焦点の曖昧な作品になっているような印象を与えている。

この焦点の曖昧さは、「モナリザ・スマイル」が、従来のフェミニズム的な視点を持った女性映画になることを敢えて避けているところにも関係しているように思える。この映画で若き女性たちの指導者として登場するキャサリンは、女性の自立を訴えるフェミニストとして描かれるが、観客たちが感情移入していく女子大生たちでさえ、必ずしも彼女の生き方をなぞろうとはしないし、キャサリン自身、自分の生き方について100%確信を持っていないかのように描かれている。このことは、ウーマン・リブを経て解放されたアメリカの女性たちがキャリア・ウーマンとして、社会でめざましく活躍したものの、30代、40代という子供を産めるギリギリの年齢になって、急に家庭を築きたくなるというケースが、最近、少なくないことと思い合わせると興味深い。そう考えると、結婚して家族に恵まれつつ、仕事の面でも成功することができる男性たちに比べると、女性たちの置かれている状況というのは、「モナリザ・スマイル」から半世紀経った今でもそれほど変わっていないような気もしてくる。「モナリザ・スマイル」の曖昧なメッセージ性は、いまだに人生の難しい選択を迫られる女性たちが自分の出した答をみつめる時の戸惑いを反映しているのかもしれない。

特集

THE CHRONICLES OF RIDDICK
RIDDICK
—リディック—

THE CHRONICLES OF RIDDICK
●2004年・アメリカ・カラー・スコープサイズ・ドルビーデジタル、DTS、SDDS・1時間58分
●監督・脚本／デイヴィッド・トゥーヒー　製作／スコット・クルーブ、ヴィン・ディーゼル　製作総指揮／テッド・フィールド、ジョージ・ザック、デイヴィッド・ウーマーク　撮影／ヒュー・ジョンソン　美術／ホルガー・グロス　衣裳／エレン・ミロジニック　特殊メイク／ヴィ・ニール　視覚効果／ピーター・チョン　音楽／グレアム・レヴェル
●出演／ヴィン・ディーゼル、コルム・フィオーレ、ジュディ・デンチ、タンディ・ニュートン、カール・アーバン、アレクサ・ダヴァロス、ライナス・ローチ、ニック・チンランド、キース・デイヴィッド
●配給／東芝エンタテインメント、松竹
●8月7日より丸の内プラゼール、丸の内ピカデリー2ほか全国松竹・東急系にて公開

「リディック」ワールドを読み解く
——「ピッチブラック」から「リディック」まで

文＝山下慧

お尋ね者のリディックが狂信者軍団ネクロモンガーによる惑星侵略に巻き込まれ、ついには軍団の支配者を打ち倒す。リディックは続いて軍団に君臨し、宇宙侵攻の行方を左右することになるだろう。——原題が"THE CHRONICLES OF RIDDICK"である通り、SFアクション大作「リディック」は、リディックをめぐる壮大な宇宙年代記を描くものだ。本作はその序章に相当する。主人公は冤罪を晴らそうとする逃亡者ではなく、凶悪な殺人と脱獄を繰り返してきたことは間違いない。そんな明確な犯罪者が、強大な武装カルト集団を率いることになるのだから、以後も型破りな展開が予想できよう。リディック年代記は、ダーク・ヒーローによる宇宙神話を試みている点で意欲的だ。

知力体力に優れ、暗闇でも見える暗視眼を持った（普段は遮光ゴーグルを着用）殺人犯／脱獄囚。このリディックのキャラクターは、本作の監督デイヴィッド・トゥーヒーによる00年のSF映画「ピッチブラック」で初登場した。つまり「リディック」は「ピッチブラック」の続編もしくはスピン・オフ作品なのだ。

「ピッチブラック」はタイトなSFスリラーであった。恒星間定期船が陽の沈まない無人惑星に不時着、乗客ら生存者は旧調査隊が残した宇宙船で脱出を計るが、折しも22年に一度の日食が訪れ、夜行性の怪物群が彼らに襲いかかる。怪物がうごめく闇の中、船までバッテリーを皆で運ぶ過程のサスペンスに焦点をあてたもので、閉鎖状況におけるモンスターとの対決を捉えた点では「エイリアン」や「トレマーズ」「レリック」等に連なる作品と言えよう。無作為の移動集団を敵が急襲してくる点では「駅馬車」以来のパターンを踏襲し、襲撃される乗客に凶悪犯がいたという寸法だ。ただこの異分子リディックは、「駅馬車」のリンゴ・キッドのような善きお尋ね者でもなければ、行動の障害となる"内部の敵"でもない。漆黒の闇の下、犯罪者の暗視能力と生存本能が脱出のよすがとなる一種の逆転の構図が、SF的状況設定と共に生きていた作品だった。

トゥーヒー監督はこの、正統派ヒーローとは異なったアンチ・ヒーローを軸に宇宙年代記を構想した。「ピッチブラック」で生き残ったリディック、ジャック（本作ではキーラ）、イマムの三人は続いて登場するものの、因縁ある敵やリディックの出自などはあらためて設定され、まったく新しい物語が「リディック」で綴られていく。そこで映画2作品を橋渡しするアニメーション短篇も作られた。この「リディック　アニメーテッド」は、「ピッチブラック」で脱出した先の3人が狂気の犯罪者蒐集家に捕獲され、リディックがその配下の賞金稼ぎや怪物を退けて、ある星へ2人を送り届けるまでを描いている。その星がやがてネクロモンガーの侵略を受け、またアニメ版で生き延びた賞金稼ぎが相変わらずリディックを追い続けているというわけだ。監督は「アニマトリックス／マトリキュレーテッド」のピーター・チョン、実制作は韓国のアニメ・スタジオが担当し、声も前作に同じキャストとなった。「アニマトリックス」以降、シリーズの隙間をアニメで補完する例がよく見られるが、「リディック」の場合はひとつの事件を提示する程度に留め、アニメ版を見なければ本編の意味がわから

ないということはない。
アニメ版の5年後から「リディック」はスタートする（主要キャストは前作・アニメ版を承けての登板だが、ジャック＝キーラ役だけはオーディションの結果変更となった）。ネクロモンガーは宇宙の浄化を目的に人民を洗脳する狂信者集団であり、そこには選民思想や宗教戦争の投影が見られよう。さらに、軍団の統率者はかつてフューリア族の戦士に殺されると預言を受け一族を虐殺したものの、リディックこそがそのフューリア族の生き残りだというのだから、これはSF版モーゼ物語でもある。そういえば黒人イマムは一作目からイスラム教の巡礼者という設定で、古代聖典はリディック年代記の世界観を探るうえで重要な要素になりそうだ。統率者がリディックを畏れ追撃する一方で、臣下の司令官が奥方に下剋上を唆されるあたりは『マクベス』を連想させるなど、「リディック」はアンチ正統派を保ちつつ古典的たらんとする。様式的な世界観をもって救世主譚を綴る大河SFとしては、「砂の惑星」を思い浮かべる向きも多かろう。そうした原初的聖典的SFドラマを、アンチ・ヒーローを軸に、巨大セット至上主義的な撮影で描き出そうとしたのが「リディック」だ。荘厳な作り物感や身体のアクション描写がそのまま物語の迫力に結び付いたとは言い難いものの、「リディック」の野心は至極真っ当であった。ここは逆にB級SFシリーズのノリで、軍団を率いたリディック＝反逆の救世主の行く末を描くのも手ではあろうが、すでに構想済みのシリーズ後続作品製作は、未だ決定されていない。

「ピッチブラック」
●「リディック」ワールドの原点。すべてはここから始まった。
●2500円（税込・期間限定）
●映像特典：予告篇、メイキング、隠し映像、プロフィール（キャスト＆スタッフ）など。
●発売・販売元／松竹

『リディック アニメーテッド』
●「ピッチブラック」と「リディック」の橋渡し的な作品。主役の声をヴィン・ディーゼルが担当。
●2940円（税込）
●映像特典：メイキング、ピーター・チョンによる製作秘話など。
●発売元／ユニバーサル　販売元／ハピネット

「有名になって良かったこと？『リディック』を作ることができたことだね」

「ピッチブラック」で演じたリチャード・B・リディックを主人公にした新たな映画を作りたいというのはヴィン・ディーゼルが抱き続けてきた念願。「ワイルド・スピード」で突然スターになった時、彼はそのパワーをさっそく駆使することを恐れなかった。彼が「ワイルド・スピードX2」と「リディック」両方あわせて4000万ドルという高額なギャラを要求したことも、最終的に彼が「ワイルド・スピード」の続編に出なくなった要因のひとつと言われている。

VIN DIESEL／1967年、米ニューヨーク生まれ。7歳から舞台に立ち、学校卒業後に俳優を目指すが挫折、その経験を元にした監督・主演の短編がカンヌ国際映画祭で注目され、97年に長編「Strays」を監督。それがきっかけで「プライベート・ライアン」(98) に起用され、「ワイルド・スピード」(01)、「トリプルX」(02) のヒットで一躍有名になる。

ヴィン・ディーゼル［リディック］インタビュー

取材・文＝猿渡由紀

「スタジオが『ワイルド・スピードX2』を作ろう、と言った時、僕は、いや、それよりリディックの映画を作ってよ、と頼んだ。するとスタジオは『ピッチブラック2』か、と聞いてきたよ。僕は違う違う、続編じゃなくて、リディックを主人公にした現代の神話を作りたいんだ、と主張した。僕が意図したのは、ジュディ・デンチが出てくるようなエピック神話だったんだ」

デンチが演じるのは、エレメンタル族の使者エアリオン。不思議な存在感をもつこの役を彼女に演じてもらうために、ディーゼルは努力を惜しまなかった。

「ロンドンで舞台に出ていた彼女に、大量の花を贈ったんだ。そして『どうかお願いだから、この映画に出てください』と頼んだよ。僕らには『ロード・オブ・ザ・リング』みたいな有名な原作があるわけじゃない。彼女のような役者がいなければ、『ピッチブラック』みたいな小さなSFホラー映画の経験しかない僕らに、大規模な神話を作れる自信なんて、なかったからね」

映画のできばえには心底満足している様子のディーゼル。しかし、自称仕事中毒の彼の心は今また、長年温め続けてきているもうひとつのプロジェクト"Hannibal"を実現させることでいっぱいだ。

「だから僕はゲームが好きなんだ。仕事のことを考えないでいられるのは、ゲームに熱中している時だけだからね」

CGからみた「メイキング・オブ・リディック」

文＝大口孝之

「リディック」のVFXは、十一社ものプロダクションによって手掛けられた。

その代表は、ロンドンのダブルネガティブ社である。同社は、98年設立という若い会社だが、「リディック」の前作にあたる「ピッチブラック」(00)で注目されたVFX工房でもある。今回は、プリプロダクションから参加し、映画冒頭でリディックが惑星ヘリオン・プライムに到着する場面を手掛けた。宇宙船が、海や砂丘、川などの上を飛び、ヘリオンの街が登場するまでの描写で、全てCGで造られている。

また同社は、二人のキャラクターの表現

普通、スピン・オフというと本編よりスケールは小さくなるものだが、「リディック」は前作より壮大なSF叙事詩になったという珍しいケースだ。それだけリディックというキャラクターが立っていたということ。

「僕が『ピッチブラック』の脚本に参加したときはありがちなモンスター映画だったんだ。そこでモンスターが外から攻撃してくるのなら、内側からプレッシャーをかける人物がいるという対立構造の設定も面白いと思って作ったのがリディックというキャラクターだ」

トゥーヒー監督は「グランド・ツアー」や「アライバル—侵略者—」とSF作品を撮っているが、やはりSF通なのだろうか。

「僕はSF映画の監督として認知されているようだけど、あくまでもひとつのジャンルであって、ドラマやアクションも好きだよ。『逃亡者』や『G.I.ジェーン』の脚本も書いているくらいだから。チャンスがあればほかのジャンルの映画も撮りたいと思っている。でも『リディック』の場合はファンタジーの部分をファンタジー好きのヴィンが考えて、SFの部分はバックグラウンドがある僕が考えたから、やっぱりSFは得意なのかな(苦笑)」

トゥーヒー監督にとって「リディック」は初のメジャー作となったが、これまでと勝手が違うところもあったようだ。

「僕がこういうイメージだと言っても、それをイメージできない人や想像力の乏しい人は確かに多いかな(笑)。説明をするときに〝あの映画のように〟と説明するのは確かにわかりやすいけど、映画監督としては一度見たものを作るなんて意味がないと思う。だから僕は前に見たことのあるシーンやデザインがあると、これはやめようとすぐ言うようにしてるんだ」

「リディック」は三部作の構想があり、本作の中にもいくつかの謎は残ったままだ。

「僕もヴィンもいろんな構想を持っていて、二人で一晩中話したこともあったよ。リディックがどうなっていくか構想はできてるんだけど、実際に続編ができるかどうかは皆さんの応援にかかっています。ぜひ見てください」

DAVID TWOHY／1956年生まれ、カリフォルニア州立大学卒業。88年に「クリッター2」で脚本家デビューし、91年にTV映画「グランド・ツアー」で監督デビュー。「アライバル—侵略者—」(96)から劇場映画に進出し、「ピッチブラック」(00)、「ビロウ」(02)を手がける。脚本家としても「逃亡者」(93)、「ウォーターワールド」(95) などを執筆。

デイヴィッド・トゥーヒー［監督・脚本］インタビュー

取材・文＝竹之内円

に難易度の高い技術を使っている。一人はエアリオン(ジュディ・デンチ)で、物質状態から実体の無いエーテル体への変化を描く必要があった。そのためデンチの撮影には、メインのカメラ以外に、もう二台のカメラを用いて三角測量が行われ、空間上の彼女の位置情報が正確に求められた。このデータを元に、パーティクル(微粒子)の流体シミュレーションで、煙のような質感と動きが与えられ、同時に衣裳の裏地(クロス・シミュレーションで作られた)が透けて見えるようにして、透明感を表現している。

また、リディックと闘うロード・マーシャル(コルム・フィオーレ)は、時空を超えた存在であるアストラル・ロード・マーシャルとなって、超高速で移動する際にストリーク(残像の筋)を引くような動きをする。さらに、魂(アストラル体)が抜け出して、身体が二重になったような

「ピッチブラック」は低予算ながら緻密な設定と演出、ヴィン・ディーゼル演じる凶悪犯リディックの魅力あるキャラクターでSF映画ファンから高い評価を受けた。そしてスピン・オフした「リディック」は壮大なSFアクション超大作となって姿を現した。

『ピッチブラック』がヒットした理由は意外な展開の面白さと、なによりもリディックの魅力だと思う。それでリディックを主人公にして前作の設定を活かしつつ、まったく違う世界を舞台にしたSFアクション・ファンタジーを作ろうということになったんだ」

「リディック」は製作費180億円という超大作だが、トゥーヒー監督にその大役をまかせることに不安はなかったのだろうか。

「大作映画というのは、どんな名監督でも

SCOTT KROOPF／カリフォルニア大学で演劇を学び、CM・TV・ドキュメンタリー製作会社に入り映像製作を始める。その後は映画製作会社で「コーラスライン」(85)、「スタンド・バイ・ミー」(86)、「プリティ・ブライド」(99)、「ラスト　サムライ」(03)などに携わる。現在はインターメディアのモーション・ピクチャー・グループの社長に就任。

スコット・クループ［プロデューサー］インタビュー

取材・文＝竹之内円

ギャンブルなんだ。大作は関わる人間が多いから、その人たちとどれだけコミュニケーションが取れて、自分の考えを伝えられるかだ。デイヴィッドにはそれができる。それに彼は細かいところにもこだわって、予算をすべて画面の見えるところに全部使ったんだ。それは大事なことだね」

　スコット・クループはこれまでに「ラスト　サムライ」などの大作もプロデュースしているが、やはり大変な仕事のようだ。

「正直な話、クリエイティヴな人というのはとても感情的な人が多くて熱くなることが多いんだけど、今回はデイヴィッドもヴィンも『ピッチブラック』で世に出たことをわかっているし、古い友人なので、熱くなっても翌朝には冷静になって話し合える関係なのはよかったね。でも盛り上がってアイデアが出すぎて、それを選別していくのは大変だったな(笑)。『リディック』を皆さんに支持してもらってそのアイデアを続編で活かしたいね」

「リディック」の続編の前にすでに着手している新作は、あの大ヒット作「マスク」の続編「マスク2」だとか！

「実はもう撮影は終わって、今はポストプロダクション中なんだ。川に捨てられたマスクを拾った男がマスクをしたまま子供を作ったら、子供がマスクになってというストーリーで、おもしろい映画に仕上がったと思うよ」

表現も行われている。これを表現するために、本物の俳優とCGによるデジタルダブル（代役）を、デジタル処理でブレンドするというテクニックが用いられた。

　二つ目の代表的な会社は、ロサンゼルスのリズム&ヒューズ・スタジオだ。同社は主に、惑星クリマトリアの描写を担当した。この惑星は、恒星からの強烈な熱線と、惑星内部の火山熱によって、灼熱地獄となっている。この風景を描くために、特別なパーティクル・シミュレーションが考案され、膨大なレンダリング時間をかけて、爆発的に拡がるVTF（Visible Thermal Front）ストームが表現された。ちなみに、クリマトリアの空に輝くオーロラのような光は、「ソラリス」の大気の素材を流用したものだ。

　同社は、犬と豹をブレンドしたような狂暴な怪物ヘルハウンドや、コルクと呼ばれる地下刑務所の合成も担当している。

現代を生きる〈少年〉、そして映画
「誰も知らない」
「16歳の合衆国」

本特集では、ティーンエイジャーの少年が主人公であるほかは全く関係のない2本の映画を、同時に扱っている。
製作国も、物語の内容も、作家の意図も異なる映画ではあるが、
この2本を横断していくなかで見えてくる〈現代社会を生きる子供〉を、大人として確認してみたく思った。
大人の読者の皆さんのご意見、そしてティーンエイジャーの読者のご意見。
映画を見たうえで、本特集を読んでいただき、ぜひ聞かせていただきたい。

誰も知らない

●監督・プロデューサー・脚本・編集／是枝裕和 撮影／山崎裕 美術／磯見俊裕 音楽／ゴンチチ ●出演／柳楽優弥、北浦愛、木村飛影、清水萌々子、韓英恵、YOU、串田和美、岡元夕紀子、平泉成、加瀬亮、タテタカコ、木村祐一、遠藤憲一、寺島進 ●2004年・日本・ビスタサイズ・ドルビーSR・2時間21分 配給／シネカノン

●1988年に実際に起きた事件がモチーフ。母親に置き去りにされた4人の子供たちが、大人に知られることなく兄妹だけで生きていこうとする姿を描く。02年10月16日クランク・イン。翌年8月7日のクランク・アップまでの一年弱をかけて丁寧に撮影された。04年のカンヌ国際映画祭で、長男役の柳楽優弥が日本人初にして史上最年少の最優秀男優賞を受賞し話題となった。

●8月7日よりシネカノン有楽町、川崎チネチッタ、梅田ガーデンシネマ、名演小劇場、岡山シネマクレール、シネカノン神戸、京都京極弥生座ほか全国にて順次公開

16歳の合衆国
THE UNITED STATES OF LELAND

●監督・脚本／マシュー・ライアン・ホーグ 製作／ケヴィン・スペイシー、バーニー・モリス、バーマー・ウェスト、ジョナ・スミス 音楽／ジェレミー・エニック 挿入歌／ピクシーズ 出演／ドン・チードル、ライアン・ゴズリング、クリス・クライン、ジェナ・マローン、レナ・オリン、ケヴィン・スペイシー ●2004年・アメリカ・ビスタサイズ・ドルビーデジタル・1時間44分 配給／アスミック・エース

●頻発する青少年による信じ難い事件を独特な視点で描き、03年サンダンス映画祭を熱狂させた。知的障害を持つ弟の恋人を殺してしまった16歳の少年。世界を満たす〈哀しみ〉にどう対処していいのかわからず、固く心を閉ざした少年の様子を繊細に描く。

●8月7日よりシネマスクエアとうきゅう、8月28日より動物園前シネフェスタ4、9月18日より今池国際シネマほか全国にて順次公開

「誰も知らない」

簡単に答えが出ない重量級の問い

※結末まで触れている部分がございます。映画をご覧いただいてからお読みいただくことをお勧めします。

対談

是枝裕和（監督）×斎藤環（精神科医）

構成＝佐藤結　撮影＝吉岡誠

見れば見るほど、そして見る人の数だけ、発見がある本作。
映画・漫画など視覚表現上の隠喩構造の変容を、
精神分析理論で読み解いた『フレーム憑き―視ることと症候』（青土社）を
上梓されたばかりの斎藤環さんに、是枝裕和監督と対談していただいた。
一歩踏み込んだ分析とそれに対する監督の答えが、
この映画の理解をさらに深めるためのひとつのヒントとなった。

安全地帯から見ることを回避させたかった

斎藤　「誰も知らない」、拝見しました。たいへんすばらしい作品でした。

是枝　ありがとうございます。

斎藤　まず、この作品を見た観客の中で賛否が一番分かれるのが、この母親をどう受け止めるかということだと思います。精神科医としての立場から見ると、「とんでもない母親だ。この子たちは、これからいったいどうなってしまうんだろう」と、考えざるを得ない母親です。しかし、映画の中では、フィクションの強みを生かして、YOUさん演じる母親は、彼女なりに懸命に生きていて、簡単には憎めない存在になっている。母親を一方的に断罪するということを避けようとなさったんですよね？

是枝　どう避けるか、ということが大きな問題でした。やってることはひどいことなんですが、「単純に愛情がなくて子供たちをほったらかしにしたのであれば、あそこまで子供たちが外部の侵入を拒んで、自分たちだけであの空間を守っていこうとしただろうか？」という疑問を感じたんです。そして、もしかしたら、母親がいる間には、ある種の幸せな時間もあって、それが彼らの中に記憶として残っていたために、母親を待ったのではないか、と想像して、そこから、母親をどう造形し、どういうシーンを作っていったらいいかと、いろいろやってみました。

斎藤　YOUさんのキャラクターはたいへん説得力があります。現在形でしか生きられない、その場、その場の熱情だけで生きて、責任はとれないというタイプの人間に見えます。

是枝　目の前に子供がいるとベタベタと愛せるんですが、一旦、家から出てしまうと思い出さない。

斎藤　ただ、リアルな方から入りますと、母親が非常に悪い母親で、虐待的な場合でも、子供たちは結束すると思うんです。もしかしたら、そっちの方が「母親から他の兄弟を守るんだ」というお兄さんの責任感がより強くなったかもしれない。その可能性はあえて切り捨てたんでしょうか？

是枝　切り捨てました。もし、そっちを選ぶと、見る側が「わあ、ひでえ母親だなあ」と、安全地帯からあの家族の悲劇を見ることになるなと思ったんです。「この母親がちゃんとしてれば、こんなことにはなんないんだよ」というように。

斎藤　そうですね。教育映画というか、わかりやすい映画になってしまう。

是枝　実際に子供を持っている女性の中には、男性との関係ではなくても、仕事と子供のどちらに重点をおくのかということなどで、悩んでいる人もたくさんいると思います。そういう、誰の中にでもある、ゆらぎのようなものが、なるべく重ねやすいような形で彼女を造形しておいた方が、見る人が誰かを批判する立場としてではなく、むしろ、批判される側に身を置く形で映画に参加できるのかなと考えて、ああいった形をとりました。

斎藤　よくわかります。そういう複雑性がフィクションの醍醐味だなと思って見ていました。一つ不思議に思ったのは、住所も電話番号もわかっているのに、お兄さんが母親に会いに行こうとしないことなんですが。

是枝　僕も最初は「なんで行かないんだろう」と思っていたんですが、ある時、そう考えていること自体が、すごく大人の発想なのかもしれないなと思ったんですね。母親が新しい男と暮らしているところに行って「なんとかしてくれ」と言うことは、彼の中では選択肢としてなかったから行ってないんだと思いました。彼が把握している人間関係の世界には、たぶんそこまで含まれていなかった。電話でつながった先は現実的な場所ではなかったのかなと思いました。

斎藤　そうかもしれませんね。子供には大人の発想に流れていかない、頑なさのようなものがありますから。思春期くらいからそういうものが崩れ始めるんですが、あのくらいの年齢だと、割と自分の幻想に固執して、ものすごく突飛な行動になってしまったりすることがあります。そういう意味では、あのお兄ちゃんの年齢設定はまさに境界線にあるわけですね。

泣き顔は撮らないと決めて

斎藤　「親に捨てられる子供」というテーマも、我々の心を揺さぶるものがあります。個人的な質問になるんですが、設定の中に是枝さん自身の体験に根ざしているものが多少あるんでしょうか。ご兄弟はいらっしゃるんですか。

是枝　姉が2人います。年が離れているので、ほぼ一人っ子のような環境で育ってますが、そんなに特別な環境で育っているわけではないです。

斎藤　ずっと東京ですか。

是枝　はい。両親が共働きだったので、鍵っ子で、家で1人でいるという状況は多かったです。帰ってこない両親を待つ不安であるとか、何の根拠もないんですが、「もう、帰ってこないんじゃないか」という恐怖感ですとか、そういうものは、かなり感じてました。それは誰にでもあるものじゃないかと思うんですが、どうでしょう?

斎藤　理由はわかりませんが、これは人間に普遍的な現象みたいですね。多くの子供に「親に捨てられるかもしれない」と思った経験があるようです。他にも「親が死んじゃったらどうしよう」と考えて眠れなくなるというようなこともありますよね。それは、成長の過程の中で失われていく親子関係の象徴みたいなものかもしれないと思います。

通常、こういう設定の映画ですと、小さい子がお母さんを恋しがって夜中に泣きわめくというような、過剰な演出になりがちだと思ったんですが、割とさらっと流されましたね。これも意図してですか?

是枝　あの状況をドキュメントで撮ったら、一日中泣いたり叫んだりしていると思うんですが、それだとやりたいと思っている方向とずれてしまうので、今回は泣き顔は撮らないと決めて、その中で、残された子供たちの痛みや悲しみというものをどう表現できるのかということをやってみました。

斎藤　泣くシーン自体がないんですね。すごく不思議な印象であると同時に、ファンタスティックな感じを受けました。

是枝　子供たちのいる部屋が現実からちょっと浮いた空間に見えているのは、それもあるかもしれないですね。

斎藤　泣いてしまったら、それは社会を求めている証拠みたいなものですからね。

是枝　特にお兄ちゃんは、泣くという行為すら許されていないというような捉え方をしていました。

斎藤　泣かれるより悲劇的に見えたのは、そういうことかもしれません。

お兄さんについて言えば、ああいった生い立ちの少年は、あらゆる責任を自分がとらなくてはいけないというような、いわゆるアダルト・チルドレン的な発想を持つようになることがありうると考えたんですが。お兄さん役のモデルとなった少年は、かなり、過剰な責任感を持っていたようですね。

是枝　ええ。

斎藤　映画の中では、外に出られる特権を生かして友達を連れてくるシーンなどで彼のいいかげんなところがちょっと出てきて、過剰さがほどよく薄められていたので救われました。あれで、完璧に責任を全うしようとしたら、別の形で共同体が崩壊したと思います。子供の過剰な責任感というのは、自滅的であることが多いので、そういう、ちゃらんぽらんさがないと、救われない感じがするものですから。

是枝　彼が友達を作るのは、そのことによって、共同体が壊れかけていくという流れにしたかったからなのですが、彼が全部を背負うのではなく、弱いところを見せたことによって救われると感じられたというのはすごく面白いです。

是枝　裕和　これえだ ひろかず
1962年東京都出身。87年早稲田大学第一文学部卒業後、テレビマンユニオンに参加。主にドキュメンタリー番組を演出。95年、初監督作「幻の光」で第52回ヴェネチア国際映画祭金のオゼッラ賞受賞。続いて「ワンダフルライフ」「ディスタンス」を発表。03年「カクト」「蛇イチゴ」を初プロデュース。

背中あわせにある"ひきこもり"と"置き去り"

斎藤　もともとのタイトルが「素晴らしい日曜日」だったということですが、そういう感じもわかります。ある種の開放感というか、「終わらない夏休み」的な楽しさもあったんじゃないかという想像もできます。

今の社会では、責任や倫理の網の目がすごく細かくなってしまっていて、あらゆる行為に対して倫理観が問われるような状況があります。そうした中で、しっかりした親子関係が育まれる子供は幸せかもしれないけれども、一方で息苦しさもある。その息苦しさが、男の子の場合のひきこもりや、女の子の場合のリストカットなど、生命力の希薄さのよう

なものにつながってしまうことがある。

この映画で描かれているのは、そうした状況の対極にあるとも言える、濃密な生命空間で、そこに魅力を感じるわけですよね。

是枝　大人が排除された空間の中で、子供がある濃密な感情体験をしていく。その、非常に歪んだ形ではあるけれども、ある魅力的な空間が、外部とどんな接点を持つことによって壊れていくのかということを時間経過の中でやってみたかったというのが一つありました。

斎藤　映画の舞台は現代ですけれども、コンピュータやインターネットは完全に排除されている。これは意識してされたのですか。完全に社会からシャットアウトされているということで。

是枝　はい。テレビもゲームをするときだけは使ってるんですけれど、外への窓としては使いたくなかったので、かなり意図的にやめています。

斎藤　ある種、究極のひきこもり生活なわけですが、それがもたらす、奇妙な開放感みたいなものに、見ていて不思議な感じを受けました。

匿名であることの開放性のようなものもあると思います。匿名の反対が何かというと、なかなか難しいですが、我々は少なくとも、登録済みの空間に生きている。そこには、利便性や快適性と裏腹に息苦しさみたいなものがある。その反対側に、この映画で描かれたような、まったく匿名の空間、まさに誰も知らないところで育まれる空間の豊かさというものがあるような気がしました。ただ、あの子供たちの中で、お兄ちゃんは半分社会化されてますが、下の子たちはほとんど野生児的な感じで育っていく可能性があって、その将来には悲劇的な予感が濃密にあります。その時は幸せでも、その幸福さが社会と接触した瞬間にトラウマ化されてしまうということがあり得ると思うんですよね。そういった意味では、ものすごく残酷な幸福さというか、すごく魅力的でありつつも、「このままでいいんだろうか？」というハラハラ感がどうしてもあるんですが。

是枝　社会と接点を持たない空間での、ある種の満たされた感じというのが、いつまでも続くものではないなとは思っていました。だからこそ、映画の中で彼らが笑っていること自体が悲惨な状況に見えるという形をとりたかったんです。「かわいそう」とはちょっと違って、「痛い」と感じるような。

斎藤　私が専門にしているひきこもりのケースでは、親が子供を捨てられないところに問題があって、時には「捨てることもあっていいのでは？」と僕らが問いかけても、絶対に捨てられないんですね。30歳、40歳になっても働かないわが子を、将来のあてもなく養い続けている。「捨てられない、切り離せないことが自立をさまたげることもある」というんですけれど。

「誰も知らない」を見て、同じ、ひきこもるにしても、こういう親子形態もありうるんだと、新鮮に感じた面もありました。本当に、捨てられない母親ばっかり見ているもんですから、さわやかさみたいなものすら、ちょっと感じました。

是枝　なるほど。

斎藤　私は古い世代にもっとエゴを発揮してほしいんです。「親もグレていいんだ」と常々言っている身としては、映画の中の子たちがもっと年上だったら、ああいう母親もありかもしれないと思ったわけです。彼らはちょっと年少過ぎるので、悲劇になってしまいましたが。

是枝　捨てられない母親の問題の帰結として、ひきこもりがある。

斎藤　はい。そういう点でこの映画を、とても新鮮でリアルに感じたのかもしれません。

是枝　"ひきこもり"と"置き去り"は背中あわせなんですね。

斎藤　そうですね。ああいう形で置き去りにされて、社会と関わらずにいた子供たちがどうなっていくのか、という話は、前例がないように思うので、それだけでも「誰も知らない」で投げかけられた問いの重さは重量級という感じがします。簡単には答えが出ない問題として、私も考えていきたいと思います。

斎藤環 さいとう・たまき
1961年岩手県出身。筑波大学医学研究科博士課程修了。医学博士。現職は、爽風会佐々木病院・診療部長。専門は思春期・青年期の精神病理学、病跡学、ラカンの精神分析、「ひきこもり」問題の治療・支援ならびに啓蒙活動。

大人の視点で見る、少年を主軸にすえたふたつの映画

スクリーンの中の子供たちと向き合い…

文＝滝矢直

子供（未成年者）が犯罪の当事者になるニュースが、後を絶たない。
痛ましい事件の報道の陰で、被害者となった子供の心が
どれほどの痛みを受けているのか。また、その一方で
加害者ともなりうる子供たちに、「大人」はどう向き合うべきなのか？
「子供がわからない」という言葉が大人たちの間で使われるようになったのは、
いつ頃からだったただろうか？

未成熟な大人と成長する子供

是枝裕和監督の「誰も知らない」は、1988年に実際に起きた「東京西巣鴨子供置き去り事件」がモチーフとなっている。4人の兄妹をアパートの一室に残して、男と住むために出て行ってしまった母親。兄妹は時折、母から送られてくる現金書留だけを頼りに、半年もの間、子供たちだけの生活を続けたが、末妹の死によって初めてその暮らしが大人たちの知るところとなったのだ。監督はこの事件に「なぜ長男は、母親のように妹弟を捨てて出て行かなかったのか？」という疑問を抱いたという。裁判で母親と再会したとき、母親の期待に応えられなかった自分を責めて涙を流したという長男は、どんな気持ちで子供たちだけの生活を続けていたのか？　カンヌ映画祭でタランティーノに絶賛されたあの強いまなざしで、柳楽優弥演じる長男・明にそんな想いを抱きながら「誰も知らない」を観た。

秋のある日、母親・けい子（YOU）と12歳の息子・明がアパートに引っ越してくる。けい子には他に父親の違う3人の子供がいるが、大家には秘密にしているため、長女の京子（北浦愛）は一人電車でやってくる。そしてまだ幼い茂（木村飛影）と、ゆき（清水萌々子）は、なんとスーツケースに入って荷物として運ばれてくる。「窒息するんじゃないか」と思わず心配してしまうが、母親は子供と一緒に"かくれんぼ"のスリルを楽しんでいるのである。その後、「大きな声で騒がない」「ベランダや外には出ない」といった、この家のルールを子供たちに確認させる姿も、親というよりはお姉さんぶった学級委員のよう。そんな無邪気な母親は、明に「妹や弟をよろしくね」というメモと少しのお金を残して、好きな男の元へと行ってしまう……。

©「誰も知らない」製作委員会

家のルールを守って4人だけの生活を続ける子供たち。一人だけ外出が許されている明は、長男の責任感で母親の役割を務めようとする。しかし、冬が来てもけい子からの連絡はない。不安になった明はけい子の男友達に金を借りたり、コンビニの女店員に売れ残りの食べ物を分けてもらったりするのだが、男は明たちとの関係に責任を持ちたがらず、店員も明の相談には乗るものの、彼らは決して深入りはしないのだ。そんな外界との関わりの希薄さは、案外、明たちにとっては幸福だったのかも知れない。なぜなら、お金が底をつき電気や水道が止められてしまっても、近所の公園で水を汲み、洗濯をし、カップラーメンの容器に雑草を植えてみたりと、彼らなりに知恵を絞った"誰も知らない"子供だけの時間は、なんだか楽しげに流れているのである。外の世界にいるのは、明を万

引き犯と間違えたことを"肉まん"で口止めしようとするコンビニの店長や、ゲーム感覚で万引きをする少年たち、援交の真似事で金を工面する少女。世間の汚さを身につけた人々との関わりが平穏を乱すのだから。「子は親の鏡」という言葉があるが、まっすぐな明の眼は、「大人」の鏡としてその無責任さやずるさを映していく。次第に明たちと仲良くなる少女・紗希（韓英恵）もまた、大人を見透かすような強いまなざしが印象的だ。明たちの部屋に居場所を見つけ、京子や茂、ゆきを母親のような包容力で包み込む彼女を迎えたことで、子供たちの世界には、新しい家族の形が、彼ら自身によって築かれていく。終盤、不幸にも命を落としたゆきを自分たちの手で埋葬する明と紗希の間には、初恋のほのかな想いなど通り越した"絆"すら感じられるのだ。妹の死によって楽しい時間は永遠でないことを知らされても、その痛みを受け止めてなお自らの足で歩いていけるほど、子供たちは成長しているのである。きっと彼らは未成熟な大人の助けなど必要とせず生きていくのだろう……そう思わせるラストシーンに、まがりなりにも「大人」である私は、拒絶されたような寂しさと同時に、無責任な大人たちに代わって「ごめんね」と胸の中でつぶやいてしまったのだった。

大人たちが求めた"理由"見つからない明確な答え

大人たちによる被害者であった明たちに対し、「16歳の合衆国」の主人公リーランド（ライアン・ゴズリング）は、事件の加害者として登場する。彼は恋人ベッキーの弟で、知的障害を持つライアンを刺し殺してしまうのだ。ごく普通の少年であるリーランドが、なぜ罪を犯したのか？　大人たちはその"理由"を見出そうとする。逮捕され、施設に送られたリーランドは、罪を犯したことは認めるものの「物事に明確な理由なんてない。ただ"事"が起きただけ」だと静かに語るだけだ。そんな少年に興味を抱く施設の教官パール（ドン・チードル）。売れない作家でもある彼は、リーランドが小説のネタになるのではという思惑を持っていて、施設の規則に反した個人的なカウンセリングを通して心の内に迫ろうとする。

本作が監督デビューとなるマシュー・ライアン・ホーグは、パールのように、ロサンゼルス少年審判所（矯正施設）で2年間、教員生活を送った経験を持ち、それがこの脚本を書き始めるきっかけとなった。彼は、担当した殺人罪に問われた少年たちのことを「ただ単に取り返しのつかない間違いを犯してしまった、普通の少年だった」と語っている。そして少年たちが"事"を起こした背景に目を向け、さまざまな道徳的な疑問が湧いてきたのだという。監督自身が投影されたキャラクターであるパールも、リーランドをとりまく人々に目を向け始める。息子が犯した事件に自分を責める母親。長く会っていない父親・アルバート（ケヴィン・スペイシー）は、パールが尊敬する有名作家だが、やはり「息子を小説の題材にしたい」という欲求が、愛情より優先している。気持ちがすれ違ってしまったベッキーはドラッグに溺れていく。私たちが一見「普通」と思っている幸せに、隣り合わせの脆さや残酷さ。「世界にあふれている哀しみを誰よりも敏感に感じ取ってしまう」という少年に、パールは彼が罪を犯した"理由"を見出すことができない。

一方でパールは自分が犯している"罪"をリーランドから指摘されてしまう。恋人がいながら他の女性と関係していることや、施設の規則を破ったこと。「自分でも悪いとわかっていることを、なぜするのか」という矛盾をつかれた大人は「自分は弱い人間だから」と言い訳をしつつ、眼をそらしてしまうのだ。「誰も知らない」の明や紗希のように強くはないが、多くの哀しみをたたえたようなまなざしでリーランドは言う。「世界の見方は二つある。背後に潜む"哀しみ"を見るか、すべてに眼を閉ざすか」

劇中には、そんな彼の目に映る印象

的な映像が挿入される。それは穏やかな日常の風景だが、片方ずつの眼で見たときに視点がずれて二通りの見え方をするのだ。この〟ずれ〟が表すのは、私たちが生んでいる日常的な矛盾。それが無意識で、無自覚であっても、結果的に誰かを哀しませてしまうこともある。例えば、パールが恋人と浮気相手の両方を傷つけてしまったように。その罪は、リーランドの犯した罪とどれほどの違いがあるのか。しかしそう問われたとき、大人たちはパールと同じように言い訳をしてしまうだろう。「ある程度、眼をつぶらなければやっていけない」と。世界にあふれる罪や哀しみに眼を閉ざすことは、社会をうまく生きていくための術といえるだろう。しかし眼を閉ざさないリーランドが敏感に受け止めてきた哀しみは、吐き出せる言葉以上にピュアな心を抉っていたのかも知れない。ひょっとしてリーランドがライアンを殺したのは、ハンディキャップゆえに吐き出せる言葉を持たない彼を、この世界から解放してあげたかったのだろうか……。

大人たちが求めた〟理由〟に明確な答えが用意されないまま、哀しみの連鎖は新たな予期せぬ悲劇を招いてしまう。そして学校を辞めたパールは、裏切った恋人にもう一度会いに行く。きっと彼は、もう言い訳に逃げることはしないはずである。

※　※

子供の気持ちに近づこうと見た2本の映画から、浮かび上がってきた未成熟な大人たちの姿。「子供がわからない」原因は大人自身にもあるのかも知れない。勿論、痛ましい事件をすべて大人や社会のせいにすべきではないのだが。子供を守り、導くべき「大人」や「親」であるより、一人の「男」や「女」であることを優先しがちな現代社会。そんな生き方を否定することはできないが、少なくとも子供たちとちゃんと向き合い、その視線に恥ずかしくない一人の「人間」でありたいと思う。スクリーンの中から見つめる子供たちのまっすぐな瞳に、あなたはきちんと向き合えただろうか？

「16歳の合衆国」

マシュー・ライアン・ホーグ

モンスターとみなされた少年たちのもうひとつの物語

インタビュアー＝**大場正明**

コロンバインの事件との共通点

『コロンバイン・ハイスクール・ダイアリー』は、銃乱射事件を起こした少年たちの友人だったブルックス・ブラウンが書いたノンフィクションだが、そのなかにこんな記述がある。「多くの人々は、**自分の手を汚してまでコロンバイン**の背後にある本当の理由を究明したくないと思っている。本当の問題だったかもしれないことを受け入れるよりも、その場しのぎの解決を信じるほうが簡単だから」。「16歳の合衆国」の物語には、このブラウンの言葉に通じる問題意識があるように思う。

「コロンバインの事件は、この脚本を執筆している頃に起きたので、とても興味を持ちました。その本は読んでませんが、いま話を聞いただけでも、映画との共通点**を感じます。アメリカで事件が報**道されたときには、少年たちが学校でいじめにあい、孤立していたことなど、ダークサイドにはほとんど触れられませんでした。それを究明し、事件を起こした彼らが同情の対象になることを許さないような風潮があったからです。この事件を含めた少年犯罪に対する私たちの姿勢には、事件を異なる方向から見ることを恐れているところがあるように思えます。その少年たちにも人生があり、それがどういうものであったのかを知る**のが怖い。**なぜなら、彼らを凶悪で非人間的なものとみなし、隔離して安全だと感じる方が簡単だからです。私はこの映画で、その少年たちのもうひとつの物語を描き

たかった。彼らはモンスターではなく、彼らのなかには善があるかもしれない。もちろんそういう視点に立つことは、困難をともなうし、非常に危険ですらあるのですが、こうした題材を扱う場合には、避けて通るわけにはいかないものだと思います」

ホーグ監督は、映画の撮影に入る前に、カミュの『異邦人』をライアン・ゴズリングに与え、主人公リーランドのキャラクターについて語り合ったという。『異邦人』の主人公ムルソーの世界観は、現代を生きる若者の感性を予見していたともいえるわけだが、この小説は、映画の内容や主人公にどのような影響を及ぼしているのだろうか。

「ムルソーとリーランドには多くの共通点があります。たとえば、どちらも感情を強く抑制しているために、肉体的な感覚が鋭敏になっている。ムルソーは、タオルの生地の感触や海水の味、太陽の光を敏感に感じる。同じようにリーランドも太陽の光に敏感に反応するし、誰かが部屋に入ってくると、その人物の匂いを鋭く嗅ぎとります。この小説でもうひとつ興味深いのは、何かを起こした人間の反応が、周囲の人々が期待していたものと違っていた場合に、人々がどう反応するかということに注目しているところです。ムルソーは罪を犯したから裁判にかけられるのですが、その裁判では、彼が自分の母親の死に際して、泣くというような普通の反応を見せなかったことが取り上げられ、裁かれます。アメリカでは、誰かが殺人を犯した場合、その人間の反応が、悲しみや後悔など人々の期待に沿うようにメディアで表現されないと、怒りや反感が生まれてきます。この映画では、そういうことを意識している。リーランドが完全に心を閉ざしているために、人々が違った反応をしなければならなくなるということです」

ひとつの事件によって変化していく関係性

リーランドが送られる矯正施設で生活しているのは、ほとんどが黒人やヒスパニックの少年で、リーランドは特別な目で見られ、誰も近づこうとはしない。その溝からは、彼らが犯した犯罪や生活環境の違いが見えてくる。

「その通りで、リーランドはかなり特殊なケースです。私が実際に働いていた施設にいたのも、ほとんどが黒人やヒスパニックの少年たちでした。彼らが犯した犯罪は、ドラッグの売買や盗難、ギャングの抗争による殺人など、育った環境と結びつきがあり、その動機についてはつじつまがあっている。私はリーランドのような少年に実際に会ったわけではありませんが、ヒントになった体験はあります。施設には、殺してしまった母親の死体と二、三日過ごしていた少年とか、母親を五十回も刺して殺した少年がいて、他の少年たちは、彼らがなぜそんなことができるのか理解できず、ショックを受けていました。映画には、そういう体験が反映されています」

しかし、施設のなかで黒人のグループに属していたアフロの少年は、リーランドが人種差別や貧困とは異なる絶望を背負っていることを感じとる。教官のパールもリーランドとの関係を通して救いを見出す。これに対して、リーランドの密かな心の支えであったカルデロン家や被害者の家族であるポラード家は、崩壊し、あるいは関係が揺らいでいく。

「私は、ひとつの事件が起こったことによる関係の変化、特に失われる関係よりも新たに生まれたり、再生される関係に強い関心を持っていました。普通であれば、家庭がそれに最も相応しい場所のはずですが、カルデロン家もポラード家もばらばらになり、リーランドと父親の関係も修復されません。一方で、リーランドは、施設という異質な世界に放り込まれ、アフロの少年とはまったく世界観が違うにもかかわらず、ふたりの間に何かが生まれる。パールもリーランドを利用しようとしていたのに、それが絆に変わっていく。そういう関係は、いつどこでも生まれる可能性があるはずです。ただ、家族というのは、ともするとこの関係の大切さを見失いがちになるところがあるように思います」

〈引用文献〉
●『コロンバイン・ハイスクール・ダイアリー』ブルックス・ブラウン、ロブ・メリット著　西本美由紀訳（太田出版、2004年）

MATTEW RYAN HOGE

コロラド州生まれ。南カリフォルニア大学入学、スクール・オブ・シネマで学士号を取得。在学中に執筆した脚本“Happy”は、“最も傑出した脚本”に与えられるエイブラハム・ポロンスキー賞を受賞。99年には、倉庫に一緒に住む友人について描いたセルフ・コメディ“Self Storage”を自主制作。その後、ロサンジェルスの矯正施設で2年間の教員生活を送り、その経験から本作の脚本を執筆。ケヴィン・スペイシーに認められて、スペイシーのプロダクション『トリガー・ストリート』で製作、監督デビューした。

KinejunInterview

いまや、押しも押されぬナンバー・ワンヒットメーカー

監督 サム・ライミ

キャラクターの内面を描くことに注意を払ったよ

インタビュアー＝竹之内円

撮影／江木康人

SAM RAIMI／1959年、米ミシガン生まれ。学生時代から8ミリ映画を撮り、84年に「死霊のはらわた」で監督デビューを果し、注目を集める。90年にはハリウッドで「ダークマン」を撮り、「シンプル・プラン」(98)、「ギフト」(00)などを発表。02年の「スパイダーマン」の記録的大ヒットで名実ともにハリウッドのトップ監督に。「未来は今」(94)などコーエン兄弟とのコラボもある

最近は三部作など、最初からシリーズ化を狙った大作が多くなったが、「スパイダーマン2」ほど前作を超える高いクオリティとドラマ性を持った続編はない。84年に低予算のスプラッターホラー「死霊のはらわた」で監督デビューを果し、今や世界ナンバーワンヒットの映画監督になってしまったサム・ライミ。全世界からの期待と注目を受けての続編製作は相当のプレッシャーだったに違いない。

「もちろんプレッシャーは感じました。でもどんな続編を作れば観客が満足してくれるのか、考えてもすぐに答えは見つかりませんでした。そこで前作で自分はどこが気に入っているのかを考えたのです。その結果、前作よりスケールの大きい作品を作るのではなく、ピーター・パーカーというキャラクターをより綿密に描くことにしました。MJへの愛や背負ってしまった責任との対峙などを深く描けば、観客も共感してくれるのではと考えたのです」

「スパイダーマン」の大ヒットがハリウッドに与えた影響は大きく、頓挫していた「スーパーマン」と「バットマン」の新作も動き出し、「デアデビル」や「ヘルボーイ」とコミックの映画化が相次いだ。

「コミックの映画化がトレンドになっていることは実感していますし、確かに多くなっています。長い間映画の世界にいると、波があることがわかります。それがホラーであったり、アドヴェンチャーであったりするわけですが、今は明らかにスーパーヒーローものがトレンドであることは間違いないと思います。その理由のひとつとして「スパイダーマン」のプロデューサーであり、版元でもあるマーヴル・コミックの会長アヴィ・アラドが、いい映画を作ろうとハリウッドと闘ってきたという歴史があると思います」

だが、たくさんのスーパーヒーロー映画が作られると、「スパイダーマン」ならではの特色を出していかなければならないはず。

「もちろん差別化しなければいけないという思いはどこかにはありましたが、それがすべてではありません。というのもスタン・リーが作り出した原作コミックのキャラクターが、ほかのヒーローとは違っているからです。ピーターは本当に普通の男の子なんです。お金

もないし、女の子にもモテないし、家庭環境も恵まれていないので、観客に共感してもらえる、どこにでもいるタイプのキャラクターなんです。『スパイダーマン』はそんな普通の少年が偶然に持ってしまった超人的能力が、いかに、私生活に影響を与えるかという物語なんです。そこに焦点を当てていますので、ほかのヒーロー映画とは違ったものになっていると思いますよ」

「スパイダーマン」の第1作はもともとジェームズ・キャメロンの監督で進んでいたものだが、降板し『スパイダーマン』ファンのサム・ライミにまわってきたのだ。これはピーター同様に運命だったのだろうか!?

「私は『スパイダーマン』に関われて本当に名誉なことだと思っています。でも正直なところ『スパイダーマン』は普遍的な作品なので、どんな監督でも撮ることはできたと思うんです。なので私が監督することになったのは、ラッキーとしか言いようがありません。運命ではないと思いますよ。と言うのは、監督の依頼があったときに〝本当に私が監督していいの?〟と強く思っていましたから。ピーターのように運命ではありませんが、同じように監督していくという責任は負っていくつもりです」

「スパイダーマン」は現時点で全世界28カ国で公開され、そのうち12カ国で歴代オープニングを樹立、全米では初日の興行記録が4044万ドル（約44億円）という歴代新記録を更新するなど、前作を上回る大ヒットとなっている。だがサム・ライミにとってそんな記録はただの数字に過ぎない。

「興行成績も確かにプレッシャーにはなりますが、それよりも観客が求めているものに応えられる作品を撮ることの方が私にはプレッシャーですね。これはきっとどんな映画監督でも同じだと思いますよ」

　サム・ライミは記者会見のときも取材のときもブリーフケースを片時も手放さない。実はその中に実兄と共同執筆している「スパイダーマン3」の執筆中の脚本が入っていて、移動の最中も取材の合間もずっと書いているのだという。

「これを失くしたら、私はスタジオに殺される(笑)。『スパイダーマン3』はどうなるか、正直なところ私にもわかりません。『2』が終わった時点のキャラクターたちの経験を踏まえ、彼らがこれからの人生をどう歩んでいくのかを考えているところです」

「スパイダーマン3」の公開は2007年に決定。それまで待てない！

「スパイダーマン2」

グリーン・ゴブリンとの闘いから2年、恋人ＭＪよりスパイダーマンとして生きることを決めたピーターだが、そのことが重荷となってきた。だが尊敬するオクタヴィウス博士が実験の失敗で怪人ドック・オクとなり、ピーターは……。
●2004年・アメリカ・スコープサイズ・ドルビーデジタル、SDDS・2時間7分
●監督／サム・ライミ　●出演／トビー・マグワイア、キルスティン・ダンスト、ジェームズ・フランコ
●配給／ソニー・ピクチャーズ
●日劇1ほか全国東宝洋画系にて上映中

FROM France

㊺恋愛はズルズルに限る?

齋藤敦子

聞きましたよ、香織ちゃんが試写で涙したって話。いいなあ、そんなに熱い思い出のある幼なじみがいて。実は私も7月に高校の同窓会があって、思い出の志賀高原に行ったんだけど、暑くはあっても熱くはならなかったんだ、残念ながら。

確かに「イザベル・アジャーニの惑い」や「世界でいちばん不運で幸せな私」に見られるようなズルズルいっちゃう恋愛は、フランス映画のお家芸かもしれません。アメリカ映画では(何しろピューリタンなお国柄ゆえ)、恋人たちが出会い、さまざまな誤解や困難を乗り越え、結婚してハッピーエンド、というのが恋愛映画の法則で、何が何でも直線的に進んでいくけど(イギリス映画の場合はもう少し屈折するでしょうけど)、フランス映画の恋愛は、アメリカ映画でエンド・マークが出るところから始まり、切れたり切れなかったりでひたすらズルズル。文字通り紆余曲折していくわけです。もともとフランス文学自体、煎じ詰めればすべて不倫文学で、『アドルフ』しかり、『危険な関係』しかり、『ボヴァリー夫人』しかり。ヒロインはすべて夫のある身、恋愛イコール不倫だもの。「世界でいちばん~」も、アメリカ映画風に幼なじみ型純愛映画として始まりながら、途中でわざわざ二人とも別人と結婚し、W不倫というフランス恋愛映画の法則を守っているところが律儀でおかしい(今頃になってわかったんだけど、実は、監督のヤン・サミュエルと私は同じ映画学校の同窓生だったんですよ、向こうが後輩ですけど)。

ズルズルいっちゃう恋愛映画の伝統は日本にもあって、例えば成瀬巳喜男の「浮雲」の至高体験後遺症の高峰秀子と森雅之なんか、絵に描いたようなズルズルさ加減だし、恩地日出夫の「生きてみたいもう一度 新宿バス放火事件」の火傷とPTSDの桃井かおりと石橋蓮司の切れそうで切れないドロドロ関係もすごくよかった。

これって、近松なんかの心中物の伝統を踏まえたものじゃないかと思うんです。死に行く道すがら、つまりは極限状態のズルズルを"道行"という一幕に仕立ててしまう感覚。日本映画って、意外やフランス映画の感覚に近いのだ、と私は思っていたんですよ、ついこの間までは。でもさ、「セカチュー」みたいな、主人公がただウジウジしているだけで、何の紆余曲折も、ズルズルもない"純愛"映画が大ヒットしたり、ズルズルの遥か手前でグズグズしている「冬ソナ」が大流行したりするのを見ると、日本もアメリカ並のお子ちゃま感覚になったのかなと、ちょっとがっかり。ま、別に不倫を奨励するつもりもないんですけど。

ドーバー越えて

往復連載
齋藤敦子
中野香織

「世界でいちばん不運で幸せな私」
今秋、シネスイッチにて公開

服飾史家である中野香織さんと、映画評論家で字幕翻訳家の齋藤敦子さんの往復書簡的コラム。ファッション誌の映画コラムニストとフランス映画社宣伝部員として出会った中野さんと齋藤さんは、以来十数年、友情を育む。この連載では、イギリス文化とフランス映画という専門分野をベースに映画談義が交わされる。

オブジェ制作=井上陽子

取材・文＝石村加奈　撮影＝吉岡誠　スタイリスト＝小野和美

柳楽優弥

「誰も知らない」でカンヌ国際映画祭最優秀男優賞受賞！

「誰も知らない」(是枝裕和監督）で、本年度カンヌ国際映画祭・最優秀男優賞を受賞した(史上最年少にして日本人初！)柳楽優弥さん。母親に置き去りにされた、柳楽さん演じる長男・明を含む４兄妹たちの逆境を生き抜く姿が描かれた本作は、彼の俳優デビュー作でもある。１年かけて演じた明を「強い人」と評した彼に、明はなぜ兄弟を捨てて逃げなかったのだろうか？　と尋ねると「ちゃんとした兄弟だから。兄弟は守らなきゃいけないんです」と仏像のような美しい目をまっすぐ向けて答えた。では、人間が生きてゆくのに必要なものは何だと思う？　と問うと、「相談できる相手。そういう人がいなきゃ、生きていけない。くだらないことや腹がたつことなんかは、聞いてくれる相手がいるだけで気持ちって和らぐと思います」

目は心の鏡と言うが、責任や思いやりという人間にとって大事な、しかし壊れやすいものを彼はちゃんと持っているのだろう。一方、アクション映画への憧れを嬉々として話す彼。ジャッキー・チェンのようなアクションに、いつか挑戦してみたいのだとか。幾度となく街を駆け回る明役でも、サッカーで鍛えた無謀なひたむきさを見せた。たとえば友だちの少女から逃げるように走るシーン。

「５回くらい撮り直してて、結構疲れてたんですけど、走ってる時にキャメラを載せた車が僕を追い抜いて、画面から抜けちゃって。その時、このまま終わるのが悔しくて、絶対映ってやると思ってダッシュしました」

果たして画面には再び彼の姿が現れる！

本作に参加したいちばんの喜びを「人見知りが少し直った」とはにかむ彼。受賞をきっかけに、将来の夢を「サッカー選手か俳優」から俳優一本に決めた。本作と出会った頃から15cmも背が伸びた、まだまだ伸びざかりの柳楽優弥。ただ今、誰も知らない未来に向かって全力疾走中だ。

YUUYA　YAGIRA／1990年３月26日生まれ。ドラマ「クニミツの政」(フジテレビ)「電池が切れるまで」(テレビ朝日）などに出演。カンヌの最優秀男優賞受賞で、活躍がますます期待される。

「誰も知らない」
●監督・脚本・編集／是枝裕和　出演／北浦愛、木村飛影、清水萌々子、韓英恵、YOU
●８月７日よりシネカノン有楽町ほか全国にて公開

ノースリーブ：unconditional／HPH　03-5766-3015　パンツ、ベルト：REPLAY／REPLAY青山店03-5778-9225　スニーカー：NIKE／CHAPTER03-5778-9353

取材・文＝大森さわこ　撮影＝吉岡誠

情熱という感情を演技で表現したい

「イザベル・アジャーニの惑い」で来日したイザベルに生き方を学ぶ

ISABELLE ADJANI／1955年パリ郊外生まれ。14歳で映画デビュー。トリュフォー監督「アデルの恋の物語」で注目される。主な主演作は「ポゼッション」「殺意の夏」「サブウェイ」「カミーユ・クローデル」「可愛いだけじゃダメかしら」「王妃マルゴ」ほか

「イザベル・アジャーニの惑い」

●監督／ブノワ・ジャコ　共演／スタニスラス・メラール、ジャン・ヤンヌ、ロマン・デュリス　●シネスイッチ銀座、関内ＭＧＡにて公開中

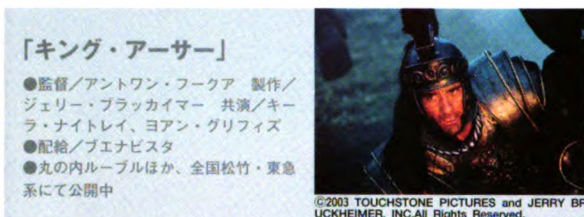
イザベル・アジャーニといえばデビュー作「アデルの恋の物語」以降、情熱的な恋に生きる役を演じてきたフランスの大物女優。そんな彼女が新作「イザベル・アジャーニの惑い」の宣伝で15年ぶりに来日した。19世紀のフランスの文豪コンスタンが手がけた小説『アドルフ』の映画化で、気品ある伯爵夫人と人生に退屈した年下青年の悲恋がキメ細かく描かれる。「原作では複雑な恋愛がテーマになっていて、人間の内面を映像で描くのはむずかしいけど、ひとつの挑戦だと思って取り組みました。すばらしい文化を誇る日本の観客には、この映画の感情の機微を理解していただけるはずです」

アジャーニ自身の指名で監督に選ばれたブノワ・ジャコに関しては「彼は女優に近い感覚を持っていて、女優の中に自分自身も入って映画を撮ってくれる」と賞賛の言葉を送る。本編ではやわらかな白の衣裳を身にまとい、キリリとしながらも〝どこか、はかなさもあるアジャーニ。「この映画で描かれたように、男と女の恋愛観はすごく食い違っていると思います。青年アドルフにとって恋はゲームでしたが、ヒロインのエレノールはそう考えず、やがては恋のためにすべてを投げ打ちます。今回の役を演じて思ったのは、愛というのは崇高な感情なのに、それは幸せな結果をもたらさないこともある、ということです。女性は恋愛の犠牲者になってはいけないと私は思うし、不幸な恋には終止符を打つべきですね」

これまで数々の恋愛遍歴で知られ、今回の共演者、19歳年下のスタニスラス・メラールと恋の噂もあった。「私が女優になったのは、情熱という感情を演技で表現したかったからです。だから、恋愛というのは文学の中でも私のお気に入りのテーマです」。恋の感情に素直に生きてきた女性の自信とゆとり。49歳とは信じられない美しさは、彼女のそんな人生から生まれているのだろう。

取材・文＝中西愛子　撮影＝谷岡康則　ヘアメイク＝木村真（E／9）

クライヴ・オーウェン

「キング・アーサー」で表現したリーダーの資質

「キング・アーサー」

●監督／アントワン・フークア　製作／ジェリー・ブラッカイマー　共演／キーラ・ナイトレイ、ヨアン・グリフィズ
●配給／ブエナビスタ
●丸の内ルーブルほか、全国松竹・東急系にて公開中

CLIVE OWEN／1964年イギリスのワーウイックスシャー生まれ　84年に王立演劇学校へ入学し、ヤング・ヴィク・シアター入り「フルーム」(88)で映画デビュー　主な出演作に、「クロース・マイ・アイズ」(91)「ベント／堕ちた饗宴」(97)「ゴスフォード・パーク」(01)「ボーン・アイデンティティー」(02)「すべては愛のために」(03)など　"Closer" "Savage Grace" などの新作が待機中

このところ、じわじわとハリウッド進出の動きを見せているイギリスの演技派俳優クライヴ・オーウェン。今回、超大作「キング・アーサー」でタイトル・ロールの大抜擢を受け、どこか現代人の姿にも通じる苦悩するリーダー像を味わい深く演じた。

「アーサーがリーダーになることは、彼にとって宿命なんだ。でも、彼はリーダーの資質を持ちながら、そうなることを最初は躊躇する。僕はこの役をヒーローのように華々しく演じることは危険だと思った。皆が期待するような、いかにもヒーロー風に演じることはね。この映画の終わりが、いわゆるアーサー王伝説の始まりになる。天性のリーダーである彼は、この映画に描かれる物語を経験して、ようやく自分のリーダーの資質に気づくんだよ。僕は最初に脚本を読んだ時、『七人の侍』『ワイルドバンチ』『荒野の七人』に共通するものがあるなと思ったんだ。弱い立場の人間を守らなくてはいけない使命を持つ人たちの物語という点でね」

今年40歳になるオーウェン。彼が俳優になろうと心に決めたのは10歳の時だった。

「学校劇で『オリバー』のアートフル・ドジャーを演じたんだ。この時、はっきりと決意したね。王立演劇学校に行って、3年間演技の勉強をした。演劇は僕にとっていつも重要さ。今も何年かに1度はロンドンで舞台に立つようにしている。でも、どちらかというと舞台は俳優としてのワークアウト、ジム通いみたいな感じかな。個人的には映画の方が好きなんだ」

次のジェームズ・ボンドの有力候補としても知られる。私がこの固有名詞を口にした途端、それまでポーカー・フェイスだったオーウェンはにんまり笑った。

「単に噂にすぎないよ。僕は想像上で役選びはしない。もし本当に話がきたら考えるよ（笑）」

取材・文＝山中久美子　撮影＝吉岡誠

オドレイ・トトゥ

「堕天使のパスポート」で強く生きる女性を演じる

AUDREY TAUTOU／1978年フランス・ボーモン生まれ。99年「エステサロン／ヴィーナス・ビューティ」で注目され、「アメリ」(01) で世界中の観客を魅了した。近作は「スパニッシュ・アパートメント」(02)「Les Marins Perdus」(03)。

「堕天使のパスポート」
●監督／スティーヴン・フリアーズ　共演／キウェテル・イジョフォー、セルジ・ロペス
●8月7日よりシャンテ・シネほかにて

「アメリ」のキュートなキャラがはまり役かと思ったら、一転スティーヴン・フリアーズ監督の新作では、ロンドンに密入国してきたトルコ人女性に変身していたオドレイ・トトゥ。チャームポイントの大きな眼が「堕天使のパスポート」の中では不安そうに光っているのが印象的だ。

「監督の演出方法は独特でした。瞬時に俳優の本質的なものを見分ける力は感覚的なものですね。その才能に驚かされました」

ワケありの多国籍スタッフで運営されるロンドンのホテル。オドレイ演じるシェナイもそこで不法就労する身だ。ある日、客室のトイレから人間の心臓が見つかるが、支配人は警察に届ける様子をみせない。

「難民の方たちの苦労とは比べものにはならないけど、パリからロンドンにきて、英語での撮影をこなさなくてはならない私もまた不安や恐怖と闘っていたので、異国でのアイデンティティの喪失と再生という映画のテーマを、自分の身近なできごとに引き寄せて役作りしたんですよ」

実際イギリスは労働時間が長く、食事も休みのとり方もシステムが違っていてかなり戸惑ったという。トルコなまりの英語の習得もプレッシャーだった。

「でも女優をやっていると作品ごとにいろんな出会いがある。そして演じながら役を発見することで自分を発見することができるのも魅力です」

事件に巻き込まれたシェナイは追われる身となり、アメリカ行きを決意するが、難民の彼女にはパスポートがない。何ひとつ持たない人間が下す究極の選択。人がどんなことをしてでも守りたいものはなんだろうかと監督は問いかける。

「私の場合、何物にも代えがたいのは自由であること。今すごく仕事に満足していますが、自由が奪われるくらいなら、この仕事を失っても構いません」

HOT SHOTS **interview**

取材・文＝横森文　撮影＝江木康人

マイク・マイヤーズ

全米大ヒットアニメ「シュレック２」で初来日を果たす

「コメディアンとして一番笑ったシーン？　それは長ぐつをはいたネコのウルウル目です。ん……あれは本当に面白かったですね」

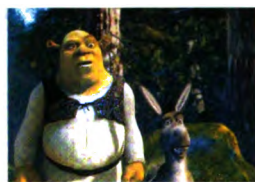
そう、小さな声で1つ1つの質問を熟考しながら答えるマイク・マイヤーズ。とてもあの「オースティン・パワーズ」などで破壊的なギャグを見せた人物とは思えないほど、素顔の彼はおとなしく、ごく普通の人だった。

「僕はもともとカツラやメイク、衣裳などで別の人格になるのが好きなフィジカルなタイプなんです。だから声優をやること自体、自分にとってかなり挑戦でした。それにアニメがそんなに好きなわけでもないですし。でも今回のアニメーターの仕事は素晴らしいと思っています。ちなみに一番最初に見た日本のアニメは、ジョン・ベルーシなども教えたコメディの先生デル・クローズの授業です。タイトルは忘れましたけど。あと実は『オースティン・パワーズ』では『カウボーイビバップ』を参考にした部分もあります」

「シュレック」では、マイヤーズはドンキーのキャラクターが大好きだという。

「というかエディ・マーフィのファンなのです。だからエディが出ている作品なら電話帳を読むだけでも参加したいと言うでしょう」

驚くほど自分の売り込み気分ゼロのマイヤーズ。「シュレック2」でも人間に変わった時はショーン・コネリーが演じれば良かったんじゃないかとまで言っていた。我の強いコメディアン世界の中で、なぜこの人がコメディアンを!?　という疑問が湧いてきてしまう。

「僕のエージェントももう少し映画に出たらとよく言っています(笑)。でも現在、僕は2つ脚本を書いていて、それで手一杯なんですよ。だって書くのは大変なことですからね」KJ

「シュレック２」
●監督／アンドリュー・アダムソン、ケリー・アズベリー、コンラッド・ヴァーノン　製作総指揮／ジェフリー・カッツェンバーグ
●声の共演／エディ・マーフィ、キャメロン・ディアス、ジュリー・アンドリュース、アントニオ・バンデラス、ジョン・クリース、ルパート・エヴェレット、ジェニファー・ソーンダース、ラリー・キング
●日比谷スカラ座１ほか全国東宝洋画系にて上映中

MIKE MYERS
1963年、カナダ生まれ。89年にテレビバラエティ『サタデー・ナイト・ライブ』で注目を集め、「ウェインズ・ワールド」(92)で映画デビューを果たす。主な出演作は「オースティン・パワーズ」シリーズや「ハッピー・フライト」(03)など

取材・文＝編集部

「阿修羅城の瞳」

人気舞台を映画化！　市川染五郎が、映画初主演作で舞台の当り役に挑む!!

娯楽時代劇に意欲をみせる滝田洋二郎監督

舞台のイメージに近い衣裳を纏う邪空役の渡部篤郎

主人公・病葉出門（わくらはいずも）役の市川染五郎と、阿修羅王となるつばき役の宮沢りえ

滝田洋二郎監督による来春公開予定の新作時代劇「阿修羅城の瞳」。派手な演出や激しいアクションなど、エンターテインメント性豊かな『劇団☆新感線』の演目を、同劇団と松竹のコラボレイトにより市川染五郎主演で00年に上演して話題となった同名舞台の映画化である。同舞台は03年にも再演されており、市川はその当たり役で映画初主演を飾ることになった。今回はその6月末に行われた香川県琴平町の旧金毘羅大芝居（通称・金丸座）での撮影現場へ伺った。

市川演じる病葉出門は、江戸の町に巣食う鬼たちを退治する役人＝鬼御門だった経歴を持つ舞台役者。撮影されていたのは、その出門が稽古中の芝居小屋へ、安倍邪空（渡部篤郎）ら鬼御門に追われた女盗賊のつばき（宮沢りえ）が逃げ込んでくる場面。劇中劇とはいえ、舞台上での市川は正に水を得た魚のよう。市川は普段の芝居でも男の色気を漂わせ、近作の某テレビドラマでは活かされなかった本来の魅力を存分に発揮している。出門は軽妙洒脱なキャラクターで、宮沢も「軽やかな部分と、洒落たシーンや台詞があったりするところが大好き」と、市川の出門役を絶賛。逃げこんできたつばきと出門の軽妙なやりとりにも、市川・宮沢の息のあったところがみられた。また、久々に出会ったライバルの邪空と出門が対峙する緊張感を孕んだ場面では、けれん味のある市川に対し、クールでさめた渡部という二人の対照的な芝居が面白い。本作は出門とつばきの恋の行方と共に、出門と邪空という個性の違うライバル同士の闘いも見所だ。

今回のロケ先となった金丸座は、1835年に建設（1976年に移転・復元）された現存する最古の芝居小屋。国の指定重要文化財だが、滝田監督たっての希望で今回の撮影が実現したという。

「入ってみると空気が違うというか、タイムスリップをしたような気分になる。映画では現在ないものをいろいろ再現できますが〝ここに来ただけで〟という本物の魅力がある。今日の撮影も、ここへ来て場所を見て思いついて膨らませたりしています。そういう意味で、非常にいいものを引き出してくれる」（滝田）

「陰陽師」よりもファンタジー性が高く、SFXもさ

撮影現場ルポ

「阿修羅城の瞳」

文化文政の江戸の町　魔物たちを退治する鬼御門の腕利きだった病葉出門は、５年前のある事件を機にその任を辞し　四世鶴屋南北の一座で舞台役者として活躍していた　出門は、偶然出逢った女盗賊のつばきに不思議な因縁を感じて惹かれるが、つばきは真実の恋に出会うと鬼の王・阿修羅に生まれ変わる宿命を背負っていた　江戸の町に阿修羅復活を企む陰謀が渦巻く……
●監督／滝田洋二郎　原作／中島かずき
●出演／市川染五郎、宮沢りえ、大倉孝二、樋口可南子、小日向文世、内藤剛志、渡部篤郎
●配給／松竹　●05年陽春公開予定

このシーンの撮影場所となった、現存する最古の芝居小屋の金丸座

現場に訪れた松竹の迫本社長（上左）と企画・プロデュースの宮島秀司（上右）

らに大掛かりなものとなるが、滝田監督はそんな本作への意気込みを「こういう時代だからこそ、夢があってロマンのある映画を、照れずに作り物としてぬけぬけと面白がってみたい」と語る。

金丸座の舞台に立つのは、92年の『第八回四国こんぴら歌舞伎大芝居』以来という市川は、映画初主演となる本作への意気込みや見所をこう語る。

「映画化が実現したのは、舞台を観に来てくださった方々、舞台に携わった全てのキャストとスタッフの純粋な想いがひとつになったからだと思う。その想いをすべて背負ってこの現場に来ているつもりです。舞台でやった役を違う形で演じるという意味でも思い入れがあるし、プレッシャーを背負いながらやり抜くことが大事かなと思う。映画は初主演になりますが、もう31歳で、初物で売る齢でもないから、結果を出したいと思う。壮大な物語ですが、あくまで〝純愛ドラマ〟で、娯楽時代劇であるところが魅力。日本にしかできない素晴らしい映画になると思っています」（市川）

鬼になるヒロインという難しい役を演じる宮沢は、自身の役とこの作品についてこうコメント。

「吊るされたり、殺陣をしてみたり、〝今までにない役柄だな〟って、すごく毎日実感してます。〝恋をすると鬼になる〟というこの作品のテーマは、女性だったら誰でも、どこかにきっと持っている思いや気持ちだという気がします。二面性のある役を演じるのはプレッシャーでしたが、母親からは〝今までで一番役作りがいらないんじゃないか〟って。どういう意味かは分かりませんが（笑）。染五郎さんは懐がとても深いから、お芝居をしていて安心感がある。自由に本番が迎えられるので、とても嬉しく思っています」（宮沢）

現場を訪れた松竹の迫本淳一社長は、「染五郎さんは、この舞台版で一皮剥けたと思う」と、映画版でも市川がさらなる成長を遂げることへ期待を寄せ、映画化を企画した宮島秀司プロデューサーは、今後も「劇団☆新感線」作品の映画化の構想があることを明かした。「八犬伝」なども控える松竹にとって、ファンタジー性の高い伝奇的な時代劇は新機軸となる可能性をもつ。大きな期待感をもって完成を待ちたい。

©Kevin Winter／Getty Images／AFLO FOTO AGENCY

GOES ON

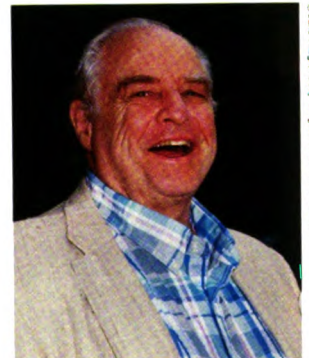
©Pool／Getty Images／AFLO FOTO AGENCY

やけくそっぷりが堂に入ってきた最近のコートニー姐。この無造作ヘアーもはやりそうな予感。キモの据わり方が違う……。

相変わらずトラブル続きのコートニー・ラヴ

コートニー・ラヴが、6月に引き起こした凶器を携えての暴行罪のかどで7月9日、ロサンゼルスの裁判所に出廷が義務づけられていたにもかかわらず、すっぽかして逮捕状を出されてしまった。ラヴは、6月29日、別件の暴行罪で出廷するよう命じられていた際も予定時間より5時間も遅刻して来て、判事に厳しくお叱りを受けたばかり。ラヴの弁護士は、両方の場合とも、“彼女は頭が混乱してしまっただけ。故意にすっぽかそうとしたわけではない”と弁明していたが、その日の夕方、ラヴがニューヨークのベルビュー病院に担ぎ込まれたというニュースが報道された。ラヴのこれまでの経歴ゆえ、最初、報道陣は“麻薬または薬物の過剰投与か？自殺か？”という反応を見せたが、ラヴの弁護士が“婦人科系の問題”だと発表するや、“流産か？”という憶測が流れた。ラヴは、上記の2件の暴行事件のほか、薬物の不法所持やコカインでラリって元ボーイフレンドの自宅の窓を壊した事件でも、裁判所通いが続く“アイ・ラブ・トラブル”的毎日をおくっている。

破産状態ではなかったマーロン・ブランド

去る7月1日、マーロン・ブランドが亡くなった際、ブランドはほとんど文無し状態で、つつましく独りで年金生活をおくっていたと報道された。しかし、ブランドは、実際には、1,000万ドル相当のビバリーヒルズの家、1960年代に25万ドルで購入したタヒチに在る11個の島、絵画コレクション等を所有しており、その資産は2,160万ドルにも及ぶという。ブランドには、腹違いの8人の子供たちが居るが、自分の遺産相続権分を守るべく、それぞれ、皆、早速、弁護士を雇ったそうである。ブランドが具体的な資産額を生前、明らかにしなかったのは、死ぬまでは、自分の子供たちの間で遺産相続争いが起こるのを見たくなかったからかも？

©Carlo Allegri／Getty Images／AFLO FOTO AGENCY

破産してるのも似合うけど、ひみつでがっちりためこんでたのももっと似合うマーロン翁。

息子に先立たれたカーク・ダグラス

カーク・ダグラスの息子で、マイケル・ダグラスとは腹違いの弟にあたる俳優でコメディアンのエリック・ダグラスが、7月6日、ニューヨークの自宅のアパートで死んでいるところを発見された。エリックの検死の薬物検査結果があがってくるまでは、死因は特定できないそうだが、生前、有名な父と兄を持つプレッシャーから逃れるために薬物中毒になった過去があったエリックだけに、薬物の過剰投与の結果か、自殺かのどちらかだろうと言われている。いずれにせよ、親にとって自分の子供の死に遭遇することほどつらいことは無い。父カークも息子の死に相当落ち込んでいるそうである。

©Evan Agostini／Getty Images／AFLO FOTO AGENCY

逆縁の悲劇のせいか、めっきりふけこんでみえるカーク翁。

HOT SHOTS

HOLLYWOOD

セレブの光と影とそのまたウラ

●荻原順子

what happened there?

©Carlo Allegri／Getty Images／AFLO FOTO AGENCY

がんばれキャメロン！　でも申し訳ないがその映像見たい……。

キャメロン・ディアスの知られたくない過去 PART II

去年の夏、1992年当時、無名だったキャメロン・ディアスをトップレスで撮影したカメラマン、ジョン・ラターが、この写真を330万ドルで買わないかとディアスに持ちかけ、ディアスの訴えで恐喝などの容疑で逮捕された事件があったが、今度は、この写真撮影の様子を撮影したビデオがインターネットを通して出回っている。「彼女は天使ではない：キャメロン・ディアス」と題された長さ30分のこのビデオは、当時、19歳だったディアスが、トップレスに網タイツという扮装でもう１人の女優と一緒に男性を相手にＳＭプレイをするといった内容で、ひどいクオリティの代物らしいが、このビデオを39ドル95セントで有料ダウンロードできるサイト、スキャンダル・インクの予告編の映像にはアクセスが殺到して、一時はアクセス不可能になるほどの関心を集めたとか。もちろん、ディアス側は、ラターが撮影した写真、及び、ビデオに関する裁判所による販売差し止め命令を行使して、スキャンダル・インクからのダウンロードを禁止させたが、時すでに遅し。同サイトから派生した海賊版が出回ってしまっているようだ。インターネットの普及で、抹殺したい過去の作品や写真のコントロールが難しくなってきていて、スターたちも大変なのである。

デニス・クエイド、結婚

おめでとう。なにがあろうと「メグ・ライアンと結婚してた男」というのは勲章では？　それにしても老けたなあ。

©Peter Kramer／Getty Images／AFLO FOTO AGENCY

今回は暗めのネタが多いので、最後は明るいニュースを……。デニス・クエイドがかねてから交際中だった18歳年下のテキサスの不動産エージェント、キンバリー・バフィントンと、７月４日、モンタナにて結婚式を挙げた。花婿の介添人は、前妻メグ・ライアンともうけた12歳になる息子、ジャックが務めたそうだ。クエイドにとっては３度目の結婚になるが、今度こそ、末永くお幸せに……。

New Cinema Rush

ニュー・シネマ・ラッシュ
新作紹介

8月

リディック
THE CHRONICLES OF RIDDICK

異色ＳＦ映画「ピッチブラック」のスピン・オフ。前作と同じ監督デイヴィッド・トゥーヒーが、ヴィン・ディーゼルの魅力を前面に押し出し新たなるダーク・ヒーロー伝説を放つ。遥かな未来。賞金稼ぎに捕らわれたリディックは、やがてロード・マーシャル率いる狂信的なネクロモンガーの軍団に立ち向かう。

DATA ●監督／デイヴィッド・トゥーヒー 出演／ヴィン・ディーゼル、コルム・フィオーレ、ジュディ・デンチ 配給／東芝エンタテインメント、松竹 ●8月7日より丸の内プラゼール、丸の内ピカデリー2ほか全国松竹・東急系にて（2004年・米・118分）
http://riddick.jp/

サンダーバード
THUNDERBIRDS

40年近く世界中で愛され続けている英国産人気テレビ・シリーズが、実写になって蘇る。“トレイシー・ボーイズ”に扮する明日のスターたちにも注目だ。ジェフ・トレイシーが創設した国際救助隊＝サンダーバード。まだ幼なく隊員になれず嘆く五男で14歳のアランに、ついにチャンスが訪れる。

DATA ●監督／ジョナサン・フレイクス 出演／ビル・パクストン、アンソニー・エドワーズ、ソフィア・マイルズ、ロン・クック、ベン・キングズレー 配給／ＵＩＰ ●8月7日より日劇3ほか全国東宝洋画系にて（2004年・英・95分）
http://www.thunderbird-movie.jp/

モナリザ・スマイル
MONA LISA SMILE

ジュリア・ロバーツと次世代スター女優たちの競演で贈る感動の群像ドラマ。名門女子大学を舞台に、それぞれの生き方を見つけ出していく女性たちの姿を描く。1953年、ニューイングランドの女子大で教鞭を取り始めた女性教師キャサリン。やがて保守的で頑固な生徒たちの心をつかみ、憧れの存在となる。

DATA ●監督／マイク・ニューウェル 出演／ジュリア・ロバーツ、キルスティン・ダンスト、ジュリア・スタイルズ、マギー・ギレンホール 配給／ＵＩＰ ●８月７日よりみゆき座ほか全国東宝洋画系にて（2003年・米・120分）
http://www.monalisa-smile.jp/

華氏911
FAHRENHEIT 9/11

今年５月のカンヌ国際映画祭でパルムドールを受賞し話題騒然となった、異才マイケル・ムーアの衝撃ドキュメンタリー。ブッシュ家とビンラディン家との癒着など、ブッシュ政権批判をユーモアたっぷりに描く。また、ドキュメンタリーとしては異例の超拡大規模で公開するやいなや、大ヒットを記録する。

DATA ●監督／マイケル・ムーア 主演／ジョージ・W・ブッシュ 配給／ギャガ、博報堂ＤＹメディアパートナーズ、日本ヘラルド ●８月14日より恵比寿ガーデンシネマにて（2004年・米・122分）
http://www.kashi911.com/

歌え！ジャニス・ジョプリンのように
JANIS ET JOHN

昨年、亡くなったマリー・トランティニャンの遺作。元夫のサミュエル・ベンシェトリが監督し、マリーの熱演を引き出している。夫のとある詐欺計画から、ジャニス・ジョプリンに成り済ますことを命せられた妻ブリジット。最初は渋々だったが、次第にジャニスに魅せられ新たな自分を発見していく。

DATA ●監督／サミュエル・ベンシェトリ 出演／セルジ・ロペス、マリー・トランティニャン、フランソワ・クリュゼ 配給／ギャガ、東京テアトル ●８月７日よりシャンテ・シネにて（2003年・仏＝スペイン・104分）

ステップ・イントゥ・リキッド
STEP INTO LIQUID

サーフィンの魅力を探ったドキュメンタリー映画の名作「エンドレス・サマー」。その監督の息子デイナ・ブラウンがメガホンを取った新たなるサーフィン映画の決定版。地球を縦横無尽にかけめぐりとらえた迫力ある映像と、サーフィンに人生をかけてきた多くのレジェンド・サーファーのコメントが楽しめる。

DATA ●監督／デイナ・ブラウン 出演／レイアード・ハミルトン、ケリー・スレーター、ピーター“コンドル”メル、ロシェル・バラード 配給／グラッシィ ●８月14日よりシネマライズにて（2003年・米・87分）
http://laidback.co.jp/LaidBack/LBLIB/StepInto.htl

堕天使のパスポート
DIRTY PRETTY THINGS

オドレイ・トトゥが英語を駆使して挑んだ、名匠スティーヴン・フリアーズの社会派ヒューマンドラマ。ロンドンで生きる移民たちの苦悩を炙り出す。ロンドンのホテルでメイドをするトルコ人、シェナイ。彼女は同じホテルに勤める同居人オクウェがある秘密を知ったことから事件に巻き込まれてしまう。

DATA ●監督／スティーヴン・フリアーズ　出演／オドレイ・トトゥ、キウェテル・イジョフォー、セルジ・ロペス、ソフィー・オコネドー　配給／東芝エンタテインメント　●8月7日よりシャンテ・シネにて（2002年・英・97分）
http://www.datenshi.jp/

天国の青い蝶
THE BLUE BUTTERFLY

十数年前、国際的に知られる昆虫学者と末期脳腫瘍を患うカナダの少年との間に起きた感動の実話をもとに映画化。「翼をください」のレア・プールがやさしさ溢れる視点で綴る。余命わずかと宣告された10歳の少年ピートは、昆虫学者アランと共に伝説の青い蝶をつかまえるべくジャングルへ向かう。

DATA ●監督／レア・プール　出演／ウィリアム・ハート、パスカル・ブシェール、マーク・ドネイト、ラオール・トゥルヒロ　配給／東芝エンタテインメント　●8月14日よりシネスイッチ銀座にて（2004年・カナダ＝英・96分）
http://www.bluebutterfly.jp/

16歳の合衆国
THE UNITED STATES OF LELAND

ケヴィン・スペイシーが製作を務め、豪華キャストで描く衝撃の青春映画。新人俳優ライアン・ゴズリングが、16歳の少年の鋭くナイーヴな感性を見事に演じる。平凡な少年リーランドは、ある日、恋人の弟で障害者のライアンを殺害。売れない作家パールは、そんな少年の心の闇を解き明かそうと試みる。

DATA ●監督／マシュー・ライアン・ホーグ　出演／ドン・チードル、ライアン・ゴズリング、クリス・クライン、ジェナ・マローン　配給／アスミック・エース　●8月7日よりシネマスクエアとうきゅうにて（2003年・米・104分）
http://16sai.jp/

ある日、突然。
TAN DE REPENTE

アルゼンチンの新鋭ディエゴ・レルマンが弱冠26歳の時に放った長編デビュー作。3人の少女の奇妙な旅が、モノクロ映像の中、オフビート感覚で描かれていく。ブエノスアイレスで無為な日々を過ごすマルシアは、ある日突然、見知らぬ2人のレズビアンに見込まれ強引に旅立つことになる。

DATA ●監督／ディエゴ・レルマン　出演／タチアナ・サフィル、カルラ・クレスポ、ベロニカ・ハサン　配給／ザジフィルムズ、ブルーバック・フィルムズ　●8月7日よりシネ・アミューズにてレイト（2002年・アルゼンチン・93分）
http://www.zaziefilms.com/totsuzen/

マインド・ゲーム

「アニマトリックス」などで知られる映像創作集団「STUDIO 4℃」が、実写、2D、3Dを融合させた斬新な映像でみせるハイブリット・ムーヴィー。初恋の幼なじみ、みょんちゃんに再会した西。喜びも束の間、あっけなくヤクザに殺されてしまうが、神様に逆らって現世に舞い戻る。

DATA ●監督/湯浅政明 原作/ロビン西 音楽/山本精一 声の出演/今田耕司、藤井隆、山口智充、中條健一、前田沙耶香 配給/アスミック・エース ●8月7日よりシネクイントにて(2004年・日・103分)
http://www.mindgame.jp/index.html

プリンス&プリンセス
PRINCES ET PRINCESSES

「キリクと魔女」で話題を呼んだフレンチ・アニメの巨匠ミッシェル・オスロが放つ、劇場用アニメ幻の初監督作品。現在、過去、未来、さまざまな国を舞台にしながら、影絵の手法を用いた魅惑的な6本のおとぎ話を展開する。日本語版の声の吹き替えは、原田知世と松尾貴史が担当。

DATA ●監督/ミッシェル・オスロ 音楽/クリスチャン・メイル 声の出演(日本語吹き替え)/原田知世、松尾貴史 配給/ワイズポリシー、ツイン ●8月7日よりシネセゾン渋谷にてモーニング&レイト(1999年・仏・70分)
http://www.wisepolicy.com/princes_et_princesses/

劇場版 金色のガッシュベル!! 101番目の魔物

テレビやカードゲームで人気爆発中のアニメがついに映画化。やさしい魔界の王になるため戦うガッシュの前に、101番目の魔物が現れ大ピンチに襲われる。夏休み、富士山へピクニックへやって来たガッシュたち。少女コトハが持つ不思議な本の予言を信じて洞窟に急ぐが、そこは魔界の入り口だった。

DATA ●監督/志水淳児 原作/雷句誠 脚本/橋本裕志 声の出演/大谷育江、櫻井孝宏 配給/東映 ●8月7日より丸の内東映ほか全国東映系にて(2004年・日・85分)
http://member.toei-anim.co.jp/movie/2004_GB/

WALKABOUT 美しき冒険旅行
WALKABOUT

イギリスの鬼才ニコラス・ローグの長編デビュー作にして最高傑作。美しい映像と独特な編集のリズムで、英国人の姉弟とアボリジニの少年の旅を綴っていく。父に連れられオーストラリアにやって来た14歳の娘と6歳の息子。突然父が銃をとり自殺。残された2人は、やがてアボリジニの少年と出会う。

DATA ●監督/ニコラス・ローグ 出演/ジェニー・アガター、リュシアン・ジョン、デイヴィッド・ガルピリル、ジョン・メイロン 配給/ケイブルホーグ、日本スカイウェイ ●8月7日よりテアトルタイムズスクエアにてレイト(1971年・英・100分)
http://www.cablehogue.co.jp/walkabout/

ＩＺＯ

日本映画の荒ぶる監督・三池崇史が、アウトローを生み出し続ける脚本家・武知鎮典と組んだアクション娯楽大作。主演は、「連続殺人鬼　冷血」の本格無頼俳優・中山一也。1865年、幕府要人暗殺の罪で人斬り以蔵は処刑された。しかし、彼の魂は時空を超えて現代に甦り、究極の殺人マシンＩＺＯと化す。

DATA　●監督／三池崇史　企画・原案・脚本／武知鎮典　出演／中山一也、桃井かおり、松田龍平、美木良介、高野八誠、原田龍二、石橋蓮司　配給／チームオクヤマ　●８月21日よりシアター・イメージフォーラムにて（2004年・日・128分）
http://www.izo-movie.com/

ムーンライト・ジェリーフィッシュ

若手実力派藤原竜也と木村了が主演するスタイリッシュ・メルヘン。監督・脚本を手掛けるのは、本作が初監督作の新進映像ディレクター、鶴見昴介。太陽の下で生きられない難病を抱えた弟ミチオと、弟のために夜の世界に生きる兄セイジ。２人の前に太陽のようなケイコが現れ家族愛を目覚めさせていく。

DATA　●監督・脚本・編集／鶴見昴介　撮影／栢野直樹　出演／藤原竜也、岡村綾、木村了、袴田吉彦、虎牙光輝、水島かおり、西山宗佑　配給／PONY CANYON　●８月７日より新宿トーアにて（2004年・日・113分）
http://www.ponycanyon.co.jp/moon/

D.P

「巌流島－GANRYUJIMA－」の千葉誠治監督が、「仮面ライダー555」で一躍ブレイクした半田健人を主演に描くバイオレンス＆サスペンス。朝もやの中で目を覚ました７人の若者。彼らは誰が敵で味方なのか、自分が誰なのかすら分からない。状況打開の唯一の手掛かりは、首元に刻まれたＤ．Ｐの文字だった。

DATA　●監督・脚本／千葉誠治　アクション監督／下村勇二　出演／半田健人、藤田陽子、高野八誠、蒲生麻由、阿部薫、一條俊　配給／ケイエスエス　●８月７日よりテアトル池袋にてレイト（2004年・日・76分）
http://www.kss-movie.com/dp/index.html

MASK DE 41［マスク·ド·フォーワン］

負け犬人生を歩むサラリーマンが、リングで大奮闘するヒューマン・ファミリー・コメディ。ＣＭディレクターとして活躍中の新鋭・村本天志が、プロレスへの熱い思いを胸に自ら企画リストラ宣告された41歳のサラリーマン、倉持は、これを機に、長年の夢だったプロレス団体を興す決意をする。

DATA　●監督／村本天志　製作／仙頭武則　脚本／足立紳　撮影／藤澤順一　出演／田口トモロヲ、松尾スズキ、筒井真理子、伊藤歩　配給／ファントム・フィルム　●８月21日よりK's cinemaにて（2004年・日・113分）
http://www.phantom-film.com/lineup/mask.html.

ミラーを拭く男

定年間近のサラリーマンとその家族の思わぬ運命を、緒形拳主演で描く人間ドラマ。家族のために働き続けた中年サラリーマンは、定年を控えたある日、交通事故を起こしてしまう。人生の岐路に立たされた彼と家族は、それぞれに立ち止まって生き方を見つめ直し、ゆっくりと再生していく。

DATA　●監督・脚本／梶田征則　出演／緒形拳、栗原小巻、辺戸名一茶、国仲涼子、津川雅彦　配給／パル企画　●8月21日よりテアトル池袋にて（2004年・日・120分）
http://www.pal-ep.com/mirrors/mirrors-top.htm

狐怪談

여우계단 WHISPERING CORRIDORS 3: WISHING STAIRS

韓国の美少女たちが主演する女高怪談シリーズ第3作。短編作品で頭角を現した女性監督ユン・ジェヨンが、少女たちの不安定な感情を巧みに掬い取る。ソヒとジンソンはバレエ部の親友同士。が、いつもプリマで美しいソヒをジンソンは妬んでいた。そしてその嫉妬はソヒのバレエ生命をも奪ってしまう。

DATA　●監督／ユン・ジェヨン　出演／ソン・ジヒョ、パク・ハンビョル、チョ・アン、パク・チョン、イ・ジミョン、コン・サンア　配給／東芝エンタテインメント　●8月7日より新宿武蔵野館にてレイト（2003年・韓・100分）
http://www.kitsunekaidan.net/

マーダー・ライド・ショー

HOUSE OF 1000 CORPSES

全米で話題をさらい、すでに続編も予定されている衝撃ホラー怪作。ヘヴィ・ロック界の大物ロブ・ゾンビが、幻想に彩られた独自の映像センスで長編映画を撮り上げた　ハロウィンの前夜。4人の若者を乗せた車は途中で拾った美人ヒッチハイカーの誘いで彼女の家へ。が、そこは殺人一家の住家だった。

DATA　●監督／ロブ・ゾンビ　出演／シド・ヘイグ、ビル・モーズリイ、カレン・ブラック、シェリ・ムーン　配給／アートポート　●8月14日よりシアター・イメージフォーラムにて（2002年・米・89分）
http://www.emovie.ne.jp/murderride/preindex.html

怪談新耳袋　劇場版

BS－iで放映された怪談ショートフィルム集、ホラー界の巨匠、若手監督らが腕をふるう大好評シリーズの“劇場版”がついに登場！「案山子／KAKASHI」の脚本家・三宅隆太、「エコエコアザラク」の鈴木浩介ほか気鋭監督も参加　さらに、竹中直人をはじめ多彩なキャストが並んでいるのも話題だ。

DATA　●監督／三宅隆太、鈴木浩介、佐々木浩久、豊島圭介、平野俊一、吉田秋生、雨宮慶太　出演／竹中直人、坂井真紀、高岡早紀、掘北真希　配給／スローラーナー　●8月21日より渋谷シネ・ラ・セットにて（2004年・日・92分）
http://www.actcine.com/sinmimi/roadshow.html

THE BLUES Movie Project

第一線で活躍する7人の映画監督たちが、人の心を歌う"ブルース"についてのドキュメンタリーをそれぞれ作り、結集させた壮大なプロジェクト。製作総指揮を務めるマーティン・スコセッシをはじめ、音楽好きで知られるヴィム・ヴェンダースやマイク・フィギスらがブルースへの熱い思いを描き上げる。

DATA ●監督／マーティン・スコセッシ、ヴィム・ヴェンダース、マイク・フィギス、チャールズ・バーネット、リチャード・ピアース、マーク・レヴィン、クリント・イーストウッド　配給／日活　●8月28日よりバージンシネマズ六本木ヒルズほかにて(2003年・米)
http://www.blues-movie.com/

写真は「フィール・ライク・ゴーイング・ホーム」(マーティン・スコセッシ監督)

アマンドラ！希望の歌

AMANDLA!: A REVOLUTION IN FOUR PART HARMONY

南アフリカのアパルトヘイトに対し、歌を最大の武器として立ち向かった人々を描く感動のドキュメンタリー。1940年代の南アフリカ。白人による身勝手な人種隔離政策アパルトヘイトに苦しむ黒人たちは、残虐な敵と最も効果的に戦う方法を考える。そして、彼らは歌で自らの肉体と誇りを守り抜いていく。

DATA ●監督／リー・ハーシュ　出演／ネルソン・マンデラ、クリス・ハニ、フランシス・バード、ゴールデン・ネスィスウィ　配給／クロックワークス　●8月7日よりヴァージンシネマズ六本木ヒルズにてレイト(2004年・南アフリカ=米・104分)
http://www.amandla.info/

写真は「jack tv」

MAESTRO　マエストロ

MAESTRO

今日のダンス・ミュージックのルーツとも言える、ニューヨーク・アンダーグラウンド・ダンスシーンの貴重な記録を綴ったドキュメンタリー。シーンから多大な影響を受けた現代のトップＤＪたちや、ダンサーたちのインタヴューを交え、クラブカルチャーの起源、精神、発展の歴史を伝える。

DATA ●監督／ジョセル・ラモス　出演／ラリー・レヴァン、デイヴィッド・マンキューソ、フランキー・ナックルズ、ニッキー・シアーノ　配給／ナウオンメディア　●シブヤ・シネマ・ソサエティにてレイト上映中（2004年・米・87分）
http://www.nowonmedia.com/MAESTRO/

花はんめ

神奈川県川崎市桜本界隈。ここに住むはんめ＝在日のおばあちゃんたちの、切なくもまぶしい姿をとらえたヒューマン・ドキュメンタリー。清水の姉さんと皆から慕われる86歳の孫分玉さんが暮らすアパートを舞台に、そこへやって来るおばあちゃんたちのひたむきな日常や語らいを映し出していく。

DATA ●監督／金聖雄　製作／米山靖　撮影／石倉隆二　音楽／横内丙午　配給／「花はんめ」上映委員会、ヒポコミュニケーションズ　●8月14日よりシネマアートン下北沢にてモーニング（2004年・日・100分）
http://www.hanahanme.com/menu.html

劇場公開映画批評

このページの批評は作品の結末にふれているものもあります。ご了承の上、お読み下さい。

69 sixty nine

東映配給
7月10日公開

的田也寸志

庵野秀明監督の「ラブ&ポップ」(98)を手始めに、三池崇史「オーディション」(00)、篠原哲雄「昭和歌謡大全集」(03)と、このところ村上龍の小説が原作者本人ではなく他者の監督作品としてコンスタントに映画化されるようになってきているが、そのいずれも秀作に仕上がっているのが嬉しい。映画や小説などには、接した人の数だけの解釈が存在すると言われるが、その伝に倣うと村上小説はクリエイターの創作意欲を良き方向へ誘う〝何か〟があるのだろう。そう考えると、原作者自身による映画化作品が今ひとつ弾けなかった理由も自ずと掴めてきそうだ(村上龍は一度他者の原作を映画化してみると、面白い結果が得られそうな気もしてくるのだが)。

それはさておき「69 sixty nine」である。今からおよそ35年もの昔の青春群像を、当時まだ生まれてもいなかった新進監督・李相日(リ・サンイル／74年生まれ)が手がけたものだが、李監督の前作「BORDER LINE」(03)に荒削りながらも大いに堪能させられた口としては、今回その個性を初のメジャー作品に臆する事なく投入し、また過去を舞台にしつつも、あくまで普遍的な視線を徹底させて現代の観客に提示している頑固さには、大いに唸らされた。

とにもかくにもノーテンキでエネルギッシュな主人公ら高校生たちのファンダンゴを軽やかに持続させているのが長所なのだが、その中からふっと思春期ならではのブルーな想いが見え隠れしてくるあたりの見せ方も素晴らしく(特にバリケード封鎖事件後の、ケンとアダマの心のすれ違い)、しかもそれらが全体のバランスを崩す事なく、ひとつのテンポとして呼吸しているあたりも絶妙だ。また、当時の音楽やファッションなどの流行を羅列すれば、それはそれでノスタルジックな情緒は醸し出されるだろうが、本作はその域に留まることなく、主人公たちの空騒ぎを増幅させるアイテムとして、まずそれらを存在させているのがいい(だからこそ「イワセマナブの場合は〜」が抱腹絶倒のギャグとなる)。さらには方言を多分に意識させる演出には、地方色を際立たせているのはもちろんのこと、本作を映画ならではの独自の世界へと誘う効果をもたらしていた(方言は、これからの日本映画を必ず豊かにする。それは近々公開「スウィングガールズ」でも見事に証明されている)。

キャストも総じて好演で、主演コンビもさながら、個人的にはやはり岩瀬学クン役の金井勇太にとどめをさす。大人たちでは嶋田久作が久々に柄を活かした怪演を見せてくれていた。そんな男性群の奮闘に比べると、女の子たちがお飾りの域を出ていないのは構成上やむなしとしても、せめてヒロインに可憐で清楚なだけではない魅力が出ていたら、もっと世界観が膨れ上がったような気もする。彼女とは真逆的存在として一瞬登場の、井川遥の色っぽいおねーさんが妙にインパクトあっただけに、なおさらそう思えてならなかった。

ザ・ボディガード

AVENGING ANGELO
アートポート配給
6月12日公開

鬼塚大輔

かなり前に完成していながら、やっと公開された(アメリカ本国ではビデオ/DVDスルー)シルヴェスター・スタローン主演作。

親代わりのマフィアのドン、アンソニー・クインを対立する組織のヒットマンに殺されてしまったボディガード、スタローンが、クインの娘であるマデリーン・ストウを殺し屋たちの手から守ろうとする、などと書くと痛快なアクションを期待したくなるところだが、実際はコメディとラブ・ロマンスの要素の方が強い。

五十代を迎えたスタローンは「追撃者」(00)、「シェイド」(03)などの作品と同じように体を動かすよりは心境演技で芸域を広げようとしていて、しんみりとした味を出している。「スパイキッズ3-D:ゲームオーバー」(03)みたいに無理にふざけるのではなく、無骨な動作の端々からユーモアを醸し出そうとする今回の方が素直に楽しめる。

相手役のストウはさすがに若い女優には出せない貫禄と色気があるが、コメディ演技に少しばかり無理が見える。父の敵である組織のボスと結婚し(!?)初夜にコーフンさせて心臓麻痺を起こさせ、あっぱれ仇を討つあたり、突き抜けた演技でないのでもう一つ爆笑に結びついてこない。

作品自体が弾まないのはもちろんストウのせいばかりでなく、マーティン・バークの監督ぶりやウィル・アルディスとスティーヴ・マッコールの脚本にも問題がある。殺し屋たちの襲撃の仕方に芸がないので、スタローンに返り討ちにされるために出てくるようにしか見えず、クライマックスのどんでん返しも伏線の張り方が下手なので、ちっとも意外なものになっていないのである。

とはいえ、のんびりと見物してればそれほど腹の立つシロモノではない。アンソニー・クインの最後の演技を観るだけでも入場料の価値はある。最初の方で殺されてしまうとはいえ大変な貫禄だし、えもいわれぬ愛嬌があるのだ。

大爆笑のないコメディ映画、緊迫感のないアクション映画だが、ロマンティックな味わいに捨てがたいものがあるのである。

ウォルター少年と、夏の休日

SECONDHAND LIONS
日本ヘラルド映画配給
7月10日公開

黒田邦雄

是枝裕和監督の「誰も知らない」に登場する若い母親は、好きになった男と暮らしたいために子供を捨てる。母親であることより、女としての人生を選択したわけだが、ティム・マッキャンリーズ監督の「ウォルター少年と、夏の休日」の主人公ウォルターも、同じような理由で母親に捨てられた少年である。父親不在の家庭で育ち、母親の愛も受けられない孤独な少年は、ひと夏を二人の老人が一緒に暮らしている田舎の一軒家に預けられる。老人とはいえ、見るからにマッチョな二人は、元外人部隊に所属したツワモノである。何より冒険を愛する二人は、当然、家庭を守る良き父親ではなかったはずだ。二人がどういう家庭を持っていたのかよくわからないが、彼らの昔話に登場するのは、荒唐無稽な冒険譚ばかりである。父親であることより男であることを選択した人生であったことは間違いなさそうだが、そうであれば、ウォルターの母親と同類項の人間と言えまいか。

ところが、母親については母親失格を人間失格であるかのように描いているのに、家庭に収まれなかった冒険野郎にはいたって肯定的で、まるで理想の父親像

のように描いているのである。これは少しヘンではないか。家庭を捨てる女は無責任、だらしないなどと叱責されるのに、家庭に収まらないで好き勝手に行動する男は、男はこうでなきゃとその無責任が賛美される。まさに男女不平等極まれりなのに、アメリカ映画はまだそのことに気づいていないことを、この映画は証明している。もっとも、時代を一九六〇年代初頭にしてエクスキューズをはかっているようだが、そうはいかない。どんな時代でも、アメリカはこういう男たちが好きなのだ。というより、アメリカはこういう冒険野郎がいないと成立しない国なのである。

　そういう意味では、この映画は典型的なアメリカ映画なのだが、老人たちの〈夢の暮らし〉が、いっさい女なしで成立しているという設定は、なかなかユニークだ。もしかして二人は、家庭を壊す張本人が女そのものであることを、経験則で学んでしまったのではないか。だから、家庭に収まりたくないのではなく、家庭に収まりたいから家庭を捨てたのかもしれない。二人の老人と少年の三人暮らしは、何と理想的な家庭を形成していることか。家庭に収まりたくない男でも、こんな家庭ならぜひ持ちたいと思うに違いない。つまり、この映画は少年の成長物語であるより、男たちの理想のホームドラマとして成立しているのだ。ロバート・デュヴァル、マイケル・ケインのベテラン俳優が演じる老人たちは何とも魅力的で、ハーレイ・ジョエル・オスメント演じるウォルターも、今時珍しいほど純な少年だ。女なしですごす、男たちのひと夏の楽しさ。こんな設定でマッチョな世界を賛美してきたハリウッド映画の功罪を思いつつ、でもまあいっかなどと思ってしまうのは、テキサスのきらめく太陽のせい？

セイブ・ザ・ワールド

THE IN-LAWS
ギャガ＝ヒューマックス配給
6月26日公開

石井美由季

「セイブ・ザ・ワールド」とは大袈裟な邦題だが、「あきれたあきれた大作戦」(79)のリメイクであり、中身は気楽なファミリー・コメディ。息子と娘の結婚を機に出会う父親コンビが強引にタッグを組んで、武器密輸組織の壊滅と、子供の結婚式の成功のために活躍する。この落差がしかし笑える驚きで、世界を救うもなにも、まずこの映画を救いたいと思わせた。

　アンドリュー・フレミング監督の演出は実に深く、脚本に書かれたこと以外は固執しなかったかのよう。見せ場としてのアクションにリアルさは感じられず、派手な爆発を幾つか挿入するだけでハイ終了だ。しかし、その脱力さ加減がかえって俳優の演技力を実感させるという棚ボタ効果。特に健闘しているのが、コラーゲンみなぎる肌と白い歯がまぶしいマイケル・ダグラス、44年生まれだ。

　パラシュート降下の背景が明らかに合成でも、表情に漂うは十二分の高揚感。あまりに楽しそうなので、見ているこっちが苦笑い。口八丁手八丁で息子の嫁家族をあしらい、元セックス中毒をパロった台詞にも動じない様子には、さすが百戦錬磨の一流スター兼プロデューサーの貫禄が。体力を使うアクションは追っ手側のFBIに任せて、ヒョウヒョウとCIA秘密捜査官を演じている。キャサリン・ゼタ＝ジョーンズ夫人に精気を吸い取られてばかりと思いきや、まだちゃんと余力があった。

　ダグラスとコンビを組むアルバート・ブルックス、47年生まれも負けていない。ただでさえ要領の悪いパニクリ男をやらせたらピカ一なのに、入浴シーンでは赤いTバック姿を晒して肝だめし。フランス人の悪役を演じるイギリス人俳優ディヴィッド・スーシェ、46年生まれも捨て難い。素肌にセーター、整った眉毛、オネエっぽい指先の仕種など、小技を効かせて笑わせる。これらベテラン俳優の捨て身の迷演の前では、若手スターもかたなしだ。

　世界平和だの家族愛だの、歯の浮くテーマは一切忘れていい。今作の存在意義は、頑張るオヤジの底力を思い知らせることにあるのだ。

ヴェロニカ・ゲリン

VERONICA GUERIN
ブエナ　ビスタ配給
5月29日公開

大森さわこ

ジョエル・シュマッカーは「バットマン」シリーズのようなハリウッド娯楽作を手がける職人でいながら、時おり、ちょっと心に響く映画を撮ったりする。ジョン・グリシャム映画の実は最高傑作とも思える「依頼人」、ヴェトナム戦争の訓練所を描いた「タイガーランド」。こうした作品ではそこで起こる事件だけではなく、それにかかわった人物たちの心理を微妙に描き分け、抑制の効いた演出力を発揮した。主役の立て方もうまく、前者のスーザン・サランドン、後者のコリン・ファレルはキャリア中、最高の演技を見せた。

今回の新作はアイルランドのジャーナリストで、麻薬犯罪の実体を暴こうとした実在のジャーナリスト、ヴェロニカ・ゲリンの死の直前までの活動に焦点を当てた作品で、「タイガーランド」などに通じる地味な良心作の系譜を期待させる。主役の立て方は、いつも通りにうまいシュマッカー。ケイト・ブランシェットは本当にパワフルで、知性と行動力を持ったヒロインを誠実な演技で見せる。

ただ、正直言うと、そんな彼女の演技だけが妙に際立ち過ぎて、ヴェロニカの実像が、もうひとつ見えない気もした。脚本が少々大味なのだ。犯罪組織に向かっていく彼女の勇敢さは描かれるが、そこまで事件の追及にのめりこむ彼女の内面が、デリケートには描かれない。正義感だけが見え過ぎる直線的な脚本だ。

こういう手法は〝正義〟が問われるアメリカが舞台の作品ならもっと効果を発揮するのだろうが、屈折した複雑さのあるアイルランドが舞台ゆえ、もう少し心理描写に陰影が欲しい。ラストもヒロインをヒーロー視しすぎている気がした。

ジム・シェリダンの力作「父の祈りを」にも通じる内容で、シェリダン映画でおなじみのブレンダ・フリッカーも母役で好演を見せるだけに、よけいにドラマ的な物足りなさを感じた。

一種の〝事件ミステリー〟として見るには、話が単純化されているので、最初から最後まで飽きさせない構成ではある。このあたりにハリウッド職人監督のうまさと限界を同時に感じた。

丹下左膳　百万両の壺

エデン配給
7月17日公開

田中千世子

歌舞伎役者は先代の方がよかったと、恒に言われ続ける宿命にある、と三島由紀夫が書いているが、歌舞伎４００年に対して１００年ちょっとの映画においても同じような現象が起きている。大河内の丹下左膳こそ本物、いや大友柳太郎だって楽しかった等の声は当然起きる。歌舞伎の場合は昔の映像記録が残っていたとしても、なまの舞台は蘇ることがないのだから、先代が、いや先々代がよかったの繰言は永遠に続くかわりに、現在に対してははっきりとあきらめがつく。ところが映画はスクリーンで見れば過去のスターも今のスターも同じ土俵の勝負。豊川悦司は分が悪い。監督の津田豊滋だって、共演者たちだって分はとても悪い。だからだろうか、みんな明るく開き直っている。画面も明るくカラフル。そんな思い切りのよさが映画の元気になって、さわやかな印象だ。特に左膳（豊川）とお藤（和久井映見）のカップルが面白い。夫婦同然の二人だが、豊川左膳は用心棒兼ルームメイトを気取っており、和久井は矢場の経営者としてビジネス・ウーマンの顔を誇示する。この二人、本当にルームメイトみたいだ。そしてこんな雰囲気のカップルが今の世に

はかなり多い。ところで百万両の壺をめぐる騒動は、先々……代の大河内左膳のようにテンポよく運んでうまい。脚の長い豊川がサッとちょび安ごと壺を回収するシーンは何とも小気味よい。このちょび安を引き取るかどうかでもめた二人だが、結局こまごまと世話をやき、教育するのはお藤である。しっかり者の母性が香ってなかなか感動的である。もうひとつのカップル、柳生源三郎（野村宏伸）と新妻萩乃（麻生久美子）はコミカルな面を担当するが、ややかたい。愛嬌がにじみ出るという感じがない。愛嬌だけでなく人情とか、男女の情愛といった情感をにじみ出すことは、本当に難しいわざだと思う。昔の日本映画はそれをあたりまえのようにやっていた。今、勇気をもって娯楽時代劇が作られるのはよいことだが、この際、情感の研究に着手するともっとよい。観客もそれをどんどん体得しよう。

スチームボーイ

東宝配給
7月17日公開

野村正昭

日本SF大賞を受賞した「童夢」(83年)が、石ノ森章太郎「猿飛びエッちゃん」への、「AKIRA」(劇場版は88年)が、横山光輝「鉄人28号」への、それぞれオマージュであることは有名だが、そうすると、この新作「スチームボーイ」について、大友克洋監督が「手塚治虫さんの「アストロボーイ(鉄腕アトム)」に対抗して、原子の力じゃなくて〝蒸気の力〟にしようということで、題名も「スチームボーイ」にしたのです」(本誌7月上旬号)と語っているのが、俄然興味深く思えてくる。

何よりも、まず目をひくのは手塚アニメを凌ぐ緻密なディテールだ。19世紀イギリスの佇いや、スチーム城内部のメカひとつひとつの動きが、凄まじい凝りようで、こちらに迫ってくる。「迷宮物語／工事中止命令」(87年)や「AKIRA」を今見直しても、いささかも古びて見えないのは、大友監督の細部への拘りが時代や技法を越えて、作品に有効に機能しているからだ。

発明一家スチム家に生まれた少年レイが、祖父ロイドから究極の蒸気動力源〝スチームボール〟を渡され、陰謀と冒険に巻き込まれるという物語は、手塚作品への対抗という意識も作用したせいか、その世界観は、あくまでもストレートで屈託がなく〝大冒険空想活劇〟の名に恥じぬ出来栄えである。デジタルや3DCGを駆使しつつ、蒸気の部分などは手描きで丁寧に描きこまれ、素人目にも、その完成度の高さには圧倒される。

万国博覧会開会式での戦闘場面のカタルシスも含めて、久しぶりの大友作品を堪能しつつ、しかし見ているうちに、正直言って、微妙な違和感が徐徐に生じてきたことも告白しておかなければならないだろう。押井守「イノセンス」への不満はさておき、だが、あの作品は押井守その人からでなければ絶対に生まれなかったものだ。「スチームボーイ」は大友克洋にしか生みだせなかったものか、どうか。

気になるのは「冒険活劇にしたのは、1本の作品をコンピュータで実現するのが予算的にも技術的にもいかに大変なことか、当時の僕たちがいかによくわかっていたかという証拠です。回収するためには〝ウケる映画〟をつくらなければならないということです」という大友監督の発言であり、そう見れば、手塚治虫というよりは、むしろ宮崎駿「天空の城ラピュタ」(86年)を想起せざるをえない設定にこそ問題は起因しているのではないか。レイ役の鈴木杏や、スカーレット役の小西真奈美や声優陣の善戦にも拘らず、主要なキャラクターの殆どが壮大な書き割りを前にした駒にしか見えないのが辛く、これは「AKIRA」でもそうだったが、長大な物語を映画という限られた時間に圧縮する際のバランスの問題なのかとも思えてくる。

ラストの大仕掛けにしても、宮崎作品の新作と同じ趣向で、構想10年をかけて、偶然にせよ「ハウルの動く城」の前座に見えてしまうのは、つくづく損なタイミングだったのではないか。

写真は『鉄砲玉の美学』

日本映画時評 190

プログラムピクチュアから遠く離れて

山根貞男

このところ、映画にうるさい友人たちと顔を合わすや、先日の東京・池袋の新文芸坐における中島貞夫特集の話になり、あれはいったい何だったんだろう、とジョッキを手に盛り上がっている。「あれ」とは、その特集上映が大成功を収めたことである。

特集「遊撃の美学　映画監督・中島貞夫」の上映作品はニュープリント七本を含め二十八本。期間は六月二十六日〜七月九日。番組は二本立てで日替わり。新文芸坐の話によれば、初日の土曜、その翌日、つぎの土曜、そして最終日が、朝から立ち見になる満員盛況であったという。四日間の番組は順に、『日本暗殺秘録』(一九六九)と『鉄砲玉の美学』(七三)、『893愚連隊』(六六)と『狂った野獣』(七六)、『脱獄・広島殺人囚』(七四)と『やくざ戦争　日本の首領』(七七)、『くノ一忍法』(六四)と『ジーンズ・ブルース　明日なき無頼派』(七四)。初日には中島監督とわたしの、つぎの土曜には中島監督と蓮實重彦の、それぞれ対談があいだに挟み込まれた。わたしがトークのさいに言及した『にっぽん'69　セックス猟奇地帯』(六九)と『ポルノの女王　にっぽんSEX旅行』(七三)の日をはじめ、ほかにも大入りの日が何日もあったという。

この特集は『遊撃の美学　映画監督中島貞夫』(ワイズ出版)の刊行に合わせて企画されたものだが、関係者のほとんどが興行成績を危ぶんでいた。昨年、別の劇場で催された深作欣二特集が失敗したからである。ところがフタを開けてみると、大盛況で、だれもが驚き、快哉を叫ぶとともに、これはどういうことだと不思議がらずにはいられなかった。失礼ながら、深作欣二がコケたのだから、中島貞夫が立ち見になると思えないではないか。そこで、以後、この現象をわいわい分析することになったのである。

まず第一には、これほどの中島貞夫特集は初めてということが大きいにちがいない。デビュー作『くノ一忍法』も初期傑作『893愚連隊』も意欲作『鉄砲玉の美学』も、伝説の映画と化していたところへ、今回、知られざる傑作『ポルノの女王　にっぽんSEX旅行』などとともにニュープリントで蘇った。映画ファンなら駆けつけて当然であろう。そして、ここが映画監督中島貞夫の特異なところだが、六十一本の作品のうち、どれが代表作かを特定することが容易ではない。代表的な作品というだけでも、たちどころに十本は挙げることになる。しかも、時代劇と現代劇の双方のみならず、青春映画、やくざ映画、アクション映画、戦争映画、ドキュメンタリーと、あらゆる種類の映画があって、ジャンル区分をしても意味を成さない。要するに中島貞夫の作品は何でもありなのである。ならば、何本か選ぶのはむずかしく、つぎつぎ見る以外ない。

今回、観客の年齢層は幅が広く、女性客も多かった。すでに中島作品を何本も見ているファンもいれば、初めての人もいたと思われる。いずれにしろ、たとえば『日本暗殺秘録』と『鉄砲玉の美学』の二本立てを見れば、およそ同じ監督の撮った映画とは思えず、どちらもエネルギッシュに面白いので、がぜん興味をそそられ、つぎつぎ見たくなっても異なことではない。そんなふうにいくつもの要因が重なって大入りの盛況になったのであろう。

何でもあり、つぎつぎ見たくなる。そうした連続性はいうまでもなくプログラムピクチュアの基本要素にほかならない。今回の特集の大成功は、すぐれた作品なら、プログラムピクチュアの活力が歳月の隔たりを越えてちゃんと生きていることを示している。やはり映画は現在形の生きものなのだと思う。

量産時代の映画にどっぷり浸っていた経験からいうと、プログラムピクチュアは何が飛び出すかわからない点に面白さがある。各社のプログラムピクチュアを少し連続的に見ていれば、見る前に、主演スターや監督、あるいはジャンルや路線などで、それなりの見当をつけることはでき、つけたうえで映画館に入るが、予測どおりの結果を望んでいるわけではない。むしろ、見当が外れ、意外な面白さにぶつかることをこそ期待している。プログラムピクチュアの連続性を支えてきた、そうした欲望のあり方を、中島貞夫の作品群はいまも刺激してやまないのである。

話題を新作に移せば、津田豊滋の『丹下左膳　百万両の壺』を見ての印象が、いま述べたことに通じる。昨年の秋、豊川悦司を主演に丹下左膳映画がつくられると聞いたとき、アイデアの面白さにわたしは感心した。あの隻眼隻手の怪人ヒーローを豊川悦司が演じるなら、新しい時代劇が生まれるにちがいないと思ったのである。ところが、完成した作品を見ると、まるで予想が外れてい

る。筋立てと登場人物の明快さ、それにふさわしく、だれもが台詞をハキハキ言い、明るいシーンでは照明がガンガン当たっていること、描写の悠々たるリズム、総じてあっけらかんとした雰囲気、といったふうに、この作品に流れているのは、まるで一九五〇年代のプログラムピクチュア全盛期における東映時代劇の空気ではないか。では、古臭いかというと、そうではない。やはり豊川悦司のキャスティングが成功して、現代的な時代劇が誕生している。

豊川悦司がいかにもモダンな左膳を演じているわけではない。むしろまったく逆に、昔の東映時代劇のムードに丸ごと浸って、初めての時代劇を楽しんでいるかに見える。ところが、そうすればするほど、何か微妙に違った感じが析出していく。あの長身が時代劇のセット空間をのっしのっしと歩き回ったり、ごろりと寝転んだりするとき、異様さを少しずつ醸し出し、あの顔と声が真っ白な着物と真っ赤な襦袢とのあいだで奇妙な響きを生み、それらの印象が矢場のセットのきらびやかな極彩色によって増幅されることで、まぎれもない現代的な不気味さを結晶させるのである。

七十数年前、大河内傳次郎の丹下左膳が出現したとき、異貌のヒーローぶりに人々は喝采した。映画はたちまちシリーズ化され、やがて山中貞雄が『丹下左膳餘話　百萬兩の壺』(一九三五)でその怪剣士のイメージを転倒させた。今回の映画はその山中版のリメイクで、あれほどの傑作ではないが、大河内左膳の不気味さは明らかに引き継がれている。新人津田豊滋は、キャメラマンでもある利点を活用し、昔の時代劇を転生させたのである。それは同時にプログラムピクチュアのあり方に通じているが、だからといって、いまは姿を消したプログラムピクチュアがこんな形で蘇ったと見ることなどできない。この映画の作り手たちはそのことを意識的に踏まえているからこそ、ある達成をつかんだにちがいない。

写真は『丹下左膳　百万両の壺』

渡辺謙作の『ラブドガン』も基本的なあり方はかつてのプログラムピクチュアを思わせ、殺し屋たちがたがいに殺し合うという話からして、一九五〇年代日活の無国籍アクションに通じる。赤いピストルがいつも中心にあること、撃つ者の感情によって銃弾の色が青や黄や赤になるという話だけではなく、画面の色彩設計に凝っていること、そして、カット展開あるいは描写の大胆ともデタラメともいえる跳び方も含め、日活時代の鈴木清順ふうと見るべきか。べつに出処や影響を問いたいわけではない。問題は、イメージの奔放さがそれなりに楽しめると同時に、空転を感じさせ、最終的にはイメージごっこでしかないことである。

たとえば永瀬正敏も宮崎あおいも岸部一徳も新井浩文も、きっちりいつもの雰囲気で登場する。明らかにそれは、かつてのプログラムピクチュアの場合、スターがどんな種類の映画に出ようと持ち前のキャラクターを崩さないのに通じる。そんなあり方を楽しむことはできるが、逆にいえば、どんな映画に出ても凄みを放つ宮崎あおいがここでは新鮮な魅力を発揮しないように、凡庸に陥っていることになる。なぜなら宮崎あおいはプログラムピクチュア時代のスターとは決定的に違っているからで、そのことを踏まえなければ、ある安心圏内に留まるのは当然の成り行きであろう。イメージの奔放さがイメージごっこに終るとは、そのことにほかならない。

この作品では、カット運びや描写が大胆ともデタラメともいえる跳び方をするいっぽう、殺し合う殺し屋どうしが父と子のような関係で結ばれ、そこに紛れ込む女子高生が両親の死をめぐる男女関係に苦しみ、といったふうに、筋立てとしては人情話が絡み、見ていくうち、画面づくりと物語のどちらかが邪魔に感じられてくる。無茶を承知で比較すれば、日活時代の鈴木清順のアクション映画においては、イメージの奔流のなかで人情話が昇華されていた。その鈴木作品の美術を担当した木村威夫が初監督の短篇『夢幻彷徨』を撮り、極彩色の華麗なイメージの乱舞で目を奪うが、ふたたび強引に比較すれば、そこでは、戦争体験に根差すメロドラマをいわばレールに、強烈なイメージの連鎖がつづられていく。

わたしは『丹下左膳　百万両の壺』や『ラブドガン』を見てプログラムピクチュアを想起し、それとの異同について述べたが、二作品を見る多くの観客はプログラムピクチュアのことなど考えもしないにちがいない。その観客のあり方は正しいと思う。だが、作り手の場合は事情が異なるのではないか。というのは、プログラムピクチュアがもはや存在しない、存在することができないにもかかわらず、明らかにそのことに無意識な映画が散在し、つまらない独り善がりに陥っていると思われるのである。

その意味でも、中島貞夫特集の大成功は注目すべきであろう。あの盛況からきっと何かが生まれてくる。端的なことでは、当の中島貞夫自身が信じられない表情で興奮と喜びの初日を迎えたあと、何年も前から想を練ってきた大チャンバラ映画の企画と本格的に取り組むことにしたという。

文化映画紹介

渡部実

第42回日本産業映画・ビデオコンクール レポート

初夏を思わせる6月14日に、東京神保町の如水会館で「第42回日本産業映画・ビデオコンクール」(主催・㈳日本産業映画協議会）の授賞式が開催された。このコンクールをご存じの読者もいるかも知れない。1963年、発展する日本の産業の動向をその年度に製作された映画(映像)によって伝え、優れた作品を奨励するというコンクールであり、今年で42回目を迎えた。

言うまでもなく日本経済は、コンクールが始まった60年代は順調に発展していたものだが、80年代のいわゆるバブル現象とその崩壊により低迷の一途を辿ってしまった。当然、大手の企業、公共事業などの仕事は減り、それを記録する産業映像も減ってしまった。そして何よりもスポンサード(映像作品の製作を映像プロダクションなどに発注する発注者）の減少、それに伴う製作費の削減などの諸条件が産業映像の発展を停滞させている感がある。本欄でも80~90年代には当時の優れた産業映画を取り上げ、それらの作品が文化映画のベスト・テンに入賞した時期もあった。

このコンクールも最盛期には応募総数が3ケタあったが、今年は2ケタの74本である。しかも今回はフィルム2本、ビデオ70本だという。現在の日本経済が苦境に置かれているように、産業映像を製作するプロダクションも同じく苦境に置かれている。加えてフィルムからビデオへのハード面の変化は、劇映画（フィーチャーフィルム）より早く産業映画を含む短編映画界に訪れた。結果として日本の産業映像の世界は、現在、大変動の時期に来ていると言っても過言ではない。それでは製作が困難であるこの分野に新作がまったく無いのかといえば、そうではない。今年は応募が2ケタになったが、日本経済は水面下で活性化しており、その分野を注意深く扱った映像作品にも力作、注目作が多く見られた。

現代社会を反映する映像たち

日本産業映画・ビデオコンクールの応募分野は多岐にわたり、それだけに毎回、時代に照応した個性的な作品が揃う。この事実は現在の応募状況を見てもそうである。基本となるものは「奨励賞」の対象となる産業一般の部門――すなわち「鉄鋼・金属・鉱業」「電力・ガス・エネルギー」「建設・不動産・運輸」「化学・繊維」「公共団体」「官公庁」「商業・サービス・その他」などの部門である。さらにコンクールの名称に因んだ「日本産業映画・ビデオ部門賞」が「企業紹介」「技術記録」「販売促進」「教育訓練」「学術・研究」「広報」「観光」「教養」の8つの種類に分かれて用意されている。最終審査会では各

「小津安二郎監督作品　DVD化の軌跡」より

部門賞が決定された後、その中よりさらに優れた作品として「文部科学大臣賞」(ちなみに今年の受賞は7月上旬号の本欄で紹介した「不思議の星　地球」＝企画・国立天文台、製作・イメージサイエンス、である)、そして「経済産業大臣賞」「日本経団連会長賞」などが決められ、全応募作品の中から最も優れた「大賞」が決定される。受賞結果と審査委員の講評は毎年、主催者である㈳日本産業映画協議会の母体である毎日新聞社の毎日新聞・朝刊に発表される。

今回は短いスペースながら、今年のコンクールで見事大賞を受賞した「**小津安二郎監督作品　DVD化の軌跡**」(企画・製作／松竹、企画・脚本・演出／阿部勉、撮影／池谷秀行、音楽／竹中恵子、録音／鈴木肇、解説／三上真一郎、監修／川又昂。ビデオ作品・42分)を紹介したい。

この作品は、「販売促進部門」に応募されていた。昨年が小津安二郎監督の生誕100年にあたることから、松竹では現存する小津作品の全てを「DVD　小津安二郎」の名称でDVD全4集として発売することとした。小津作品34タイトルである。松竹ではその製作にあたって、デジタルリマスター修復版の名のもとに、最新のデジタル技術を駆使し作業を進めた。作業を進める段階で当時の小津組のスタッフたちを監修に招き、当時の撮影現場での小道具の色合いなどを検証している。またサイレント映画については当時の字幕と画面、その両者がどこで一致しているか、また両者に微妙な変動があるか、などの検証も行われた。

現在はDVD全盛の時代である。DVDで録画も可能な機器も市販されている。そのような状況であるから、顧客(ユーザー)、特に映画ファンは貪欲である。顧客は映画の名作をDVDで見てもそれだけの鑑賞では満足しない。いかにしてこの名作が作られたのか、そのメイキングを知りたくなる。DVDを発売する側も、フィルムの変色・褪色の補正、傷みのひどいフィルムの修復などはもとより、デジタルリマスター修復版の製作によって新たな映像製作者としての気概を持つことになる。その点、「小津安二郎監督作品　DVD化の軌跡」は映像製作のスタッフたちがその作業の工程をそのままに記録している。つまり包み隠さずにDVD製作の舞台裏を見せていることがかえって新鮮であり、そこに興味と共感を覚えるものだ。

小津安二郎監督の映画は無声映画時代より存在する訳だが、これら無声映画の名作はDVDにめでたく収まることとして、その一方、この「小津安二郎監督作品　DVD化の軌跡」はその小津映画をいかに現代に蘇生させることが出来るかという、芸術を保護する立場に立った科学の目を感じる。まさに産業映像は現代社会を反映する映像たちと言えるだろう。「販売促進」の部門からDVDに関するこのような作品が出現してきたことに時代の推移を痛感するものだ。

いかに経済、産業が低迷しても、20世紀以来の日本の産業発達の証言者である産業映像は決して無くならないだろう。それと同様に長い歴史を持つ貴重なこのコンクールも、将来にわたって日本経済を映像から見守るためにも長く存続してもらいたいと思う。このコンクールの長い歴史を概観することは、20世紀後半の産業発達史を見ることに等しいと思われるからである。

(問合せ先＝㈳日本産業映画協議会　TEL03－3213－2696)

読者の映画評

●第一次審査通過（応募総数177通）
須田総一郎（「スクール・オブ・ロック」）、大田一（「キル・ビルVol.2」）

●応募要項
住所、氏名（ペンネーム使用の方は本名を忘れずに）、年齢、職業、電話番号を明記の上、800字～900字で、縦書き。原稿用紙、またはワープロ打ちされたものでご応募ください。レポート用紙不可。字数厳守のこと。

●宛先
〒106-0045　東京都港区麻布十番1－2－3
プラスアストル　キネマ旬報編集部
「読者の映画評」係まで

皆様のご応募お待ちしております

スクール・オブ・ロック

渡辺憲治
東京都中野区
56歳・会社員

一口に言えば楽しい映画だ。賞金が出るバンド・バトル出場を目指して邁進、ついに目的を果たす。話はパターン化されてはいるが、実に後味が爽やかなコメディである。

主人公は、へんてこりんで勝手な演奏ぶりから、自ら結成したロックバンドを解雇されるミュージシャンという漫画的な人物だ。これが金ほしさにルームメイトに化けて名門小学校の代用職員になり、行儀よい子供たちに真剣にロックを教え、自らも生きる目的を持つ。むろん、元プロ野球のダメ男が弱い少年のチームのコーチとなり、自らも再生する「がんばれ！ベアーズ」という秀作もあるが、野球とロックという違いこそあれ、パターンに沿ったなどと一口で片づけられないほど軽快であり、作品自体が弾んでいる。

「がんばれ！ベアーズ」でもそうだったが、この分野では成長過程にある子供に対し、いかに教えるかが大きなポイントであり、ここがしっかりしていないと、ただの押しつけといった退屈さに直結する。本作のロックミュージシャン落第男は、音楽の才能のある子には楽器や歌を、そうでない子には照明、その他の役割を与える。そうすることによって仕組みを教え、役割の大切さを認識させるのである。一見ハチャメチャに見えるが、実は立派な教育者なのだ。

また、この偽代用教員を演じるジャック・ブラックは出色である。歌と演奏はもとより、どんな時にも表情は明るく豊かで、その動きも軽やかだ。この見事なコメディアンを見て、その体型から誰しもがジョン・ベルーシを思い起こすだろう。ベルーシの場合、黒みがかったアクの強さが特色だったが、ブラックの場合は透明感が漂い、さらりとしたフットワークのよさが特色であろう。そして、本作にはその個性が、実によく反映されているといった感があるのだ。

ある分野では落第はしたが、子供たちの才能を見つけ出し、情熱を込めて育成する。世の中にはそのような役割を担った者もいるのだ。人間、捨てたものではないぞ、とこの映画は強く語りかけているのである。

キル・ビル Vol.2

エースケ
愛知県刈谷市
21歳・学生

もともと一本の映画にする予定だったとは思えないほど毛色の違う作品だ。アクションの連続で破天荒な躍動感を生んだVol.1に対し、Vol.2はドラマが展開し、そこからの飛躍としてアクションがある。「静」の部分が多いので、アクションに移行するときの衝撃性は前作より強い。山寺での修行はパロディを盛り込んだ荒唐無稽なアクションで、前作にいちばん近いテイストをしている（個人的にはカメラの寄り方が笑えた）。リスペクトの対象が日本映画からカンフー映画・マカロニウエスタンにスライドしただけで、映画愛をスクリーンにぶちまけるスタンスは健在だ。エル・ドライバーとザ・ブライドの対決はちょっと異質である。金髪・白人・長身という共通項を持つ女同士が血まみれになって闘い、汚れていく。タランティーノのいかがわしさが垣間見える。「キル・ビル」は妄想濃度の高いアクションばかりだが、この妄想はちょっと変態的で興味深い。アクション以上の高揚度と緊迫感を生み出すのが、毒とユーモアがたっぷりとスパイスされた長たらしいダイアローグである。ファンならば「タランティーノ・イズ・バック」と心の底で叫ぶだろう。「明日友だちに話して聞かせたい」度はトリビアの比じゃない。特にビルを演じるデヴィッド・キャラダインの語り部としての資質は高い。

彼の口から結婚式の襲撃にはブライドとビルにすれ違いがあったことが明かされる。ビルは単なる悪者ではなく、愛する人を傷つけてしまったことで自責の念に苛まれているのだ。復讐という確固とした行動原理があるブライドとは対照的である。ビルはブライドを殺すチャンスがありながらも、そうしなかった。復讐という運命を引き受けることがブライドに対する償いだと悟っていたのだろう。ビルを倒し娘との生活を手にしたブライドが口にした言葉は「ありがとう」だった。副題の「ザ・ラブストーリー」はVol.1でコミカルさを隠してカッコ良さのみに焦点を絞った宣伝をした映画会社の策略かと思いきや、Vol.2の本筋はまさしくラブストーリーであった。

ションヤンの酒家（みせ）

西川しずか
東京都狛江市
31歳・会社員

中国重慶の、いわゆる思い出横丁のような通りで、鴨首の煮物を売る食堂を経営する女主人公ションヤンの生活を見つめる「ションヤンの酒家」。人々の移動手段として、街を横断するロープウェイに象徴される、近代的な都市重慶の、日陰とも言えるその場所で、たくましく生きる大陸女性を美しく描いている。

ションヤンは、美しく仕事ができ面倒見も良いのに、両親の離婚、義母や義姉との不仲、弟の麻薬中毒、自身の男性関係など、何故か周りは問題にあふれている。良い意味でも悪い意味でも、頭が良くしたたかなので、ふりかかる問題を次々と乗り越えるが、どこかいつも孤独なションヤン。そのあまりのしっかり者ぶりが、周りの人を依存させすぎてしまうのかもしれない。ヒロインのそんな強さを表現するように、鴨の羽をむしったり首を切り落としたり、淡々と店の唯一の売り物である、鴨首の煮物の仕込みをする様子が映る。また、街を流れる河の濁流が、ヒロインの決して穏やかとは言えない人生を、象徴しているかのようだった。

青味がかった画面に、店の飾り、服の模様、傘、ションヤンの口紅などに使われる赤が大変詩的で、全体を通してほとんどずっと雨の降りしきる重慶の街と合わさり、全体的にしっとりとして冷たくそれでいて力強い、この物語とぴったり重なる綺麗な映像だった。上から眺めているように、細い路地を赤い傘をさして歩く主人公のカットや、背後から映す、鏡に映るヒロインの覗くようなまなざしなど、一つ一つが絵画的だと思っていたが、フォ・ジエンチイ監督が美術を学び、美術監督を経て今に至っていると知り、納得がいった。

ションヤンの凛とした強さの中にある孤独や弱さを、艶やかに表現するタオ・ホンがすばらしい。欲を言えば、ヒロインに近づく相手役を演じる俳優が、役柄とは言えもう少し素敵な人だったら、もっと切ない綺麗な映画になったように思えたが、いかがなものだろうか。とは言え、主人公の未来に希望のようなものを感じさせるラストまで、ひたひたと水が流れるような美しさを放つ、印象的な映画だった。

キング・アーサー

監督／アントワン・フークア 出演／クライヴ・オーウェン、キーラ・ナイトレイ、ヨアン・グリフィズ（ブエナ ビスタ配給）
●丸の内ルーブルほか全国松竹・東急系にて公開中

アーサー王伝説を新学説を基に描いた、ジェリー・ブラッカイマー製作のスペクタクル・ロマン。ブリテンの血をひくローマ帝国の指揮官アーサーは、祖国滅亡の危機に瀕し、自身の宿命に殉じる決意をする。

西脇英夫

「トロイ」に続く西欧の正統歴史物語で、真面目すぎるほどカッチリと作られていて圧巻だ。主人公と円卓の騎士は「七人の侍」を彷彿とさせる忠誠と固い絆で結ばれていて感動的。しかし、何より見せてくれるのは女戦士のナイトレイで、男性陣を食わんばかりの存在感。敵役の親子二人も重厚で輝いている。そのためもあってか、主演のオーウェンは抑えた渋い演技に味わいがあるものの、やや影が薄い。ただし、そのぶん円卓の騎士それぞれが光っていて、集団劇の魅力が十分に発揮されている。

★★★★

北川れい子

これまでにさまざまな分野で語られているアーサー王伝説や円卓の騎士に与することなく、キング誕生の由来に絞って描いたのは面白いと思う。しかも英雄としてではなく、不正義は見過せないヒューマンな指導者として描いていること。けれどもアーサーのキャラはリアルでも物語が遠すぎる。むろん、他民族や異宗教を弾圧するローマの姿勢に、現実世界が重なったりはするが、アーサーが祖国愛に目覚るきっかけは甘いし、円卓の騎士たちと深い結びつきも約束ごと的。役者も魅力不足。

★★

田中千世子

健全なる娯楽大作。ローマ帝国に仕える指揮官アーサーが住民を守って避難させる。第二次大戦末期の関東軍と違って何と心優しく勇敢なことだろう。とことん理想化された英雄物語のため、だんだん幼稚に見えてくるが、氷上の戦闘シーンはすばらしい。手に汗握って、氷よ、まだだ、まだ割れるな。そうだ、今だ、早く早く。と念じて古代の〈いくさ〉に参加していく醍醐味。この映画、反戦思想も軍国思想も特にないが、ローマ法王を頂点とするキリスト教聖職者への憎悪が強い。

★★★

轟夕起夫

何とビックリ、〝アーサー王伝説〟がマキノ雅弘の「次郎長三国志」シリーズのようになってしまったというか（アーサー役のC・オーウェンと次郎長役の小堀明男、どちらもジミ～な味わいながらキラリと光るアクターだ）。親分の意気に仲間たちが共感し殉じるの図は、世界共通。ただし、本作には「次郎長三国志」シリーズの要、広沢虎造のような（異化効果を放つ）語り部がいないのが残念。こうした武骨な肉弾戦闘映画が次々と作られる状況に、いまや正々堂々とした闘いがないことの反動も感じる。

★★★

シュレック2

監督／アンドリュー・アダムソン、他 声の出演／マイク・マイヤーズ、エディ・マーフィ、キャメロン・ディアス（UIP配給）
●日比谷スカラ座1ほか全国東宝洋画系にて公開中

様々な有名童話をパロディ化した世界を舞台に、心優しい怪物シュレックが活躍するファンタジー・コメディ第2弾。シュレックとの結婚を反対するフィオナの父は、殺し屋を雇って2人を引き離そうとする。

西脇英夫

従来の、王子とお姫様物語の約束事をことごとく裏切って、逆へ逆へと展開していく1作目のへそ曲がりスタイルは、キッチリと踏襲しているものの、今回はお姫様争奪戦にストーリーを絞り込み、冒険活劇のテイストをたっぷり盛り込んで、一段と面白くなっている。つまり前作の大人向けに強引に変換したギクシャクさがすっかりとれて、大人にも子供にも楽しめる素直な娯楽作品に仕上がっている。とくに、猫の剣士といい、ゴッドマザーといい、主人公二人をとりまく脇役の造形が見事だ。

★★★

北川れい子

1作目よりもストーリーもジョークもソフトになっているが、パロディ精神は今回も健在、ずっとカラフルになった色調とも大いに楽しめる。怪物シュレックも、オバサンふう姫も、慣れれば普通のカップルと同じで、特に姫など、前回でのカンフー技がウソみたいに、犬猿の仲の夫と父王の間で、でっかい胸を痛めて。そしてくすぐったくなるほどチャーミングな新加入キャラの長ぐつネコ。台詞も動きもシュレックを喰っていて、ぜひこのネコ君主演のアニメを同じスタッフで作ってほしい。

★★★

田中千世子

めでたく結ばれたオニとブス姫の人生第2ラウンド。両親との対面やセレモニーや何やかやといった俗事に我らがシュレックが翻弄されて、あわれだ。一作目を愛しすぎたがゆえにこの続編には心がのらない。ハリウッドの楽屋ネタが多すぎるのもよくないし、人間は顔ではない、いや顔こそ全てだといったところで悶々とさせる話の作り方もよくない。長靴をはいた猫の登場は嬉しかったが、彼の本質を善意のおせっかいファシストにするくらいの知恵がほしかった。

★★

轟夕起夫

製作総指揮カッツェンバーグの宿敵ディズニー（ワールド）へのパロディ報復は一層エスカレートし、「フットルース」「ゴーストバスターズ」（嗚呼、80年代！）等々、無数の映画からの引用も賑々しいのだが、しかし、作品本体は〝後出しジャンケン〟といった感じで、前作の真摯にしてワン＆オンリーな勢いには及ばず。もはやシュレックとフィオナ姫の関係は〝見せ球〟で、スタッフはその周囲のキャラで狂躁的に遊んでいる。ま、（長ぐつをはいた）ネコ好きか否かでも評価は分かれるだろう。

★★

ぼくセザール　10歳半　1m39cm

監督／リシャール・ベリ　出演／ジュール・シトリュク、ジョゼフィーヌ・ベリ、マボ・クヤテ、アンナ・カリーナ（アスミック配給）●日比谷スカラ座2、新宿武蔵野館ほかにて公開中

主人公の身長1m39cmの目線で撮影するなど、子供の視点で描かれたハートウォーミングストーリー。少し複雑な年頃の10歳の少年セザールは毎日が冒険。ある日、親に内緒でロンドンへ向うが……。

子供映画と侮るなかれ、これは傑作だ。全編子供の目線で作られながらも、決して子供に媚びず、甘やかさず、なめていないところが知的で、成熟した作品を感じさせる。主人公のナレーションが随所に入り、そのときの心象が述べられるのだが、このセリフが素晴らしく、笑わせながらも大人の心をグサリと刺す的確さと毒を含む。たわいない子供世界の話かと思っていると、物語は親友の父親探しのロードムービーへと急展開、やがて微笑ましくも感動的なラストへ。実に巧みな演出と脚本だ。

★★★★

いま一つ、とりとめがない。思春期ものというには幼稚すぎるし、子供映画というには幼稚な大人を出しすぎている。かといって、子供の目から見た大人の映画というほどの鋭さもない。要するに10歳の子供たちの日常や友情を他愛なくスケッチし、その延長でちょっぴり冒険もしたぞっていうだけ。それぞれの家庭の風景にしても珍しくもなんともない。ただロンドンに行った子供たちが出会う、ケバいお助けおばさんが、ゴダールのミューズだったアンナ・カリーナだったのは嬉しく、ニヤリ。

★★

フツーの感じが好もしい。特に目立たないけれど、いないと淋しい、そんなクラスメートがどこの学校にもいるものだ。甘いお菓子と美女に目がない小デブのセザール。この映画もちょうどセザールのよう。フランスの全ての思春期映画がトリュフォーの「大人は判ってくれない」やルイ・マルの「地下鉄のザジ」のような映画史的傑作というわけにはいかないのだ。ベリ監督もちゃんと分をわきまえて、詩情を狙わず話をいくつも用意して物語をつくりこんでいったのがよい。

★★★

主人公の少年の、身長1メートル39センチの目線がキャッチする世界。それはたかだか彼の、半径1メートル39センチ内の出来事の集積だったりするわけだが、かたやオトナのそれも（概ねそこから数十センチ伸びただけの）やはり身の丈程度のものであったりする。つまりこれは「かつて子供であった」オトナたちに、そのイタい事実を再確認させる映画でもあるのだ。男2×女1の聖三角形の冒険を救うのが、かの「はなればなれに」のA・カリーナ（それにしても凄いメイクで登場）というのが印象的。

★★★

天国の青い蝶

監督／レア・プール　出演／ウィリアム・ハート、パスカル・ブシェール（東芝エンタテインメント配給）●8月14日よりシネスイッチ銀座、新宿武蔵野館、関内MGAほかにて

奇跡的な実話に基づくヒューマンドラマ。脳腫瘍を患い余命僅かと宣告された少年ピートの最後の願いを叶えるため、昆虫学者アランとピートの母親は、三人で中南米の熱帯雨林へ幻の蝶を捕まえる旅に出る。

このところ内外を問わず難病物の作品が多いが、この映画は死にゆくものの哀しみやはかなさを描くのではなく、幻の蝶を捜し求めるというロマンに昇華したところが魅力的。ただし、内容的にはそれだけで、脚本に工夫やアイデアがなく、面白味に欠ける。せめて、昆虫に関するうんちくや熱帯雨林の自然環境などの描写に、目を引くようなリアリティがあったら厚みが増したかも。また主役の子供はともかく、芸達者のはずのハートの演技が堅く感じられ、全体に暗い印象をうける。

★★

実話の映画化だそうだが、どうも素直に腑に落ちない。余命わずかな少年の夢と、その夢の実現のために我武者羅な母。そして少年の夢の道案内人となる昆虫学者。むろん少年も自分の夢のために本気で努力はするけれども、奇跡という名の偶然と地元の人々の協力があったればこそで、早い話、他力本願、それもかなりゴリ押しに近い。母親と学者のキャラクターにクセがあるのもうっとうしく、後半のジャングル・シーンの傲慢さも鼻につく。受け身の難病ものとは一味違う、奇妙な映画。

★

ガンで余命いくばくもない少年がジャングルへ青い蝶を探す旅に出る。この道のエキスパートの昆虫学者の小さな弟子として――。南米の美しい自然。夢と希望と幸福感が少年の心と体を充たしていく。これは実話に基づく映画である。ウィリアム・ハートが少年を肩車してジャングルを走る。そういうシーンをちゃんと入れているのはいい。素直で単調であることをよしとしているレア・プール監督の作り方だが、もっと大地や植物や虫や動物へしつこく迫ってもよかった。

★★

末期の脳腫瘍を患った少年とともに中南米へと旅立った国際的昆虫学者の、奇跡の、感動の実話。そこにはブルーモルフォと呼ばれる神秘の蝶の存在が大きく関与している。とまあ、題材が題材なだけに真面目な作りの映画なのだが、その生真面目さが何か物足りなさを感じさせる。もちろん、神秘の蝶の在り処よりも、仮初めの関係から心を開いていき〝父と子の絆〟を追体験する二人に焦点をあてた演出意図もよくわかるのだが。蝶好きで人間ギライという、いかにもな学者肌をW・ハートが余裕で魅せる。

★★

★★★★…必見！　★★★…一見の価値あり　★★…悪くはないけど　★…私は薦めない

16歳の合衆国

監督／マシュー・ライアン・ホーグ　出演／ドン・チードル、ライアン・ゴズリング（アスミック・エース配給）
●8月7日よりシネマスクエアとうきゅうにて

矯正施設で働いた経験をもとに脚本を執筆し、監督デビューを飾った26歳の新進監督の作品。平凡に見えた16歳の少年が、恋人の弟で知的障害を持つ少年を刺殺。その心の闇、周囲の人々に及ぼす波紋を描く。

バレエ・カンパニー

監督／ロバート・アルトマン　出演／ネーヴ・キャンベル、マルコム・マクダウエル（エスピーオー配給）
●シャンテ・シネ、Bunkamuraル・シネマにて上映中

ロバート・アルトマンが、名門バレエ・カンパニー『ジョフリー・バレエ・オブ・シカゴ』のダンサーたちをテーマにした群像ドラマ。エリート・ダンサーたちの舞台裏、その光と影に迫る。

河原晶子

16歳の合衆国

ケヴィン・スペイシーは壊れてゆく家族の物語にどこか魅かれているのだろうか？　それは彼が人間の絆に絶望感を抱いていることの裏返しなのだろうか？　主人公の16歳の少年の犯罪は残酷で衝撃的だけれど、恋人の弟である知的障害を持つ少年に寄せる彼の屈折した愛は痛々しく心に響くものがある。彼が教師（ドン・チードルが好演）に送ったノートの題名にある〝合衆国〟という言葉が本来持つ大きさは、現在のアメリカで強い怒りのメッセージとなって警告を暗示しているようだ。

★★★

バレエ・カンパニー

「ベジャール、バレエ、リュミエール」でベジャールの創造の日々の真実の時間に出逢った後では、フェイク・ドキュメンタリーを意識したらしいこの映画は、バレエへの安易なアプローチにしかみえない。ネーヴ・キャンベルの強引な情熱にひきずられたアルトマンは寂しい。ベジャールという創造者の前に、M・マクダウェルの演じるカンパニーのボスの存在はあまりにも薄い。そしてハイライトとなる舞台『青い蛇』はまるでキャバレーのショーのようだった。

★★

稲垣都々世

16歳の合衆国

すべてを観客の感受性に委ねた「エレファント」と違い、この映画の若い監督は、一所懸命、真摯に、理由を語ろうとした。人の悲しみを深く感じるナイーブな少年。彼の心象はていねいに描かれているし、〝悲しみ〟という概念も理解できる。しかし、ここで描かれる悲しみがすべて恋愛の破綻に起因していることが、問題を表層化する。作り手の良心はしだいに娯楽と拮抗し始め、ドラマチックな展開へと流れていく。抽象概念に理由を求めるなら、より深い考察と観念を追求すべきだろう。

★★

バレエ・カンパニー

「バレエのことを全く知らない」アルトマンが撮ったから、バレエに全く興味のない者でも楽しめたのだろうか。お得意のアンサンブル・ドラマをドキュメンタリー的なスケッチの中にリアルにさらっと展開させる。彼らはなぜそうまでバレエにこだわるのか？　理由などない。それがアーティストというもの。彼らはバレエを選び、人生を捧げたのだ。「矛盾だらけの世界を見せたい」と語る監督は、いつもの毒気を忘れ、素直な驚きをもってダンサーへのシンパシーを表明しているようだ。

★★★

大場正明

16歳の合衆国

この映画では、現代の少年犯罪を根底から見直そうとする問題意識が、ひとつの事件の現実を越えて、象徴的な次元へと突き詰められていく。こうした題材を扱う場合、加害者と被害者の次に注目されるのは双方の家族だが、この物語では、傍観者であったはずのパールやアレンが主導権を握り、主人公リーランドと彼らの間には、宗教的ともいえる象徴的な繋がりが生まれる。最終的に救済や贖罪へと至るドラマの背景にあるのは、もはやひとつの事件ではなく、アメリカ社会そのものなのだ。

★★★★

バレエ・カンパニー

アルトマンらしくない映画である。本物のバレエ・カンパニーの世界にフィクションとしてのドラマを盛り込み、独自の世界を切り開く準備をしながら、それで終わっている。彼が、人間の表層と実体のギャップを浮き彫りにするということは、ステージと舞台裏、ダンサーの活動と私生活を描くというような単純なことではない。要するにこれは、原案、製作、主演をこなしたネーヴ・キャンベルの映画であって、アルトマンは、得意の群像劇を演出する職人芸を披露しているに過ぎない。

★★

金原由佳

16歳の合衆国

加害者のリーランドの家族も、被害者のライアンの家族も、各自まったく違う国に住んでいるかのように関係が乖離している。互いの領域に踏み込まず、決定的な衝突を避け、でもそのことによって絶望的に傷ついている子供たちの造形がなんとも痛い。その一方で、他人の感情を勝手に推し量り、相手との関係において一方的で、自己完結した結論をくだすリーランドの境界線症候群的な描写に唸る。本作をはじめ、他人と自分の境をうまく捉えられない世代の映画が確実に増えていることに、震える。

★★★

バレエ・カンパニー

ヒロインのライがスポットライトを浴びるのは中盤の、ため息が出るほど官能的な『マイ・ファニー・バレンタイン』を踊る場面とクライマックスだけ。後は神のごときふるまう芸術監督の厳しい目線に日々晒され、様様な制約の中、自分の踊りを何とか主張せんとするダンサーの孤独な戦いのみが展開する。いつもの意地悪な視線が弱まり、ネーヴ・キャンベルはじめ、ダンサーへの慈しみを感じるのは、アルトマンの、芸術に殉ずる者への温かき共感なのかも。それでも皮肉なあの結末！　痺れた。

★★★★

歌え!ジャニス★ジョプリンのように

監督／サミュエル・ベンシェトリ　出演／セルジ・ロペス、マリー・トランティニャン（ギャガ配給）
●8月7日よりシャンテ・シネにて

平凡な主婦が、夫の借金の穴埋めのためにジャニス・ジョプリンの扮装をしたことから、新たな人生に出合うことに。主演のマリー・トランティニャンはフランスでの公開直前、恋人に殴打され急逝している。

全編にどこか死の匂いの立ち込めるブラック・コメディである。ジャニス・ジョプリンとジョン・レノン。そしてスキャンダラスな事件の果てに亡くなったマリー・トランティニャン。ジャニスに変貌してゆくマリーは、映画の役よりもジャニスが憑依したマリー自身にみえてくる。ジャニスとジョンとあの60年代への妄想に生きるクリストフ・ランベール（久々にフランス映画に復帰）も、マリーの遺作となった本作を作ったマリーの前夫の監督も、すべての存在がなぜかはかない祭りのあとのようだ。　★★★

ここには色んな愛がある。ジャニスとジョンへの愛。彼女を輝かせた60年代の自由、奔放さへの憧れ。ジャニスの精神に感化されて輝き始める主婦と、彼女への嫉妬とともに愛を思い出す夫。しかし、どの愛も散漫で作り物めいて今一つ信じられない。クリストフ・ランベール演じる夫の従兄弟の狂気に近い愛はおちゃらけの道具になってしまったし、ヒロインとその家族の〝いつの間にか〟の再生にも驚くしかない。この監督が本当に愛していたものは何か。元妻だったマリー？　★★

この映画に出演した後で、皮肉で悲劇的な運命をたどったマリーの演技は印象に残る。ただ物語があまりにも予定調和的で、深みに欠ける。ジャニスが自分の一部になるだけでは、ヒロインはまだ本当に何かを発見したことにはならない。これでは、何かを発見するのはむしろ夫の方だ。日常生活から死に至るまで、すべてが予め準備されている郊外という環境に対する風刺的な表現には光るものがあるのに、なぜもっと突き詰めないのか。そうすれば、発見の意味がより明確になることだろう。　★★

ヒロインはジャニスの何に感化されたのか、映画は暗黙の了解めいた描き方で、ファッションや喋り方、仕草など表層的な真似に留まるヒロイン像にイライラ。むしろ、女性の生理を赤裸々に男どもにシャウトしたジャニス的なる女とどう接するかという男側の踏絵的な心理展開こそ興味深い。ジャニスを全肯定するレオンと、ジャニス化していく妻に恐怖心を抱くパブロの対比。そこから、おそらくジャニス的だった亡きM・トランティニャンと、彼女に尽くした監督の関係性が見え、切ない。　★★

箪笥

監督／キム・ジウン　出演／イム・スジョン、ムン・グニョン、ヨム・ジョンア、キム・ガプス（コムストック配給）
●シネマミラノにて上映中

「クワイエット・ファミリー」「反則王」のキム・ジウンが韓国の古典的な怪談話「薔花紅蓮伝」に想を得たホラー。美しい姉妹は無気味な継母の存在に怯えていた。やがてその不安は残酷な現実となり……。

郊外に立つ妖しげな邸宅。美しい継母と美少女の姉妹。アンティークとしての箪笥やソファ。文学的ホラーとしてのゴージャス感をちりばめながら、すべての恐怖は使い古されたクリシェに満ちている。継母と姉妹の人格が錯綜するあたりはおもしろいが……。ホラー美学からはほど遠い不快感とあざとさとおぞましさ。ほんもののホラーは人間の心の暗闇をのぞき込む恐さのはずなのに、ここでは映像の思いつきのこけおどしだけで物語が展開してゆく。ダリオ・アルジェントのゴージャスなホラー美学が懐しい。　★★

いくつかのジャパニーズ・ホラーと較べ、雰囲気描写は格段にうまい。怖くはなくとも、怖そうなイメージをしっかり映像化している。ただ、怨霊でなく精神的な理由による妄想として見せる理性はよいとして、その病気の背景が深く語られないと、つまり人の心が描かれないと、映像は単なる幻想になる。察しが悪いせいか終盤まで真相に気づかなかったが、知ったところで「あ、そう」で終わる。単純なお話を長々と、しんねりむっつり、大仰に構えて語る過剰さもまた、韓国らしい。　★★

ホラー・オムニバスの「THREE／臨死」で、キム・ジウンが手がけた「メモリーズ」を観たときに、登場人物の関係や設定などに繋がりがありそうなこの新作は、イ・スヨンの「4人の食卓」と肩を並べるような作品になるのではないかという期待を抱いたのだが、そういう映画ではなかった。時代性や社会性を完全に排除し、整合性の問題に呪縛されてしまったこの映画は、人物の心理や心情に分け入るでもなく、神話的な世界に踏みだすでもなく、どこにも開かれることなくただ閉じている。　★★

成熟した女性への激しい嫌悪感、父親への近親相姦的な愛情と独占力、密接すぎる姉妹の距離…少女期特有の極端な感情の揺れがとことん耽美なビジュアルとして設計された点に勝負あり。部屋によって異なる花柄の壁紙をはじめ、ゴブランの絨毯や赤いベルベットのベッドカバーなど、舞台となる家は中世、騎士物語のお城のように仰仰しく装飾され、継母と娘二人の対決の構図もさながらホラー版白雪姫、いやまさに少女漫画の快感。御伽噺同様、王様＝父親の、存在薄き静観ぶりが実に不気味。　★★

★★★★…必見！　★★★…一見の価値あり　★★…悪くはないけど　★…私は薦めない

試写よりの使者
The envoy from previews.

宮崎祐治 ㊾

「顔」が気になった映画を3本。

「ラ・ピエトラ　愛を踊る女」は死を前にして踊るダンサーとその夫の物語。「私は死ぬ」と暗い顔で呟いてどんどん死に向って行く妻と、そんな妻を放っておいてどんどん他の女とセックスする夫。とうてい主役の顔をしていない脇役の彼が主役に逆転していく後半が、実はすごく面白い。みんな「愛している」を繰り返すけれど虚しく聞こえるばかり。

すっかり悪人顔の役所広司が面白い体の動きをみせる「笑の大学」。役所は三谷作品を「巌流島」で経験済みだけれど、突然走り回るドタバタな動きは、カメラワークも加わって舞台とは違うおかしさ。まるで三谷さんが走っているみたいだった。

「らくだの涙」はドキュメンタリーとドラマの境界をあやうく綱渡りしている。それでも、らくだは人が入っているみたいな顔をして都合よく涙を流すし、モンゴルの遊牧民家族や馬頭琴を演奏しに来る音楽家になんとも魅力的な味のある顔が揃って、映画を愛すべきものにしている。

「ラ・ピエトラ 愛を踊る女」はダンス映画ではなく、マリ=クロード・ピエトラガラが死への道を体現していくドラマ。夫のフロラン・パニーにも娘にも「嫌われて」死にたいと言う彼女は「死ぬまでにしたい10のこと」より厳しい。

傑作の舞台「笑の大学」をどう映画化されたか。期待は裏切られない。室長(小松政夫)の話をうまく膨らませているし、役所が舞台を見に行くシーンは新鮮だった。ただ、稲垣吾郎が狡賢い作家の裏面を演じられていないのと、文字で説明し過ぎなのが気になったが。

「らくだの涙」は白いらくだの出産が奇跡的に撮影できたとか。鳴き声はチューバのように哀しく、目はいつも泣いているように潤んで見えるけれど、その表情にストーリーを語らせる手法は正しいかどうかわからない。

立川志らくのシネマ徒然草

188 マーロン・ブランドについて語れるかな？

マーロン・ブランドが亡くなったので、「ゴッドファーザー」フリークの私としては何か書かなくてはなるまい。そう意気込んでみたようなものの、あんまり書くことがないんですね。私の師匠談志も、テレビ番組の中でマーロン・ブランドについてコメントを求められ「うーん、ポール・ニューマンの方が好きだった」と、ほとんどコメントにならないような事を言っていた。言いづらいんですね。「ゴッドファーザー」だけなんですもの。勿論、若い頃の名作はたくさんありますよ。でも、後の時代から観ると、パッとしないというか、映画ファンの心を燃え上がらせないのだ。それにちょっとポール・ニューマンっぽいし。いや、ポール・ニューマンがマーロン・ブランドに似ていたのか。ポール・ニューマンで作品を並べてみようか。「ハスラー」「明日に向って撃て！」「スティング」。どうですか、ワクワクするじゃないですか。マーロン・ブランドだと、「欲望という名の電車」「波止場」「乱暴者」……暗くなってしまいます。「ゴッドファーザー」で復活した後は、「ラストタンゴ・イン・パリ」「地獄の黙示録」……重い。「ドンファン」……知らない。私は観ているが、どんな内容か忘れた。「スーパーマン」「ドン・サバティーニ」にも出演していたが、情けない役だった。

そうそう、若い頃、チャップリンの「伯爵夫人」にも主演してた。地味だったなぁ。佐分利信が演じたら爆笑になっていたと思う。変な例えだが。やはり「ゴッドファーザー」が強烈すぎるんでしょう。あの役はマーロン・ブランドしか考えられない。マフィアの親分に品格を持たせた。勿論、「仁義なき戦い」の金子信夫のいやらしい山守親分もあれはあれで素敵だが。前述した佐分利信もよくヤクザの親分を演じたが、陰気すぎてつまらなかった。佐分利信は重たい印象があるが、どこかとぼけたところが面白いのだ。

マーロン・ブランドは若い頃はスターだった。それが落ちぶれ、「ゴッドファーザー」で甦った。しかしそれ以降は駄目。「ゴッドファーザー」の芝居から脱皮出来なかった。どうにかしようと思考錯誤したのが「スーパーマン」や「ドンファン」なのか。もうひと花咲かせてほしかった。例えば、歌手の小林幸子。彼女は、少女時代はスターだった。それが大きくなるにつれ、落ち目になった。しかし中年になって『おもいで酒』でカムバック。人々は「あの可憐な少女だった彼女がこんな大人の歌を唄うようになったのか」と感動した。そしてそれ以降、ヒット曲が出なくとも、紅白歌合戦のド派手な衣裳、というか装置で世間を驚かした。それは今日まで続いている。途中までマーロン・ブランドと似ている。似てないか。マーロン・ブランドは小林幸子になってほしかった。意味が分からないか。マーロン・ブランドも「ゴッドファーザー」の後、何か違う形で世間をおどかせばよかったのだ。「スーパーマン」での、スーパーマンの父親では世間の失笑を買っただけ。いっそのこと、スーパーマンを演じちゃえばよかったのだ。年老いたスーパーマン。よれよれになりながらも、息子のスーパーマンと一緒に悪と戦う。そこまでやれば、世間がマーロン・ブランドは、次はどんな役にチャレンジするだろうかと、期待したであろう。

「チャーリー」というチャップリンの伝記映画があった。チャップリンをロバート・ダウニー・ジュニアが演じた。晩年のチャップリンも彼が老けメイクで演じたが、蝋燭人形みたいになっちゃって見ていられなかった。マーロン・ブランドが演ずれば面白かったであろう。晩年のチャップリンも太っていたし、それよりなにより「伯爵夫人」でこけた埋め合わせにもなる。マーロン・ブランドがチャップリンを演ずるとなれば、これは大ニュースだ。「ドン・サバティーニ」で「ゴッドファーザー」のパロディなんか演じている場合ではなかった。

書くことがないとか言っておきながら、随分と書いたね。最後にこれだけは言っておきます。マーロン・ブランドの演じた「ゴッドファーザー」は映画史最高のキャラクターであることは間違いありません！

「ゴッドファーザー」

映画を見ればわかること

川本三郎

(68)朝鮮戦争を描く「ブラザーフッド」のことなど

いきなり私事で恐縮だが、この七月で六十歳になった。愕然とする。大監督と比較するのはおこがましいとはわかっているが、小津安二郎が六十歳の誕生日に亡くなっていることを思うと、この年齢の重みを意識せざるを得ない。といっても昔と今では六十歳の重みは違う。

詩人の井川博年さんがある随筆（『井川博年詩集』思潮社、03年）のなかで「人生バンド」という物差しを紹介している。そのひとの亡くなった年を、当時の平均寿命で割って人生比率を出すものだという。

たとえば、石川啄木は二十六歳で亡くなったが、それを当時の平均寿命四十歳との比率にすると〇・六五になり、これを現在の平均寿命七十八歳にかけると、約五十一歳になる。

この「人生バンド」の物差しを使うと小津安二郎は現在では六十九、七十歳で亡くなったことになろうか。少し気が楽になる。

文芸評論家で作家の中村光夫はかつてこんな名言を吐いた。

「ひとは三十歳になると年齢を取ったと思う。四十歳になるとまだ若いと思う」

それに倣って「まだ若い」と思うことにしよう。六十歳になっていいことがひとつ。映画館でシニア料金、千円で新作が見られること。これまでの千八百円に比べればずっと割安である。

某日、渋谷の映画館の窓口ではじめて「シニア」といってみた。ちょっとドキドキした。年齢詐称と思われるといけないので身分証明書（パスポート）を一緒に出した。すると窓口の若い女性が「証明書は要りません」と笑顔を見せてくれた。

なんと自己申告制だった。紳士的である。感心した。たとえば京橋のフィルムセンターはそうではない。そこで時折り、入り口でトラブルが起る。証明書を忘れた老人にシニア料金を適用しないのである。白髪で誰が見ても六十歳以上のお年寄りが、証明書を忘れたためにシニア料金で入れない。「オレが六十歳以上に見えないのか、キミは」と受付の若い女性に怒る。女性は「規則ですから」と困惑する。

こういうトラブルにならないようパスポートを持っていったのだが、自己申告だったとは素晴しい。これからいままで以上に映画館で映画を見る機会が増えそうだ。

シニア料金で見たのは、韓国映画、カン・ジェギュ監督の「ブラザーフッド」。兄（チャン・ドンゴン）と弟（ウォンビン）の兄弟愛を通して朝鮮戦争の悲劇を描いている。悲惨な歴史を直視する作り手たちの真摯な想いに圧倒される。

何よりも戦闘シーンが凄まじい。兵隊と兵隊が殺し合う。白兵戦であり、肉弾戦である。血が吹き出る。肉が飛ぶ。死体がころがる。カメラは兵士の目となって大きく揺れ動き、激しく震える。レンズに血や泥がこびりつく。映像は荒々しい。おびただしい死体にもカメラはひるむことなく近づく。

泥まみれの兵士たちの顔のアップが多い。

イラストレーション　ムカサリツコ

映画を見ればわかること　川本三郎

息苦しくなるほど。カメラは終始、戦場の兵士たちの目と同じところに立とうとしている。戦局を遠くから見渡すような俯瞰はほとんどない。それはしょせん安全地帯にいる将軍たちの目でしかない。

湾岸戦争の時、「テレビのなかの戦争」とか「ヴァーチャル・ウォー」といったことがいわれた。戦争がまるでテレビゲームのようになったといわれた。

カン・ジェギュは、それに異を唱える。冗談ではない。戦争はゲームではない。人と人が殺し合う凄惨な戦いの場である。生身の人間が無惨に殺されてゆく地獄である。

ブレ続ける熱いカメラには、戦争を軽々しく語る者たちへの怒りがこもっている。無名の兵士たちの恐怖、錯乱、無念が乗り移ったようにカメラは戦場をめまぐるしく走り、兵士たちに接近し、どこまでも彼らに寄り添おうとする。鳥の目を排し、徹底的に虫の目で地を這おうとする。この熱気に圧倒される。

「ブラザーフッド」

国家のため、イデオロギーのためといった虚飾を排し、兄は弟のため、弟は兄のために必死に生き延びようとする。国家より個。大義より家族愛。兄のチャン・ドンゴンは、弟のために怒りにかられて上官にさからい、ついには、石で殴殺する。その個の戦いの凄まじさは、数ある戦争映画のなかでも傑出している。

一方で、平和な時代を象徴するささやかな日常品の使い方もうまい。

弟が学校でいい成績を収めたのを祝って兄が贈る万年筆。兄が、いつか弟の大学入学祝いに贈ろうとしていた手作りの靴。

あるいは、婚約者(イ・ウンジュ)が兄に贈ったハンカチ。ソウルで兄が半年ぶりに彼女に再会した時、彼女はハンカチに目をとめる。「ずっと持っていてくれたのね」。観客も忘れていたこのハンカチで、兄の彼女への深い愛情がわかる。

あるいはまた、平和な夏の日、ソウルの町角で兄と弟が食べたアイスキャンディー。満足な食料のない戦場で、このアイスキャンディーが兄弟のいい思い出になっている。

戦争が悲劇であるのは、戦争など望んでいない市井の人々が犠牲になってゆくことだろう。まだ平和な時代、イ・ウンジュが、楽しく水遊びする家族の姿を見ながら「今日みたいな日がずっと続くといいのに」という言葉が胸を打つのは、そのあとの苛酷な戦争との対比になっているからだ。

一九五〇年代、ハリウッドでは数多くの、朝鮮戦争を描く映画が作られた。記憶に残っているものでは、マーク・ロブソン監督、ウィリアム・ホールデン主演「トコリの橋」(54年。米兵ミッキー・ルーニーの恋人になる日本人女性を淡路恵子が演じた)、アンソニー・マン監督、ロバート・ライアン主演「最前線」(57年)、ディック・パウエル監督、ロバート・ミッチャム主演「追撃機」(58年)、リュイス・マイルストン監督、グレゴリー・ペック主演「勝利なき戦い」(59年)などがある。いずれも激戦を反映し、第二次世界大戦を描いた映画とは違って、暗く、意気が上がらなかった。ベトナム戦争の苦闘はすでにこの時に予感されていたのかもしれない。

「ブラザーフッド」を見てわかったことがある。「最前線」で描かれた戦いは、「ブラザーフッド」で兄が勇敢に奇襲を敢行した洛東江攻防戦であり、「勝利なき戦い」のポークチョップ・ヒルと呼ばれた激戦地は、兄と弟が最後に対峙した杜密嶺の高地のひとつだった。

約五十年たって、韓国映画が内側から熱く、激しくあの戦争を描いたことで、昔見たハリウッド映画が改めて思い出される。そして「朝鮮特需」という言葉があったように、日本の高度成長が、隣国の悲劇に支えられたことを思うと、頭を垂れる他ない。

連載

日本魅録（にほんみろく） ㊳

香川照之

KING ASANO

今日のメイク・衣裳の支度場所は、この旅籠のような旅館の二階だという。それにしても東京のド真ん中、本郷の路地裏にもこんな古びた旅館があったのか。下町の入り組んだ小径の合間にひっそりと建っていることもあって、まるで絣の着物を着た明治時代の書生でも出て来そうな風情がある。屋根は、容赦のない太陽の強い光に照りつけられて今にも押しつぶされそうだった。私は、横押しの扉を開けて中に入ってみた。

玄関には誰もいなかった。

年代物の緑色のソファが置いてある応接室が、階段の左手に覗える。階段を登る時、その猫の額ほどの応接室の壁に「なるべく禁煙」という張り紙がしてあるのが見えた。「なるべく禁煙」とは、果たしてどっちなのだろうか？ 辺りに灰皿は無いようだったが、チラリと見ただけでは分からない。

二階には五つほどの部屋があった。襖はどこも開け放ってある。空っぽだ。すでにスタッフも朝イチで近くのロケ現場に出払ってしまっているらしい。ガランとした鄙びた踊り場に、しんとした真夏の熱気が停滞していた。

それにしても、誰もいない。私は諦めて、人のいない廊下を支度部屋を探して歩き出した。突きあたりの広間の戸だけが半開きになっている。襖を開けた。人の気配がした。脇を見た。映画界の至宝・浅野忠信が、すぐ左横の柱に背を凭せてゆらりと座っていた。

まるでひと気のない空間に、ひとり浅野忠信が膝を崩してくつろいでいる光景は、それだけですでに映画の中のワンシーンのような景色だったが、もちろん我々はまだメイクもしていないし、ワンカットもキャメラは回っていない。

「あ、こんにちは」

「あっ……こんにちは」

咄嗟に出たのは実に形式的な挨拶だった。だがこれでは、海外の空港で偶然出くわした孤独な日本人同士だ。彼とは何年か前の毎日映画コンクールの授賞式で少し顔を合わせていたので初対面ではなかった。けれども、うろんげに目を上げた浅野忠信から発せられる圧倒的にスローな佇まいが、我々の間に瞬時にマッタリとした空気を作り出してしまっていた。

とりあえず部屋に入る。正面にある窓からは抜けるように青い空が見えている。民家に落ちる夏の陽ざしが、もくもくした白い雲に遮られて少しずつ移動していた。

「カンヌ、今年も行かれたんですよね。ゆっくりされました？」

我々は糸を解きほぐすように少

しずつ話し出した。

「あっ……ハイ、一週間くらい」

石井克人監督の新作「茶の味」が、監督週間に招待されていることを私は知っていた。

「浅野君はもう何回目なの？」

「五、六回目ですかね…」

あんな夢舞台に五回も六回も行けるとは信じられない僥倖だ。

「ベネチアなんかも良いんでしょうねえ。行ってみたいなあ」

「ああ…ベネチアは、あれで飯が美味かったら最高なんすけど」

ベネチアは、映画祭が開催されているのは何とかという小さい島で、そこは食事が充実しておらず、別の地域に船移動しないと美味いものは食べられないのだという。

「北野監督とかガンガンそっちに移動されてましたから」

しかしさすがカンヌ、ベネチアである。地上の楽園のようなこの両映画祭の話題のおかげで、私が来た時は完全に空気が停止していたこの部屋が、いつの間にか南仏のオープンカフェにでも化けた気すらしてくる。が、無論目の前には海などない。窓枠からは、年老いた猫が睾丸を舐めている平屋の軒先が見えるだけなのである。

結局、浅野忠信とこの広間で話したのは三十分ほどであった。三十分間、我々は色々な話をした。

浅野がベネチアで男優賞を受賞した「地球で最後のふたり」のタイ人監督、ペンエーグ・ラッタナルアーン（私は昨年の東京国際映画祭で出会った）組の撮影技術が意外にも最新鋭だったこと。「珈琲時光」の侯孝賢（ホウ・シャオシェン）監督の撮影は全部ゲリラで、予定にない電車の中のシーンとかを当日の朝に急きょ「撮ろう！」と言い出し毎日大変だった経緯。そして当然、フィルムを湯水のごとく使ったこと。

一見、シャイで線が細そうに思える浅野はその実終始ニコニコ顔で、よく見れば首が異様にガッシリしていた。この男が映画界を背負っている責任の重さがその首の太さに見事に表れていた。だから、強い信念で浅野を本作品の主役に据えた日向寺（ひゅうがじ）太郎監督の覚悟は功を奏すのではないか――最後はぼんやりとそんなことを考えていた。

その時部屋に助監督が入って来て、我々の出番を告げた――。

黒木和雄監督に師事した日向寺太郎の、この初監督作品は「ニケの風」という。しかしながら、新人が初めてメガホンをとる現場というのはいつもエキサイティングだ。妥協しない、前例を踏まない、周囲を見ない、思い入れの塊、血走った眼――かつて私が出会った何人かの新人監督は、本当に規格から外れた斬新な手法ばかりを私に提示してくれたものだ。

後にそれでベルリン映画祭新人監督賞を獲る緒方明は、処女作「独立少年合唱団」を予算もないのに一年もかけて撮る大作にしてしまった。当時サントリーの社員で、自ら執筆したサンダンス映画祭脚本賞受賞作「ピーピー兄弟」を映画化した藤田芳康など、毎日腐るほどリハーサルして固めた芝居を本番の日は全く変えてしまい、実に刺激的だった。そして俳優の伊勢谷友介はデビュー作「カクト」で、若さに任せた苛酷な徹夜を何日続けたことだろう？

けれど、こういう尋常でない欲望を持っている監督を目の前にすると、私は「あー、何か変てこりんなこと本番でやっちゃうかー」と俄然燃えてくるのである。

では「ニケの風」はどうか。

日向寺監督は師匠の黒木和雄に似てほとんど何も言わない。外見も地元の郵便屋さんみたいで何も言わないのがものすごく似合っている。でも、ここ一番は違った。しっかと物を言い、途中までの出来映えには「手応えがあります」と答え、何より、助監督時代はただ優しかった眼鏡の奥の目に強い光が灯っている。それを見てこちらの心に火がつかない訳がない。そして初めて目の前で見る浅野の飄々とした芝居は、きっと日向寺監督の決意と噛み合うだろう。処女作に臨む監督が「普通でない」状態にある時、映画の神様は通常の二倍、微笑んでくれるものだ。

これは本郷ではなく、別の日に江古田にて撮ったもの

リレー・エッセイ

映画と私

沢村一樹

俳優

17才という年令は、初めてこの経験をするには、遅すぎたのかもしれない。場所は鹿児島随一の繁華街〝天文館〟にある映画館。高3になり部活がなくなった僕は、いつもの週末がそうであるように、この日も受験勉強に充てるべき時間を思う存分映画鑑賞に費やしていた。この日のお目当ては、ハリソン・フォード主演の「刑事ジョン・ブック／目撃者」。アーミッシュとよばれる、電気もガスも使わない18世紀さながらの暮らしを営む人々の村が舞台で、映画雑誌等では、なかなかの評判をとった映画だ。

薄暗い館内では物語がいよいよクライマックスへと突入し、まばらとはいえほとんどの観客が固唾を飲んでスクリーンに喰い入っていた。その時、中央右端の非常口と書かれた緑色の灯りの下から現れた2人組の男に気をうばわれたのは、あるいは僕だけだったかもしれない。まさかこんな所に？ と疑いながらも身を沈め、できるだけ気配を消し、平静を装おうと努める僕に気付いてか、気付かずか、2人組は館内を物色する様に傾斜を登り、後方へと向かった。今や目の前に広がるスクリーンに映し出されるセクシーなハリソン・フォードの勇姿も、館内に響き渡る上質なドルビーサウンドも僕にとっては何の意味も持たず、2人組のコツコツというその足音だけが意識を支配していた。「大丈夫、バレるはずがない！」。学校帰りの制服姿とはいえ、ブレザーにネクタイ、この暗がりなら会社員に見えるはず。このマヌケな高校生は、本気で仕事帰りののんきなサラリーマンになりすまし、只々、見つからない事だけを祈りながら映画を観ているフリをした。しかし残念ながら、その願いが神に届くはずもなく、かえって一番目立ってしまっていたであろう僕をターゲットとして捉えたその足音は、テンポをゆっくりと上げながら真っ直ぐこちらへ向かい、僕のすぐ右斜め後ろで立ち止まると無遠慮に話しかけてきた。「君、高校生？」

初めて見る補導員は、白髪まじりのダンディーだった。それにしても、補導員って、どうしてこうもあからさまに〝補導員〟なんだろう。映画館に入ってくるなり観客ではないと判るその目つきと風貌は、その後、上京して間もない頃バイト先に向かう青梅街道沿いで見た〝脱走犯を捕えるべく、１００メートルおきに配置された私服警官〟と結びつく。３６０度、上から下まで〝刑事やってます〟〝逃げた犯人を捜してます〟というオーラは〝私服の意味ないじゃん〟と言いたくなる程で、その判りやすさたるや微笑ましいくらいだった。しかし、素人の僕にすら見抜かれるこの微笑ましい集団は、その日の夜には見事事件を解決した。その前に〝逃げられるなよ〟と言いたくなるが……。

とにかく学校帰りに映画館へ寄り、狭いイスとイスの間に無理に押し込まれた様に小さく座る僕は、先の警官同様いかにもな補導員に、まんまと生徒手帳を提示させられていた。初めての補導だった。それにしても「刑事ジョン・ブック」を観る事が、そんなにいけない事なのか？

不満をブチまける僕に、Mr.ダンディーは丁寧に対応した。どうやら田舎の劇場でよくある〝同時上映〟というシステムが災いの原因で、この時のもう一方の作品が「誘惑」という、タイトルからしてそれっぽい感じではあるが、なんとまあ〝R－18指定〟だったのだ。でも、もう見ちゃいましたけど、小学生の頃から11PMの大橋巨泉や藤本義一に鍛えられたこの目には何の刺激も感じませんでしたけど……。大体、そんな作品と「刑事ジョン・ブック」をセットにするなよ映画館！ と考えているうちに、怒りのスイッチがONになってしまった僕は、

「ねえ、おじさん達入場料払ったの？　僕は少ないこづかいの中から1100円払って入場したんです。それなのに、映画が終わる20分前に話しかけてくるなんて非常識でしょ。この20分の為に、ここにこうして座っているようなものなんです。しかも今観てるのは『刑事ジョン・ブック』で、そのR−18とは関係ないでしょう。だいたい補導員なら他に、ゲーセンとかパチンコ屋とか、行くべき場所があるでしょ。こんな所に不良がいるかっ！　昭和30年代かっ！」
　あっさりと手帳を返したダンディー2人組はその場を去り、怒りに震えた高校3年生は目の前に流れるエンドクレジットを、ボー然と眺めるのでした。スクリーンの中にも、スクリーンの前にも物語がある。映画館ならではの出来事でした。
（その1週間後、職員室へ呼び出された僕は、同じ様に生活指導にブチまけ、事なきを得ました。）

さわむら・いっき
1968年、鹿児島生まれ。連続TVドラマ『続・星の金貨』（96）でデビュー、以後『ショムニ』（00）、『ごくせん』（02）、『白い巨塔』（03〜04）、98年から『浅見光彦シリーズ』などの話題作に出演する。映画は『恋は舞い降りた。』（97）。また『スチームボーイ』（04）では声優にもチャレンジしている。

高校3年生で経験した映画館での思い出

「刑事ジョン・ブック／目撃者」

成田陽子の忘れられないスター

第18回

ヴァネッサ・レッドグレーヴ

VANESSA REDGRAVE

美しく気高く年を重ねる
演劇一家出身の英国女優

1937年1月30日、イギリス、ロンドン生まれ。父サー・マイケル・レッドグレーヴ、母レイチェル・ケンプソン、妹リン、弟コリンという俳優一家に生まれ育つ。8歳からバレエを学び、57年舞台で、58年に映画でデビューする。66年「モーガン」と68年「裸足のイサドラ」でカンヌ映画祭女優賞を、77年「ジュリア」でアカデミー賞助演女優賞を、94年「リトル・オデッサ」でヴェネチア映画祭助演女優賞を受賞。アカデミー賞を受賞した式上での政治的発言が物議をかもしたことは有名。62年にトニー・リチャードソン監督と結婚(67年に離婚)、二人の間にできた二人の娘も女優になった。

彫りの深い顔立ち　気位の高そうな表情

娘の友達にヴァネッサという名前の女の子が居て、その母親が「大好きなヴァネッサ・レッドグレーヴから名前を取ったのだけど、77年度のアカデミー賞で反ユダヤ主義を平然と言ってのけて以来、ものすごく複雑な気持になってしまって」とつぶやいていたのを思い出す。その母親はユダヤ系アメリカ人で積極的にイスラエルを支持していたから、その当惑、引いては嫌悪の情もよく分かり、今日(04年7月17日)メリル・ストリープにインタビューした際、「自分の意見を公共の席で発言すると必ず請求書が来るけれど、テロリストが横行し、米政府の厳重な制限の下で反政府発言をしては番組をおろされたり、役をはずされたりのニュースを聞く度に、私はその発言者の著名人なり俳優たちの勇気をたたえたいと思ってしまう。黙っていると世の中の

「ジュリア」

「裸足のイサドラ」

流れにのまれて、何の役にも立たないと思うから。アメリカはまだまだ自由な国ですから、思う存分、個人の意見を吐いて、不気味なセンサーシップをやっつけましょう！」と言うのを聞いてはすぐに同調したり。もともと政治に興味のない私メは政治的発言（ハリウッドでは特に反ブッシュの）が色々と余波を呼ぶ状況に頭をかかえ混乱するばかりなのである。

　ともかくレッドグレーヴの整ってはいるが鋭い目鼻立ちと長身、見るからに気位の高そうな表情と英国俳優三代目の毛並、毅然とした態度を見るにつけ、英国人のがんこなプライドの看板を背負っているようだと思いこみ、おまけに革新労働党から議員に立候補などというニュースを聞いていたのも手伝って、ジャンヌ・ダルクとマーガレット・サッチャーを足して二で割ったような人だという印象を持っていた。前にも書いたが、英国女優の中でも庶民的なブレンダ・ブレッシン型よりも、貴族的、またはエキセントリックな女優を好む私メは、ヴィヴィアン・リーとか、デボラ・カーの狂気をはらむセクシュアリティーに魅かれ、レッドグレーヴに対しては、タカラヅカの男役に憧れるような性が転倒した、多少、倒錯的な魅力を感じていたとでも言おうか。つまり、あの彫りの深い顔立ちと痩身の彼女に温かな女らしさはまず感じられなかったのである。

　同じように北ヴェトナムを支援して激しく批判され非愛国者といまだにレッテルがついているジェーン・フォンダと共演の「ジュリア」でアカデミー助演女優賞を受け、会場周辺でレッドグレーヴ・ボイコットのデモを繰り広げた人々を「ユダヤ主義のフードラム（チンピラ、ギャング）ども」と言ってのけた彼女のガッツには頭が下がるではないか。今でこそ、バーブラ・ストライサンドやらウーピー・ゴールドバーグがワイワイ政府批判をするのがスタイリッシュにして、勇気があると評価されるが、今から26年前に、既に世界を支配しつつあるユダヤ人をこき下ろしたのである。現在でも映画・マスコミ・金融をコントロールしているユダヤ系に対して批判的意見を言うセレブリティーはまず見当らないのに、である。

若い頃は木を見て森を見てなかった

　さて当人にお目もじした第一回は、86年の『セカンド・サーヴ』というTV映画で性転換プロ・テニス選手、レネー・リチャーズを怪演した時だ。もとは米海軍の外科医だった男性が女性に性転換してUSオープン女子チームの一員として競技した実話のTV化で、レッドグレーヴの中性度が効果を放ち、米語アクセントは朝メシ前であろうが、セミプロの腕にまでテニスに励んでの役作りで見事にエミー賞にノミネートされている。

　役を演じてない時の俳優たちは会見などでは、"当人の公のイメージという役"を演じる——例えばいつもゴキゲンスーパースマイル顔のトム・クルーズ、とか、才気走ったケヴィン・スペイシーなど——のがナラワシだが、レッドグレーヴはそういう不要な隠れみのなぞ無用、しらくさい、とばかりに楚々とした、限りなく恥ずかしそうでシャイな素顔をあらわにし、答え方も「あのー、そのー」が多く入った長々しいもので、サッチャー女帝の鉄粉のみじんだにないのだ。長身と立派な顔を折り曲げんばかりの謙虚な姿勢は、マギー・スミスやジュディ・デンチにも共通するから、英国の舞台で風雪を過ごすと、妙な威厳とかが洗われてしまうのかもしれないと思ったりもした。

「才能は遺伝か、とよく聞かれるけれど、それにプラス環境だと思うわ。でも私は父に演劇学校に行きたいと言ったら強く反対されて歌と踊りに集中し、ミュージカルのキャリアを進めと言わ

れてね。それまで、歌と踊りのレッスンにずっと励んでいて、ミュージカルも大好きだったけれど、シェイクスピアもやりたいと父に訴えたの。演劇学校に行ったあとにチャンスが来ればミュージカルも出来るけど歌と踊りばかりでは窓口が小さすぎるとね。父はなるほど、という表情をして、あとは何も言わなかったわ」

祖父ロイ・レッドグレーヴに父のサー・マイケル、母のレディ・レイチェルと演劇一筋の血を引く一族の長女のヴァネッサが誕生した時は、ローレンス・オリヴィエが『ハムレット』で父のマイケルと共演中だったため、カーテンコールに、

「レイディース・アンド・ジェントルメン！ 今宵、偉大な女優がこの世に誕生しました。ラエーテスは娘を授ったのです！」

というスピーチをしたエピソード（父親はラエーテス役を演じていた。もちろんハムレットはオリヴィエ）は有名だし、ヴァネッサという名は知人のヴァージニア・ウルフの姉、ヴァネッサ・ベルから取ったなど、現実にドラマチックな場面の連続の中で育っただけに、個人のドラマを語るのにうんざりしているフシも窺え、フランコ・ネロとの大ロマンスやティモシー・ダルトンとの年上の女の恋などにはいっさい答えず、

「ハワーズ・エンド」（上）「湖畔のひと月」（下）

「私は英国人ですから、自分のプライベートなことについて話すのはきらいです。本当にいやなのです」

と毅然と言い放っていたのを思い出す。

反体制闘士などというレッテルが貼られ、PLOを支持したために、82年にはボストン交響楽団のナレーターの役をキャンセルされ、ブラックリストに載ってしまい、一時はインタビューの度に2ページの契約書にサインを要求し、レッドグレーヴには政治的な質問はしてはならぬ、校正を読ませる、取り消し権を持たせる、テープのコピーも提出、とまるで亡命政治家並のパラノイドを見せていたが、それもゆるやかになり、

「私が若かった頃は誰も彼も助けてやろうという使命に夢中になって、木を見て森を見ない状態になってしまって。以後、社会的、芸術的、政治的な経験が積み重なって、やっと少し分析することが出来るようになりました。ひとつのキイになる問題と他のすべてを勝手に結びつけたりしないようになり、人々の和を計り、もっと遠くから客観的に見る目を養っています。はじめは張りきりすぎて、はやりすぎて失敗してしまったのね」

と若気の至りをもらしたりもしたのである。

ヴァネッサ・レッドグレーヴと筆者

舞台より映画の方が複雑で難しい

次に会見したのは92年「ハワーズ・エンド」で再びオスカー助演女優賞にノミネートされたルス・ウィルコックスの役を演じた時だ。55歳のレッドグレーヴは相変らずスックと立ち、豊かな栗色の髪の下におだやかな表情を浮かべて会見に現れ、煙草をチェーンスモークしながら、メリハリのある声で、しかし、途切れ途切れな話し方で質問に答えてくれる。

——レッドグレーヴ・ダイナスティーと呼ばれることに誇りを感じますか。

「堂々の大河小説として描きたいのはよく分かるけれど私の家系は決してダイナスティー（名家）ではなく、クラン（郎党）ってなところね。曾祖父は週一ポンドの賃金で仕事場に歩いて出かけて部屋代にあてた、という先祖を持っているから、ハードワークなくして生

きるべからず、という信念が代々に伝わっている。人々は成功した家族と見ているようだけれど、実情はそんなに甘くないし、質素な勤労精神こそ、最も貴重な遺産だと信じているのよ。誇りこそ感じても、ダイナスティーとは全く思っていないわ」

――小さい頃の思い出の映画は何ですか。

「運が良くて三ヵ月にいっぺんくらいしか映画が見られなかった私の少女時代だったけれど、ある日父が私と弟にお小遣いをくれて、それでフレッド・ジンネマンの『山河遥かなり』を見て大いに感激し、その後、長い間、弟とシーン毎にセリフや背景を思い出しては映画を再構成したりして。当時の映画の支えるインパクトの大きさに今、改めて感心してしまうわね」

――役作りのプロセスについて。

「作家は物語を語る声が聞こえると言うし、モーツァルトも音が勝手に耳に入ってくると聞いたけれど、私の場合は演じる役の人間が私の横にいるような気がしてきてね。私の外側にいるわけでもなく、内側にいるわけでもなく、別個の人間で私はその人に触れたり、一緒に考えたり、呼吸をしたりするの。役作りに入る時、このキャラクターはどんな本を読むだろうか、どんな目でものを見るのか、と懸命に考え、とても情熱的にその人の見方にのめり込んでいく。そうすると徐々に私の隣でその人の存在が出現していくのよ」

――若い俳優たちへの助言などありますか。

「何もないわ。その人たちの努力次第ですもの。ただ私自身に対しての日課は、人の言葉をよく聞くこと、質問をすること、そしてまたよく聞き、質問をしていくパターンを繰り返すことね。価値のあるコミュニケーションを続ける努力をするのは人間の成長にとってとても大事だと思わないこと」

――一番影響を受けた人物は？

「まず、マダム・マリー・ランベールのバレエ教室で、もっとがんばれ、もっと、と叫ばれたことね。限度とかゴールを考えずにどんどん前進のみとロシア訛りで叱咤激励されて、とにもかくにも上達しなくてはとそればかりの毎日は、あとになって絶対に手を抜かない姿勢の基本になったのよ。それから父。私の演技を人一倍険しい目で見て、激しく批判するばかり。一度だってゆるめず、私のすべての動きを目で追って私は極度の緊張のまま、硬くなったりもしたけれど、あの厳しさが私を謙虚にし、チームワークの大事さを分からせてくれたと思うの」

――舞台と映画、どちらが難しいですか。

「おそらく私だけだと思うけれど、映画のコマ割れ演技が舞台の演技をより良いものにしたと確信しています。その意味でも前後の関連性のない映画でエースを決めた時のうれしさは格別。つまり映画の方が複雑で難しいと思うのですよ」

――美容整形をどう思われますか。

「絶対に整形はしないと宣言していたのに85年に目の下のタルミを取り除いてもらってね。良い役が全然来なかったので、えいっとやったのだけれど、それ以外はしていないし、これからも二度とするつもりはないわ。整形をした人にとやかく言うつもりは全くありません」

三度目は95年の「湖畔のひと月」、つい最近はTVシリーズの「ニック&タック」という美容整形ストーリーにゲスト出演した際に会ったが、質素にして、温かい人となりはそのまま、美しく、気高く年を取ることの素晴らしさを身を持って示している英国の白いバラなのである。

Vanessa Redgrave Filmography

1966 モーガン(V)
わが命つきるとも
欲望
1967 ジブラルタルの追想
赤と白とゼロ(T)
キャメロット
1968 遥かなる戦場
裸足のイサドラ
かもめ
怪奇な恋の物語
1969 素晴らしき戦争
1971 トロイアの女
肉体の悪魔
愛と悲しみの生涯
1974 オリエント急行殺人事件
1975 危険な愛の季節(V)
1976 シャーロック・ホームズの素敵な挑戦
1977 ジュリア
1979 アガサ／愛の失踪事件
ヤンクス
オーロラ殺人事件
1984 ボストニアン(V)
1985 ウェザビー
1986 プリック・アップ
1991 悲しき酒場のバラード
1992 ハワーズ・エンド
1993 愛と精霊の家
1994 マザーズ・ボーイ／危険な再会
リトル・オデッサ
1995 闇に抱かれて
湖畔のひと月
1996 ミッション：インポッシブル
1997 陰謀のシナリオ(V)
1997 ダロウェイ夫人
オスカー・ワイルド
1998 ルル・オン・ザ・ブリッジ
ディープ・インパクト
1999 クレイドル・ウィル・ロック
17歳のカルテ
2000 ボイス・オブ・エンジェル(T)
2001 プレッジ
2002 デブラ・ウィンガーを探して
2003 惑星「犬」。(V／声の出演)

※日本公開作品(劇場、ビデオ、テレビ)のみ対象
※テレビ作品は除く

連載7

あの娘ぼくがこんなシネマ撮ったらどんな顔するだろう

河原雅彦

イラスト&題字 中村まこと

この物語は、明日の映画界の発展のため空前の話題作を生み出そうと七転八倒する、とある映画製作会社を舞台とした『机上の空論キャスティング小説』である。

シネマ2 嵐のクランクイン「実写版 北斗の拳」前編

「俺が石原だ。」
「俺も石原だ。」
「みんな石原だ。」

某月某日。とある撮影スタジオ。

今日は映画製作会社アトミック・シモンズ㈱が社運を懸けて臨む「実写版 北斗の拳」運命の撮影初日。

映画をこよなく愛する純情新人社員・あずさはきつく自分のホッペをつねってみたが、そこにはやはり受け入れがたい現実があった。

「公務で忙しいんだからチャキチャキ撮らんとな」
「おう、おやじ」×2

石原慎太郎都知事・石原伸晃国土交通大臣・石原良純気象予報士の三人が、浅黒く日焼けした肌にワイルドな戦闘服を身にまとい、威風堂々スタジオに入って来たのだ。

出演が決まってからというもの、多忙なスケジュールを縫って仲良く横須賀の日サロに通っていたという噂はどうやらモノホンらしい。

「おはようございまーす」

深々と頭を下げながらあずさは思う。

「……なんつう威圧感だ」

仮に「内村プロデュース」で「この夏、石原家でホームステイ」的なお題が出されたら、さすがのさまぁ～ず・大竹も「脱いでわびます！」と泣きながらパンツを下ろし許しを乞うであろう。で、結局出川が行かされるであろう。

「ぽい、だろお前達？」
「ぽいよおやじ。ぽい、ぽい」×2
「ぽい、ぽい」肩を抱き寄せ、なにやら健闘を讃え合う純度100％の石原族。

どうやら話題は、それぞれの役作りに及んでいるらしい。

白髪を荒々しく金髪に染め上げた長兄・ラオウ役の慎太郎。

ムッシュかまやつ風のカツラをおしゃまにかぶった心優しき次兄・トキ役の伸晃。

そして胸に七つの傷を刻み込んだ、ぶっとい眉毛は書き足しいらずの末っ子・ケンシロウ役の良純。

なるほど。三者三様、なりきり度は相当なもの

と言える。
だが、考えてみて欲しい。
つうか考えるまでもなく、大臣と予報士はめちゃめちゃ都知事の息子である。
確かに主演・ケンシロウの敵役である世紀末覇者を演じるのは、持ち前の圧倒的なオーラからして都知事が最も相応しい。
が、原作の設定はあくまで兄弟。
慎太郎がどんなに若作りしてみせようと、彼らを兄弟と言い張るのは、ダークダックスをオレンジレンジだと言い張るぐらいの莫大な無茶が生じてしまう。まあ、無理なカラーリングで頭皮を痛めた老人に都政を任せていて大丈夫か？……という素朴な疑問はひとまず置いとくとしても、だ。
さて、この矛盾点を解消すべく、あずさは必死で打開案を出し続けた。
当初の予定通り西岡徳馬をラオウに据えて、都知事を三兄弟の師匠役っていうのはどうだ？ 役を書き足して、乱世を司る黒幕的な存在なんてどうだ？
が、その度にミミの「気合いでなんとかなるんでねぇ？」という根も葉もない根性論にダメ上司どもがちゅるっと流され、会議はな～んとなく終了。早くお家に帰ってポケモンを見たいミミはダッシュで会議室を後にするのだった……。
……ちなみに。
暴れん坊将軍役の松平健は出演を快諾。この決定にもあずさは死ぬほど耳を疑ったが、松平的に「2004年をマツケンイヤーにしたいから」とのこと。もちろん、「原作は読んだことがない」と豪語している。
はてさて。
「おい、徳重ぇ。火ぃ」
ディレクターズチェアに腰掛けた都知事が、バット役にねじ込んだ石原プロ期待の新人にタバコの火をつけさせる。
「おい、徳重ぇ。道路ぉ」
続けざま重要書類に目を通しつつ思案に暮れた伸晃が、ストレスからか意味不明の言葉を新人に投げかけた。21世紀の石原裕次郎、すでにオロオロである。
「よ、よろしくお願いしま～す」
雲のジュウザ役のオダギリジョーや、山のフドウ役の曙太郎も極度の緊張に顔を引きつらせながらの現場入り。そんな彼らにすかさず駆け寄りボディーチェックを行う黒服のSP達。果たしてこれがシネマの撮影風景なのだろうか……？ あずさの胸は早くも言い知れぬ不安でぱっつんぱっつんであった。
そんな中、満田のやたらいい声が現場に七色の虹をかける。
「それでは本日より杵柄組、クランクインです！ 歴史に残る映画を作りましょう！」
フラボノピンクだった。
「パフパフ！ ドンドン、ドン！」と、お安い掛け声を連発しつつ旗畑も参上。何はともあれ、これから一カ月間このチームで一本の映画に情熱を注ぐのだ。新人・あずさも否が応にも気合いが入る。
「では、シーン28のテストいきま～す！」
助監督のテキパキした声でいよいよファーストシーンのリハに突入。
ラオウ率いる騎馬隊にケンシロウが堂々一人で対峙する緊迫の場面だ。殺伐とした世界観を演出したセット内はすでにクランクイン特有の熱気で溢れかえっていた。
すると、だ。
「あ～全然駄目だな、こりゃ」
あずさの耳にセットを見つめる初老の男の声が聞こえてきた。
石原慎太郎都知事、その人だ。
「都知事、どうされました？」
「スケール感がバッテンだわ。そうは思わんかね、君ぃ」
「バッテン……ですか？」
「いかんせんスタジオじゃ臨場感が出んのぉ。よし！ ロケでやろう。今からざっくりロケっちゃお」
「い、今からですか！？」
「どうせならド派手にロケっちゃお。ハリウッドばりにロケっちゃお。やっぱ、銀座がいいよな。美味い寿司屋も知ってるし、都知事自ら申請しちゃお」
「ちょ、ちょっと待って下さい！ 銀座じゃ殺伐とした世界観が……」
「うーん、そこらへんはCGで」
「ロケの意味、ないじゃないスかっ！？」
「じゃあ、一時間後に三越前に集合しちゃお。徳重ぇ、車回しとけぇ」
……「午前中は降水確率10％だから平気だよ」と良純がスケジュールを切り出したところで、次号『嵐のクランクイン』中編に続く

アトミック・シモンズ㈱の人々

あずさ
映画を愛する熱血純情新入社員。『実写版Dr.スランプ』で映画製作に初参加した。

満田
企画開発チームのリーダーながら世情に疎いプロデューサー。野性の勘だけで生きている。

旗畑
毒にも薬にもならない発言ばかりの宣伝チームのリーダー。若手に暴言をはく悪癖あり。

ミミ
無能なお茶汲みバイトで東北訛りの家出少女。満田の愛人でその意見がやたら重宝される。

撮影現場ルポ

イズ・エー [is A.]

遂に公開される、少年犯罪に斬りこんだ問題作

取材・文＝**進藤良彦**

近年、頻発する少年犯罪がマスコミを賑わせている。つい先日も学校内で小六女児が同級生を殺害するという衝撃的な事件が起きたばかりだが、やはり少年犯罪を考える上で大きな節目となったのは、97年に神戸で起きた連続児童殺傷事件だろう。その猟奇的な犯行と大胆な犯行声明文、そして犯人とされた少年が事件当時14歳の中学生だったことで、日本中が大きなショックを受けた。

この事件に触発された藤原健一監督が、実に6年以上の歳月を経てようやく実現させた映画が、この秋公開予定の衝撃作「イズ・エー［is A.］」である。少年犯罪を題材に犯罪被害者と加害者双方の心の救済を描いた本作で劇場デビューを果たす藤原監督は、神戸の少年Aがあれだけの残虐な犯行にもかかわらず少年法の保護の下で数年で社会復帰するという現実に疑問を抱き、そこに直面する人々の怒りや哀しみ、痛みを描こうと思い立ったという。

「イズ・エー」の撮影は昨年の夏に行われた。我々はわずかながらその現場を訪問し、キャストに話を聞く機会を持てた。渋谷の街中で無差別爆破殺人事件を起こした少年が、わずか4年で社会復帰を果たして働いている工場のシーン。午前中は日常風景のみの静かな撮影だったが、それでもスタッフ・キャストの面々からは、ひとかどならぬ熱気が伝わってきた。

爆破事件で妻子を失い、少年法で守られる犯人に怒り苦しむ刑事・三村を演じるのは、これが本格的な映画初主演となる津田寛治。昼食休憩後は、三村が工場を訪ね、怒りを露にして少年に詰め寄るという緊迫したシーンも撮影された。刑事の立場も利用して再び社会に戻ってきた少年を執拗に追い続ける男の狂気を、津田が過不足ない芝居で巧みに表現する。自然と現場は緊張感に包まれた。自身も子を持つ親である津田にとっては、心情的にリンクする部分も大きい役だろう。爆破事件の惨状を再現したシーンの撮影時には、現場に立っただけで涙があふれてきたという。

「気持ちが重なる分、そこでメロメロになってしまっては良くないと思って、逆に手綱を引き締めてます。僕自身も父親ですが、この映画のテーマは社会派のメッセージ云々よりも"父親"と

数々の野心的なOV作品の監督を経て、本作で劇場映画の監督デビューを果たした藤原健一監督

いう存在そのものであると思うんですね。加害者の父と被害者の父という全く逆の立場の二人が、どこかで子供のことを思いながら同じ地点に立っているという、そこで通じ合う物語。決して、大切な家族を失った男の単なる復讐劇ではありません」

一方の加害者の少年の父親・海津を演じるのは内藤剛志。この日の撮影では津田との絡みはなかったが、我が子が犯した罪の大きさに苦しみながら、残された家族を思い、息子とともに前向きに生きていこうとする父親を熱く演じている。数年前まで生放送の情報番組で司会をつとめていた内藤は、少年犯罪事件を伝える側に立ち、複雑な思いを抱えていたと、当時を振り返る。

「ニュースで伝えられる事件を起こした子供のお父さんは、まさに僕と同じ世代の人たちばかりだった。僕らは自分の息子・娘に何を伝え忘れたんだろうと、すごく思ったんです。それは絶対に子供のせいじゃない。彼らが影響を受けるのは親からであり、親がいなければ周囲の環境でしょ。その頃からずっと考えていたことが、この映画に参加することで行動になる。僕の役もそうだと思うけど、そうやって考え続け、行動し続けるということが、もしかしたら僕らに欠落していたことなのかもしれません」

そして内藤は、「現実にもこれから映画が公開されるまで、いろいろ起きると思いますけど……」と、つぶやいた。その予言が想像を上回るスピードで進行しつつあることはすでに触れた通りだ。もっとも難しい役作りを強いられたのは、少年犯罪者・勇也を演じた小栗旬だったかもしれない。奇しくも彼は神戸の事件当時、少年Aと同じ14歳だった。

「勇也は純粋すぎたからこそ違う世界に行ってしまった人だと、僕は解釈してます。自分だけの世界を作り上げて、現実をリアルに感じていない。自分の感情だけで好きなように動く子供のピュアな感じが、勇也という少年なんじゃないかと思って演じています」

加害者の父と子、そして被害者の父。彼らを結ぶ悲劇の糸は、観客の心に必ず何らかの影を落とすことだろう。それが我々が哀しい現実に追いつくためのよすがとなることを信じて、この映画の行方を見守りたい。

イズ・エー [is A.]

渋谷で爆破事件が発生。捕まったのは14歳の少年だった。事件は大きな話題となるが、少年法に守られた加害者の少年はわずか4年で出所する。その爆破事件で家族を失った刑事は、その少年の更生を疑うが……。少年犯罪という難しい問題を、被害者となった刑事、加害者の少年、加害者の父という三人の視点から描いた人間ドラマ。

●監督・脚本／藤原健一　脚本／江面貴亮　出演／津田寛治、小栗旬、内藤剛志、戸田菜穂、水川あさみ、姜暢雄、菅田俊　配給／GPミュージアムソフト

●ユーロスペースほかにて10月公開予定

安西水丸の 4コマ映画館

(88)イオセリアーニに乾杯！

「イオセリアーニに乾杯！」

イオセリアーニという監督の映画を知ったのは、「月曜日に乾杯！」という作品だった。仕事に疲れた中年男が、家出するかのようにベニスを訪れて、これといった事件はないのだが何となく気分のほんわかとしてくる映画だった。彼自身この映画にちょこっと出ていて、それは何んだか怪しげな貴族の老人といった役柄で結構笑わせられた。

今度この監督の作品四本をまとめ、タイトルも監督名を入れた「イオセリアーニに乾杯！」として上映されるらしい。ぼくは四本のうち二本、「四月」と「歌うつぐみがおりました」というのを見せていただいた。「四月」は、イオセリアーニ監督のデビュー作で、なかなか鋭い映像美を見せている。この監督は旧ソ連グルジア共和国のトビリシ生れで、よくわからないのだが、「四月」は当局によって上映禁止とされた作品らしい。中篇のモノクロ映画で、セリフがまったくないのだが、それでも目の離せない魅力がある。映像のすべてを一枚ずつプリントしたら素晴らしい写真作品になる映画に仕上がっている。まるでカルティエ＝ブレッソンの写真を見ているようだ。

「歌うつぐみがおりました」にも同じようなことがいえる。モノクロの作品なのだが、映像の流れが実にいい。人が歩いていて、その横を車が重なるように通りすぎていく。そんな映像がどれも決まっていて、これには驚愕する。

「四月」には若いカップルが登場する。二人が離れたりくっついたりするところを見ると、愛し合っているのだろう。二人は他人の生活を見ているうちに物欲が湧いてくる。同時に心のバランスが崩れていく。こういったペシミスティックなところが当局の反感を買ったのだろうか。

「歌うつぐみがおりました」の主人公は実にC調（古い言葉ですね）な男だ。その場の気分で動いているが、それでもどこか憎めないところがある。見終わった後もほんわかとした気分が残る。まさに「イオセリアーニに乾杯！」となるのだ。

タイトル、日時、場所（映画館名）、感想、採点（★）など、1作品1ページ。
あなただけの映画鑑賞ノートです。
［B6判・200ページ（予定）］

日頃ご愛読いただいております皆さまに、確実に本誌をご購読していただきたく、創刊85周年記念キャンペーンを開始いたします。このキャンペーン中、新規で定期購読をお申し込みいただきましたお客様全員に、**キネ旬特製手帳をプレゼント**。この機会をお見逃しなく。皆さまのお申し込みお待ちしております。

※ペンは付きません

もちろん現会員の皆様にもお送りいたします。

キネ旬を定期購読しませんか？

本誌創刊85周年特別企画
キネマ旬報定期購読キャンペーンのお知らせ

対象期間12/31まで

■ 特典 ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■
・毎号（5日、20日発売）確実にお手もとにお届け
・送料無料
・2年以上の申し込みは断然お得
　+今ならキネ旬特製手帳をプレゼント！　⇒お届けは8月下旬以降の予定

■購読料
半年…9,840円　1年…19,680円　2年…35,040円 →4,320円お得　3年…47,160円 →11,880円お得

■お申し込み方法
・本誌綴じ込みの郵便振替用紙をご利用ください。
・用紙に必要事項(お客様のお名前、住所、電話番号)と、ご希望の購読開始号、購読期間を記入し、代金を郵便局でお支払い。銀行口座自動引き落としもご利用いただけます。詳しくは綴じ込みの預金口座振替依頼書をお読みください。

■このキャンペーンについてのお問合せは小社営業部（03−3589−8325）まで

SPECIAL REPORT

第26回 モスクワ国際映画祭 総括

「とうとうロシア映画は勝利した！」

文＝山田和夫

第26回モスクワ国際映画祭（二〇〇四年六月十八日〜二十七日）。筆者には二十五回目の参加だが、映画祭当局がおどろき、私自身もびっくりしたことがある。日本の出品作で今回新設された新人監督（デビューまたは二本目まで）のコンペ〈パースペクティヴ〉に選ばれたタカハタ秀太監督の「ホテル　ビーナス」に関連して、代表二十一名、取材ジャーナリスト五十五名が参加を申し込んだこと。言うまでもなく主演スターの草彅剛がはじめてモスクワに来たためで、作品の製作者の一つフジテレビと、タカハタ監督が「Sma STATION-3」を担当するテレビ朝日のテレビ・クルーが大挙押し寄せたことによる未曾有のことだ。テレビの偉力と言う他ない。

「ホテルビーナス」の公式記者会見では草彅が「世界に一つだけの花」の一節を歌うサービスがあり、タカハタ監督には「ゴーリキーの「どん底」を思い出した」とロシア人ジャーナリストの発言があった。ロシア人にしてみれば極上のほめ言葉だったが、公式上映も好評、閉会式には新人監督コンペ部門の最優秀作品賞を監督が受ける喜びとなった。プレゼンターは仏女優イザベル・アジャーニ。副賞に二万ドルとネガフィルム一万メートルがついた。

日本映画ではコンペ外の〈世界周遊〉プログラムで、犬童一心監督の「ジョゼと虎と魚たち」が二回上映され、いずれも最後まで席を立つものがなく、終わるとロビーで参加した犬童監督にお祝いの言葉を述べる人たちが目についた。他には〈ギャラ・プレミア〉部門でカンヌ受賞の是枝裕和監督「誰も知らない」も上映された。

本コンペの審査委員長はアラン・パーカー監督。その結果は別表通りだが、注目すべきは今回ロシアから三本がコンペに選ばれ、グランプリに当たる「金の聖ゲオルギー賞」と「銀の聖ゲオルギー賞」（最優秀監督賞、同男優賞）をドミトリー・メスヒーエフ監督のロシア映画「私たち」がトリプル受賞した。数年前にはモスクワ映画祭に自国作品が一本もコンペに選ばれなかったことがあり、映画祭当局に非難が集中したことがあっただけに、さらにソ連崩壊後は初のグランプリ獲得とあって、委員長のニキータ・ミハルコフ監督は「とうとうロシア映画は勝利した。同僚諸君ありがとう」と閉会式でその喜びをかくせなかった。

ドミトリー・メスヒーエフ監督

ニキータ・ミハルコフ監督とアラン・パーカー監督

たしかに「私たち」は独ソ戦初期を戦った兵士たちを描く力作。ドイツ軍の急襲に成す術もなく敗走するソ連部隊の混乱、生き延びるためになりふりかまわぬ赤裸々な将兵たちの素顔がまっすぐに見つめられる。三人が捕虜となり護送途中に脱走、占領下の小村に逃げ込む。大祖国戦争を戦ったヒロイズムは微塵もない。ドイツ軍に雇われて巡回する農民がいる。だれが味方か敵か、区別もつかない。こうしたなかで、徐々に抵抗をはじめる三人である。過去の記憶を全面的な肯定でもなく否定でもなく、可能な限り客観的に凝視する姿勢が目立つ。男優賞をとったボグダン・ストゥプカから演技陣の充実も、ロシア映画の地力を思わせた。

「FIPRESCI」（国際映画批評家連盟）賞とロシア映画批評家賞をとったロシア映画「収穫のとき」も、過去に眼を向けた、記録映画監督マリーナ・ラズベ

ジキーナの劇映画デビュー作。一九五〇年代はじめのコルホーズ（集団農場）を舞台に、労働英雄となった女性コンバイン手の悲喜劇を描き、ヒロイン以外はノンプロの農民を使う大胆な手法が注目されたが、劇的構成が弱すぎた。もう一本のロシア・コンペ作品「パパ」（監督・主演ウラジミル・マシコフ）も眼は過去に。一九三〇年代から戦争へ、あるユダヤ人一家の運命を追い、スターリンの粛清とナチスのユダヤ人虐殺とが織り込まれるが、ここでも、「過去」を見る眼は抑制されていた。観客投票による民衆賞はこの「パパ」がとった。ミハルコフ委員長の〝勝利宣言〟はいささか気が早いと思うが、近く日本公開の「父、帰る」（昨年のヴェネチア映画祭金獅子賞）も合わせ、またここ二〜三年のモスクワ映画祭で見たロシア映画を考えると、たしかにロシア映画に復調の兆しは見える。

今年の海外ゲストはけっこうにぎやかで、開会式にはオープニング上映の「キル・ビルVol-2」のクエンティン・タランティーノ監督と主演男優のデイヴィッド・キャラダインが姿を見せ、ボスニアのエミール・クストリッツァ監督や前記仏女優アジャーニらに加え、閉会式には米女優メリル・ストリープが登場、これがきわめつきの盛り上がりとなる。彼女はジャック・ニコルソン、ロバート・カーライルらに続いて、今年のコンスタンチン・スタニスラフスキー賞を受けた。アクターズ・スタジオでスタニスラフスキー・システム（〝メソッド〟）を学んだだけに、その喜びぶりはひとしお。成熟した女性の魅力に母性のあたたかさとやさしさをたたえた表情と堂々とした仕草で会場を魅了した。プレゼンターはスタニスラフスキーの子孫、十一歳のアレクセイ・プリヤー。トロフィーをメリルに渡したあと、おどろくべき本格的テナーで、「オー・ソレ・ミオ」を朗々と歌い上げて、満場の拍手を受けた。

クエンティン・タランティーノ監督とデイヴィッド・キャラダイン

メリル・ストリープ

クロージング上映はロシア映画の新作「夜の監視人」（監督ティムール・ベクマムベトフ）。人気SF作家セルゲイ・ルキヤネンコの原作を映画化、中世の闇の騎士と光の騎士が現在のモスクワに復活して争うオカルト調ホラー・アクション、ミハルコフ委員長は「われらのタランティーノ！」と監督を紹介したが、とてもそんなものではなかった。折角盛り上がった閉会式のあとだけに、残念。

第26回モスクワ国際映画祭 受賞リスト

○ 金の聖ゲオルギー賞（最優秀作品賞）
「私たち」（監督ドミトリー・メスヒーエフ、ロシア）

○ 銀の聖ゲオルギー賞（審査員特別賞）
「豚の反乱」
（監督ヤーク・クリミ、レネ・レイヌミャギ、エストニア）

○ 銀の聖ゲオルギー賞（最優秀監督賞）
ドミトリー・メスヒーエフ（「私たち」、ロシア）

○ 銀の聖ゲオルギー賞（最優秀女優賞）
ヒーナ・ゾリージャ
（「母との対話」、アルゼンチン＝スペイン）

○ 銀の聖ゲオルギー賞（最優秀男優賞）
ボグダン・ストゥプカ（「私たち」、ロシア）

○ 特別賞（コンスタンチン・スタニスラフスキー賞）
メリル・ストリープ（米）

○ 新人映画コンクール〈パースペクティヴ〉賞
「ホテル　ビーナス」（監督タカハタ秀太、日本）

○ FIPRESCI（国際映画批評家連盟）賞
「収穫のとき」（監督マリーナ・ラズベジキーナ、ロシア）

○ ロシア映画批評家賞
「収穫のとき」（同上）

○ 民衆賞（観客投票による）
「パパ」（監督ウラジミル・マシコフ、ロシア）

コラム

世界に広がる支持署名のキャンペーン

―モスクワ映画博物館の危機―

文と写真＝山田和夫

「映画は単にビジネスではない。それ以上のもの、芸術だ」の横断幕

モスクワの国立中央映画博物館が危機に直面している。同館が同居する「キノツェントル」(映画センター)ビルが、アレッキーノ・エンターテインメント・センターに売却されることが六月はじめに浮上、ちょうど第26回モスクワ国際映画祭会期と並行して、「映画博物館を救え！」の運動が盛り上がった。

　一九八六年、旧ソ連末期にソ連邦映画人同盟が宏壮な「キノツェントル」を建設、その一角に「映画博物館」が一九八八年に完成、エイゼンシュテイン研究の世界的権威で映画学者のナウーム・クレイマンが館長に就任した。一九九一年末、ソ連邦解体により映画人同盟はロシア連邦映画人同盟と映画人同盟連合(旧連邦加盟共和国の映画人同盟連合体)に分裂し、所有権争いがはじまる。と同時に「キノツェントル」ビルはレストランや映画館やカジノに切り売りされはじめた。その間「映画博物館」は二〇〇一年七月、国立中央映画博物館の地位をかろうじて獲得したが、それも昨今のモスクワ再開発ブームに押し流されようとしていて、先行き不透明。

　博物館には二つの展示場で貴重な映画資料の展覧会が行われ、チャップリン、エイゼンシュテイン、サタジット・レイ、マレーネ・ディートリッヒの名を冠した四つの映写ホール(七〇〜二〇〇席)で、ゴスフィルモフォンド(ロシア連邦国立映画保存所)や各国大使館の協力を得、多くの日本映画を含む内外新旧の重要作品を連日上映。ミハイル・ロンムやアンドレイ・タルコフスキー他、物故した映画人の書斎が再現され、多くの映画書、映画資料が大量に収集・保存されていて、内外映画人、映画愛好者のメッカ的存在だから、「映画博物館を救え！」の運動は立ちどころに、ネットを通じて若者たちの自主的な広がりとなった。運動の支持署名は三週間で七千名を超え、六月二十三日には映画祭会場前のプーシキン公園で数百人の抗議集会が開かれた。

　運動はすぐさま国際的な広がりを持ち、クエンティン・タランティーノやベルナルド・ベルトルッチ、アニエス・ヴァルダやアモス・ギタイ、クリス・マルケルや新藤兼人らのメッセージが寄せられた。活動家たちはそれにはげまされ、さらに大規模な集会を目ざし、プーチン大統領への陳情署名もはじめた。前記集会には世界的なアニメ作家ユーリー・ノルシュテインが参加、「映画を殺すな！」と雄弁を振るい、若者たちを感激させた。

　ロシア映画の現状と未来を同時に伝える大切な出来事である。

抗議集会でのユーリー・ノルシュテイン監督

（写真上）公式会見にて。会見で司会を担当した年配の男性が、「ホテル　ビーナス」を評して奥深い作品と感想を述べてくれたそう。（写真左）授賞式にてタカハタ監督の受賞スピーチ。

「ホテル　ビーナス」
タカハタ秀太監督　受賞インタビュー

モスクワの地で改めて感触を得た世界の人々に観てもらう喜び

取材・文＝石津文子

「モスクワ映画祭は意外と華やかだったんですよね。最初はすごく地味で質素だと聞いていたんですが、去年のVTRを見たら意外に派手で。実際に行ったら、やっぱり華やかでちょっとびっくりしました」

モスクワ国際映画祭パースペクティブ部門で、タカハタ秀太監督の「ホテル　ビーナス」が最優秀作品に選ばれた。パースペクティブ部門は今年から新設された、長編デビュー2作目までの監督作品を対象にしたコンペティション。同部門審査委員長アレクセイ・ウチーチェリの論評によれば、既成の枠にとらわれない才能の発掘を目的としたコンペの中でも、オリジナリティの高い撮影、編集と俳優の演技、そしてテーマ性が評価されたようだ。

「委員長によれば、審査員は一番最後に『ホテル～』を観たそうなんですが、普通、最後に観た作品は損なんですって。疲れているし、最終日の朝早い時間だし。でも観終わったときに、なんとなくお互い微笑んだらしいんですよ。なんの討論もなく決めたそうで、嬉しいですよね」

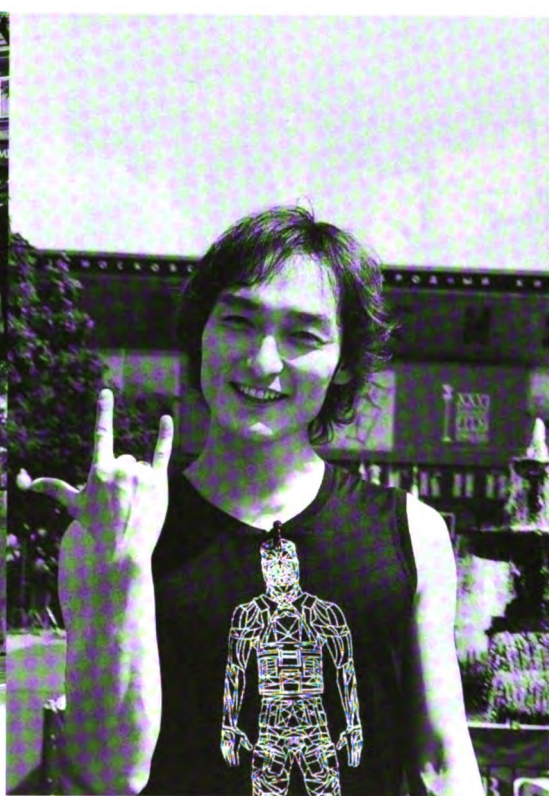
主演の草彅剛と共に出席した公式会見では、ロシア人記者からかなり突っ込んだ質問も受けた。

「チョナン（草彅）に対しては、日本のスターだということでその質問が多かったんだけど、僕に対してはある記者から『ゴーリキーの"どん底"を読んだ上での映画じゃないのか』と聞かれて、『読んでないですよ』って答えたんですけど、映画の内容については結構細かく聞いて下さいましたね。それと、足のカットが多かったことについても聞かれました。『僕は足に真実があると思って足のカットを多くしたんだ』って話をしたんですけど、"足にも真実がある"というような言葉がロシアにはあるらしいんです」

公式上映でも観客の反応の高さに驚いたという。

「終わったあと、15分くらい経ってもまだ涙ぐんでいる人もいて。すごく感激されていましたね。一応わかってくれたんだと。音楽もたくさん入ってるし、カットも速いのに、現地では年配の人が結構評価してくれたんです。どうしてなのか僕もまだピンとこない。海外の人から見れば、韓国語を喋ってることは関係ないし」

言葉の点でフィルターがかかってしまいがちな日本人よりも、ロシアの観客の方が素直に観ることができたのだろうし、舞台がウラジオストックであ

（写真右）映画祭メイン会場前にて。チョナン・カンボーズを決める草彅剛。ひと足先に帰国の途についた彼は、タカハタ監督からの電話で、モスクワ空港で受賞の報を聞いたという。（写真上）テレビ取材のクルーに囲まれる、ロシアでも大人気の草彅。上映会場では映画ファンたちからサイン攻め！（写真下）ブルーカーペットを歩き、授賞式に向かうタカハタ監督。

ることも、身近に感じられたのかもしれない。また、モスクワでは現在日本ブームの感があり、草彅には国営放送からも取材申し込みがあった。

「現地の人も、国営放送からインタビューがあるなんてほとんどあり得ない、すごいことだと言っていて。モスクワ全体が日本方向に目が向いてるんですよ。食事もそうでしたけど、文化面でも村上春樹の本がすごく売れていて、その日本からトップスターが来るということで話題にはなっていたみたいですね。『ホテル～』は無国籍な話で、日本的なところはほとんどないんですけどね」

　受賞はまったく期待しておらず、そのため授賞式でも緊張することはなかったそう。

「段取りを聞かされていなかったので、気づいたら授賞式が始まっていて、イザベル・アジャーニが紹介された。でも僕、アジャーニって人を知らなくって（笑）。それでいきなり、ノミネート作の紹介も何もなく名前を呼ばれたので、本当にびっくり。でも咄嗟だったから、何も考えずに前日の上映用に暗記したロシア語で挨拶したんです。もし事前に知らされてたら、すごく緊張したでしょうね」

　初参加の映画祭で存外の褒賞を手にした気分を、タカハタ監督は「パスポートを手に入れたよう」と表現した。

「参加するだけでよかったのが、賞をもらうとこうも違うかというか。獲った瞬間から後が全く予想してなかった展開だったので、そのことに本当にびっくりしてますね。以前、映画監督した気分をパスポートをもらったみたいと言ったんですけど、今回は本物のパスポートをもらった気分。この作品は海外を特別意識していたわけじゃないけれど、やっぱり今までの日本映画にないものを作ろうというのは根底にあった。だから、今後もそういう作り方をしていけば、海外でもどこかで引っかかったりするのかな、という気もしないでもないですね。賞狙いというわけではなく、海外の映画祭では違う文化の人に観てもらう喜びがあるので、コンペでなくてもいいから、これからも参加したいなと思いますね」

　世界への渡航証を手にし、大きな一歩を踏み出したタカハタ監督。受賞と、そこから広がる未来に心から祝福を贈りたい。

大高宏雄の ファイト シネクラブ
Hiroo Otaka Fight CineClub

Round 107 シネコン最前線を行く(1)

新しいシネコンの閲覧に、連続して行ってきた。シネプレックスわかば（埼玉県鶴ヶ島市、6月26日オープン）、ユナイテッド・シネマとしまえん（東京都練馬区、7月9日）、TOHOシネマズ高知（高知県高知市、7月17日）。神奈川県海老名市に、国内最初のシネコンがオープンしたのが、一九九三年。それから十年以上が過ぎ、シネコンはさらなる〝進化〟を遂げていた。

それら三館に、共通していたことがあった。劇場内に広がるロビーに、映画の宣材物、いわゆるスタンディ（立てかけ）、バナー（壁かけ）などが、全く見当たらなかったことだ。館内が、とにかく簡素化されていた。シネコンを含めた映画館には、館内に今後公開される作品の宣材物が置かれてあるのが普通。ここではそれらが、見事なまでに排除されていたのである。

ただよく見れば、これはとしまえんの例だが、入り口右側のガラス張りのショウウィンドーのようなスペースのなかに、「サンダーバード」の立体模型が、左側の同じスペースのなかに、「LOVERS」で使われた衣裳の数々が、それぞれ展示されていた。さらに、映画館の外壁には（ビルは四階建てで、映画館のみ）、「スパイダーマン2」の立体模型が飾られていた。

実は後で聞いたところによると、閲覧後のオープン時には、としまえん以外のシネコンでは、従来どおり宣材物がロビー内に置かれていたという。つまり、としまえんのみが、宣伝のデコレーション化を意図的に行っていた。館内のスタンディなどを排したこのようなデコレーションの形は、シネコンでの劇場宣伝のあり方が、大きく変わりつつあることを指し示す。

シネコン自体が、ひとつの宣伝の場としての役割を大きく担い始めたと言っていいだろう。シネコンには、大量に観客が集まる。まさにそこが、テレビや新聞のように、宣伝の大きな場として活用できるわけだ。としまえんは他館との差別化の意味からも、その意義を前面に出した。すでに米国では、こうしたシネコンでの宣伝のやり方は、有料化しているという。日本でも、いずれそうなる可能性があるかもしれない。

映画館における宣伝は、映画を恒常的に観ようとしている人たちに行うものだから、配給会社は今まで以上に力を入れ始めている。なかでも予告編は、人々の観に行く意欲を大きくあおる。だから、予告編上映の優先権をめぐっては、これまでも各配給会社がしのぎを削りあっていた。こうした事態のなか、宣材物の有効利用をめぐっても、新たな競争原理が生まれ始めたと言っていいだろう。

としまえんでは、オフィシャル・スポンサーとして、ある企業の名前が入っていた。これなど、シネコンが単なる宣伝の場から〝媒体〟への道を歩み始めていることをよく表わしている。観客側から言えば、いずれシネコンがサッカーや野球の球場に近いものになるのかもしれない。そのような、いわば未来型シネコンを指し示したのが、としまえんであった。

しかし翻って高知でのシネコンのオープンは、観客側にとっての大きな問題点だが、そこに横たわっていた。その詳細はまた次号で。

全国映画興行収入ランキングTOP10

日刊興行通信社調べ

今週	先週	タイトル	配給会社	公開日	公開週	上映館
7月1週目（3日・4日）						
1	1	ハリー・ポッターとアズカバンの囚人	ワーナー	6・26	2	丸の内ピカデリー1
1	2	デイ・アフター・トゥモロー	FOX	6・5	5	日劇1
1	2	世界の中心で、愛をさけぶ	東宝	5・8	9	日劇3
4	4	ブラザーフッド	UIP	6・26	2	日比谷スカラ座1
5	5	海猿　ウミザル	東宝	6・12	4	日劇2
6	6	トロイ	ワーナー	5・22	7	丸の内ルーブル
7	7	シルミド　SILMIDO	東映	6・5	5	丸の内東映
6	6	下妻物語	東宝	5・29	6	シャンテ・シネ
9	9	白いカラス	G／H	6・19	3	みゆき座
10	—	友引忌	松竹	7・3	1	シネマミラノ
7月2週目（10日・11日）						
1	1	ハリー・ポッターとアズカバンの囚人	ワーナー	6・26	3	丸の内ピカデリー1
2	—	スパイダマーン2	ソニー	7・10	1	日劇1
3	3	世界の中心で、愛をさけぶ	東宝	5・8	10	日比谷映画
4	2	デイ・アフター・トゥモロー	FOX	6・5	6	日劇3
5	—	69　sixty nine	東映	7・10	1	丸の内東映
6	5	海猿　ウミザル	東宝	6・12	5	日劇2
7	4	ブラザーフッド	UIP	6・26	3	日比谷スカラ座1
8	6	トロイ	ワーナー	5・22	8	丸の内ルーブル
9	—	ウォルター少年と、夏の休日	ヘラルド	7・10	1	丸の内ピカデリー2
10	9	白いカラス	G／H	6・19	4	みゆき座

かし、今や家族の共同体は崩壊しつつあり、食卓でも別々の物を食べることが珍しくない現在にあって、家族で映画を見に行っても、「ハリー・ポッター」「ポケモン」などそれぞれ入り口で分かれて数時間後に集合となるケースも珍しくないそうだ。映画自体に責任はないが、そんな時代の中で、この種類の映画は難しい。それにしても、いろいろ事情はあると思うが、強力作品がひしめく夏興行の中で、丸の内ピカデリー２系というブッキングはどうなんだろうか。

「69 sixty nine」は、個人的には大きな期待を寄せていた作品である。作品の評判も上々だったが、全国208スクリーンで公開され、まずまずのスタートとなった。まずまずというのは、東映の関係者によると、ローカルの反応がにぶく、いわゆる優等生タイプの若者しか動員していないためだとか。もう一回り大きなヒットにするには、普通の子に広がらなくてはという。主要８館で「凶気の桜」（興収６億円）の110％で、６～７億円が見込まれる。私は公開前に東映関係者に「渋谷の単館を頭にフリーブックの興行のほうがこの作品に相応しいのでは？」と話したら、なんとも複雑な表情が返ってきた。分かっていることを訊いてしまったのかもしれない。冒頭に書いた通り、150館くらいのフリーブッキングで10億円の興収が可能な時代である。実際渋谷東映だけがダントツにいいが、ほかがきびしい結果となった。

×　　×

夫婦50割引（どちらかが50歳以上なら夫婦で2000円）キャンペーンが７月１日から始まったが、シネコンでは抗議がチラホラ目立つという。というのも、入場の際にその割引きを知らずに一般料金を払い、劇場のＣＭでキャンペーンのことを知り、あとから申告してくる観客がわずかだがいるそうだ。既存館では、そのようなクレームはほとんど無いという。どうやらチケット売り場が大きいシネコンでは、キャンペーンの宣伝ポスターが目立たないらしい。しかしながら、それらは個々の劇場努力で乗り越えられることだろうし、なにより観客にとって絶対に良いサービスなのだから、当初は混乱もあると思うが、動員増のために継続させてほしいものである。　（掛尾良夫）

BOX OFFICE REPORT

日本 ボックスオフィスレポート

若い観客が支持する日本映画

かつて、プロデューサーの奥山和由氏による〈シネマ・ジャパネスク〉や仙頭武則氏による〈J・MOVIE・WARS〉といった日本映画を推進する試みが90年代初めから中頃になされたが、時期尚早だったのか、必ずしもうまくいったとは言えなかった。それから数年後、日本映画は確実に若い観客層に支持される作品が増えてきた。若い観客の求める映画が作られるようになったことと、興行形態がはるかに自由度を増したことが大きな理由であろう。それは「ウォーターボーイズ」(01／シャンテ・シネ系／9億2000万円)あたりから始まり、「ピンポン」(02／シネマライズ系／14億円)、「木更津キャッツアイ」(03／シネマライズ系／15億円)というように続いている。従来の洋画単館をチェーンマスターに全国150館ほどのブッキングでブロックブッキング以上の興行収入をあげるようになった。現在も**「下妻物語」**(シャンテ・シネ、シネクイント)が快走中で最終的に8億円くらいが見込めそうだ。かつてなら東宝系のシャンテとパルコのシネクイントの組み合わせは考えられなかったし、全国150という館数はちょっとした拡大興行だった。それが、都心の興行会社が組むことで作品の認知度をあげ、シネコンの普及で大きな館数を取れるようになり、その結果、中規模の作品が10億円以上の興収をあげることができるようになった。これは、確実に新たな観客の掘り起こしにつながっている。今年は、**「茶の味」**、**「誰も知らない」**、**「スイングガールズ」**など楽しみな作品が並んでいる。この欄でたびたび引き合いに出している韓国映画界が、外国映画に対して自国の映画のシェアを50%前後に維持しているのは、若い観客層が外国映画より自国の映画を好むのが大きな理由と言われている。日本も少しは改善しそうだ。

× ×

この夏の最大の期待作**「ハリー・ポッターとアズカバンの囚人」**は快調な興行を続け、公開10日間で興収44億円をあげ、最終的に150億円も見えてきそうだ。前号で、前作対比85%で149億円と書いたが、150億円をクリアするのはたいへんなことである。7月10日に、その「ハリー・ポッターとアズカバンの囚人」を追う対抗馬**「スパイダーマン2」**(ソニー／日劇1系)をはじめ、**「ウォルター少年と、夏の休日」**(日本ヘラルド／丸の内ピカデリー2系)、**「69 sixty nine」**(東映／東映邦画系)などが出ている。

前作の「スパイダーマン」は一昨年の5月11日から、全国503スクリーンで公開され、興収75億円をあげている。今回の**「スパイダーマン2」**は全国695スクリーンで、しかも夏休み公開だけにどこまで伸ばせるかが注目される。初日・2日目、全国動員79万7835人、興収10億8000万円強の数字をあげた。これは前作比109%である。今後の落ちを考えると、前作並から80億円以上まで伸ばせるかが第一目標となろう。今年の夏は「ハリー・ポッター」「スパイダーマン2」そして24日に公開となる**「シュレック2」**の3本合計で250～300億円の間に収まるのではと予想している。

「ウォルター少年と、夏の休日」はいわゆる堅調な、つまり静かなスタートとなった。父親のいない内気な少年が、たくましく生きる2人のじいさんと出会い成長する物語で、少年に「シックス・センス」「A.I.」のハーレイ・ジョエル・オスメント、じいさん二人にマイケル・ケインにロバート・デュヴァルという申し分のないキャスティング。かつては、子供が高学年になっても(中学1～2年くらいまでか)、親が子供に見せたい映画を選んで、家族そろって映画にいったものである。し

全米新作興行成績ランキング　6月25日～7月1日

■封切り日は「スパイダーマン２」"The Road to Love"は６月30日、他は全て６月25日。興収の(　)内は６月25日～６月27日の週末３日分

	タイトル	配給会社	興収　万ドル
	スパイダーマン２（サム・ライミ）	ソニー	6425.6 (――)
	きみに読む物語(仮題)（ニック・カサヴェテス）	ニュー・ライン	2131.1 (1346.5)
	トゥー・ブラザーズ（ジャン＝ジャック・アノー）	ユニバーサル	899.4 (614.4)
	Time of the Wolf（ミヒャエル・ハネケ）	パーム	1.3 (0.8)
	The Intended（クリスチャン・レヴリング）	ＩＦＣ	0.4 (0.2)
	ケイナ（クリス・デラポルト）	ＩＤＰ	0.3 (0.2)
	The Road to Love（レミ・ラング）	アラブ・フィルム・ディストリビューション	0.04 (――)

全米新作興行成績ランキング　7月2日～7月8日

■封切り日は「キング・アーサー」は７月７日、他は全て７月２日。興収の(　)内は７月２日～７月５日の週末４日分

	タイトル	配給会社	興収　万ドル
	キング・アーサー（アントワン・フークア）	ブエナ　ビスタ	843.0 (――)
	The Clearing（ピーター・ヤン・ブラッゲ）	フォックス・サーチライト	76.2 (62.2)
	De-Lovely（アーウィン・ウィンクラー）	ＭＧＭ／ＵＡ	50.9 (40.0)
	Before Sunset（リチャード・リンクレイター）	ワーナー・インディペンデント	40.0 (31.1)
	America's Heart and Soul（ルイス・シュワーツバーグ）	ブエナ　ビスタ	22.1 (18.5)
	Bonjour, Monsieur Shlomi（シェミ・ザーヒン）	ストランド	1.2 (0.9)
	Deserted Station（アリレザ・レジアン）	ファースト・ラン	0.2 (0.1)

Source : Nielsen EDI and Variety

30日　4044万ドル　　３日　3190万ドル
１日　2380万ドル　　４日　2108万ドル
２日　3074万ドル　　５日　3209万ドル

このうち封切り日の数字は、金曜日に登場したシリーズ前作の実績3940万ドルを上回ると同時に、水曜日登場の映画としては新記録になる。従来の最高記録は、昨年末の「ロード・オブ・ザ・リング／王の帰還」の3450万ドルであった。また、最初の週末３日間だけで１億ドル突破は達成できなかったものの、封切りからの６日間の合計１億8000万ドル余は、これまでには例のないハイ・ペースになる。

結局のところ、この週における「スパイダーマン２」の実績は、週末４日間で１億1582万ドル弱、１週間では１億4700万ドル余で、メガヒットは言うまでもなく、実に早々と２億ドルを超えているといった次第。

さらに「スパイダーマン２」は、このような興行上の成果だけではなく、批評家からも全員一致に近い好評を集めている。まるで一連の「ロード・オブ・ザ・リング」のようなのだが、映画芸術アカデミーの会員が「王の帰還」に向けたのと同じ敬意を抱くかどうか、これは分からない。

あるいは「スパイダーマン２」が、シリーズ前作の数字を凌ぐのも決して容易なこととは思えないが、とりあえず「シュレック２」は「スパイダーマン」の最終売り上げ４億0370万ドルをこの週末のうちに凌駕し、オールタイムでのランク第５位へと進出している。

ところで今週は、７日にデビューした「キング・アーサー」を別にすれば、他の作品は明らかに「スパイダーマン２」との正面衝突を避けるような控えめな公開規模でのスタートとなっている。それらのうちでは、ワーナーの、いわゆる特殊部門の配給機構ワーナー・インディペンデントの市場参入最初の作品となる"Before Sunset"（「恋人までの距離〈ディスタンス〉」の続編）が、批評家から高い評価を集めており、要注目と言えそうだ。

対照的に、大作として注目を集めていたが苦戦を強いられているのが、「キング・アーサー」である。「パイレーツ・オブ・カリビアン／呪われた海賊たち」から、ほぼ１年後に同じプロデューサーの作品として登場したものでもあるが、出足とすれば、今回の王様は去年の海賊の４割にも届かないといった具合である。

最後になったが、今週の市場全体の売り上げは３億0288万ドル余で、昨年同時期の２億3134万ドル余を大きく上回っている（週末については条件が違うので、今回は省かせていただいた）。夏のシーズンとしての興収も20億ドルを超え、とにかくトータルでは極めて順調である。

BOX OFFICE REPORT U.S.A. ボックスオフィスレポートU.S.A.——濱口幸一

今年最大のヒット作となるか？「スパイダーマン２」登場

［６月25日～７月１日］

別表のように、この週に登場した新作の中でのトップ(と同時に、市場全体のリーダーとも)なったのは「スパイダーマン２」なのだが、このマーヴル・コミックスからの映画化第２作については、次週分でまとめて報告とさせていただきたい。というのも、やはり今週の興行に関しては、まず「華氏911」について触れるべきと思えるからである。前号で既報のように、本作は23日にニューヨークの２館で公開され、大盛況のスタートとなったのだが、25日からは全国で868館という、ドキュメンタリーとしては空前の規模に拡大され、週末に関しては全体のトップになる大成果を挙げるに至った。具体的な数字は、ウィークエンドの３日間で2392万ドル余、１週間では3893万ドル余で、実に封切りから５日目に過ぎない27日の段階で、マイケル・ムーア自身の「ボウリング・フォー・コロンバイン」が持っていた、ドキュメンタリー作品としての興行記録を更新している。

もっとも単純な売上額の比較からすると、さすがに「華氏911」は、昨年同時期のトップ作品「チャーリーズ・エンジェル　フルスロットル」の実績(週末が3763万ドル余、１週間で5306万ドル弱)には及ばないのだが、このシリーズ作品は3459館でのスタートだったのだから、実際の劇場での言わば“動員の密度”は、「華氏911」が遥かに上なのは言うまでもないところである。

また週末の市場全体としての数字も“The Notebook”に「トゥー・ブラザーズ」という２本の一斉公開作品が存在する分、昨年同時期の数字を凌いでいる。すなわち、2003年が１億2234万ドル弱だったのに対して、今年は１億4897万ドル弱といった次第である。

一方、１週間の興収は、昨年の今頃が独立記念日に向けた「ターミネーター３」などの一斉公開作品３本を含む６本が封切られた結果としての２億2973万ドル余だったが、本年については２億8690万ドル弱。やはり「スパイダーマン２」の力は絶大で、この１本だけで去年の「ターミネーター３」を筆頭とする一斉公開作品３本の実績4782万ドル弱を凌いでいるのである。

なお一方で、今年最大のヒット作の座を「スパイダーマン２」と争うであろう「シュレック２」が、30日に合計興収４億ドルを突破している。

また興行の話題とは離れるが、アメリカ映画協会(ＭＰＡＡ)の会長を足掛け39年にわたって務めてきたジャック・ヴァレンティの引退が１日に正式発表され、後任には、元の民主党下院議員で農務長官でもあったダン・グリックマンが就任することも明らかにされている。

［７月２日～７月８日］

今年は、独立記念日の７月４日が日曜日と重なったために翌日の月曜も休日で、メモリアル・デーの時と同様に統計としては４日間の週末となっている。

さて、前週の30日にデビューした「スパイダーマン２」であるが、予想通りとも期待通りとも言える猛ダッシュを見せてくれた。封切りから、この週末までの大まかな成績は次のようになる。

「華氏911」

トピック・ジャーナル

川端靖男
指田　洋
鈴木　元

東宝本社ビル再開発計画と東京国際映画祭の新たな試み

日比谷映画劇場とみゆき座の閉館

A　今日は、東宝が6月29日に有楽町の本社ビル再開発計画を発表したニュースから始めよう。

B　1957年に完成した現在の本社ビルは、地下3階、地上9階建てで、演劇劇場の芸術座と映画館の日比谷映画、みゆき座が入っている。来年の4月から新ビルの建設工事が始まり、2007年11月に完成予定。地上19階で、上層階にホテルが、下層階には芸術座と同規模の演劇劇場が入る予定で、総予算は約50億円とのことだ。

A　10階以上がホテルになると発表されたけど、どうやらビジネスホテルになるようだね。

B　日比谷、有楽町界隈には、リーズナブルな価格のホテルがないんだ。逆に帝国ホテルのような高級ホテルはある。でもまさか終電を逃してそこに泊まる訳にもいかないもの。

C　うん、あの近辺で1万円弱のビジネスホテルができたら、タクシーで1万円以上掛かる郊外に家を持つビジネスマンにとっては非常に便利だろうな。

A　それで、肝心の東宝本社はどこに移るんだい。

B　シャンテ・ビルに入っていた日本生命が、今年の10月いっぱいで出るようだから、空いたオフィスが第一候補と言われているね。

C　ただ、そのシャンテ・ビルはパソコンなどを接続するLAN回線に対応してないようなんだ。そのための基礎工事が必要だそうだよ。

B　最近は、原稿などもメールで送る時代だからね。まあ、来年3月からシャンテ・ビルに入るとすれば数ヵ月の猶予があるんだから、試写室も含めて大きな工事が行われそうだね。

A　この新ビルの話で触れておきたいのは、演劇劇場の建設は決まっているが、日比谷映画、みゆき座が作られる予定はないということなんだ。この2館はいわゆる東宝洋画系のチェーン・マスターなのだけど、無くなるということなのかな。

B　うん。来年3月末で日比谷映画とみゆき座は閉館になる。今では、東宝洋画系のチェーン数が増えているから2系統を減らしたからといってそれほど支障は無いんだよ。劇場側も、逆に番組作りに苦労していた側面もあったからね。

C　それと、みゆき座で言えば、渋谷と新宿にはもうチェーンを組む劇場がなかったんだ。以前組んでいた渋谷エルミタージュは松竹・東急系に、新宿武蔵野館は単館系だけになっている。

B　かつてのように劇場の色で映画を観てもらう時代ではないんだよ。みゆき座だったら女性映画の殿堂と言われてプログラムにも劇場名が刻印されている時代があったけど、今は、お客さんが近所のシネコンに足を運んで、10本以上の中から観たいものを選ぶという時代に変わっている。

C　それに東宝の劇場で言えば、

有楽町の東宝本社ビル

シャンテ・シネがあって、スカラ座2もあって、ここをメイン館にして、全国100館くらいで公開するやりかたも見られるじゃないか。

A 「ウォーターボーイズ」なんかもそうやって全国に広がってヒットしたんだね。お客が入ると見れば、シネコンはスクリーンをどんどん広げるわけだ。

B 夜9時からは入場料金を下げている郊外のシネコンも多いから、平日の夜遅くの回は、家から近いシネコンで観るお客さんも増えているよ。銀座の稼働力がダウンしてきたといわれる大きな要因だね。

A シネコンで言えば、TOHOシネマズ川崎では、iモードFeliCaの携帯でチケットを購入して、劇場の発券機にタッチすると発券されるサービスが始まったようだし、近所のより利便性の高いシネコンにお客さんが流れてゆくのは世の理なんだろうね。

B ビデオやDVDのテレビサイズで映画を観るのに慣れている世代は、殊更大きいスクリーンには拘らないよ。

C でも、長らく慣れ親しんだ2つの劇場がなくなるのは寂しいね。

六本木ヒルズでのオープニング

A 次は開催概要が発表された第17回東京国際映画祭の話をしよう。今年は10月23日(土)から31日(日)の9日間。Bunkamura(渋谷区)と六本木ヒルズ(港区)の2つの場所がメイン会場となる。さらに大きな変化として、東京国際映画祭マーケットが発表されている。

B 幕張では『東京国際エンタテインメントマーケット2004』と銘打ち、映画やゲーム、アニメーションのコンテンツのマーケットが開催される。一般の入場もあるから、動員目標は5万人とのことだ。一方、六本木ヒルズでは『東京国際フィルム&コンテンツマーケット2004』が行われる。こちらは一般参加者を排除した純粋なバイヤーとバイヤーの取引所になるようだよ。

C 幕張は22日(金)から24日(日)の3日間、引き続き六本木も25日(月)から27日(水)の3日間になるんだけど、会場が分かれるのは不便だね。せめて都内の同一会場にするべきだったと思うんだけど。

A 都内でマーケットができる規模の場所が押さえられなかったから幕張に決めたようだね。でも、今年急にマーケットを行う必要があるのかな。

B このマーケットを発表したのが5月のカンヌ国際映画祭。だけど、そこから約5ヵ月間でどれだけのバイヤーを集められるんだろう? 正直1年間の準備やPR期間はあってもよかったんじゃないかな。

A もうひとつの変化である、新しい会場の六本木ヒルズについても触れておきたい。オープニングはヒルズの前に赤絨毯をひいて、セレブを歩かせるようなアイデアがあるようだね。

B ただ問題は、映画を上映するヴァージンシネマズ六本木ヒルズだよ。一番大きいスクリーンは別にして、それ以外のスクリーンにはいわゆる舞台挨拶をするスペースはないはずなんだ。つまり舞台自体がないんだね。まさか別の会場からスクリーンを使って中継するわけにもいかないだろうし。

A もちろん、カテゴリーによって会場は埋まっていくんだろうから、どうしてもBunkamuraのオーチャードホールは大きな招待作品、ヴァージンシネマズ六本木ヒルズはコンペやアジアの風などの作品が掛かるんだろうけど、実際のところ、東京国際映画祭の事務局はコンペティションをどう捉えているのかな?

B ずっと言われていることだけど、コンペティションがメインになるようでないと、国際映画祭として発展してゆかないと思うんだ。東京から新しい才能が見出されて、

TOHOシネマズ川崎での
携帯チケット発券デモンストレーション

トピック・ジャーナル
topic journal

東宝本社ビル再開発計画と東京国際映画祭の新たな試み

その後、その監督が世界から注目されるような流れが欲しいよね。そういう実績が積み重なって、世界の映画人がその映画祭を認めてゆくんだから。いくら11大映画祭といっても、それだけで認知されていると思ったら間違いなんじゃないかな。

C　何よりも日本の映画会社が、東京国際映画祭に出品することを目指して作ると聞いたことがないんだ。それが問題だと思う。つまり、先ほど挙がった映画祭の実績ということに帰結する問題なんじゃないかな。

A　角川歴彦氏がGPになって新しいことを始めたいという意志はいいと思うんだけど。

B　マスコミにPRする術はさすがだ。東京国際映画祭をいかに取り上げられるかはいろいろ考えている気はする。

C　今回発表された『黒澤明賞』もそうだね。世界的な活躍著しいプロデューサー、監督に贈られるということだけど。

B　大きな打ち上げ花火としてはいいんじゃないか。それにそういう才能を認めてゆくという姿勢を打ち出したというのは、映画や映画祭に対する前向きな志向だよ。

C　何か新しいことをやろうという姿勢は頼もしい。でもやはり日本を代表する映画祭として、東京国際映画祭に期待する部分が大きいから僕らも辛口になるのは仕方がないよ。開催まであと何度かマスコミへの発表が行われる予定だし、またこのページで話すべき時期がきたら取り上げるとしよう。

夏興行の行方と単館の話題作

A　では最後に、今夏の興行の話をしようか。ヒットシリーズの2大作品から。6月26日公開「ハリー・ポッターとアズカバンの囚人」（丸の内ピカデリー1系ほか拡大／WB）と7月10日公開「スパイダーマン2」（日劇1系／SPE）はどうだい？

B　「スパイダーマン2」は、先行を入れて公開6日間で17億8000円。60～70億円なりそうだ。

A　一昨年公開の前作が75億円だったが、普通パート2は80％みたいなことを言われる興行にあって、そこまでいけば十分じゃないかな。今回の映画はドラマも良くできていて、作品としての評判も高い。

B　アメリカでは公開8日間で2億ドルを突破、2億ドル突破の全米最短記録を作っているからね。

C　「ハリー・ポッターとアズカバンの囚人」は16日間で58億円。130～150億円は見えてきたね。

B　第1作「ハリー・ポッターと賢者の石」が220億円。前作「ハリー・ポッターと秘密の部屋」は173億円。そう考えれば、シリーズの流れに乗って堅い数字を出しそうだともいえるんじゃないか。

A　アメリカで大ヒットした、7月24日公開の「シュレック2」（日比谷スカラ座1系／UIP）はどうだい。実はこの夏興行に勢いが付くかどうかは前述の2つの大作とこの「シュレック2」にかかっているんじゃないかと思っているんだけど。

B　7月24日、25日の2日間で全国3億円弱。ただこのあと夏休みの家族連れも期待できるから、前作（22億5千万円）超えの25億円は目指したいところだろうね。

A　日本映画は？

B　7月17日公開「スチームボーイ」（東宝、東宝系）は9日間で4億4086万円。「イノセンス」（最終興収10億円）の118・2％だ。このままでいけば興収10億円を超えて15億円にどれだけ近づけるかというところじゃないかな。「AKIRA」の大友克洋監督最新作ということで、期待の1本だったんだけれども、「イノセンス」と同じく一般にはさほど広がらなかったのかな。

C　昨年東宝のラインナップに上がりながら公開延期になっているし、製作費は膨らんで直接製作費

「ハリー・ポッターとアズカバンの囚人」

24億円。製作側はもっと高い数字を目指しているはずなんだが。

B　でもまあ、この作品も「イノセンス」のようにDVD化されてから製作費回収という目論見があるはずだよ。根強いファンは多いからね。

A　同日公開「劇場版ポケットモンスター　アドバンスジェネレーション　烈空の訪問者デオキシス」(日劇3系／東宝)は?

B　9日間で13億5676万円。前作の98・5%だから、前作並みの45億円あたりに落ち着くんじゃないかな。

C　実は、ゲームボーイアドバンスのゲームに関連したオーロラチケット引換券付き特別前売券が4月17日から7月16日の間に162万5千枚を売り上げているんだ。ゲームとうまくリンクさせた前売券は、子どもの心にダイレクトに訴求するんだね。

A　単館系作品だけれども8月21日公開の「華氏911」(ギャガ＝博報堂DY＝日本ヘラルド配給)を取り上げておこう。恵比寿ガーデンシネマでは一週前の8月14日からの先行上映となる。

C　本当は正月公開予定だったんだけど、日本でのマイケル・ムーア報道の熱いうちに公開しようという目論見があるんだろう。

B　前作「ボウリング・フォー・コロンバイン」も恵比寿で23週の記録を作って単館系の大ヒット(恵比寿ガーデンのみ1億7324万円／全国興収5億円)を果たしたし、今回はどんな記録を作ってくれるのか。今年だと「パッション」(テアトルタイムズスクエア、ほか／日本ヘラルド)が作った10億円あたりが予測できうる範囲だけど、いい意味でそんな数字を遥かに超える大ヒットを期待したいね。

C　「踊る大捜査線　THE MOVIE2」「マトリックス　リローデッド」が牽引した昨年の数字には届かないけれど、今年も「ハリー・ポッターとアズカバンの囚人」「スパイダーマン2」はじめ、なかなか健闘している。「華氏911」のようなメッセージ色が強く興行的にも楽しみな作品も控えているし、オリンピックや猛暑を吹き飛ばすような活気ある興行を期待したいな。

BOOK THEATER
本の映画館

国際シンポジウム 小津安二郎 生誕100年記念「OZU 2003」の記録

蓮實重彦、山根貞男、吉田喜重 編著

朝日新聞社刊 1365円（税込）

review

監督たちが語る それぞれの 小津安二郎

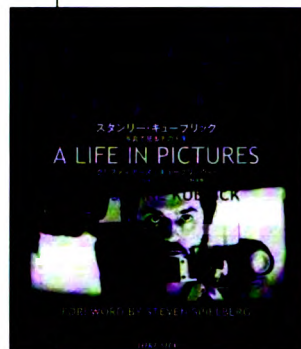
高崎俊夫

昨年、小津安二郎の生誕百年を記念して行われたシンポジウム「OZU 2003」を採録した本書は、この天才監督をめぐる言説がいかに多彩な表情をもっているかを実感させる。海外の批評家も何人か登場するが、やはり興味を惹くのは監督たちの言葉だ。日本側のシンポジウムは澤井信一郎、崔洋一、黒沢清、是枝裕和、青山真治というメンバーだが、世代によって断絶があらわになる。

たとえば澤井監督の「小津は、カットバックの単調さに怯え、絶望的な格闘の末に、逆目線による相似形に人物のカットバックを生み出したのではないか」という仮説は撮影所システムを知っている世代らしい卓見だと思う。

いっぽう黒沢監督以下の世代になると、81年のフィルムセンターの大特集とその直後に出た蓮實重彦の『監督　小津安二郎』によってイニシエーションに近い強烈な小津体験を被っている。黒沢監督が率直に語っている、当時、8ミリの自主映画では、よく小津そっくりのまねをしたというエピソードは、この世代のフットワークのよさを感じさせる（そういえば、なぜ、このシンポジウムには小津のオマージュから出発した周防正行が不在なのだろうか）。

青山監督の「後輩の親友だった山中貞雄が、アメリカ映画を完璧に自家薬籠中のものにしたのに対し、小津はそれに失敗したのではないか」という発言はいかにもシネ・フィルらしいが、青山の「月の砂漠」で仮構された家族の〈虚ろさ〉が小津映画への彼自身のアンビバレントな想いの産物であることは疑い得ないだろう。青山に限らず、黒沢の「ニンゲン合格」でも是枝の「幻の光」でも、家族を描いた作品が、海外の映画祭ではかならず小津の影響を云々されるというのは、この世代を無意識のうちに侵している小津映画の異様な呪縛力を雄弁に物語っているようにも思えてならないのだ。

しかし本書の読みどころは、マヌエル・オリヴェイラが、「小津安二郎の反映画」で吉田喜重が指摘した「晩春」の笠智衆と原節子の親子が、ラスト近く、京都の旅館の一室に泊まる有名な場面に漂う、同衾とも近親相姦ともみまがう性的なイメージへの反証というか疑問を呈するくだりだろう。小津映画の中でももっとも謎めいた誘惑的で多義性をはらんだこのシーンをめぐってはもっと深く討議されてよかったし、当初予定されていたヴィクトル・エリセなら、どんなことを語っただろうと想像すると、あらためて彼の不在が残念でならない。

スタンリー・キューブリック 写真で見るその人生

クリスティアーヌ・キューブリック 編著　浜野保樹 訳

愛育社刊　1890円（税込）

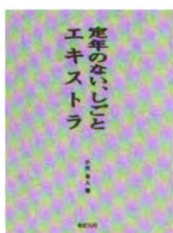
review

カメラを持つ男の一生にカメラで追る

森直人

「かつて私が言葉で伝えようとしたことは一度もない」。扉を開けるとそんな発言の引用が記してある本書は、故スタンリー・キューブリックの生涯を、言葉ではなく写真を中心に追った一冊である。キャプションは妻のクリスティアーヌ・キューブリックが手掛け、愛と尊敬にあふれた前書きをスティーヴン・スピルバーグが担当している。

「家族アルバム」とクリスティアーヌが称しているように、2歳の肖像（と当時のNYの街並み）から晩年まで、私的なスナップやポートレートが基本的に時間軸に沿って紹介されている。頭髪が薄くなっていく過程までわかる、まさに〝一生の記録〟なのだ。同時に、キューブリックが『ルック』誌のカメラマン時代などに撮った、モンゴメリー・クリフトやジャズマンやボクサーらの写真も収められているのが、また貴重。サングラスをかけていないテリー・サザーンの写真もある！（P101）。

「孤独な世捨て人」というキューブリックのパブリック・イメージを正すことがクリスティアーヌの目的だったらしい。確かに「撮る」ことに集中した人生の中での、家族や仲間とのリラックスした姿は、巨匠の知られざる等身大の魅力を伝えてくれる。説明する言葉より、画像が醸し出すオーラの方が正確な場合もあるのだ。自分の服装には全く無頓着だったというエピソードが、具体的に確認できてしまうのも可笑しい。

定年のない、しごと エキストラ

（小代浩人著／新紀元社刊／税込1365円）

「エキストラ道」なんて言葉はないが、エキストラという「しごと」への筆者の姿勢が爽やかだ。役者の邪魔になってはいけない、でも少しは画面に出たい。ニンマリしたり落ち込んだりしながら、ホームレスから社長まで演じてきた日々が綴られている好著。

韓国ドラマ・映画スター事情 ペ・ヨンジュン、ウォンビンに出会うソウルから

（舞かな子著／ブックマン社刊／税込1365円）

ペ・ヨンジュンをはじめとする韓国スターたちの知られざる情報が満載。宗教は？　学歴は？　出身地は？　他にも韓国の芸能事情（韓国で一番人気の韓国スターは？）やソウルの芸能人遭遇マップなど、興味深い内容ばかり。スターの写真もカラーで楽しめます。

ミニシアター　フライヤーコレクション

（ピエ・ブックス刊／税込3360円）

映画のチラシが捨てられない！　というチラシマニアに、心からオススメする一冊。美しい絵本や写真集のように、ミニシアターのフライヤーが並ぶ。ずっと眺めていたい一枚、そっとつぶやきたくなるキャッチ・コピー。あなたの思い出のチラシも、きっとあるはず。

映画がたたかうとき ー壊れゆく〈現代〉を見すえて

（木下昌明著／影書房刊／税込2310円）

泣いて笑ってハッピーエンド、そんな映画もいいけれど、時には映画館を出てからも、ずっと考え続けてしまうテーマをくれる映画に出会いたい。この本で筆者がとりあげるのは、人間や社会について、広く深く考えさせられる映画ばかり。観て、読んで、考えたい。

サントラ・ハウス
sound track house

賀来 タクト

丹下左膳 百万両の壺
♪大谷幸

7月14日発売／定価2800円
©ランブリング・レコーズ
RBCS-1082

著名なる山中貞雄監督作品をリメイクした人情時代劇。大谷幸としては「化粧師 Kewaishi」につながる古き日本を題材にした作品と一見映るが、果たしてそんな時代劇興味は冒頭から消し飛ばされる。

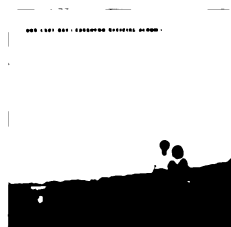
導入部、夜道で展開する殺陣の場面でまず流れたのは、スピーディなポップ感に彩られた楽曲だった。通常ならば、重苦しく斬り合いの殺伐を演出する采配が採られてもおかしくないところを、あまりに軽やかに大谷音楽は駆けていく。聞けば、監督からは参考用の楽曲としてヒップホップ風のレゲエ音楽を提示されたという。その要請に応えた素直な仕掛けともいえるが、およそ従来の時代劇の空気からかけ離れた音楽の在り方に面食らった向きは少なくないはずだ。

監督からの要望という一点において、本作品はどうしても異色の道を歩まざるを得ない運命にあった。いわく「音楽で泣かせたい、笑わせたい」と迫った津田豊滋の趣向は、大谷にもう一人の役者を演じる必要を説いたといってもいい。その後に展開する数々の喜劇場面、人情場面、そして決闘場面において、音楽の存在は前面に押し出されている。少しでも音に敏感な者ならば、そのいずれにも線の強い旋律が配され、耳に届く仕掛けになっていることに気づく。音楽の総量も明らかに多い。仕掛けの点では、金魚釣りに興じる源三郎が萩乃に見つかる場面が目を引くだろう。サスペンスフルな楽曲と喜劇風味の楽曲が場面の切り返しに合わせて交錯するここでは、津田の関西気風があふれる好例でもあるが、個人的にはやりすぎの感がどうしても拭えない。悪く言えば、押しつけがましくも見える。そこまで説明過剰であってよいものか、と。

果たして、そんなベタな采配こそを逆に聴きどころとすれば混乱を招くだろうか。実のところ、ここ最近の大谷といえば、どこか抑えを効かせることを主眼とした仕事が続いていた。それをあえて覆すかのような津田の要求は、大谷に戸惑いの消極面だけをもたらしたとは言い切れず、むしろ一種の開き直りにも似た陽性の娯楽性を呼び起こしたといえようか。先述の導入部に戻るなら、ヒップホップ調の現代大衆性の中にも、左膳の英雄色を無理なくにじませ、やがてアジア風味の旋律を重ねていくという具合である。アジア的異国情緒の盛り込みとは、まさに昨今、かの地への興味を募らせている作曲者ならではの現代意匠の表れであり、ノリノリの意気昂揚の証左であった。映像への掛け算を逆の采配で行ったことへの喜び、楽しみがここにある。いわば「踊り」である。それを知る面白さ。

電子音に弦、種々の木管、ギターを取り入れた大谷音楽は、しかし、冒頭のポップ感に酔っているだけではない。喜劇味を漂わせる一方で、長屋情緒をすくい取ろうとした詩的な響きも忘れなかった。さらには、左膳とお藤の関係をつづった浪漫も盛り込んで、実にカラフルこの上ない。そういった確かな情感演出への配慮を含め、実はこれが1週間程度の作曲期間しか得られなかった急場の仕事だったと知れば、その卓越した眼力と技術力に改めて驚かされるだろう。ギリギリの状況下で、監督の要望と自己の志向を一体化させた妙技は、あたかも隻眼剣士の刃筋のごとしである。

CASSHERN

♪鷺巣詩郎ほか

4月23日発売／定価3500円
◎東芝EMI
TOCT-25301-2

70年代の人気テレビ・アニメーションを実写映画化したアクション。そのサウンドトラック・アルバムは一枚を「インスパイア盤」とした歌曲集、もう一枚を劇音楽集とするという贅沢な2枚組仕様となった。

歌曲集には10人のアーティストが名前を連ねる。既成の楽曲提供者として椎名林檎、MONDO GROSSO、HYDE、ACIDMAN、鬼束ちひろ、GLAY、書き下ろし楽曲提供者として宇多田ヒカル、TOWA TEI、THE BACK HORN、SS:STという顔ぶれである。監督の出自と交友関係がものを言った内容であり、商品力という点でも大きい。

劇音楽集には鷺巣詩郎による楽曲11曲と、権藤知彦、本田優一郎による追加楽曲3曲、締めて14曲、60分あまりの楽曲が収められる。打ち込み音に管弦楽をまぶした趣向で、デジタル＋レトロともいうべき作風に即した仕上がりといえようか。ギター、ドラムスを押し出した楽曲も頻繁に顔を出しており、先述のアーティストたちの歌曲に歩調をそろえている部分が見受けられる。もっとも、作品の情感部分を担うかのごときリリカルな旋律、音色が基調を成している部分は多く、男声ヴォーカル、女性合唱、あるいは弦、キーボードを駆使しての香り付けも忘れていない。概して、悲哀の名残が印象に深い内容であり、堅実な仕事になったといっていい。そういった鷺巣の努力をきちんとアルバム化している点において、2枚組ディスクの価値はこれまた大きいといえる。

デイ・アフター・トゥモロー

♪ハラルド・クローサー

6月5日発売／定価2625円
◎ジェネオン／ランブリング・レコーズ
GNCE-3014

氷河期到来を描いた天災パニック映画。久々にSF／ファンタジー分野への帰還を果たした監督のローランド・エメリッヒであるが、かつて蜜月を共にしたディヴィッド・アーノルドという盟友はもはやいない。新たに音楽を預けたのは、オーストリア出身のハラルド・クローサーであった。

エメリッヒのプロデュースのもと映画「13F」で同監督との邂逅を果たしたクローサーは、まず厚みのある弦で大作の雰囲気をものにする。最大時で100人を超えるそれは、豊かな抒情性を蓄えて、惨事の情景を荘重に彩っていく。旋律への確かな配慮は、先述の「13F」で既に明らかであったが、その才能の改めての確認を行う意味でも格好のサンプルとなった。

主題曲として提示される主導動機は劇中で幾度となく顔を出し、副主題の的確な配置もあって、情感面での失速感はない。管、打楽器への盛り込みも忘れられておらず、作品の重厚を演出する目的は見事に果たされている。ただ、華やかさという点では恐ろしくその場がなく、今時の派手で大がかりなアクション音楽を期待すると思わず凍り付くだろう。個人的には、そんな地味ながら一点を凝視したかのような楽曲の在り方に、70年代の同ジャンルの気分を見いだすこともでき、好感を抱くものである。

ディスクには、前島秀国による秀逸な解説書も封入されている。クローサーの音楽的背景、才能の方向性を知る上で、ぜひともご一読いただきたい。

キル・ビル Vol.2

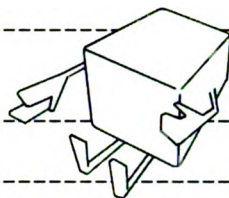
♪VARIOUS

4月14日発売／定価2520円
◎ワーナーミュージック・ジャパン
WPCR-11797

奇抜な復讐譚の第2弾は、またしても数多の既成曲によってドラマが埋められた。

作品の基調となるマカロニ・ウエスタン作品からはエンニオ・モリコーネ、ルイス・バカロフの楽曲が選ばれ、続いてシバリー、チャーリー・フェザース、ロレ・マヌエル、ジョニー・キャッシュ、マルコム・マクラーレンなどがディスクには並び、梶芽衣子の《怨み節》がラストを締める。劇音楽担当者のロバート・ロドリゲスとTHERZAの楽曲もそれぞれ1曲ずつ収録されている。総じて寄せ集めの感は否めないが、聴く分には楽しいだろう。

tele-jun

時評　石飛徳樹

「ウォーターボーイズ2」（フジテレビ系にて、毎週火曜日21時より放送）

連続ドラマにも地方の時代がやって来た

青春ドラマには地方都市がよく似合う。「アメリカン・グラフィティ」の昔から、洋の東西を問わず、そう決まっている。優れた青春ドラマの多くは、街が主人公と言ってもよいくらい、街の空気が画面から立ち上ってくる。

最近の日本映画のヒット作を見渡しても、「世界の中心で、愛をさけぶ」は香川県庵治町、「下妻物語」は茨城県下妻市、「69 sixty nine」は長崎県佐世保市、「チルソクの夏」は山口県下関市の風景に触れることなしには、その魅力を語れない。

ところが、テレビの連続ドラマには、地方都市を舞台にしたものが意外に少ない。『白線流し』『夏子の酒』など、数えるほどしかない。『俺たちの旅』の吉祥寺から『池袋ウエストゲートパーク』の池袋まで、私たちの記憶に残っている青春ドラマの舞台は東京とその近郊に集中している。

原作の空気を曲げてまで舞台を東京に移すこともある。83年に放送された大学生の群像劇『青が散る』は宮本輝の原作では、関西が舞台だった。ところが、テレビでは東京に変えられていた。原作は、大阪や神戸の街の空気を生き生きと伝えており、まさに街が主役の一角を担っていた。それだけにこの変更は残念で仕方がなかった。

連続ドラマの舞台が東京に集中するのは、一つには人気タレントを長期間、地方に拘束することができないという物理的な理由があろう。これは裏を返すと、人気タレントを使わなければ地方都市を舞台にすることができるわけだ。

昨夏、地方の進学校の男子シンクロを描いた『ウォーターボーイズ』がトップアイドルなしでスマッシュヒットを記録した。今夏は『ウォーターボーイズ2』と『世界の中心で、愛をさけぶ』の2本が地方の高校を舞台にしている。いよいよ連ドラの東京一極集中が緩和されつつある。

制作者が東京を舞台に設定したがるのはもう一つ、東京に住む視聴者が多いという理由もある。しかし考えてみれば、東京在住といっても、その多くは地方出身で占められている。『世界の中心～』の朔太郎のように、地方の高校を卒業し、進学か就職の際に上京してそのまま東京の住人になっているのだ。

私たちがドラマに感動する場合、そこには大抵、次の二つの要素のどちらかが存在する。未来への憧憬か過去への郷愁だ。例えば、『俺たちの旅』に憧れて吉祥寺で大学生活を送りたいと考えた地方の高校生がどれほどいたか。その逆、つまり東京に住む地方出身者たちが、あの日に戻りたいという気分になるのが『ウォーターボーイズ』『世界の中心～』である。

青春ドラマにはだからこそ地方都市が似合うのだ。

クリエイターズ・アイ　東 真司

三浦和義事件～もうひとつのロス疑惑の真実～

1981年にL.A.で強盗に銃撃されて妻を失った三浦和義は、多額の保険金を手にする。疑惑の目が向けられた三浦に、マスコミの取材が押し寄せ……。本人と関係者への詳細なリサーチに基づき、逮捕から無罪を勝ち取るまでの姿を再現。真実の三浦和義像に迫るドキュメントドラマ。
●2004年・1時間33分　●監督・企画／東真司　脚本／鵜飼桃蔵　制作／ヒューマンタッチ　●出演／高知東生、宝生舞、杉浦太陽、乱一世、螢雪次朗、村野武範
●製作・配給／三浦和義事件製作委員会
●8月8日までアップリンクファクトリーにて公開中
※GPミュージアムソフトより9月25日にDVDとビデオがリリース

「三浦和義事件～もうひとつのロス疑惑の真実～」

東真司（あずま・しんじ）
1960生まれ。80年に歌手デビューした後、テレビドラマや舞台で俳優としても活躍。OV監督、舞台演出、音楽プロデュースなどにも活動の場を広げるようになり、今回の「三浦和義事件～もうひとつのロス疑惑の真実～」で劇場映画監督デビュー。主な作品に、OV監督作「新ＯＬの性　人妻の性　淫らな５人の女たち」(01)「実録・事件 北海道「夫殺し」冷凍怪奇事件」(03)「実録・事件　青梅「姉妹」バラバラ殺人」(04)、テレビドラマ出演作「光戦隊マスクマン」(39話／87)「刑事追う」(18話／96)「ラーメン刑事「龍」の殺人捜査①」(00)、出演舞台「ミス・サイゴン」「ドンナ・ジョアンナ」「お気に召すまま」など。

あの「ロス疑惑」を映画化したい

あの「ロス疑惑」を映画化したい。ちょうど一年前の夏でした。

先ず本人に会ってみようと思い、三浦和義氏にオファーを出してみた。目の前に現れた彼は年こそ取ったがまさにあの三浦和義氏だった。

……何だろう……変に緊張したことを僕は覚えている。話をしているうちに単に面白おかしく映画にしてはいけないなと感じたのである。

僕の感じたままの彼を描こう。確信できた。

今回は事件性を前面に出すのではなく、三浦和義そのものを描いて行くことで、今まで誰も知らない彼を描ける。作品の方向性がようやく決まった。

フリー監督である僕は企画も含め自ら動くしかなかった。彼の話を何度も聞いて脚本にする段階まで来た。

だが映画化するには当然予算も掛かる。この企画を買ってくれる処を探すことから始めなければならなかった。

プロデューサーとしての仕事から始まった。実録ものを2作品撮って来た事が多少の信頼にもなり何とか映画化できる所まで来た。

スタッフはいつも付き合ってくれる方々が集まってくれた。だが今回の第一の難関がキャスティングだった。この事件のことはみんな知っている。いいイメージの事件ではない。キャストが決まらない。スタッフのスケジュールもある。俳優とも何度も会い、ようやくキャストも決まったのが撮影のスケジュールぎりぎりだった。

撮影に入ると素晴らしいスタッフ、キャストのおかげで順調に進んだ。

今回の作品で難しかったのは、実際にあったことを描くという所だった。観客もこの事件のことは知っている。今まで報道されなかったこと、三浦氏があの当時どういう暮らしをしていたのか……、今回はそこに重点を置いて描いてみた。事実に忠実に乗っ取ったドラマとして仕上がっていると思う。

見所のひとつとしては逮捕後の三浦氏の様子。あまり報道されなかった獄中での暮らしぶり。最高裁無罪判決までの十数年、彼が何をしていたのか……。また、映画全体を支える音楽も気にしてもらえると嬉しいですね。

作品作りって大変だけど止められない何かがあるんです。一度、僕の世界を覗いてみて下さい。

テレビ・トラベラー　樋口尚文

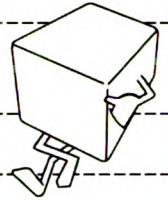
テレビドラマ版『世界の中心で、愛をさけぶ』（ＴＢＳ系にて、毎週金曜22時より放送中）

⑮③批評性のなさと口当たりのよさと

　原作小説が書籍の売り上げレコードを更新したのにとどまらず、映画版の「世界の中心で、愛をさけぶ」が歴代興行記録の十指に入るヒットを弾き出したというのはいささか謎であった。

　私はそもそも映画版にはさして関心を持っていなかったが、この桁外れの動員数を聞いて、いったい今時の観客がどんなものを面白がっているのか、それが知りたいが余りに木戸銭を払って覗いてみた。１３８分もの長尺を見終えた後、ぽかんとした。と言うのも、さっぱり泣かせて貰えないどころか、本作をどのように見ればいいのか途方に暮れたからだ。高校時代の淡い恋と傷ましい別離の記憶がとりついた三十代半ばの男が、現在の恋人の助力を得ながら、強烈な過去の呪縛から解放されてゆく、その物語自体は判らなくもない。が、映画版で現在の男に扮する大沢たかおが精神的に成熟していないほどほどに感傷的な甘チャンとしか映らないので、彼に引っ張りまわされる現在の恋人の柴咲コウまで、自立していない男に好んで翻弄される物好きな女性というふうに見えてしまう。これに対して、長澤まさみと森山未來が好演する回想の部分が素直に魅力的に出来ているので、この違和はいよいよ増幅されるのだった。

　このちぐはぐさを生んでいるのは、作り手の、人物に対する批評性が希薄だからだろう。追憶に縛られた人物を、作り手が同期しながらセンチメンタルになって描いても表現にはならない。行定勲監督は、この主人公・朔太郎のだめさ加減を批評的にとらえるのではなく、共に過去を耽溺するかの如くで、故・篠田昇の映像はそのナルシスティックぶりに輪をかけている。過去に生きる人物と言えば「アデルの恋の物語」(75)を思い出すが、トリュフォーにその耽溺の甘さはなく、アデルを怜悧に突き放して眺めることで、過去に生きることの凄惨を描き出していた。もっとも、過去と現在にみっともないくらいに引き裂かれている主人公など多くの観客の見たいものではないわけで、過去に呪縛されたと言っても一向に鬼気迫って来ない作り手の甘さ、薄さが今時の若い観客たちにとってもオン・デマンドなものなのだろう。

　その点、ＴＢＳの金曜ドラマ枠に繰り出したドラマ版は、やはり綾瀬はるかと山田孝之の若年コンビのパーツに好感が持てるとともに、朔太郎の緒形直人が大沢たかおよりもぐっとぼろぼろの壊れ具合で、今後の展開がどうなるかは判らないが、現在のところは映画よりもずっと得心のゆく人物造形になっている。そのほか、過剰な郷愁の意匠が施されていない点でも、ドラマ版には、ある種健康な批評性が感じられるのだが。

tele-jun

海外ドラマ・ウォッチ　池田敏

「Angels in America」（日本未放送）

第56回エミー賞ノミネーション発表！

今年は9月19日（現地時間）に主要部門が発表される第56回エミー賞。そのノミネーションが7月15日に発表された。保守的という声が多いエミー賞とあって、昨年に引き続いての候補が多いが、一部の新顔が波乱を巻き起こしそうな気配もあって面白くなりそうだ。

最多ノミネート番組は、HBOが昨年12月に放送した、話題のミニ・シリーズ『Angels in America』（写真／日本未放送）。日本版も上演されたトニー・クシュナーの同名戯曲を、アル・パチーノ、メリル・ストリープ、エマ・トンプソンら、映画のような豪華キャストでTV化。結果、計21個のノミネートを受け、俳優方面の4部門だけでパチーノ、ストリープ、トンプソンを含む8人が候補に。本番での圧勝も確実か。

ノミネート数の二番手は、おなじみ『ザ・ソプラノズ　哀愁のマフィア』で、20個。対象となった第5シーズンに出演したスティーヴ・ブシェミも、助演男優賞にノミネートされている。

チャンネル別では『Angels in America』『ザ・ソプラノズ　哀愁のマフィア』『SEX AND THE CITY』のHBOが計124個のノミネート。第2位のNBCが65個だからやはり凄い数字である。

各分野の作品賞候補を見てみよう。ドラマ・シリーズ作品賞候補は『CSI：科学捜査班』『Joan of Aradia（原題）』『ザ・ソプラノズ』『24－TWENTY FOUR－』『ザ・ホワイトハウス』。4候補が昨年と同じだが、昨秋始まったばかりの『Joan of Arcadia』が入ったのは大健闘だろう。とはいえ最大の見どころは、『ザ・ホワイトハウス』の史上最多受賞＆連続最多受賞記録5回目を対抗馬『ザ・ソプラノズ』が阻止できるかだ。

コメディ・シリーズ作品賞候補は『Hey！レイモンド』『SEX AND THE CITY』『ふたりは友達！ウィル＆グレイス』『Curb Your Enthusiasm（原題）』『Arrested Development（原題）』で、『Arrested～』は初ノミネート（『フレンズ』が漏れたのは残念！）。だがこの部門、昨秋惜しくも急逝した『パパにはヒ・ミ・ツ』の故ジョン・リッターが主演男優賞にノミネートされたのはサプライズ！　また、『SEX AND THE CITY』の女優陣が初めて揃って4人ともノミネートされたのは嬉しい。

他、ミニシリーズ／TVムービー部門の俳優賞候補に、アントニオ・バンデラス、グレン・クローズ、ウィリアム・H・メイシー、ジュリー・アンドリュース、アンジェリカ・ヒューストンなどがいたりで、今年も授賞式は華やかなビッグ・イヴェントになりそう。

授賞式は10月3日にCS＆CATVのAXNが、今年も日本独占中継する。

南の風と波

【放送日】8月14日
(61) 監督／橋本忍　出演／新珠三千代、夏木陽介、星由里子、西村晃

伊津子とその母

【放送日】8月28日
(54) 監督／丸山誠治　原作／由起しげ子　出演／水谷八重子、有馬稲子、三國連太郎

▶「婦人警察官」の再放送もあり

©東宝

新珠三千代

「南の風と波」

（写真・左）1930年奈良県生まれ。45年に宝塚歌劇団に入団、数々の舞台を踏み55年退団。日活に入社して、映画女優の道を歩む。

©東宝

有馬稲子

「伊津子とその母」

（写真・左）1934年大阪府生まれ。48年宝塚音楽学校に入校、翌年宝塚歌劇団に加わる。52年に退団ののち、53年に東宝の専属となる。

文・浦崎浩實

新珠三千代の美貌をどう表現したらいいだろう。

大分以前、「細うで繁盛記」の新珠三千代ファンだという郷ひろみと、彼女が〝ごひいき対面〟しているTVを偶然見たことがある。何となく居心地の悪そうな新珠。郷さんのような人は（男性として）魅力的ですか、とか何とか司会者から話を振られた新珠は明らかに返答に窮していた。

新珠三千代はその場限りのお愛想など言えない人なのだと、私は感銘に打たれた。「細うで〜」を遂に見ることのなかった私が言うのもおこがましいけれど、新珠三千代の美貌ほどTV的大衆性と無縁のものもなかったのでは？

大理石のようなひんやりした美貌。独特のエロキューション。大きく見開かれた瞳は理知が勝り、情熱は皮膚の下に厳かに鎮め込まれている感があって、映画の彼女の表情を思い浮かべると、私など自然に顔がゆるんでしまう。

「南の風と波」は高知のはずれの貧しい漁村を舞台にした群像劇。東宝の〝規格〟外の冷厳なリアリズムに貫かれた超異色作だ。雇われ船長の夫（西村晃）の機帆船が遭難し、幼い子供たちも親類に預けなければ立ちゆかなくなる悲劇の未亡人を新珠は演じている。ラスト、浜辺で慣れない肉体労働をする彼女の肉体から、エロティシズムの芳香が放たれるのだった。

有馬稲子は、新珠の宝塚4年後輩。同じ花組に属し、有馬の男役、新珠の娘役で共演したこともあるようだ。

芸名の出典は例によって百人一首で、大弐三位（だいにのさんみ）（紫式部の娘）の「有馬山　猪名の篠原風吹けば　いでそよ人を忘れやはする」。養母（実父の姉）と彼女の母娘二代にわたる芸名なのである。

「伊津子とその母」は、映画出演9作目。母（先代・水谷八重子）と二人暮らしの彼女は、中村伸郎の経営する小出版社に勤務しているが、適齢期の彼女に叔母の沢村貞子が平田昭彦との縁談を持ってくる。それが壊れると、中村伸郎の甥・金子信雄が愛を告げ、中村＋坪内美子夫婦の仲人でまとまりそうになるが、有馬の家作である千石規子の家へ家賃の催促に金子と行ったところ、彼女の思いがけない身上が暴露され、また破談。三國連太郎の誠実さに魅かれながらも、いざとなると……。

むろん、ハッピーエンドで妹分的な青山京子（小林旭と結婚、引退）も初々しい。有馬稲子は華やかな雰囲気とは裏腹に、後年になるに従い、どこか不幸で、はかなげなヒロインに傾斜するところがあった。本作や「愛人」（53）など初期作品は、別の可能性を秘めているようで、観ながら感慨がわく。

すれすれ
【放送日】8月3日よる11時30分～
(60) 監督／瑞穂春海　原作／吉行淳之介　出演／川口浩、川崎敬三、弓恵子、宮川和子

帰って来た幽霊
【放送日】8月10日よる11：00～
(60) 監督／斎藤寅次郎　原作／下山隆夫　出演／アチャコ、浪花千栄子、柳家金語楼、田端義夫

勝負は夜つけろ
【放送日】8月17日よる11時30分～
(64) 監督／井上昭　原作／生島治郎　出演／田宮二郎、久保菜穂子、川津祐介、小沢栄太郎

現金の寝ごと
【放送日】8月24日深夜12：00～
(56) 監督／西村元男　出演／船越英二、近藤美恵子、伏見和子、星ひかる

白いジープのパトロール
【放送日】8月31日よる11時30分～
(58) 監督／竹谷豊一郎　原案／原田光夫　出演／石井竜一、仁木多鶴子、三益愛子、浜口喜博

▶「たそがれの東京タワー」「一夜の百万長者」「泣き笑い地獄極楽」「悪徳」の再放送もあり

「帰って来た幽霊」　©角川映画

「すれすれ」　©角川映画

「勝負は夜つけろ」　©角川映画

「現金の寝ごと」　©角川映画

「白いジープのパトロール」　©角川映画

発掘！お宝大映シネマ

火曜深夜

スカイパーフェクTV!日本映画専門チャンネル

文＝藤田真男

　この番組で毎月、名前も知らない監督の作品に出くわす。運と要領だけで映画を撮り続けた監督がいる一方で、無数の新人監督や監督になれなかった助監督が現れては消えていったのかと思うと、モノノアワレを覚える。

　僧侶でもあった瑞穂春海監督は戦後、要領よく各社を渡り歩き、映画作りよりも競輪、麻雀に熱中していたという。吉行淳之介の風俗小説を映画化した「すれすれ」(60)にも、あまりやる気は感じられないが、競輪場ロケだけは、しっかり用意されている。

　キャストは豪華だ。根は純情なドン・ファン青年に川口浩。共演は三宅邦子、中村伸郎、東野英治郎、岸田今日子ほか。小津安二郎監督「秋刀魚の味」(62)と同じ面々が、ただ事務的に画面を通過していく。やる気のある若い監督に撮らせれば、いくらでも面白くできただろうに。

　「帰って来た幽霊」(60)は斎藤寅次郎監督、アチャコ、浪花千栄子主演。ヒット作「お父さんはお人好し」(55)のトリオによる人情喜劇だ。一旗あげようと大陸に渡った男が15年ぶりに無一文で帰郷。が、再婚した妻は失明し、子供たちも父を覚えていない。

　白砂青松の瀬戸内の風景が美しい。アチャコの映画は今見て笑えるものではないが、こういう素朴な映画を日本人が楽しんでいた時代だからこそ、白砂青松の美しい自然が破壊されずに保たれていたのかとも思える。

　「勝負は夜つけろ」(64)は港神戸を舞台にした生島治郎原作のハードボイルド映画。演出はやや平板だが、主演の田宮二郎にいつもの力みがないのはいい。足が不自由な役なので、まさにケガの功名。名脇役・伊達三郎も登場。「台風クラブ」(84)で初めて伊達三郎を起用した相米慎二監督は、端役の伊達さんに最大級の敬意を払っていたが、相米さんも昔の大映映画をたくさん見ていたのだろうか。

　「現金(げんなま)の寝ごと」(56)は池上金男共同脚本の中編喜劇。富くじ（宝くじ）をネタにした落語の現代版みたいな話。

　「白いジープのパトロール」(58)は先月の佳作（今月再放送あり）「たそがれの東京タワー」(59)や「眠狂四郎」シリーズ(63～69)の星川清司脚本。パトカーの警官が、銀行強盗に拉致された恋人を救出するまでを、コミカルなタッチもまじえて描いた中編だ。

　夜の多摩川で強盗を追いつめると、ギター独奏（「アルハンブラの想い出」）が流れるのは「第三の男」(49)の影響か。無名の新人監督の工夫と努力がしのばれる。ニコライ堂の見える聖橋、九段の坂道など、人も車も少ないと東京もいいところだ。

DVD&VIDEO RELEASE

DVD&ビデオリリース

丸山尚輝&やまもとかほ

先取り情報

●東映ビデオ
9／21「いつかA列車に乗って」
●東宝ビデオ
9／25「ションヤンの酒家」「暁の脱走」「エスパイ」「名もなく貧しく美しく」「また逢う日まで」
●アートポート
8／27「アンデッド」
●ジェネオン　エンタテインメント
8／25「真実のマレーネ・ディートリッヒ　デラックス版」
●エスピーオー
9／3「純愛中毒　コレクターズBOX」
●ユニバーサル・ピクチャーズ・ジャパン
9／10「ギャザリング　デラックス版」
●日活
10／8「ポーリーヌ」
●松竹ビデオ
9／25「クイール」「花嫁はギャングスター」
●パラマウント　ホーム　エンタテインメント
9／17「スクール・オブ・ロック」
●角川映画
8／27「アルジャーノンに花束を」「女と男の名誉」「傷だらけの挽歌」「荒野のガンマン」「コッチおじさん」「最後の谷」「ザ・デイ・アフター」「ジュニア・ボナー　華麗なる挑戦」「シルクウッド」「スペースキャンプ」「太平洋の地獄」「泥棒野郎」「ひとりぼっちの青春」「フラミンゴキッド」「燃える戦場」

TOPICS

2枚組で3時間以上の特典！不朽の名作「アラジン」初DVD化

★ブエナ・ビスタ・ホーム・エンターテイメントがコンベンションを開催し、04年秋・冬のラインナップを発表した。アニメ作品の目玉は「アラジン」の初DVD化で、3時間以上の映像特典を収録した「スペシャル・エディション」が10／8に2940円で登場。同社では目標100万枚出荷に向け、様々なプロモーション活動を展開する。この他、9／15「イノセンス」はスタンダード版、こだわりのリミテッド版2種類、コレクターズBOX（予約締切8／10）の計4バージョンで発売。実写作品は9／3「ホーンテッドマンション特別版」、9／15「コールドマウンテン」（通常版とコレクターズ・エディションの2種類）、10／20「フォーチュン・クッキー　特別版」などが控える。
★人気の米テレビシリーズ「ロズウェル／星の恋人たち」（FOX）のDVD化を記念して、ヒロイン役のシリ・アップルビーが初来日した。7月7日の七夕にちなんで浴衣姿で登場、抽選で選ばれたラッキーなファンの声援に、笑顔で応えていた。また特別ゲストとして、ドラマの大ファンという眞鍋かをりが登場。
★「サッカー・ドッグ　ヨーロッパ選手権」「サッカー・ドッグ」「ビンゴ」の8／25DVD発売を記念して、ソニー・ピクチャーズ　エンタテインメントはドッグカーゴ付き自転車が当たるクイズキャンペーンを実施。詳細はhttp://www.sonypictures.jpにて。

ビデオレンタルランキングTOP20

［6月30日現在　月刊「ビデオ・インサイダー・ジャパン」より］

順位	前回	タイトル	発売元
1	初	踊る大捜査線　THE MOVIE 2	フジテレビ、INP
2	1	ラスト　サムライ	ワーナー
3	初	ファインディング・ニモ	ブエナ　ビスタ
4	初	アンダーワールド	ハピネット
5	初	踊る大捜査線　BAYSIDE SHAKEDOWN2	フジテレビ、INP
6	2	バッドボーイズ2バッド	ソニー
7	3	キル・ビル　Vol.1	ユニバーサル
8	5	木更津キャッツアイ　日本シリーズ	TBS
9	初	24-TWENTY FOUR-シーズンII vol.12	フォックス
10	10	g@me.	「g@me」製作委員会
11	初	花と蛇	東映ビデオ
12	6	陰陽師II	角川映画
13	初	24-TWENTY FOUR-シーズンII vol.11	フォックス
14	4	マトリックス　レボリューションズ	ワーナー
15	初	頭文字D 4th Stage VOL.1	トゥーマックス
16	6	座頭市	バンダイビジュアル
17	初	映画犬夜叉　天下覇道の剣	小学館
18	7	ティアーズ・オブ・ザ・サン	ソニー
19	50	コール	アートポート
20	13	S.W.A.T.	ソニー

月刊「ビデオ・インサイダー・ジャパン」（発行／ギャガ・クロスメディア・マーケティング）は、ビデオ販売店、レンタル店などで読まれている専門誌です。
お問い合わせは　03－3589－7636まで。

おすすめ新作DVD

丸山尚輝

DVD

VIDEO同時レンタル
ハピネット・ピクチャーズ
2002年・韓・115分
監督／ホン・サンス
出演／キム・サンギョン、チェ・サンミ、イェ・ジウォン、キム・ハクソン
★3990円

8.27S&R

気まぐれな唇

TURNING GATE

韓国映画の奥行きの深さに触れることが出来る作品

●「豚が井戸に落ちた日」のホン・サンス監督の長編第4作は、あてのない旅に出た男と、彼と行きずりの関係を持ったふたりの女が織りなすふたつの恋を通して、男女の恋愛観の相違を描出した作品だ。撮影当日分の台本のみを渡して役者から即興的な芝居を引き出し、順撮りしていったと言うサンス演出は、ひょうひょうとした中にも時々生々しさを感じさせ、観る者の心を揺さぶる。主演は、本作の演技が認められ、「殺人の追憶」に起用されたキム・サンギョン。彼と関係を持つ女性たちにチェ・サンミとイェ・ジウォン。

出演する筈だった映画を降ろされ、ぶらりと旅に出た俳優のギョンスは、旅先でふたりの女性と知り合う。ひとりは積極的にアプローチしてくるダンサーのミョンスク、もうひとりはミステリアスな魅力の人妻・ソニョン。彼女たちと一夜を共にした彼は、しかしそれぞれの関係に深く踏み込むことができず……。

DVD

ブラック・シティ～黒白森林～

黒白森林

トランスフォーマー
2003年・香・未公開・105分 監督／バリー・ウォン、マック・チーシン 出演／アンソニー・ウォン
★3990円
●刑事とマフィアの黒幕との戦いの裏には、ある秘密が隠されていた……。「ゴッド・ギャンブラー」シリーズで知られるバリー・ウォン監督によるアクション。

8.14S&R

DVD

ヴァキューミング

VACUUMING COMPLETELY NUDE IN PARADISE

VIDEO同時レンタル
クリエイティブアクザ
2002年・英・未公開・75分 監督／ダニー・ボイル 出演／ティモシー・スポール
★3990円
●「トレインスポッティング」のダニー・ボイル監督がメガホンを取った青春ドラマ。電気掃除機セールスマンたちが繰り広げる販売合戦。

8.6S&R

DVD

ジェームズ・キャメロンのタイタニックの秘密 3Dプレミアム版

GHOST OF THE ABYSS

ジェネオン エンタテインメント
2003年・米・92分
監督・出演／ジェームズ・キャメロン
★3990円
●ジェームズ・キャメロン監督が、海底に眠るタイタニック号を撮影したドキュメンタリー。メイキングなどの映像特典ほか、付属の特製メガネで楽しめる3Dの61分版も同時収録。

7.23S&R

DVD

オルガミ～罠

VIDEO同時発売
ポニーキャニオン
97年・韓・未公開・100分 監督／キム・ソンホン 出演／ユン・ソジョン
★3990円
●『冬のソナタ』のチェ・ジウが97年に出演したサイコ・サスペンス。理想の男性と結婚し幸せを手に入れたかにみえた新妻は、やがて夫と姑の関係に疑念を抱く。

8.18S&R

DVD

スウォーズマン 剣士列伝

笑傲江湖

ジェネオン エンタテインメント
90年・香・未公開・117分 監督／ツイ・ハーク、キン・フー 出演／サミュエル・ホイ ★3990円
●武術の秘伝"葵花宝典"書を巡る争奪戦を、ワイヤ・ワークによる派手なアクションで魅せる歴史活劇。予告編集、フォトギャラリーなどの映像特典付き。

8.6S

DVD

黄龍 イエロードラゴン

VIDEO同時発売
倉田プロモーション
2003年・日・98分
監督・脚本／鹿島勤 脚本／笠木望 脚本・出演／倉田保昭 出演／宮本真希、照英 ★5040円
●国際派俳優・倉田保昭と、「マトリックス」シリーズのアクション・チームがタッグを組んで贈るエンタテインメント活劇。

7.25S&R

★価格はすべて税込み。ただし、レンタルのみの場合は無表記。Sはセル、Rはレンタル、TFはテレビフィーチャー、OVはオリジナルビデオ。

DVD
ツインズ・エフェクト プレミアムエディション
千機變

VIDEO同時発売
ジェネオン エンタテインメント
2003年・香・107分
監督／ダンテ・ラム
出演／ジリアン・チョン、シャーリーン・チョイ ★3990円
●香港の人気アイドル・ユニット“Twins”主演のヴァンパイア・アクション。メイキング、インタビュー、プロモなどの映像特典付き。

8.25 S & R

DVD
ピンク・パンサー フィルム・コレクション

フォックス ホーム エンターテイメント
64年～・米・518分
監督／ブレイク・エドワーズ 出演／ピーター・セラーズ
★15540円
●ピーター・セラーズがクルーゾー警部に扮した人気シリーズ5作ほか、映像特典も収めるコレクション。尚、アニメーション2編も同時発売する。

8.20 S

DVD
かまち

VIDEO同時発売
「かまち」製作委員会
2004年・日・115分
監督／望月六郎 脚本／渡辺千明 出演／谷内伸也、大沢あかね ★3990円
●膨大な量の詩と絵を遺し、若くして逝ったカリスマ的少年・山田かまちの姿を描いた青春ドラマ。初日舞台挨拶風景などの映像特典付き。

8.18 S & R

DVD
飛ぶ教室
DAS FLIEGENDE KLASSENZIMMER

VIDEO同時レンタル
松竹ホームビデオ
2003年・独・114分
監督／トミー・ヴィガント 出演／ウルリヒ・ノエテン
★3990円
●エーリヒ・ケストナーの児童文学を映画化した、寄宿舎に暮らす5人の少年たちの友情ドラマ。スタッフ&キャスト紹介、オリジナル予告編の映像特典付き。

8.25 S & R

DVD
アメリカン・パロディ・シアター
AMAZON WOMEN ON THE MOON

ユニバーサル・ピクチャーズ・ジャパン
87年・米・未公開・85分 監督／ジョン・ランディスほか 出演／ロザンナ・アークエット ★1575円
●ジョン・ランディスほか、気鋭の監督が放つ全20話からなるオムニバス・ギャグコメディ。未使用シーン、NGシーンの映像特典付き。期間限定廉価セール！

8.25 S

DVD
シービスケット プレミアム・エディション
SEABISCUIT

VIDEO同時発売
ポニーキャニオン
2003年・米・141分
監督／ゲイリー・ロス
出演／トビー・マグワイア ★3990円
●大恐慌時代、人々に希望を与えた伝説のサラブレッドの活躍を綴る感動の実話。コメンタリーなど、約120分の特典映像付き。また、初回のみ豪華ブックレット&豪華外箱仕様。

8.18 S & R

DVD
ピーター・パン コレクターズ・エディション
PETER PAN

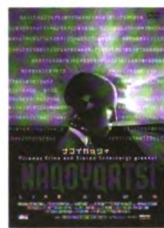
VIDEO同時レンタル
ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント
2003年・米・113分
監督／P・J・ホーガン 出演／ジェレミー・サンプター
★3990円
●最新のVFXで描く冒険ファンタジー。6.1chサラウンドEXの音響、もう一つのエンディングなど映像特典も盛りだくさんの内容。

8.25 S & R

DVD
クラシック・モンスターズ コレクション

ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント
43年～・英＝米・334分 監督／テレンス・フィッシャーほか
出演／ピーター・カッシングほか
★8379円
●“ハマー・フィルム”の4作品「フランケンシュタインの復讐」「吸血鬼蘇る」「恐怖」「ゾンビ襲来」を収めたBOX。3000セット限定生産。

8.25 S

DVD
ナコイカッツィ
NAQOYQATSI : LIFE AS WAR

東芝エンタテインメント
2002年・米・89分
監督／ゴッドフリー・レジオ ★4935円
●映像作家、G・レジオが、ヨーヨー・マの音楽をフィーチャーして贈る映像叙事詩。監督インタビューなどの映像特典付き。三部作「コヤニスカッツィ」「ポアカッツィ」を収録したBOXも同時発売。

8.18 S & R

DVD
ふくろう

VIDEO同時レンタル
日本ヘラルド映画
2004年・日・119分
監督・脚本／新藤兼人 出演／大竹しのぶ、伊藤歩 ★4935円
●精力的に作品を発表し続ける、現役最長老・新藤監督最新作。寂れた開拓村を舞台に、母娘の関係を毒っけたっぷりに描き出す。モスクワ国際映画祭主演女優賞受賞作。

8.25 S & R

DVD
サッカー・ドッグ ヨーロッパ選手権
SOCCER DOG : EUROPEAN CUP

ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント
2004年・米・未公開・94分 監督／サンディ・タン 出演／ジェイク・トーマス
★3990円
●サッカーが得意なスーパー・ドッグの活躍を描く「サッカー・ドッグ」シリーズ第2弾。未使用シーンなどの映像特典付き。第1作もDVD同時発売。

8.25 S & R

DVD
ドラムライン
DRUMLINE

VIDEO同時レンタル
フォックス ホーム エンターテイメント
2002年・米・119分
監督／チャールズ・ストーン三世 出演／ニック・キャノン、オーランド・ジョーンズ ★4179円
●スポーツ競技におけるもうひとつの闘い、マーチング・バンドにスポットを当てた異色の青春アクション！

8.20 S & R

おすすめ未公開作品 これだけは見逃すな！

丸山尚輝

DVD

VIDEO同時レンタル
ソニー・ピクチャーズエンタテインメント
2003年・米・未公開・121分
監督／マーティン・ブレスト
出演／ベン・アフレック、ジェニファー・ロペス、アル・パチーノ
★3990円

8.25 S & R

ジーリ
GIGLI

ラズベリー賞6部門も受賞した話題の大作!?

●かつて、熱愛カップルとして話題を振りまいたベン・アフレックとジェニファー・ロペスが共演、バカップルぶり……もとい、濃厚なラヴ・シーンを披露し、しかも第24回ラズベリー賞で6部門も総なめにしちゃった、噂のアクション・コメディ(悪意ないです)。監督は、「ジョー・ブラックをよろしく」のマーティン・ブレスト。1シーンずつの出演だが、クリストファー・ウォーケン、アル・パチーノというビッグ・ネームも登場している豪華作だ。オリジナル劇場予告編付き。

兄貴分のルイスに、知的障害を持つ少年・ブライアンを施設から誘拐するよう命じられた、犯罪組織の一員であるラリー・ジーリ。果たして、首尾良くブライアンを連れ出すことに成功した彼だったが、アパートにお目付役を名乗る謎のセクシー美女(しかしレズビアン)リッキーが現れたことから、3人での奇妙な共同生活が始まる……。

DVD

グッド・ガール
THE GOOD GIRL

VIDEO同時レンタル
パラマウント ホーム エンタテインメント
2002年・米＝独＝蘭・133分 監督／ミゲール・アテタ 出演／ジェニファー・アニストン ★4179円
●「デイ・アフター・トゥモロー」のジェイク・ギレンホール共演の女性ドラマ。別エンディング、NG集などの映像特典付き。

8.27 S & R

DVD

アドルフの画集
MAX

VIDEO同時発売
東芝エンタテインメント
2002年・ハンガリー＝加＝英・108分 監督／メノ・メイエス 出演／ジョン・キューザック ★3990円
●ヒトラーの知られざる若き日の姿を描いた人間ドラマ。メイキング＆インタビューなどの映像特典のほか、初回版のみデザインカード封入。

8.27 S & R

DVD

ブラザー・ベア
BROTHER BEAR

VIDEO同時発売
ブエナ・ビスタ・ホーム・エンターテイメント
2003年・米・85分
監督／アーロン・ブレイズ、ボブ・ウォーカー 声／ホアキン・フェニックス
★2940円
●ディズニー印の動物アニメ。NG集やゲーム、未公開シーン集などの映像特典満載。

8.25 S & R

DVD

ロスト・メモリーズ 特別版
2009 LOST MEMORIES

VIDEO同時レンタル
ワーナー・ホーム・ビデオ
2001年・韓＝日・136分 監督／イ・シミョン 出演／チャン・ドンゴン、仲村トオル ★3129円
●「ブラザーフッド」のチャン・ドンゴンと仲村トオルが共演するSFアクション。インタビュー、メイキングなどの映像特典付き。

8.27 S & R

DVD

エンド・オブ・ザ・ロード
異域之末路英雄

カルチュア・パブリッシャーズ
93年・香・未公開・88分 監督／チュー・インピン 出演／トニー・レオン
★3990円
●トニー・レオンが93年に主演した戦争ドラマ。第二次世界大戦下のビルマを舞台に、若き将校の運命を描く。共演にン・マンタ、ロザムンド・クワンら。

8.27 S

DVD

ペイチェック 消された記憶
PAYCHECK

VIDEO同時レンタル
ユニバーサル・ピクチャーズ・ジャパン
2003年・米・119分
監督／ジョン・ウー
出演／ベン・アフレック ★3990円
●ベン・アフレック主演によるノンストップSFアクション。スタント・シーンの舞台裏、もうひとつのエンディング、音声解説などなど特典も充実。

8.25 S & R

★価格はすべて税込み。ただし、レンタルのみの場合は無表記。Sはセル、Rはレンタル、TFはテレビフィーチャー、OVはオリジナルビデオ。

No. 145

キネ旬DVDコレクション

ゴールドディスク・コレクション 第2弾〈ウォー・ムービーズ〉

「戦場」

娯楽映画の枠組みの中で精一杯戦争に対峙する作品群

文・鬼塚大輔

戦争の真実に迫る作品たち

映画というメディアと戦争という蛮行には、切っても切れない腐れ縁のようなものがある。戦意昂揚映画も反戦映画も数限りなく作られてきたが、今回一挙発売となる5作品は映画／商業映画の枠組みの中で精一杯戦争の真実に迫ろうと努力し、しかもそのことに成功している異色作ばかりであり、どの作品も一見の価値がある。

「要塞」(70)ではロック・ハドソン扮するアメリカ兵がイタリアに潜入しダム爆破を試みる。と書くと、よくある内容の戦争映画のようだが、異色なのはレジスタンスへの見せしめとして家族を殺された子供たちが、ハドソンと共に銃を手にするという設定である。しかも、子供たちの健気さや可愛らしさだけを前面に押し出すのではなく、戦闘の中で狂気に蝕まれていくリーダー格の少年の姿もきちんと描き出しているので、『蠅の王』の趣さえあるのだ。

ダム爆破のスペクタクルの後、殺戮の道へと走っていこうとする少年をやさしく抱きしめ連れ戻すハドソンの表情は絶品だ。

アンドレ・ド・トス監督の「大侵略」(68)は若き日のマイケル・ケイン主演。砂漠を舞台にドイツ軍の石油備蓄基地爆破を狙うならず者部隊の活躍を描く。このならず者部隊が最初から捨て石として設定されているのが苦いところで、ラストの衝撃は久々に観返しても鮮烈であった。

上記二本は第二次大戦を背景としたものだが、「勝利なき戦い」(59)は朝鮮戦争が舞台。韓国映画「ブラザーフッド」において米軍の参戦は、ジェット戦闘機編隊のワン・ショットだけで処理されていたが、この作品では米軍対中国軍の壮絶な地上戦が描かれる。主演のグレゴリー・ペックを囲む男優陣がとにかく豪華で、リップ・トーン、ジョージ・ペパード、ロバート・ブレイク、マーティン・ランドーといった個性的な面々。中でも異国での大義なき戦いへの疑問を隠そうとしないウッディ・ストロードのクールな怒りが光る。

第一次大戦を背景に、実在のドイツ空軍エースの悲劇を描いたのが「レッド・バロン」。CGに頼らぬ空戦描写は、今になってみると貴重なものだ。

「戦場」が教えてくれること

今回の5作の中の目玉はテッド・ポスト監督の「戦場」である。ヴェトナム戦

ゴールドディスク・コレクション第2弾〈ウォー・ムービーズ〉

「要塞」
◎1970年・アメリカ・カラー・4:3ビスタサイズ・ドルビーデジタル・1時間50分
◎監督／フィル・カールソン
◎出演／ロック・ハドソン、シルヴァ・コシナ

「勝利なき戦い」
◎1959年・アメリカ・モノクロ・4:3ビスタサイズ・ドルビーデジタル・1時間37分
◎監督／ルイス・マイルストン
◎出演／グレゴリー・ペック、ハリー・ガーディノ

「戦場」
◎1977年・アメリカ・カラー・4:3ビスタサイズ・ドルビーデジタル・1時間54分
◎監督／テッド・ポスト
◎出演／バート・ランカスター、マーク・シンガー

「戦場」

「勝利なき戦い」

「レッド・バロン」

「大侵略」

「要塞」

争が本格化する以前、米軍が〝軍事顧問〟という名目で実際には参戦し始めていた60年代初頭を背景としている。バート・ランカスター扮する古参士官のもとに、新兵たちと新人下士官が送られてくる。まったく戦場を知らない彼らは、ベテラン兵士一名と共に寒村に要塞を作る任務に送り出されるが、そこでヴェトコンの激しい抵抗に遭う。戦闘経験がないため、次々と起こるトラブルに対処出来ずパニックを起こすだけの兵士たち。頼りになるベテランは積み重なってきたプレッシャーに耐えられず自殺してしまう。部下たちを救うために奔走するランカスターの前に立ちはだかる上層部の無理解と南ヴェトナム軍部の腐敗。

やっとの思いで救援に駆けつけるランカスターだが、部下の一人クレイグ・ワッソンはヴェトナム人の兵士と村人たちを見捨てて逃げることを拒否する。ある決断を下したランカスターを襲う過酷な運命、そしてワッソンが知らされる残酷な真実……。

「戦場」はヴェトナム・コミットメントが泥沼化する前の時点を描いた作品だが、泥沼化へと至る要因の数々を冷徹な目で描き出している。大国の傲慢、異国の文化への無理解、間違ったデータへの盲信……etc.

アメリカはヴェトナム戦争において、和平という名の敗北を喫した。イラク戦争では〝戦闘〟においては早々と圧倒的な勝利を収めたものの、戦闘終了後は混乱が続き、〝戦争〟そのものは泥沼化の様相を呈している。「戦場」で描き出された問題点が、恐ろしいことに四十年後の現在、そのまま繰り返されているのである。

カルト映画としての地位を得ていた「戦場」は、今まさにその重要性を増しているのだ。この作品が投げかけてくる問いへの答えは、いまだに与えられないままである。

今回の5作品は、すべてテレビ放映時の日本語吹き替え音声付き（テレビ放映のためにカットされた部分は字幕）。主に60年代から70年代に活躍していた実力派声優たちによる熱のこもった演技を〝聴いて〟いると、テレビ画面に釘付けとなっていた少年の日々が蘇ってくる。

「大侵略」
◎1968年・イギリス・カラー・16:9LBスコープサイズ・ドルビーデジタル・1時間54分
◎監督／アンドレ・ド・トス
◎出演／マイケル・ケイン、ナイジェル・グリーン

「レッド・バロン」
◎1971年・アメリカ・カラー・16:9LBビスタサイズ・ドルビーデジタル・1時間36分
◎監督／ロジャー・コーマン
◎出演／ジョン・フィリップ・ロー

◎映像特典：（各作品とも）テレビ放映時の日本語吹替版収録、スタッフ＆キャスト解説など
◎8月6日発売／各3990円（税込）
◎発売・販売元／日活

80日間世界一周

80日間世界一周

◎1956年・アメリカ・カラー・スコープサイズ（スクイーズ）・3時間2分
◎監督／マイケル・アンダーソン　製作／マイケル・トッド
◎出演／デイヴィッド・ニーヴン、カンティンフラス、シャーリー・マクレーン、ロバート・ニュートン
◎特典：ロバート・オズボーンによるイントロダクション、未公開シーン、スチールギャラリー、ドキュメンタリー（マイケル・トッドの世界）、ロサンゼルス・プレミア試写会、アカデミー賞授賞式など
◎8月6日発売／3129円（税込）
◎発売・販売元／ワーナー・ホーム・ビデオ

延べ80日間の旅をおよそ3時間で見せる大作

文・細越麟太郎

新開発された映写方式「トッド・AOシステム」

ハリウッド映画各社でワイドスクリーン・システムが定着すると、そのシステムを活かした本格的な企画が製作されて、1956年には大作がアカデミー各賞を競った。フォックスは従来のシネマスコープを55ミリ・フィルムで改良したミュージカル「王様と私」。パラマウントはセシル・B・デミル監督自らの入魂リメイクのオールスター大作「十戒」。ワーナーはエドナ・ファーバー女史の長編ベストセラーでジェームズ・ディーンの遺作「ジャイアンツ」。そしてこのトッド・AOシステムによる世界一周ロケーション大作「80日間世界一周」だ。

大方の予想では大河ドラマ「ジャイアンツ」がオスカー最有力候補と言われていたが、結果はこの「80日間世界一周」の勝利。これは意外だった。

三つの映写機で一気に上映していたシネラマ方式はスペクタキュラーな映像が魅力だったが、ドラマ構成の演出に無理があた。そこでひとつのレンズでシネラマ効果を出すために、マイケル・トッドが中心になって開発された新しい映写方式がトッド・AOシステムであり、この作品が試験的第一作だった。

したがって、俳優のクローズ・アップは避けて、広いワイドスクリーンを効果的な人物配置で見せる演出でドラマを構成し、美しい世界各地の名所めぐりをするロケーション本位の企画は魅力的だ。それが特に新鮮だったのだろう。

ワイドスクリーン作品としては初めてのオスカー受賞作品となったのである。

過去にビデオやレーザー・ディスクでの発売はあったが、画面のセンターだけを無謀にトリミングした映像には多くの不満があったので、今回のDVDでの完全なワイド・スクリーンの映像フレームは、ファンにはそれだけでも心弾むものがある。

監督のマイケル・アンダーソンは「クロスボー作戦」や「さらばベルリンの灯」などの監督だが、ジュール・ヴェルヌの原作のもつユーモラスなニュアンスを失うことなく淡々としたテンポで話を進めるリズムに好感が持てる。とくに映画の冒頭にジョルジュ・メリエスの歴史的名画「月世界旅行」（1902）が使用されているのが必見。

47名にものぼる カメオ・スターの競演

主演は「ピンクの豹」「ナバロンの要塞」などのデイヴィッド・ニーヴン。気品と不屈の気骨をユーモラスに演じるイギリス紳士に最高の適役だ。

そんな彼の忠実な召使いを演じるのはメキシコのコメディアン、カンティンフラス。何事にも動じない小マメなサポートに好感が持てる。

もともとロンドンの会員クラブで、つまらないホイスト・ゲームの最中に決まった80日間世界一周の賭けは、「将来は80時間でも、世界一周が出来る」と豪語した主人公のフィリアス・フォッグの冗談だった。しかしジュール・ヴェルヌの予想を超えて、現在では24時間で地球を一周できるわけで、科学の進歩は原作を超えている。その怪紳士フィリアスに不審を抱いて、追跡をする探偵を「宝島」「邪魔者は殺せ」などのロバート・ニュートンが演じているのが見逃せない。旅行の道中で異教徒の処刑の危機を救われた姫を演じるのは、新人のシャーリー・マクレーン。この作品で認められて「アパートの鍵貸します」のブレイクを誘った。特典の中で、シャーリーはカメオ出演しているマレーネ・ディートリッヒに、映画女優としての多くを学んだ、というが、生涯の親友となったフランク・シナトラとも、この映画の出演が出会いのチャンスとなった。

カメオ出演は、ひとつの人当てゲームのようなものだから、見てのお楽しみだが、それぞれにオチがついている。「カサブランカ」のピーター・ローレは客船のボーイをしているし、「失はれた地平線」のロナルド・コールマンはなぜかインドで鉄道官史をしている。バスター・キートンは列車の車掌という始末。

このキャスティングの妙が大いにファンを笑わせる仕掛けだ。そしてラストの6分にも及ぶソール・バスのデザインによるクレジットも圧巻。

とくに特典映像も豊富で、研究家ブライアン・シブリーによるマイケル・トッドの紹介は貴重だし、未公開だった「アウトテイク集」は、亡くなったトッドの未亡人エリザベス・テイラーが、このDVD発売のために秘蔵映像を提供している。

なお、11月6日にはジャッキー・チェン出演でリメイク版も公開される。

マレーネ・ディートリッヒ

フランク・シナトラ

No. 147 キネ旬DVDコレクション

ゼブラーマン プレミアムBOX

ゼブラーマン　プレミアムBOX

◎2004年・日本・カラー・16:9LBビスタサイズ・ドルビーサラウンド・1時間55分
◎監督／三池崇史　脚本／宮藤官九郎
◎出演／哀川翔、鈴木京香、渡部篤郎
◎映像特典：特報、劇場予告、TVスポット、初日舞台挨拶、ボーナスディスク収録インタビュー（三池崇史、宮藤官九郎、哀川翔、鈴木京香、渡部篤郎、大杉漣）、幻のTV版『ゼブラーマン』
◎封入特典：解体新書、ゼブラーマン大百科、2010年カレンダー、ボールペン、キャラクターシール、劇場使用35ｍｍ映画フィルム、テレビ版の主題歌ＣＤ、ピンバッジ、ボールペン、号外新聞など
◎発売中／8400円（通常版は4935円※すべて税込）
◎販売元／東映
◎発売元／東映ビデオ

遊び心満点の豪華特典付きプレミアムＢＯＸ

文・新田隆男

少年時代に見た子供向け番組に憧れていた冴えない小学校教師が、自らもまた、そのヒーローのようになる。教師が憧れていたヒーローは、低視聴率のため、たった七回で放送を打ち切られた番組『ゼブラーマン』。一応、変身ヒーロー番組のジャンルに入りながらも、主人公は『仮面ライダー』のような改造人間でも、『ウルトラマン』のような宇宙から来た使者でもなく、自らの肉体を鍛えて戦う男だった、という設定。かくして、主人公の小学校教師もまた地球に迫る危機のために、山籠りをしてトレーニングを積む羽目になる。この役柄に挑む哀川翔も、自ら白黒のゼブラーマン・コスチュームを身につけ、ほぼノースタントで挑戦。変身ヒーローでありながら変身しないゼブラーマンを目指す小学校教師も、スクリーン上に身一つで観客にゼブラーマンを信じさせようとする哀川翔もイコール、と考えれば、これは主演百本を記念した、哀川翔の感動的なライブ・フィルムとも言えるのだ。ちなみに、哀川翔の主演一作目は、東映Ｖシネマのレギュラーリリースの二本目（一本目は宮崎ますみ主演の「ブラック・プリンセス」）である「ネオチンピラ／鉄砲玉ぴゅ～」。以降、哀川翔は「とられてたまるか！」「極楽とんぼ」など東映Ｖシネマで幾多のヒット・シリーズを生み出

プレミアムBOXにはこれだけの封入特典がある

すが、十数年を経て、主演百本記念が全国東映邦画系で公開とは、粋な計らいをしてくれたものである。

哀川翔の資質に迫る充実のメイキング

ところで、今回のDVDには新作のお約束としてメイキングがついている。が、これがなかなか並みのメイキングではないのだ。本編がある種のライブ・フィルムであるわけだが、言うなれば、メイキングはもうひとつのドキュメンタリー。ライブ・ツアーに同行したスタッフが舞台裏を捉えた映像であり、これまたよくあるような番宣用のメイキングとは一味も二味も違っているのだ。

まずは衣裳合わせ。初めてゼブラーマンのコスチュームに身を包む哀川翔の姿はもちろんきっちり捉えられているが、さらにNGになったコスチュームを身に着ける場面も収録されている。これが見どころのひとつ。世の中にはカッコいいカッコよさと、カッコ悪いからこそカッコいい、という二種類のヒーローが存在しているが、哀川翔はそのどちらにも属さない。カッコ悪い状況でもカッコいい、という新たなオーラを発揮できるのでは、と思えてくる。「ネオチンピラ／鉄砲玉ぴゅ〜」で見せたチンピラのビビりと意地も、ゼブラーマン・コスチュームに身を包んだ姿も（NGゼブラーマン・コスチュームに身を包んだ姿でさえ）、カッコ悪い状況でさえ、カッコいいのだ。ジャージも似合うからカッコいいのではなく、ジャージをカッコよく着られるのが哀川翔の本質なのだ。ちなみに、それはゼブラーマン・コスチュームに身を包みながら、「どうよ」と言ってのける場面にしっかりと刻まれている。これ、本編以上に哀川翔の本質に迫る秀逸なメイキングでしょう。ノースタントでのアクション撮影、深夜に及んでも、「ひとつとして納得できないカットは残しちゃいけないんだ」と自分にダメだししていく姿、撮影を2日残しながら足を負傷、その足を引きずりながらクライマックスの撮影に臨む姿は、完全に劇中のゼブラーマンにダブる。単なる映像特典、という意味を超えて、もうひとつの「ゼブラーマン」といった趣だ。

メイキング映像

マニアックな遊び心に溢れた映像特典も！

三池崇史監督の資質的なものなのか、あるいは宮藤官九郎の脚本による部分なのか、特撮ヒーロー番組への思い入れ、フェチ度といったものは実はそれほど高くない（2010年に放送されているヒーロー番組『放射能戦隊アレクサンダー』やエイリアンの造型など、ギャグとして提出される部分に、無意識的な冷笑さが表れている気がする）。哀川翔ライブ・フィルムとして見た場合には気にならないが、ヒーロー映画論として見るなら、その部分に若干の味気なさを感じるのだが、特典類ではその部分のフォローが見事に効いている。

とくにすごいのは劇中で70年代に放送されていたとされるTVシリーズ『ゼブラーマン』の番宣をレトロな文字出しなど演出に工夫しながら再現しているあたり。架空の番組だから、ありえないはずなのだが、出演者のインタビューはもちろん、主題歌を歌った水木一郎（本人出演！）のインタビューまで収録されているのだ。どこでどうやって作り出したのか、どこぞのホールで行われている当時（ありえない！）のゼブラーマン・ショーを収録している遊び心も凄すぎ。いやあ、マニアックな遊びが横溢していて、楽しめます。

No. 148 キネ旬DVDコレクション

八月の濡れた砂

八月の濡れた砂

◎1971年・日本・カラー・16:9LBスコープサイズ・ドルビーデジタル（モノラル）・1時間31分
◎監督／藤田敏八
◎出演／村野武範、テレサ野田、地井武男、原田芳雄、渡辺文雄
◎特典：劇場予告編、秘蔵撮影スナップ、オーディオコメンタリー、サントラCD
◎8月6日発売／4935円（税込）
◎発売・販売元／日活

タランティーノもリスペクトする藤田敏八

文・磯田勉

藤田敏八の代表作、待望のDVDで登場

そのフィルモグラフィ中、これまで特に語られることなく、知る人ぞ知る存在だった藤田敏八監督の「修羅雪姫」（73）と「修羅雪姫 怨み恋唄」（74）が「キル・ビル Vol.1」（03）でリスペクトというかオマージュというか、まるでヘタなカヴァー曲のように堂々と引用されたのは痛快だった。監督の名すら知らなかったであろう若い世代にも十分浸透して、今や藤田作品で最も有名になったのかもしれない。それはそれで結構なことだが、当の藤田敏八当人は今頃、俳優としての出演作でいつも見せていたような、少し当惑気味のあの表情で、さぞや苦笑いしているのではないだろうか。ところで、当のタランティーノ自身は他の藤田作品を観たことがあるのか。松浦亜弥ならずともはっきりしてよね、と言いたくなるが、タランティーノさん以外も必見なのが、〈DIG THE NIPPON 70's グラフィティ〉の第2弾としてこのほどDVD化された「八月の濡れた砂」（71）。正真正銘、藤田の代表作と呼ぶにふさわしい傑作である。

ひと夏の海辺に展開する、普遍の青春ドラマ

冒頭、校庭から蹴りつけたサッカーボールが窓ガラスに吸い込まれ、砕け散った瞬間にタイトルが被さる、鮮やかなストップモーションのプロローグ。舞台はぎらつく太陽が眩しい、ひと夏の湘南。地元の少年ふたり組と東京から来た少女とその姉の四人の交流が綴られるが、連鎖的に語られるエピソードには一見、暴力

やセックスや自殺など、真夏の海に繰り広げられる青春映画にふさわしいお膳立てが用意されているように見えるが、その描写にはいささかも過激なところはない。

少女を犯した学生や母の愛人の放ったやくざとの喧嘩も、自分のせいで自殺したかもしれない同級生の少女の死も、母とその情夫に猟銃を突きつけてヨットを奪ったことも、陽光眩しいヨットの甲板で少女の姉を代わる代わる犯したことも、少年たちにとっては等し並み、退屈な日常を紛らわす遊びに過ぎない。彼らもまた、藤田繁矢名義のデビュー作「非行少年　陽の出の叫び」(67)以来の藤田映画の主人公の系譜に連なる遊戯精神の持ち主であるが、大人に対してつねに反抗的に振舞う不良少年の健一郎(村野武範)にしても、性への憧れと畏れを抱く親友の清(広瀬昌介)にしても、まだ自分が何者でもないことへの不安と苛立ちを覚え、その狭間で持て余し、燃焼できない「自己」を探しているだけなのだ。ヨットを奪った健一郎は「後悔するぞ!」と言われ、「ああ、後悔したいんだ。できりゃあな!」と言い放った台詞が胸を打つ。すべての感情と行動を遊戯としてしか表わしえない、アドレッセンスにある者の叫び。

だが、この遊びは伊達ではなく、いのち懸けの遊びである。少年たちの鬱屈はついに爆発することなく、陽光きらめく広大な海のなかに飲み込まれてゆく。そこには「野良猫ロック　ワイルド・ジャンボ」(70)や「同　暴走集団'71」(71)や「新宿アウトロー　ぶっ飛ばせ」(70)と同様に、死の影が見え隠れする。同じく湘南を舞台にした「太陽の季節」(56)と「狂った果実」(56)で幕を開けた日活青春映画は、事実上の旧日活体制における最終作であるこの映画において17年間の歴史に幕を降ろした。この映画の「不発」のエナジーは60年代末の学生運動の波が挫折し、時代の閉塞感を反映したものといわれてきたが、30年以上が経った今も、時代の空気とは別に普遍/不変の青春像として共感をもって受け止められる力を持っている。それこそ、「修羅雪姫」で初めて藤田敏八の名を知った若い人たちにも観てもらいたいと願う。

そして「八月の濡れた砂」といえば、あの石川セリの歌う同名の主題歌。今は亡き林美雄アナがラジオの深夜放送「パックイン・ミュージック」でヘヴィローテーションで流したことで知られたり、最近では藤田敏八も演出に参加したドキュメンタリー映画「にっぽん零年」が02年に劇場公開された際、60~70年代文化に惹かれるシンガー、渚ようこが歌ったカヴァーヴァージョンがエンドクレジットを飾ったことでも記憶に新しい名曲。このDVDには秘蔵の6ミリシネテープ音源からマスタリングを施したサントラCDを封入。気だるくも優しいセリの歌声による主題歌(レコードテイクとは別ヴァージョン)を含むBGMを収めている。また、村野武範と剛たつひと——この二人は翌年、テレビドラマ『飛び出せ!青春』で先生と生徒として共演しているのが愉快——によるオーディオコメンタリーも楽しい聞きものだ。

No. 149 キネ旬DVDコレクション

娘の結婚

娘の結婚

◎2003年・日本・カラー・スタンダードサイズ・ドルビーデジタル・1時間35分
(2003年12月14日　WOWOWハイビジョン放送)
◎監督／市川崑　脚本／小津安二郎、野田高梧
◎出演／鈴木京香、長塚京三、仲村トオル、緒川たまき、藤村志保
◎特典：予告編、メイキング
◎発売中／3990円（税込）
◎発売・販売元／松竹

小津安二郎生誕100年を記念して製作

文・黒田邦雄

市川崑監督は長い監督人生において、一貫して、何を語るかではなく、どう撮るかにこだわってきた。それを言い換えれば情緒に溺れないということで、言い切ってしまえば、素材は何だっていいのである。例えば、彼が映画化した小説の作家名を見ればいい。夏目漱石、泉鏡花、島崎藤村、谷崎潤一郎、川端康成、三島由紀夫、大岡昇平、石原慎太郎、深沢七郎、幸田文等々、明治の文豪から戦後文学の旗手まで、誰もが知っている作家名がずらりと並んでいるのだが、市川監督が特にこだわってこれらの作家をチョイスしたとはとても考えられない。脈絡が余りにもなさすぎるからだ。その時々のオファーに応えたにすぎないのだろうが、結果はいずれも、見事に市川作品として消化されている。文学的な情緒に惑わされず、どう撮るかだけにこだわることで、結果として原作をねじふせてしまうのである。

市川ワールドの華やかさ

小津安二郎監督の名作「晩春」をリメイクするというのは一般的には〝暴挙〟だが、市川監督となれば話は別。彼にとって小津作品のリメイクは、有名文学に挑むのと同じ好奇心のなせるわざだったのではなかろうか。つまり、「晩春」のストーリーを借りながら、いかに市川作品として成立させてしまうかという野心。「晩春」のシナリオを殆どそのまま使い、小津の有名なロー・アングルまで取り入れてなお、実に市川監督的な「晩春」を作り上げているの

である。記憶にあるシークエンス、耳覚えのあるセリフの連続であるにもかかわらず、観終わって残るのは小津作品の渋い余韻ではなく、市川ワールドの華やかさだ。

定年で現場を離れながらも仕事が忘れられないオートバイ設計士の父親（長塚京三）と、アルバイトをしながら父親と暮らしている三十前の娘（鈴木京香）。舞台が現代に移し変えられたため、「晩春」で笠智衆と原節子が演じた父娘より、ひとまわり若くなった感じである。五十六歳という設定ながら笠智衆はもはや男としては枯れた感じだったのに、それより年上という設定の長塚京三はまだ充分に男臭くて色気があり、この父親に娘が理想の男性像を重ねても納得できるものがある。京都の宿で父と娘がふとんを並べて寝るという有名なシークエンスがカットされているのも、長塚京三と鈴木京香では不倫カップルに見えてしまうからではないか。

あの時代とイマの時代の違い

父親の友人が再婚したことを知った原節子が、〝おじさま、不潔だわ〟と言うセリフがあるが、イマどきこんなことを言う娘はいまい。しかし、市川監督は鈴木京香にそっくりそのまま言わせている。当然、そのニュアンスは大いに違っていて、鈴木京香の場合、軽いからかいだろう。原節子の場合はもっと深刻で、戦後の男性主義社会の中で聖なる男性像を父親に求めざるを得なかった彼女にとって、再婚は男の身勝手な行為に他ならないのだ。男への不信が父親へのストイックな憧憬となり、その父親の再婚話に絶望してしまうという展開は、あの時代を無視して理解できまい。鈴木京香にはそういうこだわりがないから、結婚することの面倒くささや、男性に対する期待のなさが、父親と一緒にいたいという甘えになっているようだ。市川監督の演出はことさら新しいエピソードを付け加えることもなく、セリフも殆どそのままでありながら、「晩春」とは異なる父親と娘のありようをくっきりと浮かび上がらせているのだが、それは「晩春」に多くあった情緒たっぷりの風景カットを潔く捨て、市川監督らしい曖昧さのないドラマに仕上げているからだと思われる。当然、小津作品の深みはないが、余計な感情が入ってこないから、人物の腹を探る必要がなくなったのだ。笠智衆の思い入れたっぷりな〝うーむ〟や、原節子のモナリザ並の不可解な微笑もない「娘の結婚」は、実にあっけらかんとしているかわりに、老けていかない父親の若さに対する娘の戸惑いや、結婚をしなくても生きていける現代の女性像を浮かび上がらせて、同じシナリオでよくここまでイマ風に出来たものだと感心させられた。

俳優たちがいい。長塚京三と鈴木京香はイマの時代の人間らしい風情の中にどこか古めかしさも漂わせて、オツな味わいである。杉村春子が演じた父親の妹を藤村志保が演じているが、杉村ほど下世話にならず好演である。娘の親友役の緒川たまき、父親の部下役の仲村トオルなど、いずれも「晩春」の俳優陣にひけを取らない出来だ。特典映像のメイキングでは、市川演出でなかったら引き受けなかったという鈴木京香のコメントに納得した。

日本映画紹介

データ表記■製作会社／配給会社／封切日／C＝カラー、BW＝モノクロ、PC＝パートカラー（使用フィルム：F＝フジ、EK＝コダック、A＝アグファ）／BU＝ブローアップ／FR＝フィルムレコーディング、LC＝レーザーシネマ／S＝スタンダード、V＝ヴィスタ、EV＝ヨーロピアンヴィスタ、CS＝シネマスコープ／D＝ドルビー、DSR＝ドルビーSR、S＝ステレオ、M＝モノラル／上映時間／映倫指定／封切代表館／M＝モーニングショー、E＝イヴニングショー、L＝レイトショー

臨終

フューズビジュアル作品（制作＊ブロードバンドテレビ）／フューズビジュアル配給／04・1・17／C（DV・DLP）・16：9・S／92分／池袋シネマ・ロサ／L

スタッフ■監督＝旭正嗣（第一章）／巽祐一郎（第二章、第三章）　製作／企画＝吉田精二　プロデューサー＝赤田久巳　脚本＝立石俊二　撮影監督＝加藤孝信　照明応援＝酒匂正弘（第三章）　編集＝BBTV　録音＝近藤由佳　スタイリスト＝小倉久乃　音楽協力＝権代考人（第一章）　スチール＝石川登栂子　技術応援＝江沢崇　助監督＝谷洋平（第一章）／楠本直樹（第二章、第三章）　主題歌＝PENICILLIN「四次元ダイバー」

キャスト■「第一章　ラビリンス」桐子…熊田曜子　健一…加々美正史　石山裕三　宇田川憂香　鈴木拓実　「第二章　クロス・ラブ」カナ…上野未来　マモル／ユズル…吉永雄紀　杉澤祐子　「第三章　シンドローム」ユキ…今宿麻美　アキラ…高野八誠　マイ…遠藤みずき

解説■この世に想いを残す死者たちを描いた、3話オムニバスの悲恋ドラマ。監督は、第一章を『ザ・オークション　セリにかけられた女たち』の旭正嗣が、第二章と第三章を「D#1」の巽祐一郎が担当。脚本は「SEMI　鳴かない蝉」の立石俊二。撮影監督に「いじめる熟女たち　淫乱調教」の加藤孝信があたっている。第一章の主演は「流れくノ一伝説　天草四郎異聞　魔剣のお夕」の熊田曜子と加々美正史、第二章の主演は「黄昏流星群　同窓会星団」の上野未来と「1980」の吉永雄紀、第三章の主演は「blue」の今宿麻美と「新・影の軍団　第参章　地雷火」の高野八誠。

略筋■「第一章　ラビリンス」大学の友人やたったひとりの肉親である父親にまで無視され、淋しい日々を送る桐子。そんな彼女に声を掛けてくれたのは、幼なじみの健一だった。だが、やがて蘇る忌まわしい過去。実は、ふたりは幼い頃に公園の池に落ちた玩具を取ろうとして溺死していて、健一は今も現世を彷徨う桐子の魂をあの世へ導く為に現れたのであった。「第二章　クロス・ラブ」メル友のユズルが亡くなった。最後に彼が送って来た手紙の住所を頼りに、ユズルの住む田舎町へと出掛けたカナは、そこでマモルと言う青年と出会い、楽しい一時を過ごす。だが、実は彼はカナに会う為にこの世に戻ったユズルの幽霊だった。「第三章　シンドローム」病室で目覚めたユキ。過去のことを憶えていない彼女は、見舞いに訪れた恋人だと言うアキラと共に記憶を手繰り寄せるうち、彼女を恨んでいた親友・マイとマイの奸計に一枚噛んでいたアキラによって自殺に追い込まれ、病院に担ぎ込まれたことを想い出す。そんなユキに、今は愛していると言って詫びるアキラ。だが、彼女は彼を病室の窓から突き落としてしまう……とその時、復讐を果たした彼女自身もまた息を引き取るのだった。

ウィニング・パス
Winning Pass

映画「ウィニング・パス」製作委員会（イメージ・サテライト＝サクセス・ロード＝九州シネマ・アルチ）作品／イメージ・サテライト配給（配給協力＊ツイン）／04・1・24（03・11・15　福岡県・百道TNCシネマサロンパヴェリア）／C（HD・FR　F）・V・DSR／108分／恵比寿東京都写真美術館ホール

スタッフ■監督＝中田新一　映画「ウィニング・パス」製作委員会＝中橋真紀人／中田新一／吉村秀二　エグゼクティブプロデューサー＝中橋真紀人　プロデューサー＝佐々木文夫／中田新一　製作担当＝小野山哲史　原案＝三輪勝司　脚本＝矢城潤一／原田哲平　撮影＝今泉尚亮　照明＝白石成一　編集＝桐畑寛　録音＝深田晃　美術＝池田大威　衣裳＝矢内貴恵　音楽＝千住明　スチール＝小島浩　VE＝高橋善弥　VFXスーパーバイザー＝田中敦彦　VFXプロデューサー＝石川智太郎　音響効果＝岩丸恒　助監督＝山本保博　主題歌＝高橋洋子「僕はひとりじゃない」

キャスト■小林健太…松山ケンイチ　小林舞…堀北真希　太田香織…佐藤めぐみ　小林正…矢崎滋　小林智子…角替和枝　水越真由美…石井めぐみ　坂田一郎…ベンガル　焼うどん屋のおやじ…柄本明　林医師…加藤剛　バスケ部監督…寺島進　焼うどん屋の息

子…神戸浩 佐藤誠…三浦誠己 岡野…鈴木雄一郎 田中大輔…佐々木和徳 井上和也…久保山知洋 清水拓也…龍彌 白石裕一…加藤大治郎 悪ガキ…金尾直樹 三村洋子…緒方美穂 香織の母…斎藤深雪 校長先生…川口啓史 車椅子販売店・責任者…佐瀬雅彦 ヘッドコーチ…徳永祐政 山根…山見誠治 松谷…矢田成昭 若井看護士…村山夏香 松谷の妻…若葉要 マネージャー…原田佳奈 看護助手…小貫薫 本山看護士…石垣三代 3年1組…安部壮一／稲富諒／井筒拓哉／大木健司／太田克宜／甲斐寛和／北山裕二／久保雅輝／桑原正佳／後藤諒太／作田和己／柴尾大樹／武田卓也／田中健司／鶴島光哲／橋本宙樹／松元哲也／山下隼護／山本直也／吉岡三四郎／若間一樹／浅田依子／大久保里子／工藤友美／黒瀬小百合／小池絵奈／佐藤茜／高原直美／高見奏子／富岡優貴／鳥塚絢未／永井香菜／長田美咲／原沙織／藤田久美子／船田真由香／古島充乃／前元優子／松尾亜由美／増水亜由未／本嶋優紀／山下まり絵／山本衣織／横山温美／吉川幸子 生徒…井上紳弥／木下淳平／大山裕生／大山愛生／金梨華／脇園菜央美／佐藤由侑子／高田麻菜／江洲春菜／折戸沙耶佳／梶原麻美 劇団 青春座…江口之章／有馬多賀子／河野理子 車椅子バスケットボールメンバー…京谷和幸／高橋幸久／原隆広／眞十賢二／瓜生田昇／藤岡淳治／坂元繁／植木政利／竹藤八恵／大谷紘子／山本浩之／清山洋一郎／川島誉／山本将光／本田昌士／福地広和／宮平盛男／本多宇幸／松永真澄／渡邉祐一／江藤秀信／堀川裕二／市川浩／河野崇之／岩崎満男／清末智恵己／槙原史恭／織田俊幸／高橋繁／三浦良雄／白川長廣／本山真人／井上幸晴／金子幸博／真鍋厚毅／緒方誠／小林輝久／諏訪憲雄／山崎徳彦／堤宏二／氏岡磨香／堀川小百合／大塚よしたか

解説■事故で下半身不随となった高校生が、車椅子バスケとの出会いを通して再起していく姿を描いた青春ドラマ。監督は「チンパオ 陳宝的故事」の中田新一。三輪勝司による原案を基に、「6週間 プライヴェートモーメント」の矢城潤一と原田哲平が共同で脚本を執筆。撮影を「修羅のみち5 東北殺しの軍団」の今泉尚亮が担当している。主演は「偶然にも最悪な少年」の松山ケンイチ。第16回東京国際映画祭ニッポン・シネマ・フォーラム出品、北九州市制40周年記念、文化庁支援、文部科学省選定、厚生労働省推薦、写真美術館で観る映画シリーズvol.8作品。

略筋■NBAの選手を夢見る北九州市の高校生・健太は、ある日、バイク事故で下半身不随となり、車椅子での生活を余儀なくされる。現実を受け入れられず、一時は自殺も考えた健太。だが、車椅子バスケットと出会い、"北九イーグル"のメンバーとなってからは、明るさを取り戻し、厳しい練習にも打ち込むようになり、学校への復学も果たした。そして、全日本選手権九州予選に出場することになった彼は、恋人・香織が見守る中、その決勝戦で強豪"大分ロッキーズ"と息もつかせぬ攻防戦を展開。残り5秒で逆転シュートを放つ——が、惜しくもボールはゴールを逸れ、北九イーグルは敗退してしまう。しかしその時、健太は生きていることの素晴らしさを実感するのだった。

嗤う伊右衛門
Eternal Love

「嗤う伊右衛門」製作委員会（角川書店＝あすか企画＝レントラックジャパン＝IMAGICA＝ジャパン・デジタル・コンテンツ＝東宝）作品（製作賛助＊角川出版事業振興基金／制作＊トスカドメイン／制作協力＊松竹京都映画）／東宝配給／04・2・7／C（EK）・V・DD／128分／PG—12／新宿文化シネマ

スタッフ■監督＝蜷川幸雄 企画＝江川信也 エグゼクティブプロデューサー＝角川歴彦 プロデューサー＝中川好久／道祖土健／椿宜和／前田茂司 協力プロデューサー＝水野純一郎 制作担当＝黒田満重 原作＝京極夏彦 脚色＝筒井ともみ 撮影＝藤石修 照明＝渡辺三雄 編集＝川島章正 録音＝中村淳／湯脇房雄 美術＝中澤克巳 装飾＝中込秀志 衣裳＝松田和夫／鍛本美佐子／関口綾子 音楽＝宇崎竜童 音楽プロデューサー＝中西陽一郎 編曲＝中村哲／太田恵資／岡野等 スクリプター＝奥平治美 スチール＝桂秀也 スティディカム＝清久素延 B班撮影＝笠告誠一郎 VFXプロデューサー＝浅野秀二 デジタルイメージディレクター＝かとうよしひさ 3DCGデザイナー＝渡川豊也／植村文子／毛利裕一朗 音響効果＝柴崎憲治 特殊メイク＝江川悦子 造型＝江川悦子／神田文裕 殺陣＝久世浩 操演＝羽鳥博幸 助監督＝足立公良

キャスト■民谷（境野）伊右衛門…唐沢寿明 民谷岩…小雪 又市…香川照之 伊東喜兵衛…椎名桔平 直助…池内博之 民谷又左衛門…井川比佐志 針売りのお槇…藤村志保 宅悦…六平直政 西田尾扇…大門伍朗 秋山長右衛門…不破万作 梅…松尾玲央 余茂七…MAKOTO 利倉

屋…妹尾正文　堀口官蔵…新川将人　勇之介…月川勇気　袖…清水沙映　八丁堀…冨岡弘　伊右衛門の父…谷口高史　伊右衛門（少年時代）…濱口和之　勇家寛子　早乙女未来　山田陽一　大村隆春　榊原大介　梅千一　鎌田颯

解説■古典『四谷怪談』の主人公・伊右衛門と岩の物語を、ピュアなラヴ・ストーリーに置き換えて描く時代ドラマ。監督は「青の炎」の蜷川幸雄。京極夏彦による同名原作を基に、「阿修羅のごとく」の筒井ともみが脚色。撮影を「踊る大捜査線　BAYSIDE SHAKEDOWN 2」の藤石修が担当している。主演は、「青の炎」の唐沢寿明と「ラスト サムライ」の小雪。第16回東京国際映画祭特別招待作品。

略筋■民谷家に婿入りすることになった、嗤わぬ浪人・伊右衛門。妻の岩は、疱瘡を患い顔半面が崩れてはいたものの、卑屈なところの一切無い凛とした女だった。結婚した当初は様々な誤解から行き違いもあったが、ふたりは次第に深く愛し合うようになっていく。ところが、岩が発病する以前に彼女に袖にされたことを未だに恨みに思っている筆頭与力・伊東喜兵衛はそれが面白くなく、ふたりを巧みな奸計に陥れ、その仲を引き裂いてしまう。一年後、自分が身を引いたことで伊右衛門が幸せに暮らしていると信じていた岩は、実は彼が喜兵衛の愛人・梅とその子供を押しつけられ、不遇の暮らしを強いられていると知り愕然となる。全ては喜兵衛の謀。しかし、それを知った岩を喜兵衛は伊右衛門に斬るよう命じたのである。果たして、伊右衛門は岩を斬るも、彼女との愛を貫く為に喜兵衛に復讐すると、岩の亡骸の隣で自らの命も絶つのであった。

天国の本屋 恋火

松竹＝電通＝小学館＝衛星劇場＝S・D・P＝テレビ朝日提供作品（制作＊松竹映画製作室）／松竹配給／04・6・5（04・5・29 北海道・札幌シネマフロンティア）／C（F）・V・DD／111分／丸の内プラゼール

スタッフ■監督＝篠原哲雄　製作代表＝迫本淳一／森隆一／亀井修／石川富康／細野義朗／早河洋　製作＝久松猛朗　「天国の本屋～恋火」フィルムパートナーズ＝野田助嗣／伊東森人／千野毅彦／内藤和也／志村武彦／植田文郎／山根博行／牧野ひろみ／中澤裕行／庄野樹／石川和男／中川滋弘／溝口靖／小川義延／木村純一／松田佐栄子　企画／プロデュース＝宮島秀司　プロデューサー＝榎望／遠谷信幸　ラインプロデューサー＝斉藤朋彦／岩田均　プロデューサー補＝野地千秋　製作担当＝森太郎　配給＝北川淳一　原作＝松久淳／田中渉「天国の本屋」「天国の本屋　恋火」　脚色＝狗飼恭子／篠原哲雄　撮影＝上野彰吾　照明＝矢部一男　編集＝川瀬功　録音＝岸田和美　美術＝小澤秀高　装飾＝山本信毅　コスチューム＝石橋瑞枝／河原歩　音楽＝松任谷正隆　音楽プロデューサー＝小野寺重之　音楽編集＝浅梨なおこ　スクリプター＝西岡容子　スチール＝鈴木さゆり　花火スチール＝高橋聡　スティディカム＝千葉真一　ヴィジュアルエフェクト＝泉谷修　特殊視覚効果＝日本エフェクトセンター　デジタルエフェクト＝増田英和／今井元／鳴原譲　音響効果＝帆苅幸雄　助監督＝谷口正晃　主題歌＝松任谷由実「永遠が見える日」

キャスト■長瀬香夏子／桧山翔子…竹内結子　町山健太…玉山鉄二　ヤマキ…原田芳雄　瀧本…香川照之　由衣…香里奈　サトシ…新井浩文　マル…大倉孝二　千太郎…斉藤陽一郎　ヨネ…吉田日出子　太助…桜井センリ　桧山幸…香川京子　「天国の喫茶店」ママ…鰐淵晴子　西山…塩見三省　太田…根岸季衣　長瀬妙子…かとうかずこ　長瀬郁朗…あがた森魚　コンサート・マネージャー…斎藤歩　弦楽カルテット…宮内達哉／長谷川加奈／貞広典子／中村淳一　町山健太（子供時代）…久保海晴　長瀬香夏子（子供時代）…重田恵里　看護婦…猪股ユキ　山田…丸橋夏樹　薫…福谷充弥　「天国の卒業生」…水木薫　「天国の本屋」客…竹嶋康成／森下能幸　「不思議な公園楽団」…ロケット・マツ／川口義之／三上敏視／田口昌由　「天国の街の人々」…山岡一／佐々木美紅　花火大会関係者…高瀬理恵／三間弘美／黒岩茉由／嶋秀樹／東拓也／辻洋周／澤村和明／大池友佳／岸健介／細川泰史／濱道俊介／槇文彦／奈々葉／清水日由美子／古出朋妃／山崎大昇／吉田直子／吉田久／北脇一徹　花火大会観客…小林秀治／畠山直隆／斉藤ユキ／五十嵐和子／八ツ井光雄

解説■天国と地上を結ぶ愛の奇跡を描いたファンタジー。監督は「深呼吸の必要」の篠原哲雄。松久淳と田中渉による2篇の原作「天国の本屋」「天国の本屋　恋火」を基に、狗飼恭子と篠原監督が共同で脚色。撮影を「星に願いを。」の上野彰吾が担当している。主演は、「星に願いを。」の竹内結子と「eiko」の玉山鉄二。

略筋■楽団を解雇され、自暴自棄になっていたピアニストの健太。人材管理官を名乗る

ヤマキと言う男に連れられ、〝天国の本屋〟で短期アルバイトをすることになった彼は、そこで憧れのピアニスト・翔子と出会うが、彼女はある事故で片耳の聴覚を失い、以来、ピアノが弾けなくなっていた。一方その頃、地上では翔子の姪の香夏子が10年前に中止になっていた花火大会を復活させるべく、仲間たちと奮闘していた。しかし、その大会のフィナーレを飾ってきた、それを一緒に見ると男女が深い仲になれると言う伝説の〝恋する花火〟の花火師で、実は翔子の恋人だった瀧本は、暴発事故を起こし翔子の聴覚を奪ってしまったのをきっかけに、既に花火師を辞めていたのである。だが、香夏子は知っていた。叔母は、最期まで瀧本の花火が上がるのを楽しみにしていたことを。そこで、彼女は瀧本を説得しようと、彼のもとへ日参を続けた。同じ頃、翔子は途中で断念していた組曲を、健太の協力で完成させようとしていた。それは、毎年、瀧本の花火をモチーフに作り続けてきたもので、10曲になった時に結婚しようと誓い合っていたのだが、10回目の年、瀧本の花火は上がらず、翔子も病に倒れ他界してしまったのだった。花火大会の日。果たして、香夏子の想いが通じ、瀧本は恋する花火を打ち上げ、天国の翔子はそれを見ながら完成させた組曲を自ら弾くことが出来た。そして、地上では天国でのバイトを終えた健太が翔子の曲を演奏し、それを聞きつけた香夏子と共に恋する花火を見るのであった……。

蒸発旅日記

ワイズ出版作品（製作協力＊ぱる出版＝コスモマジックプロ＝喇嘛舎）／ワイズ出版配給／03・7・12／C（ヴァリカムHD24P・キネコ・）・V・M／83分／渋谷ユーロスペース

スタッフ■監督＝山田勇男 企画／プロデューサー／制作＝岡田博 ラインプロデューサー＝北川篤也 製作担当＝円尾敏郎 原作＝つげ義春「新版 貧困旅行記／蒸発旅日記」 脚色＝北里宇一郎／山田勇男 撮影監督＝白尾一博 照明＝宮下昇 編集＝斎藤禎久／白尾一博 録音＝鮎田秀彦 美術監督＝木村威夫 美術＝安宅紀史 装飾＝山下修治 衣裳＝小野明美 挿入曲／編曲＝CAMÉ／藤本和之 スクリプター＝工藤みずほ スチール＝首藤幹夫 音響効果＝帆刈幸雄 助監督＝森崎偏陸

キャスト■津部義男…銀座吟八 須藤静子…秋桜子 娘踊り子…藤繭ゑ 墓石を探す男…田村高廣 姐さん踊り子…清水ひとみ ベレー帽男…住吉正博 列車の娘…夕沈 列車の婦人…和田幾子 住職…和崎俊哉 列車の男…飯島大介／近藤京三 浴衣男…伊藤博幸／樫山圭 日傘の男…日野利彦 蓮池の女…石川真希 煙草売りの女／バナナのたたき売り（声）…稲川実代子 「新月」従業員…浜菜みやこ 「緑水荘」の娘…林裕子 「緑水荘」の若女将…松沢有紗 「カリガリ」ウェイトレス…木下真利 「新月」の少年…七海遥 紙風船少女…高野早苗 静子の弟…中川惠太 パチンコ婦人…五十嵐小夜子 捕物男…斉藤太郎／福田作男 岩風呂の声…桐山照子／桐山嘉守／岡田ふみゑ／滝口欣次／宮川とく代／宮川泰雄

解説■生活に行き詰まり蒸発した漫画家が旅する、迷宮のような世界を描いたドラマ。監督は「アンモナイトのささやきを聞いた」の山田勇男。つげ義春のエッセイ「貧困旅行記」の1篇を基に、「SIBERIAN EXPRESS 3」の北里宇一郎と山田監督が共同で脚色。撮影監督に「パルコフィクション」の白尾一博があたっている。主演は「浪人街」の銀座吟八。

略筋■日々の暮らしに行き詰まった漫画家・津部は、今の生活を変えたいと言う一心から、自分の作品の愛読者でありながら一面識もない静子と結婚しようと思い立ち、彼女のもとへと旅立った。静子は、津部の好みには合わなかった。だが、多少のことは我慢して結婚してしまおうと思った津部は、一週間後の再会を約束して、その間に小さな旅に出る。その旅で、彼は精神病院から抜け出した患者や先祖の墓石を探す老人、そしてストリッパーの娘と出会った。約束の日、津部は静子にプロポーズするが、東京でもう一度考え出直してくれと言われ、帰京する。

カクト

「カクト」製作委員会（バンダイビジュアル＝エンジンフィルム＝テレビマンユニオン＝シィースタイル＝IMAGICA）作品（制作＊テレビマンユニオン）／ザナドゥー配給／03・7・26／C（）・EV・／108分／R―15／渋谷シネ・アミューズ

スタッフ■監督＝伊勢谷友介 企画＝安田匡裕 プロデューサー＝是枝裕和 ラインプロデューサー＝田口聖 製作主任＝湊谷恭史 製作担当＝白石始 原案＝亀石太夏匡 脚本＝伊勢谷友介／亀石太夏匡 撮影＝伊藤寛 編集＝大水昌弘 録音＝鶴巻仁 アートディレクション＝カクト 美術＝磯見俊裕 音楽＝TUKe／es9／DJ Domino スチール＝若木信吾

助監督■武正晴
キャスト■リョウ…伊勢谷友介　ナオシ…伊藤淳史　マコト…高野八誠　真治…加瀬亮　中村…香川照之　手塚…寺島進　熱帯魚屋の女…桃生亜希子　イズミ…すほうれいこ　恭子…蓮見知香　ケイスケ…大塚朝之　山田…野村貴志　鉄平…鉄平　オレンジ…ORANG　梅沢…松沼礼　ミキオ…吉永雄紀　鈴木…亀石太夏匡　石崎…螢雪次朗　刑事…大久保運/田中要次/酒井晴人　ナオシの父親…鈴木一功　省吾…横尾省吾　ケン…七里謙一郎　喫茶店店長…橋沢進一　ウェイトレス…川村亜紀　コンビニ店員…井手大介　DJ…DJ Domino　クラブの女…まつゆう/ミズタマ/中島ちあき/椎名令恵　鈴木の先輩…有友正隆　真治の彼女…今村有希　少年…晋銭俊明/長者康之
解説■3人の大学生を中心に巻き起こる一夜の騒動を描いた青春群像劇。監督は、本作が初監督作品となる俳優・伊勢谷友介。脚本は、亀石太夏匡の原案を基に、伊勢谷監督と亀石自身が共同で執筆。撮影を「スワッピング・ナイト 危険な戯れ」の伊藤寛が担当している。主な出演は、「月に沈む」の伊勢谷友介と「新 刑事まつり 一発逆転/ルーキー刑事」の伊藤淳史、「新・影の軍団」の高野八誠、「帰ってきた刑事まつり/はぐれちゃった刑事」の加瀬亮、「刑務所の中 DOING TIME」の香川照之、「A SNAKE OF JUNE 六月の蛇」の寺島進ら。
略筋■これといった目的もなく単調な日々を送る大学生のリョウは、誕生日、彼女に裏切られたマコトと田舎から家出して来たナオシと酒を飲んでいるうち、知り合いのヤクザ・鈴木からドラッグを調達しようと繰り出した。ところが、受け取った筈のドラッグが見つからない。慌てた彼は、マコトとナオシと共に落としたドラッグを探して奔走するが、警察の手入れに巻き込まれ、夜の街を疾駆するハメに。明けて翌朝、なんとか逃げ延びることが出来た3人は、それぞれの居場所へと戻ると、少し前向きな人生を歩み始める。

八月のかりゆし

ギャガ・コミュニケーションズ■バップ作品(制作*ギャガ・コミュニケーションズ/制作協力*オフィス シー・エー プランニング)/ギャガ・コミュニケーションズ配給/03・8・2/C(HD・FR・HD—カム・DLP)・V・S/87分/テアトル池袋/L
スタッフ■監督■高橋巌　企画■宮下史之/大島満　企画協力■鴻池和彦　プロデューサー■公野勉/岡本東郎/水上繁雄/下地和成　共同プロデューサー■鈴木裕光/倉持健一/東田眞一　協力プロデューサー■黒田康太/梨木友徳　制作担当■熊木白仁　脚本■高木弓芽　撮影■岡雅一　照明■清野俊博　録音■鶴巻仁　美術■仲前智治　衣裳■清藤美香/松山さと子　音楽■斉藤和義　スチール■神谷智次郎　VE■矢部光宏　音響効果■伊藤瑞樹　助監督■冨永憲治
キャスト■テル…松田龍平　マレニ…末永遥　アキ…Tama　キジムナー…斉藤和義　チル…兼城道子　エイミ…きゃん ひとみ　ハユミ…仲田正江　柳口タダシ…嶋田久作　るいこ…匠ひびき　リウボウ…村山富市　マレビトの娘…北川えり　ライブハウスのバンド…バーシャクラブ　日本兵…近藤龍哉　アキ(少女時代)…上窪ちなみ　駐在…我那覇孝淳　アメリカ兵…Jay Winter　店員…熊本保美子供…上原佑紀/宮城幸治　テル(少年時代)…金城飛鳥　おじい…熊本進　おばあ…熊本ウメ　少年(リウボウの回想)…熊本譲　少女(リウボウの回想)…高良希美　マレニの同級生…荻堂華花/玉城美咲
解説■沖縄を舞台に、霊能師の少女と従兄である高校生が体験する、魂の旅を描いたファンタジー。監督は「infinity∞ 波の上の甲虫」の高橋巌。脚本は「infinity∞ 波の上の甲虫」の高木弓芽。撮影を「19」の岡雅一が担当している。主演は、「ナイン・ソウルズ」の松田龍平と「バトル・ロワイアルII【鎮魂歌】」の末永遥。
略筋■死別した母の、沖縄の実家で暮らすことになった高校生のテル。夏休み、彼は従妹のマレニと共に小さな旅に出る。それは、マレニが〝ユタ〟になる為の修行であった。そして、マレニはガジュマルの木の精〝キジムナー〟に導かれ、知り合ったおじい・リウボウのマブイを天国へ送ってやったり、戦争で不幸な死に方をした男女のマブイを慰めてやることに成功しユタとなるが、テルもまた旅の中で不思議な力を身につけるようになり、この先、沖縄の地に留まって彼女を支えていくことを決意するのであった。

天使の牙 B.T.A

「天使の牙」製作委員会(トワーニ■電通■小学館■エイベックスグループ■日本出版販売■日本テレビ音楽■バップ■日本テレビアート)作品(企画協力*大沢オフィス/制作*トワーニ/制作協力*日本テレビアート■三城)/ワ

ーナー・ブラザース映画配給/03・8・23/C（HD・FR・EK）・V・DDSRD—EX/118分/丸の内シャンゼリゼ

スタッフ■監督＝西村了　製作＝加賀義二/加藤鉄也「天使の牙」製作委員会＝平井文宏/毎熊邦夫/西牟田知夫/合志陽一郎/西室陶子/気賀純夫/遠谷信幸/福山亮一/兵頭秀樹/亀井修/植田文郎/岩渕博/小島則夫/山崎俊一/新崎英美/阿久津明/五十嵐真二/高橋ななみ/鶴田尚正/古屋文明/藤沢美枝子/小松賢志/白濱なつみ/吉岡正敏/草野公/堀込祐輔/篠崎安雄/大島満/岡本東郎/老野豊彦/外山一身/田口紘　企画＝奥田誠治/中嶋哲也　エグゼクティブプロデューサー＝佐藤敦　プロデューサー＝北島和久/渡邉浩仁/川端基夫　協力プロデューサー＝河野治彦/伊藤響　アシスタントプロデューサー＝伬忠子/沼田紅　制作担当＝飯塚昌夫　原作＝大沢在昌「天使の牙」　脚色＝寺田敏雄/落合正幸　撮影監督＝河津太郎　編集＝普嶋信一　録音＝林大輔　美術＝稲垣尚夫　装飾＝山田好男　衣裳＝長田好宜/中川知　スタイリスト＝棚橋公子/岡島千影/城寶昭子/関けいこ/野々市ゆき/渡辺真弥/西野泰子　音楽＝松本俊明　音楽プロデュース＝志田博英　選曲＝佐藤啓　スクリプター＝天池芳美　スチール＝押山晃一　脚本協力＝大石哲也/川嶋澄乃/石橋周一　ガファー＝中川大輔　ヴィジュアルエフェクト＝泉谷修　3Dデジタルエフェクト＝早井亨/金井圭一/鳴原譲/菊間潤子　2Dデジタルエフェクト＝今井元/照井一宏/真鍋将/古澤一久/増田英和　音響効果＝中村佳央　特殊メイク＝松井祐一/福田雅郎/三好史洋　操演＝鳴海聡/船橋誠　監督補＝井原眞治　助監督＝神徳幸治/伊藤大輔/原桂之介/青木耕太郎　主題歌＝t.A.T.u.「ノット・ゴナ・ゲット・アス」

キャスト■古芳和正…大沢たかお　神崎はつみ/アスカ…佐田真由美　河野明日香…黒谷友香　君国辰郎…萩原健一　芦田課長…佐野史郎　中西警視正…西村雅彦　神…嶋田久作　最守康夫…豊原功補　小田医師…小木茂光　関藤亮…永井大　秋田…田中要次　水谷…遠山俊也　岩村…日向崇　赤村…要潤　鈴木リョウジ　FULL MONTY　須永慶　阿部六郎　森下能幸　大石継太　柴崎真人　春延朋也　南雲勇助　飯島大介　天現寺竜　滝内泉　窪園純一　加賀谷純一　樋渡真司　下村彰宏　萩原みえ　西山周吾　小林賢二　佳本周也　松村武　マクドナルド・ジェイミー　小池美穂　あがたゆうな　池町映菜　笹本昌幸　葉山大記　松浦健城　森崎えいじ　洒向信司　重見成人　高槻祐士　保科光志　西沢智治　渡辺勝彦　磯村竜太　田口治　浜島貴一　叶雅貴　伊勢田隆弘　向原順平　安田佳史　片平翔　長谷川元春　竹中伸一郎　五十嵐敏郎　石塚義高　杉野克彦　高橋佑衣　中山香　石田祥子　辻寛子　佐野未来　鈴木淳至　坂本哲郎　佐藤祐希　坂井涼一　山本忠　江口信　白川梨花

解説■脳移植によって、別人となって蘇った女刑事の活躍を描くサスペンス・アクション。監督は、本作が初監督作品となる「フードファイト」の西村了。大沢在昌の同名小説を基に、「部屋とYシャツと私」の寺田敏雄と「世にも奇妙な物語　映画の特別編/雪山」の落合正幸が共同で脚色。撮影監督に「修羅雪姫」の河津太郎があたっている。主演は、「JamFilms/コールドスリープ」の大沢たかおと、映画初出演の佐田真由美。

略筋■麻薬組織"クライン"のボス・君国を追う女刑事・明日香は、君国の愛人・はつみに身柄の保護を求められ接触を図るも、彼女と共に、捜査のパートナーで恋人でもあった古芳の凶弾に倒れてしまう。その後、極秘裡に明日香の脳ははつみの体に移植され、彼女はアスカとしてこの世に蘇った。そんな彼女に使命が下る。君国と接触するのだ。果たして、クラインのアジト潜入に成功したアスカは、そこで、クラインとの内通者と目され、銃撃以来、行方不明になっていた古芳と再会。そして、実は彼が身を隠し君国の行方を追い続けていたこと、更に明日香とはつみを撃ったのは別人であることを聞かされた彼女は、古芳に正体を明かし、彼と協力して、君国と本当の内通者であった中西警視正を倒すのだった。こうして事件は解決した。だが、古芳と同棲を始めたのも束の間、アスカは移植の後遺症で自我を失ってしまい、同時に解剖によって君国の死体は整形した別人のものであることが判明する……。

外国映画紹介

データ表記■製作国＊製作会社／配給会社／製作年／封切日／C＝カラー、BW＝モノクロ、PC＝パートカラー／上映時間／S＝スタンダード、V＝ヴィスタ、CS＝シネマスコープ／D＝ドルビー・ステレオ、U＝ウルトラ・ステレオ、DSD＝ドルビー・ステレオ・ディジタル、DTS＝デジタル・シアター・システム、SDDS＝ソニー・ダイナミック・デジタル・サウンド、SR＝スペクトラル・レコーディング／EP＝エグゼクティヴ・プロデューサー

シルミド／SILMIDO

実尾島／실미도（シルミド（地名））

韓＊シネマ・サーヴィス作品／東映配給／03■04・6・5／C・CS・ドルビーデジタル／135分 字幕■根本理恵

スタッフ■監督■カン・ウソク 製作■イ・ミンホ 脚本■キム・ヒジェ 原作■ペク・ドンホ 撮影■キム・ソンボク 音楽■チョ・ヨンソク／ハン・ジェグオン 編集■コ・イムピョ

キャスト■カン・インチャン（684部隊第3班長）…ソル・ギョング／チェ・ジェヒョン（韓国空軍准尉）…アン・ソンギ／チョ（韓国空軍兵）…ホ・ジュノ／ハン・サンピル（684部隊第1班長）…チョン・ジェヨン

解説■韓国で実際に起こった"実尾島（シルミド）事件"をベースに、政治に翻弄された特殊部隊兵士たちの運命を描いた社会派エンタテインメント。監督は「トゥー・カップス」シリーズのカン・ウソク。原作はペク・ドンホのノンフィクション小説。出演は「オアシス」のソル・ギョング、「MUSA／武士」のアン・ソンギ、「火山高」のホ・ジュノ、「ガン&トークス」のチョン・ジェヨンほか。

略筋■1968年4月、インチョン沖に浮かぶ無人島シルミドに、死刑囚など重罪を犯した31人の男たちが極秘に集められた。彼らは韓国政府により684部隊の訓練兵という身分を与えられ、北朝鮮の金日成暗殺のための特殊部隊に仕立て上げられることに。隊長のチェ・ジェヒョン（アン・ソンギ）の指導の下、壮絶な特訓を課せられる31人。苛酷な日々の中、第3班班長となったインチャン（ソル・ギョング）は、第1班班長のサンピル（チョン・ジェヨン）とボクシングの試合で対戦、激しい打ち合いの末、勝利する。負けを認めないサンピルはインチャンにさらに喧嘩を吹っかけるが、これをきっかけに二人の間に信頼関係が生まれていく。一方、訓練は日ごとに厳しさを増し、インチャンの班員が転落死するにも至った。かくして3年以上が経過。いよいよ実行の時が近づくが、しかし直前になって、南北融和の気運が高まり外交路線を急遽変更した韓国政府は、中止命令を下した。今や国にとって邪魔になった684部隊の存在を隠蔽しようと、政府はジェヒョンに訓練兵の抹殺を命じる。悩んだ彼は、抹殺に反対する部下チョ（ホ・ジュノ）の出張中に粛正を行なおうとする。しかしジェヒョンの特別な計らいで抹殺計画を知ったインチャンは、サンピルたちと相談し、一致団結。訓練兵たちは銃を手に取り、蜂起する。訓練兵と指揮官たちの激しい銃撃戦の中、ジェヒョンはすべての責任を取って自殺。激戦の末に島を脱出した訓練兵たちは、バスを乗っ取り、ソウルの中心の青瓦台へと向かう。そして手榴弾で全員、バスごと自爆するのだった。

キャンプ

Camp（合宿）

米＊IFC■ジャージー・フィルムズ■キラー・フィルムズ■ジョン・ウェルズ・プロダクションズ作品（IFCフィルムズ提供）／アスミック・エース配給／03■04・6・5／C・V・ドルビーSRD／111分 字幕■石田泰子

スタッフ■監督■トッド・グラフ 製作■トッド・グラフ／ケイティ・ルーメル／クリスティーン・ヴァション／パメラ・コフラー／ダニー・デヴィート／マイケル・シャンバーグ／ステイシー・シェア／ジョナサン・ウェスガル EP■ジョン・ウェルズ／リチャード・クルベック／ホリー・ベッカー／キャロライン・カプラン／ジョナサン・シュリング 脚本■トッド・グラフ 撮影■キップ・ボグダーン 音楽■スティーヴン・トラスク 音楽監督■ティム・ウェイル 音楽監修■リンダ・コーエン 作曲■マイケル・ゴア 美術■ダイナ・ゴールドマン 編集■マイロン・カースティン 衣裳■ドーン・ウェスバーグ 振付■ミシェル・リンチ／ジェリー・ミッチェル

キャスト■ヴラッド…ダニエル・リタール／エレン…ジョアナ・チルコート／マイケル…ロビン・デ・ジーザス／ショーン…スティーヴン・カッツ／スピッツァー…ヴィンス・リモルディ／プチ…カヒリー・ベス／ジェンナ…ティファニー・テイラー／ディー…サシャ・アレン／ジル…アラナ・アレン／フリッツィ…アナ・ケンドリック／バート…ドン・ディクソン／スティ

ーヴン・ソンドハイム…本人

解説■ミュージカル俳優養成のためのサマー・キャンプに集うアメリカのティーンエイジャーたちを描いた青春ドラマ。監督・製作・脚本はこれが監督デビューとなるトッド・グラフ。音楽（オリジナルスコア）は「ヘドウィグ・アンド・アングリーインチ」のスティーヴン・トラスク。作曲は「フェーム」「夢の降る街」のマイケル・ゴア。振付は「私が美しくなった100の秘密」のジェリー・ミッチェルほか。出演は「ズーランダー」のダニエル・リタールなど、一般公募で募集した新人たちを中心に、音楽プロデューサーのドン・ディクソン、ミュージカル界の巨匠スティーヴン・ソンドハイムほか。

略筋■落ちこぼれやはみ出し者たちが集まる、俳優養成キャンプの夏がやってきた。いじめられっ子のゲイのマイケル（ロビン・デ・ジーザス）、モテない女の子エレン（ジョアナ・チルコート）、肥満のために父親から過食防止の顎ワイヤーを嵌めさせられているジェンナ（ティファニー・テイラー）、ゲイにしかモテないディー（サシャ・アレン）、女王気分のジル（アラナ・アレン）と彼女に奴隷のように仕えるフリッツィ（アナ・ケンドリック）などなど。そんな中、爽やかでハンサムな少年ヴラッド（ダニエル・リタール）が登場し、マイケルとエレンの心に恋の炎が点火する。キャンプ3日目に、教師のバート・ハンリー（ドン・ディクソン）が遅れて到着。彼は元売れっ子で、今はアルコール中毒に陥っている落ち目の作曲家だった。朝から晩まで続くレッスンの一方、ヴラッドをめぐる恋愛バトルも進行中。ジルが自分の部屋に彼を誘い込んで肉体関係を持ってしまったため、エレンが嫉妬したりも。そんな中、両親に無視されて落ち込んでいたマイケルの誕生日パーティーが開かれる。心の荒んでいたハンリーは、グチを吐いてそのパーティーをぶち壊してしまうが、ヴラッドたちが彼の書いた新曲を演奏しているのを見て、再びやる気を起こした。そして慈善公演の日。ジェンナが両親の前で素晴らしい歌を披露し、最高の舞台となった。終演後、ヴラッドとエレンとマイケルは互いの友情を確かめ合いながら、3人で夜の湖で泳ぐのだった。

白いカラス

The Human Stain（人間の染み）

米＊レイクショア・エンタテインメント＝ミラマックス・フィルムズ＝シネレンタ＝ストーン・ヴィレッジ・プロダクションズ作品／ギャガ＝ヒューマックス配給／03＝04・6・19／C・CS・ドルビーデジタル／108分　字幕＝太田直子

スタッフ■監督＝ロバート・ベントン　製作＝トム・ローゼンバーグ／ゲイリー・ルチエッシ／スコット・シュタインドルフ　EP＝ロン・ボズマン／アンドレ・ラマル　脚本＝ニコラス・メイヤー　原作＝フィリップ・ロス　撮影＝ジャン・イヴ・エスコフィエ　音楽＝レイチェル・ポートマン　美術＝デイヴィッド・グロップマン　編集＝クリストファー・テレフセン　衣装＝リタ・ライアック

キャスト■フォーニア・ファーリー…ニコール・キッドマン／コールマン・シルク教授…アンソニー・ホプキンス／レスター・ファーリー…エド・ハリス／ネイサン・ザッカーマン…ゲイリー・シニーズ／コールマン・シルク青年…ウェントワース・ミラー／スティーナ・ポールソン…ジャシンダ・バレット／ミセス・シルク…アンナ・ディーヴァー・スミス

解説■白い肌に生まれついた黒人の男と、心に傷を抱えた女の愛と苦悩を描くヒューマン・ドラマ。監督は「トワイライト」のロバート・ベントン。脚本は「ジャック・サマースビー」のニコラス・メイヤー。原作はフィリップ・ロスの小説「ヒューマン・ステイン」。撮影は「抱擁」のジャン＝イヴ・エスコフィエ（これが遺作）。音楽は「ジャスティス」のレイチェル・ポートマン。出演は「コールドマウンテン」のニコール・キッドマン、「レッド・ドラゴン」のアンソニー・ホプキンス、「めぐりあう時間たち」のエド・ハリス、「クローン」のゲイリー・シニーズ、「アンダーワールド」のウェントワース・ミラー、「ルール2」のジャシンダ・バレット、「アメリカン・プレジデント」のアンナ・ディーヴァー・スミスほか。

略筋■1998年、米マサチューセッツ州。名門アテナ大学の学部長コールマン・シルク（アンソニー・ホプキンス）は、ユダヤ人として初めて古典教授の地位に昇りつめた学者。だが勇退を目前に、何気なく発した言葉が黒人差別だと非難され、辞職に追い込まれてしまう。半年後。いまだ怒りのおさまらないコールマンは、湖畔で隠遁生活を送る作家のネイサン・ザッカーマン（ゲイリー・シニーズ）を訪ね、自分の屈辱の経緯を本にしてくれと依頼する。それには尻込みしたネイサンだが、孤独な二人の間には友情が芽生えていった。1年後。コールマンはネイサンに、恋人がいることを打ち明ける。彼女

の名はフォーニア・ファーリー（ニコール・キッドマン）。義父の虐待、ベトナム帰還兵の夫レスター（エド・ハリス）の暴力、子供の死という悲惨な過去を背負った、清掃の仕事をしている34歳の女性だ。一方、コールマンも自身の出生にまつわる秘密を、長年連れ添った亡き妻にさえ隠していた。実は彼は白い肌に生まれついた黒人であり、社会でうまく生きていくためにユダヤ人だと偽っていたのだった。互いに深い傷を持つコールマンとフォーニアは、ネイサンの忠告を無視して、どんどん愛にのめり込んでいく。そしてコールマンがフォーニアに自分が黒人であることを告白したあと、二人は交通事故死してしまうのだった。

メダリオン

The Medallion（大メダル）

香＝米＊エンペラー・マルチメディア・グループ＝ゴールデン・ポート・プロダクションズ作品／日本ヘラルド映画配給（ポニーキャニオン＝日本ヘラルド映画提供）／03＝04・6・19／C・CS・ドルビーSRD／SDDS／89分

字幕＝栗原とみ子

スタッフ■監督＝ゴードン・チャン　製作＝アルフレッド・チョン　EP＝ジャッキー・チェン／ウィリー・チャン／アルバート・ヤン　脚本＝アルフレッド・チョン／ゴードン・チャン／ポール・ホイーラー／ベネット・ジョシュア・ダヴリン／ベイ・ローガン　撮影＝アーサー・ウォン　音楽＝エイドリアン・リー　アクション監督＝サモ・ハン・キンポー

キャスト■エディ・ヤン…ジャッキー・チェン／ニコル・ジェームス…クレア・フォラーニ／アーサー・ワトソン…リー・エヴァンス／スネークヘッド…ジュリアン・サンズ／ジャイ…アレクサンダー・バオ／レスター…アンソニー・ウォン／シャルロット・ワトソン…クリスティ・チョン／スマイス…ジョン・リス・デイヴィス

解説■未知のパワーを得られる伝説のメダルをめぐって巻き起こる騒動を描いたアクション。監督・共同脚本は「デッドヒート」のゴードン・チャン。アクション監督は「ハッピーフライト」のサモ・ハン・キンポー。製作総指揮・主演は「シャンハイ・ナイト」のジャッキー・チェン。共演は「サベイランス／監視」のクレア・フォラーニ、「レディース・マン」のリー・エヴァンス、「宮廷料理人ヴァテール」のジュリアン・サンズ、「インファナル・アフェア」のアンソニー・ウォン、「ジャンダラ」のクリスティ・チョン、「ロード・オブ・ザ・リング」シリーズのジョン＝リス・デイヴィスほか。

略筋■死者が蘇り、肉体には超人的なパワーが宿るという中国古代から伝わる聖なるメダルの秘密を発見した、密輸犯罪組織の首領スネークヘッド（ジュリアン・サンズ）は、メダルのカギを握る少年ジャイ（アレクサンダー・バオ）の誘拐を計画する。一方、香港警察きっての型破りな刑事エディ（ジャッキー・チェン）は、インターポールのワトソン（リー・エヴァンス）と共に、4カ月前からスネークヘッドの行方を追っていた。やがてスネークヘッドの右腕レスター（アンソニー・ウォン）が、ジャイを捕えてアイルランドに向かう。それを追ってエディもアイルランドへ。インターポールのスマイス支部長（ジョン＝リス・デイヴィス）のもとを訪ねるが、そこで彼は偶然にもワトソンと元恋人のニコル（クレア・フォラーニ）と再会。スマイスの命令により、3人はチームを組むことになる。決死の捜査が続く中、エディはジャイを救い出すことに成功するが、2人はコンテナに閉じ込められ、水中に落とされてしまう。エディはジャイを庇って命を落とした。しかしジャイが持っていたメダルの力で、エディの肉体は光に包まれ、不死身のパワーを得て蘇る。やがて病院の死体安置所で意識を取り戻したエディは、やはり不死身のパワーを得たスネークヘッドと対決。苦戦が続くものの、メダルの力を借りてエディはスネークヘッドを倒した。さらに戦いの中で倒されたニコルも、メダルの力で蘇らせるのだった。

訃報

—映画・TV界—

マックス・ローゼンバーグ氏（米／映画製作者）6月14日に死去。89歳。「フランケンシュタインの逆襲」57、「愛のふれあい」69、日本劇場未公開の「マッドハウス」74、「監獄都市ブラッド」76、「ブラッディ・バースデイ」80などを手掛けた。

伊藤正次氏（いとう・まさつぐ／俳優）6月19日、膵臓がんのため死去。68歳。『私は貝になりたい』などのTVドラマや「宮沢賢治その愛」96などに出演。83年に伊藤演劇研究所を設立し、裕木奈江らを輩出。樋口可南子、賀来千香子らの演技指導にもあたった。

篠田昇氏（しのだ・のぼる／映画撮影監督）6月22日、肝不全のため死去。52歳。75年、日本大学芸術学部在学中に自主映画製作グループ〝グループポジポジ〟を発足。85年の「ラブホテル」でプロとして最初の撮影監督を務め、以後「Love Letter」95、「スワロウテイル」96、「四月物語」98、「リリイ・シュシュのすべて」01、「花とアリス」04などの岩井俊二監督作品をはじめ、「宇宙の法則」90、「夏の庭」94、「Be RLiN」95、「クロエ」01、「真夜中まで」01などを手掛ける。映画以外にもTV、CM、プロモーションビデオなど幅広い映像分野で活躍した。「世界の中心で、愛をさけぶ」04が遺作となった。

湯浅憲明氏（ゆあさ・のりあき／映画監督）6月14日、脳梗塞のため死去。70歳。法政大学在学中の54年に大映入社。川島雄三監督の「雁の寺」「しとやかな獣」62などに助監督としてついた後、64年の「幸せなら手をたたこう」で監督デビュー。その後、「大怪獣ガメラ」65、「大怪獣空中戦　ガメラ対ギャオス」67など「ガメラ」シリーズや「樹氷悲歌（エレジー）」71、「成熟」71を手掛けて活躍。71年の大映倒産以降はフリーとなり、「宇宙怪獣ガメラ」80やTVドラマ『アイアンキング』『コメットさん』『ウルトラマン80』など多数演出した。

野沢尚氏（のざわ・ひさし／脚本家、作家）6月28日、事務所のマンションで首吊り自殺を図り死去。44歳。日本大学芸術学部を卒業した83年「V.マドンナ大戦争」が城戸賞に入賞（85年に映画化）。85年にTVドラマ『殺して、あなた』でデビュー。その後も『親愛なる者へ』『青い鳥』『眠れる森』『結婚前夜』『反乱のボヤージュ』『砦なき者』などを手掛け、現在制作中のNHK大河ドラマ『坂の上の雲』の脚本も執筆中だった。作家としては、00年に自らの脚色で映画化もされた『破線のマリス』で江戸川乱歩賞、『深紅』で吉川英治文学新人賞を受賞している。「その男、凶暴につき」89、「さらば愛しのやくざ」90、「ラストソング」94、「私たちが好きだったこと」97、「名探偵コナン　ベイカー街の亡霊」02など映画の脚本も数多く手掛けた。

マーロン・ブランド氏（米／俳優）7月1日、肺疾患のため死去。80歳。数年前から心臓病を患い、ここ数年は入退院を繰り返していた。職を転々とした後、ニューヨークのアクターズ・スタジオで演技を学ぶ。44年にブロードウェイでデビューし、47年のエリア・カザン演出『欲望という名の電車』のスタンレー役で注目を浴びる。51年に同監督が映画化した際にも出演し、アカデミー賞主演男優賞に初ノミネート。以降、「波止場」54と「ゴッドファーザー」72で同賞に2度輝くが、2度目は映画界の北米先住民族の扱いに抗議し、受賞を拒否して話題となった。主な作品は他に「革命児サパタ」52、「乱暴者（あばれもの）」53、「野郎どもと女たち」55、「若き獅子たち」58、「片目のジャック」（監督も）60、「逃亡地帯」66、「伯爵夫人」67、「ラストタンゴ・イン・パリ」72、「スーパーマン」78、「地獄の黙示録」79、「ドン・サバティーニ」89、「ドンファン」95、「スコア」01など多数。近年まで活躍を続け、独特の演技スタイルは後進の俳優にも多大な影響を与えた。

イベント

「キネマ旬報」創刊85周年 バックナンバーフェア

「キネマ旬報」の創刊85周年を記念して、本年度の号を中心にしたバックナンバーフェアを、以下の書店にて開催する。

●ヤマニ書房本店
福島県いわき市平2・7・2
問＝0246・23・3481

●芳林堂書店津田沼店
千葉県船橋市前原西2・18・1 津田沼パルコB館
問＝047・478・3737

●くまざわ書店聖蹟桜ヶ丘店
東京都多摩市関戸1・11・1 聖蹟桜ヶ丘ショッピングセンターA館
問＝0423・37・2531

●喜久屋書店倉敷店
岡山県倉敷市水江1 イオン倉敷ショッピングセンター2階
問＝086・430・5450

●丸善ら・がーる新札幌DUO店
札幌市厚別区中央二条5・6・2
問＝011・890・2586

群馬アジア映画祭

第10回群馬アジア映画祭では、同県出身の飯塚健監督、清水崇監督による日本映画2本とアジア映画2本を上映する。中国箏の演奏やアジアティーの無料サービス、アジア激辛カップメンコーナーなども用意されている。

8月8日(日)10時「初恋のきた道」12時30分「サマーヌード」15時30分「呪怨」17時30分「ザ・カップ／夢のアンテナ」
料金（4本立て）＝1200円(前)1000円／小中高生600円(前)500円
会場＝みかぼみらい館大ホール（群馬県藤岡市藤岡2728）
問＝0274・22・5511

テレビ＋ネット回線で映画が楽しめる

「Bフレッツ」「フレッツADSL」の回線を利用して、多チャンネル放送サービスとビデオ・オン・デマンド・サービスを利用できるプランが実現した。各種のサービス契約と専用セットトップボックスを家庭用のテレビに接続することで、40チャンネルと、1000タイトル以上の映画をテレビ画面で楽しむことができる。現在キャンペーン中のため、2004年9月利用分までの月額基本料を無料としている。

問＝ウィンドウズ・ユーザー 0091・92・33／マック・ユーザー 0091・92・34／その他03・5954・5330／e-mail：kojin@plala.or.jp

「ロード・オブ・ザ・リング」記念切手発行

ニュージーランド郵政発行の「ロード・オブ・ザ・リング 中つ国の舞台」を図案に取りいれた切手の通信販売が始まった。日本国内での使用は不可だが、雄大な自然とその中に生きる登場人物の写真が美しい。8種1シートで1680円、別途送料200円。

注文宛先＝〒170・8668 豊島郵便局私書箱96号／FAX03・5951・3431／order@agcy.co.jp
※注文者の郵便番号、住所、氏名、電話番号、切手名称、希望シート数をはがき、FAX、メールにて申し込む。
問＝03・5951・3433
http://www.agcy.co.jp

募集

NCW クリエイティブセミナー 2004 autumn開催

映画の学校、ニューシネマワークショップのシリーズ講座「映画はこうしてつくられる」第6弾は、新作「スウィングガールズ」公開を前にした矢口史靖監督が語る。

9月5日(日)14時～17時
料金＝1500円
会場＝ニューシネマワークショップ（東西線早稲田駅徒歩1分）
申込・問＝03・5285・7455／seminar@ncws.co.jp
http://www.ncws.co.jp

北欧映画入門

小松弘・早稲田大学教授を講師にむかえ、北欧映画における独特の人間のとらえ方――人間の滑稽なる悲劇を描ききる――など、北欧映画の魅力について講義する。

8月17日(火)18時
料金＝4000円／非会員5000円
会場＝北欧留学情報センター（東京都新宿区築地町17秋巧ビル5階）
※氏名、住所、電話・ファックス番号を明記して、ファックス、メールで申し込むこと。
申込＝FAX03・5261・0025／info@bindeballe.com
問＝03・5229・5899

シネ・リーブル梅田 シネマポイントカード会員募集

年会費1000円、有効期間は1年、カード提示により当日一般・学生料金より300円割引になるシネマポイントカードの会員をシネ・リーブル梅田で募集中。映画鑑賞料金の10%をポイント加算、1000ポイントで映画鑑賞1本無料が実現する。入会資格は高校生以上、募集期間は9月20日まで。

イメージフォーラム 夏期特別講座 受講生募集

イメージフォーラム付属映像研究所が、夏期特別講座2クラスと、アニメーションコース第2期の受講生を募集している。

「映像メディアアート・ヒストリー」講師：中島崇（映像作家）
8月16日(月)〜18日(水)13時〜16時
受講料＝8000円

「映画撮影ワークショップ」講師：高間賢治（撮影監督）
8月9日(月)〜19日(木)18時30分〜21時30分
受講料＝4万5000円

「アニメーションコース 第2期」9月〜12月／月・火曜18時30分〜21時30分
受講料＝10万円

※申し込み用紙を電話かファックスで取りよせる、もしくはウェブからダウンロードすること。
問＝03・5766・0116（FAX03・5466・0064）
http://www.imageforum.co.jp/school

映画美学校 ドキュメンタリー・コース 受講生募集

プロデュース機能を持つ教育機関として注目を集める映画美学校が9月に開講するドキュメンタリー・コースの受講生を募集している。

授業日程＝初等科40名／火・金曜19時〜21時30分（月1で土曜に実習）／高等科20名／金曜19時〜21時30分／研究科20名／月1回土曜15時〜17時30分
受講資格＝18歳以上
受講期間＝2004年9月〜2005年8月
授業料＝初等科37万8000円／高等科29万4000円／研究科6万3000円
応募方法＝はがきに住所、氏名、年齢、職業を明記し、受講案内希望と書いて送る。募集要項はホームページからも申し込み可。※8月30日(月)18時〜（募集ガイダンス十上映会）開催
会場＝映画美学校（東京都中央区京橋3-1-2片倉ビル）
問＝03・5205・3565
http://www.eigabigakkou.com

東京都

■neoneo 坐 vol.5
華氏8・15〜 60回目の昼下がり
8月15日(日)14時「戦争が終わって僕らは生まれた」15時40分「815」
料金＝1200円（会員800円）／2作品2000円（会員1400円）
会場＝スペースneo（千代田区神田小川町2-10-13御茶ノ水ビル1F）
問＝080・5468・3251
http://www014.upp.so-net.ne.jp/kato-takanobu/neoneoza/index.html

■TheaterKINOKuniya
「モロ・ノ・ブラジル」
8月10日(火)18時45分
料金＝1000円（前900円）
会場＝紀伊國屋サザンシアター
問＝03・5469・5917

■現代中国映画上映会
8月7日(土)10時10分「五人の娘」／12時40分「T.R.Y.」14時40分「最後の恋、初めての恋」／17時「T.R.Y.」19時「最後の恋、初めての恋」
料金＝「五人〜」1500円（会員1200円）「T.R.Y.」十「最後の恋〜」1700円（会員1400円）
会場＝文京シビックホール
問＝03・5689・3763
http://www.parkcity.ne.jp/~gentyuei/

■日比谷図書館映画会
「TOMORROW 明日」
8月11日(水)14時
料金＝無料
会場＝東京都立日比谷図書館
問＝03・3502・0101

■CLOSE UP! 荒戸源次郎
8月21日(土)23時〈トークライブ〉ゲスト：荒戸源次郎／司会：大高宏雄／ホスト：大槻貴宏／「牛乳屋フランキー」上映（大高宏雄リコメンド）
料金＝2800円（前2500円）
会場＝ポレポレ東中野
問＝03・3371・0088
http://www.mmjp.or.jp/pole2/

■京マチ子スペシャル
連日朝10時30分〜
8月1日(日)〜7日(土)「偽れる盛装」
8月8日(日)〜14日(土)「甘い汁」
8月15日(日)〜21日(土)「娘の冒険」
料金＝1200円／シニア・学生1000円／会員800円／水曜1000円均一
会場＝ラピュタ阿佐ヶ谷
問＝03・3336・5440
http://www.laputa-jp.com/

■「石井のお父さんありがとう 岡山孤児院ー石井十次の生涯」上映会
料金＝1600円（前1200円）／子供1200円（前800円）
8月6日(金)10時、12時30分、14時40分／練馬文化センター
問＝03・3933・3311
8月7日(土)10時、12時30分、14時40分／中野ゼロホール
問＝03・5340・5000
8月8日(日)10時、12時30分、14時40分／サンパール荒川
問＝03・3806・6531
8月19日(木)14時／台東区生涯学習センターミレニアムホール
問＝03・5246・5812

■黒木和雄監督特集
8月14日(土)12時10分「とべない沈黙」14時20分「キューバの恋人」16時40分「竜馬暗殺」19時「祭りの準備」

8月15日(日)12時10分「原子力戦争」14時20分「TOMORROW／明日」16時40分「美しい夏キリシマ」「父と暮せば　メイキング」
8月16日(月)12時10分「日本の悪霊」14時20分「スリ」16時40分「浪人街」19時「竜馬暗殺」
8月17日(火)12時10分「夕暮まで」14時20分「祭りの準備」16時40分「泪橋」19時「とべない沈黙」
8月18日(水)12時10分「キューバの恋人」14時20分「泪橋」16時40分「日本の悪霊」19時「TOMORROW／明日」
8月19日(木)12時10分「原子力戦争」14時20分「浪人街」16時40分「夕暮まで」19時「祭りの準備」
8月20日(金)12時10分「TOMORROW／明日」「父と暮せば　メイキング」16時40分「スリ」19時「美しい夏キリシマ」
料金＝1500円／シニア1000円／水曜1000円均一／(前)3回券3000円
会場＝テアトル池袋
問＝03・3987・4311

■スターライトシネマ～恵比寿ガーデンシネマ・セレクション～
各日19時より上映
8月6日(金)「飛ぶ教室」
8月7日(土)「ロッタちゃんはじめてのおつかい」
8月8日(日)「ロッタちゃんと赤い自転車」
8月13日(金)「ボウリング・フォー・コロンバイン」
8月14日(土)「リアリティ・バイツ」
8月15日(日)「ゴーストワールド」
料金＝入場無料
会場＝恵比寿ガーデンプレイス・センター広場
※18時より整理券配布、18時30分より入場、上映開始以降は整理券不要。荒天の場合、中止もあり
問＝03・5423・7111
http://www.gardenplace.co.jp

■アニメーションおもしろ七変化！　岡本忠成の世界
8月7日(土)10時30分「モチモチの木」「南無一病息災」「水のたね」
8月14日(土)10時30分「あれはだれ？」「ちからばし」「虹に向って」
料金＝小・中学生100円／幼児無料／(引率)500円／高校・大学生・シニア300円
会場＝東京国立近代美術館フィルムセンター
問＝03・5777・8600
http://www.momat.go.jp/

神奈川県

■ビデオ上映会
8月7日(土)13時
「被爆とわたくし」／〈対談・公演〉林京子・黒古一夫
料金＝無料
会場＝神奈川近代文学館・展示館中会議室
問＝045・622・6666

愛知県

■シネマの夕べ
「美しい夏キリシマ」
8月20日(金)19時
料金＝600円(前500円)／会員400円
会場＝碧南市芸術文化ホール／シアターサウス
問＝0566・48・3731
http://www.city.hekinan.aichi.jp/GEIBUN/index.htm

三重県

■「森の学校」上映会
8月8日(日)14時、18時
「森の学校」
料金＝1300円(前1000円)／高校生以下600円(前500円)
会場＝伊勢市観光文化会館
問＝090・1825・9644

滋賀県

■大津シネマクラブ8月例会
「アフガン零年」
8月7日(土)10時30分、13時30分、18時30分
月会費＝1000円(入会金1000円)
会場＝大津市生涯学習センター
問＝077・534・6403
http://www3.ocn.ne.jp/~eiga100/otsu-cinemaclub/

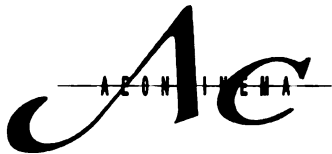
京都府

■ドキュメンタリー・フィルム・ライブラリー
「リストラとたたかう男」
8月22日(日)13時、15時30分、18時
料金＝1000円／会員700円
会場＝ひと・まち交流館　京都2階　第1・2会議室
問＝075・354・8711
http://dofil87.hp.infoseek.co.jp

大阪府

■夏休み子供映画祭
8月6日(金)10時30分、13時50分「ぽのぽの　クモモの木のこと」11時50分、15時10分「風の又三郎」
8月7日(土)12時50分「動物園日記」10時30分、15時「オズの魔法使」
8月8日(日)10時30分〈子どもアニメ体験シアター〉13時30分〈落語家・林家竹丸によるアニメ無声映画弁士付き上映会〉「兎と亀」「のんきな父さん山崎街道」「日本一の桃太郎」「国士無双」
料金＝子ども500円／大人700円(一日券)※天王寺公園入園料150円が必要
会場＝天王寺公園映像館
問＝06・6261・3563

■中華民国(台湾)電影会
「白色酢漿草」(英語・中国語字幕)
8月14日(土)18時30分
料金＝500円
会場＝大阪市立北市民教養ルーム(阪急梅田駅近く)
問＝0798・67・2300

■第七藝術劇場

「トントンギコギコ図工の時間」
～8月13日(金)12時30分、14時30分、16時30分、18時40分
料金＝1500円／大学生・会員1300円／高校生・中学生・シニア1000円／小学生以下700円／親子ペア2000円
会場＝第七藝術劇場
問＝06・6302・2073

兵庫県

■戦争とアニメ
「桃太郎の海鷲」「マレー沖海戦」「スパイ撃滅」〈お話：村上知彦氏(まんが評論家)、景山理氏(シネ・ピピア支配人)〉
8月14日(土)13時30分
料金＝1000円(前)800円／中学生以下700円(前)500円)／会員800円
会場＝ピピアめふ6F「めふの間」
問＝0797・87・3565

広島県

■名作映画鑑賞会
8月5日(木)10時30分、14時、18時「はだしのゲン2」
8月6日(金)10時30分、14時「ひろしま」
8月7日(土)10時30分、14時、18時「クロがいた夏」
8月8日(日)10時30分、14時「しんちゃんのさんりんしゃ」
8月13日(金)10時30分、14時、18時「わんぱく王子の大蛇退治」
8月14日(土)10時30分、14時、18時「太陽の王子 ホルスの大冒険」
8月15日(日)10時30分、14時「銀河鉄道999」
料金＝440円／こども220円
会場＝広島市映像文化ライブラリー
問＝082・223・3525

山口県

■コミュニティシネマ山口
「スタンド・バイ・ミー」
8月6日(金)13時、16時、19時
8月7日(土)19時
8月8日(日)13時、16時
「美しい夏キリシマ」
8月13日(金)13時、19時
8月14日(土)13時、16時
8月15日(日)13時、16時
料金＝1000円／学生・会員800円
会場＝山口情報芸術センタースタジオC
問＝083・901・2222

福岡県

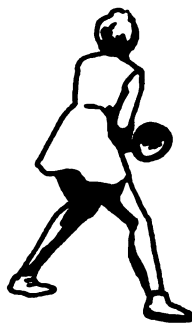
■南インド映画特集
8月4日(水)14時「ザ・デュオ」
8月5日(木)14時「ボンベイ」19時「テロリスト」(マッリの種)
8月6日(金)14時「島」19時「悲哀」
8月7日(土)11時「シャドー・キル」14時「島」17時「旅路」
8月8日(日)11時「テロリスト」(マッリの種)14時「ザ・デュオ」
8月11日(水)14時「神の与えしもの」
8月12日(木)11時「ぼくの家出」14時「旅路」
8月13日(金)11時「誓いの炎」14時「神の戯れ」
8月14日(土)11時「悲哀」14時「神の戯れ」17時「誓いの炎」
8月15日(日)11時「ぼくの家出」14時「神の与えしもの」
料金＝500円／大学・高校生400円／中学・小学生300円
会場＝福岡市総合図書館映像ホール・シネラ
問＝092・852・0600
http://toshokan.city.fukuoka.jp/

キネ旬ロビイ
kinejun lobby

読者の声

●寝る前の楽しみ

今年の春から月二回の「キネマ旬報」を本屋に買いに行くのを楽しみにしている。仕事が終わって、寝る前に、一人の大切な時間……ゆっくり、じっくり読むのが最高！　次に観る映画を決めるのにも、勿論、参考にしてます。（菅原裕子・山形県鶴岡市・看護師・48歳）

●60年代ロンドン

シアターコクーンでのマシュー・ボーン演出「プレイ・ウィズアウト・ワード」はジョセフ・ロージー監督の「召使」をモチーフにしたダンス・パフォーマンスだが、それ以外にも60年代のロンドンのエッセンスが注ぎ込まれていて、映画のセクシャルな要素やダークな部分は程々だが、イギリスらしい皮肉なウィットに溢れていて楽しかった。またジョセフ・ロージーらの60年代の作品が観たくなってしまった。（小川和彦・千葉県浦安市・会社員・32歳）

●おかしくて涙が出ちゃう

最近「シルミド SILMIDO」「ブラザーフッド」と言ったちょっとせつない映画を続けて見ていたので、「69 sixty nine」を見たらあまりの面白さに笑いながら涙が出るほどでした。最近おかしくて涙が出ちゃうなんて久しぶりデス!!宮藤官九郎さんらしいシナリオで本当に大声で笑ってしまう程面白い作品で、出演者達がイキイキしていて最後に拍手を送りたい感動でした。（徳永洋子・東京都板橋区・会社員・38歳）

●忘れられた映画

樋口尚文『「砂の器」と「日本沈没」70年代日本の超大作映画』（筑摩書房）を読んだ。70年代というとATGと日活ロマンポルノと東映ヤクザ映画が今だに伝説的に語られる。しかし、ほぼ同時に制作され、当時ヒットしたにもかかわらず、半ば忘れられた映画をきちんと検証するという切り口が面白かった。（秦範夫・神奈川県厚木市・会社員・29歳）

●兄弟愛の強さに感動

「ブラザーフッド」を見ました。もともと戦争の意味を理解できずにいるので、他人同士が殺し合う映像に苦痛ばかりを感じてしまいました。ただ兄弟愛の強さには感動し、「ティアーズ・オブ・ザ・サン」のようなヒーロー話ではないことが救いだったように思います。（角田理恵・神奈川県藤沢市・学生・21歳）

●くやしく思えます

野沢尚さんの突然の訃報、ホントウに驚きました。映画並みの出来だったドラマ「砦なき者」の完成披露の際に原作本にサインと、握手をしていただいて、ほんの少しだけドラマの感想などもお話したので。「深紅」は続行されるそうですが、これからもっとたくさんの物語で映画界まで賑わせてほしかったです。こんな私のようなワガママな想いが追いつめてしまったのかと、残念を通りこしてくやしく思えます。「理由」（宮部みゆき）同様「砦～」も劇場公開してほしい。（盛川久美・神奈川県横浜市・派遣社員・36歳）

●伝説の人、逝く

7月1日にマーロン・ブランドが80歳で逝きました。二度のアカデミー賞主演男優賞を誇る名優であるが、様々な逸話を残した伝説の人でもあった。「地獄の黙示録」での異様な存在感が最後の輝きになったと思います。60年代から70年代を代表する俳優であることは間違いないですね。心よりご冥福をお祈りしております。（入江弘幸・岩手県紫

波郡・会社員・39歳）

●寒さを実体験できる？

「デイ・アフター・トゥモロー」を見た。バリバリと建物から人間から、目に見えるもの全てが凍っていくさまはすごい。見ている観客も寒さを身に感じたので、これは実体験だ……と、この映画は素晴らしいと思って見回したら、何ていうことは無い、映画館の冷房がききすぎていたのだ。それにしても寒かった。地球温暖化防止に協力してほしい。（木村弘・東京都小平市・75歳）

キネ旬読者から東劇へ「この映画を上映して！」

★7月下旬号p152「映画館主義　東劇篇」の東劇で上映してほしい映画について。「**タワーリング・インフェルノ**」が是非見たいです。子供の頃、TVの洋画劇場で二夜に分けてやったのを見たのが、最初でした。やっぱ、パニック映画は大きなスクリーンで見たいものです。（八藤後真紀・千葉県柏市・会社員・33歳）

★東劇で上映して欲しい作品「**大いなる西部**」。大好きな作品ですが、TVでしか観たことがありません。ぜひとも劇場で観てみたいと思っています。（上野恒義・埼玉県坂戸市・自営業・46歳）

★「映画館主義　東劇篇」を読んでいて、その数ページ後に「八甲田山」の木村大作さんのインタビューがあった。ぜひとも「**八甲田山**」を上映してほしいが、これは東宝でした。伊藤大輔監督「**大江戸五人男**」などは、無理でしょうね。人が入らないかもしれないし。あと洋画では「**俺たちに明日はない**」。（高橋仁・東京都品川区・会社員・38歳）

★7月下旬号の東劇の特集を読んだ。最近、「ゴッドファーザー」をそこで観たからだ。かつて銀座文化でずっとクラシック映画を上映していたが、それに代わるものとしてぜひ定着してほしい。個人的には「**ライアンの娘**」「**戦場にかける橋**」「**時計じかけのオレンジ**」「**若者のすべて**」を観てみたい。（前波真一・東京都小平市・編集業・38歳）

★ジャッキー・チェンの肉体を駆使して、動きまわる映画は大好きですが、SFXアクション映画は見た事がありません。けれど、大ファンの中村獅童さんがはまっている「スパイダーマン2」は評判も良い様で、出掛けてみましょうかと思っています。東劇上映希望映画は「**明日に向って撃て！**」と「**俺たちに明日はない**」。（大野栄子・東京都杉並区・主婦・76歳）

★パラダイススクエアで「ゴッドファーザー」と「大脱走」のリバイバル公開を観た。100席程度の広さの割には天井が高くてスクリーンも大きい方だが、東京では東劇での公開だから何ともうらやましい。20年以上前、東劇で「ウエスト・サイド物語」を70ミリで観て大感動した私としては、もっと大きなスクリーンで観たかった。ま、それはともかく今後も名作をどんどんリバイバル公開して下さい。期待してますよ。（木村康志・大阪府大阪市・46歳）

★日比谷映画劇場とみゆき座が来年3月で閉館とのニュースを聞き、また顔のある映画館が消えるのかと思い、寂しい気持ちです。日劇（有楽町マリオン）には掛からないけど、きらっと光る洋画の小品、またはマリオンと時差上映される大作を座って鑑賞するために足を運んだ日々が懐かしいです。地方にも〝クローン〟のようなシネコンが増幅していき、鑑賞時刻と座席がキチンと決まるシステムは劇場で映画を観る上での利便性を高めることには大きく寄与していると感じます。反面、効率重視の画一的な劇場運営にもの足りなさを覚える旧来のファンも少なからずいると思います。そんな一方で、東劇のリバイバル上映への果敢な挑戦の記事にはうれしくなりました。リクエスト要望とありましたが、やはり大きな画面で見て面白い映画、例えば**デイヴィッド・リーンの作品**をぜひともお願いしたいと思います。（木田実・千葉県市川市・会社員・38歳）

スクリーンの魔術師

第22回 ウイリアム・ワイラー

絵と文 すぎやまあけヒロ

William Wyler 1902〜1981年

1902年7月1日フランスのアルザス生まれ。大学を卒業後アメリカに渡り、ユニヴァーサルの宣伝部員から助監督となり、26年に監督に昇進する。アカデミー賞監督賞にノミネートされること12回。そのうち「ミニヴァー夫人」(42)「我等の生涯の最良の年」(46)「ベン・ハー」(59)と3回受賞。“巨匠の中の巨匠”と呼ばれた。パン・フォーカスという新しいカメラ技術を取り入れ、ワイラー・タッチを完成させる。ディテールへの要求は厳しかった。

女相続人

偽りの花園

黄昏

西部の男

大いなる西部

コレクター

必死の逃亡者

探偵物語

ワイラー映画でアカデミー主演賞を受けた人々

38年「黒蘭の女」ベティ・デイヴィス

42年「ミニヴァー夫人」グリア・ガースン

46年「我等の生涯の最良の年」フレデリック・マーチ

49年「女相続人」オリヴィア・デ・ハヴィランド

59年「ベン・ハー」チャールトン・ヘストン

68年「ファニー・ガール」バーブラ・ストライサンド

もちろん53年の「ローマの休日」のオードリー・ヘプバーンもふくまれる。

次回は吉村公三郎監督です

パンフォーカス

観客がどちらの人物に思い入れをするかは、観客に任せたいのである。つまり、イメージを押しつけたくないのである。私は。

若き日のワイラー

従来のカメラだと焦点を手前の人物に合わせれば①遠くの人物はボケる。逆に遠くに合わせれば②手前がボケてしまうのが、パンフォーカス技術によってすべてに焦点を合わせる③ことができるようになった。この場面では、発作を起こして苦しむ夫を後方の妻が冷然と見つめている表情が観客にもわかるのである。

ご説明しますについて

コンビ

ゴールドウィンは当時まだ超一流とはいえなかったワイラーを起用して「孔雀夫人」(36)「デッド・エンド」(37)「偽りの花園」(41)そして「我等の生涯の最良の年」(46)へと到達したのである。(文芸作品コンビと評された)

サミュエル・ゴールドウィン MGMの社名にその名を残す大プロデューサー

ユニバーサルを離れて、36年に組んだのが、もちろんほめられないエピソードも数々あるがハリウッドで最も信頼度の高いプロデューサーといわれたサミュエル・ゴールドウィンだった。

この人と組んでから躍進めざましかった

90

私はカットでつなぐのは好きじゃないんだよ。だから長まわしになるんだ。

いいよいいよ さあーもうひと踏んばりだよー

冗談じゃないわよ

やってらんないわよ

完全主義者のワイラーは納得がゆくまで何ども撮り直すので、俳優やスタッフとの間に摩擦がたえなかった。特にベティ・デイヴィスとの対立はすさまじかった。

ハリウッドのスタジオ関係者の間では「ナインティ・テイク・ワイラー」とあだ名されていた。満足のいくまでテストをくり返しなな、なんと90回もやり直した記録があったから。

ここだけの話。90回ダメ出ししたことがあるのよ

L・B・ジョーンズの解放

(70年)黒人葬儀屋L・B・ジョーンズの離婚訴訟をとり上げ、ファースト・シーンからみごとなワイラーが現われてくる。スターらしいスターをほとんど使わず、自己の思いの丈を吐露している。この映画でワイラーは差別に対する拒否の姿勢だけは

あいまいさを残さずうったえている。ラストはまさに彼の全生涯全映画の「結び」の意味がこめられている感がする。

もちろん社会派も

彼の48作め最後の映画です

ベン・ハー

(59年)

スペクタクルだって

ローマ帝国下、ローマ第一の戦車操者となったベン・ハーの波乱の人生。製作費54億円(当時)出演者5万人の映画史上超大作。アカデミー賞11部門に輝いた記録づくめの作品。

ローマの休日

そしてあのロマンチックコメディ

永遠の妖精ヘプバーンの誕生！

①ある小国のお姫様アンはローマに着いたが各国の大使や外交官、政財界の大立者との公式行事が多くてお疲れ気味……

(53年)

上半身はいかにも公式行事。下半身はスカートの中でクツぬぎ。

②隙をみて侍従つきの大使館から脱出する。

街の床屋で髪の毛をカットしてもらう。

③つかの間の"自由"を手にして、お茶めな世間知らずを発揮するアン。知り合ったのは白馬に乗った王子さまではなく、スクーターに乗った新聞記者。

スクーター

アン王女の退屈と何ものかを期待する気持がつたわってくる。

④このシーンのために作った映画のような気にさせるすばらしいラスト。無言のカット・バックが、いかなる雄弁よりも有効であることを教えてくれている。

あたしじゃないとは思ってました

初主演でオスカーを手にする

じつはイギリス王室をモデルにしているんだよ。当時のマーガレット王女とお付き武官のタウンゼント大佐の悲恋をね。

The End

Digitized by Google

今号の筆者紹介

（ ）内の数字は掲載ページ

立川志らく　落語家。私の新作映画「不幸の伊三郎」と落語の会を9月26～28日に上野広小路亭でやります。（33）

桂千穂　他人が絶賛する邦画のなかで私には全然ダメな作品が近頃ふえた。私が退化したせいと思いたくないが。（34）

石上三登志　ごひいきTVシリーズ「ホーンブロワー」のヨアン・グリフィズがなんと「キング・アーサー」のランスロット卿！（53）

植草信和　フリー編集者。恥ずかしながら、飯嶋和一の小説を初めて読んだ。傑作、佳作揃いに驚嘆。凄い才能だ。（71）

轟夕起夫　文筆稼業。前号の増村保造のページ、冒頭は「最初、女が～」です。細かいことですが念のため。（77）

萩尾瞳　映画評論家。玉三郎19年ぶりの「桜姫東文章」を昼夜通しで。玉さま、ますます艶っぽくて、う～ん。（81）

高山由紀子　映画監督。「娘道成寺・蛇炎の恋」がいよいよ8月28日より公開。企画して7年、長い道のりでした。（85）

おかむら良　映画評論家。森田芳光監督の「海猫」の撮影を函館で見た。いいラブストーリーになりそう。（86）

井口健二　SF映画評論家。応援しているサッカーチームがようやく3勝目。いろいろ有ったが、とにかく勝った。（88）

嵯峨創三　評論家。椅子が足元から崩壊。パソコンが壊れても仕事はできるが、椅子が壊れちゃ仕事にならないと痛感。（90）

山下馨　映画系文筆業。映画評者諸氏よ、8月上旬号での志らく氏の言は、「取り上げない」のか「怒る」べきか。（98）

鶴田浩司　映画評論家。シネセゾン渋谷へ行く前に、〝とりかつ〟へ。渋谷で六百円で満腹になれる驚きの定食屋。（99）

竹之内円　映画ライター。三上博史主演の舞台「ヘドウィグ」を見てきました。いやぁ笑った。二度三度と見たい！（101）

信夫梨花　米系テレビ・ドキュメンタリーのため、エキストラ出演の仕事をしました。徹夜の撮影がきつかった。（103）

大口孝之　映像クリエータ　今年もLAのシーグラフに参加する。この様子は、NHKの「デジスタ」で紹介する予定。（104）

佐藤友紀　原因と結果、自分でも大納得の検査入院。意外な友が泣いて心配してくれたのが一番こたえた。ごめん。（106）

荻原順子　「キャット・ウーマン」のインタビューで会ったベンジャミン・ブラットはすごくナイス・ガイで惚れました。（109）

猿渡由紀　甥っ子3人とプールで遊んだせいでまた日焼け。南の島に行ってきたのよ、と言いたいけれど。（114）

佐藤結　なにやら尋常ではない暑さと、止まらない体重微増の中で目の前のことしか考えられない毎日です。（118）

滝矢直　ライター。配水管工事の人が作業中、うちの洗濯機を破損。新品を買ってもらえることに！ ちょっとラッキー？（122）

大場正明　評論家。「夜の回帰線」、「死とほんのすこしの愛」などを読む。（124）

齋藤敦子　傑作「PTU」に続くジョニー・トーの新作「大事件」も凄く面白かった。カンヌのレポートで触れ忘れたので一言。（128）

石村加奈　ライター。七夕の誓いを果たすべく海通いの週末。毎年初回は、海水のしょっぱさに体がしゅわ～んと驚く。（129）

大森さわこ　「堕天使のパスポート」は久しぶりにフリアーズの下町ストリート感覚あり。主演のイジョフォーに惚れた。（130）

中西愛子　フリー。凄まじい猛暑にふらふら。焼肉とビールで力をつけてこの夏を乗り切ろうと思ってます。（131）

山中久美子　ロンドンで「華氏911」を観る。公開時のレビューの厳しさとは反対に映画館は大盛況。（132）

横森文　大好きなM・マイヤーズにインタビューできて幸せ！ あまりにも謙虚な普通人ぶりにさらにファンに！（133）

的田也寸志　フリー。著書ノヴェライズ「狐怪談」が竹書房文庫より発売中。映画は今月7日公開予定です。（145）

石井美由季　ライター。「マッケンサンバII」CDを購入。狙いのタイトル曲よりも「マッケンでGO！」に心酔。（146）

黒田邦雄　映画評論家。ジョナサン・ミラー新演出のオペラ「フォルスタッフ」を鑑賞。意外に大人しかった。（146）

鬼塚大輔　静岡英和学院大学教授。今年の8月も例年通り、CD＋高座で圓朝の怪談噺をたっぷり聴くつもりです。（147）

田中千世子　映画評論家。神戸市立博物館ではフェルメールの絵が画家のアトリエに飾られているような素敵な展示。（148）

野村正昭　映画評論家。「フロム・ダスク・ティル・ドーン3」と「踊る大捜査線」の音楽がそっくりなのは偶然か（149）

山根貞男　映画評論家。「スパイダーマン2」の面白さにブッ飛んだ。サム・ライミも練りに練った脚本も凄い。（150）

渡部実　映画評論家。大学も夏休みに入り、学生よりも先生が喜ぶというのも複雑な気分になります。（152）

西脇英夫　映画評論家。A・ズビャギンツェフ監督のロシア映画「父、帰る」の静謐な恐さにうならされた。（156）

北川れい子　映画評論家。「草思」8月号掲載の、中江裕司監督の自伝的エッセイ「島々映画生活」がとても面白い。（156）

河原晶子　やっと「バンドネオン」を観た！ 独創的なタンゴ・ダンス！ ピナ・バウシュはやはり80年代初期作品が凄い。（158）

稲垣都々世　23％ポイントにつられてエアコンを新調し、そのポイント＋αで冷蔵庫も買った。みごと商法にはまった……。（158）

金原由佳　映画ライター。国際学生映画祭「Next Frame Nippon 2004」に参加。かなりの荻上直子通になりました。（158）

宮崎祐治　夏休み恒例の中学の同窓会。今、面白い映画は何かと聞かれて、タイトルも何も浮かばなかった。（160）

川本三郎　評論家。DVDでデュヴィヴィエの「並木道」を見つける。わが青春のグラマー、マガリ・ノエルに心ときめく。（162）

香川照之　85周年記念号を読んで、キネマ旬報賞読者賞がいかにすごいことだったかを知る。気持ちを新たに引き締めねば。(164)

成田陽子　ミュンヘンから〝ヒットラー・トレイル〟でイーグルス・ネストなどなど。大自然を愛する彼のテイストはとびきり。(168)

河原雅彦　俳優・舞台演出・脚本。演出舞台『鈍獣』が8／22までパルコで絶賛公演中。その後は地方を回ります。(172)

中村まこと　俳優。公園でおばさんに仔猫の里親を請われる。その猫がかわいすぎ！　留守がちの俺、現在苦悩中。(172)

進藤良彦　ライター。遅まきながらやっと光ファイバーを導入してブロードバンド生活。ネットの調べものも快適ダ。(174)

安西水丸　夏生れなので(七月二十二日、カニ座の最終日)、夏がうれしい。この季節にスパートをかける。今年もそんな気分だ。(176)

山田和夫　映画評論家。八月末新著『山田和夫・世界映画の発見』(新日本出版社)を刊行。世界映画の研究をあつめた。(178)

石津文子　星護監督「笑の大学」にしびれた翌日、なぜか役所さんとワインを飲む夢を見た。吾郎ちゃんと合体？(181)

大高宏雄　映画記者。祝キネ旬85周年。過去より、ここ10年のふんばりをこそ評価したい。編集者よ、さらなる飛躍を。(183)

濱口幸一　夏休み直前の最後の授業で、榎本健一、あきれたぼういずを扱う。まずは受け入れてもらい、ホッと一息。(186)

高崎俊夫　獅子文六の自伝的小説が面白い。その辛いユーモアは渋谷実、前田陽一の映画にも共通すると睨んでいる。(192)

森直人　裏方ライティングを共同担当しました、石井克人著『ためにならない映画の教科書』絶賛発売中です！(193)

賀来タクト　文筆家。ジェリー・ゴールドスミス逝去。長い間、勇気づけていただきありがとうございました。(194)

石飛徳樹　朝日新聞記者。篠田昇さんの追悼上映会で、奥様をはじめ、ゆかりの方々にお話をうかがう。改めて喪失感。(196)

樋口尚文　映画批評。『大島渚1968』漸く刊行。帯に「この熱さを忘れるな」。編者の宮田仁さんに敬服。(198)

池田敏　米国TVライター。最近よく聴くm－floの新譜。矢島〝カーク船長〟正明さんの美声も堪能できます。(199)

浦崎浩實　試写会の列に並んでいたら、割り込んだな！と後の女性二人に言いがかりをつけられる。各々方ご用心！(200)

藤田真男　『旅する巨人 宮本常一と渋沢敬三』を読み、戦前の松竹俳優・山内光の波瀾の生涯を知って驚いた。(201)

丸山尚輝　ライター。最近、教育テレビにハマってます。子供向けから外国人用講座まで、面白番組が目白押し。(202)

やまもとかほ　ビデオライター。三谷幸喜脚本最新作「笑の大学」(秋公開)が面白い。元ネタである舞台もぜひ見たくなった。(202)

細越麟太郎　ニューヨークで見たコール・ポーターの伝記映画「デ・ラブリー」には酔わされました。(208)

新田隆男　ライター。「スパイダーマン2」のラスト・カットに震えました。これぞ新古典主義！(210)

磯田勉　PS2ゲーム攻略本『ウルトラマン　ファイナルコンプリートガイド』(エンターブレイン)に執筆しました。(213)

すぎやまチヒロ　わかりにくい歌詞がある。「あなたにあげた夜をかえして」。どうやって返すんだ！責任者出てこい！(232)

劇場招待プレゼント&上映スケジュール

●ご招待券（9月中有効）ご希望の方は本誌挟み込みのプレゼントハガキに希望劇場名を書いてお申し込みください。8月20日消印有効。
●劇場の都合により番組が変更になる場合がありますので、ご確認の上お出かけください。＊印は次回上映作品

地区	劇場名	TEL	招待組数	8/5(木)～26(木) 上映スケジュール
銀座	有楽町スバル座	03(3212)2826	2	海猿 ウミザル｜スパイダーマン2／世界の中心で、愛をさけぶ （2部興行）
新宿	テアトル新宿	03(3352)1846	2	機関車先生
渋谷	渋谷シネパレス1	03(3461)3534	10	ウォルター少年と、夏の休日｜リディック
渋谷	渋谷シネパレス2			キング・アーサー｜リディック｜釣りバカ日誌15 ハマちゃんに明日はない!?
渋谷	シネ・アミューズ イースト／ウエスト	03(3496)2888	2	箪笥｜＊誰も知らない
				地球で最後のふたり
渋谷	シブヤ・シネマ・ソサエティ	03(3496)3203	2	好きと言えるまでの恋愛猶予
池袋	シネマサンシャイン	03(3982)6101	5	スパイダーマン2〈字幕〉
				デイ・アフター・トゥモロー｜サンダーバード〈吹替〉〈字幕〉
				ハリー・ポッターとアズカバンの囚人〈吹替〉〈字幕〉
				マッハ！
				箪笥
				69 sixty nine｜劇場版 金色のガッシュベル!! 101番目の魔物
池袋	シネマ・ロサ	03(3986)3713	10	キング・アーサー｜リディック〈字幕〉
				ウォルター少年と、夏の休日｜リディック〈吹替〉〈字幕〉｜釣りバカ日誌15 ハマちゃんに明日はない!?
池袋	シネ・リーブル池袋	03(3590)2126	5	ドリーマーズ
				永遠の片想い｜華氏911
池袋	テアトル池袋	03(3987)4311	2	それいけ!アンパンマン 夢猫の国のニャニィ｜〈黒木和雄監督特集〉｜ミラーを拭く男
浅草	浅草中映劇場	03(3841)2400	5	タイムリミット／シャンハイ・ナイト｜キル・ビル2／ティアーズ・オブ・ザ・サン｜シティ・オブ・ゴースト／イン・ザ・カット｜MUSA 25時
浅草	浅草名画座	03(3841)3028		極道の妻たち 地獄の道連れ／新兵隊やくざ 火線／必殺5 黄金の血｜死に花／姉御 日本暴力団 組長｜捨て身のならず者／最後の博徒／三匹の侍｜極道の妻たち 最後の戦い／任侠列伝 男／新座頭市物語 折れた杖
東京	早稲田松竹	03(3200)8968	3	オアシス／ジョゼと虎と魚たち｜フォーチュン・クッキー／恋愛適齢期｜ハイ・アート／しあわせの法則｜呪怨／呪怨2
東京	三軒茶屋シネマ	03(3421)3322	10	幸せになるためのイタリア語講座／恋愛適齢期｜幸せになるためのイタリア語講座／ションヤンの酒家｜ホーンテッドマンション／クイール
東京	下高井戸シネマ	03(3328)1008	10	コールドマウンテン｜グッバイ、レーニン！｜ビッグ・フィッシュ
東京	シネマアートン下北沢	03(5452)1400	5	〈少年エネルギー〉｜〈戦争特集〉
東京	バウスシアター	0422(22)3555	2	キング・アーサー
				炎のジプシーブラス～地図にない村から～｜華氏911
				マッハ！
横浜	横浜日劇	045(251)1815	2	ゴシカ／悪霊喰／ドーン・オブ・ザ・デッド｜スターシップ・トゥルーパーズ2／シルミド SILMIDO／タイムリミット｜ドラムライン／21グラム／ホーンテッドマンション

※劇場によっては、土・日・祝日は招待券を使用できませんので、ご了承ください

地区	劇場名	TEL	招待組数	8/5(木)・6(金)	7(土)〜13(金)	14(土)〜20(金)	21(土)〜26(木)
横浜	シネマ・ジャック	0120(198)009	2	〈犯罪劇場、四十九日。〉	ヒバクシャ 世界の終わりに/灰の記憶	ボウリング・フォー・コロンバイン/イン・ディス・ワールド	〈がんばれ、ニッポン男児。〜幕末のヒーローを見よ〜〉
	シネマ・ベティ	0120(198)009		恋愛適齢期/コールドマウンテン	アフガン零年/美しい夏キリシマ		carmen. カルメン/女王ファナ
	関内MGA	045(261)8913	2	ドリーマーズ			華氏911
新潟	新潟シネ・ウインド	025(243)5530	5	[illegible] それいけ!アンパンマン 夢猫の国のニャニイ ラブドガン	それいけ!アンパンマン 夢猫の国のニャニイ/ラブドガン/子猫をお願い/パリ・ルーブル美術館の秘密		
松本	松本エンギザ	0263(32)0396	5	69 sixty nine/スチームボーイ	劇場版 金色のガッシュベル!!101番目の魔物/リディック		劇場版 NARUTO/華氏911
岐阜	シアターペルル	058(262)0871	5	ウォルター少年と、夏の休日 スイミング・プール	モナリザ・スマイル/スイミング・プール		カレンダーガールズ/モナリザ・スマイル
愛知	名古屋シネマスコーレ	052(452)6036	10	HARUMO ハルコ	機関車先生	機関車先生/十三通目の手紙	ムーンライト・ジェリーフィッシュ
	名古屋ゴールド劇場	052(451)0815	10	カーサ・エスペランサ 赤ちゃんたちの家	カーサ・エスペランサ 赤ちゃんたちの家/地球で最後のふたり		華氏911
	名古屋シルバー劇場	052(451)0815		永遠の片想い/ラブドガン	サンダーバード		
	名古屋シネマテーク	052(733)3959	5	〈木村威夫特集〉	ハナのアフガンノート/午後の五時		アメリカン・スプレンダー
	今池国際シネマ	052(732)1880	5	箪笥	茶の味		劇場版 NARUTO
	今池国際劇場	052(732)1880	5	ポケットモンスターAG 裂空の訪問者 デオキシス			
大阪	テアトル梅田	06(6359)1080	10	dot the I			カーサ・エスペランサ 赤ちゃんたちの家
				機関車先生			
	シネ・リーブル梅田	06(6440)5930	5	茶の味			
				永遠の片想い			
	シネ・ヌーヴォ	06(6582)1416	5	〈小津安二郎の藝術〉			
京都	祇園会館	075(561)0160	5	ラスト サムライ/フォーン・ブース			
神戸	シネ・リーブル神戸	078(334)2126	5	花咲ける騎士道	マインド・ゲーム	＊ステップ・イン・トゥ・リキッド	
				永遠の片想い		＊カーサ・エスペランサ 赤ちゃんたちの家	
				茶の味			華氏911
	シネ・ピピア	0797(87)3565	5	シュレック2			
				キング・アーサー			
広島	広島サロンシネマ1	082(241)1781	10	みなさん、さようなら。		スイミング・プール	
	広島サロンシネマ2	082(241)1781		ハッピーエンド	ドラムライン		誰も知らない
	広島シネツイン1	082(241)7711		スキャンダル/それいけ!アンパンマン 夢猫の国のニャニイ	父と暮せば/それいけ!アンパンマン 夢猫の国のニャニイ		
	広島シネツイン2	082(246)7787		父と暮せば	誰も知らない		誰も知らない/華氏911
	シネマモード	0849(23)3788	5	スチームボーイ	劇場版 金色のガッシュベル!!101番目の魔物/スチームボーイ		
九州	シネテリエ天神	092(781)5508	10	茶の味		茶の味/ギャザリング	茶の味/バーバー吉野
	KBCシネマ1	092(751)4268	10	ディープ・ブルー	機関車先生		華氏911
	KBCシネマ2	092(751)4268		花咲ける騎士道	ドリーマーズ	カーサ・エスペランサ 赤ちゃんたちの家	
	シネサロン・パヴェリア	092(852)5650	5	永遠の語らい	父と暮せば		
	シネ・リーブル博多駅	092(434)3691	10	いつか、きっと	マインド・ゲーム	丹下左膳 百万両の壺	
				永遠の片想い	地球で最後のふたり		誰も知らない
	シネパラダイス	096(211)3360	5	スパイダーマン2 ドラムライン	スパイダーマン2/スイミング・プール		華氏911

◆次の各劇場へ今号の本誌挟み込み〈試写会ハガキ〉を持参されると、各劇場規定料金にて割引ご招待いたします。
【高知】●高知東映●ピカデリー1・2・3●あたご劇場（高知キネ旬友の会協力）　【高松】●高松東宝1・2・3（高松キネ旬友の会協力）
【松山】シネ・リエンテ●シネマサンシャイン　【福岡】●福岡中洲大洋●福岡東映劇場●駅前ロマン●福岡オークラ劇場（福岡キネ旬友の会協力）

Presents

プレゼントの応募は本誌とじ込みハガキでどうぞ。8月20日必着です。

Goods

サンダーバード

オリジナルTシャツ

約40年にわたり世界中の人々から愛され続けてきた人気ＴＶシリーズが、最新のＶＦＸで新しく実写版となって生まれ変わった！　主演はＢ・パクストン、Ｓ・マイルズほか。８月７日より日劇３ほか全国東宝系にて〈提供：ＵＩＰ〉

５名

Goods

シュレック２

オリジナル・カチューシャ

新キャラクターが登場する第２作は、笑いも倍増！　マイク・マイヤーズ（シュレック）とエディ・マーフィ（ドンキー）の掛け合いも最高！　吹替え版のボイスキャストにも要注目だ。日比谷スカラ座ほか全国東宝系にて〈提供：ＵＩＰ〉

３名

Goods

着信アリ

特製携帯カード

ホラー・ブーム再燃の中、今年１月に公開されヒットを記録した、柴咲コウ主演のジャパニーズ・ホラーの決定版がいよいよビデオ＆ＤＶＤで発売される（ＤＶＤセル限定版：税込7140円、通常版：4935円）〈提供：東宝／バップ〉

５名

Goods

悪い男

キム・ギドク監督サイン入りプレス

世界の映画祭を席巻する韓国の鬼才キム・ギドク監督が、ヤクザの男と女子大生の屈折した"純愛"を描いたラブ・ストーリー。８月６日にＤＶＤが豪華ＢＯＸ仕様でリリースされる（セルＤＶＤ税込：5040円）〈提供：エス・ピー・オー〉

１名

ゲームソフト

X２：Wolverine's Revenge

（Xbox　ワールドコレクション）

アメリカで「Ｘ－ＭＥＮ２」の公開と同時に発売された、ウォルヴァリンが主役のアクションアドベンチャーゲーム。ただ今好評発売中(税込5040円)。お問合せ先：Xboxカスタマサポート TEL　0570－019－602〈提供：マイクロソフト㈱〉

２名

招待券

スーパーミラクルイリュージョン　木下大サーカス

高松公演（10月16日～11月15日有効）

世界三大サーカスのひとつ「木下大サーカス」が贈る、美しい動物たちとの競演が話題の夢と感動のイリュージョン。10月16日～12月13日の日程でサンポート高松特設会場（香川県）にて公演を行う。〈提供：木下大サーカス高松公演事務局〉

10組20名

Kinejun Information

編集部だより

■【お詫びと訂正】　８月上旬特別号の85周年名刺広告において、イオンシネマズ株式会社様の代表取締役社長様のお名前に誤りがありました。正しくは矢島誠様です。関係者、読者の皆様に深くお詫び申し上げます。

出版部だより

■韓国ドラマのシナリオ対訳集シリーズの最新刊「「オールイン　運命の愛」で始める韓国語」がいよいよ８月下旬の発売となります（予価２５２０円）。既刊「「冬のソナタ」で始める韓国語」「「美しき日々」で始める韓国語」も好評発売中。

事業部だより

■２４０ページの、バックナンバー在庫一覧に掲載しております号より以前の号のリストもございます。ご希望の方は、ご郵送いたしますので、ハガキ・ファックス等でご連絡下さい。

事業部だより

■８月21日(土)開催「映画製作セミナー」受講生募集中！「ジョゼと虎と魚たち」「スウィングガールズ」といった作品が、どのようなプロセスで作られたのかを知るまたとない機会です。監督、プロデューサーそして俳優を目指す人は必聴。詳細は http://www.kinejun.com にて。

キネマ旬報

2004年
8月下旬特別号
No.1411

●発行人
小林　光

●編集長
関口裕子

●副編集長
前野裕一

●編集スタッフ
山田正人
天本伸一郎
滝澤麻衣
神保憲史
川井英司

●広告スタッフ
島崎智明
上田真美

●表紙デザイン・レイアウト
島岡　進

●レイアウト
梅津由子
渡部浩美

●発行
株式会社キネマ旬報社
〒106-0045
東京都港区麻布十番
1-2-3　プラスアストル
振替00100-0-182624
TEL 03-3589-8300(代表)
03-3589-8327(編集部)
03-3589-8325(営業部)
03-3589-8329(広告部)
FAX 03-3589-8302
http://www.kinejun.com/

●印刷・製本
三晃印刷株式会社

ISSN 1342-5412

編集後記

■若者たちが大木からぼろぼろと落ちて、次々と地面に叩きつけられてゆく冒頭のシーン。スクリーンを通して観る者にまで痛みを感じさせる見事な導入部だ。以降も、ワイヤーやCGを使わないアクションは続いてゆく。そう、この映画を観て感じたのは何より、混じりけのない〝純粋さ〟だ。物語の主人公ドンは、長い間村を護ってきた仏像を取り返す一心で、大都市バンコクに向かう。これまでド田舎で暮らしてきた若者が、日々鍛錬したムエタイと肉体ひとつで仏像を盗んだ巨悪と対峙するという、ちょっと現実離れしたストーリーが、観る者の心に響いてくるのは、何よりも作り手の真っ直ぐな想いが、主人公を介して伝わるからであろう……と、柄にもなく真面目に書いてしまったが、一番言うべきは、この「マッハ！」がどの国の映画にも全くひけを取らないエンタテインメント作品だということ。保証します！　**神保**

コレすごく面白かった！
「マッハ！」
全国松竹・東急系にて公開中

■幼少の頃、珍しい貝に勝手な名前をつけて「貝博士」と異名をとった〝神童〟は、30年の時を経て再び貝に夢中。ただ今「アサリの模様パターンとその要因」に関する書物を捜索中。**川井**

■プチョン国際ファンタスティック映画祭で観た「Gagamboy」は、フィリピン映画に目を向けさせるに十分痛快な1本でした。アジア映画、元気ありますね。**神保**

■モスクワ映画祭での受賞をうけて、「ホテル　ビーナス」のタカハタ秀太監督に再会。再び草彅とのコンビで新作をとの話も出て、タカハタ監督の今後の動向に期待です。**滝澤**

■金城一紀氏原作・脚本「フライ，ダディ，フライ」撮影現場へ。いちファンとして映画化を待ち侘びていたので、その実現の感激を改めて実感。今最も完成が楽しみな作品の一つ。**天本**

■今年の4月から新作紹介のページを担当していますが、公開される作品の数に改めてびっくり。果たして一般的に認知される映画はどれくらいあるのか、非常に疑問。**山田**

■「ゴッドファーザー」を東劇で再見して気付いたのは、ドンが出る場面が意外と少ないこと。しかしながら、圧倒的な存在感。第1作のオーラはコッポラよりもブランドの方が強かった。**前野**

■8月上旬号の《リスペクト》特集では、皆さんから様々な反響をいただきました。なかでも山田洋次監督や今村竑介プロデューサーほか多くの映画人からいただいた、企画に対する賛同、激励の言葉には、編集部一同大いに励まされました。未来に向けてさらに努力していきたいと思います。ご協力いただきました皆さま、本当にありがとうございました。**関口**

次号予告

9月上旬号[No.1412]◎8月20日発売◎定価820円(税込)

巻頭特集
「LOVERS」
金城武、アンディ・ラウ、チャン・ツーイー、チャン・イーモウ監督インタビュー

作品特集：◎「釣りバカ日誌15」◎「珈琲時光」◎「父、帰る」◎「MASK DE 41」
撮影現場ルポ：◎「血と骨」◎「オペレッタ狸御殿」
追悼特集：マーロン・ブランド、野沢尚、篠田昇

FACE●金城武　Hot Shots●ヴィン・ディーゼル、牧瀬里穂、「力道山」、「頭文字（イニシャル）D」

キネマ旬報バックナンバー在庫一覧

☆=定価(税込) 送料は各120円(2／下・臨時増刊は160円)

2003

●1390・10月上旬号 ☆820円
「陰陽師Ⅱ」／「トゥームレイダー2」／「サハラに舞う羽根」／リスペクト－中平康／映画本座談会2003年上半期版／「木更津キャッツアイ」ルポ③

●1391・10月下旬号 ☆820円
「インファナル・アフェア」「リーグ・オブ・レジェンド」／「マグダレンの祈り」／「木更津キャッツアイ」ルポ④ 「阿修羅のごとく」ルポ前篇

●1392・11月上旬号 ☆820円
「キル・ビル」／「ティアーズ・オブ・ザ・サン」／「スカイハイ［劇場版］」／「木更津キャッツアイ」ルポ⑤ 「阿修羅のごとく」ルポ後篇

●1393・11月下旬号 ☆820円
「阿修羅のごとく」／「マトリックス レボリューションズ」「g@me.」／「昭和歌謡大全集」「木更津キャッツアイ」ルポ⑥／双葉十三郎が選ぶ日本映画男優100人

●1394・12月上旬特別号 ☆860円
「木更津キャッツアイ 日本シリーズ」「バッドボーイズ2バッド」「ブラウン・バニー」「幸福の鐘」／「ヴァイブレータ」

●1395・12月下旬号 ☆820円
「ラスト サムライ」／「ファインディング・ニモ」「美しい夏キリシマ」／「MUSA」／どう見た「キル・ビル」／特別企画：小津安二郎生誕百年

2004

●1396・1月上旬号 ☆820円
「2046」「最後の恋、初めての恋」「ミシェル・ヴァイヨン」／「ジョゼと虎と魚たち」／「10ミニッツ・オールダー」「アイデン&ティティ」「すべては愛のために」

●1397・1月下旬新春特別号 ☆860円
KOREAN MOVIE & STAR 2004／「ミスティック・リバー」／「着信アリ」／「半落ち」／「25時」 新春インタビュー：新藤兼人・鈴木敏夫・三谷幸喜・大林宣彦

●1398・2月上旬号 ☆820円
「ドラッグストア・ガール」／「シービスケット」／「赤い月」／「ニューオーリンズ・トライアル」／「オアシス」 特別企画：祝・主演100本 哀川翔

●1399・2月下旬決算特別号 ☆1600円
2003年度ベスト・テン／公開作品リスト／「嗤う伊右衛門」／「この世の外へ クラブ進駐軍」

●1400・3月上旬号 ☆820円
「ロード・オブ・ザ・リング 王の帰還」／「ヘブン・アンド・アース」／「東京原発」「グッバイ・レーニン!」／「マスター・アンド・コマンダー」

●1401・3月下旬号 ☆820円
「ホテル ビーナス」「ペイチェック 消された記憶」／「イノセンス」／「花とアリス」／「ピカ☆☆ンチ LIFE IS HARDだからHAPPY」 スクリーンで甦る「大脱走」

●1402・4月上旬号 ☆820円
「クイール」／「イン・ザ・カット」／「殺人の追憶」「N.Y.式ハッピー・セラピー」「卒業の朝」 第76回アカデミー賞のすべて

●1403・4月下旬号 ☆820円
「恋人はスナイパー《劇場版》」／「ディボース・ショウ」／「ピーター・パン」／「バーバー吉野」／映画本座談会2003年下半期／クリント・イーストウッド論

●1404・5月上旬特別号 ☆860円
「コールドマウンテン」／「CASSHERN」「キル・ビルVol.2」／「ロスト・イン・トランスレーション」／山中貞雄監督入門／特集 イ・ビョンホン

●1405・5月下旬号 ☆820円
「世界の中心で、愛をさけぶ」／「ビッグ・フィッシュ」／「パッション」／対談：犬童一心×山崎努・青島幸男×谷啓

●1406・6月上旬号 ☆820円
「トロイ」／「21グラム」／「深呼吸の必要」／「クリムゾン・リバー2 黙示録の天使たち」／日本映画の曲り角

●1407・6月下旬特別号 ☆860円
「ブラザーフッド」と夏の韓国映画 「デイ・アフター・トゥモロー」／「天国の本屋～恋火」／「海猿」 スペシャルインタビュー：寺島進

●1408・7月上旬号 ☆820円
「スチームボーイ」／「白いカラス」／「ウォルター少年と、夏の休日」／「ハリー・ポッター」と夏休み映画64本 追悼：三橋達也

●1409・7月下旬号 ☆820円
「69 sixty nine」「スパイダーマン2」／「ドリーマーズ」／「丹下左膳 百万両の壺」「茶の味」鼎談：石井克人×我修院達也×浅野忠信 特別企画：韓国映画の女性たち

●1410・8月上旬特別号 ☆1000円
《創刊85周年記念特別号①》
リスペクト 映画人から映画人へ：対談・双葉十三郎×川本三郎、インタビュー・山田洋次、中井貴一／表紙で振り返る「キネマ旬報」読者賞インタビュー：和田誠、三谷幸喜

近刊バックナンバー

'04・8月上旬特別号 創刊85周年記念特集①
☆1000円◇送料120円

'04・7月下旬号 「69 sixty nine」特集
☆820円◇送料120円

'04・7月上旬号 「スチームボーイ」特集
☆820円◇送料120円

'04・6月下旬特別号 「ブラザーフッド」と夏の韓国映画
☆860円◇送料120円

'04・6月上旬号 「トロイ」特集
☆820円◇送料120円

'04・5月下旬号 「世界の中心で、愛をさけぶ」特集
☆820円◇送料120円

■本欄掲載以外の号の一覧もございますのでご希望の方はハガキ等でお申し込み下さい。

■バックナンバーのお申し込みは、最寄の書店に御注文いただくか、小社宛、現金書留または郵便振替用紙にて、定価に送料をあわせて御入金下さい。また、下記の書店にてバックナンバーを扱っておりますので、御利用下さい。

北上市 ブックスサンワ
仙台市 丸善アエル店
川口市 書泉ブックドーム
千葉県 芳林堂書店津田沼店・多田屋中央店
東京都 八重洲BC本店・三省堂書店本店・書泉グランデ・書泉ブックマート・書泉ブックタワー・大盛堂書店・リブロ渋谷店・リブロ池袋店・旭屋書店銀座店・教文館・紀伊國屋書店本店・紀伊國屋書店新宿南店・ブックファースト渋谷店・ジュンク堂書店池袋店・ジュンク堂書店プレスセンター店
横浜市 有隣堂イセザキ本店
静岡市 戸田書店静岡本店
名古屋 ちくさ正文館本店・リブロ名古屋店・ヴィレッジヴァンガード生活創庫店・ヴィレッジヴァンガードベイシティ
京都市 ブックファースト京都店
大阪市 旭屋書店本店・シネ・ヌーヴォ・ジュンク堂書店大阪本店・紀伊國屋書店梅田本店シネマシネマ
神戸市 ジュンク堂書店三宮駅前店
倉敷市 喜久屋書店倉敷店
広島市 リブロ広島店
福岡市 リブロ福岡店・ジュンク堂書店福岡店
長崎市 メトロ書店アミュプラザ店

※キネマ旬報創刊85周年記念バックナンバーフェアを開催中。詳細は226ページを御参照下さい。

このたびは創刊85周年記念特別号に、御協賛、御協力いただいましてありがとうございます。
ご愛読者並びに、各社、各団体の方々に　あらためて厚く御礼申し上げます。
引き続きご支援ご鞭撻の程、宜しくお願いいたします。

キネマ旬報社　一同

P1 日本テレビ放送網(株)
(株)東京放送
(株)フジテレビジョン

P2 (株)テレビ朝日
(株)テレビ東京
(株)AXNジャパン
(株)衛星劇場
ジャパンケーブルキャスト(株)
ジュピターエンタテインメント(株)
(株)スター・チャンネル
(株)スペースシャワーネットワーク
日活(株)　衛星メディア事業本部

P3 日本映画衛星放送(株)
(株)WOWOW
(有)興行通信社
(株)時事映画通信社
文化通信社
角川映画(株)
(株)サンライズ
(株)シネマハウト
(株)セントラル・アーツ

P4 (株)テレビマンユニオン
(株)徳間書店　スタジオジブリ事業本部
映像京都(株)
東映太秦映画村
東映(株)京都撮影所
東映(株)東京撮影所
(株)バカ・ザ・バッカ
(株)パパドゥ
(株)パパドゥ音楽出版
ミコット・エンド・バサラ(株)

P5 (株)ルートピクチャーズ
(株)ロボット
(株)アートポート
(有)アジア映画社
アスミック・エースエンタテインメント(株)
(株)キネティック
(株)ギャガ・コミュニケーションズ
(株)クレストインターナショナル
(株)クロックワークス

P6 (株)ケイブルホーグ
(株)コムストック
(株)GPミュージアムソフト
(有)シネカノン
(有)セテラ・インターナショナル
東芝エンタテインメント(株)
東宝東和(株)
(株)東北新社
日活(株)

P7 日本ヘラルド映画(株)
ニューセレクト(株)
(株)パンドラ
(株)ファントム・フィルム
(株)プチグラパブリッシング
(株)フランス映画社
(株)プレノンアッシュ
ムービーアイエンタテインメント(株)
(株)メディア・スーツ

P8 (有)ユーロスペース
ワーナー・ブラザース映画
(株)ワイズポリシー
アミューズソフトエンタテインメント(株)
(株)IMAGICA
(株)エスピーオー
(株)NHKソフトウェア
エムスリイエンタテインメント(株)
(株)角川エンタテインメント

P9 カルチュア・パブリッシャーズ(株)
(株)紀伊國屋書店
キングレコード(株)
ジェネオンエンタテインメント(株)
(株)タキコーポレーション
東映ビデオ(株)
(株)東和プロモーション
(株)徳間ジャパンコミュニケーションズ
20世紀フォックスホームエンターテイメントジャパン(株)

P10 (株)パノラマ・コミュニケーションズ
(株)ハピネット・ピクチャーズ
パラマウントホームエンタテインメントジャパン(株)
バンダイビジュアル(株)
(株)ファインフィルムズ
(株)フルメディア
(株)ブロードウェイ
(株)ポニーキャニオン
(株)マクザム

P11 (有)オムロ
(株)バイオタイド
(有)ビー・ウイング
(有)リベロ
レオ・エンタープライズ(株)
秋葉原オリエンタルコミックシアター
京成興業(株)
オフィスサンマルサン
(有)シネマスコーレ

P12 泰和企業(株)
(株)マルハン
相鉄ローゼン(株)
(株)チネチッタ

P12 中映(株)
(株)東急レクリエーション
(株)パルコ
ヘラルド・エンタープライズ(株)
(株)ラピュタ

P13 (株)太田出版
(株)角川書店
(株)クリーク・アンド・リバー社
(株)集英社
(有)たなべ書店
ぴあ(株)
矢口書店
(株)インターチャネル
(株)ウォーカープラス

P14 (株)駅前探険倶楽部
(株)シンクウェア
トーメンテレコム(株)
アオイスタジオ(株)
アストロデザイン(株)
(株)am 3
映画堂
映通社
オフィス63

P15 コダック(株)
(株)第一通信社
中央映画貿易(株)
(株)デザインファクトリー
(財)デジタルコンテンツ協会
東宝不動産(株)
(株)ナムコ
日本電子光学工業(株)

P16 (財)日本ファッション協会
(株)パルック
富士写真フイルム(株)
報映産業(株)
(株)マツダ映画社
(株)ヤマグチ
(株)ギャガ・クロスメディア・マーケティング

P17 (株)スカイパーフェクト・コミュニケーションズ
東映衛星放送(株)
オンキヨー(株)
(株)ランブルフィッシュ

P18 (株)ソリッド・エクスチェンジ

2004年　8月下旬特別号　No.1411

祝キネマ旬報創刊85周年

祝キネマ旬報創刊85周年

祝キネマ旬報創刊85周年

映像京都株式会社

代表取締役社長　西岡善信

〒六一六-八一六七
京都市右京区太秦多薮町一四-二二一-一一三
電話　〇七五(八八一)〇六五七
FAX　〇七五(八八一)〇六〇四

株式会社徳間書店 スタジオジブリ事業本部

STUDIO GHIBLI

〒184-0002　東京都小金井市梶野町一-四-二五
TEL〇四二二(六〇)四〇〇三(代表)
FAX〇四二二(六〇)四〇三〇

TV MAN UNION テレビマンユニオン

代表取締役社長　白井　博

東京都渋谷区元代々木町30-13
日交元代々木ビル〒151-0062
TEL 03-5478-1611
http://www.tvu.co.jp

東映株式会社東京撮影所

東映

取締役所長　生田　篤

〒178-8666　東京都練馬区東大泉二丁目三十四番五号
電話　(〇三)三八六七-一一七一
FAX　(〇三)三八六七-一七〇四

東映株式会社京都撮影所

東映

常務取締役所長　坂上　順

〒六一六-八一六三
京都市右京区太秦西蜂ヶ岡町九
電話　〇七五(八六二)五〇〇三

KYOTO STUDIO PARK 東映太秦映画村

代表取締役社長　髙岩　淡

〒616-8586
京都市右京区太秦東蜂ヶ岡町10
TEL　075-864-7716

ミコット・エンド・バサラ株式会社

「雨鱒の川」（監督：磯村一路　原作：川上健一
出演：玉木宏　綾瀬はるか）2004年秋公開予定

MICOTT & BASARA INC.

ミコット・エンド・バサラ株式会社

代表取締役会長　木下泰彦
代表取締役社長　三宅澄二

〒150-0022
東京都渋谷区恵比寿南1-1-10
TEL　03-5773-5811
FAX　03-3713-4477
URL　http://www.micott.jp

株式会社パパドゥ

株式会社パパドゥ
株式会社パパドゥ音楽出版

〒150-0022　東京都渋谷区恵比寿南3-3-8　4F
tel 03-5722-3411
fax 03-5722-3401

PAPAdo

株式会社バカ・ザ・バッカ

バカばっかりの職人集団
株式会社バカ・ザ・バッカ

代表取締役社長
池ノ辺　直子

〒105-0014
東京都港区芝2-3-25 NIKIビル7F
TEL 03-3455-8015 FAX 03-3455-8016
baca@bacca.net　http://www.bacca.net

祝キネマ旬報創刊85周年

Art Port

株式会社 アートポート

代表取締役 社長
松下順一

〒150-0011
東京都渋谷区東1-2-23 MAビル
TEL:03-5469-8735
FAX:03-5469-8736

www.artport.co.jp

ROBOT
COMMUNICATIONS INC.

株式会社ロボット
〒150-0021 東京都渋谷区恵比寿西1-16-15
Phone(本社代表):03-3464-1171

映画部
〒150-0021 東京都渋谷区恵比寿西2-3-12
Phone:03-3464-9306 Fax:03-3464-9302

ROOTPICTURES

代表取締役
綾部昌徳
Masanori Ayabe

株式会社
ルートピクチャーズ
〒150-0002
東京都渋谷区渋谷3-17-1 第二鈴木ビル3F
TEL:03-5468-5498 FAX:03-3499-1273
www.root-pictures.com

株式会社キネティック

代表取締役 三尾和子
専務取締役 塚田誠一

〒104-0052 東京都中央区月島一-十四-七 旭倉庫四階
TEL(〇三)五五四八-五六八一

アスミック・エース
エンタテインメント株式会社

取締役会長 原 正人
代表取締役社長 椎名 保

〒106-8553 東京都港区六本木6-1-24
ラピロス六本木3F
TEL 03(5413)4311
FAX 03(5413)2844

Asmik Ace
Entertainment Inc.

http://www.asmik-ace.co.jp/

アジア映画社
ASIA FILMS CO.,LTD.

企画、製作、輸出入、出版

〒657-0037神戸市灘区備後町2-1-12-601
2-1-12-601, BINGO-CHO, NADA-KU, KOBE, JAPAN
TEL. 078(856)6157 FAX. 078(856)6158
e-mail：info@asianfilms.co.jp

世界初!ムエタイ・アクション超大作!!
仏像を取り戻せ!
MACH
マッハ!!!!!!!!

7月24日〈土〉より
渋谷東急他 全国松竹・東急系にて熱烈ロードショー!!

THE KLOCK WORX
株式会社クロックワークス
〒150-0022 東京都渋谷区恵比寿南1-6-10 MFビル4F
TEL:03-5720-7791

Crest international

今秋、新宿テアトル タイムズスクエアにて
『山猫 イタリア語・完全復元版』公開予定

株式会社クレストインターナショナル
〒107-0052
東京都港区赤坂4-4-16クレスト赤坂304
Tel:03-3589-3176 Fax:03-3589-3186
http://www.crest-inter.co.jp

GAGA★
communications inc.

株式会社
ギャガ・コミュニケーションズ
代表取締役最高経営責任者
藤村 哲哉
代表取締役社長
丸茂 日穂

〒106-0032
東京都港区六本木3丁目16番35号
イースト六本木ビル
TEL 03-3589-7500(代表)

祝キネマ旬報創刊85周年

祝キネマ旬報創刊85周年

祝キネマ旬報創刊85周年

祝キネマ旬報創刊85周年

祝キネマ旬報創刊85周年

トーメンテレコム株式会社

代表取締役　岩下眞一

〒100-[illegible] 東京都千代田区丸の内3-8-1
トーメン丸の内ビル6階
TEL 〇三(五二一九)三六七〇
FAX 〇三(五二一九)三六九〇

3キャリア公式
ケータイ映画サイト!

Cinema Style

空メール⇒ cinema@mead.jp

株式会社シンクウェア
代表取締役　福永　充利

thinkware
mobile communication services

〒106-0041 東京都港区麻布台1丁目4-3
エグゼクティブタワー麻布台8F
Tel. 03-5572-0870／Fax.03-5572-0871
http://thinkware.jp/

シネマ☆スタークラブ
株式会社駅前探険倶楽部

取締役社長　**松尾祐二**

〒105-0014
東京都港区芝1-12-7(芝一丁目ビル)
Tel. 03-5442-1025
Fax. 03-5442-1064
http://ekitan.com/

---

am3
Global Yet Small

代表取締役社長
山下 顕一

株式会社 am3 (エーエムスリー)
〒105-0022 東京都港区海岸2-6-31 日建ビル6F
Tel 03-5418-6353　Fax 03-3452-9803
http://www.am3.co.jp

GAME BOY ADVANCE アドバンスムービー

ASTRO

アストロデザイン株式会社

〒152-0011
東京都目黒区原町2-6-17
TEL : 03-5720-6200
FAX : 03-5720-6364
http://www.astrodesign.co.jp

---

aoi

アオイスタジオ株式会社

取締役社長　**古田昌宏**

〒106-0045 東京都港区麻布十番一-一-一四
TEL (03)三五八二-三八一一
FAX (03)三五八二-九六八二

CREATIVE HOUSE
オフィス63

デザイン●広告・宣伝企画
広告代理業●印刷

広告図案師　Art Directer
檜垣 紀六

営業担当
橋本 誠二

☎03(3206)5463　FAX 03-3206-5465
〒104-0042　東京都中央区入船1-7-5 宍戸ビル2F
E-mail:office_63@yahoo.co.jp

映通社

福原好和

〒154-0024 世田谷区三軒茶屋2-14
電話 03-3410-9772

"85周年おめでとうございます"

映画堂
EIGADOU

杵　麻幢

"この6月に移転致しました!"
〒553-0003大阪市福島区福島
6-22-15
TEL・FAX　06-6453-9511

祝キネマ旬報創刊85周年

祝キネマ旬報創刊85周年

だれ

だ？

NIN×NIN

忍者ハットリくん×ザ×ムービー

香取慎吾

田中麗奈　ゴリ　知念侑李／伊東四朗

戸田恵子　浅野和之　升毅　宇梶剛士　東幹久

鈴木雅之　藤子不二雄Ⓐ「忍者ハットリくん」　マギー　服部隆之

www.nin-nin.com

8.28 全国東宝系ロードショー

特別定価1000円 本体952円

雑誌 20723-8/15

4910207230840

00952